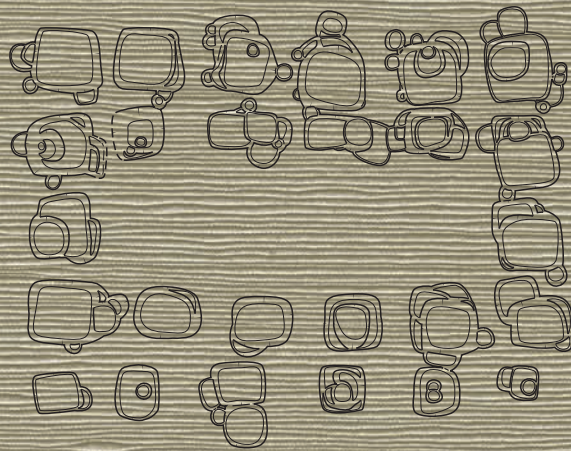


西野々遺跡Ⅲ

高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ
(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ)

本文編



2011.3

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

西野々遺跡Ⅲ

高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ
(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ)

本文編

2011.3

高知県教育委員会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターでは、平成16年度から高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局の業務委託を受けた一般国道55号自動車専用道路(高知東部自動車道)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しております。この事業には高知南国道路と南国芸芸道路の二つの自動車専用道路が含まれ、今回報告する西野々遺跡は南国市大埴字西野々・竹中に所在し、高知南国道路計画路線上に位置します。

高知南国道路は高知ICから高知空港ICを結ぶ全長15kmの自動車専用道路で、工事路線には西野々遺跡を始めとして多くの遺跡が所在し、平成16年度から発掘調査を行っています。西野々遺跡は、平成19年度に『西野々遺跡Ⅰ』の報告書を刊行し、今回の報告書が、本年度刊行した『西野々遺跡Ⅱ』に続く、西野々遺跡、最後の巻になります。

遺跡は縄文時代前期前半までに形成されたと考えられる沖積扇状地および自然堤防状の高まりに立地する弥生時代から近世にかけての複合遺跡で、今回報告する調査区からは弥生時代中期から後期の集落跡、古代の官衙関連と考えられる掘立柱建物跡や道路遺構、中世の溝で圍繞された屋敷跡が確認され、西野々遺跡の中心部であったと判断され、西野々遺跡を評価する上で、貴重な資料を提供しています。

本書が地域の歴史解明や考古学研究の資料、さらには埋蔵文化財の保護に繋がれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたっては、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所、南国市そして地元の関係者の埋蔵文化財に対する深い御理解と御協力を賜ったことに心から謝意を表すると共に、調査、報告書作成では関係各位に多大な御指導並びに御教示頂いたことに心より厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 小笠原 孝夫

例 言

1. 本書は、(財)高知県文化財団が高知県教育委員会の委託を受けて平成18・19年度に実施した西野々遺跡の発掘調査報告書(『西野々遺跡Ⅲ』)である。
2. 発掘調査は高知東部自動車道高知南国道路建設に伴うもので、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが調査主体となり実施した。
3. 西野々遺跡は高知県南国市大桶字西野々・竹中に所在する弥生時代から中世にかけての集落遺跡であると共に古代の官衙関連遺跡で、今回報告する第Ⅵ調査地区(Ⅵ区)から第Ⅷ調査地区(Ⅷ区)の発掘調査延べ面積は13,611㎡であった。
4. 発掘調査・整理作業は次の体制で行った。

平成18年度

総 括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 川島博海

総 務：次長 森田尚宏，総務課長 戸梶友昭，主任 池野かおり

調 査 総 括：調査課長兼企画調整班長 廣田佳久

調 査 担 当：調査第四班長 藤方正治，専門調査員 井上昌紀(Ⅵ区担当)，主任調査員 小野由香(Ⅶ区担当)，調査第一班長 山本哲也(Ⅷ区担当)，主任調査員 前田憲志(Ⅵ区担当)，技術補助員 坂本憲彦・大原直美・大賀幸子・大野大，測量補助員 畝川雅行・西村譲二・宮澤学・松尾直哉

事務補助員：奥宮千恵子

平成19年度

総 括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 汲田幸一

総 務：次長 森田尚宏，総務課長 戸梶友昭，主任 谷真理子

調 査 総 括：調査課長兼企画調整班長 廣田佳久

調 査 担 当：調査第四班長 藤方正治，主任調査員 小野由香(Ⅶ区担当)，調査第一班長 山本哲也(Ⅷ区担当)，技術補助員 坂本憲彦・大原直美・大賀幸子，測量補助員 西村譲二

事務補助員：奥宮千恵子

平成22年度

総 括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 小笠原孝夫

総 務：次長 森田尚宏，総務課長 里見敦典，主任 弘末節子

調 査 総 括：調査課長兼企画調整班長 廣田佳久

事務補助員：奥宮千恵子

5. 本書の執筆，遺物撮影・調整等は廣田が行い，調査日誌抄と現場写真は調査担当が執筆，撮影したものを使用した。編集は廣田が行い，整理作業員の補助を得た。
6. 遺構は，ST(竪穴状遺構)，SB(掘立柱建物跡)，SA(堀・柵列跡)，SK(土坑)，SD(溝跡)，SR(道路遺構)，SU(畝状遺構)，SP(水溜り状遺構)，SX(性格不明遺構)，SE(井戸跡)，P(ピット)とし，遺構番号は調査区，遺構ごとに通し番号とし，Ⅵ区は6001～，Ⅶ区は7001～，Ⅷ区は8001～のように表記している。掲載している遺構の平面図の縮尺はそれぞれに記載してあり，方位(N)は世界標準座標方眼北である。なお，掘立柱建物跡や堀・柵列跡などの模式図はS=1/200で掲載している。

例言

7. 遺物は原則として弥生土器をS = 1/4 それ以外をS = 1/3 で掲載し、各挿図にはスケールを掲載している。遺物番号は調査区ごとの通し番号とし、挿図と図版の番号は一致している。なお、遺物番号は、Ⅵ区が6001～6980、Ⅶ区が7001～7913、Ⅷ区が8001～8105で、掲載遺物の総点数は1,998点である。なお、細片で図示できなかった遺物については写真のみを掲載し、文章中には図版番号を併記している。

8. 現地調査及び本報告書を作成するにあたっては、下記の方々のご指導並びに貴重なご教示、ご助言を頂いた。記して感謝の意を表したい。

趙哲済(財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所)、辻本裕也・辻康男(パリノ・サーヴェイ株式会社)、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏

9. 調査にあたっては、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所、南国市のご協力を頂いた。また、地元住民の方々には遺跡に対する深いご理解とご援助を頂き、厚く感謝の意を表したい。

10. 整理作業は下記の方々に行って頂いた。記して感謝する次第である。

中西純子, 内村富紀, 元木恵利子, 小林貴美, 松田美香, 山形和江, 田島 歩, 岡宗真紀, 川添明美, 大賀幸子, 大原直美, 西内広美, 岩貞泰代, 横山めぐみ, 黒岩佳子, 澤田美弥, 川谷文香, 西山麻美

11. 出土遺物は「06-2NN」, 「07-2NN」と註記し、高知県立埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第I章 序章.....	1
1. はじめに.....	1
2. 調査の契機と経過.....	2
(1) 契機と経過.....	2
(2) 確認調査.....	3
(3) 調査の方法.....	4
第II章 調査の概要.....	7
1. 調査の経緯.....	7
(1) 調査の経緯.....	7
(2) 調査日誌抄.....	7
2. 調査区の概要.....	19
(1) VI区.....	19
(2) VII区.....	27
(3) VIII区.....	43
第III章 遺構と遺物.....	49
1. VI区.....	49
(1) 弥生時代.....	49
(2) 古代.....	148
(3) 中世.....	182
(4) 近世以降.....	192
2. VII区.....	193
(1) 弥生時代.....	193
(2) 古代.....	231
(3) 中世.....	303
(4) 近世以降.....	328
3. VIII区.....	334
(1) 弥生時代.....	334
(2) 古代.....	346
(3) 中世.....	352
(4) 近世.....	355
第IV章 自然科学分析.....	357
1. はじめに.....	357

2. 試料.....	357
3. 分析方法.....	357
(1) 植物珪酸体分析.....	357
(2) 種実遺体分析.....	358
(3) 炭化材同定.....	358
(4) 粒度分析.....	358
(5) 軟X線写真撮影.....	358
(6) 胎土薄片作製鑑定.....	358
(7) 胎土蛍光X線分析.....	359
4. 結果.....	359
(1) 植物珪酸体分析.....	359
(2) 種実遺体分析.....	361
(3) 炭化材同定.....	361
(4) 粒度分析.....	362
(5) 軟X線写真撮影.....	363
(6) 胎土薄片作製鑑定.....	368
(7) 胎土蛍光X線分析.....	368
5. 考察.....	373
(1) 弥生時代の溝埋土の植物珪酸体群集.....	373
(2) VII-1区 ST-7007埋土から得られた種実遺体.....	376
(3) 弥生時代の遺構から検出された炭化材.....	376
(4) 西野々遺跡の遺構検出面基盤層の堆積状況.....	378
(5) VIII区の古代～中世の層準の堆積・土壌相.....	386
(6) 弥生土器の胎土の鉱物学・岩石学検討.....	387
6. 小結.....	391
(1) 古環境.....	391
(2) 土器胎土.....	391
第V章 総括.....	395
1. はじめに.....	395
2. 古環境と地形発達史.....	395
3. 弥生時代について.....	396
(1) 集落の様相と変遷.....	396
(2) 遺物の様相.....	398
4. 古代について.....	400
(1) 掘立柱建物跡について.....	400
(2) 陶硯と文字資料にみる遺跡の性格について.....	402
(3) 素焼き土器の様相と変遷.....	402

(4) 搬入品の様相.....	403
5. 中世について.....	404
6. まとめ.....	404
7. おわりに.....	405
遺物観察表.....	407
遺構計測表.....	491

挿図目次

図1-1 西野々遺跡位置図.....	1
図1-2 竹中地区試掘トレンチ位置図(S=1/2,500).....	2
図1-3 西野々遺跡周辺の本ノギ図(S=1/5,000).....	3
図1-4 西野々遺跡グリッド設定図(S=1/5,000).....	4
図1-5 西野々遺跡調査区全体図(S=1/10,000).....	5
図1-6 VI～VIII区グリッド設置図(S=1/2,500).....	5
図2-1 VI区の調査区と地山の堆積層(S=1/1,000).....	19
図2-2 VI-2区北壁セクション.....	20
図2-3 第II・III層出土遺物実測図.....	21
図2-4 第IV層出土遺物実測図1.....	22
図2-5 第IV層出土遺物実測図2.....	23
図2-6 第V層出土遺物実測図1.....	25
図2-7 第V層出土遺物実測図2.....	26
図2-8 第V層出土遺物実測図3.....	26
図2-9 VII区の調査区と地山の堆積層(S=1/1,000).....	27
図2-10 VII-1区西壁セクション.....	28
図2-11 第I層出土遺物実測図.....	29
図2-12 第III層出土遺物実測図.....	30
図2-13 第IV・V層出土遺物実測図1.....	32
図2-14 第IV・V層出土遺物実測図2.....	33
図2-15 第IV・V層出土遺物実測図3.....	34
図2-16 第IV・V層出土遺物実測図4.....	35
図2-17 第IV・V層出土遺物実測図5.....	36
図2-18 第IV・V層出土遺物実測図6.....	37
図2-19 第IV・V層出土遺物実測図7.....	37
図2-20 第IV・V層出土遺物実測図8.....	38

挿図目次

図2-21	第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物実測図9	39
図2-22	第Ⅵ層出土遺物実測図1	40
図2-23	第Ⅵ層出土遺物実測図2	41
図2-24	第Ⅵ層出土遺物実測図3	42
図2-25	Ⅷ区の調査区と地山の堆積層(S=1/1,000)	43
図2-26	Ⅷ-1区南壁セクション	44
図2-27	第Ⅰ層出土遺物実測図	45
図2-28	第Ⅲ・Ⅳ層出土遺物実測図	46
図2-29	第Ⅴ層出土遺物実測図	46
図2-30	第Ⅵ層出土遺物実測図	47
図3-1	ST-6001・6002・6044	50
図3-2	ST-6001出土遺物実測図1	50
図3-3	ST-6001出土遺物実測図2	51
図3-4	ST-6002出土遺物実測図	52
図3-5	ST-6003	53
図3-6	ST-6003出土遺物実測図1	53
図3-7	ST-6003出土遺物実測図2	54
図3-8	ST-6005・6035	55
図3-9	ST-6004・6005出土遺物実測図	56
図3-10	ST-6006・6007	56
図3-11	ST-6007出土遺物実測図	57
図3-12	ST-6008	57
図3-13	ST-6008出土遺物実測図	58
図3-14	ST-6009・6010	58
図3-15	ST-6010出土遺物実測図1	59
図3-16	ST-6010出土遺物実測図2	60
図3-17	ST-6011	61
図3-18	ST-6012・6037・6049	62
図3-19	ST-6013・6014・6039	63
図3-20	ST-6011・6013出土遺物実測図	64
図3-21	ST-6014出土遺物実測図	65
図3-22	ST-6015・6016	66
図3-23	ST-6016出土遺物実測図1	67
図3-24	ST-6016出土遺物実測図2	67
図3-25	ST-6017	68
図3-26	ST-6018	68
図3-27	ST-6019～6021	69
図3-28	ST-6017・6018・6020出土遺物実測図	70

図3-29 ST-6021出土遺物実測図1	71
図3-30 ST-6021出土遺物実測図2	72
図3-31 ST-6022	73
図3-32 ST-6022出土遺物実測図	74
図3-33 ST-6023	75
図3-34 ST-6023出土遺物実測図	75
図3-35 ST-6025・6026	76
図3-36 ST-6026出土遺物実測図	77
図3-37 ST-6027, SK-6010	78
図3-38 ST-6027出土遺物実測図1	79
図3-39 ST-6027出土遺物実測図2	80
図3-40 ST-6028, SK-6047	81
図3-41 ST-6028出土遺物実測図	82
図3-42 ST-6029・6030	82
図3-43 ST-6030出土遺物実測図1	83
図3-44 ST-6030出土遺物実測図2	84
図3-45 ST-6031, SK-6043	84
図3-46 ST-6031出土遺物実測図1	85
図3-47 ST-6031出土遺物実測図2	85
図3-48 ST-6032・6033	85
図3-49 ST-6033出土遺物実測図	86
図3-50 ST-6034	87
図3-51 ST-6034出土遺物実測図	88
図3-52 ST-6035出土遺物実測図	89
図3-53 ST-6036・6047	89
図3-54 ST-6036出土遺物実測図	90
図3-55 ST-6037出土遺物実測図	91
図3-56 ST-6038	92
図3-57 ST-6038出土遺物実測図	93
図3-58 ST-6040	93
図3-59 ST-6040出土遺物実測図	94
図3-60 ST-6041	94
図3-61 ST-6042	95
図3-62 ST-6042出土遺物実測図1	95
図3-63 ST-6042出土遺物実測図2	96
図3-64 ST-6042出土遺物実測図3	96
図3-65 ST-6043・6044出土遺物実測図	97
図3-66 ST-6045	97

図3-67 ST-6047・6048 出土遺物実測図.....	98
図3-68 ST-6050.....	98
図3-69 ST-6051.....	99
図3-70 ST-6051 出土遺物実測図.....	99
図3-71 ST-6052.....	99
図3-72 ST-6052 出土遺物実測図.....	100
図3-73 ST-6053.....	100
図3-74 ST-6054.....	101
図3-75 ST-6054 出土遺物実測図.....	101
図3-76 ST-6055.....	101
図3-77 ST-6055 出土遺物実測図.....	102
図3-78 ST-6056.....	102
図3-79 ST-6056 出土遺物実測図.....	103
図3-80 ST-6057 出土遺物実測図.....	103
図3-81 SB-6001, SK-6001.....	104
図3-82 SB-6002.....	104
図3-83 SB-6003.....	105
図3-84 SB-6004, SK-6013.....	105
図3-85 SB-6005.....	105
図3-86 SB-6006, SK-6010.....	106
図3-87 SB-6007.....	106
図3-88 SB-6008.....	106
図3-89 SB-6009, SK-6015.....	106
図3-90 SB-6010, SK-6017.....	107
図3-91 SB-6011.....	107
図3-92 SB-6012.....	107
図3-93 SB-6013.....	108
図3-94 SB-6014.....	108
図3-95 SB-6015・6016, SK-6020～6024.....	108
図3-96 SB-6017.....	109
図3-97 SB-6018.....	109
図3-98 SB-6012・6018 出土遺物実測図.....	109
図3-99 SB-6019.....	109
図3-100 SB-6020.....	110
図3-101 SB-6021.....	110
図3-102 SB-6022.....	110
図3-103 SB-6023.....	110
図3-104 SB-6024.....	111

図3-105 SB-6025, SK-6057	111
図3-106 SB-6026	111
図3-107 SA-6001	112
図3-108 SA-6002	112
図3-109 SA-6003	112
図3-110 SA-6004	112
図3-111 SA-6005	112
図3-112 SA-6006	112
図3-113 SA-6007	113
図3-114 SK-6001	113
図3-115 SK-6001出土遺物実測図	113
図3-116 SK-6002・6003	114
図3-117 SK-6004	114
図3-118 SK-6002～6004出土遺物実測図	115
図3-119 SK-6007	115
図3-120 SK-6009	115
図3-121 SK-6010	116
図3-122 SK-6011	116
図3-123 SK-6007・6011出土遺物実測図	116
図3-124 SK-6012	117
図3-125 SK-6014	117
図3-126 SK-6014出土遺物実測図	118
図3-127 SK-6015	118
図3-128 SK-6015出土遺物実測図	118
図3-129 SK-6016	118
図3-130 SK-6016出土遺物実測図	119
図3-131 SK-6017	119
図3-132 SK-6018	120
図3-133 SK-6019	120
図3-134 SK-6017・6019出土遺物実測図	120
図3-135 SK-6020打製石鎌出土状態	121
図3-136 SK-6021	121
図3-137 SK-6022～6024	122
図3-138 SK-6020出土遺物実測図1	122
図3-139 SK-6020出土遺物実測図2	123
図3-140 SK-6020出土遺物実測図3	124
図3-141 SK-6020出土遺物実測図4	125
図3-142 SK-6020出土遺物実測図5	126

図3-143 SK-6020出土遺物実測図6	127
図3-144 SK-6021・6023出土遺物実測図	128
図3-145 SK-6026	129
図3-146 SK-6024～6027出土遺物実測図	130
図3-147 SK-6028	130
図3-148 SK-6029	130
図3-149 SK-6030	131
図3-150 SK-6033	131
図3-151 SK-6029・6031・6033出土遺物実測図	132
図3-152 SK-6036	132
図3-153 SK-6037	133
図3-154 SK-6034・6037出土遺物実測図	133
図3-155 SK-6038	133
図3-156 SK-6038出土遺物実測図	134
図3-157 SK-6040出土遺物実測図	135
図3-158 SK-6041遺物出土状態	135
図3-159 SK-6041出土遺物実測図1	136
図3-160 SK-6041出土遺物実測図2	137
図3-161 SK-6041出土遺物実測図3	137
図3-162 SK-6045	138
図3-163 SK-6046	138
図3-164 SK-6048	139
図3-165 SK-6046・6048出土遺物実測図	139
図3-166 SK-6054	140
図3-167 SK-6057	140
図3-168 SK-6057出土遺物実測図	141
図3-169 SK-6058出土遺物実測図	142
図3-170 SD-6001	142
図3-171 SD-6001出土遺物実測図	143
図3-172 SD-6002	143
図3-173 SD-6002出土遺物実測図1	143
図3-174 SD-6002出土遺物実測図2	144
図3-175 SD-6002出土遺物実測図3	145
図3-176 SD-6002出土遺物実測図4	146
図3-177 SD-6002出土遺物実測図5	147
図3-178 SD-6002出土遺物実測図6	147
図3-179 SD-6002出土遺物実測図7	147
図3-180 ビット出土遺物実測図	148

図3-181 SB-6027.....	149
図3-182 SB-6027出土遺物実測図.....	150
図3-183 SB-6028.....	150
図3-184 SB-6029.....	151
図3-185 SB-6030.....	152
図3-186 SB-6031.....	152
図3-187 SB-6028～6031出土遺物実測図.....	153
図3-188 SB-6032.....	153
図3-189 SB-6033.....	153
図3-190 SB-6034.....	154
図3-191 SB-6035.....	154
図3-192 SB-6032～6035出土遺物実測図.....	155
図3-193 SB-6036.....	155
図3-194 SB-6036出土遺物実測図.....	155
図3-195 SB-6037.....	156
図3-196 SB-6038.....	156
図3-197 SB-6039.....	156
図3-198 SB-6039出土遺物実測図.....	157
図3-199 SB-6040.....	157
図3-200 SB-6041.....	157
図3-201 SB-6042.....	157
図3-202 SB-6043.....	158
図3-203 SB-6044.....	158
図3-204 SB-6045.....	159
図3-205 SB-6046.....	159
図3-206 SA-6008.....	159
図3-207 SA-6009.....	159
図3-208 SA-6010.....	160
図3-209 SA-6011.....	160
図3-210 SK-6068.....	162
図3-211 SK-6069.....	163
図3-212 SK-6059・6061・6062・6064～6067・6070・6071出土遺物実測図.....	163
図3-213 SK-6072遺物出土状態.....	164
図3-214 SK-6072出土遺物実測図1.....	165
図3-215 SK-6072出土遺物実測図2.....	166
図3-216 SK-6074・6075出土遺物実測図.....	166
図3-217 SK-6075.....	167
図3-218 SK-6076.....	167

挿図目次

図3-219	SK-6079・6080・6083 出土遺物実測図	168
図3-220	SK-6082	168
図3-221	SK-6083	169
図3-222	SK-6084	169
図3-223	SD-6003～6006	170
図3-224	SD-6005・6007 出土遺物実測図	171
図3-225	SD-6008・6009	171
図3-226	SD-6008 出土遺物実測図	172
図3-227	SD-6009 出土遺物実測図	173
図3-228	SR-6001・6002	174
図3-229	SR-6001・6002 出土遺物実測図	175
図3-230	SR-6003	175
図3-231	SR-6003 出土遺物実測図1	176
図3-232	SR-6003 出土遺物実測図2	177
図3-233	SR-6003 出土遺物実測図3	178
図3-234	SU-6001 出土遺物実測図	178
図3-235	ピット出土遺物実測図1	179
図3-236	ピット出土遺物実測図2	180
図3-237	ピット出土遺物実測図3	180
図3-238	ピット出土遺物実測図4	181
図3-239	ピット出土遺物実測図5	182
図3-240	ピット出土遺物実測図6	182
図3-241	SB-6047	183
図3-242	SB-6048	183
図3-243	SB-6049	183
図3-244	SB-6050	184
図3-245	SB-6051	184
図3-246	SB-6049・6051 出土遺物実測図	184
図3-247	SB-6052	185
図3-248	SB-6052 出土遺物実測図	185
図3-249	SA-6012	185
図3-250	SA-6013	185
図3-251	SA-6014	185
図3-252	SA-6015	185
図3-253	SK-6085	186
図3-254	SK-6088	186
図3-255	SK-6089	187
図3-256	SK-6091	187

図3-257 SK-6095.....	187
図3-258 SK-6096.....	188
図3-259 SD-6010.....	188
図3-260 SD-6010出土遺物実測図.....	189
図3-261 SP-6001.....	190
図3-262 SP-6001出土遺物実測図.....	191
図3-263 ピット出土遺物実測図.....	191
図3-264 SK-6098・6100出土遺物実測図.....	192
図3-265 ST-7001.....	193
図3-266 ST-7001出土遺物実測図.....	195
図3-267 ST-7002.....	195
図3-268 ST-7002出土遺物実測図.....	196
図3-269 ST-7003.....	197
図3-270 ST-7003出土遺物実測図.....	197
図3-271 ST-7004.....	198
図3-272 ST-7005, SK-7002.....	198
図3-273 ST-7005出土遺物実測図.....	199
図3-274 ST-7006.....	199
図3-275 ST-7006出土遺物実測図.....	200
図3-276 ST-7007.....	200
図3-277 ST-7007出土遺物実測図.....	201
図3-278 ST-7008.....	202
図3-279 ST-7008出土遺物実測図.....	203
図3-280 ST-7009.....	203
図3-281 ST-7009出土遺物実測図1.....	204
図3-282 ST-7009出土遺物実測図2.....	205
図3-283 ST-7010.....	206
図3-284 ST-7011.....	206
図3-285 ST-7010・7011出土遺物実測図.....	207
図3-286 ST-7012.....	207
図3-287 ST-7013.....	208
図3-288 ST-7013出土遺物実測図.....	208
図3-289 ST-7014.....	209
図3-290 ST-7015・7016.....	209
図3-291 ST-7017.....	210
図3-292 ST-7017出土遺物実測図.....	211
図3-293 ST-7018, SK-7019.....	212
図3-294 ST-7018出土遺物実測図.....	213

挿図目次

図3-295 ST-7019.....	213
図3-296 ST-7019出土遺物実測図.....	214
図3-297 ST-7020.....	214
図3-298 ST-7021.....	215
図3-299 ST-7022.....	215
図3-300 ST-7023.....	216
図3-301 ST-7021・7023出土遺物実測図.....	216
図3-302 ST-7024.....	216
図3-303 ST-7025.....	217
図3-304 ST-7025出土遺物実測図.....	217
図3-305 ST-7026.....	217
図3-306 ST-7026出土遺物実測図.....	217
図3-307 ST-7027.....	218
図3-308 ST-7028.....	218
図3-309 ST-7029.....	218
図3-310 ST-7028・7029出土遺物実測図.....	218
図3-311 ST-7030.....	219
図3-312 ST-7031.....	219
図3-313 ST-7031出土遺物実測図.....	219
図3-314 SB-7001.....	220
図3-315 SB-7002, SK-7009.....	220
図3-316 SB-7002出土遺物実測図.....	221
図3-317 SB-7003, SK-7022.....	221
図3-318 SA-7001.....	221
図3-319 SK-7003.....	222
図3-320 SK-7003出土遺物実測図.....	222
図3-321 SK-7004.....	222
図3-322 SK-7005.....	222
図3-323 SK-7004・7005出土遺物実測図.....	223
図3-324 SK-7009.....	223
図3-325 SK-7009出土遺物実測図.....	224
図3-326 SK-7010.....	225
図3-327 SK-7010～7012出土遺物実測図.....	225
図3-328 SK-7013.....	226
図3-329 SK-7013出土遺物実測図.....	226
図3-330 SK-7015.....	227
図3-331 SK-7015・7016出土遺物実測図.....	227
図3-332 SK-7019.....	228

図3-333 SK-7022.....	228
図3-334 SK-7021・7022出土遺物実測図.....	229
図3-335 SD-7001.....	229
図3-336 SD-7001, P-7001出土遺物実測図.....	230
図3-337 SB-7004.....	231
図3-338 SB-7004出土遺物実測図1.....	232
図3-339 SB-7004出土遺物実測図2.....	233
図3-340 SB-7004出土遺物実測図3.....	234
図3-341 SB-7005.....	235
図3-342 SB-7006.....	235
図3-343 SB-7007.....	236
図3-344 SB-7005~7007出土遺物実測図.....	236
図3-345 SB-7008.....	237
図3-346 SB-7009.....	237
図3-347 SB-7010.....	238
図3-348 SB-7011.....	238
図3-349 SB-7012.....	238
図3-350 SB-7013.....	239
図3-351 SB-7014.....	239
図3-352 SB-7009・7010・7013・7014出土遺物実測図.....	240
図3-353 SB-7015.....	241
図3-354 SB-7016.....	241
図3-355 SB-7017.....	242
図3-356 SB-7015~7017出土遺物実測図.....	243
図3-357 SB-7018.....	243
図3-358 SB-7019.....	244
図3-359 SB-7020.....	244
図3-360 SB-7021.....	244
図3-361 SB-7022.....	245
図3-362 SB-7018・7019・7022出土遺物実測図.....	245
図3-363 SB-7023.....	245
図3-364 SB-7023出土遺物実測図.....	246
図3-365 SB-7024.....	246
図3-366 SB-7025.....	246
図3-367 SB-7026.....	246
図3-368 SB-7027.....	247
図3-369 SB-7027出土遺物実測図.....	247
図3-370 SB-7028.....	248

図3-371 SB-7028出土遺物実測図.....	248
図3-372 SB-7029.....	249
図3-373 SB-7030.....	249
図3-374 SB-7031.....	250
図3-375 SB-7032.....	250
図3-376 SB-7033.....	250
図3-377 SB-7034.....	251
図3-378 SB-7035.....	251
図3-379 SB-7029・7031・7033・7035出土遺物実測図.....	252
図3-380 SB-7036.....	252
図3-381 SB-7037.....	252
図3-382 SB-7038.....	252
図3-383 SB-7039.....	252
図3-384 SB-7040.....	253
図3-385 SB-7041.....	253
図3-386 SB-7042.....	253
図3-387 SB-7043.....	254
図3-388 SB-7044.....	254
図3-389 SB-7045.....	254
図3-390 SB-7046.....	255
図3-391 SB-7047.....	255
図3-392 SB-7048.....	255
図3-393 SB-7049.....	256
図3-394 SB-7040・7041・7046～7049出土遺物実測図.....	256
図3-395 SB-7050.....	257
図3-396 SB-7051.....	257
図3-397 SB-7052.....	257
図3-398 SB-7053.....	257
図3-399 SB-7054.....	258
図3-400 SB-7055.....	258
図3-401 SB-7056.....	258
図3-402 SB-7057.....	259
図3-403 SB-7058.....	259
図3-404 SB-7058出土遺物実測図.....	259
図3-405 SB-7059.....	260
図3-406 SB-7059出土遺物実測図.....	260
図3-407 SB-7060.....	260
図3-408 SB-7060出土遺物実測図.....	261

図3-409 SB-7061.....	261
図3-410 SB-7061出土遺物実測図.....	261
図3-411 SA-7002.....	262
図3-412 SA-7002出土遺物実測図.....	262
図3-413 SA-7003.....	262
図3-414 SA-7003出土遺物実測図.....	263
図3-415 SA-7004.....	263
図3-416 SA-7005.....	263
図3-417 SA-7005出土遺物実測図.....	264
図3-418 SA-7006.....	264
図3-419 SA-7007.....	264
図3-420 SA-7008.....	264
図3-421 SA-7008出土遺物実測図.....	265
図3-422 SA-7009.....	265
図3-423 SA-7010.....	265
図3-424 SA-7010出土遺物実測図.....	265
図3-425 SK-7025.....	266
図3-426 SK-7024・7026出土遺物実測図.....	266
図3-427 SK-7027.....	267
図3-428 SK-7027・7029出土遺物実測図.....	267
図3-429 SK-7030～7033出土遺物実測図.....	269
図3-430 SK-7035.....	269
図3-431 SK-7036.....	270
図3-432 SK-7037.....	270
図3-433 SK-7036・7037出土遺物実測図.....	271
図3-434 SK-7038.....	271
図3-435 SK-7039.....	271
図3-436 SK-7043.....	272
図3-437 SK-7041・7042・7044出土遺物実測図.....	272
図3-438 SK-7045・7047・7049出土遺物実測図.....	273
図3-439 SK-7055.....	275
図3-440 SK-7050・7051・7055出土遺物実測図.....	276
図3-441 SK-7056出土遺物実測図.....	276
図3-442 SK-7057.....	276
図3-443 SK-7057出土遺物実測図.....	277
図3-444 SK-7058出土遺物実測図.....	277
図3-445 SK-7059.....	278
図3-446 SK-7060.....	278

図3-447 SK-7060出土遺物実測図	279
図3-448 SK-7061	279
図3-449 SK-7063	279
図3-450 SK-7064・7065	279
図3-451 SK-7066	280
図3-452 SK-7067	280
図3-453 SK-7068	280
図3-454 SK-7064・7068出土遺物実測図	281
図3-455 SK-7070出土遺物実測図	281
図3-456 SK-7071出土遺物実測図	281
図3-457 SK-7074出土遺物実測図	282
図3-458 SD-7002出土遺物実測図	282
図3-459 SD-7002・7003	283
図3-460 SD-7004・7005	283
図3-461 SD-7006・7007	284
図3-462 SD-7003～7006出土遺物実測図	285
図3-463 SD-7008	285
図3-464 SD-7008出土遺物実測図1	286
図3-465 SD-7008出土遺物実測図2	287
図3-466 SD-7008出土遺物実測図3	288
図3-467 SD-7008出土遺物実測図4	289
図3-468 SD-7008出土遺物実測図5	289
図3-469 SD-7008出土遺物実測図6	290
図3-470 SD-7008出土遺物実測図7	291
図3-471 SD-7008出土遺物実測図8	291
図3-472 SD-7008出土遺物実測図9	292
図3-473 SD-7008出土遺物実測図10	293
図3-474 SD-7008出土遺物実測図11	294
図3-475 SD-7008出土遺物実測図12	295
図3-476 ピット出土遺物実測図1	296
図3-477 ピット出土遺物実測図2	297
図3-478 ピット出土遺物実測図3	297
図3-479 ピット出土遺物実測図4	298
図3-480 ピット出土遺物実測図5	299
図3-481 ピット出土遺物実測図6	300
図3-482 ピット出土遺物実測図7	301
図3-483 ピット出土遺物実測図8	301
図3-484 ピット出土遺物実測図9	302

図3-485 SB-7062.....	303
図3-486 SB-7063.....	304
図3-487 SB-7064.....	304
図3-488 SB-7065.....	304
図3-489 SB-7066.....	304
図3-490 SB-7066出土遺物実測図.....	305
図3-491 SB-7067.....	305
図3-492 SB-7068.....	305
図3-493 SB-7069.....	305
図3-494 SB-7070.....	306
図3-495 SB-7071.....	306
図3-496 SB-7072.....	306
図3-497 SB-7073.....	306
図3-498 SB-7074.....	307
図3-499 SB-7075.....	307
図3-500 SB-7076.....	307
図3-501 SB-7069・7073・7074・7076出土遺物実測図.....	308
図3-502 SB-7077.....	308
図3-503 SB-7078.....	308
図3-504 SB-7079.....	309
図3-505 SB-7080.....	309
図3-506 SB-7081.....	309
図3-507 SB-7082.....	310
図3-508 SB-7083.....	310
図3-509 SB-7084.....	310
図3-510 SB-7085.....	311
図3-511 SB-7086.....	311
図3-512 SB-7082・7086出土遺物実測図.....	311
図3-513 SB-7087.....	311
図3-514 SB-7087出土遺物実測図1.....	312
図3-515 SB-7087出土遺物実測図2.....	312
図3-516 SB-7088.....	312
図3-517 SB-7089.....	313
図3-518 SB-7090.....	313
図3-519 SB-7091.....	313
図3-520 SB-7092.....	313
図3-521 SB-7093.....	314
図3-522 SB-7094.....	314

挿図目次

図3-523	SB-7088・7093・7094出土遺物実測図	314
図3-524	SB-7095	314
図3-525	SA-7011	315
図3-526	SA-7012	315
図3-527	SA-7013	315
図3-528	SA-7014	315
図3-529	SA-7015	315
図3-530	SA-7016	315
図3-531	SA-7017	316
図3-532	SA-7018	316
図3-533	SA-7019	316
図3-534	SA-7020	316
図3-535	SA-7021	316
図3-536	SK-7075	317
図3-537	SK-7079出土遺物実測図	317
図3-538	SK-7080	318
図3-539	SK-7081	318
図3-540	SK-7080・7081出土遺物実測図	318
図3-541	SK-7085	319
図3-542	SK-7087	320
図3-543	SK-7088	320
図3-544	SK-7089	320
図3-545	SK-7085・7086・7091出土遺物実測図	321
図3-546	SK-7093	321
図3-547	SK-7094出土遺物実測図	321
図3-548	SK-7095	322
図3-549	SK-7096	322
図3-550	SK-7098	322
図3-551	SK-7099	323
図3-552	SK-7100	323
図3-553	SK-7101	323
図3-554	SK-7095・7097・7099～7102出土遺物実測図	324
図3-555	SD-7009	324
図3-556	SD-7009・7011出土遺物実測図	325
図3-557	SD-7010～7012	326
図3-558	ピット出土遺物実測図1	326
図3-559	ピット出土遺物実測図2	327
図3-560	ピット出土遺物実測図3	328

図3-561 SK-7104.....	328
図3-562 SK-7104出土遺物実測図1.....	329
図3-563 SK-7104出土遺物実測図2.....	329
図3-564 SK-7105.....	329
図3-565 SK-7105・7106出土遺物実測図.....	330
図3-566 SK-7108.....	330
図3-567 SK-7114.....	331
図3-568 SK-7114・7115・7119出土遺物実測図.....	332
図3-569 SD-7013・7014.....	333
図3-570 ST-8001.....	334
図3-571 ST-8002.....	335
図3-572 ST-8002出土遺物実測図.....	335
図3-573 ST-8003.....	336
図3-574 ST-8003出土遺物実測図.....	336
図3-575 SA-8001～8003.....	337
図3-576 SA-8004・8005.....	338
図3-577 SK-8001.....	338
図3-578 SK-8003.....	338
図3-579 SK-8003出土遺物実測図1.....	339
図3-580 SK-8003出土遺物実測図2.....	339
図3-581 SK-8016.....	340
図3-582 SD-8001.....	341
図3-583 SD-8001出土遺物実測図.....	341
図3-584 SD-8002・8003, SA-8001～8003.....	341
図3-585 SD-8002出土遺物実測図1.....	342
図3-586 SD-8002出土遺物実測図2.....	343
図3-587 SD-8004～8007.....	344
図3-588 SD-8004～8006出土遺物実測図.....	344
図3-589 SD-8008・8009.....	344
図3-590 SU-8001・8002.....	345
図3-591 ピット出土遺物実測図.....	345
図3-592 SK-8018出土遺物実測図.....	346
図3-593 SK-8020～8022出土遺物実測図.....	347
図3-594 SD-8010出土遺物実測図.....	348
図3-595 SD-8010～8014.....	348
図3-596 SD-8014～8016.....	349
図3-597 SD-8011・8015・8016・8019出土遺物実測図.....	349
図3-598 SD-8017～8021.....	350

図3-599 SD-8019・8020	351
図3-600 SU-8005.....	351
図3-601 SU-8005出土遺物実測図.....	352
図3-602 SU-8007.....	352
図3-603 ピット出土遺物実測図.....	352
図3-604 SB-8001.....	353
図3-605 SD-8022・8023	353
図3-606 SX-8001.....	354
図3-607 SX-8001出土遺物実測図.....	354
図3-608 SK-8025出土遺物実測図.....	355
図4-1 植物珪酸体含量.....	360
図4-2 粒度分析結果.....	362
図4-3 粒度分析結果三角ダイアグラム.....	363
図4-4 Ⅷ-1区採取堆積層断面の軟X線写真.....	363
図4-5 砂粒・基質・孔隙の割合.....	368
図4-6 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1).....	369
図4-7 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2).....	370
図4-8 胎土中の砂の粒径組成(1).....	371
図4-9 胎土中の砂の粒径組成(2).....	372
図4-10 土器の科学組成散布図(1).....	374
図4-11 土器の科学組成散布図(2).....	375
図4-12 西野々遺跡分析地点の層序とサンプル採取層準.....	377
図4-13 調査地点位置図.....	379
図4-14 香長平野の地形と遺跡の立地.....	379
図4-15 西野々遺跡東西方向の層序模式柱状断面図.....	382
図4-16 調査区周辺の地形分類図.....	383
図4-17 介良野遺跡の層序と年代.....	384
図4-18 胎土分析試料の粒度組成.....	390
図5-1 竪穴建物跡形状別変遷図.....	396
図5-2 竪穴建物跡の規模.....	397
図5-3 弥生時代掘立柱建物跡の規模.....	398
図5-4 サヌカイト出土状況.....	398
図5-5 打製石鎌接合資料.....	399
図5-6 打製石鎌重量分布図.....	400
図5-7 古代掘立柱建物跡の規模.....	401
図5-8 土師器, 須恵器, 土師質土器の変遷概念図.....	403
図5-9 中世掘立柱建物跡の規模.....	404

表目次

表3-1	ST-7001 付属遺構計測表.....	194
表3-2	ST-7002 付属遺構計測表.....	196
表4-1	植物珪酸体含量.....	360
表4-2	種実分析結果.....	361
表4-3	樹種同定結果.....	361
表4-4	西野々遺跡の粒度組成.....	362
表4-5	西野々遺跡の粒度組成解析結果.....	362
表4-6	弥生土器胎土分析試料一覧および胎土分類結果.....	364
表4-7	薄片観察結果(1).....	365
表4-7	薄片観察結果(2).....	366
表4-7	薄片観察結果(3).....	367
表4-8	土器胎土の蛍光X線分析結果(化学組成).....	373
表5-1	サヌカイト出土状況総括表.....	398
表5-2	古代掘立柱建物跡の変遷.....	401

遺物観察表目次

VI区 遺物観察表 1 (6001 ~ 6025).....	409
VI区 遺物観察表 2 (6026 ~ 6050).....	410
VI区 遺物観察表 3 (6051 ~ 6075).....	411
VI区 遺物観察表 4 (6076 ~ 6100).....	412
VI区 遺物観察表 5 (6101 ~ 6125).....	413
VI区 遺物観察表 6 (6126 ~ 6150).....	414
VI区 遺物観察表 7 (6151 ~ 6175).....	415
VI区 遺物観察表 8 (6176 ~ 6200).....	416
VI区 遺物観察表 9 (6201 ~ 6225).....	417
VI区 遺物観察表 10 (6226 ~ 6250).....	418
VI区 遺物観察表 11 (6251 ~ 6275).....	419
VI区 遺物観察表 12 (6276 ~ 6300).....	420
VI区 遺物観察表 13 (6301 ~ 6325).....	421
VI区 遺物観察表 14 (6326 ~ 6350).....	422
VI区 遺物観察表 15 (6351 ~ 6375).....	423
VI区 遺物観察表 16 (6376 ~ 6400).....	424
VI区 遺物観察表 17 (6401 ~ 6425).....	425
VI区 遺物観察表 18 (6426 ~ 6450).....	426

Ⅵ区 遺物觀察表 19 (6451～6475).....	427
Ⅵ区 遺物觀察表 20 (6476～6500).....	428
Ⅵ区 遺物觀察表 21 (6501～6525).....	429
Ⅵ区 遺物觀察表 22 (6526～6550).....	430
Ⅵ区 遺物觀察表 23 (6551～6575).....	431
Ⅵ区 遺物觀察表 24 (6576～6600).....	432
Ⅵ区 遺物觀察表 25 (6601～6625).....	433
Ⅵ区 遺物觀察表 26 (6626～6650).....	434
Ⅵ区 遺物觀察表 27 (6651～6675).....	435
Ⅵ区 遺物觀察表 28 (6676～6700).....	436
Ⅵ区 遺物觀察表 29 (6701～6725).....	437
Ⅵ区 遺物觀察表 30 (6726～6750).....	438
Ⅵ区 遺物觀察表 31 (6751～6775).....	439
Ⅵ区 遺物觀察表 32 (6776～6800).....	440
Ⅵ区 遺物觀察表 33 (6801～6825).....	441
Ⅵ区 遺物觀察表 34 (6826～6850).....	442
Ⅵ区 遺物觀察表 35 (6851～6875).....	443
Ⅵ区 遺物觀察表 36 (6876～6900).....	444
Ⅵ区 遺物觀察表 37 (6901～6925).....	445
Ⅵ区 遺物觀察表 38 (6926～6950).....	446
Ⅵ区 遺物觀察表 39 (6951～6975).....	447
Ⅵ区 遺物觀察表 40 (6976～6980).....	448
Ⅶ区 遺物觀察表 1 (7001～7025).....	449
Ⅶ区 遺物觀察表 2 (7026～7050).....	450
Ⅶ区 遺物觀察表 3 (7051～7075).....	451
Ⅶ区 遺物觀察表 4 (7076～7100).....	452
Ⅶ区 遺物觀察表 5 (7101～7125).....	453
Ⅶ区 遺物觀察表 6 (7126～7150).....	454
Ⅶ区 遺物觀察表 7 (7151～7175).....	455
Ⅶ区 遺物觀察表 8 (7176～7200).....	456
Ⅶ区 遺物觀察表 9 (7201～7225).....	457
Ⅶ区 遺物觀察表 10 (7226～7250).....	458
Ⅶ区 遺物觀察表 11 (7251～7275).....	459
Ⅶ区 遺物觀察表 12 (7276～7300).....	460
Ⅶ区 遺物觀察表 13 (7301～7325).....	461
Ⅶ区 遺物觀察表 14 (7326～7350).....	462
Ⅶ区 遺物觀察表 15 (7351～7375).....	463
Ⅶ区 遺物觀察表 16 (7376～7400).....	464

Ⅶ区 遺物観察表 17 (7401～7425).....	465
Ⅶ区 遺物観察表 18 (7426～7450).....	466
Ⅶ区 遺物観察表 19 (7451～7475).....	467
Ⅶ区 遺物観察表 20 (7476～7500).....	468
Ⅶ区 遺物観察表 21 (7501～7525).....	469
Ⅶ区 遺物観察表 22 (7526～7550).....	470
Ⅶ区 遺物観察表 23 (7551～7575).....	471
Ⅶ区 遺物観察表 24 (7576～7600).....	472
Ⅶ区 遺物観察表 25 (7601～7625).....	473
Ⅶ区 遺物観察表 26 (7626～7650).....	474
Ⅶ区 遺物観察表 27 (7651～7675).....	475
Ⅶ区 遺物観察表 28 (7676～7700).....	476
Ⅶ区 遺物観察表 29 (7701～7725).....	477
Ⅶ区 遺物観察表 30 (7726～7750).....	478
Ⅶ区 遺物観察表 31 (7751～7775).....	479
Ⅶ区 遺物観察表 32 (7776～7800).....	480
Ⅶ区 遺物観察表 33 (7801～7825).....	481
Ⅶ区 遺物観察表 34 (7826～7850).....	482
Ⅶ区 遺物観察表 35 (7851～7875).....	483
Ⅶ区 遺物観察表 36 (7876～7900).....	484
Ⅶ区 遺物観察表 37 (7901～7913).....	485
Ⅷ区 遺物観察表 1 (8001～8025).....	486
Ⅷ区 遺物観察表 2 (8026～8050).....	487
Ⅷ区 遺物観察表 3 (8051～8075).....	488
Ⅷ区 遺物観察表 4 (8076～8100).....	489
Ⅷ区 遺物観察表 5 (8101～8105).....	490

遺構計測表目次

西野々遺跡Ⅵ～Ⅷ区 遺構・遺物表.....	492
遺構計測表 1 Ⅵ区 竪穴建物跡 (ST-6001～6042).....	493
遺構計測表 2 Ⅵ区 竪穴状遺構 (ST-6043～6057).....	494
遺構計測表 3 Ⅵ区 掘立柱建物跡 1 (SB-6001～6023).....	494
遺構計測表 4 Ⅵ区 掘立柱建物跡 2 (SB-6024～6049).....	495
遺構計測表 5 Ⅵ区 掘立柱建物跡 3 (SB-6050～6052).....	496
遺構計測表 6 Ⅵ区 塀・柵列跡 (SA-6001～6015).....	496
遺構計測表 7 Ⅵ区 土坑 1 (SK-6001～6011).....	496

遺構計測表 8	VI区土坑2 (SK-6012~6054)	497
遺構計測表 9	VI区土坑3 (SK-6055~6098)	498
遺構計測表10	VI区土坑4 (SK-6099~6101)	499
遺構計測表11	VI区溝跡 (SD-6001~6010)	499
遺構計測表12	VI区道路遺構 (SR-6001~6003)	499
遺構計測表13	VI区畝状遺構 (SU-6001)	499
遺構計測表14	VI区水溜り状遺構 (SP-6001)	499
遺構計測表15	VII区竪穴建物跡 (ST-7001~7021)	500
遺構計測表16	VII区竪穴状遺構 (ST-7022~7031)	500
遺構計測表17	VII区掘立柱建物跡1 (SB-7001~7025)	501
遺構計測表18	VII区掘立柱建物跡2 (SB-7026~7048)	502
遺構計測表19	VII区掘立柱建物跡3 (SB-7049~7080)	503
遺構計測表20	VII区掘立柱建物跡4 (SB-7081~7095)	504
遺構計測表21	VII区塀・柵列跡1 (SA-7001~7015)	504
遺構計測表22	VII区塀・柵列跡2 (SA-7016~7021)	505
遺構計測表23	VII区土坑1 (SK-7001~7032)	505
遺構計測表24	VII区土坑2 (SK-7033~7075)	506
遺構計測表25	VII区土坑3 (SK-7076~7119)	507
遺構計測表26	VII区溝跡 (SD-7001~7014)	508
遺構計測表27	VII区井戸跡 (SE-7001)	508
遺構計測表28	VIII区竪穴建物跡 (ST-8001・8002)	508
遺構計測表29	VIII区竪穴状遺構 (ST-8003)	508
遺構計測表30	VIII区掘立柱建物跡 (SB-8001)	508
遺構計測表31	VIII区塀・柵列跡 (SA-8001~8005)	509
遺構計測表32	VIII区土坑 (SK-8001~8025)	509
遺構計測表33	VIII区溝跡1 (SD-8001~8004)	509
遺構計測表34	VIII区溝跡2 (SD-8005~8024)	510
遺構計測表35	VIII区畝状遺構 (SU-8001~8007)	510
遺構計測表36	VIII区性格不明遺構 (SX-8001)	510

写真目次

写真2-1	VI-1区発掘調査風景	8
写真2-2	VI-2区発掘調査風景	9
写真2-3	VI区現場見学会	10
写真2-4	VII-1区発掘調査風景1	11
写真2-5	VII-1区発掘調査風景2	12

写真2-6	Ⅶ-1区発掘調査風景3.....	13
写真2-7	現地説明会風景1.....	14
写真2-8	現地説明会風景2.....	14
写真2-9	現地説明会風景3.....	14
写真2-10	Ⅶ-5区発掘調査風景.....	15
写真2-11	Ⅷ-4区発掘調査風景.....	16
写真2-12	Ⅷ-1区発掘調査風景.....	18
写真4-1	Ⅵ区深掘断面堆積状況1.....	378
写真4-2	Ⅵ区深掘断面堆積状況2.....	378
写真4-3	Ⅵ区深掘断面堆積状況3.....	378
写真4-4	Ⅵ区深掘断面堆積状況4.....	378
写真4-5	Ⅷ区軟X線写真撮影試料採取断面.....	386
写真4-6	Ⅷ区軟X線写真撮影試料の堆積断面.....	386

付図目次

付図1	西野々遺跡第Ⅵ調査地区(Ⅵ区)弥生時代遺構平面図(S=1/200)
付図2	西野々遺跡第Ⅵ調査地区(Ⅵ区)古代遺構平面図(S=1/200)
付図3	西野々遺跡第Ⅵ調査地区(Ⅵ区)中近世遺構平面図(S=1/200)
付図4	西野々遺跡第Ⅵ調査地区(Ⅵ区)遺構平面図(S=1/200)
付図5	西野々遺跡第Ⅶ調査地区(Ⅶ区)弥生時代遺構平面図(S=1/200)
付図6	西野々遺跡第Ⅶ調査地区(Ⅶ区)古代遺構平面図(S=1/200)
付図7	西野々遺跡第Ⅶ調査地区(Ⅶ区)中近世遺構平面図(S=1/200)
付図8	西野々遺跡第Ⅶ調査地区(Ⅶ区)遺構平面図(S=1/200)
付図9	西野々遺跡第Ⅷ調査地区(Ⅷ区)弥生時代遺構平面図(S=1/200)
付図10	西野々遺跡第Ⅷ調査地区(Ⅷ区)古代遺構平面図(S=1/200)
付図11	西野々遺跡第Ⅷ調査地区(Ⅷ区)中近世遺構平面図(S=1/200)
付図12	西野々遺跡第Ⅷ調査地区(Ⅷ区)遺構平面図(S=1/200)
付図13	西野々遺跡中世屋敷跡遺構平面図(S=1/200)
付図14	西野々遺跡遺構変遷図(S=1/1,500)

西野々遺跡 I～Ⅷ区 遺構・遺物表

西野々遺跡 I～Ⅷ区 遺構・遺物表

遺 構 名	I 区	II 区	III 区	IV 区	V 区	VI 区	VII 区	VIII 区	合計
竪 穴 建 物 跡	3軒	—	—	—	—	42軒	21軒	2軒	68軒
竪 穴 状 遺 構	—	—	1軒	—	—	15軒	10軒	1軒	27軒
掘 立 柱 建 物 跡	25棟	32棟	31棟	24棟	—	52棟	95棟	1棟	260棟
堀 ・ 柵 列 跡	12列	22列	4列	3列	—	15列	21列	5列	82列
土 坑	45基	88基	82基	37基	13基	101基	119基	25基	510基
溝 跡	53条	54条	120条	50条	43条	10条	14条	24条	368条
井 戸 跡	—	—	2基	—	—	—	1基	—	3基
道 路 遺 構	—	—	—	—	—	3条	—	—	3条
畝 状 遺 構	—	—	12列	11列	6列	1列	—	7列	37列
水 溜 り 状 遺 構	1基	—	—	—	—	1基	—	—	2基
性 格 不 明 遺 構	—	2基	—	—	2基	—	—	1基	5基
ピ ッ ト	2,108個	3,761個	2,496個	1,160個	1個	3,693個	6,847個	580個	20,646個
遺 構 総 数	2,247	3,959	2,748	1,285	65	3,933	7,128	646	22,011
出 土 遺 物 総 点 数	6,650点	8,857点	15,801点	4,060点	1,451点	62,892点	90,449点	7,315点	197,475点
掲 載 遺 物	425点	408点	549点	135点	143点	980点	913点	105点	3,658点

第I章 序 章

1. はじめに

本書は、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター（以下「埋蔵文化財センター」という。）が平成17年度に行った高知東部自動車道埋蔵文化財試掘調査(竹中地区)の結果を受け、平成18年度と平成19年度に高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局から業務委託を受けた高知南国道路外1件埋蔵文化財発掘調査のうち、埋蔵文化財センターが実施した西野々遺跡(VI～VIII区)の成果をまとめたものである。

この調査は、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所が計画し、実施している高知東部自動車道(一般国道55号・高知南国道路/南国安芸道路)の内、高知南国道路建設工事に伴って影響を受ける埋蔵文化財について事前の発掘調査を行った上で、出土遺物等の整理作業を行い、遺跡の記録保存を図ることを目的としている。

西野々遺跡は、平成15年度に実施した事前の試掘調査で、弥生時代から近世にかけての遺構・遺物が周知の茶田遺跡を含めた西野々地区の約88%で確認され、さらに地元の要望もあり、大字を取って名称変更した遺跡で、後述のとおり平成17年度に実施した試掘調査によって、遺跡の範囲が東に大きく広がった。遺跡は物部川とその支流によって形成された扇状地末端部に立地する弥生時代から近世にかけての複合遺跡で、弥生時代中期後半から後期前半の集落、奈良時代後半から平安時代中期にかけての官衙関連遺構、室町時代の屋敷跡と集落に特徴付けられる。

今回報告するVI～VIII区は西野々遺跡の東部に位置し、遺構・遺物のあり様から西野々遺跡の中核部に当たるとみられ、弥生時代では竪穴建物跡65軒が検出された集落跡、古代では方形の柱穴で構成された掘立柱建物跡71棟が復元された官衙関連施設跡、中世では一辺35～44mの溝に囲まれた屋敷跡が確認されている。

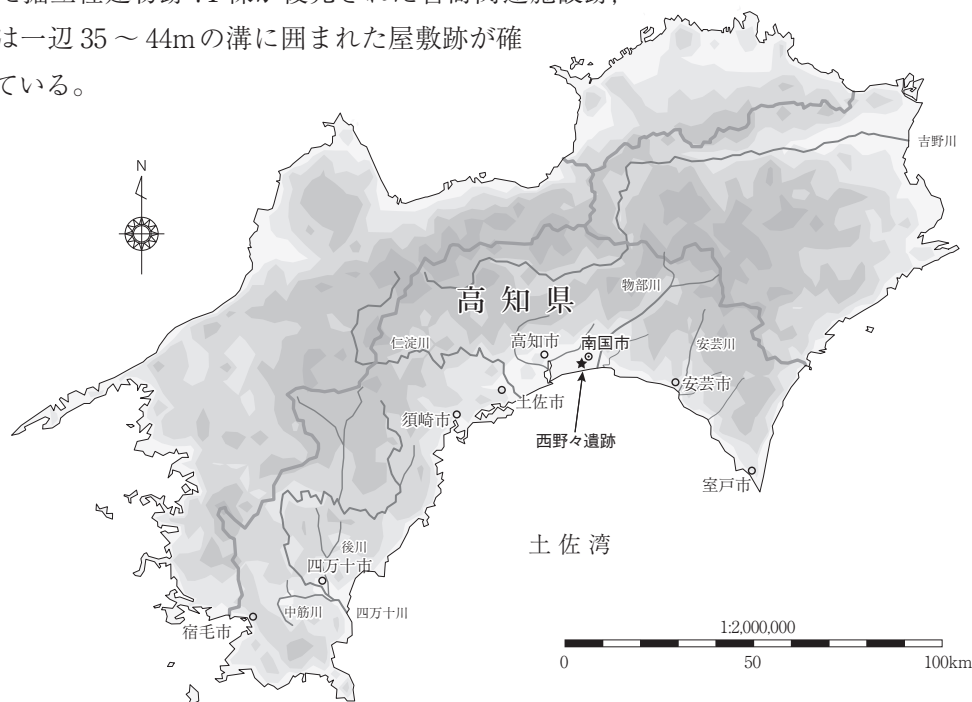


図1-1 西野々遺跡位置図

2. 調査の契機と経過

(1) 契機と経過

高知南国道路は、高知市～安芸市間 36 km を結ぶ一般国道 55 号の自動車専用道路である高知東部自動車道の一環として高知中央生活圏の連携強化を図るほか、四国横断自動車道、南国安芸道路と接続し、広域交通ネットワークの形成を目的とする道路で、昭和 62 年、国の高規格幹線道路網計画に組み込まれている。東部自動車道は延長 36 km と長く、かつ県内最大級の遺跡である田村遺跡群など遺跡の集中する高知平野を横断する路線であり、平成 16 年度以降大発掘調査が実施されている。

埋蔵文化財について埋蔵文化財センターを交え具体的な調整を開始したのは平成 15 年度からである。まず、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と埋蔵文化財の取り扱いについて高知県教育委員会を交え調整を行った。その結果、当面の工事予定区域について周知の遺跡も存在するものこのれまでに発掘調査が実施されておらず、遺構の遺存状態が全く不明であるため土地の買収が完了した箇所から順次試掘調査を行うこととなった。なお、試掘調査は、平成 15～18 年度が埋蔵文化財センター、平成 19 年度からは高知県教育委員会が実施すると共に調整業務も行っている。

西野々遺跡については、平成 15 年度の試掘調査の結果、県道仁井田竹中線以西の当面の調査対象地が 38,000 m² (東西約 700m) と広範囲に及ぶため 3 パーティーで平成 16 年度と平成 17 年度の 2 ヶ年で発掘調査を実施した。さらに、平成 17 年度に実施した東隣の竹中地区の試掘調査でも弥生時代から近世にかけての多数の遺構・遺物が確認され⁽¹⁾、引き続き 3 パーティーで平成 18 年度に発掘調査を行い、土地の買収等の問題で残った部分については 2 パーティーで平成 19 年度に発掘調査を行った。

西野々遺跡は全部で 8 調査区 (I～Ⅷ区) に分けて発掘調査を実施したが、各調査区の調査年度は、I 区、II 区、III 区の東半分が平成 16 年度、III 区の西半分、IV 区、V 区が平成 17 年度、VI～Ⅷ区が平成

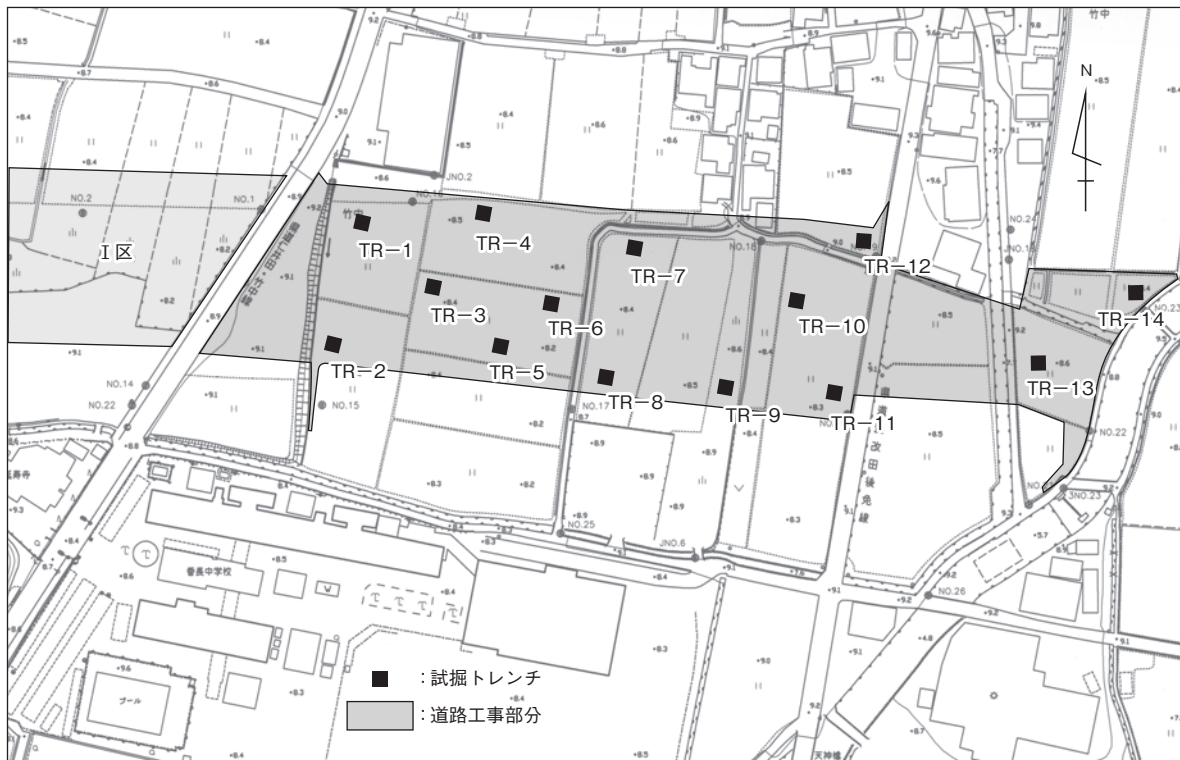


図1-2 竹中地区試掘トレンチ位置図(S=1/2,500)

18年度、Ⅶ区とⅧ区の残りが平成19年度であった。

I区とⅡ区については『西野々遺跡Ⅰ』（平成20年3月）、Ⅲ～Ⅴ区については『西野々遺跡Ⅱ』で報告し、Ⅵ～Ⅷ区については本書（『西野々遺跡Ⅲ』）で報告する。

また、発掘調査は、財団法人高知県文化財団が国土交通省四国地方整備局と業務委託を締結した高知県教育委員会からの委託を受け、平成15年度以降継続的⁽²⁾に実施しており、高知南国道路関係では、西野々遺跡(平成16～19年度)、向山戦争遺跡(平成20年度)、関遺跡(平成20～22年度)、田村遺跡群(平成22～24年度)、田村西遺跡(平成22年度)の調査を実施している。

一方、整理業務も並行して行っているが、報告書の刊行は平成20・21年度はなく、これまでに刊行したのは『西野々遺跡Ⅰ』（高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ）平成20年3月のみで、本年度、『西野々遺跡Ⅱ』（高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ）と本書の『西野々遺跡Ⅲ』（高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ）を刊行する。

(2) 確認調査

平成15年度に実施した試掘調査によって、県道仁井田竹中線以西については遺構が確認され、平成16年度から発掘調査を実施していたが、県道仁井田竹中線以东については、I区の状況から遺構の存在は推測されたものの、実際に確認していなかったため平成17年度に県道仁井田竹中線から県道南国インター線を挟んで下田川までの区間(竹中地区)について試掘調査を実施した。

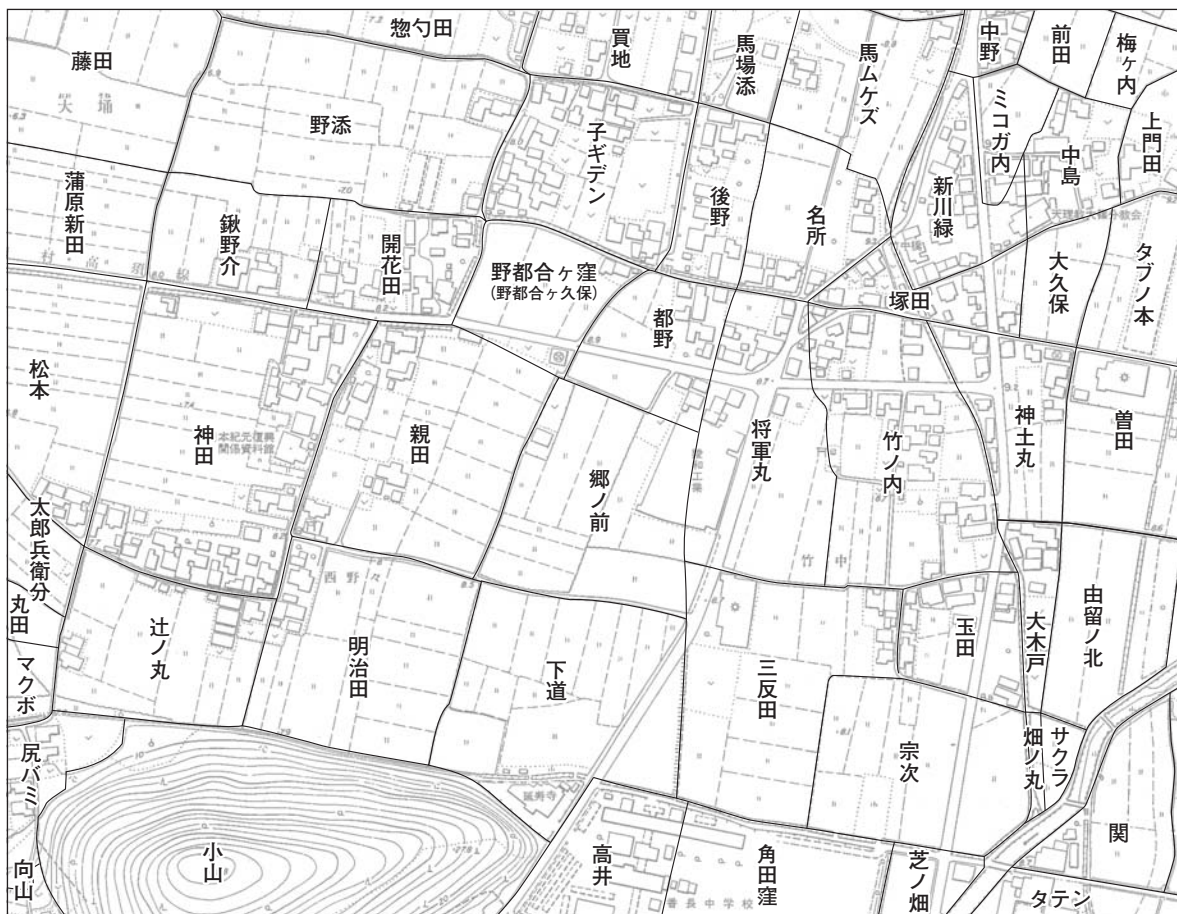


図1-3 西野々遺跡周辺の本ノギ図(S=1/5,000)

2. 調査の契機と経過 (3) 調査の方法

試掘調査は5×5mを基本とし、14ヵ所にトレンチを設定して行った。その結果、調査対象地のほぼ全域で弥生時代と古代の遺物包含層と遺構が確認され、県道南国インター線の西側では弥生時代と古代の遺構が重複し、特に遺構の密度が高くなっていた。一方、県道南国インター線以東では遺構の密度が、徐々に低くなり、下田川右岸では地形も下田川に向かって下がっていた。

(3) 調査の方法

平成16年度から実施している西野々遺跡の発掘調査で設定した基準点を基に、グリッドを設定して、調査では新たに4級基準点(4等水準点を併設)を設定して調査に備えた。

なお、測量は世界測地系第4座標系(IV系)の基準点を使用し、X = 62,500m, Y = 11,000m(北緯33° 33' 49", 東経133° 37' 07", 真北方向角-0° 03' 56")を原点とし、A0(100mグリッド:大グリッド)を組んだ。調査区域が狭いX軸(南北)にアルファベット、調査区域が広いY軸(東西)にアラビア数字を配し、物部川までの高知南国道路区域の調査に対応できるものとした。100mグリッド(大グリッド)の下には20mグリッド(中グリッド)を設定し、A1-1と枝番を付し、実際調査で使用する4mグリッド(小グリッド)にはさらに枝番をA1-1-1と付した。なお、遺構図にはグリッド名ではなく座標値を表記している。

調査は、原則として遺物包含層直上まで機械力を導入し、遺物包含層以下は人力で行った。なお、遺物包含層でも遺物量が少ない部分や薄い部分については作業効率を考慮し機械力を導入した。調査区は東西に長く、排土置き場の関係上それぞれ東半分(E)と西半分(W)に分け、VI区E, VI区Wのように呼称し調査を行った。

また、考古学成果のみではなく、遺跡の成り立ちを含めた古環境復元にも重点を置き、地質学や土壌学等関連分野の協力を得て、自然科学分析を積極的に取り入れた。平成18年度は大阪市文化財協

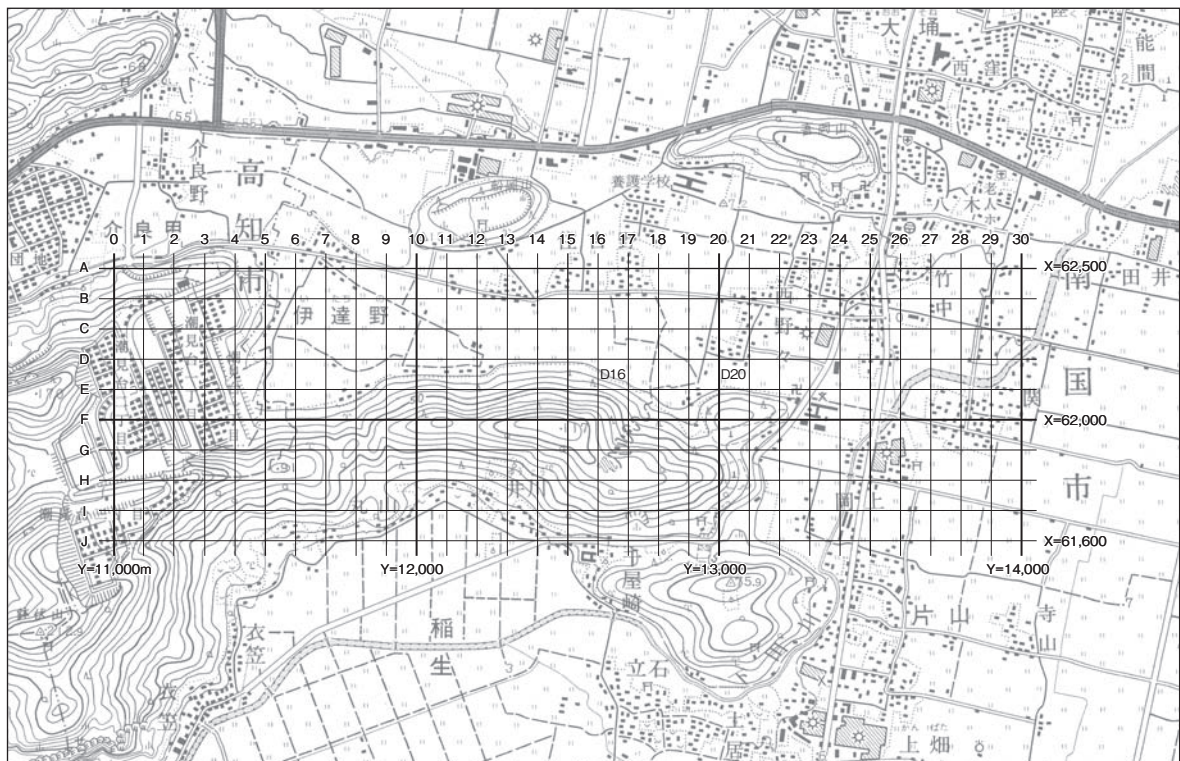


図1-4 西野々遺跡グリッド設定図(S=1/5,000)

会(現財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所)趙哲濟氏に現地指導を仰いだ。

測量は、先の基準点を基にした人力での実測と共に産業用ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影測量を行うことにより効率化に努めた。

調査の最終段階には、調査成果の記者発表と共に一般の方々を対象とした現地説明会を開催し、発掘調査の成果を公表して埋蔵文化財の普及にも努めた。

なお、発掘調査終了後には埋め戻しを行い現況に復し、引き渡しを行った。

註

(1) この試掘調査によって遺跡の範囲は東西約 1.0 kmに及ぶことが判明した。また、南にある香長中学校でも南国市教育委員会の発掘調査で遺構・遺物が確認されており、南北は 100m以上あるものとみられ、遺跡の規模

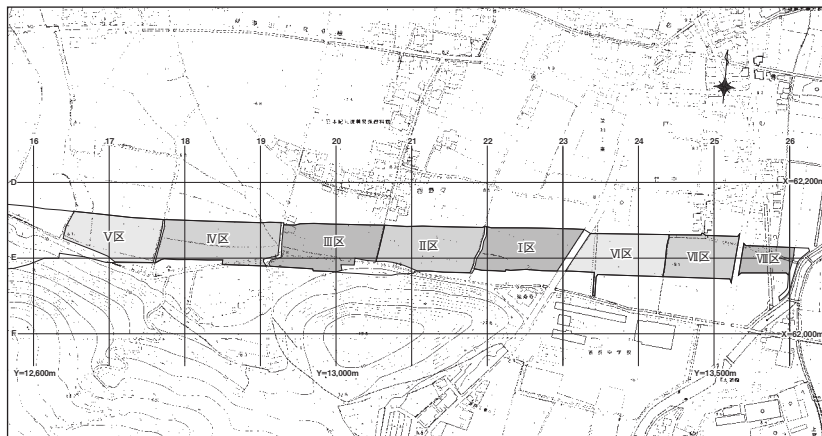


図1-5 西野々遺跡調査区全体図(S=1/10,000)

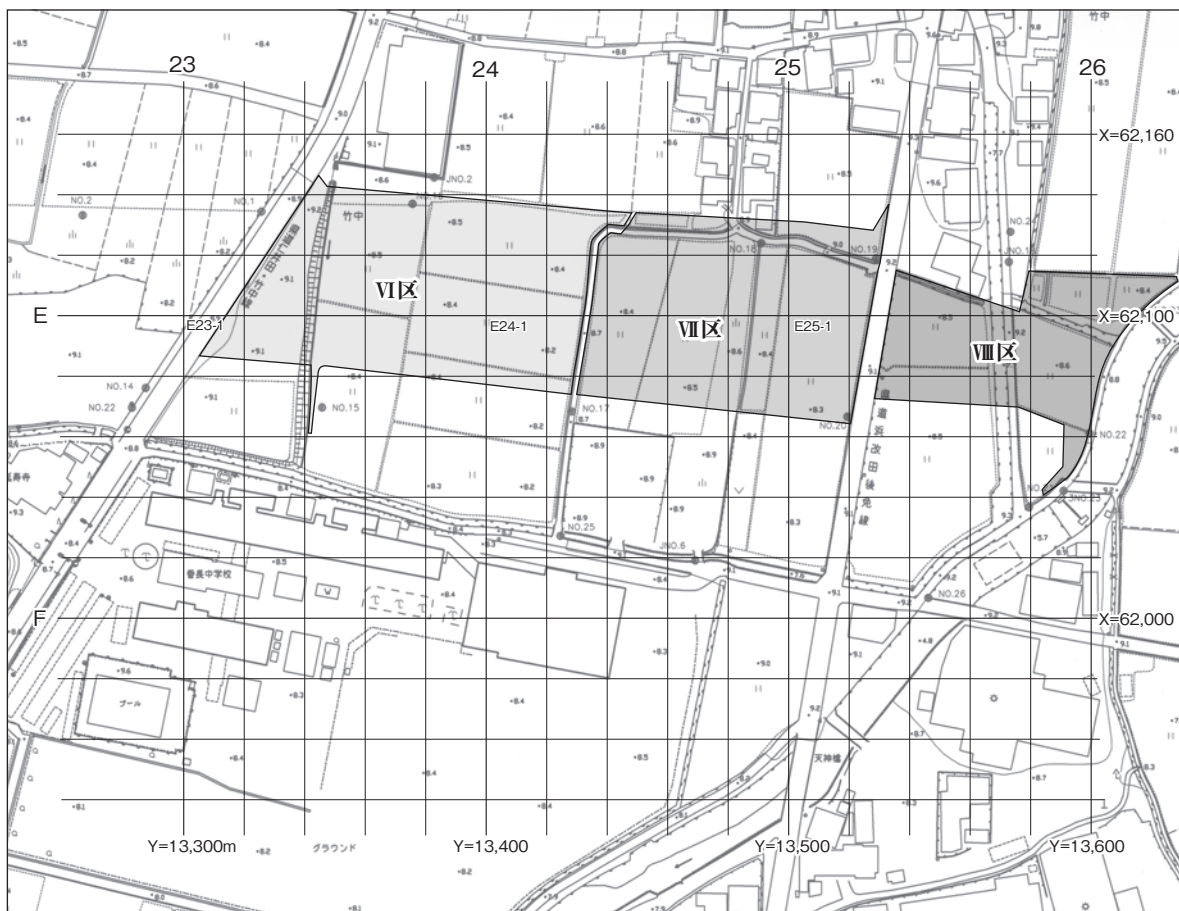


図1-6 VI～VIII区グリッド設置図(S=1/2,500)

2. 調査の契機と経過 (3) 調査の方法

は少なくとも100,000㎡に及ぶものと推測される。

(2) 平成20年度は道路特定財源が一般財源化される問題で4月当初には契約できず、契約が締結されたのは平成20年6月6日であった。また、平成19年度からは高知西バイパスについても高知南国道路外の事業の一つとして高知県教育委員会が業務委託を受け実施している。平成21年度は高知南国道路が一時凍結路線(平成21年3月31日に凍結発表)となり、凍結が解除され再開したのは7月からであった。また、この間、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所から報告書の印刷部数について問題提起され、高知県教育委員会との間で協議を重ねた結果、決着したのは平成22年度の経費積算段階であった。

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査の経緯

(1) 調査の経緯

西野々遺跡は、平成15年度に行った高知東部自動車道高知南国道路に伴う事前の試掘調査によって遺跡の範囲が大幅に拡大した茶田遺跡について、大字の「西野々」を取って名称を変更した遺跡で、平成17年度に実施した試掘調査によって、遺跡の範囲がさらに東に拡大し、東西幅は約1.0kmとなった。

発掘調査は、平成17年度の試掘調査結果を受け、県道仁井田竹中線以西の調査(平成16年度にⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区の東半分、平成17年度にⅢ区の西半分、Ⅳ区、Ⅴ区)終了後の平成18年度に引き続き実施することとなった。調査範囲は県道仁井田竹中線から下田川までの約300mで、途中に県道南国インター線が通っていることなどから調査区を3区(Ⅵ～Ⅷ区)に分け、3パーティーで実施した。しかし、土地の買収等の関係等で、調査が完了しない部分がⅦ区とⅧ区に残り、平成19年度にその部分の調査を実施した。

本調査は平成18年4月1日付けで高知県教育委員会との間で業務委託契約を締結した上で、準備に入り、5月の連休明けから開始した。現場調査が終了したのはⅥ区が平成19年3月26日、Ⅶ区が平成19年3月22日、Ⅷ区が平成19年3月7日であった。平成19年度も4月1日付けで高知県教育委員会との間で業務委託契約を締結した上で、準備に入り、4月中旬から開始し、現場作業が終了したのは、Ⅶ区が6月4日、Ⅷ区が6月5日であった。

なお、それぞれ排土置き場の関係上、東半分(E)と西半分(W)に分けて行った。

(2) 調査日誌抄

Ⅵ区(第Ⅵ調査区)

平成18(2006)年5月8日～平成19(2007)年3月26日

Ⅵ区W(Ⅵ-1区・Ⅵ-2区の西側約1/3)(実働82日)

- | | |
|-------------------------------------|------------------------------------|
| 5.8 調査区の周囲に安全柵を設置する。 | 5.25 北西部の機械掘削を終了する。 |
| 5.9 調査区西部の客土を撤去する。 | 5.26 雨天のため現場作業を中止する。 |
| 5.10 雨天のため現場作業を中止する。 | 5.29 南西部の機械掘削に移る。 |
| 5.11 〃 | 5.30 引き続き機械掘削を行う。 |
| 5.12 客土の撤去を行う。 | 5.31 南西部の機械掘削を終了する。 |
| 5.15 引き続き客土の撤去を行う。 | 6.1 北東部の機械掘削に移る。 |
| 5.16 調査区バンクの設定を行う。 | 6.2 引き続き北東部の機械掘削を行う。 |
| 5.17 雨天のため現場作業を中止する。 | 6.5 北東部の機械掘削を終了する。 |
| 5.18 客土の撤去をほぼ終了する。 | 6.6 南東部の機械掘削に移る。 |
| 5.19 雨天のため現場作業を中止する。 | 6.7 引き続き南東部の機械掘削を行う。 |
| 5.22 北西部より機械掘削を開始し、併行して遺構
検出を行う。 | 6.8 南東部の機械掘削を終了する。 |
| 5.23 雨天のため現場作業を中止する。 | 6.9 写真撮影のため、西部より調査区の清掃作業
を開始する。 |
| 5.24 北西部の機械掘削を行う。 | 6.10 遺構検出状態の写真撮影を行う。 |

1. 調査の経緯 (2) 調査日誌抄

- 6.12 遺構配置図の作成及び遺構埋土の確認を行う。
6.13 北西部より遺構調査を開始する。
6.14 西部の調査を行う。
6.15 雨天のため現場作業を中止する。
6.16 〃
6.19 西部の遺構調査を行う。また、小学生の現場見学を受け入れる。
6.20 西部の弥生時代の竪穴建物跡を中心に調査を行う。
6.21 引き続き竪穴建物跡の調査を行う。また、中学生の現場見学を受け入れる。
6.22 西部を中心に南へ遺構調査を行う。
6.23 雨天のため現場作業を中止する。
6.26 〃
6.27 〃
6.28 南西部の遺構調査を行う。
6.29 引き続き南西部の遺構調査を行う。
6.30 南西部の竪穴建物跡の調査を行う。
7. 3 引き続き南西部の竪穴建物跡の調査を行う。
7. 4 引き続き竪穴建物跡の調査を行う。
7. 5 雨天のため現場作業を中止する。
7. 6 〃
7. 7 〃
7.10 降雨のため午前中で作業を中止する。
7.11 職員研修のため現場作業を休止する。
7.12 南西部の竪穴建物跡の調査を行う。
7.13 引き続き南西部の竪穴建物跡の調査を行う。
7.14 引き続き竪穴建物跡の調査を行う。
7.18 調査区周辺の草刈り作業を行う。
7.19 雨天のため現場作業を中止する。
7.20 〃
7.21 〃
7.24 昨日の降雨のため現場作業を中止する。
7.25 南西部と北東部の遺構調査を行う。
7.26 引き続き南西部と北東部の遺構調査を行う。
7.27 南西部の調査を終了する。
7.28 北東部の遺構調査を行う。また、中学生の現場見学を受け入れる。
7.29 東部の調査区バンクの人力掘削を行う。
7.31 北東部の遺構調査を行う。
8. 1 引き続き北東部の調査を行う。
8. 2 北東部の竪穴建物跡を中心に調査を行う。
8. 3 引き続き北東部の竪穴建物跡を中心に調査を行う。
8. 4 引き続き北東部の竪穴建物跡の調査を行う。
8. 7 北東部の遺構調査及び調査区バンクの掘削を行う。
8. 8 北東部から中央の遺構調査に移る。
8. 9 引き続き東部の調査を行う。
8.10 東部から南の遺構調査に移る。
8.14 現場作業を休止する。
8.15 〃
8.16 〃
8.17 台風対策を行い、午後より降雨のため現場作業を中止する。
8.18 台風のため現場作業を中止する。
8.21 南東部の遺構調査を行う。
8.22 引き続き南東部の遺構調査を行う。
8.23 南東部の竪穴建物跡を中心に調査を行う。
8.24 引き続き南東部の竪穴建物跡を中心に調査を行う。
8.25 南東部の竪穴建物跡と土坑の調査を行う。
8.28 竪穴建物跡及び土坑の調査を行う。
8.29 竪穴建物跡の調査をほぼ終了する。
8.30 土坑を中心に調査を行う。
8.31 引き続き土坑の調査を行う。
9. 1 遺構調査をほぼ終了する。
9. 3 調査区西部より清掃作業を開始する。
9. 4 引き続き清掃作業を行う。
9. 5 遺構完掘状態の写真撮影を行う。
9. 6 雨天のため現場作業を中止する。
9. 7 航空測量に向けて調査区内の排水作業と清掃作業を行う。



写真2-1 VI-1区発掘調査風景

- 9. 8 再度調査区の清掃作業を行う。
- 9. 9 遺構完掘状態の空中写真撮影測量を行うが、降雨のため途中で中止する。
- 9.11 雨天のため現場作業を中止する。
- 9.12 〃
- 9.13 〃
- 9.14 再々度調査区の清掃作業を行う。
- 9.15 遺構完掘状態の空中写真撮影測量を行う。
- 9.20 下層確認を行い、調査区Wの調査を終了する。
- 9.21 埋め戻し作業を開始する。
- 9.22 引き続き埋め戻し作業を行う。
- 9.23 〃
- 9.25 埋め戻し作業を行う。
- 9.26 引き続き埋め戻し作業を行う。
- 9.27 〃
- 9.28 〃
- 9.29 〃
- 9.30 埋め戻し作業を終了する。

VI区E (VI-2区の東側約2/3) (実働101日)

- 10. 2 南西部より機械掘削を開始する。
- 10. 3 引き続き南西部の機械掘削を行う。
- 10. 4 南東部の機械掘削に移る。
- 10. 5 雨天のため現場作業を中止する。
- 10. 6 南東部の機械掘削を行う。
- 10. 7 南東部の機械掘削を終了する。
- 10.10 北東部の機械掘削に移る。
- 10.11 引き続き北東部の機械掘削を行う。
- 10.12 北東部の機械掘削を終了する。
- 10.13 北西部の機械掘削に移る。
- 10.16 北西部の機械掘削を行う。
- 10.17 北西部の機械掘削を終了する。
- 10.18 調査区東部より清掃作業を開始する。
- 10.19 遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 10.20 調査区に設定したバンクの除去作業を行う。
- 10.23 雨天のため現場作業を中止する。
- 10.24 調査区に設定したバンクの除去作業を行う。
- 10.25 北東部より遺構調査を開始する。
- 10.26 北東部から南東部の遺構調査を行う。
- 10.27 南東部を中心に遺構調査を行う。
- 10.30 南東部の遺構調査を行う。
- 10.31 引き続き南東部の遺構調査を行う。
- 11. 1 中世の水溜まり状遺構を中心に調査を行う。
- 11. 2 引き続き水溜まり状遺構を中心に調査を行う。
- 11. 6 水溜まり状遺構の調査を行う。
- 11. 7 引き続き水溜まり状遺構の調査を行う。
- 11. 8 水溜まり状遺構の調査及び測量を行う。
- 11. 9 南東部の遺構調査をほぼ終了する。
- 11.10 南部の遺構調査へ移る。
- 11.13 南部の遺構調査を行う。
- 11.14 引き続き南部の遺構調査を行う。
- 11.15 遺構測量を行う。
- 11.16 東部の遺構調査を行う。
- 11.17 引き続き中央部東の遺構調査を行う。
- 11.20 職員研修のため現場作業を休止する。
- 11.21 〃
- 11.22 南西部の遺構調査に移る。
- 11.24 南西部の遺構調査を行う。
- 11.27 南西部の遺構調査を行い、午後より降雨のため現場作業を中止する。
- 11.28 引き続き南西部の遺構調査を行う。
- 11.29 南西部の弥生時代の遺物包含層の人力掘削を行う。
- 11.30 引き続き弥生時代の遺物包含層の人力掘削と遺構調査を行う。
- 12. 1 南西部の竪穴建物跡を中心に調査を行う。
- 12. 4 南西部の遺構調査と併行して南部の弥生時代の遺物包含層の人力掘削を行う。
- 12. 5 南部の弥生時代の遺物包含層の人力掘削と遺構検出を行う。
- 12. 6 引き続き南部の弥生時代の遺物包含層の人力



写真2-2 VI-2区発掘調査風景

1. 調査の経緯 (2) 調査日誌抄

- 掘削と遺構検出を行う。
- 12.7 雨天のため現場作業を中止する。
- 12.8 南西部の遺構調査をほぼ終了する。
- 12.11 西部の遺構調査に移る。
- 12.12 西部の遺構調査を行う。
- 12.13 雨天のため現場作業を中止する。
- 12.14 〃
- 12.15 西部の遺構調査を行う。
- 12.18 西部を中心に遺構調査を行う。
- 12.19 引き続き西部の遺構調査を行う。
- 12.20 北西部から中央部の遺構調査を行う。
- 12.21 引き続き北西部から中央部の遺構調査を行う。
- 12.22 北部の遺構調査をほぼ終了する。
- 12.25 北東部の遺構調査に移る。
- 12.26 雨天のため現場作業を中止する。
- 12.27 北東部の遺構調査を行う。
- 12.28 引き続き北東部の遺構調査を行う。
- 1.4 北部と北東部の遺構の平面図を作成する。
- 1.5 北部と北東部の遺構の平面図の作成と併行して遺構レベル実測を行う。
- 1.9 北東部の遺構調査を再開する。
- 1.10 北東部から北部の遺構調査を行う。
- 1.11 北部の遺構調査を行う。
- 1.12 北部の竪穴建物跡を中心に調査を行う。
- 1.15 北部の竪穴建物跡の調査を行う。
- 1.16 引き続き北部の竪穴建物跡の調査を行う。
- 1.17 引き続き中央部の遺構調査を行う。
- 1.18 中央部の弥生時代の遺物包含層の人力掘削を行う。
- 1.19 中央部の遺構調査を行う。
- 1.22 引き続き中央部の遺構調査を行う。
- 1.23 中央部の遺構調査をほぼ終了する。
- 1.24 弥生時代の溝跡を中心に調査を行う。
- 1.25 引き続き溝跡を中心に調査を行う。
- 1.26 遺構調査をほぼ終了する。
- 1.29 遺構調査を終了し、調査区の清掃作業を開始する。
- 1.30 調査区の清掃作業を行う。
- 1.31 引き続き清掃作業を行う。
- 2.1 東より遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 2.2 西より遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 2.3 遺構完掘状態の空中写真撮影測量を行う。
- 2.5 南部に堆積している弥生時代の遺物包含層の機械掘削を行う。
- 2.6 弥生時代の遺物包含層の機械掘削を終了する。
- 2.7 南部の精査を行う。
- 2.8 新たに確認された遺構の調査を行う。
- 2.9 引き続き遺構調査を行うが、午後より降雨のため現場作業を中止する。
- 2.13 遺構調査をほぼ終了する。
- 2.14 雨天のため現場作業を中止する。
- 2.15 清掃作業を行う。
- 2.16 遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 2.19 下層確認を行い、VI-2区東側の調査を終了する。
- 2.21 機材の撤収作業を行う。
- 2.22 引き続き機材の撤収作業を行う。
- 2.26 機材の撤収作業を行う。
- 3.6 現地説明会に向け調査区の清掃作業を行う。
- 3.7 引き続き清掃作業を行う。
- 3.8 西野々遺跡の記者発表を行う。
- 3.10 西野々遺跡現地説明会を開催する。
- 3.12 埋め戻し作業を開始する。
- 3.13 引き続き埋め戻し作業を行う。
- 3.14 〃
- 3.15 〃
- 3.16 〃
- 3.17 〃
- 3.19 埋め戻し作業を終了し、西野々遺跡VI区の調査を全て完了する。
- 3.23 現場事務所跡地の盛土の撤去作業を行う。
- 3.26 現場事務所跡地の残りの撤去作業と清掃作業を行い、平成18年度の現場調査を終了する。



写真2-3 VI区現場見学会

Ⅶ区(第Ⅶ調査区)

平成18(2006)年5月8日～平成19(2007)年3月22日

Ⅶ区W(Ⅶ-1区西側約2/3とⅦ-3区)(実働119日)……………

- | | |
|------------------------------------|---------------------------------------|
| 5.8 調査区の周囲に安全柵を設置する。 | 6.23 雨天のため現場作業を中止する。 |
| 5.9 重機による表土掘削を開始する。 | 6.26 〃 |
| 5.10 雨天のため現場作業を中止する。 | 6.27 昨日の降雨のため午前中現場作業を中止し、午後から排水作業を行う。 |
| 5.11 昨日の降雨のため現場作業を中止する。 | 6.28 南西部の遺構調査を行う。 |
| 5.12 調査区南西部より重機掘削を開始し、併行して遺構検出を行う。 | 6.29 引き続き南西部の遺構調査を行う。 |
| 5.15 南西部の重機掘削及び遺構検出を行う。 | 6.30 〃 |
| 5.16 北西部の重機掘削と遺構検出を行う。 | 7.3 南西部の遺構調査及び精査を行う。 |
| 5.17 雨天のため現場作業を中止する。 | 7.4 引き続き南西部の遺構調査及び精査を行う。 |
| 5.18 排水作業後、北西部の重機掘削を行う。 | 7.5 雨天のため現場作業を中止する。 |
| 5.19 雨天のため現場作業を中止する。 | 7.6 台風対策を行う。 |
| 5.22 北東部の重機掘削を行う。 | 7.7 雨天のため現場作業を中止する。 |
| 5.23 雨天のため現場作業を中止する。 | 7.10 降雨のため午前中で作業を中止する。 |
| 5.24 北東部の重機掘削と調査区へ側溝の設置を行う。 | 7.11 職員研修のため現場作業を休止する。 |
| 5.25 重機による掘削を終了する。 | 7.12 南西部の遺構調査を行う。 |
| 5.26 雨天のため現場作業を中止する。 | 7.13 引き続き南西部の遺構調査を行う。 |
| 5.29 南西部と北西部の遺構検出を行う。 | 7.14 南西部の遺構調査を行う。 |
| 5.30 北西部の遺物包含層の人力掘削と遺構検出を行う。 | 7.18 引き続き南西部の遺構調査を行う。 |
| 5.31 引き続き北西部の包含層掘削と遺構検出を行う。 | 7.19 雨天のため現場作業を中止する。 |
| 6.1 北西部と南東部の遺構検出を行う。 | 7.20 〃 |
| 6.2 南東部の遺構検出を行う。 | 7.21 〃 |
| 6.5 北東部の遺構検出を行う。 | 7.24 排水作業後、南西部の遺構調査を行う。 |
| 6.6 引き続き北東部の遺構検出を行う。 | 7.25 南西部の遺構調査を行う。 |
| 6.7 遺構検出を終了し、調査区の清掃作業を開始する。 | 7.26 引き続き南西部の遺構調査を行う。 |
| 6.8 雨天のため現場作業を中止する。 | 7.27 〃 |
| 6.9 〃 | 7.28 〃 |
| 6.12 調査区の清掃作業を行う。 | 7.31 南西部の遺構調査を行う。 |
| 6.13 遺構検出状態の写真撮影を行う。 | 8.1 引き続き南西部の遺構調査を行う。 |
| 6.14 南西部より遺構調査を開始する。 | |
| 6.15 雨天のため現場作業を中止する。 | |
| 6.16 排水作業後、遺構調査を行う。 | |
| 6.19 南西部の遺構調査を行う。 | |
| 6.20 引き続き南西部の遺構調査を行う。 | |
| 6.21 〃 | |
| 6.22 〃 | |



写真2-4 Ⅶ-1区発掘調査風景1

1. 調査の経緯 (2) 調査日誌抄

- 8.2 排水作業後, 南西部の遺構調査を行う。
8.3 遺構の測量を行う。
8.4 南西部の遺構調査を行う。
8.7 南西部から北西部の遺構調査を行う。
8.8 引き続き南西部から北西部の遺構調査を行う。
8.9 〃
8.10 〃
8.14 現場作業を休止する。
8.15 〃
8.16 〃
8.17 雨天のため現場作業を中止する。
8.18 台風のため現場作業を中止する。
8.21 西部の遺構調査を再開する。
8.22 西部の遺構調査を行う。
8.23 引き続き西部の遺構調査を行う。
8.24 〃
8.25 調査区の草刈り作業を行う。
8.28 西部の遺構調査を行う。
8.29 西部の遺構調査と黒色土層の人力掘削を行う。
8.30 南西部の遺構調査と北西部の包含層掘削を行う。
8.31 西部の遺構調査を行う。
9.1 西部の遺構調査と北西部の遺物包含層掘削を行う。
9.4 遺構の測量を行う。
9.5 西部の遺構調査を行う。
9.6 雨天のため現場作業を中止する。
9.7 排水作業後, 遺構調査を行う。
9.8 遺構調査を行う。
9.11 西部の遺構調査を行う。
9.12 排水作業後, 西部の遺構調査を行う。
9.13 西部及び北東部の遺構調査を行う。
9.14 遺構測量を行う。
9.15 北西部及び北東部の遺構調査を行う。
9.19 〃
9.20 引き続き北西部及び北東部の遺構調査を行う。
9.21 西部の遺構調査を行う。
9.22 東部の遺構調査を行う。
9.25 南東部の遺構調査を行う。
9.26 東部の遺構調査を行う。
9.27 北東部及び南東部の遺構調査を行う。
9.28 引き続き北東部及び南東部の遺構調査を行う。
9.29 遺構調査及び測量を行う。
10.2 北東部及び南東部の遺構調査を行う。
10.3 引き続き北東部及び南東部の遺構調査を行う。
10.4 〃
10.5 雨天のため現場作業を中止する。
10.6 北東部及び南東部の遺構調査を行う。
10.10 〃
10.11 引き続き北東部及び南東部の遺構調査を行う。
10.12 〃
10.13 〃
10.16 北東部及び南東部の遺構調査を行う。
10.17 引き続き北東部及び南東部の遺構調査を行う。
10.18 〃
10.19 〃
10.20 〃
10.23 雨天のため現場作業を中止する。
10.24 南東部を中心に遺構調査を行う。
10.25 引き続き南東部の遺構調査を行う。
10.26 〃
10.27 南東部及び北東部の調査を行う。
10.30 南東部の遺構調査と遺構測量を行う。
10.31 引き続き南東部の遺構調査と遺構測量を行う。
11.1 調査区全体の遺構精査を行う。
11.2 南西部及び南東部の遺構調査を行う。
11.6 南東部の遺構調査を行う。
11.7 南東部の遺構調査と南西部の清掃作業を行う。
11.8 南東部及び北東部の遺構調査と南西部の清掃作業を行う。
11.9 南東部及び北東部の遺構調査と北部の清掃作業を行う。
11.10 南東部及び北東部の遺構調査と調査区の清掃



写真2-5 VII-1区発掘調査風景2

- 作業を行う。
- 11.13 南東部の遺構調査及び清掃作業を行う。
- 11.14 空中写真撮影測量に向けて清掃作業を行う。
- 11.15 引き続き清掃作業を行う。
- 11.16 遺構完掘状態の空中写真撮影測量を行う。
- 11.17 遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 11.18 遺構測量を行う。
- 11.20 遺構測量を行う。
- 11.21 職員研修のため現場作業を休止する。
- 11.22 下層確認調査を行い、Ⅶ区Wの調査を終了する。
- 11.23 埋め戻し作業を開始する。
- 11.24 引き続き埋め戻し作業を行う。
- 11.25 埋め戻し作業を終了する。

Ⅶ区E(Ⅶ-1区東側約1/3とⅦ-2区)(実働65日)

- 11.28 西部より重機による表土掘削を行う。
- 11.29 中央部から東部の重機掘削を行う。
- 11.30 東部の重機掘削と西部及び中央部の遺構検出を行う。
- 12.1 引き続き北東部の重機掘削と北部中央の遺構検出を行う。
- 12.4 南東部の重機掘削と北東部の遺構検出を行う。
- 12.5 南部の重機掘削と北東部の遺構検出を行う。
- 12.6 南西部の重機掘削及び北東部から南部の遺構検出を行う。
- 12.7 雨天のため現場作業を中止する。
- 12.8 南西部の重機掘削と遺構検出を行う。
- 12.11 南西部の重機掘削及び遺構検出を行う。
- 12.12 引き続き南西部の重機掘削と遺構検出を行う。
- 12.13 雨天のため現場作業を中止する。
- 12.14
- 12.15 南西部の重機掘削を行う。
- 12.18 調査区の清掃作業を行う。
- 12.19 遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 12.20 南西部より遺構調査を開始する。
- 12.21 南西部の遺構調査を行う。
- 12.22 引き続き南西部の遺構調査を行う。
- 12.25 南西部の遺構調査を行う。
- 12.26 雨天のため現場作業を中止する。
- 12.27 南西部の遺構調査を行う。
- 12.28 引き続き南西部の遺構調査を行う。
- 1.4 南西部の遺構調査を再開する。
- 1.5 南部の遺構調査に移る。
- 1.9 引き続き南部の遺構調査を行う。
- 1.10 中央部の遺構調査を行う。
- 1.11 引き続き中央部の遺構調査を行う。
- 1.12 中央部から北東部の遺構調査を行う。
- 1.15 調査区中央に設定したバンクの除去作業を行う。
- 1.16 北西部の遺構調査を行う。
- 1.17 引き続き北西部の遺構調査を行う。
- 1.18 北西部と北部の遺構調査を行う。
- 1.19 引き続き北西部と北部の遺構調査を行う。
- 1.22 北部の遺構調査を行う。
- 1.23 引き続き北部の遺構調査を行う。
- 1.24 雨天のため現場作業を中止する。
- 1.25 北部の遺構調査を行う。
- 1.26 引き続き北部の遺構調査を行う。
- 1.29 北部から北東部の遺構調査を行う。
- 1.30 引き続き北部から北東部の遺構調査を行う。
- 1.31 北部から北東部の遺構調査と遺構測量を行う。
- 2.1 引き続き北部から北東部の遺構調査を行う。
- 2.2
- 2.5 北部から北東部の遺構調査を行う。
- 2.6 引き続き北部から北東部の遺構調査を行う。
- 2.7 仮設水路の一部を人力掘削し拡張する。
- 2.8 拡張部の遺構調査を行う。
- 2.9 雨天のため現場作業を中止する。
- 2.13 南東部の遺構調査を行う。
- 2.14 雨天のため現場作業を中止する。



写真2-6 Ⅶ-1区発掘調査風景3

1. 調査の経緯 (2) 調査日誌抄

- 2.15 排水作業後南東部の遺構調査を行う。
- 2.16 南東部の遺構調査を行う。
- 2.19 南東部から南部の遺構調査を行う。
- 2.20 引き続き南東部から南部の遺構調査を行う。
- 2.21 南部の遺構調査を行う。
- 2.22 引き続き南部の遺構調査を行う。
- 2.23 雨天のため現場作業を中止する。
- 2.26 遺構調査をほぼ終了し、調査区の清掃作業を開始する。
- 2.27 雨天のため現場作業を中止する。
- 2.28 調査区の清掃作業を行う。
- 3.1 遺構完掘状態の空中写真撮影測量を行う。
- 3.2 空中写真撮影測量の結果待ちのため、現場作業を休止する。
- 3.5 雨天のため現場作業を中止する。
- 3.6 記者発表及び現地説明会に向け調査区の清掃

作業を行う。

- 3.7 引き続き調査区の清掃作業を行う。
- 3.8 西野々遺跡現地説明会の記者発表を行う。
- 3.10 西野々遺跡現地説明会を開催する。
- 3.12 下層確認調査を行い、調査区東側の調査を終了する。
- 3.13 埋め戻し作業を開始する。
- 3.14 引き続き埋め戻し作業を行う。
- 3.15 〃
- 3.16 埋め戻し作業を中止する。
- 3.17 埋め戻し作業を行う。
- 3.19 水路の補修作業を行う。
- 3.20 埋め戻し作業を行う。
- 3.22 埋め戻し作業を終了し、平成18年度の調査を完了する。



写真2-7 現地説明会風景1



写真2-8 現地説明会風景2

平成19(2007)年4月17日～6月4日

Ⅶ区N(Ⅶ-4・5区)(実働26日).....

- 4.17 調査区を西部と東部に分け、東部より重機掘削を開始する。
- 4.18 雨天のため現場作業を中止する。
- 4.19 東部の重機掘削及び遺構検出を行う。
- 4.20 引き続き東部の重機掘削及び遺構検出を行う。
- 4.23 現場作業を休止する。
- 4.24 遺構検出状態の写真撮影を行い、東部より遺構調査を開始する。
- 4.25 雨天のため現場作業を中止する。
- 4.26 東部の遺構調査を行う。
- 4.27 引き続き東部の遺構調査を行う。
- 5.1 雨天のため現場作業を中止する。

- 5.2 東部及び西部の遺構調査を行う。
- 5.7 東部の遺構調査を行う。



写真2-9 現地説明会風景3

- 5. 8 引き続き東部の遺構調査を行う。
- 5. 9 東部の遺構調査を行い、東部の調査は終了する。
- 5.10 午前中は降雨のため作業を中止し、午後より遺構調査を行う。
- 5.11 東西部の遺構調査も行う。
- 5.14 東西部及び西部の遺構調査を行う。
- 5.15 引き続き東西部及び西部の遺構調査を行う。
- 5.16 〃
- 5.17 雨天のため現場作業を中止する。
- 5.18 東西部及び西部の遺構調査を行う。
- 5.21 〃
- 5.22 引き続き東西部及び西部の遺構調査を行う。
- 5.23 東西部を中心に調査を行い、西部の調査は終了する。
- 5.24 東西部の調査を行う。
- 5.25 雨天のため現場作業を中止する。
- 5.28 東西部の遺構調査をほぼ終了する。
- 5.29 遺構調査を終了し、調査区の清掃作業を開始する。

- 5.30 遺構完掘状態の空中写真撮影測量を行う。
- 5.31 遺構の測量を行う。
- 6. 1 下層確認調査を行い、調査区北部の調査を終了する。
- 6. 4 機材等の撤去作業を行い、西野々の現場Ⅶ区の撤去作業をすべて終了する。



写真2-10 Ⅶ-5区発掘調査風景

Ⅷ区(第Ⅷ調査区)

平成18(2006)年5月8日～平成19(2007)年3月7日

Ⅷ区E(Ⅷ-2～4区)(実働53日).....

- 5. 8 調査区を南部、北東部、北西部の3ヵ所に分け、周囲に安全柵を設置する。
- 5. 9 南部の機械掘削を開始し、併行して遺構検出を行う。
- 5.10 雨天のため現場作業を中止する。
- 5.11 昨日の降雨のため現場作業を中止する。
- 5.12 南部の機械掘削を行う。
- 5.15 南部の機械掘削及び北西部は重機が搬入できないため人力掘削を行う。
- 5.16 引き続き南部の機械掘削及び北西部の人力掘削を行う。
- 5.17 雨天のため現場作業を中止する。
- 5.18 南部の機械掘削及び北西部の人力掘削を行う。
- 5.19 雨天のため現場作業を中止する。
- 5.22 南部は機械掘削を行い、北西部の人力掘削を終了する。
- 5.23 雨天のため現場作業を中止する。
- 5.24 南部の機械掘削を終了し、北西部で近世の遺

- 構確認を行う。
- 5.25 北東部の機械掘削に移る。
- 5.26 引き続き北東部の機械掘削を行う。
- 5.29 北東部は機械掘削を、北西部は古代～中世遺物包含層の人力掘削を行う。
- 5.30 北東部の機械掘削を終了し、北西部の遺構検出を行う。
- 5.31 写真撮影のために南部及び北東部の清掃作業を行う。
- 6. 1 南部で確認された近世の遺構の検出写真の撮影後、調査し完掘状態の写真撮影を行う。
- 6. 2 北東部の北壁沿いに矢板を設置し、南部は古代～中世遺物包含層の機械掘削及び人力掘削に入る。
- 6. 5 南部の機械掘削及び人力掘削を行う。
- 6. 6 北東部の古代～中世遺物包含層の機械掘削に移り、南部は引き続き人力掘削を行う。
- 6. 7 北東部の機械掘削を終了する。

1. 調査の経緯 (2) 調査日誌抄

6. 8 北東部の東壁及び北西部の北壁沿いに矢板を設置する。
6. 9 南部の人力掘削及び遺構検出作業を行う。
- 6.12 北東部の人力掘削を行う。
- 6.13 調査区北東部の遺構検出と北西部の清掃作業を行う。
- 6.14 調査区3ヵ所の遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 6.15 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.16 昨日の降雨のため現場作業を中止する。
- 6.19 北東部の遺構調査を開始し、併行して遺構測量を行う。
- 6.20 北東部の遺構を中心に調査を行う。
- 6.21 北東部の遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 6.22 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.23 〃
- 6.26 〃
- 6.27 排水作業を行い、午後より北東部の遺構調査を行う。
- 6.28 北西部及び南部の遺構調査を行う。
- 6.29 北東部の遺構確認のために黒色土層の機械掘削を行い、南部は溝跡を中心に遺構調査を行う。
- 6.30 引き続き北東部の機械掘削及び南部の遺構調査を行う。
7. 3 北西部と南部の遺構調査を行う。
7. 4 北西部の遺構調査を行う。
7. 5 雨天のため現場作業を中止する。
7. 6 昨日の降雨のため現場作業を中止する。
7. 7 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.10 雨天のため現場作業を午前中で中止する。
- 7.11 職員研修のため現場作業を休止する。
- 7.12 南部の遺構測量を行う。
- 7.13 北西部の遺構調査及び南部の遺構測量を行う。
- 7.14 引き続き北西部の遺構調査及び南部の遺構測量を行う。
- 7.18 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.19 〃
- 7.20 〃
- 7.21 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.24 北東部の遺構調査と遺構測量を行う。
- 7.25 南部の遺構調査を終了する。
- 7.26 北東部の黒色土層を人力掘削し、遺構確認を行う。
- 7.27 引き続き北東部は人力掘削を行い、北西部は遺構調査を終了する。
- 7.28 北東部の人力掘削を終了し、調査区3ヵ所の清掃作業を開始する。
- 7.31 調査区周辺の草刈り及び清掃作業を行う。
8. 1 北部の排水作業及び南部の遺構測量を行う。
8. 2 調査区全体の清掃作業を行う。
8. 3 引き続き清掃作業を行う。
8. 4 遺構完掘状態の空中写真撮影測量を行う。
8. 7 北東部の下層確認調査を行い、Ⅷ区Eの調査を終了する。
8. 8 埋め戻し作業を開始する。
8. 9 引き続き埋め戻し作業を行う。
- 8.10 〃
- 8.11 埋め戻し作業を行う。
- 8.14 現場作業を休止する。
- 8.15 〃
- 8.16 埋め戻し作業を再開する。
- 8.17 雨天のため埋め戻し作業を中止する。
- 8.18 〃
- 8.21 埋め戻し作業を終了する。



写真2-11 Ⅷ-4区発掘調査風景

Ⅷ区W(Ⅷ-1区西側)(実働51日)

- 12.1 調査区周囲に安全柵を設置し、古代遺物包含層までの機械掘削を開始する。
- 12.4 西部の機械掘削を行う。
- 12.5 西部の機械掘削及び遺構検出を行う。

- 12.6 引き続き機械掘削と遺構検出を行う。
- 12.7 降雨のため現場作業を午前中で中止する。
- 12.8 昨日の降雨のため現場作業を中止する。
- 12.11 機械掘削と遺構検出を行う。
- 12.12 機械掘削を終了する。
- 12.13 雨天のため現場作業を中止する。
- 12.14 〃
- 12.15 排水作業後、遺構検出を行う。
- 12.18 遺構検出と調査区の清掃作業を行う。
- 12.19 遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 12.20 調査区北西より遺構調査を開始する。
- 12.21 北西の溝跡を中心に調査を行う。
- 12.22 引き続き溝跡を中心に調査を行う。
- 12.25 畝状遺構を中心に調査を行う。
- 12.26 雨天のため現場作業を中止する。
- 12.27 排水作業後、南壁の精査を行う。
- 12.28 土層のサンプリング作業を中心に行う。
- 1.4 調査区北西の遺構調査を行う。
- 1.5 古代から近世までの遺構調査を終了する。
- 1.9 調査区の清掃作業を開始する。
- 1.10 引き続き清掃作業を行う。
- 1.11 古代～近世の遺構完掘状態の空中写真撮影測量を行う。
- 1.12 遺構測量を行う。
- 1.15 弥生時代の遺物包含層の人力掘削と遺構検出を行う。
- 1.16 雨天のため現場作業を中止する。
- 1.17 遺構検出より溝跡2条を確認する。
- 1.18 確認された溝跡を中心に調査を行う。
- 1.19 引き続き溝跡を中心に調査を行う。
- 1.22 溝跡内より柵列跡を検出し調査を行う。
- 1.23 引き続き柵列跡の調査を行う。
- 1.24 雨天のため現場作業を中止する。
- 1.25 清掃作業及び遺物の調査を行う。また、趙氏による堆積土層について現場指導を受ける。
- 1.26 北西部の調査を行うが、午後より降雨のため現場作業を中止する。
- 1.29 北西部から北東部の遺構調査を行う。
- 1.30 北東部の遺構調査を行う。
- 1.31 引き続き北東部の遺構調査を行う。
- 2.1 南西部の弥生時代の遺物包含層の人力掘削を行い、溝跡を検出する。
- 2.2 北東部の遺構調査を行う。
- 2.5 弥生時代の竪穴建物跡を中心に調査を行う。
- 2.6 引き続き弥生時代の竪穴建物跡を中心に調査を行う。
- 2.7 南西部の遺構調査を行うとともに遺構測量も行う。
- 2.8 引き続き南西部の遺構調査を行う。
- 2.9 雨天のため現場作業を中止する。
- 2.13 南西部の遺構調査を行う。
- 2.14 雨天のため現場作業を中止する。
- 2.15 遺構調査を終了する。
- 2.16 遺構測量を行う。
- 2.19 調査区の清掃作業を開始する。
- 2.20 遺構完掘状態の空中写真撮影測量を行う。
- 2.21 遺構測量を行う。
- 2.22 下層確認調査を行い、Ⅷ区Wの調査を終了する。
- 2.23 雨天のため埋め戻し作業を中止する。
- 2.26 埋め戻し作業を中止する。
- 2.27 埋め戻し作業を行う。
- 2.28 引き続き埋め戻し作業を行う。
- 3.1 〃
- 3.2 〃
- 3.7 埋め戻し作業を終了し、平成18年度の調査を完了する。

平成19(2007)年4月17日～6月5日

Ⅷ区W(Ⅷ-1区東側)(実働27日).....

- 4.17 調査区周囲に安全柵を設置し、機械掘削を開始する。
- 4.18 雨天のため現場作業を中止する。
- 4.19 機械掘削と併行して遺構検出を行う。
- 4.20 引き続き機械掘削及び遺構検出を行う。
- 4.23 雨天のため現場作業を中止する。
- 4.24 機械掘削を終了する。
- 4.25 雨天のため現場作業を中止する。
- 4.26 遺構検出と調査区の清掃作業を行う。
- 4.27 遺構検出状態の写真撮影を行う。

1. 調査の経緯 (2) 調査日誌抄

- 5.1 雨天のため現場作業を中止する。
- 5.2 遺構調査を開始する。
- 5.7 畝状遺構を中心に調査を行う。
- 5.8 引き続き畝状遺構を中心に調査を行う。
- 5.9 畝状遺構と溝跡の調査を行う。
- 5.10 引き続き畝状遺構と溝跡の調査を行う。
- 5.11 弥生時代の竪穴建物跡の調査を行う。
- 5.14 弥生時代の竪穴建物跡を中心に調査を行う。
- 5.15 引き続き竪穴建物跡を中心に調査を行う。
- 5.16 竪穴建物跡を中心に調査を行うが、午後より降雨のため現場作業を中止する。
- 5.17 雨天のため現場作業を中止する。
- 5.18 竪穴建物跡を中心に調査を行う。
- 5.21 竪穴建物跡と溝跡の調査を行う。
- 5.22 引き続き竪穴建物跡と溝跡の調査を行う。
- 5.23 竪穴建物跡の調査をほぼ終了し、溝跡の調査を行う。
- 5.24 遺構調査を終了する。
- 5.25 雨天のため現場作業を中止する。
- 5.28 調査区の清掃作業を行う。
- 5.29 遺構完掘状態の空中写真撮影測量を行う。
- 5.30 遺構測量を行う。
- 5.31 雨天のため現場作業を休止する。
- 6.1 下層確認調査を行い、Ⅷ区Wの調査を終了する。
- 6.2 埋め戻し作業を開始する。
- 6.4 埋め戻し作業を行う。
- 6.5 埋め戻し作業を終了し、西野々遺跡Ⅷ区の調査を全て完了する。



写真2-12 Ⅷ-1区発掘調査風景

2. 調査区の概要

調査区が東西約300mに及び、途中で県道南国インター線が通っていることから、県道の西側にVI区とVII区の2つの調査区、東側にVIII区を設定した。また、VI区とVII区のほぼ真中に農道が通っていたことからそこを境に西側をVI区、東側をVII区とした。

また、基盤層は網状流路となった洪水堆積(洪水流による砂の充填)によることから検出面の土質が異なっている。

(1) VI区

VI区は平成16年度に発掘調査を行ったI区とは県道仁井田竹中線を挟んだ東隣の調査区で、東西約130m、南北約62mの範囲である。調査区には水路が通っていたため、調査区を大きく2つに分け、西側の三角形を呈する調査区をVI-1区、東側の調査区をVI-2区とした。発掘調査では、排土置き場の関係で、VI-2区のほぼ真中を境に西側(VI区W)と東側(VI区E)に分けて行った。

地形は北東部(8.0m)から南西部(7.6m)に向って緩やかに傾斜し、ほぼ全域から弥生時代の遺構、東側を中心に古代と中世の遺構が検出された。

調査面積は、VI-1区が1,100㎡、VI-2区が5,330㎡の計6,430㎡であった。また、下層確認のためのトレンチ(141㎡)を設定して、土層の堆積状況の調査を行った。

① 層序

遺構検出面は調査区北西部が第VI層上面となっているが、基盤層は前述のとおり洪水堆積によることから調査区には、北東から南西に向って斜め方向に黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト層、暗灰黄色(2.5Y4/2)砂層、黒色(N2/0)～黒褐色(10YR3/1)砂質シルト層、暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト層が帯状に堆積しており、それぞれが遺構検出面となっている。

比較的遺存状況の良好であった北壁では次の堆積が認められた。

第I層 黒褐色(7.5Y3/1)シルト質粘土層

第II層 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト層

第III層 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土層

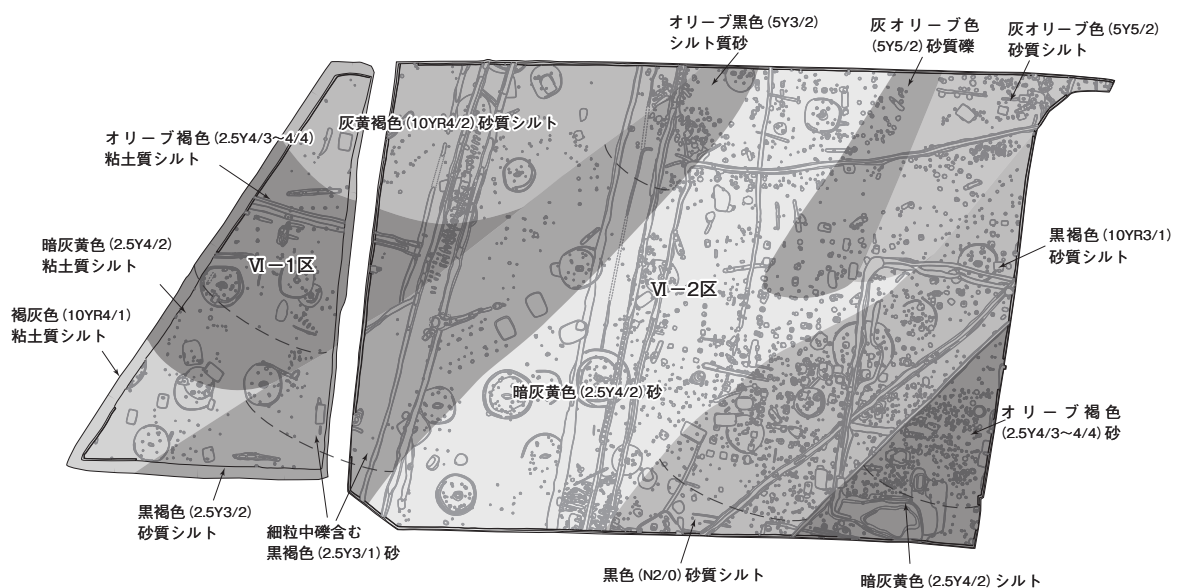


図2-1 VI区の調査区と地山の堆積層(S=1/1,000)

2. 調査区の概要 (1) VI区

第IV層 黒褐色(2.5Y3/2)シルト質粘土層

第V層 黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト層

第VI層 灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト層

層位中、第Ⅲ～Ⅴ層が遺物包含層で、遺構検出面は第Ⅵ層上面であった。

第Ⅰ層は現在の耕作土層で、厚さ約15cmを測り、調査前は水田であった。

第Ⅱ層は第Ⅰ層に伴う床土層で、厚さ約5cmを測る。

第Ⅲ層は中世の遺物包含層で、厚さ約10cmを測り、調査区の多くで認められた。

第Ⅳ層は古代の遺物包含層で、厚さ5～10cmを測り、第Ⅲ層同様比較的多くで認められた。

第Ⅴ層は弥生時代の遺物包含層で、標高の高い箇所では削平され、確認できなかった。

第Ⅵ層は自然堆積層で前述のとおり洪水堆積による。色調はやや異なるが、西側が東側に比ベシルト分が多くなっていた。

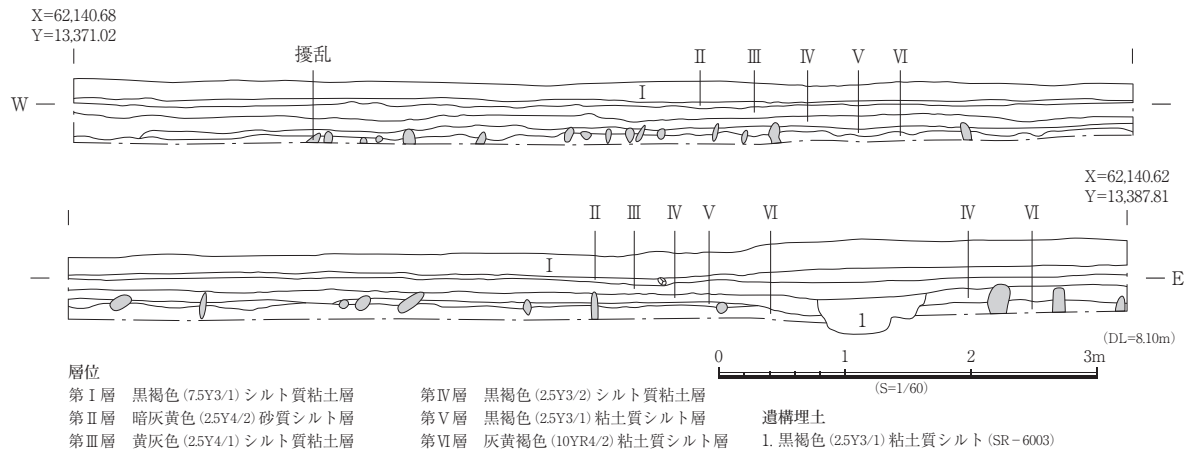


図2-2 VI-2区北壁セクション

② 堆積層出土遺物

第Ⅱ層出土遺物

肥前系磁器(図2-3 6001)

紅皿で、外面には型作りの際の条線が残存し、高台から外底面は露胎となる。胎土には黒色粒を少し含む。

近世陶器(図2-3 6002・6003)

いずれも皿で、6002は、口縁部が体部から外反する。外底面の外側から見込にかけてオリーブ色の釉を施釉する。外底面には重ね焼きの際の窯道具の痕跡が残存する。6003は、底部が貼付け高台で、畳付は釉ハギとなる。いずれも胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

石製品(図2-3 6004)

太型蛤刃石斧で、基部が残存し、側面に研磨痕がみられる。

銅製品(図2-3 6005)

煙管の吸口で、銹化が進み、側面には接合部の一部が残存する。

第Ⅲ層出土遺物

土師質土器(図2-3 6006)

杯で、口縁部は内湾気味に上がる。口縁部から体部外面には煤が付着する。底部の切り離しは回転

糸切りで、胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

備前焼(図2-3 6007)

擂鉢で、口縁部は上外方を向く体部から直立し、下端を肥厚する。口縁部外面には自然釉がかかり、体部内面には4本単位の条線が部分的に残存する。胎土には細粒砂から極細粒中礫を比較的多く含む。

白磁(図2-3 6008)

碗で、底部は削り出し高台となり、外面には回転ヘラ削りの痕跡が残存する。見込には1条の沈線が巡る。胎土には黒色粒を少し含む。

青磁(図2-3 6009・6010)

いずれも皿で、6009は、底部の切り離しが回転糸切りとなり、釉ハギされる。見込には劃花文がみられる。胎土には黒色粒を少し含む。6010は、底部が削り出し高台で、見込には蓮弁とみられる草花文が残存する。全面に施釉され、畳付が釉ハギとなる。胎土には黒色粒を若干含む。

土製品(図2-3 6011~6016)

いずれも土錘で、6011・6012が円筒形、他が紡錘形となる。胎土は、6011が細粒砂から中粒砂を比較的多く、6012と6015が細粒砂から中粒砂を少し、6013が細粒砂から中粒砂を若干、6014と6016が細粒砂から粗粒砂を少し含んでいた。

第IV層出土遺物

弥生土器(図2-4 6017~6023)

6017は長頸壺とみられ、口頸部は直立する。頸部内面には指ナデ調整の後にハケ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

6018と6019は甕で、6018は、口縁部が胴部からくの字形をなす。胴部内外面にはハケ目が残存する。6019は、口頸部が外傾し、貼付口縁となり、口縁部外面には指頭圧痕が残存する。いずれも胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

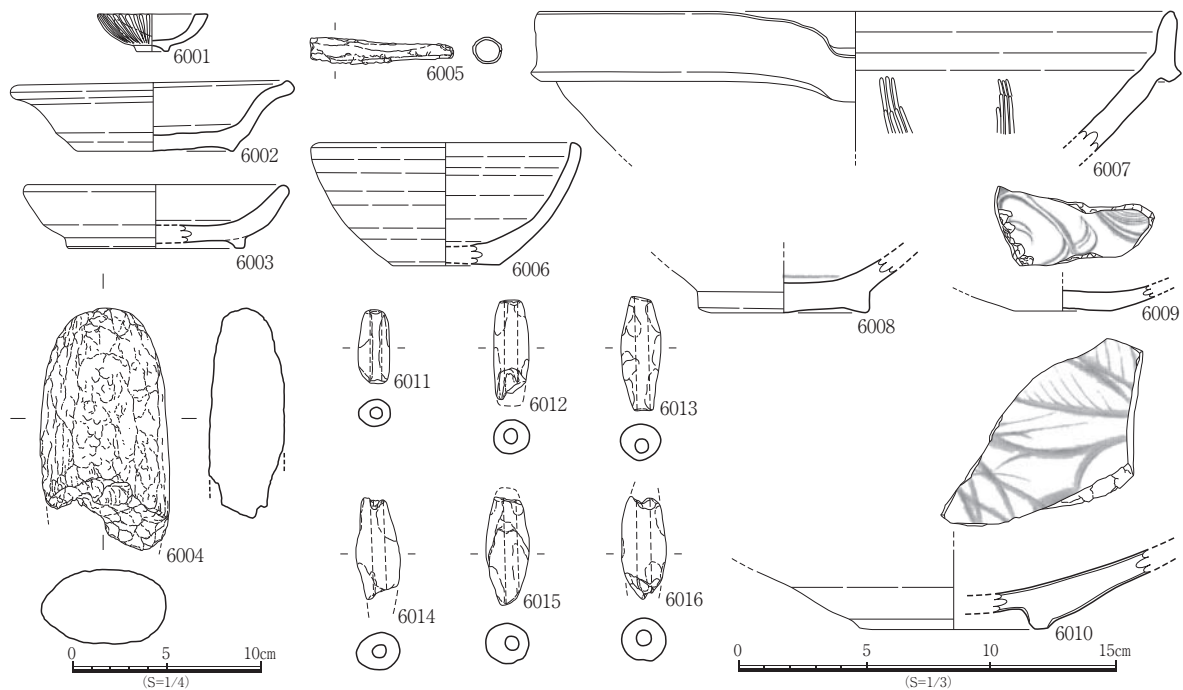


図2-3 第II・III層出土遺物実測図

2. 調査区の概要 (1) VI区

6020～6022は底部で、6020と6021は甕、6022は壺とみられる。6020は上げ底風となり、胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。6021の胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。6022は、内面にヘラナデ調整を施し、外底面は未調整となり、胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6023はミニチュア土器で、外面下端と底部外端には指頭圧痕が残存する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

土師器(図2-4 6024)

甕で、胴部はほぼ直立し、口頸部は外傾する。口頸部内面と胴部外面にはハケ目が残存し、胴部内面はヨコ方向のヘラナデ調整の後にナデ調整を加える。胎土には中粒砂から粗粒砂を多く含む。

須恵器(図2-4 6025～6033)

6025は杯蓋で、口縁部はほぼ平坦な天井部から下外方に下り、端部を真下に小さく屈曲さす。天井部外面には自然釉がかかり、部分的にハダ荒れがみられる。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

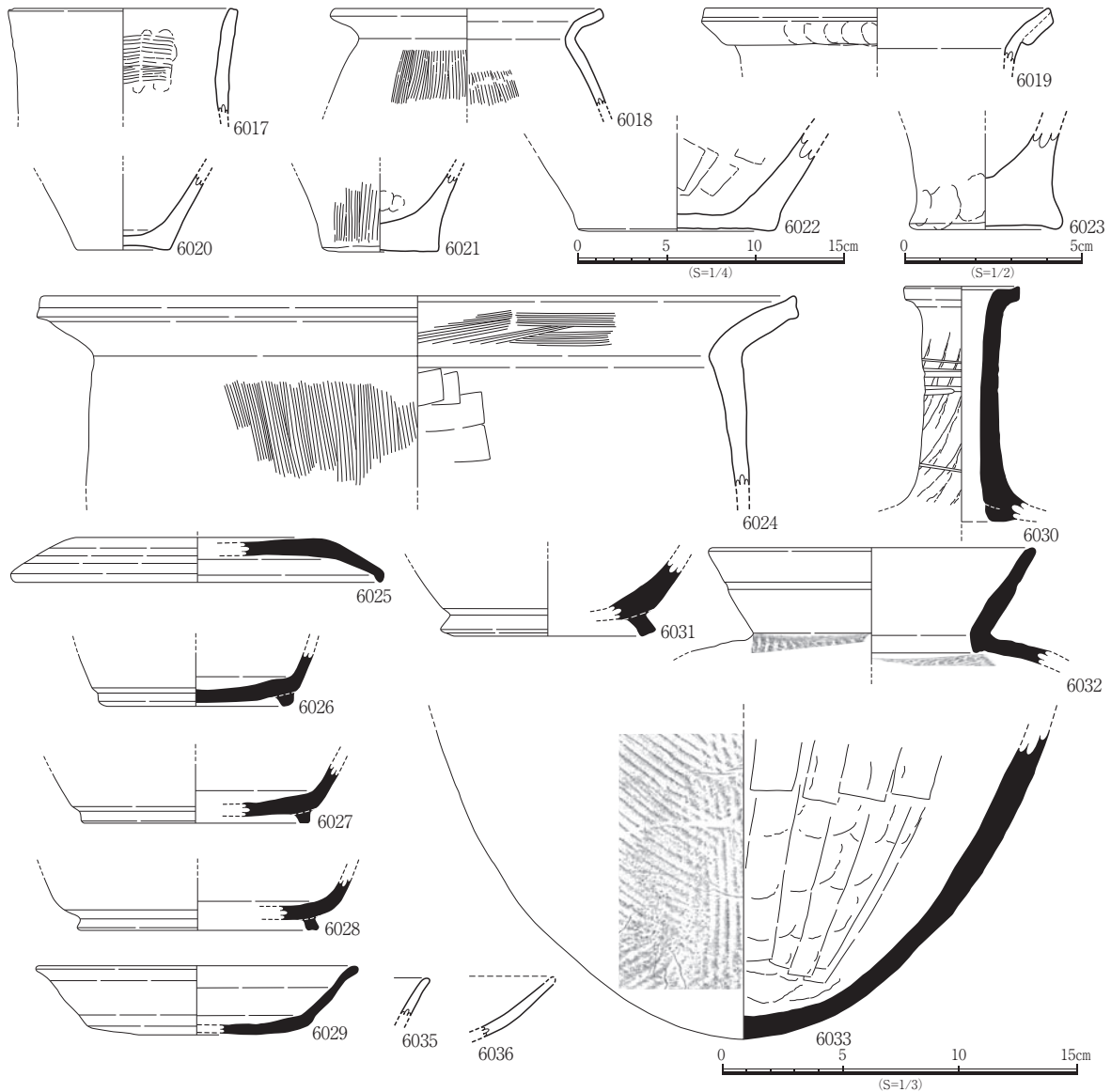


図2-4 第IV層出土遺物実測図1

6026～6028は高台が付く杯身で、高台高はいずれも0.6cmである。6026と6027の底部外面は回転ヘラ切りとなる。6028も底部外面は回転ヘラ切りとみられるが、ナデ調整が施され確認できない。胎土には、6026と6027が細粒砂から中粒砂を少し含み、6028が細粒砂から極粗粒砂を少し含む。6029は無高台の杯で、底部の切り離しは回転ヘラ切りとなる。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

6030は長頸壺で、口頸部は細く、直立し、端部が短く屈曲する。外面にはしまり目、2条の凹線と沈線状のキズが残存する。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。6031は台付壺で、底部にはハの字形に開く高さ1.2cmの高台が付く。胎土には細粒砂から中粒砂及び黑色粒を少し含む。6032は甕で、口頸部は丸味のある胴部から屈曲して外傾し、端部は丸い。胴部内面には同心円文のタタキ目、外面には平行のタタキ目が残存する。胎土には細粒砂から粗粒砂及び黑色粒を比較的多く含む。6033は甕の底部で、丸く、内湾気味に立ち上がり、内外面にタタキを施し、内面にはヘラナデ調整を加えるが、当て具の痕跡が残存する。胎土には細粒砂から極細粒中礫を少し含む。

緑釉陶器(図版59 6034)

6034は硬質系の皿で、全面に緑釉を施釉する。胎土は精良で、極細粒砂から細粒砂を若干含む。

灰釉陶器(図2-4 6035・6036, 図版59 6037)

6035は椀、6036・6037は皿とみられ、6036と6037の外面には回転ヘラ削りの痕跡が残存する。いずれも胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

石製品(図2-5 6038～6043)

6038はサヌカイト製の凹基の石鏃である。

6039～6041は投弾とみられ、断面形は、6039が丸く、6040と6041がやや扁平である。

6042と6043は磨石である。いずれも扁平で、縁辺を中心に擦痕が残存する。

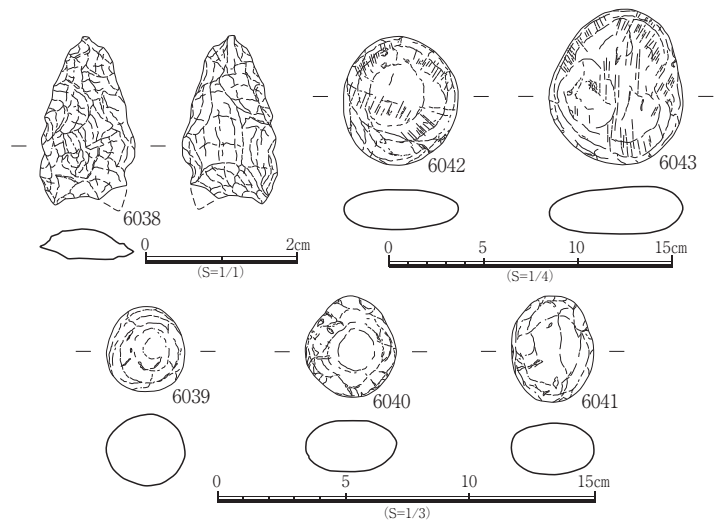


図2-5 第IV層出土遺物実測図2

第V層出土遺物

弥生土器(図2-6・7 6044～6076)

6044～6047は壺で、6044はほぼ全体が復元できる。6044は、底部が平らで、胴部は倒卵形をなす。口頸部は外

反し、口縁部は貼付口縁となる。外面頸部と胴部の境には断面三角形の突帯を貼付し、上下をヨコナデ調整する。口縁部外面は指押え、口頸部内面はヨコ方向、頸部外面と胴部外面はタテ方向にヘラ磨き、胴部内面上半にはヨコ方向のヘラナデ調整、下半と外底面にはナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。6045は、頸部がくの字形をなし、口縁部でさらに外傾し、端部にはヘラ状工具による斜格子文を施す。口縁部は貼付口縁となっているが、貼付した粘土帯は剥離し、遺存しない。頸部外面には幅約1.3cm、厚さ約0.5cmの粘土紐を貼付し、指先でつまみ、刻目風となる。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。6046は、口頸部が外反するもので、端部を拡張し、擬凹線文を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。6047は、口頸部が大きく外反するもので、括

張した端部には凹線文を施す。頸部内面はナデ調整, 外面はタテ方向のハケ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

6048～6062は甕で, 全体が復元できたのは6058のみであった。6048～6055は口縁部外面に粘土帯を貼付したものである。6053のみ明瞭ではないが, 粘土帯を貼付したことが断面で確認できる。6048は口縁端部下端にヘラ状工具による刻目, その下にクシ描直線文を施文し, 頸部内面はヘラナデ調整, 外面はナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。6049は口縁端部下端にヘラ状工具による刻目, その下に微隆起突帯を作り出す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。6050も口縁端部下端にヘラ状工具による刻目を施すもので, 口縁部はやや外反する頸部から大きく外反する。口縁部外面には指頭圧痕が残存する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。6051は, 6050より口頸部が外反するもので, 端部下端に棒状工具による刻目を施す。口縁部外面には指頭圧痕が残存する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。6052は, 口縁部が頸部からさらに外傾するもので, 口縁部外面には指頭圧痕が残存するが, 端部下端には刻目は施されていない。頸部外面にはタテ方向のハケ調整の後にヨコ方向にヘラ磨きを加える。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。6053は口頸部が外傾するもので, 内外面にタテ方向のハケ調整を施し, 粘土帯を貼付した痕跡を消すが, 口縁端部が大きな凹面となり, 粘土帯貼付の痕跡が残る。また, 口縁部外面には煤がわずかに付着する。6054は, 口縁部が大きく開くもので, 口縁部外面には指頭圧痕が残る。6055は, 直立する胴部から口頸部が外傾するもので, 口縁部外面には指頭圧痕が残り, 胴部内面にハケ目が残る。6053～6055の胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6056～6059は, 口縁部が胴部から緩やかに外反するものである。6056の口縁端部にはヘラ状工具による刻目が残存し, 胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。6057は, 底部以外が復元できたもので, 胴部内面下半にはハケ目, 各所に指頭圧痕が残存する。また, 口縁部から胴部外面には煤が付着する。6058は全体が復元できたもので, 底部は平らで, 胴部は中胴部よりやや上に最大径を有し, 口頸部は緩やかに外反して上がる。頸部には2個1対の径約0.5cmの円孔を穿つ。胴部内面は指ナデとナデ調整, 外面は下から上にヘラ磨きを施す。口縁部から底部外面には各所に煤が付着する。6057と6058は胎土に細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。6059は口縁端部が丸くなるもので, 胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

6060～6062は, 口頸部がくの字形をなすもので, 6060は, 胴部内外面にタテ方向のハケ調整を施し, 口縁端部は若干上方に拡張され, 平面となり, 口縁部から胴部外面には煤が付着する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。6061は胴部内面にナデ調整, 外面にハケ調整を施すもので, 口縁端部を内側に拡張する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。6062は胴部内外面にナデ調整を施し, 口縁端部は擬凹線文となる。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

6063～6070は底部で, 6066・6068・6069は壺とみられる。いずれも平底のしっかりしたもので, 内面は指押えとナデ調整を主体とし, 6067と6069にはヘラ磨きを施し, 6063には焦げ目が付着する。外面の調整には種々あり, 6063はナデ調整, 6064・6069・6070はヘラ磨き, 6065・6068はハケ調整, 6066はヘラナデ調整, 6067はタタキの後にヘラ磨きを施す。外底面の調整はナデ調整を施すものが多いが, 未調整のままのもの(6066・6069・6070)や, ヘラ削りを施すもの(6068)もみられる。胎土には細粒砂から粗粒砂ないし極粗粒砂または極細粒中礫を比較的多く含むもの(6063・6064・6066・6068・6069)と多く含むもの(6065・6067・6070)がある。

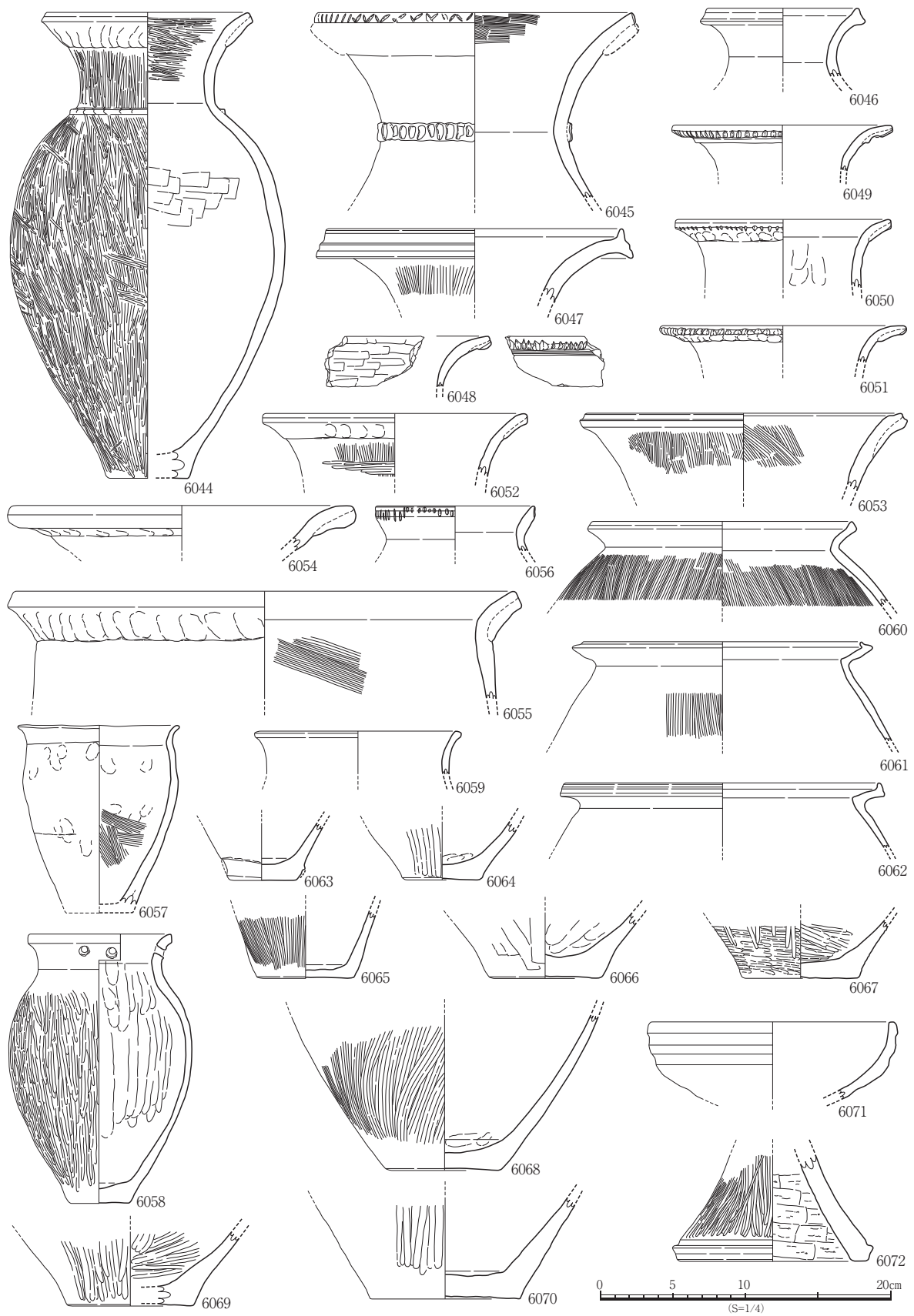


図2-6 第V層出土遺物実測図1

2. 調査区の概要 (1) VI区

6071と6072は高杯で、6071は口縁部が直立する杯部で、外面に凹線文を施し、胎土には細粒砂から極細粒砂を少し含む。6072はハの字形に開く脚部で、内面にはヨコ方向のヘラ削り、外面にはタテ方向のヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

6073～6076はミニチュア土器で、6073は全体を復元できた。6073は、平らな底部から胴部が内湾気味に上がり、口頸部がくの字形をなす。各所に指頭圧痕が残る。6074は、底部外端をつまみ出しが高台状になるもので、基部には指頭圧痕が残る。6073と6074は胎土に細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。6075も底部外端をつまみ出しており、基部には指頭圧痕が残存する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。6076は、器壁が薄いもので、底部から胴部に向って直立しており、外面にはヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

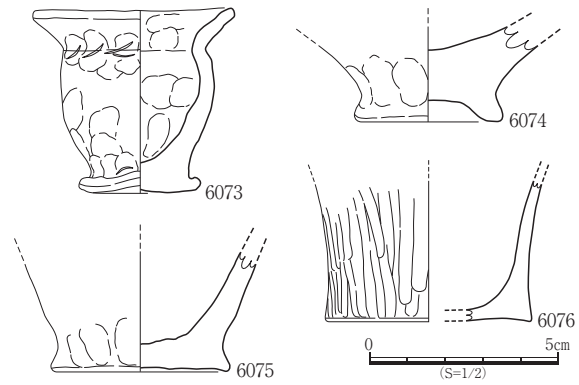


図2-7 第V層出土遺物実測図2

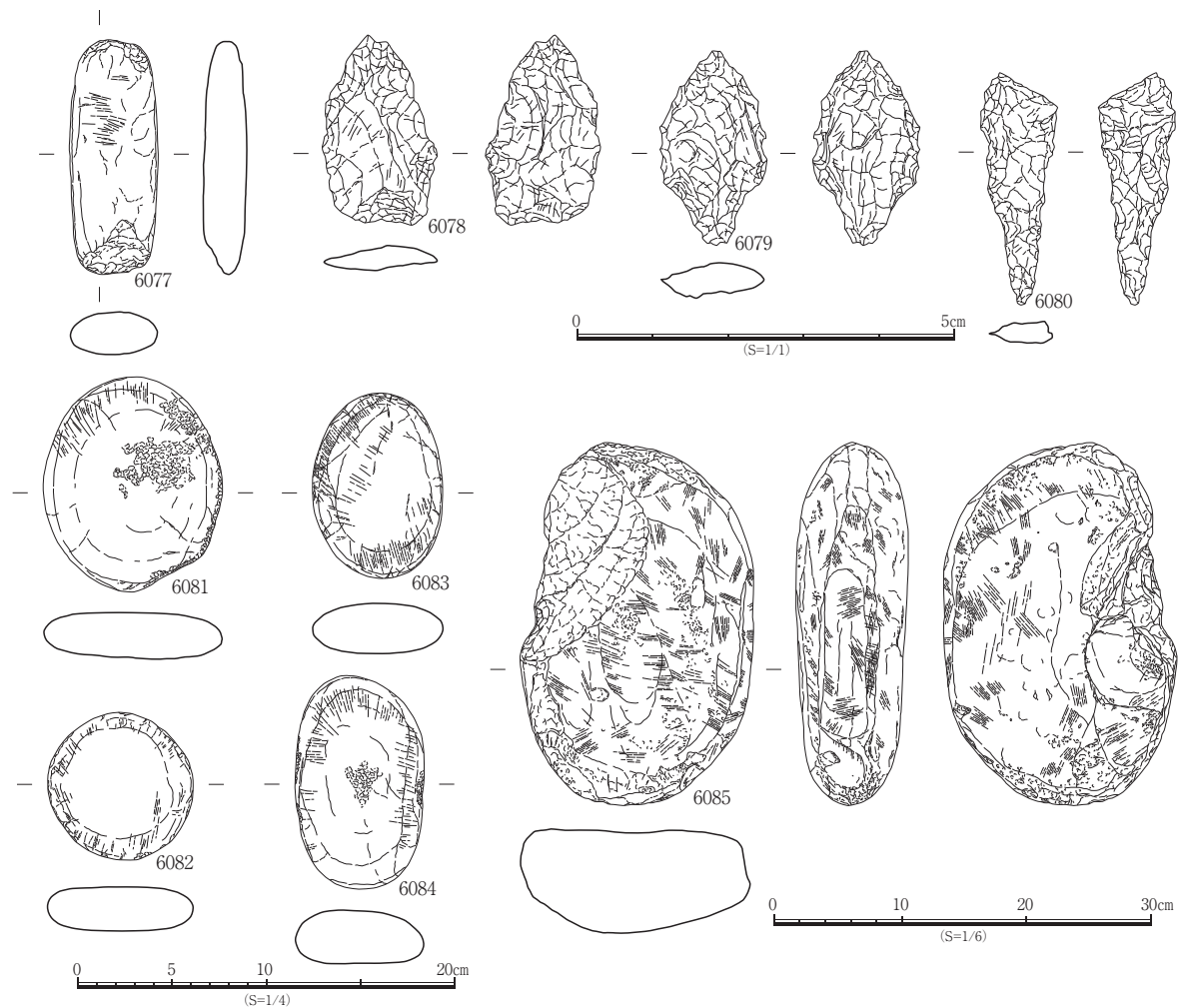


図2-8 第V層出土遺物実測図3

石製品(図2-8 6077~6085)

6077は扁平柱状石斧で、両刃となり、刃部長3.7cm, 幅0.9cmを測る。基部には擦痕が目立つ。

6078と6079はサヌカイト製の石鏃で、6078は平基, 6079は凸基となる。

6080はサヌカイト製の穿孔具とみられるもので、断面は扁平であるが、先端が尖る。

6081は扁平な叩石で、片面に弱い敲打痕がみられ、側面を中心に縁辺に擦痕が残る。

6082~6084は磨石で、いずれも扁平で縁辺を中心に擦痕が残る。6084には片面中央と側面に弱い敲打痕も残る。

6085は中粒砂岩の河原石を使用した砥石で、両面と側面の3カ所に使用痕が残存する。また、縁辺に敲打痕も遺存する。

(2) VII区

VII区はVI区の東隣の調査区で、東西約100m, 南北約65mの範囲である。調査区は現在の私道と用水路の関係で5カ所に分れる。これらは、大きく北部と南部に分れ、さらに南部は西側と東側、北部は東西3カ所に細分される。最も調査面積の広い南部西側の調査区をVII-1区、次に調査面積の広い南部東側の調査区をVII-2区、北部は西からVII-3区, VII-4区, VII-5区とした。

発掘調査は、平成18年度にVII-1区の西側約2/3とVII-3区の調査を行ってからVII-1区東側約1/3とVII-2区の調査を行った。なお、VII-1区の東側は、SB-7004・7005を完掘さす目的で拡張させたため工の字形となっている。平成19年度にはVII-4・5区の調査を行った。

地形は北部(8.1m)から南部(7.9m)に向かってやや傾斜し、西側を中心に弥生時代と中世の遺構、ほぼ全域から古代の遺構が検出された。

調査面積は、VII-1区が3,396㎡(延べ3,680㎡), VII-2区が1,234㎡(延べ1,334㎡), VII-3区が44㎡, VII-4区が55㎡, VII-5区が342㎡(延べ365㎡)の合計5,071㎡(延べ5,478㎡)であった。また、下層確認のためのトレンチ(208㎡)を設定して、土層の堆積状況の調査を行った。

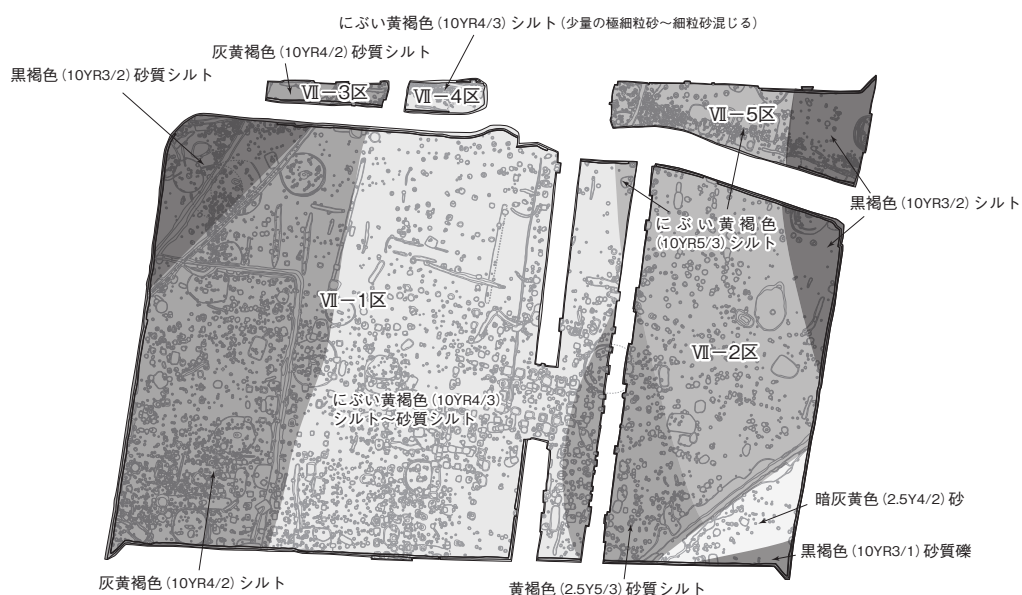


図2-9 VII区の調査区と地山の堆積層(S=1/1,000)

2. 調査区の概要 (2) VII区

① 層序

地山である検出面の大半は第Ⅷ層で、北側がシルト層、南側が砂質シルト層となっていた。また、北西部では黒褐色(10YR3/2)砂質シルト層(第Ⅶ層)、北東部では黒褐色(10YR3/2)シルト層(第Ⅶ層)が遺構検出面となっていた。また、南東部では、第Ⅷ層の上に暗灰黄色(2.5Y4/2)砂層と黒褐色(10YR3/1)砂質礫層の堆積が認められた。

- 第Ⅰ層 オリーブ黒色(5Y3/2)砂質シルト層
- 第Ⅱ層 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト層
- 第Ⅲ層 砂混じりの暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルト層
- 第Ⅳ層 砂混じりの黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト層
- 第Ⅴ層 黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト層
- 第Ⅵ層 黒色(10YR2/1)粘土質シルト層
- 第Ⅶ層 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト層
- 第Ⅷ層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト～砂質シルト層

層位中、第Ⅳ～Ⅵ層が遺物包含層で、遺構検出面は第Ⅶ層と第Ⅷ層上面であった。

第Ⅰ層は現在の耕作土層で、厚さ約20cmを測り、調査前は水田であった。

第Ⅱ層は旧耕作土層とみられ、厚さ約20cmを測る。第Ⅲ層は第Ⅱ層に伴う床土とみられ、厚さ約5cmを測る。

第Ⅳ層は中世の遺物包含層で、厚さ5～10cmを測る。

第Ⅴ層は古代の遺物包含層で、比較的遺存状況は良く、厚さ20cmを測る部分も認められた。なお、発掘調査では第Ⅳ層と明確に区分して遺物を取り上げておらず、ここでは第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物として取り扱う。

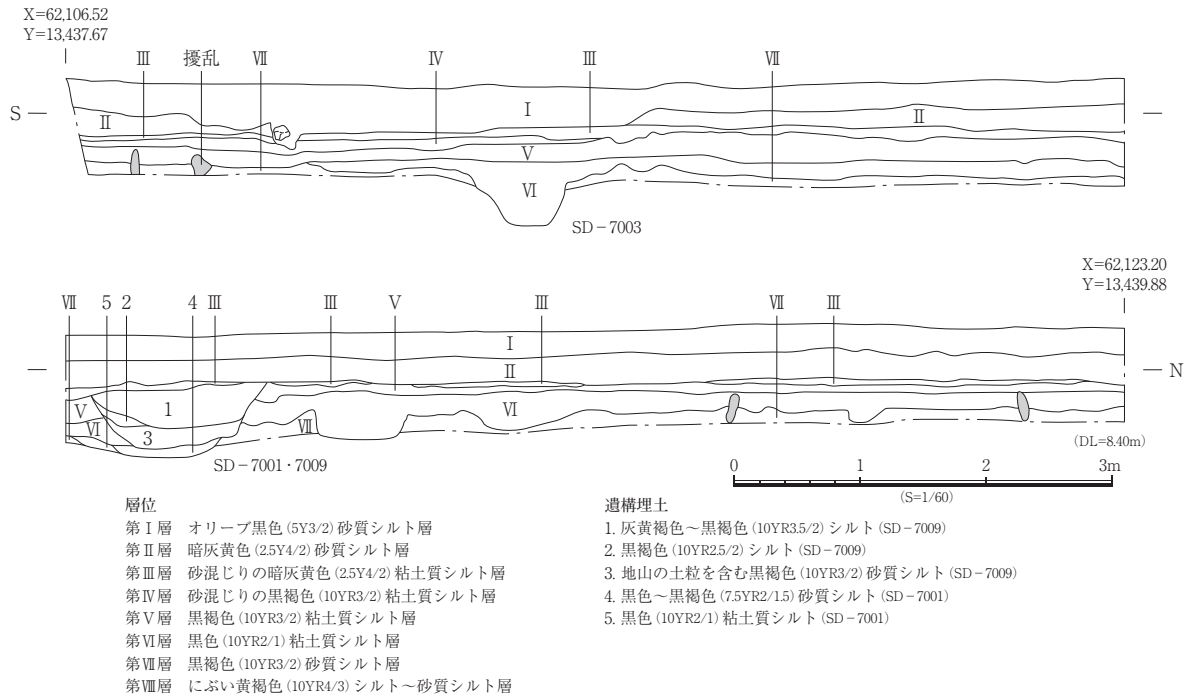


図2-10 VII-1区西壁セクション

第VI層は弥生時代の遺物包含層であり、北西部を中心に遺存状態が良かった。

第VII層以下は自然堆積層で前述のとおり洪水堆積による。

② 堆積層出土遺物

第I層出土遺物

備前焼(図2-11 7001)

播鉢で、口縁部は体部から直立し、胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

肥前系磁器(図2-11 7002~7004)

7002・7003は皿で、7002は、底部が削り出し高台となり、体部は内湾し、口縁部は外傾し、端部は丸い。体部外面から内面に施釉し、見込には胎土目が3ヵ所に残る。7003は残部全面に施釉される。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

7004は端反碗で、口縁端部は外傾する。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

京焼系陶器(図2-11 7005)

丸碗で、底部は内湾気味に上がる。底部は削り出し高台となり、畳付は釉ハギとなる。器面には細かな貫入が入る。胎土には極細粒砂を若干含む。

近世以降陶器(図2-11 7006~7009)

7006は端反皿で、口縁部は屈曲し、胎土には極細粒砂から細粒砂を若干含む。

7007は花瓶で、頸部は真上に上がり、口縁部は外反する。頸部内面にはしぼり目が残る。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

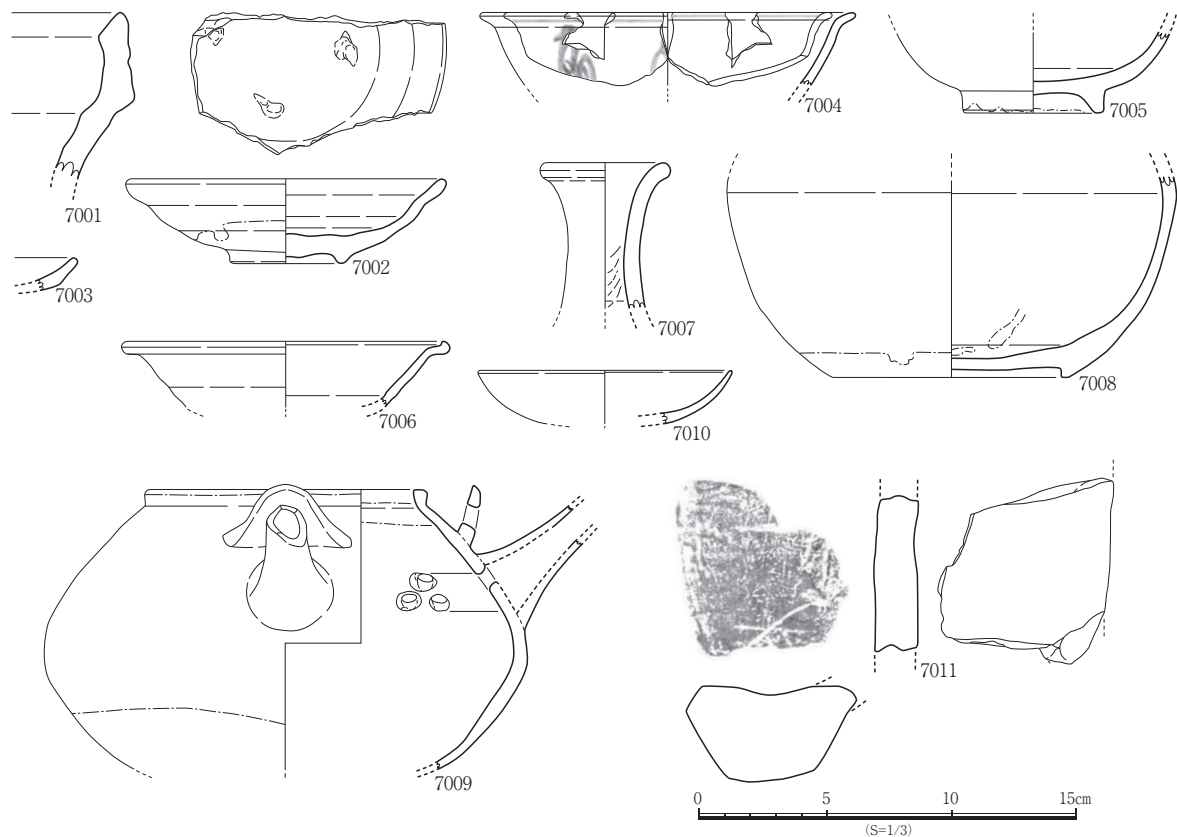


図2-11 第I層出土遺物実測図

2. 調査区の概要 (2) VII区

7008は鉢で、底部は削り出し高台となり、体部は内湾して上がる。体部外面下端から内面にかけて鉄釉を施釉し、内底面には釉溜りがみられる。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

7009は土瓶で、肩部には注ぎ口、その上に把手が付く。口縁部内面から外面下胴部にかけて鉄釉を施釉し、下胴部には煤が付着する。

近世以降磁器(図2-11 7010)

皿で、口縁部は底部から内湾して上がり、端部は細い。胎土には黒色粒を少し含む。

瓦(図2-11 7011)

平瓦で、凹面には布目が残存し、側面はヘラで面取り、凸面はナデ調整される。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

第Ⅲ層出土遺物

土師器(図2-12 7012・7013)

7012は皿で、成形は左手手法となり、口縁端部内側は若干折込み、器面はヨコナデ調整の後にヘラ磨きを施す。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

7013は甕で、胴部は直立し、口縁部は外傾し、外側に粘土帯を貼付して肥厚する。内面と胴部外面にはハケ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

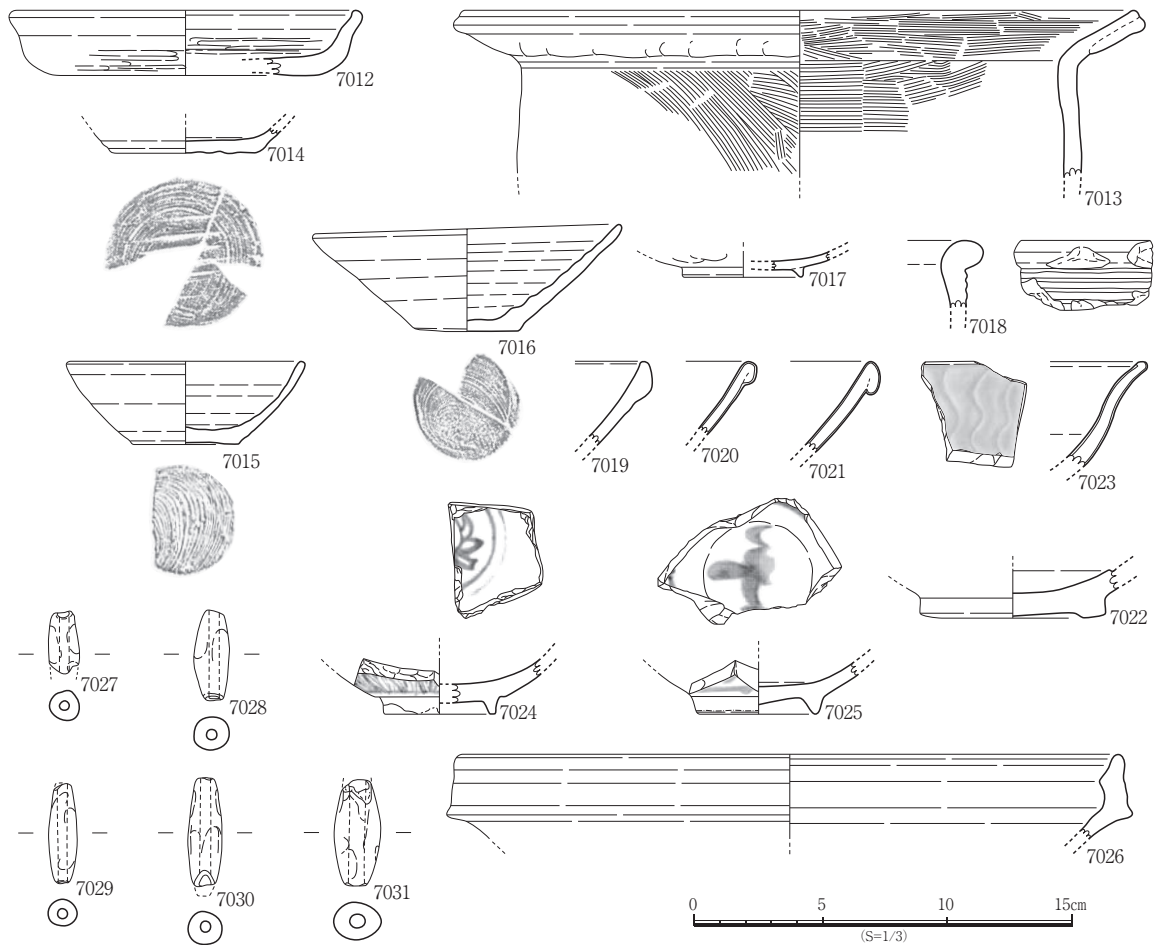


図2-12 第Ⅲ層出土遺物実測図

土師質土器(図2-12 7014~7016)

いずれも杯で、成形はB技法となり、底部の切り離しは回転糸切りである。7014の外底面には板状圧痕、7015・7016の内面にはロクロ目が残り、7015の内面には煤が付着する。胎土には、7014が極細粒砂から粗粒砂を少し、7015が極細粒砂から中粒砂を少し、7016が極細粒砂から極粗粒砂を若干含む。

瓦器(図2-12 7017)

椀で、底部は丸味があり、外面には高さ0.4cmの高台が付き、胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

瓦質土器(図2-12 7018)

鍋で、口縁部は丸く肥厚され、外面には4条の沈線が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

白磁(図2-12 7019~7022)

いずれも汀溪窯系の白磁碗で、口縁部が残る7019~7021は玉縁となる。7021には貫入がみられる。7022は削り出し高台となり、外面には回転ヘラ削りが残る。胎土には黒色粒を7019・7022が少し、7020・7021が比較的多く含む。

青磁(図2-12 7023)

鉢で、口縁部は内湾して立ち上がる体部から外傾し、端部は丸い。全面に青磁釉を施釉する。胎土には黒色粒を比較的多く含む。

青花(図2-12 7024・7025)

いずれも碗で、底部は削り出し高台となり、7024は全面に施釉し、畳付を釉ハギし、7025は見込から高台外側に施釉する。胎土には黒色粒を7024が比較的多く、7025が少し含む。

備前焼(図2-12 7026)

擂鉢で、口縁部は斜め上方を向く体部から真上に立ち上がる。外面には重ね焼きの痕跡が残る。

土製品(図2-12 7027~7031)

すべて土錘で、いずれも紡錘形となり、胎土には、7027が細粒砂から粗粒砂を比較的多く、7028・7029が極細粒砂から極粗粒砂を少し、7030・7031が極細粒砂から中粒砂を少し含む。

第IV・V層出土遺物

土師器(図2-13 7032~7054)

7032~7034は杯蓋で、7032は天井部に擬宝珠形のつまみが残存する。7033は、口縁部が平らな天井部から外下方に下るもので、天井部には扁平な擬宝珠形のつまみが付く。7034は、天井部が凹むもので、ボタン状のつまみが付く。内面にはヘラ磨きの痕跡が残る。胎土には、7032・7034が極細粒砂から中粒砂を少し、7033が細粒砂から粗粒砂を若干含む。

7035~7038は底部外面端部に輪高台の付く杯身で、7037と7038にはヘラ磨きの痕跡が残り、7037の内面には煤が付着する。胎土には、7035が極細粒砂から中粒砂を少し、7036が極細粒砂から粗粒砂を少し、7037・7038が細粒砂から中粒砂を若干含む。

7039~7041は杯で、輪高台は付かず、いずれも口縁端部内側に折込みがみられ、7041は凹線となる。また、7039は他に比べ器壁が厚く、内面にはヘラ磨きの痕跡が残る。胎土には、7039が極細粒砂から中粒砂を少し、7040が極細粒砂から粗粒砂を少し、7041が細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

2. 調査区の概要 (2) VII区

7042～7045は皿で、7042は小型で口縁部は斜め上方を向く。7042・7045の口縁端部は丸く仕上げられるが、7043・7044の口縁端部内側には折込みが沈線状となって残る。また、7044にはヘラ磨きの痕跡が一部残る。なお、7042は器面が摩耗しているため判然としないが、形態的にみてA技法の可能性もある。胎土には、7042が極細粒砂から中粒砂を若干、7043・7045が極細粒砂から粗粒砂を少し、7044が細粒砂から粗粒砂を少し含む。

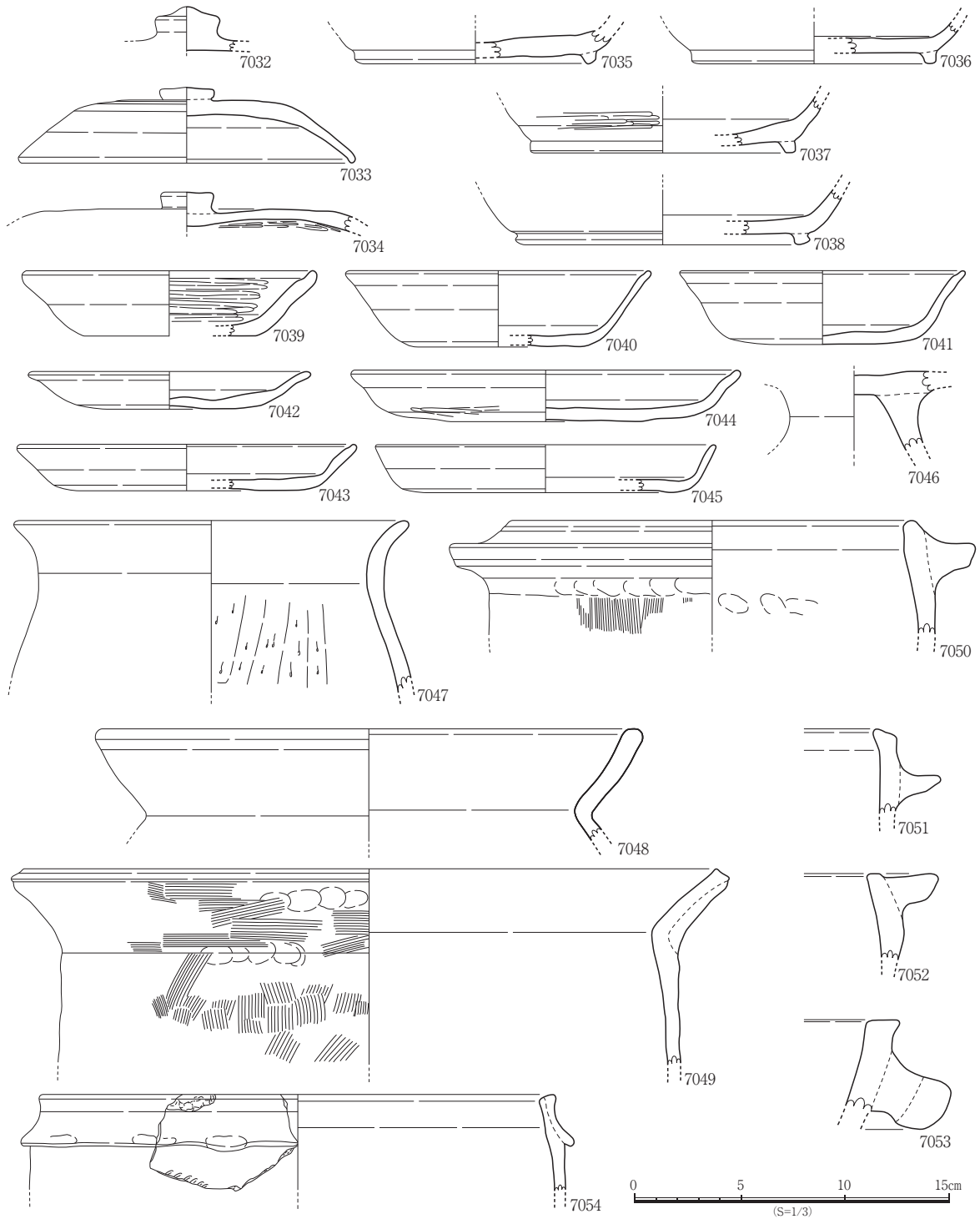


図2-13 第IV・V層出土遺物実測図1

7046は高杯で、残部が少ないが、杯部が左手手法、脚台部がA技法とみられ、土師器と土師質土器の折衷となる。

7047～7049は甕で、7047は口縁部が長胴の胴部から外反するもので、胴部内面にはヘラ削りが施される。7048は、口頸部がくの字形を呈すもので、口縁部は内湾気味に外傾する。7049は、口縁部が直立する胴部から外傾するもので、口縁部は粘土紐で肥厚する。胎土には、7047が細粒砂から極細粒中礫、7048・7049が細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

7050～7054は羽釜で、7050～7052は、口縁部が直立する胴部からそのまま立ち上がり、外面に鍔が付くもので、7050・7052の鍔は被熱で変色する。7053は、口縁部が外傾するもので、外面には太い鍔が付く。7054は、口縁部がやや内傾し、粘土紐を貼付して鍔を作り出すもので、鍔以下に煤が付着する。胎土には、7050が細粒砂から粗粒砂を多く、7051～7053が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く、7054が極細粒砂から中粒砂を多く含む。

須恵器(図2-14～17 7055～7121)

7055～7069は蓋で、7069以外は杯蓋である。7世紀初めから9世紀前半にかけてのものがみられ、後述する遺構の時期を反映している。7055～7059は、つまみが残存するもので、7055・7056のように宝珠形に近いものから7059のようにボタン状になったものまでみられる。胎土には、7055が細粒砂から中粒砂を比較的多く、7056が極細粒砂から中粒砂を少し、7057が細粒砂から粗粒砂を若干、7058・7059が白色極細粒砂から中粒砂を少し含む。7060は、口縁部が丸味のある天井部から外下方に下り、端部を丸く仕上げるもので、天井部外面にはヘラ起こしの後にヘラ記号を刻む。胎土には白色極細粒砂から極粗粒砂を少し含む。7061はかえりのあるもので、天井部外面ほぼ全域に回転ヘラ削りが施される。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。7062～7066は、口縁部が平らな天井部から斜め下方に下るもので、端部を下方に小さく屈曲さす。調整は基本的に、回転ナデ調整を施した後に天井部内面にナデ調整を加え、かつ天井部外面の大半に回転ヘラ削りを施す。天井部には7064のような擬宝珠形つまみがつくものとみられる。胎土には、7062が極細粒砂から中粒砂を若干、7063・

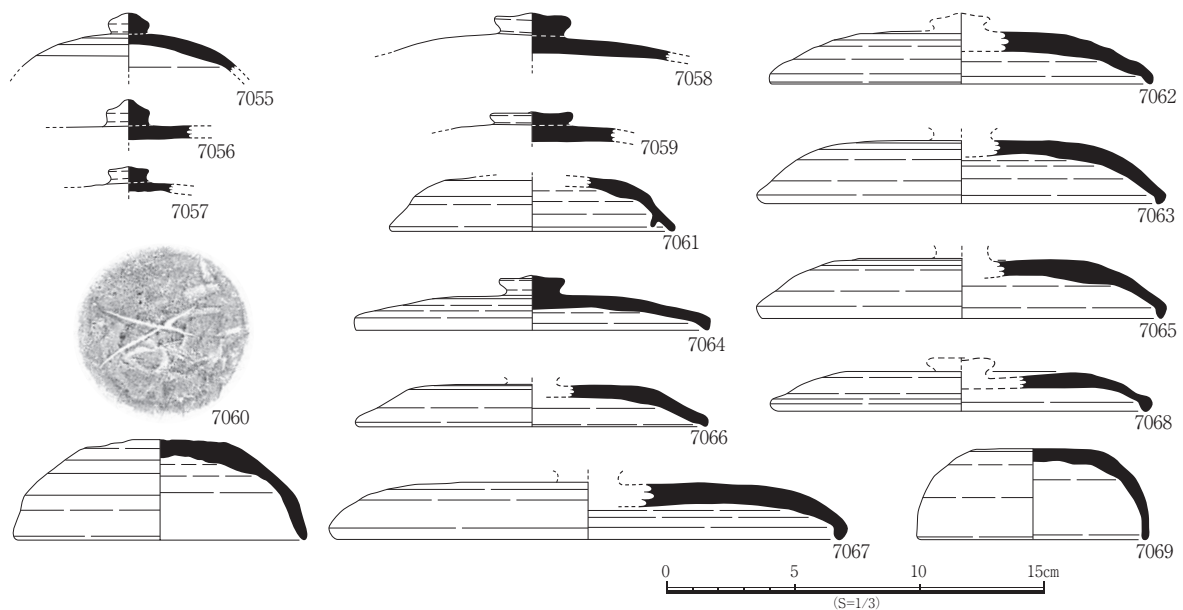


図2-14 第IV・V層出土遺物実測図2

7065 が極細粒砂から中粒砂を少し, 7064・7066 が極細粒砂から粗粒砂を少し含む。7067 は大型の杯蓋で, 天井部がやや凹み, 胎土には極細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。7068 も天井部が凹むもので, 外面は自然釉がかかり, ハダ荒れがみられる。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

7069 は壺の蓋とみられるもので, 口径は 9.0 cm を測る。天井部はヘラ起こしとなり, 胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7070 ~ 7096 は輪高台の付く杯身で, 7073・7083・7086 がほぼ全体を知ることができる。これ以外は底部の破片である。形態的には, 口縁部が平らな底部から上外方に延びるもの(7070~7088)と口縁部が内湾気味に延びるもの(7089~7095)があり, 後者は白色系となる。調整は基本的に, 回転ナデ調整を施した後に内底面にナデ調整を加え, 底部を回転ヘラ切りで切り離す。7072・7073・7076・7087・7089 は切り離しの後にナデ調整を加える。なお, 7091 は回転糸切り, 7092 は静止糸切りとなる。また, 7070 ~ 7076 の体部外面下端から底部外端部には回転ヘラ削りを施した上で, 高台を貼付し, ヨコナデ調整で整える。高台は, その多くが底部外面端部に付くが, 7077 のように端部より内側につく

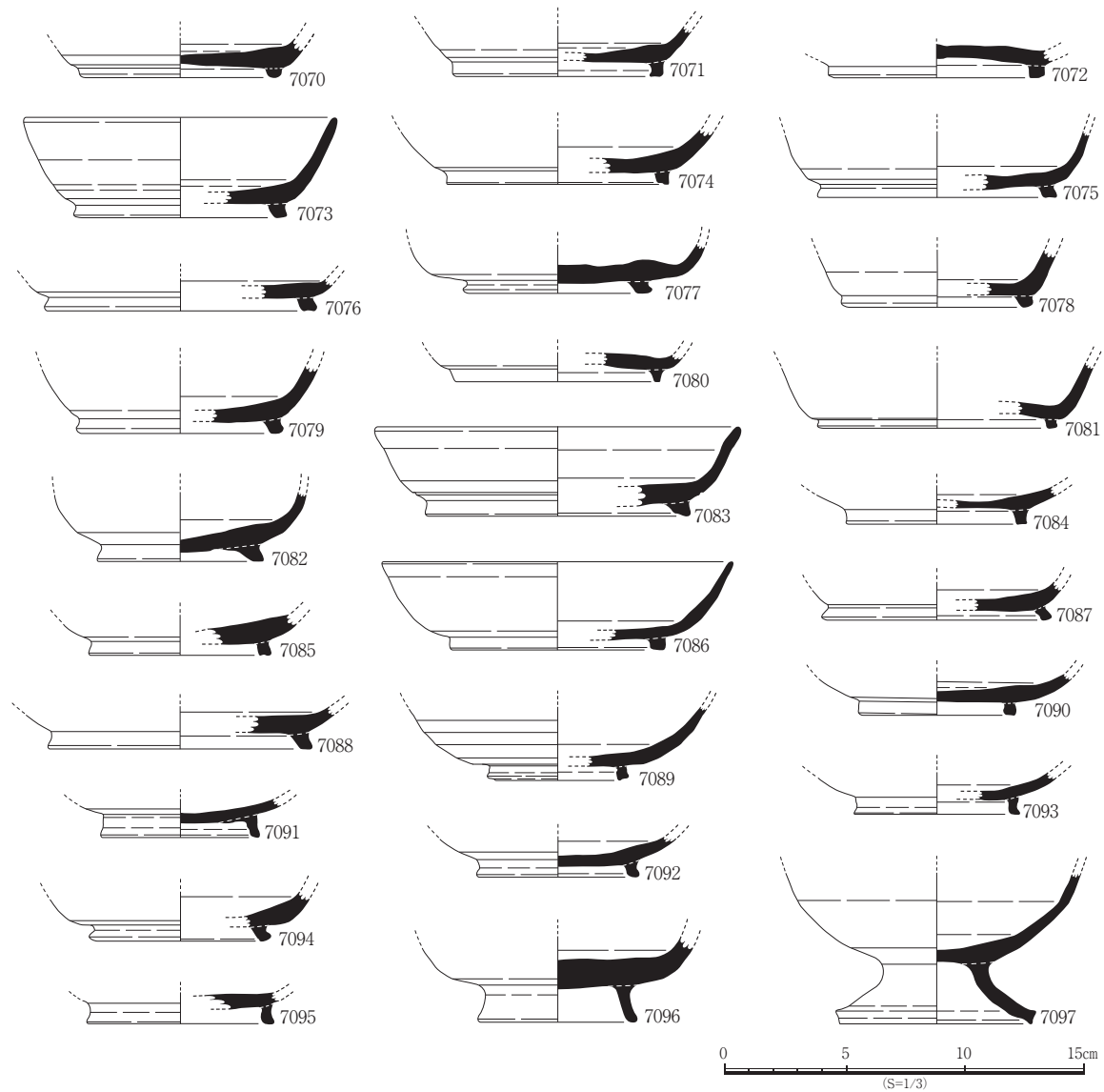


図2-15 第IV・V層出土遺物実測図3

ものもみられ、7096のように高いものもある。胎土には、極細粒砂から中粒砂を若干含むもの(7089・7092)、極細粒砂から中粒砂を少し含むもの(7071・7075・7076・7080・7082・7084・7086・7091・7093・7095)、極細粒砂から粗粒砂を少し含むもの(7072・7079・7081・7087・7088・7090・7094・7096)、極細粒砂から粗粒砂を比較的多く含むもの(7077)、細粒砂から中粒砂を少し含むもの(7070・7073・7074・7078・7085)、細粒砂から粗粒砂を比較的多く含むもの(7083)がある。

7097は台付椀で、底部は丸く、外面にはハの字形に開く高さ2.6cmの高台が付く。底部外面には回転ヘラ削りを施す。胎土には極細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

7098～7107は杯で、7098～7104には高台が付かず、7105～7107はベタ高台となる。形態的には、底部はほぼ平らで、口縁部は外上方に延び、端部は丸い。底部の切り離しはベタ高台のものが回転糸切り、7099がヘラ起こしである以外は回転ヘラ切りとなる。また、7104の外底面にはハケ目のような痕跡が残る。胎土には、極細粒砂から中粒砂を若干含むもの(7105)、極細粒砂から中粒砂を少し含むもの(7100・7101・7106・7107)、極細粒砂から粗粒砂を少し含むもの(7104)、極細粒砂から極粗粒砂を少し含むもの(7102)、細粒砂から中粒砂を少し含むもの(7098)、細粒砂から粗粒砂を比較的多く含むもの(7103)、極細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含むもの(7099)がある。

7108～7112は皿で、7108・7109は小型となる。調整は基本的に杯と同じで、底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。口縁端部内側には折込みが7112にみられ、その痕跡が7108・7110には凹線となって残る。胎土には、極細粒砂から中粒砂を少し含むもの(7110～7112)、極細粒砂から粗粒砂を少し含むもの(7109)、細粒砂から極粗粒砂を少し含むもの(7108)がある。

7113は鉢とみられるもので、外面には重ね焼きの痕跡が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

7114は提瓶で、胴部は丸く、口頸部は外傾する。胴部側面には回転ヘラ削りを施す。胎土には細粒

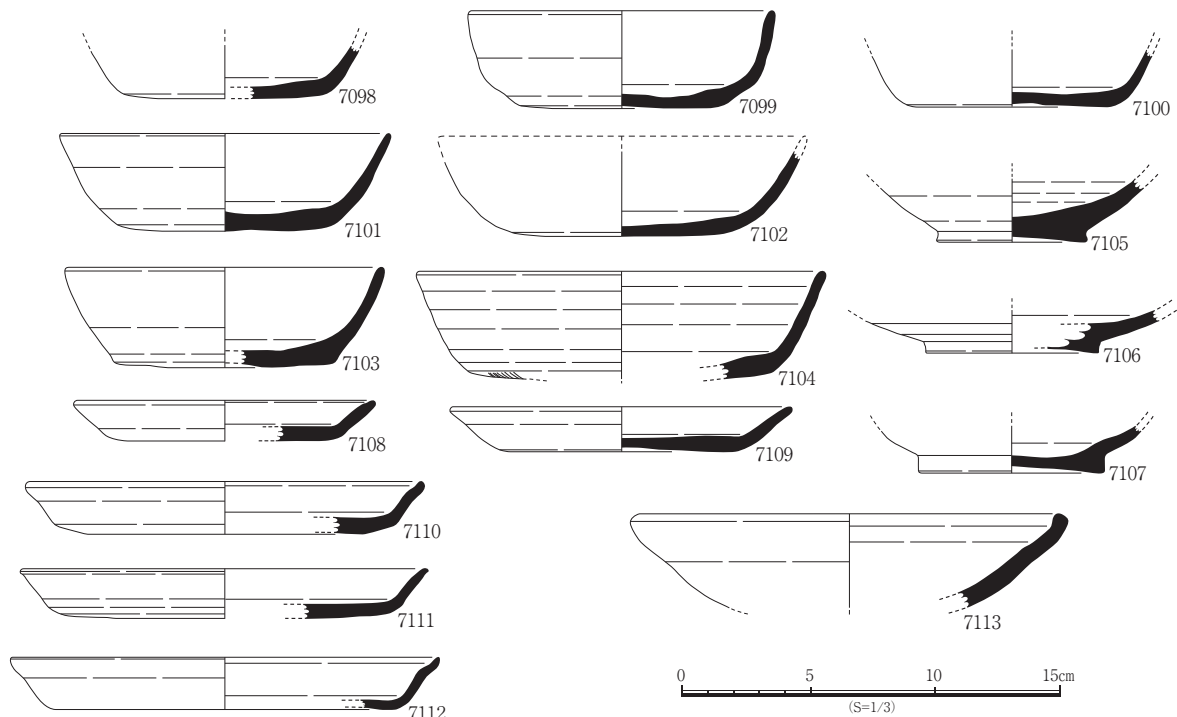


図2-16 第IV・V層出土遺物実測図4

砂から粗粒砂を少し含む。

7115～7120は壺である。7115は肩部外面に「大」の刻書が残るもので、焼成後に刻む。底部は回転ヘラ切りによってやや凸面となり、胴部は真上に立ち上がり、上胴部で内湾し、頸部に至る。口縁部はやや外反するものとみられる。外底面は回転ヘラ切りの後にナデ調整を施す。胴部外面はハダ荒れがみられる。胎土には白色細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。7116は短頸壺で、口縁部は短く外反する。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。7117・7118は台付壺で、7118は大型である。7117には高さ0.9cmで真下を向く高台、7118には高さ1.4cmでハの字形に開く高台が付く。また、7118の外底面には回転ヘラ削りの痕跡が残る。胎土には、7117が極細粒砂から粗粒砂、7118が細粒砂から極粗粒砂を少し含む。7119・7120は平底の壺で、外面には回転ヘラ削りが施される。胎土には、7119が細粒砂から粗粒砂を比較的多く、7120が極細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

7121は甕で、口縁部は胴部から真上に短く延び、胴部外面には平行のタタキ目が残存する。胎土には極細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

土師質土器(図2-18～20 7122～7157)

7122～7127は杯で、成形はいずれもA技法となる。調整は基本的に、回転ナデ調整を施した後に内底面にナデ調整を加え、7125・7127が回転糸切りである以外、底部を回転ヘラ切りで切り離し、7122はナデ調整を加える。7122は、折込みの痕跡が口縁端部内側に稜となって残り、体部から底部の外面には煤が付着する。7125は、口縁部が体部から外傾する。7126は、口縁部が体部から内湾気味

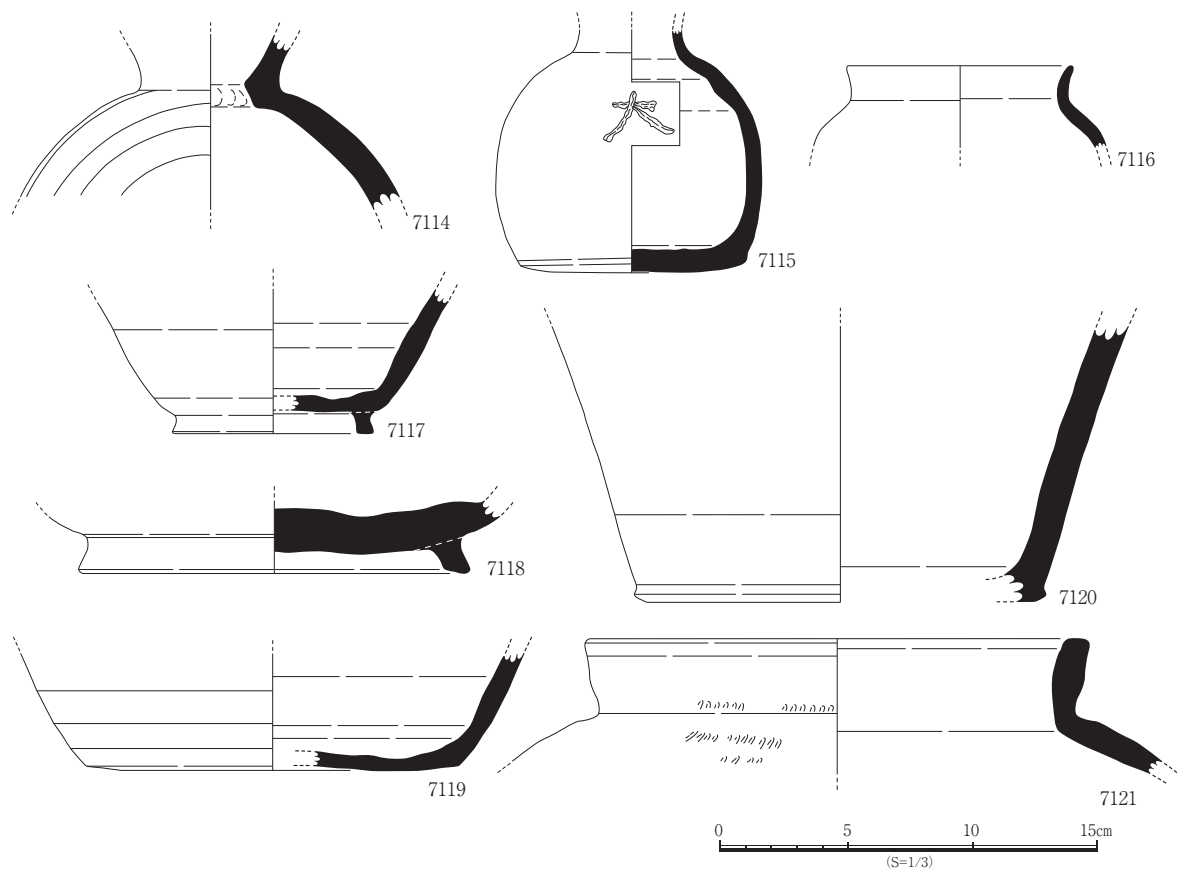


図2-17 第四・V層出土遺物実測図5

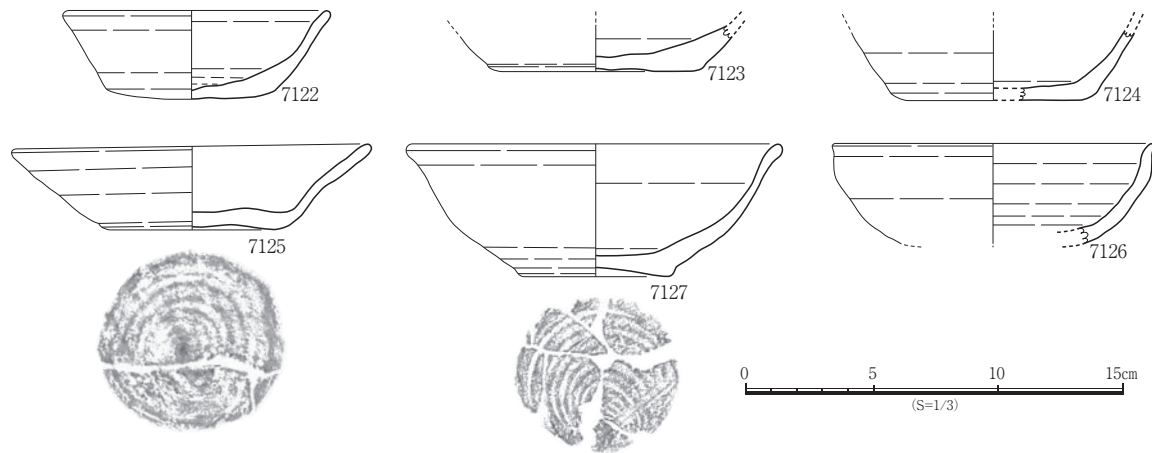


図2-18 第IV・V層出土遺物実測図6

に上がり、端部は外傾し、細く仕上げる。7127は、体部が内湾気味に上がり、口縁部が外反し、端部を丸く仕上げ、内面には回転ヘラ削りを施す。ただし、ナデ調整を加えており、単位は不明瞭である。胎土には、7122が極細粒砂から粗粒砂を比較的多く、7123が極細粒砂から粗粒砂を少し、7124が極細粒砂から中粒砂を若干、7125は細粒砂以下を若干、7126が細粒砂から中粒砂を少し、7127が極細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

7128～7147は碗で、7128・7129はベタ高台、7132～7147は輪高台で、口縁部しか残存していない7130・7131も輪高台が付くものとみられる。7128・7129は、成形がA技法で、底部の切り離しは回転糸切りとなる。胎土には、極細粒砂から粗粒砂を7128が少し、7129が比較的多く含む。7130・7131は底部以外が残存するもので、7130は、口縁部が内湾する体部から短く屈曲し、外面には粘土紐巻き上

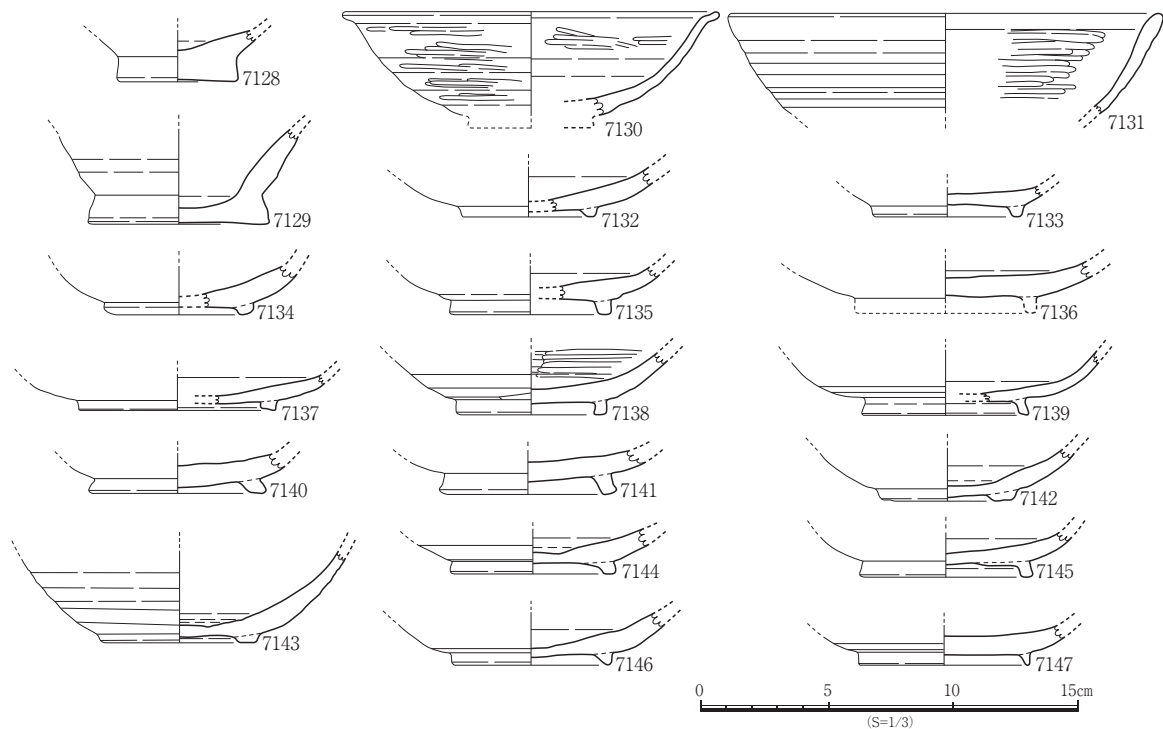


図2-19 第IV・V層出土遺物実測図7

げの際に稜になった部分を中心に、内面には部分的にヘラ磨きを施す。7131は白色系で、口縁部は体部から内湾気味に上がり、端部は丸い。外面には部分的に回転ヘラ削り、内面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。胎土には、7130が細粒砂から中粒砂を若干、7131が極細粒砂から極粗粒砂を少し含む。7132～7147は椀の底部で、成形は、7143がB技法である以外いずれもA技法となる。底部は7133のように平らなものもみられるが、概ね丸味があり、外底面は切り離しの痕跡をナデ調整でスリ消すものも多く、切り離しが判明するのは、7136・7138・7140(回転ヘラ切り)、7143・7145・7147(糸切りで回転か静止かは不明瞭)である。7133は内面に煤が付着し、7138は内面にヘラ磨き、外面に回転ヘラ削り、7139・7143・7144・7147は外面に回転ヘラ削りが施される。胎土は概ね精良で、7132・7136・7139・7143・7147が極細粒砂から中粒砂を少し、7133・7135・7145が細粒砂から粗粒砂を少し、7134が極細粒砂から細粒砂を比較的多く、7137が極細粒砂から極粗粒砂を若干、7138・7142が極細粒砂から粗粒砂を少し、7140・7141が細粒砂から極粗粒砂を少し、7144が細粒砂から中粒砂を少し、7146が極細粒砂から粗粒砂を若干含む。

7148～7151は皿で、成形はいずれもA技法で、底部の切り離しは回転ヘラ削りとなる。形態的には、口縁部が平らな底部から短く外上方を向くもの(7148・7149)、口縁部が底部から斜め上方に開くもの(7150)、杯の器高を縮小したもの(7151)がみられる。胎土は概ね精良で、7148・7150が極細粒砂から粗粒砂を少し、7149・7151が極細粒砂から中粒砂を少し含む。

7152～7157は小皿で、7152～7156は、成形がA技法となる。調整は基本的に杯と同じで、回転ナデ調整を施した上で内底面にナデ調整を施し、底部を回転ヘラ切りで切り離す。7152・7153は小皿としては底部が比較的深く、器高指数は22.9、7154・7155は底部が浅く、器高指数は17.5(7154)・17.3(7155)である。7156は口縁部が開くものである。胎土は概ね精良で、7152が細粒砂から粗粒砂を少し、7153が細粒砂から中粒砂を少し、7154が細粒砂から中粒砂を若干、7155が極細粒砂から中粒砂を若干、7156が極細粒砂から粗粒砂を少し含む。7157は、成形がB技法で、底部の切り離しが回転糸切りとなるものであるが、調整は前者と変わらない。内面から体部外面にかけて煤が付着し、胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

緑釉陶器(図2-21 7158～7160・7163～7167, 図版140・141 7161・7162・7168)

7158～7163は軟質系で、いずれも椀とみられる。基本的に、回転ナデ調整を器面に施してから全面に緑釉を施釉するが、7160は部分的に剝落し、7162は外面の一部に残り、7163は高台外面のみに

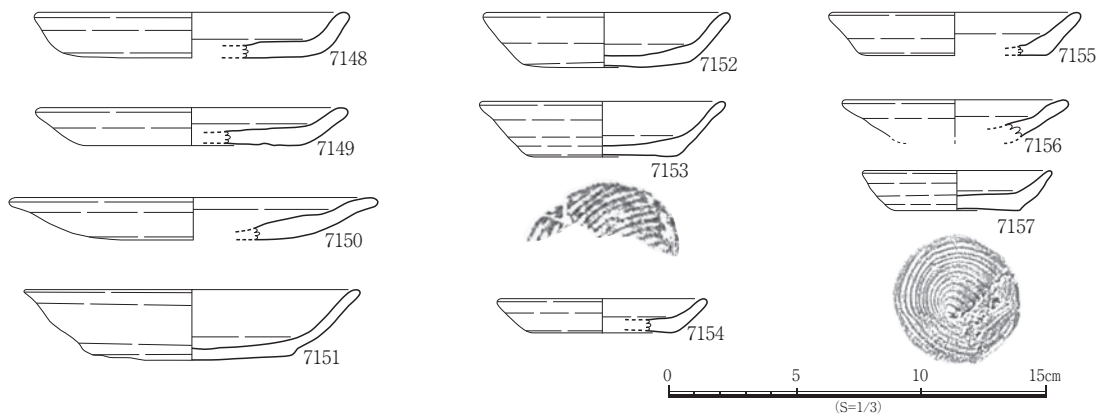


図2-20 第IV・V層出土遺物実測図8

残る。胎土は精良で、7158が極細粒砂から細粒砂を若干、7159が極細粒砂から中粒砂を少し、7160～7163が極細粒砂から中粒砂を若干含む。

7164～7168は硬質系で、7164～7166は椀とみられる。7164は外面に回転ヘラ削りを施す。胎土は精良で、7164が極細粒砂から中粒砂を若干、7165が極細粒砂から粗粒砂を若干、7166が白色細粒砂以下を少し含む。7167・7168は皿で、7168の外面にはヘラ磨きが施される。胎土は精良で、7167が極細粒砂から細粒砂を若干、7168が細粒砂から中粒砂を少し含む。

灰釉陶器(図版141 7169～7171)

いずれも細片で、7169は椀、7170・7171は皿とみられる。7170・7171の外面には回転ヘラ削りが施される。胎土は精良で、7169・7170が極細粒砂から中粒砂を若干、7171が極細粒砂から中粒砂を少し含む。

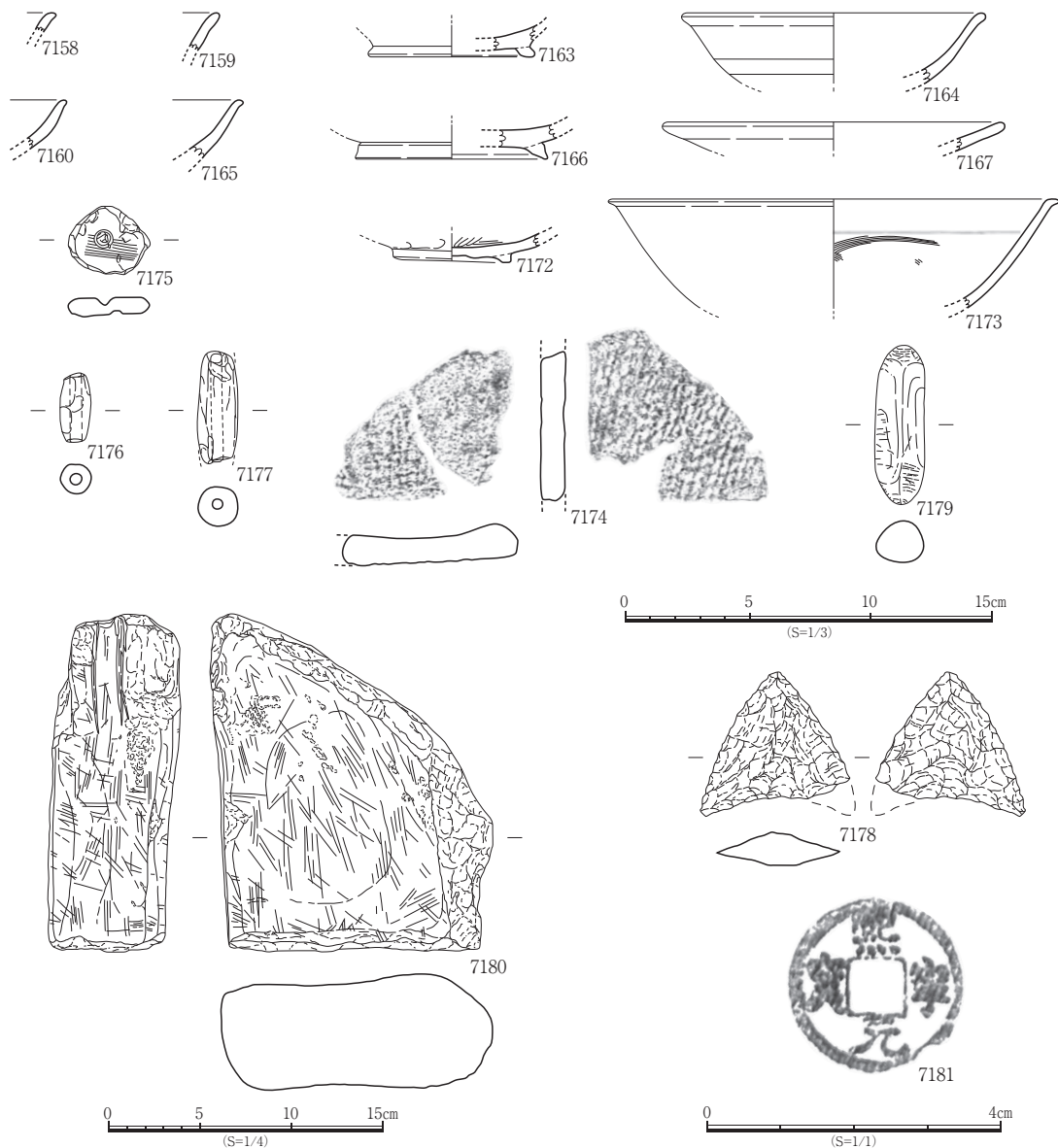


図2-21 第IV・V層出土遺物実測図9

瓦器(図2-21 7172)

椀で、内面には墨痕が残ることから硯に転用されたものとみられる。底部は丸味があり、外面には断面逆台形の高台が付く。内面はナデ調整の後にヘラ磨きを施す。胎土には極細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

青磁(図2-21 7173)

同安窯系の端反碗で、口縁端部は小さく屈曲する。見込にはカキ目が残る。胎土には黒色粒を比較的多く含む。

瓦(図2-21 7174)

平瓦で、凹面には布目、凸面には縄目のタタキ目残り、側面はヘラで面取りされる。胎土には細粒砂から細粒中礫を少し含む。

土製品(図2-21 7175~7177)

7175は紡錘車の未成品で、土器を転用する。円孔は両面から穿孔されるが、未貫通でずれる。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

7176・7177は土錘で、7176は紡錘形、7177は円筒形を呈する。胎土には、7176が細粒砂から粗粒砂

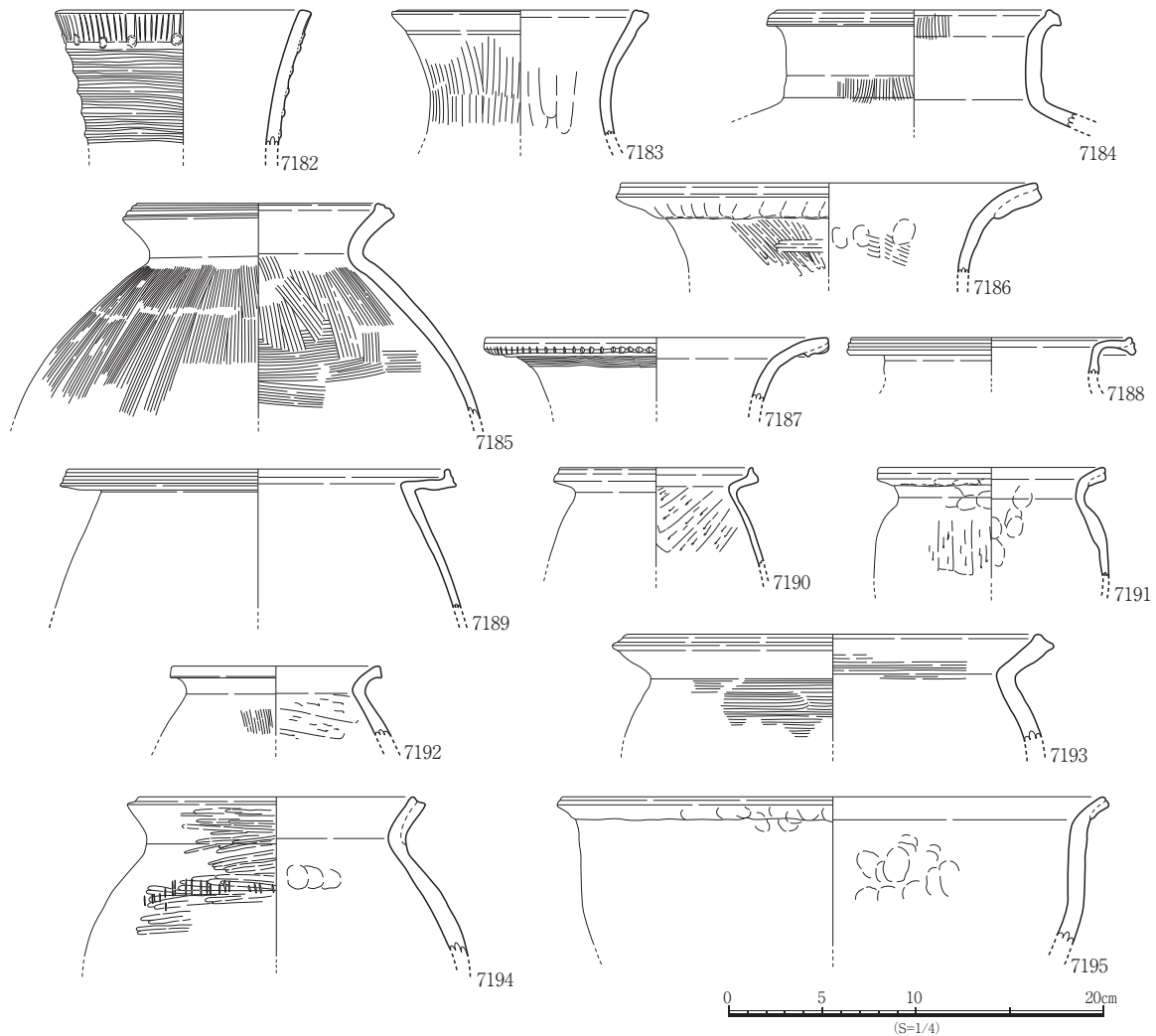


図2-22 第VI層出土遺物実測図1

を少し含む。7177が極細粒砂から中粒砂を若干含む。

石製品(図2-21 7178~7180)

7178はサヌカイト製の凹基の石鏃である。

7179は穿孔具で、表面は平滑で、両端が尖り、擦痕が残る。

7180は河原石を用いた砥石で、両面と側面の3ヵ所に使用痕と側面に2条の条線が残存する。

金属製品

古銭(図2-21 7181)

真書の熙寧元宝(1068~1077年)である。

第VI層出土遺物

弥生土器(図2-22・23 7182~7206)

7182~7185は壺である。7182は長頸壺で、口縁部が緩やかに外反し、外面にはヘラ状工具による刻目、円形浮文、5条の貼付微隆起突帯と突帯間にクシ描直線文を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。7183は、口頸部が外反するもので、端部には擬凹線文を施す。口縁部外面には小さな段部を作り出す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。7184は、口縁部が直立する頸部から外傾し、端部を肥厚して擬凹線文を施す。器面にはハケ目が部分的に残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。7185は、口頸部がくの字形を呈するもので、胴部は球形に近い。胴部内外面にはハケ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

7186~7195は甕である。7186・7187は、口頸部が外反し、貼付口縁となるもので、7186の口縁部外

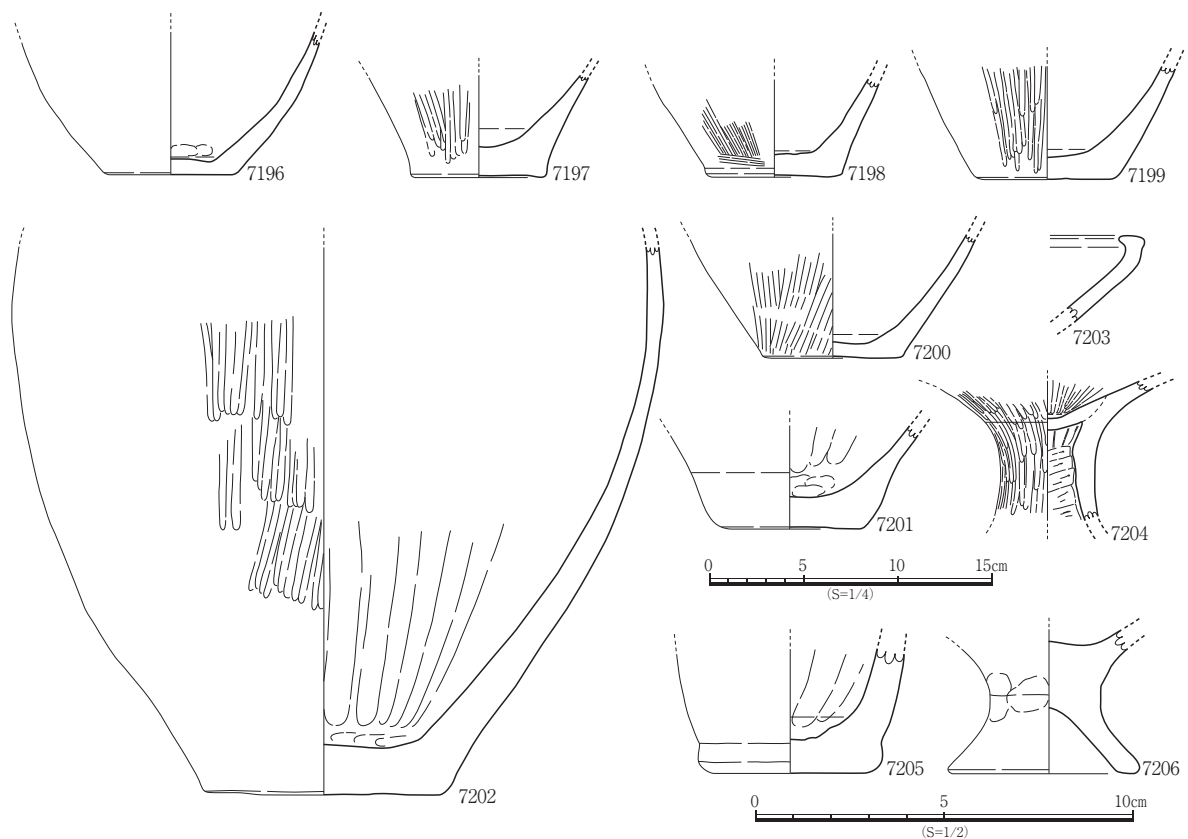


図2-23 第VI層出土遺物実測図2

面には指頭圧痕, 7187の口縁端部下端にはヘラ状工具による刻目, 作り出し微隆起突帯, クシ描直線文を施す。胎土にはいずれも細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

7188は, 口縁部が直立する頸部から真横に屈曲するもので, 端部を肥厚し, 凹線文を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

7189～7194は, 口頸部が概ねくの字形を呈するもので, 7189の口縁端部には凹線文, 外面には煤が付着する。7190の口縁端部には擬凹線文, 外面には煤が付着する。7191は, 頸部が短く直立し, 口縁部外面には指頭圧痕が残り, 胴部外面にはヘラ削りが施される。7192は, 口縁端部が浅い凹面となり, 胴部内面にはヘラ削りが施され, 外面はハケ調整の後にナデ調整を加え, その大半をナデ消す。7193は, 口縁端部が凹面となり, 頸部内面と胴部外面にハケ調整を施す。7194は, 口縁部に粘土帯を貼付した痕跡が断面と口縁端部に残るもので, 外面はヘラ磨きで接合痕跡を消す。肩部外面にはヘラ状工具によるタテ方向の刺突文が残る。胎土には, 7189・7194が細粒砂から粗粒砂を多く, 7190・7191が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く, 7192が極細粒砂から極粗粒砂を比較的多く, 7193が細粒砂から極細粒中礫を多く含む。

7195は, 口縁部が内湾気味に直立する胴部から短く外傾するもので, 口縁部を肥厚し, 外面には指頭圧痕が残る。また, 外面口縁部から胴部にかけて煤が付着する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

7196～7202は甕の底部とみられるもので, 上げ底風のものもみられるが, 概ね平底となる。調整はナデ調整を主体とし, 7197・7199・7202の外面にはヘラ磨き, 7198・7200の外面にはハケ調整が施され, 7199の外底面は未調整となる。また, 7196の内面には焦げ目, 7200の外面には煤の付着がみら

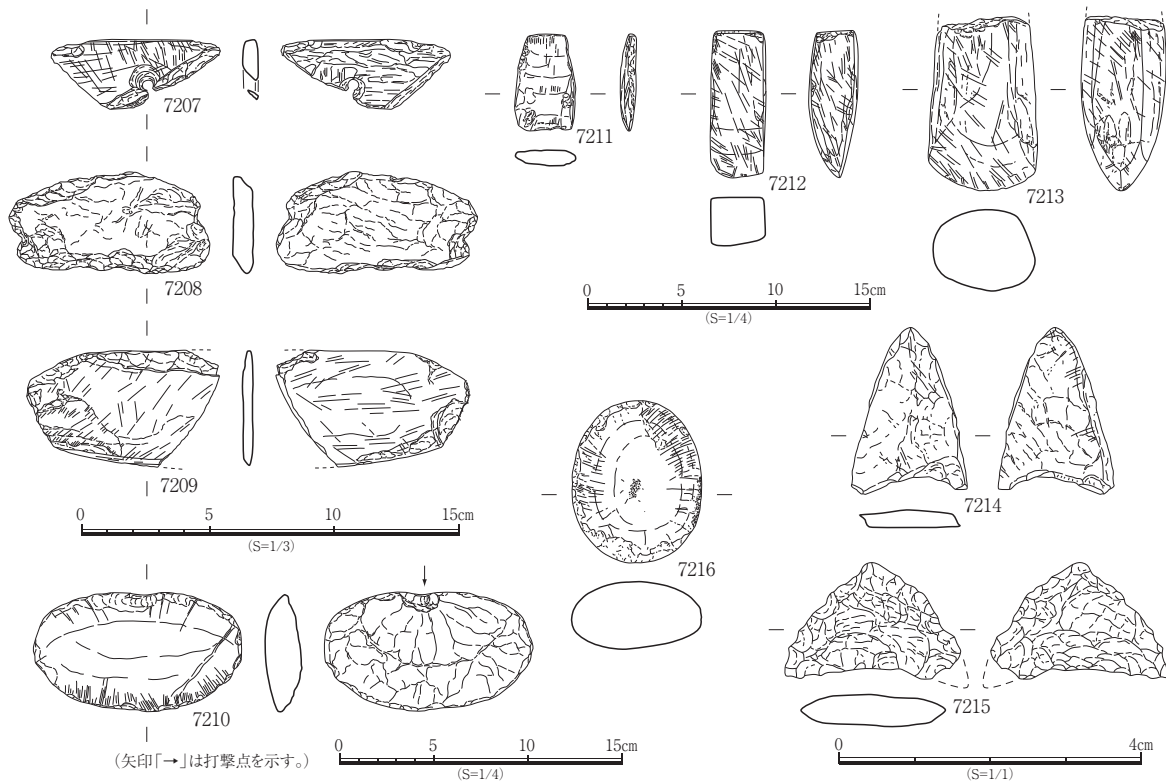


図2-24 第VI層出土遺物実測図3

れ、7197の外面は被熱で変色する。胎土には、7196・7198・7200が細粒砂から極粗粒砂を多く、7197が細粒砂から細粒中礫を比較的多く、7199が細粒砂から粗粒砂を比較的多く、7201・7202が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

7203・7204は高杯で、7203は、口縁部が斜め上方に上がる体部から直立するもので、端部を内側に拡張する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。7204は、脚柱基部が残存するもので、杯部と脚部は粘土円盤を充填する。脚部内面にはヘラ削り、他はヘラ磨きを施し、胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

7205・7206はミニチュア土器で、7205は甕、7206は台付鉢を模ったものとみられる。胎土には、7205が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く、7206が中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図2-24 7207～7216)

7207～7209は石庖丁で、7207は紐孔1個が残存し、7208は両端に抉りがみられる。7209は未成品ではないかとみられるもので、約半分が欠損する。残存部には研磨された刃部が残る。

7210は打製石鎌で、表面は縁辺を中心に擦痕が残る、裏面は剝離面となり、頂部に打撃点が1ヵ所みられる。

7211～7213は石斧で、7211は小型の扁平片刃石斧で、刃部長2.9cm、幅0.5cmを測る。7212は柱状片刃石斧で、背部に浅い抉りが2ヵ所残る。7213は両刃石斧で、断面は丸く、刃部長5.7cm、幅2.3cmを測る。

7214・7215は石鎌で、7214はサヌカイト製の磨製石鎌で、凹基となり、部分的に研磨痕が残る。7215はサヌカイト製の石鎌で、凹基となる。

7216は磨石で、表面は平滑で、縁辺を中心に擦痕、片面中央と側面に弱い敲打痕が残る。

(3) Ⅷ区

Ⅷ区はⅦ区とは県道南国インター線を挟んだ東隣の調査区で、東西約75m、南北約35mの範囲である。また、西野々遺跡の東端部に当たる。調査区は現在の農道と用水路の関係で4ヵ所に分れる。これらは、大きく西部と東部に分れ、さらに東部は南側と北側に分れ、北側は東西2ヵ所に細分される。西部の調査区をⅧ-1区、東部の調査区をⅧ-2区、北部は西からⅧ-3区、Ⅷ-4区とした。

発掘調査は、平成18年度にⅧ-2～4区の調査を行ってからⅧ-1区の西半分の調査を行い、平成19年度に残っていたⅧ-1区の東半分の調査を行った。

地形はⅧ-1区東側が南北方向にやや窪み(標高7.7m)、Ⅷ-1区西側とⅧ-2区西側からⅧ-3区が南北方向に微高地状(標高7.8m)となり、そこから調査区東側を南流する下田川に向って傾斜する。遺構密度はⅦ区に比べると低いもの

の、溝跡を中心に検出され、弥生時代の遺構はほぼ全域で、古代の遺構は西端部、中世以降の遺構は西側を中心にみられた。

調査面積は、Ⅷ-1区が669㎡(延べ1,067㎡)、Ⅷ-2区が365㎡、Ⅷ-3区が25㎡、Ⅷ-4区が199㎡(延べ246㎡)の合計1,258㎡(延

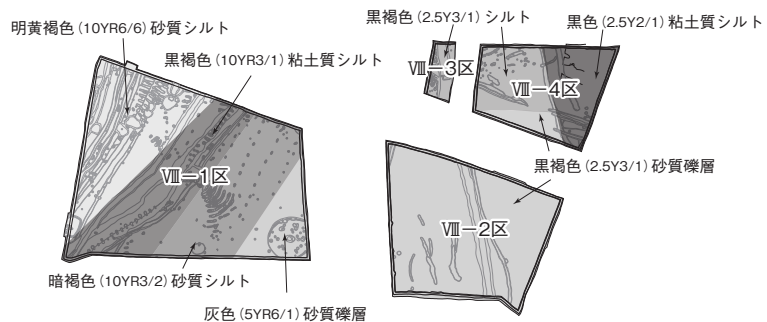


図2-25 Ⅷ区の調査区と地山の堆積層(S=1/1,000)

2. 調査区の概要 (3) VIII区

べ1,703 m²)であった。また、下層確認のためのトレンチ(56 m)を設定して、土層の堆積状況の調査を行った。

① 層序

確認された層序のうち第Ⅲ～Ⅵ層が遺物包含層で、第Ⅷ層以下が遺構検出面となっている。遺構検出面となっている土層はいずれも自然堆積層で、標高が最も高い部分に第Ⅹ層がみられ、標高が下がるにつれて、第Ⅹ層の上に第Ⅸ層、第Ⅷ層、第Ⅵ層の順に堆積が認められる。

比較的遺存状況の良かった南壁がVIII区の堆積状況を表している。

- 第Ⅰ層 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト層
- 第Ⅱ層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト層
- 第Ⅲ層 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト層
- 第Ⅳ層 黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト層
- 第Ⅴ層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト層
- 第Ⅵ層 暗褐色(10YR3/3)砂質シルト層
- 第Ⅶ層 黒褐色(10YR3/1)シルト層
- 第Ⅷ層 黒褐色(7.5YR3/2)粘土質シルト層
- 第Ⅸ層 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土質シルト層
- 第Ⅹ層 灰色(5Y6/1)砂質礫層

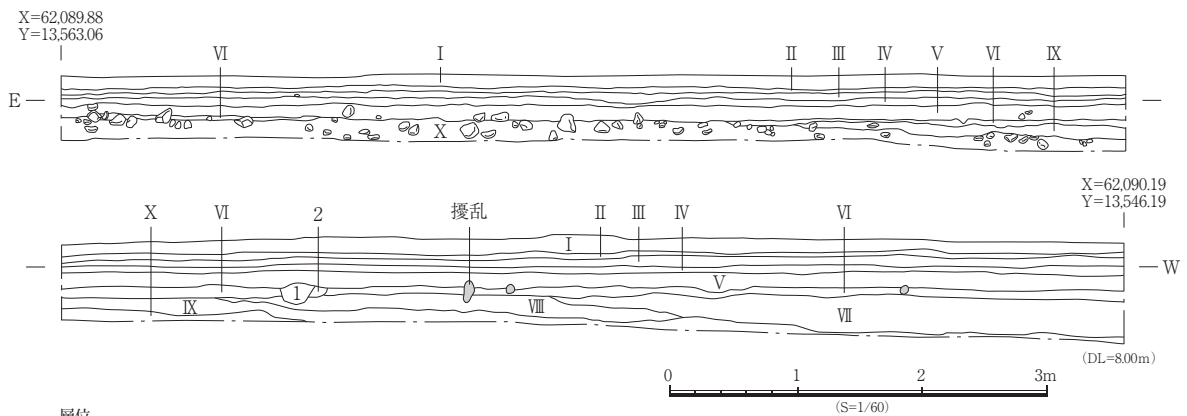
層位中、第Ⅲ～Ⅵ層が遺物包含層で、遺構検出面は第Ⅶ～Ⅹ層の上面であった。

第Ⅰ層は現在の耕作土層で、厚さ約20cmを測り、調査前は水田であった。

第Ⅱ層は第Ⅰ層に伴う床土とみられ、厚さ約5cmを測る。

第Ⅲ層と第Ⅳ層は中世の遺物包含層で、第Ⅳ層が第Ⅲ層に比べやや色調が濃くなっており、厚さ5～10cmを測る。土質が同じで、色調が似ていることから調査では明確に区分して遺物を取り上げおらず、ここでは第Ⅲ・Ⅳ層出土遺物として取り扱う。

第Ⅴ層は古代の遺物包含層で、比較的遺存状況は良く、厚さ20cmを測る部分も認められた。



- | | | |
|---------------------------|----------------------------|--|
| 第Ⅰ層 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト層 | 第Ⅵ層 暗褐色(10YR3/3)砂質シルト層 | 遺構埋土
1. 地山の土粒を少し含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト(SD-8022)
2. 黄灰色(2.5Y4/1)シルト(遺構番号なし) |
| 第Ⅱ層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト層 | 第Ⅶ層 黒褐色(10YR3/1)シルト層 | |
| 第Ⅲ層 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト層 | 第Ⅷ層 黒褐色(7.5YR3/2)粘土質シルト層 | |
| 第Ⅳ層 黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト層 | 第Ⅸ層 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土質シルト層 | |
| 第Ⅴ層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト層 | 第Ⅹ層 灰色(5Y6/1)砂質礫層 | |

図2-26 VIII-1区南壁セクション

第VI層は弥生時代の遺物包含層であり、VIII-1区の西部を中心に認められた。

第VII層以下は自然堆積層で前述のとおり洪水堆積による。

また、VIII-4区では基盤層である第X層が丁度弥生時代の溝跡(SD-8008)を境に下田川に向かって大きく落ち込んでいた。VIII-4区に設けた下層確認トレンチの東端では、弥生時代の遺物包含層の下端から基盤層である第X層上端までの約1.6mに粘土質シルトからシルト質砂まで18層がレンズ状に累重していた。

② 堆積層出土遺物

第I層出土遺物

土師器(図2-27 8001)

羽釜で、内湾する口縁部には断面三角形の鏝が付く。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

白磁(図2-27 8002)

皿で、底部は削り出し高台となり、高台から見込にかけて白磁釉を施釉し、畳付は釉ハギとなる。器面は摩滅が著しい。胎土には黒色粒を比較的多く含む。

青花(図2-27 8003)

碗で、底部は削り出し高台となり、見込に2条の界線と花文、外面に草花文を施す。高台外側から見込に施釉し、畳付は釉ハギとなる。胎土には黒色粒を僅かに含む。

土製品(図2-27 8004)

土錘で、紐溝を設ける。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図2-27 8005)

扁平な磨石で、表面は平滑となり、縁辺を中心に擦痕、周縁に筋状の摩滅痕と擦痕が残る。

古銭(図2-27 8006)

寛永通宝で、新寛永とみられる。

第III・IV層出土遺物

瓦質土器(図2-28 8007)

甕で、口縁部は丸い胴部から短く屈曲し、端部は丸い。胴部外面には煤が若干付着する。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

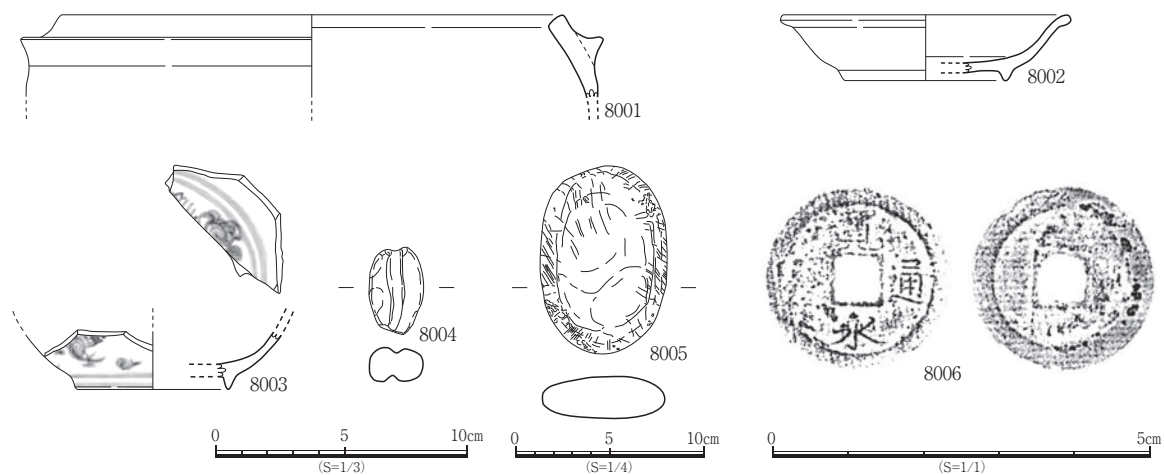


図2-27 第I層出土遺物実測図

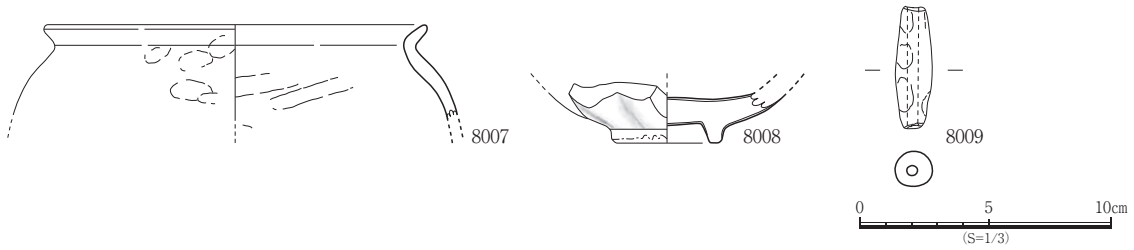


図2-28 第Ⅲ・Ⅳ層出土遺物実測図

青磁(図2-28 8008)

碗で、底部は削り出し高台となり、外面には鎬蓮弁文が施される。青磁釉は全面に施釉し、畳付は釉ハギとなる。胎土には黒色粒を比較的多く含む。

土製品(図2-28 8009)

紡錘形の土錘で、紐孔は径0.4cmを測る。表面はナデ調整され、部分的に指頭圧痕が残る。

第Ⅴ層出土遺物

弥生土器(図2-29 8010)

甕で、口縁部は外反し、貼付口縁となる。外面には指頭圧痕とハケ目が残る。胎土には細粒砂から極細粒中礫を比較的多く含む。

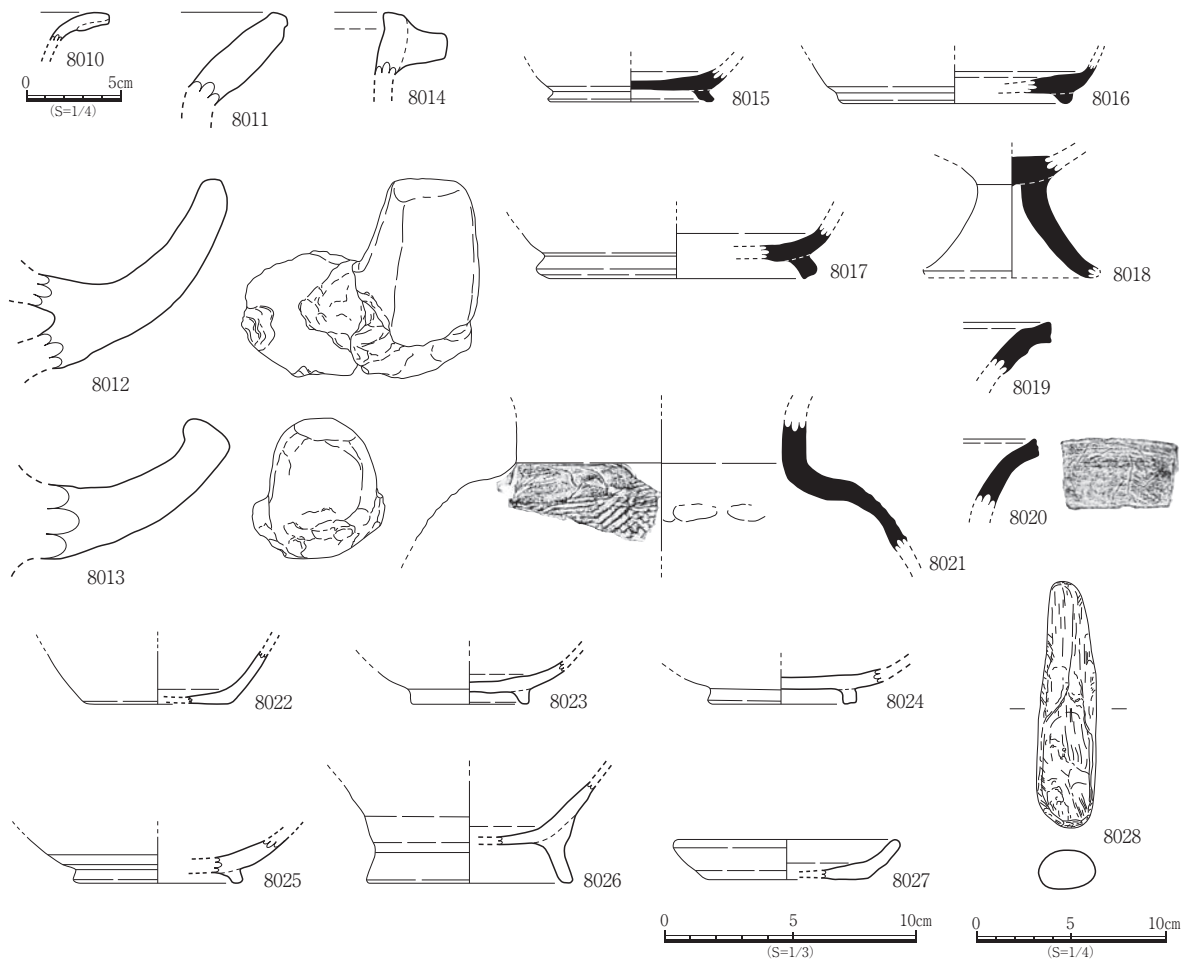


図2-29 第Ⅴ層出土遺物実測図

土師器(図2-29 8011~8014)

8011は甕で、口縁部は外傾し、端部には1条の凹線が巡る。胎土には粗粒砂から極粗粒砂を多く含む。8012・8013は甕の把手で、8012が7.5cm, 8013が7.2cmと長く、いずれも上方に反る。器面はナデ調整を施す。胎土には中粒砂から極粗粒砂を8012が少し, 8013が多く含む。

8014は羽釜で、ほぼ直立する口縁部外面に断面台形の鐳が付く。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

須恵器(図2-29 8015~8021)

8015~8017は杯身で、輪高台が付く。8015は小型で、高台高は0.5cmを測り、ハの字形に開く。8016の高台は断面逆三角形で、高さ0.5cmを測る。8017の高台は高さ1.0cmと高く、ハの字形に開き、自然釉が付着する。胎土には、8015・8017が極細粒砂から中粒砂を若干, 8016が極細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

8018は小型の高杯で、脚柱部は大きく開く。胎土には極細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

8019~8021は甕で、8019は、口縁部が外傾し、端部に1条の凹線、外面に小さな凸帯が巡る。8020は、口縁部が外反し、外面にタタキを施す。8021は、頸部が肩の張る胴部から直立し、胴部外面に格子目のタタキを施す。胎土には、8019が極細粒砂から中粒砂を少し, 8020が極細粒砂から極粗粒砂を少し, 8021が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

土師質土器(図2-29 8022~8027)

8022は杯で、成形はA技法となり、胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

8023~8026は椀で、輪高台が付き、いずれも底部から内湾気味に上がる。8025は、外面に回転ヘラ削りを施し、内面に煤が付着する。8026は、底部外面端部にハの字形に開く高さ1.6cmの高台が付く。胎土には、8023が極細粒砂から中粒砂を若干, 8024・8025が極細粒砂から粗粒砂を少し, 8026が極細粒砂から中粒砂を少し含む。

8027は小皿で、成形はA技法となり、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

石製品(図2-29 8028)

棒状の叩石で、両端は摩滅し、部分的に研磨痕、擦痕が残る。

第VI層出土遺物

弥生土器(図2-30 8029~8032)

8029は壺で、口頸部は外反し、端部を上下に拡張する。内面にはハケ目が僅かに残る。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

8030・8031は甕で、いずれも口縁部は外反し、貼付口縁となる。8030は外面に微隆起突帯と

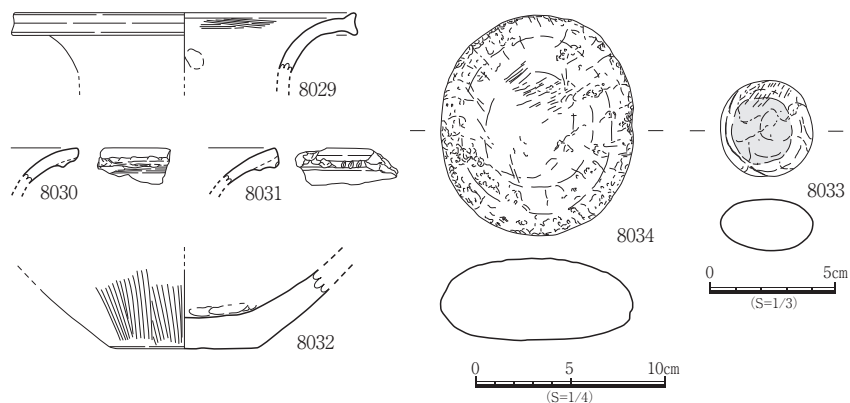


図2-30 第VI層出土遺物実測図

2. 調査区の概要 (3) VIII区

クシ描直線文, 8031は口縁端部下端にヘラ状工具による刻目, その下に微隆起突帯を施す。胎土には, 8030が中粒砂から粗粒砂を多く, 8031が中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

8032は壺の底部で, 外面にはハケ目が残り, 胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図2-30 8033・8034)

8033は投弾で, 擦痕が残り, 光沢がみられる部分がある。

8034は磨石で, 表面は風化し, 剥落がみられ, 部分的に擦痕と弱い敲打痕が残る。

第三章 遺構と遺物

1. VI区

調査区は現在の用水路の関係で、西側と東側に大きく分れており、西側の調査区をVI-1区、東側の調査区をVI-2区と呼称して記述する。

確認された遺構の時代は古墳時代を除く、弥生時代～近代であり、弥生時代、古代、中世が中心となる。弥生時代では竪穴建物跡42軒を始めとして集落を構成する遺構を検出した。この集落はI区東側(『西野々遺跡I』)からVIII区までの東西約800mの範囲に展開しており、その中心がこのVI区からVIII区で、確認された竪穴建物跡は63軒(全体で68軒)に及ぶ。

古代では官衙関連とみられる掘立柱建物跡を中心に奈良時代から平安時代の遺構を検出した。この官衙関連の建物はIV区(『西野々遺跡II』)からVIII区に分布しており、方形の掘方を持つ建物数は100棟余りを数え、西野々遺跡最大規模の建物跡が検出され東隣のVII区からVI区に中枢があったものと考えられる。また、VI区では道路遺構が確認されており、これを境として東側に建物跡は展開する。

中世では溝に囲まれた屋敷跡の西半分が確認されている。東半分はVII区にある。屋敷跡自体は何カ所かで確認されているが、明確に溝に囲まれた屋敷跡はなく、出土遺物でも差異が看取される。

(1) 弥生時代

竪穴建物跡を始めとした遺構は北西端部を中心として同心円状に分布する。特に、東側への広がりが見られ、直径100m程度の範囲に集落が構成されていた可能性も考慮され、北と南の調査区外にも少なからず竪穴建物跡が存在することが想定される。

確認された遺構は、竪穴建物跡42軒、竪穴状遺構15軒、掘立柱建物跡26棟、塀・柵列跡7列、土坑58基、溝跡2条、ピット1,474個であった。この内、掘立柱建物跡と舟形土坑がセットになったものも確認されている。

① 竪穴建物跡・竪穴状遺構

確認した42軒の竪穴建物跡の平面形には円形、多角形、方形がみられ、円形から多角形そして方形への変遷が窺える。また、竪穴建物跡に比べ小規模で、かつ平面形が矩形(方形ないし隅丸方形)を呈する遺構が一定数確認され、柱穴を伴うものもみられ、上部構造が想定されることから竪穴状遺構として取り上げた。確認された竪穴状遺構は15軒で、本項で報告する遺構数は合計57軒である。

ST-6001 (図3-1)

VI-1区の南側で検出した円形の竪穴建物跡で、ST-6002・6044とSK-6011に掘り込まれていた。径は4.00～4.22mで、遺存する壁高は14～19cmと浅く、床面の標高は7.481～7.501mを測る。ST-6002に掘り込まれているため床面にはST-6002の付属遺構もみられるが、本建物跡の付属遺構としては、中央ピット(P-1)と壁溝および18個のピットを確認した。この内、支柱穴と考えられるピットは中央ピットを囲むP-2～5とみられ、4本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-2は径28～30cmのほぼ円形で、深さ29cm、P-3は径22cmの円形で、深さ15cm、P-4は径42cmの円形で、深さ16cm、P-5は径22cmの円形で、深さ45cmを測る。柱間寸法は1.45～2.10mである。また、P-4の西隣のP-6も径22cmの円形で、深さ31cmを測ることからP-4の掘り替えの可能性も考えられる。中央ピット(P-1)は一辺0.70～0.72mを測る不整形で、深さ30cmを測り、サヌカイト片130点(7.6g)と共に石鏃(6086)

が出土しており、作業ピットとして使用されたことが考えられる。壁溝は西壁沿いと東壁沿いで、幅10～15cm、深さ2cm、延長4.50mを測る。埋土は大きく上下2層に分層され、上層には地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルト、下層が地山のブロックを含む黒色(10YR2/1)砂質シルトとなっており、2時期あったことも考えられる。出土遺物には弥生土器159点、石製品11点、サヌカイト片810点(100.5g)がみられ、石製品9点(6086～6094)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-2・3 6086～6094)

6086～6088はサヌカイト製の石鏃で、6086は凸基、6087は平基となる。6088は大型の石鏃であるが基部が欠損する。

6089はサヌカイト製の穿孔具とみられるもので、先端部が欠損する。

6090～6093は磨石で、いずれも扁平で両面中央部を中心に縁辺にかけて擦痕が残る。6091には弱い敲打痕が片面中央部と側面に残ることから叩石としても使用された可能性があり、6093には側面に比較的強い擦痕がみられることから砥石としても使用されたことも考えられる。

6094は粗粒砂岩の河原石を使用した砥石で、両面2カ所に使用痕が残存する。

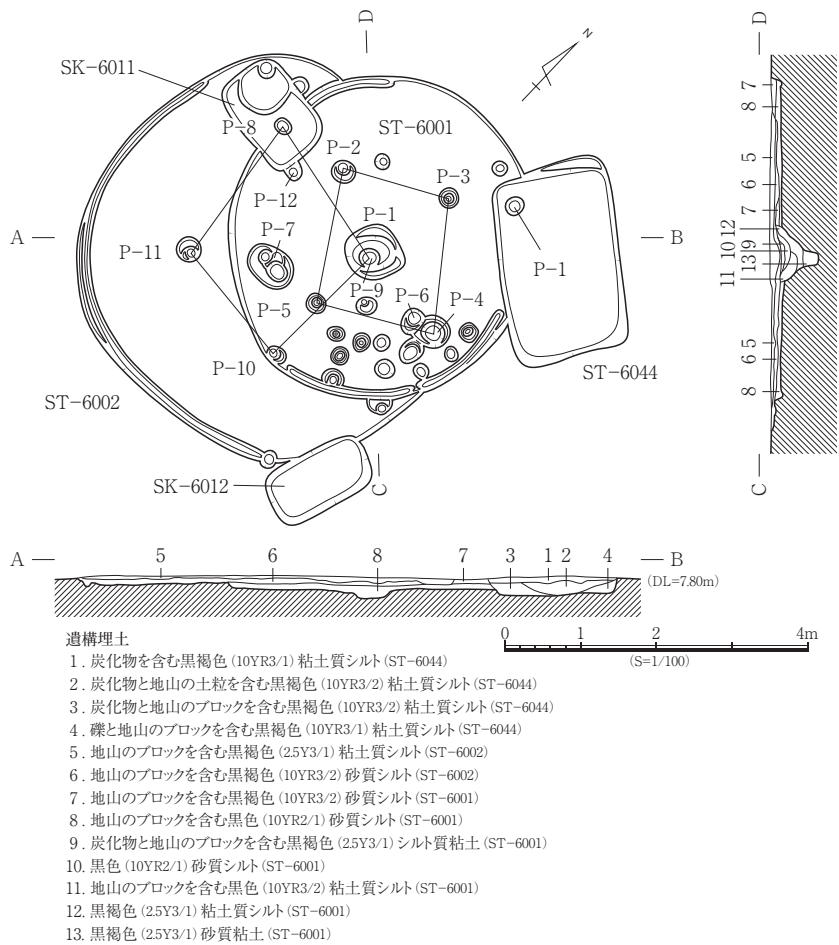


図3-1 ST-6001・6002・6044

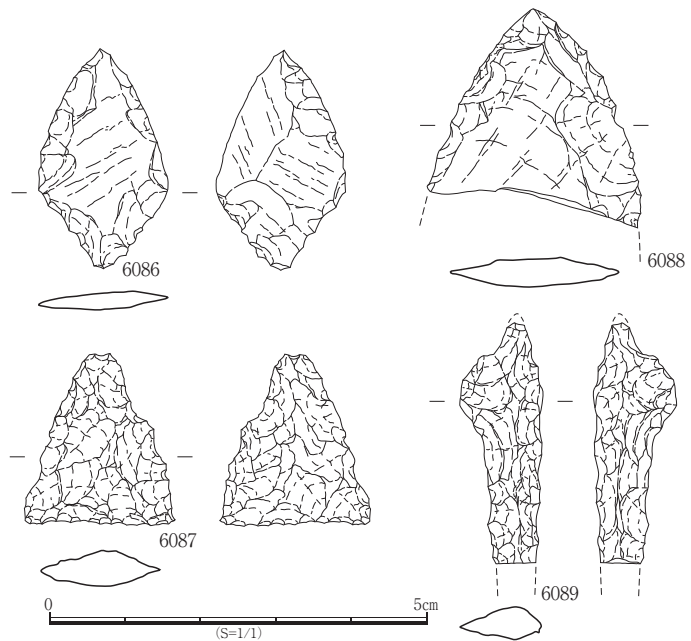


図3-2 ST-6001出土遺物実測図1

ST-6002 (図3-1)

VI-1区の南側，ST-6001を切った形で検出した円形の竪穴建物跡で，ST-6044とSK-6011・6012に掘り込まれていた。平面形は径4.72～5.12mで，遺存する壁高は8～11cmと浅く，床面の標高は7.570～7.595mを測る。付属遺構として，中央ピット(P-7)と壁溝および7個のピットを確認した。この内，支柱穴と考えられるピットは中央ピットを囲むP-8～11とみられ，4本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-8は径19～24cmの楕円形で，深さ32cm，P-9は径

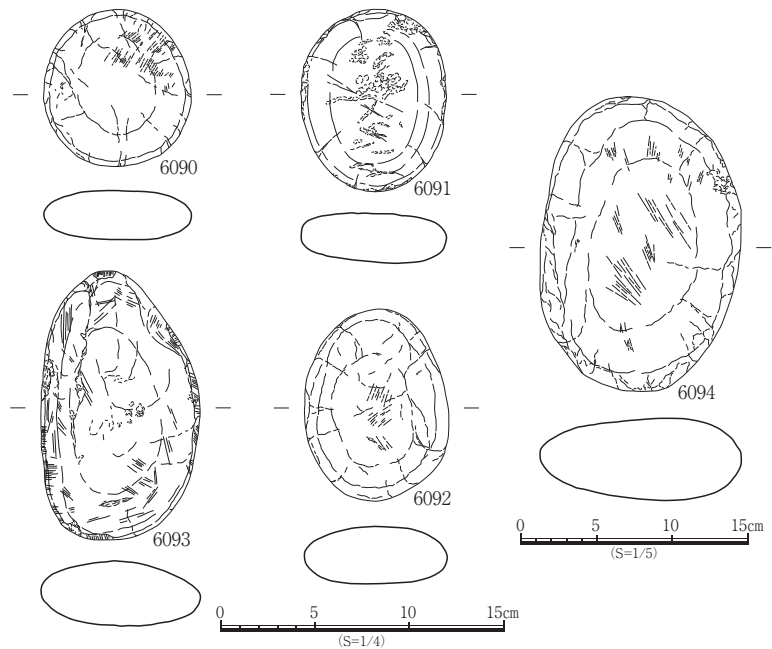


図3-3 ST-6001出土遺物実測図2

25～28cmの楕円形で，深さ49cm，P-10は径20～24cmの楕円形で，深さ11cm，P-11は径30cmの円形で，深さ69cmを測る。柱間寸法は1.70～2.10mである。ただし，P-8の位置がややずれていることから深さがやや浅いもののP-12(径約20cm，深さ14cm)が支柱穴であったことも考えられる。中央ピット(P-7)は長径0.65m，短径0.50mの楕円形で，深さ12cmを測り，弥生土器(6098)とサヌカイト片8点(0.3g)が出土している。壁溝は南壁沿いに設けられており，幅8～15cm，深さ3cm，延長6.72mを測る。埋土は大きく上下2層に分層され，上層には地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト，下層が地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトとなっており，ST-6001と同じく2時期あったことも考えられる。出土遺物には弥生土器211点，土製品1点，石製品8点，サヌカイト片18点(33.5g)，軽石1点がみられ，弥生土器5点(6095～6099)，土製品1点(6100)，石製品7点(6101～6107)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-4 6095～6099)

6095は壺で，頸部は丸味のある胴部からほぼ直立し，口縁部は外傾する。口縁部は外傾接合で肥厚され，端部下端にヘラ状工具による刻目を施す。頸部内面にはしぼり目，外面にはハケ目，胴部内面には指頭圧痕が残存する。頸部外面基部に1条のヘラ描沈線を巡らし，その下にハケ状工具による刺突文を施す。内面には接合痕が良く残る。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

6096は甕の底部とみられるもので，極粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6097～6099はミニチュア土器とみられるものである。6097は壺のミニチュア土器で，頸部は丸味のある胴部から外反する。器面には指頭圧痕が各所に残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。6098は上げ底風の底部で，胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。6099も上げ底風の底部を有するもので，胎土には中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

土製品(図3-4 6100)

土器の破片を転用した紡錘車で，両面から径0.5cmの円孔を穿つ。上面にはヘラ磨きの痕が残る。

1. VI区 (1) 弥生時代

胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

石製品(図3-4 6101~6107)

6101は石庖丁の未成品とみられるもので、石材の関係で剝離が目立ち、刃部は欠損する。両面に研磨痕が残存する。

6102は両刃の柱状石斧で、刃部長3.5cm、幅2.4cmを測る。全面に研磨痕が残存する。

6103はサヌカイト製の石鏃で、凸基となる。

6104・6105は投弾とみられるもので、断面は卵形を呈する。

6106・6107は磨石で、石材が砂岩ではなく、6106は緑色岩、6107がチャートと珍しい。いずれも表面は平滑であるが、6106は石材の関係で幾分風化する。

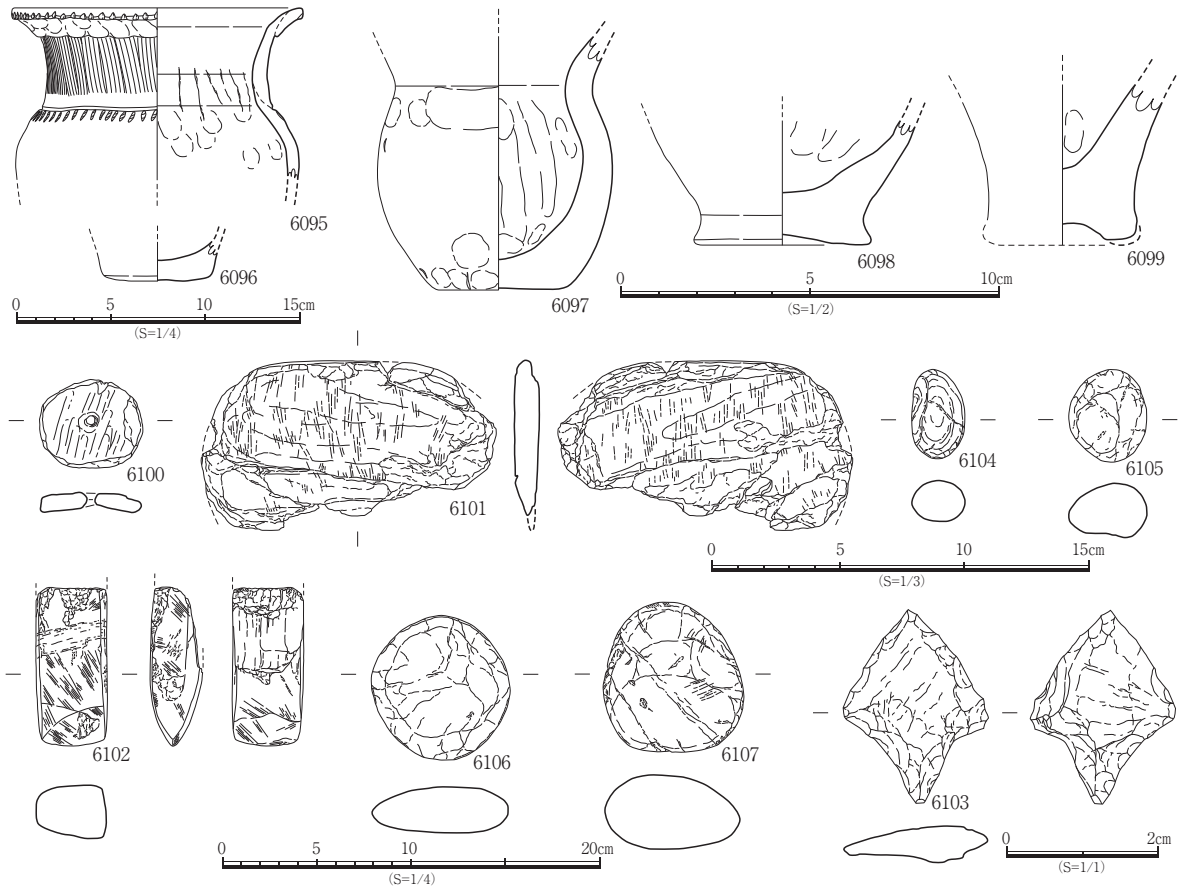


図3-4 ST-6002出土遺物実測図

ST-6003(図3-5)

VI-1区の南端で検出した円形の竪穴建物跡で、SA-6002とSK-6013を掘り込んでいた。径は約4.80mで、遺存する壁高は24~30cmと比較的遺存状態が良く、床面の標高は7.317~7.353mを測る。付属遺構として、中央ピット(P-1)と壁溝および9個のピットを確認した。この内、主柱穴と考えられるピットは中央ピットを囲むP-2~5とみられ、4本柱で棟を支えていたものと考えられるが、P-2とP-5の間がP-3とP-4の間より約0.70m広がっていることからするとP-6も主柱穴であった可能性もある。その場合は5本柱で棟を支えていたことになる。P-2は径30cmの円形で、深さ24cm、P-3は径26cmの円形で、深さ47cm、P-4は径22cmの円形で、深さ33cm、P-5は径20~25cmの楕円形で、

深さ24cmを測る。柱間寸法は1.55～2.25mである。5本柱であった場合の柱間寸法はP-2とP-6の間が1.20m, P-6とP-5の間が1.18mとなる。中央ピット(P-1)は長径0.78m, 短径0.40mの楕円形で, 深さ25cmを測り, 弥生土器(6108・6113)が出土する。壁溝は部分的に途切れるが, 大半の壁沿いに設けられており, 幅8～20cm, 深さ2～4cm, 延長10.11mを測る。埋土は, 部分的に地山のブロックを含む部分もみられるが, 基本的に黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト単一層である。出土遺物には弥生土器1,223点, 石製品12点, サヌカイト片6点(2.0g), 緑色片岩片1点がみられ, 弥生土器8点(6108～6115), 石製品10点(6116～6125)が図示できた。

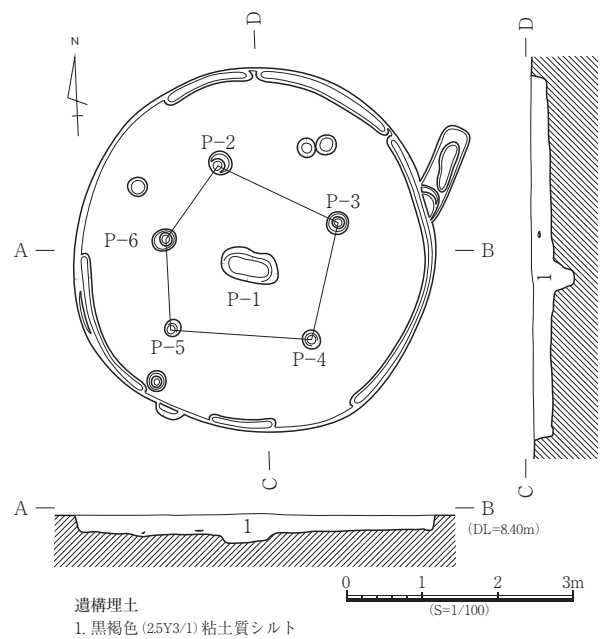


図3-5 ST-6003

出土遺物

弥生土器(図3-6 6108～6115)

6108は壺で, 胴部は球形を呈し, 口頸部は大きく外反する。口縁部は粘土帯を外側に貼付して肥厚し, 外面に多くの文様を施文する。まず, 口縁部には端部下端にヘラ状工具による刻目, その下に上下をヨコナデ調整することで作り出した微隆起突帯, 上下にクシ描直線文(上は4本単位1段, 下は4本単位2段)を施すことにより作り出した微隆起突帯, 肩部には4本単位のクシ描直線文を8段施すことにより7条の微隆起突帯を作り出し, 上端に円形浮文, 下端に楕円形浮文を貼付する。胎土には細粒

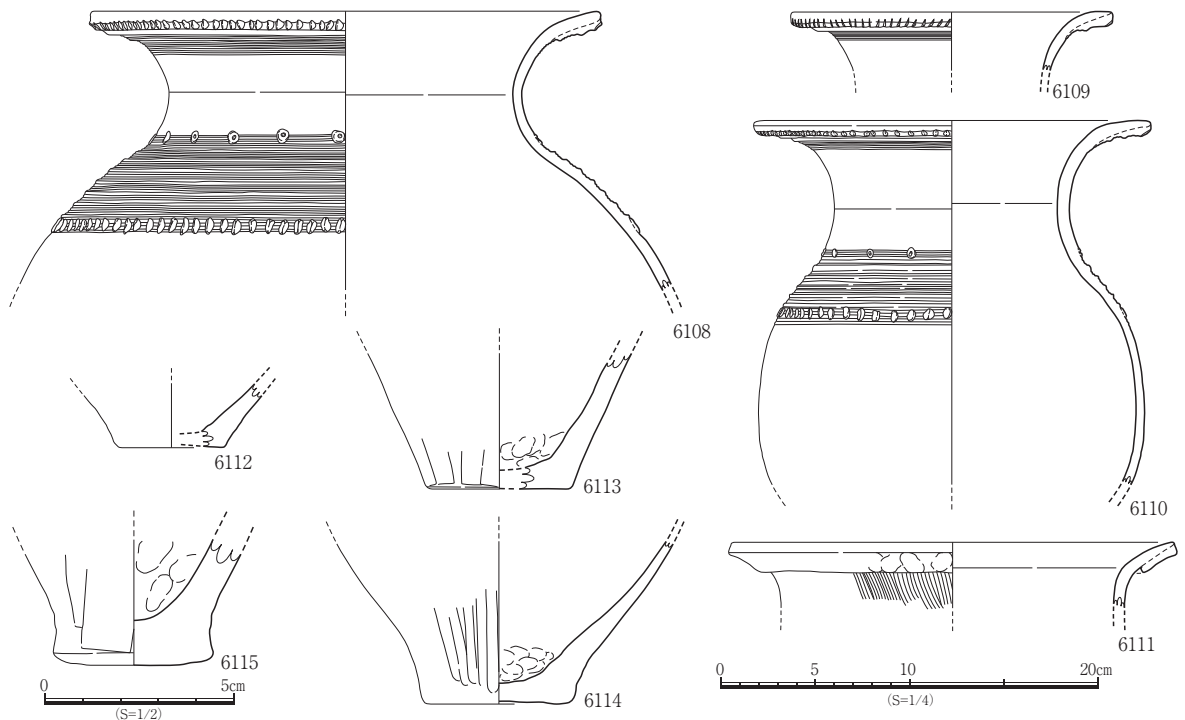


図3-6 ST-6003出土遺物実測図1

砂から極粗粒砂を多く含む。

6109～6111は甕で、6109と6110は同形態となり、6108の甕タイプである。胴部は中位に最大径があり、断面は楕円形となり、口頸部は大きく外反する。口縁部は粘土帯を貼付して肥厚し、壺同様の文様を施文する。6109は、口縁端部下端にヘラ状工具による刻目、その下に上下をヨコナデ調整して微隆起突帯を作り出し、下に4本単位のクシ描直線文を施す。胎土には中粒砂から粗粒砂を多く含む。6110は中胴部以上が復元でき、口縁部には端部下端にヘラ状工具による刻目、その下に上下にクシ描直線文を施すことにより強調された微隆起突帯2条、肩部にはクシ描直線文を6段施すことにより5条の微隆起突帯を作り出し、上端に円形浮文、下端に楕円形浮文を貼付する。なお、内面はナデ調整を施している。胎土には粗粒砂から極粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。6111は直立する頸部から外傾する口縁部を有するもので、貼付口縁となり外面には指頭圧痕が残る。粘土帯の貼付は、頸部にハケ調整の後に行われている。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

6112～6114は底部が残存するもので、いずれも甕とみられ、外面には被熱痕跡が認められる。6113の外面にはヘラナデ調整、6114の外面にはヘラ磨きが施される。胎土には中粒砂から極粗粒砂を中心に6112が多く、6113・6114が比較的多く含む。

6115はミニチュア土器とみられるもので、外面にはヘラナデ調整が施される。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

石製品(図3-7 6116～6125)

6116は打製石斧で、基部側面2カ所には柄に装着する際と考えられる抉りが残存する。

6117はサヌカイト製の凸基の石鏃で、茎の先端が欠損する。

6118～6122は投弾とみられるもので、いずれも砂岩を使用しており、重量は22.8～38.6gを測る。

6123～6125は磨石で、断面はいずれも扁平となり、平らな面の縁辺を中心に擦痕が残存する。6124には片面中央と側面3カ所に弱い敲打痕が残り、叩石としても使用されたものと思われる。

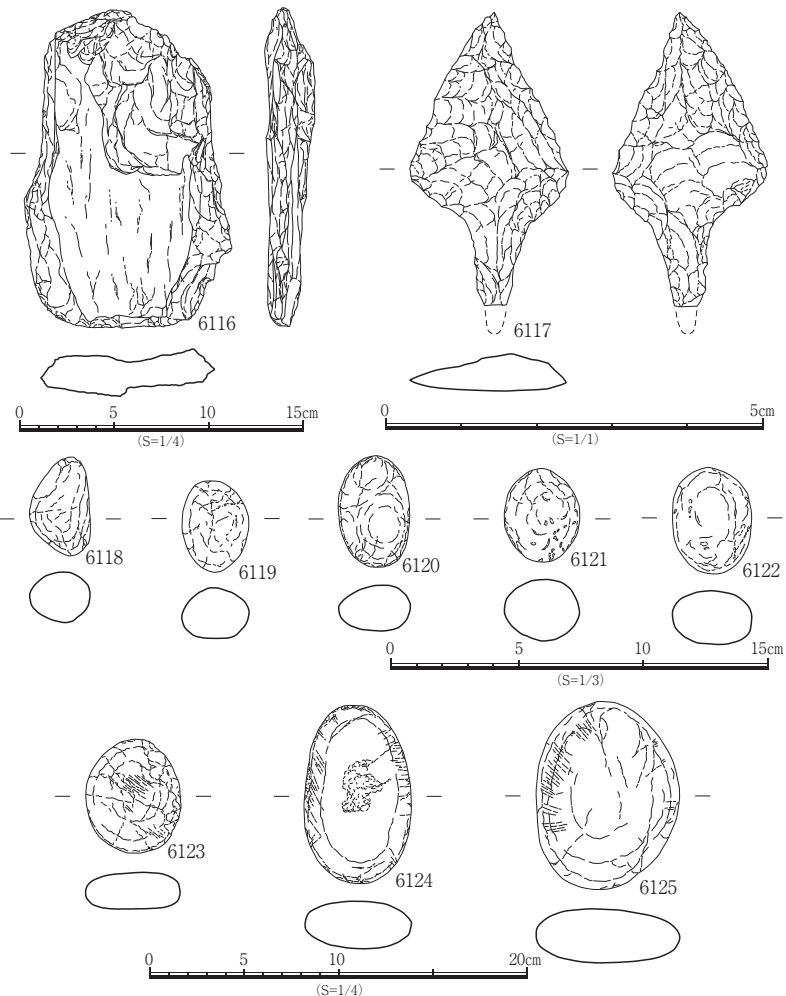


図3-7 ST-6003出土遺物実測図2

ST-6004

VI-1区の南西壁際で検出した径約6.00mとみられる円形の竪穴建物跡で、大半は西の調査区外に続く。遺存する壁高は20～23cmで、床面の標高は7.378～7.424mを測る。付属遺構として12個のピットを確認したが、深さが6～22cmと浅く、かつ壁際に検出されていることから主柱穴と判断されるものはなかった。壁溝は検出した東壁沿いすべてに設けられており、幅15～20cm、深さ2～4cm、延長4.98mを測る。埋土は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト単一層である。出土遺物には弥生土器47点、石製品1点がみられ、弥生土器2点(6126・6127)が図示できた。

出土遺物

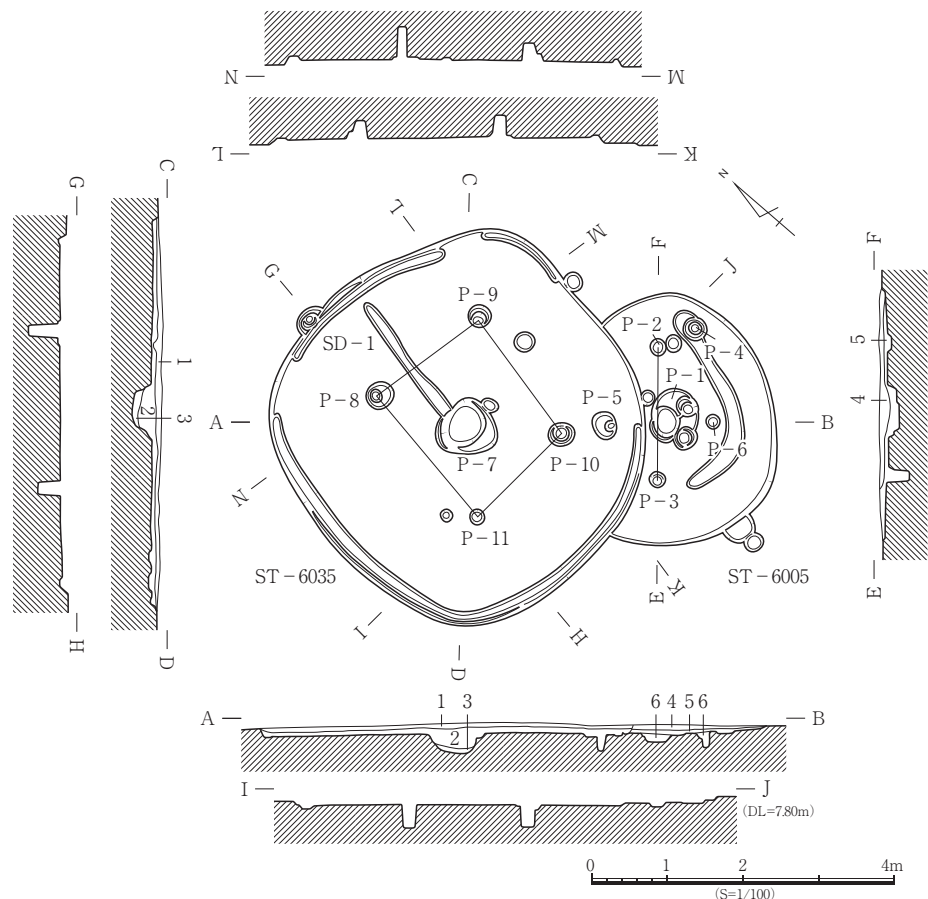
弥生土器(図3-9 6126・6127)

6126は壺で、口縁部が大きく開き、外傾接合により口縁端部を下方に拡張し、端部が比較的広い面となる。6127は甕で、口頸部は外反し、外傾接合により口縁部を肥厚し、端部下端にヘラ状工具により刻目を入れ、その下に微隆起突帯を作り出し、下半にクシ描直線文を施す。いずれも胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

ST-6005 (図3-8)

VI-1区の中央部で検出した径約3.30mとみられる円形の小型竪穴建物跡で、ST-6035に切られる。

遺存する壁高は7～9cmと浅く、床面の標高は7.625～7.643mを測る。付属遺構として、中央ピット(P-1)と9個のピット、溝跡を確認した。この内、主柱穴と考えられるピットは位置関係から中央ピットを挟むP-2・P-3ではないかとみられ、2本柱で棟を支えていたものと考えられる。ただし、P-2(径20cmの円形)の深さが4cmと浅く、P-4(径31cmの円形、深さ51cm)との組み合わせ、またはP-5(径30～38cmの楕円形、深さ



- 遺構埋土
- | | |
|--------------------------------|---|
| 1. 黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト(ST-6035) | 4. 地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト(ST-6005) |
| 2. 黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト(ST-6035) | 5. 地山のブロックを含む黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト(ST-6005) |
| 3. 黒色(N2/0)粘土質シルト(ST-6035) | 6. 地山のブロックを多く含む黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト(ST-6005) |

図3-8 ST-6005・6035

1. VI区 (1) 弥生時代

22cm)とP-6(径20cmの円形, 深さ33cm)の組み合わせも考量される。いずれにしても, この規模の建物であれば2本柱で棟を支えていたのではなかろうか。なお, P-3は径20cmの円形で, 深さ28cmを測り, 柱間寸法はP-2とP-3間が1.75m, P-3とP-4間が2.10m, P-5とP-6間が1.36mである。中央ピット(P-1)は長径0.44m, 短径0.38mの楕円形で, 深さ12cmを測り, 遺物の出土はみられなかった。溝跡は床面の南から北に曲り, L字形をなし, 幅17~25cm, 深さ2~4cm, 延長2.74mを測る。埋土は地山の土粒の含む度合いによって3層に分層されるが黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトを主体とする。出土遺物には弥生土器185点, 石製品1点, サヌカイト片1点(0.2g)がみられ, 弥生土器2点(6128・6129), 石製品1点(6130)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-9 6128・6129)

いずれも壺の底部とみられるもので, 粗粒砂を中心に細粒砂から粗粒砂を多く含む。

石製品(図3-9 6130)

投弾とみられるもので, 断面はほぼ円形を呈し, 重量は31.6gを測る。

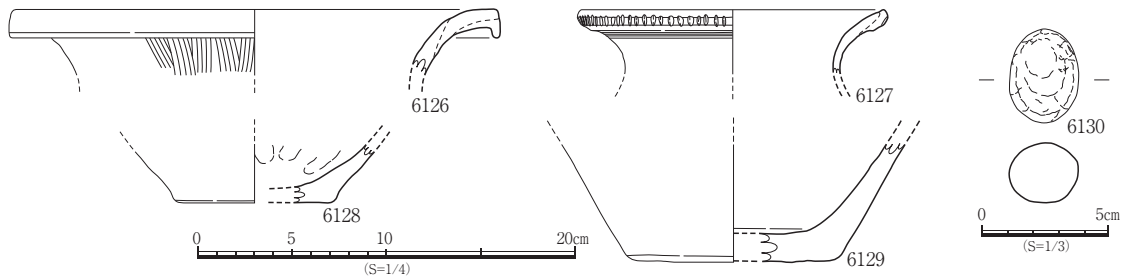


図3-9 ST-6004・6005出土遺物実測図

ST-6006・6007(図3-10)

いずれもVI-2区の北西壁際で検出した径約6.00mとみられる円形の竪穴建物跡で, 大半は北の調査区外に続く。東側を古代の道路遺構(SR-6002)に掘り込まれており, 遺存状態は決して良くはないが, 床面からプランの異なる壁溝が検出され, かつ北壁のセクションで上下に異なる埋土が認められたことから2軒の建物が重複していたものと判断される。よって, ST-6007はST-6006の建替えと考えられる。ST-6006の遺存する壁溝は8~10cm, 床面の標高は7.733~7.749mを測る。付属遺構としては, 壁溝を検出した。幅16~25cm, 深さ4cm, 延長1.96mを測る。ST-6007の遺存する壁溝は8cm, 床面の標高は7.710~7.742mを測る。付属遺構としては壁溝と3個のピットを検出した。ピットの内, P-1は径26cmの円形で, 深さ28cmを測り, 主柱穴であった可能性が高い。残りのピットは位置関係と深さが11~13cmと浅いことから主柱穴にはならないものと考えられる。壁溝は東壁沿いで検出され, 幅15~18cm, 深さ5cmを測る。埋土は, ST-6006が黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト, ST-6007が黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土となっていた。ST-6006からは出土遺物がなく, ST-6007からは弥生土器11点, 土製品1点, 石製品2点, サヌカイト片2点(0.6g)がみられ, 弥生土器2点(6131・6132), 土製品1点(6133), 石製品2点(6134・6135)が

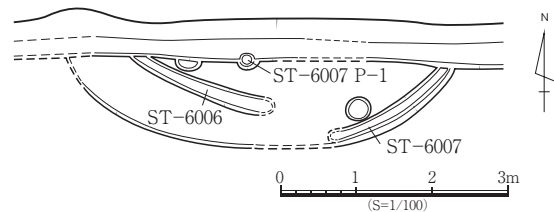


図3-10 ST-6006・6007

図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-11 6131・6132)

6131は甕で、口縁部は外反し、端部下端にハケ状工具による刻目を入れ、外面にタテ方向のハケ調整を施す。胎土には中粒砂から極粗粒砂を少し含む。

6132は蓋で、天井部はつまみ状をなす。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

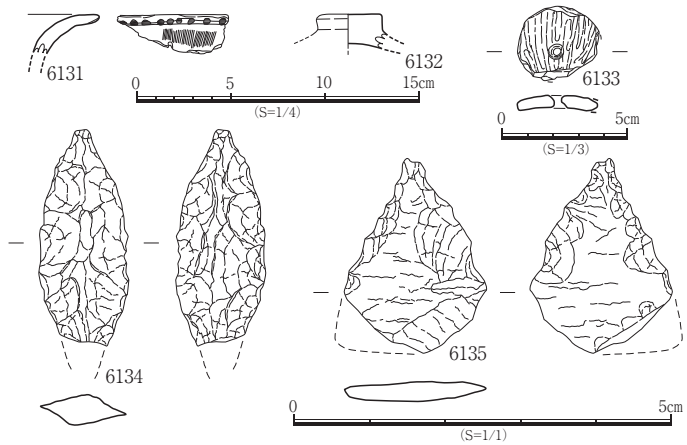


図3-11 ST-6007出土遺物実測図

土製品(図3-11 6133)

土器を転用した紡錘車で、径0.3cmの円孔を両面から穿つ。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-11 6134・6135)

いずれもサヌカイト製の石鏃で、6134は基部を欠くが、柳葉形をなす。6135は基部の一方を欠くが平基となる。

ST-6008(図3-12)

VI-2区の北西部で検出したほぼ円形の竪穴建物跡で、古代の道路遺構(SR-6002)に掘り込まれていた。平面形は径4.40～4.80mで、遺存する壁高は4cmと極めて浅く、床面の標高は7.769～7.796mを測る。付属遺構として、中央ピット(P-1)と壁溝および8個のピットを確認した。この内、支柱穴と考えられるピットは位置関係から中央ピットを囲むP-2～7(P-7はSR-6002に切られたと推測される。)とみられ、6本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-2は径28cmの円形で、深さ26cm、P-3は径26cmの円形で、深さ40cm、P-4は径45cmの円形で、深さ39cm、P-5は径24cmの円形で、深さ11cm、P-6は径25～28cmの楕円形で、深さ30cmを測る。柱間寸法は1.10～1.45mである。中央ピット(P-1)は長径1.25m程度、短径0.70mの楕円形とみられ、深さ25cmを測り、弥生土器(6137)が出土する。壁溝は南西壁沿いの一部

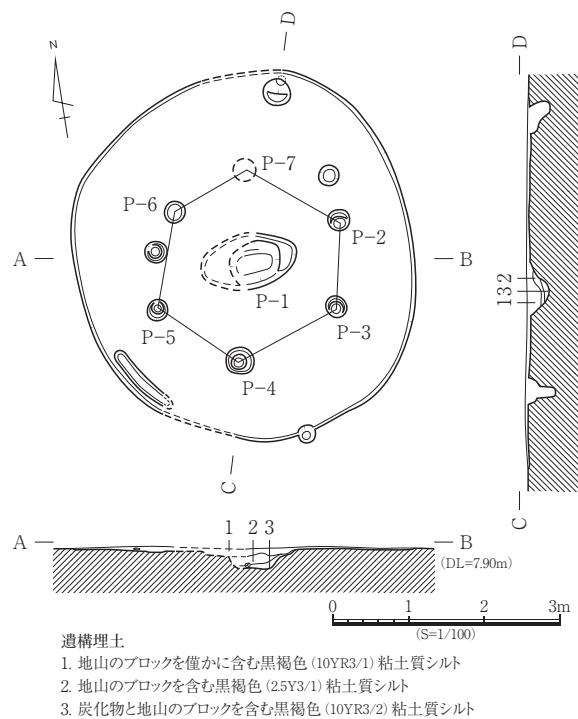


図3-12 ST-6008

に設けられており、幅14cm、深さ1cm、延長1.04mを測る。埋土は基本的に地山(灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト)のブロックを僅かに含む黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトで、中央ピットには炭化物等の堆積も認められた。出土遺物には弥生土器22点、石製品1点、サヌカイト片15点(5.9g)がみられ、弥生土器2点(6136・6137)、石製品1点(6138)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-13 6136・6137)

6136は壺とみられ、口頸部は外反し、外傾接合で口縁部を肥厚し、端部下端にヘラ状工具で刻目を入れ、その下に微隆起突帯をヨコナデ調整で作り出す。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

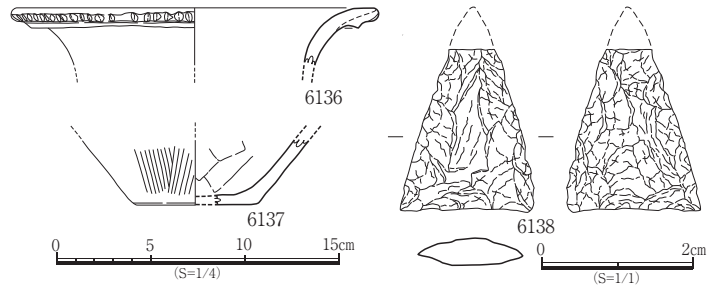


図3-13 ST-6008出土遺物実測図

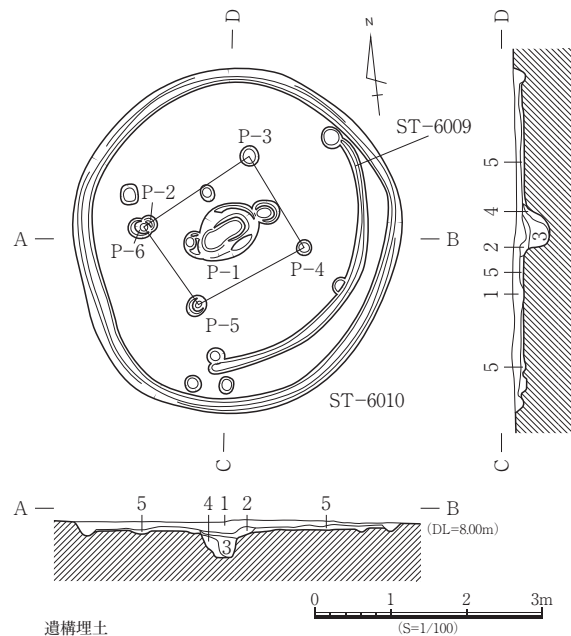
6137は甕の底部と考えられるもので、器壁が比較的薄く、外面にはタテ方向の粗いハケ調整が施される。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

石製品(図3-13 6138)

サヌカイト製の平基の石鏃で、先端部が欠損する。

ST-6009・6010(図3-14)

いずれもVI-2区の北西部で検出したほぼ円形の竪穴建物跡で、壁溝の配置状態や堆積状態から2軒の建物跡が想定され、ST-6010はST-6009の建替えと考えられる。ST-6009を南東側に拡張し、中央ピット(P-1)や主柱穴は一部掘り返しはみられるものの再利用したものと思われる。また、サヌカイト製の石鏃と共にサヌカイトのチップが大量に出土しており、石鏃の工房跡であったものと思われる。まず、ST-6009は径約4.80mで、遺存する壁溝は19cm、床面の標高は7.673～7.705mを測る。付属遺構として、中央ピット(P-1)と4個のピットを検出した。この内、主柱穴と考えられるピットは位置関係から中央ピットを囲むP-2～5とみられ、4本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-2は径25cmの円形で、深さ10cm、P-3は径21cmの円形で、深さ14cm、P-4は径18cmの円形で、深さ30cm、P-5は径25cmの円形で、深さ20cmを測る。柱間寸法は1.25～1.70mである。



遺構埋土

1. 地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト(ST-6010)
2. 黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト(ST-6010)
3. 地山のブロックを含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト(ST-6010)
4. 炭化物と地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト(ST-6010)
5. 地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト(ST-6009)

図3-14 ST-6009・6010

中央ピット(P-1)は長径0.98m、短径0.50mの楕円形で、深さ36cmを測る。壁溝は南東壁沿いに設けられていたとみられ、幅10～17cm、深さ3～6cm、延長4.24mを測る。ST-6010は径5.5mで、遺存する壁溝は14～20cm、床面の標高は7.697～7.721mを測る。付属遺構として、再利用された中央ピット(P-1)と壁溝および14個のピットを検出した。主柱穴は基本的に再利用され、P-6(径23～32cmの楕円形で、深さ11cm)のみがP-2の掘り替えの主柱穴と考えられる。なお、中央ピット(P-1)からは弥生土器4点、石製品1点(6144)、サヌカイト片76点(28.7g)、チャート片1点(0.1g)が出土する。壁溝は壁沿いを巡っており、幅13～18cm、深さ2～5cm、延長13.05mを測る。埋土は基本的に、ST-6009が黒褐色(2.5Y3/1)

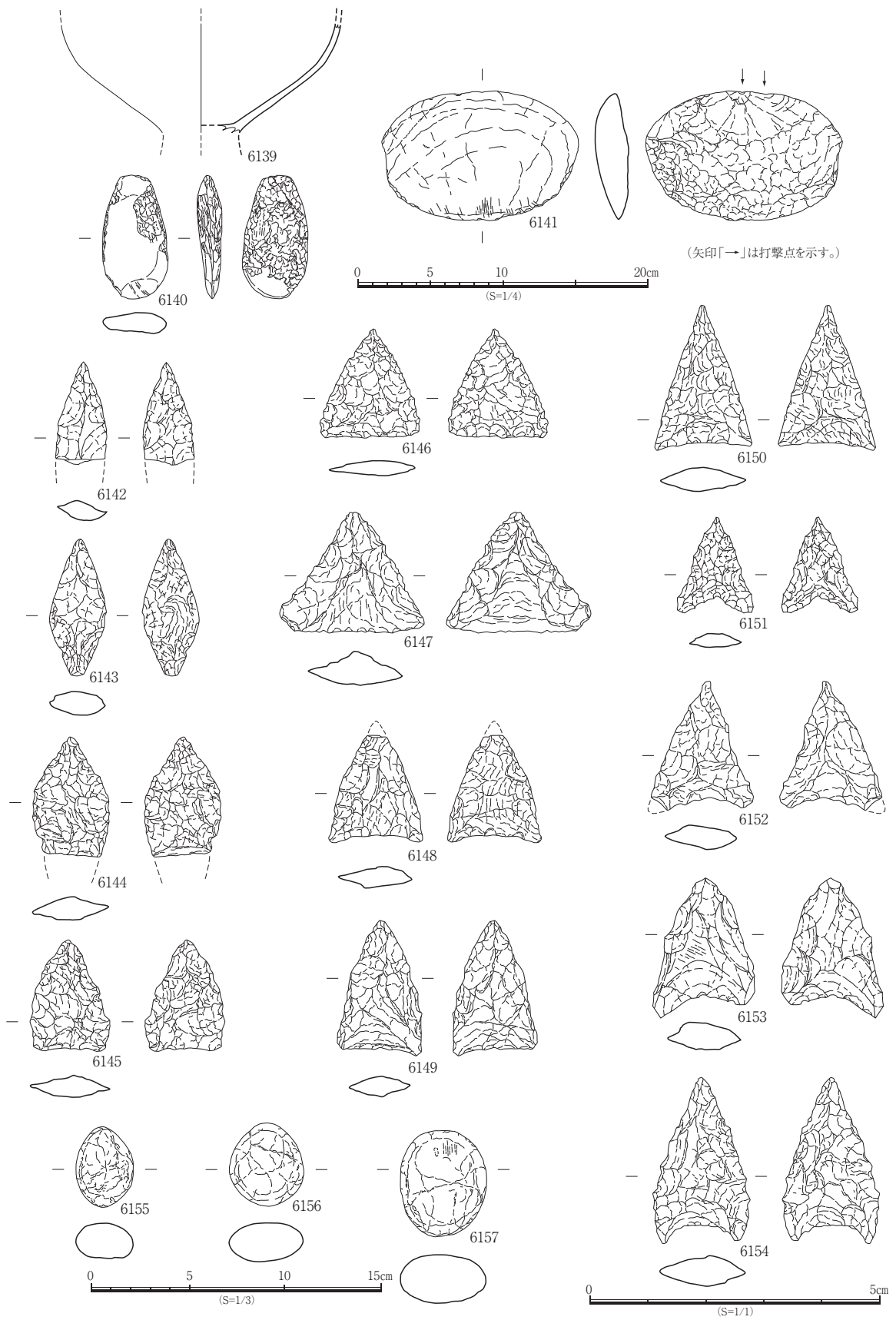


図3-15 ST-6010出土遺物実測図1

1. VI区 (1) 弥生時代

粘土質シルトを主体に地山のブロックを含み、ST-6010 が黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトを主体に地山のブロックを含むもので、中央ピットには炭化物等の堆積がみられ3層に分層される。出土遺物には、ST-6009から弥生土器2点、サヌカイト片43点(2.0g)、ST-6010から弥生土器300点、石製品28点、サヌカイト片19,568点(1,206.4g)、チャート片64点(3.6g)がみられ、ST-6010から出土した弥生土器1点(6139)、石製品28点(6140～6167)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-15 6139)

台付鉢とみられるもので、器壁が薄く、体部は内湾気味に立ち上がる。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

石製品(図3-15・16 6140～6167)

6140は小型蛤刃石斧で、約1/2は研磨されていない。刃部長4.4cm、幅1.3cmを測る。

6141は大型の打製石鎌で、片面が自然面、片面が剝離面となり、剝離面に手の平を添え握ったものと考えられ、平滑な自然面の縁辺部は摩滅し、擦痕が残存する。

6142～6154はサヌカイト製の石鏃で、柳葉形(6142～6144)、平基(6145～6150)、凹基(6151～6154)がみられる。

6155～6157は投弾とみられるもので、表面は平滑で、重量は31.7～88.9gを測る。

6158は扁平な叩石で、片面中央と側面に弱い敲打痕が残存する。

6159～6164は磨石で、いずれも扁平で表面は平滑となり、縁辺を中心に擦痕が残存する。石材は6163がチャートである以外砂岩である。

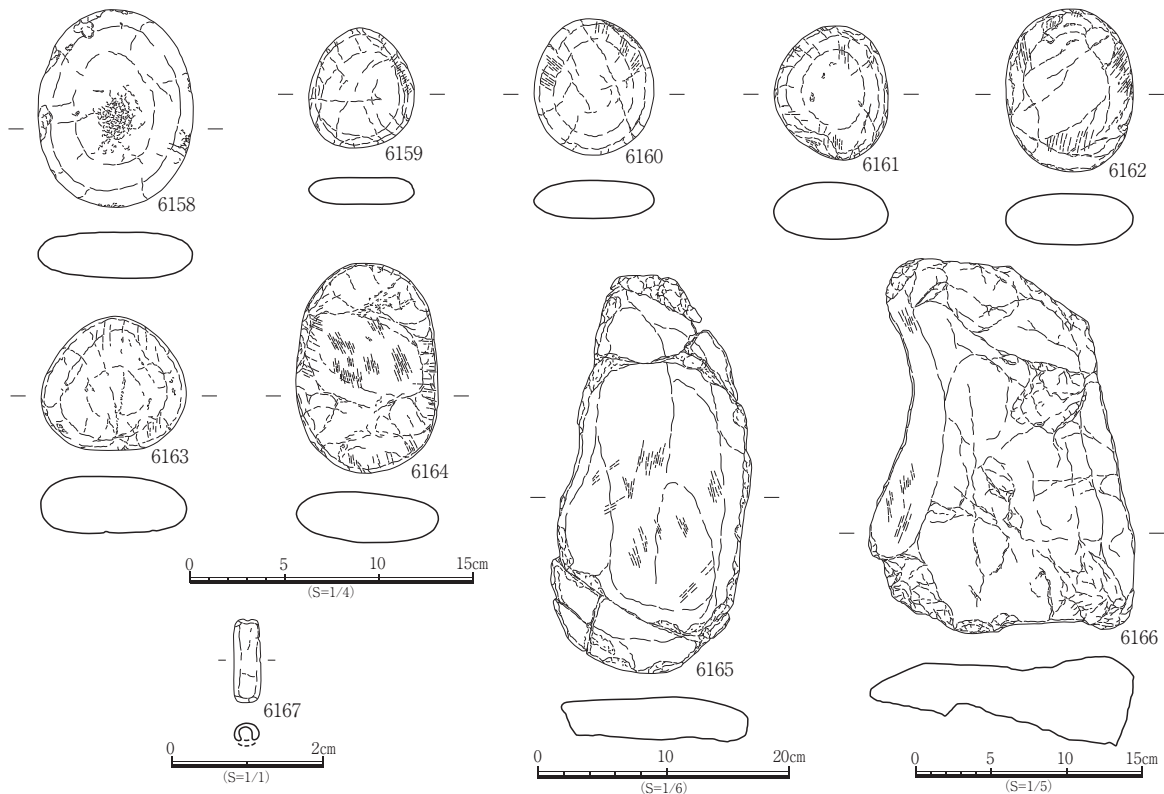


図3-16 ST-6010出土遺物実測図2

6165・6166は砥石で、6165は扁平で上面のみを使用し、6166は上面の3ヵ所と側面の2ヵ所に使用痕が残存する。

6167は蛇紋岩製の管玉で、表面は風化する。紐孔は両端から穿孔される。

ST-6011 (図3-17)

VI-2区の北西部で検出した円形の竪穴建物跡で、古代の道路遺構(SR-6002)に掘り込まれており、支柱穴の1個は確認できない。平面形は径約4.60mで、遺存する壁高は7~10cmと浅く、床面の標高は7.751~7.784mを測る。付属遺構として、中央ピット(P-1)と壁溝および8個のピットを確認した。この内、支柱穴と考えられるピットは位置関係から中央ピットを囲むP-2~5(P-5はSR-6002に切られたと推測される。)とみられ、4本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-2は径30cmの円形で、深さ36cm、P-3は径24cmの円形で、深さ21cm、P-4は径30cmの円形で、深さ23cmを測る。柱間寸法は1.35~1.90mである。中央ピット(P-1)は長径1.20m程度、短径1.00m程度の楕円形とみられ、深さ45cmを測り、弥生土器8点が出土する。壁溝はほぼ壁に沿って巡っていたとみられ、幅12~26cm、深さ2~8cm、延長11.80mを測る。また、南東壁際では、壁溝の内側で幅16cm、深さ2cm、延長2.32mを測る溝を検出したが、位置関係からみて関連するものではないかと思われる。埋土は基本的に炭化物を僅かに含む黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土で、中央ピットは炭化物等の堆積も認められさらに2層に分層される。出土遺物には弥生土器22点、石製品4点、サヌカイト片2点(1.2g)がみられ、石製品4点(6168~6171)が図示できた。

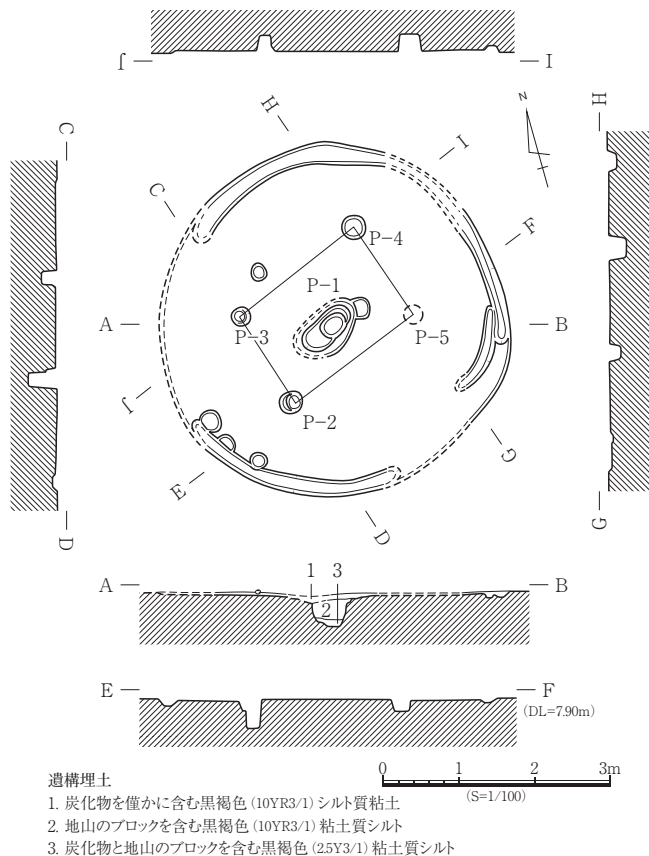


図3-17 ST-6011

出土遺物

石製品(図3-20 6168~6171)

6168は2個の紐孔を持つ石庖丁で、刃部長8.2cm以上(推定10.7cm)、幅0.7cmを測る。

6169・6170は太型蛤刃石斧である。6169は、基部に向って細くなり、刃部長7.0cm、幅1.1cmを測る。6170は未成品で、断面は柱状をなし、研磨痕跡は遺存しない。

6171は磨石で、扁平で表面は平滑となり、縁辺を中心に擦痕、側面に敲打痕が残存する。

ST-6012 (図3-18)

VI-2区の西部、ST-6037の床面で、ST-6037の壁溝とは異なる壁溝を検出したことによりその存在が推測された竪穴建物跡で、径約3.50mの円形ではなかったかとみられる。床面の標高は約7.800mと考えられる。壁溝との位置関係から支柱穴はP-1~3とみられ、かつST-6037の中央ピット

1. VI区 (1) 弥生時代

ト(P-4)で確認できないもののP-2の対角線上にも支柱穴があったとみられることから、4本柱で棟を支えていたものと推測される。P-1は径24~28cmの楕円形で、深さ29cm、P-2は径21~26cmの楕円形で、深さ18cm、P-3は径24cmの円形で、深さ20cmを測る。柱間寸法は1.10~1.70m程度とみられる。検出した壁溝は北東部分の壁に沿っていたものとみられ、幅12~18cm、深さ4cm、延長3.71mを測る。埋土は、壁溝の埋土である黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトと同じではなかったかとみられる。遺物にはP-1から出土した弥生土器2点がみられたが、図示できなかった。

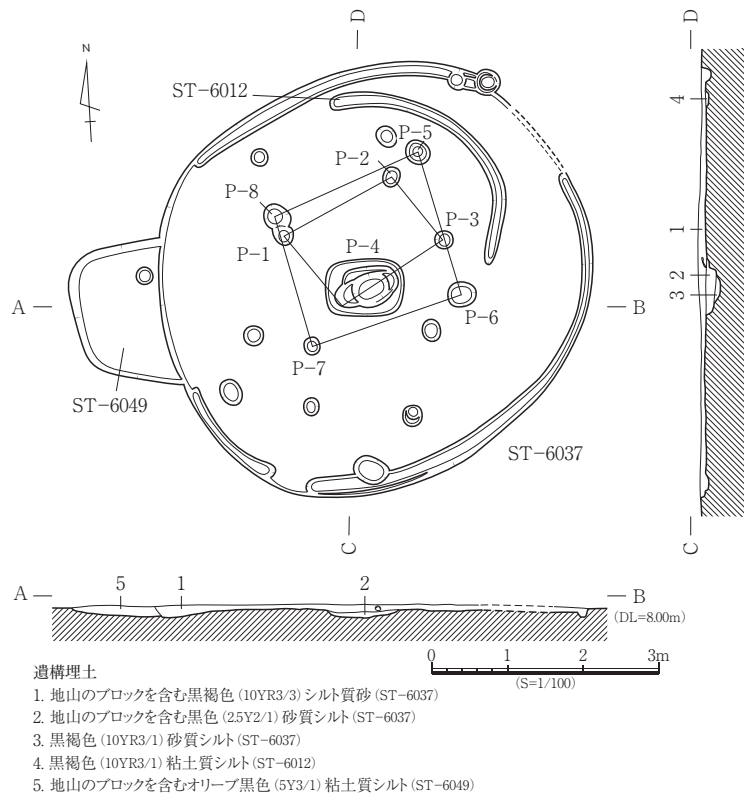


図3-18 ST-6012・6037・6049

ST-6013 (図3-19)

VI-2区の南西部、ST-6014を掘り下げた段階で検出した不整形の竪穴建物跡で、径4.50~5.08mで、遺存する壁高は2~10cmと極めて浅く、床面の標高は7.560~7.594mを測る。確認できた中央ピット(P-1)は1個であることからそれを中心に建物が拡張されているとみられ、ST-6013はST-6014の建替え前の建物であったものと考えられる。また、支柱穴は壁溝と中央ピットとの位置関係からP-2~6とみられ、5本柱で棟を支えていたものと判断される。後述する建替えのST-6014自体も1度建替えられるが2度共5本柱で棟を支えていたとみられることから、5本柱を踏襲していたことが窺える。P-2は径25~28cmの楕円形で、深さ26cm、P-3は径20~23cmの楕円形で、深さ33cm、P-4は径25~27cmの楕円形で、深さ25cm、P-5は径20cmの円形で、深さ22cm、P-6は径22~25cmの楕円形で、深さ19cmを測る。柱間寸法は1.75~1.95mである。検出した壁溝は北東部と南西部の壁に沿ったもので、幅12~18cm、深さ3cm、延長4.55mを測る。埋土は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器65点、石製品2点、サヌカイト片1点(0.8g)、軽石1点がみられ、弥生土器1点(6172)、石製品1点(6173)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-20 6172)

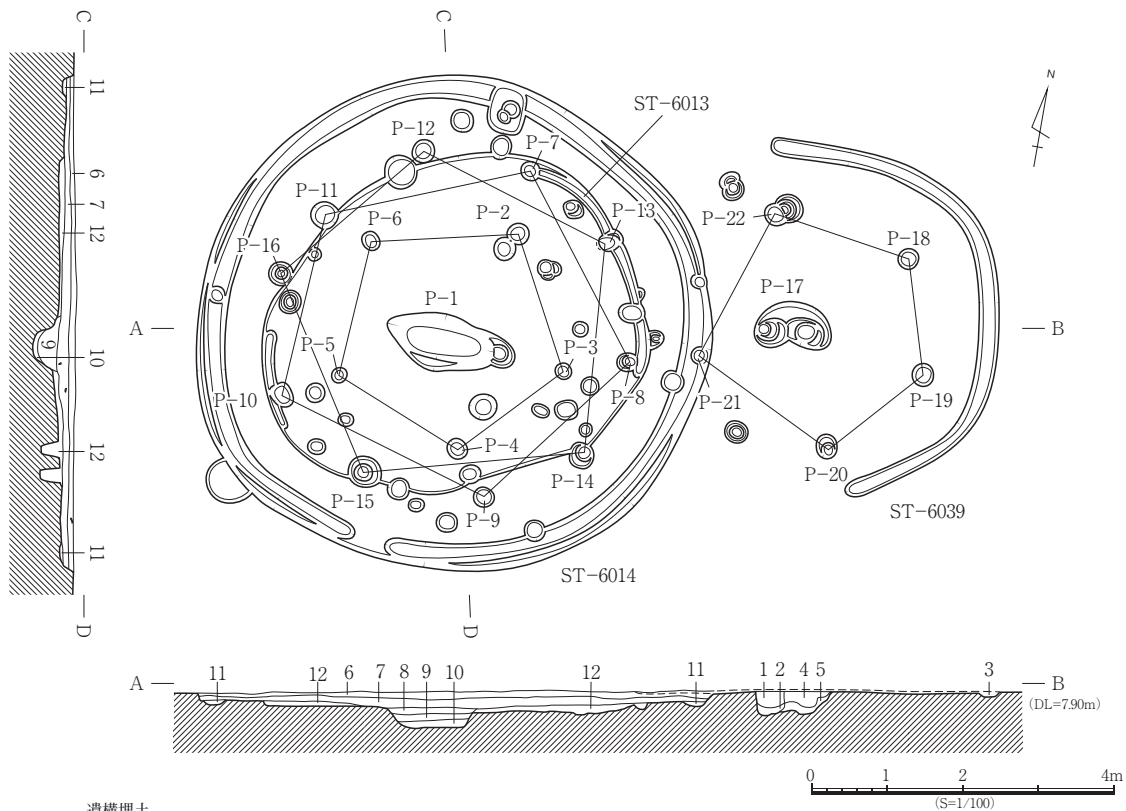
甕で、外面頸部下端にヨコナデ調整で作り出した微隆起突帯がみられ、胴部外面は被熱で変色する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

石製品(図3-20 6173)

叩石で、棒状をなし、先端部に敲打痕、側面に擦痕が残存する。

ST-6014 (図3-19)

VI-2区の南西部で検出したほぼ円形の竪穴建物跡で、径6.50～6.70mで、遺存する壁高は20～26cm、床面の標高は7.608～7.671mを測る。前述のとおり、ST-6013を拡張して建替えたもので、さらに1度建替えられたとみられ、2時期の存続期間がある。ただし、2時期の支柱穴は切り合いがなく、先後関係は不明であり、便宜的に1期と2期を分けて記述する。付属遺構として、再利用された中央ピット(P-1)と壁溝および37個のピットを確認した。まず、1期の支柱穴と考えられるピットは位置関係から中央ピットを囲むP-7～11とみられ、5本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-7は径24cmの円形で、深さ29cm、P-8は径22～26cmの楕円形で、深さ39cm、P-9は径26cmの円形で、深さ38cm、P-10は径27～34cmの楕円形で、深さ20cm、P-11は径36cmの円形で、深さ28cmを測る。柱間寸法は2.45～3.00mである。2期の支柱穴は1期同様位置関係で中央ピットを囲むP-12～16とみられ、同じく5本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-12は径30cmの円形で、深さ33cm、P-13は径24～32cmの楕円形で、深さ37cm、P-14は径30～35cmの楕円形で、深さ30cm、P-15は径40～45cmの楕円形で、深さ27cm、P-16は径28～30cmの楕円形で、深さ16cmを測る。柱間寸法は2.50～2.95mである。再利用された中央ピット(P-1)は長径1.45m、短径0.68mの楕円形で、深さ42cmを測り、弥生土器(6178)や石製品(6193)などが出土する。検出した壁溝は南壁の一部を除いて巡っており、幅18～32cm、深さ3～9cm、延長19.22mを測る。壁溝が設けられていない部分は入口とみられる。埋土は大きく上下2層



遺構埋土

- | | |
|---------------------------------------|---|
| 1. 中粒中礫を含む黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト(ピット) | 7. 細粒中礫を含む黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト(ST-6014) |
| 2. 中粒中礫を含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト(ピット) | 8. 黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト(ST-6014) |
| 3. 黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト(ST-6039) | 9. 炭化物を僅かに含むオリーブ黒色(5Y2/2)粘土質シルト(ST-6014) |
| 4. 黒色(10YR2/1)粘土質シルト(ST-6039) | 10. 黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト(ST-6014) |
| 5. 中粒中礫を含む黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト(ST-6039) | 11. 地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト(ST-6014) |
| 6. 黒色(2.5Y2/1)砂質シルト(ST-6014) | 12. 黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト(ST-6013) |

図3-19 ST-6013・6014・6039

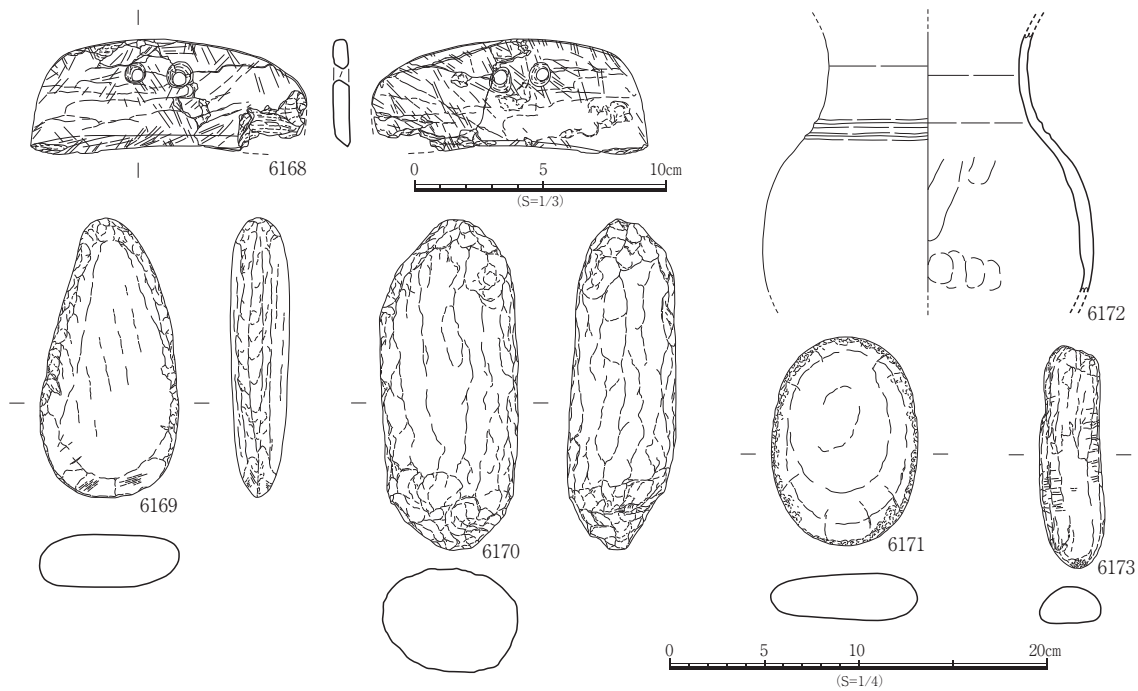


図3-20 ST-6011・6013出土遺物実測図

に分層され、上層は黒色(2.5Y2/1)砂質シルト、下層が細粒中礫を含む黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトで、中央ピットは炭化物等の堆積も認められさらに3層に分層される。出土遺物には弥生土器786点、石製品5点、サヌカイト片12点(22.0g)、軽石1点がみられ、弥生土器17点(6174～6190)、石製品5点(6191～6195)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-21 6174～6190)

6174・6175は壺で、6174は外傾する口縁部に粘土帯を貼付して肥厚したもので、端部に凹線文を施し、2個1対の円形浮文を貼付する。外面には指頭圧痕が残存する。胎土には細粒砂から極細粒中礫を少し含む。6175は口縁端部下端を拡張したもので、端部にハケ状工具によるとみられる刺突文を施す。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を少し含む。

6176～6182は甕で、6176～6178は、口縁部が直立ないし外傾する頸部から外反するもので、外傾接合で口縁部を若干肥厚する。その痕跡が口縁部外面に指頭圧痕として残存する。6177・6178の口縁端部下端にはヘラ状工具による刻目が施される。いずれも胎土には細粒砂から粗粒砂ないし極粗粒砂を少し含む。6179～6182は、口頸部がくの字形を呈するもので、6179・6181・6182は口縁端部上端、6180は両端を拡張し、6179～6181には凹線文、6182には擬凹線文を施す。6181・6182の外面には煤が付着する。いずれも胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

6183～6186は甕の底部とみられるもので、6183・6184の外面にはハケ調整、6186の外面にはヘラ磨きが施され、6185・6186の外面は被熱で変色し、煤が付着する。胎土には、6183が中粒砂から粗粒砂、6184が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く、6185が細粒砂から極粗粒砂を少し、6186が中粒砂から極細粒中礫を少し含む。

6187は台付鉢とみられるもので、ハの字形に開く高さ2.0cmの脚台が付く。胎土には細粒砂から粗

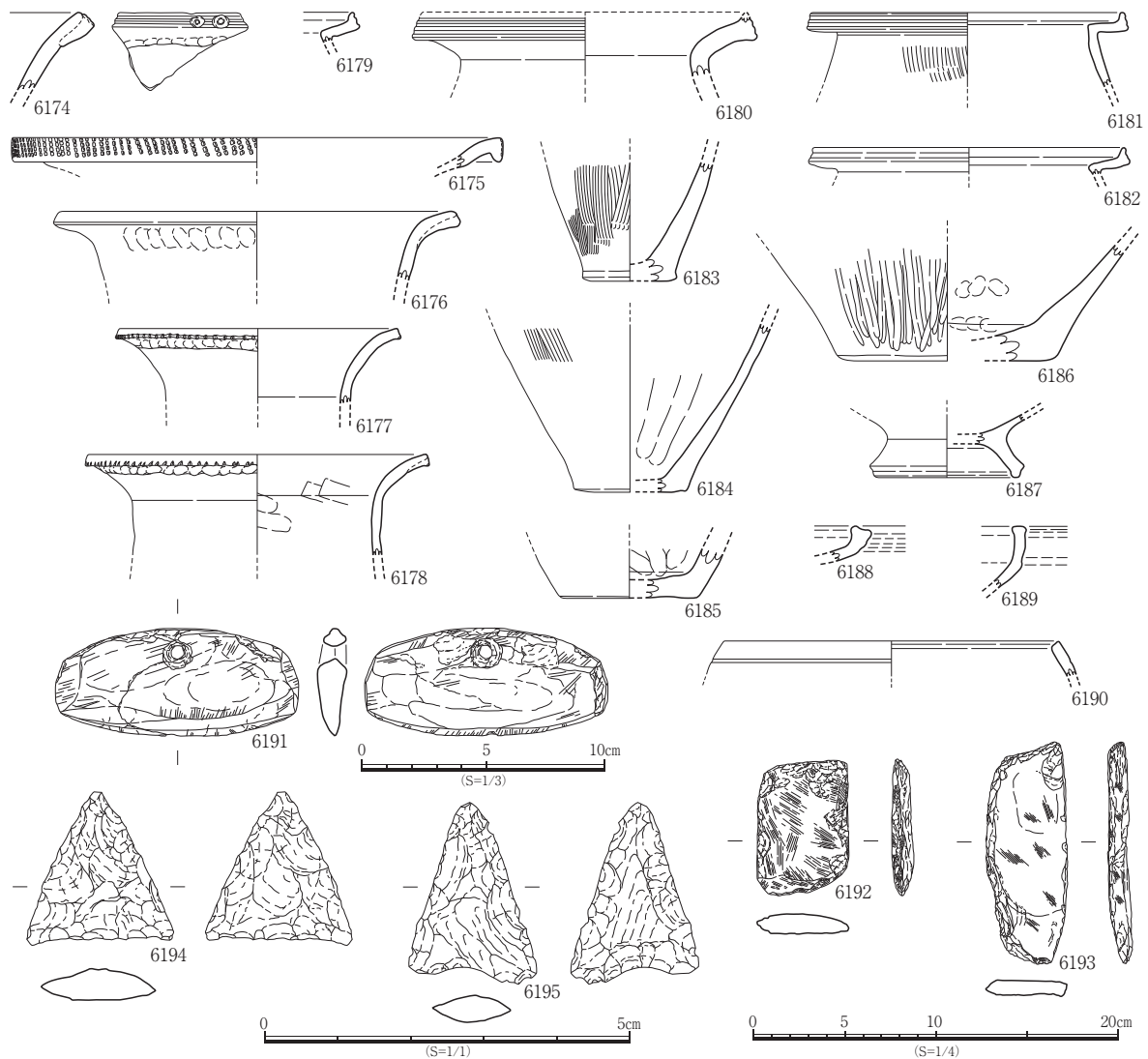


図3-21 ST-6014出土遺物実測図

粒砂を少し含む。

6188～6190は高杯で、6188・6189には擬凹線文が施される。6189は、外傾する体部から口縁部が直立するもので、口縁部にヨコナデ調整、体部内面にナデ調整、外面にヨコ方向のヘラ磨きを施す。また、内面には朱が付着する。6190は、口縁部が内傾し、外面に1条の凹線が巡る。胎土には、6188・6189が細粒砂から粗粒砂を少し、6190が中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-21 6191～6195)

6191は紐孔1個の石庖丁で、全面を研磨する。刃部長9.7cm、幅0.7cmを測る。

6192は石斧で、片面が欠損するため形状が判然としないが、扁平片刃石斧ではないかとみられる。片面は研磨され、刃部長4.9cm、幅1.1cmを測る。6193は石斧の未成品とみられるもので、片面と一側面は研磨されるが、片面は未調整である。

6194・6195はサヌカイト製の石鎌で、6194は平基、6195は凹基となる。

ST-6015(図3-22)

VI-2区の南西端部、ST-6016の床面で、ST-6016の壁溝より内側を巡る壁溝を検出したことに

よりその存在が推測された竪穴建物跡で、径約4.90mの円形ではなかったかとみられる。床面の標高は7.629～7.653mを測る。中央ピット(P-1)が1個しか検出されていないことからST-6015はST-6016の建替え前の建物であったものとみられる。壁溝との位置関係から支柱穴はP-2～7とみられ、6本柱で棟を支えていたものと推測される。P-2は径28～32cmの楕円形で、深さ17cm、P-3は径34cmの円形で、深さ18cm、P-4は径35cmの円形で、深さ16cm、P-5は径30cmの円形で、深さ13cm、P-6は径20cmの円形で、深さ23cm、P-7は径25～28cmの楕円形で、深さ18cmを測る。柱間寸法は1.20～1.70mとみられる。埋土は、壁溝の埋土である黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトと同じではなかったかとみられる。遺物には壁溝から出土した弥生土器2点、P-4から出土したサヌカイト片1点(4.1g)がみられたが、図示できるものはなかった。

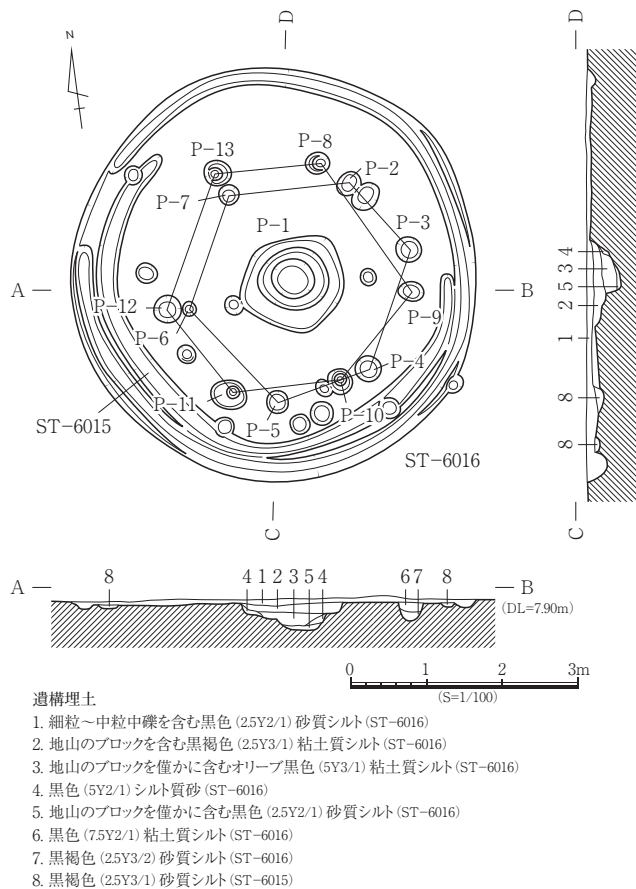


図3-22 ST-6015・6016

ST-6016(図3-22)

VI-2区の南西端部で検出した円形の竪穴建物跡で、径5.40mで、遺存する壁高は14～19cm、床面の標高は7.627～7.670mを測る。前述のとおり、中央ピット(P-1)を再利用し、ST-6015を拡張して建替えたものとみられる。付属遺構として、再利用された中央ピット(P-1)と壁溝および17個のピットを確認した。この内、支柱穴と考えられるピットは位置関係から中央ピットを囲むP-8～13とみられ、6本柱で棟を支えていたものと考えられる。この建物も建替え前と同じ柱本数で拡張して建替えている。P-8は径30cmの円形で、深さ33cm、P-9は径26～34cmの楕円形で、深さ25cm、P-10は径32cmの円形で、深さ41cm、P-11は径40～45cmの楕円形で、深さ29cm、P-12は径36cmの円形で、深さ39cm、P-13は径35cmの円形で、深さ34cmを測る。柱間寸法は1.40～2.10mである。再利用された中央ピット(P-1)は2段に平場が巡り、長径1.34m、短径1.28mの不整円形で、深さ44cmを測り、弥生土器(6198・6199)などが出土する。検出した壁溝は西壁の一部を除いて巡っており、幅18～28cm、深さ4～11cm、延長14.81mを測る。壁溝が設けられていない部分は入口とみられる。埋土は細粒から中粒中礫を含む黒色(2.5Y2/1)砂質シルトで、中央ピットは土質によりさらに4層に分層される。出土遺物には弥生土器292点、土製品1点、石製品2点、サヌカイト片12点(11.9g)がみられ、弥生土器6点(6196～6201)、土製品1点(6202)、石製品2点(6203・6204)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-23 6196～6201)

6196・6197は壺で、6196は口頸部が外反し、口縁部を肥厚するもので、端部下端にヘラ状工具によ

る刻目，その下に2条の微隆起突帯，2段のクシ描直線文を施し，棒状浮文を貼付する。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から粗粒砂を多く含む。6197は，口縁部が大きく外反するもので，端部は拡張され凹線文が施される。内面には鋭利なハケ状工具で，斜格子状のハケ調整を行う。胎土には中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6198～6200は甕で，6198・6199は，口頸部がくの字形となり，口縁端部を上下に若干拡張し擬凹線文を施す。胎土には，6198が粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を比較的多く，6199が細粒砂から極粗粒砂を少し含む。6200は，口縁部が外反するもので，内外面にはハケ目が残存し，外面には煤が僅かに付着する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

6201はミニチュア土器で，白を模ったものとみられる。器面には各所に指頭圧痕が残存し，胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

土製品(図3-23 6202)

土器を転用した紡錘車で，径0.4cmの円孔を両側から穿つ。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

石製品(図3-24 6203・6204)

いずれもサヌカイト製の石鎌で，6203は凸基，6204は柳葉形ないし凸基となる。

ST-6017(図3-25)

VI-2区の南西端部で，壁溝の一部，中央ピット(P-1)を検出したことからその存在が推定される竪穴建物跡で，径約6.00mの円形ではなかったかとみられる。推定される床面の標高は7.725～7.792mとみられる。付属遺構として，中央ピット(P-1)と壁溝および周辺で24個のピットを確認した。この内，主柱穴と考えられるピットは壁溝との位置関係から中央ピットを囲むP-2～5とみられ，4本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-2は径25cmの円形で，深さ17cm，P-3は径31～36cmの楕円形で，深さ36cm，P-4は径25cmの円形で，深さ14cm，P-5は径25cmの円形で，深さ13cmを測る。柱間寸法は2.35～3.10mである。中央ピット(P-1)は南側と北側に平場があり，長径1.00m，短径0.58mの楕円形で，深さ31cmを測り，弥生土器(6205)などが出土する。検出した壁溝は北西壁に沿ったものとみられ，幅15～28cm，深さ4cm，延長7.22mを測る。埋土は，壁溝の埋土から黒褐色(25Y3/1)砂質シルトではなかったかとみられる。また，中央ピットは炭化物等によって3層に分層される。出土遺物に

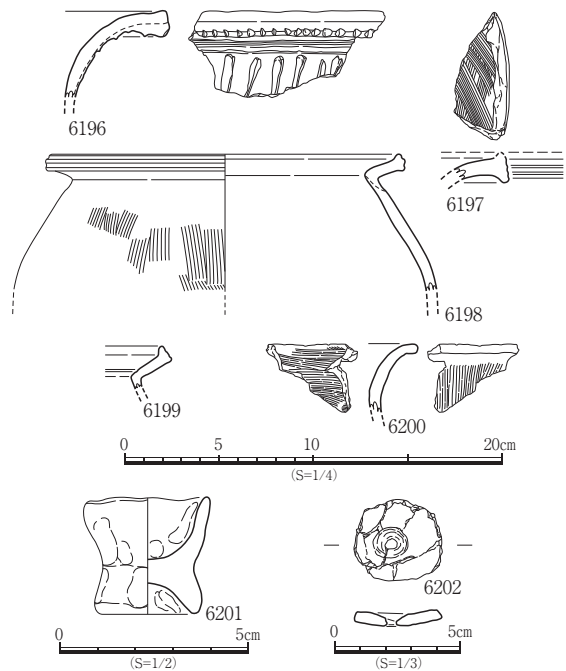


図3-23 ST-6016出土遺物実測図1

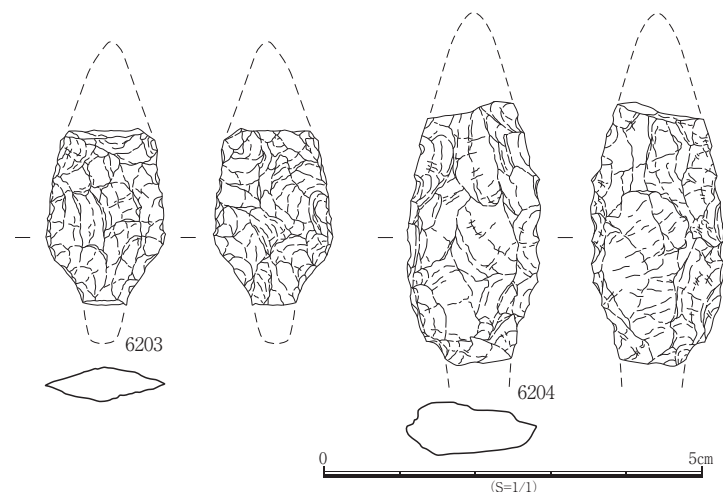


図3-24 ST-6016出土遺物実測図2

1. VI区 (1) 弥生時代

は弥生土器12点がみられ、中央ピットから出土した弥生土器1点(6205)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-28 6205)

壺で、外面はハケ調整の後にハケ状工具による刺突文が施される。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

ST-6018(図3-26)

VI-2区の南部で検出したほぼ円形の小型の竪穴建物跡で、古代の溝跡(SD-6008)に掘り込まれていた。径は3.85~4.15mで、遺存する壁高は7~11cmと浅く、床面の標高は7.768~7.807mを測る。付属遺構として、中央ピット(P-1)と13個のピットを確認した。この内、主柱穴と考えられるピットは中央ピットを囲むP-2~5とみられ、4本柱で棟を支えていたものと考えられ、P-2は径25cmの円形で、深さ19cm、P-3は径35cmの円形で、深さ8cm、P-4は径26cmの円形で、深さ7cm、P-5は径25cmの円形で、深さ19cmを測る。なお、P-4はやや浅いことから東隣のP-6(径30cmの円形で、深さ26cm)が主柱穴であったことも考えられる。いずれにしても、4本柱で棟を支えていたものとみられる。柱間寸法は1.30~1.50mである。中央ピット(P-1)は長径0.68m、短径0.40mの楕円形で、深さ31cmを測り、弥生土器2点が出土する。埋土は基本的に上下2層に分層され、上層は地山のブロックを含むオリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルト、下層が地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/1)砂質シルトで、中央ピットはさらに4層に分層される。出土遺物には弥生土器171

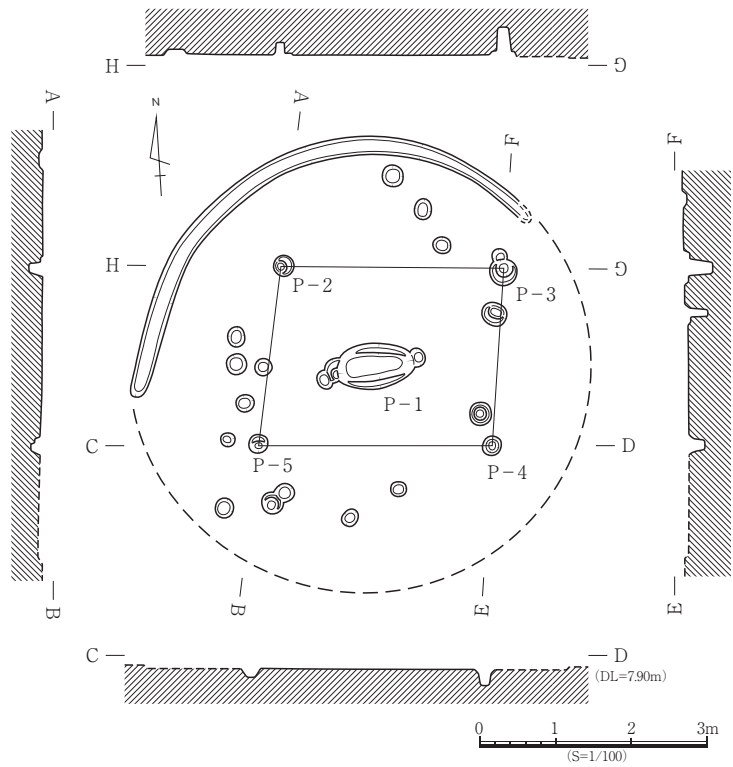
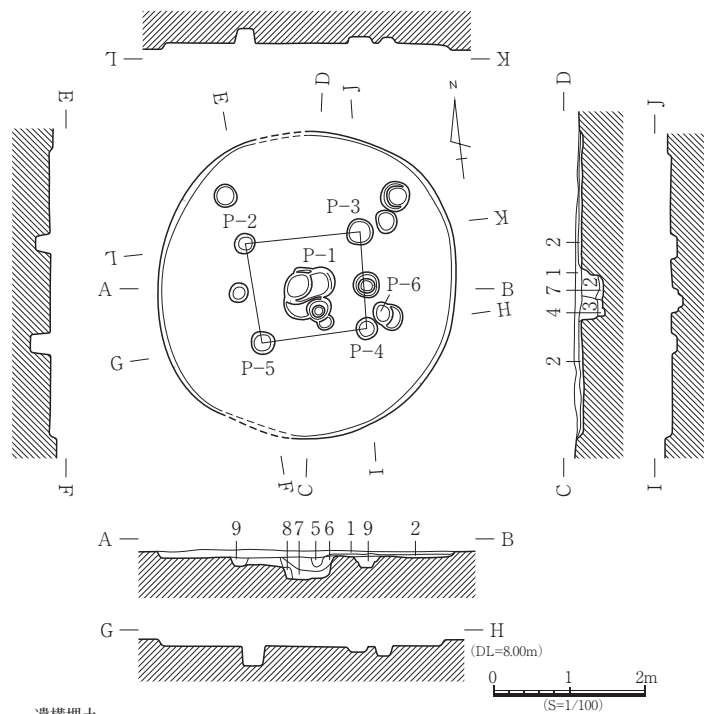


図3-25 ST-6017



遺構埋土

- | | |
|-----------------------------------|--------------------------------|
| 1. 地山のブロックを含むオリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルト | 5. 黒色(7.5Y2/1)粘土質シルト |
| 2. 地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/1)砂質シルト | 6. オリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルト |
| 3. オリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルト | 7. 黒色(5Y3/1)砂質シルト |
| 4. 地山のブロックを含むオリーブ黒色(5GY2/1)粘土質シルト | 8. 地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/1)砂質シルト |
| | 9. オリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルト |

図3-26 ST-6018

点, サヌカイト片1点(13.1g)がみられ, 弥生土器1点(6206)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-28 6206)

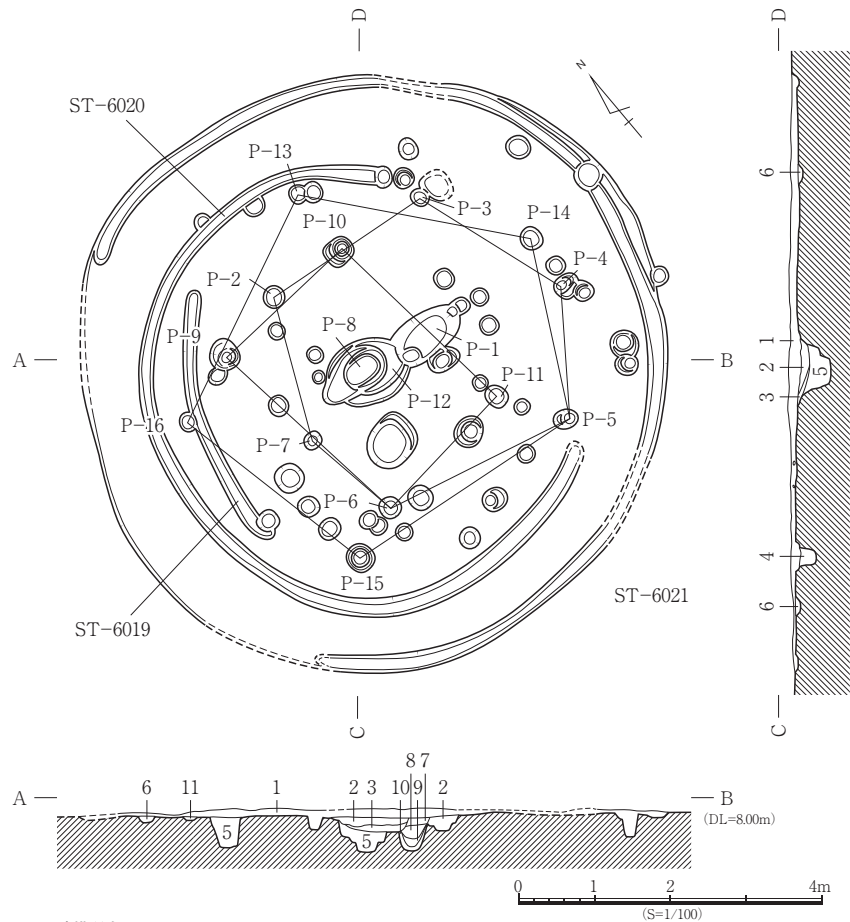
甕で, 底部は平らで, 外上方へ立ち上がる。外面にはヘラナデ調整が施される。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

ST-6019(図3-27)

VI-2区の南部, ST-6014の東隣, ST-6021の床面で, ST-6020・6021の壁溝より内側に壁溝を検出したことによりその存在が推測された竪穴建物跡で, 径約6.50mの円形ではなかったかとみられる。床面の標高は7.734~7.800mを測る。また, 古代の道路遺構(SR-6003)に掘り込まれる。

ST-6019~6021の3軒は重複し, かつST-6014・6015などとは異なり, 中央ピット(P-1・8・13)を建替えるごとに作り直している。まず, ST-6019とST-6020の先後関係は不明で, 最後にST-6021が拡張して作られている。埋まった後に建てられていたことは, ST-6021の東壁の壁溝の外にST-6019の東壁の壁溝が残っていたことから推察される。

ST-6019の付属遺構として, 中央ピット(P-1)と壁溝および支柱穴とみられる6個のピットを確認した。このピット以外にも関連するピットが存在していたとは思われるが, 確認できていない。支柱穴は壁溝との位置関係からP-2~7とみられ, 6本柱で棟を支えていたものと推測される。後述するが, ST-6019~6021の支柱の本数は異なる。このことから建替えの経過は首肯されよう。P-2は径30cmの円形で, 深さ32cm, P-3は径22~25cmの楕円形で, 深さ22cm, P-4は径32cmの円形で, 深さ23cm, P-5(ST-6021の支柱穴と重複)は径22~24cmの楕円形で, 深さ39cm, P-6(ST-6020の支柱穴



遺構埋土

- | | |
|---|---|
| 1. 黒褐色(10YR3/1)砂質シルト(ST-6021) | 6. 黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト(ST-6020) |
| 2. 地山のブロックを含む黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト(ST-6021) | 7. 黒色(5Y2/1)粘土質シルト(ST-6019) |
| 3. 炭化物を僅かに含む黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト(ST-6021) | 8. 地山のブロックを含む黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト(ST-6019) |
| 4. 黒色(5Y2/1)砂質シルト(ST-6021) | 9. オリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルト(ST-6019) |
| 5. オリーブ黒色(5Y3/1)砂(ST-6020) | 10. 黒色(7.5Y2/1)砂(ST-6019) |
| | 11. 黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト(ST-6019) |

図3-27 ST-6019~6021

1. VI区 (1) 弥生時代

と重複)は径28cmの円形で、深さ27cm、P-7は径22cmの円形で、深さ24cmを測る。柱間寸法は1.25～2.60mとみられる。中央ピット(P-1)は長径1.10m、短径0.58mの長楕円形で、深さ46cmを測り、弥生土器11点が出土する。埋土は、中央ピットの埋土から黒色(2.5Y2/1)粘土質シルトと同じではなかったかとみられる。また、中央ピットは土質によって4層に分層される。出土遺物には弥生土器16点、サヌカイト片4点(1.6g)がみられたが、図示できるものはなかった。

ST-6020 (図3-27)

VI-2区の南部、ST-6014の東隣、ST-6021の床面で、ST-6021の壁溝より内側を巡る壁溝を検出したことによりその存在が推測された竪穴建物跡で、径約6.00mの円形ではなかったかとみられる。床面の標高は7.703～7.789mを測る。前述のとおり、ST-6019との前後関係については明確ではないが、ST-6019より一回り小さくなっており、ST-6020が古い可能性も考えられる。また、古代の道路遺構(SR-6003)に掘り込まれる。

ST-6020の付属遺構として、中央ピット(P-8)と壁溝および主柱穴とみられる4個のピットを確認した。このピット以外にも関連するピットが存在していたとは思われるが、確認できていない。主柱穴は壁溝との位置関係からP-6・9～11とみられ、4本柱で棟を支えていたものと推測される。P-6はST-6019の主柱穴と重複する。P-9は径38～42cmの楕円形で、深さ47cm、P-10は一辺29～31cmの不整形で、深さ42cm、P-11は径27～30cmの楕円形で、深さ39cmを測る。柱間寸法は2.00～2.95mとみられる。中央ピット(P-8)は長径1.00m、短径0.59mの長楕円形で、深さ45cmを測り、下層部が残存しており弥生土器6点(6207)とサヌカイト片1点が出土する。埋土は、壁溝の埋土から黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトと同じではなかったかとみられる。出土遺物には弥生土器7点、サヌカイト片1点(1.6g)がみられ、弥生土器1点(6207)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-28 6207)

甕で、底部は平らで、やや内湾気味に立ち上がる。内面はハケ調整を行った上で、ヘラ磨きを施し、下半にハケ目が残存する。外面は全面に下から上にヘラ磨きが施されるが、被熱で変色し、部分的に煤が付着する。外底面はヘラ削りを施す。胎土には細粒砂から極細粒中礫を比較的多く含む。

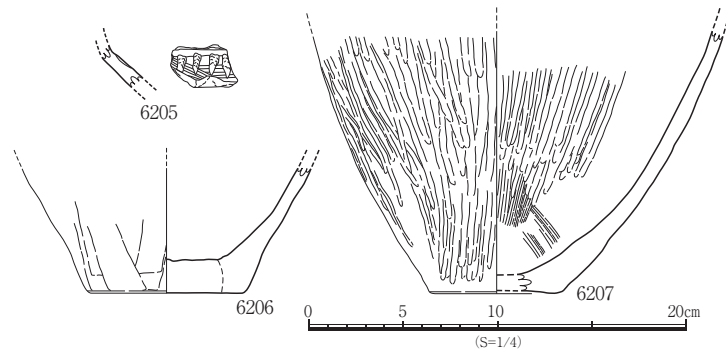


図3-28 ST-6017・6018・6020出土遺物実測図

ST-6021 (図3-27)

VI-2区の南部、ST-6014の東隣で検出した円形の竪穴建物跡で、径は7.72～7.82mで、遺存する壁高は9～16cm、床面の標高は7.744～7.768mを測る。前述のとおり、ST-6019・6020の建替えの住居とみられる。付属遺構として、中央ピット(P-12)と壁溝および40個のピットを確認した。このピットの中にはST-6019・6020のものが含まれると思われるが、確認できていない。この内、主柱穴と考えられるピットは位置関係から中央ピットを囲むP-5・13～16とみられ、5本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-5はST-6019の主柱穴と重複する。P-13は径25cmの円形で、深さ28cm、P-14

は径25～32cmの楕円形で、深さ14cm、P-15は径32～36cmの円形で、深さ54cm、P-16は径25cmの円形で、深さ38cmを測る。柱間寸法は2.40～3.35mである。再利用された中央ピット(P-12)は南側に平場があり、長径1.10m、短径0.85mの楕円形で、深さ26cmを測る。検出した壁溝は西壁を除いて巡っており、幅12～26cm、深さ2～7cm、延長16.98mを測る。壁溝が設けられていない西壁部分が入口とみられる。埋土は黒褐色(10YR3/1)砂質シルトで、中央ピットは土質によりさらに2層に分層される。出土遺物には弥生土器478点、石製品17点、サヌカイト片147点(70.7g)、チャート片2点(0.1g)がみられ、弥生土器11点(6208～6218)、石製品13点(6219～6231)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-29 6208～6218)

6208～6216は甕で、6208～6210は口縁部外面に粘土帯を貼付するもので、口頸部は外反する。6208は口縁部外面下端にヘラ状工具による刻目、その下にヨコナデ調整で微隆起突帯を作り出し、上下にクシ描直線文を施し、粘土帯接合痕を消す。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。6209は口縁端部下端にヘラ状工具による刻目、口縁部外面に指頭圧痕が残存する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。6210は頸部内面にヘラナデ調整、口縁部外面に指押えを行う。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。6211・6212は、頸部が丸味のない胴部から直立し、口縁部が外傾するもので、6211の胴部内面にはヘラ削り、外面にはヘラ磨きが施される。また、頸部外面には煤が付着する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。6212は、口頸部内面にヨコ方向のヘラ磨き、胴部内面にヘラ削り、外面にヘラナデ調整を施し、口縁部外面には外傾接合の際の指頭圧痕が残存する。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。6213・6214は口頸部がくの字形を呈するもので、6213は口縁端部上端を拡張し、凹線文、6214は擬凹線文を作り出す。6214の胴部内面にはナデ調整の後にヘラ磨き、外面には中胴部より上にナデ調整、下にヘラ磨きを施した上で、中胴部に波状の刺

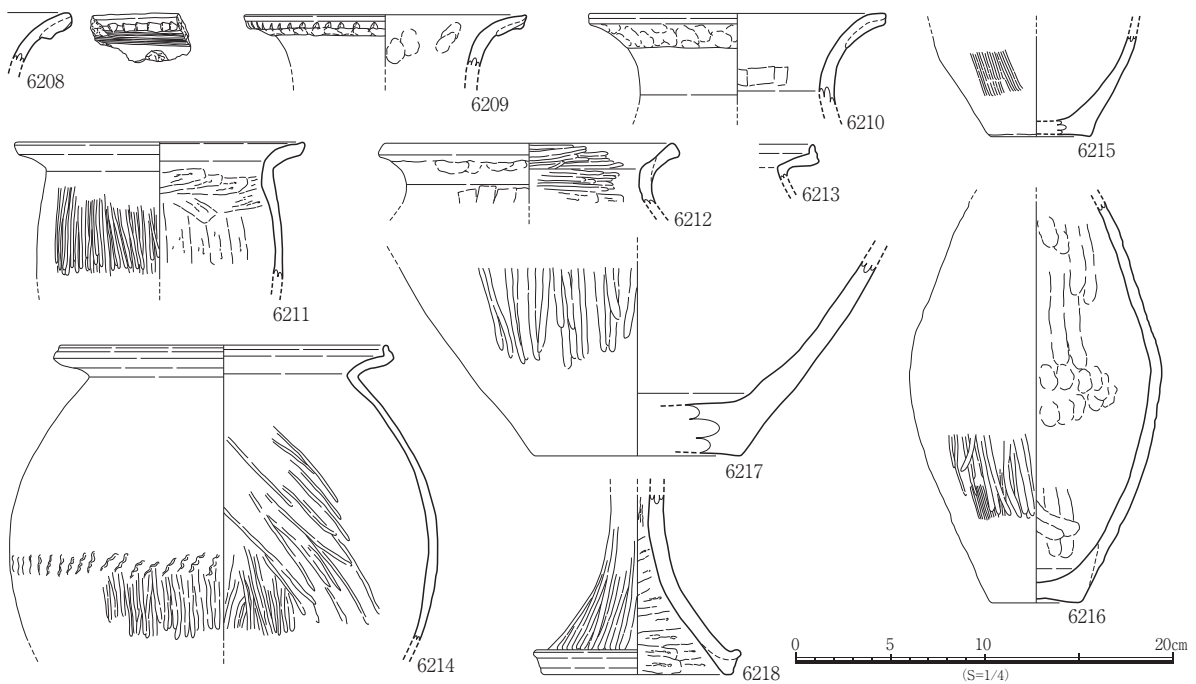


図3-29 ST-6021出土遺物実測図1

突文を巡らす。口縁部外面から中胴部外面には煤が付着する。胎土には、6213が細粒砂から中粒砂を比較的多く、6214が細粒砂から粗粒砂を多く含む。

6215～6217は底部で、いずれもやや上げ底風となる。6215は小型の甕とみられ、外面はハケ調整で、煤が付着する。6216は中胴部に最大径を有するもので、胴部は細長く、外面は上半を中心に煤が付着し、器面が剥離、摩耗するが、下半にはハケ目とヘラ磨きの痕跡が残存する。6217は、底部が厚く、斜め上方に立ち上がっていることから壺と考えるが、外面下半は被熱で変色する。胎土には、6215が中粒砂から極粗粒砂を多く、6216が細粒砂から極粗粒砂を多く、6217が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6218は高杯で、裾部が大きく開き、端部は上方に拡張され擬凹線文を施文する。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

石製品(図3-30 6219～6231)

6219は2個の紐孔を持つ石庖丁をサヌカイトで製作しようとしたものであるが、穿孔途中で、割れ廃棄したものとみられる。片面は研磨され、刃部も僅かに残存する。

6220は大型の打製石鎌で、表面縁辺を中心に擦痕、中央に2カ所弱い敲打痕も残存する。

6221は形態が判然としない石器であるが、石斧の破片であった可能性もある。断面はかまぼこ状

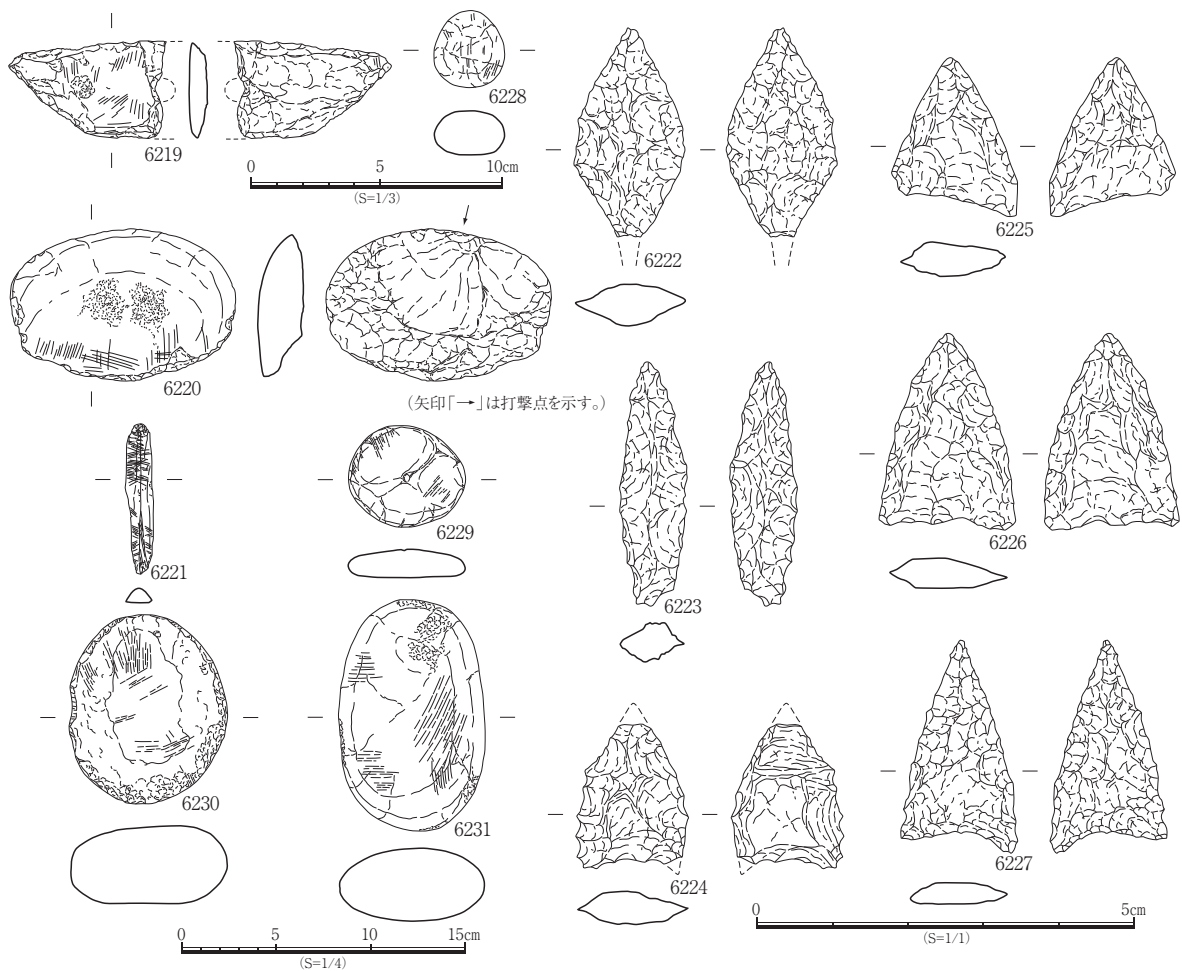


図3-30 ST-6021出土遺物実測図2

を呈し、平らな面は剝離面となり、残りの面には研磨痕が残存する。

6222～6227はサヌカイト製の石鏃で、6222は凸基、6223は柳葉形、6224～6227は凹基である。なお、6224～6226は挟りが僅かであることから平基と考えることもできる。

6228は投弾で、表面は平滑で、重量は21.0gを測る。

6229～6231は磨石で、いずれも扁平で縁辺を中心に擦痕が残存する。6229の表面は光沢があり、6230は側面に弱い敲打痕、6231には側面の一部に弱い敲打痕が残存する。

ST-6022 (図3-31)

VI-2区の南部、SD-6001とSD-6002の間で検出した円形の堅穴建物跡で、ST-6055に掘り込まれる。径は4.98～5.06mで、遺存する壁高は42cm、床面の標高は7.606～7.628mを測る。付属遺構として、中央ピット(P-1)と壁溝および15個のピットを確認した。この内、支柱穴と考えられるピットは位置関係から中央ピットを囲むP-2～6とみられ、5本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-2は径38cmの円形で、深さ21cm、P-3は径30cmの円形で、深さ17cm、P-4は径25cmの円形で、深さ11cm、P-5は径35cmの円形で、深さ22cm、P-6は径30cmの円形で、深さ24cmを測る。柱間寸法は1.40～1.90mである。中央ピット(P-1)は南側に段部があり、長径0.90m、短径0.56mの楕円形で、深さ29cmを測り、弥生土器3点が出土する。検出した壁溝は南西壁に沿った部分のみで、幅18～24cm、深さ8～10cm、延長3.93mを測る。埋土は大きく3層に分層され、上層からオリブ黒色(5Y3/1)シルト質砂、黒色(2.5Y2/1)砂質シルト、オリブ黒色(5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器237点、石製品16点、サヌカイト片7点(12.7g)がみられ、弥生土器7点(6232～6238)、石製品14点(6239～6252)が図示できた。

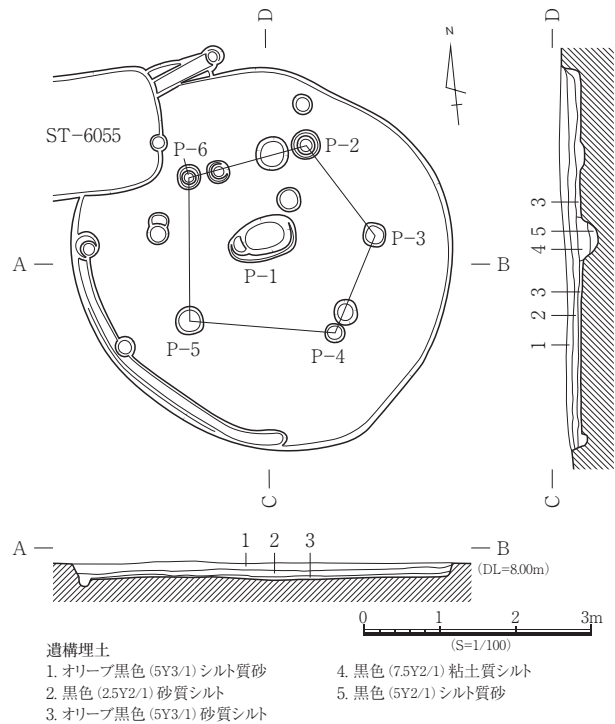


図3-31 ST-6022

出土遺物

弥生土器(図3-32 6232～6238)

6232は壺で、口頸部は外反し、貼付口縁となる口縁端部にはハケ状工具による刺突文を施文する。また、口縁部外面には粘土帯を接合した際の指押えの痕が残存する。なお、粘土帯はハケ調整してから貼付している。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6233は甕で、口縁部は外反し、端部下端にヘラ状工具による刻目、その下に微隆起突帯をヨコナデ調整で作り出し、下半にクシ描直線文を施し、粘土帯の接合痕跡を消す。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

6234・6235は底部で、6234は壺、6235は甕とみられる。6234の内面にはヘラ磨きが施される。胎土には、6234が中粒砂から極粗粒砂を比較的多く、6235が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

6236は蓋で、天井部は凹面となり、口縁部はハの字形に開き端部を細く仕上げ。外面にはヘラナデ調整が施される。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

6237・6238はミニチュア土器で、6237は小壺、6238は鉢を模ったものとみられる。6237の胴部外面にはハケ調整、6238の内面にはヘラ削り、外面には下から上へのヘラ磨きを施す。6238の口縁部には外側から2個の円孔を穿つ。また、底部は貼付け高台となり、内面に製作時の指押えの痕が残存し、外面はヘラナデ調整で消される。胎土には細粒砂から粗粒砂を6237が少し、6238が比較的多く含む。

石製品(図3-32 6239～6252)

6239は2穴、6240は抉りのある石庖丁である。6239は長方形を呈し、全面を研磨し、両面から穿孔する。刃部長9.3cm、幅0.4cmを測る。6240は、片面が研磨され平滑であるが、片面は剥離のままとなり、

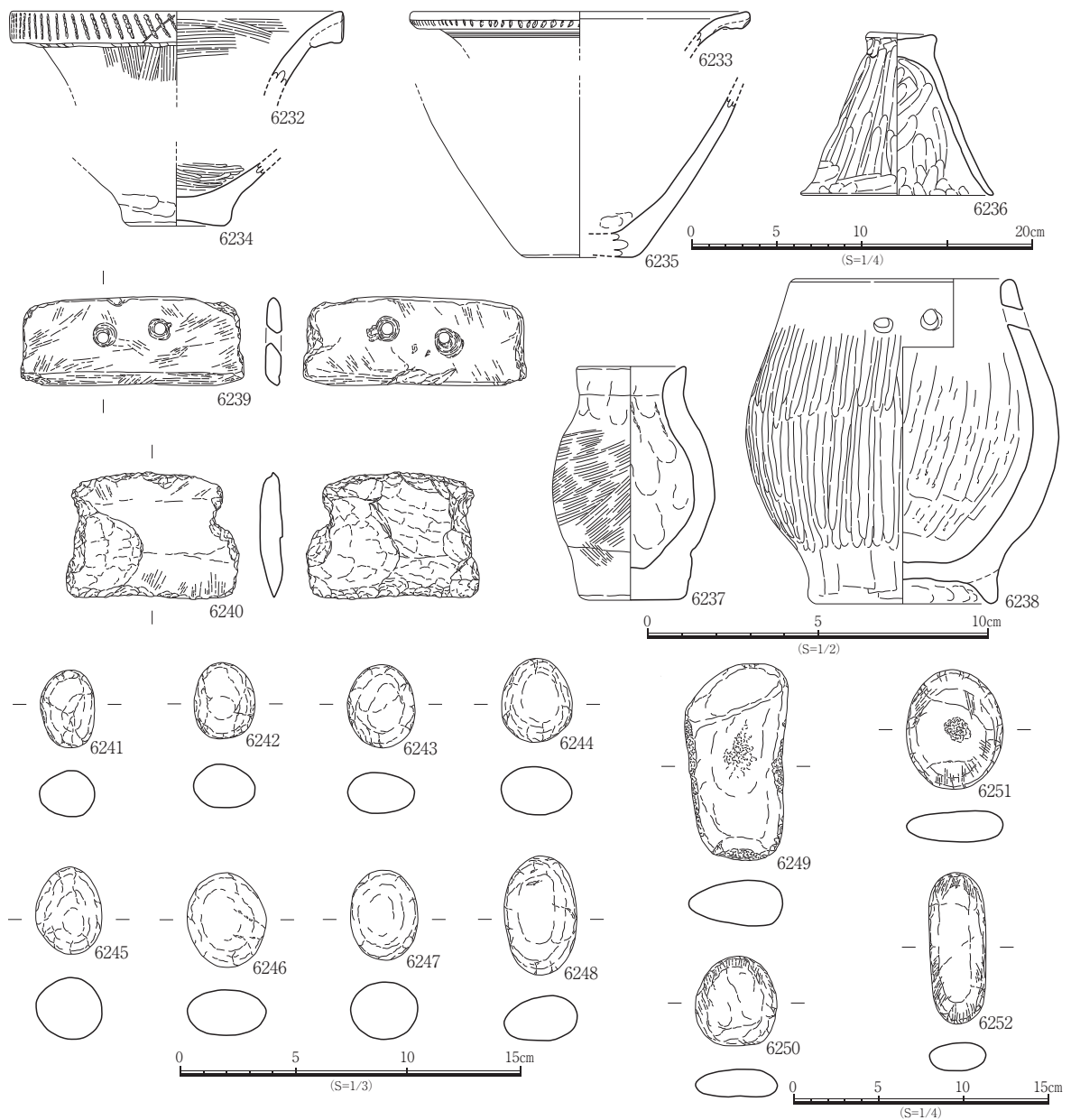


図3-32 ST-6022出土遺物実測図

両端に抉りが残存する。刃部長7.2cm, 幅0.8cmを測る。

6241～6248は投弾で、断面は楕円形から円形を呈し、重量は23.2～46.9gを測る。いずれも表面は平滑である。

6249は叩石で、片面中央部に弱い敲打痕、側面3ヵ所に強い敲打痕が残存する。

6250～6252は磨石で、いずれも扁平で縁辺を中心に擦痕が残存し、6251の片面中央部には弱い敲打痕が残存する。

ST-6023 (図3-33)

VI-2区の中央北端部、SD-6001の西隣で検出した円形の小型竪穴建物跡で、北側は調査区外に続く。径は3.82mで、遺存する壁高は17cm, 床面の標高は7.915～7.954mを測る。付属遺構として、中央ピット(P-1)と壁溝および6個のピットを確認した。この内、主柱穴と考えられるピットは位置関係から中央ピットを囲むP-2～5と未検出の1個ではないかとみられ、5本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-2は径25cmの円形で、深さ39cm, P-3は径25～28cmの楕円形で、深さ30cm, P-4は径24cmの円形で、深さ43cm, P-5は径28cmの円形で、深さ30cmを測る。柱間寸法は1.00～1.50m程度とみられる。中央ピット(P-1)は東側に段部があり、長径0.60m, 短径0.46mの不整楕円形で、深さ20cmを測る。検出した壁溝は南棟壁に沿った部分のみで、幅15～20cm, 深さ5cm, 延長1.72mを測る。

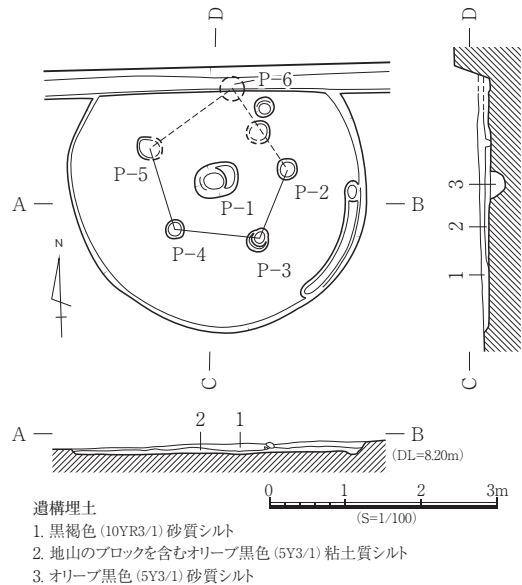


図3-33 ST-6023

埋土は上下2層に分層され、上層は黒褐色(10YR3/1)砂質シルト、下層は地山のブロックを含むオリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトで、中央ピットにはオリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルトの堆積が認められた。出土遺物には弥生土器92点がみられ、弥生土器2点(6253・6254)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-34 6253・6254)

6253は甕で、貼付口縁となり、貼付した粘土帯の接合痕を消すために口唇部はヨコナデ調整され、端部は細く尖ったようになる。外面には指頭圧痕が残存する。胎土には中粒砂から粗粒砂を少し含む。

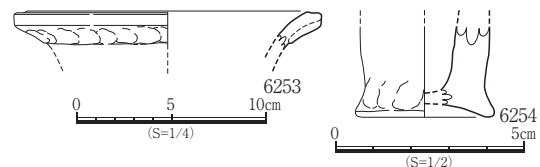


図3-34 ST-6023出土遺物実測図

6254はミニチュア土器で、上げ底の底部から胴部はほぼ直立し、甕を模ったものとみられる。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

ST-6024

VI-2区の北東端部、SK-6058の東隣で検出した円形の竪穴建物跡とみられるもので、大半は調査区外に続く。径は約5.30mと推定され、遺存する壁高は8cm, 床面の標高は8.035～8.052mを測る。付属遺構として、壁溝と7個のピットを確認した。この内、P-1は径28cmの円形で、深さが32cmあり、

支柱穴とみられるが、繋がり不明である。検出した壁溝は西壁に沿って巡っており、幅15cm、深さ6cm、延長1.43mを測る。埋土はオリブ黒色(5Y3/1)砂質シルトであった。遺物は出土しなかった。

ST-6025 (図3-35)

VI-1区の中央部、ST-6026の床面で、ST-6026の壁溝の内側で異なる壁溝を検出したことによりその存在が推測された竪穴建物跡で、遺存する壁溝の形状から一辺が約2.50mで、対角線の長さが約4.70mの五角形ではなかったかとみられる。床面の標高は7.457～7.491mである。中央ピット(P-1)が1個しか検出されていないことから中央ピットは再利用され、ST-6025がST-6026の建替え前の住居と考えられる。付属遺構として中央ピット(P-1)と壁溝および支柱穴と考えられる6個のピットを確認した。このピット以外にも関連するピットが存在していたと思われるが、確認できていない。支柱穴は壁溝との位置関係から中央ピットを囲むP-2～6とみられ、5本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-2は径32cmの円形で、深さ28cm、P-3は径27～37cmの楕円形で、深さ33cm、P-4は径42cmの円形で、深さ50cm、P-5は径30cmの円形で、深さ34cm、P-6は径25～28cmの楕円形で、深さ47cmを測る。柱間寸法は1.30～2.00mである。中央ピット(P-1)は播り鉢状に段部があり、長径1.30m、短径0.70mの不整楕円形で、深さ44cmを測るが、この建物に関連した埋土は確認できていない。検出した壁溝は東壁に沿ったもので、幅13～34cm、深さ3～6cm、延長5.52mを測る。埋土は、壁溝の埋土である地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルトと同じではなかったかとみられる。遺物にはP-2から出土した弥生土器1点とサヌカイト片1点(2.1g)がみられたが、図示できなかった。

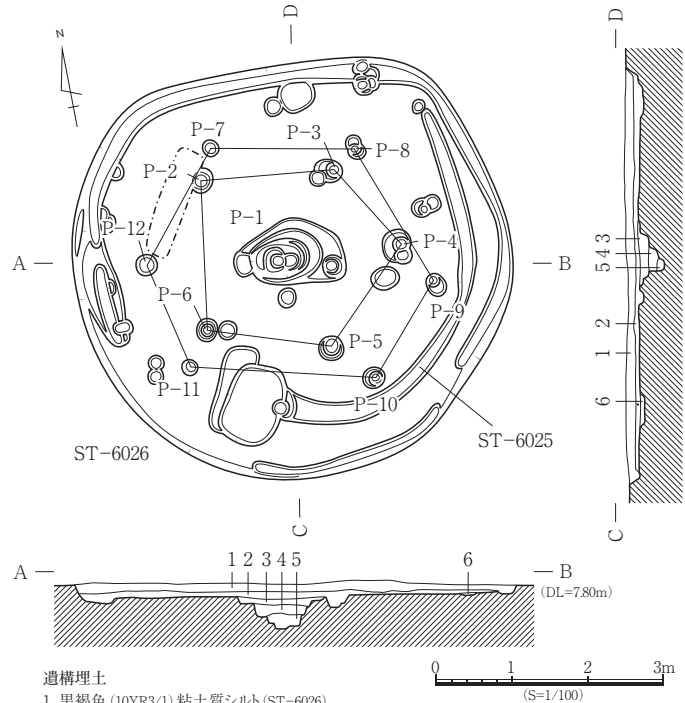


図3-35 ST-6025・6026

ST-6026 (図3-35)

VI-1区の中央部、西壁際で検出した多角形の竪穴建物跡で、一辺が2.50～3.80mで、対角線の長さが約5.90mの六角形ではなかったかとみられる。遺存する壁高は17～34cm、床面の標高は7.402～7.487mである。前述とおり中央ピット(P-1)が1個しか検出されていないことから中央ピットは再利用され、ST-6026がST-6025を拡張して建替えたものと考えられる。付属遺構として中央ピット(P-1)と壁溝および31個のピットを確認した。このピットの中にはST-6025のピットが存在すると思われるが、確認できていない。この内、支柱穴は壁溝との位置関係から中央ピットを囲むP-7～12とみられ、6本柱で棟を支えていたものと考えられ、ST-6025のそれより一回り大きくなる。P-7

は径21cmの円形で、深さ2cm、P-8は径22cmの円形で、深さ45cm、P-9は径25～30cmの楕円形で、深さ35cm、P-10は径28cmの円形で、深さ53cm、P-11は径20cmの円形で、深さ42cm、P-12は径27cmの円形で、深さ11cmを測る。柱間寸法は1.50～2.45mである。中央ピット(P-1)は掘り鉢状に段部があり、長径1.30m、短径0.70mの不整楕円形で、深さ44cmを測り、弥生土器4点が出土する。検出した壁溝は南西壁部分と南東壁の一部を除いて巡っており、幅13～36cm、深さ2～10cm、延長13.76mを測る。壁溝の状況からすると入口は南西部にあったものとみられる。埋土は基本的に黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトで、地山の土粒の含む度合いにより2層に分層され、中央ピットは地山のブロックの含む具合によりさらに3層に分層される。出土遺物には弥生土器114点、土製品1点、石製品14点、サヌカイト片20点(53.1g)、軽石1点がみられ、弥生土器3点(6255～6257)、土製品1点(6258)、石製品10点(6259～6268)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-36 6255～6257)

6255は甕で、胴部は内傾して立ち上がり、頸部から外反し、口縁部で大きく開く。口縁端部は凹面となり、下端にヘラ状工具による刻目を施し、肩部外面には爪でつまみ出した2条の微隆起突帯を貼付する。胎土には粗粒砂から極粗粒砂を多く含む。

6256は甕の底部で、器面には丁寧なナデ調整を施す。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

6257は小型の高杯で、裾部はハの字形に開き、端部を上方に拡張する。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

土製品(図3-36 6258)

紡錘車の未成品で、土器を転用する。円孔は未貫通で、片面中央部が丸く窪む。胎土には中粒砂か

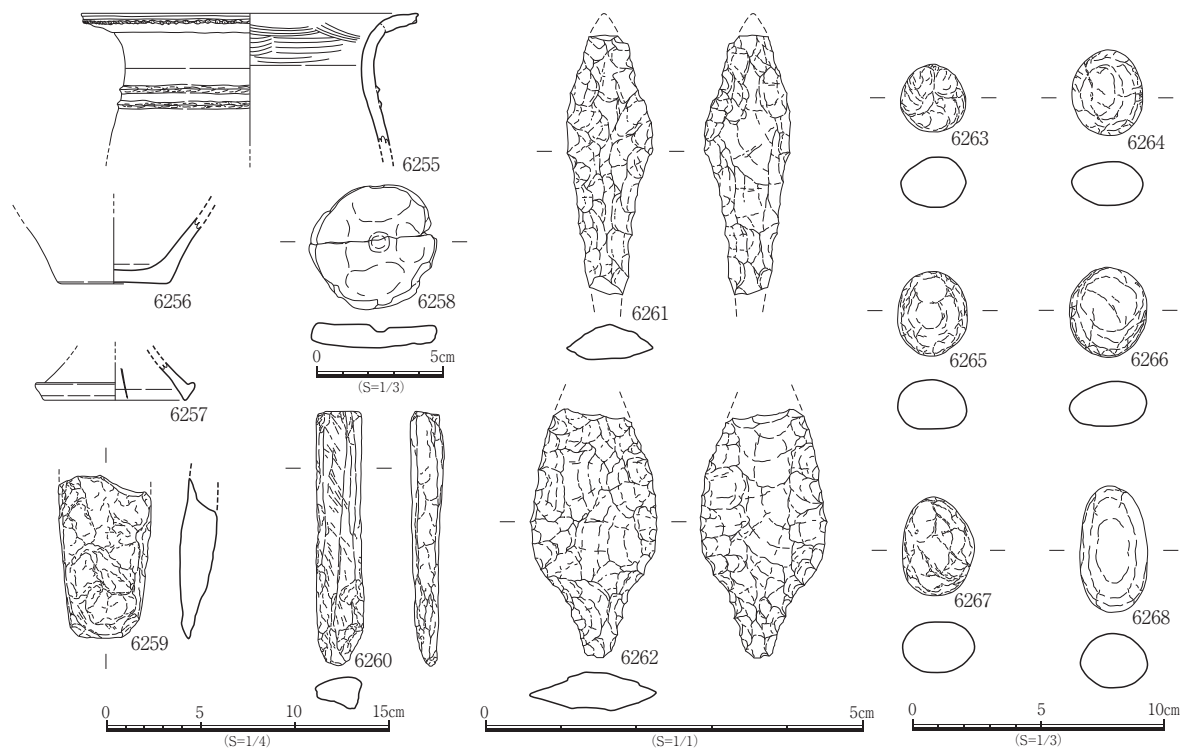


図3-36 ST-6026出土遺物実測図

1. VI区 (1) 弥生時代

ら極粗粒砂を多く含む。

石製品(図3-36 6259～6268)

6259・6260は石斧で、6259は珍しいサヌカイト製で、刃部以外は風化する。刃部長3.6cm, 幅0.7cmを測る。6260は、側面が3面あり、内2面は剥離面のままで、残りの1面のみ研磨され、刃部を作り出している部分もあることから未成品と考えられる。

6261・6262はサヌカイト製の石鏃で、6261は凸基無茎、6262は凸基となる。

6263～6268は投弾で、表面は平滑となり、重量は19.3～42.3gを測る。

ST-6027(図3-37)

VI-1区の南部、SK-6010を切った形で検出した多角形の竪穴建物跡で、一辺が2.50～3.00mで、対角線の長さが約5.80mの六角形ではなかったかとみられる。遺存する壁高は26～32cm, 床面の標高は7.384～7.409mである。付属遺構として中央ピット(P-1)と壁溝および11個のピットを確認した。この内、主柱穴は壁溝との位置関係から中央ピットを囲むP-2～7とみられ、6本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-2は径28cmの円形で、深さ22cm, P-3は径24cmの円形で、深さ18cm, P-4は径30cmの円形で、深さ7cm, P-5は径30cmの円形で、深さ23cm, P-6は径30cmの円形で、深さ21cm, P-7は径28cmの円形で、深さ22cmを測る。配置状況からP-4を主柱穴としたが、深さが浅く、隣接するP-8(径30cmの円形で、深さ32cm)が主柱穴であった可能性も考えられる。柱間寸法は1.60～2.00mである。中央ピット(P-1)は播り鉢状に段部があり、長径1.20m, 短径0.90mの楕円形で、深さ43cmを測り、弥生土器11点(6278・6289), 石製品1点が出土する。検出した壁溝は北壁から南壁に沿って巡っており、幅12～18cm, 深さ2～5cm, 延長8.52mを測る。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトと黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトが互層に堆積しており、地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトによって10層程度に分層される。また、床面直上で、貼床ではないかとみられる堆積が認められる部分もある。出土遺物には弥生土器800点, 石製品16点, サヌカイト片20点(36.7g)がみられ、弥生土器21点(6269～6289), 石製品9点(6290～6298)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-38 6269～6289)

6269～6276は壺で、6269は全体を復元でき、底部は上げ底風となり、胴部は中位より下に最大径

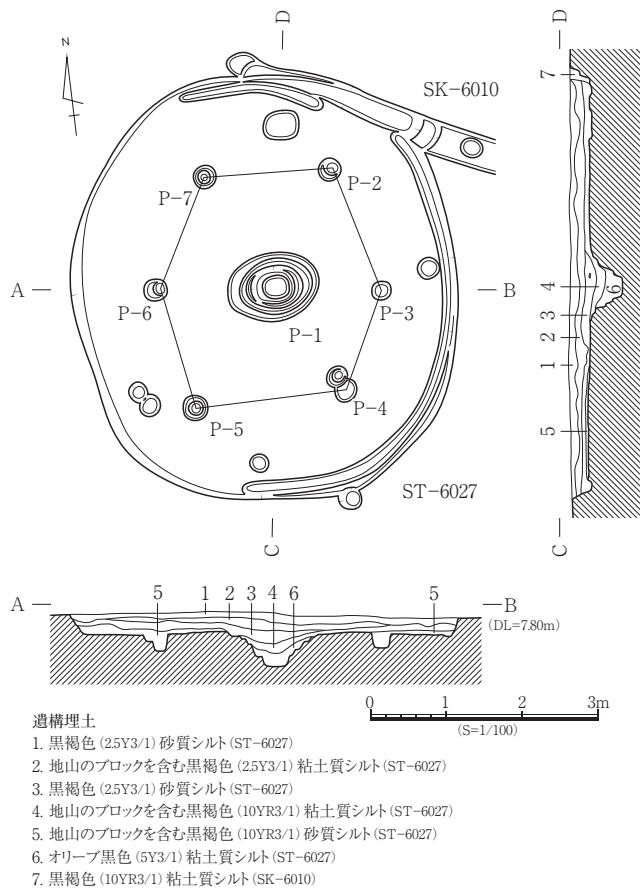


図3-37 ST-6027, SK-6010

があり、口頸部はやや外傾して立ち上がる。口縁部外面には3条の凹線と2個1対の円孔が2カ所に残り、頸部と胴部の境には断面三角形の突帯を貼付し、口縁部の円孔と対となる円孔を穿つ。胴部外面はナデ調整の後にヘラ磨きを施した後に、肩部に波状の刺突文を2段に施文する。胎土には細粒砂から中粒砂を多く含む。6270は、口縁部が直立する頸部から外反するもので、口縁端部を拡張し、擬凹線文を施す。頸部外面にはハケ目が残存する。胎土には中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。6271・6272は口縁部を肥厚し、端部下端にヘラ状工具による刻目、その下に微隆起突帯を作り出す。6272は微隆起突帯の下に爪痕が残存し、頸部外面にはヘラ状工具とみられるタテ方向の沈線がみられる。また、刻目は沈線状をなす。胎土には、6271が細粒砂から極粗粒砂を多く、6272は細粒砂から粗粒砂を多く含む。6273は長頸壺で、外面にはクシ描きによる5本単位の直線文5段を挟んで波状文が上下に施文される。胎土には中粒砂から粗粒砂を多く含む。6274も長頸壺とみられるもので、外面には2

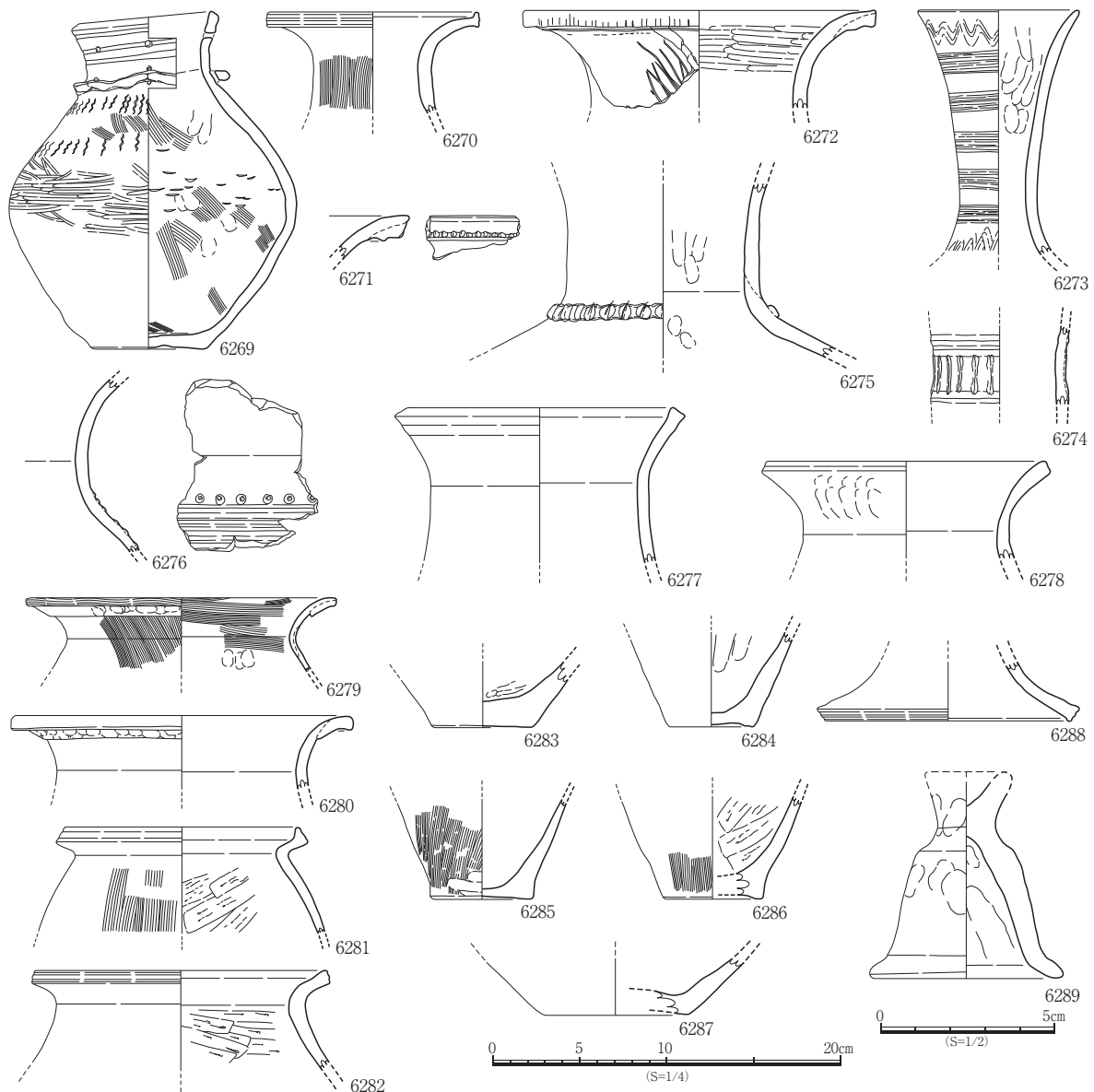


図3-38 ST-6027出土遺物実測図1

段の貼付微隆起突帯(上は2条, 下は1条)の間に棒状浮文を貼付する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。6275・6276は口縁部を欠くもので, 6275には6272の口縁部, 6276には6271の口縁部がつくものとみられる。6275の肩部外面下端には細い粘土紐を貼付し, 指で摘んだ突帯が付く。6276の肩部外面には円形浮文と3条の微隆起突帯が貼付される。胎土には中粒砂から極粗粒砂を, 6275が比較的多く, 6276が多く含む。

6277～6282は甕で, 6277・6278は, 口縁部が内傾する頸部から外傾するもので, 端部は浅い凹面となる。6278の口縁部外面には指頭圧痕が2段に残存する。胎土には, 6277が細粒砂から極粗粒砂, 6278が中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。6279・6280は貼付口縁となるもので, 6279は口頸部がくの字形を呈し口唇部から内面と頸部外面に細かなハケ目が残存する。6280の口頸部は外反する。いずれも, 口縁部外面には指頭圧痕が残存する。胎土には, 6279が中粒砂から粗粒砂を少し含み, 6280が極粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。6281・6282は口頸部がくの字形を呈するもので, 口縁端部外面には擬凹線文を施す。いずれも胴部内面はヘラ削りとなり, 6281の頸部外面には煤が付着する。胎土には, 6281が細粒砂から粗粒砂, 6282が中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6283～6287は底部で, 6287が壺である以外は甕とみられる。6283・6286の外面は被熱で変色し, 6286の内面にはヘラ削りが施される。また, 6287の内底面には朱が付着する。胎土には, 6283が細粒砂から粗粒砂を比較的多く, 6284が中粒砂から極細粒中礫を多く, 6285が中粒砂から極粗粒砂を比較的多く, 6286が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く, 6287が粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

6288は高杯で, 裾部は大きく開き, 端部には擬凹線文が施される。胎土には中粒砂から極粗粒砂を少し含む。

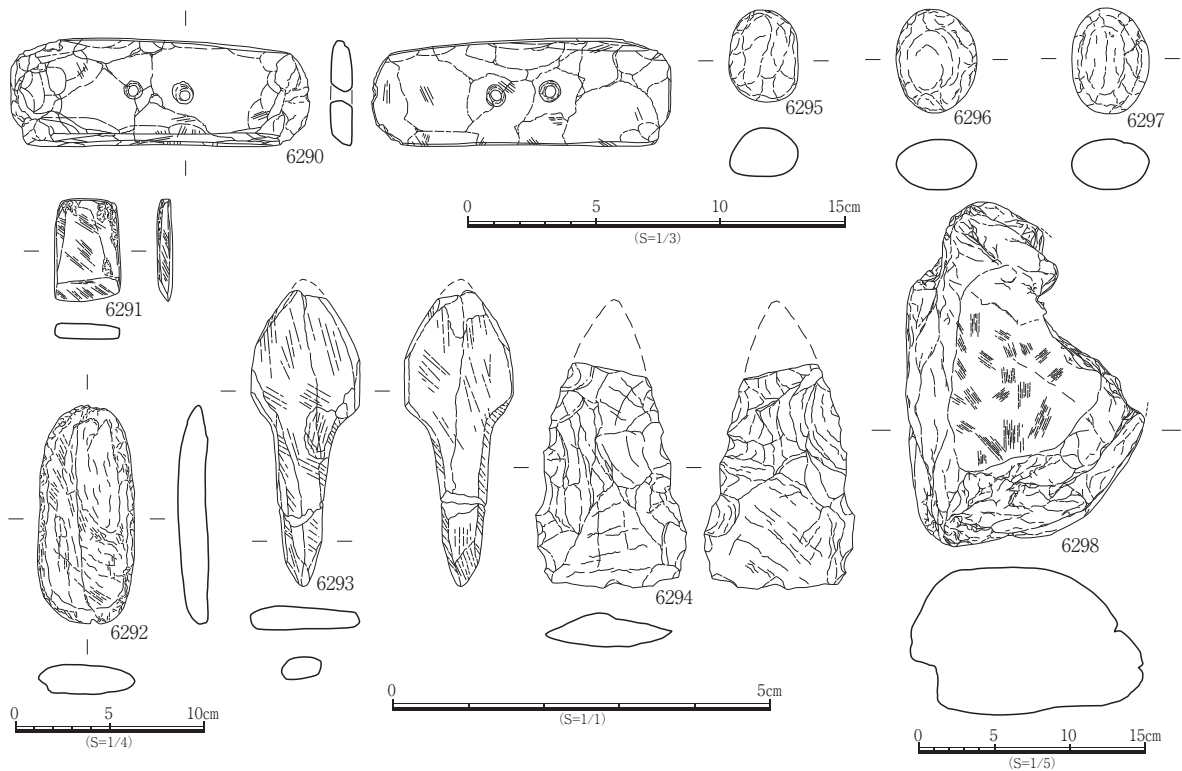


図3-39 ST-6027出土遺物実測図2

6289はミニチュア土器で、蓋を模ったものとみられ、つまみはハの字形に開き、天井部は外下方に下り、口縁部は短く外傾する。胎土には中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-39 6290~6298)

6290は長方形を呈する2穴の石庖丁で、全面を研磨するが、石材の関係で各所に亀裂とひび割れがみられる。紐孔は両面から穿孔される。

6291・6292は石斧で、6291は小型の扁平片刃石斧である。6292は片面が研磨面、一方が剥離面となり、刃部に刃こぼれがみられる。

6293・6294は石鏃である。6293は唯一の磨製石鏃で、凸基となる。6294はサヌカイト製で、平基となる。

6295~6297は投弾で、表面は平滑となり、重量は28.7~36.7gを測る。

6298は中粒砂岩の河原石を使用した砥石で、4面を使用する。

ST-6028(図3-40)

VI-2区の中央部、SK-6036の北隣、SK-6047に掘り込まれた形で検出した多角形の小型竪穴建物跡で、一辺が2.40~2.60mで、対角線の長さが約4.60mの六角形ではなかったかとみられる。遺存する壁高は4~8cmと浅く、床面の標高は7.840~7.880mである。また、建物は古代の溝跡(SD-6008)に中央部を掘り込まれていた。付属遺構として中央ピット(P-1)と21個のピットを確認した。この内、支柱穴は中央ピットを囲むP-2~5ではないかとみられ、4本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-2は径30cmの円形で、深さ14cm、P-3は径32cmの円形で、深さ54cm、P-4は径38cmの円形で、深さ43cm、P-5は径40cmの円形で、深さ44cmを測る。柱間寸法は1.65~1.90mである。中央ピット(P-1)は中央部に円形の落ち込みがあり、一辺0.85~1.20m程度の方形で、深さ35cmを測り、弥生土器14点(6300~6302・6304~6306)が出土する。埋土

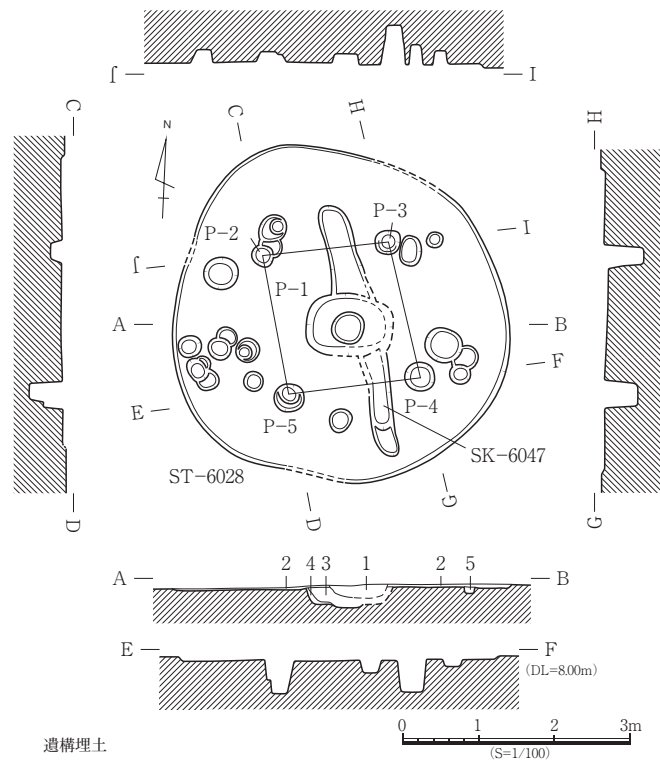


図3-40 ST-6028, SK-6047

は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/1)シルト質砂で、中央ピットは土質によりさらに3層に分層される。出土遺物には弥生土器185点、サヌカイト片2点(3.2g)がみられ、弥生土器8点(6299~6306)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-41 6299~6306)

6299は壺で、外面には3本単位のクシ描直線文と楕円形浮文が残存する。胎土には細粒砂から粗粒

砂を少し含む。

6300～6303は甕で、6300は貼付口縁となる。6301も外傾接合で、口縁部を肥厚する。口縁部は直立する頸部から屈曲し、端部にヘラ状工具による刻目を施す。胎土には中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。6302・6303は口頸部がくの字形を呈するもので、6302の口縁端部には凹線文が施され、口頸部外面には煤が付着する。6302の胴部内外面はナデ調整であるのに対し、6303の内面はヘラ削りの後にハケ調整を加え、外面は細かなヘラ磨きを施す。また、6303の胴部外面には煤が部分的に付着する。胎土には、6300が細粒砂から粗粒砂、6301が中粒砂から粗粒砂、6302・6303が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

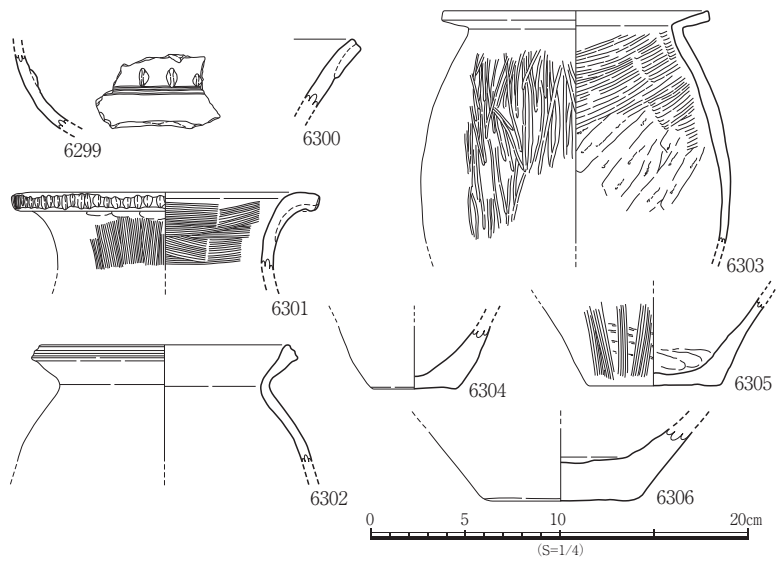


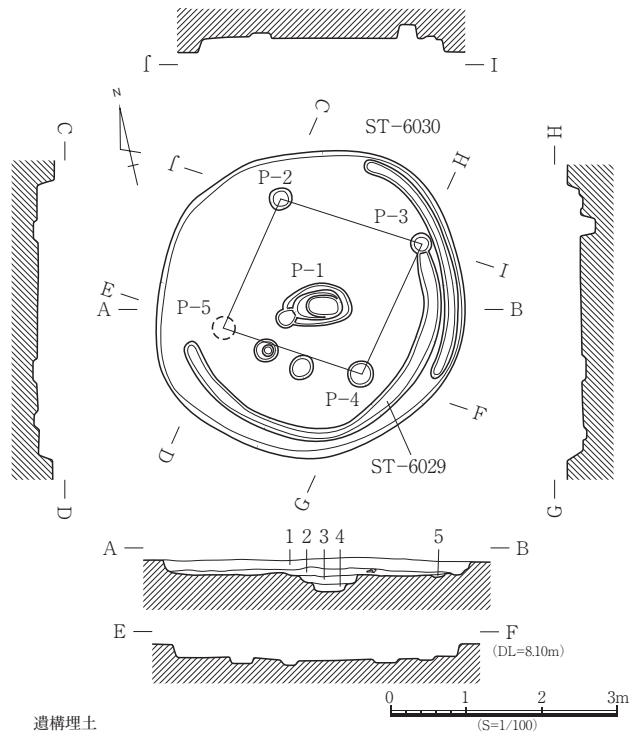
図3-41 ST-6028出土遺物実測図

6304～6306は底部で、6306が壺とみられる以外は甕である。調整は基本的にナデ調整であるが、6305の外面にはタタキの後にハケ調整が施される。胎土には、6304が中粒砂から極粗粒砂を多く、6305が細粒砂から粗粒砂を比較的多く、6306が中粒砂から極細粒中礫を比較的多く含む。

ST-6029 (図3-42)

VI-2区の南東部、ST-6031の南隣、ST-6030の床面でST-6030の壁溝の内側を巡る壁溝を検出したことによりその存在が推測された竪穴建物跡で、ST-6030より一回り小さい多角形とみられ、一辺2.00～2.40mで、対角線の長さが約3.80mの五角形ではなかったかとみられる。中央ピット(P-1)が1個しか検出されていないことから再利用され、さらに検出された柱穴も限られていることから支柱穴も再利用されたものと考えられ、短期間で拡張され、建替えられたのではなかろうか。

よって、付属遺構として遺存するのは壁溝のみで、東壁から南壁に沿ったとみられ、幅12～20cm、深さ3～6cm、延長5.43m



遺構埋土

- 1. 黒褐色(10YR3/1)シルト質砂(ST-6030)
- 2. オリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルト(ST-6030)
- 3. 黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト(ST-6030)
- 4. 黒色(10YR3/2)砂質シルト(ST-6030)
- 5. 黒色(10YR2/1)シルト質砂(ST-6029)

図3-42 ST-6029・6030

を測る。埋土は、壁溝の埋土から黒色(10YR2/1)シルト質砂とみられる。出土遺物には、弥生土器1点が壁溝から出土しているが、図示できなかった。

ST-6030 (図3-42)

VI-2区の中央部, ST-6031の南隣で検出した多角形の小型竪穴建物跡で, ST-6029の建替えとみられ, 一辺が2.40~2.50mで, 対角線の長さが約4.10mの五角形と考えられる。遺存する壁高は20~22cmで, 床面の標高は7.750~7.770mである。付属遺構として中央ピット(P-1)と壁溝および6個のピットを確認した。この内, 支柱穴は中央ピットを囲むP-2~4とみられるが, P-2の対角線上で柱穴は確認されておらず, 判然としない。ただし, 柱穴の配置から考えると4本柱で棟を支えていたものとみられる。P-2は径25cmの円形で, 深さ7cm, P-3は径27cmの円形で, 深さ18cm, P-4は径33cmの円形で, 深さ5cmを測る。柱間寸法は1.85~1.95m程度とみられる。中央ピット(P-1)は西側に段部があり, 長径0.88m, 短径0.56mの不整楕円形で, 深さ26cmを測り, 弥生土器11点が出土する。壁溝は北東壁に沿った部分が検出されており, 幅14~18cm, 深さ3cm, 延長3.31mを測る。埋土は大きく上下2層に分層され, 上層が黒褐色(10YR3/1)シルト質砂, 下層がオリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルトで, 中央ピットは土質によりさらに2層に分層される。出土遺物には弥生土器299点, 石製品4点, サヌカイト片11点(31.7g), 頁岩片1点がみられ, 弥生土器7点(6307~6313), 石製品4点(6314~6317)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-43 6307~6313)

6307~6311は甕で, 6307~6309は口頸部が緩やかに外反し, 6308・6309は口縁部を肥厚する。6308の胴部外面にはハケ調整の後にヘラ磨きを施し, 口縁部外面には指頭圧痕が残存する。6310は口頸部がくの字形を呈するもので, 肥厚された口縁端部には擬凹線文を施文する。口唇部から胴部外面には煤が付着する。胎土には, 6307・6309が細粒砂から粗粒砂を比較的多く, 6308が細粒砂から極粗粒砂を多く, 6310が細粒砂から粗粒砂を少し含む。6311は肩部外面に作り出し微隆起突帯2条とクシ描直線文3条を施文した上で楕円形浮文を貼付する。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

6312は甕, 6313は壺の底部とみられる。6312の外底面にはヘラ削り, 6313の外底面は未調整となる。

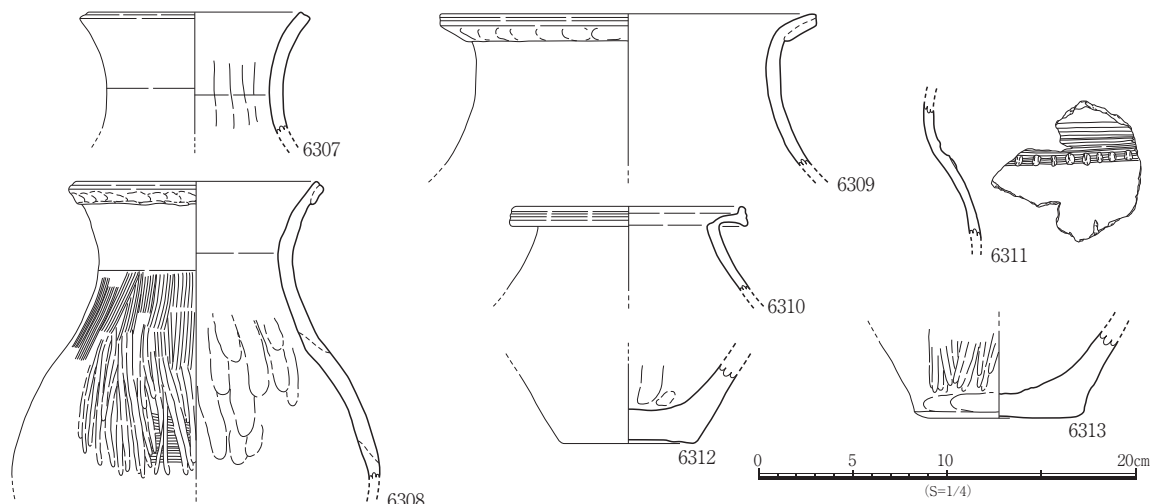


図3-43 ST-6030出土遺物実測図1

胎土には、6312が粗粒砂を中心に細粒砂から極粗粒砂を比較的多く、6313が細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

石製品(図3-44 6314~6317)

6314・6315は小型のサヌカイト製石鏃で、いずれも平基となる。

6316は投弾で、表面は平滑で、重量は28.1gを測る。

6317は叩石で、棒状となり、先端が摩滅し、各所に擦痕が残存する。

ST-6031(図3-45)

VI-2区の東部、ST-6033の南隣、SK-6043に掘り込まれた形で検出した多角形の大型竪穴建物跡で、一辺が2.00

~4.70mで、対角線の長さが約8.20mの七角形とみられる。建物跡の中央部は中世の溝跡(SD-6010)に掘り込まれており、中央ピットなどは遺存していない。遺存する壁高は16~20cmで、床面の標高は7.835~7.876mである。付属遺構として壁溝および28個のピットを確認した。この内、支柱穴は壁に沿ったP-1~8とみられ、8本柱で棟を支えていたものと考えられる。ただし、P-8は中世の遺構に切れ未確認である。P-1は径30~40cmの楕円形で、深さ20cm、P-2は径22cmの円形で、深さ19cm、P-3は径32cmの円形で、深さ29cm、P-4は径25cmの円形で、深さ13cm、P-5は径30cmの円形で、深さ21cm、P-6は径34cmの円形で、深さ15cm、P-7は径30~35cmの楕円形で、深さ26cmを測る。柱間寸法は1.95~2.65mである。遺存する壁溝は北東壁と北西壁、および南西壁に沿った部分で、幅10~25cm、深さ4cm、延長10.01mを測る。埋土は大きく上下2層に分層され、上層が黒褐色(10YR3/1)シルト質砂、下層が黒色(2.5Y2/1)砂であった。出土遺物には弥生土器284点、土製品1点、石製品5点、サヌカイト片30点(33.6g)、チャート片・軽石各1点がみられ、弥生土器5点(6318~6322)、土製品1点(6323)、石製品4点(6324~6327)が図示できた。

出土遺物
弥生土器(図3-46 6318~6322)

6318は壺で、口縁部は貼付口縁で外反し、端部にヘラ状工具による斜格子文を施文した上で、2個1対の棒状浮文を貼付する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

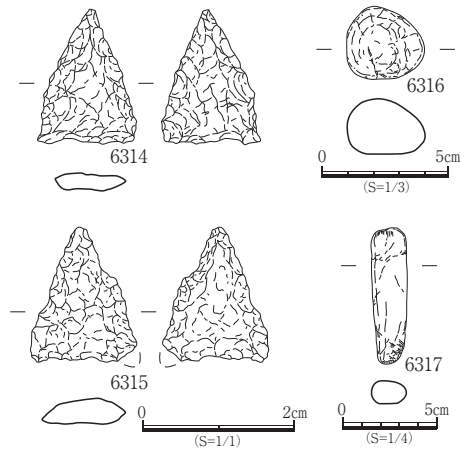


図3-44 ST-6030出土遺物実測図2

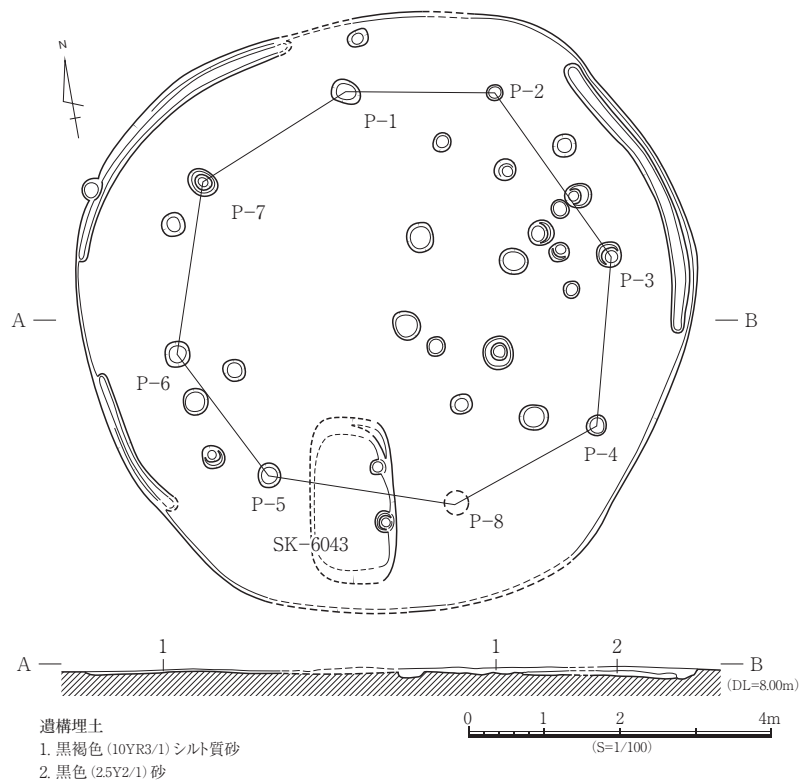


図3-45 ST-6031, SK-6043

6319は甕で、6318と同じく口縁部は貼付口縁で外反する。口縁端部下端にはヘラ状工具による刻目を施し、外面にはヨコナデ調整の後にヘラ磨きを加える。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

6320・6321は甕の底部で、外面は、6320がハケ調整、6321がヘラナデ調整とナデ調整を施す。胎土には、細粒砂から極粗粒砂を6320が少し、6321が比較的多く含む。

6322はミニチュア土器で、蓋を模ったものとみられる。天井部は凹面となり、器面には指頭圧痕とナデ調整の痕が残存する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

土製品(図3-46 6323)

土器を転用した紡錘車の未成品で、円孔は未貫通となる。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

石製品(図3-47 6324~6327)

6324は小型蛤刃石斧で、断面は扁平となり、基部には柄に装着するための挟りが両側面に残存する。刃部長4.8cm、幅1.4cmを測る。

6325・6326は投弾で、表面は平滑となり、重量は、6325が26.1g、6326が123.9gを測る。

6327は細長い叩石で、表面は比較的平滑で、側面を中心に擦痕がみられ、片面中央と右側面に敲打痕が残存する。

ST-6032(図3-48)

VI-2区の東部、ST-6031の北隣で、中央ピット(P-1)と壁溝の一部を検出したことによりその存在が推定された建物跡で、壁溝の有り様から多角形の竪穴建物跡で、一辺が約2.30mで、対角線の長さが約4.70mの六角形とみられ、床面の標高は8.151~8.175mを測る。また、北東側には本建物跡の壁溝とは方向を異にする壁溝が検出されたことから別の建物跡(ST-6033)が想定されるものの、中央ピット(P-1)は1個しか確認されておらず、再利用されたものとみられる。このことから、規模の大きなST-6033はST-6032を拡張して建替えたものと考えられる。

付属遺構として中央ピット(P-1)と壁溝および4個のピット

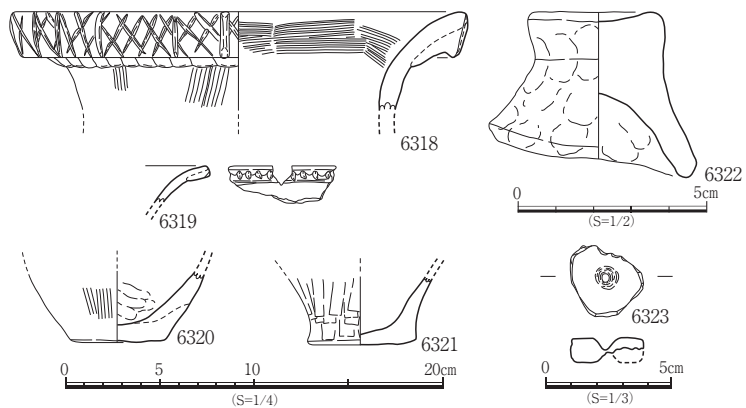


図3-46 ST-6031出土遺物実測図1

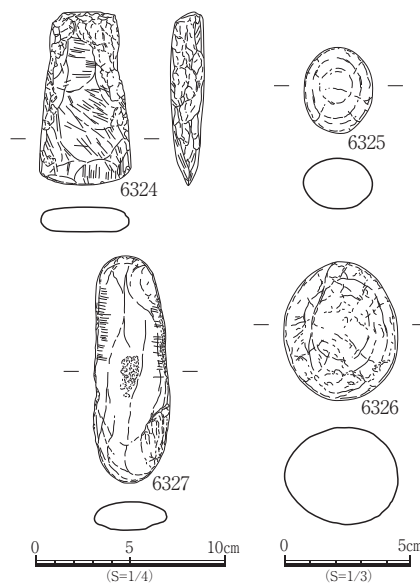


図3-47 ST-6031出土遺物実測図2

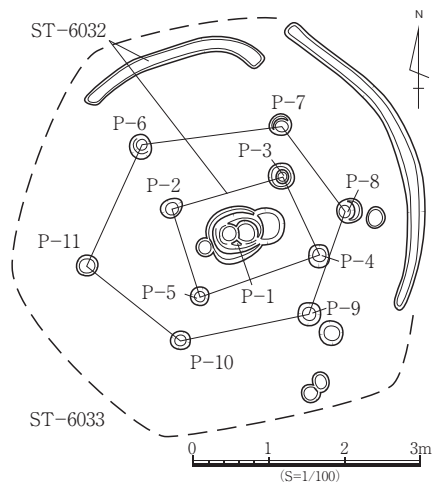


図3-48 ST-6032・6033

トを確認した。これ以外にも関連するピットが存在したとみられるが、確認されていない。主柱穴は中央ピットを囲むP-2～5とみられ、4本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-2は径24～30cmの楕円形で、深さ34cm、P-3は径35cmの円形で、深さ32cm、P-4は径30cmの円形で、深さ43cm、P-5は径24cmの円形で、深さ31cmを測る。柱間寸法は1.15～1.65mである。遺存する壁溝は北東壁に沿った部分とみられ、幅16～22cm、深さ2～4cm、延長2.54mを測る。埋土は、壁溝の埋土である黒褐色(2.5Y3/1)シルト質砂と同じであったものとみられる。出土遺物には弥生土器4点がみられたが図示できるものはなかった。

ST-6033 (図3-48)

ST-6032の建替えと考えられる建物で、壁溝の有り様からST-6032同様多角形の竪穴建物跡で、一辺が2.50～2.70mで、対角線の長さが約5.20mの六角形とみられ、床面の標高は7.952～8.163mを測る。付属遺構として中央ピット(P-1)と壁溝および10個のピットを確認した。主柱穴は壁溝との位置関係から中央ピットを囲むP-6～11とみられ、6本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-6は径30cmの円形で、深さ36cm、P-7は径30cmの円形で、深さ35cm、P-8は径34cmの円形で、深さ34cm、P-9は径30cmの円形で、深さ31cm、P-10は径25cmの円形で、深さ30cm、P-11は径27cmの円形で、深さ32cmを測る。柱間寸法は1.40～1.85mである。中央ピット(P-1)には段部と浅い落ち込みがみられ、長径0.75m、短径0.70mの楕円形で、深さ42cmを測り、弥生土器23点(6331)、石製品1点(6332)、サヌカイト片2点(1.5g)が出土する。遺存する壁溝は北東壁に沿った部分とみられ、幅16～28cm、深さ5～7cm、延長4.46mを測る。埋土は、壁溝の埋土である黒色(7.5Y2/1)粘土質シルトと同じであったものとみられる。出土遺物には弥生土器42点、石製品2点、サヌカイト片3点(6.1g)がみられ、弥生土器4点(6328～6331)と石製品2点(6332・6333)が図示できた。

出土遺物

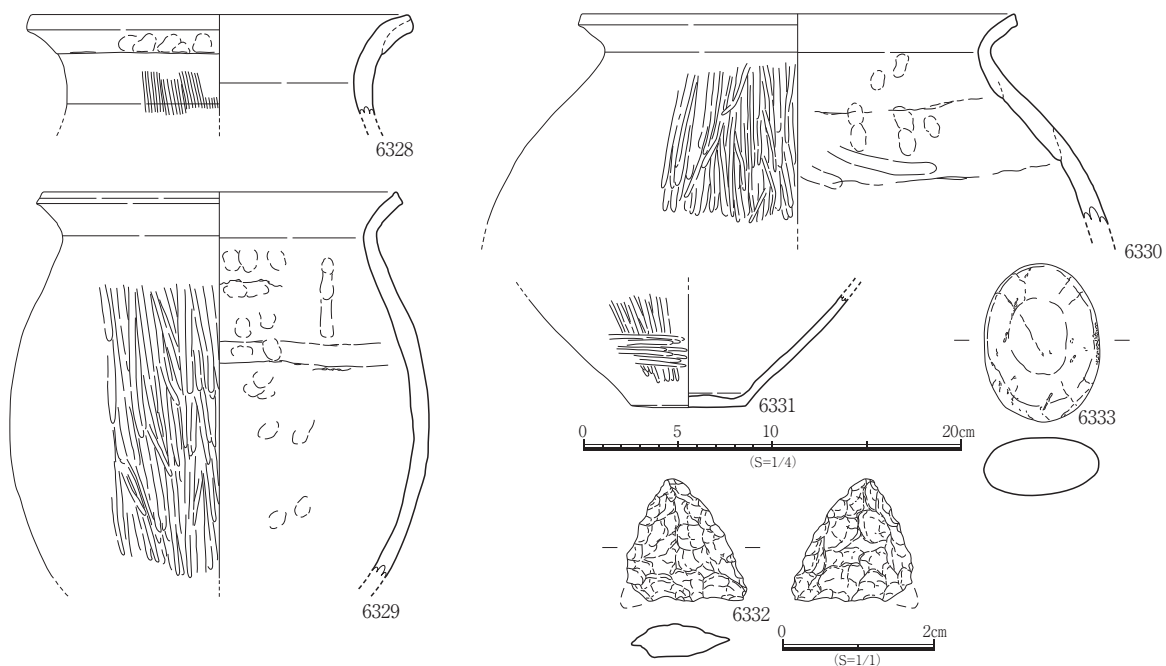


図3-49 ST-6033出土遺物実測図

弥生土器(図3-49 6328~6331)

いずれも甕で、口頸部は胴部から緩やかに外反する。6328は口縁部を肥厚し、6329は口縁端部が凹面、6330は口縁端部が浅い凹面となる。6329と6330は胴部外面にヘラ磨きを施し、6330には内傾接合の痕跡が明瞭に残存すると共に外面には黒班がみられる。胎土には、6328が細粒砂から粗粒砂を少し、6329が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く、6330が細粒砂から極細粒中礫を比較的多く含む。

6331は甕の底部とみられるもので、外面にはヘラ磨きが施され、胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

石製品(図3-49 6332・6333)

6332はサヌカイト製の小型の石鏃で、平基となる。

6333は磨石で、表面は平滑となり、右側面に弱い敲打痕が残存する。

ST-6034(図3-50)

VI-2区の東端部、SB-6024の南隣で検出した多角形の建物跡で、一辺が2.40~2.80mで、対角線の長さが約5.30mの七角形とみられ、床面の標高は8.041~8.067mを測る。中央ピット(P-1)は1個しか確認されていないが、検出されたピットの配置状況から2時期の変遷が考慮され、同一プランでの建替えが想定される。また、中世の屋敷跡を囲む溝跡(SD-6010)に掘り込まれており、遺存状態はあまり良くない。

付属遺構として中央ピット(P-1)と壁溝および15個のピットを確認した。まず、1期の支柱穴としては中央ピットを囲むP-2~6が考えられ、5本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-2は径30cmの円形で、深さ31cm、P-3は径46cmの円形で、深さ28cm、P-4は径42cmの円形で、深さ38cm、P-5は径33cmの円形で、深さ33cm、P-6は径34cmの円形で、深さ24cmを測る。

柱間寸法は1.35~2.55mである。2期の支柱穴としては同じく中央ピットを囲み、1期より一回り大きく配置されたP-7~12が考えられ、6本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-7は径35~38cmの不整円形で、深さ34cm、P-8は径35cmの円形で、深さ47cm、P-9は径40cmの円形で、深さ29cm、P-10は径48cmの円形で、深さ47cm、P-11は径35cmの円形で、深さ35cm、P-12は径34cmの円形で、深さ42cmを測る。柱間寸法は1.35~2.00mである。中央ピット(P-1)は播鉢状の段部となり、長径1.05m、短径0.80mの不整楕円形で、深さ33cmを測り、弥生土器74点(6336)、石製品1点、サヌカイト片5点が出土する。遺存する壁溝は東壁から西壁に沿った部分とみられ、幅10~26cm、深さ3~8cm、延長9.28mを測る。埋土は黒色(2.5~7.5Y2/1)砂質シルトで、中央ピットは土質の違いによりさらに5層に分層

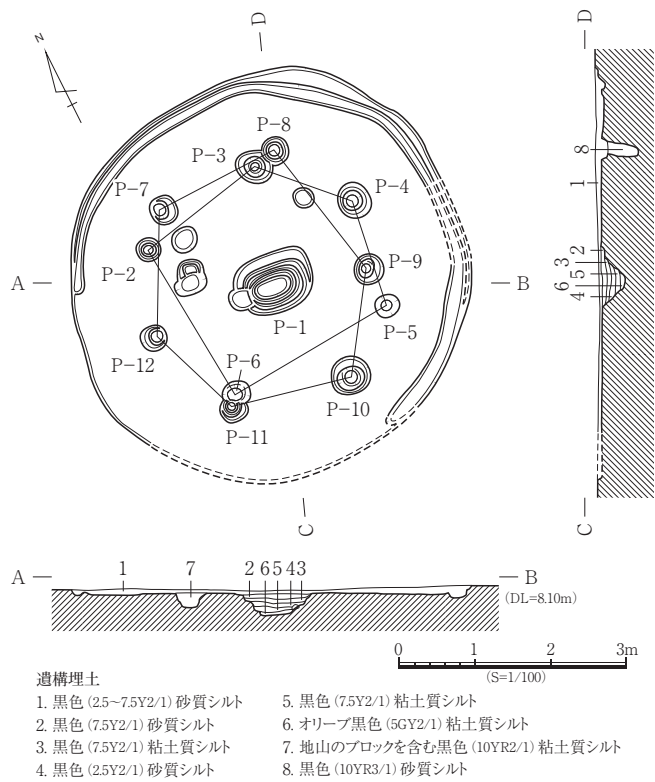


図3-50 ST-6034

される。出土遺物には弥生土器503点, 石製品6点, サヌカイト片38点(26.1g)がみられ, 弥生土器3点(6334~6336), 石製品4点(6337~6340)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-51 6334~6336)

6334は壺で, 頸部は丸味のある胴部から直立し, 外面にはヘラ磨きを施し, 頸部下端にやや大きめの指先で摘んだ微隆起突帯を貼付する。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

6335・6336は鉢で, 6335は口縁部が体部から外反し, 貼付口縁となり, 口唇部には煤が付着する。6336は高台を貼付した底部となる。胎土には, 6335が細粒砂から粗粒砂を比較的多く, 6336が細粒砂から粗粒砂を少し含む。

石製品(図3-51 6337~6340)

6337はサヌカイト製の石鏃で, 凹基となる。

6338は投弾で, 表面は平滑で, 重量は30.5gを測る。

6339・6340は磨石で, いずれも断面は扁平で, 表面は平滑となり, 縁辺を中心に擦痕が残存し, 6339は端部に弱い敲打痕がみられる。

ST-6035(図3-8)

VI-1区の中央部, ST-6005を掘り込んだ形で検出した隅丸方形の竪穴建物跡である。一辺は4.55~4.85mを測り, 主軸方向はN-8°-Eを示す。遺存する壁高は9~14cm, 床面の標高は7.572~7.602mを測る。付属遺構として, 中央ピット(P-1)と壁溝, 溝跡(SD-1)および7個のピットを確認した。この内, 支柱穴と考えられるピットは位置関係から中央ピットを囲むP-2~5とみられ, 4本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-2は径31cmの円形で, 深さ43cm, P-3は径28cmの円形で, 深さ24cm, P-4は径32cmの円形で, 深さ29cm, P-5は径20cmの円形で, 深さ30cmを測る。柱間寸法は1.55~2.05mである。中央ピット(P-1)は南東側に段部があり, 長径0.80m, 短径0.74mの不整円形で, 深さ28cmを測り, 弥生土器5点が出土する。また, 中央ピットから北壁に向って延びる幅14~22cm, 深さ1~3cm, 延長1.80mの溝跡(SD-1)を検出したが, 出土遺物はなく, 性格は判然としない。検出した壁溝は部分的に途切れるものの, 大半の壁沿いに設けられており, 幅14~22cm, 深さ2~3cm, 延長11.23mを測る。埋土は大きく2層に分層され, 上層は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト, 下層が黒色(2.5Y2/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器76点, 石製品3点, サヌカイト片36点(9.6g)がみられ, 弥生土器

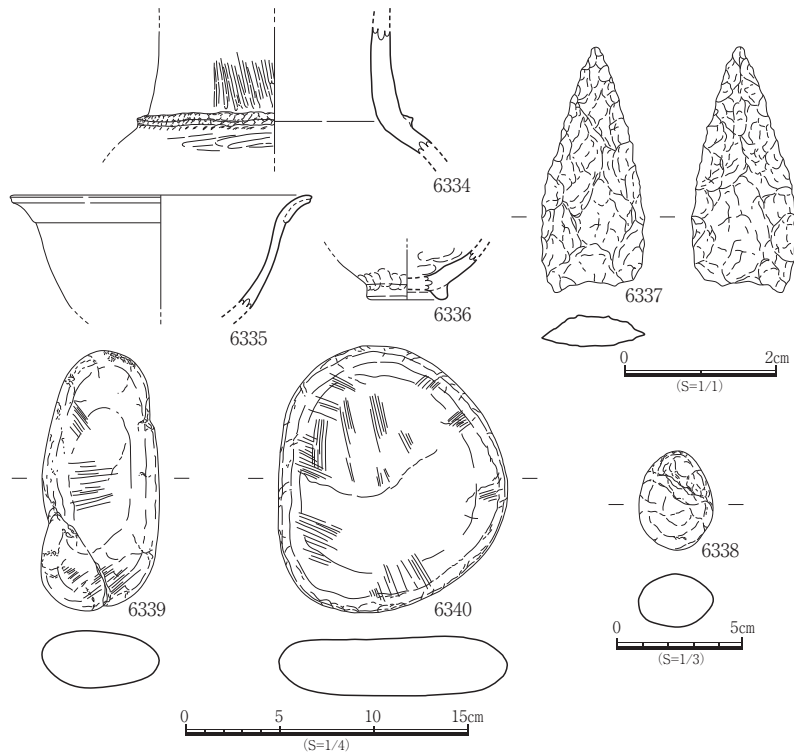


図3-51 ST-6034出土遺物実測図

3点(6341~6343), 石製品3点(6344~6346)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-52 6341~6343)

6341は甕で、口頸部はくの字形を呈し、口縁端部を肥厚し、擬凹線を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。6342も甕で、胎土には中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6343は蓋とみられるもので、天井部は柱状を呈し、胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-52 6344~6346)

いずれも磨石で、6344・6345は丸く扁平なもので、表面は平滑で擦痕が目立つ。6346は扁平な楕円形を呈し、表面は平滑で片面に擦痕が目立つ。

ST-6036(図3-53)

VI-2区の北西部、ST-6047に掘り込まれた形で検出した隅丸方形の竪穴建物跡である。一辺は4.10~4.28mを測り、主軸方向はN-28°-Wを示す。遺存する壁高は8cmと浅く、床面の標高は7.709~7.776mを測る。中央ピット部分はST-6047によって掘削されたものとみられ確認できた付属遺構は壁溝と6個のピットである。この内、主柱穴と考えられるピットは位置関係からP-1~4とみられ、4本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-1は径29cmの円形で、深さ45cm、P-2は径29cmの円形で、深さ34cm、P-3は径25cmの円形で、深さ33cm、P-4は径30cmの円形で、深さ38cmを測る。柱間寸法は1.45~1.95mである。なお、P-5(径28~35cmのほぼ円形で、深さ44cm)も比較的しっかりした柱穴であり、主柱穴であった可能性もある。検出した壁溝は南壁から東壁に沿って設けられており、幅12~16cm、深さ2cm、延長4.30mを測る。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトを主とする。出土遺物には弥生土器215点、土製品1点、石製品3点、サヌカイト片73点(7.5g)がみられ、弥生土器3点(6347~6349)、土製品1点

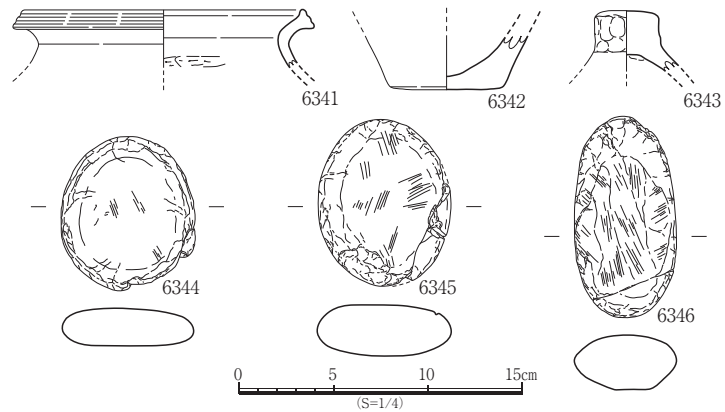
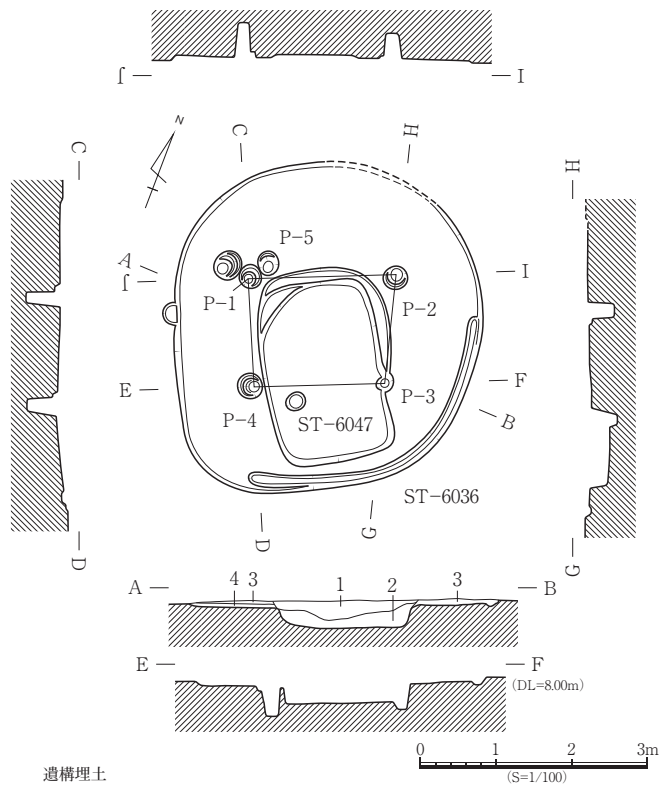


図3-52 ST-6035出土遺物実測図



遺構埋土

1. 地山のブロックを含む黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト(ST-6047)
2. 少量の炭化物と地山のブロックを多く含む黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト(ST-6047)
3. 黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト(ST-6036)
4. 地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト(ST-6036)

図3-53 ST-6036・6047

1. VI区 (1) 弥生時代

(6350), 石製品3点(6351~6353)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-54 6347~6349)

6347・6348は甕で、6347は口縁部がくの字形を呈し、口縁部上端を拡張する。胎土には雲母片と細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。6348は外面にハケ目が残存し、胎土には極粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

6349は高杯で、口縁部は体部から屈曲し、外上方へ立ち上がり、外面には擬凹線文を施文する。内外面にはヘラ磨きが施されるが、外面は放射線状をなす。胎土には6347同様、雲母片と細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

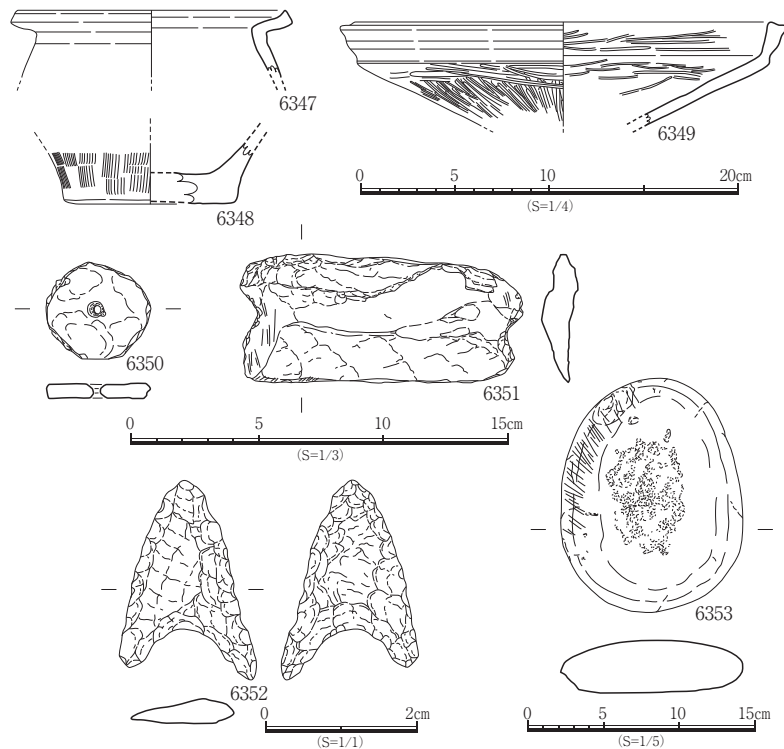


図3-54 ST-6036出土遺物実測図

土製品(図3-54 6350)

土器を転用した紡錘車で、径0.3cmの円孔を両面から穿つ。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

石製品(図3-54 6351~6353)

6351は両端に抉りのある石庖丁で、長方形となり、刃部長10.4cmを測る。

6352はサヌカイト製の石鎌で、風化が進む。形態は凹基となる。

6353は扁平な叩石で、両面中央を中心に敲打痕、縁辺と側面には擦痕が残存し、磨石としても使用されたとみられる。

ST-6037(図3-18)

VI-2区の西部、ST-6049に掘り込まれた形で検出した隅丸方形の竪穴建物跡である。一辺は5.70~5.80mを測り、主軸方向はN-65°-Eを示す。遺存する壁高は12~17cmで、床面の標高は7.762~7.815mを測る。付属遺構は中央ピットと壁溝および13個のピットである。この内、主柱穴と考えられるピットは位置関係から中央ピット(P-4)を囲むP-5~8とみられ、4本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-5は径28~35cmの不整円形で、深さ30cm、P-6は径32~37cmの不整円形で、深さ25cm、P-7は径22cmの円形で、深さ28cm、P-8は径32~38cmの不整円形で、深さ24cmを測る。柱間寸法は1.85~2.05mである。中央ピット(P-4)は段部を有し、底面に楕円形状の落ち込みがあり、一辺0.73~1.04mの方形で、深さ20cmを測り、弥生土器44点(6358・6361・6368・6370)が出土する。検出した壁溝は西壁を除いて設けられており、幅12~22cm、深さ5cm、延長12.07mを測る。西壁に入口が設けられていたことも考えられる。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/3)シルト質砂で、中央ピットは土質によりさらに2層に分層される。出土遺物には弥生土器333点、石製品2点、サヌカイト

片64点(25.3g)がみられ、弥生土器18点(6354～6371)、石製品1点(6372)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-55 6354～6371)

6354～6357は壺で、6354は、口頸部が外反し、口縁部が貼付口縁となるもので、端部下端にヘラ状工具による刻目、頸部外面は上半にナデ調整、下半にヨコナデ調整を施す。6355は、口縁部が大きく外反するもので、貼付口縁となり、端部に棒状工具で刻目を施す。6356は、口頸部が丸い胴部から短く外反し、端部を拡張して擬凹線文を施す。胴部内面下半にはヘラ削り、上半にはナデ調整を施し、部分的に指頭圧痕が残存する。外面はハケ調整の後にナデ調整を加える。6357は頸部が直立し、口縁部が外反し、外面にはタテ方向のハケ調整を施す。胎土には、6354が中粒砂から極粗粒砂を比較的多く、6355が細粒砂から粗粒砂を比較的多く、6356・6357が中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

6358～6366は甕で、6358は貼付口縁となり、口縁部は短く外反し、端部下端にヘラ状工具による刻目を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。6359～6362は、口縁部が内傾ないし内湾する胴部から大きく屈曲し、端部を肥厚し、凹線文を施文したもので、6362以外の外面には煤が

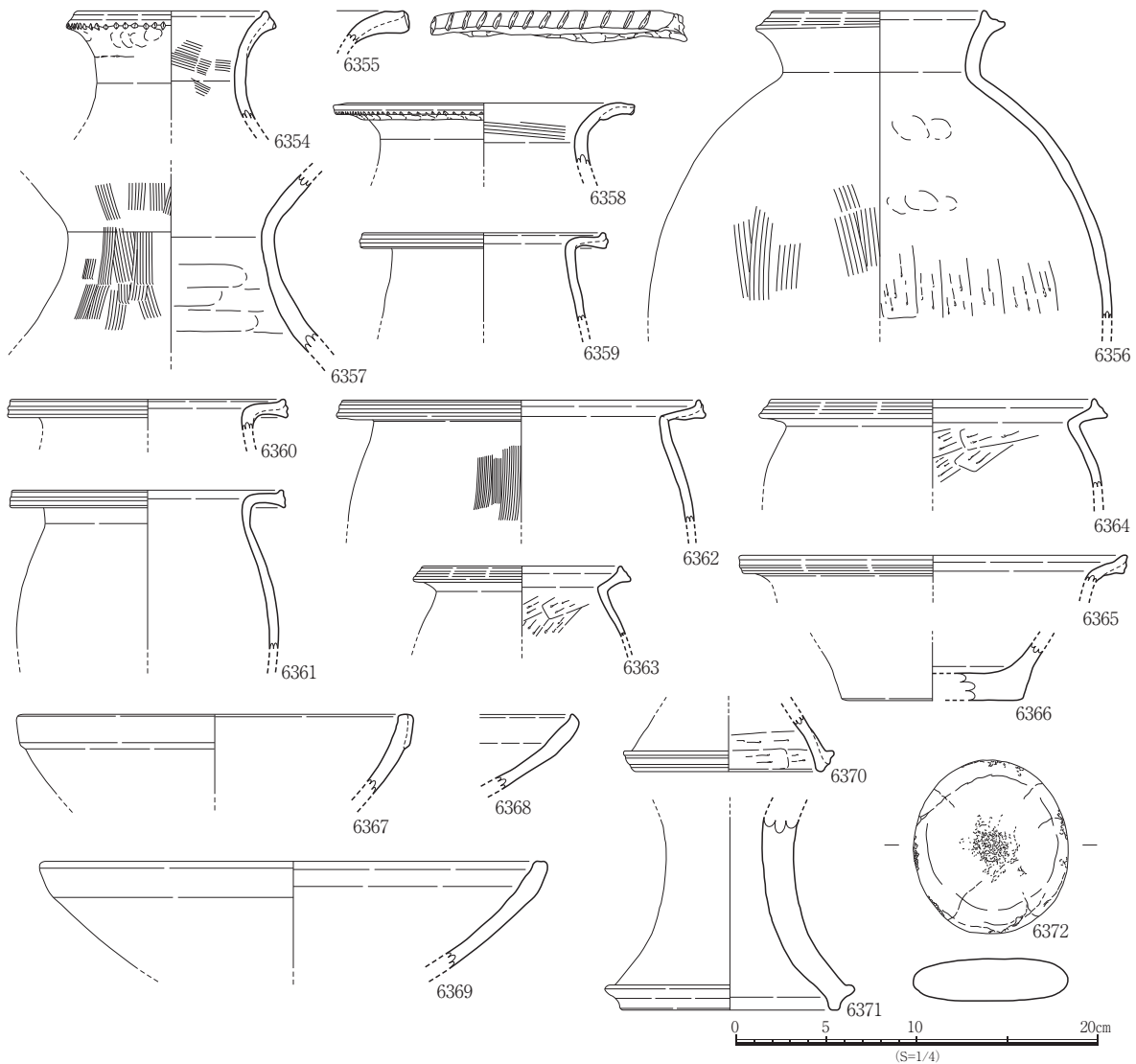


図3-55 ST-6037出土遺物実測図

附着する。いずれも胎土には中粒砂から粗粒砂を比較的多く、ないし多く含む。6363～6365は、口頸部がくの字形を呈するもので、口縁端部は肥厚され、擬凹線文が施文される。6363・6364の胴部内面にはヘラ削りが施される。胎土には、細粒砂から粗粒砂ないし極粗粒砂を6363・6364が比較的多く、6365が少し含む。6366は底部で、外面は被熱で変色し、器面が剥離する。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から粗粒砂を多く含む。

6367は鉢で、貼付口縁となり、胎土には中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6368～6371は高杯で、6368・6369は、口縁部が体部から小さく屈曲する。胎土には、6368が粗粒砂を中心に中粒砂から粗粒砂を比較的多く、6369が細粒砂から極粗粒砂を多く含む。6370は、裾部がハの字形に開くもので、内面にはヘラ削り、端部には凹線文を施す。6371は、裾部が斜め下方に開くもので、端部は凹面となる。胎土には、6370が細粒砂から粗粒砂を比較的多く、6371が中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

石製品(図3-55 6372)

扁平な叩石で、片面中央と側面に弱い敲打痕が残存する。

ST-6038(図3-56)

VI-2区の南西部、ST-6041に掘り込まれた形で検出した隅丸方形の竪穴建物跡である。一辺は4.52～4.95mを測り、主軸方向はN-22°-Wを示す。遺存する壁高は7～11cmと浅く、床面の標高は7.723～7.767mを測る。付属遺構は中央ピットと壁溝および11個のピットである。支柱穴となり得るピットが多く、2時期の変遷、建替えが想定される。ただし、中央ピット(P-1)は掘り返した痕跡が確認できないこととプランに拡張の痕跡が確認できないことから同一プランでの建替えと考えられる。まず、1期の支柱穴はP-2～5とみられ、4本柱で棟を支え、2期の支柱穴は一部同じピットを使用するがP-6・7・3・8・9・5とみられ、6本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-2は径34～43cmの不整形円で、深さ22cm、P-3は径29～34cmの不整形円で、深さ25cm、P-4は径45cmの円形で、深さ24cm、P-5は径22cmの円形で、深さ31cm、P-6は径30cmの円形で、深さ23cm、P-7は径32～35cmの不整形円で、深さ27cm、P-8は径30～38cmの不整形円で、深さ33cm、P-9は径30～35cmの不整形円で、深さ26cmを測る。柱間寸法は、1期が1.75～2.80m、2期が1.35～1.75mである。中央ピット(P-1)は段部を有し、長径1.45m、短径0.80mの楕円形で、深さ22cmを測り、弥生土器2点(6373)が出土する。検出した壁溝は南壁から東壁沿いと北東壁沿いの一部に設けられており、幅12～16cm、深さ3～7cm、延長7.05mを測る。埋土は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトで、中央ピットは土質によりさらに2層に分層される。出土遺物には弥生土器121点、サヌカイト片1点(10.6g)がみられ、弥生土器3点(6373～6375)が図示できた。

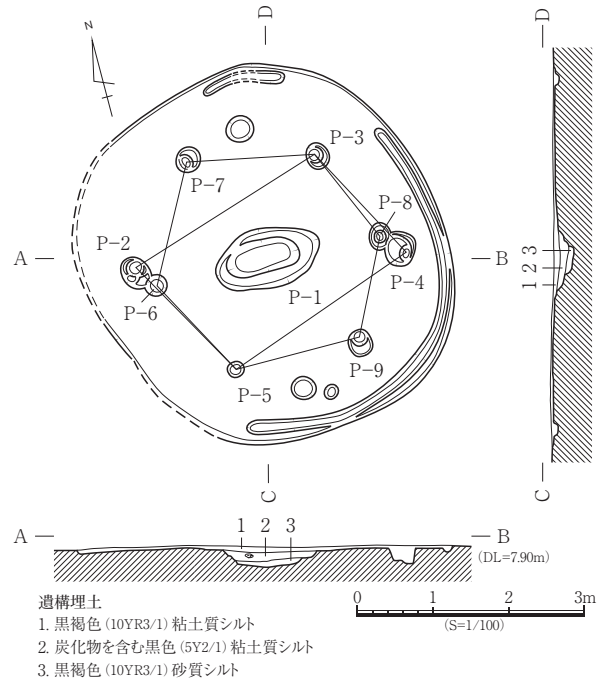


図3-56 ST-6038

出土遺物

弥生土器(図3-57 6373~6375)

6373は甕の底部とみられるもので、内面にはヘラ削りを施し、胎土には中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

6374・6375はミニチュア土器で、6374は壺、6375は甕を模ったものとみられる。いずれも胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から粗粒砂ないし極粗粒砂を比較的多く含む。

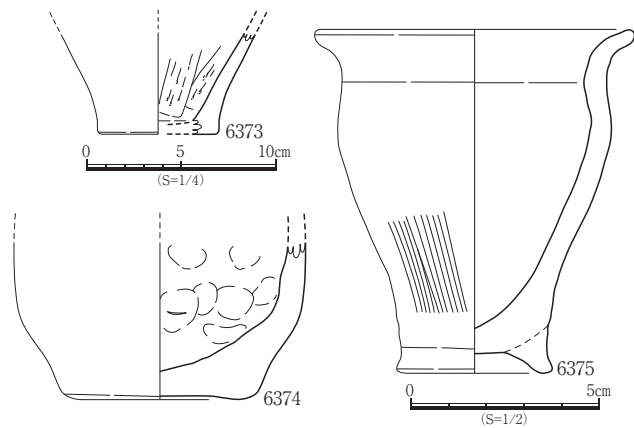


図3-57 ST-6038出土遺物実測図

ST-6039(図3-19)

VI-2区の南西部、ST-6014の東隣で中央ピット(P-12)と壁溝が検出されたことによりその存在が推定された建物跡で、壁溝の形状から隅丸方形の竪穴建物跡とみられ、一辺は4.80~4.85mで、主軸方向はN-78°-Eを示すものとみられる。床面と考えられる部分の標高は7.754~7.787mを測る。P-16がST-6014を掘り込んでいたことからST-6014より後出とみられ、付属遺構として、中央ピットと壁溝および9個のピットを確認した。この内、主柱穴と考えられるピットは位置関係から中央ピット(P-17)を囲むP-18~22とみられ、5本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-18は径25cmの円形で、深さ31cm、P-19は径28cmの円形で、深さ14cm、P-20は径30cmの円形で、深さ31cm、P-21はST-6014の東壁に掘り込まれており、径25cmの円形で、深さ25cm、P-22は径30cmの円形で、深さ29cmを測る。柱間寸法は1.55~2.10mである。中央ピット(P-17)は西側をピットに掘り込まれているが、長径1.00m、短径0.50mの楕円形で、深さ28cmを測り、南側に落ち込みがあり、弥生土器10点が出土する。検出した壁溝は北壁から南壁沿いに設けられており、幅15~24cm、深さ4cm、延長7.47mを測る。埋土は、壁溝と中央ピットの埋土である黒色~黒褐色(10YR2/1~3/1)粘土質シルトとみられ、中央ピットは土質により2層に分層される。出土遺物には弥生土器11点がみられたが、図示できるものはなかった。

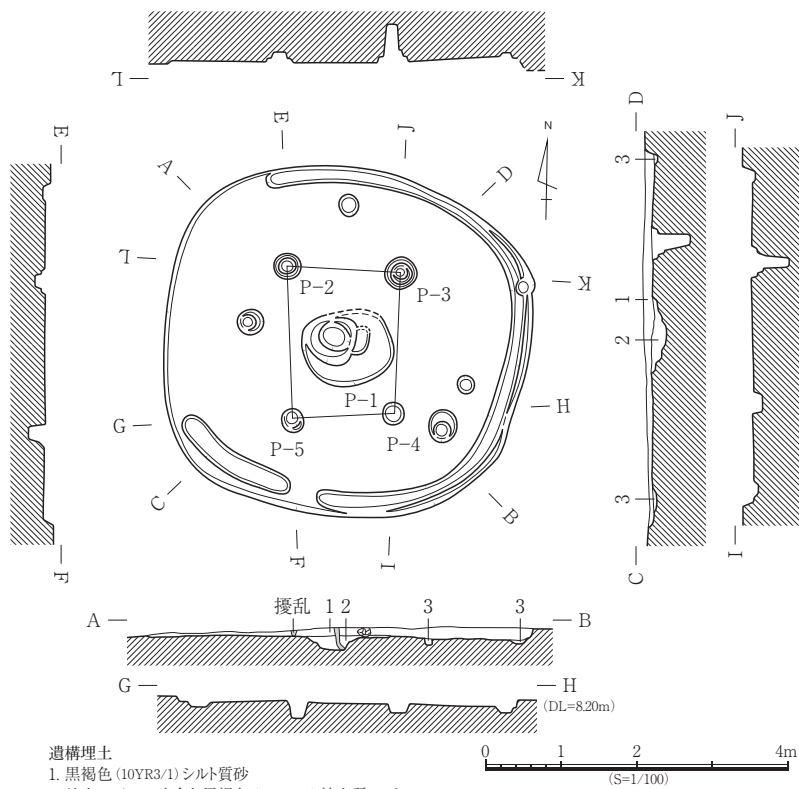


図3-58 ST-6040

ST-6040(図3-58)

VI-2区の北部、SD-6001の

東側, SK-6055を切った形で検出した隅丸方形の竪穴建物跡である。一辺は4.60~4.80mを測り, 主軸方向はN-81°-Wを示す。遺存する壁高は22~28cmで, 床面の標高は7.934~7.991mを測る。付属遺構は中央ピットと壁溝および8個のピットである。この内, 主柱穴と考えられるピットは壁溝との位置関係から中央ピット(P-1)を囲むP-2~5とみられ, 4本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-2は径32cmの円形で, 深さ14cm, P-3は径40cmの円形で, 深さ50cm, P-4は径30cmの円形で, 深さ12cm, P-5は径29cmの円形で, 深さ22cmを測る。柱間寸法は1.35~2.00mである。中央ピット(P-1)は西側が落ち込み, 一辺1.00~1.12mの不整形形で, 深さ23cmを測り, 弥生土器1点(6377)が出土する。検出した壁溝は西壁沿いと南壁の一部を除いて設けられており, 幅14~30cm, 深さ3~6cm, 延長10.28mを測る。埋土は黒褐色(10YR3/1)シルト質砂で, 中央ピットには地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトの堆積が認められた。出土遺物には弥生土器59点, サヌカイト片62点(18.2g)がみられ, 弥生土器2点(6376・6377)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-59 6376・6377)

6376は壺で, 直立する口縁部は貼付口縁となり, 外面にヘラ状工具による斜格子文, その上に棒状浮文を貼付する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

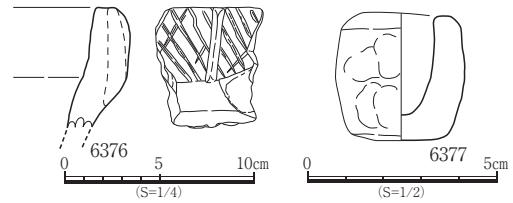
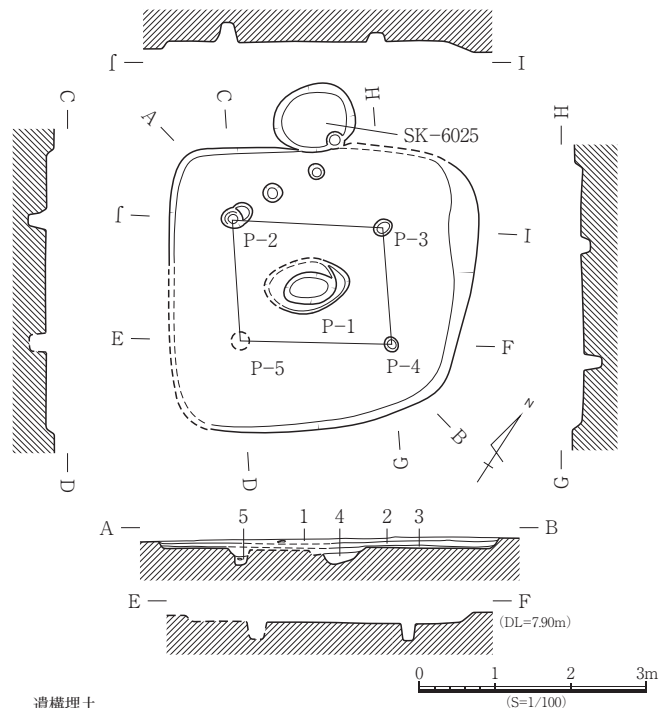


図3-59 ST-6040出土遺物実測図

6377は手づくね土器で, 器面には指頭圧痕が残存する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

ST-6041(図3-60)

VI-2区の南西部, ST-6038を切った形で検出した方形の竪穴建物跡で, 古代の道路遺構(SR-6002)と溝跡(SD-6005)に掘り込まれる。一辺は3.75~4.10mを測り, 主軸方向はN-50°-Eを示す。遺存する壁高は12cmで, 床面の標高は7.615~7.627mを測る。付属遺構として, 中央ピット(P-1)と6個のピットを確認した。この内, 主柱穴と考えられるピットは位置関係から中央ピットを囲むP-2~5(P-5はSD-6005に切られたと推測される。)とみられ, 4本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-2は径28cmの円形で, 深さ25cm, P-3は径20~25cmの不整形円形で, 深さ12cm, P-4は径18~20cmの不整形円形で, 深さ22cmを測る。柱間寸法は1.55~2.00mとみられる。中央ピット(P-1)は中央部が落ち込み, 長径約1.20m, 短径約0.70mの楕円形で, 深



遺構埋土

- 1. 黒褐色(25Y3/1)砂質シルト
- 2. 地山のブロックを含む黒褐色(25Y3/1)砂質シルト
- 3. 地山のブロックを含む黒色(25Y2/1)粘土質シルト
- 4. 黒色(10YR2/1)粘土質シルト
- 5. 黒褐色(10YR3/1)シルト質砂

図3-60 ST-6041

さ24cmを測る。埋土は3層に分層され、上層から黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト、地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト、地山のブロックを含む黒色(2.5Y2/1)粘土質シルトで、中央ピットには黒色(10YR2/1)粘土質シルトの堆積が認められた。出土遺物には弥生土器28点がみられたが、図示できるものはなかった。

ST-6042 (図3-61)

VI-2区の中央南端部南壁際で、SD-6001を切った形で検出した方形の竪穴建物跡で、約2/3は調査区外に延びる。一辺は約5.10mを測り、主軸方向はN-58°-Eを示す。遺存する壁高は35cmで、床面の標高は7.546～7.570mを測る。付属遺構として、壁溝と6個のピットを確認したが、検出部分が少なく、支柱穴の繋がりは明確ではないが、P-1(径42cmの円形で、深さ18cm)が支柱穴の一つではないかとみられ、4本柱で棟を支えていたのではなかろうか。検出した壁溝は北西壁沿いと北東壁沿いの一部に設けられており、幅15～20cm、深さ4～6cm、延長6.76mを測る。埋土は地山のブロックを含む黒色(2.5Y2/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器551点、土師器2点、土製品1点、石製品7点、サヌカイト片1点(2.9g)がみられ、土師器2点(6378・6379)、弥生土器1点(6380)、土製品1点(6381)、石製品3点(6382～6384)が図示できた。

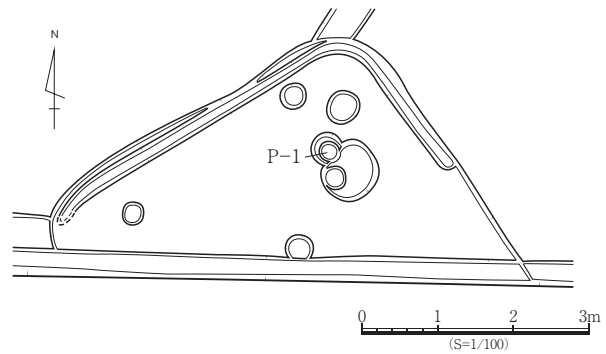


図3-61 ST-6042

出土遺物

土師器(図3-62 6378・6379)

いずれも壺で、搬入品である。6378は複合口縁となり、胎土は精良で、細粒砂から極粗粒砂を少し含む。6379は丸底となり、頸部外面下端には断面矩形の突帯を貼付する。胴部内外面は丁寧にハケ調整される。胎土には細粒砂から極細粒中礫を比較的多く含む。

弥生土器(図3-63 6380)

高杯で、脚柱はほぼ直立し、裾部は斜め下方を向く。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

土製品(図3-63 6381)

土器を転用した紡錘車の未成品で、円孔は未穿孔である。

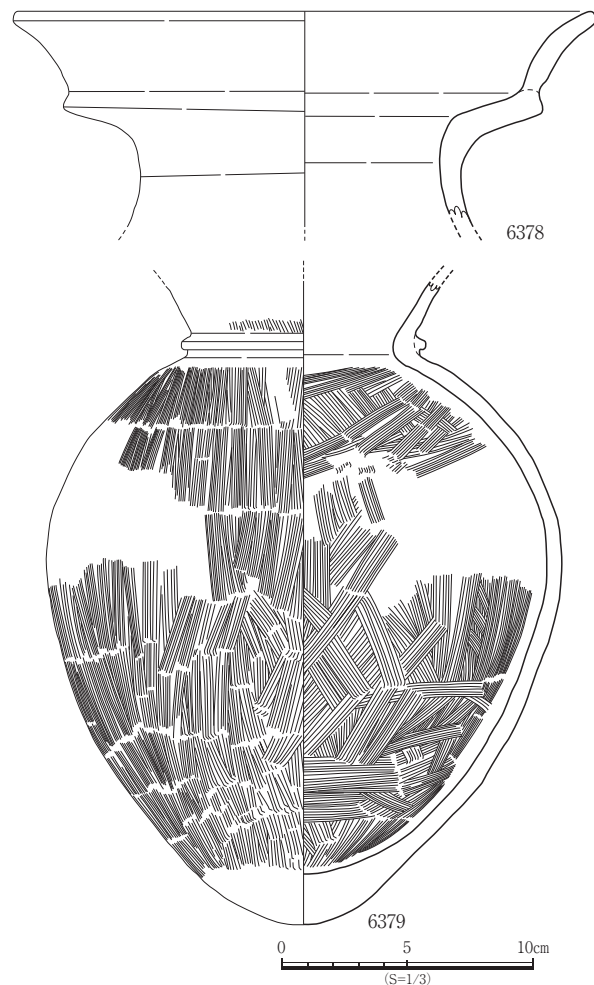


図3-62 ST-6042出土遺物実測図1

1. VI区 (1) 弥生時代

石製品(図3-64 6382~6384)

6382は叩石で、両面中央と側面に敲打痕が残存し、さらに縁辺を中心に擦痕がみられる。

6383・6384は磨石で、表面は平滑となり、縁辺を中心に擦痕がみられる。

ST-6043

VI-1区南部、ST-6001の北隣で検出した隅丸方形の竪穴状遺構である。長辺3.25m、短辺2.48m、深さ11cmを測り、長軸方向はN-10°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。付属遺構として、短い壁溝と9個のピットを確認した。この内、深さは浅いが、P-1(径20cmの円形で、深さ6cm)とP-2(径22cmの円形で、深さ6cm)は並びからすると覆いの支柱穴ではないかとみられる。また、P-3(径23cmの円形で、深さ32cm)は検出したピットの中では最もしっかりしており、関連する柱穴である可能性も考えられる。検出した壁溝は西壁沿いの限られた部分に認められたのみで、壁溝と言えるかどうか判然としない。なお、幅20cm、深さ3cm、延長0.61mを測る。埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質粘土であった。出土遺物には弥生土器23点と石製品1点がみられ、石製品1点(6385)が図示できた。

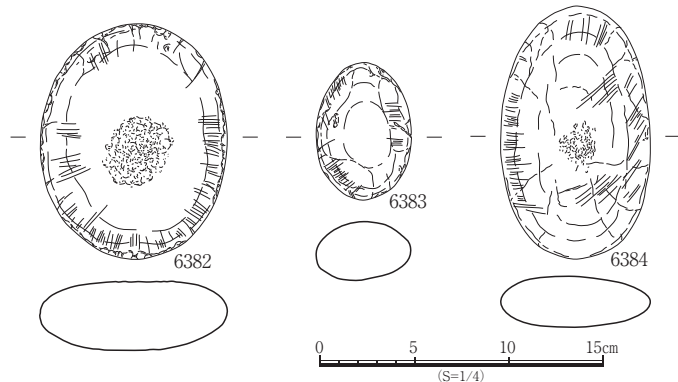


図3-63 ST-6042出土遺物実測図2

出土遺物

石製品(図3-65 6385)

6385は叩石で、両面中央に弱い敲打痕が残存し、さらに縁辺を中心に擦痕がみられ、磨石としても使用されたものと考えられる。

ST-6044(図3-1)

VI-1区南部、ST-6043の南隣、ST-6001を切った形で検出した方形の竪穴状遺構である。長辺2.51m、短辺1.61m、深さ26cmを測り、長軸方向はN-56°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。付属遺構として、1個のピットを確認した。P-1は径24cmの円形で、深さ11cmを測る。埋土は基本的に黒褐色(10YR3/1~3/2)粘土質シルトで、炭化物や土粒の含む度合いにより4層に分層される。出土遺物には弥生土器136点がみられ、弥生土器5点(6386~6390)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-65 6386~6390)

6386~6388は壺で、胴部はいずれも丸味がありほぼ同形態となり、6387・6388は施文も似る。6386は、口縁部が外傾する頸部から外反するもので、貼付口縁となり、端部下端にはヘラ状工具による刻目を施し、口縁部外面には指頭圧痕が残存する。頸部から胴部外面にはナデ調整を施し、肩部外面にはヘラ状工具による刺突文を施す。6387は、胴部外面上半をヨコナデ調整、下半をナデ調整した上で、肩部外面に微隆起突帯5条と棒状浮文を貼付する。6388は、胴部外面をハケ調整した上で、竹管文を施し、微隆起突帯3条、棒状浮文を貼付する。いずれも胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

6389・6390は甕で、6389は、口頸部がくの字形をなし、口縁端部を肥厚、拡張し擬凹線文を施文する。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。6390は底部が残存し、胎土には中粒砂から粗粒砂を多く含む。

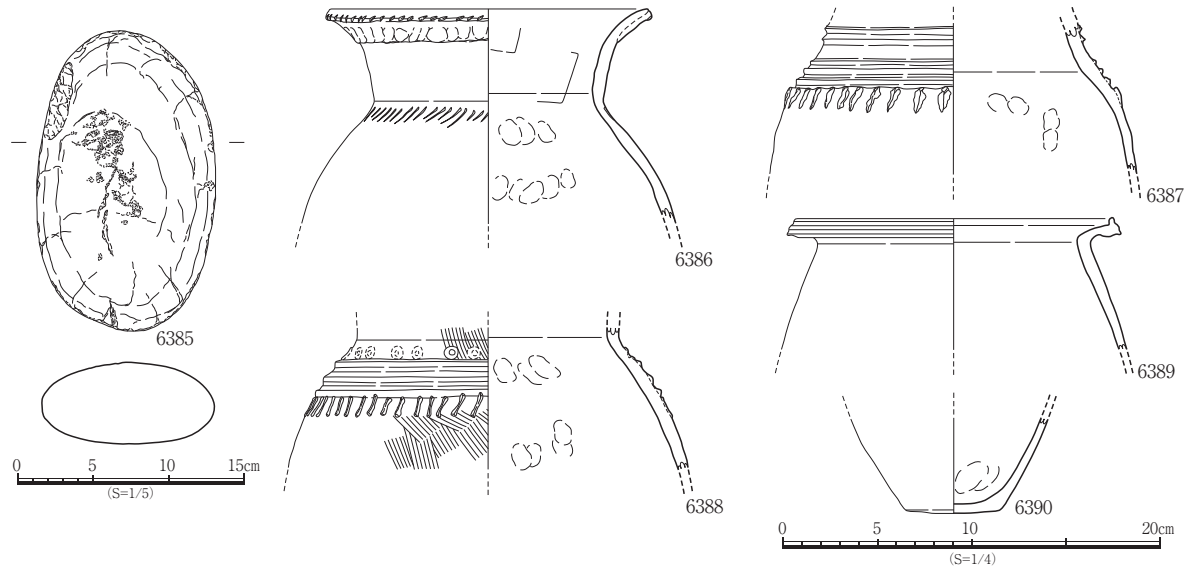


図3-65 ST-6043・6044出土遺物実測図

ST-6045 (図3-66)

VI-1区南端部、SB-6004の東隣で検出した方形の竪穴状遺構である。長辺1.92m、短辺1.45m、深さ7cmを測り、長軸方向はN-13°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。付属遺構として、3個のピットを確認したが、いずれも深さが3cmに満たない。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器10点がみられたが、図示できるものはなかった。

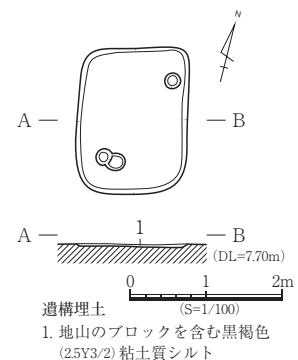


図3-66 ST-6045

ST-6046

VI-2区北西部、ST-6006・6007の南隣で検出した方形の竪穴状遺構で、古代の道路遺構(SR-6002)に西半分を切られる。長辺約2.90m、短辺約1.80mとみられ、深さは8cmを測り、長軸方向はN-4°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。付属遺構は確認されていない。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/1～2.5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器6点、サヌカイト片2点(1.3g)がみられたが、図示できるものはなかった。

ST-6047 (図3-53)

VI-2区北西部、ST-6046の東隣で検出した方形の竪穴状遺構で、ST-6036を掘り込んでいた。長辺2.58m、短辺1.73m、深さは38cmを測り、長軸方向はN-31°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。北側と東側に平場を有し、付属遺構としては、1個のピット(径24cmの円形で、深さ4cm)を検出したが、浅く支柱穴と考え難い。埋土は上下2層に分層され、上層が地山のブロックを含む黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト、下層が少量の炭化物と地山のブロックを多く含む黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器124点、石製品2点、サヌカイト片27点(9.7g)がみられ、弥生土器2点(6391・6392)、石製品2点(6393・6394)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-67 6391・6392)

6391は搬入品の高杯で、外傾する頸部から口縁部は大きく屈曲し、端部下端を拡張、凹線1条を巡らす。また、内面には矩形の突帯を貼付していたものとみられる。胎土には中粒砂を中心に細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6392は甕の底部とみられるもので、外面は被熱で変色し、胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

石製品(図3-67 6393・6394)

6393は叩石で、10個体以上に割れていた。表面は平滑で、縁辺を中心に擦痕がみられ、両端には摩滅痕が残存する。

6394は立方体の砥石で、4面に使用痕が残存する。

ST-6048

VI-2区北西部、ST-6011の北隣で検出した方形の竪穴状遺構で、古代の道路遺構(SR-6001・6002)に掘り込まれ、東側は掘削される。長辺約3.30mとみられ、短辺1.68m、深さは13cmを測り、長軸方向はN-82°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。付属遺構は確認されていない。埋土は黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器14点、石製品1点がみられ、石製品1点(6395)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-67 6395)

磨石で、扁平となり、縁辺を中心に擦痕が残存する。

ST-6049(図3-18)

VI-2区西部、ST-6037に掘り込まれた形で検出した隅丸方形の竪穴状遺構である。長辺1.21m以上(約3.00mとみられる。)、短辺1.80m、深さは8cmを測り、長軸方向はN-86°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。付属遺構として、1個のピット(径22cmの円形で、深さ10cm)を確認した。埋土は地山のブロックを含むオリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器28点がみられたが、図示できるものはなかった。

ST-6050(図3-68)

VI-2区西部、ST-6049の南側で検出した隅丸方形の竪穴状遺構である。長辺3.18m、短辺2.32m、深さは26cmを測り、長軸方向はN-25°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。付属遺構は確認されなかった。埋土は3層に分層され、上層から中粒中礫を含むオ

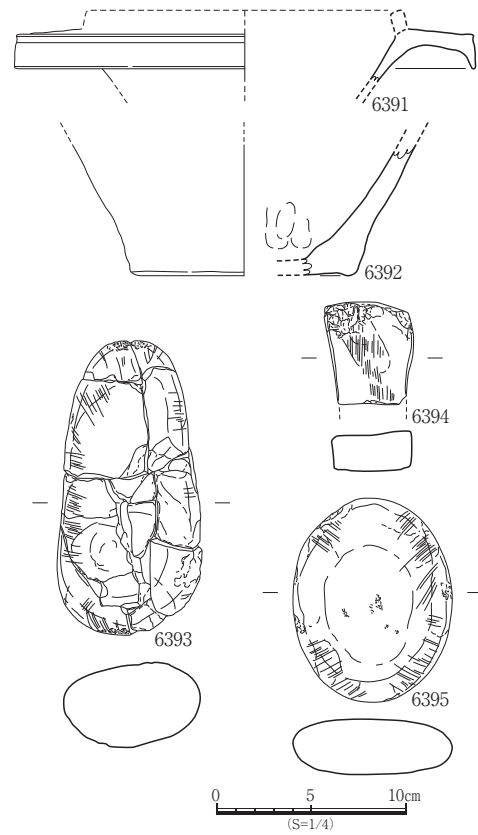
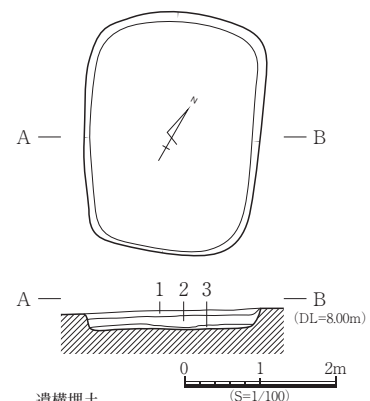


図3-67 ST-6047・6048出土遺物実測図



遺構埋土

1. 中粒中礫を含むオリーブ黒色(5Y2/2)シルト質砂
2. 細粒中礫と地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1)シルト質砂
3. 細粒-中粒中礫を含む黒色(2.5Y2/1)シルト質砂

図3-68 ST-6050

リーブ黒色(5Y2/2)シルト質砂, 細粒中礫と地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1)シルト質砂, 細粒～中粒中礫を含む黒色(2.5Y2/1)シルト質砂であった。出土遺物には弥生土器40点, サヌカイト片1点(1.1g)がみられたが, 図示できるものはなかった。

ST-6051 (図3-69)

VI-2区西部, ST-6050の西側で平行する形で検出した方形の竪穴状遺構である。長辺2.97m, 短辺2.27m, 深さは42cmを測り, 長軸方向はN-27°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。付属遺構は確認されなかった。埋土は黒褐色～黒色(10YR3/1～2.5Y2/1)を呈するシルト質砂, 砂質シルト, 粘土質シルトなどが互層に堆積し, 5層に分層される。出土遺物には弥生土器89点がみられ, 弥生土器4点(6396～6399)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-70 6396～6399)

6396は甕で, 貼付口縁となり, 端部下端にはヘラ状工具による刻目, その下には2条の微隆起突帯を作り出す。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から粗粒砂を多く含む。

6397は壺の底部とみられるもので, 胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

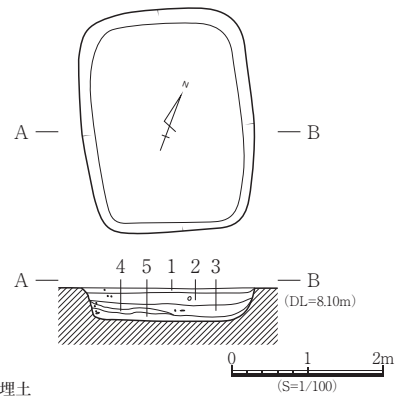
6398は高杯で, 赤色塗彩される。口縁部は真上を向き, 端部は平面となり, 外面に1条の凹線が巡る。胎土には

細粒砂から極粗粒砂を若干含む。6399も同形態の高杯で, 口縁部を肥厚し, 外面には3条の凹線を巡らす。器面はヨコナデ調整の後に外面にヨコ方向のヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

ST-6052 (図3-71)

VI-2区西部, ST-6050の南隣で検出した隅丸方形の竪穴状遺構である。長辺4.00m, 短辺2.61m, 深さは35cmを測り, 長軸方向はN-65°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。東壁に段部を検出し, 付属遺構として, 北東壁際で浅い掘り込みを確認した。埋土は, 上層が地山のブロックを含む黒褐色～黒色(10YR3/1～2/1)粘土質シルトを主体とし, 下層部には地山のブロックを含む黒色(10YR2/1)砂質シルトの堆積がみられ, 4層に分層される。出土遺物には弥生土器139点, 石製品1点, サヌカイト片1点(18.2g)がみられ, 弥生土器4点(6400～6403)と石製品1点(6404)が図示できた。

出土遺物



- 遺構埋土
1. 中粒中礫と地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/1)シルト質砂
 2. 少量の炭化物と中粒中礫を含む黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト
 3. 地山のブロックを含む黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト
 4. 中粒中礫を含むオリーブ黒色(5Y2/2)シルト質砂
 5. 地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト

図3-69 ST-6051

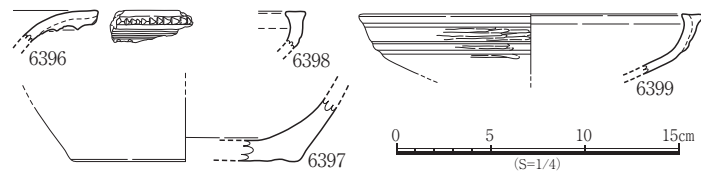
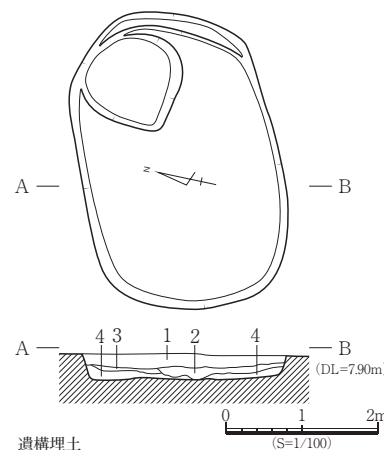


図3-70 ST-6051出土遺物実測図



- 遺構埋土
1. 地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト
 2. 地山のブロックを含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト
 3. オリーブ黒色(5Y2/2)シルト質砂
 4. 地山のブロックを含む黒色(10YR2/1)砂質シルト

図3-71 ST-6052

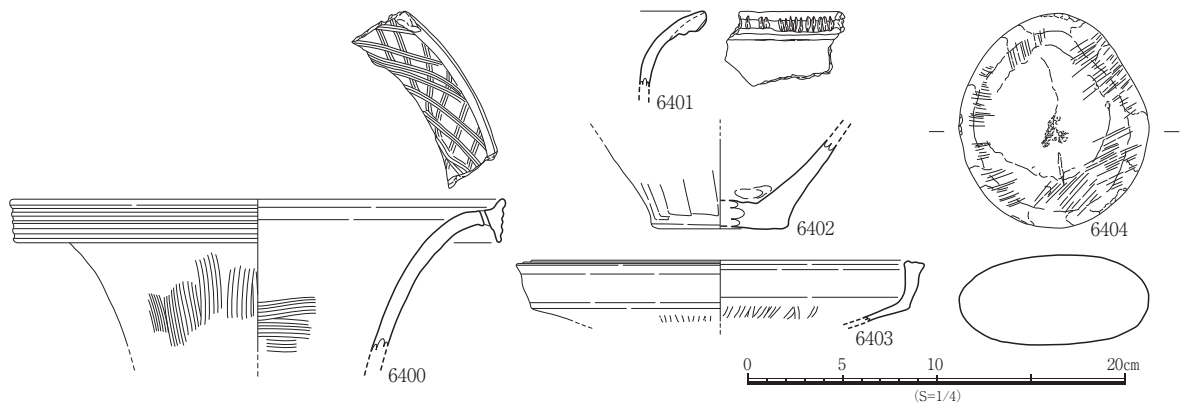


図3-72 ST-6052出土遺物実測図

弥生土器(図3-72 6400~6403)

6400は壺で、口頸部は外反し、口縁端部を上下に拡張して凹線文を施文する。口縁部はヨコナデ調整、頸部内外面はハケ調整で、口縁部内面にハケ状工具による斜格子文を施す。また、口縁部には径0.3cmの円孔が1ヵ所に残存する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

6401は甕で、貼付口縁となり、口縁端部下端にはヘラ状工具による刻目、その下に微隆起突帯1条をヨコナデ調整により作り出す。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

6402は甕の底部とみられるもので、外面にはヘラナデ調整とナデ調整を施し、胎土には中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6403は高杯で、口縁部は大きく開く体部から直立し、端部を肥厚し、擬凹線文を施す。口縁部はヨコナデ調整、体部内面と外面下半に放射線状、外面上半にヨコ方向のヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

石製品(図3-72 6404)

磨石で、表面は平滑となり、縁辺を中心に擦痕が残存する。

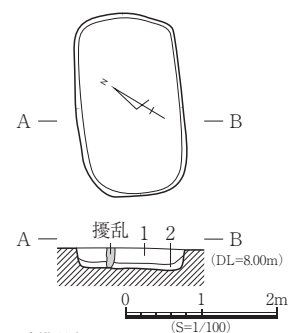
ST-6053(図3-73)

VI-2区中央部、ST-6028の南隣で検出した方形の竪穴状遺構である。長辺2.43m、短辺1.44m、深さは29cmを測り、長軸方向はN-53°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。付属遺構確認されていない。埋土は上下2層に分層され、上層がオリーブ黒色(10Y3/1)砂質シルト、下層がオリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質砂であった。出土遺物には弥生土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

ST-6054(図3-74)

VI-2区南部、ST-6055の西隣で検出した方形の竪穴状遺構である。長辺3.17m、短辺1.91m、深さは28cmを測り、長軸方向はN-63°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。付属遺構として、壁溝と1個のピットを確認した。

ピットは径36cmの円形で、深さ4cmを測り、掘方は浅いものの中軸線上にあり、覆いの支柱穴であった可能性が高い。他の竪穴状遺構で確認されているピットの多くも掘方が浅く、支柱穴とは考え難いとしたが、本例を見ると強ち支柱穴でなかったとは断言できないかもしれない。確認した壁溝は南壁沿いと東壁沿いで確認され、幅22~28cm、深さ1~4cm、延長3.59mを測る。この壁溝の存在は、



遺構埋土
1. オリーブ黒色(10Y3/1)砂質シルト
2. オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質砂

図3-73 ST-6053

一連の竪穴状遺構が上部構造を有していた可能性を示唆する。埋土は黒褐色(10YR3/1)シルト質砂を主体に下層部に黒色(2.5Y2/1)シルト質砂の堆積が認められた。出土遺物には弥生土器106点, 石製品1点がみられ, 弥生土器4点(6405~6408)と石製品1点(6409)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-75 6405~6408)

いずれも甕の底部とみられるもので, 調整はナデ調整を基本とし, 6406の外底面にはヘラ削りとナデ調整を施すが, 6407・6408の外底面は未調整となる。いずれも胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-75 6409)

石庖丁で, 2穴の紐孔を穿孔していたとみられるが, 残存する紐孔は1個で, その下に小さな穿孔痕跡が残存する。

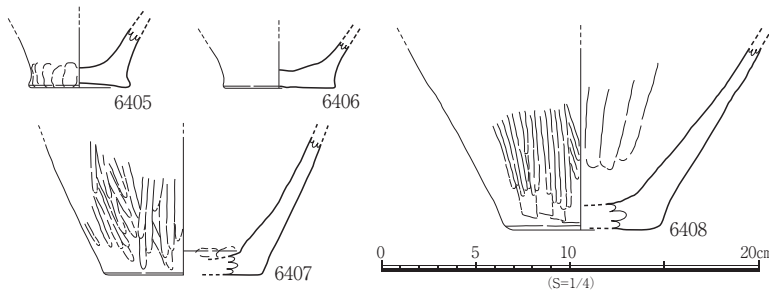


図3-75 ST-6054出土遺物実測図

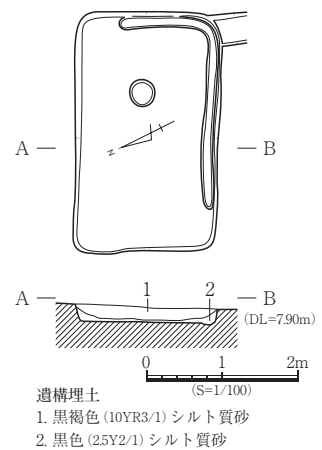
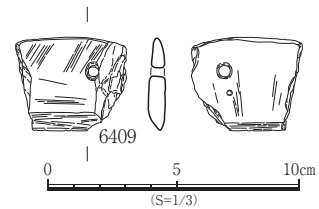


図3-74 ST-6054



ST-6055 (図3-76)

VI-2区南部, ST-6054の東隣, ST-6022を切った形で検出した方形の竪穴状遺構である。長辺2.94m, 短辺1.63m, 深さは42cmを測り, 長軸方向はN-88°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。付属遺構は確認されていない。埋土はオリーブ黒色(5GY2/1)砂質シルト・粘土質シルト, 黒色(7.5Y2/1)粘土質シルトを主体に地山の混じり具合により4層に分層される。出土遺物には弥生土器277点, 石製品2点がみられ, 弥生土器10点(6410~6419)と石製品1点(6420)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-77 6410~6419)

6410~6413は甕で, 貼付口縁となる。6410・6411は, 口縁部が胴部から短く外反するもので, 6410の口縁部外面には指頭圧痕が残存する。一方, 6411はヨコナデ調整とナデ調整で, 指押えの痕を消しているが, 口唇部が凹面となり, 粘土帯を貼付した痕跡を確認できる。6412・6413は, 口頸部が外反するもので, 両方とも口縁部外面には指頭圧痕が残存し, 6412の口縁端部下端にはヘラ状工具による刻目が施される。胎土には, 細粒砂から極粗粒砂を6410・6413が比較的多く, 6411・6412が多く含む。

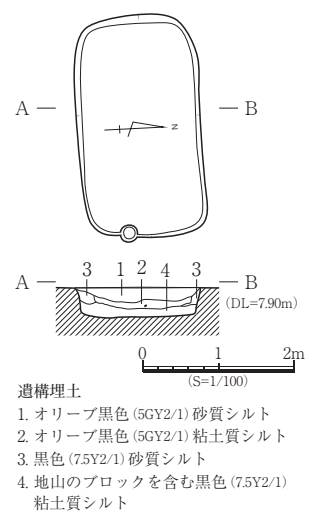


図3-76 ST-6055

1. VI区 (1) 弥生時代

6414～6419は、6416・6418が壺の底部とみられる以外は甕の底部である。調整は基本的にナデ調整で、6416の外表面はハケ調整の後にヘラ磨き、6418の外表面はヘラ磨きが施され、いずれも外底面は未調整となる。また、6415・6419の外表面には煤が付着する。胎土には細粒砂から粗粒砂ないし極粗粒砂を6414が多く、6415・6417・6418が比較的多く、6416・6419が少し含む。

石製品(図3-77 6420)

6420は磨石で、表面は平滑となり、縁辺を中心に擦痕が残存する。

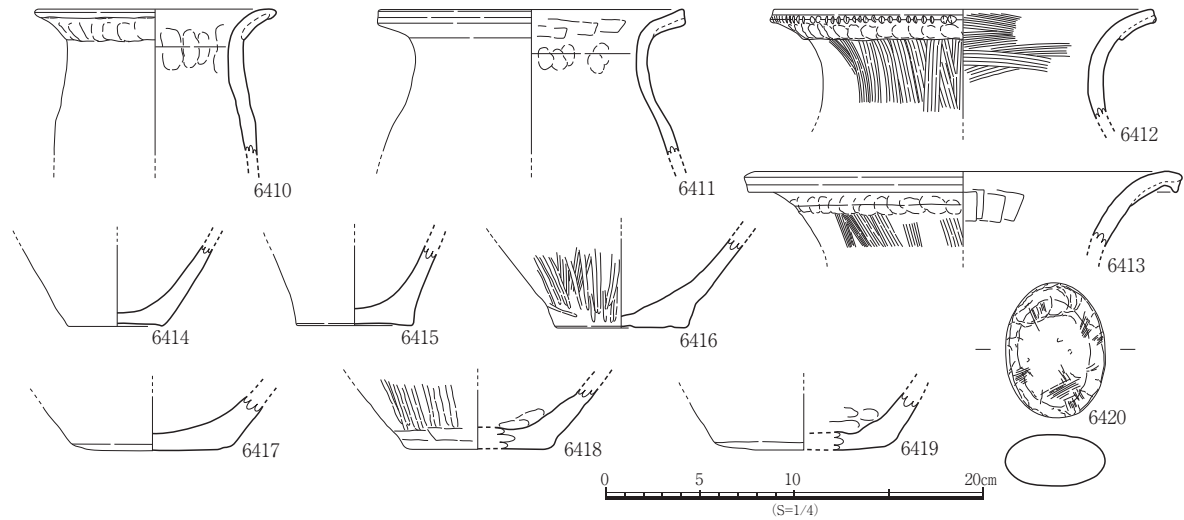


図3-77 ST-6055出土遺物実測図

ST-6056 (図3-78)

VI-2区南部、ST-6055の北隣で検出した隅丸方形の竪穴状遺構である。長辺2.47m、短辺1.76m、深さは71cmを測り、長軸方向はN-89°-Wを示す。断面形は逆台形を呈し、北側に段部を有する。付属遺構は確認されていない。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)シルト質砂からオリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルトまで数層に分層され、シルト質砂と砂質シルトが互層となる。出土遺物には弥生土器57点、石製品2点がみられ、弥生土器5点(6421～6425)と石製品1点(6426)が図示できた。

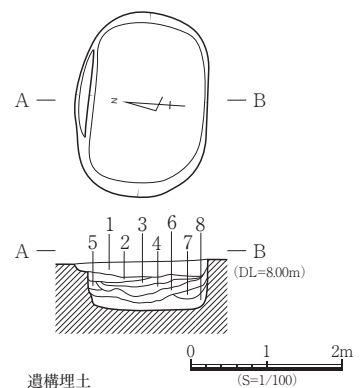
出土遺物

弥生土器(図3-79 6421～6425)

6421は壺で、口縁部は直立する頸部から外反し、口縁部を肥厚する。端部下端にはヘラ状工具による刻目、口縁部外面には指頭圧痕が残存する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6422・6423は甕で、口頸部は外反し、貼付口縁となり、6422の口縁端部下端にはヘラ状工具による刻目、その下に微隆起突帯を作り出し、頸部外面下端に2個1対の円形浮文を貼付する。6423は口縁部外面に指頭圧痕が残存するが、施文はない。胎土はいずれも細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

6424・6425は甕の底部とみられるもので、6424の外表面にはヘラ磨きが施される。胎土には、中粒砂



- 遺構埋土
1. 黒褐色(2.5Y3/1)シルト質砂
 2. オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質砂
 3. 黒色(2.5Y2/1)砂質シルト
 4. 黒褐色(2.5Y3/1)シルト質砂
 5. 黒色(7.5Y3/1)砂
 6. 黒色(5Y2/1)砂質シルト
 7. オリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルト
 8. 地山のブロックを含むオリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルト

図3-78 ST-6056

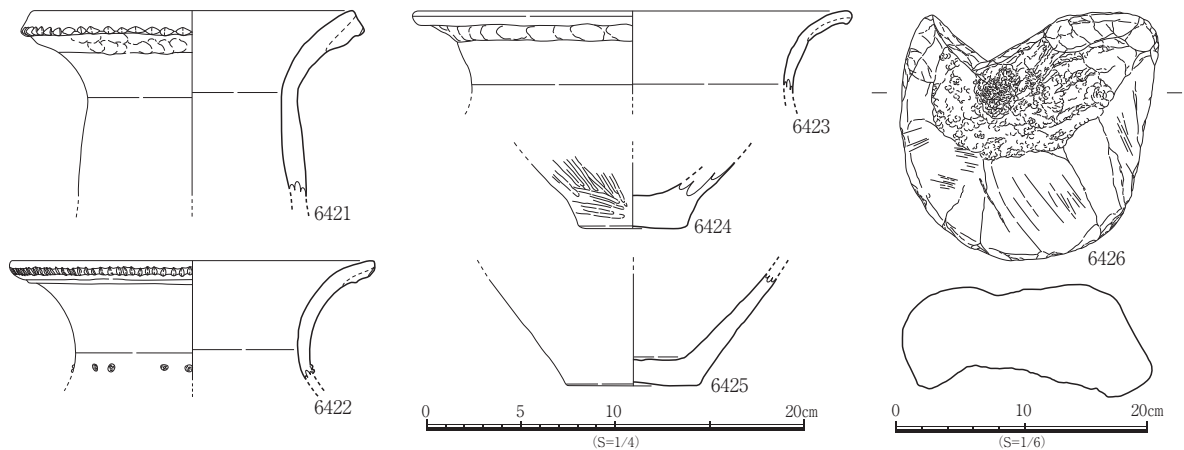


図3-79 ST-6056出土遺物実測図

から極粗粒砂を6424が比較的多く、6425が多く含む。

石製品(図3-79 6426)

6426は河原石を用いた砥石で、2面に使用面と両面に敲打痕が残存する。

ST-6057

VI-2区東端部、東壁際で検出した方形の竪穴状遺構で、大半は調査区外にある。長辺約3.50mとみられ、短辺0.79m以上(約2.00mとみられる。)、深さは21cmを測り、長軸方向は方眼北(N-0°-E)を示す。断面形は逆台形を呈する。付属遺構は確認されていない。埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルトである。出土遺物には弥生土器11点、石製品1点がみられ、弥生土器2点(6427・6428)と石製品1点(6429)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-80 6427・6428)

いずれも甕で、口縁部は胴部から外傾し、胴部外面にはタタキ目が残存する。6427は、底部が丸底となり、胴部内面にはハケ調整が施され、胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。6428は、胴部外面にタタキを施した後に下半にハケ調整を加え、胴部内面にはハケ調整の後に下半にヘラ削りを行い、中胴部から上に指ナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極細粒中礫を比較的多く含む。

石製品(図3-80 6429)

柱状をなす砥石で、4面に使用痕が残存する。

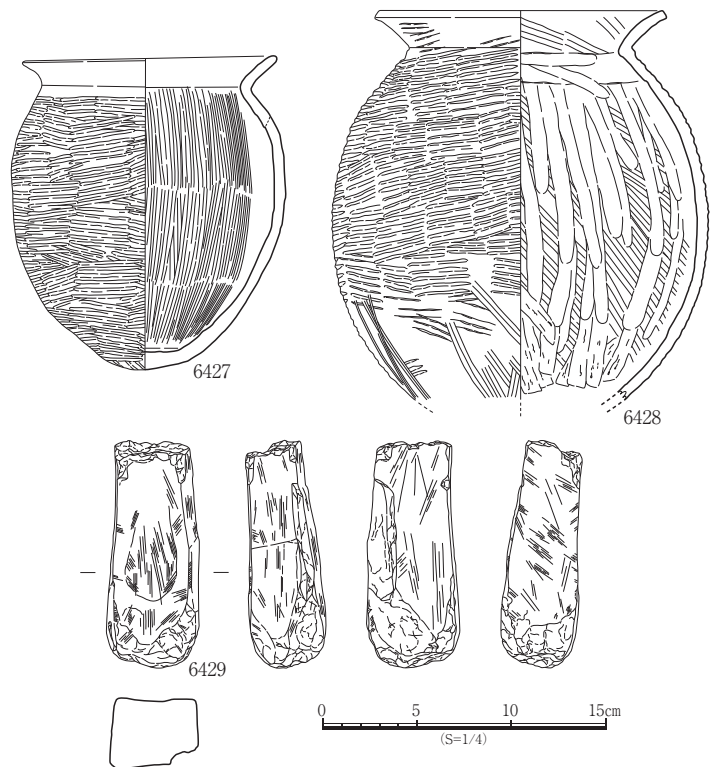


図3-80 ST-6057出土遺物実測図

② 掘立柱建物跡

26棟が復元できた。弥生時代の特徴的な建築構造が看取される。小規模なものもみられるが、梁行1間で桁行が3～5間となるものが主体となり、舟形土坑を伴うものもみられる。構造的には高床式倉庫ではなく掘立柱住居とみられ、竪穴住居と併存していたものと考えられる。ただし、柱穴で構成される性格上、竪穴住居に比べ出土遺物が少なく、時期の決め手を欠くものが大半である。いずれにしても、竪穴住居と共に集落を構成する重要な遺構である。

SB-6001 (図3-81)

VI-1区中央部やや北、SK-6001の南側で検出した桁行4間(6.10～6.20m)、梁行1間(2.75～2.80m)のやや歪みのある東西棟建物跡で、棟方向はN-89～90°-Wを示し、概ね方眼東を向く。北側約1.5mには北平側に平行する舟形土坑(SK-6001)があり、この建物に伴う可能性が高い。また、西妻柱列上で柱穴が検出されているが、梁行は他の例でも1間となっており、この建物も1間であったものと思われる。柱間寸法は、桁行(東西)が1.25～1.70m、梁行(南北)が2.75・2.80mである。柱穴の平面形は、楕円形を呈するものもみられるが基本的に円形で径20～45cmを測り、柱径は10～16cmとみられ、深さは15～52cmである。柱穴の埋土は黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトないしオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質粘土であった。出土遺物は弥生土器4点がみられたが、図示できるものはなかった。

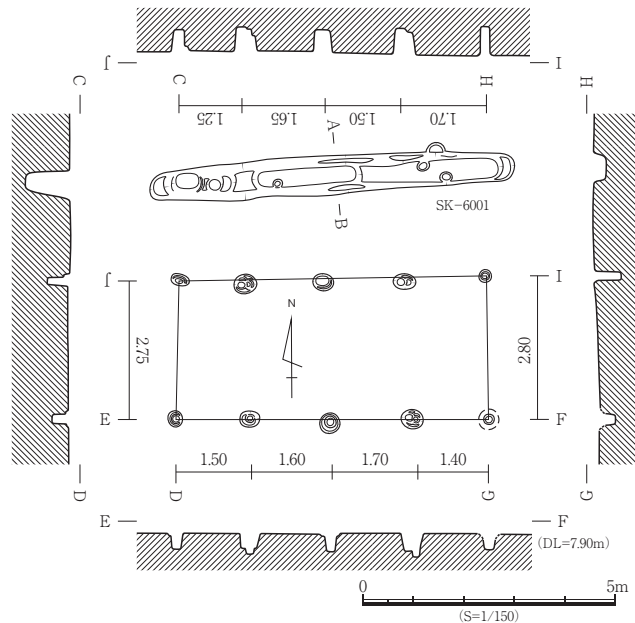


図3-81 SB-6001, SK-6001

SB-6002 (図3-82)

VI-1区中央部西壁際、ST-6025の北隣、SK-6004を切った形で検出した桁行3間(4.90m)、梁行1間(2.90m)の南北棟建物跡で、棟方向はN-1°-Eを示し、ほぼ方眼北を向く。北西隅柱は調査区外で検出できていない。柱間寸法は、桁行(東西)が1.50～1.80m、梁行(南北)が2.90mである。柱穴の平面形は、楕円形や方形を呈するものも一部にはみられるが基本的に円形で径32～43cmを測り、柱径は12～15cmとみられ、深さは26～47cmである。柱穴の埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質粘土であった。出土遺物は弥生土器18点がみられたが、図示できるものはなかった。

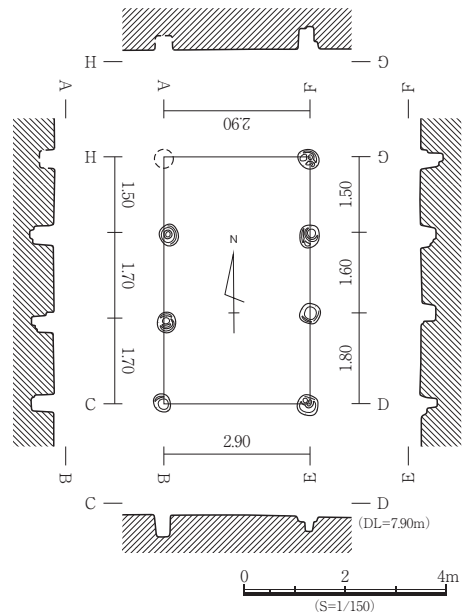


図3-82 SB-6002

SB-6003 (図3-83)

VI-1区南西部、ST-6001の西隣、ST-6043を切った形で検出した桁行2間(4.50m)、梁行1間(1.60～1.65m)のやや歪

みのある南北棟建物跡で、棟方向はN-16~17°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が2.10~2.40m, 梁行(東西)が1.60・1.65mである。柱穴の平面形は、楕円形を呈するものも一部にはみられるが基本的に円形で径22~29cmを測り、柱径は6~15cmとみられ、深さは7~52cmである。柱穴の埋土はオリブ黒色(5Y3/1)シルト質粘土であった。出土遺物は弥生土器5点がみられたが、図示できるものはなかった。

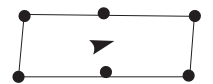


図3-83 SB-6003

SB-6004 (図3-84)

VI-1区南部, ST-6003の東隣で検出した桁行2間(3.00~3.10m), 梁行1間(1.95~2.20m)の歪みのある南北棟建物跡で、棟方向はN-17~21°-Eを示す。西側約0.8mには西平側に平行する舟形土坑(SK-6013)があり、この建物に伴う可能性も考えられる。柱間寸法は、桁行(南北)が1.20~1.80m, 梁行(東西)が1.95・2.20mである。柱穴の平面形は、楕円形を呈するものも一部にはみられるが基本的に円形で径20~26cmを測り、柱径は8cmとみられ、深さは8~31cmである。柱穴の埋土は黒褐色(2.5Y3/2)シルト質粘土ないしオリブ黒色(5Y3/1)シルト質粘土であった。遺物は出土しなかった。

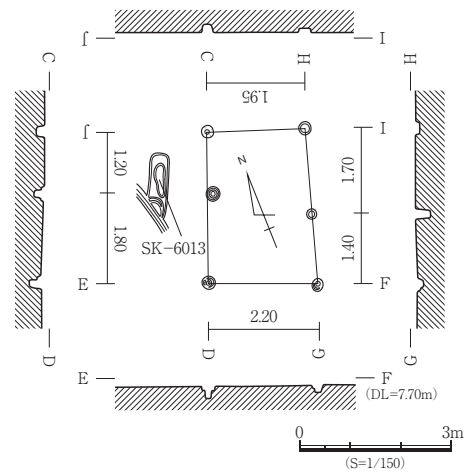


図3-84 SB-6004, SK-6013

SB-6005 (図3-85)

VI-1区南部, ST-6002を切った形で検出した桁行3間(4.50m), 梁行1間(2.60~2.70m)のやや歪みのある東西棟建物跡で、棟方向はN-66~68°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.30~1.70m, 梁行(南北)が2.60・2.70mである。柱穴の平面形は、楕円形を呈するものも一部にはみられるが基本的に円形で径20~28cmを測り、柱径は5~10cmとみられ、深さは27~44cmである。柱穴の埋土は黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器6点がみられたが、図示できるものはなかった。

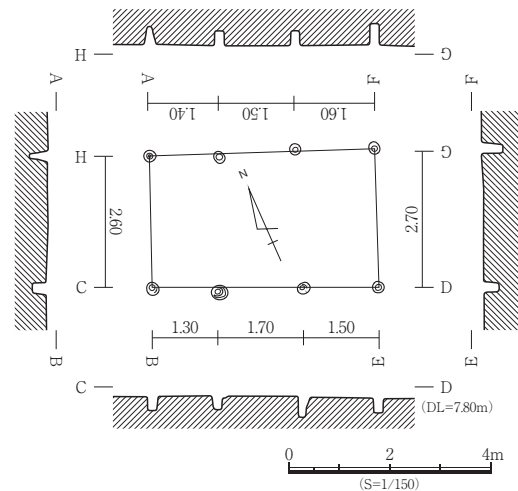


図3-85 SB-6005

SB-6006 (図3-86)

VI-1区南部, ST-6027を切った形で検出した桁行4間(5.90~6.00m), 梁行1間(3.00m)のやや歪みのある東西棟建物跡で、棟方向はN-65~66°-Wを示す。北西隅柱と東に1間目の柱穴は未確認である。北側約1.5mには北平側に平行する舟形土坑(SK-6010)があり、この建物に伴う可能性が高い。柱間寸法は、桁行(東西)が1.30~1.90m, 梁行(南北)が3.00mである。柱穴の平面形は円形で径22~30cmを測り、柱径は約10cmとみられ、深さは23~42cmである。柱穴の埋土は黒色(2.5Y2/1)シルト質粘土であった。出土遺物には弥生土器5点とチャート片1点(10.1g)がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-6007 (図3-87)

VI-1区中央部東壁際, ST-6005の東隣で検出した桁行1間(1.90m)以上, 梁行1間(2.60m)の東西棟

1. VI区 (1) 弥生時代

建物跡で、棟方向はN-63°-Wを示す。東側の多くは調査区外に延びる。柱間寸法は、桁行(東西)が1.90m、梁行(南北)が2.60mである。柱穴の平面形は、楕円形を呈するものも一部にはみられるが基本的に円形で径24~33cmを測り、柱径は9~11cmとみられ、深さは16~22cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土であった。出土遺物には弥生土器5点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-6008 (図3-88)

VI-2区北西部西壁際、SB-6009と重複した形で検出した桁行3間(3.70m)、梁行1間(3.00m)の東西棟建物跡で、棟方向はN-52°-Eを示し、北西隅柱は西の調査区外にあるとみられ未確認である。北側約1.5mには北平側に平行する舟形土坑

(SK-6015)があるが、建物より北に延びていることから、この舟形土坑はSB-6009に伴う可能性が強い。柱間寸法は、桁行(東西)が1.10~1.60m、梁行(南北)が3.00mである。柱穴の平面形は、楕円形を呈するものも一部にはみられるが基本的に円形で径25~35cmを測り、柱径は9~14cmとみられ、深さは19~38cmである。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-6009 (図3-89)

VI-2区北西部西壁際、SB-6008と重複した形で検出した桁行5間(7.80m)、梁行1間(3.00m)の東西棟建物跡で、棟方向はN-51°-Eを示し、北西隅柱と北西隅柱から1間目の柱穴の2個は西の調査区外にあるとみられ未確認である。北側約1.5mには北平側に平行する舟形土坑(SK-6015)があり、この建物に伴う可能性が強い。柱間寸法は、桁行(東西)が1.20~2.20m、梁行(南北)が3.00mである。柱穴の平面形は、楕円形を呈するものも一部にはみられるが基本的に円形で径23~37cmを測り、柱径は9~16cmとみられ、深さは7~42cmである。柱穴の埋土は黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトであった。出

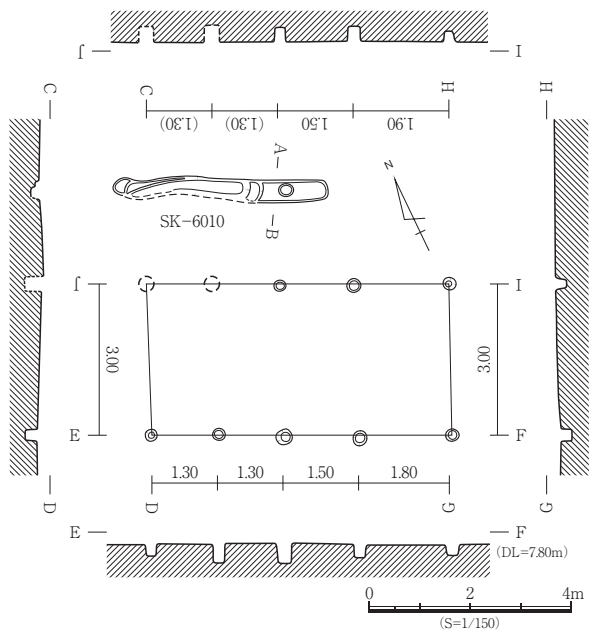


図3-86 SB-6006, SK-6010

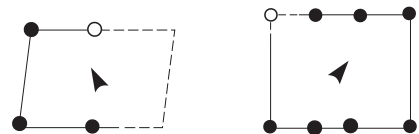


図3-87 SB-6007 図3-88 SB-6008

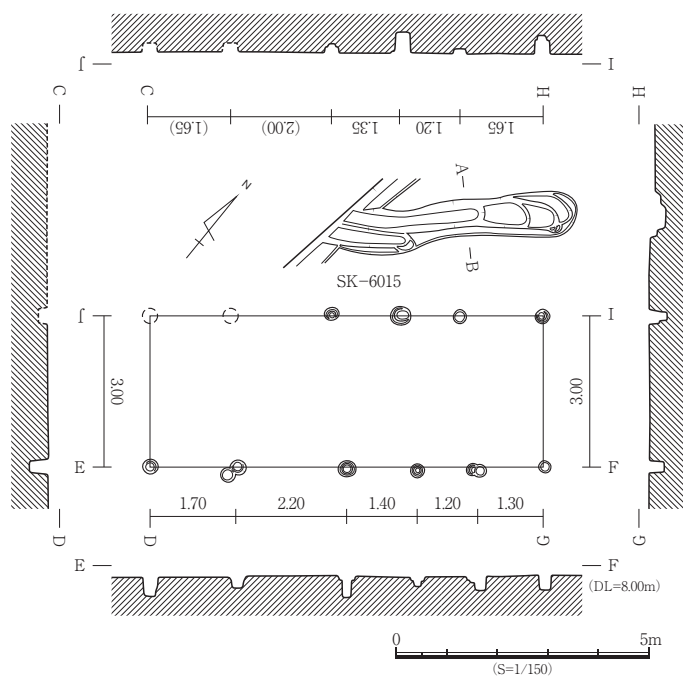


図3-89 SB-6009, SK-6015

土遺物には弥生土器9点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-6010 (図3-90)

VI-2区北西部, ST-6008 の南側で検出した桁行5間(6.40~6.50m), 梁行1間(2.90~3.00m)のやや歪みのある東西棟建物跡で、棟方向は概ねN-61°-Eを示し、北西隅柱から2間目の柱穴と南西隅柱から1間の柱穴の2個は未検出である。北側約2.0mには北平側に平行する短い舟形土坑(SK-6017)があり、この建物に伴う可能性が考慮される。柱間寸法は、桁行(東西)が1.00~1.50m, 梁行(南北)が2.90・3.00mである。柱穴の平面形は、楕円形を呈するものも一部にはみられるが基本的に円形で径22~34cmを測り、柱径は10~16cmとみられ、深さは12~28cmである。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器7点がみられたが、図示できるものはなかった。

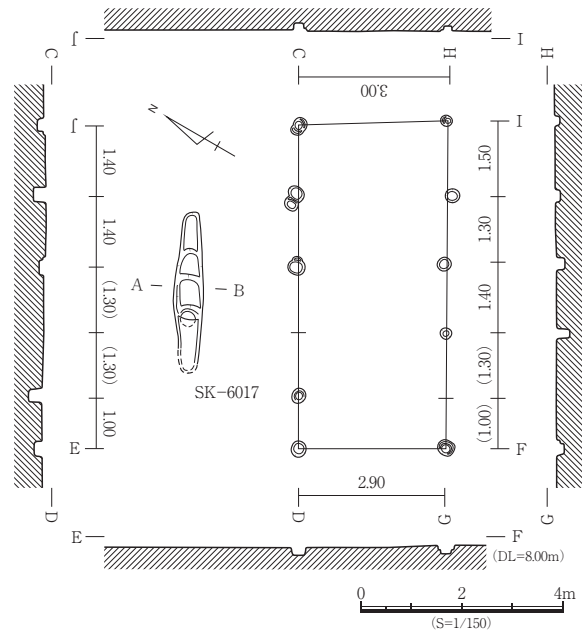


図3-90 SB-6010, SK-6017

SB-6011 (図3-91)

VI-2区北西部, SB-6010 の東側で検出した桁行1間(1.95~2.00m), 梁行2間(1.80~1.90m)のやや歪みのある小型南北棟建物跡で、棟方向は概ねN-38~40°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.95・2.00m, 梁行(東西)が0.90・1.00mである。柱穴の平面形は、楕円形を呈するものも一部にはみられるが基本的に円形で径19~33cmを測り、柱径は6~12cmとみられ、深さは9~24cmである。柱穴の埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

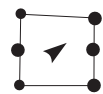


図3-91 SB-6011

SB-6012 (図3-92)

VI-2区北西部, SB-6011 の南隣で検出した桁行3間(5.10m), 梁行1間(2.10~2.40m)の歪みのある南北棟建物跡で、棟方向は概ねN-1°-W~N-3°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.50~1.90m, 梁行(東西)が2.10・2.40mである。柱穴の平面形は、楕円形を呈するものも一部にはみられるが基本的に円形で径30~42cmを測り、柱径は6~11cmとみられ、深さは9~35cmである。柱穴の埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトないし黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土であった。出土遺物には弥生土器8点がみられ、内1点(6430)が図示できた。

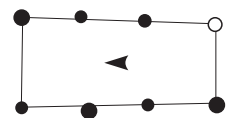


図3-92 SB-6012

出土遺物

弥生土器(図3-98 6430)

甕で、貼付口縁となり、口縁部は外反する。口縁部外面には指頭圧痕が残存し、煤が僅かに付着する。胎土には中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SB-6013 (図3-93)

VI-2区北西部, ST-6011 の東側で検出した桁行2間(2.80~2.90m), 梁行1間(2.30~2.40m)のやや歪

みのある小型南北棟建物跡で、棟方向は概ねN-4~5°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.30~1.60m, 梁行(東西)が2.30・2.40mである。柱穴の平面形は、楕円形を呈するものも一部にはみられるが基本的に円形で径24~38cmを測り、柱径は8~11cmとみられ、深さは18~51cmである。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器30点がみられたが、図示できるものはなかった。

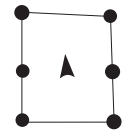


図3-93 SB-6013

SB-6014 (図3-94)

VI-2区南西部, ST-6021の西側で検出した桁行2間(2.80m), 梁行1間(2.10m)の小型南北棟建物跡で、棟方向は概ねN-34°-Wを示す。東側柱真中の柱穴は未検出である。柱間寸法は、桁行(南北)が1.30~2.80m, 梁行(東西)が2.10mである。柱穴の平面形は、楕円形を呈するものもみられるが基本的に円形で径27~46cmを測り、柱径は7~13cmとみられ、深さは8~29cmである。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトであった。遺物は出土しなかった。

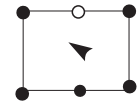


図3-94 SB-6014

SB-6015 (図3-95)

VI-2区北西部, ST-6014の北側で検出した桁行5間(8.20m), 梁行1間(3.30m)の大型東西棟建物跡で、棟方向はN-65°-Eを示し、北東隅柱はST-6051と切り合っており未確認である。北側約2.0mには北平側に平行する舟形土坑群(SK-6020~6024)があり、この建物に伴う可能性が考慮されるが、重複するSB-6016との先後関係が不明なため、どの舟形土坑に伴うか判然としない。しかし、SB-6016とは棟方向がほぼ

同じであることから大きな時期差はないものとみられ、舟形土坑群も時期差は余りないものと考えられる。柱間寸法は、桁行(東西)が1.40~2.10m, 梁行(南北)が3.30mである。柱穴の平面形は、楕円形を呈するものも一部にはみられるが基本的に円形で径23~46cmを測り、柱径は11~18cmとみられ、深さは12~33cmである。柱穴の埋土は黒褐色(2.5Y3/1)シルト

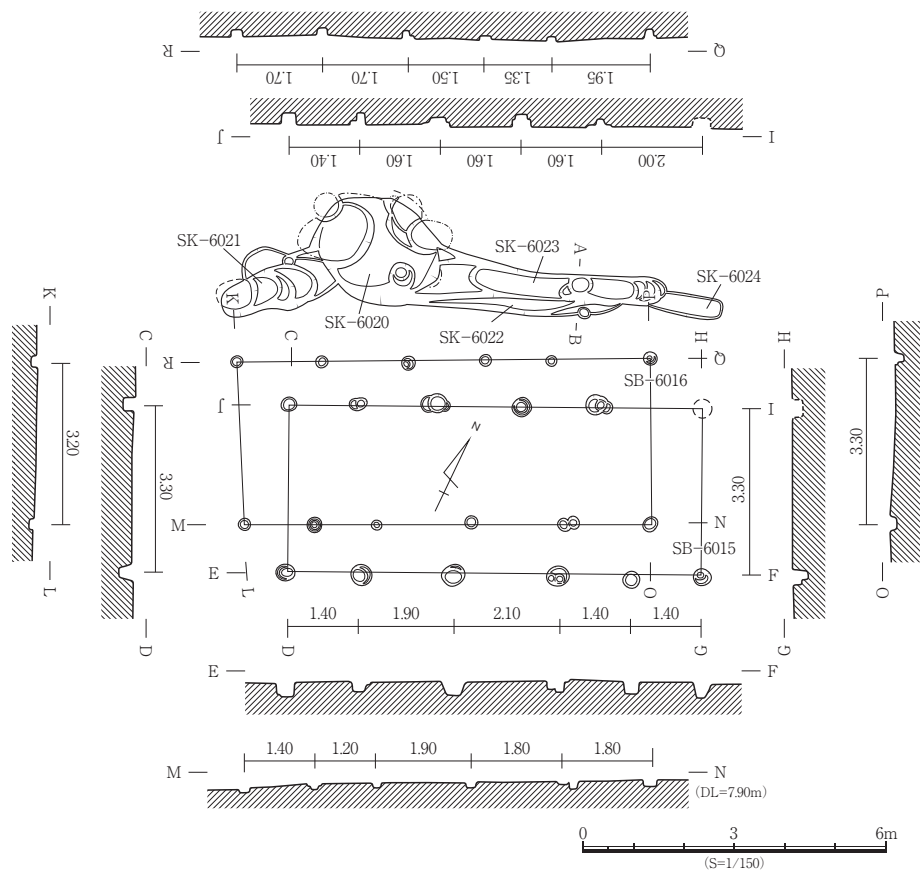


図3-95 SB-6015・6016, SK-6020~6024

質砂であった。遺物は出土しなかった。

SB-6016 (図3-95)

VI-2区北西部, ST-6014の北側で検出した桁行5間(8.10~8.20m), 梁行1間(3.20~3.30m)の大型東西棟建物跡で, 棟方向はN-64~65°-Eを示す。北側約1.0mには北平側に平行する舟形土坑群(SK-6020~6024)があり, 前述のとおりこの建物に伴う可能性が考慮されるが, 重複するSB-6015との先後関係が不明なため, どの舟形土坑に伴うか判然としない。しかし, SB-6015とは棟方向がほぼ同じであることから大きな時期差はないものとみられ, 舟形土坑群も時期差は余りないものと考えられる。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.20~1.95m, 梁行(南北)が3.20・3.30mである。柱穴の平面形は, 楕円形を呈するものも一部にはみられるが基本的に円形で径19~30cmを測り, 柱径は7~12cmとみられ, 深さは6~19cmである。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/1)シルト質砂であった。遺物は出土しなかった。

以上のように, SB-6015とは規模的に大きな違いはみられないものの柱穴の大きさが一回り小さくなっていることからすると, SB-6015の方が後出で, 本建物の建替えと考えることも可能である。

SB-6017 (図3-96)

VI-2区南西部, ST-6014の西側, ST-6038を掘り込んだ形で検出した桁行2間(4.00m), 梁行1間(2.40~2.50m)のやや歪みのある南北棟建物跡で, 棟方向は概ねN-28~30°-Eを示す。東側柱真中の柱穴は, ST-6038と重複していた関係で検出できていない。柱間寸法は, 桁行(南北)が2.00m, 梁行(東西)が2.40・2.50mである。柱穴の平面形は, 楕円形を呈するものもみられるが基本的に円形で径26~42cmを測り, 柱径は12cm前後とみられ, 深さは19~28cmである。柱穴の埋土は黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器5点がみられたが, 図示できるものはなかった。

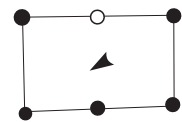


図3-96 SB-6017

SB-6018 (図3-97)

VI-2区南西部, ST-6038の南隣, ST-6041を切った形で検出した桁行2間(3.10m), 梁行1間(2.70m)の小型東西棟建物跡で, 棟方向はN-83°-Wを示す。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.40~1.70m, 梁行(南北)が2.70mである。柱穴の平面形は, 楕円形を呈するものも一部にみられるが基本的に円形で径19~32cmを測り, 柱径は7~16cmとみられ, 深さは16~29cmである。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土であった。出土遺物には弥生土器2点がみられ, 内1点(6431)が図示できた。

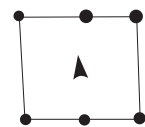


図3-97 SB-6018

出土遺物

弥生土器(図3-98 6431)

甕で, 貼付口縁となり, 口縁部は外反する。口縁部外面には指頭圧痕が残存する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

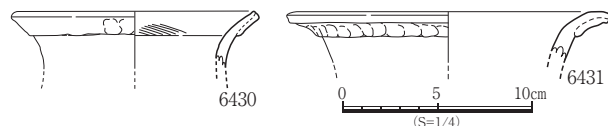


図3-98 SB-6012・6018出土遺物実測図

SB-6019 (図3-99)

VI-2区南西部, ST-6016の東側で検出した桁行2間(3.20m), 梁行1間(2.80m)の小型東西棟建物跡で, 棟方向は概ねN-70°-Wを示す。北側柱真中の柱穴は未検出である。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.60m等間隔, 梁行(南北)が2.80mである。柱

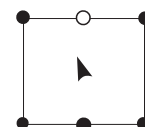


図3-99 SB-6019

穴の平面形は、楕円形を呈するものもみられるが基本的に円形で径22～40cmを測り、柱径は約8cmとみられ、深さは11～26cmである。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/1)シルト質砂であった。遺物は出土しなかった。

SB-6020 (図3-100)

VI-2区南部, ST-6021の東隣で検出した桁行1間(2.80～2.90m), 梁行1間(1.70～1.80m)の歪みのある小型東西棟建物跡で、棟方向はN-48～51°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が2.80・2.90m, 梁行(南北)が1.70・1.80mである。柱穴の平面形は、楕円形を呈するものもみられるが基本的に円形で径21～32cmを測り、柱径は約13cmとみられ、深さは8～23cmである。柱穴の埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器1点がみられたが、図示できなかった。

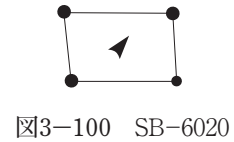


図3-100 SB-6020

SB-6021 (図3-101)

VI-2区南部, ST-6021の東隣, SB-6020の東隣で検出した桁行4間(6.00～6.10m), 梁行1間(2.90m)のやや歪みのある南北棟建物跡で、棟方向は概ねN-41°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.10～1.75m, 梁行(東西)が2.90mである。柱穴の平面形は、楕円形を呈するものも一部にみられるが基本的に円形で径25～35cmを測り、柱径は約15cmとみられ、深さは16～34cmである。柱穴の埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器2点がみられたが、図示できなかった。

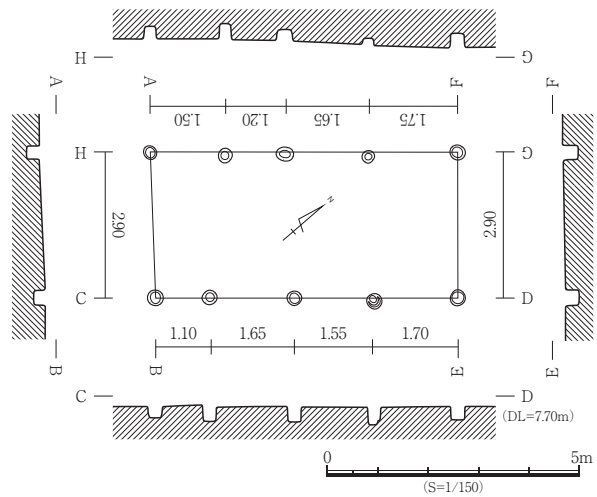


図3-101 SB-6021

SB-6022 (図3-102)

VI-2区南部, ST-6054の南側で検出した桁行2間(2.50～2.70m), 梁行1間(2.50m)の歪みのある小型南北棟建物跡で、棟方向はN-38～40°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.05～1.45m, 梁行(東西)が2.50mである。柱穴の平面形は円形で、径23～30cmを測り、柱径は約13cmとみられ、深さは28～58cmである。柱穴の埋土は黒色(5Y2/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器6点がみられたが、図示できるものはなかった。

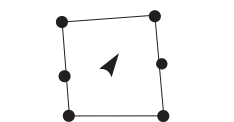


図3-102 SB-6022

SB-6023 (図3-103)

VI-2区中央部, ST-6047の北側で検出した桁行2間(3.60m), 梁行1間(2.00m)の小型南北棟建物跡で、棟方向はN-22°-Wを示す。西側柱の真中の柱穴は未検出で、南妻柱列上に柱穴が乗るが、他の例からみて別の柱穴と考えられる。柱間寸法は、桁行(南北)が1.70・1.90m, 梁行(東西)が2.00mである。柱穴の平面形は円形で、径25～36cmを測り、柱径は約15cmとみられ、深さは24～37cmである。柱穴の埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトであった。遺物は出土しなかった。

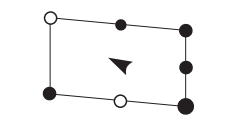


図3-103 SB-6023

SB-6024 (図3-104)

VI-2区北東部, ST-6034の北隣で検出した桁行4間(5.10m), 梁行1間(2.40～2.50m)の東西棟建物跡

で、棟方向はN-57~58°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.10~1.40m、梁行(南北)が2.40・2.50mである。柱穴の平面形は円形で、径24~33cmを測り、柱径は12~14cmとみられ、深さは8~28cmである。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器2点がみられたが、図示できなかった。

SB-6025 (図3-105)

VI-2区北東部、SB-6024の北隣で検出した桁行4間(5.70m)、梁行1間(2.70m)の東西棟建物跡で、棟方向はN-62°-Eを示す。丁度、北と南の側柱列中央の柱穴が未検出であるが、構造上それぞれ入口等何らかの機能を果たしていたことも考慮される。また、西側約1.5mに北平側と平行する短い舟形土坑(SK-6057)があり、この建物に伴う可能性が高い。柱間寸法は、桁行(東西)が1.20~3.00m、梁行(南北)が2.70mである。柱穴の平面形は、楕円形を呈するものも一部にみられるが基本的に円形で、径24~44cmを測り、柱径は12~15cmとみられ、深さは14~25cmである。柱穴の埋土は黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトであった。遺物は出土しなかった。

SB-6026 (図3-106)

VI-2区北東部、SB-6025と重複する形で検出した桁行5間(7.00m)、梁行1間(2.70m)の大型南北棟建物跡で、棟方向はN-42°-Eを示す。北東隅柱と東側柱北から1間目柱穴は調査区外にあり、未確認である。柱間寸法は、桁行(南北)が1.20~1.60m、梁行(東西)が2.70mである。柱穴の平面形は、楕円形を呈するものも一部にみられるが基本的に円形で、径24~44cmを測り、柱径は15~21cmとみられ、深さは4~35cmである。柱穴の埋土は黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器1点がみられたが、図示できなかった。

③ 塀・柵列跡

7列を復元したが、竪穴建物跡や掘立柱建物跡など集落の施設を圍繞するものではなく、間接的に関連するとみられる。

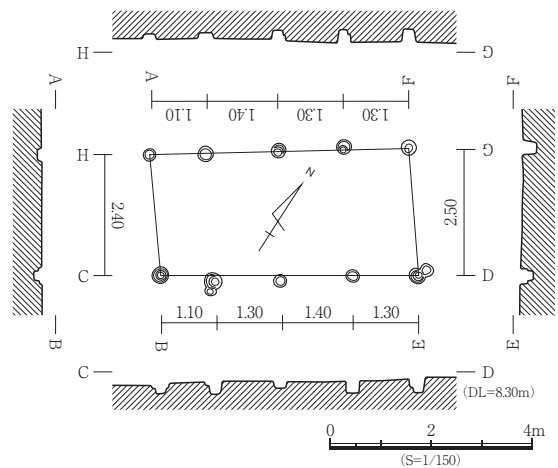


図3-104 SB-6024

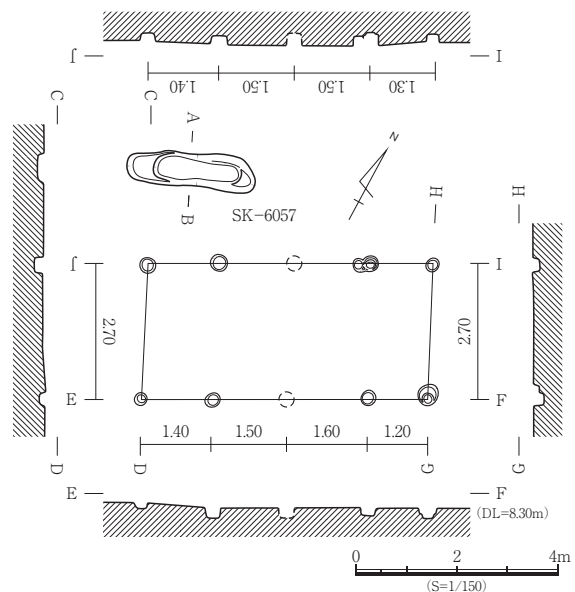


図3-105 SB-6025, SK-6057

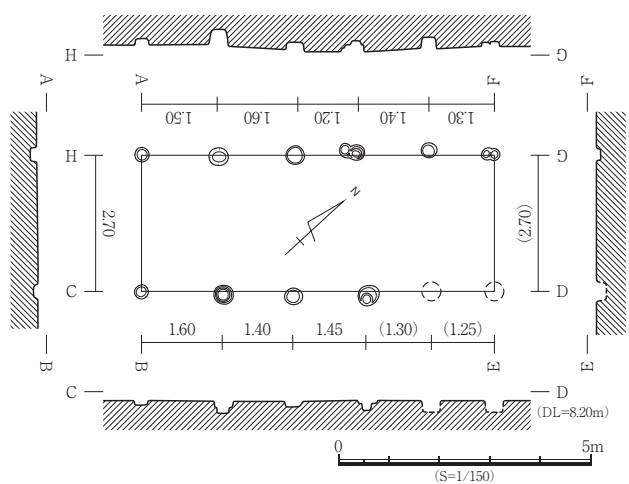


図3-106 SB-6026

1. VI区 (1) 弥生時代

SA-6001 (図3-107)

VI-1区南西部西壁際, SB-6003の西平側の延長上で検出した南北柵列跡(N-9°-E)である。2間分(2.00m)を検出し, 柱間寸法は0.90mと1.10mである。柱穴の平面形は楕円形を呈するものもあるが基本的に円形で, 径は18~26cmを測り, 柱径は10cm前後で, 深さ13~19cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含むオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質粘土であった。出土遺物には弥生土器1点がみられたが, 図示できなかった。



図3-107 SA-6001

SA-6002 (図3-108)

VI-1区南部, ST-6003に掘り込まれた形で検出した南北柵列跡(N-11°-W)である。4間分(3.20m)を検出し, 柱間寸法は0.80m等間隔である。柱穴の平面形はほぼ円形で, 径は20~26cmを測り, 柱径は10cm前後とみられ, 深さは3~27cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土であった。遺物は出土しなかった。



図3-108 SA-6002

SA-6003 (図3-109)

VI-1区東部, ST-6005の南隣で検出した東西柵列跡(N-52°-W)である。6間分(4.20m)を検出し, 柱間寸法は0.60~0.80mである。柱穴の平面形は楕円形を呈するものが多く, 径は16~65cmを測り, 柱径は10cm前後とみられ, 深さは2~9cmと浅い。柱穴の埋土は黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器45点と比較的多かったものの, 図示できるものはなかった。



図3-109 SA-6003

SA-6004 (図3-110)

VI-2区南西部, ST-6041の西隣で検出した東西柵列跡(N-60°-E)である。2間分(5.20m)を検出し, 柱間寸法は2.30・2.90mと広い。柱穴の平面形はほぼ円形で, 径は22~28cmを測り, 柱径は8~11cmとみられ, 深さは8~13cmである。柱穴の埋土は黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトであった。遺物は出土しなかった。

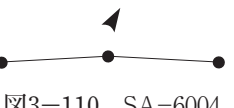


図3-110 SA-6004

SA-6005 (図3-111)

VI-2区中央部, SK-6040の北西側で検出した南北柵列跡(N-37°-E)である。3間分(5.80m)を検出し, 柱間寸法は1.50~2.30mと比較的広い。柱穴の平面形は円形以外に楕円形を呈するものもみられ, 径は26~50cmを測り, 柱径は11~15cmとみられ, 深さは7~45cmである。柱穴の埋土は黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトであった。遺物は出土しなかった。



図3-111 SA-6005

SA-6006 (図3-112)

VI-2区中央部, SK-6046の北側で検出した東西柵列跡(N-67°-E)である。4間分(13.00m)を検出し, 柱間寸法は2.90~4.20mと広い。柱穴の平面形は楕円形を呈するものもみられるがほぼ円形で, 径は25~44cmを測り, 柱径は10cm前後とみられ, 深さは3~16cmである。柱穴の埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトであった。遺物は出土しなかった。

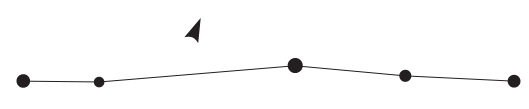


図3-112 SA-6006

SA-6007 (図3-113)

VI-2区北部, SK-6054の南側で検出した東西柵列跡(N-84°-W)である。5間分(13.70m)を検出し,

柱間寸法は2.50～3.20mと広い。柱穴の平面形はほぼ円形で、径は20～50cmを測り、柱径は約16cmとみられ、深さは3～28cmである。柱穴の埋土はオリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器2点がみられたが、図示できなかった。



図3-113 SA-6007

④ 土坑

SK-6001 (図3-81・114)

VI-1区北部, SB-6001の北隣で検出した舟形の土坑で, SB-6001に関連する土坑とみられる。長辺7.24m, 短辺0.76m, 深さ91cmを測り, 長軸方向はN-86°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。両端には一段低い段部, 底面からは3個のピットとピット状の落ち込みが検出され, 何らかの覆いをしていたことが考えられる。埋土は地山のブロックを含むオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質粘土であった。出土遺物には弥生土器236点と石製品3点がみられ, 弥生土器3点(6432～6434)と石製品3点(6435～6437)が図示できた。

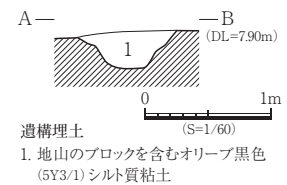


図3-114 SK-6001

出土遺物

弥生土器(図3-115 6432～6434)

6432は無頸壺で, 口縁部は丸い胴部から僅かに直立する。胴部内面下半にはヘラ削り, 外面にはタテ方向のハケ調整を施す。6433は壺で, 口縁部が直立する頸部から外反するもので, 貼付口縁となり, 口縁部外面には指頭圧痕が残存する。いずれも胎土には中粒砂から極粗粒砂を少し含む。

6434は甕で, 口縁部は外反し, 貼付口縁となり, 端部下端にはヘラ状工具による刻目を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

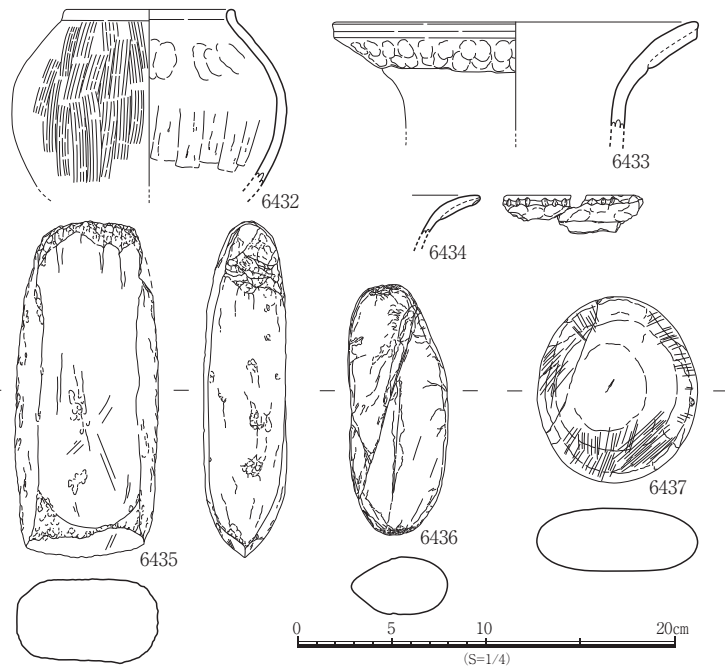


図3-115 SK-6001出土遺物実測図

石製品(図3-115 6435～6437)

6435は太型蛤刃石斧で, 刃部は丁寧に研磨される。刃部長6.5cm, 幅1.6cmを測る。

6436は叩石で, 断面は楕円形を呈し, 両端に敲打痕と摩滅痕が残存する。

6437は磨石で, 表面は平滑となり, 縁辺を中心に擦痕が残存する。

SK-6002 (図3-116)

VI-1区北部, ST-6035の北側で検出した不整形の土坑である。長辺約2.80m, 短辺1.30m, 深さ1.48mを測り, 長軸方向はN-14°-Eを示す。北側に円形の深い落ち込みがあり, それに向って北と南から階段状の段部が作られており, 水汲み用施設であった可能性が考慮される。北側の落ち込みにはかつて湧水があったのではなかろうか。埋土は黒色～黒褐色(10YR2/1～3/1)シルト～粘土質シルトを

1. VI区 (1) 弥生時代

主に地山のブロックの含み具合により6層に分層される。出土遺物には弥生土器19点と石製品1点がみられ、石製品1点(6438)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-118 6438)

磨石で、表面の約2/3が剥離する。

SK-6003(図3-116)

VI-1区北部、SK-6002を掘り込んだ形で検出した浅い不整楕円形の土坑である。長径2.60m、短径1.28m、深さ7cmを測り、長軸方向はN-10°-Eを示す。北側に不整楕円形の浅い落ち込みがみられる。埋土は地山のブロックを含むオリーブ黒色(5Y2/2)シルト質粘土であった。出土遺物には弥生土器65点がみられ、内3点(6439~6441)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-118 6439~6441)

6439・6440は壺で、6439は、貼付口縁で、口縁部は外傾し、拡張した端部にはハケ調整の後に楕円形浮文を貼付し、その下に微隆起突帯を作り出す。この微隆起突帯は上下にクシ描直線文を施すことにより作り出している。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。6440は、口縁部が直立する頸部から大きく外反するもので、貼付口縁となり、端部には擬凹線文を施す。口縁部外面には指頭圧痕が残存する。胎土には極粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6441は甕の底部とみられるもので、外面は被熱で変色し、外底面には煤が付着する。胎土には極粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

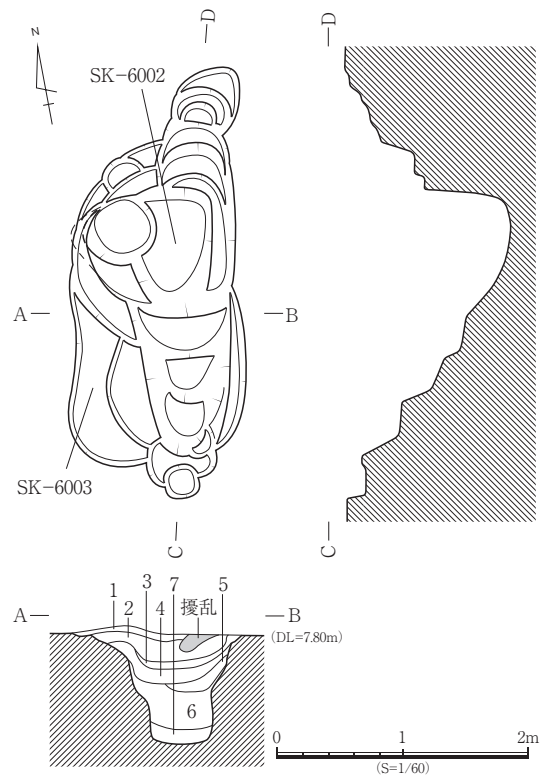
SK-6004(図3-117)

VI-1区中央部西壁際、ST-6026の北隣、SB-6002に掘り込まれた形で検出した舟形の土坑で、西の調査区外に続く。他の例からすると建物跡に関連するものとみられるが、周囲には関連する建物跡は確認されていない。長辺5.47m以上、短辺0.72m、深さ40cmを測り、長軸方向はN-88°-Wを示し、ほぼ方眼東を向く。断面形はU字形を呈する。床面はほぼ平らで、東端部に階段状の段部がみられる。埋土は黒色~黒褐色(10YR2/1~3/1)粘土質シルトを主体に3層に分層される。出土遺物には弥生土器60点がみられ、内2点(6442・6443)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-118 6442・6443)

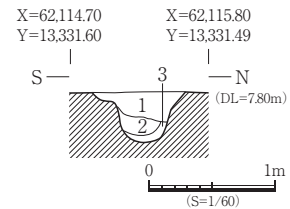
いずれも甕の底部とみられるもので、6442は高台状の底部となり、接合部には指頭圧痕が残存す



遺構埋土

1. 地山のブロックを含むオリーブ黒色(5Y2/2)シルト質粘土(SK-6003)
2. 地山のブロックを含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト(SK-6002)
3. 黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト(SK-6002)
4. 地山のブロックを含む黒色(10YR2/1)シルト(SK-6002)
5. 黒色(2.5Y2/1)シルト(SK-6002)
6. 地山のブロックを含む黒色(10YR2/1)シルト(SK-6002)
7. 黒色(10YR2/1)砂質シルト(SK-6002)

図3-116 SK-6002・6003



遺構埋土

1. 黒色(10YR2/1)粘土質シルト
2. 黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト
3. 地山のブロックを僅かに含む黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト

図3-117 SK-6004

る。6443は器壁が薄く、外面にハケ目が残存する。胎土には、6442が細粒砂から極粗粒砂、6443が中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SK-6005

VI-1区中央部、ST-6026とST-6035の間で検出した溝状の土坑である。長辺3.46m、短辺0.27m、深さ4cmを測り、長軸方向はN-11°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土はオリブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトであった。遺物は出土しなかった。

SK-6006

VI-1区中央部、ST-6026の床面で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.07m、短辺0.76m、深さ17cmを測り、長軸方向はN-32°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/1)砂質シルトであった。遺物は出土しなかった。

SK-6007 (図3-119)

VI-1区中央部、ST-6035の南隣で検出した染み状の不整楕円形の土坑である。長径2.84m、短径1.41m、深さ7cmを測り、長軸方向はN-10°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土はオリブ黒色(5Y3/1)シルト質粘土であった。出土遺物には弥生土器40点がみられ、内3点(6444~6446)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-123 6444~6446)

6444・6445は壺である。6444は、口縁部が水平に屈曲するもので、内面基部には矩形の突帯が付く。胎土には極粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。6445は口縁部が胴部からほぼ直立するもので、肩部外面にはヘラ状工具による刺突文を施す。胎土には中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6446は甕で、貼付口縁となり、口縁部は外反する。口縁端部下端にはヘラ状工具による刻目、その下に微隆起突帯を作り出す。微隆起突帯の上半にはヨコナデ調整、下半にはハケ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

SK-6008

VI-1区中央部、ST-6005の南側で検出した溝状の土坑で、東側に深さ22cmのピット状の落ち込みがみられ、何らかの覆いをしていたことも考えられる。長辺3.26m、短辺0.18m、深さ6cmを測り、長軸方向はN-60°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土であった。遺物は出土しなかった。

SK-6009 (図3-120)

VI-1区南部、SK-6010の東隣で検出した楕円形の土坑で、壁際に幅の

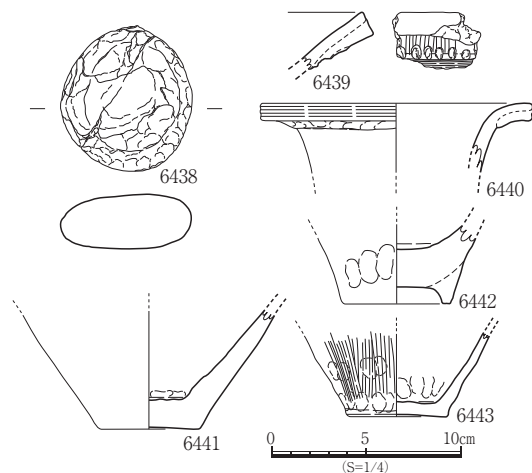


図3-118 SK-6002~6004出土遺物実測図

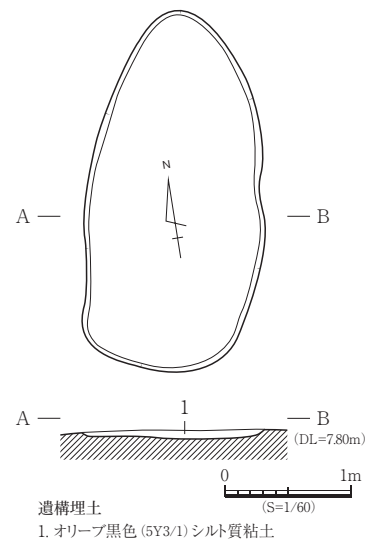


図3-119 SK-6007

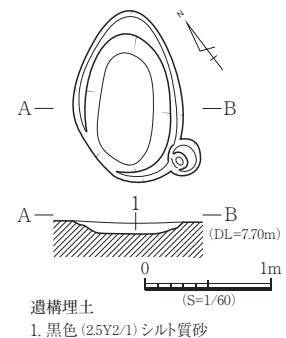


図3-120 SK-6009

1. VI区 (1) 弥生時代

狭い段が巡り、底面は一段落ち込む。長径1.35m，短径0.84m，深さ8cmを測り，長軸方向はN-36°-Eを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は黒色(2.5Y2/1)シルト質砂であった。遺物は出土しなかった。

SK-6010 (図3-37・86・121)

VI-1区南部，ST-6027に掘り込まれた形で検出したSB-6006との関連が考慮される舟形の土坑で，西端部に一段低い段部がみられ，東側の底面には径30cmの円形で，深さ5cmのピットがあり，何らかの覆いをしていたことも考えられる。長辺4.26m，短辺0.44m，深さ30cmを測り，長軸方向はN-63°-Wを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトであった。遺物は出土しなかった。

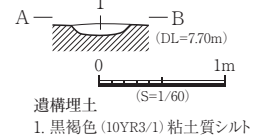


図3-121 SK-6010

SK-6011 (図3-122)

VI-1区南部，ST-6001・6002を切った形で検出した方形の土坑で，北西壁際に円形の落ち込み，底面から2個のピットを確認した。長辺1.38m，短辺0.92m，深さ30cmを測り，長軸方向はN-82°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトを主体に地山のブロックの含み具合によって5層に分層される。出土遺物は弥生土器46点，サヌカイト片6点(2.6g)がみられ，弥生土器2点(6447・6448)が図示できた。

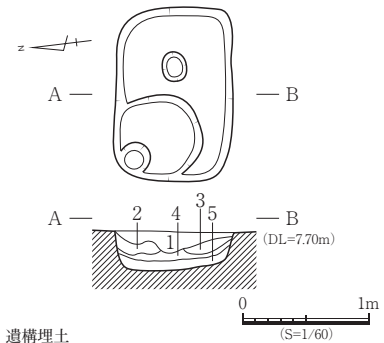


図3-122 SK-6011

出土遺物

弥生土器(図3-123 6447・6448)

6447は壺で，口縁部は外反し，端部には擬凹線文を施してから棒状浮文を貼付する。胎土には中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

6448は甕で，口頸部はくの字形を呈し，胴部外面にはヘラ磨きを施す。胎土には中粒砂から極粗粒砂を少し含む。

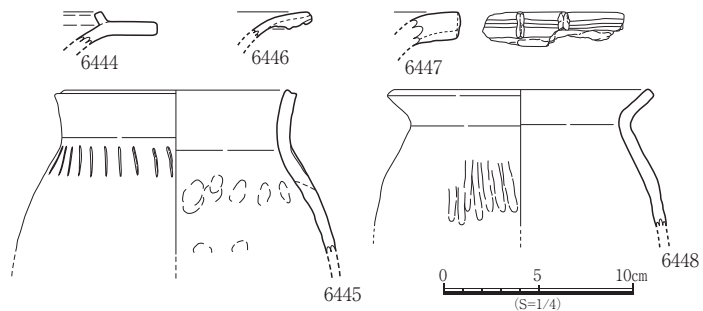


図3-123 SK-6007・6011出土遺物実測図

SK-6012 (図3-124)

VI-1区南部，ST-6002の東壁を切った形で検出した方形の土坑で，形状から考えると土坑墓の可能性も考慮される。長辺1.42m，短辺0.78m，深さ24cmを測り，長軸方向はN-19°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土はオリブ黒色(5Y2/2)シルト質粘土であった。出土遺物は弥生土器43点，サヌカイト片2点(0.6g)がみられたが，図示できるものはなかった。

SK-6013 (図3-84)

VI-1区南端部，ST-6003に切られた形で検出した舟形の土坑で，SB-6004の西平側に平行していることから関連した土坑とみられる。長辺1.28m以上，短辺0.40m，深さ10cmを測り，長軸方向はN

-28°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し、底面には2カ所に浅い落ち込みがみられる。埋土は暗オリーブ灰色(5GY3/1)シルト質粘土であった。遺物は出土しなかった。

SK-6014 (図3-125)

VI-1区南端部、南壁際で検出した舟形の土坑である。SK-6001などと同形態で同じ性格のものとみられ、南側には掘立柱建物が存在するものと考えられる。長辺6.15m、短辺0.90m、深さ88cmを測り、長軸方向はN-86°-Wを示す。断面形は逆台形を呈し、西側に最深部があり、西壁際に段部が2段、東側には階段状の段部が設けられる。底面からは支柱穴となり得るピットは確認されていない。埋土は黒色～黒褐色(10YR2/1～2/2)シルト質粘土ないし粘土質シルトと黒褐色(10YR2/2～3/1)砂質シルトを主体に地山のブロックの含み具合により6層に分層される。出土遺物には弥生土器133点と石製品1点がみられ、弥生土器6点(6449～6454)と石製品1点(6455)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-126 6449～6454)

6449・6450は壺で、6449は貼付口縁となり、口頸部は胴部から外反して立ち上がり、頸部下端には3条の微隆起突帯を貼付する。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。6450は、胴部外面にハケ調整の後にヘラ磨きを施した上で、肩部に4本単位のクシ描波状文を施文する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

6451・6452は甕で、いずれも口縁部は外反し貼付口縁となり、口縁部外面には指頭圧痕が残存し、6452の端部下端にヘラ状工具による刻目を施す。胎土には、6451が細粒砂から極粗粒砂を少し、6452が中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

6453は壺の底部とみられるもので、底部は高台状となり、胎土には極粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

6454は高杯で、裾部は大きく開き、端部を拡張して擬凹線文を施す。脚柱中央部外面には4条のヘラ描沈線、その下4カ所に三角形の透かしを設ける。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

石製品(図3-126 6455)

打製石鎌で、表面が自然面で平滑となり縁辺を中心に擦痕、裏面が剝離面となり、縁辺1カ所に打撃痕が残存する。

SK-6015 (図3-89・127)

VI-2区北西部、西壁際で検出した舟形の土坑で、SB-6009

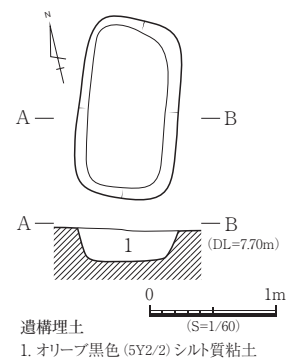
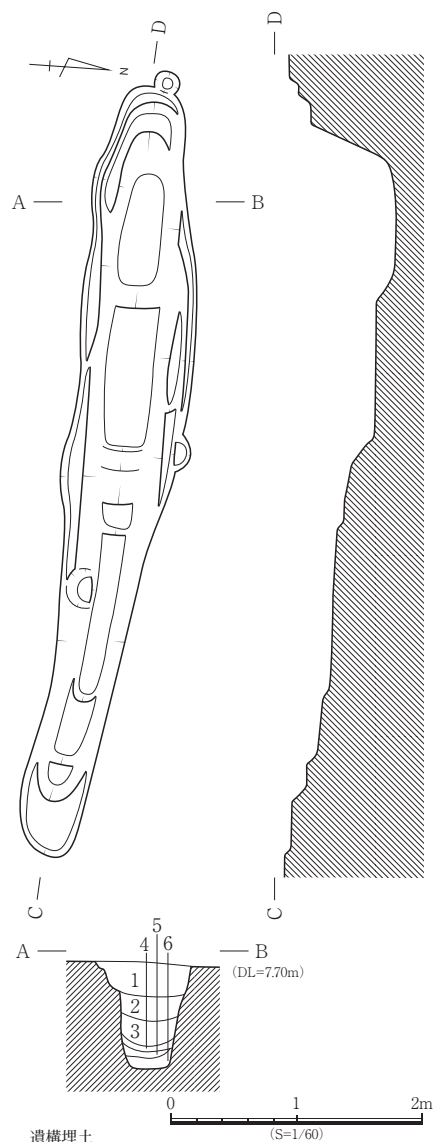


図3-124 SK-6012



遺構埋土
1. 地山のブロックを含む黒色(10YR2/1)シルト質粘土
2. 黒色(10YR2/1)粘土質シルト
3. 地山のブロックを含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト
4. 黒褐色(10YR3/1)砂質シルト
5. 黒褐色(10YR3/2)砂
6. 黒褐色(10YR2/2)砂質シルト

図3-125 SK-6014

1. VI区 (1) 弥生時代

に伴うものとみられ、VI-1区から遺構の西端部と考えられる掘り込みを検出している。長辺11.80m，短辺0.72m，深さ37cmを測り，長軸方向はN-47°-Eを示す。断面形はU字形を呈し，東端部には階段状の段部が設けられ，底面は西に向って深くなる。また，西端部にも段部が

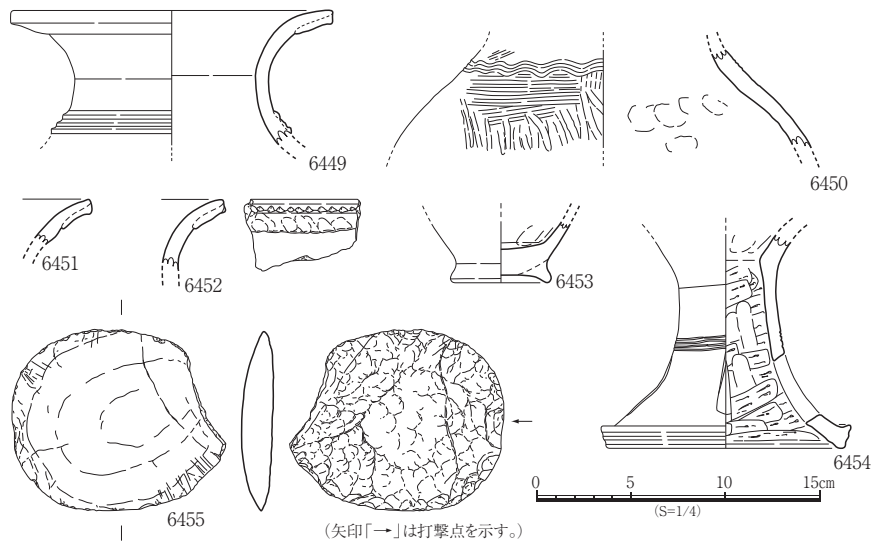


図3-126 SK-6014出土遺物実測図

みられ，階段状を呈していた可能性が考えられる。埋土は3層に分層され，上層から黒色(10YR2/1)シルト質粘土，地山のブロックを含む黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト，黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトとなっていた。出土遺物には弥生土器233点がみられ，内4点(6456～6459)が図示できた。

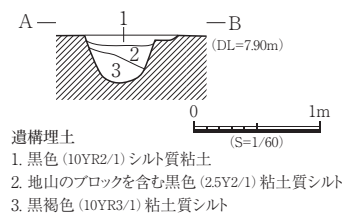


図3-127 SK-6015

出土遺物

弥生土器(図3-128 6456～6459)

いずれも甕で，6456・6457は貼付口縁で口頸部が外反し，端部下端にヘラ状工具による刻目を施す。6456は刻目の下にヨコナデ調整で微隆起突帯を作り出す。いずれも胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。6458は，口縁部が直立する頸部から外傾するもので，貼付口縁となり，口縁部外面には指頭圧痕が残存する。6459は口頸部がくの字形を呈するもので，口縁端部は凹面となり，口縁部は外傾接合で肥厚される。胎土には，6458が細粒砂から極粗粒砂，6459が極粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

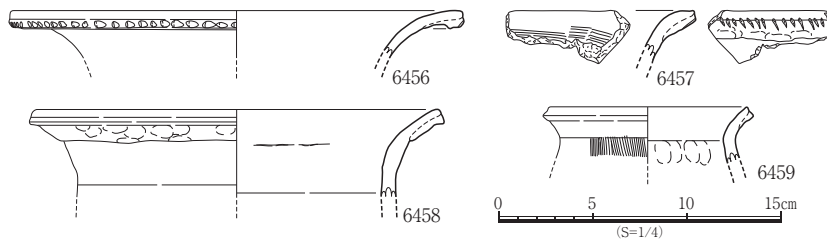


図3-128 SK-6015出土遺物実測図

SK-6016 (図3-129)

VI-2区北西部，ST-6008の北隣で検出した舟形の土坑で，西側を古代の道路遺構(SR-6002)に掘り込まれる。長辺3.00m以上，短辺0.66m，深さ38cmを測り，長軸方向はN-47°-Wを示す。断面形はU字形を呈し，底面の西側

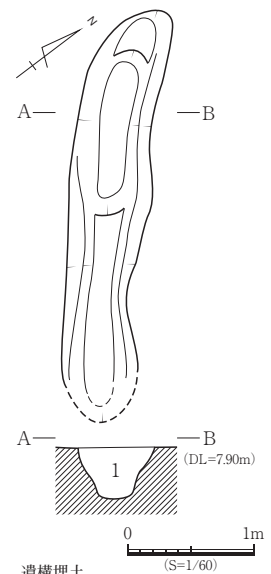


図3-129 SK-6016

は1段低い落ち込みとなる。埋土は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器68点、石製品2点がみられ、弥生土器3点(6460～6462)、石製品2点(6463・6464)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-130 6460～6462)

6460は甕で、口縁部は短く外反し、胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

6461・6462は甕の底部とみられるもので、6461の底部は高台状となる。いずれも胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

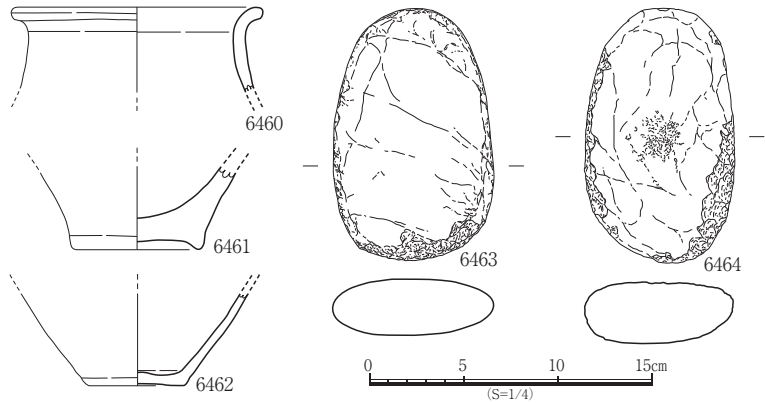


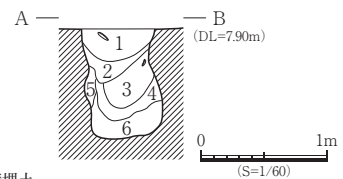
図3-130 SK-6016出土遺物実測図

石製品(図3-130 6463・6464)

いずれも叩石で、6463は縁辺部、6464は側面と片面中央に敲打痕が残存する。

SK-6017(図3-90・131)

VI-2区北西部、ST-6008の東隣で検出した舟形の土坑で、西側を古代の道路遺構(SR-6002)に掘り込まれる。長辺3.01m以上、短辺0.59m、深さ1.35mを測り、長軸方向はN-61°-Eを示す。断面形は概ね逆台形を呈するが、場所により袋状をなす部分もみられる。埋土は黒褐色(2.5Y3/1～3/2)粘土質シルトを主体に地山のブロックの含む度合いによって6層に分層される。出土遺物には弥生土器39点、石製品2点がみられ、弥生土器5点(6465～6469)、石製品2点(6470・6471)が図示できた。



- 遺構埋土
- 1. 黒色(10YR2/1)粘土質シルト
 - 2. 黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト
 - 3. 地山のブロックを僅かに含む黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト
 - 4. 地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルト
 - 5. 地山のブロックを含む黒色(5Y2/1)シルト質砂
 - 6. オリーブ黒色(5Y3/2)砂質シルト

図3-131 SK-6017

出土遺物

弥生土器(図3-134 6465～6469)

6465は壺で、貼付口縁となり、口頸部は外反する。口縁部外面には指頭圧痕が残存する。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から極細粒中礫を比較的多く含む。

6466～6468は甕で、口縁部はいずれも外反し、6467・6468は貼付口縁となり、6466・6467の口縁端部下端にはヘラ状工具による刻目が施される。胎土には、6466が細粒砂から粗粒砂を比較的多く、6467が粗粒砂から極粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く、6468が粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6469はミニチュア土器で、器面には指頭圧痕が残り、胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

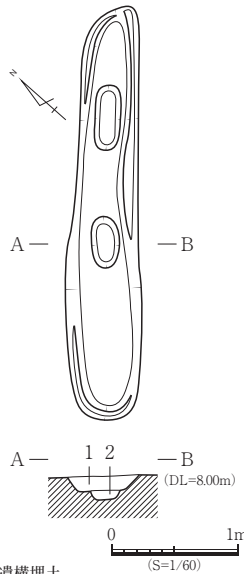
石製品(図3-134 6470・6471)

6470は打製石鎌で、欠けたままで使用したとみられる。表面は自然面で平滑となり縁辺を中心に擦痕、裏面は剝離面となる。

6471は扁平な磨石で、縁辺を中心に擦痕が残存する。

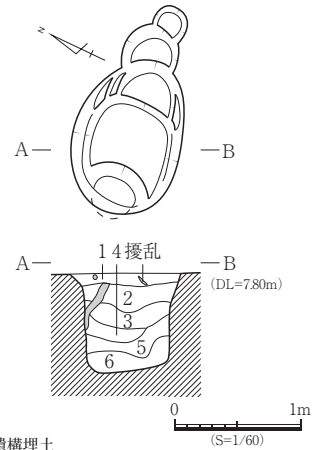
SK-6018 (図3-132)

VI-2区中央部, ST-6012・6037の北隣で検出した舟形の土坑である。長辺3.25m, 短辺0.58m, 深さ58cmを測り, 長軸方向はN-49°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し, 底面には楕円形状の浅い落ち込みがみられた。埋土は地山のブロックを含むオリブ黒色(7.5Y3/1)砂で, 落ち込み部分には地山のブロックを含む黒色(10YR2/1)シルト質砂の堆積が認められた。出土遺物には弥生土器1点がみられたが, 図示できなかった。



- 遺構埋土
1. 地山のブロックを含むオリブ黒色(7.5Y3/1)砂
 2. 地山のブロックを含む黒色(10YR2/1)シルト質砂

図3-132 SK-6018



- 遺構埋土
1. 中粒中礫を含む黒色(7.5Y2/1)シルト質砂
 2. 少量の炭化物, 中粒中礫と地山のブロックを含む黒色(2.5Y2/1)砂質シルト
 3. 少量の炭化物, 中粒中礫と地山のブロックを含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト
 4. 地山のブロックを含む黒色(7.5Y2/1)粘土質シルト
 5. 黒色(7.5Y2/1)粘土質シルト
 6. 地山のブロックを含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト

図3-133 SK-6019

SK-6019 (図3-133)

VI-2区西部, SK-6024の東隣で検出した楕円形の土坑で, 東側のピットを切る。長径1.24m, 短径0.86m, 深さ96cmを

測り, 長軸方向はN-86°-Eを示す。断面形は概ね逆台形を呈し, 壁が垂直となる部分も一部にみられた。埋土は黒色(7.5Y2/1)粘土質シルトを主体に地山のブロックの含む度合いにより6層に分層される。出土遺物には弥生土器34点がみられ, 内2点(6472・6473)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-134 6472・6473)

6472は甕で, 口縁部は胴部から屈曲し, 口縁端部を拡張して凹線文を施す。胴部内面にはヘラ磨き, 外面には煤が付着する。胎土には雲母片と細粒砂から粗粒砂を少し含む。

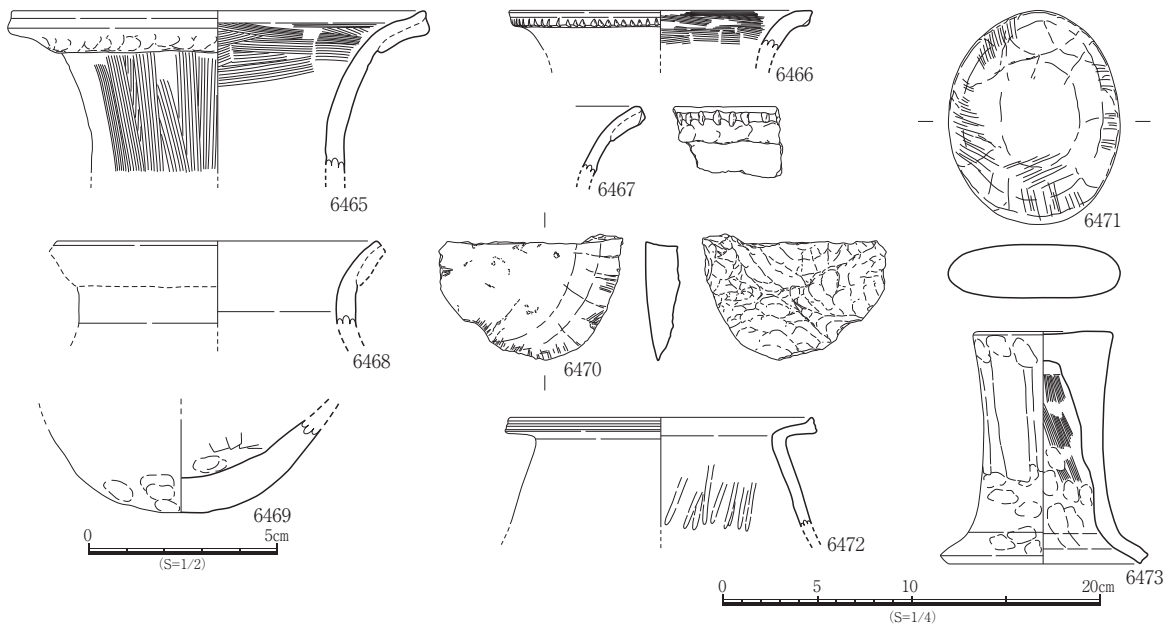


図3-134 SK-6017・6019出土遺物実測図

6473は蓋で、天井部は凹面となり、口縁部は外に開き、端部は浅い凹面となる。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

SK-6020～6024 (図3-95・135～137)

VI-2区西部，SB-6015・6016の北側で検出した舟形を中心とする土坑群で、セクションで確認した切り合い関係は，SK-6021，SK-6020，SK-6022，SK-6023，SK-6024の順で，形状は，SK-6020が不整形である以外はいずれも舟形となる。これら遺構の有り様には二種類みられ，それは深さに現れる。すなわち，SK-6020・6021が1.30m以上掘削されているのに対し他は0.50m前後となり，前者は下層の砂礫層に達し，当時は湧水があったことが推察され，水汲み用の施設とみられ，SK-6002と同じ性格であったことが窺える。ただし，SK-6020にはSK-6002で確認されたような階段状の施設が確認されていないが，後述するように支柱穴とみられるピットが検出されており，階段状の施設が設けられていたことも考えられる。

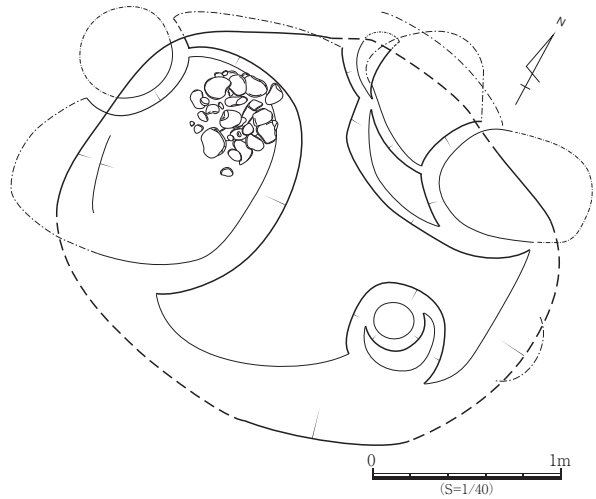


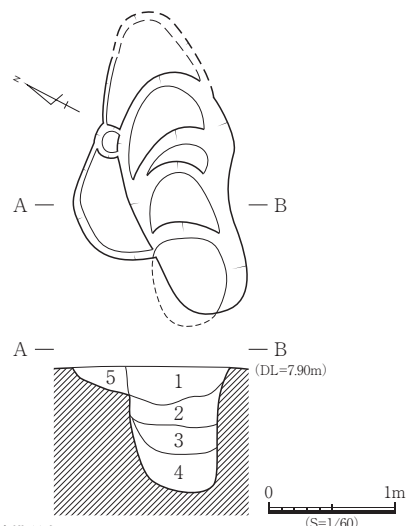
図3-135 SK-6020打製石鎌出土状態

舟形を呈するSK-6022・6023はその形状と他の例からみて，前述のとおりSB-6015・6016に関連するものと考えられる。切り合い関係が明確ではないが，柱穴が一回り大きくなっている点を拡張と捉えれば，SB-6015がSB-6016の建替えと考えることができ，SK-6022がSB-6016に，SK-6023がSB-6015に関連する可能性がある。

なお，SK-6021～6023は調査時には切り合い関係が明確にできず，同一の遺構として調査しているため，出土遺物を明確にできないものも含まれる。以下，個々の遺構について記す。

SK-6020は長径2.56m，短径2.08m，深さ1.56mを測り，断面形は袋状を呈し，底面から径50cm，深さ47cmを測る円形ピット1個と円形状の落ち込みを2カ所検出した。このピットはしっかりしており，支柱穴としての機能を果たしていたのではなかろうか。埋土は黒色ないし黒褐色(2.5Y2/1～10YR3/2)を基調とするシルト質粘土から粘土質シルトを主体とし砂粒から細粒中礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器33点，石製品83点がみられ，弥生土器15点(6474～6488)と石製品54点(6489～6542)が図示できた。この内，6489～6541の打製石鎌は2層中から折り重なるようにまとまって出土している。

SK-6021は舟形の土坑で，西端部が最も深く，それに向っ



遺構埋土

1. 粗粒中礫を含む黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト(SK-6021)
2. 中粒中礫を含む黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト(SK-6021)
3. 地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト(SK-6021)
4. 地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト(SK-6021)
5. 黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト(ピット)

図3-136 SK-6021

1. VI区 (1) 弥生時代

て東から階段状の段部が確認された。長辺2.50m, 短辺0.92m, 深さ1.30mを測り, 長軸方向はN-46°-Eを示す。断面形は概ね逆台形を呈し, 壁が垂直となる部分もみられた。埋土は黒色～黒褐色(2.5Y2/1～3/1)粘土質シルトを主体に地山や礫の含む度合いにより4層に分層される。SK-6023出土遺物として図示した弥生土器のうち6546と6553は本遺構から出土する。

SK-6022は, 本来, SK-6023と同規模の舟形の土坑とみられ, 前述のようにSB-6016に付設された可能性が考えられる。大半はSK-6023に掘り込まれており, 南壁の一部が確認されたのみである。検出長は, 長辺が4.24m, 短辺が0.34m, 深さ52cmで, 長軸方向はN-68°-Eを示す。断面形は概ね逆台形を呈するとみられる。埋土は黒褐色(10YR3/1)砂であった。

SK-6023は前述のようにSB-6015に付設された可能性が考えられる舟形土坑で, 長辺7.60m, 短辺0.90m, 深さ55cmを測り, 長軸方向はN-70°-Eを示す。東側に舟形状の落ち込みがみられ, その中央に径50cmの円形で深さ29cmのピットがあり, 支柱穴の可能性が考えられる。埋土は, 下層で粗粒中礫を含む黒褐色(10YR3/1)砂の堆積が認められた以外は黒色～黒褐色(10YR2/1～3/1)粘土質シルトを主体としていた。出土遺物には弥生土器390点がみられ, 内18点(6543～6560)が図示できた。

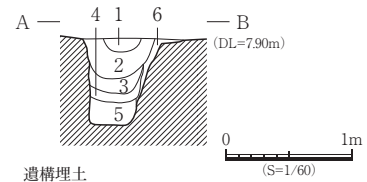
SK-6024は舟形土坑で, 長辺4.52m, 短辺0.42m, 深さ12cmを測り, 長軸方向はN-71°-Eを示す。底面は平坦で, 特に付設されたとみられる遺構は確認されていない。埋土は中粒中礫と地山のブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土であった。出土遺物には図示した弥生土器1点(6561)がみられた。

出土遺物

弥生土器(図3-138・139 6474～6488): SK-6020

6474は壺で, 胴部は丸味があり, 内面にヘラ削り, 外面にハケ調整の後にヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

6475～6480は甕で, い



- 遺構埋土
1. 中粒中礫と地山のブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土(SK-6024)
 2. 中粒中礫と地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト(SK-6023)
 3. 黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト(SK-6023)
 4. 地山のブロックを含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト(SK-6023)
 5. 粗粒中礫を含む黒褐色(10YR3/1)砂(SK-6023)
 6. 黒褐色(10YR3/1)砂(SK-6022)

図3-137 SK-6022～6024

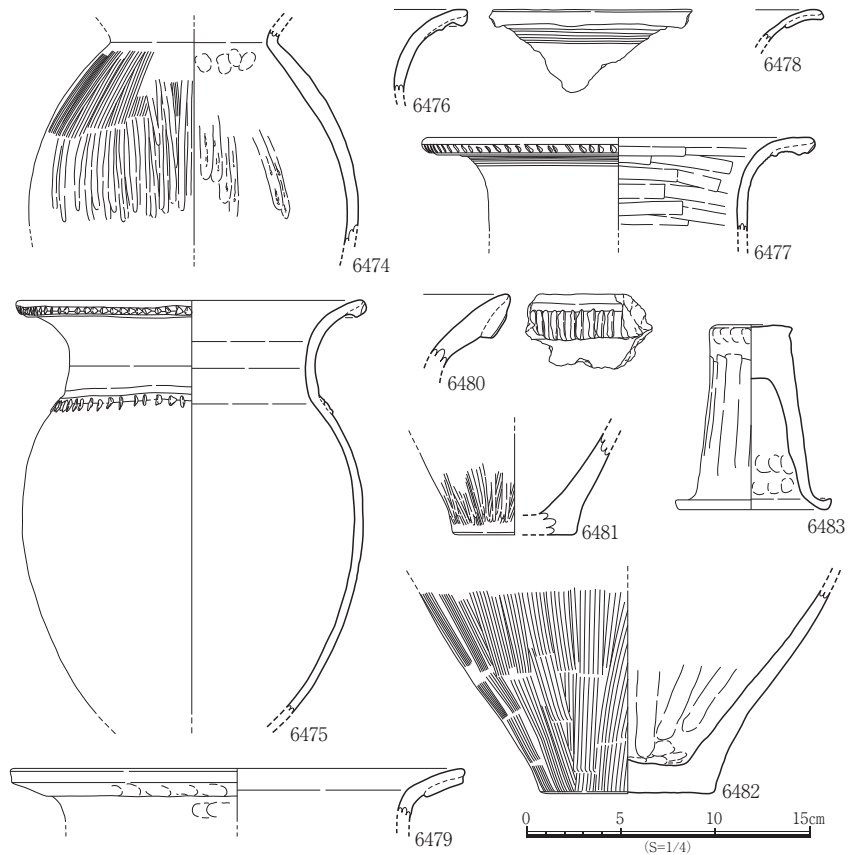


図3-138 SK-6020出土遺物実測図1

ずれも貼付口縁となり、口頸部は外反し、6475・6476・6478・6479の外面には煤が付着する。6475～6477には口縁部外面に微隆起突帯を作り出し、6475・6477の口縁端部下端にはヘラ状工具による刻目を施す。6475の肩部外面には貼付微隆起突帯の上に楕円形浮文を貼付する。口縁部外面の微隆起突帯は、ヨコナデ調整で作り出し、6476は下半、6477は上下にクシ描直線文を施す。胎土には、6475が中粒砂から極粗粒砂、6476が粗粒砂を中心に中粒砂から粗粒砂、6477が粗粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。6478・6479は口縁部外面に指頭圧痕が残存し、胎土には、6478が中粒砂から粗粒砂を比較的多く、6479が細粒砂から粗粒砂を少し含む。6480は口縁外面にヘラ状工具で幅広の刻目を施す。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

6481・6482は甕の底部とみられるもので、6481の外面にはヘラ磨き、6482の外面にはハケ調整が施され、6482の内面には焦げ目が付着し、外面は被熱で変色する。胎土には、6481が中粒砂から粗粒砂を比較的多く、6482が中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

6483は蓋で、天井部は浅い凹面となり、ほぼ真下に下り、口縁部は短く外反する。天井部外端には指頭圧痕が残存する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

6484～6488は大きさに差異はあるものの同形態のミニチュア土器で、口縁部は胴部から短く外反ないし外傾し、器面各所に指頭圧痕が残存する。底部は、6484が平底、6485・6488が高台状、6486・6487が上げ底風となる。口縁部は、6484～6486が貼付口縁となり、口縁部外面には指頭圧痕が残存する。6485・6486の胴部外面には黒斑がみられる。胎土には、6484が粗粒砂を中心に中粒砂から粗粒砂を少し、6485・6486が細粒砂から粗粒砂を比較的多く、6487が中粒

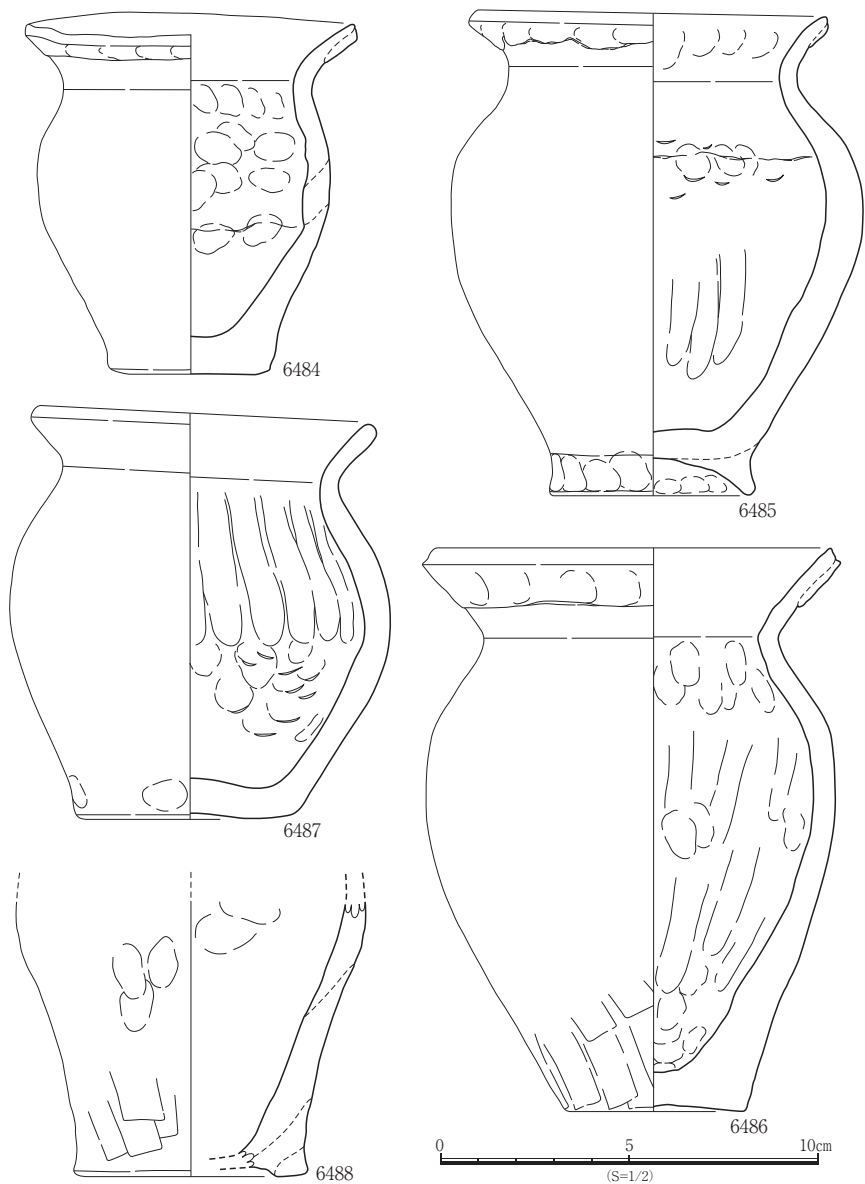


図3-139 SK-6020出土遺物実測図2

砂から粗粒砂を多く、6488が細粒砂から粗粒砂を少し含む。

石製品(図3-140~143

6489~6542): SK-6020

6489~6541は打製石鎌で、重量によって小型(100g以下)、中型(100~200g)、大型(200g以上)に大きく分けることができる。これは、使用する人によって異なるのではないかとみられ、小型が小人、中型が女性、大型が男性と区別されるのではなかろうか。製作技法は、砂岩質の河原石を割って作り出し、表面が自然面、裏面が剝離面となり、裏面の縁辺に打撃点が残存する。残存する打撃点は大半が1点で、2~4点(6510・6518・6527・6528・6531・6535・6536・6538・6539・6541)のものもみられ、中型以上のものが多い。使用方法は剝離面に手の平を添え握ったものと考えられ、平滑な自然面の縁辺部は摩滅し、擦痕が残存する。

6542は叩石で、端部に摩滅痕、縁辺を中心に擦痕が残存する。

弥生土器(図3-144 6543~6560): SK-6021・6023

6543~6546は壺で、口縁部が遺存しているのは6543のみであるが、形態的にはほぼ同じものとみられる。6543は、口縁部が頸部から

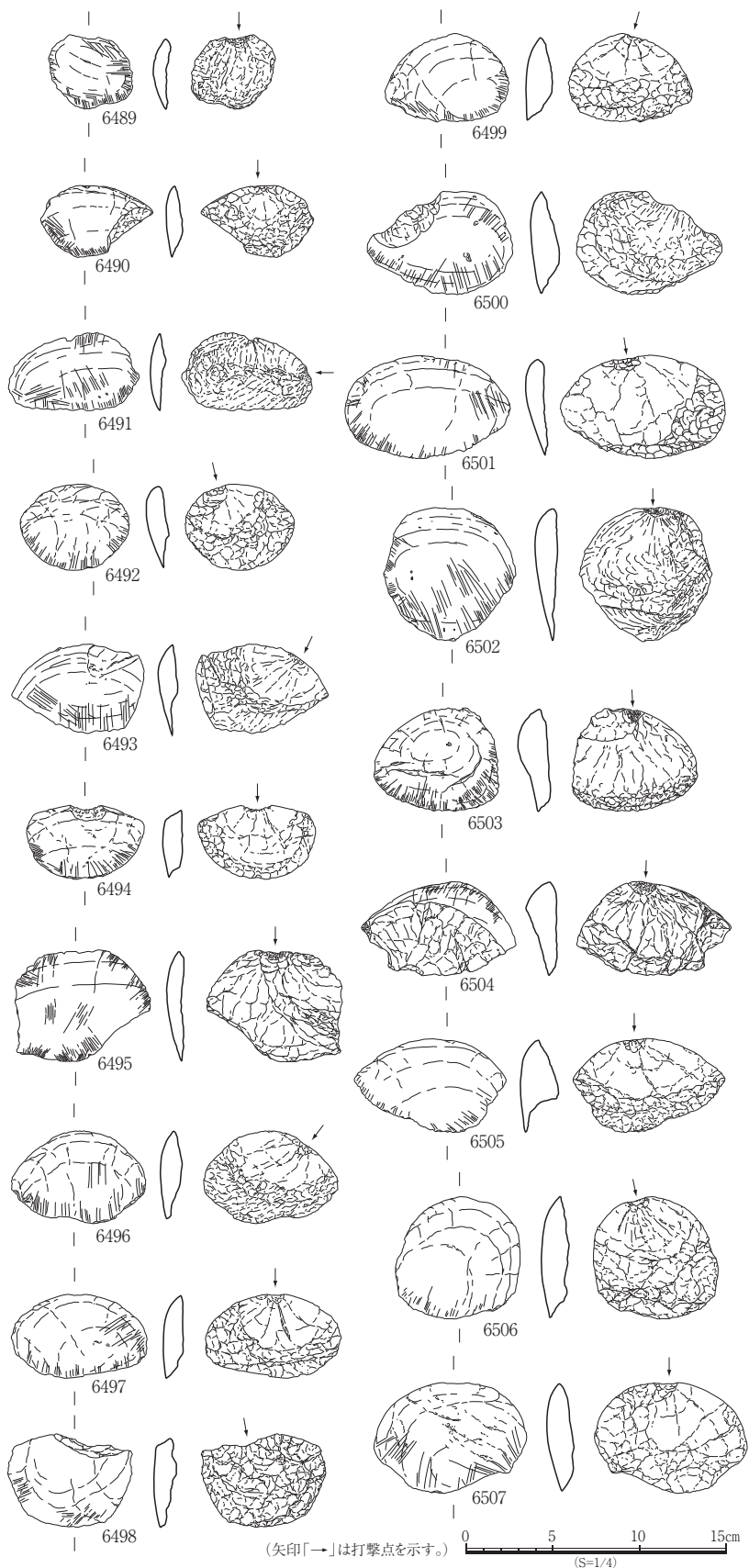


図3-140 SK-6020出土遺物実測図3

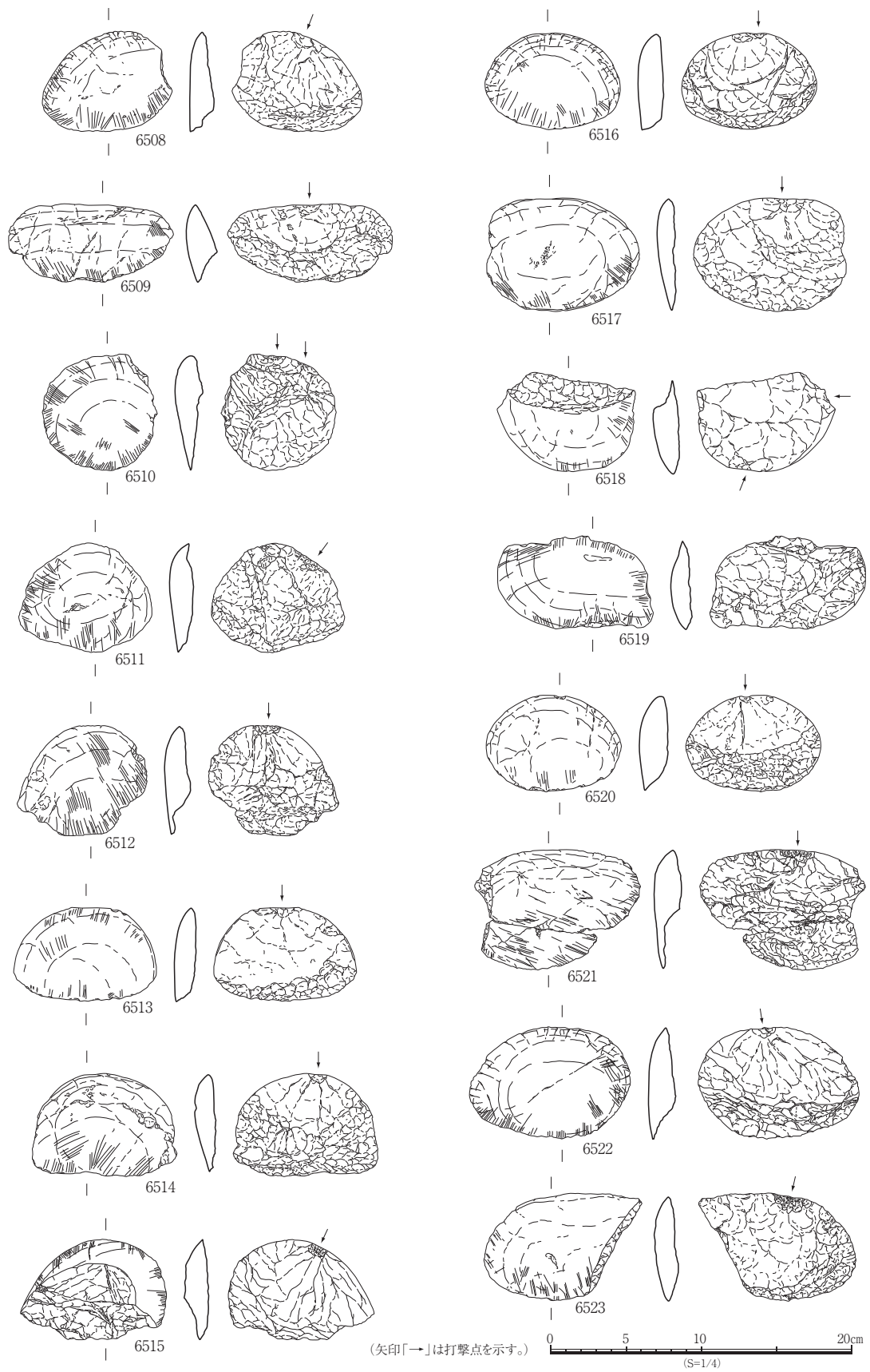


図3-141 SK-6020出土遺物実測図4

1. VI区 (1) 弥生時代

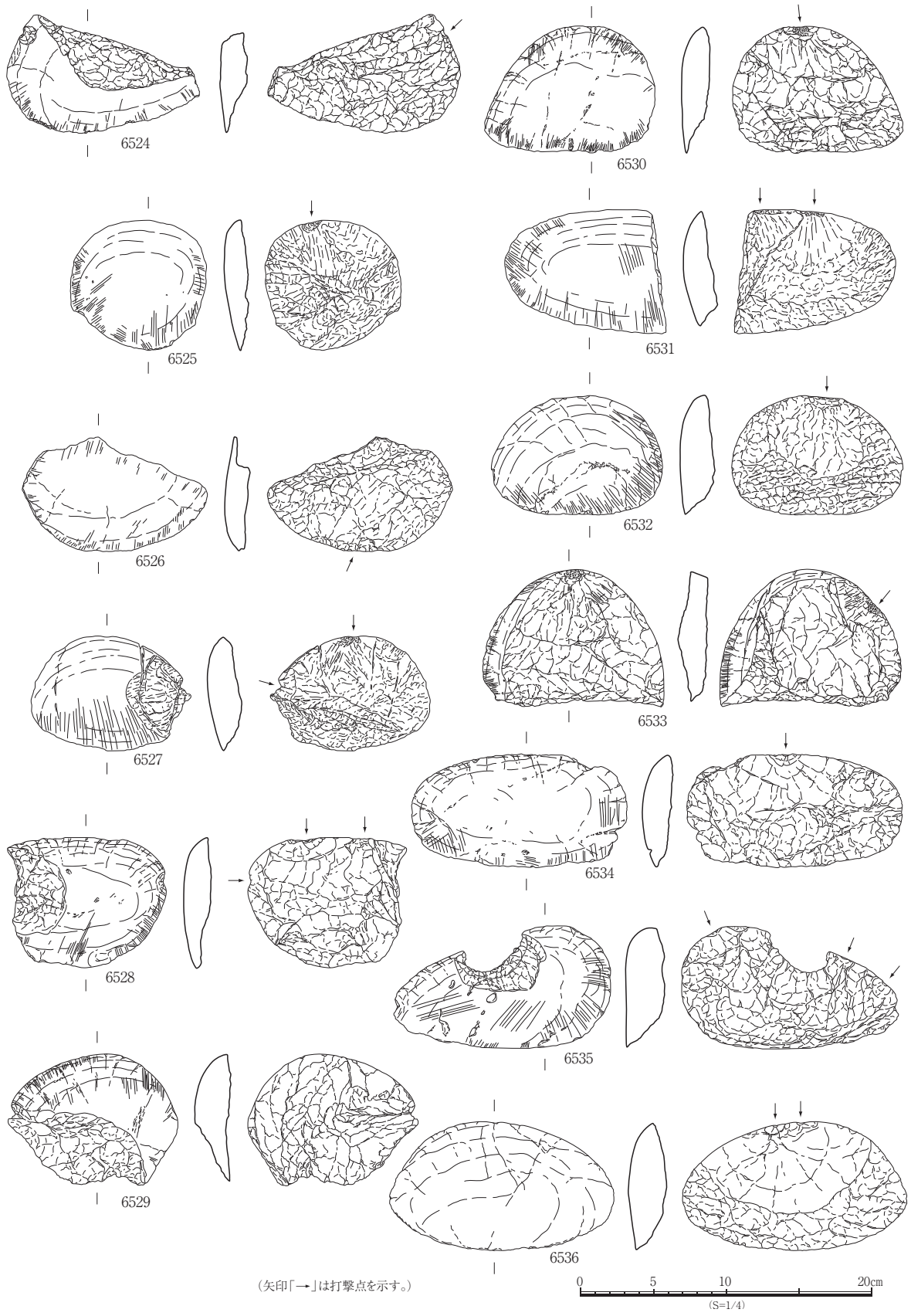


図3-142 SK-6020出土遺物実測図5

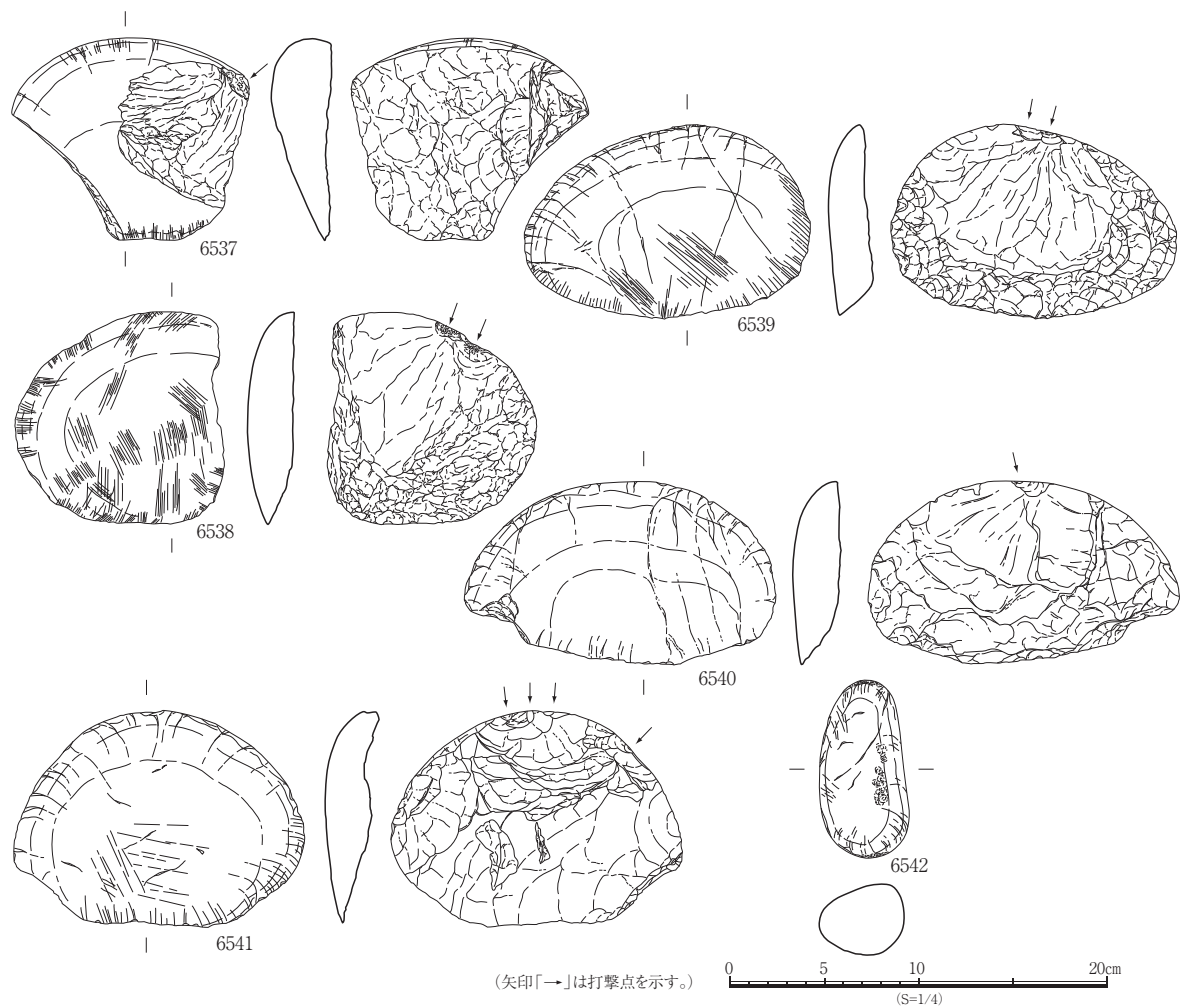


図3-143 SK-6020出土遺物実測図6

外傾し、端部下端にヘラ状工具で刻目を施す。内外面にはハケ目が残存する。6544は、外面をナデ調整してから頸部と胴部の境に刻目突帯を貼付する。6545は同じ部位に棒状工具で刺突文を施す。胴部外面にはヘラ磨きの痕跡が残存する。6546は中胴部に最大径を有し、胴部内面上半にハケ調整、下半にナデ調整、外面上半にハケ調整、下半にヘラ磨きを施した上で、中胴部外面にハケ状工具による刺突文を施文する。また、下胴部外面には煤が付着する。胎土には、6543が中粒砂から極粗粒砂、6544が細粒砂から粗粒砂、6545・6546が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6547～6553は甕で、6547～6550は貼付口縁となる。6547は、頸部が胴部からほぼ直立し、口縁部が短く外反する。口縁端部下端にはヘラ状工具による刻目、その下に作り出し微隆起突帯とクシ描直線文、頸部下端に円形浮文、クシ描直線文と作り出し微隆起突帯、4本単位のクシ描波状文を施す。微隆起突帯はヨコナデ調整で作り出し、口縁部に施文されたものは下方に、頸部に施文されたものは上方にクシ描直線文をそれぞれ施す。口縁部外面には僅かに煤が付着する。6548は、口縁部が外反し、端部にヘラ状工具による刻目を施す。6549も口縁部が外反し、端部下端にヘラ状工具による刻目、その下に作り出し微隆起突帯とクシ描直線文を施す。施文方法は6547のそれと同じである。6550は、口縁部が短い頸部から外反し、口縁部外面には指頭圧痕が残存する。また、外面には煤が付着する。胎土には、6547が中粒砂から極細粒中礫を多く、6548が中粒砂から極粗粒砂を少し、6549が粗粒

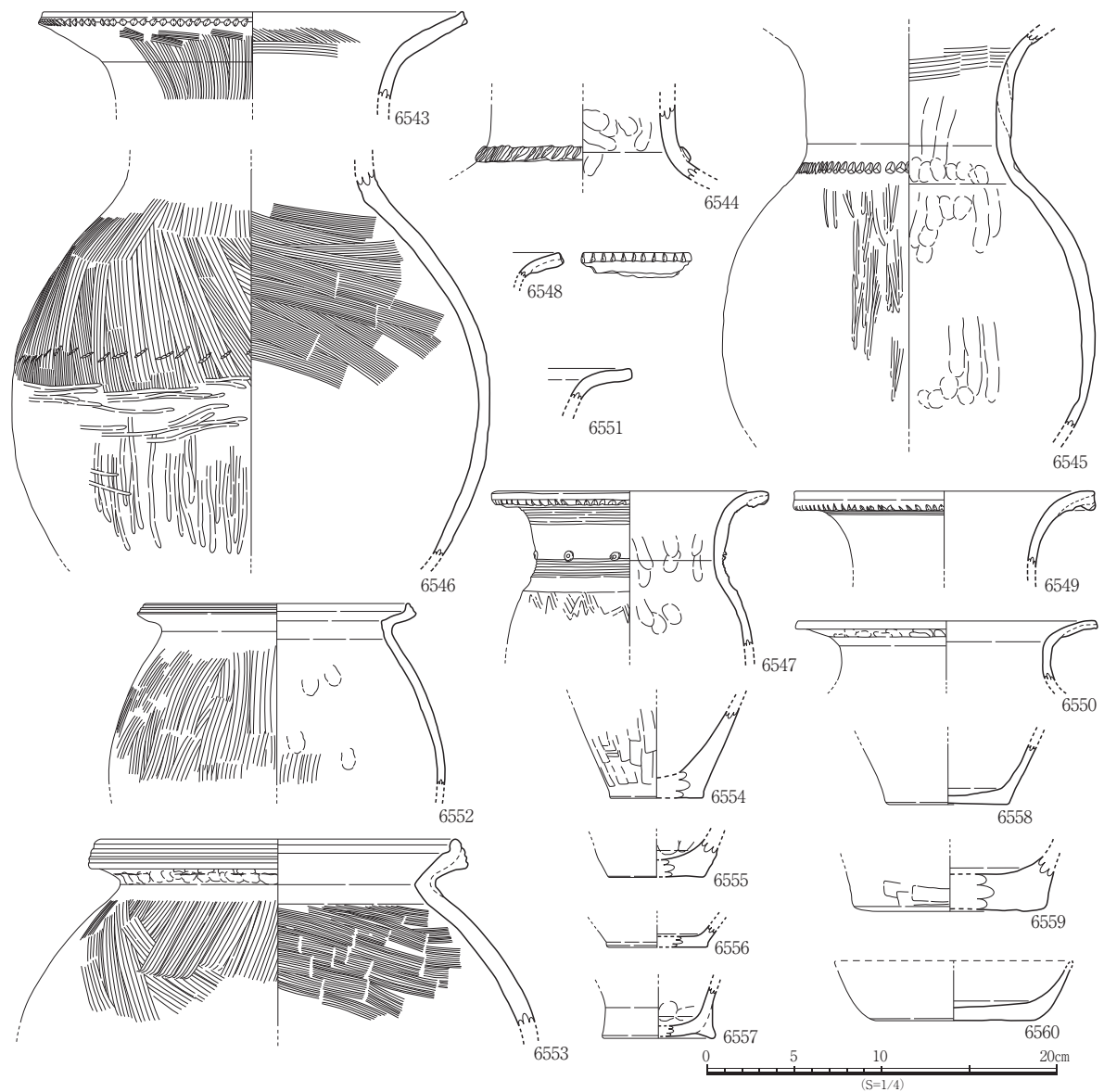


図3-144 SK-6021・6023出土遺物実測図

砂を中心に細粒砂から粗粒砂を多く、6550が粗粒砂を中心に中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。6551は6550とほぼ同じ形態を呈するが、粘土帯の貼付は確認できない。外面にはハケ目が残存する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。6552・6553は、口頸部がくの字形を呈するものである。6552は口縁端部上端を拡張し、擬凹線文、胴部外面にはハケ調整を施す。また、外面は被熱で変色し、口縁部外面に煤が付着する。6553は口縁部を肥厚し、端部に凹線文を施す。口縁部外面には指頭圧痕が残存する。胴部内外面にはハケ調整を施す。いずれも胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

6554～6559は甕の底部とみられるもので、6557が高台状を呈する以外はいずれも平底となる。調整はナデ調整を基本とするが、6554・6559の外面にはヘラナデ調整が施される。胎土には、細粒砂ないし中粒砂から粗粒砂ないし極粗粒砂を6556・6558が多く含む以外は比較的多く含む。

6560は鉢で、皿とも表現できるもので、底部は平らで口縁部は外上方に短く延びる。胎土は比較的精良で、細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

弥生土器(図3-146 6561):SK-6024

壺で、胴部は丸く、頸部はやや外傾して立ち上がる。外面にはハケ調整を施し、頸部と胴部の境にやや大きめの微隆起突帯を貼付する。この微隆起突帯は、細い粘土紐を貼付してから指先で摘みながら押圧しており、直下に爪の痕が残存する。胎土には中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

SK-6025

VI-2区南西部, ST-6041 の北壁を切った形で検出した楕円形の土坑である。長径1.07m, 短径0.89m, 深さ24cmを測り, 長軸方向はN-47°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し, 底面はほぼ平らで付設遺構は確認されなかった。埋土は黒色(2.5Y2/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器28点, 石製品1点がみられ, 弥生土器2点(6562・6563)と石製品1点(6564)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-146 6562・6563)

6562は壺で、口縁部は外反し、端部を上下に拡張し凹線文を施し、さらに下端にはヘラ状工具による刻目を入れる。胎土には中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6563は甕の底部とみられ、胎土には中粒砂から粗粒砂を少し含む。

石製品(図3-146 6564)

磨石で、表面は平滑となる。

SK-6026(図3-145)

VI-2区南西部西壁際, ST-6041 の西側で検出した不整楕円形の土坑である。長径2.29m, 短径約1.35m, 深さ93cm以上を測り, 長軸方向はN-26°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し, 底面は南側に最深部があり, 北から3段の段部, 南から1段の段部を設け, SK-6021と同様に水汲み用の施設であったものとみられる。埋土は細粒~中粒中礫を含む黒色~黒褐色(10YR2/1~2.5Y3/1)を基調に粘土質シルト, 砂質シルト, 砂が互層に堆積していた。出土遺物には弥生土器14点がみられ, 内1点(6565)が図示できた。

出土遺物

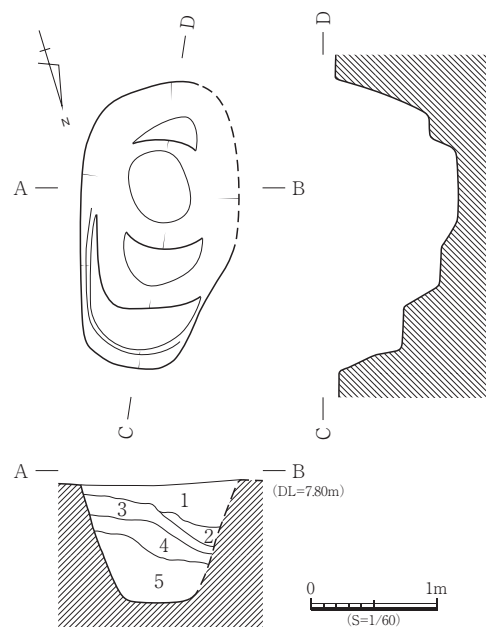
弥生土器(図3-146 6565)

甕で、底部は上げ底となり、内外面にタテ方向のハケ調整を施し、外面下端に指ナデ調整を加える。胎土には極細粒砂を中心に中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

SK-6027

VI-2区南西部西壁際, SK-6026の南隣で検出した舟形の土坑で、西側は調査区外に続く。長辺1.50m以上, 短辺0.45m, 深さ20cmを測り, 長軸方向はN-70°-Wを示す。断面形は逆台形を呈し, 底面はほぼ平坦で付属遺構は確認されていない。埋土は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器15点と石製品1点がみられ, 弥生土器1点(6566)と石製品1点(6567)が図示できた。

出土遺物



- 遺構埋土
1. 細粒~中粒中礫を含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト
 2. 細粒~中粒中礫と地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト
 3. 細粒~中粒中礫と地山のブロックを含む黒色(2.5Y2/1)砂
 4. 細粒~中粒中礫と地山のブロックを含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト
 5. 中粒中礫と地山のブロックを含む黒色(10YR2/1)砂

図3-145 SK-6026

1. VI区 (1) 弥生時代

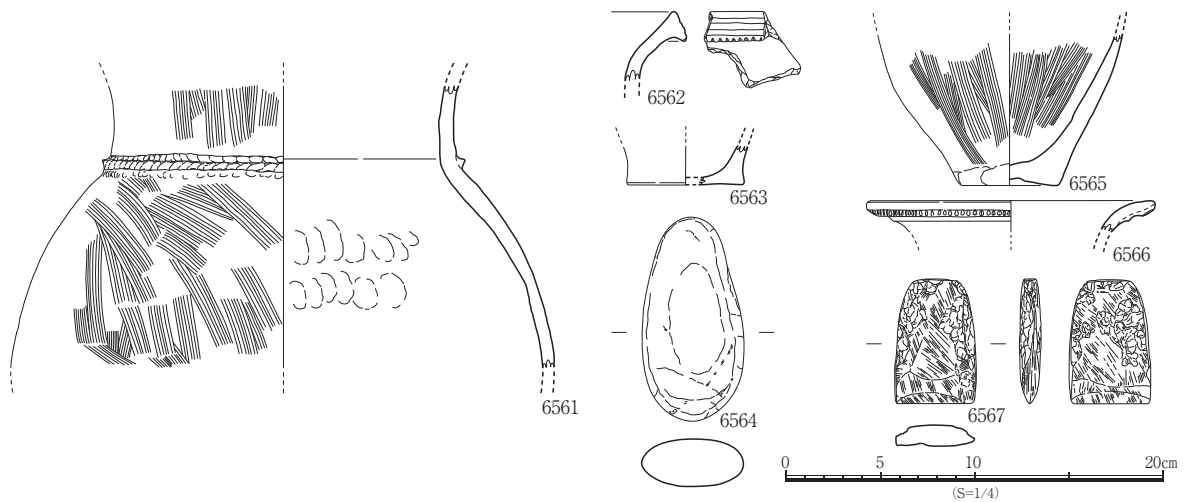


図3-146 SK-6024～6027出土遺物実測図

弥生土器(図3-146 6566)

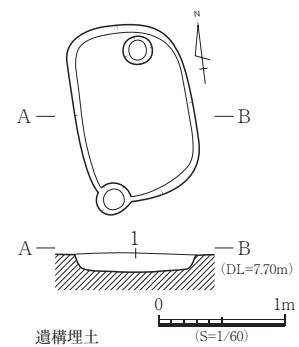
甕で、口縁部は外反し、端部下端にはヘラ状工具による刻目、その下にはヨコナデ調整で微隆起突帯を作り出し、下半にクシ描直線文を施す。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

石製品(図3-146 6567)

扁平両刃石斧で、部分的に剝離するが、ほぼ全面を研磨する。刃部長4.1cm、幅0.6cmを測る。

SK-6028(図3-147)

VI-2区南西部、ST-6016の西側で検出した方形の土坑で、南壁にピットが掘り込む。長辺1.42m、短辺0.95m、深さ16cmを測り、長軸方向はN-6°-Wを示す。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦で、北側に径23cm、深さ6cmの円形のピット1個を確認した。埋土は黒色(2.5Y2/1)砂質シルトであった。遺物は出土しなかった。

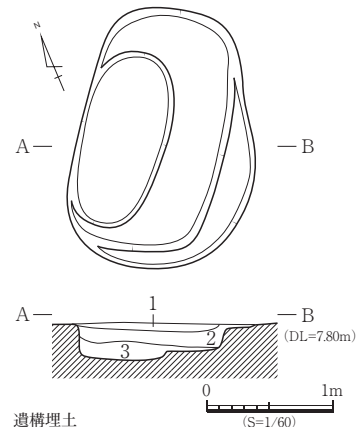


遺構埋土
1. 黒色(2.5Y2/1)砂質シルト

図3-147 SK-6028

SK-6029(図3-148)

VI-2区南西部、ST-6016の北側で検出した不整形の土坑である。長辺2.08m、短辺1.41m、深さ28cmを測り、長軸方向はN-32°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し、底面には東側に段部、西側に楕円形状の落ち込みがある。埋土は上層で黒褐色～黒色(2.5Y3/1～2/1)砂質シルト、下層で黒色(2.5Y2/1)粘土質シルトの堆積が認められた。出土遺物には弥生土器24点がみられ、内5点(6568～6572)が図示できた。



遺構埋土
(S=1/60)
1. 中粒中礫と地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト
2. 地山のブロックを含む黒色(2.5Y2/1)砂質シルト
3. 黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト

図3-148 SK-6029

出土遺物

弥生土器(図3-151 6568～6572)

6568・6569は壺で、口縁部を肥厚する。6568は、口頸部が外反し、端部が粘土帯を肥厚したことにより凹面となり、外面にはハケ調整を施す。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。6569は、口縁

部が大きく開き、肥厚した上で端部を上下に拡張し、凹線文を施す。内面には斜格子状のハケ目が残存する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

6570・6571は甕で、口頸部は外反し、貼付口縁の端部下端にはヘラ状工具による刻目、その下にはヨコナデ調整で微隆起突帯を作り出す。いずれも胎土には中粒砂から粗粒砂を多く含む。

6572は蓋の口縁部ではないかとみられる個体で、口縁部は開き、上端を拡張する。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SK-6030 (図3-149)

VI-2区南西部、ST-6016の北側で検出した不整円形の土坑である。長径1.82m、短径1.50m、深さ14cmを測り、長軸方向はN-67°-Eを示す。断面形は舟底形を呈し、底面には付属遺構は確認できなかった。埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質砂であった。遺物は出土しなかった。

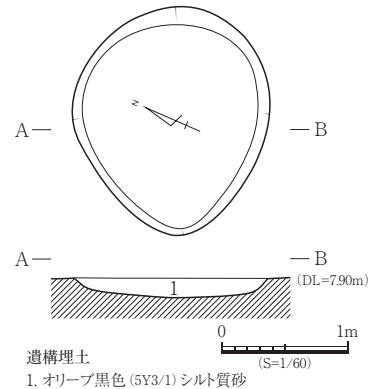


図3-149 SK-6030

SK-6031

VI-2区南部、ST-6017とST-6018の間で検出した溝状の土坑である。長辺5.04m、短辺0.34m、深さ42cmを測り、長軸方向はN-64°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し、底面は東に向かって傾斜する。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器15点、サヌカイト片1点(3.5g)がみられ、弥生土器2点(6573・6574)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-151 6573・6574)

6573は壺で、口頸部は外反し、肥厚した口縁端部にはヘラ状工具による斜格子文を施す。口縁部外面には指頭圧痕が残存する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6574は甕で、口頸部は外反し、端部を丸く仕上げ、頸部外面にはハケ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SK-6032

VI-2区南部、ST-6042を切った形で検出した不整形の土坑である。長辺1.66m、短辺0.52m以上、深さ32cmを測り、長軸方向はN-82°-Wを示す。断面形は逆台形を呈し、底面は東に向かって傾斜する。埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルトであった。遺物は出土しなかった。

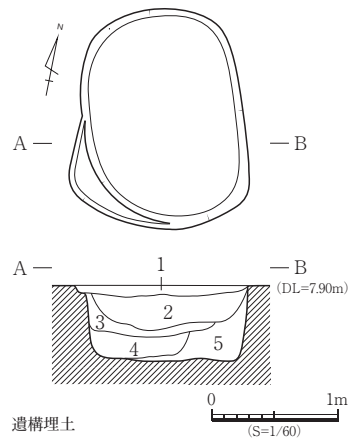


図3-150 SK-6033

SK-6033 (図3-150)

VI-2区南部、染み状の遺構に切られた形で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.72m、短辺1.24m、深さ67cmを測り、長軸方向はN-21°-Wを示す。断面形は箱形を呈し、形状的には土坑墓ではないかとみられる。埋土は地山のブロックを含むオリーブ黒色～黒褐色(5Y2/1～2.5Y3/2)を基調とした砂質シルトと粘土質シルトの堆積が認められた。出土遺物には弥生土器36点、石製品1点がみられ、石製品1点(6575)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-151 6575)

扁平な磨石で、表面は平滑となり、片面中央は摩滅する。

SK-6034

VI-2区南部, SB-6021を掘り込んだ形で検出した不整形の土坑である。長辺1.17m, 短辺1.05m, 深さ19cmを測り, 長軸方向はN-47°-Wを示す。断面形は逆台形を呈し, 底面で2個のピットを確認

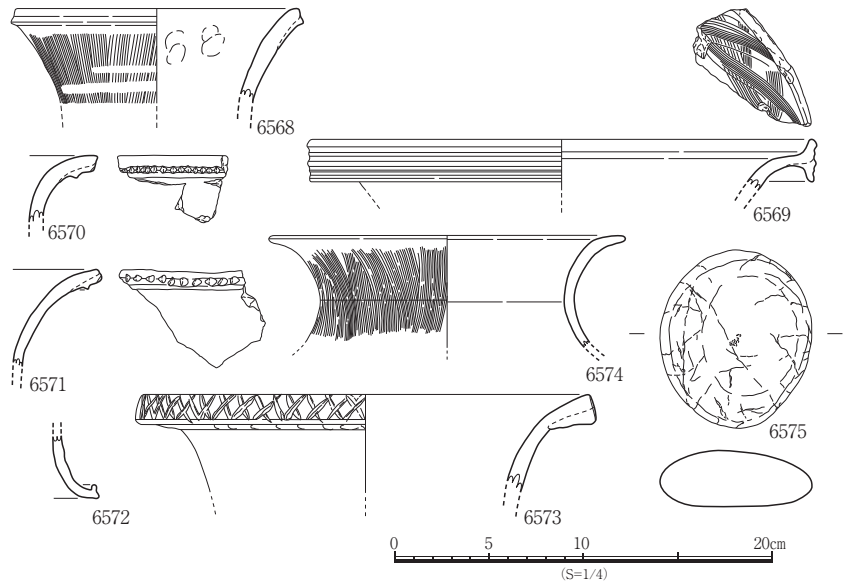


図3-151 SK-6029・6031・6033出土遺物実測図

した。埋土はオリブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器28点がみられ, 内1点(6576)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-154 6576)

貼付口縁の甕で, 口縁部外面下端に微隆起突帯を作り出す。肩部外面には円形浮文を貼付し, その下に3条の作り出し微隆起突帯とその間にクシ描直線文, 下端に棒状浮文を貼付する。胎土には粗粒砂を中心に細粒砂から粗粒砂を多く含む。

SK-6035

VI-2区中央部南寄り, ST-6021の東側で検出した不整楕円形の土坑である。長径1.75m, 短径0.85m, 深さ42cmを測り, 長軸方向はN-22°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土はオリブ黒色(5Y3/1)砂質シルトであった。遺物は出土しなかった。

SK-6036 (図3-152)

VI-2区中央部, ST-6021の北東側で検出した舟形の土坑で, 南壁をピットに切られる。長辺約2.70m, 短辺0.58m, 深さ28cmを測り, 長軸方向はN-23°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し, 底面南側には径40~60cmの楕円形状を呈する深さ13cmの落ち込みを確認した。埋土は2層に分層され, 上層に黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト, 下層に黒褐色(2.5Y3/1)シルト質砂の堆積が認められた。遺物は出土しなかった。

SK-6037 (図3-153)

VI-2区中央部, SD-6001の西側で検出した楕円形の土坑である。長径1.92m, 短径1.60m, 深さ1.22mを測り, 長軸方向はN-54°-Eを示す。長軸の断面形は階段状を呈し, 北の最深部に向かって3段の段部を設ける。SK-6021・6026などと同様に水汲み用の施設であったものとみられる。埋土は

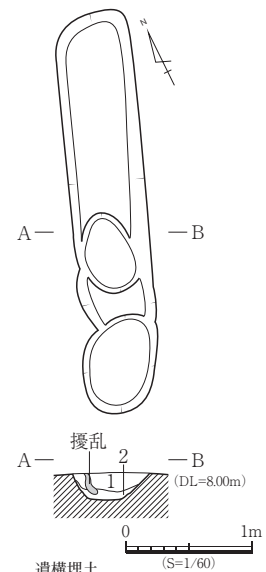


図3-152 SK-6036

オリブ黒色～黒色(5Y3/1～7.5Y2/1)を基調にシルト質砂, 砂質シルト, 粘土質シルトの堆積が認められた。出土遺物には弥生土器78点がみられ, 内3点(6577～6579)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-154 6577～6579)

6577は全体が復元できる甕で, 底部は上げ底風となり, 胴部は中胴部より上に最大径を有し, 口縁部は頸部から外反し, 端部は浅い凹面となる。頸部外面に指押え, その下にはヘラナデ調整, 胴部にはタタキの後に上から下へヘラ磨き, 外底面はナデ調整を施す。中胴部外面を中心に煤が薄く付着する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6578・6579は甕の底部とみられるもので, 6578の外表面は, ヘラ磨きが施され, 被熱で変色し, 煤が付着する。6579の外底面は未調整となる。いずれも胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

SK-6038(図3-155)

VI-2区中央部, SK-6037の北側で検出した舟形の土坑である。長辺8.92m, 短辺0.76m, 深さ47cmを測り, 長軸方向はN-77°-Wを示す。断面形状は逆台形を呈し, 底面は東側約2/3が1段(4～20cm)低くなる。埋土は上下2層に分層され, 上層はオリブ黒色(5GY2/1)粘土質シルト, 下層が黒色(7.5Y2/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器264点, 石製品2点がみられ, 弥生土器15点(6580～6594), 石製品2点(6595・6596)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-156 6580～6594)

6580～6586は甕で, 6580～6583は貼付口縁となり, 口頸部は外反する。6580は口縁部外面にヘラ状工具による刻目, その下に微隆起突帯を貼付する。6581は口縁端部下端にヘラ状工具による刻目, その下にヨコナデ調整で微隆起突帯を作り出し, 下半にクシ描直線文, 頸部下端にも微隆起突帯を作り出し, 上にクシ描直線文を施し, 直下に棒状浮文を貼付する。6582は口縁部外面に指頭圧痕が残存する。6583は口縁端部下端に

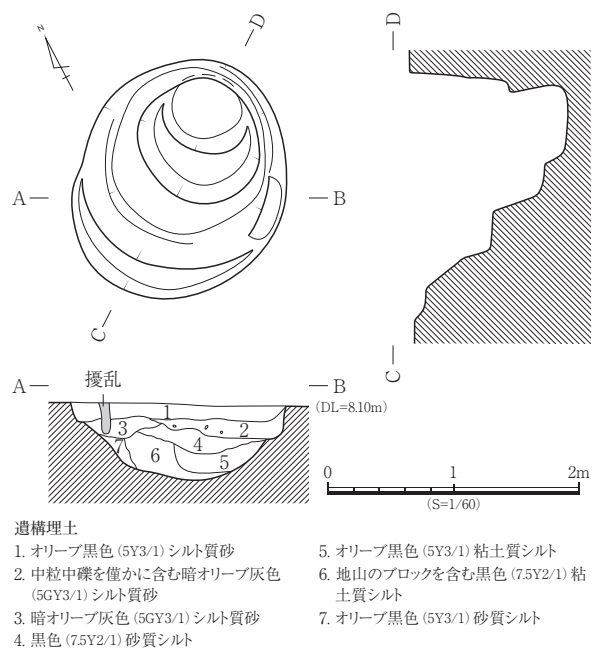


図3-153 SK-6037

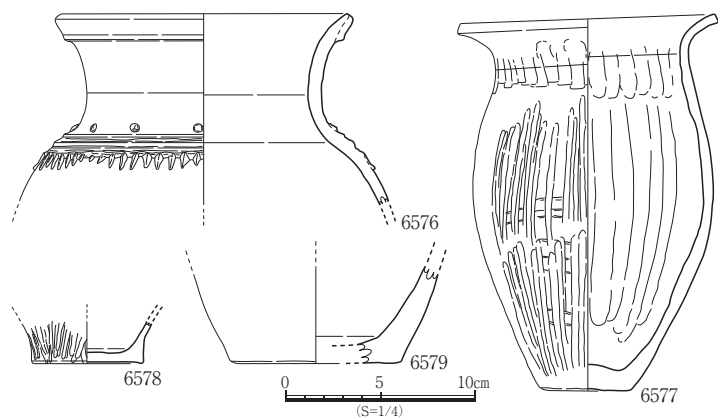


図3-154 SK-6034・6037出土遺物実測図

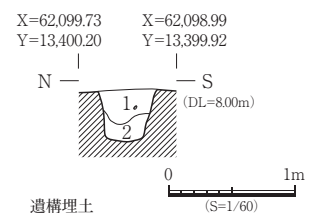


図3-155 SK-6038

ヘラ状工具による刻目を施し、口縁部外面はヨコナデ調整で指頭圧痕をすり消す。胎土には、6580・6581が細粒砂から粗粒砂を多く、6582が細粒砂から極粗粒砂を多く、6583が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。6584は、口縁部が短く直立する頸部から外傾するもので、端部は浅い凹面となる。胴部外面にはハケ目が残存する。6585は、口頸部がくの字形を呈するもので、口縁部外面は浅い凹面となる。胎土には、6584が細粒砂から粗粒砂を比較的多く、6585が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。6586は肩部外面に7本単位のクシ描直線文を施し、その下にはタテ方向のハケ目が残存する。また、肩部外面を中心に煤が付着する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

6587～6591は甕の底部とみられるもので、調整はナデ調整を基本に、6589の外面にはヘラ磨き、6590の内面にはヘラ削りを施す。また、6587の外面は被熱で変色し、6590の外面と6591の内面には煤が付着する。胎土には、6587が細粒砂から粗粒砂を比較的多く、6588が細粒砂から極粗粒砂を多く、6589が細粒砂から粗粒砂を少し、6590・6591は細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6592・6593は壺の底部とみられるもので、6592は内面にヘラ削り、外面にヘラ磨き、6593は内面にナデ調整の後にヘラ磨き、外面にハケ調整の後にヘラ磨きをそれぞれ施す。胎土には、6592が細粒砂から極粗粒砂、6593が細粒砂から極細粒中礫を比較的多く含む。

6594は蓋で、天井部は凹面となり、ハの字状に下って、口縁部で外に開く。口縁部は貼付口縁となり、端部は凹面をなす。外面にはハケ調整の後に指ナデとナデ調整を加え、口縁部外面には指頭圧痕が残存する。胎土には、細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

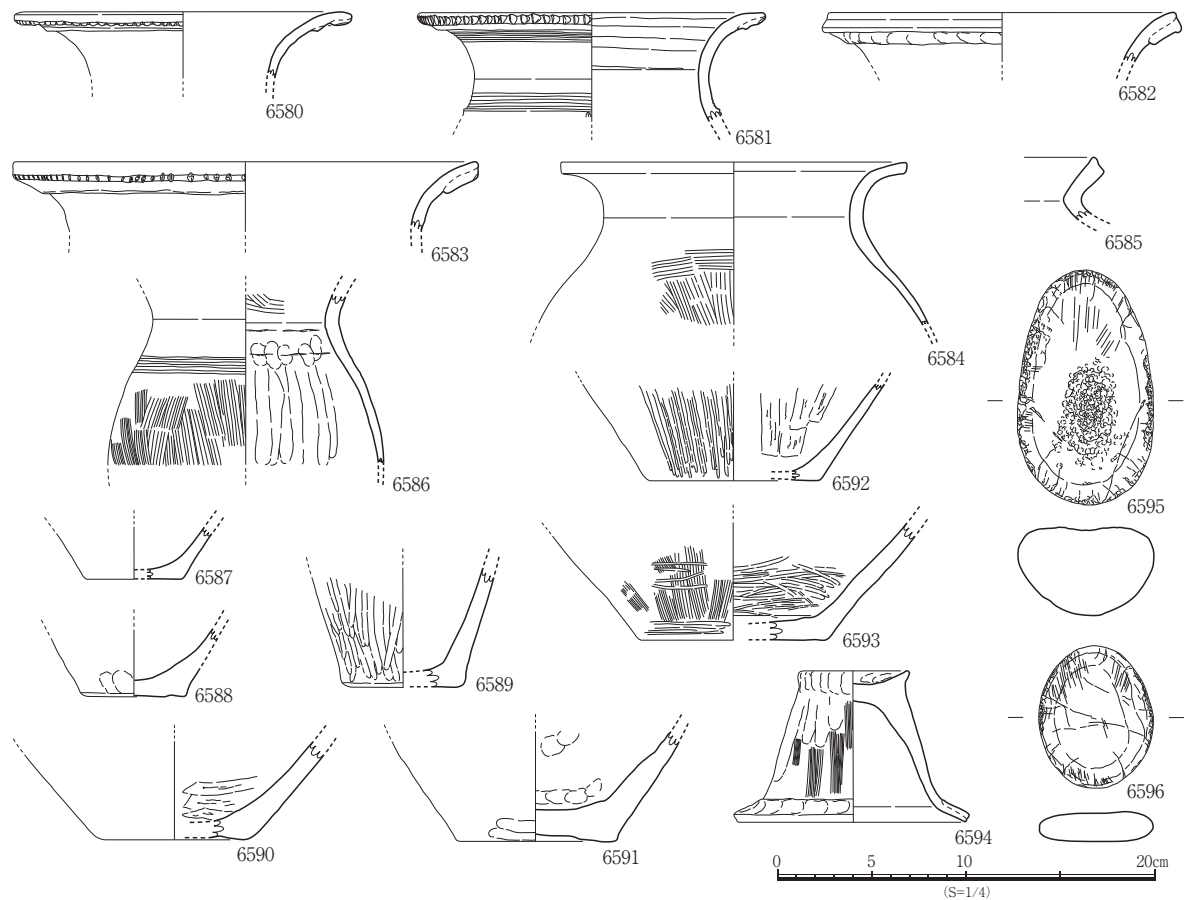


図3-156 SK-6038出土遺物実測図

石製品(図3-156 6595・6596)

6595は叩石で、片面中央と側面に敲打痕、縁辺を中心に擦痕が残存する。

6596は扁平な磨石で、表面は平滑となり縁辺を中心に擦痕、側面に敲打痕が残存する。

SK-6039

VI-2区中央部、SK-6038の北側で検出した溝状の土坑である。長辺約3.00m、短辺0.26m、深さ5cmを測り、長軸方向はN-78°-Wを示す。断面形は舟底形を呈し、底面西側に径22cmの円形で、深さ3cmのピットが掘り込まれていた。埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトであった。遺物は出土しなかった。

SK-6040

VI-2区中央部、SK-6039を切った形で検出した不整形の土坑である。長辺3.62m、短辺1.16m、深さ12cmを測り、長軸方向はN-8°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器1点、石製品1点があり、石製品1点(6597)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-157 6597)

抉りのある粘板岩製の石庖丁で、欠損部以外は研磨され、刃部長9.2cm、幅0.3cm以上を測る。

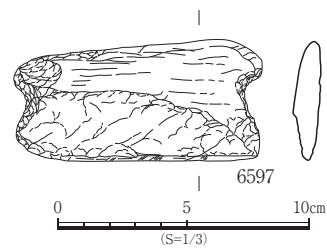


図3-157 SK-6040出土遺物実測図

SK-6041(図3-158)

VI-2区南部、ST-6022の東側で検出した不整形楕円形の土坑である。長径1.62m、短径0.52m、深さ13cmを測り、長軸方向はN-77°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒色(7.5Y2/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器493点、石製品8点があり、弥生土器13点(6598~6610)、石製品4点(6611~6614)が図示できた。

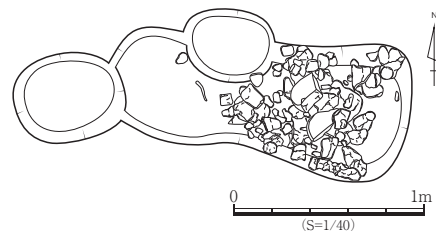


図3-158 SK-6041遺物出土状態

出土遺物

弥生土器(図3-159・160 6598~6610)

6598~6603は壺で、6598・6599は、口縁部に小さな粘土帯を貼付し、肥厚する。6598は長胴で、口頸部は緩やかに外反し、胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。6599は、頸部が丸い胴部からほぼ直立し、口縁部が外傾する。口縁部から頸部外面はヨコナデ調整、胴部外面はヘラ磨きを施し、肩部にヘラ状工具による刺突文を巡らす。肩部内面にはしぼり目が残存する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。6600は頸部外面下端に微隆起突帯を貼付し、胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。6601は、胴部最大径が中胴部より下にある。器面は摩耗し、胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。6602は、口頸部が大きく外反し、口縁部は肥厚され、ハケ状工具で斜格子文が施される。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。6603は、胴部最大径が中胴部より上にあり、内外面にはヘラ磨きが施される。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

6604~6606は甕で、6604・6605は貼付口縁となる。6604はほぼ全体が復元されるもので、底部は平らで、胴部は丸く、中胴部よりやや上に最大径があり、頸部は短く直立し、口縁部は外傾する。胴部内面は中胴部を中心にヘラナデ調整、下胴部にナデ調整、外面は中胴部を中心にナデ調整、下胴

1. VI区 (1) 弥生時代

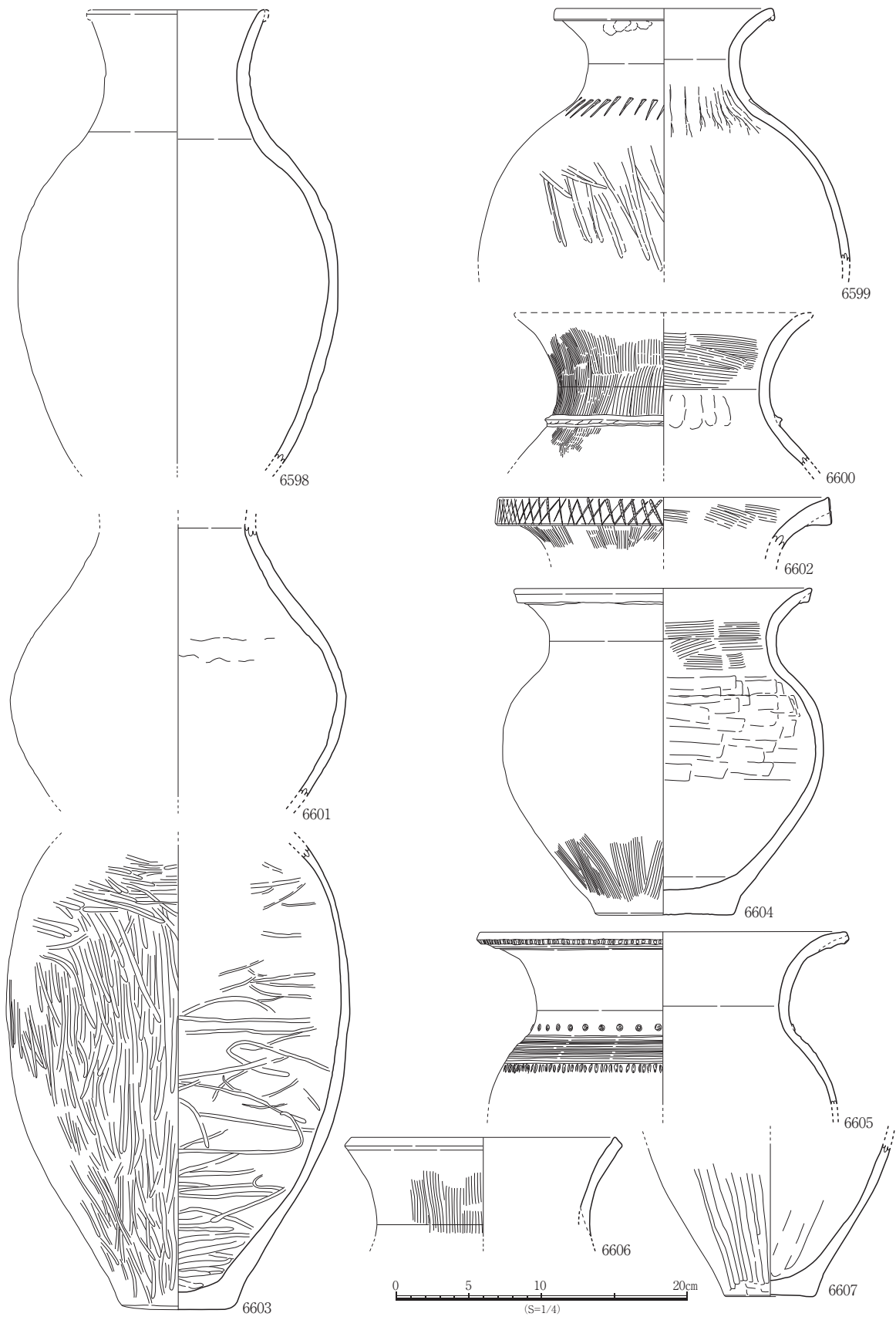


图3-159 SK-6041出土遺物実測图1

部にハケ調整, 外底面にヘラ削りを施す。口頸部外面には煤が付着する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。6605は, 口頸部が丸い胴部から外反し, 口縁端部下端にヘラ状工具による刻目, その下に作り出し微隆起突帯, 肩部外面に円形浮文, 3条の作り出し微隆起突帯とそこにクシ描直線文, ヘラ状工具による刺突文を施文する。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。6606は, 口頸部が緩やかに外反し, 胎土には細粒砂から極粗粒中礫を比較的多く含む。

6607・6608は甕の底部とみられるもので, 6607は外面にヘラナデ調整とナデ調整を施す。胎土には, 6607が中粒砂から極粗粒砂, 6608が細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

6609・6610は壺の底部とみられるもので, いずれも外面にはヘラ磨きを施す。いずれも胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

石製品(図3-161 6611~6614)

6611・6612はサヌカイト製の石鏃で, いずれも平基となる。

6613は叩石で, 片面中央部を中心に敲打痕が残存する。

6614は砥石で, 両面と側面の3面に使用痕があり, 側面には敲打痕が残存する。

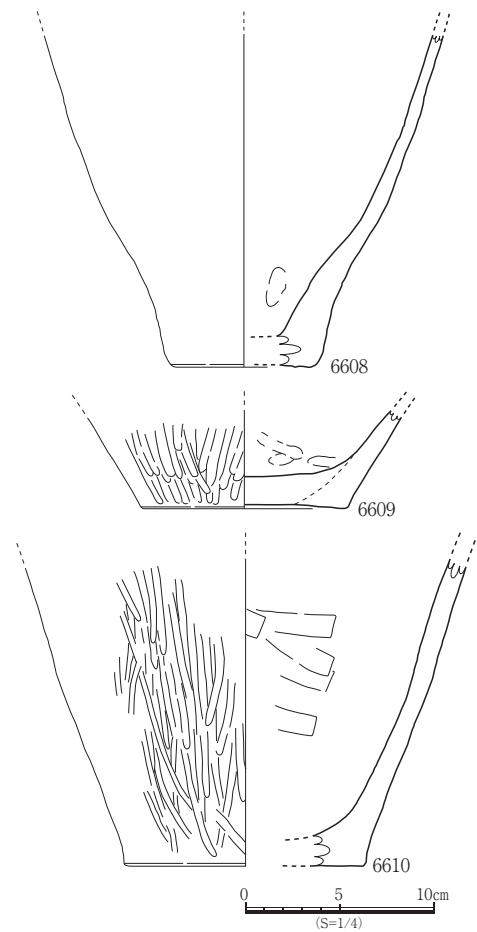


図3-160 SK-6041出土遺物実測図2

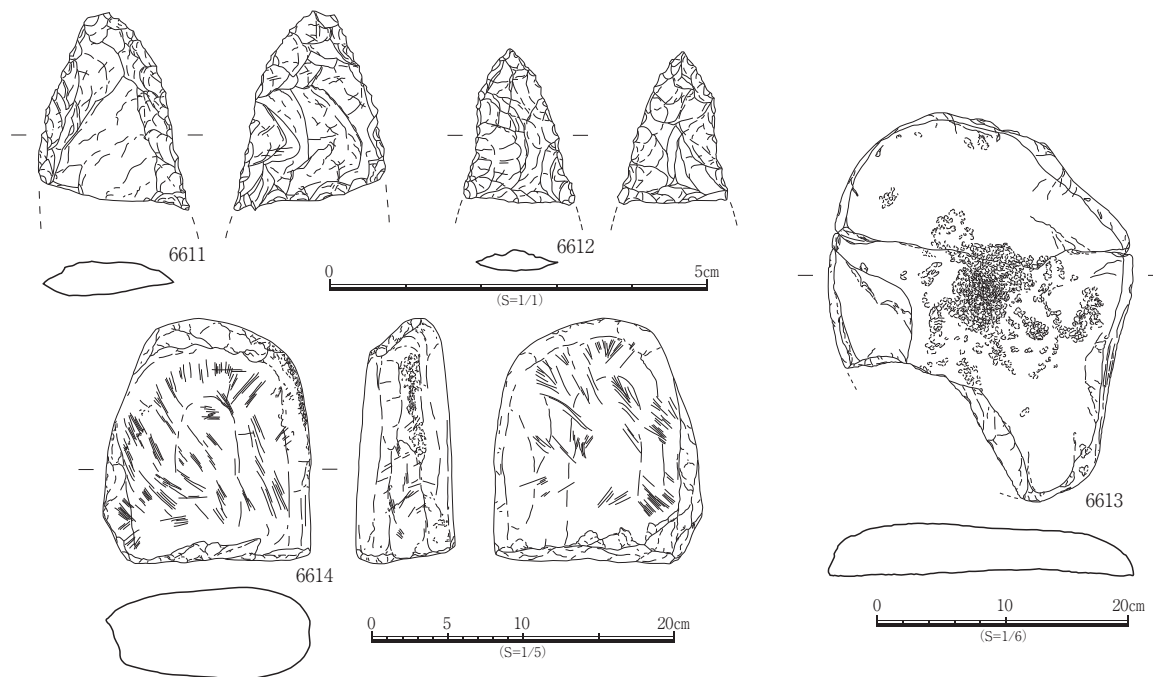


図3-161 SK-6041出土遺物実測図3

SK-6042

VI-2区南部, SK-6041の北隣で検出した不整形の土坑である。長辺2.18m, 短辺1.20m, 深さ30cmを測り, 長軸方向はN-38°-Wを示す。断面形は逆台形を呈し, 底面は北側と南側に段部を有する。埋土はオリブ黒色(7.5Y3/1)砂質シルトであった。遺物は出土しなかった。

SK-6043

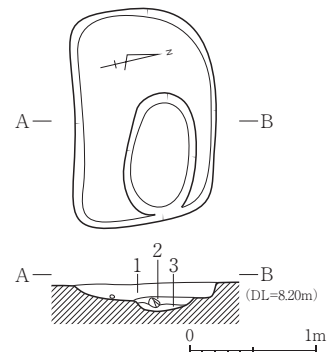
VI-2区東部, ST-6031を掘り込んだ形で検出した方形とみられる土坑で, 中世の溝跡(SD-6010)に西側を切られる。長辺2.08m以上, 短辺0.38m以上, 深さ20cmを測り, 長軸方向はN-11°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し, 東壁際で2個のピットを確認した。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトであった。遺物は, サヌカイト片1点(2.2g)が出土したのみであった。

SK-6044

VI-2区東部, ST-6031の東側で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.47m, 短辺1.00m, 深さ20cmを測り, 長軸方向はN-68°-Wを示す。断面形は逆台形を呈し, 底面西側でピット状の落ち込みが認められた。埋土は黒色(2.5GY2/1)粘土質シルトであった。遺物は出土しなかった。

SK-6045 (図3-162)

VI-2区中央部東寄り, SD-6001の東側で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.68m, 短辺1.09m, 深さ12cmを測り, 長軸方向はN-83°-Wを示す。断面形は舟底形を呈し, 底面東側でピット状の落ち込みが認められた。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトで, 落ち込み部分にはオリブ黒色(5Y3/1)砂質シルトと黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトが認められた。出土遺物には弥生土器2点がみられたが, 図示できなかった。

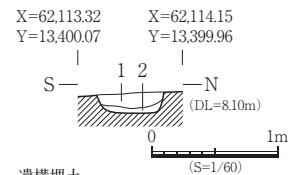


遺構埋土
1. 黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト
2. オリブ黒色(5Y3/1)砂質シルト
3. 黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト

図3-162 SK-6045

SK-6046 (図3-163)

VI-2区中央部, SD-6001を切った形で検出した舟形の土坑である。長辺6.94m, 短辺0.52m, 深さ18cmを測り, 長軸方向はN-80°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し, 底面西側に楕円形状の落ち込みが認められた。埋土は上下2層に分層され, 上層がオリブ黒色(5GY2/1)粘土質シルト, 下層が黒色(2.5GY2/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器154点がみられ, 内4点(6615~6618)が図示できた。



遺構埋土
1. オリブ黒色(5GY2/1)粘土質シルト
2. 黒色(2.5GY2/1)砂質シルト

図3-163 SK-6046

出土遺物

弥生土器(図3-165 6615~6618)

6615・6616は甕で, 6615は, 口縁部が外傾する頸部からさらに外傾するもので, 口縁部外面には指頭圧痕が残存する。6616は, 口頸部がくの字形を呈するもので, 口縁端部は拡張し, 凹線文を施文する。いずれも胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6617は甕の底部とみられるもので, 外底面は未調整となる。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

6618は手づくね土器で, 器面には指頭圧痕がみられ, 外底面にはナデ調整を施す。胎土には細粒砂から中粒砂を若干含む。

SK-6047 (図3-40)

VI-2区中央部, ST-6028 を切った形で検出した舟形の土坑で, 古代の溝跡(SD-6008)に中央部を掘り込まれる。長辺3.42m, 短辺0.48m, 深さ20cmを測り, 長軸方向はN-17°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は炭化物を含む黒褐色(10YR3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器27点, 石製品1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-6048 (図3-164)

VI-2区中央部, ST-6028 の北側で検出した舟形の土坑で, 古代の溝跡(SD-6008)に北側を掘り込まれる。長辺2.96m以上, 短辺0.94m, 深さ32cmを測り, 長軸方向はN-20°-Wを示す。断面形は逆台形を呈し, 南壁際に小さな段部, 底面から2個のピットと北側にピット状の落ち込みを確認した。埋土は地山のブロックを含むオリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土質シルトが主体となっていた。出土遺物には弥生土器100点, 石製品1点がみられ, 弥生土器2点(6619・6620)と石製品1点(6621)が図示できた。

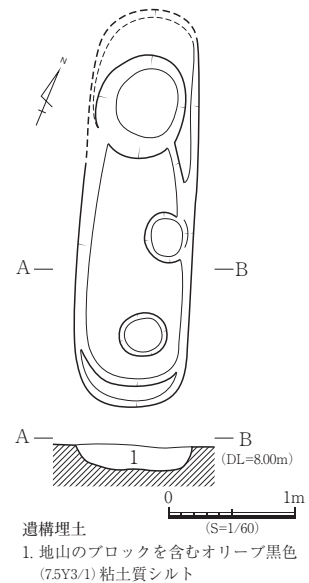


図3-164 SK-6048

出土遺物

弥生土器(図3-165 6619・6620)

6619は壺で, 口縁部は短く直立する頸部から外反する。胴部内面には指ナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6620は甕の底部で, 外面にはタタキの後にハケ調整を加える。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

石製品(図3-165 6621)

扁平な磨石で, 表面は平滑となり, 縁辺を中心に擦痕, 片面中央に弱い敲打痕が残存する。

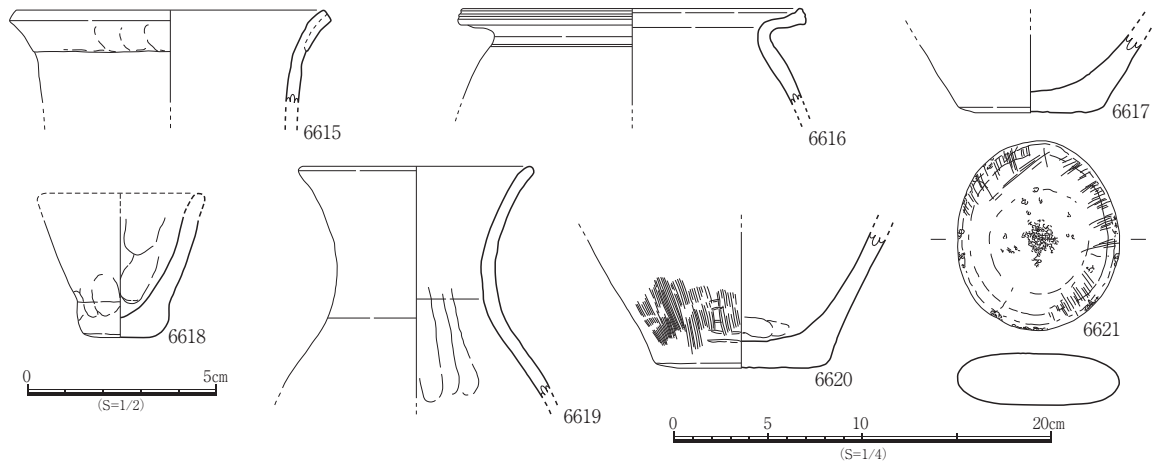


図3-165 SK-6046・6048出土遺物実測図

SK-6049

VI-2区中央部北寄り, SD-6001 の西側で検出した不整楕円形の土坑である。長径1.61m, 短径1.51m, 深さ13cmを測り, 長軸方向はN-22°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し, 南壁際に1段低い平場が認められた。埋土はオリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器1点がみられたが, 図示できなかった。

SK-6050

VI-2区中央部北寄り，SD-6001の西隣で検出した不整楕円形の土坑である。長径1.24m，短径1.04m，深さ7cmを測り，長軸方向はN-83°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土はオリブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトであった。遺物は出土しなかった。

SK-6051

VI-2区北部，SB-6023の北側で検出した舟形の土坑である。長辺2.25m，短辺0.38m，深さ16cmを測り，長軸方向はN-72°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し，東側が1段落ち込む。埋土はオリブ黒色(5GY2/1)粘土質シルトであった。遺物は出土しなかった。

SK-6052

VI-2区北部，SK-6051の北隣で検出した舟形の土坑で，東側を古代の溝(SD-6008)に掘り込まれる。長辺約2.60m，短辺0.46m，深さ15cmを測り，長軸方向はN-65°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土はオリブ黒色(10Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器1点がみられたが，図示できなかった。

SK-6053

VI-2区北部，ST-6040の西側で検出した舟形の土坑である。長辺3.54m以上，短辺0.39m，深さ14cmを測り，長軸方向はN-77°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土はオリブ黒色(5Y3/1)シルト質砂であった。出土遺物には弥生土器3点がみられたが，図示できなかった。

SK-6054 (図3-166)

VI-2区北部，SK-6053の南側で検出した舟形の土坑である。長辺4.54m，短辺0.36m，深さ12cmを測り，長軸方向はN-73°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを含むオリブ黒色(7.5Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器78点がみられたが，図示できなかった。

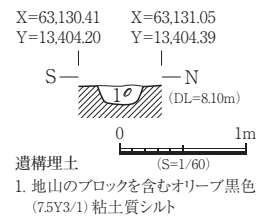


図3-166 SK-6054

SK-6055

VI-2区北部，ST-6040に切られた形で検出した舟形の土坑で，東壁をピットに掘り込まれる。長辺0.99m以上，短辺0.55m，深さ6cmを測り，長軸方向はN-87°-Wを示す。断面形は逆台形を呈し，中央部が1段落ち込む。埋土はオリブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器3点がみられたが，図示できなかった。

SK-6056

VI-2区北部，ST-6040の南側で検出した舟形の土坑で，各所でピットに掘り込まれる。長辺約3.90m，短辺0.55m，深さ13cmを測り，長軸方向はN-89°-Eを示す。断面形は舟底形を呈し，底面から1個のピットを検出した。埋土は地山のブロックを含む黒色(10YR2/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器14点がみられたが，図示できなかった。

SK-6057 (図3-105・167)

VI-2区東部，SB-6025の北側で検出した舟形の土坑である。長辺2.55m，短辺0.62m，深さ38cmを測り，長軸方向はN-66°-Eを示す。断面形はU字形を呈し，両端には段部がみられる。前述のとおり位置関係か

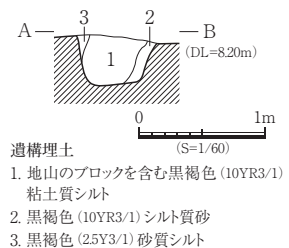


図3-167 SK-6057

らSB-6025に伴う可能性が強い。埋土は基本的に地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトで、一部に黒褐色(10YR3/1)シルト質砂と黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトの堆積が認められた。出土遺物には弥生土器370点がみられ、内15点(6622～6636)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-168 6622～6636)

6622・6623は壺で、口縁部を肥厚する。6622は、口縁部が外傾し、端部にヘラ状工具による刻目を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を6622が少し、6623が比較的多く含む。

6624～6627は甕で、6624～6626は口頸部が外反し、6624・6626は貼付口縁となり、端部下端にヘラ状工具による刻目、口縁部外面には指押えを施す。6624の外面には煤が付着する。6625は口縁部外面に断面三角形の微隆起突帯を貼付するもので、肩部外面には微隆起突帯と棒状浮文を貼付し、中胴部にはヘラ磨きの痕が残る。6626は肩部外面に微隆起突帯を貼付し、中胴部内面に接合痕跡、外面にヘラ削りの痕が残存する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を6624・6626が比較的多く、6625は多く含む。6627は、口縁部が内湾気味に上がる胴部から短く外反するもので、端部には棒状工具で刻目

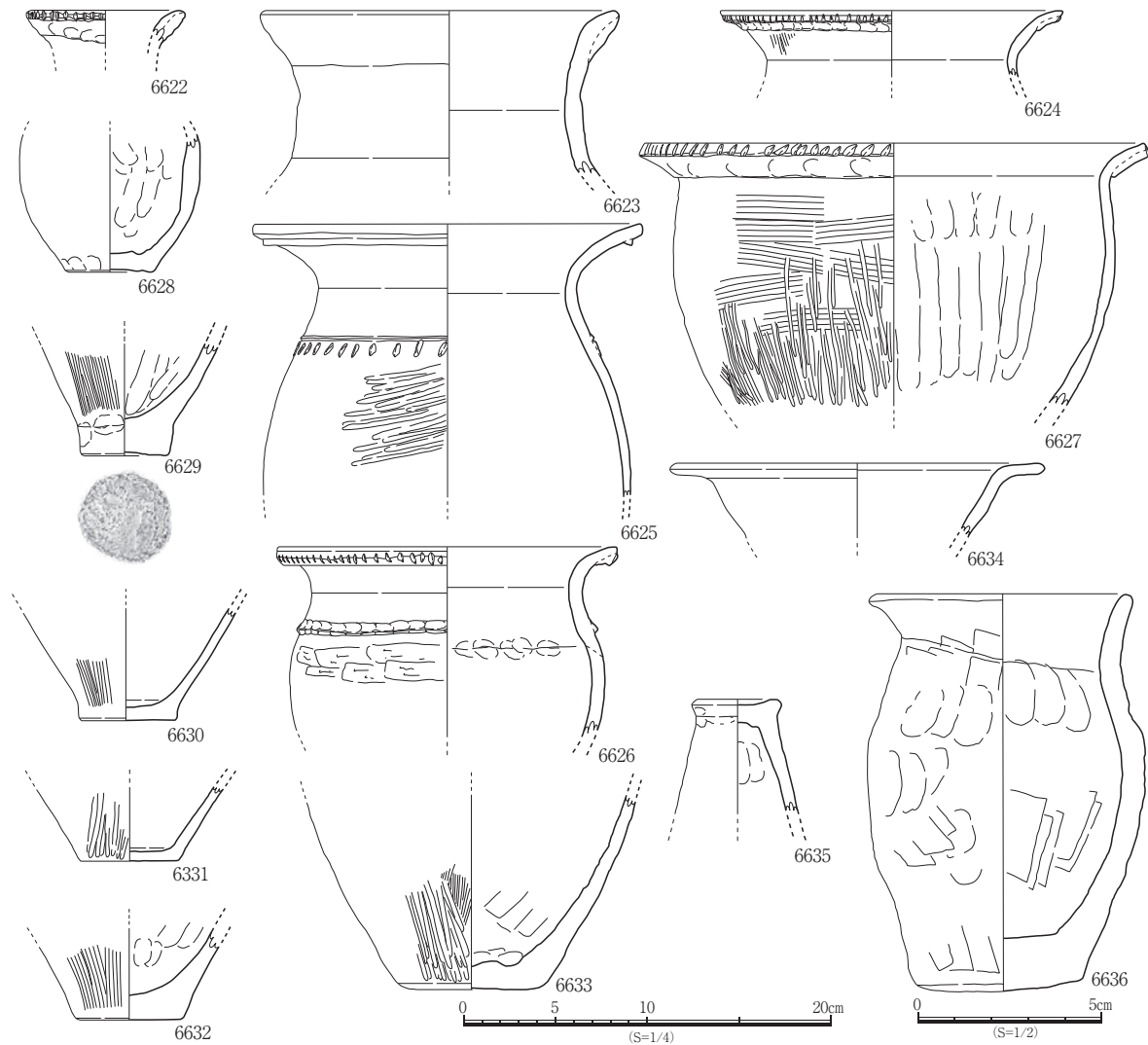


図3-168 SK-6057出土遺物実測図

1. VI区 (1) 弥生時代

を施す。外面には黒斑が残存する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6628は小型の壺で、内面には指ナデ調整、外面下端には指押えを施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

6629～6633は甕の底部とみられるもので、調整は基本的に、内面が指ナデ調整とナデ調整、外面はハケ調整とヘラ磨きとなるが、6633の内面にはヘラナデ調整、6629の外底面にはハケ調整が施される。また、6630の内面には焦げ目が付着し、6632の外面は被熱で変色する。胎土には、細粒砂から極粗粒砂を6629・6630・6633が比較的多く、6631・6632が多く含む。

6634は鉢で、口縁部は外傾する体部から真横に屈曲する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6635は蓋で、天井部は凹面となり、ハの字形に開く。外面は被熱で変色する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

6636はミニチュア土器で、甕を模ったものとみられる。器面にはヘラナデ調整とナデ調整を施し、各所に指頭圧痕が残存する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

SK-6058

VI-2区北東部、ST-6024の西側で検出した舟形の土坑で、両端は調査区外に続く。長辺2.52m以上、短辺0.63m、深さ7cmを測り、長軸方向はN-17°-Eを示す。断面形は舟底形を呈し、西壁沿いに壁溝状の落ち込みがみられる。埋土は黒褐色(2.5Y3/2)シルト質砂であった。出土遺物には弥生土器16点、サヌカイト片2点(4.2g)がみられ、弥生土器2点(6637・6638)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-169 6637・6638)

6637は甕で、口縁部は外反し、外面にヘラ状工具による刻目、その下に微隆起突帯を作り出し、下半にクシ描直線文を施す。胎土には粗粒砂を中心に中粒砂から粗粒砂を多く含む。

6638は甕の底部とみられるもので、外面には煤が付着する。胎土には粗粒砂を中心に細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

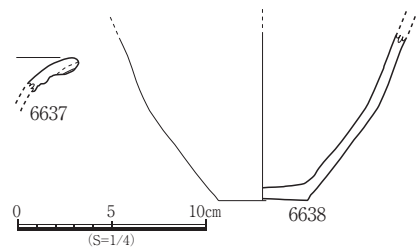


図3-169 SK-6058出土遺物実測図

⑤ 溝跡

SD-6001 (図3-170)

VI-2区中央部を縦断する南北溝で、ST-6054を切り、ST-6042に掘り込まれ、さらに北と南の調査区外に延びる。検出長は64.64m、幅0.30～0.68m、深さは5～29cmを測り、断面形は舟底形ないし逆台形を呈する。基底面は北(7.826m)から南(7.717m)に向かって傾斜し、主軸方向は南(N-173°-W)に蛇行気味に延びた後、南南西(N-155°-W)に緩やかにカーブして延びる。埋土は黒色(10YR2/1)粘土質シルトを主体として場所

により黒褐色(10YR3/1)砂質シルトの堆積が上層に認められた。出土遺物には弥生土器176点、石製品1点、サヌカイト片1点(1.9g)がみら

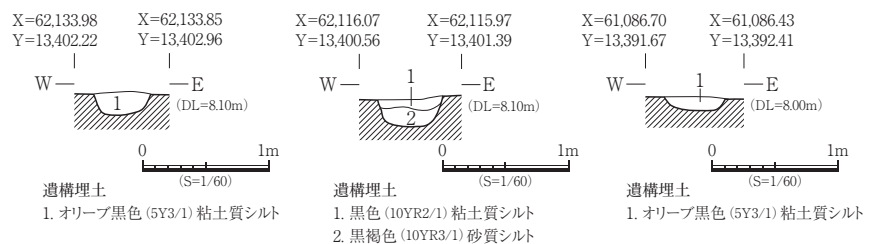


図3-170 SD-6001

れ、弥生土器1点(6639)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-171 6639)

甕で、頸部は丸く大きな胴部から外傾し、口縁部でさらに外傾する。胴部内面にはハケ目が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

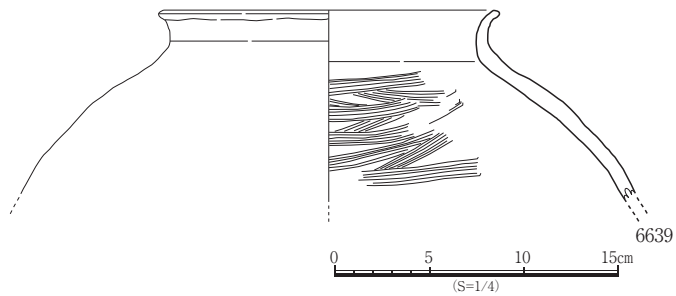


図3-171 SD-6001出土遺物実測図

SD-6002(図3-172)

VI-2区東部を斜めに縦断する南北溝で、さらに東と南の調査区外に延びる。検出長は54.84m、幅0.84~1.24m、深さは27~47cmを測り、断面形は概ね舟底形を呈する。基底面は北東(7.844m)から南西(7.498m)に向かって傾斜し、主軸方向は南西(N-130°-W)に向かってほぼ真直ぐ延びる。埋土は黒色~黒褐色(10YR2/1~

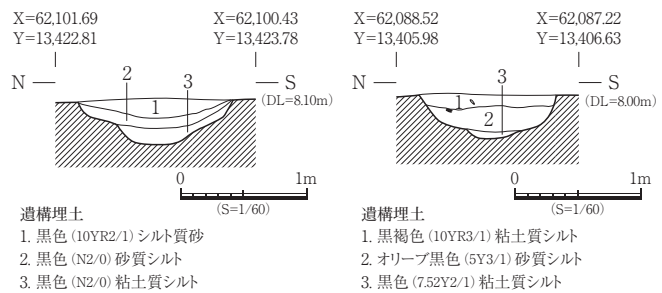


図3-172 SD-6002

3/1)粘土質シルトないし砂質シルトを主体にシルト質砂の堆積が認められる箇所もあり、2~3層に分層される。出土遺物には弥生土器2,187点、土製品1点、石製品8点がみられ、弥生土器59点(6640~6698)、土製品1点(6699)、石製品3点(6700~6702)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-173~178 6640~6698)

6640~6643は壺で、6641~6643は貼付口縁となる。6640は、口頸部が内湾して上がる胴部から外反する。口縁部はヨコナデ調整、外面にはハケ調整を施した上で、肩部にヘラ磨きを加える。6641もほぼ同形態のもので、口縁部外面には指押え、頸部から胴部外面にはハケ調整を施した上で、肩部にクシ描直線文と円弧文を2段に施文する。6642は口頸部が開く

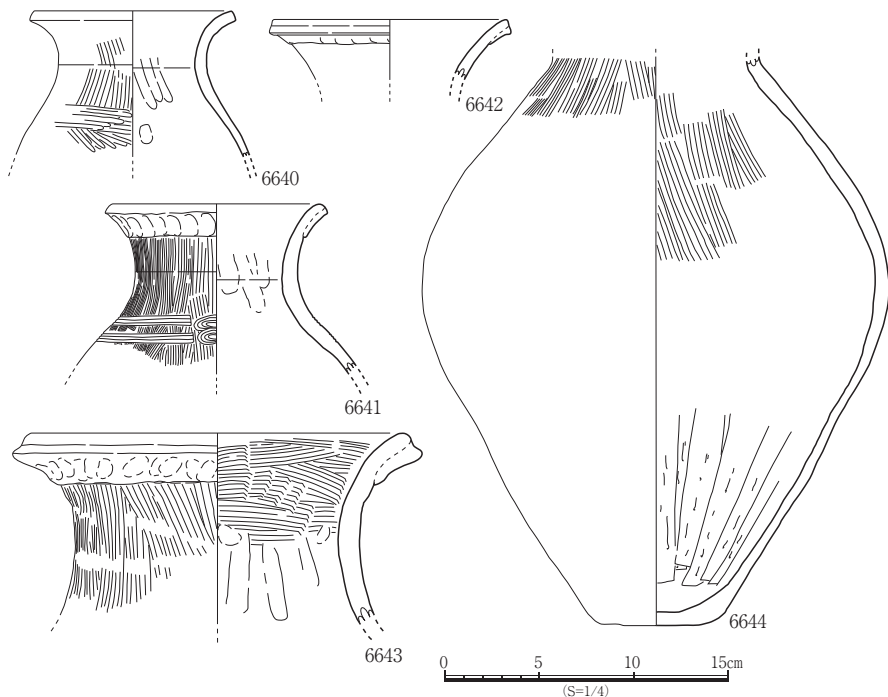


図3-173 SD-6002出土遺物実測図1

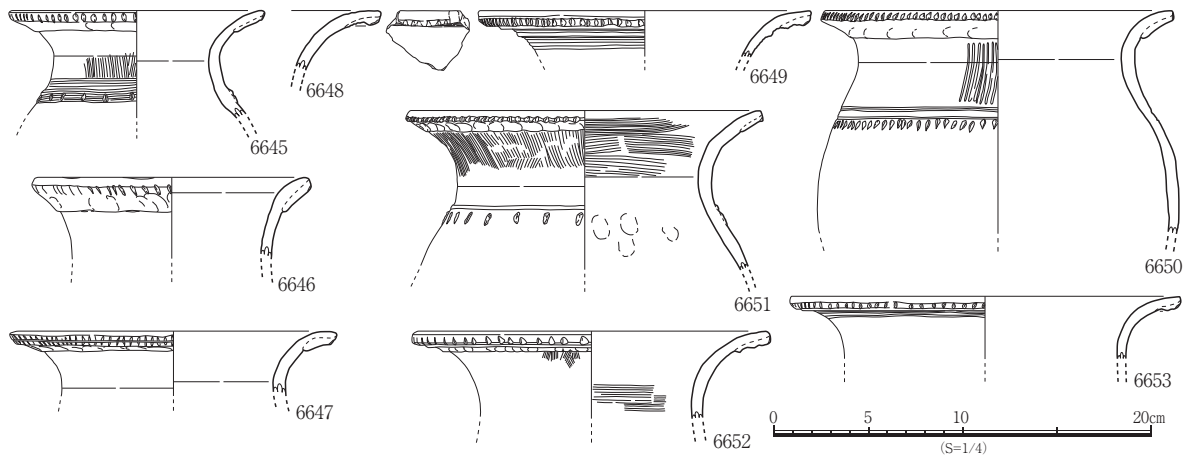


図3-174 SD-6002出土遺物実測図2

もので、口縁部外面には指頭圧痕が残存する。6643は大型で、口縁部外面に指押え、内外面にハケ調整を施す。外面のハケ調整は、粘土帯を貼付してから施す。胎土には、6639が細粒砂から極粗粒砂を多く、6642が細粒砂から粗粒砂を比較的多く、それ以外は細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6644も壺で、胴部以下が復元でき、胴部最大径は中位より上にある。下胴部内面にはヘラ削りの痕が残存する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6645～6668は甕で、口縁部が遺存する。6645～6653は、口頸部が胴部から緩やかに外反するもので、いずれも貼付口縁となり、口縁端部にはヘラ状工具で刻目を施す。口縁部外面には、6645～6647・6650・6651が指押え、6648がクシ描直線文、6649が作り出し微隆起突帯2条とクシ描直線文、6652が作り出し微隆起突帯2条、6653が作り出し微隆起突帯1条とクシ描直線文を施す。6645は肩部外面に貼付微隆起突帯1条を挟んで上下にクシ描直線文と楕円形浮文を貼付する。6650は頸部外面に4本単位のクシ描直線文を2回施文したものが4ヵ所、肩部外面にクシ描直線文とヘラ状工具による刺突文を施す。6651は頸部内外面にハケ調整、肩部外面に微隆起突帯1条と楕円形浮文を貼付する。また、煤が6647の刻目の間、6649の口縁部、6650の胴部外面、6651の口縁部に付着する。胎土には、6645・6646・6649が細粒砂から粗粒砂を比較的多く、6647・6648・6650・6652が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く、6651が細粒砂から極細粒中礫を比較的多く、6653が細粒砂から極粗粒砂を多く含む。6654も口頸部が外反するが、胴部から屈曲する。口縁部は貼付口縁となり、端部下端にヘラ状工具による刻目を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。6655～6662は口縁端部に刻目を施していないもので、6655以外は貼付口縁となる。口頸部ないし口縁部が外反ないし外傾し、貼付口縁のものは口縁部外面に指頭圧痕が残る。6659・6662の頸部外面に施されたタテ方向のハケ調整は、いずれも口縁部に粘土帯を貼付する前に施されている。胎土には、細粒砂から粗粒砂ないし極粗粒砂を6655・6658が少し、6657・6659～6662が比較的多く、6656が多く含む。6663は口頸部が大きく外反するもので、貼付口縁となり、口縁部外面には指頭圧痕が残り、口頸部外面には煤が付着する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。6664は、頸部が丸味のある胴部からほぼ直立し、口縁部が外傾するもので、貼付口縁となり、口縁部外面には指頭圧痕が残る。胴部内面には指押えとナデ調整、外面にはハケ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。6665は、口頸部は丸味のない胴部から外傾するもので、端部は丸く、胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。6666は、頸部が丸味のある胴部から外傾して立ち上がり、口縁部がさらに外傾するもので、口縁部外面には指

頭圧痕が僅かに残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。6667・6668は、口頸部がくの字形をなすものである。6667は口縁端部下端を少し拡張し、口頸部外面には指押え、肩部外面にナデ調整の後にヘラ磨きを施す。6668は口縁端部を上下に拡張し、擬凹線文を施文する。胴部内面下半にはヘラ削り、上半にはナデ調整、外面にはヘラ磨きを施す。胎土には、細粒砂から極粗粒砂を6667が比較的多く、6668が多く含む。

6669～6690は甕の底部とみられるもので、6669が高台状、6682～6684・6687が上げ底風となる以外は平底となる。器面の調整はナデ調整を基本とし、内面にヘラナデ調整(6688)、ヘラ削りの後にハケ調整(6689)、ヘラ削りの後にヘラ磨き(6678)、外面にヘラナデ調整(6670・6680)、ハケ調整(6673・

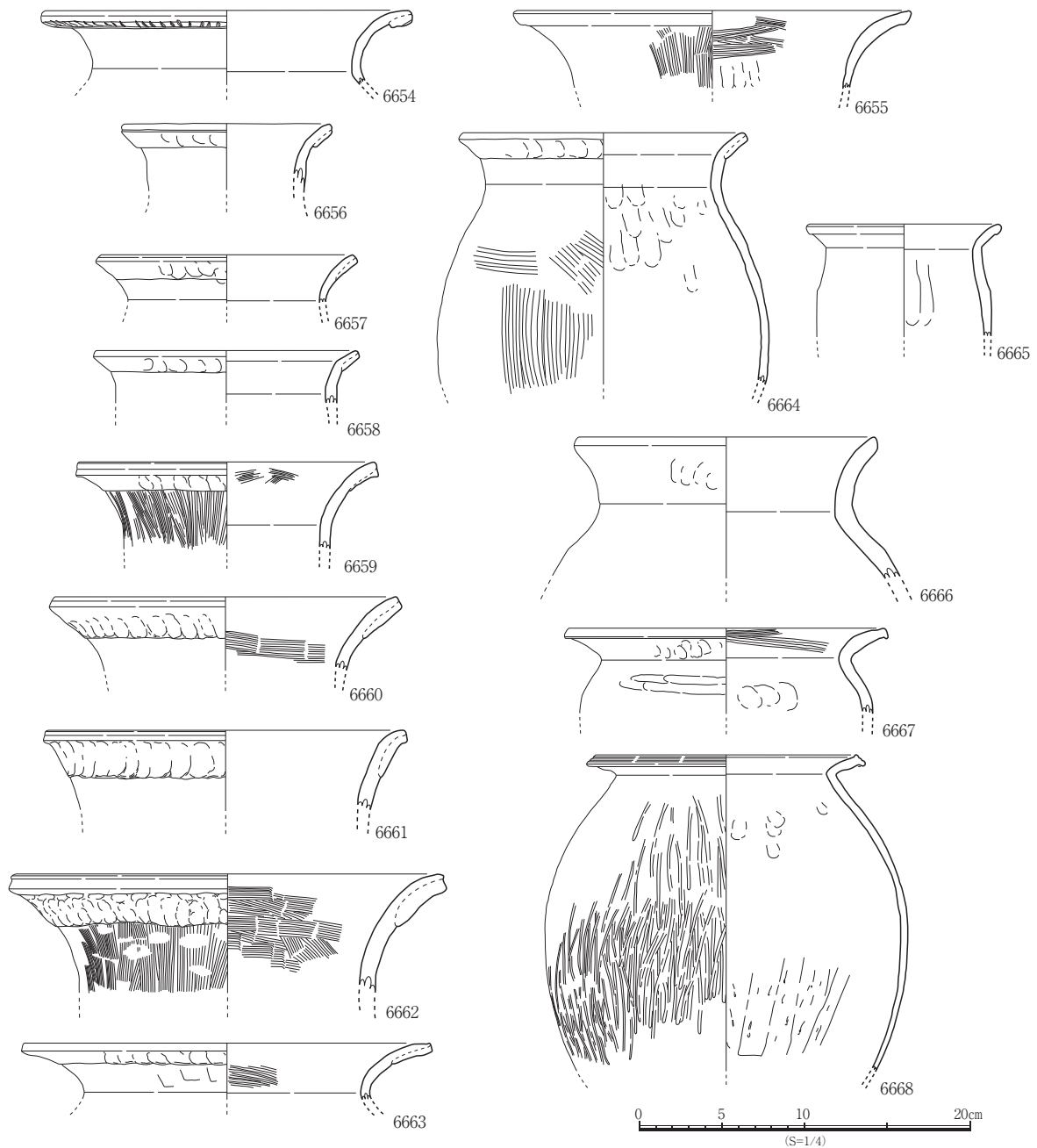


図3-175 SD-6002出土遺物実測図3

1. VI区 (1) 弥生時代

6678), タタキの後にハケ調整(6675), ヘラ磨き(6676・6677・6681・6684・6685・6690), ハケ調整の後にヘラ磨き(6689), 外底面にヘラ削り(6678・6680・6685・6690)を施すものがみられた。また, 外面に煤が付着するもの(6670・6684・6687・6689), 外面が被熱で変色するもの(6671・6681・6686)がみられる。胎土に細粒砂から粗粒砂ないし極粗粒砂を少し含むもの(6671・6674・6675・6684・6686・6688)と細粒砂から極粗粒中礫を少し含むもの(6673)もみられたが, 多くは細粒砂から粗粒砂ないし極粗粒砂を比較的多く含むものと多く含むものであった。

6691・6692は高杯で, 6691は口縁部外面に凹線文を施し, 胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。6692は裾部がハの字形に開き, 端部を上方に拡張する。内面にはヘラ削り, 外面にはヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

6693・6694は鉢で, 6693は上げ底, 6694が脚台となる。6693は, 体部が内湾気味に上がり, 口縁部が外傾し, 貼付口縁となる。外面にはハケ調整を施した上で, ヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂か

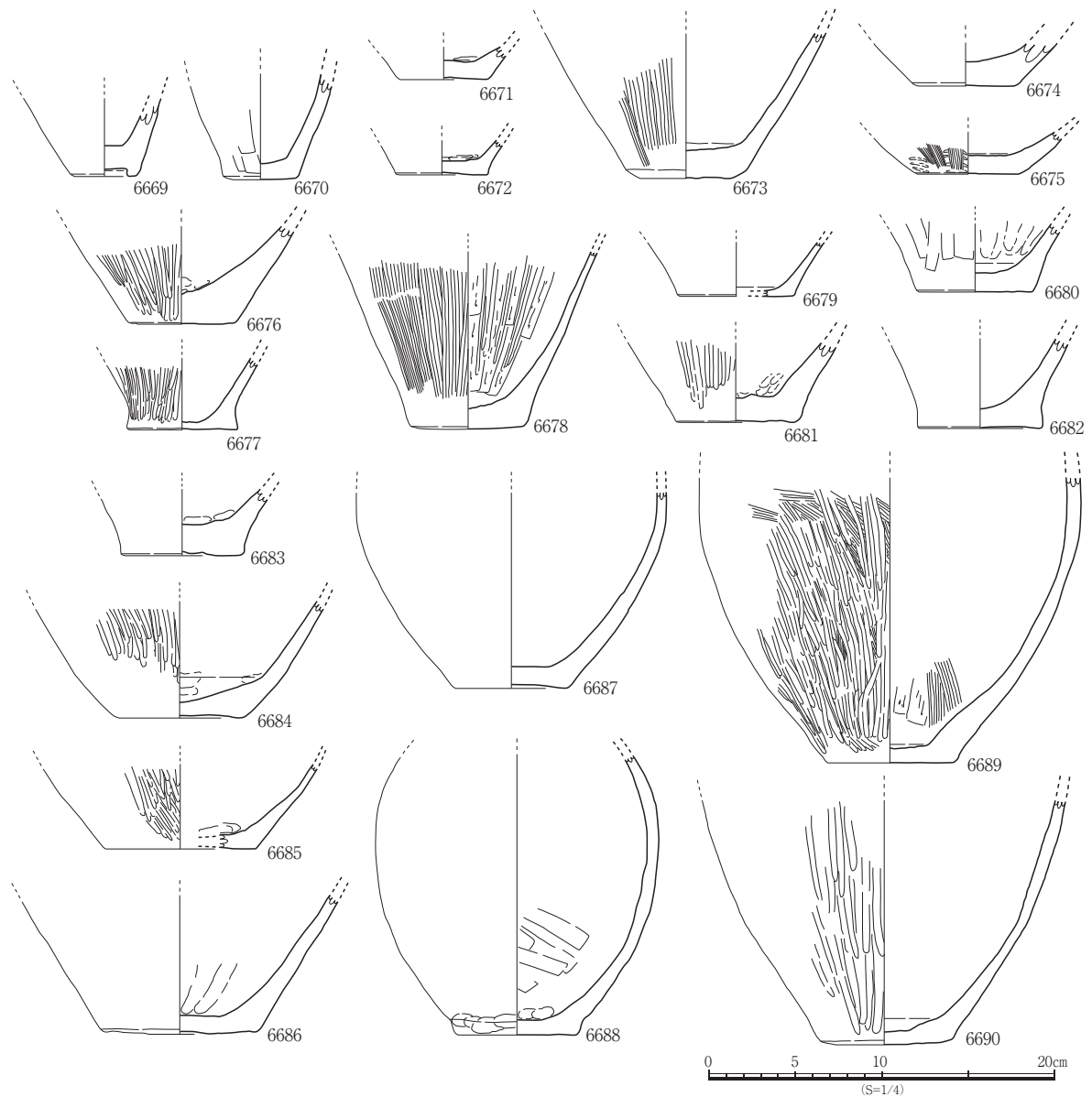


図3-176 SD-6002出土遺物実測図4

ら極粗粒砂を比較的多く含む。6694は、体部が大きく内湾気味に立ち上がり、内面にはヘラナデ調整の痕が僅かに残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6695～6698はミニチュア土器で、6695～6697は甕、6698は壺を模ったものとみられる。胎土には、6695・6696が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く、6697が細粒砂から粗粒砂を少し、6698が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

土製品(図3-179 6699)

土製円板とみられ、縁辺部が盛上る。表面には煤の付着が認められる。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

石製品(図3-179 6700～6702)

6700は石庖丁で、割れた後、割れ目を研磨し、新たに紐孔を穿孔して使用する。刃部長6.8cm、幅0.5cmを測る。

6701は扁平な叩石で、両面中央と側面に敲打痕、縁辺を中心に擦痕が残存する。

6702は河原石を用いた砥石で、上下2面、側面3面の計5面を使用する。特に、上下2面は使い込んでいる。

⑥ ピット

その多くが掘立柱建物跡などの柱穴と考えられ、総数は1,474個であった。この内、図示できた遺物が出土したのは6個(P-6001～6006)で、出土したピットについては遺物観察表に記している。

埋土は黒褐色～黒色

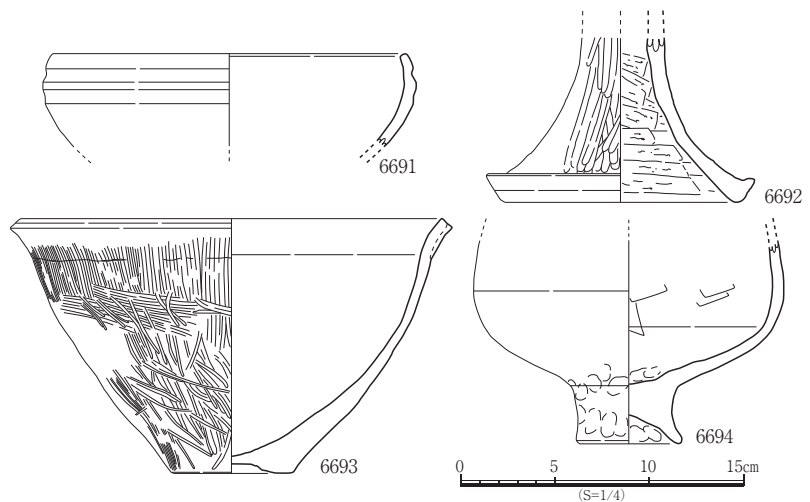


図3-177 SD-6002出土遺物実測図5

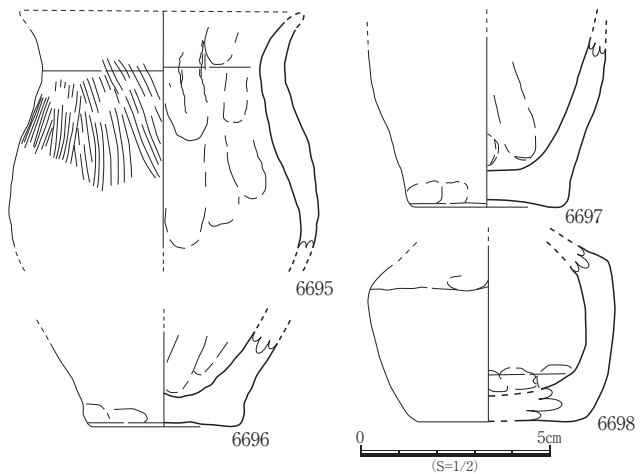


図3-178 SD-6002出土遺物実測図6

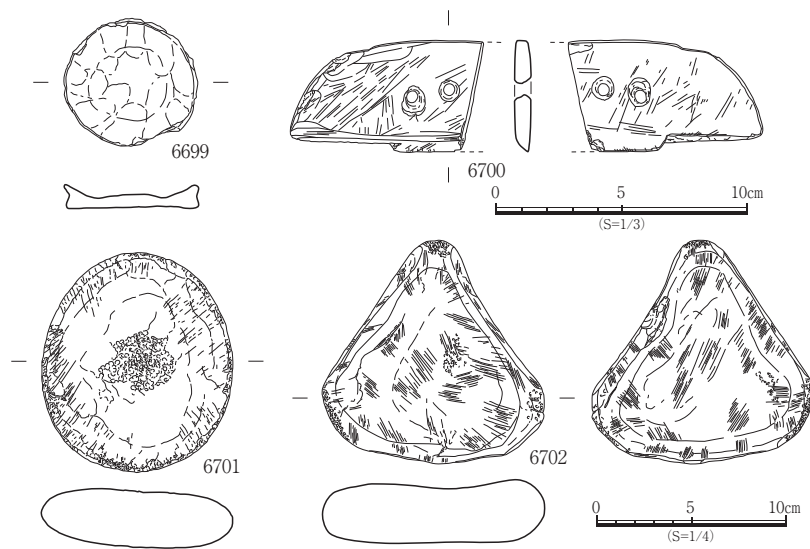


図3-179 SD-6002出土遺物実測図7

1. VI区 (2) 古代

(10YR3/1～2.5Y2/1)を基調としてシルト質粘土ないし砂質シルトであった。

出土遺物

弥生土器(図3-180 6703～6709)

6703・6704は壺で、6703の口縁部外面にはハケ状工具で斜格子状の刻目を施す。6704は、頸部外面基部に粘土紐を貼付し、ヘラ状工具で斜格子状に刻目を施す。胎土には、粗粒砂を中心に細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

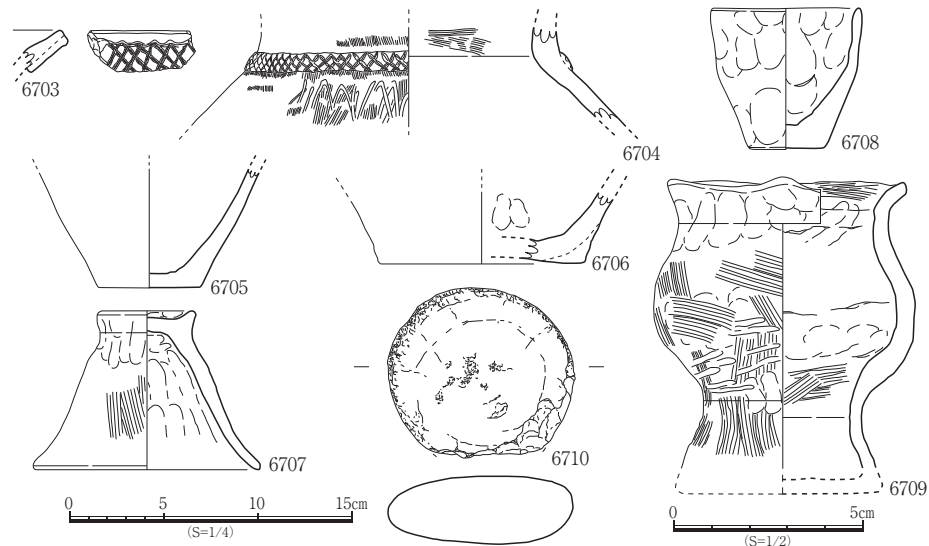


図3-180 ピット出土遺物実測図

6705・6706は甕の底部とみられるもので、いずれも外底面は未調整となり、6705の外面には煤が付着し、6706の外面は被熱で変色する。胎土には、6705が中粒砂から極粗粒砂、6706が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6707は蓋で、天井部は凹み、外下方に下った後、口縁部はさらに開く。胎土には中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6708・6709はミニチュア土器で、6708は鉢、6709は甕を模ったものとみられる。6708の器面には指頭圧痕が残り、胎土には中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。6709は、底部が中空となり、胴部は内湾して上がり、口頸部は外反する。外面には指押えの後にハケ調整を施し、さらに下胴部にヘラ磨きを施す。胎土には中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-180 6710)

叩石で、側面を中心に、片面中央にも敲打痕が残存する。

(2) 古代

遺構はVI-2区中央部からVII区にかけて展開しており、一部VIII区にもみられる。VI区では、3本の道路遺構から東側で遺構が確認されており、官衙関連とみられる掘立柱建物20棟を中心に、塀・柵列跡4列、土坑26基、溝跡7条、道路遺構3本、畝状遺構1列、ピット1,793個を検出した。中でもVI-2区の南部にその中枢がある。

① 掘立柱建物跡

復元できたのは20棟で、大半が方形の掘方の柱穴で構成された掘立柱建物跡であり、緑釉陶器や県内では出土例の少ない灰釉陶器が伴出しており、転用硯ではあるが陶硯の出土から考えて官衙関連の建物と判断される。

SB-6027 (図3-181)

VI-2区南東部で検出した桁行5間(10.5m)、梁行2間(4.40m)の大型東西棟建物跡で、一辺1mを超す柱穴で構成され、棟方向はN-80°46'-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.50~2.70m(5.0~9.0尺)、梁行(南北)は西妻柱に明確な柱痕が遺存しており、2.20m(7.3尺)を測る。柱穴の平面形は、形の崩れるものもみられるが基本的に方

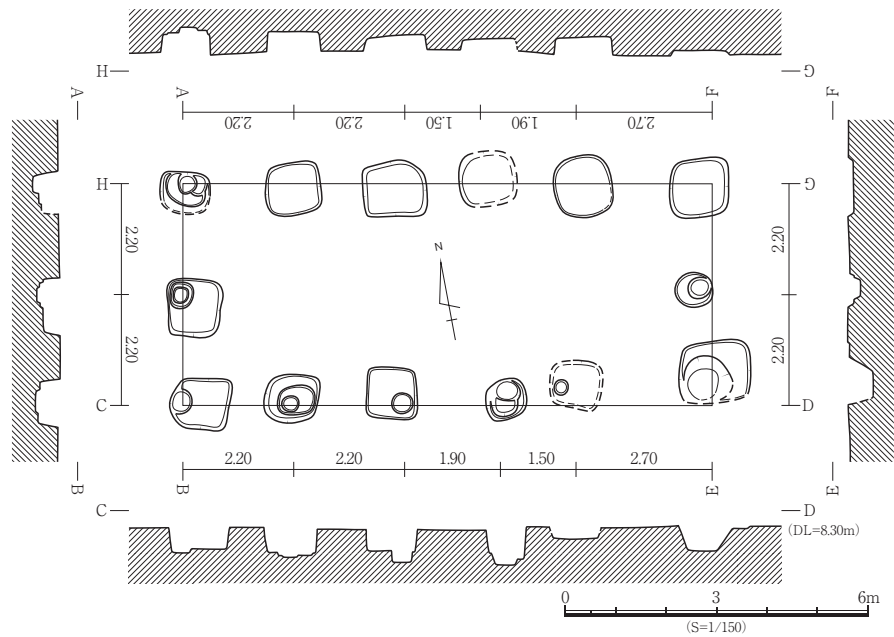


図3-181 SB-6027

形で、一辺99~105cmを中心に、一辺60~130cmを測り、柱径は24~34cmとみられ、深さは10~64cmである。柱穴の埋土は黒褐色(2.5YR3/1)砂質シルトないし粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器228点、土師器316点、須恵器102点、土師質土器2,247点、黒色土器26点、緑釉陶器8点、灰釉陶器13点、土製品4点、石製品2点、鉄製品1点、鉄滓2点がみられ、須恵器3点(6711~6713)、土師質土器6点(6714~6719)、緑釉陶器8点(6720~6727)、灰釉陶器13点(6728~6740)、石製品2点(6741・6742)が掲載できた。

出土遺物

須恵器(図3-182 6711~6713)

6711は杯蓋で、擬宝珠形のつまみが残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

6712・6713は杯身で、底部の切り離しは回転ヘラ切りとなり、6712はナデ調整を加える。高台はいずれも底部外面端部に付く。胎土は比較的精良で、6712が細粒砂から中粒砂を少し、6713が細粒砂から粗粒砂を少し含む。

土師質土器(図3-182 6714~6719)

6714・6715は杯で、成形はA技法となり、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

6716~6719は皿で、6716~6718は6719に比べ一回り小さい。いずれも成形はA技法で、器面に回転ナデ調整を施してから内底面にナデ調整を加え、回転ヘラ切りで、底部を切り離す。6716・6719は回転ヘラ切りの後にナデ調整を施す。胎土には、6716が細粒砂から中粒砂を少し、6717・6719が細粒砂から粗粒砂を少し、6718が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

緑釉陶器(図3-182 6721・6722・6727, 図版59 6720・6723~6726)

6720~6726は碗とみられるもので、6720~6725は軟質系、6726は硬質系となる。胎土は概して精良で、6725が極細粒砂から中粒砂を比較的多く含む以外は極細粒砂から中粒砂ないし粗粒砂を若干含む。

1. VI区 (2) 古代

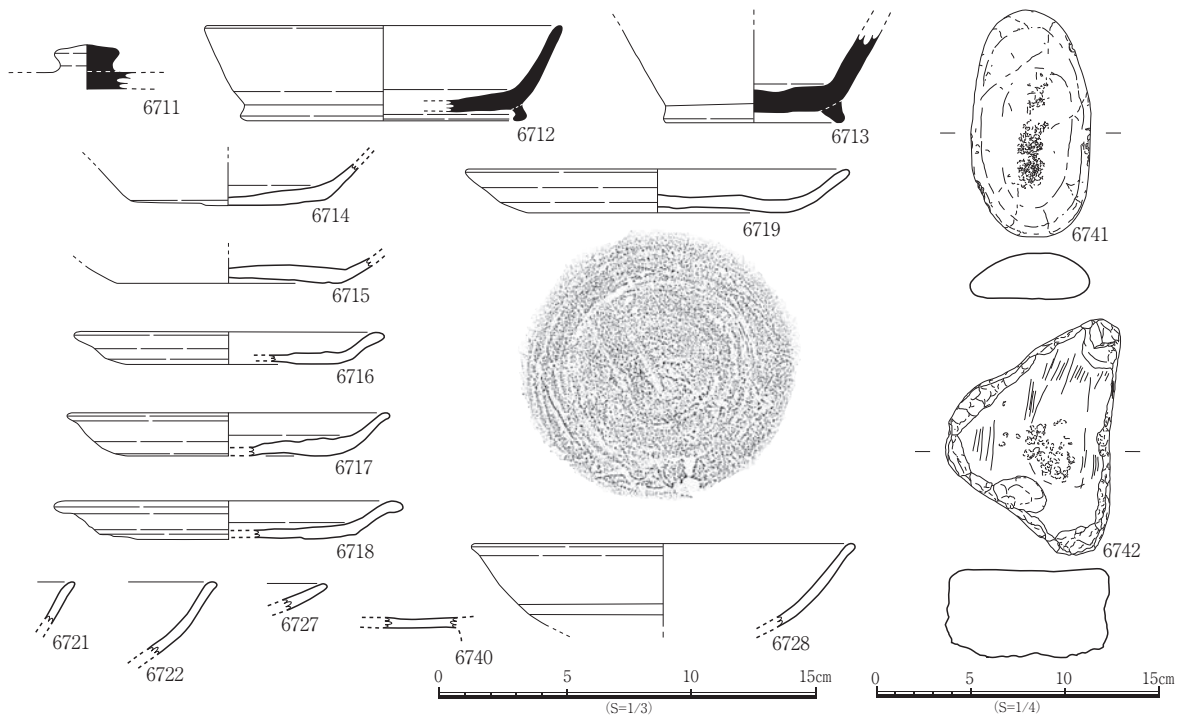


図3-182 SB-6027出土遺物実測図

6727は皿とみられもので、硬質系となり、胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

灰釉陶器(図3-182 6728・6740, 図版59・71・72 6729~6739)

6728~6730は椀, 6731~6740は皿とみられるもので、器面の調整は回転ナデ調整で、体部外面に回転ヘラ削りを加え、内面から体部外面にかけて灰釉を施釉する。胎土には極細粒砂から中粒砂ないし粗粒砂を若干含む。

石製品(図3-182 6741・6742)

6741は叩石で、表面は平滑となり、両面中央と側面に弱い敲打痕が残存する。

6742は主に砥石として使用されたものとみられるが、片面中央と側面に敲打痕が残る。

SB-6028 (図3-183)

VI-2区南部, SB-6027の南西側で検出した桁行5間(8.70m), 梁行3間(5.10m)の大型南北棟建物跡で、一辺1m近い柱穴で構成され、棟方向はN-11°26'-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.50~1.95m(5.0

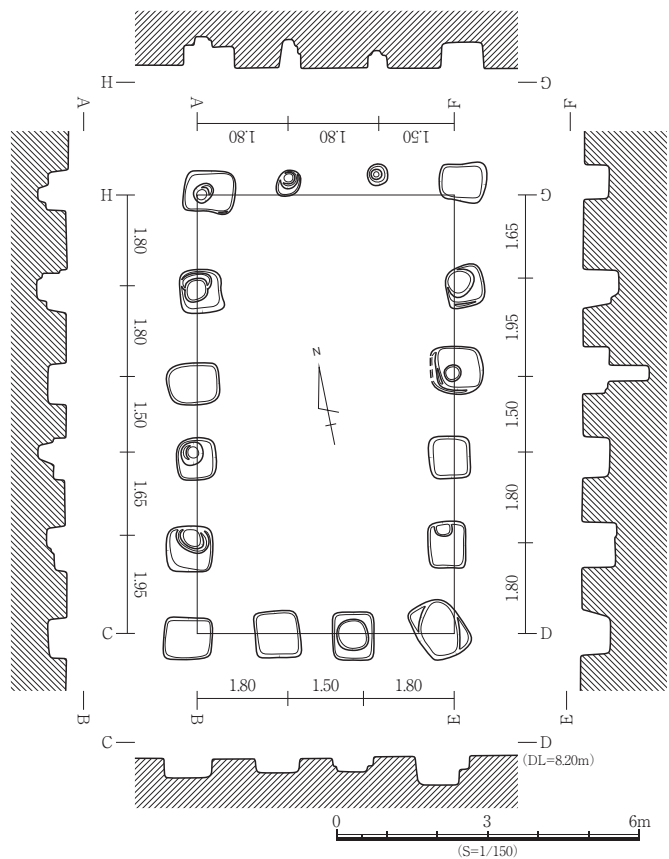


図3-183 SB-6028

～6.5尺), 梁行(東西)が1.50m(5.0尺)・1.80m(6.0尺)である。柱穴の平面形はほぼ方形で, 一辺77～88cmを中心に, 一辺40～122cmを測り, 柱径は20cm前後とみられ, 深さは24～131cmである。柱穴の埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器193点, 土師器57点, 須恵器56点, 土師質土器149点がみられ, 東側柱南から1間目の柱穴から出土した土師器1点(6743), 北東隅柱から出土した須恵器1点(6744)と東側柱北から2間目の柱穴から出土した須恵器1点(6745)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-187 6743)

釜とみられるもので, 口縁部は内湾し, 端部は凹面となる。外面にはハケ調整を施す。胎土には粗粒砂を中心に細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

須恵器(図3-187 6744・6745)

6744は杯蓋で, 天井部には宝珠形つまみが付く。胎土には細粒砂から中粒砂を若干含む。

6745は杯身で, 底部外面端部に高さ0.4cmの高台が付く。外面は自然釉がかかり, ハダ荒れがみられる。底部の切り離しは回転ヘラ切りで, ナデ調整を加える。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

SB-6029(図3-184)

VI-2区南東部, SB-6028の東隣で検出した桁行4間(6.60m), 梁行2間(4.20m)の東西棟建物跡で, 棟方向はN-84°46'-Wを示す。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.05～2.25m(3.5～7.5尺), 梁行(南北)が1.80～2.40m(6.0～8.0尺)である。柱穴の平面形は円形を呈するものも一部にはみられるが, 基本的にほぼ方形で, 一辺51～59cmを中心に, 一辺21～77cmを測り, 柱径は17～24cmとみられ, 深さは28～65cmである。柱穴の埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器59点, 土師器15点, 須恵器3点, 土師質土器9点がみられ, 南側柱西から1間目の柱穴から出土した弥生土器1点(6746), 北側柱東から1間目の柱穴から出土した土師器1点(6747)が図示できた。

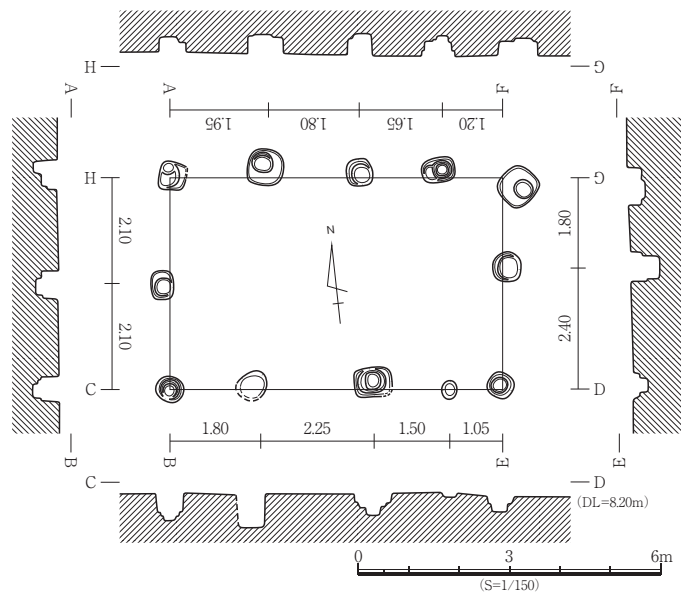


図3-184 SB-6029

出土遺物

弥生土器(図3-187 6746)

甕で, 口縁部は頸部から外傾する。外面には煤が付着する。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

土師器(図3-187 6747)

椀で, 器面は摩耗するが, 内面にヘラ磨きが施されていた可能性がある。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

SB-6030 (図3-185)

VI-2区南東部, SB-6029の東隣で検出した桁行6間(11.40m), 梁行2間(4.80m)の細長い南北棟建物跡で, 棟方向はN-8°42'-Eを示す。柱間寸法は, 桁行(南北)が1.65~2.55m(5.5~8.5尺), 梁行(東西)が2.10~2.70m(7.0~9.0尺)である。柱穴の平面形は円形を呈するものも一部にはみられるが, 基本的にはほぼ方形で, 一辺50~60cmを中心に, 一辺30~77cmを測り, 柱径は15~25cmとみられ, 深さは15~71cmである。柱穴の埋土はオリブ黒色(5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器64点, 土師器43点, 須恵器25点, 土師質土器19点, 土製品1点がみられ, 西側柱北から1間目の柱穴から出土した須恵器1点(6748)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-187 6748)

杯身で, 器面は摩耗し, 胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

SB-6031 (図3-186)

VI-2区南東部, SB-6030の東側で検出した桁行3間(6.00m), 梁行3間(3.90m)の南北棟建物跡であるが, 南妻柱の柱穴2個は未確認である。棟方向はN-8°26'-Eを示し, 柱間寸法は, 桁行(南北)が1.50~2.40m(5.0~8.0尺), 梁行(東西)が1.20m(4.0尺)・1.50m(5.0尺)である。柱穴の平面形は円形を呈するものも一部にはみられるが, 基本的にはほぼ方形で, 一辺58~66cmを中心に, 一辺38~80cmを測り, 柱径は15~22cmとみられ, 深さは8~57cmである。柱穴の埋土はオリブ黒色(5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器12点, 須恵器2点, 土師質土器9点がみられ, 南東棟隅柱の柱穴から出土した弥生土器1点(6749)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-187 6749)

甕で, 口縁部は外反し, 端部は丸い。器面にはハケ調整を施し, 胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

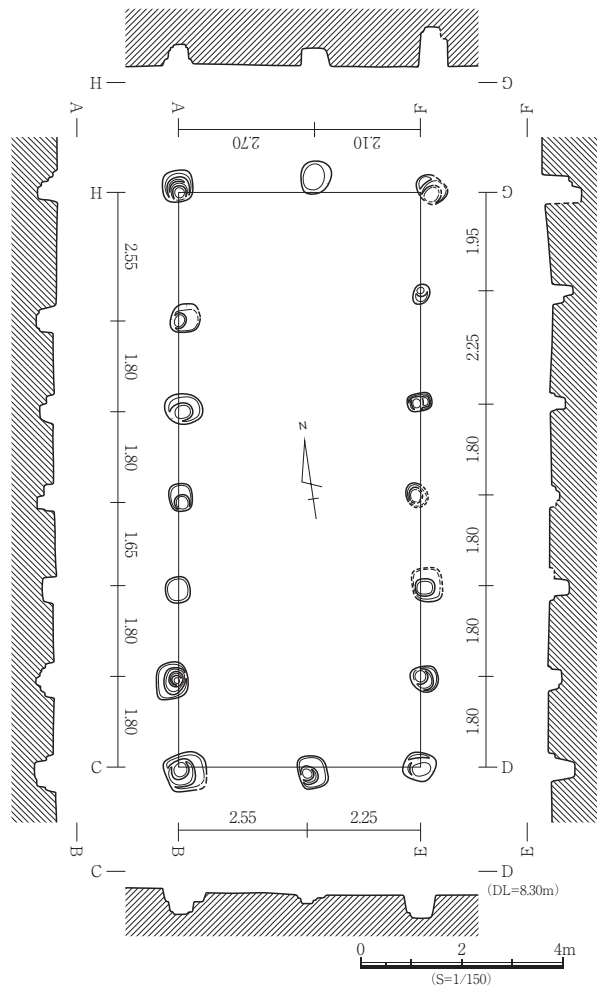


図3-185 SB-6030

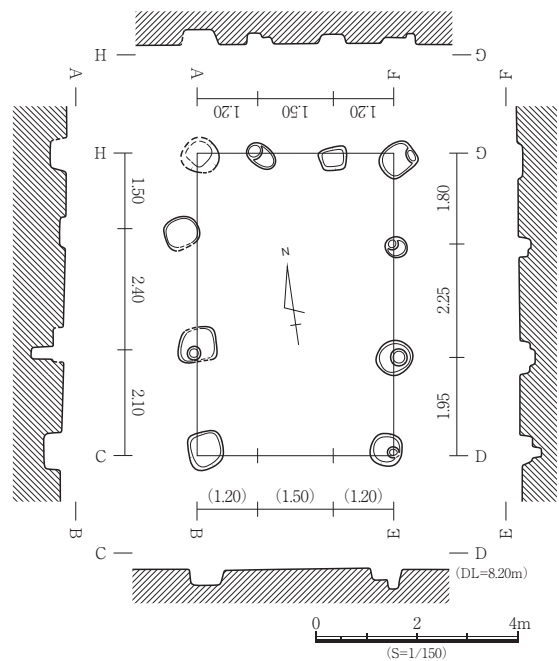


図3-186 SB-6031

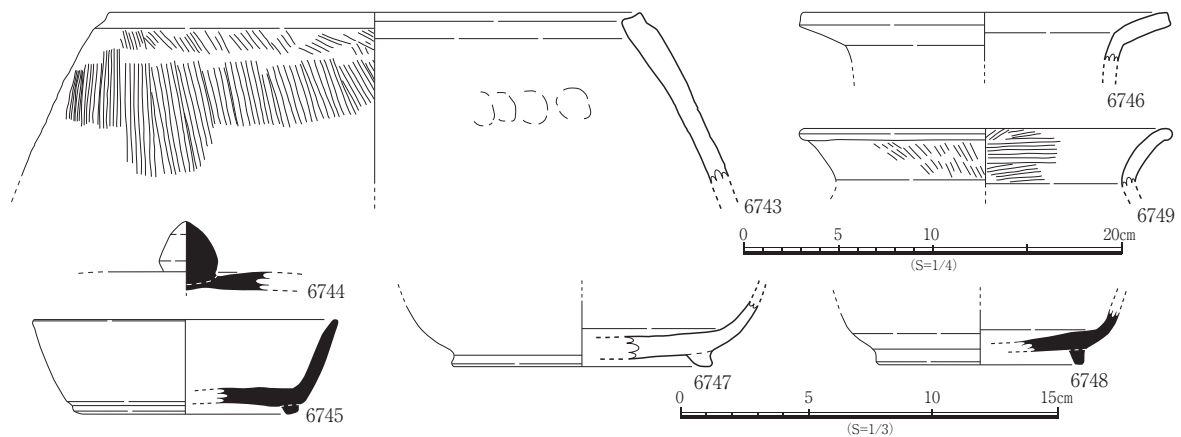


図3-187 SB-6028～6031出土遺物実測図

SB-6032 (図3-188)

VI-2区南東端部，南壁際で検出した桁行1間(1.80m)以上，梁行2間(2.85m)の南北棟建物跡で，大半は調査区外にあり，棟方向はN-11°44'-Eを示す。柱間寸法は，桁行(南北)が1.80m(6.0尺)，梁行(東西)が1.35m(4.5尺)・1.50m(5.0尺)である。柱穴の平面形はほぼ方形で，一辺約70～76cmを中心に，一辺61～80cmを測り，柱径は18～25cmとみられ，深さは29～74cmである。柱穴の埋土は黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器57点，土師器2点，土師質土器13点がみられ，北東棟隅柱の柱穴から出土した弥生土器1点(6750)が図示できた。

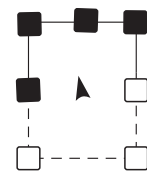


図3-188 SB-6032

出土遺物

弥生土器(図3-192 6750)

ミニチュア土器で，甕を模ったものとみられる。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

SB-6033 (図3-189)

VI-2区南端部，南壁際で検出した桁行3間(5.40m)程度，梁行2間(3.60m)の南北棟建物跡とみられるもので，棟方向はN-15°47'-Eを示すが，東西平側は未確認であるため明確な桁行は不明である。柱間寸法は，梁行(東西)が1.80m(6.0尺)等間隔である。柱穴の平面形は方形で，一辺82～86cmを中心に，一辺78～92cmを測り，柱径は23cmとみられ，深さは42～62cmである。柱穴の埋土はオリブ黒色(5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器76点，須恵器3点，サヌカイト片1点(1.0g)がみられ，北妻柱真中の柱穴から出土した須恵器1点(6751)が図示できた。

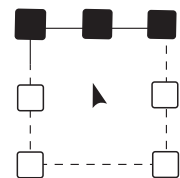


図3-189 SB-6033

出土遺物

須恵器(図3-192 6751)

皿で，口縁部内側は折込みとなり，底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

SB-6034 (図3-190)

VI-2区中央部，SB-6028の北西側で検出した桁行4間(9.60m)，梁行2間(4.50m)の南北棟建物跡であるが，北妻柱真中の柱穴は未確認である。棟方向はN-9°56'-Eを示し，柱間寸法は，桁行(南北)が2.10～3.00m(7.0～10.0尺)，梁行(東西)が2.25m(7.5尺)等間隔とみられる。柱穴の平面形はほぼ方形

1. VI区 (2) 古代

で、一辺48～60cmを中心に、一辺40～82cmを測り、柱径は16～25cmとみられ、深さは4～45cmである。柱穴の埋土は黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトないし粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器17点、土師器13点、須恵器5点、土師質土器178点、黒色土器6点、灰釉陶器1点、石製品1点、鉄滓1点がみられ、西側柱真中の柱穴から出土した灰釉陶器1点(6752)と東側柱真中の柱穴から出土した石製品1点(6753)が掲載できた。

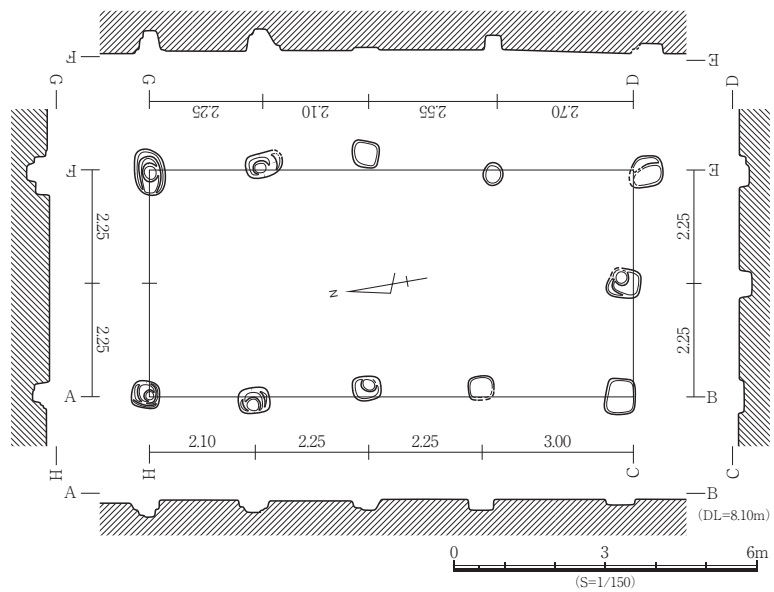


図3-190 SB-6034

出土遺物

灰釉陶器(図版72 6752)

皿とみられ、外面には回転ヘラ削りを施す。胎土は精良で、極細粒砂から細粒砂を若干含む。

石製品(図3-192 6753)

軽石の砥石で、2面に使用痕が残る。

SB-6035(図3-191)

VI-2区中央部、SB-6028の西平側と重複した形で検出した桁行3間(7.50m)、梁行2間(3.90m)の南北棟建物跡であるが、北妻柱真中の柱穴は未確認である。棟方向はN-7°50'-Eを示し、柱間寸法は、桁行(南北)が2.25～2.70m(7.5～9.0尺)、梁行(東西)が1.95m(6.5尺)等間隔とみられる。柱穴の平面形はほぼ方形で、一辺54～60cmを中心に、一辺47～76cmを測り、柱径は13～43cmとみられ、深さは13～43cmである。柱穴の埋土は黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器14点、土師器20点、須恵器7点、土師質土器37点がみられ、南妻柱真中の柱穴から出土した土師器1点(6754)と東側柱南から1間目の柱穴から出土した須恵器1点(6755)が図示できた。

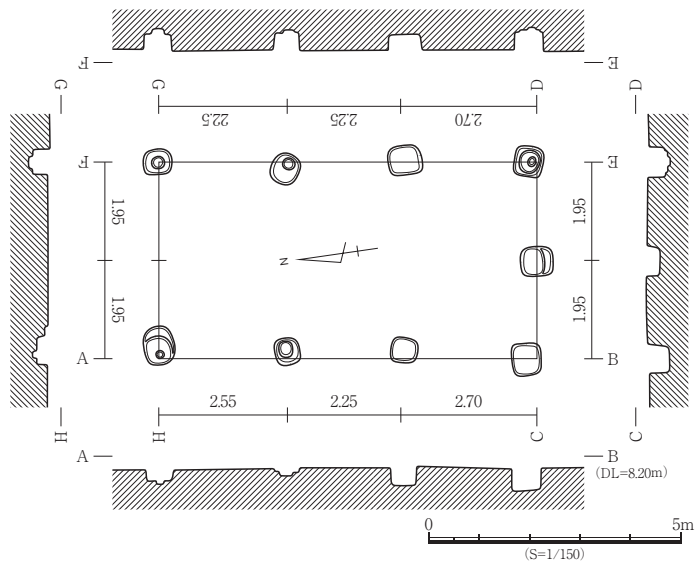
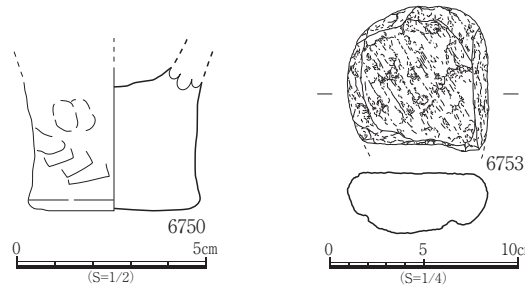


図3-191 SB-6035

出土遺物

土師器(図3-192 6754)

杯蓋で、口縁部は平らな天井部から緩やかに下り、端部を丸く仕上げる。天井部外面にはヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。



須恵器(図3-192 6755)

杯身で、底部外面端部にはハの字形に開く高さ0.5cmの高台が付く。外面には回転ヘラ削りの後にヨコナデ調整を施す。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、ナデ調整を加える。胎土には白色細粒砂から中粒砂を少し含む。

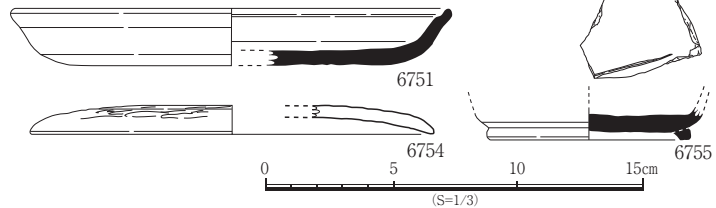


図3-192 SB-6032~6035出土遺物実測図

SB-6036 (図3-193)

VI-2区東部、SB-6039の北東側で検出した桁行3間(6.30m)、梁行2間(3.60m)の東西棟建物跡であるが、北東隅柱と東妻柱真中の柱穴は未確認である。棟方向はN-84°14'-Wを示し、柱間寸法は、桁行(東西)が2.10m(7.0尺)等間隔、梁行(南北)が1.80m(6.0尺)等間隔とみられる。柱穴の平面形はほぼ方形で、一辺58~61cmを中心に、一辺53~68cmを測り、柱径は22~24cmとみられ、深さは9~40cmである。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器2点、土師器12点、須恵器3点、土師質土器142点、石製品1点、サヌカイト片1点(0.6g)がみられ、北西隅柱の柱穴から出土した石製品1点(6756)が図示できた。

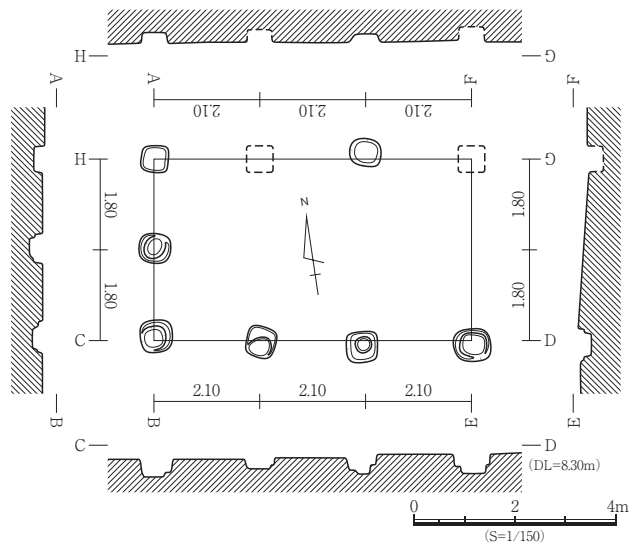


図3-193 SB-6036

出土遺物

石製品(図3-194 6756)

砥石で、上下2面を使用する。

SB-6037 (図3-195)

VI-2区北部、北壁際で検出した桁行2間(3.90m)、梁行2間(3.60m)の小型南北棟建物跡で、棟方向はN-4°54'-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.65~2.25m(5.5~7.5尺)、梁行(東西)が1.65~1.95m(5.5~6.5尺)である。柱穴の平面形は方形を指向していたとみられるものもあるが、円形を呈するものが多く、径47~

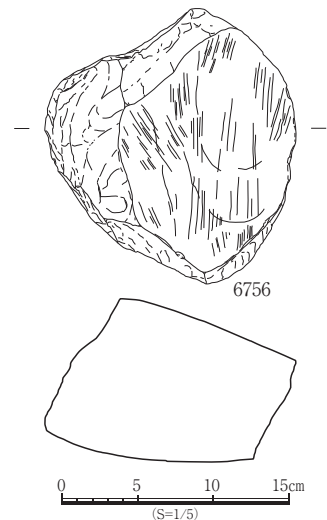


図3-194 SB-6036出土遺物実測図

1. VI区 (2) 古代

53cmを中心に、径27～68cmを測り、柱径は12～15cmとみられ、深さは10～29cmである。柱穴の埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルトないし黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器18点、土師器1点、須恵器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-6038 (図3-196)

VI-2区中央部、SD-6008のコーナー部北側で検出した桁行2間(3.30m)、梁行2間(3.00m)の小型南北棟建物跡で、棟方向はN-17°11'-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.50～1.80m(5.0～6.0尺)、梁行(東西)が1.35～1.65m(4.5～5.5尺)である。柱穴の平面形は円形を呈するものも一部にはみられるが、基本的にほぼ方形で、一辺54～59cmを中心に、一辺47～67cmを測り、柱径は11～15cmとみられ、深さは15～29cmである。柱穴の埋土はオリーブ黒色(10Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器7点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-6039 (図3-197)

VI-2区東部、SD-6034の東側で検出した桁行3間(6.50m)、梁行2間(3.30m)の東西棟建物跡で、北平側柱の2個は未確認である。棟方向はN-82°57'-Wを示し、柱間寸法は、桁行(南北)が1.80～2.55m(6.0～8.5尺)、梁行(東西)が1.50m(5.0尺)・1.80m(6.0尺)である。柱穴の平面形はほぼ方形で、一辺61～65cmを中心に、一辺50～78cmを測り、柱径は12～22cmとみられ、深さは13～33cmである。柱穴の埋土は黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトないし粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器14点、土師器18点、須恵器18点、土師質土器143点、黒色土器4点、土製品2点がみられ、南東隅柱の柱穴から出土した須恵器1点(6757)、土師質土器1点(6758)、黒色土器1点(6759)、西妻柱真中の柱穴から出土した土製品1点(6760)、南側柱西から1間目の柱穴から出土した土製品1点(6761)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-198 6757)

杯蓋で、天井部外面は回転ヘラ削りで、擬宝珠形つまみが付く。つまみはヨコナデ調整を施す。胎土には細粒砂から中粒砂

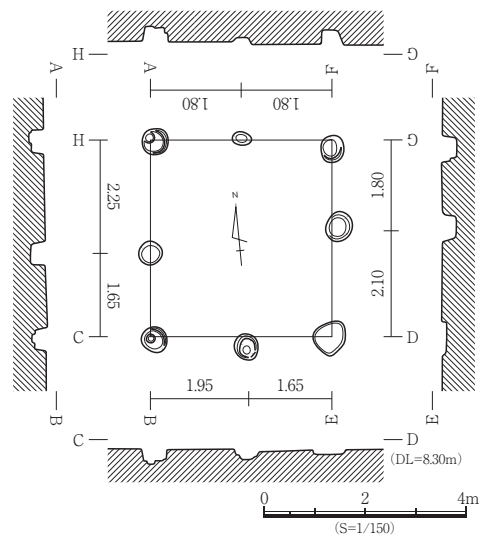


図3-195 SB-6037

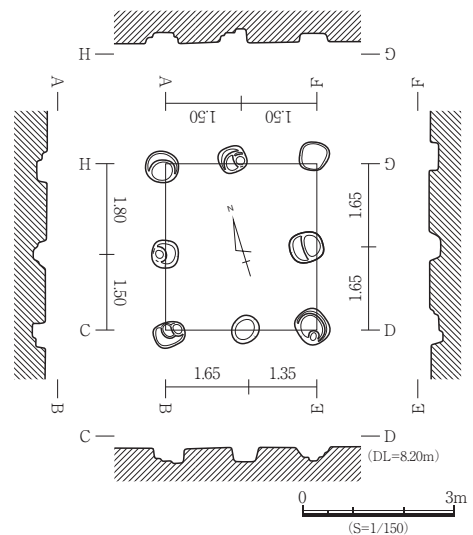


図3-196 SB-6038

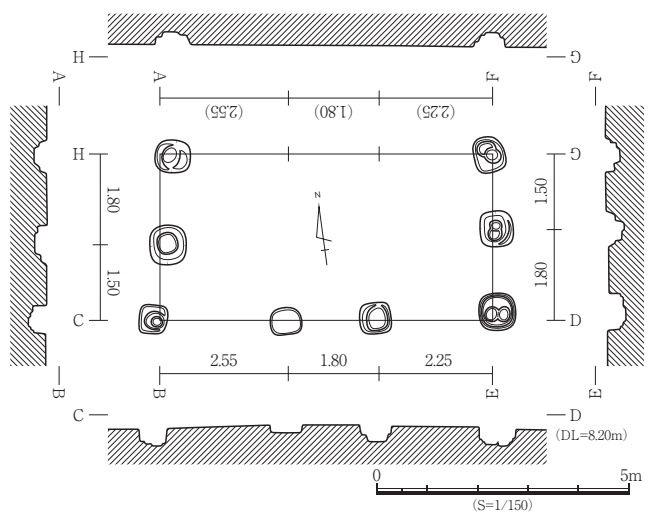


図3-197 SB-6039

を少し含む。

土師質土器(図3-198 6758)

杯で、成形はA技法となり、底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

黒色土器(図3-198 6759)

壺で、胴部は肩が張る。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

土製品(図3-198 6760・6761)

いずれも円筒形の土錘で、胎土には、6760が細粒砂から極粗粒砂を少し、6761が細粒砂から中粒砂を少し含む。

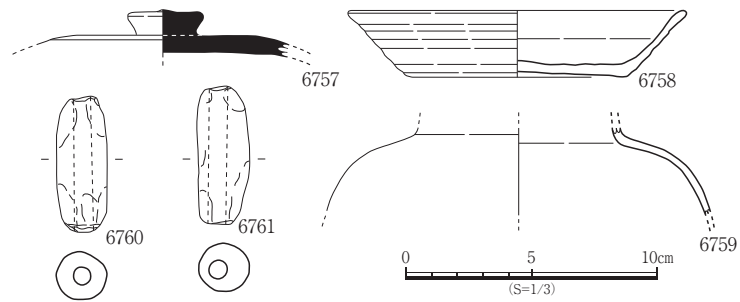


図3-198 SB-6039出土遺物実測図

SB-6040(図3-199)

VI-2区東端部、東壁際で検出した桁行2間(2.85m)、梁行2間(2.40m)の小型南北棟建物跡で、南妻柱真中の柱穴は未確認である。棟方向はN-8°40'-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.20~1.65m(4.0~5.5尺)、梁行(東西)が1.20m(4.0尺)等間隔である。柱穴の平面形はほぼ方形で、一辺50~54cmを中心に、一辺46~63cmを測り、柱径は18~21cmとみられ、深さは12~26cmである。柱穴の埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質砂であった。出土遺物には弥生土器22点がみられたが、図示できるものはなかった。

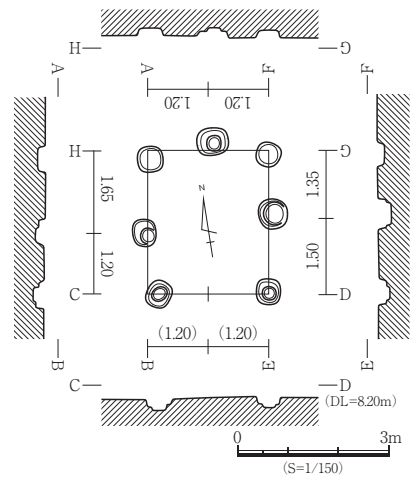


図3-199 SB-6040

SB-6041(図3-200)

VI-2区東端部、東壁際で検出した桁行2間(3.60m)以上、梁行3間(4.20m)の東西棟建物跡で、東半分は調査区外で、南西隅柱の柱穴は未確認である。棟方向はN-90°-Eを示し、方眼東を向く。柱間寸法は、桁行(東西)が1.50m(5.0尺)・1.80m(6.0尺)、梁行(南北)が1.05~1.65m(3.5~5.5尺)である。柱穴の平面形はほ

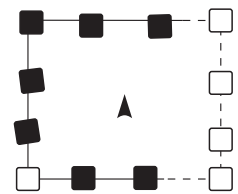


図3-200 SB-6041

ぼ方形で、一辺68~74cmを中心に、一辺60~89cmを測り、柱径は16~26cmとみられ、深さは18~29cmである。柱穴の埋土は黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器45点、須恵器2点、土師質土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-6042(図3-201)

VI-2区北部、北壁際で検出した桁行1間(2.75m)、梁行1間(2.70m)の南北棟建物跡で、棟方向はN-2°17'-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が2.75m(約9.2尺)、梁行(東西)が2.70m(9.0尺)である。柱穴の平面形はほぼ方形で、一辺63~68cmを中心に、一辺50~78cmを測り、柱径は16~20cmとみられ、深さは29~48cmである。柱穴の埋土は黒褐色(2.5Y3/1)砂質シ

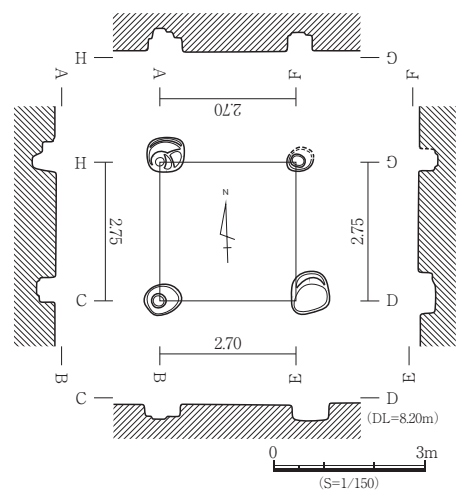


図3-201 SB-6042

1. VI区 (2) 古代

ルトであった。出土遺物には弥生土器14点、土師器17点、須恵器8点、土師質土器7点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-6043 (図3-202)

VI-2区東部、SB-6036の東隣で検出した桁行3間(6.30m)、梁行2間(4.50m)とみられる東西棟建物跡で、東西の妻柱真中の柱穴は未確認である。棟方向はN-72°21'-Eを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.80～2.55m(6.0～8.5尺)、梁行(南北)は2.25m(7.5尺)等間隔とみられる。柱穴の平面形は円形を呈するものも一部にはみられるが、ほぼ方形で、一辺58～71cmを中心に、一辺34～110cmを測り、柱径は17～25cmとみられ、深さは3～33cmである。柱穴の埋土は黒褐色(10YR3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器29点、土師質土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

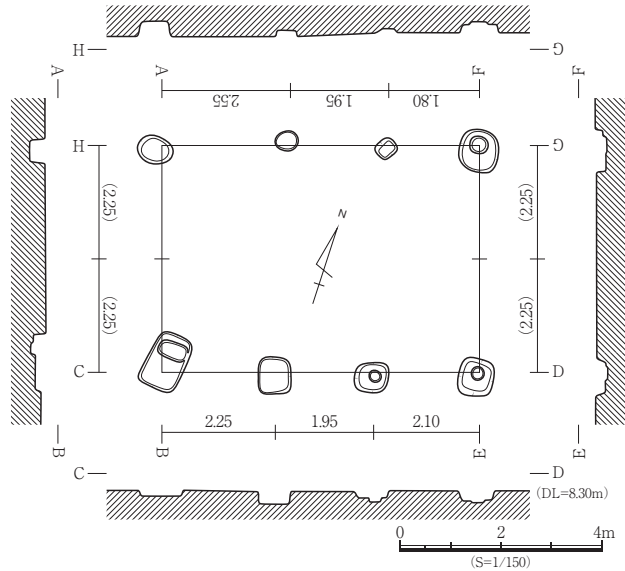


図3-202 SB-6043

SB-6044 (図3-203)

VI-2区東端部、SB-6040の西隣で検出した桁行2間(3.60m)、梁行1間(3.15m)の南北棟建物跡で、棟方向はN-7°8'-Wを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.35～2.25m(4.5～7.5尺)、梁行(東西)は3.15m(10.5尺)とみられる。柱穴の平面形は方形で、一辺71～87cmを中心に、一辺66～112cmを測り、柱径は12～28cmとみられ、深さは21～38cmである。柱穴の埋土は黒色(2.5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器16点、土師器2点、須恵器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

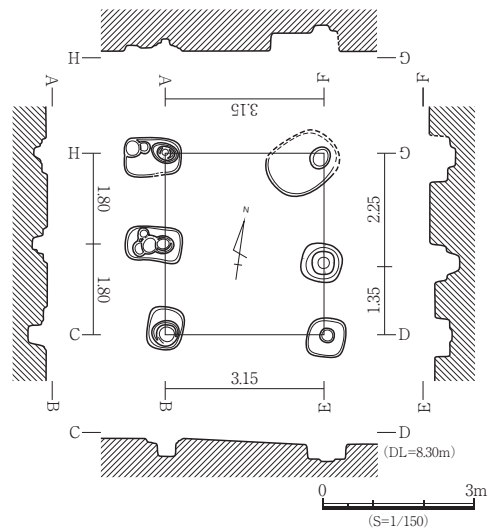


図3-203 SB-6044

SB-6045 (図3-204)

VI-2区東端部、SB-6044の南隣で検出した桁行4間(4.20m)、梁行2間(3.30m)の南北棟建物跡で、東側柱北から1間目の柱穴は未確認である。棟方向はN-30°32'-Wを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.05～1.65m(3.5～5.5尺)、梁行(東西)は1.50～1.80m(5.0～6.0尺)である。柱穴の平面形は円形を呈するものも一部にはみられるが、基本的にはほぼ方形で、一辺57～63cmを中心に、一辺45～72cmを測り、柱径は12～21cmとみられ、深さは3～60cmである。柱穴の埋土は黒色(2.5Y2/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器85点、土師質土器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-6046 (図3-205)

VI-2区北東部、SB-6043の東側で検出した桁行3間(3.90m)、梁行2間(3.30m)の東西棟建物跡で、南

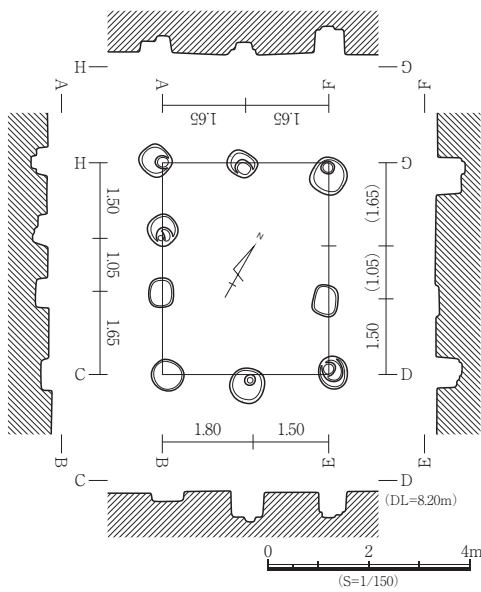


図3-204 SB-6045

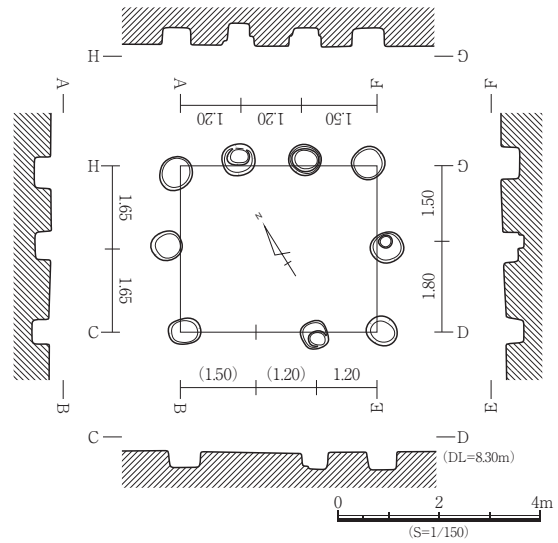


図3-205 SB-6046

側柱西から1間目の柱穴は未確認である。棟方向はN-58°24'-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.20m(4.0尺)・1.50m(5.0尺)、梁行(東西)は1.50~1.80m(5.0~6.0尺)である。柱穴の平面形は円形を呈するものも一定みられるが、その多くは方形を指向しており、一辺58~63cmを中心に、一辺50~66cmを測り、柱径は20~26cmとみられ、深さは29~43cmである。柱穴の埋土は黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器16点、土師器4点がみられたが、図示できるものはなかった。

② 塀・柵列跡

4列が復元できた。その多くが掘立柱建物に関連するものとみられる小規模なもので、建物群や一定の範囲を圍繞するようなものは確認できなかった。

SA-6008 (図3-206)

VI-1区南東部、SB-6027の西隣で検出した南北塀跡(N-12°41'-E)である。4間分(8.55m)を検出し、柱間寸法は1.95~2.40m(6.5~8.0尺)である。柱穴の平面形は円形を呈するものもみられるが、基本的に方形で、一辺73~84cmを中心に、62~102cmを測り、柱径は19~28cm、深さは36~62cmである。柱穴の埋土は黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器25点、土師器14点、須恵器6点、土師質土器6点がみられたが、図示できるものはなかった。

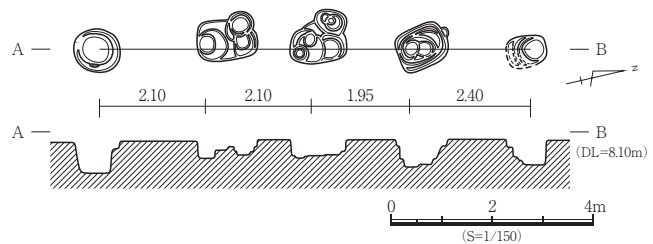


図3-206 SA-6008

柱穴の埋土は黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器25点、土師器14点、須恵器6点、土師質土器6点がみられたが、図示できるものはなかった。

SA-6009 (図3-207)

VI-1区北部、北壁際で検出した東西塀跡(N-80°50'-W)である。3間分(3.30m)を検出し、柱間寸法は0.90m(3.0尺)・1.50m(5.0尺)である。柱穴の平面形はほぼ



方形で、一辺57~64cmを中心に、54~74cmを測り、柱径は18~25cm、深さは47~67cmである。柱穴の埋土はオリーブ黒色(10Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器32点、土師質土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

図3-207 SA-6009

1. VI区 (2) 古代

SA-6010 (図3-208)

VI-1区南東部, SB-6039の南側で検出した東西堀跡(N-85°0'-W)で, 方向的にSB-6039に関連するものとみられる。4間分(8.25m)を検出し, 柱間寸法は1.80~2.40m(6.0~8.0尺)である。柱穴の平面形はほぼ方形で, 一辺49~64cmを中心に, 40~84cmを測り, 柱径は20cm前後で, 深さは23~69cm

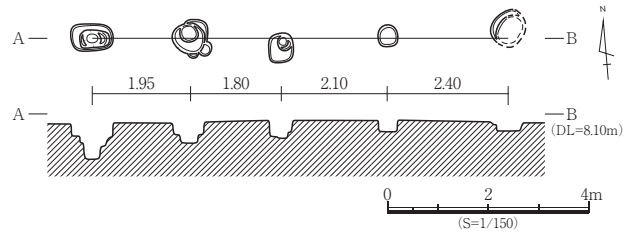


図3-208 SA-6010

である。柱穴の埋土は黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器13点, 土師器6点, 須恵器3点, 土師質土器101点, サヌカイト片1点(2.0g)がみられたが, 図示できるものはなかった。

SA-6011 (図3-209)

VI-1区南東部, SB-6039の北側で検出した東西堀跡(N-84°57'-W)で, 方向的にSB-6039に関連するものとみられる。3間分(6.90m)を検出し, 柱間寸法は2.25~2.40m(7.5~8.0尺)である。柱穴の平面形はほぼ方形で



図3-209 SA-6011

あるが, 中の2個は両端の柱穴より小型で一辺35~36cmを測るのに対し, 両端の柱穴は一辺57~75cmを測る。柱径は15cm前後とみられ, 深さは16~30cmである。柱穴の埋土はオリーブ黒色~黒褐色(5Y3/1~2.5Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器6点, 土師器2点, 土師質土器5点がみられたが, 図示できるものはなかった。

③ 土坑

SK-6059

VI-2区南東部, SB-6027の南側で検出した舟形の土坑で, 西端を中世の溝跡(SD-6010)に掘り込まれる。長辺5.84m以上, 短辺1.04m, 深さ16cmを測り, 長軸方向はN-82°-Wを示す。断面形は舟底形を呈し, 底面はやや西に傾斜する。埋土は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器39点, 土師器1点, 須恵器4点, 土師質土器11点がみられ, 須恵器1点(6762)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-212 6762)

杯身で, 内底面は摩滅しており, 硯に転用されたものとみられる。高台の外側には回転ヘラ削りの痕が残り, 高台周辺はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整され, 切り離しは不明となる。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

SK-6060

VI-2区南東部, SB-6029の北東隅柱の柱穴を切った形で検出した不整形の土坑である。長辺1.83m, 短辺0.75m, 深さ19cmを測り, 長軸方向はN-10°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器16点, 土師器2点, 須恵器6点, 土師質土器3点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-6061

VI-2区南東部, SB-6030の東側柱南から2間目の柱穴を切った形で検出した舟形の土坑である。長辺3.71m, 短辺0.60m, 深さ17cmを測り, 長軸方向はN-84°-Wを示す。断面形は逆台形を呈し, 東側に楕円形状の落ち込みがみられる。埋土は基本的に黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトで, 地山のブロッ

クを含む度合いで2層に分層される。出土遺物には弥生土器3点、土師器1点、須恵器3点、土師質土器14点がみられ、土師器1点(6763)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-212 6763)

皿で、口縁部が平らな底部から斜め上方に短く伸び、端部を丸く仕上げる。口縁部内側には折込みの痕跡は認められない。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

SK-6062

VI-2区南東部、SB-6029とSB-6030の間で検出した方形の土坑である。長辺2.72m、短辺1.58m、深さ35cmを測り、長軸方向はN-2°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(2.5Y3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器11点、土師器4点、須恵器44点、土師質土器14点がみられ、須恵器1点(6764)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-212 6764)

台付壺で、外面下端には回転ヘラ削りが施され、底部外面端部に高さ0.8cmの高台が付く。外底面はナデ調整され、底部の切り離しは不明である。胎土には細粒砂から粗粒砂と黒色粒を比較的多く含む。

SK-6063

VI-2区南東端部、SB-6032と重複した形で検出した舟形の土坑である。長辺6.05m以上、短辺0.61m、深さ56cmを測り、長軸方向はN-78°-Wを示す。断面形はU字形を呈する。埋土は黒褐色(2.5Y3/1~3/2)砂質シルトで2層に分層される。出土遺物には弥生土器11点、土師器4点、須恵器6点、土師質土器15点、サヌカイト片1点(2.7g)がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-6064

VI-2区南端部、SB-6033の北東側で検出した溝状の土坑である。長辺3.59m、短辺0.28m、深さ19cmを測り、長軸方向はN-78°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土はオリーブ黒色(7.5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器55点がみられ、内1点(6765)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-212 6765)

甕で、口縁部は外反し、貼付口縁となり、外面には指頭圧痕が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SK-6065

VI-2区南端部、SR-6003と重複する形で検出した浅い隅丸方形の土坑で、南側は調査区外に延びる。長辺2.01m以上、短辺1.42m、深さ5cmを測り、長軸方向はN-7°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器7点、須恵器12点、土師質土器5点、灰釉陶器1点がみられ、灰釉陶器1点(6766)が掲載できた。

出土遺物

灰釉陶器(図版72 6766)

皿とみられるもので、外面には回転ヘラ削りが施される。胎土は精良で、極細粒砂から中粒砂を若干含む。

SK-6066

VI-2区南部, SD-6008の東側で検出した円形の土坑である。長径2.65m, 短径2.44m, 深さ11cmを測り, 断面形は概ね逆台形を呈する。埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器18点, 土師器2点, 須恵器1点, サヌカイト片1点(1.4g)がみられ, 弥生土器2点(6767・6768)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-212 6767・6768)

いずれも壺で, 6767は外傾して立ち上がる頸部から口縁部がさらに外傾するもので, 貼付口縁となり外面にはヘラ状工具による斜格子文を施した上で, 棒状浮文を貼付する。口縁部外面の施文の下には粘土帯を貼付した際の爪痕がみられる。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。6768は, 口縁部が外傾し, 端部上端を拡張したもので, 内面には指ナデ調整とヘラナデ調整, 外面には指押えとナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

SK-6067

VI-2区南部, SK-6066の東側で検出した楕円形の土坑である。長径1.80m, 短径1.40m, 深さ5cmを測り, 長軸方向はN-4°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器29点, 土師器1点, 土師質土器1点がみられ, 弥生土器1点(6769)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-212 6769)

甕で, 口頸部は胴部から外反して立ち上がり, 口縁部は粘土帯を外側に貼って(貼付口縁)肥厚し, 端部下端にハケ状工具で刻目を施す。口縁部外面には指頭圧痕が残り, 頸部外面下端には微隆起突帯を作り出し, 下にクシ描直線文を施した上で, 棒状浮文を貼付する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

SK-6068 (図3-210)

VI-2区南部, SK-6067の南側で検出した不整円形の土坑である。長径1.66m, 短径1.42m, 深さ15cmを測り, 長軸方向はN-26°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は2層に分層され, 上層は黒褐色(10YR3/1)シルト質砂, 下層が黒色(2.5Y2/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-6069 (図3-211)

VI-2区南東部, SB-6028の東側柱北から2間目の柱穴を切った形で検出した不整形の土坑である。長辺2.38m, 短辺0.88m, 深さ10cmを測り, 長軸方向はN-75°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒色(10YR2/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器18点, 土師器90点, 須恵器3点, 土師質土器2点, 黒色土器2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-6070

VI-2区南東部, SB-6028の北東隅柱と北妻柱から2間目の柱穴を切った形で検出した不整円形の

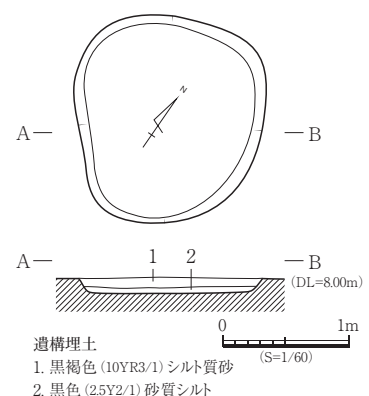


図3-210 SK-6068

土坑である。長径3.35m，短径3.00m，深さ14cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土はオリブ黒色(7.5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器37点，土師器2点，須恵器2点がみられ，弥生土器1点(6770)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-212 6770)

甕で，口縁部は外反し，貼付口縁となった口縁端部下端にはヘラ状工具による刻目，その下には2条の微隆起突帯をヨコナデ調整で作り出す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

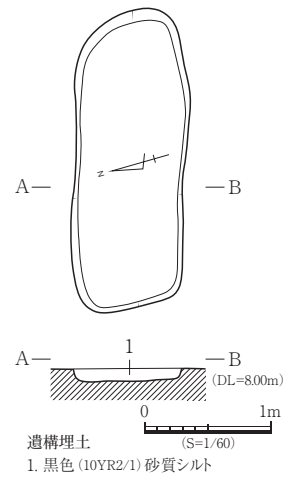


図3-211 SK-6069

SK-6071

VI-2区南東部，SB-6028の北側で検出した溝状の土坑である。長辺約3.20m，短辺0.34m，深さ9cmを測り，長軸方向はN-75°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器35点，土師器2点，須恵器3点，土師質土器17点がみられ，土師器2点(6771・6772)と土師質土器1点(6773)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-212 6771・6772)

いずれも皿で，6771は口縁部が体部から外傾するもので，端部は丸い。6772は口縁部が体部から屈曲し，端部内側を折込む。いずれも胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

土師質土器(図3-212 6773)

杯で，成形はA技法となり，底部は回転ヘラ切りで切り離され，ベタ高台風となる。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

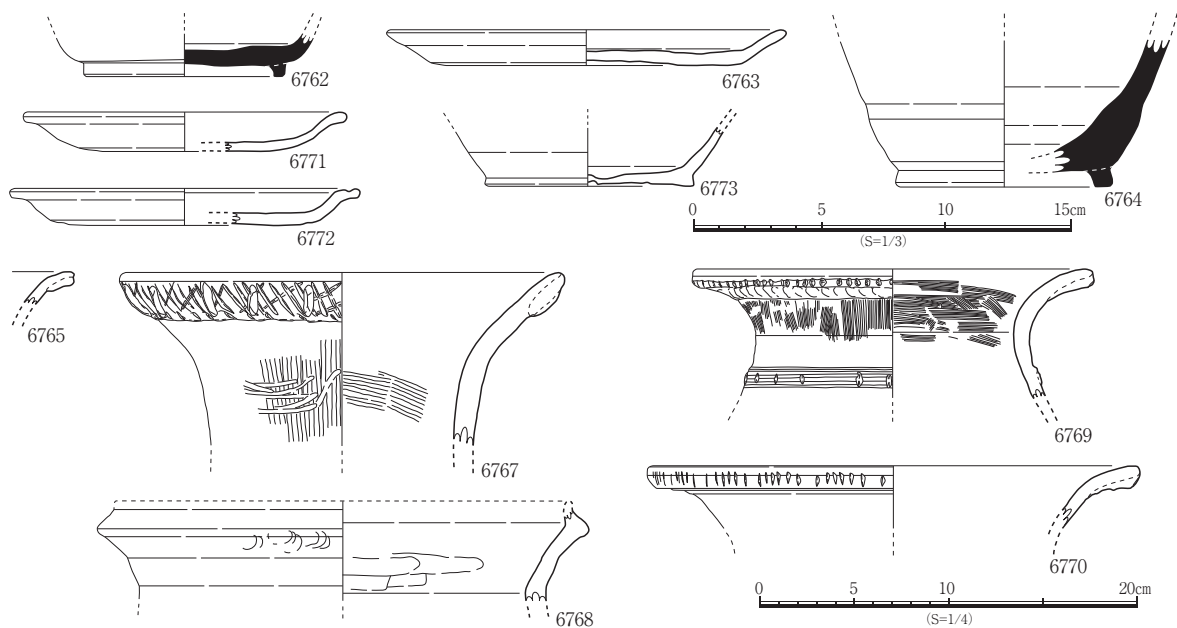


図3-212 SK-6059・6061・6062・6064～6067・6070・6071出土遺物実測図

SK-6072 (図3-213)

VI-2区南東部, SB-6027の北西隅柱の柱穴とSA-6008の北端の柱穴を切った形で検出した不整形の土坑で, 土師質土器が纏まって出土しており, 廃棄土坑とみられる。長辺1.28m, 短辺1.20m, 深さ44cmを測り, 長軸方向はN-63°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には土師器60点, 須恵器22点, 土師質土器1,117点, 黒色土器3点, 緑釉陶器・土製品・鉄製品各1点, サヌカイト片1点(0.6g)がみられ, 土師器1点(6774), 土師質土器37点(6775~6811), 黒色土器1点(6812), 緑釉陶器1点(6813)が図示できた。

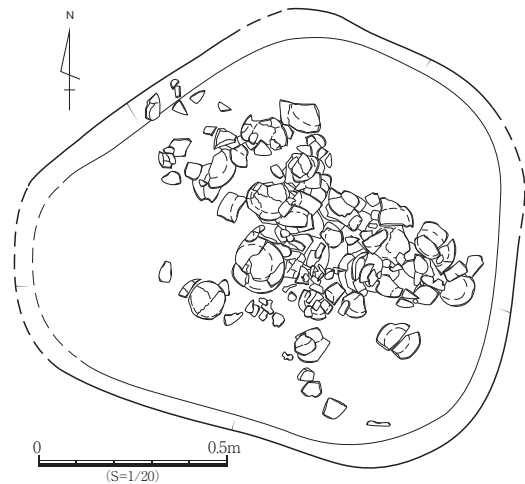


図3-213 SK-6072遺物出土状態

出土遺物

土師器(図3-214 6774)

皿で, 器高指数は9.5となり, 口縁端部内側は小さな折込みとなる。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

土師質土器(図3-214・215 6775~6811)

6775・6776は杯蓋で, 成形はいずれもA技法となる。6775は, 口縁部が平らな天井部から斜め外方に下り, 端部を下方に屈曲さすもので, 器面の調整は回転ナデ調整となり, 胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。6776は, 口縁部が平らな天井部から外下方に屈曲するもので, 端部は丸い。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

6777~6799は杯で, 成形はいずれもA技法となり, 口縁端部を丸く仕上げるが, 内側に折込みの痕跡が認められるもの(6791・6797)もある。器面が摩耗するものもみられるが, 調整は基本的に同じで, 器面に回転ナデ調整を施した上で, 内底面にナデ調整を加え, 成形時の粘土帯の高まりを消し, 回転ヘラ切りで底部を切り離す。さらに, 6784にはナデ調整を加えられ, 6794には板状圧痕が残存する。また, 器高指数が30以下の底部が浅いもの(6777~6793)(注:口縁部が欠損し, 器高が不明なものもあるが, 底径と残存部の形状から器高指数は30以下とみられる。)と30以上の底部が深いもの(6794~6796)とがある。胎土は全般に精良で, 細粒砂から中粒砂を若干含むもの(6788), 細粒砂から中粒砂を少し含むもの(6780・6782~6785・6793・6794), 細粒砂から粗粒砂を少し含むもの(6777・6778・6781・6789~6791・6796~6799), 細粒砂から極粗粒砂を少し含むもの(6779・6786・6787・6792・6795)がみられた。

6800は椀で, 成形はA技法となり, 底部外面端部にハの字形に開く高さ1.3cmの高台が付く。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6801~6811は皿で, 成形はいずれもA技法となり, 口縁端部を丸く仕上げるが, 内側に折込みの痕跡が認められるもの(6801)もある。器面が摩耗するものもみられるが, 調整は杯と同じで, 器面に回転ナデ調整を施した上で, 内底面にナデ調整を加え, 成形時の粘土帯の高まりを消し, 回転ヘラ切りで底部を切り離す。さらに, ヘラ磨きを加えるもの(6801)やナデ調整を加えるもの(6803)がみられる。また, 器高指数は11.2~18.9と幅がみられる。胎土は全般に精良で, 細粒砂から中粒砂を少し含むもの(6802・6803), 細粒砂から粗粒砂を少し含むもの(6801・6804・6806・6809・6810), 細粒砂から極粗

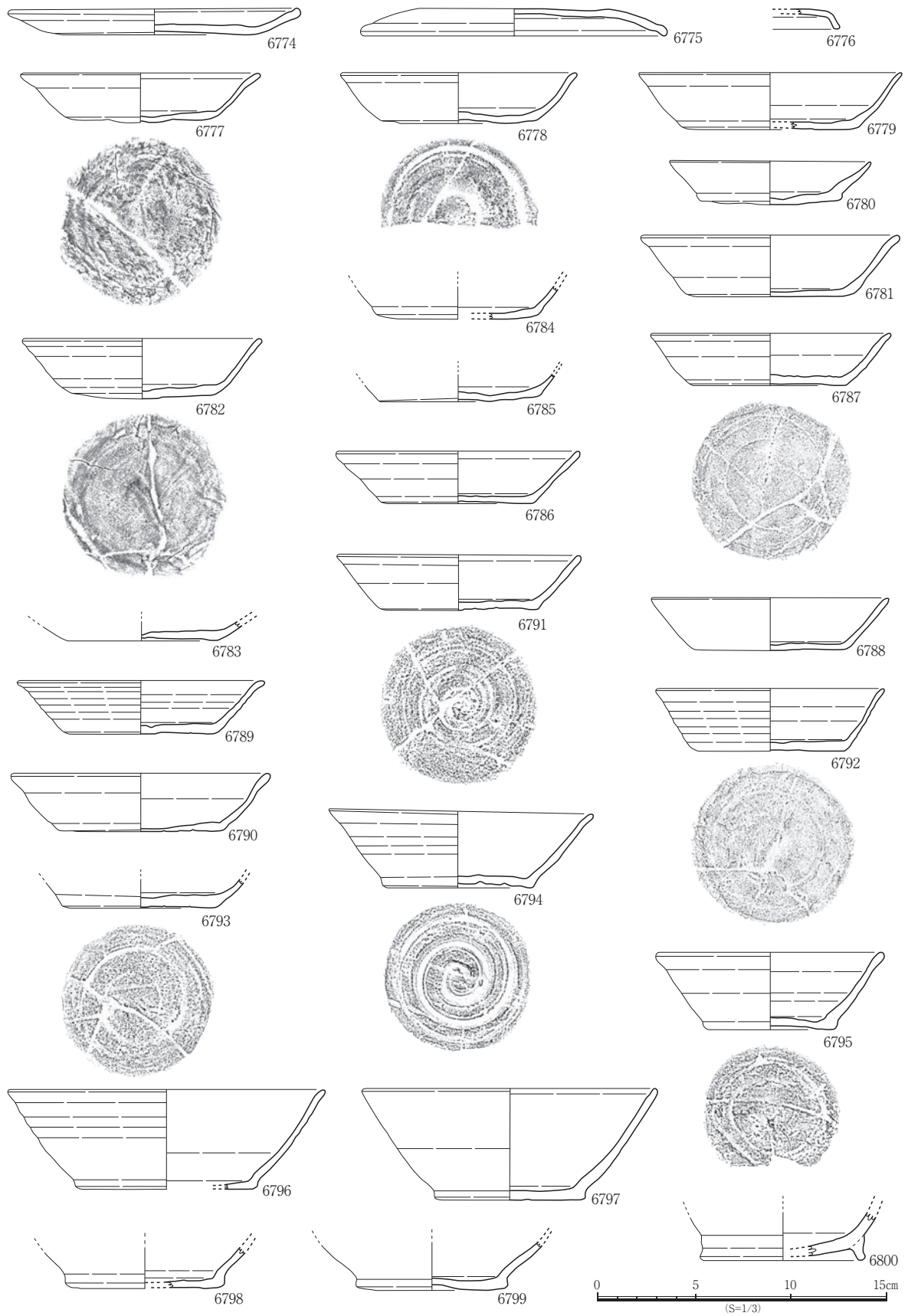


図3-214 SK-6072出土遺物実測図1

1. VI区 (2) 古代

粒砂を少し含むもの(6805・6807・6808), 細粒砂から中粒砂を比較的多く含むもの(6811)がみられた。

黒色土器(図3-215 6812)

椀で, 平らな底部外面端部にはかまぼこ状の高台が付き, 体部は内湾気味に上がる。内面にはヨコ方向のヘラ磨きが施される。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

緑釉陶器(図3-215 6813)

軟質系の皿で, 底部は削り出し高台となり, 口縁部は内湾気味に上がり, 端部を丸く仕上げる。器面は外面を中心に摩耗と摩滅が著しい。胎土は精良で, 極細粒砂から細粒砂を若干含む。

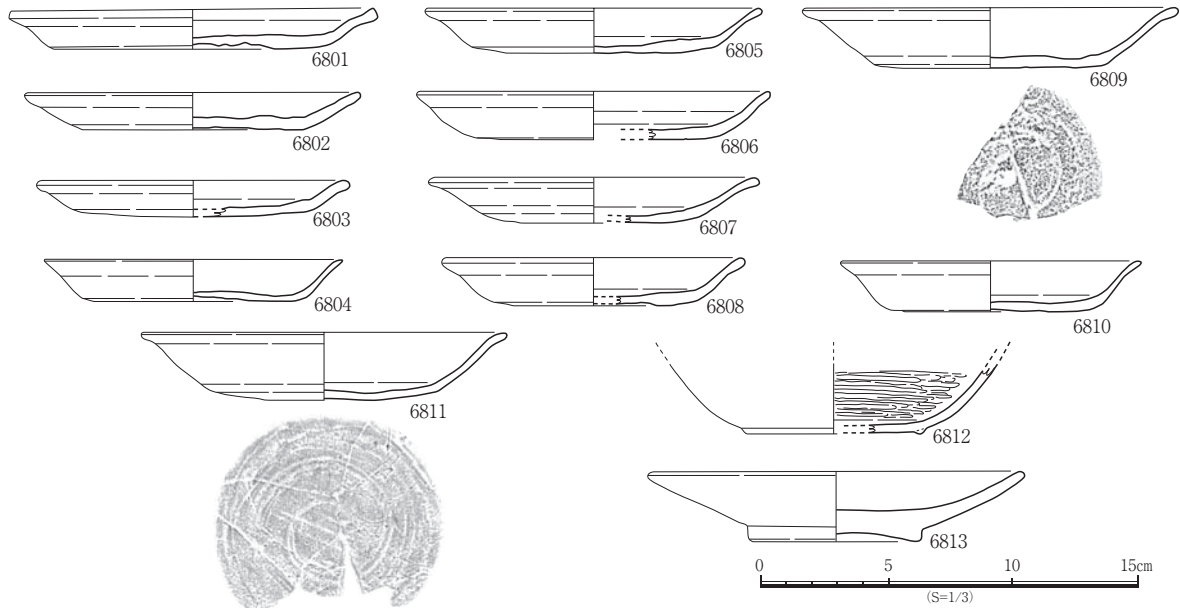


図3-215 SK-6072出土遺物実測図2

SK-6073

VI-2区南東部, SB-6027の北側柱西から1間目の柱穴を切った形で検出した方形の土坑である。長辺2.25m, 短辺2.12m, 深さ26cmを測り, 長軸方向はN-11°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は上下2層に分層され, 上層が黒褐色(10YR3/2)シルト質砂, 下層が黒褐色(10YR3/2)砂であった。出土遺物には弥生土器34点, 土師器6点, 須恵器24点, 土師質土器48点, 黒色土器1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-6074

VI-2区南東部, SB-6027の北側で検出した不整形の土坑である。長辺2.12m, 短辺1.73m, 深さ13cmを測り, 長軸方向はN-42°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器34点, 土師器2点, 須恵器14点, 土師質土器25点, 石製品4点がみられ, 石製品2点(6814・6815)が図示できた。

出土遺物

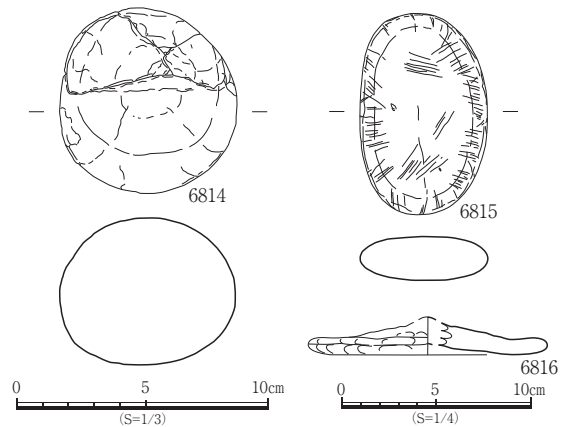


図3-216 SK-6074・6075出土遺物実測図

石製品(図3-216 6814・6815)

6814は投弾とみられるものであるが、388.3gと大型である。

6815は扁平な磨石で、縁辺を中心に擦痕が目立つ。

SK-6075(図3-217)

VI-2区東部、SB-6036の南隣で検出した不整形の土坑である。長辺2.29m、短辺1.08m、深さ21cmを測り、長軸方向はN-4°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は上下2層に分層され、上層が黒褐色(2.5Y3/1)シルト質砂、下層がオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質砂であった。出土遺物には弥生土器26点、土師器1点、土師質土器1点がみられ、弥生土器1点(6816)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-216 6816)

平たい蓋で、天井部がやや盛り上がり、口縁部がやや反り、端部は丸い。胎土には粗粒砂を中心に細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

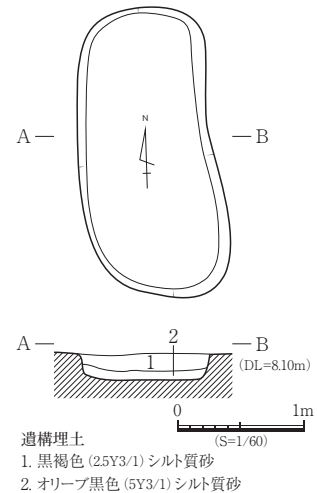


図3-217 SK-6075

SK-6076(図3-218)

VI-2区東部、SB-6036の南側柱東から1間目の柱穴を切った形で検出した方形の土坑である。長辺2.15m、短辺1.15m、深さ19cmを測り、長軸方向はN-8°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)シルト質砂であった。出土遺物には須恵器3点、土師質土器11点、灰釉陶器1点がみられ、灰釉陶器1点(6817)が掲載できた。

出土遺物

灰釉陶器(図版73 6817)

皿とみられるもので、内面のみに灰釉が施釉される。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

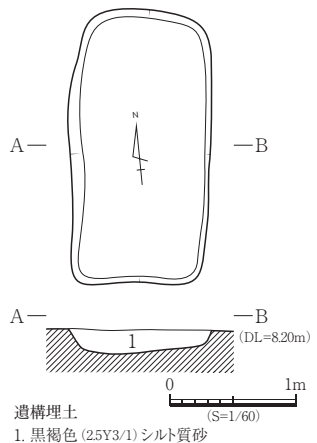


図3-218 SK-6076

SK-6077

VI-2区北東部、SD-6008に掘り込まれた形で検出した不整形の土坑である。長辺1.49m、短辺約1.45m、深さ6cmを測り、長軸方向はN-6°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/1)砂質シルトであった。遺物は出土しなかった。

SK-6078

VI-2区中央部北寄り、SD-6008の南側で検出した不整形の土坑である。長辺3.51m、短辺2.00m、深さ14cmを測り、長軸方向はN-4°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は中礫を含む黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器6点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-6079

VI-2区北部、SD-6008のコーナー部を切った形で検出した不整形の土坑である。長辺3.24m、短辺2.15m、深さ12cmを測り、長軸方向はN-45°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は中粒～粗粒中礫を僅かに含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器11点、土師器5点、須恵器46点、土師質土器36点、緑釉陶器・灰釉陶器各1点、石製品2点、サヌカイト片4点(3.7g)、チャー

1. VI区 (2) 古代

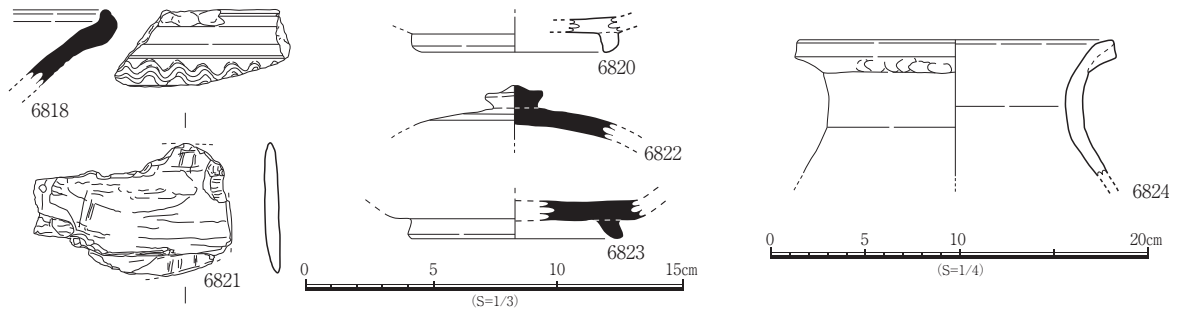


図3-219 SK-6079・6080・6083出土遺物実測図

ト片1点がみられ、須恵器1点(6818)、緑釉陶器1点(6819)、灰釉陶器1点(6820)、石製品1点(6821)が掲載できた。

出土遺物

須恵器(図3-219 6818)

甕で、口縁部は外傾し、外面には波状文を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

緑釉陶器(図版73 6819)

碗とみられるもので、硬質系で外面には回転ヘラ削りが施され、全面に緑釉を施釉する。胎土には極粗粒砂と中粒砂を若干含む。

灰釉陶器(図3-219 6820)

碗で、底部外端には定型化する以前の三日月高台が付く。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

石製品(図3-219 6821)

サヌカイト製の石庖丁で、挟りが1ヵ所残る。全面を研磨し、刃部長は9.0cm前後であったものとみられる。

SK-6080

VI-2区北部、SK-6079の北側で検出した不整形の土坑である。長辺0.94m、短辺0.92m、深さ19cmを測り、長軸方向はN-45°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土はオリブ黒色(5Y3/1)シルト質砂であった。出土遺物には弥生土器3点、土師器2点、須恵器5点がみられ、須恵器2点(6822・6823)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-219 6822・6823)

6822は杯蓋で、丸味のある天井部には擬宝珠形のつまみが付く。胎土には白色細粒砂か中粒砂を少し含む。

6823は杯身で、底部外端部より内側に高さ0.8cmの高台が付く。胎土には白色細粒砂から中粒砂を少し含む。

SK-6081

VI-2区北部、SB-6038とSB-6042の間で検出した不整形の土坑である。長径1.64m、短径1.57m、深さ8cmを測り、断面形は逆台形を呈する。埋土はオリブ黒色(5Y3/1)砂質シルトであった。遺物は出土していない。

SK-6082(図3-220)

VI-2区北部、SB-6042の北東隅柱の柱穴を切った形で検出した不整形

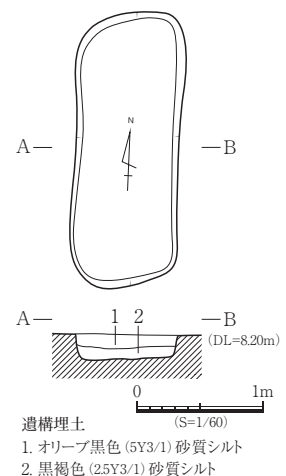


図3-220 SK-6082

形の土坑である。長辺2.12m，短辺0.88m，深さ23cmを測り，長軸方向はN-1°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は上下2層に分層され，上層がオリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルト，下層が黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器3点，土師器2点，須恵器1点がみられたが，図示できるものはなかった。

SK-6083 (図3-221)

VI-2区北部，SB-6037と重複した形で検出した舟形の土坑である。長辺2.51m，短辺0.62m，深さ13cmを測り，長軸方向はN-45°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は上下2層に分層され，上層が黒色(7.5Y2/1)粘土質シルト，下層はオリーブ黒色(10Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器11点，須恵器1点，土師質土器2点がみられ，弥生土器1点(6824)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-219 6824)

壺で，口縁部がほぼ直立する頸部から外傾し，口縁部は貼付口縁となり，外面には指頭圧痕が残存する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

SK-6084 (図3-222)

VI-2区北東部，SD-6008の北側で検出した方形の土坑である。長辺2.41m，短辺1.64m，深さ31cmを測り，長軸方向はN-51°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は上下2層に分層され，上層が地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/2)シルト質砂，下層がオリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質砂であった。出土遺物には弥生土器2点，土師器2点，須恵器3点，土師質土器3点がみられたが，図示できるものはなかった。

④ 溝跡

7条を確認した。いずれも直線的に設置されており，規格性が看取され，その多くが，後述する道路遺構の方向に則っており，建物跡とも密接に関係するものと考えられる。ただし，SD-6009のみ建物群を斜めに横切っており，他の溝跡とは性格を異にするものと思われる。

SD-6003 (図3-223)

VI-2区西端部で検出された道路遺構(SR-6001)の西側の側溝からVI-1区北部にかけて検出された東西溝で，さらに西の調査区外に延びる。南側のSD-6004と並走した形となっており，道路遺構の側溝とも考えられなくはないが，幅が0.5m前後と溝幅に比べ短く，ここでは溝跡として報告する。

検出長は23.10m，幅は0.35～0.55m，深さは8～25cmを測り，断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は東(7.571m)から西(7.507m)に向って傾斜し，主軸方向は西北西(N-74°-W)に向かって真直ぐ延びる。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器7点，須恵器3点，土師質土器11点，石製品1点がみられたが，図示できるものはなかった。

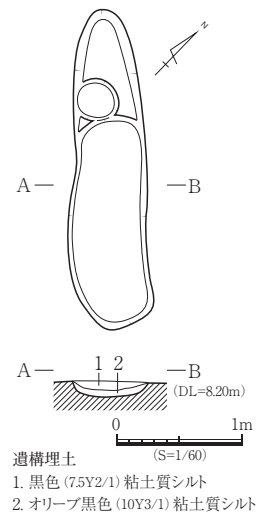


図3-221 SK-6083

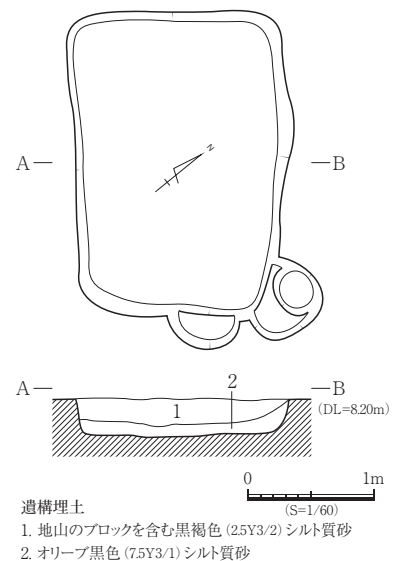


図3-222 SK-6084

1. VI区 (2) 古代

SD-6004 (図3-223)

SD-6003の南隣で、並走した形で検出した東西溝で、VI-2区西端部で検出された道路遺構(SR-6001)の西側からVI-1区北部に延び、さらに西の調査区外に続く。検出長は21.60m、幅は0.58~0.84m、深さは4~13cmを測り、断面形は舟底形ないし逆台形を呈する。基底面は東(7.657m)から西(7.550m)に向って傾斜し、主軸方向は西北西(N-74°-W)に向かって真直ぐ延びる。東側の底面は二段掘りのような形状となる。埋土はSD-6003と同じ地山のブロックを含む黒褐色(25Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-6005 (図3-223)

VI-2区南西部、道路遺構(SR-6002)に切られた形で検出された短い南北溝である。全長は約10.00mとみられ、検出幅は0.58~1.20m、深さは4~13cmを測り、断面形は概ね舟底形を呈する。基底面は北(7.628m)から南(7.607m)に向って傾斜し、主軸方向は南(N-175°-W)に向かって緩やかなカーブを描き延びる。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器3点、須恵器1点、土師質土器5点、瓦1点がみられ、土師質土器1点(6825)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-224 6825)

椀で、成形はB技法となり、底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が一部に残存する。胎土は精良で、極細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

SD-6006 (図3-223)

VI-2区中央部、道路遺構(SR-6003)の道部分で検出された細長い南北溝で、2ヵ所で途切れ、2本目が鍵状に曲がっているが、検出状況から1本の溝跡であったとみられる。検出長は28.33mで、全長は45.12m以上とみられ、幅0.18~0.41m、深さは3~12cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は北(7.884m)から南(7.750m)に向って傾斜し、主軸方向は南(N-169°-W)に真直ぐ延びる。埋土はオリーブ黒色(10Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器14点、土師器1点、須恵器1点、土師質土器7点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-6007

VI-2区北東部で検出された南北溝で、南北とも調査区外に続く。検出長は4.51m、幅は0.52~0.92m、深さは4~12cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は北(8.032m)から南(7.999m)に向って傾斜し、主軸方向は南南東(N-157°-E)にほぼ真直ぐ延びる。埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質砂であった。出土遺物には弥生土器9点、土師器11点、須恵器9点、土師質土器6点がみられ、土師器1点(6826)が図示できた。

出土遺物

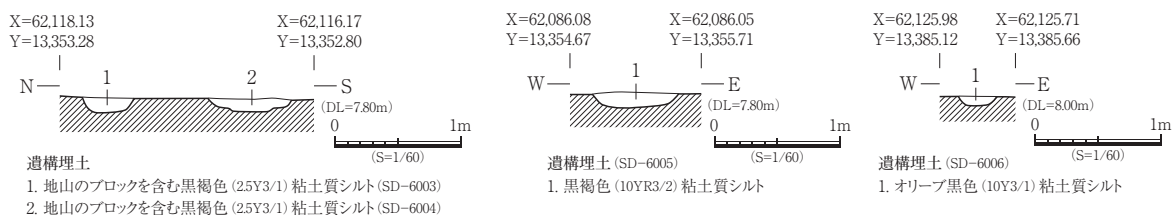


図3-223 SD-6003~6006

土師器(図3-224 6826)

皿で、成形は左手手法となり、底部はヘラ切りで、全面にヘラ磨きを施す。口縁端部内側は折込みとなる。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

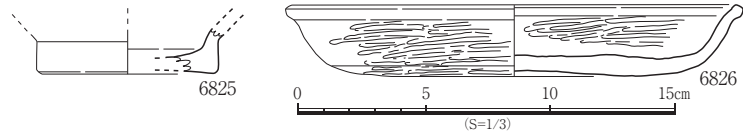


図3-224 SD-6005・6007出土遺物実測図

SD-6008 (図3-225)

VI-2区北東部から南部にかけて検出したL字形を呈する区画溝で、2条に分かれる部分があり、掘返しが行われたものとみられ、それぞれ調査区外に延びる。特に、南北に延びる西側で掘返し跡が顕著で、僅かではあるが西側に拡張されている。検出長は96.69m、幅は0.46~1.16m、深さは11~37cmを測り、断面形はU字形ないし逆台形を呈する。基底面は東(7.785m)から西(7.720m)、そして南(7.651m)に向って傾斜し、主軸方向は西(N-97°-W)に向かって真直ぐ延びた後、屈曲して南南西(N-167°-W)を向く。埋土は概ね上下2層に分層され、上層が地山のブロックを含むオリブ黒色(5Y3/2)粘土質シルト、下層が黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器357点、土師器30点、須恵器120点、土師質土器45点、緑釉陶器2点、土製品1点がみられ、弥生土器1点(6827)、土師器1点(6828)、須恵器11点(6829~6839)、緑釉陶器2点(6840・6841)、土製品1点(6842)が掲載できた。

出土遺物

弥生土器(図3-226 6827)

高杯で、口縁部は内湾する体部から直立し、端部は平面となる。外面には上からヘラ状工具による刻目、円形浮文、ヘラ状工具で頂部に刻目を施した作り出し微隆起突帯5条、その間にクシ描直線文を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

土師器(図3-226 6828)

杯身で、成形は左手手法となる。底部外端部には高さ0.9cmのハの字形に開く高台が付き、口縁部は底部から外上方に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。内面にはほぼ全面にヘラ磨きが施される。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

須恵器(図3-226 6829~6839)

6829~6833は、高台が付く杯身で、摩耗するものもみられるが、調整は基本的に、器面に回転ナデ調整を施した上で、内底面にナデ調整を加え、輪高台周辺はヨコナデ調整を施す。底部の切り離しは回転ヘラ切りとなる。6829は底部外端部に高さ0.8cmのハの字形に開く高台が付き、口縁部は底部か

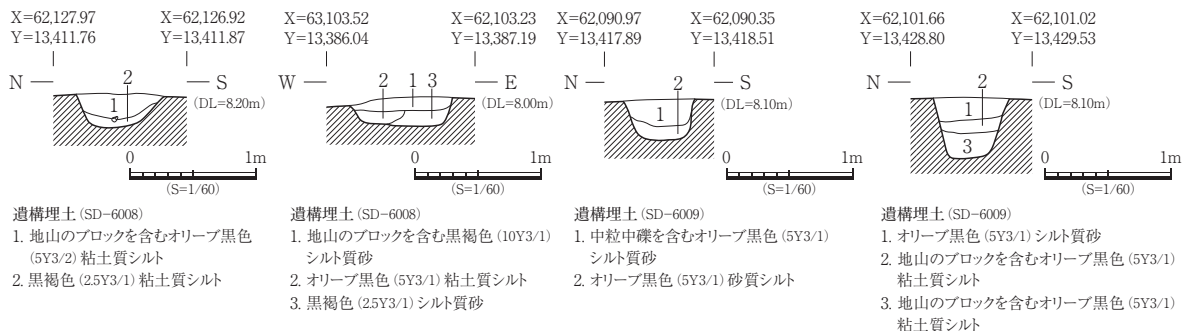


図3-225 SD-6008・6009

1. VI区 (2) 古代

ら外上方に立ち上がり、端部内側を折込む。6830は、口縁部が底部から内湾気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。6831は底部の切り離しの後にナデ調整を加える。それ以外は、切り離しのままである。胎土には、6829・6831が細粒砂から極粗粒砂を少し、6830が白色細粒砂から極粗粒砂を比較的多く、6832・6833が細粒砂から粗粒砂を少し含む。

6834は杯で、輪高台は付かない。底部の切り離しはヘラ起こしとなり、胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

6835～6838は壺である。6835は長頸壺で、口頸部は外反し立ち上がり、端部は丸い。外面には2条の凹線が巡る。胎土には白色細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。6836も長頸壺とみられるが、口頸

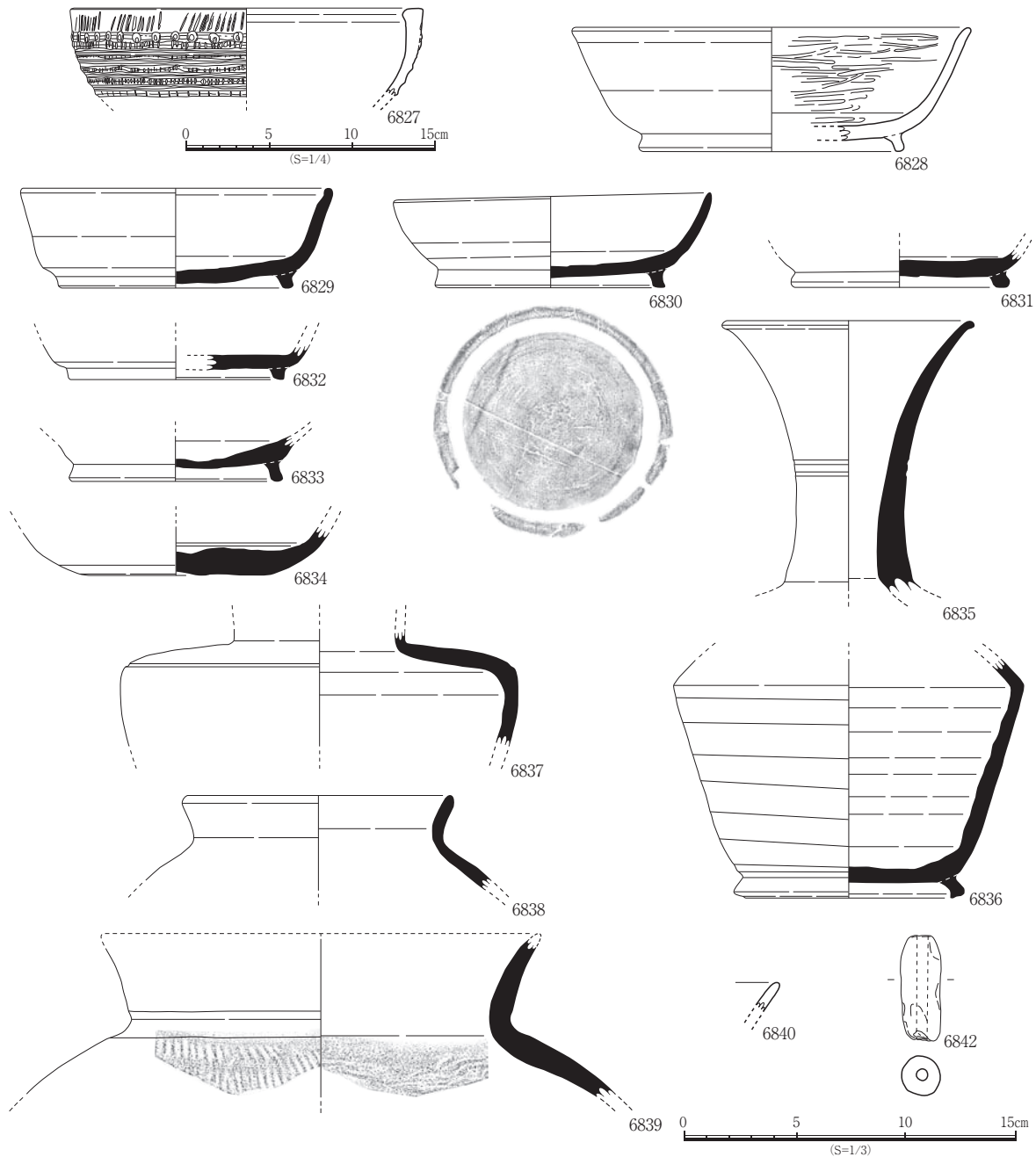


図3-226 SD-6008出土遺物実測図

部は欠損する。平らな底部外端部にはハの字形に開く高さ1.0cmの高台が付き、胴部は外上方に立ち上がった後、肩部で内傾して延びる。胴部外面中位より下に回転ヘラ削り、高台周辺にヨコナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りで、ナデ調整を加える。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。6837・6838は短頸壺とみられ、6837は肩が張り、屈曲部に1条の凹線が巡る。6838は、口縁部が胴部から短く外傾する。胎土には、いずれも細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

6839は甕で、口頸部は胴部から短く外反する。胴部内面には同心円文のタタキ目、外面には平行のタタキ目が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

緑釉陶器(図3-226 6840, 図版73 6841)

いずれも硬質系の椀で、器面は回転ナデ調整となる。いずれも器面には緑釉が施釉されるが、6840は剥落が目立ち、一部にその痕跡を留めるのみである。胎土はいずれも精良で、極細粒砂から中粒砂を若干含む。

土製品(図3-226 6842)

円筒形の土錘で、表面には指押えとナデ調整を施す。

SD-6009(図3-225)

VI-2区南東部で検出した調査区を斜めに横切る東西溝で、それぞれ調査区外に延びる。検出長は40.94m、幅は0.45～0.84m、深さは16～52cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は西(7.693m)から東(7.531m)に向って傾斜し、主軸方向は北東(N-46°-E)に向かって真直ぐ延びる。埋土は概ね上下2層に分層され、上層がオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質砂、下層が地山のブロックを含むオリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器216点、土師器5点、須恵器14点、土師質土器10点、石製品1点がみられ、須恵器2点(6843・6844)、石製品1点(6845)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-227 6843・6844)

6843は壺の蓋とみられるもので、天井部は丸味があり、口縁部は真下を向き、端部は丸い。天井部外面約1/2に回転ヘラ削りを施す。胎土には細粒砂から粗粒砂、黒色粒を比較的多く含む。

6844は甕で、口頸部は丸味のある胴部から外傾する。胴部内面には同心円文のタタキ目が残存する。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

石製品(図3-227 6845)

河原石を使用した砥石で、上面と側面2カ所に使用痕が残存する。

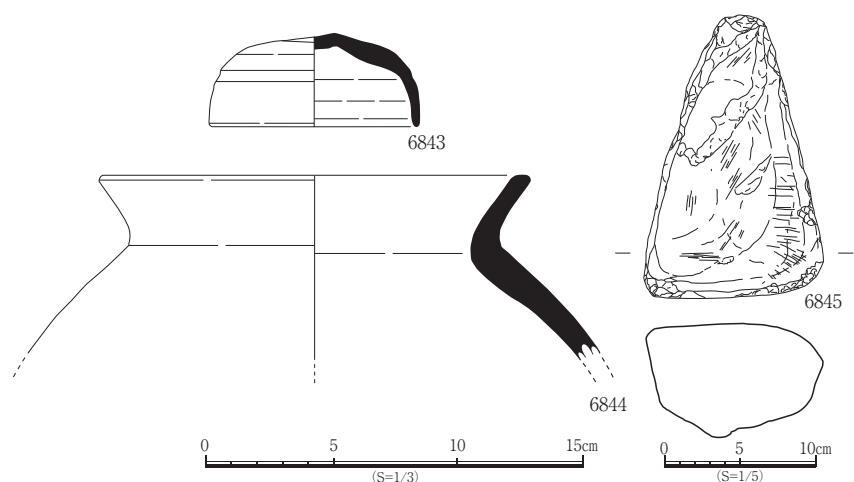


図3-227 SD-6009出土遺物実測図

⑤ 道路遺構

溝跡が並走することからそれらを側溝と考え、道路遺構と判断したものが3本ある。いずれも南北方向に設置されたもので、重複関係はないものの僅かに方向が異なる。この内、SR-6002は他の2本に比べ、側溝の掘方がしっかりしており、長期間使用されたものとみられる。

SR-6001 (図3-228)

VI-2区北西部で検出した道路遺構で、道幅(両側溝の芯々寸法)は約4.00m、溝幅は2.10～3.00mを測り、北側はさらに調査区外に続くが、南側は調査区途中で消滅する。西側の側溝は途切れるものの延長33.14m、幅0.60～0.82m、深さ3～18cmを測る。一方、東側には部分的に溝状をなす部分もみられるが、その多くは東西方向の掘削痕跡と考えられる楕円形状の浅い落ち込みが南北に並んだもので、側溝とは即断できないかもしれないが、西側の溝跡との位置関係から側溝と判断した。なお、東側は延長31.22m、幅0.50～1.23m、深さ6～18cmを測る。側溝の基底面は北(7.798～7.819m)から南(7.580～7.675m)に傾斜しており、主軸方向は南南西(N-165°-W)を向く。側溝の断面形は舟底形ないし逆台形を呈する。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器6点、土師器3点、須恵器5点、土師質土器25点、石製品2点、サヌカイト片2点(0.4g)がみられ、石製品1点(6846)が図示できた。

出土遺物

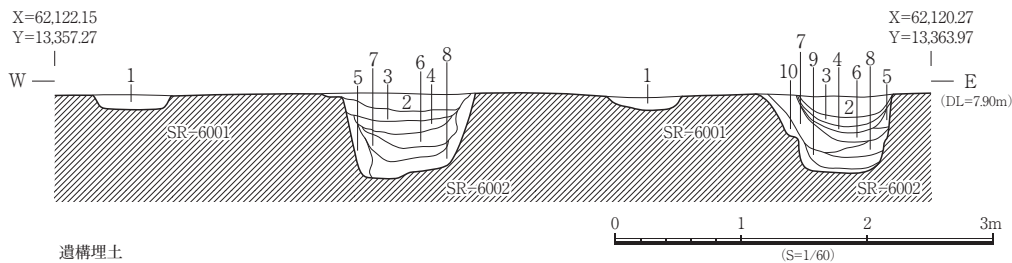
石製品(図3-229 6846)

扁平な叩石で、片面中央と側面に敲打痕が残存する。

SR-6002 (図3-228)

VI-2区北西部で検出した道路遺構で、道幅(両側溝の芯々寸法)は約3.40～4.00m、溝幅は2.30～3.00mを測り、南北ともさらに調査区外に続く。側溝は、西側が検出長60.55m、幅0.42～1.08m、深さ28～73cmを測り、東側が検出長62.62m、幅0.87～1.35m、深さ14～85cmを測る。側溝の基底面は南(7.408～7.570m)から北(7.335～7.531m)に傾斜しており、主軸方向は北北東(N-16°-E)を向く。側溝の断面形は逆台形ないしU字形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/1～3/2)粘土質シルトを主体に地山のブロック等の含む度合いにより3～10層に分層される。また、堆積状態から長期間使用されたものと考えられる。出土遺物には弥生土器120点、土師器2点、須恵器9点、土師質土器38点、東播系須恵器1点、土製品1点、鉄製品1点、サヌカイト片1点(3.7g)がみられ、弥生土器2点(6847・6848)、須恵器1点(6849)、土師質土器2点(6850・6851)、東播系須恵器1点(6852)、鉄製品1点(6853)が図示できた。

出土遺物



遺構埋土

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1. 黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト(SR-6001) 2. 中粒中礫を僅かに含む黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト(SR-6002) 3. 地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土(SR-6002) 4. 黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト(SR-6002) 5. 地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土(SR-6002) | <ul style="list-style-type: none"> 6. 黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土(SR-6002) 7. 地山のブロックを多く含む黒褐色(2.5Y3/1)砂(SR-6002) 8. 黒褐色(10YR3/1)砂(SR-6002) 9. オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土質シルト(SR-6002) 10. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂(SR-6002) |
|---|--|

図3-228 SR-6001・6002

弥生土器(図3-229 6847・6848)

6847は壺で、口縁部は外反し、端部にヘラ状工具による斜格子文を施す。外面には粘土帯を貼付した際の指頭圧痕が残存する。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

6848はミニチュア土器で、壺を模ったものとみられる。底部は平らで、胴部は外上方に延びた後、中位よりやや上から内湾して立ち上がり、頸部で外反する。胴部内面上半にはしぼり目が残存し、外面下半にはタテ方向のヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

須恵器(図3-229 6849)

杯蓋で、平らな天井部には扁平なつまみが付き、胎土には白色中粒砂を中心に細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

土師質土器(図3-229 6850・6851)

6850は杯で、成形はA技法となり、体部外面は未調整となりロクロ目が明瞭に残る。底部の切り離しは回転糸切りとなる。

6851は椀で、成形はA技法とみられ、器面には回転ナデ調整を施す。底部はベタ高台となり、底部の切り離しは回転糸切りとなる。胎土はいずれも精良で、細粒砂から中粒砂を少し含む。

東播系須恵器(図3-229 6852)

片口鉢で、口縁部は斜め上方に延び、端部を肥厚し、外面には重ね焼きの痕跡が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

鉄製品(図3-229 6853)

圭頭の鉄鏃で、鏃身はやや反り、頸部は長く、関は丸味がある。全体に錆化が進む。

SR-6003(図3-230)

VI-2区中央部西寄りで検出した道路遺構で、道幅(両側溝の芯々寸法)は約4.60～5.60m、溝幅は3.30～4.60mを測り、南北ともさらに調査区外に続く。側溝は、西側が検出長62.51m、幅0.59～1.61m、深さ4～19cmを測り、東側が検出長62.50m、幅0.79～1.23m、深さ4～19cmを測る。側溝の基底面は北(7.683

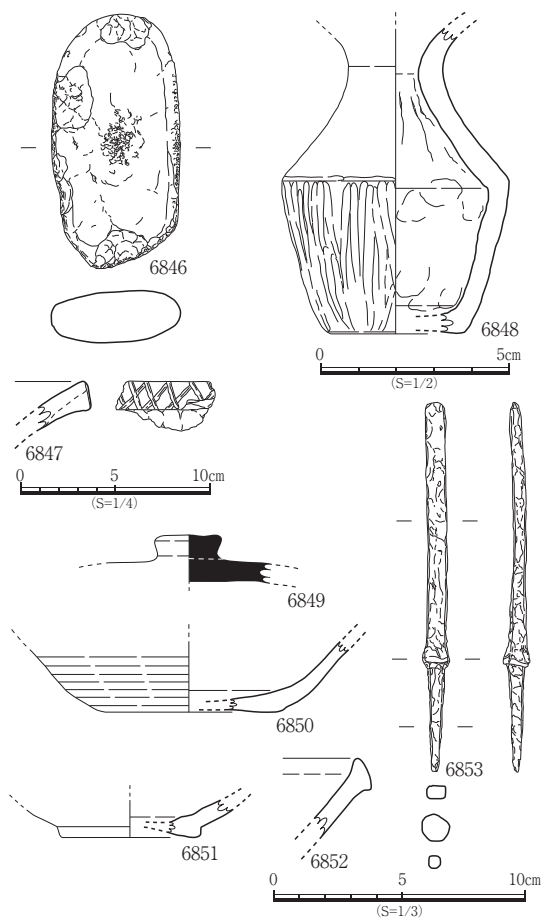


図3-229 SR-6001・6002出土遺物実測図

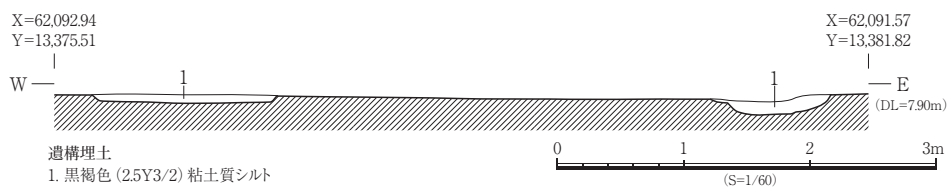


図3-230 SR-6003

～7.703m)から南(7.630～7.632m)に傾斜しており、主軸方向は南(N-169°-W)を向く。側溝の断面形は舟底形ないし逆台形を呈し、東側の側溝にはSR-6001の東側の側溝にみられた掘削痕跡が北側と南側にみられる。埋土は黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルトを主体に地山のブロック等の含む度合いにより2～4層に分層される。出土遺物には弥生土器408点、土師器83点、須恵器676点、土師質土器997点、黒色土器3点、緑釉陶器3点、灰釉陶器2点、製塩土器5点、土製品2点、瓦1点、石製品5点、鉄製品1点、鉄滓2点、サヌカイト片5点(13.4g)がみられ、土師器1点(6854)、須恵器21点(6855～6875)、緑釉陶器3点(6876～6878)、灰釉陶器2点(6879・6880)、土製品1点(6881)、石製品2点(6882・6883)が掲載できた。

出土遺物

土師器(図3-231 6854)

皿で、成形は左手手法となり、口縁部は短く外反気味に斜め上方に延び、端部内側を折込む。内底面と外底面はナデ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

須恵器(図3-231・232 6855～6875)

6855～6858は杯蓋で、6855には擬宝珠形、6856には扁平なつまみが付く。6855の天井部内面にはヘラ記号とみられる痕跡が残る。6857・6858はかえりのある杯蓋で、口縁部内面にやや外反する短いかえりが付く。胎土には、6855が細粒砂から粗粒砂を若干、6856が細粒砂から中粒砂を少し、6857・

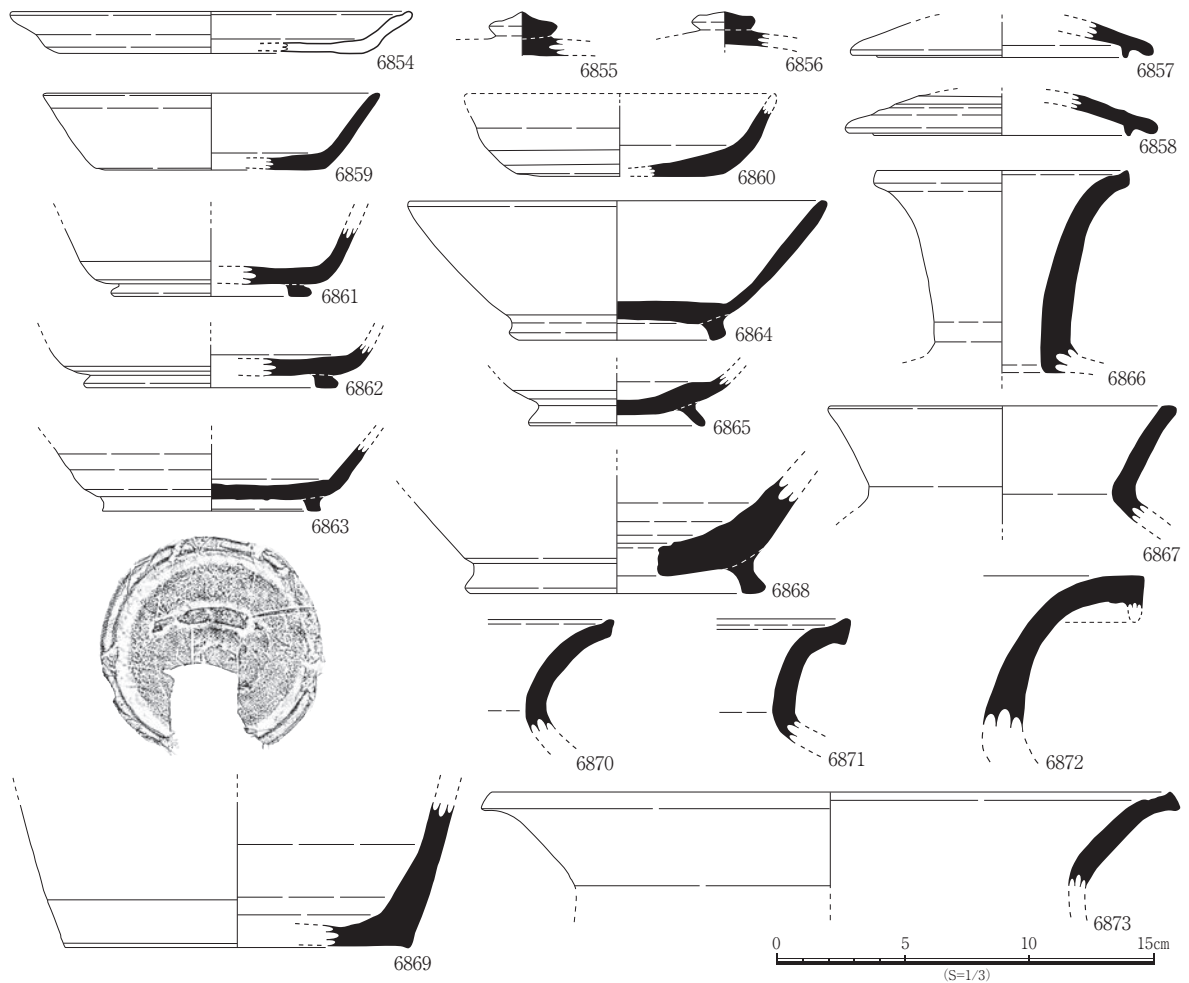


図3-231 SR-6003出土遺物実測図1

6858が細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

6859・6860は高台の付かない杯で、6859は、口縁部が底部から外上方に真直ぐ立ち上がり、端部を丸く仕上げる。6860は、口縁部が底部から内湾気味に上がる。胎土には、いずれも細粒砂から中粒砂を少し含む。

6861～6865は輪高台の付く杯身である。調整は基本的に、器面に回転ナデ調整を施した上で、内底面にナデ調整を加え、高台周辺はヨコナデ調整を施す。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、6862・6864・6865はナデ調整を加える。6861・6862は底部外端部より内側に高台、6863は底部外端部に真下を向く高さ0.6cmの高台、6864は底部外端部にハの字形に開く高さ1.0cmの高台、6865は底部外端部にハの字形に開く高さ0.9cmの細い高台が付く。胎土には、6861～6863が細粒砂から粗粒砂を少し、6864が細粒砂から極粗粒砂を少し、6865が細粒砂から粗粒砂と黒色粒を少し含む。

6866～6869は壺である。6866は細口壺で、口頸部は外反し、端部内側を折込む。胎土には細粒砂から中粒砂を若干含む。6867は広口壺で、口頸部は短く、外反する。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。6868は台付壺で、底部外面端部にハの字形に開く高さ1.7cmの高台が付き、底部には径3.5cmの円孔を焼成後外から穿つ。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。6869は平らな底部が残存するもので、外面下端には回転ヘラ削りが施される。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

6870～6873は甕で、6870・6871の口頸部は短く外傾し、端部内側を折込む。6872の口頸部は外反し、端部下端を拡張する。6873は、口頸部が外傾するもので、端部内側が窪む。胎土には、6870・6871・6873が細粒砂から中粒砂ないし粗粒砂を少し、6872が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6874・6875は転用硯とみられるもので、いずれも甕の胴部の破片を利用している。いずれも使用面は摩滅し、同心円文のタタキ目が僅かに認められる程度で、6875には墨痕とみられる染みが各所に残る。いずれも外面には格子目のタタキ目が残存する。胎土には、6874が細粒砂から粗粒砂を少し、6875が細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

緑釉陶器(図3-233 6876～6878)

6876は軟質系の椀で、底部は平らで、体部は内湾気味に上がり、口縁部は短く外反し、端部は丸い。底部の切り離しは回転ヘラ切りとなる。また、高台と貼付していた底部外面端部はヘラ磨きが施されており、光沢がある。緑釉は内面に痕跡が残る程度である。胎土には細粒砂から中粒砂を若干含む。6877・6878は軟質系の皿、6877は器面に回転ナデ調整、6878は底部が削り出し高台となる。いずれも

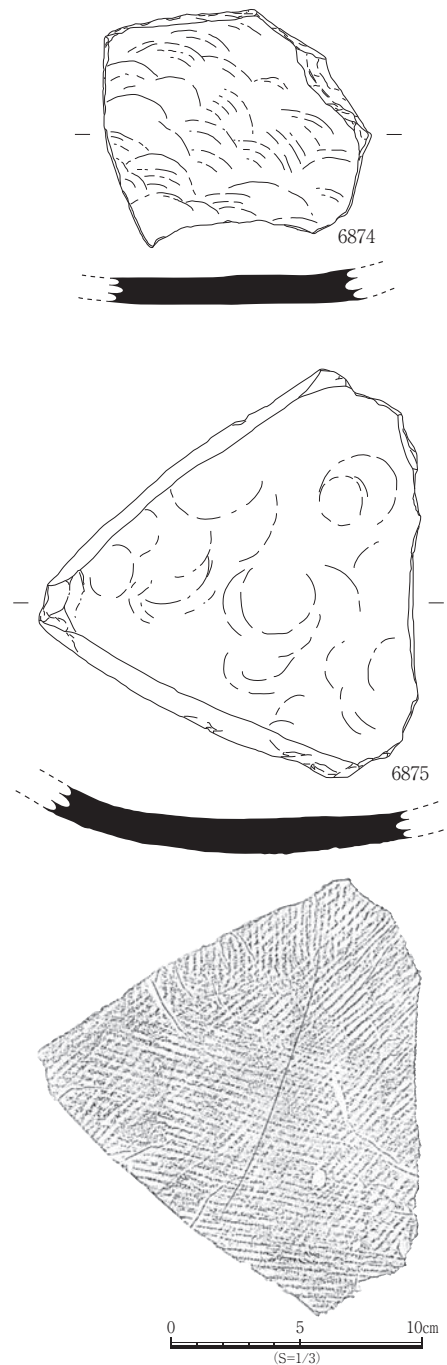


図3-232 SR-6003出土遺物実測図2

緑釉を全面に施釉するが、6878 は摩耗と剥落が目立つ。胎土には、極細粒砂から中粒砂を 6877 が若干、6878 が少し含む。

灰釉陶器(図版73 6879・6880)

いずれも皿の体部とみられるもので、器面は回転ナデ調整で、6880 の外面には回転ヘラ削りが施される。いずれも、残部には灰釉が施釉される。胎土には、6879 が極細粒砂から細粒砂を若干、6880 が極細粒砂から中粒砂を少し含む。

土製品(図3-233 6881)

土錘で、円筒形となり、表面には指押えとナデ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を若干含む。

石製品(図3-233 6882・6883)

いずれも叩石で、扁平となる。6882 は両面中央に敲打痕、縁辺を中心に擦痕が残存する。6883 は片面中央と側面の一部に弱い敲打痕と摩滅痕、縁辺を中心に擦痕が残存する。

⑥ 畝状遺構

畝地跡と考えられるもので、VI-2区南部南壁際で検出された。いずれもSR-6003とSD-6008を切っており、古代の中でも比較的新しい時期に属するものとみられる。

SU-6001

調査区南東部で検出した全部で21本の東西方向の畝状遺構で、畝間間隔は0.30～0.95m、畝幅0.24～0.60mとみられる。幅は24～68cm、深さ3～12cmを測り、最大長は4.21mである。主軸方向はN-48°～89°-Wを示しており、数時期に分かれるものとみられる。断面形は舟底形を呈する。埋土は、黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器16点、土師器10点、須恵器33点、土師質土器24点、緑釉陶器6点、灰釉陶器1点がみられ、須恵器1点(6884)、緑釉陶器6点(6885～6890)、灰釉陶器1点(6891)が掲載できた。

出土遺物

須恵器(図3-234 6884)

台付壺で、底部外面端部には真下を向き高さ0.8cmの高台が付く。外底面は丁寧なナデ調整が施されており、切り離しは不明である。外面は回転ヘラ削りが施されるが、自然釉がかかりハダ荒れとなる。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

緑釉陶器(図3-234 6885～6887、図版73・74 6888～6890)

6885は軟質系の杯で、底部の切り離しは回転糸切りとなり、緑釉は外面に僅かに残る。胎土には細粒砂から中粒砂を若干含む。

6886～6889は椀とみられるもので、いずれも軟質系である。6886・6888は器面に回転ナデ調整、6887は底部外面に輪高台が付き、6889は器面にヘラ磨きが施される。

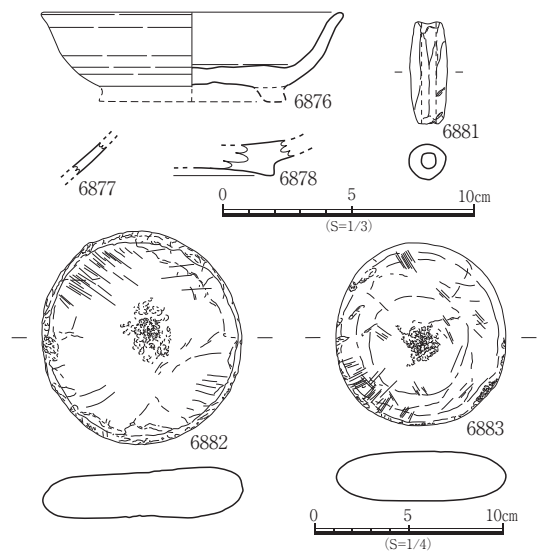


図3-233 SR-6003出土遺物実測図3

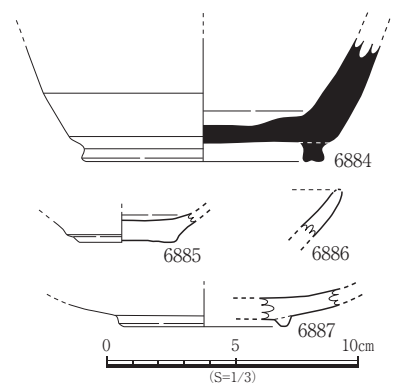


図3-234 SU-6001出土遺物実測図

6890は皿とみられるもので、硬質系で外面下半に回転ヘラ削り、それ以外はヘラ磨きを施す。胎土には、6886が細粒砂から中粒砂を若干、6887～6890が極細粒砂から中粒砂を若干含む。

灰釉陶器(図版73 6891)

椀で、器面には回転ナデ調整を施し、外面には回転ヘラ削りを加える。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

⑦ ピット

その多くが掘立柱建物跡などの柱穴と考えられ、総数は1,793個であった。この内、図示できた遺物が出土したのは42個(P-6007～6048)で、出土したピットについては遺物観察表に記している。

埋土は基本的に黒褐色(2.5Y3/1)を基調として粘土質シルトないし砂質シルトであった。

出土遺物

弥生土器(図3-235 6892～6901)

6892～6898は甕である。6892～6895は口縁部ないし口頸部が外反し、貼付口縁となるもので、いずれも口縁端部下端にヘラ状工具による刻目を施す。さらに、口縁部外面に6892はヨコナデ調整で作り出した微隆起突帯、クシ描直線文、6893・6894はクシ描直線文を施文する。胎土には、6892が細粒砂から極粗粒砂を多く、6893が細粒砂から粗粒砂を多く、6894が粗粒砂を中心に細粒砂から粗粒砂を多く、6895が中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。6896は、口頸部が膨らみのない胴部から短く外傾するもので、口縁部外面にはハケ調整の後にヘラ磨き状のキズがみられる。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。6897・6898は、口頸部がくの字形を呈するもので、口縁端部を拡張し、擬凹線文を施す。いずれも胴部内面はナデ調整で、ヘラ削りは施されていない。胎土には、6897が細粒砂から粗粒砂を比較的多く、6898が細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

6899・6900は甕の底部とみられるもので、6899の外面にはヘラ磨きが施される。胎土には、細粒砂から極粗粒砂を6899が少し、6900が比較的多く含む。

6901は高杯の口縁部とみられるもので、体部は内湾して上がり、口縁部は外上方を向き、端部に擬凹線文を施す。体部外面には1条の凹線の下にヘラ磨きを施す。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

土師器(図3-236 6902～6906)

6902は皿で、口縁端部内側を折込み、全面にヨコ方向のヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から中粒

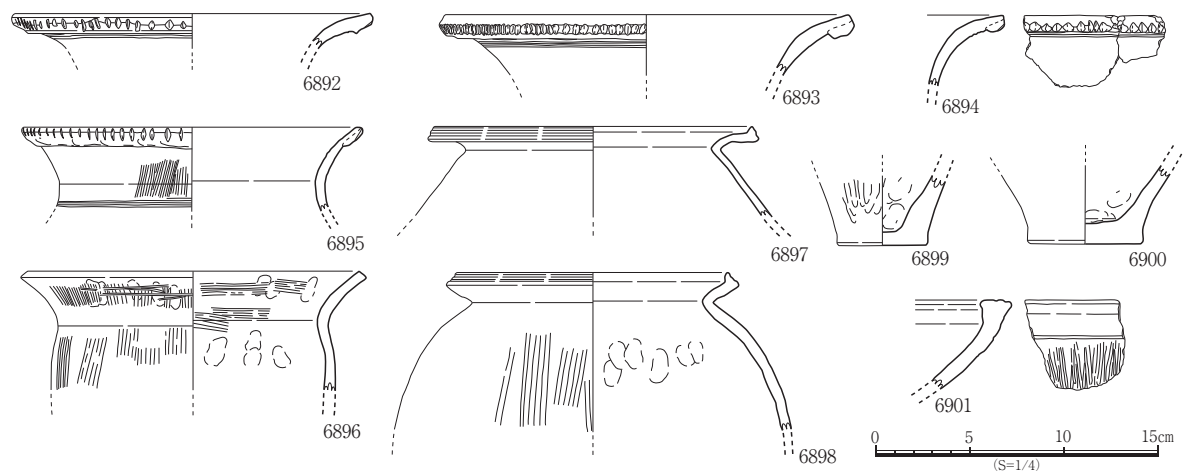


図3-235 ピット出土遺物実測図1

砂を若干含む。

6903・6904は盤で、底部外面端部には、6903が高さ0.6cm、6904が高さ0.5cmの高台が付き、口縁端部内側を折込む。6904には口縁部外面に赤色塗彩の痕跡が残る。胎土には、6903が細粒砂から粗粒砂を若干、6904が細粒砂から細粒中礫を少し含む。

6905・6906は羽釜で、6905は、口縁部が直立し、外面に断面矩形の鐳が付く。6906は水平を向く鐳が付く。胎土にはいずれも細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

須恵器(図3-237 6907～6919)

6907～6910は杯蓋で、6907はボタン状、6908は扁平な擬宝珠形つまみが残る。6909は、口縁部が平らな天井から斜め下方に下り、内側にかえりを付けるもので、天井部外面は自然釉がかかり、ハダ荒れとなる。6910は大型で、天井部外面ほぼ全面に回転ヘラ削りを施す。

6911～6915は底部外面端部に輪高台が付く杯身で、器面が摩耗するものもみられるが、調整は基本的に、器面にナデ調整を施した上で、内底面にナデ調整を加え、底部を回転ヘラ切りで切り離し、高台を貼付し、ヨコナデ調整で整えている。このうち、6911は外面下端に回転ヘラ削りを施し、6911・6912・6914は外底面にナデ調整を加え、6911・6914は回転ヘラ切りの痕跡をスリ消す。胎土には、6911が細粒砂から極粗粒砂を少し、6912～6914が細粒砂から粗粒砂を少し、6915が極細粒砂から中

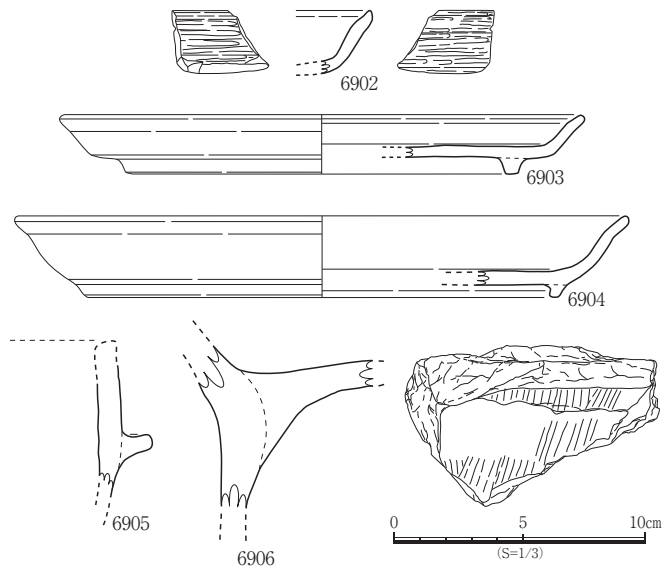


図3-236 ピット出土遺物実測図2

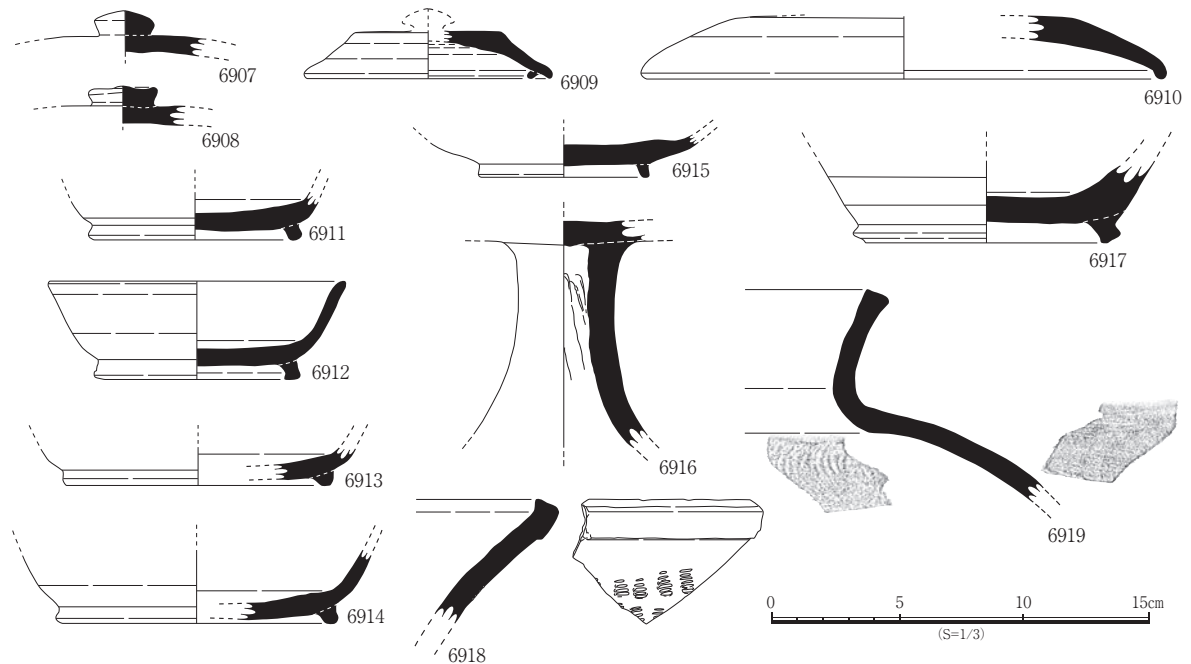


図3-237 ピット出土遺物実測図3

粒砂を比較的多く含む。

6916は高杯で、杯部底部は平らで、脚柱は真下に下り、裾部で広がる。脚柱内面にはしぼり目が残る。胎土には白色細粒砂から粗粒砂を少し含む。

6917は台付壺で、外面には回転ヘラ削り、外底面にはナデ調整を施し、底部外面端部にはハの字形に開く高さ1.3cmの高台が付く。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

6918・6919は甕で、6918は、口縁部が外反し、端部を肥厚し、外面にハケ状工具による列点文を施す。胎土には白色細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。6919は、口縁部が丸い胴部から外傾するもので、口縁部外面には煤が付着し、胴部内面には同心円文のタタキ目、外面には平行のタタキ目が残存する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

土師質土器(図3-238 6920～6923)

6920・6921は杯で、いずれも成形はA技法となり、器面は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整を加え、6920が回転ヘラ切り、6921が回転糸切りで底部を切り離す。胎土はいずれも精良で、細粒砂から粗粒砂を少し含む。

6922・6923は皿で、いずれも成形はA技法となり、器面は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整を加え、回転ヘラ切りで底部を切り離し、ナデ調整を加える。胎土には、6922が細粒砂から極粗粒砂を少し、6923が細粒砂から粗粒砂を少し含む。

黒色土器(図3-238 6924)

内黒の椀で、底部外面端部には断面三角形の小さな高台が付き、体部から口縁部は内湾気味に上がり、端部を丸く仕上げる。口縁部はヨコナデ調整で、体部外面には指押え、高台周辺はヨコナデ調整、外底面はナデ調整を施す。内面には界線状のヘラ磨きの後に圈状のヘラ磨きを加える。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

緑釉陶器(図3-238 6925・6928・6929・6931～6933, 図版74 6926・6927・6930)

6925～6928は椀とみられるもので、軟質系である。器面には回転ナデ調整を施す。6928は削り出し高台となる。胎土には、6925～6927が極細粒砂から中粒砂を若干、6928が細粒砂から粗粒砂を少し含む。6929は皿とみられるもので、軟質系である。器面は回転ナデ調整で、全面に緑釉を施釉し、

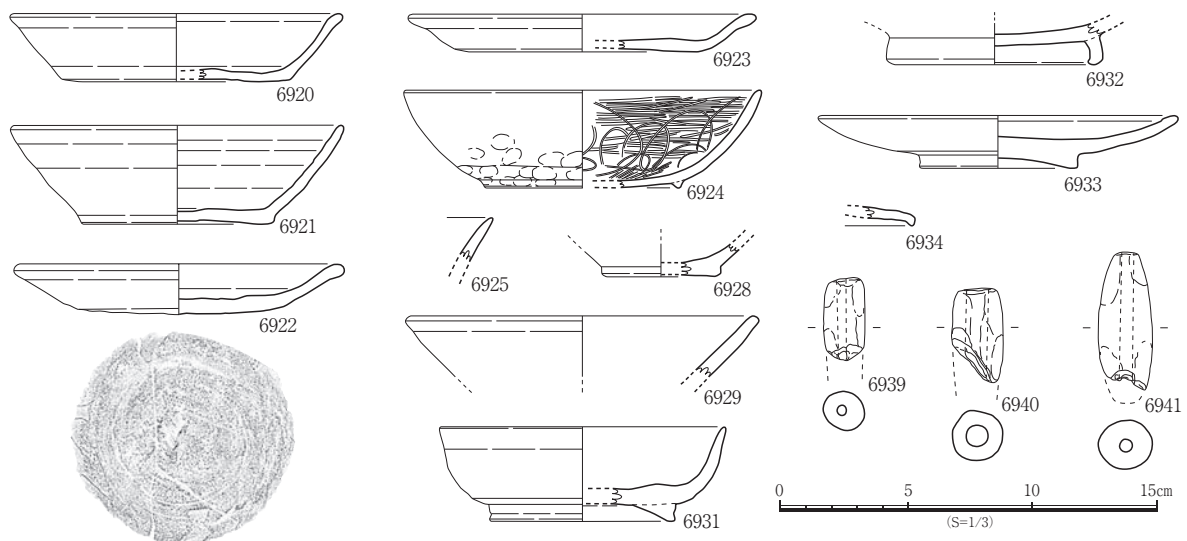


図3-238 ピット出土遺物実測図4

胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

6930～6932は椀とみられるもので、硬質系である。6930の外面には部分的にヘラ磨きが施される。6931はほぼ全体を知ることができる数少ない個体で、平らな底部外面端部には断面三角形の高さ0.7cmの高台が付き、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外上方を向き、端部を細く仕上げる。器面は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整を加える。緑釉は高台外面に残存する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を若干含む。6932は底部外面端部に高さ1.3cmの高台が付くもので、外底面はナデ調整が施され、緑釉は高台外面基部から内面に施釉される。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

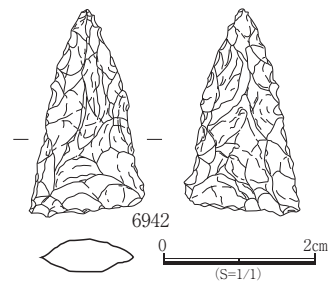


図3-239 ピット出土遺物実測図5

6933は皿で、底部は削り出し高台となり、口縁部は内湾気味に斜め上方に延びる。口縁端部内側には沈線状の小さな凹みが巡る。胎土には白色細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

灰釉陶器(図3-238 6934, 図版74 6935～6938)

6934は蓋で、器面は回転ナデ調整を施し、灰釉は口縁部外面の半分から内面に施釉される。

6935は椀, 6936～6938は皿とみられるもので、6935・6938の外面には回転ヘラ削りが施される。胎土には、6935・6936・6938が極細粒砂から中粒砂を若干, 6937が極細粒砂から細粒砂を若干含む。

土製品(図3-238 6939～6941)

土錘で、6939・6940が円筒形, 6941が紡錘形を呈する。胎土には、6939が細粒砂から中粒砂を少し, 6940が細粒砂から粗粒砂を若干, 6941が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-239・240 6942～6945)

6942はサヌカイト製の石鏃で、平基となる。

6943～6945は磨石で、表面は平滑となり、縁辺を中心に擦痕がみられる。6943は端部に摩滅痕, 6944は側面に摩滅痕と縁辺に沿って煤, 6945は側面に弱い敲打痕が認められる。

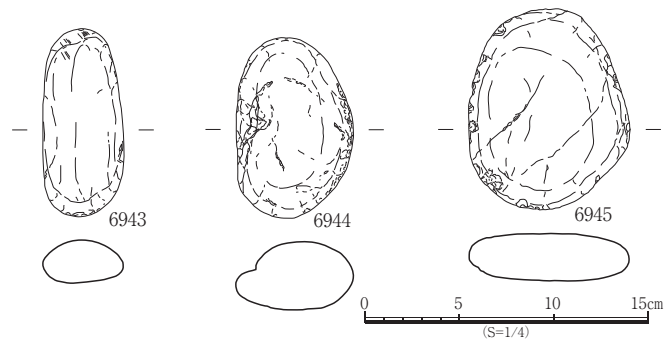


図3-240 ピット出土遺物実測図6

(3) 中世

VI-2区東部から南東部にかけて溝に囲まれた屋敷跡を確認した。VII-1区にも続いており、VI-2区で確認した部分は屋敷跡の西半分に当たる。遺構はこの屋敷跡を中心に分布して、掘立柱建物跡6棟、塀・柵列跡4列、土坑13基、溝跡1条、水溜り状遺構1基、ピット426個を検出した。

① 掘立柱建物跡

屋敷内で4棟、屋敷外で2棟の計6棟が復元できた。中世的構造である間仕切柱を持つ建物が3棟含まれる。

SB-6047(図3-241)

VI-2区南東部、屋敷内で検出した桁行4間(7.20m)、梁行2間(3.50m)の南北棟建物跡で、棟方向はN-2°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.30～2.20m、梁行(東西)が1.25～2.25mを測る。柱穴の平

面形はほぼ円形で、径約35cmを中心に、径25～48cmを測り、柱径は約12cmとみられ、深さは10～39cmである。柱穴の埋土は黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器10点、須恵器4点、土師質土器12点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-6048 (図3-242)

VI-2区南東部、屋敷内で検出した桁行3間(5.60m)、梁行2間(3.70～3.80m)のやや歪みのある東西棟建物跡で、西から1間目の柱通りに間仕切柱が建ち、棟方向はN-86～87°-Wを示す。北側柱東から1間目の柱穴は未確認である。柱間寸法は、桁行(東西)が1.70～2.00m、梁行(南北)が1.40～2.30mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約40cmを中心に、径36～58cmを測り、柱径は約15cmとみられ、深さは8～46cmである。柱穴の埋土は黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器8点、土師器7点、須恵器4点、土師質土器23点、鉄滓3点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-6049 (図3-243)

VI-2区南東部、屋敷内で検出した桁行3間(3.50～3.60m)、梁行2間(2.30～2.40m)の歪みのある総柱東西棟建物跡で、棟方向はN-87～89°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.05～1.30m、梁行(南北)が1.10～1.30mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約30cmを中心に、径19～40cmを測り、柱径は約10cmとみられ、深さは8～54cmである。柱穴の埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器9点、土師器3点、須恵器3点、土師質土器16点、サヌカイト片2点(6.0g)がみられ、土師器1点(6946)、土師質土器1点(6947)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-246 6946)

羽釜で、口縁部が胴部から内傾し、端部は丸く、外面には断面かまぼこ形の鏝を付ける。鏝から下には煤が付着する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

土師質土器(図3-246 6947)

杯で、成形はB技法となり、内面にはロクロ目が明瞭に残る。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は精良で、細粒砂から中粒砂を若干含む。

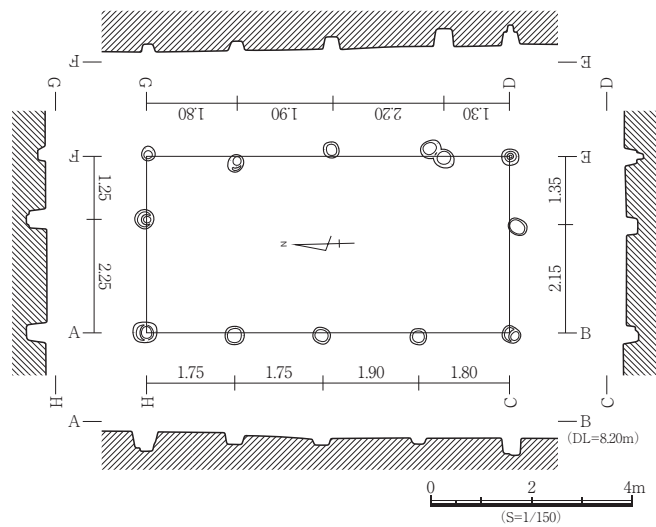


図3-241 SB-6047

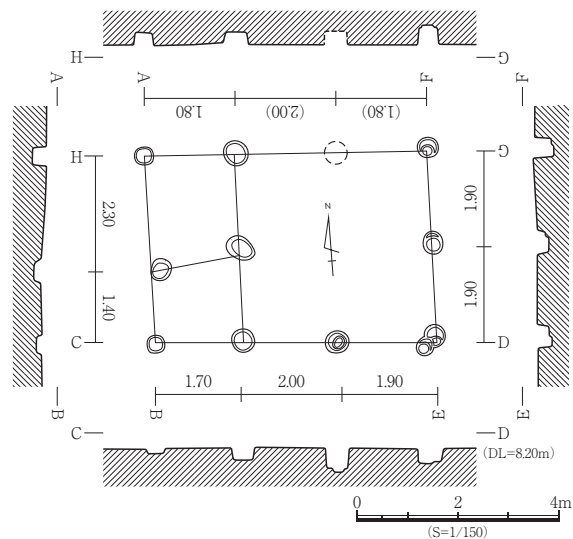


図3-242 SB-6048

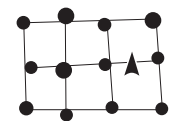


図3-243 SB-6049

SB-6050 (図3-244)

VI-2区南東部, 屋敷内で検出した桁行3間(3.65~3.70m), 梁行1間(2.20m)のやや歪みのある南北棟建物跡で, 棟方向は概ねN-1°-Eを示す。南東隅柱の柱穴と西側柱北から1間目の柱穴は未確認である。柱間寸法は, 桁行(南北)が1.15~1.30m, 梁行(東西)が2.20mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で, 径約35cmを中心に, 径24~40cmを測り, 柱径は約10cmとみられ, 深さは16~44cmである。柱穴の埋土は灰オリーブ色(7.5Y4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器5点, 須恵器3点, 土師質土器12点がみられたが, 図示できるものはなかった。

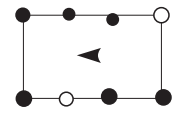


図3-244 SB-6050

SB-6051 (図3-245)

VI-2区南東部, 屋敷外で検出した桁行4間(7.70~7.90m), 梁行2間(3.70m)の歪みのある東西棟建物跡で, 東から1間目の柱通りに間仕切柱が建ち, 棟方向は概ねN-86°-Wを示す。北側柱東から1間目の柱穴はSK-6094に掘り込まれ未確認である。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.80~2.20m, 梁行(南北)が1.70~2.00mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で, 径約30cmを中心に, 径23~37cmを測り, 柱径は約10cmとみられ, 深さは20~39cmである。柱穴の埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器

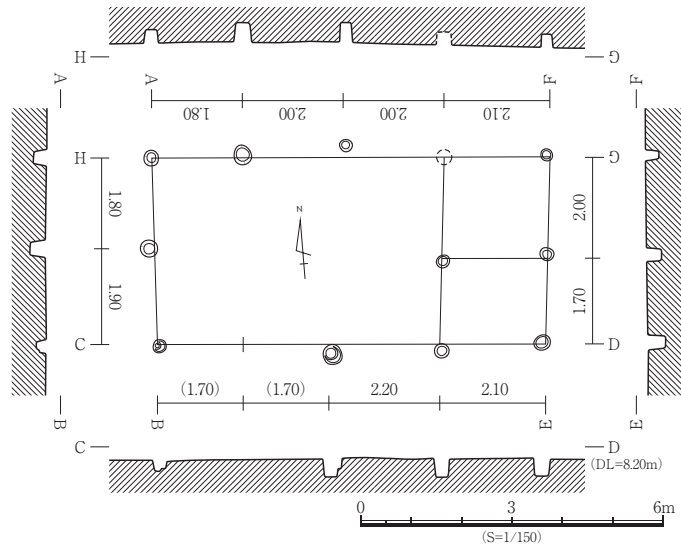


図3-245 SB-6051

34点, 土師器6点, 須恵器1点, 土師質土器24点, 石製品1点がみられ, 石製品1点(6948)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-246 6948)

投弾で, 断面は丸く, 表面は平滑である。

SB-6052 (図3-247)

VI-2区南東部, 屋敷外で検出した桁行3間(4.90m), 梁行2間(3.30m)の東西棟建物跡で, 西から1間目の柱通りに間仕切柱が建ち, 棟方向は概ねN-79°-Wを示す。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.10~2.10m, 梁行(南北)が1.65mを測る。

柱穴の平面形はほぼ円形で, 径約30cmを中心に, 径23~40cmを測り, 柱径は約10cmとみられ, 深さは13~43cmである。柱穴の埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器17点, 土師器4点, 須恵器4点, 土師質土器12点, 土製品1点, 石製品1点(6949)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-248 6949)

下臼で, 上面には4~7条単位の条線が明瞭に残る。

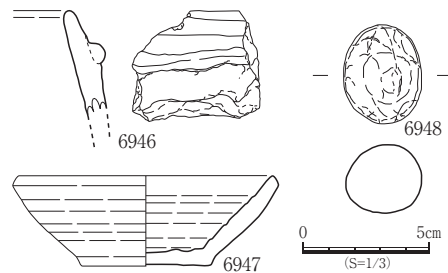


図3-246 SB-6049・6051出土遺物実測図

② 塀・柵列跡

屋敷内で1列、屋敷外で3列の計4列を復元した。掘立柱建物跡同様に屋敷外では屋敷を囲む溝跡(SD-6010)の南西側に纏まる。

SA-6012 (図3-249)

VI-2区南東部、屋敷内で検出した東西塀跡(N-89°-W)で、SB-6047～6050の北側に位置する。3間分(5.50m)を検出し、柱間寸法は1.10～2.65mである。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約28cmを中心に、20～40cmを測り、柱径は12～14cmとみられ、深さは9～37cmである。柱穴の埋土は黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器1点、土師質土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

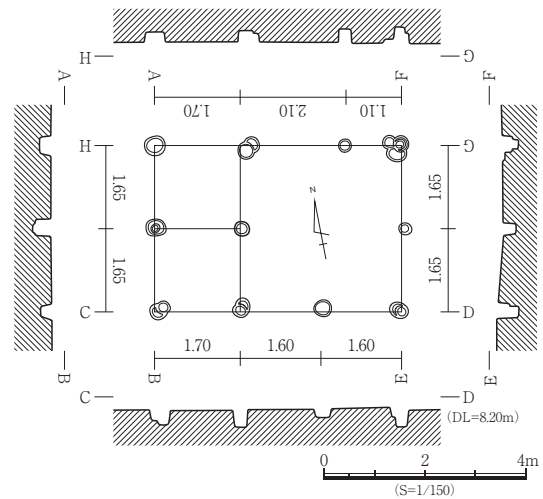


図3-247 SB-6052

SA-6013 (図3-250)

VI-2区南東部、屋敷外で検出した南北塀跡(N-2°-E)で、SB-6051の東隣に位置する。3間分(4.75m)を検出し、柱間寸法は1.35～1.90mである。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約26cmを中心に、24～28cmを測り、柱径は約12cmとみられ、深さは26～36cmである。柱穴の埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器5点、土師器1点、土師質土器9点がみられたが、図示できるものはなかった。

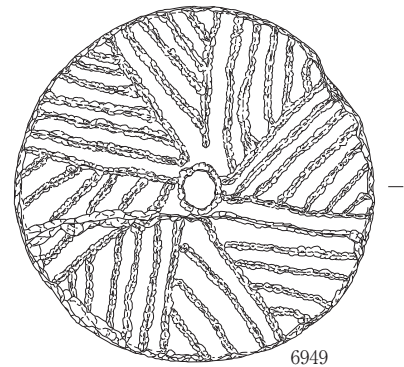


図3-248 SB-6052出土遺物実測図

SA-6014 (図3-251)

VI-2区南東部、屋敷外で検出した東西塀跡(N-56°-E)で、SB-6051の南側に位置する。4間分(6.80m)を検出し、柱間寸法は1.60・1.80mである。柱穴の平面形は楕円形を呈するものもみられるが、基本的には円形で、径約30cmを中心に、24～37cmを測り、柱径は約11cmとみられ、深さは24～34cmである。柱穴の埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器19点、土師器2点、須恵器2点、土師質土器2点がみられたが、図示できるものはなかった。



図3-249 SA-6012



図3-250 SA-6013



図3-251 SA-6014



図3-252 SA-6015

SA-6015 (図3-252)

VI-2区南東部、屋敷外で検出した東西塀跡(N-47°-E)で、SA-6014の北隣に位置する。3間分(4.50m)を検出し、柱間寸法は1.20～1.80mである。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約28cmを中心に、27～35cmを測り、柱径は約9cmとみられ、深さは15～41cmである。柱穴の埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器13点、土師器1点、須恵器4点、土師質土器5点がみられたが、図示できるものはなかった。

③ 土坑

13基の土坑を検出した。屋敷内に5基、屋敷外に8基あり、屋敷外では屋敷跡を囲む溝跡の西隣、約

20m北側, 約80m離れた西側の3ヵ所に纏まる。形状から土坑墓の可能性のあるものもみられる。

SK-6085 (図3-253)

VI-2区南東部, 屋敷内で検出した不整隅丸方形の土坑で, 基底面は方形を呈し, 長辺1.98m, 短辺0.98mを測り, 東壁沿いに7個の大礫がみられた。平場が2段あり, 基底面の小口に当たる1段目の平場北側には東西方向に大礫が並んでおり, 木棺を納めていた可能性が考えられ, 土坑墓であったものともみられる。長辺3.34m, 短辺2.00m, 深さ39cmを測り, 長軸方向はN-4°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトを主体に炭化物と地山の土粒の含み具合により3層に分層される。出土遺物には弥生土器7点, 須恵器8点, 土師質土器19点, 瓦器・白磁各1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

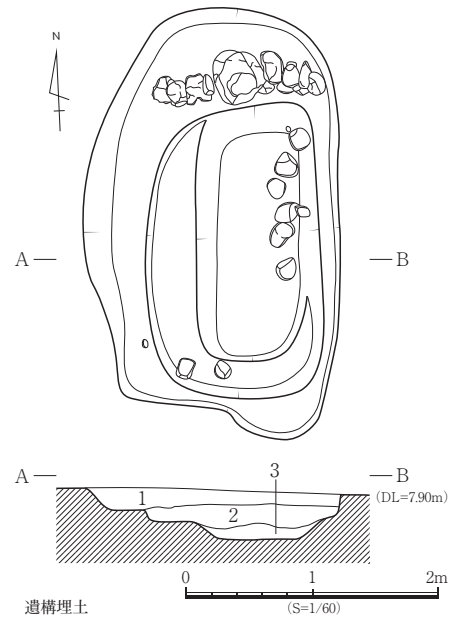


図3-253 SK-6085

SK-6086

VI-2区南東部, 屋敷内で検出した不整楕円形の土坑で, SB-6047を掘り込んでいた。長径3.27m, 短径2.32m, 深さ28cmを測り, 長軸方向はN-85°-Wを示す。断面形は逆台形を呈し, 基底面の上には平場が巡る。埋土は黒褐色(2.5Y3/1~3/2)砂質シルトを主体に炭化物と地山のブロックを含み, 下層では黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトの堆積が認められた。出土遺物には弥生土器2点, 土師器2点, 須恵器5点, 土師質土器161点, 青花1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-6087

VI-2区南東部, 屋敷内で検出した楕円形の土坑で, SB-6048と重なる。長径1.15m, 短径0.72m, 深さ7cmを測り, 長軸方向はN-23°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し, 埋土は黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルトであった。遺物は出土しなかった。

SK-6088 (図3-254)

VI-2区南東部, 屋敷内で検出した不整形の土坑で, SB-6048に掘り込まれていた。長辺1.60m, 短辺0.92m, 深さ10cmを測り, 長軸方向はN-68°-Wを示す。断面形は逆台形を呈し, 埋土は黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルトであった。遺物は出土しなかった。

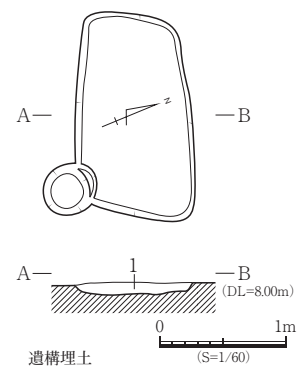


図3-254 SK-6088

SK-6089 (図3-255)

VI-2区南東部, 屋敷内で検出した円形の土坑で, SB-6050の北隣に位置する。長径1.68m, 短径1.60m, 深さ48cmを測る。断面形は逆台形を呈し, 壁際には狭い平場が巡り, 東側には三日月状の段部が認められた。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1~10YR3/2)砂質シルトを主体に, 下層では黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトの堆積が認められた。出土遺物には土師器1点, 須恵器5点, 土師質土器9点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-6090

VI-2区北東部, SK-6091の東隣で検出した方形の土坑である。長辺1.06m, 短辺0.86m, 深さ11cmを測り, 長軸方向はN-73°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルトであった。遺物は出土しなかった。

SK-6091 (図3-256)

VI-2区北東部, SK-6090の西隣で検出した方形の土坑である。長辺1.32m, 短辺1.07m, 深さ41cmを測り, 長軸方向はN-76°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は3層に分層され, 上層から地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1)シルト質砂, 地山のブロックを含むオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質砂, 灰色(5Y4/1)砂質シルトであった。出土遺物には土師器1点, 須恵器3点, 土師質土器3点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-6092

VI-2区北東部, SK-6093に切られた形で検出した方形の土坑である。長辺1.41m, 短辺0.99m, 深さ31cmを測り, 長軸方向はN-85°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルトであった。出土遺物には須恵器8点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-6093

VI-2区北東部, SK-6092を切った形で検出した不整形の土坑である。長辺2.44m, 短辺1.43m, 深さ13cmを測り, 長軸方向はN-76°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10Y3/1)シルト質砂であった。出土遺物には土師器1点, 須恵器17点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-6094

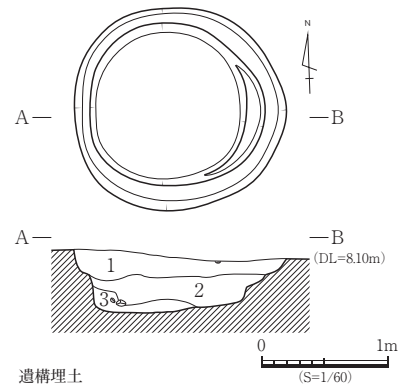
VI-2区南東部, SB-6051を切った形で検出した不整形楕円形の土坑である。長径1.92m, 短径1.20m, 深さ16cmを測り, 長軸方向はN-54°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器19点, 土師器1点, 須恵器5点, 土師質土器9点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-6095 (図3-257)

VI-2区南東部, SB-6051の南側で検出した方形の土坑である。長辺1.52m, 短辺0.95m, 深さ23cmを測り, 長軸方向はN-7°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し, 底面北側で, 径30~40cm, 深さ6cmを測る楕円形のピット1個を検出した。埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器12点, 須恵器7点, 土師質土器3点, 瓦質土器1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

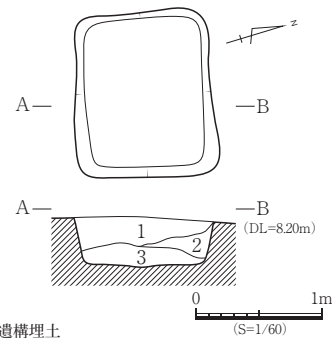
SK-6096 (図3-258)

VI-1区南西部, SK-6097の東側で検出した方形の土坑である。長辺



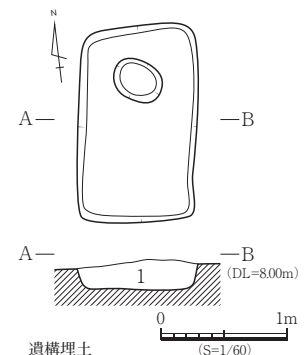
遺構埋土
1. 地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト
2. 地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルト
3. 地山のブロック含む黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト

図3-255 SK-6089



遺構埋土
1. 地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1)シルト質砂
2. 地山のブロックを含むオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質砂
3. 灰色(5Y4/1)砂質シルト

図3-256 SK-6091



遺構埋土
1. 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト

図3-257 SK-6095

1.90m, 短辺1.39m, 深さ14cmを測り, 長軸方向はN-11°-Eを示す。断面形は舟底形を呈し, 底面北側で, 径30~40cm, 深さ4cmを測る楕円形のピット1個を検出した。埋土は黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土であった。出土遺物には土師質土器6点, 白磁・青磁各1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-6097

VI-1区南西部, SK-6096の西側で検出した方形の土坑である。長辺1.93m, 短辺1.22m, 深さ23cmを測り, 長軸方向はN-13°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には須恵器・土師質土器各1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

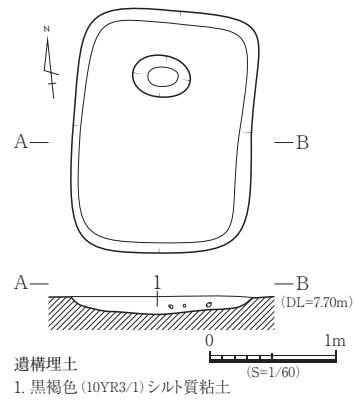


図3-258 SK-6096

④ 溝跡

屋敷を区画する溝跡を確認した。部分的に重複しているところもみられることから掘返しが行われたものとみられ, 南側で確認した水溜り状遺構(SP-6001)に繋がる。

SD-6010 (図3-259)

VI-2区東部から南東部にかけて検出したコの字形を呈する区画溝で, 2条に分かれる部分があり, 掘返しが行われたものとみられ, 北側はVII区に続く。北側では南北2条に分れ, 西のコー

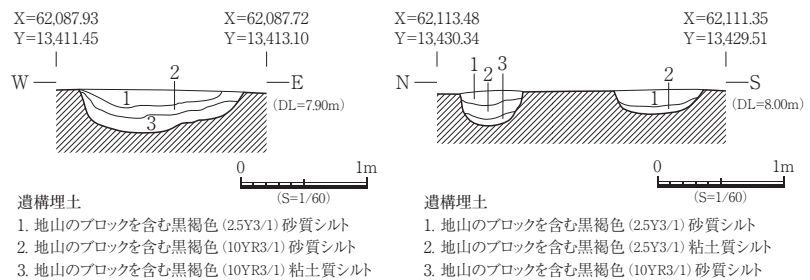


図3-259 SD-6010

ナー部で合流する。西側では屋敷内から始まる鍵状をなす溝と合流し, 南に延びて, 南端で東に屈曲してSP-6001に続く。また, 西側では掘返しの痕跡が底面と壁に残る。検出長は54.97m, 幅は0.46~1.98m, 深さは12~49cmを測り, 断面形は舟底形ないし逆台形を呈する。基底面は北東のコーナー部(7.966m)を境に東(7.789m)と南(7.461m)に向かって傾斜し, 主軸方向は東西方向で, 東(N-98°-E), 南北方向で南(N-172°-W)に向かって真直ぐ延びる。埋土は上層に地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1~10YR3/1)砂質シルト, 下層に地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトが堆積しており, 2~3層に分層される。出土遺物には弥生土器337点, 土師器29点, 須恵器172点, 土師質土器208点, 備前焼1点, 白磁3点, 青磁8点, 石製品3点, 鉄製品3点, 鉄滓4点, サヌカイト片1点(0.7g)がみられ, 弥生土器2点(6950・6951), 土師器2点(6952・6953), 土師質土器4点(6954~6957), 備前焼1点(6958), 鉄製品1点(6959)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-260 6950・6951)

いずれも甕の底部とみられるもので, 内面には, 6950がヘラナデ調整, 6951がヘラ削りを施す。胎土には, 6950が細粒砂から粗粒砂を少し, 6951が細粒砂から極細粒中礫を比較的多く含む。

土師器(図3-260 6952・6953)

いずれも皿で, 成形は手づくねで, 口縁部はヨコナデ調整, 体部外面には指頭圧痕が残る。胎土は

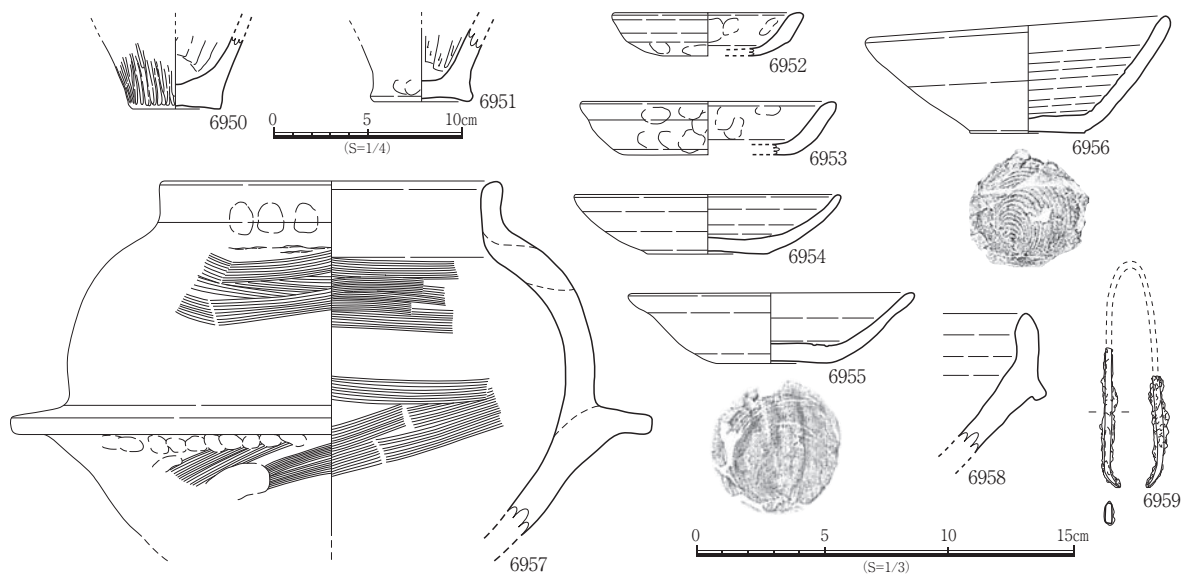


図3-260 SD-6010出土遺物実測図

いずれも精良で、6952が細粒砂から中粒砂、6953が細粒砂から粗粒砂を若干含む。

土師質土器(図3-260 6954～6957)

6954～6956は杯で、いずれも成形はB技法となり、底部の切り離しは回転糸切りによる。口縁部は、6954が内湾気味に上がり、6955が斜め上方に上がり、6956が外上方に上がり、いずれも端部は丸い。6956は外面を丁寧にナデ調整するが、内面は未調整で、ロクロ目が明瞭に残る。胎土には、6954が細粒砂から中粒砂を若干、6955が細粒砂から中粒砂を少し、6956が細粒砂から極粗粒砂を若干含む。

6957は茶釜で、丸い胴部中位に鏝が巡り、口縁部は短く直立する。胴部内外面にはハケ目が残り、鏝から下には煤が付着する。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

備前焼(図3-260 6958)

搦鉢で、口縁部は外上方に伸びる体部から直立し、下端を拡張する。口縁部外面には自然釉がかかり、ハダ荒れする。残部には条線はみられない。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

鉄製品(図3-260 6959)

毛抜きで、刃先は短く内湾し、刃部長1.3cm、幅1.0cmを測る。

⑤ 水溜り状遺構

屋敷を区画する溝(SD-6010)から続くもので、溝の一方の終焉部に当たり、屋敷では南西部に位置する。

SP-6001(図3-261)

VI-2区南東部、屋敷を区画する溝(SD-6010)が東に屈曲した部分から始まる東西約13.00m、南北約6.00mとみられる不整楕円形の遺構で、底面は一段低い平場が巡り、東寄りに深さ69cmの最深部があり、断面が搦鉢状となる。埋土は黒褐色(2.5Y3/1～3/2)を基調とした砂質シルトと粘土質シルトの堆積がみられ、地山のブロックや砂の含み具合により5層に分層される。出土遺物は多く、弥生土器194点、土師器13点、須恵器229点、土師質土器588点、黒色土器1点、灰釉陶器2点、常滑焼7点、備前焼10点、瀬戸焼8点、白磁5点、青磁12点、青花3点、土製品2点、石製品4点、サヌカイト片5点(9.3g)、鉄滓17点がみられ、須恵器2点(6960・6961)、土師質土器3点(6962～6964)、灰釉陶器2点(6965・6966)、備前焼1点(6967)、青磁1点(6968)、土製品2点(6969・6970)、石製品4点(6971～6974)が掲載できた。

出土遺物

須恵器(図3-262 6960・6961)

6960は杯身で、底部外面端部にはハの字形に開く高さ0.8cmの高台が付く。内底面には珍しいカキ目調整、外底面にはナデ調整が施される。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

6961は双耳壺の肩部に付く把手とみられる。外面に回転ヘラ削りを施してから扁平な把手を貼付する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

土師質土器(図3-262 6962～6964)

6962・6963は杯で、いずれも成形はB技法となり、底部の切り離しは回転糸切りによる。いずれの内面にもロクロ目が残るが、6962は未調整で、より明瞭に残る。いずれも胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

6964は茶釜で、口縁部は丸い胴部から短く直立する。鏝以下は欠損する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

灰釉陶器(図3-262 6965, 図版74 6966)

6965は椀で、器面は回転ナデ調整され、全面に灰釉を施釉し、貫入がみられる。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

6966は皿とみられるもので、外面には回転ヘラ削りが施され、内面に灰釉を施釉する。胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

備前焼(図3-262 6967)

播鉢で、口縁部は直立し、外面には2条の凹線が巡り、内面には条線が1カ所残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

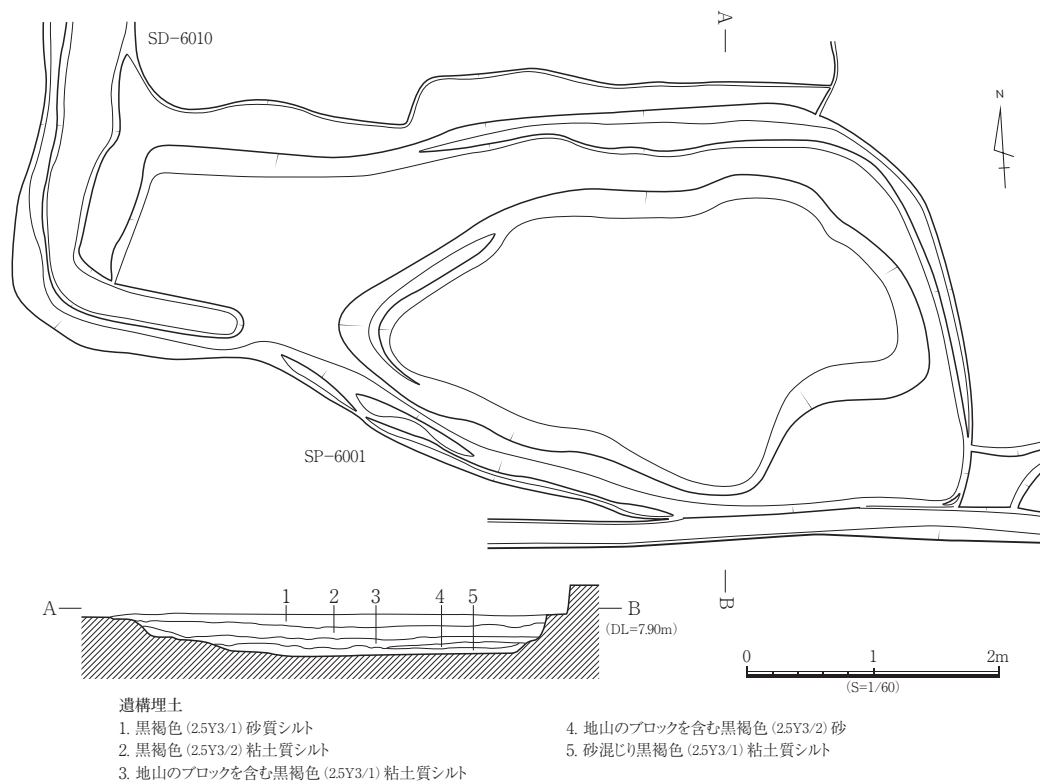


図3-261 SP-6001

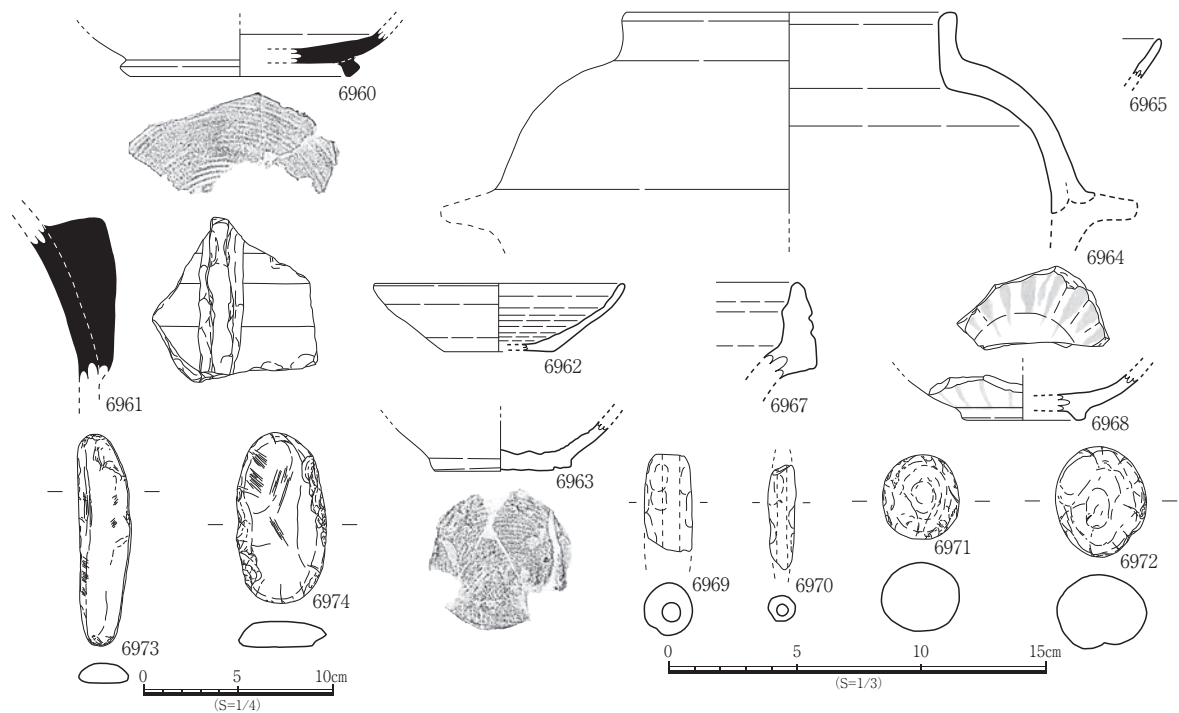


図3-262 SP-6001出土遺物実測図

青磁(図3-262 6968)

稜花碗で、見込は花卉状に凹む。晝付の外側から内面に緑釉を施釉する。胎土には黒色粒を少し含む。

土製品(図3-262 6969・6970)

いずれも土錘で、6969は円筒形、6970は紡錘形となり、胎土には、6969が細粒砂から粗粒砂を少し、6970が細粒砂から中粒砂を少し含む。

石製品(図3-262 6971～6974)

6971・6972はいずれも球形をした投弾で、表面は平滑となる。

6973は叩石で、端部に摩滅痕、各所に擦痕が残る。

6974は扁平な磨石で、側面が欠損するが、表面は平滑で、各所に擦痕が残る。

⑥ ピット

その多くが掘立柱建物跡などの柱穴と考えられるもので、大半は屋敷跡から検出され、総数は426個であった。この内、図示できた遺物が出土したのは4個(P-6049～6052)で、出土したピットについては遺物観察表に記している。

埋土は黄灰色～暗灰黄色(2.5Y4/1～4/2)を基調とした砂質シルトであった。

出土遺物

須恵器(図3-263 6975)

杯身で、内面が摩滅し、高台外側に墨が付着していることから転用硯とみ

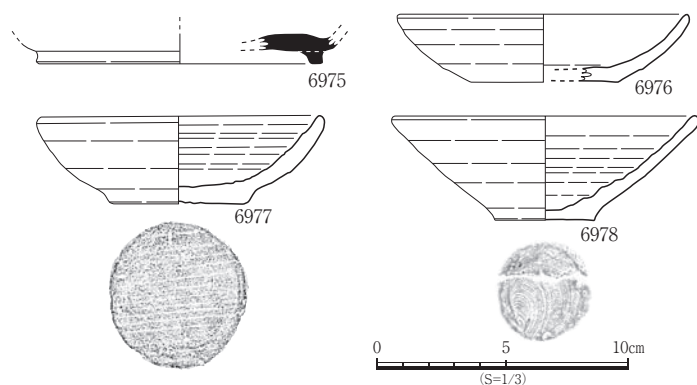


図3-263 ピット出土遺物実測図

1. VI区 (4) 近世以降

られる。外底面はナデ調整, 高台周辺はヨコナデ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

土師質土器(図3-263 6976~6978)

6976~6978は杯で, 底部の切り離しは回転糸切りとなり, 6977には板状圧痕が残る。口縁部は, 6976・6977が内湾気味に上がり, 6978が上外方に真直ぐ延び, いずれも端部は丸い。6977は, A技法で成形され, 内面には珍しいハケ調整が施される。6978は, 内面が未調整でロクロ目が明瞭に残る。胎土には, 6976が細粒砂から中粒砂を若干, 6977が極細粒砂から細粒砂を少し, 6978が極細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

(4) 近世以降

散発的に4基の土坑が確認されたのみであった。

① 土坑

SK-6098

VI-1区北部で検出した方形の土坑である。長辺2.27m, 短辺1.70m, 深さ29cmを測り, 長軸方向はN-11°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は灰色(5Y4/1)砂質シルトであった。出土遺物には須恵器2点, 土師質土器2点, 近世陶器1点がみられ, 近世陶器1点(6979)が図示できた。

出土遺物

近世陶器(図3-264 6979)

碗で, 底部は削り出し高台で, 外面は露胎となり, 煤が付着する。胎土は精良である。

SK-6099

VI-1区南東部で検出した方形の土坑である。長辺2.62m, 短辺1.16m, 深さ22cmを測り, 長軸方向はN-6°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は灰色(5Y4/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器7点, 近世磁器1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-6100

VI-2区南東部, 東壁際で検出した不整形の土坑である。長辺3.20m, 短辺1.00m以上, 深さ18cmを測り, 長軸方向はN-13°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し, 底面中央部で東西方向の溝状の掘り込みが認められた。埋土は灰色(5Y4/1)砂質シルトであった。出土遺物には須恵器1点, 土師質土器10点, 近世陶器3点, 近世磁器1点がみられ, 土師質土器1点(6980)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-264 6980)

小皿で, 口縁部は斜め上方を向き, 口唇部には煤が付着する。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

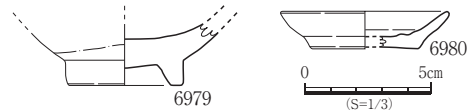


図3-264 SK-6098・6100出土遺物実測図

SK-6101

VI-2区東部, 東壁際で検出した不整形の土坑である。長径1.37m, 短径1.21m, 深さ1.19m以上を測り, 長軸方向はN-52°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し, 南東壁際以外には段上の平場が巡る。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器1点, 近世陶器1点, 近世磁器2点, 近代陶磁器5点がみられたが, 図示できるものはなかった。

2. VII区

調査区は現在の私道と用水路の関係で5ヵ所に分れる。これらは、大きく北部と南部に分れ、さらに南部は西側と東側、北部は東西3ヵ所に細分される。最も調査面積の広い南部の西側の調査区をVII-1区、次に調査面積の広い南部の東側の調査区をVII-2区、北部は西からVII-3区、VII-4区、VII-5区と呼称して記述する。

確認された遺構の時代はVI区とほぼ同じで、古墳時代を除く、弥生時代～近世であり、弥生時代、古代、中世が中心となる。弥生時代では竪穴建物跡21軒を始めとしてVI区から続く集落を構成する遺構を検出した。この集落はI区東側(『西野々遺跡I』)からVIII区までの東西約800mの範囲に展開しており、その中心がVI区からVII区で、確認された竪穴建物跡は63軒(全体で68軒)に及ぶ。

古代では官衙関連とみられる掘立柱建物跡を中心に奈良時代から平安時代の遺構を検出した。この官衙関連の建物はIV区(『西野々遺跡II』)からVIII区に分布しており、方形の掘方を持つ建物数は100棟余りを数え、VII区では西野々遺跡最大規模の建物跡が検出され、VI・VII区に中枢があったものと考えられる。また、中心となる建物は時期によって移動している。

中世では溝に囲まれた屋敷跡の東半分が確認されている。西半分はVI区にある。前述のとおり西野々遺跡では、屋敷跡自体は何ヵ所かで確認されているが、明確に溝に囲まれた屋敷跡はなく、出土遺物でも差異が看取される。

(1) 弥生時代

竪穴建物跡を始めとした遺構は西側が顕著で、東に行くに従って減少する。また、竪穴建物跡はVI区同様、円形、多角形、方形のものがみられ、平面形の変遷が看取される。

確認された遺構は、竪穴建物跡21軒、竪穴状遺構10軒、掘立柱建物跡3棟、塀・柵列跡1列、土坑23基、溝跡1条、ピット525個であった。この内、掘立柱建物跡と舟形土坑がセットになったものも確認されている。

① 竪穴建物跡・竪穴状遺構

確認した21軒の竪穴建物跡の平面形には前述のとおり円形、多角形、方形がみられ、円形から多角形そして方形への変遷が窺える。また、竪穴建物跡に比べ小規模で、かつ平面形が矩形(方形ないし隅丸方形)を呈する遺構が一定数確認され、柱穴を伴うものもみられ、上部構造が想定されることから竪穴状遺構として取り上げた。確認された竪穴状遺構は10軒で、本項で報告する遺構数は合計31軒である。

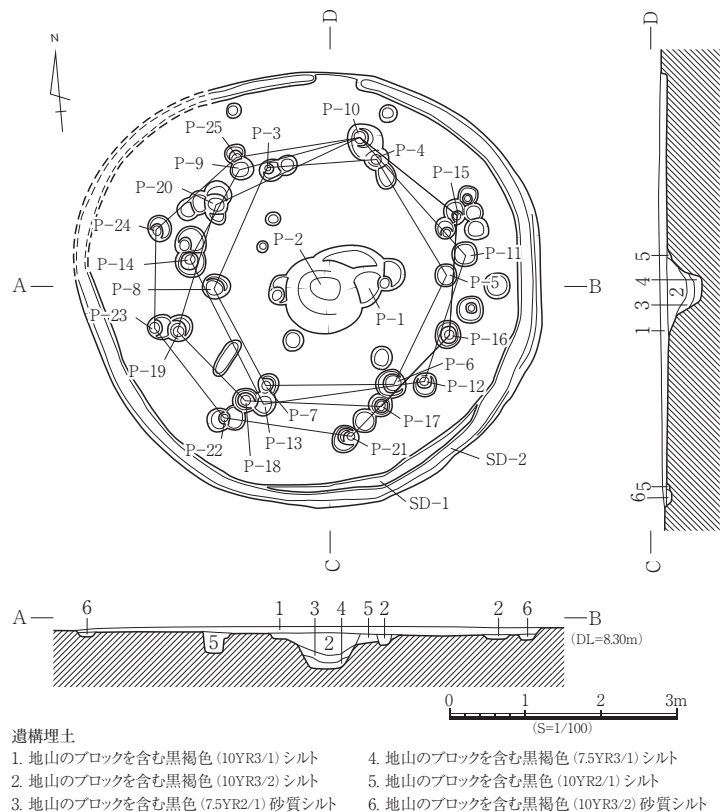


図3-265 ST-7001

ST-7001 (図3-265)

VII-1区の北西部で検出した円形の竪穴建物跡で、古代の溝跡(SD-7003)に北西部を掘り込まれていた。径は5.76～6.10mで、遺存する壁高は5～14cmと浅く、床面の標高は8.044～8.105mを測る。床面からは中央ピット2個と46個のピットおよび一部重複する壁溝が検出されていることからほぼ同一プランでの建替えが想定され、中央ピット(P-1)に伴う時期が2時期(1期・2期とも柱穴は各6個)、中央ピット(P-2)に伴う時期が2時期(柱穴は3期が7個と4期が8個)の計4時期の変遷が想定される。重複する柱穴もみられるが、柱穴の配置は少しずつ広がっており、プランも少し拡張されたとみられ、壁溝1(SD-1)が中央ピット(P-1)、壁溝2(SD-2)が中央ピット(P-2)に伴うものと考えられる。中央ピット(P-1)は楕円形を呈し、長径が約1.10mとみられ、短径0.83m、深さ13cmを測り、中央ピット(P-2)はほぼ円形を呈し、径1.01～1.02m、深さ43cmを測る。1期の支柱穴は中央ピット(P-1)を囲むP-3～8とみられ、6本柱で棟を支えていたものと判断される。柱穴はほぼ円形で径28～40cm、深さ5～49cmを測り、柱間寸法は1.45～1.80mである。2期の支柱穴は中央ピット(P-1)を囲むP-9～14とみられ、1期と同じく6本柱で棟を支えていたものと考えられる。柱穴はほぼ円形で径28～48cm、深さ5～46cmを測り、柱間寸法は1.35～2.15mである。3期の支柱穴は中央ピット(P-2)を囲むP-10・15・16～20とみられ、7本柱で棟を支えていたものと考えられる。柱穴はほぼ円形で径28～48cm、深さ36～47cmを測り、柱間寸法は1.30～2.10mである。最終の4期の支柱穴は中央ピット(P-2)を囲むP-10・15・16・21～25とみられ、8本柱で棟を支えていたものと考えられる。柱穴はほぼ円形で径29～48cm、深さ31～47cmを測り、柱間寸法は1.30～1.85mである。

1・2期の壁溝は南東壁際に遺存しており、幅約10cm、深さ2～4cm、延長3.16mを測る。3・4期の壁溝は北壁の一部を除き、壁沿いに巡っており、幅15～26cm、深さ4～6cm、延長14.34mを測る。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/1)シルトで、中央ピット(P-2)は黒色～黒褐色(7.5YR2/1～10YR3/2)砂質シルトないしシルトの堆積がみられ、地山のブロックの含む度合いにより3層に分層される。出土遺物は4期のもので、弥生土器112点、石製品1点、サヌカイト片3点(5.7g)、チャート片1点がみられ、弥生土器4点(7217～7220)が図示できた。なお、1～3期の支柱穴の中には出土遺物がみられるものもあったが、図示できるものはなかった。また、各支柱穴の規模等については、表3-1のとおりである。

出土遺物

表3-1 ST-7001付属遺構計測表

ピットNo.	辺・径(cm)	深さ(cm)	出土遺物	柱径(cm)
P-3	29～32	29	なし	8
P-4	29～32	24	なし	-
P-5	30	5	なし	-
P-6	40	24	弥生土器4	20
P-7	29	49	なし	11
P-8	33～37	26	弥生土器4	18
P-9	28	38	弥生土器1	12
P-10	48	46	なし	15
P-11	33	5	なし	-
P-12	32	40	なし	11
P-13	34	12	弥生土器4	-
P-14	40	42	弥生土器7	13
P-15	28～32	42	なし	-
P-16	29～34	47	弥生土器1	9
P-17	33～37	36	弥生土器9	12
P-18	31	38	弥生土器2	11
P-19	34	36	弥生土器1	13
P-20	34～38	37	なし	14
P-21	(22)～28	38	なし	12
P-22	34～37	31	なし	10
P-23	33	34	なし	10
P-24	34	40	弥生土器4	13
P-25	31～34	35	なし	10

弥生土器(図3-266 7217~7220)

7217は甕で、外反した口縁部に粘土帯を貼付するもので、外面に指頭圧痕が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。7218は甕の底部とみられるもので、内面にはヘラ削りと指ナデ調整、外面にはヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

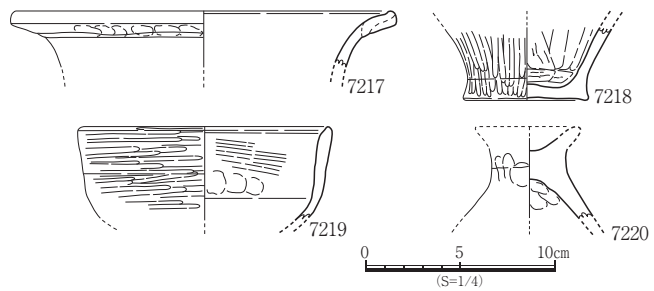


図3-266 ST-7001出土遺物実測図

7219は鉢で、口縁部は体部から真上に立ち上がり、端部は浅い凹面をなす。外面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

7220は蓋で、天井部は中凹みのつまみ状となり、口縁部は外下方を向く。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

ST-7002(図3-267)

Ⅶ-1区の北西部, ST-7001の西側で検出した径約6.50mとみられる円形の竪穴建物跡で、北西部をSD-7001, 東側を古代の溝跡(SD-7003)に掘り込まれていた。北東壁の一部と中央ピット(P-1)を検出したことから建物跡の存在が想定されるもので、一部北側に埋土が遺存しており、検出された柱穴から中央ピット(P-1)を囲む3時期(1~3期)の変遷が想定され、徐々に拡大する様子が看取される。遺存する壁高は10cm, 床面の標高は7.950~8.084mである。中央ピット(P-1)は不整楕円形を呈し、長径1.27m, 短径0.69m, 深さ28cmを測り、弥生土器15点, 軽石1点, サヌカイト片2点

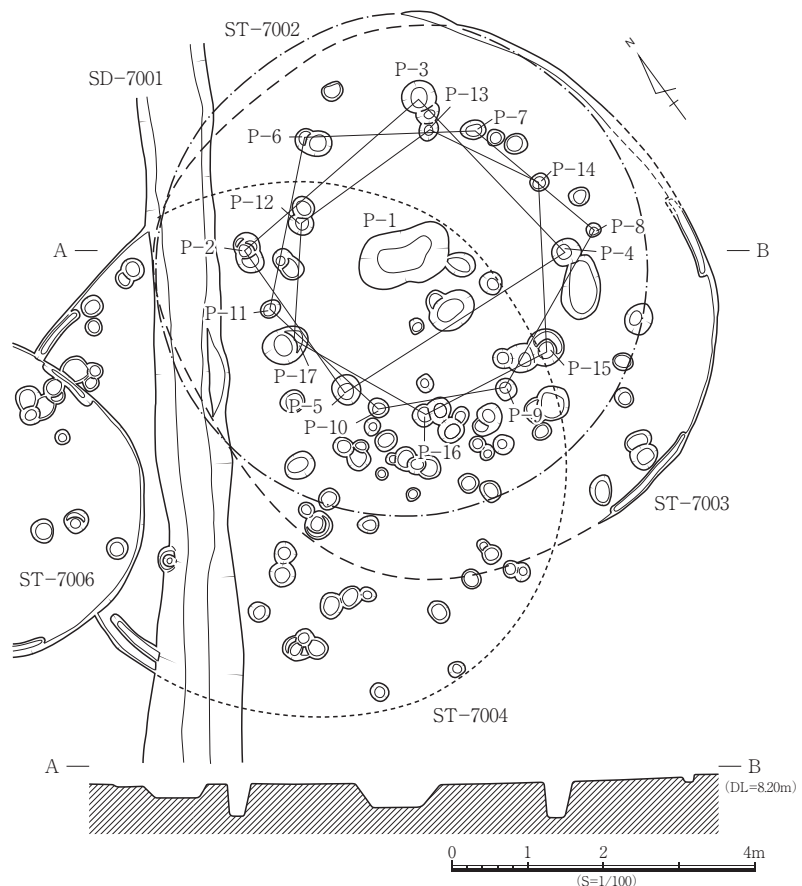


図3-267 ST-7002

(2.3g)が出土する。1期の主柱穴はP-2~5とみられ、4本柱で棟を支えていたものと考えられる。柱穴はほぼ円形で径35~46cm, 深さ34~45cmを測り、柱間寸法は2.30~3.45mである。2期の主柱穴はP-6~11とみられ、6本柱で棟を支えていたものと考えられる。柱穴はほぼ円形で径20~33cm, 深さ15~29cmを測り、柱間寸法は1.70~2.40mである。最終の3期の主柱穴はP-12~17とみられ、2期と

同じく6本柱で棟を支えていたものと考えられる。柱穴はほぼ円形で径22～49cm、深さ15～46cmを測り、柱間寸法は1.55～2.25mである。埋土は地山の土粒を僅かに含む黒褐色(10YR2.5/2)シルトで、中央ピット(P-1)は黒色(7.5YR2/1～10YR2/1)シルトを主体に地山のブロック・土粒の含む度合いにより3層に分層される。出土遺物は大半が3期のもので、弥生土器75点、石製品6点、軽石1点、サヌカイト片57点(12.2g)がみられ、弥生土器5点(7221～7225)、石製品3点(7226～7228)が図示できた。この内弥生土器1点(7225)は1期のP-3から出土している。また、各支柱穴の規模等については、表3-2のとおりである。

出土遺物

弥生土器(図3-268 7221～7225)

7221・7222は壺の底部とみられるもので、7221は外面にハケ調整を施す。7222は、器壁が薄いもので、内面にはナデ調整、外面にはヘラ磨きを施す。胎土には、7221は細粒砂から細粒中礫を比較的多く、7222は細粒砂から粗粒砂を多く含む。

7223・7224は甕の底部とみられるもので、いずれも外面は剥離し、摩耗する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を7223が多く、7224が比較的多く含む。

7225は小型の高杯とみられるもので、杯部と脚台部は粘土円盤で充填する。脚柱部は真下に下り、

表3-2 ST-7002付属遺構計測表

ピットNo.	辺・径(cm)	深さ(cm)	出土遺物	柱径(cm)
P-2	36	42	弥生土器1	16
P-3	46	34	弥生土器4 (No.7225)	-
P-4	35～38	44	なし	-
P-5	40	45	なし	-
P-6	30	19	なし	-
P-7	26～33	15	なし	-
P-8	20	29	弥生土器1	-
P-9	28	15	なし	-
P-10	27	16	なし	-
P-11	22～30	21	なし	-
P-12	34	31	弥生土器2	-
P-13	30	32	なし	-
P-14	22～25	46	弥生土器1	-
P-15	49	20	なし	20
P-16	30	23	なし	-
P-17	46	15	なし	-

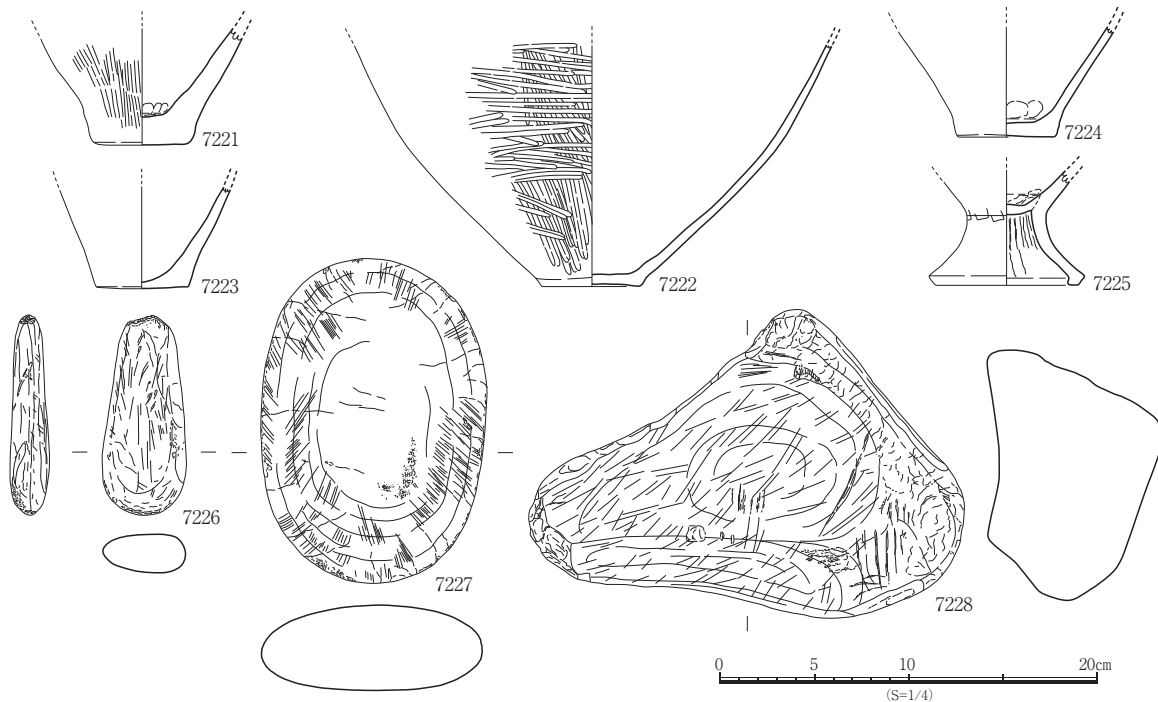


図3-268 ST-7002出土遺物実測図

裾部はハの字形に開き、端部は内側に屈曲する。杯部内外面にはヘラナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-268 7226~7228)

7226は細長い叩石で、表面は平滑で、ほぼ全面に擦痕、端部に敲打痕と摩滅痕が残る。

7227は磨石で、表面は平滑で、縁辺を中心に擦痕、側面に摩滅痕が残る。

7228は砥石で、上下2面と側面3カ所に主な使用痕が残る。

ST-7003(図3-269)

Ⅶ-1区の北西部、ST-7002と重複した形で検出した径約7.00mとみられる円形の竪穴建物跡で、北西部をSD-7001、東側を古代の溝跡(SD-7003)に掘り込まれていた。東壁と壁溝の一部および中央ピット(P-1)を検出したことから建物跡の存在が想定されるもので、検出された柱穴から中央ピット(P-1)を囲むP

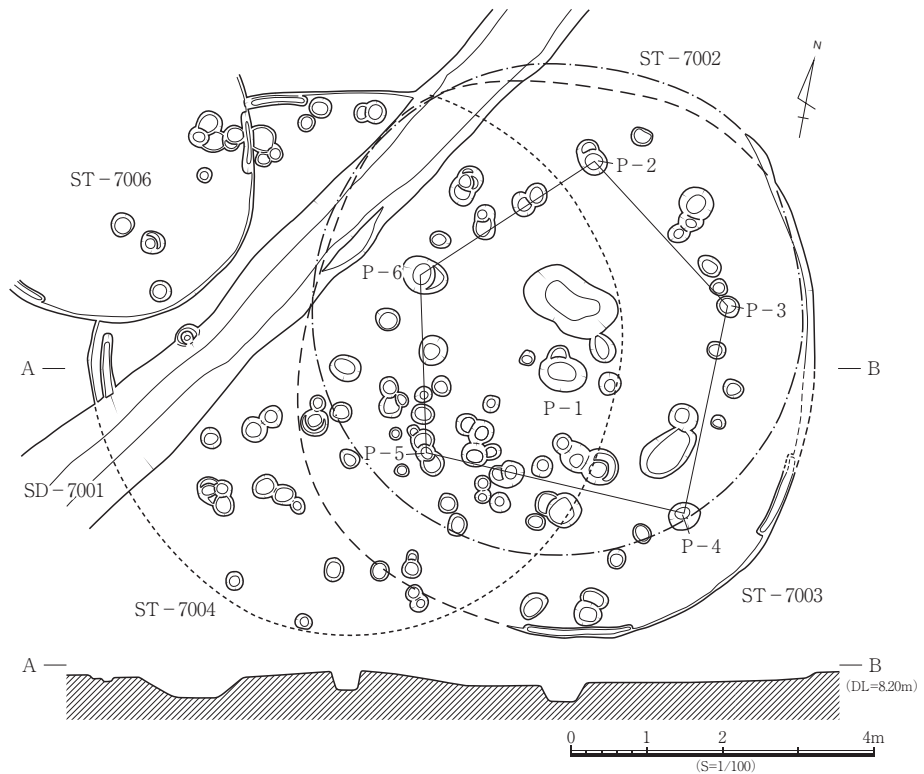


図3-269 ST-7003

-2~6が支柱穴とみられ、5本柱で棟を支えていたものと考えられる。遺存する壁高は10cm、床面の標高は7.950~8.084mである。中央ピット(P-1)は楕円形を呈し、長径0.63m、短径0.46m、深さ27cmを測り、弥生土器20点、軽石1点、サヌカイト片44点(3.3g)が出土する。P-2は径34cmの円形で、深さ27cm、P-3は径26~30cmの楕円形で、深さ46cm、P-4は径36~42cmの楕円形で、深さ26cm、P-5は径26cmの円形で、深さ33cm、P-6は径46cmの円形で、深さ35cmを測る。柱間寸法は2.35~3.50mである。壁溝は南東壁際に一部遺存しており、幅約10~14cm、深さ1~2cm、延長2.36mを測る。埋土は地山の土粒を少し含む黒褐色(10YR2.5/2)シルトで、中央ピット(P-1)は上下2層に分層され、上層は地山のブロックを含む黒褐色~黒色(7.5YR2.5/1)シルト、下層はブロックを多

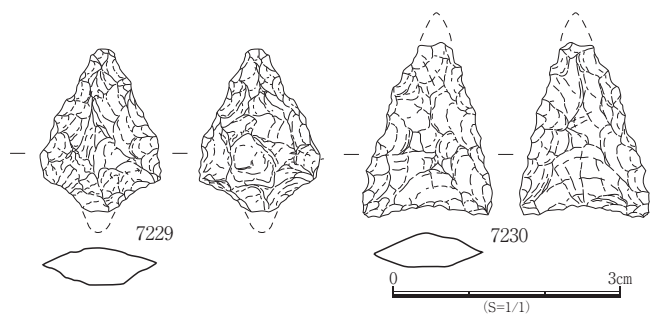


図3-270 ST-7003出土遺物実測図

2. VII区 (1) 弥生時代

く含む黒褐色(10YR2/2)シルトであった。出土遺物は弥生土器41点, 石製品2点, サヌカイト片44点(3.3g), 軽石1点がみられ, 石製品2点(7229・7230)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-270 7229・7230)

いずれもサヌカイト製の石鏃で, 7229が凸基式, 7230が凹基式となる。

ST-7004(図3-271)

VII-1区の北西部, ST-7006に切られた形で検出した径約7.00mとみられる円形の竪穴建物跡で, SD-7001に掘り込まれていた。中央ピットは未確認であるが, 西壁と壁溝の一部を検出したことから建物跡の存在が想定されるもので, 検出された柱穴の配置からP-1~6が支柱穴とみられ, 6本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-1は径24cmの円形で, 深さ10cm, P-2は径27cmの円形で, 深さ24cm, P-3は径30cmの円形で, 深さ9cm, P-4は径26~30cmの楕円形で, 深さ12cm, P-6は径28cmの円形で, 深さ10cmを測る。柱間寸法は2.15~3.10mである。壁溝は南東壁際と北西壁際に一部遺存しており, 幅約11~18cm, 深さ2~4cm, 延長1.66mを測る。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR2.5/2)シルトであった。出土遺物は弥生土器224点, サヌカイト片1点(4.0g)がみられたが, 図示できるものはなかった。

ST-7005(図3-272)

VII-1区の北西端部, ST-7006, SK-7001・7002に切られた形で検出した径約6.00mとみられる円形の竪穴建物跡で, 西側半分は調査区外にある。中央ピット(P-1)および南壁と壁溝の一部を検出したことから建物跡の存在が確認されたもので, 中央ピット(P-1)を囲む形にあるP-2・3が支柱穴とみられ, 未確認部分を含め5本柱で棟を支えていたものと考えられる。遺存する壁高は13~17cm, 床面の標高は8.029~8.089mである。中央ピット(P-1)は不整楕円形で, 長径は約1.20mとみられ, 短径1.04m, 深さ35cm

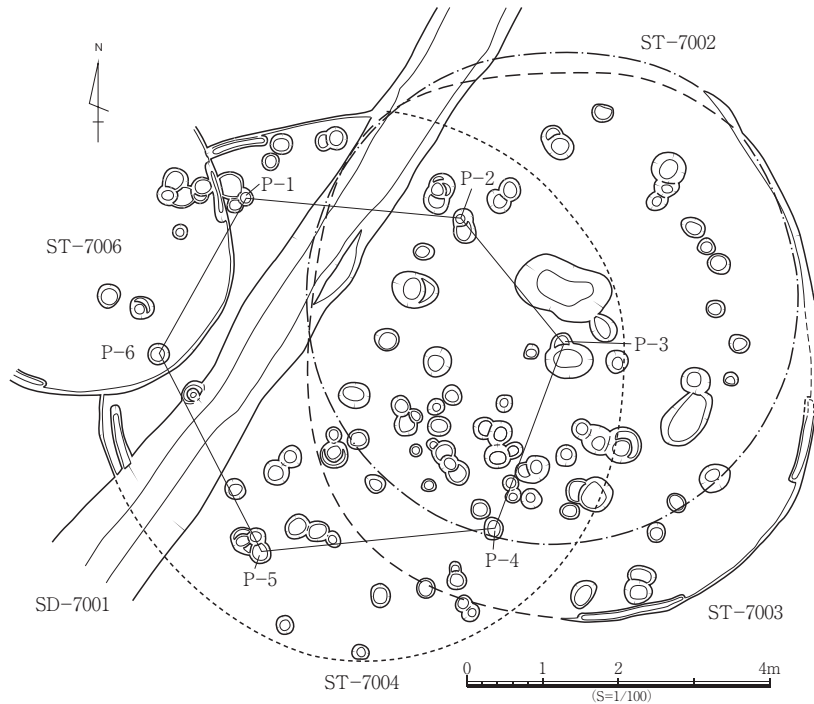
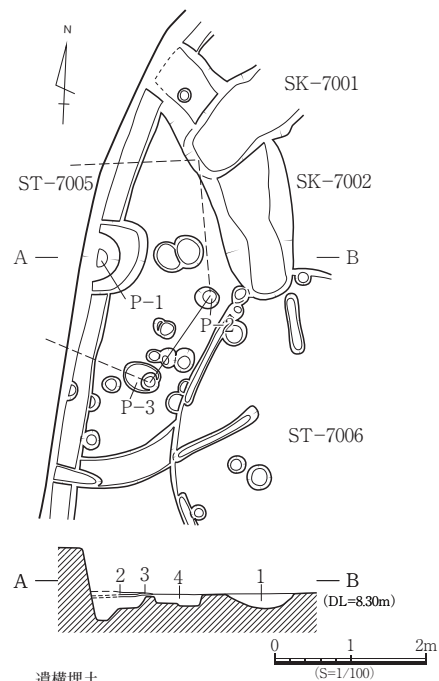


図3-271 ST-7004



遺構埋土

1. 地山の土粒を含む黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルト(SK-7002)
2. 地山の土粒を含む黒色~黒褐色(10YR2/1.5)シルト(ST-7005)
3. 地山の土粒を僅かに含む黒褐色(10YR3/2)シルト(ST-7005)
4. 地山の土粒を僅かに含む黒色(7.5YR1.7/1)シルト(ST-7005)

図3-272 ST-7005, SK-7002

を測り、弥生土器16点、サヌカイト片27点(1.2g)が出土する。P-2は径28～32cmの楕円形で、深さ37cm、P-3は径24cmの円形で、深さ23cmを測る。柱間寸法(P-2・3間)は1.40mである。壁溝は幅13～43cm、深さ7～12cm、延長2.90mを測る。埋土は地山の土粒を含む黒色～黒褐色(10YR2/1.5～3/2)シルトで、土粒の含み度合いによって2～3層に分層される。出土遺物は弥生土器72点、石製品6点、サヌカイト片515点(32.0g)がみられ、石製品2点(7231・7232)が図示できた。

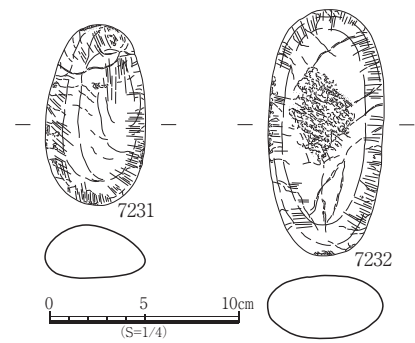


図3-273 ST-7005出土遺物実測図

出土遺物

石製品(図3-273 7231・7232)

いずれも磨石で、表面は平滑で、縁辺を中心に擦痕が残る。7232は片面中央と側面3カ所に摩滅痕が残り、叩石としても使用されたものとみられる。

ST-7006 (図3-274)

VII-1区の北西端部、ST-7004・7005、SK-7002を切った形で検出した長径4.68m、短径3.96mを測る楕円形の竪穴建物跡で、長軸方向はN-18°-Wである。遺存する壁高は8～15cm、床面の標高は7.907～7.982mである。付属遺構として中央ピット(P-1)と壁溝および17個のピットを確認した。この内、支柱穴は壁溝との位置関係から中央ピットを囲むP-2～5とみられ、4本柱で棟を支えていたものと考えられる。中央ピット(P-1)は不整円形で、長径0.72m、短径0.68m、深さ20cmを測り、弥生土器2点、石製品1点(7236)が出土する。P-2は径37cmの円形で、深さ7cm、P-3は径29cmの円形で、深さ13cm、P-4は径32cmの円形で、深さ29cm、P-5は径33cmの円形で、深さ9cmを測る。柱間寸法は1.50～1.80mである。壁溝は部分的に確認され、幅10～16cm、深さ1～3cm、延長3.76mを測る。埋土は地山の土粒を含む黒色～

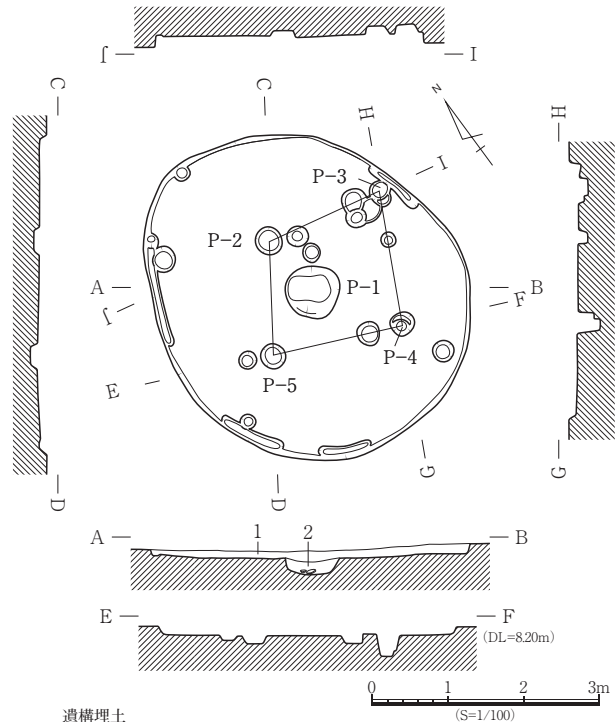


図3-274 ST-7006

黒褐色(10YR2/1.5)砂質シルトで、中央ピットには地山の土粒を少し含む黒褐色(10YR2/2)シルトが堆積し、炭化物が混じっていた。出土遺物は弥生土器106点、石製品5点、サヌカイト片1点(0.3g)、頁岩片1点がみられ、弥生土器2点(7233・7234)と石製品3点(7235～7237)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-275 7233・7234)

7233は壺とみられるが、ヘラ磨きされた胴部外面は被熱で変色し、一部に煤が付着する。口縁部は、直立する頸部から外傾し、粘土帯を貼付する。口縁部外面には指頭圧痕が2段に残る。胴部内面には

基部に指押え、上胴部に指ナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

7234は蓋で、天井部は平たく、つまみ状となり、口縁部は外下方に下る。器面には各所に指頭圧痕が残る。胎土には細粒砂から極細粒中礫を少し含む。

石製品(図3-275 7235～7237)

7235は叩石で、表面は平滑で、片面中央と側面に敲打痕、縁辺を中心に擦痕が残る。

7236は磨石で、表面は平滑で、縁辺を中心に擦痕、側面に弱い敲打痕が残る。

7237は穿孔具ではないかとみられる石器で、細長く先端に摩滅痕、縁辺の一部に擦痕が残る。

ST-7007(図3-276)

VII-1区の西南端部で検出したほぼ円形の竪穴建物跡で、径は5.08～5.42mで、遺存する壁高は20～24cm、床面の標高は7.852～7.889mを測る。付属遺構として、中央ピット(P-1)と15個のピットを確認した。この内、主柱穴と考えられるピットは中央ピットを囲むP-2～6とみられ、5本柱で棟を支えていたものと考えられる。中央ピット(P-1)は不整楕円形で、西側に平場があり、長径1.06m、短径0.51m、深さ17cmを測り、弥生土器1点、サヌカイト片18点(0.7g)が出土する。P-2は径20cmの円形で、深さ28cm、P-3は径25～35cmの楕円形で、深さ27cm、P-4は径29cmの円形で、深さ41cm、P-5は径17～25cmの楕円形で、深さ10cm、P-6は径46cmの円形で、深さ19cmを測る。柱間寸法は1.20～1.90mである。埋土は地山の土粒を少し含む黒色～黒褐色(10YR2/1.5)シルトで、中央ピットは黒褐色(10YR2/2)シルトで

地山の土粒の含み度合いにより2層に分層される。出土遺物には弥生土器425点、石製品14点、サヌカイト片24点(14.4g)がみられ、弥生土器7点(7238～7244)と石製品12点(7245～7256)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-277 7238～7244)

7238・7239は壺である。7238は、口頸部が外反し、端部に凹線文を施文する。胎土には細粒砂から

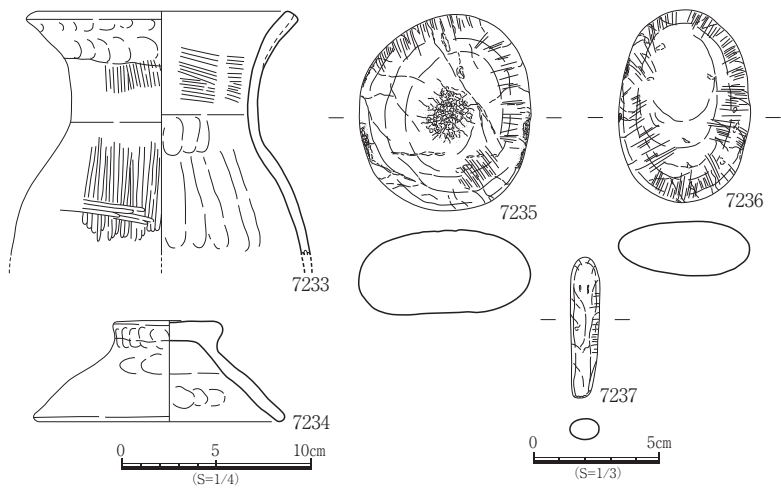


図3-275 ST-7006出土遺物実測図

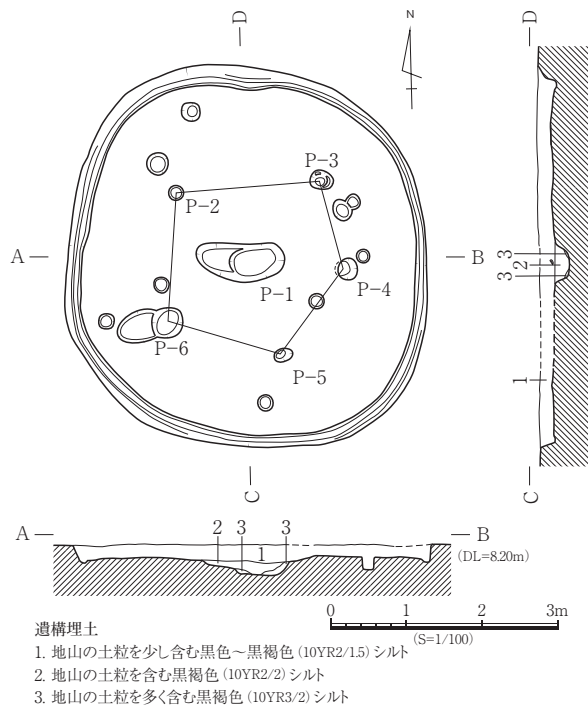


図3-276 ST-7007



図3-277 ST-7007出土遺物実測図

粗粒砂を比較的多く含む。7239は外面にクシ描直線文、微隆起突帯、楕円形浮文を貼付する。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

7240は甕で、頸部は短く直立し、口縁部は外反し、貼付口縁となり、外面に指頭圧痕が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。7241は甕の底部とみられるもので、外面にはヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7242は蓋の天井部ではないかとみられるもので、外面はナデ調整と指ナデ調整、内面は指押えと指ナデ調整を施す。胎土には、細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

7243はミニチュア土器で、壺を模ったものとみられ、口頸部は胴部から外反し、端部を丸く仕上げる。上胴部内面にはしぼり目、外面にはハケ目が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

7244は手づくね土器で、各所に指頭圧痕が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-277 7245~7256)

7245は扁平片刃石斧で、刃部が欠損し、部分的に研磨痕が残る。

7246・7247は叩石で、表面は平滑となり、縁辺を中心に擦痕が残る。7246は両端と側面1カ所に敲打痕残り、一方の端は摩滅する。7247は、片面に径2.0~2.7cmの丸い敲打痕、側面にも敲打痕が残る。

7248~7252は磨石で、縁辺を中心に擦痕が残る。7248は側面に敲打痕、7251は両端に敲打による摩滅痕残り、叩石としても使用されたものとみられる。7249は棒状を呈し、側面には弱い敲打痕が残る。7252は厚みがあるもので、側面に弱い敲打痕が残る。

7253~7256は砥石である。

7253は両面と側面3カ所に使用痕が残る。7254はよく使い込まれ、原形を留めない。使用面は5面に認められる。7255は両面と側面4カ所に使用痕残り、側面は溝状に凹む。7256は片面と側面2カ所に使用痕、側面を中心に比較的深い敲打痕が残る。

ST-7008(図3-278)

VII-1区の西南部で検出したほぼ円形の竪穴建物跡で、径は5.02~5.57mで、遺存する壁高は10~14cm、床面の標高は7.931~7.992mを測る。付属遺構として、中央ピット(P-1)と壁溝および15個のピットを確認した。この内、支柱穴と考えられるピットは中央ピット

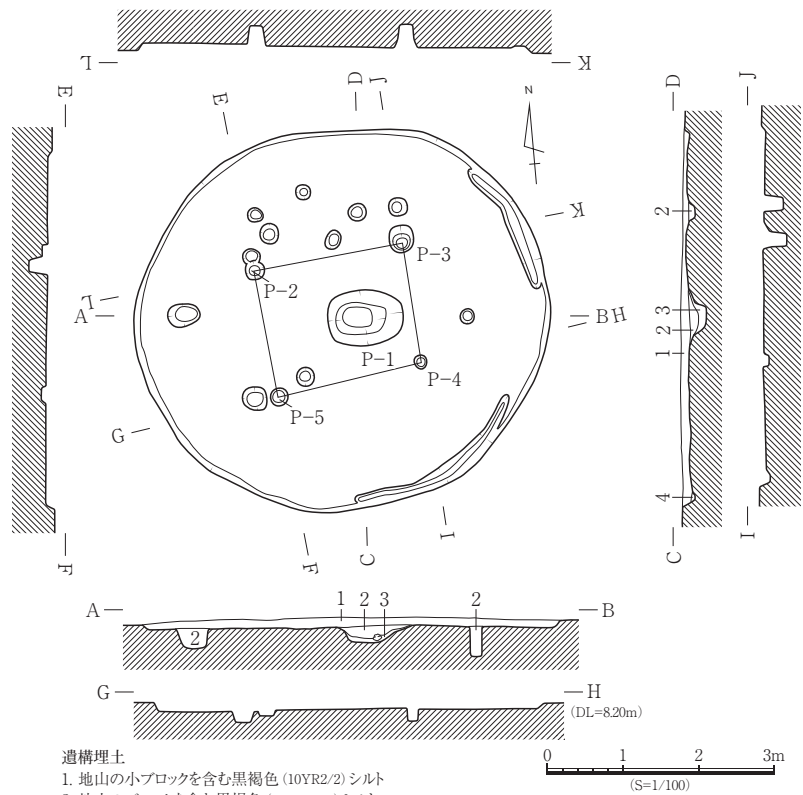


図3-278 ST-7008

トを囲むP-2～5とみられ、4本柱で棟を支えていたものと考えられる。中央ピット(P-1)は楕円形で、断面は播鉢状をなし、長径1.00m、短径0.74m、深さ29cmを測り、弥生土器8点が出土する。P-2は径25cmの円形で、深さ24cm、P-3は径36cmの円形で、深さ31cm、P-4は径18cmの円形で、深さ16cm、P-5は径24cmの円形で、深さ27cmを測る。柱間寸法は1.60～2.00mである。壁溝は北東壁沿いと南東壁から南壁沿いで確認され、幅13～22cm、深さ3～5cm、延長4.44mを測る。埋土は地山の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルトで、中央ピットは地山のブロックを含む黒褐色(10YR2.5/2)シルトで、下層に黒褐色(10YR2/2)シルトのブロックを多く含む黄褐色～暗灰黄色(2.5Y5/2.5)砂質シルトの堆積が認められた。出土遺物には弥生土器178点、石製品4点、サヌカイト片6点(9.3g)がみられ、弥生土器1点(7257)と石製品3点(7258～7260)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-279 7257)

甌で、底部には焼成後に2.9cmの円孔を穿つ。外面には煤が付着し、胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

石製品(図3-279 7258～7260)

7258は2穴の石庖丁で、背は外湾し、刃部は直線刃となり、刃部長8.8cm、幅0.4cmを測る。紐孔は径0.4cmで、両面から穿孔される。

7259はサヌカイト製の石鏃で、凸基式となる。

7260は投弾で、球形に近く、重量は36.2gを測る。

ST-7009(図3-280)

VII-1区の中央部、ST-7017の北隣で検出した円形の竪穴建物跡で、径は3.82～4.00mで、遺存する壁高は3～14cm、床面の標高は8.066～8.110mを測る。付属遺構として、中央ピット(P-1)と壁溝および12個のピットを確認した。この内、支柱穴と考えられるピットは中央ピットを囲むP-2～5とみられ、4本柱で棟を支えていたものと考えられる。中央ピット(P-1)は楕円形で、長径0.66m、短径0.38m、深さ16cmを測り、石製品1点(7272)が出土する。P-2は径25～30cmの楕円形で、深さ30cm、P-3は径27

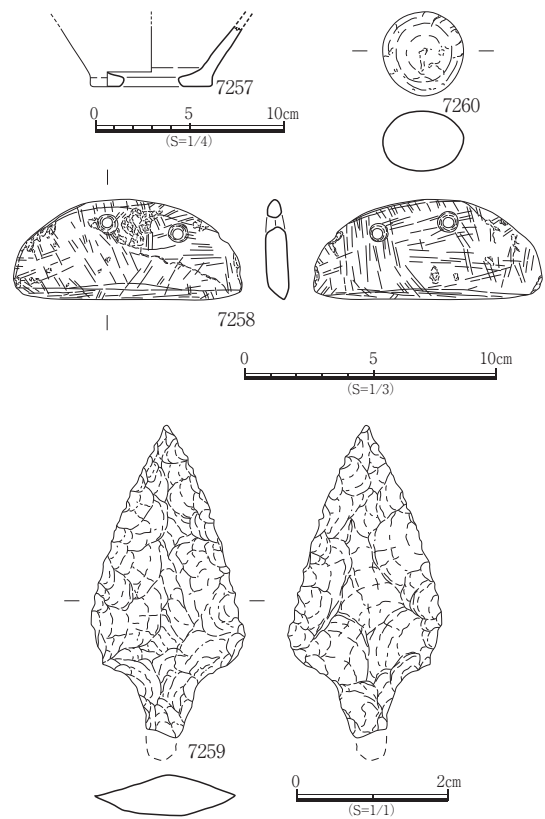
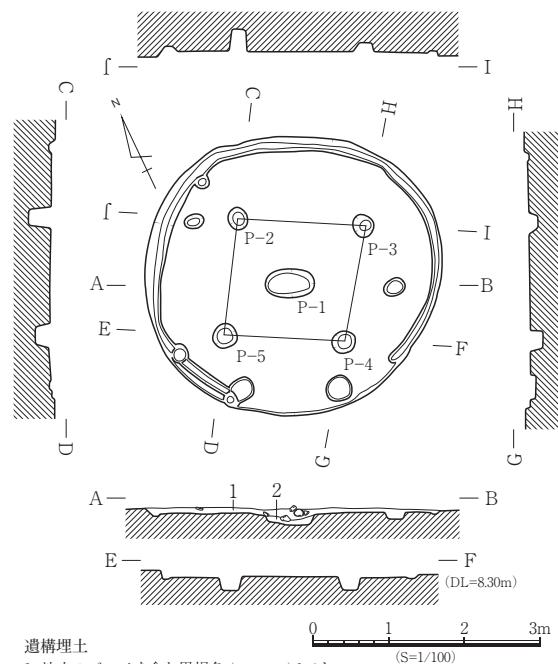


図3-279 ST-7008出土遺物実測図



遺構埋土

- 1. 地山のブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルト
- 2. 地山のブロックを含む黒褐色(10YR2.5/2)シルト

図3-280 ST-7009

～30cmの円形で、深さ11cm、P-4は径32cmの円形で、深さ17cm、P-5は径32cmの円形で、深さ19cmを測る。柱間寸法は1.55～1.70mである。壁溝は南壁を除く壁際に沿って巡っており、幅10～20cm、深さ2～6cm、延長9.04mを測る。壁溝が確認されなかった南壁が入口であった可能性がある。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルトで、中央ピットには地山のブロックを含む黒褐色(10YR2.5/2)シルトの堆積が認められた。出土遺物には弥生土器203点、石製品7点、サヌカイト片2点(4.4g)がみられ、弥生土器10点(7261～7270)と石製品5点(7271～7275)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-281 7261～7270)

7261～7265は壺で、7261～7263は、口頸部が外反するもので、口縁部には粘土を貼付する。7261は、口縁端部が凹面となる。7262は口縁端部下端にヘラ状工具による刻目、頸部外面下端に竹管文、クシ描直線文とクシ描波状文を施文する。7263は口縁端部にはヘラ状工具により斜格子文、頸部外面下端に突帯を貼付し、ヘラ状工具で斜格子文を施す。胴部内面は指ナデ調整、外面はナデ調整の後に部分的にヘラ磨きを施す。胎土には、7261が細粒砂から粗粒砂を多く、7262・7263が細粒砂から極粗粒

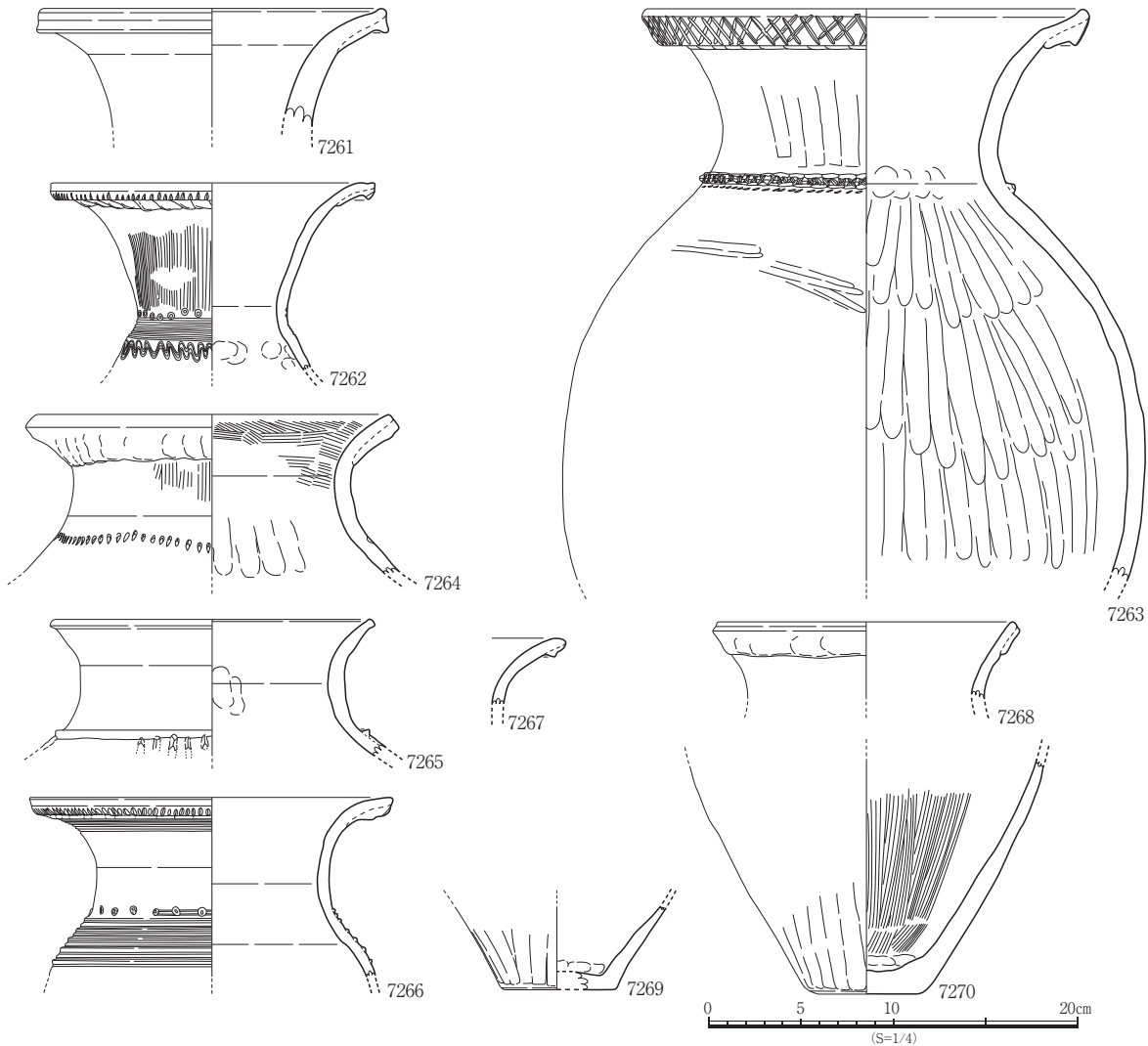


図3-281 ST-7009出土遺物実測図1

砂を比較的多く含む。7264は、口縁部が短く直立する頸部から外反するもので、口縁部には粘土帯を貼付し、外面には指頭圧痕が残る。肩部外面基部にはヘラ状工具で刺突文を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。7265も7264と同形態であるが、口縁部には粘土帯が貼付されていない。肩部外面下端には突帯と棒状浮文を貼付する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

7266～7269は甕で、口縁部は貼付口縁となる。7266は、口縁部がやや外反して立ち上がる頸部から大きく外反し、端部下端にヘラ状工具で刻目、その下に微隆起突帯を作り出し、突帯の下にクシ描波状文を施し、頸部外面下端から肩部にかけて円形竹管浮文と微隆起突帯を5条貼付する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。7267は、口縁部が外反し、外面に微隆起突帯を作り出す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。7268は、口縁部が外傾し、外面に粘土帯を貼付し、指頭圧痕が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

7269は甕の底部とみられるもので、外面にはヘラナゲ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

7270は壺の底部とみられるもので、内面には指押えとハケ調整、外面にはヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-282 7271～7275)

7271・7272は太型蛤刃石斧で、7271は刃部が欠損し、基部に研磨痕がみられる。7272はほぼ全面を研磨し、刃部長は4.7cm、幅2.0cmを測る。

7273は投弾で、表面は平滑で、重量は38.8gを測る。

7274は磨石で、扁平となり、縁辺を中心に擦痕が残る、部分的に光沢があり、側面には摩滅痕が残る。

7275は立方体の砥石で、3面に使用痕が残る。

ST-7010(図3-283)

VII-1区の北東部で壁溝と中央ピット(P-1)を検出したことから竪穴建物跡の存在が想定されたもので、径約4.00mの円形の小型竪穴建物跡とみられ、床面の標高は8.052～8.088mを測る。遺構は、古

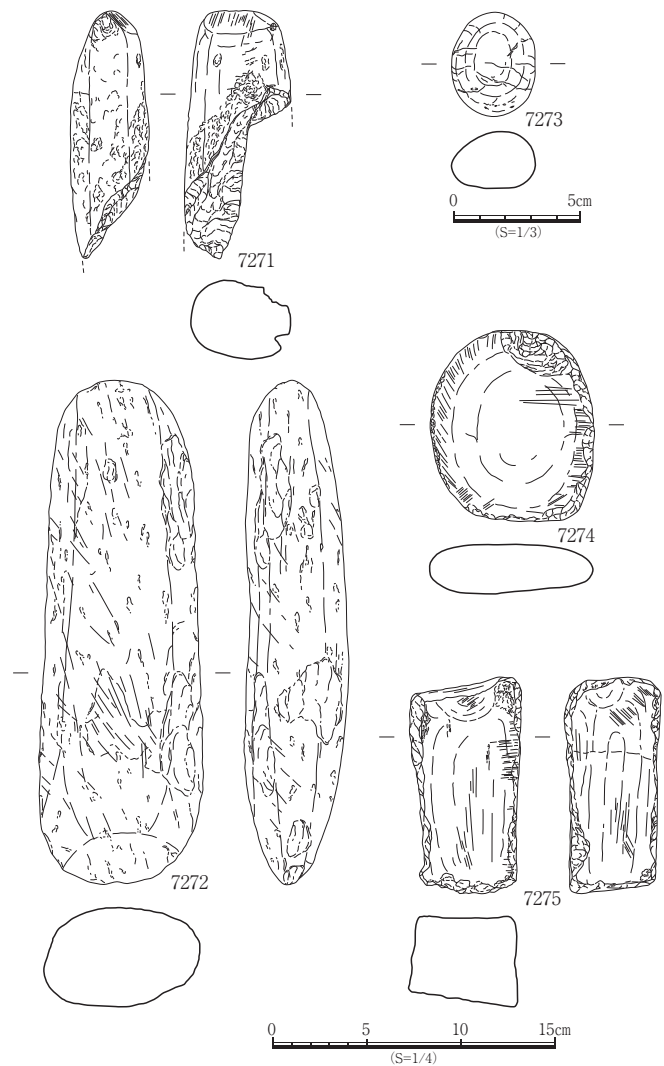


図3-282 ST-7009出土遺物実測図2

代の建物跡(SB-7044)と中世の溝跡(SD-7011)に掘り込まれる。付属遺構として、中央ピット(P-1)と壁溝および6個のピットを確認した。この内、支柱穴と考えられるピットは中央ピットを囲むP-2・3で、未確認であるが配置状況から西側に2個あったものとみられ、4本柱で棟を支えていたものと考えられる。中央ピット(P-1)は不整楕円形を呈し、長径0.70m、短径0.57m、深さ19cmを測り、弥生土器6点、石製品1点(7276)が出土する。P-2は径33cmの円形で、深さ10cm、P-3は径34cmの円形で、深さ33cmを測る。柱間寸法は1.40mである。壁溝は北壁沿いと東壁から南壁沿いで確認され、幅29~48cm、深さ4~5cm、延長6.70mを測る。埋土は、壁溝の埋土から地山のブロックを含む黒褐色(10YR2/2~3/2)シルトであったものとみられる。出土遺物には弥生土器16点、石製品1点がみられ、弥生土器1点(7276)が図示できた。

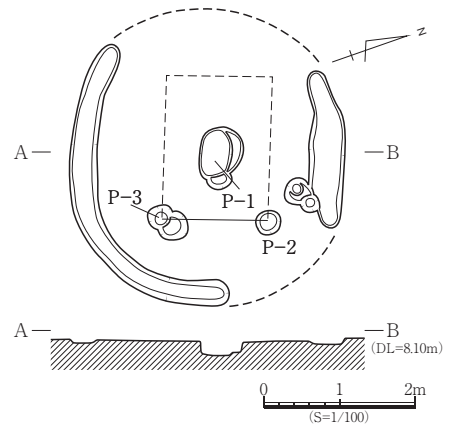


図3-283 ST-7010

出土遺物

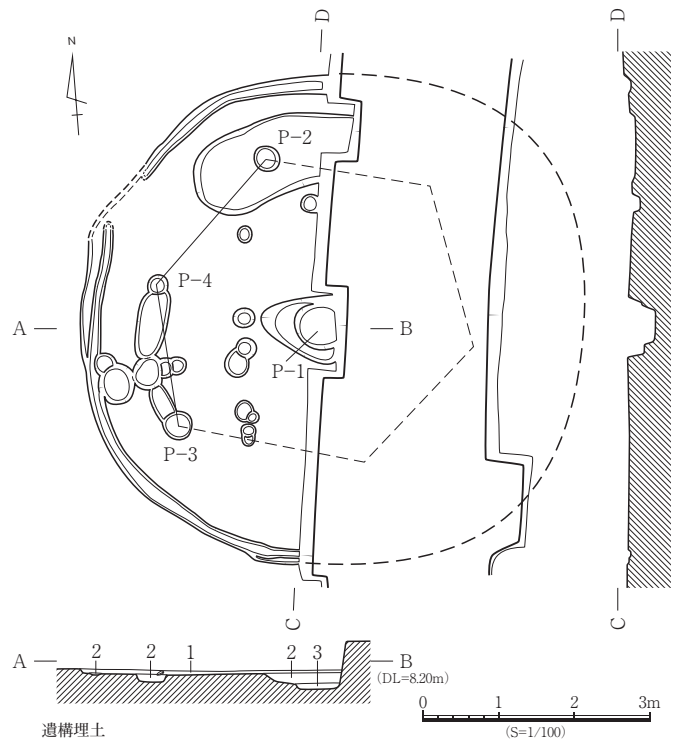
石製品(図3-285 7276)

砥石で、両面と側面の3面に使用痕が残る。

ST-7011(図3-284)

VII-1区の東端部の壁際、SK-7020を切った形で検出した径約6.50mの円形とみられる竪穴建物跡で、遺存する壁高は5~12cm、床面の標高は8.001~8.067mを測る。復元するとVII-2区にも遺存していたとみられるが、確認されていない。

付属遺構として、中央ピット(P-1)と壁溝および17個のピットを確認した。この内、支柱穴と考えられるピットは中央ピットを囲むP-2~4で、未確認であるが配置状況から東側に3個あったものとみられ、6本柱で棟を支えていたものと考えられる。中央ピット(P-1)は不整楕円形を呈し、長径1.02m以上、短径0.92m、深さ36cmを測り、弥生土器43点(7277)、石製品1点(7279)が出土する。P-2は径36cmの円形で、深さ29cm、P-3は径39cmの円形で、深さ37cm、P-4は径29cmの円形で、深さ13cmを測る。柱間寸法は1.90~2.20mである。壁溝は西壁沿いを除く各壁沿いで確認され、幅12~20cm、深さ2~4cm、延長8.79mを測る。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトで、砂礫が混じっていた。出土遺物には



遺構埋土

1. 地山のブロックを含む砂礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト
2. 黒褐色(10YR3/2)シルト
3. 黒褐色(10YR2/2)シルト

図3-284 ST-7011

弥生土器105点, 石製品1点がみられ, 弥生土器2点(7277・7278)と石製品1点(7279)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-285 7277・7278)

いずれも甕で, 7277は, 口頸部が倒卵形の胴部から外反し, 口縁部は貼付口縁となり, 端部下端にヘラ状工具で刻目, 肩部外面に簾状文を挟んで3本単位のクシ描直線文を施し, 下胴部外面にはキズとみられるヘラ描き状の沈線が3条残る。外面には煤が付着する。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。7278は, 口縁部が直立する頸部から外反し, 貼付口縁となり, 外面には2段に指頭圧痕が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

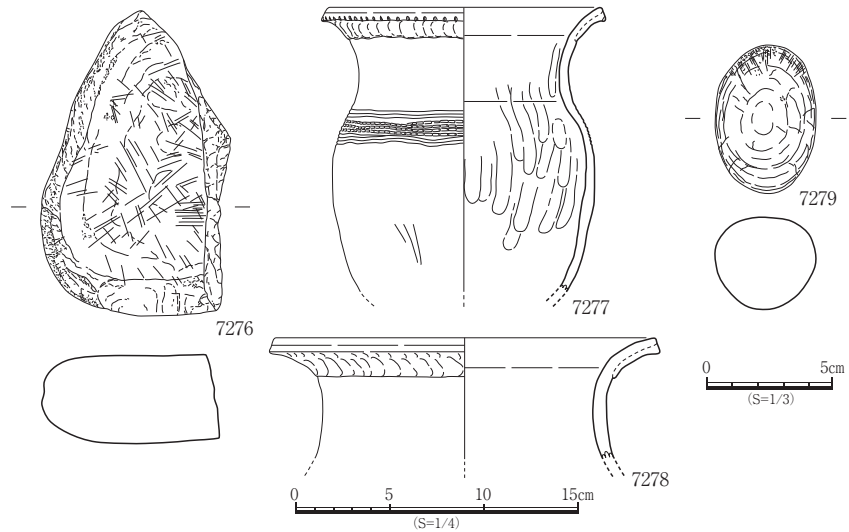


図3-285 ST-7010・7011出土遺物実測図

石製品(図3-285 7279)

投弾で, 表面は平滑となり, 部分的に擦痕が残る。

ST-7012(図3-286)

VII-5区の南西端部, 壁際で検出した円形の竪穴建物跡で, 径は約4.50mとみられ, 遺存する壁高は9~16cm, 床面の標高は8.041~8.093mを測る。南側約2/3は調査区外にある。付属遺構として, 壁溝と14個のピットを確認した。この内, 主柱穴と考えられるピットは検出状況からP-1~3で, 未確認であるが配置状況から南側に2個あったものとみられ, 5本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-1は径18~23cmの楕円形で, 深さ27cm, P-2は径25~28cmの楕円形で, 深さ21cm, P-3は径26cmの円形で, 深さ20cmを測る。柱間寸法は1.20・1.60mである。壁溝は検出した壁沿いすべてで確認され, 幅14~22cm, 深さ3~7cm, 延長5.49mを測る。埋土は地山のブロックを少し含む黄褐色(2.5Y5/4)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器9点がみられたが, 図示できるものはなかった。

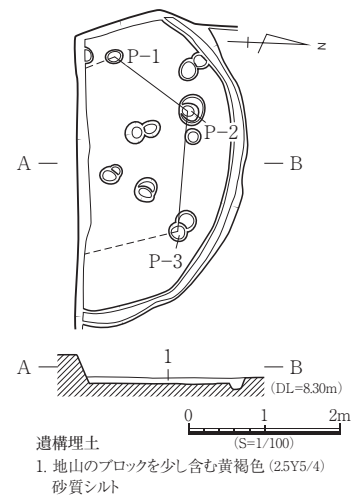


図3-286 ST-7012

ST-7013(図3-287)

VII-1区北西部, ST-7014と重複した形で検出した多角形の小型竪穴建物跡で, 南側を中世の屋敷を囲む溝(SD-7009)に掘り込まれる。一辺が2.00~2.50mで, 対角線の長さが約4.50mの六角形と考えられる。遺存する壁高は7~10cmで, 床面の標高は8.022~8.059mである。付属遺構として小型の中央ピット(P-1)と壁溝および17個のピットを確認した。この内, 主柱穴は中央ピットを囲むP-2~

2. VII区 (1) 弥生時代

6とみられ、5本柱で棟を支えていたものと考えられる。中央ピット(P-1)は長径0.49m、短径0.39mの楕円形で、深さ30cmを測る。P-2は径24cmの円形で、深さ10cm、P-3は径24cmの円形で、深さ39cm、P-4は径35cmの円形で、深さ34cm、P-5は径26～30cmの楕円形で、深さ34cm、P-6は径34～38cmの楕円形で、深さ8cmを測る。柱間寸法は1.10～1.75mである。壁溝は北壁沿いと北東壁沿いで確認され、幅9～12cm、深さ2～4cm、延長3.27mを測る。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器72点、石製品1点、頁岩片1点がみられ、弥生土器3点(7280～7282)、石製品1点(7283)が図示できた。

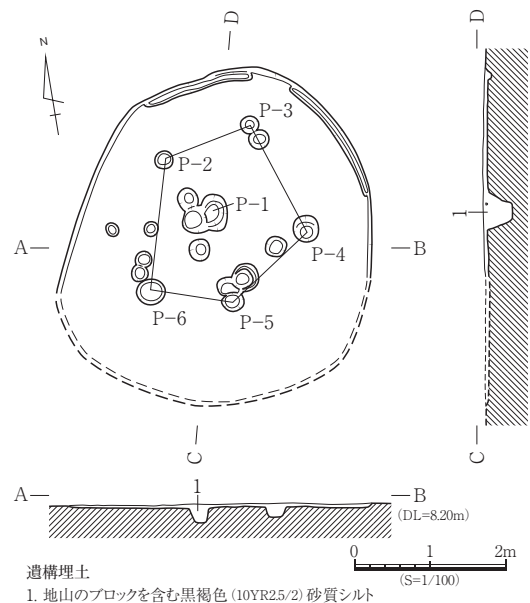


図3-287 ST-7013

出土遺物

弥生土器(図3-288 7280～7282)

7280は壺で、口縁部は外傾する頸部から開き、粘土帯を貼付する。口縁部外面にはヘラ状工具で斜めに刻目を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

7281・7282は甕である。7281は、頸部が内湾気味に真上に立ち上がり胴部から外傾するもので、外面中胴部に煤が付着し、下胴部は被熱で変色し、部分的にハケ目が残る。7282は、口頸部が内湾気味に外上方に立ち上がり胴部から外反するもので、口縁部にはハケ調整を施してから粘土帯を貼付する。口縁部外面には指頭圧痕が残る。胴部外面には煤が付着する。いずれも胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

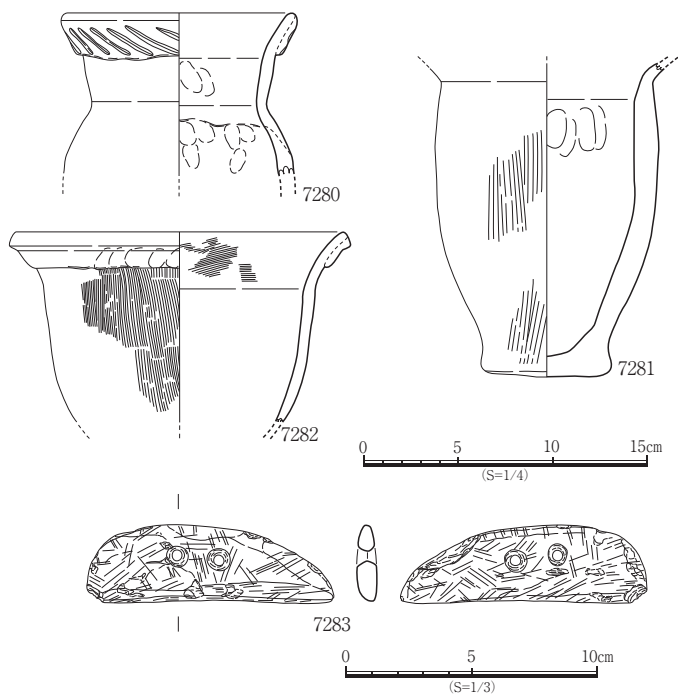


図3-288 ST-7013出土遺物実測図

石製品(図3-288 7283)

2穴の石庖丁で、背は外湾し、刃部は直線刃となる。刃部長は9.8cm、幅0.3～0.8cmを測る。全面を研磨し、径0.4cmの紐孔を両面から穿孔する。

ST-7014(図3-289)

VII-1区北西部、ST-7013と重複した形で検出した多角形の竪穴建物跡で、北側を中世の屋敷を囲む溝(SD-7009)に掘り込まれる。一辺が2.50～2.80mで、対角線の長さが約5.50mの六角形と考えられる。遺存する壁高は6～11cmで、床面の標高は7.946～8.039mである。付属遺構として中央ピット

(P-1)と壁溝および21個のピットを確認した。この内、支柱穴は中央ピットを囲むP-2~5とみられ、4本柱で棟を支えていたものと考えられる。中央ピット(P-1)は長径0.70m、短径0.40mの楕円形で、深さ20cmを測り、弥生土器10点が出土した。P-2は径22cmの円形で、深さ33cm、P-3は径40cmの円形で、深さ18cm、P-4は径32cmの円形で、深さ15cm、P-5は径38~42cmの楕円形で、深さ23cmを測る。柱間寸法は1.40~1.90mである。壁溝は南壁沿いで途切れ途切れに確認され、幅10~18cm、深さ3~8cm、延長2.93mを測る。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトで、中央ピットには地山のブロックと炭化物を含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルトの堆積が認められた。出土遺物には弥生土器268点、石製品1点、サヌカイト片1点(1.5g)がみられたが、図示できるものはなかった。

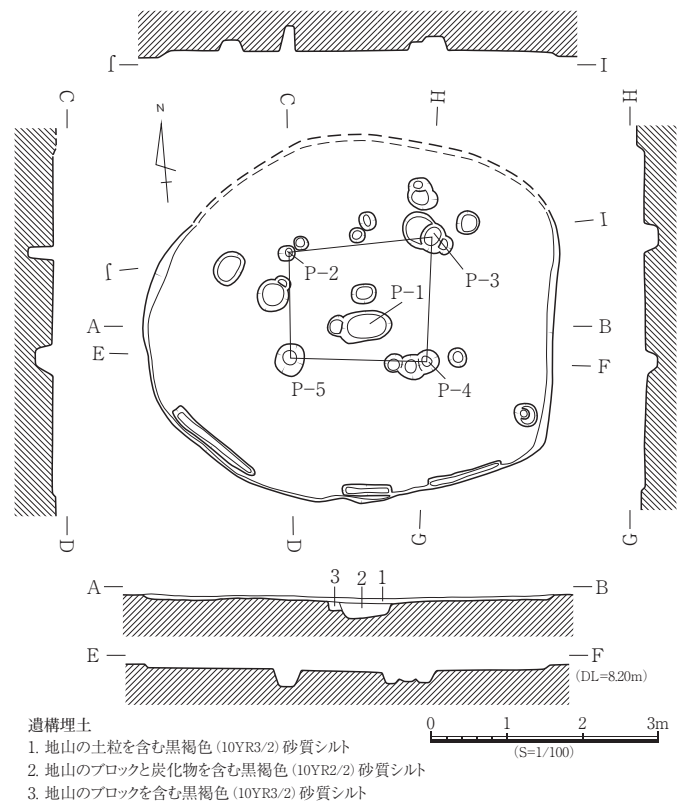


図3-289 ST-7014

ST-7015・7016 (図3-290)

VII-2区北東部、北壁際で検出した竪穴建物跡で、北側は調査区外にある。ST-7015はST-7016の床面から壁溝を確認したことによりその存在が推測されたもので、径約4.00mを測る円形の小型竪穴建物跡とみられる。中央ピット(P-1)は1個しか確認されていないことからST-7016で再利用したものと考えられる。ST-7015の付属遺構としては、壁溝と2個の柱穴を確認した。この2個のピットは検出状況から支柱穴とみられ、未確認ではあるが配置状況から北側にも支柱穴が2個あったものとみられ、4本柱で棟を支えていたものと考えられる。P-2は径22cmの円形で、深さ44cm、P-3は径19~24cmの楕円形で、深さ2cmを測る。柱間寸法は1.50mである。壁溝は南壁沿いから西壁沿いに設けられていたものとみられ、幅12~19cm、深さ2~6cm、延長4.55mを測る。埋土は、壁溝の埋土から地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/1)砂質シルトとみられる。遺物は出土しなかった。

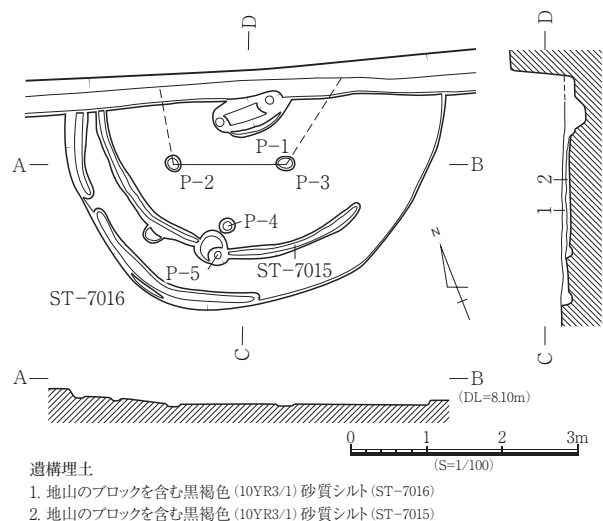


図3-290 ST-7015・7016

ST-7016はST-7015の建替えと考えられ、約50cm拡張されている。平面プランは多角形とみられ、

一辺が2.00～2.80mで、対角線の長さが約5.00mの六角形と考えられる。遺存する壁高は11～17cmで、床面の標高は7.739～7.863mである。付属遺構として中央ピット(P-1)と壁溝および4個のピットを確認した。この内、支柱穴と判断されるピットは見出せなかったが、P-4(径18～22cmの楕円形で、深さ5cm)とP-5(径28～30cmの楕円形で、深さ15cm)がその可能性を残す。中央ピット(P-1)は楕円形を呈し、両端に柱穴がみられ、長径約1.12m、短径約0.60m、深さ25cmを測り、弥生土器4点が出土する。壁溝は南壁沿いから西壁沿いで確認され、幅16～22cm、深さ2～4cm、延長3.82mを測る。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器10点がみられたが、図示できるものはなかった。

ST-7017 (図3-291)

VII-1区の中央部、SK-7006・7007を切り、SK-7008に掘り込まれた形で検出した竪穴建物跡で、古代の建物跡(SB-7023)、中世の建物跡(SB-7074・7087)、屋敷を囲む溝跡(SD-7009)などに掘り込まれる。中でも、屋敷を囲む溝跡(SD-7009)によって、西壁は遺存していない。

中央ピット(P-1)は1個で、平面プランに重複関係はなく、壁溝も建替えを示唆するものは未確認であるが、床面からは39個もの柱穴を確認しており、建替えを想定せざるを得ない。その際、支柱穴として考えられるのはP-2～4で、未確認であるが、配置的に中央ピットを挟んだP-2の対角線上に支柱穴が1個あったものとみられ、4本柱で棟を支えていたものと考えられる。その配置から平面プランは検出したものより小規模

であったとみられ、径6.50mの円形の竪穴建物跡が1期として想定される。P-2は径36cmの円形で、深さ40cm、P-3は径48cmの円形で、深さ46cm、P-4は径21cmの円形で、深さ45cmを測り、柱間寸法は2.30・2.80mとみられる。埋土は、ピットの埋土から地山の土粒を含む黒褐色(10YR2.5/2)シルトであったものと考えられる。ピットからは遺物は出土しなかった。

2期は、検出状況から長辺約6.50m、短辺約6.00mの隅丸方形の竪穴建物跡が考えられる。遺存する壁高は9～11cm、床面の標高は8.000～8.110mを測り、主軸方向はN-9°-Eを示す。付属遺構として、再利用したとみられる中央ピット(P-1)と壁溝および35個のピットを確認した。この内、支柱穴と考えられるピットは中央ピットを囲むP-5～9とみられ、5本柱で棟を支えていたものと考えられる。中央ピット(P-1)は不整楕円形で、長径1.04m、短径0.79m、深さ33cmを測り、弥生土器46点、石製品1点、サヌカイト片124点(14.0g)が出土する。P-5は径22～25cmの楕円形で、深さ33cm、P-6は径23cmの円形で、深さ40cm、P-7は径26cmの円形で、深さ39cm、P-8は径約38cmの円形で、深さ35cm、P-9は径20～28cmの楕円形で、深さ36cmを測り、掘方はいずれもしっかりしている。柱間寸法は1.60～

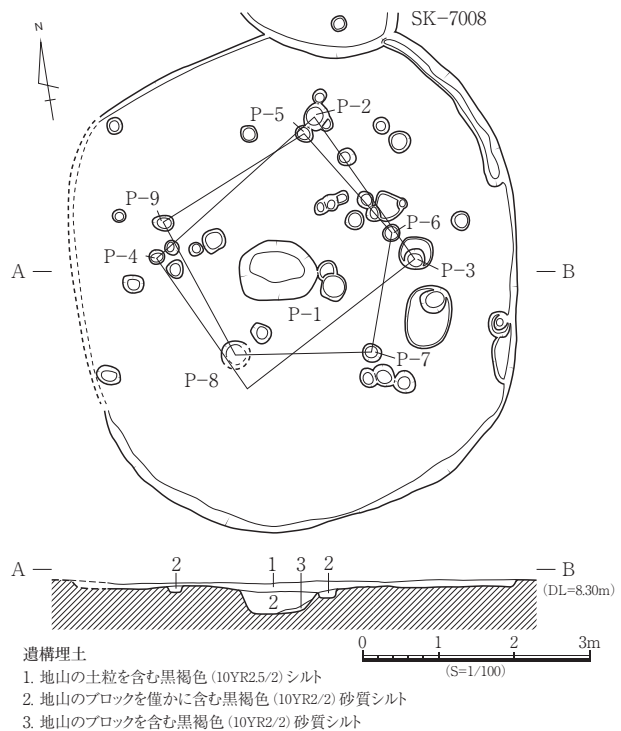


図3-291 ST-7017

2.20mである。壁溝は北東壁沿いと東壁沿いにみられ、幅16～20cm、深さ2～4cm、延長3.36mを測る。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR2.5/2)シルトで、中央ピットには黒褐色(10YR2/2)砂質シルトの堆積が認められ地山の土粒・ブロックを含む度合いにより2層に分層される。出土遺物には弥生土器370点、石製品6点、サヌカイト片845点(68.6g)、軽石1点がみられ、弥生土器7点(7284～7290)と石製品3点(7291～7293)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-292 7284～7290)

7284～7288は甕である。7284は、口縁部が内傾して立ち上がる胴部から外反するもので、胴部外面にはハケ目が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。7285は口頸部が外反するもので、口縁部にはハケ調整の後に粘土帯を貼付し、端部下端にはヘラ状工具による刻目を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。7286は、口縁部が外反し、貼付口縁となるもので、端部下端にヘラ状工具による刻目、貼付微隆起突帯、クシ描直線文を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。7287は、口縁部が直立する胴部から大きく外傾するもので、貼付口縁となる。胴部外面にはヘラ削りを施し、口縁部から上胴部外面に煤が付着する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。7288は、口頸部がくの字形を呈するもので、最大径は胴部中位より上にある。口縁部は貼付口縁で、端部は凹面となる。胴部内面はヘラ削り、外面は粗めのハケ調整の後にナデ調整を加える。外面中胴部には煤が付着する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。7289は甕の底部とみられるもので、外面には煤が付着する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

7290はミニチュア土器で、甕を模ったものとみられ、口頸部はほぼ直立する胴部から外反し、端部は丸い。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-292 7291～7293)

7291はサヌカイト製の石鏃で、平基となる。

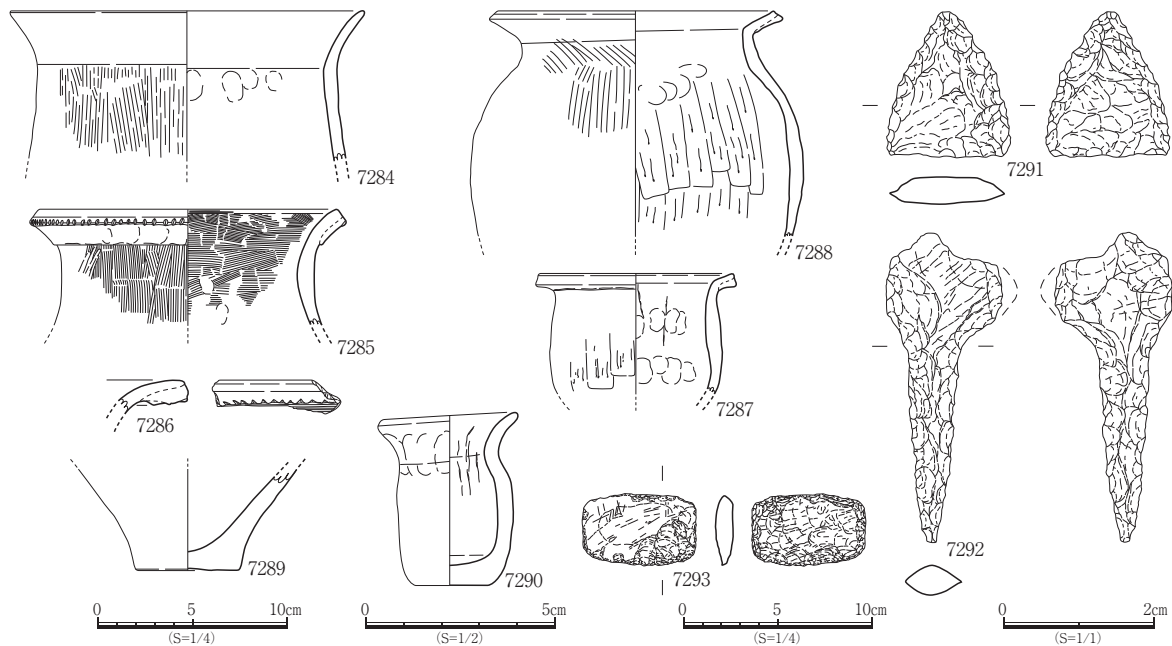


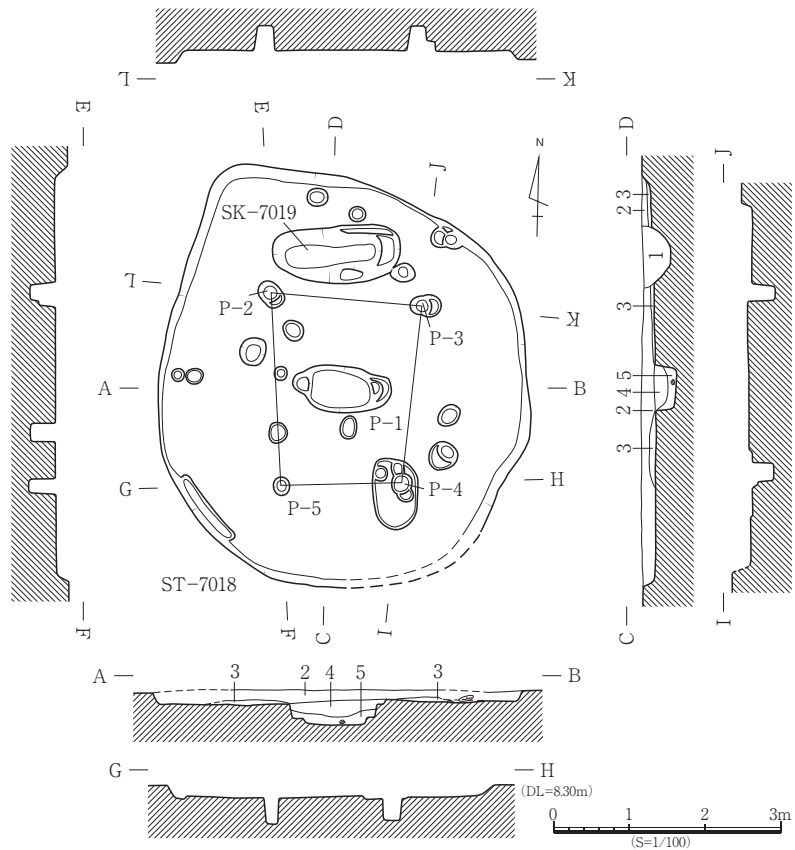
図3-292 ST-7017出土遺物実測図

7292はサヌカイト製の穿孔具で、基部は広く、先端に向って細く仕上げる。

7293は石斧の未成品ではないかとみられるが、判然としない。片面には研磨部分と剥離部分が残り、片面は剥離のままである。

ST-7018 (図3-293)

VII-1区の南東部、ST-7019の北隣で検出した長辺5.42m、短辺4.96mを測る隅丸方形とみられる竪穴建物跡で、古代の建物跡5棟(SB-7005・7016・7017・7027・7042)などに掘り込まれていた。遺存する壁高は16cm、床面の標高は7.922~7.964mを測り、主軸方向はN-4°Eを示す。付属遺構として、中央ピット(P-1)と壁溝および25個のピットを確認した。この内、支柱穴と考えられるピットは中央ピットを囲むP-2~5とみられ、4本柱で棟を支えていたものと考えられる。中央ピット(P-1)は楕円形で両端にピットがみられ、長径1.29m、短径



遺構埋土

- 1. 地山の土粒を含む黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルト(SK-7019)
- 2. 地山のブロックを含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルト(ST-7018)
- 3. 地山の土粒を含む黒褐色(10YR2/2)シルト(ST-7018)
- 4. 地山のブロックを僅かに含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルト(ST-7018)
- 5. 地山のブロックを含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルト(ST-7018)

図3-293 ST-7018, SK-7019

0.62m、深さ26cmを測り、サヌカイト片1点(1.3g)が出土する。P-2は径28cmの円形で、深さ33cm、P-3は径24~28cmの楕円形で、深さ31cm、P-4は径28cmの円形で、深さ33cm、P-5は径24cmの円形で、深さ36cmを測る。柱間寸法は1.60~2.55mである。壁溝は南西壁沿いのみで確認され、幅17~18cm、深さ2cm、延長1.08mを測る。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルトを主体に床面近くで地山の土粒を含む黒褐色(10YR2/2)シルトの堆積が認められた。中央ピットの埋土は黒褐色(10YR2/2)砂質シルトを主体とし地山のブロックの含み度合いにより2層に分層される。出土遺物には弥生土器224点、石製品4点、サヌカイト片5点(39.8g)がみられ、弥生土器5点(7294~7298)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-294 7294~7298)

7294・7295は壺で、7294は、口縁部が外反し、外面にはクシ描直線文を施文した上で、円形浮文(復元で14ヵ所)を貼付する。7295は、口縁部がほぼ直立する頸部から外反するもので、口縁部を肥厚する。

口頸部外面には煤が付着する。胎土には、7294が細粒砂から極粗粒砂を多く、7295が細粒砂から極細粒中礫を比較的多く含む。

7296は甕で、口縁部は外反し、貼付口縁となり、端部下端にハケ状工具による刻目、その下に貼付微隆起突帯とクシ描直線文を施す。胎土には

7297は甕の底部で、外面にはハケ調整の後にヘラ磨き、外底面はヘラ削りとナデ調整を施す。外面には煤が付着し、器面が剝離する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

7298はミニチュア土器で、脚台部が遺存し、器面には指押えとナデ調整を施す。また、脚台部の内側には煤が付着し、胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

ST-7019 (図3-295)

VII-1区の南東部、ST-7018の南隣で検出した長辺5.10m、短辺4.90mを測る隅丸方形とみられる竪穴建物跡で、古代の建物跡4棟(SB-7017・7027・7041・7049)などに掘り込まれていた。遺存する壁高は20~27cm、床面の標高は7.889~7.943mを測り、主軸方向はN-3°-Eを示す。付属遺構として、中央ピット(P-1)と壁溝および17個のピットを確認した。この内、主柱穴と考えられるピットは中央ピットを囲むP-2~7とみられ、6本柱で棟を支えていたものと考えられる。中央ピット(P-1)は楕円形を呈し、長径0.70m、短径0.57m、深さ22cmを測り、弥生土器1点と石製品1点が出土する。P-2は径32~40cmの楕円形で、深さ41cm、P-3は径28cmの円形で、深さ56cm、P-4は径24cmの円形で、深さ37cm、P-5は径37~40cmの楕円形で、深さ43cm、P-6は径23~28cmの楕円形で、深さ49cm、P-7は径34cmの円形で、深さ55cmを測る。柱間寸法は1.25~1.75mである。壁溝は南壁沿いから北壁沿いで確認され、幅15~23cm、深さ2~6cm、延長9.19mを測る。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルトで、中央ピットには地山の土粒を含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルトの堆積が認められた。出土遺物には弥生土器360点、石製品3点、サヌカイト片2

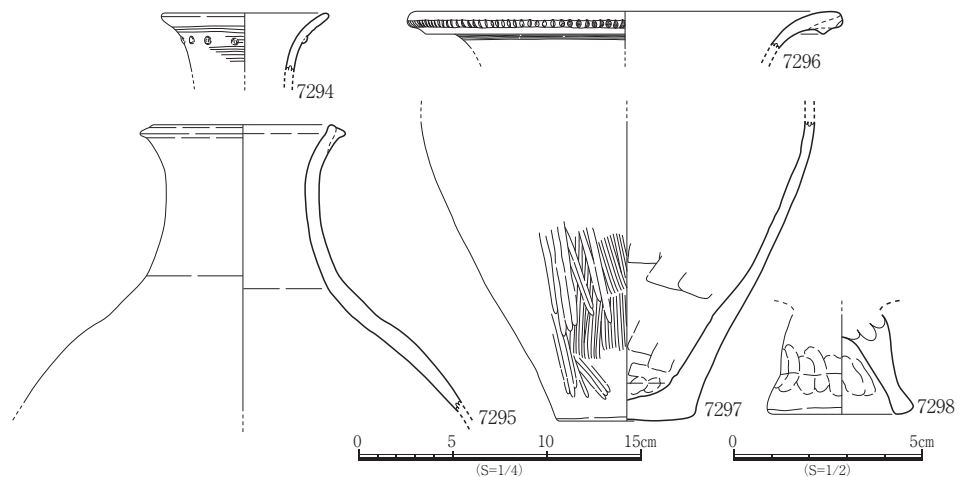


図3-294 ST-7018出土遺物実測図

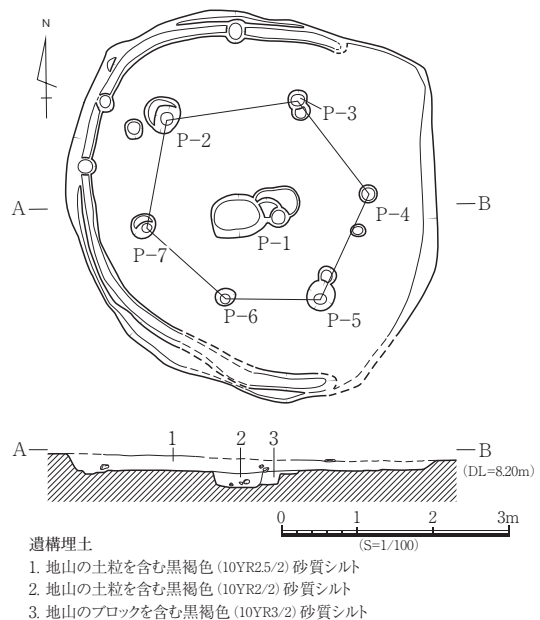


図3-295 ST-7019

点(17.9g)がみられ、弥生土器5点(7299～7303)と石製品1点(7304)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-296
7299～7303)

7299・7300は壺で、7299は、口縁部が外反するもので、端部を上下に拡張して凹線文、内面にはクシ描波状文を2段に施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。7300は、胴部が球形で、器壁は薄く、上胴部内外面にハケ調整を施し、肩部外面に円形浮文を貼付する。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

7301は甕で、口縁部は外反し、外面には微隆起突帯を4段貼付し、間にクシ描直線文を施し、さらに、一番下の微隆起突帯に接する形で楕円形浮文を貼付する。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。7302は甕の底部で、器壁が薄く、内面には焦げ目が残る。胎土には細粒砂から極細粒中礫を比較的多く含む。

7303は高杯で、杯部と脚台部は粘土円盤を充填し、口縁部は内湾する底部から直立し、端部は丸く、口縁部外面には削り出し突帯が巡る。口縁部はハケ調整の後でヨコナデ調整を加え、体部から底部と脚台外面にはヘラ磨きを施す。脚台内側はナデ調整を行う。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-296 7304)

小型両刃石斧で、研磨された表面には光沢があり、基部には敲打痕が残る。刃部は摩滅し、刃部長2.3cm、幅1.1cmを測る。

ST-7020(図3-297)

VII-5区の北部、SB-7003を切った形で検出した一辺約4.50mを測る方形とみられる小型の竪穴建物跡で、約半分は調査区外にある。遺存する壁高は10～20cm、床面の標高は8.018～8.056mを測り、主軸方向はN-33°-Wを示す。付属遺構として、壁溝および6個のピットを確認した。確認したピットはいずれも10cmに満たず、主柱穴と判断できなかったことから、未調査の北側に主柱穴が存在するものとみられ、中央ピットを挟んだ2本柱で棟を支えていたのではなかろうか。壁溝は南壁コーナー部沿いを除いて確認され、幅20～37cm、深さ5～10cm、延長4.84mを測る。埋土は極細粒中礫が若干

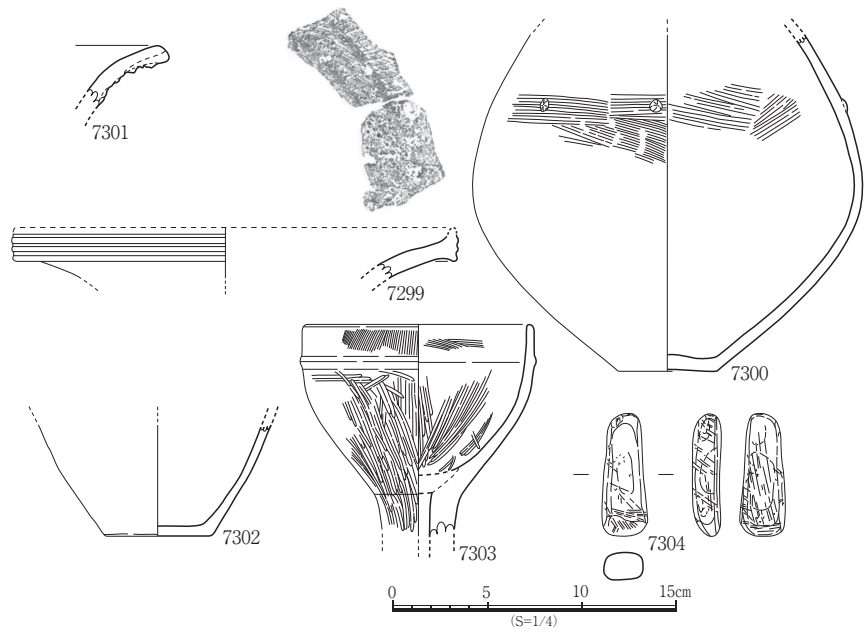
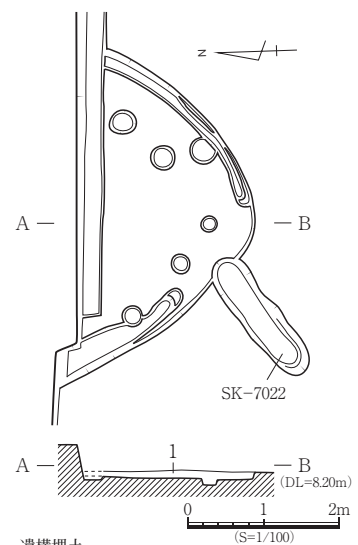


図3-296 ST-7019出土遺物実測図



遺構埋土
1. 極細粒中礫が若干混じる黒褐色(10YR3/2)砂質シルト

図3-297 ST-7020

混じる黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器16点がみられたが、図示できるものはなかった。

ST-7021 (図3-298)

Ⅶ-5区の東端部、東壁際で検出した一辺約4.80mを測る隅丸方形とみられる竪穴建物跡で、遺存する壁高は10～18cm、床面の標高は7.776～7.796mを測り、主軸方向はN-10°-Eを示す。また、東側約2/3は調査区外にある。床面からは少しずつ広がる3重の壁溝が検出されたことから2回の建替え(3時期)が行われ、建替えごとに建物を拡張したことが窺える。この他にピット12個を確認したが、支柱穴と考えられたのはP-1・2で、未確認であるが東側に対となる支柱穴が存在するものとみられ、4本柱で棟を支えていたものとみられる。ただし、この支柱穴がどの時期のものかは判然としない。この他にはP-3～5も規模から支柱穴の可能性が残る。なお、P-1は径30cmの円形で、深さ14cm、P-2は径28cmの円形で、深さ33cm、P-3は径26cmの円形で、深さ20cm、P-4は径34cmの円形で、深さ25cm、P-5は径30cmの円形で、深さ28cmを測る。P-1とP-2の柱間寸法は1.95mである。確認した壁溝は壁沿いを巡っており、SD-1が幅15～32cm、深さ6～12cm、延長4.07m、SD-2が幅14～20cm、深さ8～12cm、延長4.72m、SD-3が幅18～24cm、深さ5～14cm、延長6.47mを測る。埋土は上下2層に分層され、上層には地山の小ブロックを含む黒色(10YR2/1)砂質シルト、下層には地山の土粒を含む黒色～黒褐色(10YR2/1.5)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器48点、石製品1点がみられ、石製品1点(7305)が図示できた。

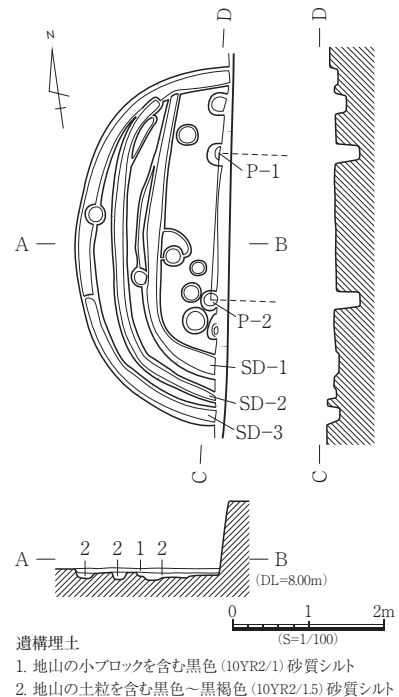


図3-298 ST-7021

出土遺物

石製品(図3-301 7305)

扁平な磨石で、縁辺を中心に擦痕、片面中央と側面3ヵ所に敲打痕と摩滅痕が残存しており、叩石としても使用されたものとみられる。

ST-7022 (図3-299)

Ⅶ-1区北西部、ST-7001の西隣で検出した隅丸方形の竪穴状遺構である。長辺2.13m、短辺1.56m、深さ43cmを測り、長軸方向はN-23°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。底面から3個のピットを確認した。中央部には方形のP-1(一辺48～55cmの方形で、深さ22cm)があり、溝状を呈するP-2(22～37cmで、深さ5cm)が取り付く。東壁際でP-3(径18cmの円形で、深さ12cm)を検出した。この内、P-1は覆いの支柱穴であった可能性がある。埋土は上下2層に分層され、上層は地山の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルト、下層が地山のブロックを含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

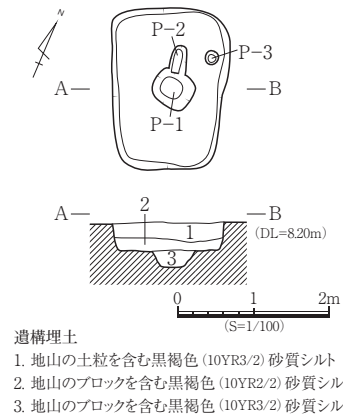
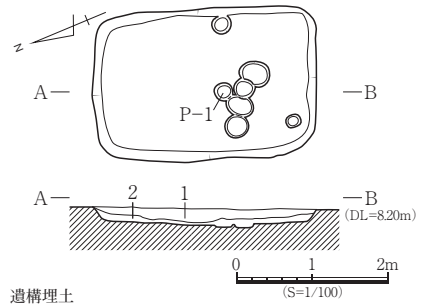


図3-299 ST-7022

ST-7023 (図3-300)

VII-1区西部, ST-7017の西側で検出した隅丸方形の竪穴状遺構である。長辺2.98m, 短辺2.00m, 深さ23cmを測り, 長軸方向はN-22°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。底面から7個のピットを確認した。いずれも浅いものであるが, 位置的にP-1(径24cmの円形で, 深さ2cm)が支柱穴であった可能性もある。埋土は上下2層に分層され, 上層は地山の土粒を少し含む黒色~黒褐色(10YR2/1.5)砂質シルト, 下層が地山の小ブロックを多く含む黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器135点, 石製品4点がみられ, 弥生土器2点(7306・7307)と石製品1点(7308)が図示できた。



遺構埋土
1. 地山の土粒を少し含む黒色~黒褐色(10YR2/1.5)砂質シルト
2. 地山の小ブロックを多く含む黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルト

図3-300 ST-7023

出土遺物

弥生土器(図3-301 7306・7307)

いずれも甕で, 7306は, 口縁部が内傾気味に立ち上がる頸部から外反するもので, 口縁部は貼付口縁となり, 外面には指頭圧痕が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。7307は, 口頸部が外反するもので, 口縁部外面には4本単位のクシ描波状文が施される。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

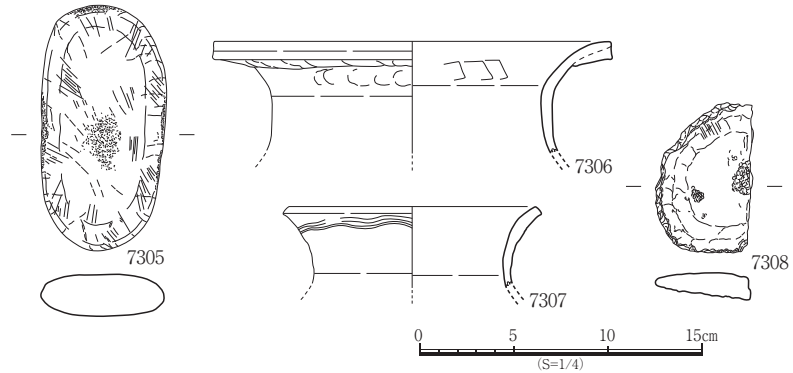


図3-301 ST-7021・7023出土遺物実測図

石製品(図3-301 7308)

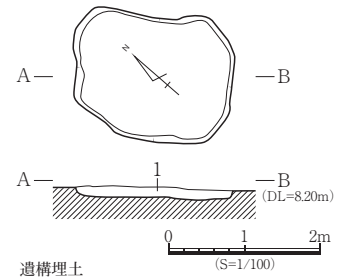
叩石で, 片面中央に敲打痕, 縁辺を中心に擦痕が残る。

ST-7024 (図3-302)

VII-1区西部, SB-7002の西側で検出した不整形の竪穴状遺構である。長辺2.17m, 短辺1.71m, 深さ13cmを測り, 長軸方向はN-34°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。付属遺構とみられるものは確認できなかった。埋土は地山の土粒を少し含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器74点がみられたが, 図示できるものはなかった。

ST-7025 (図3-303)

VII-1区南西部, ST-7007とST-7008の間で検出した不整形の竪穴状遺構で, 古代の建物跡(SB-7008・7048)などに掘り込まれる。長辺は約2.40mとみられ, 短辺1.79m, 深さ25cmを測り, 長軸方向はN-55°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。付属遺構とみられるものは確認できなかったが, 北壁際と南壁際に段部を有する。埋土は地山



遺構埋土
1. 地山の土粒を少し含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルト

図3-302 ST-7024

のブロックを含む黒褐色(10YR2/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器50点、石製品1点がみられ、弥生土器2点(7309・7310)と石製品1点(7311)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-304 7309・7310)

いずれも壺である。7309は、口縁部が外傾する頸部からさらに外傾するもので、口縁端部はハケ調整の後にヨコナデ調整を加え、下端にヘラ状工具による刻目を施す。頸部内面にはしぼり目、上胴部内面には指頭圧痕が残る。7310は、口縁部が外反して開くもので、端部は肥厚され、凹線文を施す。いずれも胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-304 7311)

細長い小型石斧で、全面を研磨する。刃部は両刃となり、刃部長1.7cm、幅1.5cmを測る。

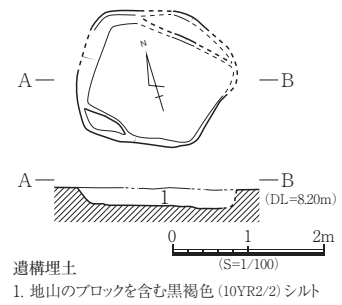


図3-303 ST-7025

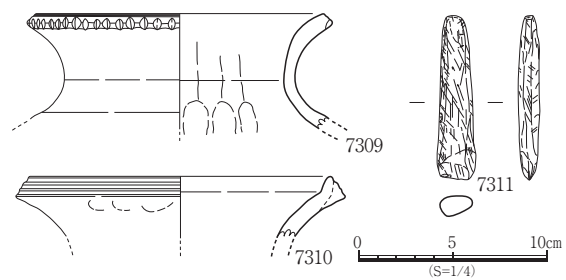


図3-304 ST-7025出土遺物実測図

ST-7026(図3-305)

VII-1区南西端部、ST-7007の西側で検出した不整形の竪穴状遺構で、古代の建物跡(SB-7019)などに掘り込まれる。長辺2.98m、短辺2.02m、深さ36cmを測り、長軸方向はN-53°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。付属遺構として壁溝とピット2個を確認した。P-1は規模から覆い等の支柱穴であった可能性が考慮される。なお、P-1は径30cmの円形で、深さ16cm、P-2は径17cmの円形で、深さ4cmを測る。壁溝はすべての壁沿いを巡っており、幅12~33cm、深さ3~8cm、延長7.90mを測る。埋土は地山の土粒と礫を少し含む黒褐色(10YR2.5/2)シルトを主体に、下層部で地山の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトの堆積が認められた。出土遺物には弥生土器160点、石製品3点、サヌカイト片1点(9.0g)がみられ、石製品2点(7312・7313)が図示できた。

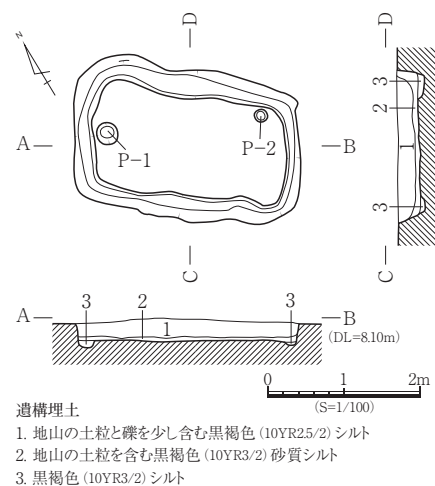


図3-305 ST-7026

出土遺物

石製品(図3-306 7312・7313)

いずれも扁平な磨石で、縁辺を中心に擦痕、片面中央と側面に弱い敲打痕が残る。

ST-7027(図3-307)

VII-1区南西部、ST-7007の東側で検出した隅丸方形の竪穴状遺構で、中世の屋敷を囲む溝跡(SD-7009)に掘り込まれる。長辺1.90m、短辺1.58m、深さ46cmを測り、長軸方向はN-55°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。

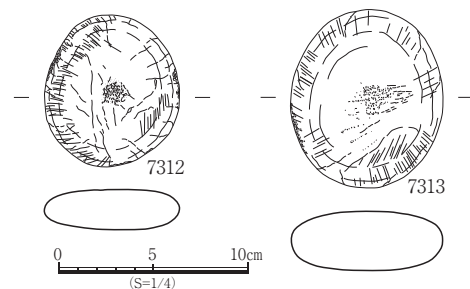


図3-306 ST-7026出土遺物実測図

明確な付属遺構は確認されなかったが、底面は西側が盛り上がり、平場となる。埋土は上下2層に分層され、上層が黒色～黒褐色(10YR2/1.5)シルト、下層が黒褐色(10YR3/2)シルトを主体とし、いずれも地山の土粒と円礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器6点がみられたが、図示できるものはなかった。

ST-7028 (図3-308)

VII-1区南部, ST-7008とST-7019の間で検出した隅丸方形の竪穴状遺構で、中世の建物跡(SB-7082)に掘り込まれる。長辺1.74m, 短辺1.25m, 深さ44cmを測り、長軸方向はN-2°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。付属遺構は確認されなかった。埋土は上下2層に分層され、上層が地山の土粒と炭化物を含む黒褐色(10YR2.5/2)シルト、下層が地山の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器16点がみられ、内1点(7314)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-310 7314)

壺で、口頸部は外反し、口縁部は貼付口縁となる。貼付した粘土帯の下には、外から内へ円孔1個を穿つ。外面のハケ調整は、粘土帯貼付の後に施される。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

ST-7029 (図3-309)

VII-1区南部, ST-7028の南隣で検出した隅丸方形の竪穴状遺構で、中世の建物跡(SB-7082)に掘り込まれる。長辺2.35m, 短辺1.78m, 深さ28cmを測り、長軸方向はN-10°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。付属遺構とみられるピット2個を確認したが、いずれかが支柱穴であった可能性もあるが、いずれも深さが10cmに満たない。また、西壁際に三日月形の段部がみられる。埋土は上下2層に分層され、上層が地山の小ブロックを含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルト、下層が地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器15点, サヌカイト片1点(0.1g)がみられ、弥生土器1点(7315)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-310 7315)

壺で、口縁部は大きく外反し、貼付口縁となり、端部下端にヘラ状工具による刻目を施す。口縁部外面には指頭圧痕が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

ST-7030 (図3-311)

VII-1区中央部, ST-7018の北側で検出した隅丸方形の竪穴状遺構で、古代の建物跡(SB-7029)や

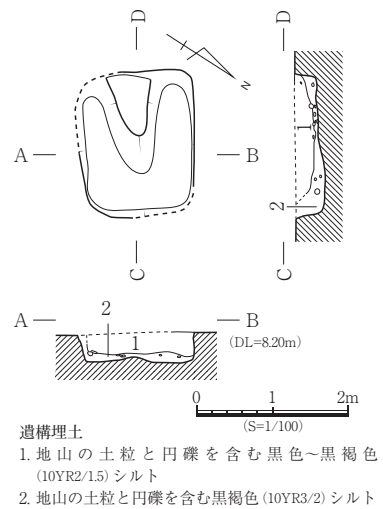


図3-307 ST-7027

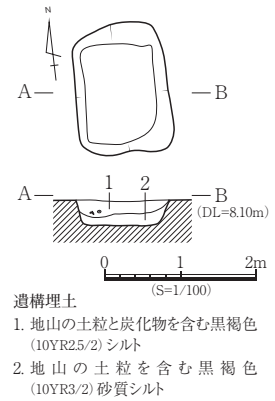


図3-308 ST-7028

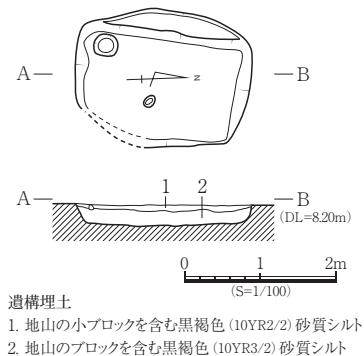


図3-309 ST-7029

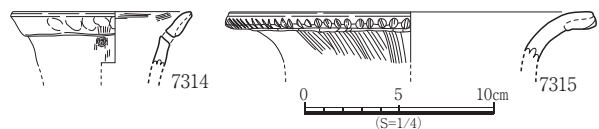


図3-310 ST-7028・7029出土遺物実測図

中世の建物跡(SB-7086)に掘り込まれる。長辺1.98m, 短辺1.30m, 深さ14cmを測り, 長軸方向はN-29°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。付属遺構は確認できなかった。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器6点がみられたが, 図示できるものはなかった。

ST-7031 (図3-312)

VII-2区中央部で検出した隅丸方形の竪穴状遺構で, 中世の建物跡(SB-7093)に掘り込まれる。長辺3.80m, 短辺2.58m, 深さ15cmを測り, 長軸方向はN-81°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。付属遺構とみられる4個のピットを確認した。全般に深さが浅いものの, 位置的にP-1(径28cmの円形で, 深さ13cm)が支柱穴であった可能性が考えられる。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器201点, 石製品4点, サヌカイト片1点(21.6g)がみられ, 弥生土器7点(7316~7322), 石製品1点(7323)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-313 7316~7322)

7316・7317は壺である。7316は, 口縁部が外傾するもので, 貼付口縁となり, 外面にはヘラ状工具による刻目, その下には貼付微隆起突帯とクシ描直線文を施す。7317は, 口縁部が大きく開くもので, 端部は拡張され凹面となり, 両端部にヘラ状工具による刻目を施す。胎土には, 7316が細粒砂から極粗粒砂, 7317が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

7318・7319は甕である。7318は, 口頸部が胴部から小さく外反するもので, 貼付口縁となり口縁部内外面には指頭圧痕が残る。7319は, 口頸部がくの字形を呈するものである。いずれも胎土には細粒

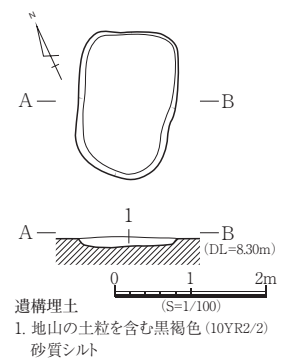


図3-311 ST-7030

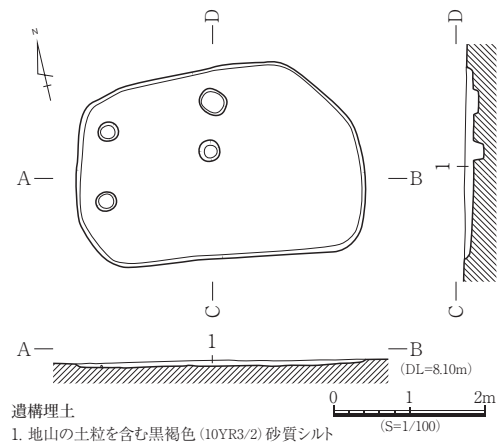


図3-312 ST-7031

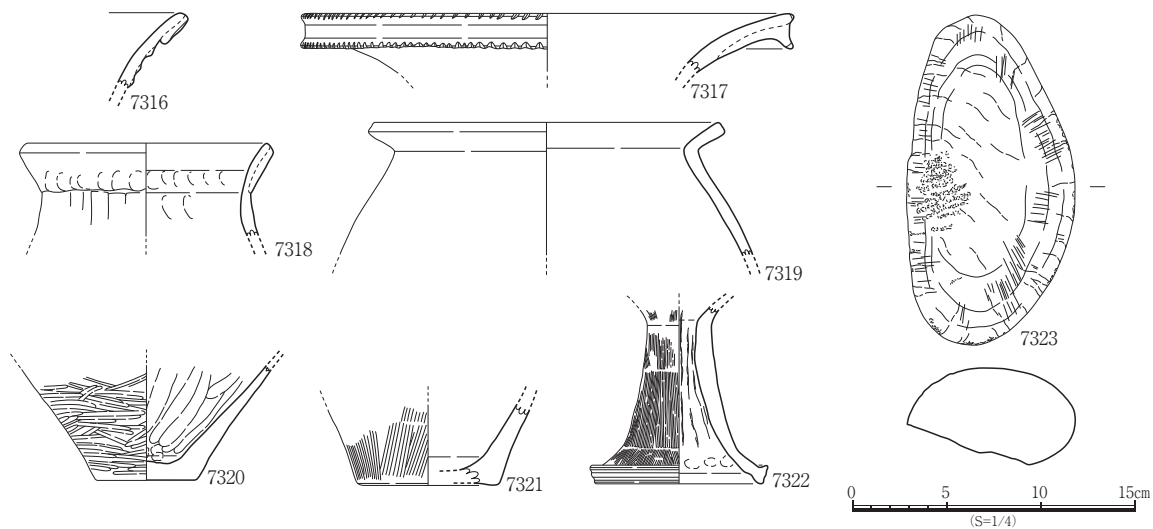


図3-313 ST-7031出土遺物実測図

砂から粗粒砂を比較的多く含む。

7320は壺の底部で、内面には指ナデ調整、外面にはナデ調整の後にヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。7321は甕の底部で、外面にはハケ目が残るものの、器面は摩耗する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

7322は高杯で、脚柱は緩やかに開き、裾端部は肥厚し凹線文を施す。外面には細かなハケ目、内面にはしぼり目が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-313 7323)

比較的大きな磨石で、約1/3が欠損する。残部表面は平滑で、縁辺を中心に擦痕、側面に筋状の敲打痕が残る。

② 掘立柱建物跡

VI区で復元した建物跡と同じ、細長い梁行1間の掘立柱建物跡を3棟復元できた。舟形土坑を伴うものもみられ、弥生独特の建物構成をみることができる。

SB-7001(図3-314)

VII-1区北西部、ST-7001と重複する形で検出した桁行5間(8.70m)、梁行1間(3.30m)の南北棟建物跡で、棟方向はN-39°-Eを示す。東隣には舟形土坑(SK-7003)が検出されているが、方向が異なっており、付属するものではないと思われる。北西隅柱はST-7001の中央ピットと重複して、南西隅柱は古代の建物跡(SB-7010)の北西隅柱に掘り込まれ、未確認である。柱間寸法は、桁行(南北)が1.30~2.30m、梁行(東西)が3.30mである。柱穴の平面形は、楕円形を呈するものもみられるが基本的に円形で径28~42cmを測り、柱径は約10cmとみられ、深さは2~22cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/1)シルトであった。出土遺物は弥生土器1点がみられたが、図示できなかった。

SB-7002(図3-315)

VII-1区西部、ST-7008の北西側で検出した桁行5間(7.80m)、梁行1間(2.90m)の東西棟建物跡で、棟方向はN-57°-Eを示す。北側約1.50mのところには北平側と平行する舟形土坑(SK-7009)があり、この建物に付属するものとみられる。ただし、この舟形土坑は南西隅柱から3間分の長さしかなく、短い。柱間寸法は、

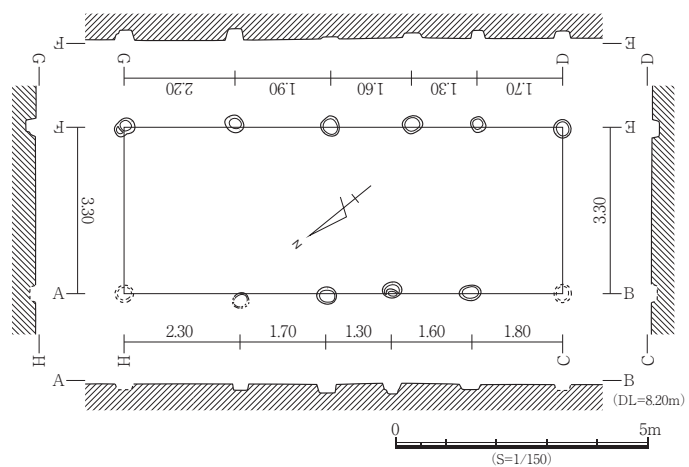


図3-314 SB-7001

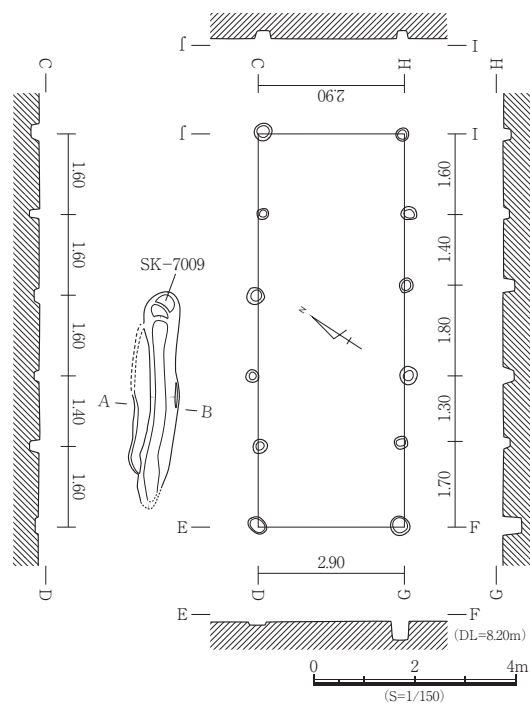


図3-315 SB-7002, SK-7009

桁行(東西)が1.30~1.80m, 梁行(南北)が2.90mである。柱穴の平面形は、楕円形を呈するものもみられるが基本的に円形で径24~40cmを測り、柱径は約10cmとみられ、深さは7~36cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物は弥生土器29点がみられ、内1点(7324)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-316 7324)

高杯で、杯部底部と脚柱部基部で接合する。杯部内面には指頭圧痕、外面にはタテ方向のハケ目、脚柱内面にはしぼり目が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

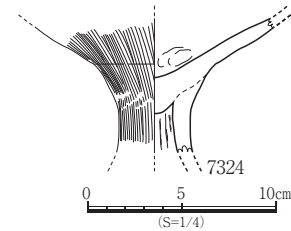


図3-316 SB-7002出土遺物実測図

SB-7003(図3-317)

VII-5区中央部, ST-7020と重複する形で検出した桁行3間(4.10m), 梁行1間(1.80m)の東西棟建物跡で、棟方向はN-52°-Eを示す。西隣には北平側と平行する舟形土坑(SK-7022)があり、他の例と比べ建物に近接するものの、付属する可能性が考えられる。また、東隣には柵列(SA-7001)が検出されており、方向はやや異なるが、関連性が考慮される。柱間寸法は、桁行(東西)が1.10~1.60m, 梁行(南北)が1.80mである。柱穴の平面形は、楕円形を呈するものも一部にみられるが基本的に円形で径24~39cmを測り、柱径は約10cmとみられ、深さは7~20cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。遺物は出土していない。

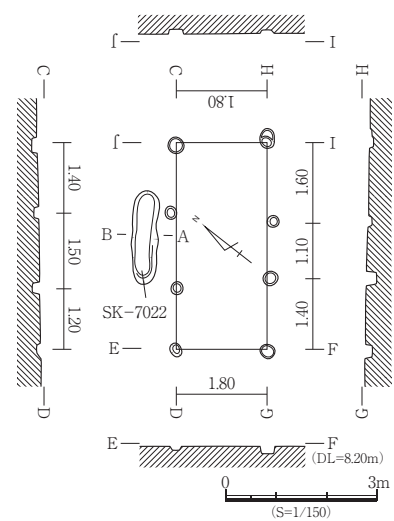


図3-317 SB-7003, SK-7022

③ 塀・柵列跡

VII区に比べ少なく、1列が復元できた。

SA-7001(図3-318)

VII-5区中央部, SB-7003の東側で検出した東西柵列跡(N-55°-E)である。5間分(6.90m)を検出し、柱間寸法は1.30mと1.40mである。柱穴の平面形は楕円形を呈するものもあるが基本的に円形で、径は24~37cmを測り、柱径は10cm前後とみられ、深さ5~19cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。遺物は出土していない。

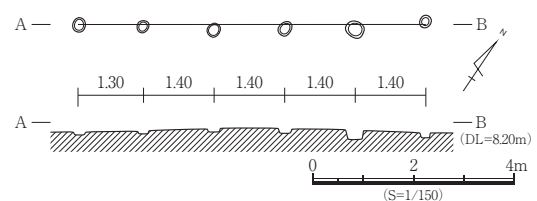


図3-318 SA-7001

④ 土坑

23基を検出した。この内、規模が大きく竪穴建物跡と考えることが可能なものも含まれるが、後述するように決め手を欠くため土坑として扱った。

SK-7001

VII-1区北西端部, ST-7006の北隣で検出した舟形の土坑で、SK-7002に掘り込まれる。長辺3.46m, 短辺0.98m, 深さ22cmを測り、長軸方向はN-52°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルトで、炭化物が少し含まれていた。出土遺物には弥生土

2. VII区 (1) 弥生時代

器10点がみられたが、図示できなかった。

SK-7002 (図3-272)

VII-1区北西端部, ST-7005 を切った形で検出したやや湾曲する舟形の土坑で, ST-7006 に掘り込まれる。長辺3.36m以上, 短辺1.10m, 深さ19cmを測り, 長軸方向は概ねN-29°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器12点, サヌカイト片2点(1.2g)がみられたが、図示できなかった。

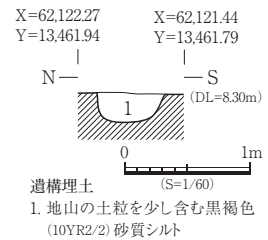


図3-319 SK-7003

SK-7003 (図3-319)

VII-1区北西部, SB-7001 と重複する形で検出した舟形の土坑である。長辺約4.40m, 短辺0.61m, 深さ24cmを測り, 長軸方向はN-80°-Wを示す。断面形はU字形を呈する。埋土は地山の土粒を少し含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器28点, 石製品1点がみられ, 石製品1点(7325)が図示できた。

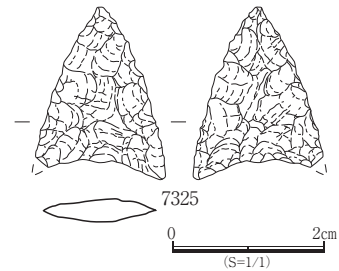


図3-320 SK-7003出土遺物実測図

出土遺物

石製品(図3-320 7325)

サヌカイト製の石鎌で, 凹基となる。

SK-7004 (図3-321)

VII-1区中央部北寄り で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.50m, 短辺1.38m, 深さ18cmを測り, 長軸方向はN-60°-Wを示す。断面形は逆台形を呈し, 底面から2個のピットを検出した。埋土は地山の小ブロックを含む黒色~黒褐色(10YR2/1.5)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器66点がみられ, 弥生土器1点(7326)が図示できた。

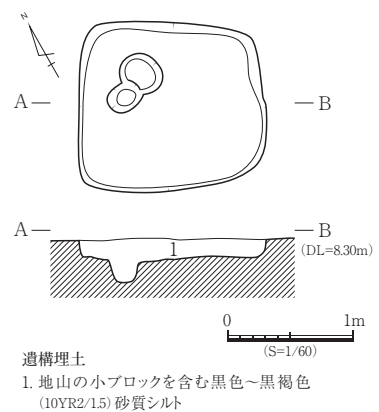


図3-321 SK-7004

出土遺物

弥生土器(図3-323 7326)

甕で, 口頸部はくの字形を呈し, 口縁部を肥厚し, 擬凹線文を施す。胴部内面にはヘラ削りを施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SK-7005 (図3-322)

VII-1区中央部で検出した舟形の土坑である。長辺3.38m, 短辺0.83m, 深さ45cmを測り, 長軸方向はN-32°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は3層に分層され, 上層から地山の土粒を含む黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルト, 地山の土粒を少し含む黒色(10YR2/1)砂質シルト, 地山の土粒を少し含む黒色(7.5YR2/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器172点がみられ, 弥生土器1点(7327)が図示できた。

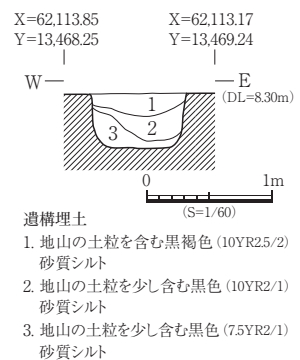


図3-322 SK-7005

出土遺物

弥生土器(図3-323 7327)

甕の底部で, 外面にはハケ目が残りに, 外面下端から外底面にかけて

煤が付着する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

SK-7006

Ⅶ-1区中央部西寄り，SK-7008に掘り込まれた形で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.20m，短辺0.94m以上，深さ10cmを測り，長軸方向はN-28°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器2点，サヌカイト片1点(3.2g)がみられたが，図示できるものはなかった。

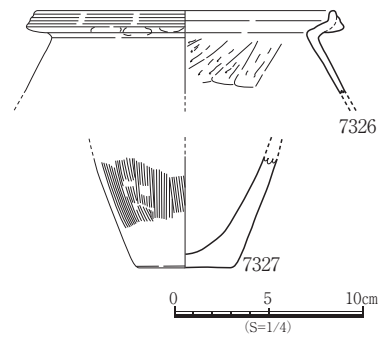


図3-323 SK-7004・7005出土遺物実測図

SK-7007

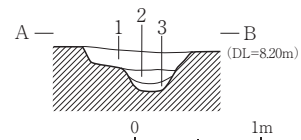
Ⅶ-1区中央部西寄り，ST-7017とSK-7008に掘り込まれた形で検出した不整形の土坑で，西側を中世の屋敷を囲む溝跡(SD-7009)に切られる。長辺2.18m以上，短辺1.90m以上，深さ9cmを測り，長軸方向はN-20°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。遺物は出土しなかった。

SK-7008

Ⅶ-1区中央部西寄り，ST-7017を切った形で検出した不整楕円形の土坑である。長径2.96m，短径2.29m，深さ11cmを測り，長軸方向はN-2°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを多く含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器35点，サヌカイト片1点(0.4g)がみられたが，図示できるものはなかった。

SK-7009 (図3-315・324)

Ⅶ-1区西部，SB-7002の北側で検出した舟形の土坑で，前述のとおりSB-7002に付属するものとみられ，古代の建物跡(SB-7033・7046・7047)に掘り込まれる。長辺4.30m，短辺0.96m，深さ34cmを測り，長軸方向はN-63°-Eを示す。断面形は概ね逆台形を呈し，北壁沿いに平場を有し，東端部には階段状の段部がみられる。埋土は3層に分層され，上層から地山の土粒を含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルト，地山の土粒を少し含む黒色(10YR2/1)砂質シルト，地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器184点，石製品1点がみられ，弥生土器8点(7328～7335)と石製品1点(7336)が図示できた。



遺構埋土

1. 地山の土粒を含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルト
2. 地山の土粒を少し含む黒色(10YR2/1)砂質シルト
3. 地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルト

図3-324 SK-7009

出土遺物

弥生土器(図3-325 7328～7335)

7328・7329は壺で，似た形態を呈する。7328は，口縁部がほぼ直立する頸部から大きく外反し，貼付口縁となり，口縁部外面には指頭圧痕が残る。7329は，口頸部が長胴の胴部から外反し，口縁部は貼付口縁となり，口縁部外面には指頭圧痕が残る。胎土には，7328が細粒砂から粗粒砂，7329が細粒砂から極細粒中礫を比較的多く含む。

7330～7334は甕で，7330は，口頸部が倒卵形の胴部から大きく外反し，口縁部は貼付口縁となり，端部下端にヘラ状工具で刻目，その下に微隆起突帯と8本単位のクシ描直線文，頸部外面に貼付微

隆起突帯を挟んで8本単位のクシ描直線文と楕円形浮文を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

7331は小型の甕で、口縁部は内湾気味に立ち上がる胴部から外傾する。外面頸部から肩部にはタテ方向のハケ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。7332は、口頸部がくの字形を呈するもので、口縁端部は浅い凹面となる。胴部内面には指頭圧痕、外面にはハケ目が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。7333も小型の甕で、胴には張りがなく、頸部で外傾する。胴部外面にはハケ目、下胴部には黒斑が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

7334は甕の底部で、器壁が薄い。外面にはハケ目が僅かに残り、胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

7335はミニチュア土器で、壺を模ったものとみられる。胴部は丸く、頸部は内傾し、口縁部で外反する。口頸部外面にはハケ目が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-325 7336)

2穴の石庖丁で、背はほぼ水平で、刃部は直線刃となり、刃部長8.6cm、幅0.3cmを測る。

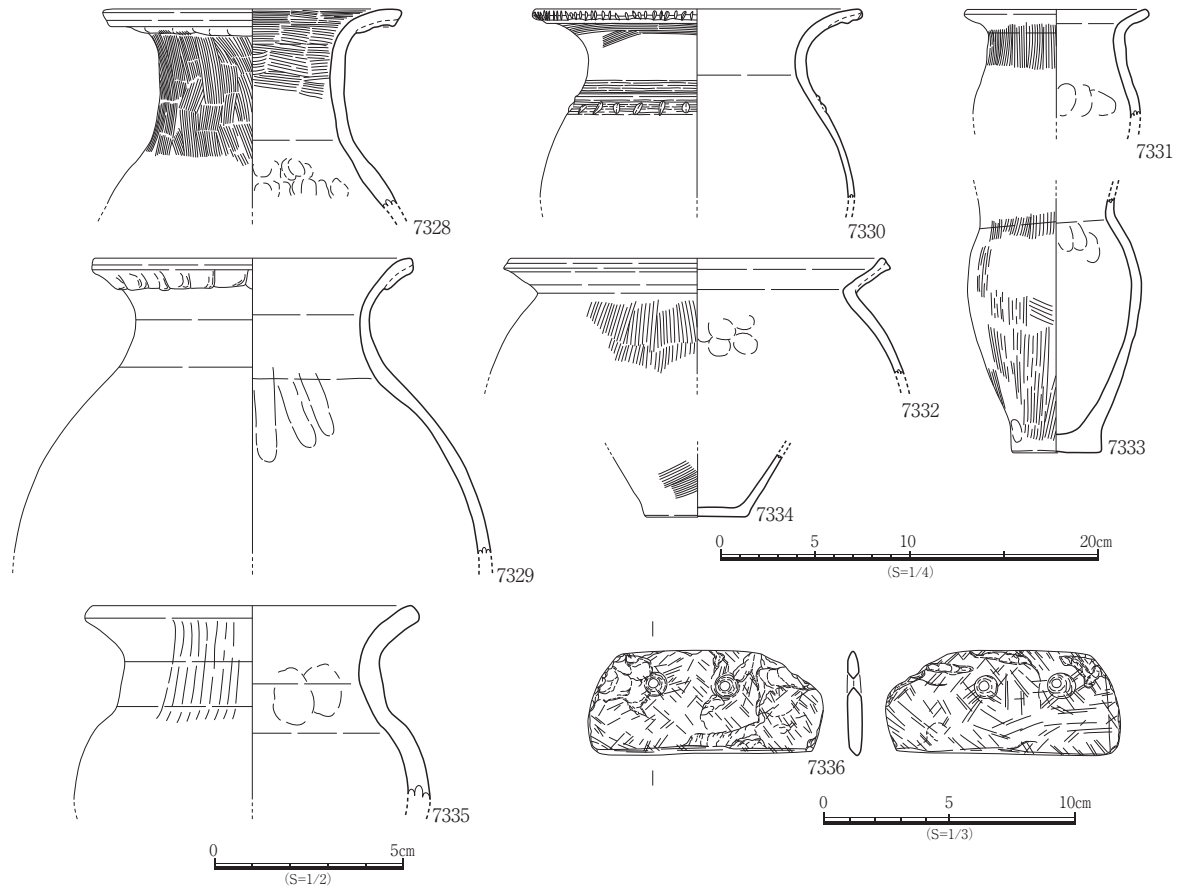


図3-325 SK-7009出土遺物実測図

SK-7010 (図3-326)

VII-1区南西部、ST-7007の東側で検出した舟形の土坑である。長辺2.59m、短辺0.68m、深さ40cmを測り、長軸方向はN-55°-Eを示す。断面形は概ねU字形を呈し、北端部には段部がみられる。埋土は3層に分層され、上層から地山の土粒を少し含む黒色～黒褐色(10YR2/1.5)シルト、地山の小ブロッ

クを含む黒色(10YR2/1)砂質シルト、地山の土粒を含む黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器60点、石製品1点がみられ、弥生土器1点(7337)と石製品1点(7338)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-327 7337)

甕で、頸部は丸味がある胴部から外傾し、口縁部でさらに外傾する。口縁部は貼付口縁となり、端部下端にはヘラ状工具による刻目、その下に作り出し微隆起突帯とクシ描直線文(4本単位×2)、肩部外面に貼付微隆起突帯を挟んで上下にクシ描直線文(4本単位×2)、微隆起突帯の下に楕円形浮文を貼付する。胴部外面には煤が付着する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-327 7338)

叩石で、小判形を呈し、表面は平滑で、両面中央に敲打痕、縁辺を中心に擦痕が残る。

SK-7011

VII-1区南端部、SK-7012に掘り込まれた形で検出した不整楕円形の土坑である。長径2.42m、短径1.80m、深さ23cmを測り、長軸方向はN-85°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器36点、石製品1点、サヌカイト片2点(6.8g)がみられ、石製品1点(7339)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-327 7339)

磨石で、小判形を呈し、表面は平滑で、縁辺を中心に擦痕、片面中央と側面に弱い敲打痕が残り、叩石としても使用されたものとみられる。

SK-7012

VII-1区南端部、南壁際で検出した方形の土坑で、古代の建物跡(SB-7037・7038)などに掘り込まれる。僅かであるが壁溝らしき掘り込みが残り、竪穴建物跡とも考えられるが、遺存状態が悪く、主柱穴と判断できるものもないため、ここでは土坑として報告する。長辺5.24m、短辺3.26m以上、深さ7cmを測り、長軸方向はN-88°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器102点、石製品1点、サヌカイト片26点(14.2g)がみられ、石製品1点(7340)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-327 7340)

サヌカイト製の石鏃で、平基となる。

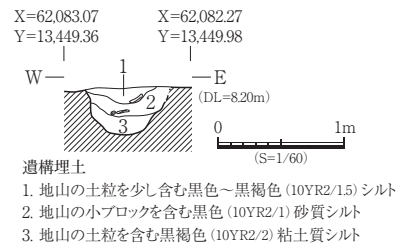


図3-326 SK-7010

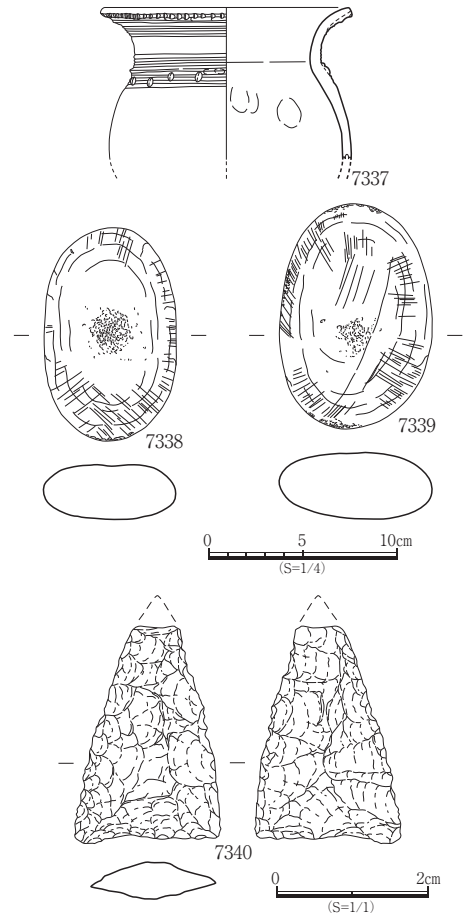


図3-327 SK-7010~7012出土遺物実測図

SK-7013 (図3-328)

VII-1区南端部, SK-7012の東側で検出した不整楕円形の土坑で, 古代の建物跡(SB-7037)などに掘り込まれる。長径1.95m, 短径0.90m, 深さ28cmを測り, 長軸方向はN-61°-Wを示す。断面形は箱形を呈する。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器160点, 石製品2点がみられ, 弥生土器5点(7341~7345)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-329 7341~7345)

7341-7342は壺で, 7341は, 口頸部が外反し, 口縁部は貼付口縁となり, 外面には指頭圧痕が残る。胎土には細粒砂から極細粒中礫を比較的多く含む。7342は大型で, 口縁部は外傾して開き, 外面にはヘラ状工具による斜格子文, その上に棒状浮文を貼付する。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

7343は甕の底部で, ヘラ磨きされた外面は被熱で変色し, 煤が付着する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

7344は高杯の杯部で, 口縁部は底部から内湾して立ち上がり, 端部は丸い。口縁部外面には2条のヘラ描沈線とヘラ状工具による刺突文, 底部外面はタテ方向, 体部外面はヨコ方向のヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。7345は高杯の脚台部で, 杯底部と脚柱基部で接合する。脚柱部は大きく開き, 外面にはヘラ描沈線で区画したヘラ描斜格子文を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

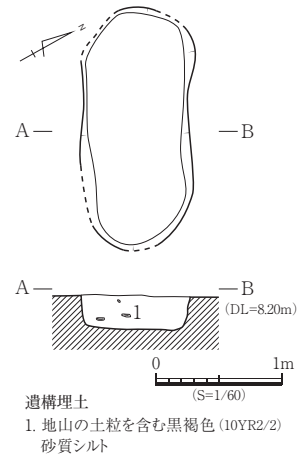


図3-328 SK-7013

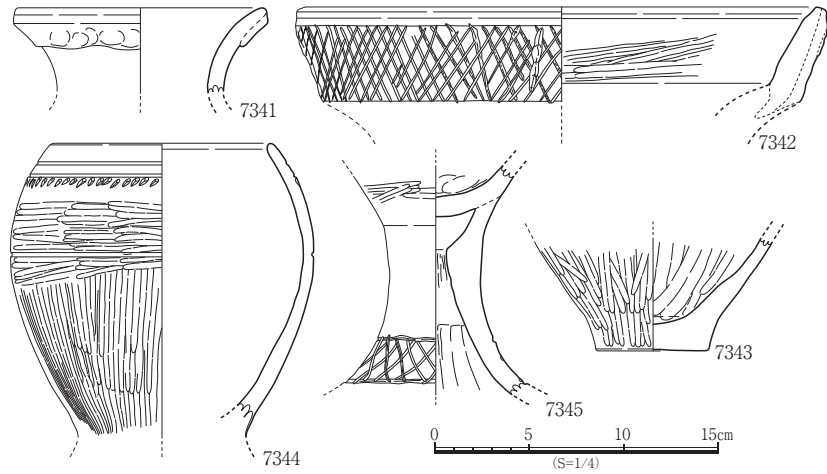


図3-329 SK-7013出土遺物実測図

SK-7014

VII-1区南端部, 南壁際で検出した方形の土坑で, 古代の建物跡(SB-7034~7036)に掘り込まれる。規模的に竪穴建物跡とも考えられるが, 遺存状態が悪く, 主柱穴と判断できるものもないため, ここでは土坑として報告する。長辺5.58m以上, 短辺1.46m以上, 深さ8cmを測り, 長軸方向はN-84°-Wを示す。断面形は逆台形を呈し, 底面からは4個のピットを検出している。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器32点がみられたが, 図示できるものはなかった。

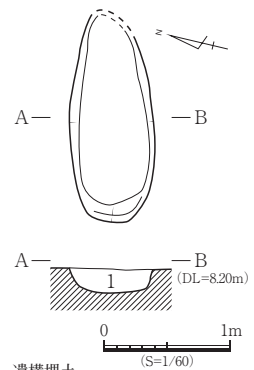
SK-7015 (図3-330)

Ⅶ-1区中央部, SK-7018の南側で検出した舟形の土坑で, 中世の建物跡(SB-7084)に掘り込まれる。長辺1.67m, 短辺0.68m, 深さ20cmを測り, 長軸方向はN-72°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を含む黒色(10YR2/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器60点がみられ, 内1点(7346)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-331 7346)

甕で, 頸部は丸い胴部から外傾し, 口縁部でさらに外反し, 貼付口縁となる。口縁部外面には指頭圧痕, 肩部外面上端にヘラ状工具による刺突文, 胴部外面にハケ目が残る。外面口頸部から上胴部にかけて煤が付着する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。



遺構埋土
1. 地山の土粒を含む黒色(10YR2/1)砂質シルト

図3-330 SK-7015

SK-7016

Ⅶ-1区中央部, SK-7018に切られた形で検出した不整形の土坑で, 古代の建物跡(SB-7028・7029)に掘り込まれる。長辺1.41m以上, 短辺1.09m, 深さ13cmを測り, 長軸方向はN-13°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の小ブロックを含む黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器3点, 石製品2点がみられ, 石製品1点(7347)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-331 7347)

扁平な磨石で, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕, 片面中央に弱い敲打痕, 両側面に敲打痕と摩滅痕が残る。叩石としても使用されたものとみられる。また, 片面には研磨痕が残る。光沢がある。

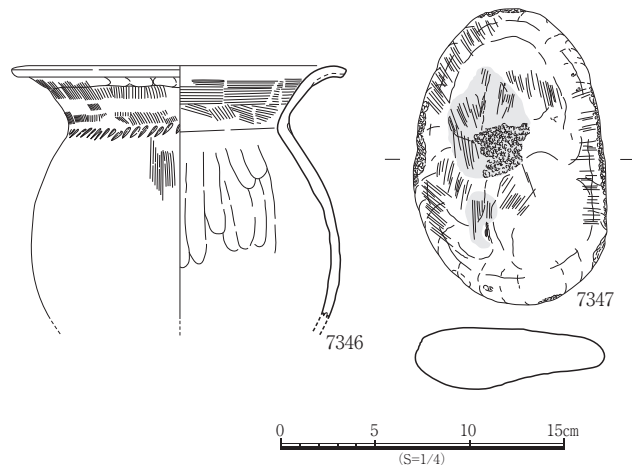


図3-331 SK-7015・7016出土遺物実測図

SK-7017

Ⅶ-1区中央部, SK-7018に切られた形で検出した不整楕円形の土坑で, 古代の建物跡(SB-7029)などに掘り込まれる。長径4.20m, 短径3.20m, 深さ18cmを測り, 長軸方向はN-86°-Wを示す。断面形は逆台形を呈し, 底面から9個のピットを確認した。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR2/2.5)砂質シルトを主体に, 下層部で地山の土粒を含む暗褐色(10YR3/3)砂質シルトの堆積が認められた。出土遺物には弥生土器134点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-7018

Ⅶ-1区中央部, ST-7030の西側で検出した隅丸方形の土坑で, 古代の建物跡(SB-7028・7029)などに掘り込まれる。平面プランは竪穴建物跡とも考えられるが, 中央ピットや主柱穴と判断できるものが確認されていないため, ここでは土坑として報告する。長辺5.20m, 短辺4.88m, 深さ15cmを測り, 長軸方向はN-3°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)砂

質シルトであった。出土遺物には弥生土器375点, サヌカイト片2点(3.0g)がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-7019 (図3-293・332)

VII-1区南東部, ST-7018 を切った形で検出した舟形の土坑である。長辺1.66m, 短辺0.76m, 深さ38cmを測り, 長軸方向はN-86°-Wを示す。断面形はU字形を呈し, 東端部に段部がみられる。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器12点, 石製品2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

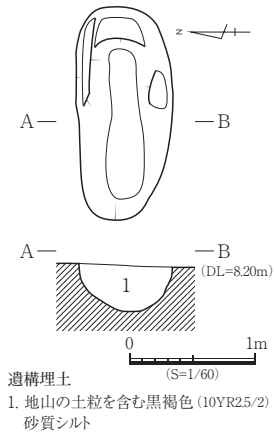


図3-332 SK-7019

SK-7020

VII-1区東端部, ST-7011 に切られた形で検出した楕円形の土坑で, 東の調査区外に続く。長径1.28m以上, 短径1.06m, 深さ11cmを測り, 長軸方向はN-80°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は地山の小ブロックを含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトで, 炭化物を少し含んでいた。出土遺物には弥生土器1点がみられたが, 図示できなかった。

SK-7021

VII-1区東端部, ST-7011 の北側で検出した楕円形の土坑で, 東の調査区外に続く。長径1.74m以上, 短径1.14m, 深さ30cmを測り, 長軸方向はN-79°-Wを示す。断面形は概ね逆台形を呈し, 西壁際には小さな平場が2段みられる。埋土は黒色(10YR2/1)砂質シルトで, 地山の含み具合により2層に分層される。出土遺物には弥生土器156点, 石製品5点がみられ, 弥生土器8点(7348~7355)と石製品2点(7356・7357)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-334 7348~7355)

7348は甕で, 口頸部は外反し, 口縁端部下端にヘラ状工具による刻目, その下にクシ描直線文を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

7349~7355は底部が残存するもので, 7349~7352は甕, 7353~7355は壺とみられる。底部は, 7349・7355が平底, 7350~7352が上げ底風, 7353・7354が上げ底となる。7349は外面にタタキ, 外底面にヘラ削り, 7350は内面にヘラ削り, 外面にヘラ磨き, 7351・7352は内面に指ナデ調整, 外面にヘラ磨き, 7353は外面にヘラ磨き, 7354は外面にタタキの後にヘラ磨き, 7355は内面に指ナデ調整とナデ調整, 外面にハケ調整の後にヘラ磨きをそれぞれ施す。いずれも胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-334 7356・7357)

7356は太型蛤刃石斧で, 刃部が欠損する。表面は側面以外を研磨する。

7357は磨石で, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕, 部分的に弱い敲打痕が残る。

SK-7022 (図3-317・333)

VII-5区中央部, ST-7020 を切った形で検出した舟形の土坑で, SB-7003 に付属するものとみられる。長辺1.85m, 短辺0.53m, 深さ23cmを測り, 長軸方向はN-54°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器14点がみられ, 内1点(7358)が図

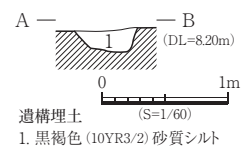


図3-333 SK-7022

示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-334 7358)

器台の裾部とみられ、器面は摩耗するが、外面には凹線文(5条の凹線)、裾端部にヘラ状工具による刻目が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

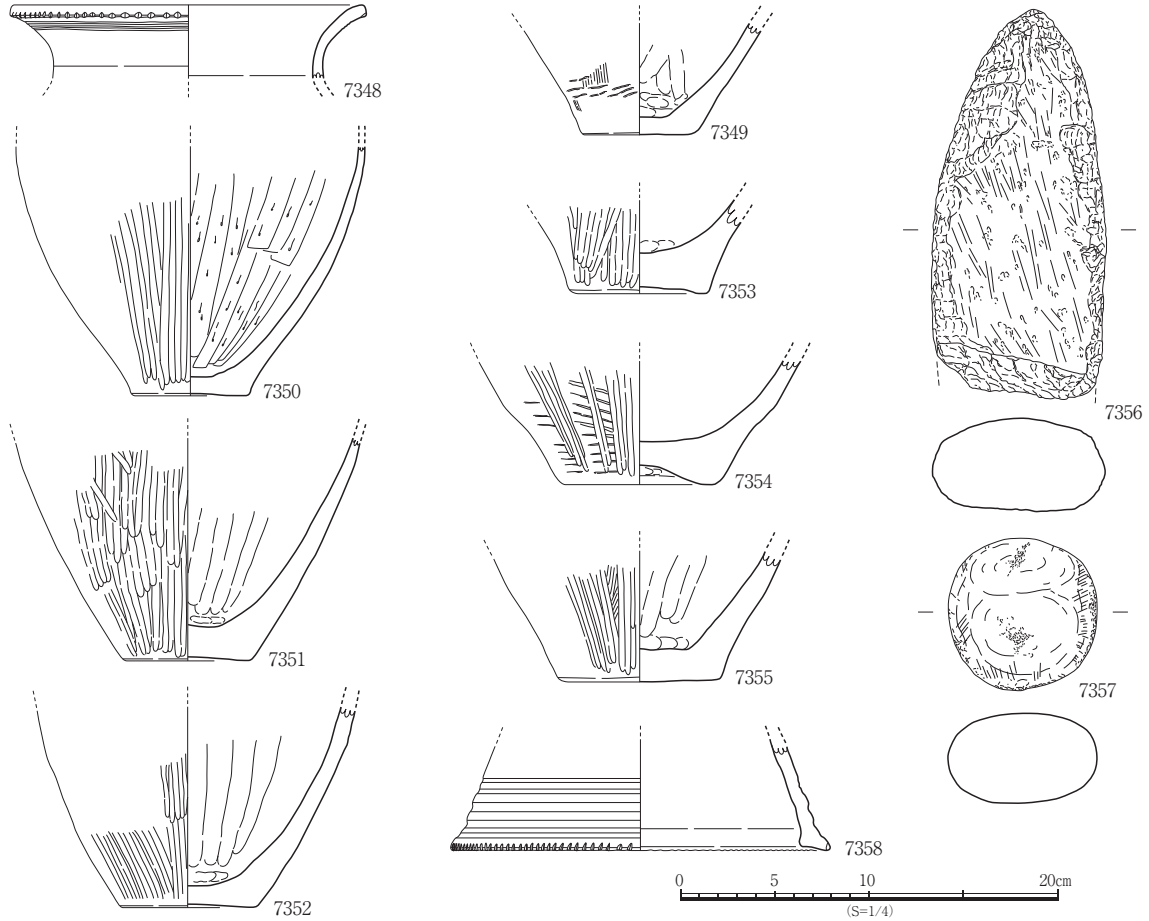


図3-334 SK-7021・7022出土遺物実測図

SK-7023

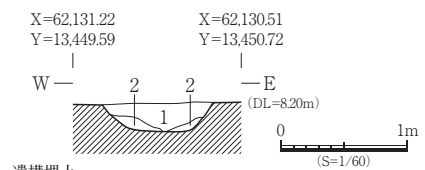
VII-5区北東部、北壁際で検出した円形とみられる土坑である。長径1.42m、短径0.74m以上、深さ18cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を含む黒色～黒褐色(10YR2/1.5)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器6点がみられたが、図示できるものはなかった。

⑤ 溝跡

確認された溝跡はVI区のSD-6002に繋がるものである。

SD-7001(図3-335)

VII-3区西端部からVII-1区の北西部を斜めに縦断する南北溝で、南はVI区のSD-6002に繋がり、北は調査区外にさらに延びる。検出長は24.60m、幅0.78～1.34m、深さは11～38cmを測り、断面形は概ねU字形を呈する。基底面は北(7.890m)から



遺構埋土
 1. 地山の土粒を少し含む黒色～黒褐色(7.5YR2/1.5)砂質シルト
 2. 地山のブロックを含む黒色～黒褐色(7.5YR2/1.5)砂質シルト

図3-335 SD-7001

南西(7.720m)に向って傾斜し、主軸方向は南西(N-145°-W)に向ってほぼ真直ぐ延びる。埋土は黒色～黒褐色(7.5YR2/1.5)砂質シルトを主体に地山のブロックや土粒の含む度合いにより2層に分層される部分もある。出土遺物には弥生土器496点、石製品7点、サヌカイト片1点(6.2g)がみられ、弥生土器10点(7359～7368)と石製品1点(7369)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-336 7359～7368)

7359は壺で、頸部は直立し、口縁部は外反し、貼付口縁となる。口縁部外面には指頭圧痕、肩部外面にはハケ目が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

7360～7364は甕で、いずれも貼付口縁となり、7360～7363は、口頸部が外反するものである。7360は口縁端部下端にヘラ状工具による刻目、その下に微隆起突帯を作り出す。口頸部外面には煤が僅かに付着する。7361～7363には刻目は施されず、口縁部外面に指頭圧痕のみが残存する。7364は、口縁部がやや内傾する頸部から外反するもので、口縁端部に小さな粘土帯を貼付して、肥厚する。口縁部外面には成形時の指頭圧痕が残り、その上をハケ調整する。胎土には、7360・7362が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く、7361・7363・7364が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

7365・7366は甕の底部で、7365の外面から外底面は被熱で変色し、7366の外底面はヘラ削りが施される。胎土には、7365が細粒砂から粗粒砂を少し、7366が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

7367は鉢で、底部は平らで、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外傾し、貼付口縁となり、外面には指頭圧痕が残る。体部外面にはハケ調整を施した後に部分的にヘラ磨き、下端から外底面はハケ調整の後にナデ調整を加える。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

7368はミニチュア土器で、甕を模ったものとみられる。底部内面にはヘラ削り、外面にはハの字形に開く高台が付く。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

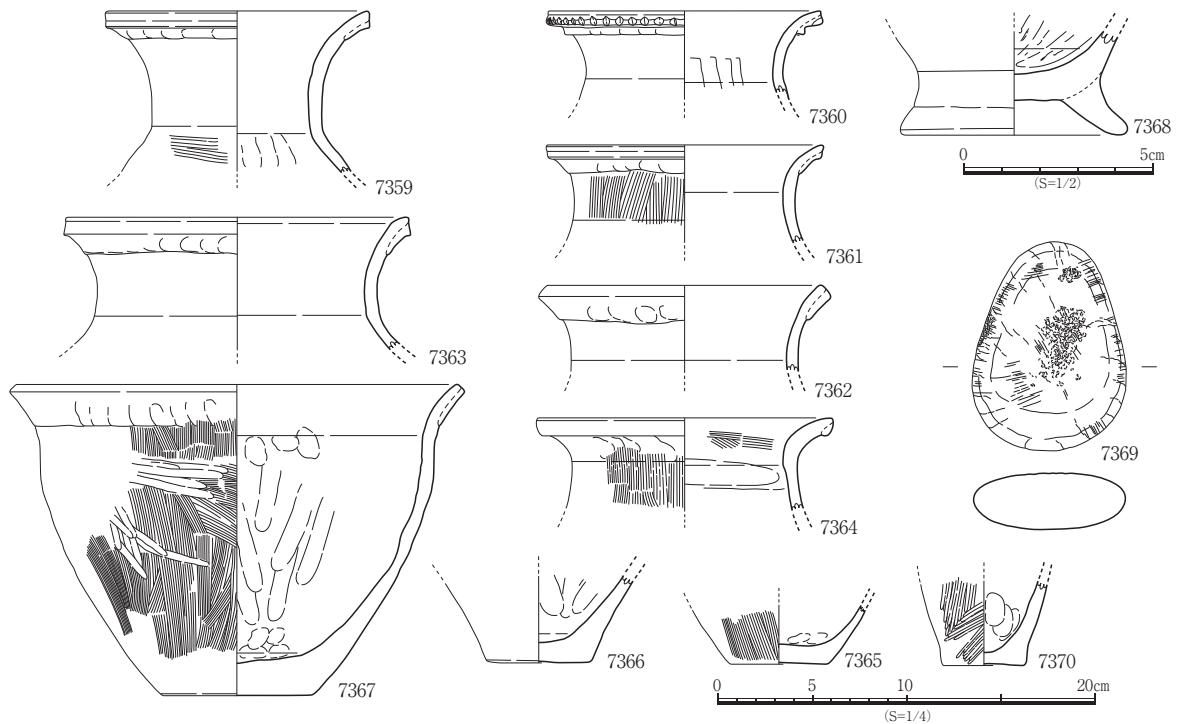


図3-336 SD-7001, P-7001出土遺物実測図

石製品(図3-336 7369)

扁平な磨石で、縁辺を中心に擦痕、片面中央に弱い敲打痕、側面に摩滅痕が残る。

⑥ ピット

検出総数は525個で、その多くが掘立柱建物跡などの柱穴とみられるが、復元できなかった。この内、図示できた遺物が出土したのはP-7001(径80~99cmの楕円形で、深さ44cm)のみで、埋土は黒色(7.5YR1.7/1)シルトであった。

出土遺物

弥生土器(図3-336 7370)

小型の甕で、外面にはヘラ磨きを施し、胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

(2) 古代

遺構はⅥ-2区中央部からⅦ区にかけて展開しており、一部Ⅷ区にもみられる。その中で、Ⅶ区は、西野々遺跡で最大規模の掘立柱建物跡が存在し、中枢をなしていたものとみられる。確認された遺構も方形の掘方の柱穴で構成された官衙関連とみられる掘立柱建物跡58棟を始めとして、塀・柵列跡9列、土坑51基、溝跡7条、ピット4,866個であった。中でもⅦ-1区の南東部にその中心がある。

① 掘立柱建物跡

復元できたのは58棟で、大半が方形の掘方の柱穴で構成された掘立柱建物跡であり、緑釉陶器や県内では出土例の少ない灰釉陶器が伴出しており、転用硯ではあるが陶硯の出土から考えて官衙関連の建物と判断される。中でも、SB-7004は一辺1m以上の柱穴で構築された県内でも有数の建物跡で、その性格が注目されると共に西野々遺跡の評価にも重要な鍵を握る遺構である。

SB-7004(図3-337)

Ⅶ-1区南東部で検出した桁行5間(9.60m)、梁行3間(5.40m)の大型東西棟建物跡で、一辺1mを越す柱穴で構成され、棟方向はN-78°8'-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.80m(6.0尺)・2.10m(7.0尺)、梁行(南北)が1.80m(6.0尺)等間隔である。柱穴の平面形は、形の崩れるものもみられるが基本的に方形で、一辺118~132cmを中心に、一辺104~152cmを測り、柱径は25cm前後とみら

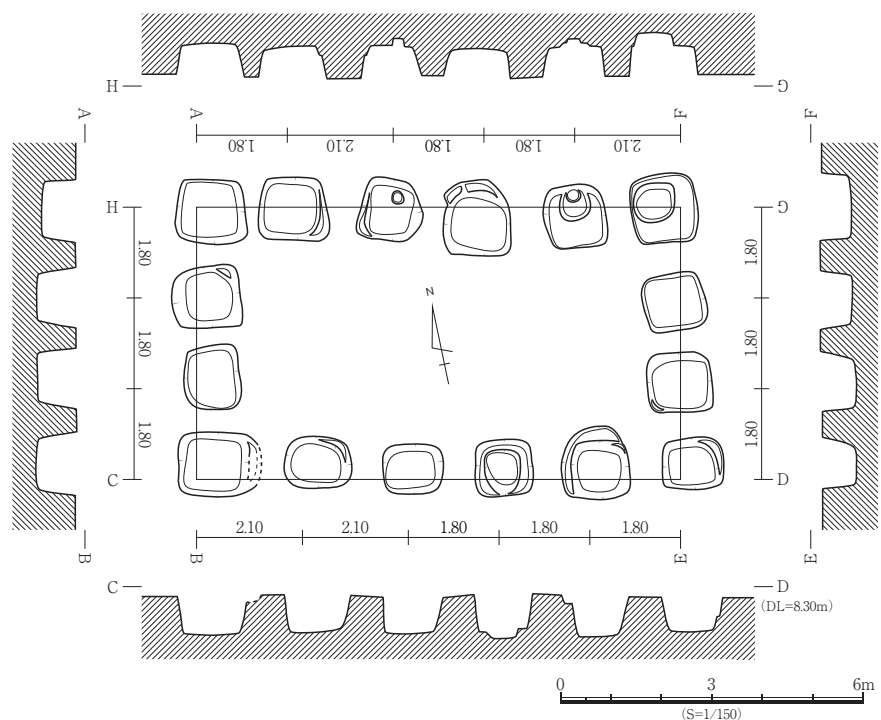


図3-337 SB-7004

れ、深さは60～90cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトを主体に地山のブロックや土粒の含む度合いにより2～4層に分層される。出土遺物は多く、弥生土器504点、土師器293点、須恵器198点、土師質土器250点、黒色土器1点、製塩土器62点、土製品1点、石製品5点、サヌカイト片1点(6.1g)がみられ、土師器6点(7371～7376)、須恵器16点(7377～7392)、土師質土器3点(7393～7395)、製塩土器1点(7396)、土製品1点(7397)、石製品2点(7398・7399)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-338 7371～7376)

7371は杯蓋で、天井部はほぼ平らで、口縁部は外下方に下り、端部は斜め下方に屈曲する。器面にはヘラ磨きを施す。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

7372は杯身で、成形は左手手法となり、胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

7373・7374は皿で、7373は、口縁端部が屈曲して上方を向き、内面には放射線状の暗文を施す。7374は口縁端部を内側に折込み、内面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。胎土には、7373が細粒砂から粗粒砂、7374が極細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

7375は高杯で、口縁部は体部から屈曲して外上方を向く。器面にはヘラ磨きを施し、胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7376は甕で、口頸部はくの字形をなし、内外面にはハケ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

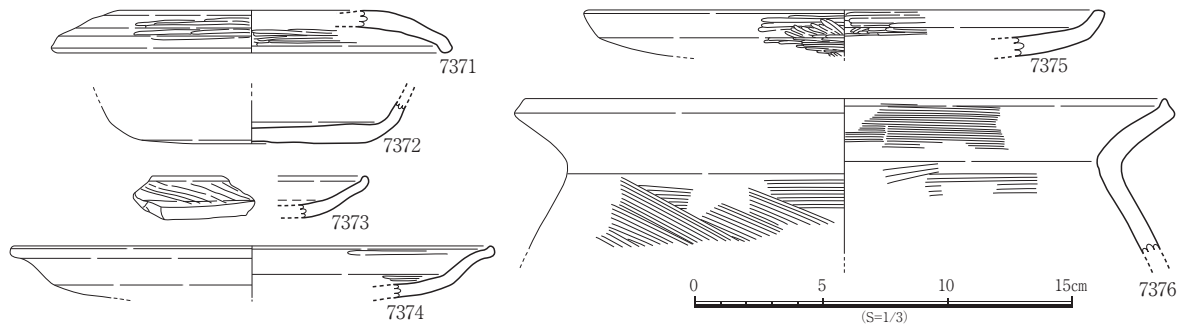


図3-338 SB-7004出土遺物実測図1

須恵器(図3-339 7377～7392)

7377～7380は杯蓋で、調整は基本的に、器面を回転ナデ調整した上で、天井部外面を回転ヘラ削りし、内面にナデ調整を加える。7377の天井部は比較的丸味があり、ボタン状のつまみが付く。7378の天井部は凹み、外面にはハダ荒れがみられる。7379の口縁端部外面には凹線が1条巡る。7380は大型で、口縁端部は口縁部から屈曲して真下を向く。胎土には、7377は極細粒砂から極粗粒砂を少し、7378が極細粒砂から粗粒砂を少し、7379が極細粒砂から中粒砂を若干、7380が細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

7381～7388は杯身で、7388以外には外底面端部に輪高台が付く。調整は基本的に、器面を回転ナデ調整した上で、内底面にナデ調整を加え、底部を回転ヘラ切りで切り離し、高台を貼付し、ヨコナデ調整を施す。大半は口縁部を欠くが、平らな底部から外上方を向くものとみられる。7381の内面には自然釉がかかり、7382の内底面には「十」のヘラ記号、7387の外面上端には回転ヘラ削りの痕跡が残る。胎土には、7381・7385・7386・7388が極細粒砂から粗粒砂を少し、7382が細粒砂から中粒砂を比

較的多く, 7383 が極細粒砂から中粒砂を少し, 7384 が極細粒砂から中粒砂を若干, 7387 が極細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

7389 は皿で, 口縁端部を内側に折込む。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7390 は台付壺で, 底部外面にはハの字形に開く高さ 1.8cm の高台が付く。外面には回転ヘラ削りの

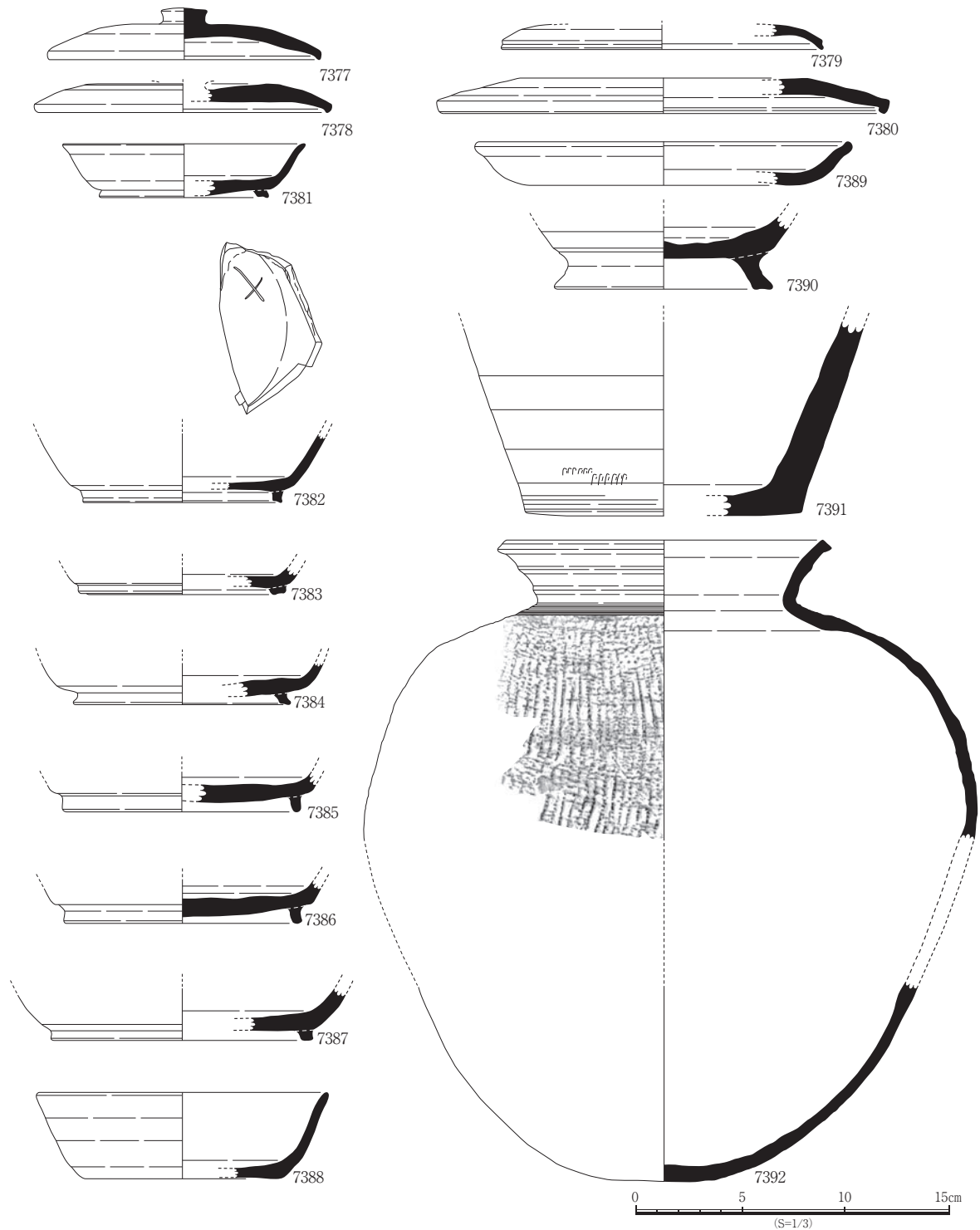


図3-339 SB-7004出土遺物実測図2

痕が残り、胎土には極細粒砂から極粗粒砂を少し含む。7391は壺で、外面は回転ヘラ削りの後に、タタキと回転カキ目調整、外底面はヘラ削りを施す。胎土には細粒砂から極細粒中礫を少し含む。

7392は甕で、底部は丸く、胴部最大径は中位より上にあり、口頸部は外傾する。口頸部外面には回転ナデ調整で作り出した小さな突帯2条が巡る。胴部内面には同心円文、外面には格子目状のタタキを施し、肩部外面に回転カキ目調整を加える。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

土師質土器(図3-340 7393~7395)

7393・7394は杯である。7393はロクロを使用して土師質土器の成形技法の一つであるA技法(粘土紐巻き上げミズビキ成形)で成形し、底部を回転ヘラ切りで切り離しているが、器面の調整はヘラ磨きで、かつ土師器と同じ色調を呈する。これは、土師器の成形が左手手法から須恵器と同じ製作技法であるA技法に移行し始めたことを示す資料と考えられ重要である。また、口縁端部は内側に折込まれる。胎土には極細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。7394は、器面が摩耗するが、底部の切り離しは回転ヘラ切りとなり、胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

7395は皿で、口縁端部は内側に折込まれ、底部の切り離しは回転糸切りとなる。胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

製塩土器(図3-340 7396)

内面には布目が残り、胎土には極細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

土製品(図3-340 7397)

土錘で、円筒形となり、孔径は0.5cmを測る。表面には指押えとナデ調整を施し、胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

石製品(図3-340 7398・7399)

7398は磨石で、表面は平滑となり、縁辺を中心に擦痕、側面に摩滅痕と弱い敲打痕が残る。

7399は砥石で、上下2面と側面の一部に使用痕と弱い敲打痕も残る。また、被熱で変色した部分もみられる。

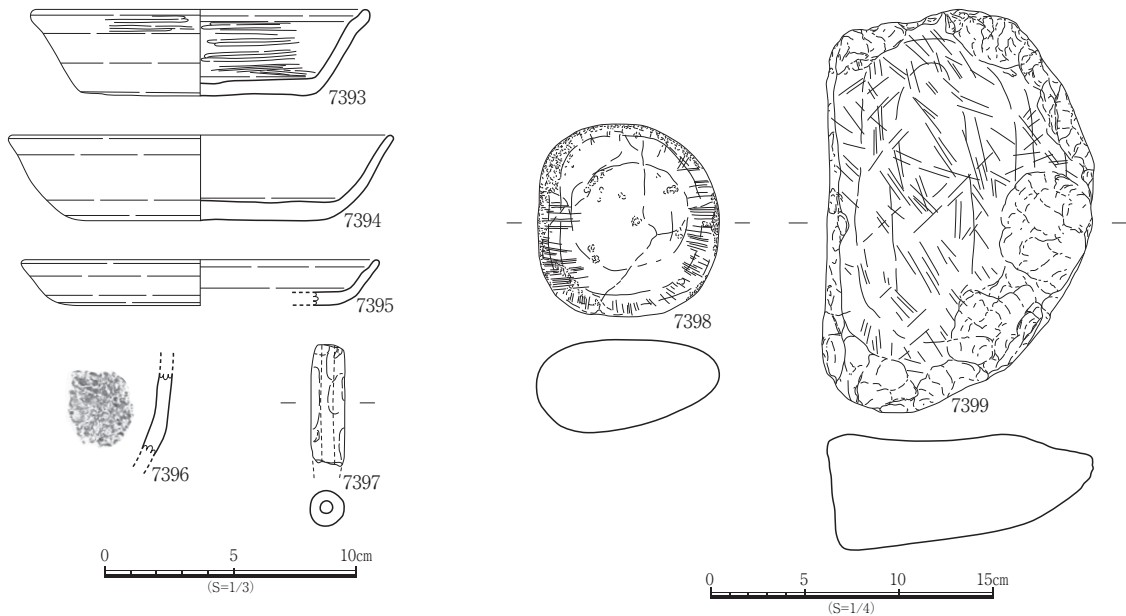


図3-340 SB-7004出土遺物実測図3

SB-7005 (図3-341)

Ⅶ-1区南東部, SB-7004の西隣で検出した桁行5間(9.00m), 梁行3間(5.10m)の大型南北棟建物跡で, 一辺1mを越す柱穴もみられ, 棟方向はN-13° 2'-Eを示す。柱間寸法は, 桁行(南北)が1.50~1.95m(5.0~6.5尺), 梁行(東西)が1.50m(5.0尺)・1.80m(6.0尺)である。柱穴の平面形は, 形の崩れるものもみられるが基本的に方形で, 一辺76~87cmを中心に, 一辺55~104cmを測り, 柱径は23~24cmとみられ, 深さは19~75cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器165点, 土師器111点, 須恵器40点, 土師質土器78点, 製塩土器2点, 土製品1点, 石製品4点, サヌカイト片1点(1.0g)がみられ, 須恵器1点(7400), 土製品1点(7401)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-344 7400)

杯身で, 高台は外面端部より内側に付き, その外側には回転ヘラ削りの痕が残る。底部外面はナデ調整で, 切り離しの痕跡は確認できない。また, 外底面以外には自然釉がかかりハダ荒れとなる。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

土製品(図3-344 7401)

円筒形の土錘で, 紐孔は径0.4cmを測り, 表面には指頭圧痕が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SB-7006 (図3-342)

Ⅶ-1区中央部, SA-7002の北西側で検出した桁行3間(6.00m), 梁行2間(3.75m)の東西棟建物跡で, 東妻柱真中の柱穴は未確認であり, 棟方向はN-78° 41'-Wを示す。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.80m(6.0尺)・2.40m(8.0尺), 梁行(南北)が1.65m(5.5尺)・2.10m(7.0尺)である。柱穴の平面形は, 形の崩れるものもみられるが基本的に方形で, 一辺73~78cmを中心に, 一辺67~89cmを測り, 柱径は20cm前後とみられ, 深さは23~51cmである。柱穴の埋土は地

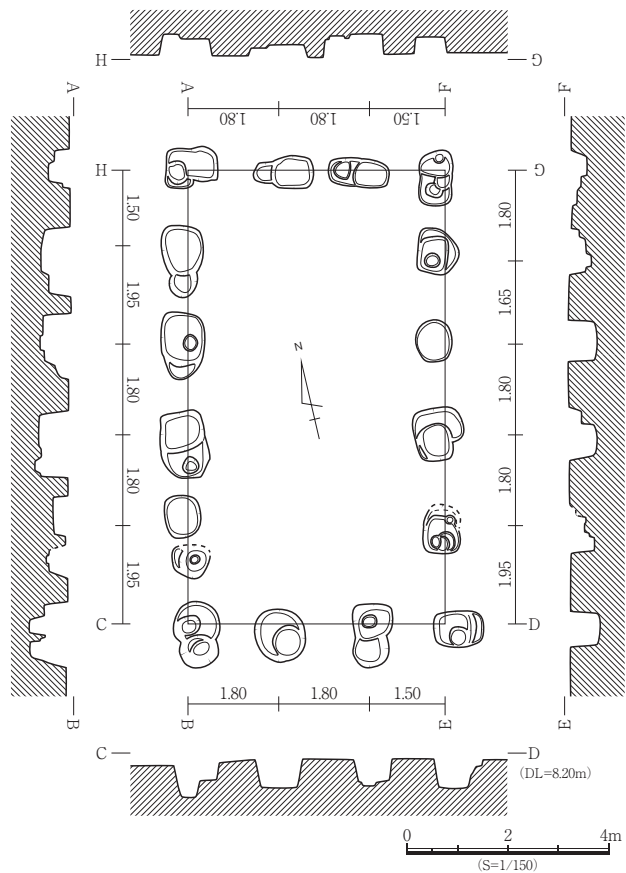


図3-341 SB-7005

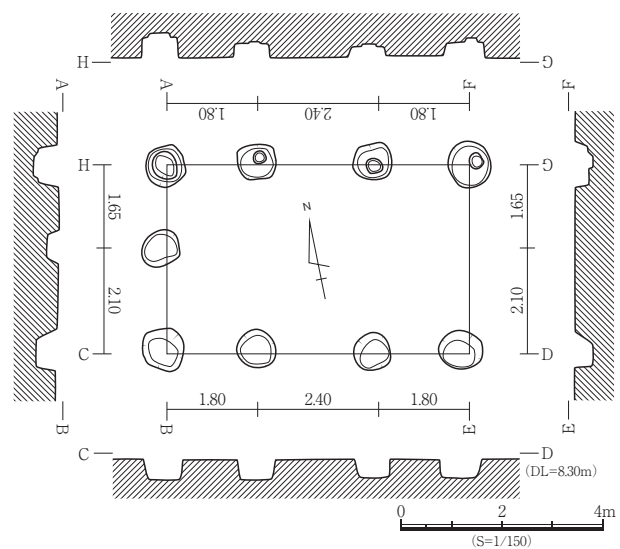


図3-342 SB-7006

山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器71点, 土師器4点, 須恵器11点, 土師質土器39点, 石製品1点がみられ, 石製品1点(7402)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-344 7402)

大型の打製石鎌で, 刃部に欠損がみられる。表面は平滑で, 刃部を中心に擦痕がみられ, 裏面は剥離面となり, 打撃点が1点残る。

SB-7007(図3-343)

VII-1区中央部南西寄り, SA-7004の北側で検出した桁行3間(6.00m), 梁行2間(3.75m)の東西棟建物跡で, 棟方向はN-84°41'-Wを示す。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.95m(6.5尺)・2.10m(7.0尺), 梁行(南北)が1.80m(6.0尺)・1.95m(6.5尺)である。柱穴の平面形は, 形の崩れるものも一部にみられるものの基本的に方形で, 一辺76~92cmを中心に, 一辺56~106cmを測り, 柱径は20cm前後とみられ, 深さは8~73cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器130点, 土師器96点, 須恵器48点, 土師質土器85点, 製塩土器3点がみられ, 土師器2点(7403・7404)と須恵器1点(7405)が掲載できた。

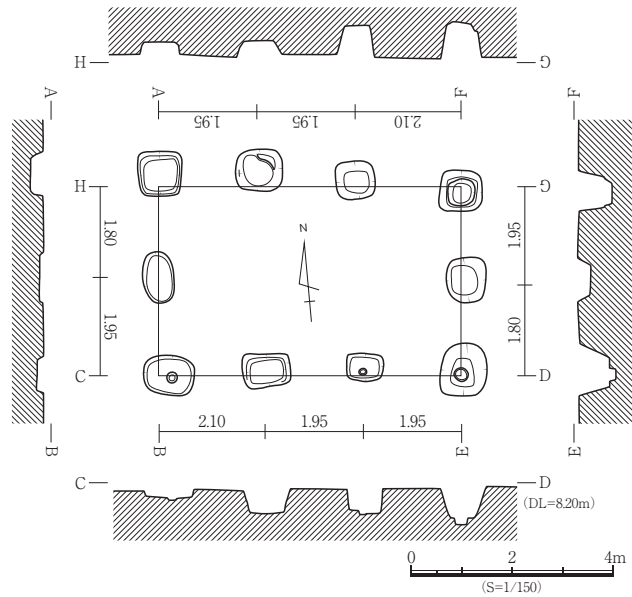


図3-343 SB-7007

出土遺物

土師器(図3-344 7403, 図版174 7404)

7403は甕の把手で, 表面には指頭圧痕, 付根部分にハケ目が残る。胎土には細粒砂から極細粒中礫を比較的多く含む。

7404は皿の底部から体部の細片で, 全面に赤色塗彩される。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

須恵器(図3-344 7405)

杯蓋で, 天井部は凹み, 外面全面に回転ヘラ削りを施す。胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

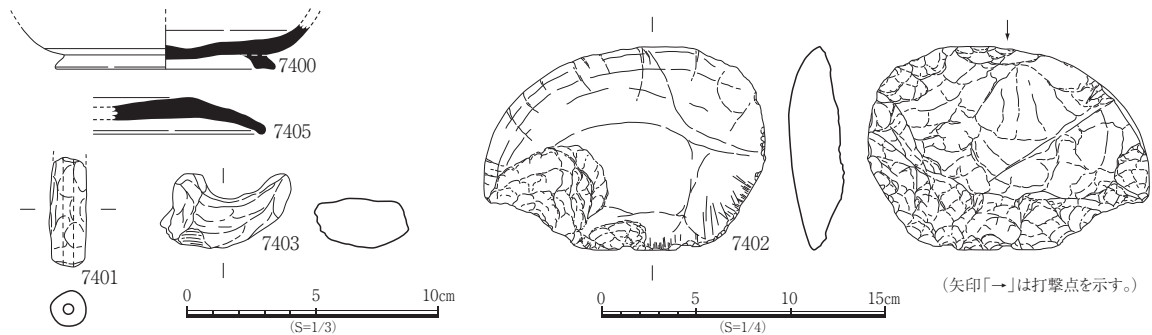


図3-344 SB-7005~7007出土遺物実測図

SB-7008 (図3-345)

Ⅶ-1区南西部, SB-7007の南西側で検出した桁行4間(7.20m), 梁行3間(4.65m)の南北棟建物跡で, 北と南の妻柱の東側柱から1間目の柱穴は未確認であり, 棟方向はN-10°13'-Eを示す。柱間寸法は, 桁行(南北)が1.50~1.95m(5.0~6.5尺), 梁行(東西)が1.50~1.80m(5.0~6.0尺)とみられる。柱穴の平面形は, 形の崩れるものもみられるが基本的に方形で, 一辺70~76cmを測り, 柱径は18cm前後とみられ, 深さは17~54cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器13点, 土師器4点, 須恵器1点, 土師質土器14点がみられたが, 図示できるものはなかった。

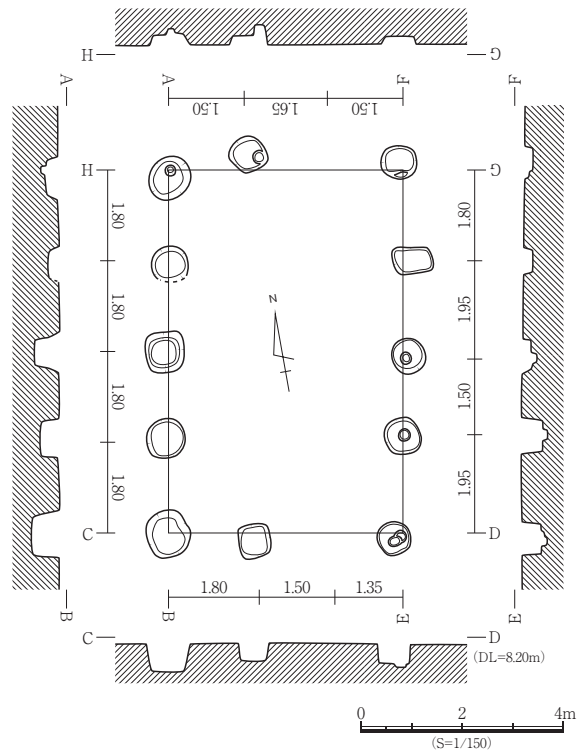


図3-345 SB-7008

SB-7009 (図3-346)

Ⅶ-1区南西端部からⅥ-2区南東端部にかけて検出した桁行5間(8.40m), 梁行3間(4.50m)の東西棟建物跡で, 調査区の間が存在するとみられる北と南の側柱の柱穴5個は未確認であり, 棟方向はN-74°37'-Wを示す。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.65m(5.5尺)・1.80m(6.0尺)とみられ, 梁行(南北)が1.20~1.80m(4.0~6.0尺)である。柱穴の平面形は, 形の崩れるものもみられるが基本的に方形で, 一辺61~70cmを測り, 柱径は20cm前後とみられ, 深さは13~56cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器22点, 土師器4点, 須恵器1点, 土師質土器7点がみられ, 須恵器1点(7406)が図示できた。

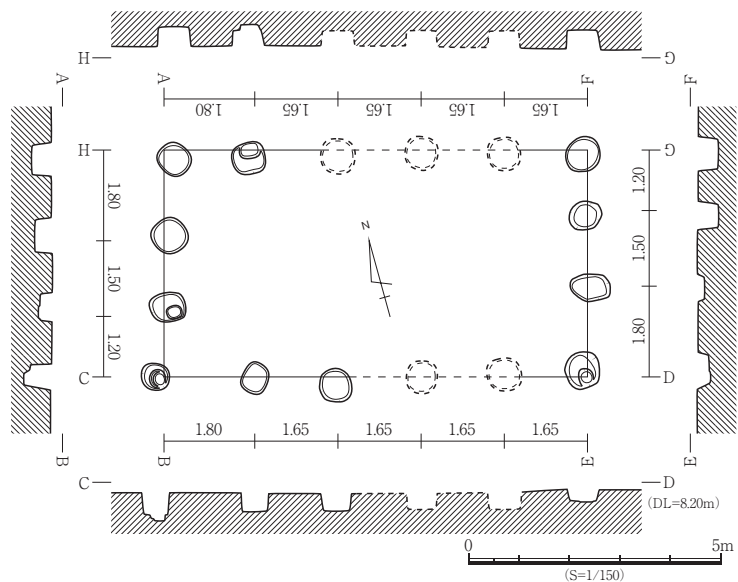


図3-346 SB-7009

出土遺物

須恵器(図3-352 7406)

杯蓋で, 硯に転用されたものとみられる。天井部は平らで, 擬宝珠形のつまみが付き, その大半に回転ヘラ削りを施す。明瞭な墨痕は認められないが, 天井部内面は摩滅する。胎土には細粒砂から極

粗粒砂を少し含む。

SB-7010 (図3-347)

VII-1区北西部, SB-7031の北隣でSK-7036・7037に切られた形で検出した桁行3間(5.10m), 梁行2間(3.60m)の東西棟建物跡で, 北西隅柱から東へ1間目の柱穴はSK-7037に切れ未確認であり, 棟方向はN-78°41'-Wを示す。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.50m(5.0尺)・1.80m(6.0尺), 梁行(南北)が1.65~1.95m(5.5~6.5尺)である。柱穴の平面形は, 形の崩れるものもみられるが基本的に方形で, 一辺58~63cmを中心に, 一辺38~76cmを測り, 柱径は18cm前後とみられ, 深さは10~27cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器32点, 土師器1点, 須恵器5点, 土師質土器17点, 鉄製品1点がみられ, 須恵器1点(7407)が図示できた。

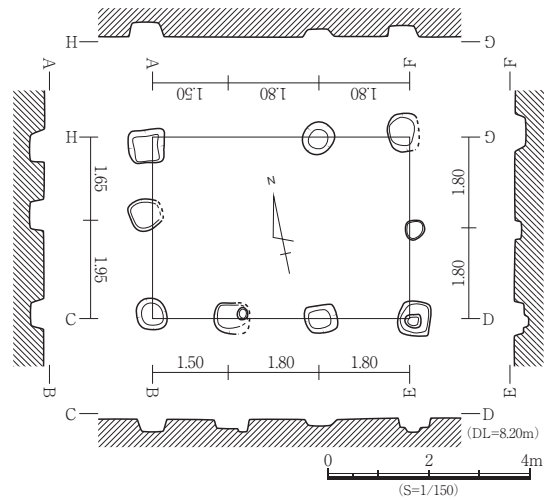


図3-347 SB-7010

出土遺物

須恵器(図3-352 7407)

杯身で, 立ち上がりが高く内傾する。底部にはヘラ起こしの痕跡が残る。胎土には極細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

SB-7011 (図3-348)

VII-1区北東端部, SB-7044と重複した形で検出した桁行3間(5.10m), 梁行2間(3.60m)とみられる東西棟建物跡で, 北側半分は調査区外にあり未確認であり, 棟方向はN-80°38'-Wを示す。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.50m(5.0尺)・2.10m(7.0尺), 梁行(南北)が1.80m(6.0尺)とみられる。柱穴の平面形は, 形の崩れるものが多いが基本的に方形とみられ, 一辺58~65cmを中心に, 一辺51~75cmを測り, 柱径は15cm前後とみられ, 深さは12~27cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器5点, 須恵器1点, 土師質土器2点, 製塩土器1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

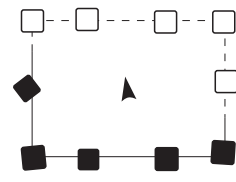


図3-348 SB-7011

SB-7012 (図3-349)

VII-1区東端部からVII-2区西端部で検出した桁行4間(6.60m), 梁行3間(4.50m)とみられる南北棟建物跡で, 北と南の妻柱はVII-1区とVII-2区間の未調査部分にあるとみられ未確認で, 北東端部から南に1間目の柱穴も未検出である。棟方向はN-11°27'-Eを示す。柱間寸法は, 桁行(南北)が1.50~1.95m(5.0~6.5尺), 梁行(東西)が1.50m(5.0尺)等間隔ではないかとみられる。柱穴の平面形は, 形の崩れるものが多いが基本的に方形とみられ, 一辺63~68cmを中心に, 一辺45~78cmを測り, 柱径は15cm前後とみられ, 深さは13~67cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器38点, 土師器10点, 須恵器13点, 土師質土器58点, サヌカイト片2点(0.4g)がみられたが, 図示できるも

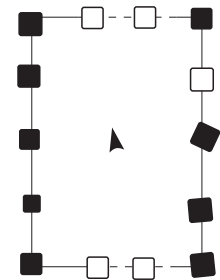


図3-349 SB-7012

のはなかった。

SB-7013 (図3-350)

Ⅶ-2区西端部, SB-7012と重複した形で検出した桁行3間(5.70m), 梁行2間(3.60m)の南北棟建物跡で, 棟方向はN-13°46'-Eを示す。柱間寸法は, 桁行(南北)が1.80m(6.0尺)・2.10m(7.0尺), 梁行(東西)が1.50m(5.0尺)・2.10m(7.0尺)である。柱穴の平面形は, 形の崩れるものが多いが基本的に方形とみられ, 一辺64~75cmを中心に, 一辺46~104cmを測り, 柱径は20cm前後とみられ, 深さは14~51cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器32点, 土師器4点, 須恵器8点, 土師質土器16点, 土製品1点がみられ, 須恵器1点(7408)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-352 7408)

杯身で, 短い立ち上がりが付くものとみられ, 底部はヘラ起こしの痕跡が残る。胎土には極細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

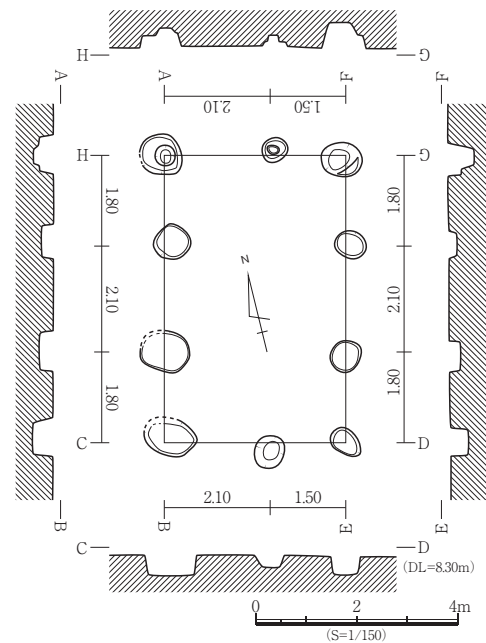


図3-350 SB-7013

SB-7014 (図3-351)

Ⅶ-1区南東部, SB-7004を掘り込んだ形で検出した桁行5間(9.60m), 梁行3間(5.10m)の大型東西棟建物跡で, 西妻柱南から1間目の柱穴はSB-7004と重複しており未確認である。棟方向はN-80°29'-Wを示し, 柱間寸法は, 桁行(東西)が1.80~2.10m(6.0~7.0尺), 梁行(南北)が1.50~1.95m(5.0~6.5尺)である。柱穴の平面形は方形で, 一辺81~97cmを中心に, 一辺58~108cmを測り, 柱径は20cm前後とみられ, 深さは44~110cmである。

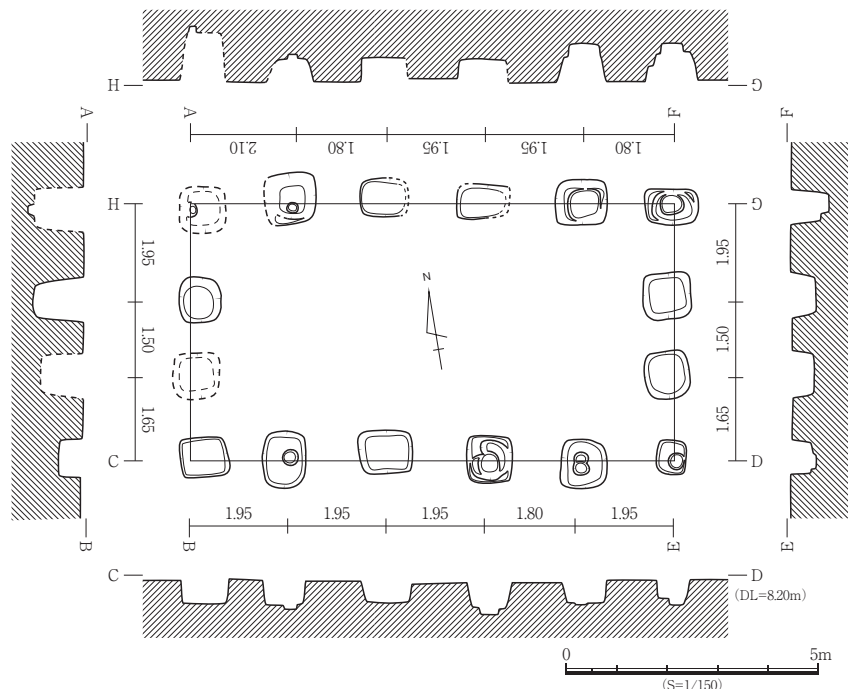


図3-351 SB-7014

柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器342点, 土師器169点, 須恵器97点, 土師質土器254点, 製塩土器22点, 石製品2点, 鉄滓1点, サヌカイト片1点

(0.3g)がみられ、土師器3点(7409～7411)、須恵器5点(7412～7416)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-352 7409～7411)

7409は大型の蓋で、口縁部は内湾気味に下り、端部を下方に屈曲さす。器面には全面にヘラ磨きを施す。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7410は高杯で、口縁部は体部から斜め上方に屈曲する。口縁部外面以外にヨコ方向のヘラ磨きを施す。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7411は甕で、口頸部はくの字形を呈し、口縁端部は丸い。胴部外面にはハケ目が残り、口縁部内面から口唇部にかけて煤が付着する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

須恵器(図3-352 7412～7416)

7412は扁平な杯蓋で、天井部は平らで、口縁部は短く斜め下方に下り、端部が下方に短く屈曲する。天井部外面全面に回転ヘラ削りを施す。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7413・7414はほぼ同形態の杯身で、底部外端部に7413は高さ0.9cm, 7414は高さ1.0cmの高台が付く。胎土には、7413が極細粒砂から中粒砂を若干, 7414が極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7415・7416は甕である。7415は、口縁部が外反し、端部は粘土紐を丸めて肥厚し、外面には回転カキ目調整を施す。胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。7416は大型の甕で、頸部は胴部から屈曲して、外上方に立ち上がり、刺突文と凹線1条が巡る。胴部内面には同心円文、外面には平行のタキ目が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

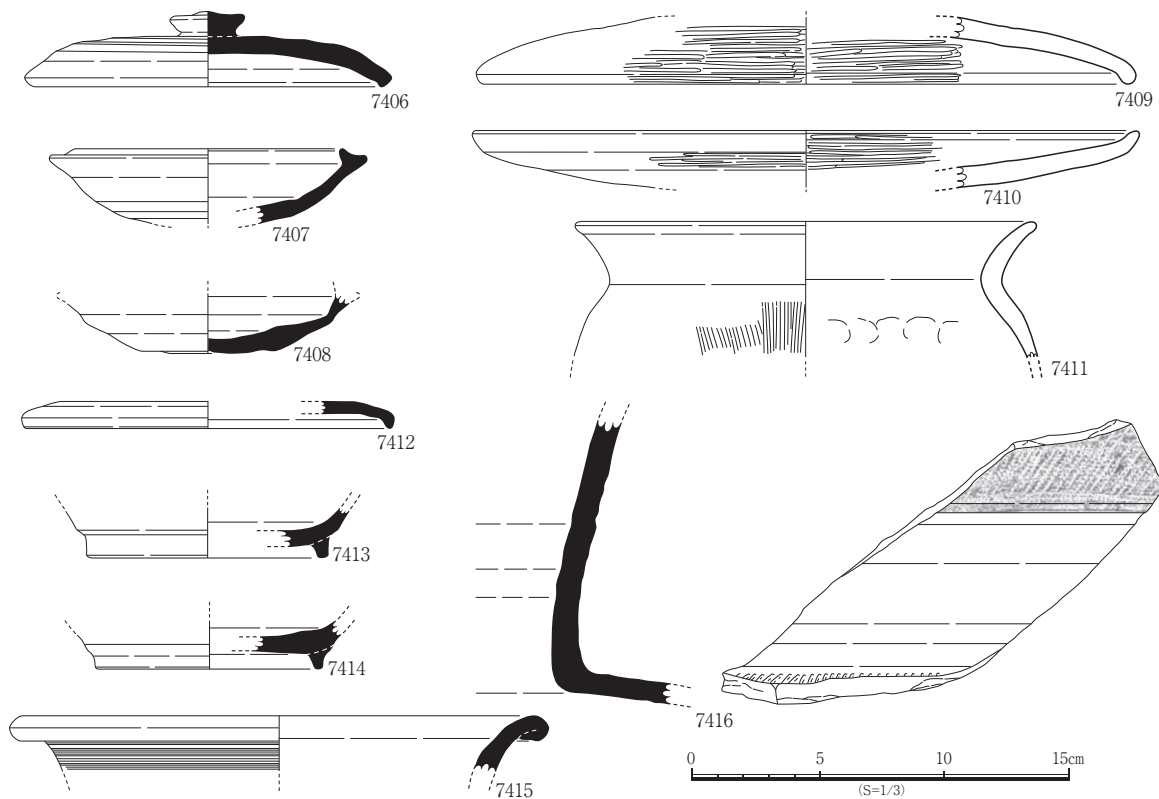


図3-352 SB-7009・7010・7013・7014出土遺物実測図

SB-7015 (図3-353)

VII-1区南東部, SB-7005の北隣で検出した桁行3間(5.40m), 梁行2間(3.60m)の南北棟建物跡で, 棟方向はN-13° 22'-Eを示す。柱間寸法は, 桁行(南北)が1.65~1.95m(5.5~6.5尺), 梁行(東西)が1.80m(6.0尺)等間隔である。柱穴の平面形はやや形の崩れるものもみられるが基本的に方形で, 一辺79~94cmを測り, 柱径は20cm前後とみられ, 深さは17~44cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器44点, 土師器19点, 須恵器13点, 土師質土器64点, 製塩土器7点, サヌカイト片1点(0.6g)がみられ, 土師器1点(7417)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-356 7417)

皿で, 口縁端部は内側に折込む。器面にはほぼ全面にヘラ磨きを施し, 外底面はヘラ削りの後, 部分的にヘラ磨きを施す。胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

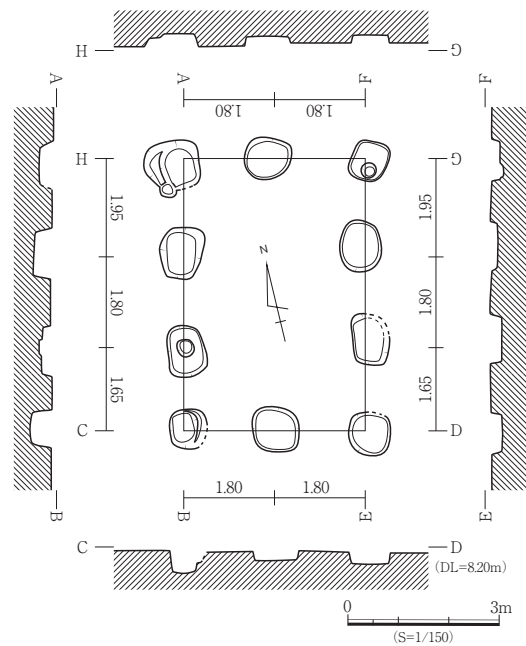


図3-353 SB-7015

SB-7016 (図3-354)

VII-1区南東部, SB-7005と重複した形で検出した桁行5間(9.60m), 梁行3間(5.10m)の南北棟建物跡で, 棟方向はN-10° 29'-Eを示す。柱間寸法は, 桁行(南北)が1.65~2.10m(5.5~7.0尺), 梁行(東西)が1.50m(5.0尺)・1.80m(6.0尺)である。柱穴の平面形はやや形の崩れるものもみられるが基本的に方形で, 一辺66~74cmを中心に, 一辺41~100cmを測り, 柱径は20cm前後とみられ, 深さは14~82cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器109点, 土師器48点, 須恵器19点, 土師質土器37点, 石製品4点, サヌカイト片1点(0.2g)がみられ, 土師器1点(7418), 須恵器1点(7419), 石製品1点(7420)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-356 7418)

高杯で, 口縁部は体部から斜め上方に屈曲

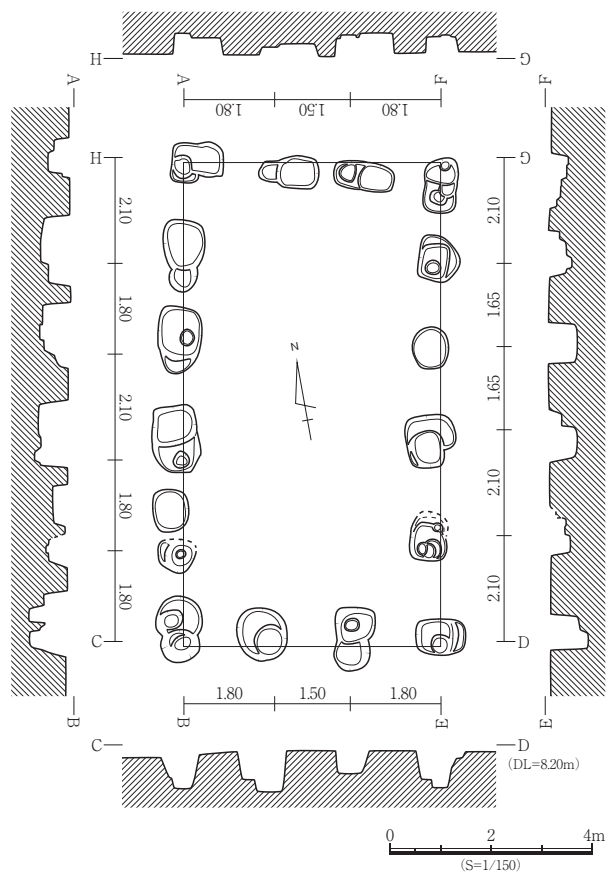


図3-354 SB-7016

する。内面には圏状、半圏状のヘラ磨き、外面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

須恵器(図3-356 7419)

杯蓋で、天井部は凹み、扁平なボタン状のつまみが付き、外面の大半に回転ヘラ削りを施す。胎土には極細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-356 7420)

磨石で、表面は平滑となり、縁辺を中心に擦痕、片面には部分的に敲打痕、側面にも敲打痕と摩滅痕が残り、叩石としても使用されていたものとみられる。

SB-7017(図3-355)

VII-1区南東部、SB-7005の南隣で検出した桁行5間(8.10m)、梁行3間(5.70m)の南北棟建物跡で、棟方向はN-10°37'-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.20~1.95m(4.0~6.5尺)、梁行(東西)が1.50~2.40m(5.0~8.0尺)である。柱穴の平面形はやや形の崩れるものもみられるが基本的に方形で、一辺85~102cmを中心に、一辺50~128cmを測り、柱径は25cm前後とみられ、深さは13~66cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器200点、土師器187点、須恵器87点、土師質土器173点、製塩土器21点、土製品1点、石製品1点、鉄製品2点、軽石1点がみられ、須恵器4点(7421~7424)、土製品1点(7425)、鉄製品1点(7426)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-356 7421~7424)

7421・7422は杯蓋で、いずれも天井部はほぼ平らで、口縁部は外下方に下る。7422は、残部に摩滅痕は認められないものの、墨痕が残っており、硯に転用されたものとみられる。胎土には、極細粒砂から中粒砂を7421は少し、7422は若干含む。

7423・7424は杯身で、7423の底部は丸味がある。底部外面は回転ヘラ切りの後にナデ調整を加え、切り離しの痕をナデ消す。特に、7424は丁寧にナデ調整を加え、その痕跡はほとんど残っていない。胎土には、7423は極細粒砂から中粒砂を少し、7424は極細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

土製品(図3-356 7425)

円筒形の土錘で、紐孔は径0.7cmを測る。表面には指頭圧痕が残る。胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

鉄製品(図3-356 7426)

雁股の鉄鏃で、二股に分かれる身基部と関及び茎が残る。

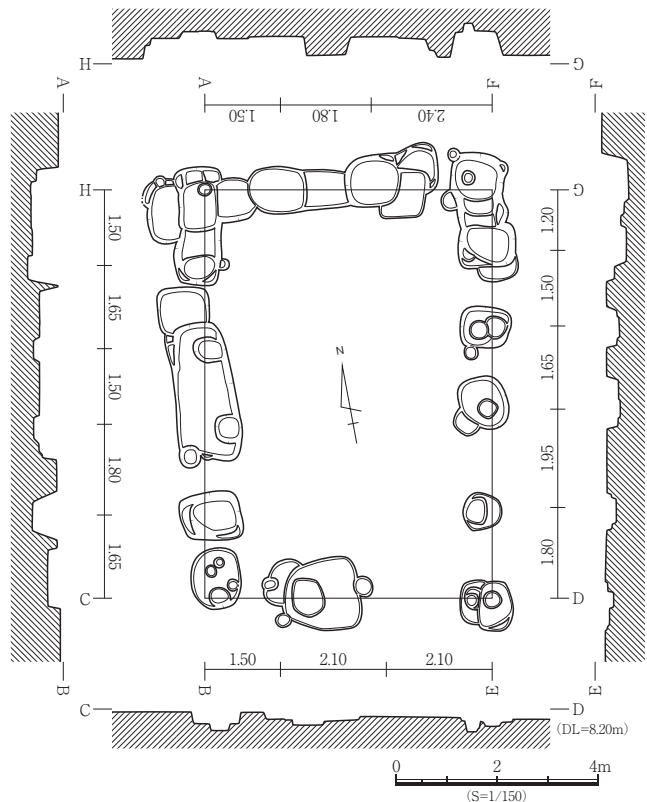


図3-355 SB-7017

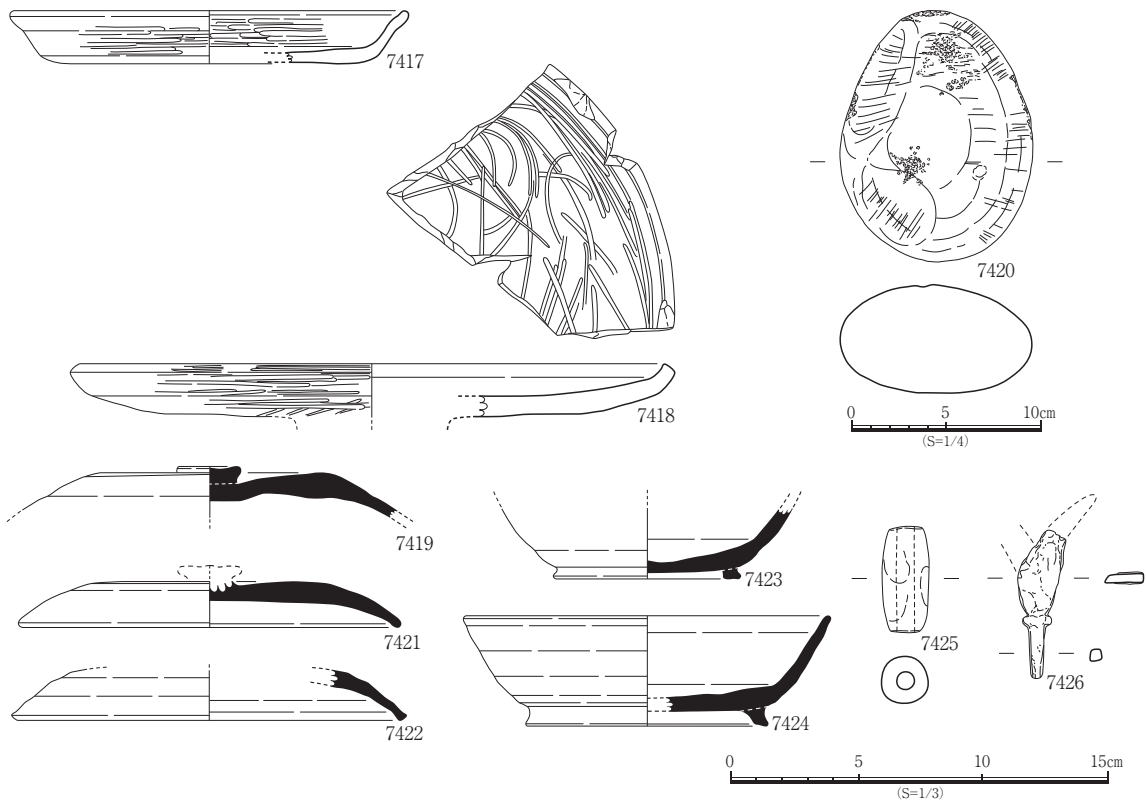


図3-356 SB-7015～7017出土遺物実測図

SB-7018 (図3-357)

Ⅶ-1区南東端部，SB-7014の南東側で検出した桁行4間(6.60m)，梁行3間(5.10m)とみられる南北棟建物跡で，東平側はⅦ-2区との間の未調査地区にあるとみられ未確認で，北妻柱西から2間目の柱穴は未検出である。棟方向はN-6°59'-Eを示す。柱間寸法は，桁行(南北)が1.50m(5.0尺)・1.80m(6.0尺)，梁行(東西)が1.50～1.95m(5.0～6.5尺)とみられる。柱穴の平面形は，形の崩れるものもみられるが基本的に方形で，一辺90～106cmを中心に，一辺55～120cmを測り，柱径は20cm前後とみられ，深さは26～80cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器87点，土師器52点，須恵器35点，土師質土器57点，製塩土器3点がみられ，土師器1点(7427)，須恵器1点(7428)が図示できた。

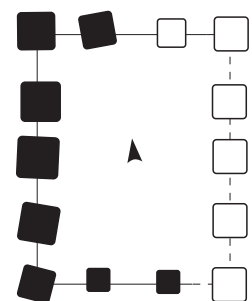


図3-357 SB-7018

出土遺物

土師器(図3-362 7427)

杯蓋で，口縁部には丸味があり，端部は下方に小さく屈曲する。内面にはヘラ磨きが残る。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

須恵器(図3-362 7428)

大型の杯身で，内底面に研磨痕が残ることから転用硯とみられる。底部外面端部には逆台形の高さ0.7cmの高台が付き，高台の外側には回転ヘラ削り，外底面はナデ調整で切り離しの痕をナデ消す。胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

SB-7019 (図3-358)

VII-1区南西端部からVI-2区南東端部にかけて検出した桁行5間(8.70m), 梁行2間(4.05m)の東西棟建物跡とみられるもので, 調査区の中に存在するとみられる北と南の側柱の柱穴4個と南東隅柱の柱穴および南東隅柱から西へ1間目の柱穴は未確認である。棟方向はN-83°1'-Wを示す。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.50~1.95m(5.0~6.5尺), 梁行(南北)が1.95m(6.5尺)・2.10m(7.0尺)とみられる。

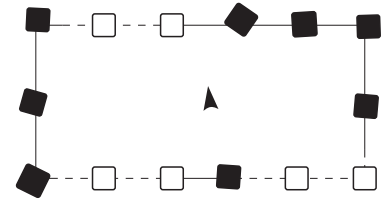


図3-358 SB-7019

柱穴の平面形は方形で, 一辺70~75cmを中心に, 一辺65~83cmを測り, 柱径は15cm前後とみられ, 深さは16~38cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器18点, 土師質土器11点, 石製品1点がみられ, 石製品1点(7429)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-362 7429)

棒状の叩石で, 断面は三角形を呈し, 内1面には研磨痕, 両端部は敲打により摩滅する。

SB-7020 (図3-359)

VII-1区南西端部, SB-7019の北隣で検出した桁行4間(6.90m), 梁行2間(3.90m)の南北棟建物跡で, 棟方向はN-6°31'-Eを示す。柱間寸法は, 桁行(南北)が1.50~2.10m(5.0~7.0尺), 梁行(東西)が1.80~2.10m(6.0~7.0尺)である。柱穴の平面形は, やや形の崩れるものもみられるが基本的に方形で, 一辺64~75cmを中心に, 一辺52~90cmを測り, 柱径は20cm前後とみられ, 深さは16~58cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器45点, 土師器11点, 須恵器5点, 土師質土器16点, 土製品1点, 石製品1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

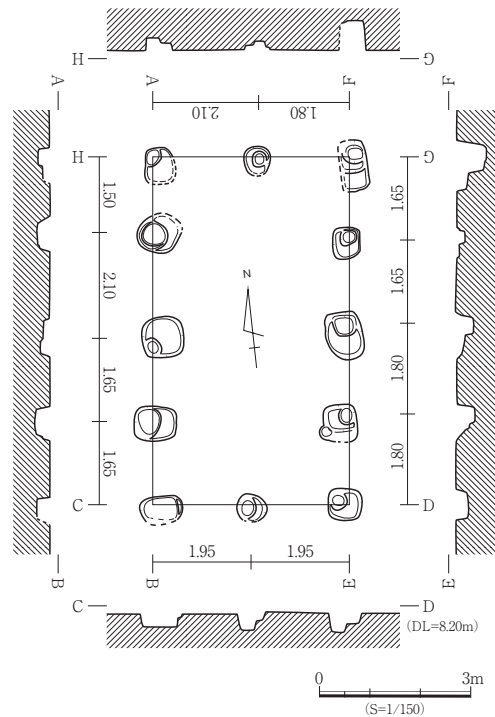


図3-359 SB-7020

SB-7021 (図3-360)

VII-1区南西端部, SB-7009と重複する形で検出した桁行3間(5.40m), 梁行2間(3.00m)の東西棟建物跡とみられるもので, 西半分はVI-2区との間の未調査地区にあるとみられ未確認である。棟方向はN-79°31'-Wを示す。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.80~1.95m(6.0~6.5尺), 梁行(南北)が1.50m(5.0尺)等間隔である。柱穴の平面形は, 形の崩れるものもみられるが基本的に方形で, 一辺59~65cmを中心に, 一辺55~74cmを測り, 柱径は18cm前後とみられ, 深さは14~42cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器24点, 土師器6点, 須恵器4点, 土師質土器3点がみられたが, 図示できるものはなかった。

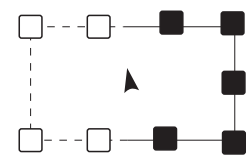


図3-360 SB-7021

SB-7022 (図3-361)

VII-1区西部, SB-7032と重複する形で検出した桁行4間(5.40m), 梁行2間(3.90m)の南北棟建物跡で,

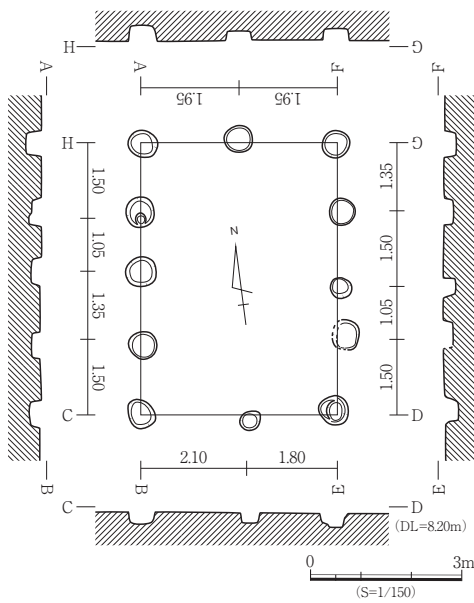


図3-361 SB-7022

出土遺物

須恵器(図3-362 7430)

杯身で、立ち上がりは短く反り上がり、端部は細い。底部にはヘラ起こしの痕が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SB-7023(図3-363)

VII-1区中央部西寄り，SB-7022の南東側で検出した桁行3間(6.90m)，梁行2間(3.60m)の南北棟建物跡で，北と南の妻柱真中の柱穴は未確認である。棟方向はN-9°39'-Eを示す。柱間寸法は，桁行(南北)が2.10～2.55m(7.0～8.5尺)，梁行(東西)が1.80m(6.0尺)等間隔とみられる。柱穴の平面形は方形で，一辺81～92cmを測り，柱径は20cm前後とみられ，深さは23～70cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器65点，土師器57点，須恵器18点，土師質土器197点，製塩土器2点，石製品2点，鉄製品1点，サヌカイト片3点(1.1g)がみられ，土師器1点(7431)，土師質土器1点(7432)，石製品1点(7433)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-364 7431)

比較的大型の皿で，底部は深く，内面には放射線状の暗文を施す。口縁端部は内側に折込む。胎土には細

棟方向はN-7°8'-Eを示す。柱間寸法は，桁行(南北)が1.05～1.50m(3.5～5.0尺)，梁行(東西)が1.80～2.10m(6.0～7.0尺)である。柱穴の平面形は，形の崩れる円形を呈するものも散見されるが基本的に方形を指向したものとみられ，一辺52～55cmを中心に，一辺39～64cmを測り，柱径は15cm前後とみられ，深さは16～31cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む暗褐色(10YR3/3)シルトであった。出土遺物には弥生土器40点，土師器2点，須恵器4点，土師質土器17点がみられ，須恵器1点(7430)が図示できた。

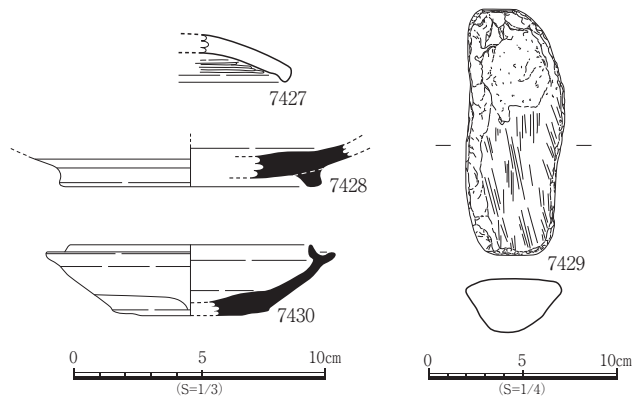


図3-362 SB-7018・7019・7022出土遺物実測図

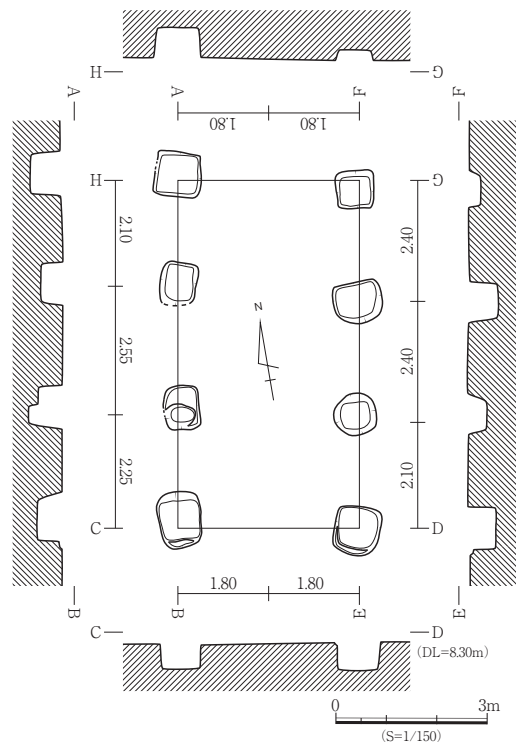


図3-363 SB-7023

2. VII区 (2) 古代

粒砂から中粒砂を少し含む。

土師質土器(図3-364 7432)

杯で、口縁部は外上方へ立ち上がり、端部には折込みの痕跡が沈線として残る。胎土には極細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-364 7433)

柱状の砥石で、両面と側面1面の3面に使用痕が残る。

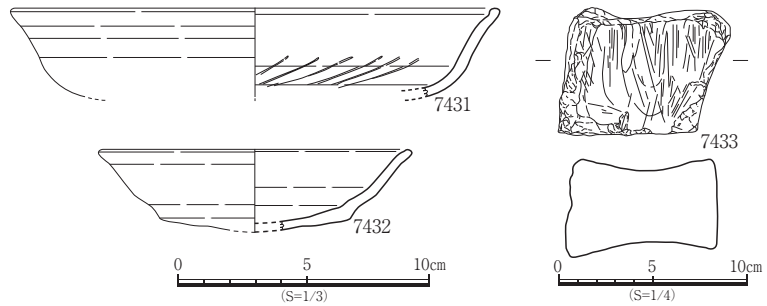


図3-364 SB-7023出土遺物実測図

SB-7024 (図3-365)

VII-1区北東端部からVII-2区の北西端部にかけて検出した桁行2間(3.60m)、梁行2間(3.30m)の南北棟建物跡とみられるもので、北と南の妻柱真中の柱穴はVII-1区とVII-2区の間の未調査地区にあるとみられ未確認である。棟方向はN-7°50'-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.65m(5.5尺)・1.95m(6.5尺)、梁行(東西)が1.65m(5.5尺)等間隔とみられる。柱穴の平面形は形の崩れるものもみられる。図3-365 SB-7024が基本的に方形で、一辺69~75cmを中心に、一辺64~80cmを測り、柱径は15cm前後とみられ、深さは31~56cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器9点、土師質土器2点、石製品1点がみられたが、図示できるものはなかった。

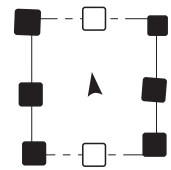


図3-365 SB-7024

SB-7025 (図3-366)

VII-2区北部、SB-7024の東側で検出した桁行3間(6.30m)、梁行2間(3.90m)の東西棟建物跡で、東側柱真中の柱穴と南東隅柱から西に1間目の柱穴は未確認である。棟方向はN-78°36'-Wを示し、柱間寸法は、桁行(東西)が2.10m(7.0尺)等間隔、梁行(南北)が1.80m(6.0尺)・2.10m(7.0尺)である。柱穴の平面形は形の崩れるものもみられるが基本的に方形で、一辺55~60cmを中心に、一辺35~72cmを測り、柱径は15cm前後とみられ、深さは10~45cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器30点、土師器1点、須恵器4点、土師質土器8点、製塩土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

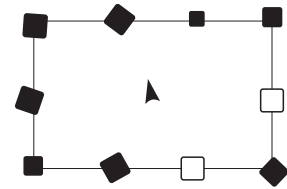


図3-366 SB-7025

SB-7026 (図3-367)

VII-2区北西部、SB-7013と重複する形で検出した桁行3間(5.10m)、梁行3間(4.50m)の南北棟建物跡で、北と南の妻柱西から1間目の柱穴は未確認である。棟方向はN-11°35'-Eを示し、柱間寸法は、桁行(南北)が1.50~1.95m(5.0~6.5尺)、梁行(東西)が1.35~1.65m(4.5~5.5尺)とみられる。柱穴の平面形は形の崩れるものもみられるが方形を指向しており、一辺53~57cmを中心に、一

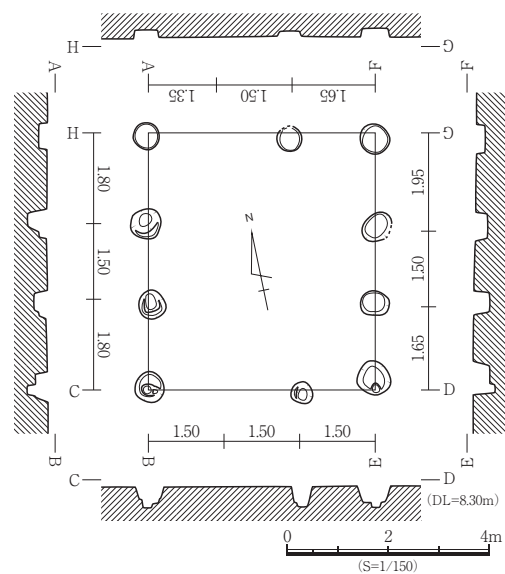


図3-367 SB-7026

辺40～69cmを測り、柱径は15cm前後とみられ、深さは9～42cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器33点、土師器3点、須恵器5点、土師質土器16点、製塩土器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-7027 (図3-368)

VII-1区南東部、SB-7005・7016・7017と重複する形で検出した桁行4間(7.20m)、梁行3間(4.80m)の比較的大きな南北棟建物跡で、棟方向はN-6°34'-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.80m(6.0尺)等間隔、梁行(東西)が1.50m(5.0尺)・1.80m(6.0尺)である。柱穴の平面形は方形で、一辺86～94cmを中心に、一辺74～114cmを測り、柱径は24cm前後とみられ、深さは19～50cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器210点、土師器175点、須恵器70点、土師質土器171点、製塩土器21点、石製品5点、軽石2点、サヌカイト片2点(3.4g)がみられ、土師器4点(7434～7437)、須恵器3点(7438～7440)、土師質土器1点(7441)、石製品1点(7442)が図示できた。

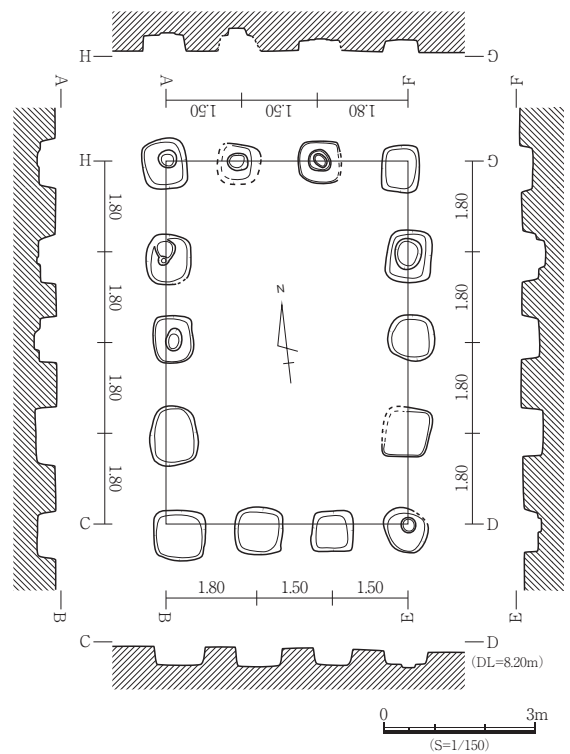


図3-368 SB-7027

出土遺物

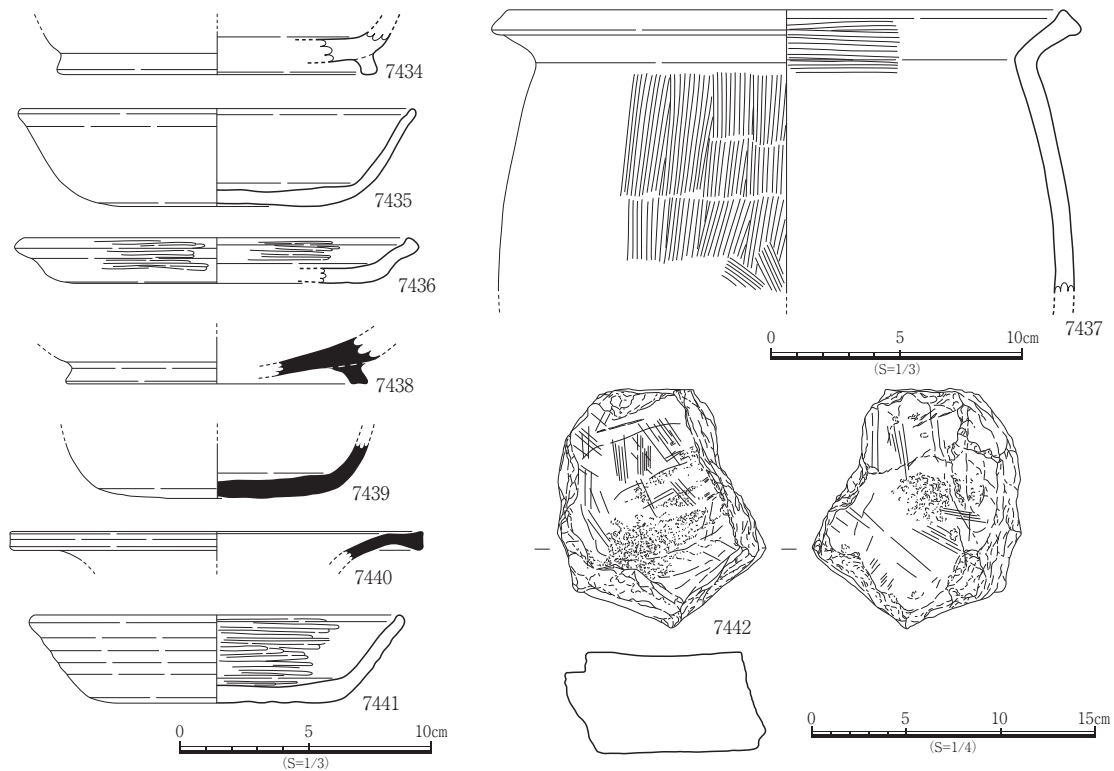


図3-369 SB-7027出土遺物実測図

土師器(図3-369 7434~7437)

7434は杯身で、高さ0.8cmの輪高台が付く。7435は杯で、口縁端部は内側に折込む。胎土には、7434が極細粒砂から中粒砂、7435が極細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

7436は皿で、口縁部は短く外上方を向き、端部を内側に折込む。器面にはヨコ方向のヘラ磨きを施し、外底面はヘラ切りとなる。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7437は甕で、口頸部は長胴となる胴部から外傾し、端部を上下に拡張する。口頸部内面と、胴部外面にはハケ目が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

須恵器(図3-369 7438~7440)

7438は大型の杯身で、高さ0.9cmの輪高台が付き、外底面はナデ調整で、切り離しの痕をナデ消す。7439は杯で、回転ヘラ切りで切り離すが、ナデ調整は加えていない。胎土には、7438が極細粒砂から粗粒砂を若干、7439が極細粒砂から中粒砂を少し含む。

7440は長頸壺の口縁部で、大きく外反し、自然釉がかかり、外面は若干ハダ荒れする。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

土師質土器(図3-369 7441)

杯で、成形はA技法であるが、内面にはヨコ方向のヘラ磨きを加え土師器的な調整を施す。また、口縁端部は内側に若干折込む。底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

石製品(図3-369 7442)

砥石で、上下2面に使用痕と敲打痕が残る。また、被熱で変色した箇所がみられる。

SB-7028(図3-370)

VII-1区中央部南寄り、SB-7029と重複する形で検出した桁行2間(3.60m)、梁行2間(3.60m)の南北棟建物跡で、棟方向はN-4°26'-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.80m(6.0尺)等間隔、梁行(東西)が1.80m(6.0尺)等間隔である。柱穴の平面形はやや形の崩れるものもみられるが基本的に方形で、一辺70~77cmを中心に、一辺61~104cmを測り、柱径は20cm前後とみられ、深さは37~47cmである。

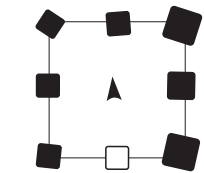


図3-370 SB-7028

柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器116点、土師器29点、須恵器22点、土師質土器44点、黒色土器1点、石製品1点がみられ、土師器1点(7443)、須恵器4点(7444~7447)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-371 7443)

杯身で、平らな底部外端部に高さ0.8cmの高台が付く。胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

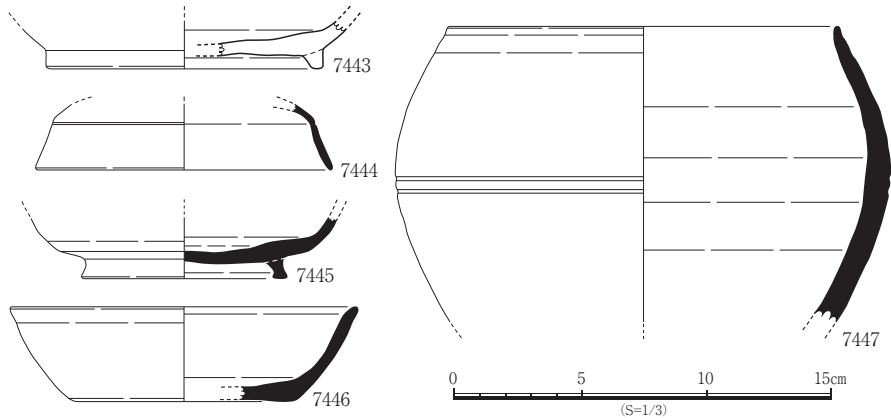


図3-371 SB-7028出土遺物実測図

須恵器(図3-371 7444~7447)

7444は杯蓋で、天井部と口縁部の境の稜は沈線となり、口縁部は外下方へ下り、端部を丸く仕上げる。口縁部高は1.8cmと比較的高い。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

7445は杯身で、底部外端部より内側に高さ0.8cmの高台が付き、外側には回転ヘラ削りを施す。底部に切り離しは回転ヘラ切りそのままとなる。7446は杯で、口縁部がやや内湾気味に立ち上がり、端部を細く仕上げる。胎土には、7445が細粒砂から粗粒砂、7446が細粒砂から中粒砂を少し含む。

7447は鉢で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部はそのまま内傾する。最大径を測る体部外面には2条の沈線が巡る。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

SB-7029(図3-372)

VII-1区中央部、SB-7028と重複する形で検出した桁行3間(5.10m)、梁行3間(4.35m)の南北棟建物跡で、棟方向はN-3°35'-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.50m(5.0尺)・1.80m(6.0尺)、梁行(東西)が1.35m(4.5尺)・1.50m(5.0尺)である。柱穴の平面形はやや形の崩れるものもみられるが基本的に方形で、一辺67~76cmを中心、一辺50~108cmを測り、柱径は18cm前後とみられ、深さは16~48cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器120点、土師器41点、須恵器26点、土師質土器101点、製塩土器2点、鉄製品1点、サヌカイト片1点(3.0g)がみられ、土師器1点(7448)、製塩土器1点(7449)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-379 7448)

皿で、口縁端部は内側に折込み、器面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

製塩土器(図3-379 7449)

口縁部は外上方を向き、端部は平面をなす。内面には布目が残る。胎土には細粒砂から極細粒中礫を多く含む。

SB-7030(図3-373)

VII-1区中央部、SB-7050と重複する形で検出した桁行4間(6.30m)、梁行2間(3.90m)の東西棟建物跡で、棟方向はN-87°51'-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.35~1.80m(4.5~6.0尺)、梁行(南北)が1.80m(6.0尺)・2.10m(7.0尺)である。柱穴の平面形はやや

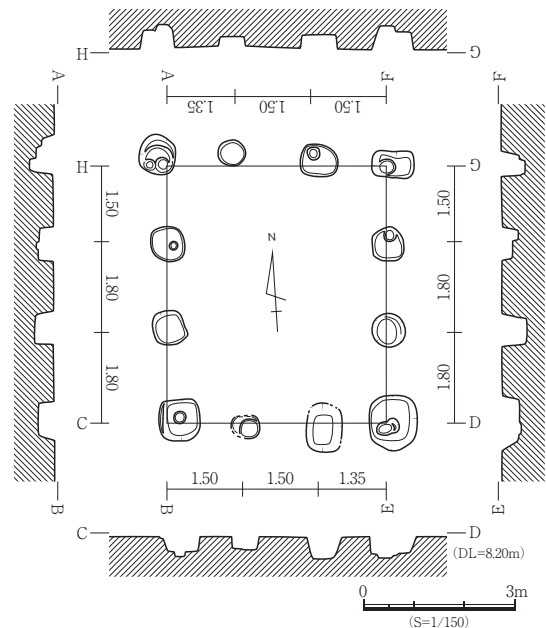


図3-372 SB-7029

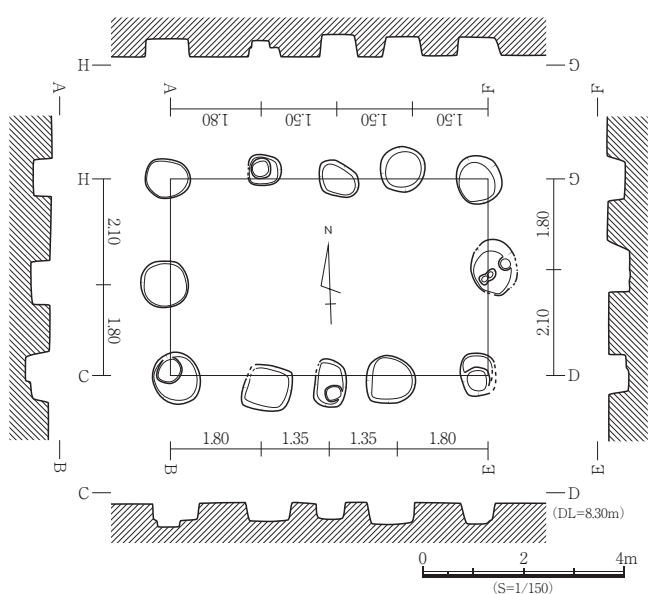


図3-373 SB-7030

形の崩れるものもみられるが基本的に方形で、一辺81～92cmを中心に、一辺60～113cmを測り、柱径は20cm前後とみられ、深さは34～47cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器100点、土師器3点、須恵器2点、土師質土器39点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-7031 (図3-374)

VII-1区北西部, SK-7036に掘り込まれた形で検出した桁行3間(6.60m), 梁行2間(3.60m)の東西棟建物跡で、北西隅柱から東へ1間目の柱穴はSK-7036に掘り込まれ未確認である。棟方向はN-85°17'-Wを示し、柱間寸法は、桁行(東西)が1.80～2.70m(6.0～9.0尺)、梁行(南北)が1.65m(5.5尺)・1.95m(6.5尺)である。柱穴の平面形はやや形の崩れるものもみられるが基本的に方形で、一辺65～75cmを中心に、一辺59～90cmを測り、柱径は18cm前後とみられ、深さは26～46cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器56点、土師器18点、須恵器14点、土師質土器45点、製塩土器1点がみられ、須恵器1点(7450)が図示できた。

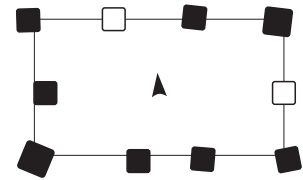


図3-374 SB-7031

出土遺物

須恵器(図3-379 7450)

皿で、口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は細く仕上がる。外面口縁部下端には沈線状の凹みが1条巡る。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、ナデ調整を加える。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

SB-7032 (図3-375)

VII-1区西部, SB-7022と重複した形で検出した桁行4間(6.30m), 梁行2間(3.00m)の東西棟建物跡で、棟方向はN-85°14'-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.35～1.80m(4.5～6.0尺)、梁行(南北)が1.35～1.65m(4.5～5.5尺)である。柱穴の平面形はやや形の崩れるものもみられるが基本的に方形で、一辺62～70cmを中心に、一辺43～78cmを測り、柱径は15cm前後とみられ、深さは13～44cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器35点、土師器8点、須恵器1点、土師質土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

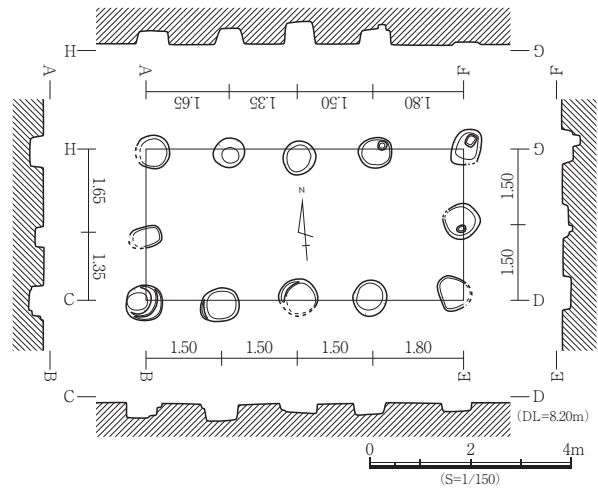


図3-375 SB-7032

SB-7033 (図3-376)

VII-1区西部, SB-7046・7047と重複した形で検出した桁行3間(5.40m), 梁行2間(3.90m)の南北棟建物跡で、北妻柱の真中の柱穴は未確認である。棟方向はN-3°34'-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.50～2.25m(5.0～7.5尺)、梁行(東西)が1.50m(5.0尺)・2.40m(8.0尺)である。柱穴の平面形は形の崩れるものが散見されるが基本的に方形を指向していたものとみられ、一辺72～79cmを中心に、

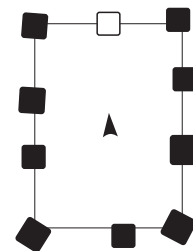


図3-376 SB-7033

一辺64～96cmを測り、柱径は18cm前後とみられ、深さは13～52cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器56点、土師器10点、須恵器15点、土師質土器32点、石製品2点がみられ、石製品1点(7451)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-379 7451)

砥石で、上下2面に使用痕が残る。

SB-7034(図3-377)

VII-1区南端部、SB-7035・7036と重複した形で検出した桁行3間(4.50m)、梁行2間(3.60m)の南北棟建物跡で、棟方向はN-1°38'-Wを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.50m(5.0尺)等間隔、梁行(東西)が1.80m(6.0尺)等間隔である。柱穴の平面形はほぼ方形で、一辺82～87cmを中心に、一辺74～102cmを測り、柱径は20cm前後とみられ、深さは39～82cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器88点、土師器7点、須恵器19点、土師質土器108点、製塩土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

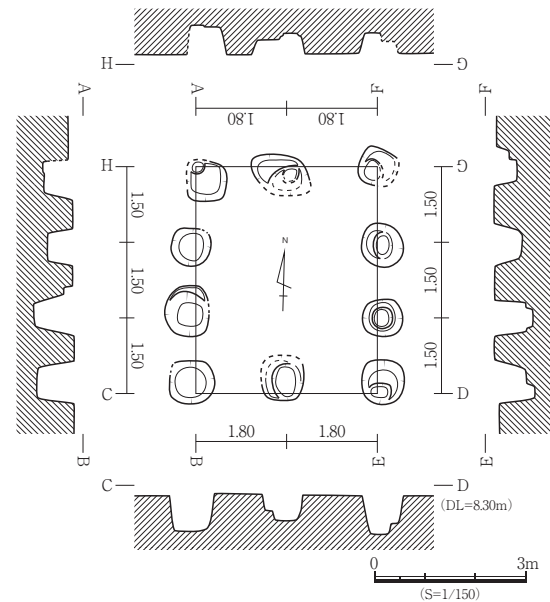


図3-377 SB-7034

SB-7035(図3-378)

VII-1区南端部、SB-7034・7036と重複した形で検出した桁行3間(4.50m)、梁行3間(4.05m)の南北棟建物跡で、棟方向はN-0°43'-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.50m(5.0尺)等間隔、梁行(東西)が1.35m(4.5尺)等間隔である。柱穴の平面形はほぼ方形で、一辺84～98cmを中心に、一辺72～112cmを測り、柱径は25cm前後とみられ、深さは21～73cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器92点、土師器36点、須恵器14点、土師質土器130点がみられ、土師質土器1点(7452)が図示できた。

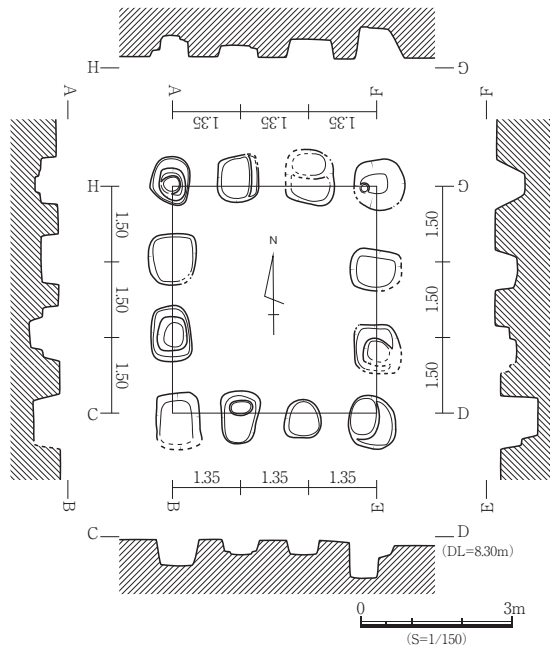


図3-378 SB-7035

出土遺物

土師質土器(図3-379 7452)

椀で、成形はA技法となる。底部外端部には高さ0.5cmの高台が付く。胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

SB-7036(図3-380)

VII-1区南端部、SB-7034・7035と重複した形で検出した桁行3間程度、梁行2間(3.30m)の南北棟建物跡とみられるもので、北妻側の柱穴以外は南の調査区外にあるとみられ未確認である。棟方向はN

-3° 25'-Eを示す。柱間寸法は、梁行(東西)が1.50m (5.0尺)・1.80m (6.0尺)である。柱穴の平面形はほぼ方形で、一辺56～59cmを中心に、一辺53～61cmを測り、柱径は20cm前後とみられ、深さは27～48cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器8点、須恵器5点、土師質土器7点がみられたが、図示できるものはなかった。

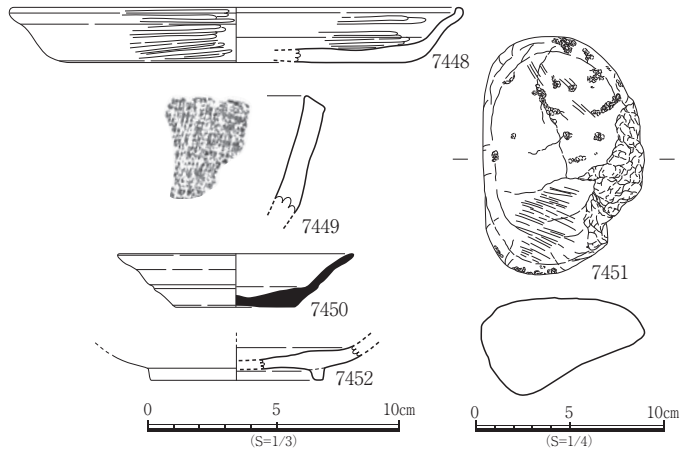


図3-379 SB-7029・7031・7033・7035出土遺物実測図

SB-7037 (図3-381)

VII-1区南端部、SB-7035の西側で検出した桁行2間(3.90m)、梁行2間(3.30m)の東西棟建物跡で、棟方向はN-87° 43'-Eを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.80m (6.0尺)・2.10m (7.0尺)、梁行(南北)が1.50m (5.0尺)・1.80m (6.0尺)である。柱穴の平面形はやや形の崩れるものもみられるが基本的に方形で、一辺56～65cmを中心に、一

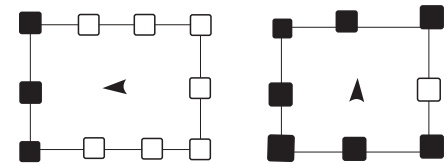


図3-380 SB-7036 図3-381 SB-7037

辺51～76cmを測り、柱径は15cm前後とみられ、深さは20～29cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器37点、土師器5点、須恵器5点、土師質土器35点、黒色土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

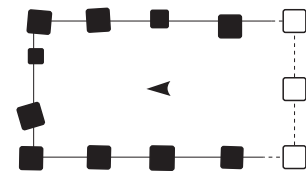


図3-382 SB-7038

SB-7038 (図3-382)

VII-1区南端部、SB-7037の西側で検出した桁行3間(5.10m)以上、梁行3間(3.60m)の南北棟建物跡で、南妻柱は調査区外にあり未確認である。棟方向はN-1° 3'-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.50m (5.0尺)・1.80m (6.0尺)、梁行(東西)が0.90～1.50m (3.0～5.0尺)である。柱穴の平面形はやや形の崩れるものもみられるがほぼ方形で、一辺61～69cmを中心に、一辺45～90cmを測り、柱径は15cm前後とみられ、深さは16～38cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器58点、土師器24点、須恵器12点、土師質土器47点、製塩土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

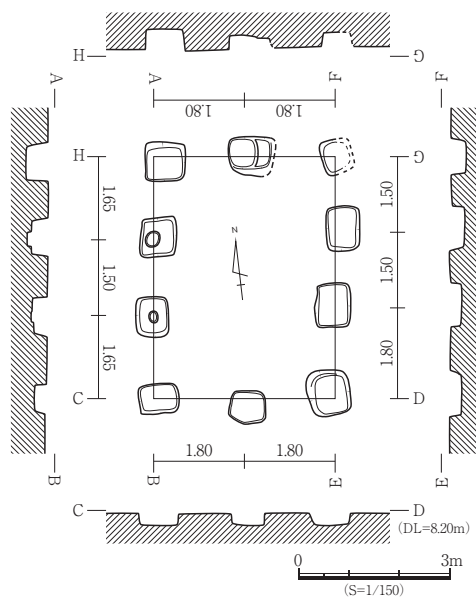


図3-383 SB-7039

SB-7039 (図3-383)

VII-1区南西部、SB-7038の西側で検出した桁行3間(4.80m)、梁行2間(3.60m)の南北棟建物跡で、棟方向はN-2° 0'-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.50～1.80m (5.0～6.0尺)、梁行(東西)が1.80m (6.0尺)等間隔である。柱穴の

平面形は方形で、一辺72～82cmを中心に、一辺58～93cmを測り、柱径は20cm前後とみられ、深さは23～42cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器58点、土師器7点、須恵器15点、土師質土器53点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-7040 (図3-384)

Ⅶ-1区中央部南西寄り、SB-7038の北側で検出した桁行2間(3.60m)、梁行2間(2.70m)の小型東西棟建物跡で、棟方向はN-88°26'-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.65～1.95m(5.5～6.5尺)、梁行(南北)が1.20m(4.0尺)・1.50m(5.0尺)である。柱穴の平面形はほぼ方形で、一辺62～69cmを中心に、一辺45～96cmを測り、柱径は20cm前後とみられ、深さは10～48cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器44点、土師器11点、須恵器3点、土師質土器20点がみられ、土師器1点(7453)が図示できた。

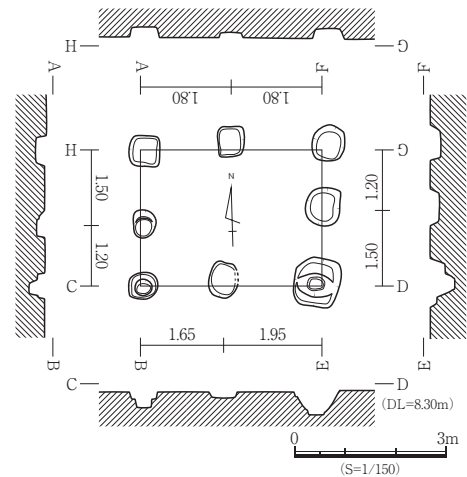


図3-384 SB-7040

出土遺物

土師器(図3-394 7453)

甕で、口縁部は外傾し、端部を肥厚する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SB-7041 (図3-385)

Ⅶ-1区南東部、SB-7049と重複した形で検出した桁行3間(4.20m)、梁行3間(3.90m)の南北棟建物跡で、棟方向はN-1°17'-Wを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.20m(4.0尺)・1.50m(5.0尺)、梁行(東西)が1.20～1.50m(4.0～5.0尺)である。柱穴の平面形はやや形の崩れるものもみられるがほぼ方形で、一辺70～76cmを中心に、一辺49～96cmを測り、柱径は20cm前後とみられ、深さは28～80cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器83点、土師器22点、須恵器10点、土師質土器97点、鉄製品1点がみられ、須恵器1点(7454)が図示できた。

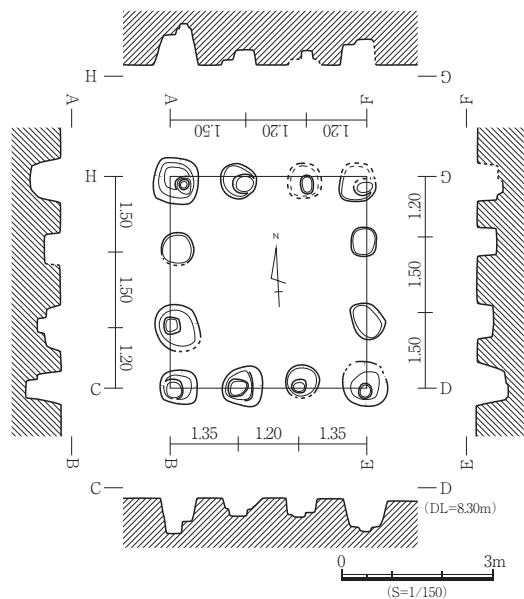


図3-385 SB-7041

出土遺物

須恵器(図3-394 7454)

かえりのある杯蓋で、真横を向く口縁部内側に真下を向くかえりが付く。天井部外面を中心に自然釉がかりハダ荒れがみられる。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

SB-7042 (図3-386)

Ⅶ-1区南部、SB-7041の北側で検出した桁行2間(3.60m)、梁行2間(3.30m)の南北棟建物跡で、南妻柱の真中の柱穴は未確認である。棟方向はN-0°28'-Wを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.20～2.40m(4.0～8.0尺)、梁行(東西)が1.50m

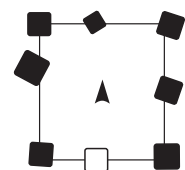


図3-386 SB-7042

(5.0尺)・1.80m(6.0尺)である。柱穴の平面形はほぼ方形で、一辺66～75cmを中心に、一辺41～92cmを測り、柱径は20cm前後とみられ、深さは15～45cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器89点、土師器17点、須恵器14点、土師質土器86点、製塩土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-7043 (図3-387)

VII-1区北西部、SB-7010と重複した形で検出した桁行3間(6.00m)、梁行2間(3.60m)の東西棟建物跡で、西妻柱の真中の柱穴はSD-7003と重複しており未確認である。棟方向はN-88°30'-Eを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.65～2.55m(5.5～8.5尺)、梁行(南北)が1.80m(6.0尺)等間隔とみられる。柱穴の平面形はやや形の崩れるものもみられるが基本的に方形で、一辺64～69cmを中心に、一辺54～83cmを測り、柱径は18cm前後とみられ、深さは20～50cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器37点、土師質土器14点がみられたが、図示できるものはなかった。

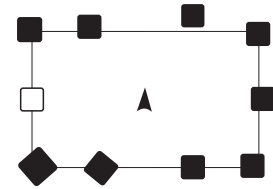


図3-387 SB-7043

SB-7044 (図3-388)

VII-1区北東部、SB-7011と重複した形で検出した桁行3間(4.80m)、梁行2間(3.90m)の南北棟建物跡とみられるもので、北西隅柱の柱穴と南妻柱の真中の柱穴は未確認である。棟方向はN-3°9'-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.20～1.95m(4.0～6.5尺)、梁行(東西)が1.95m(6.5尺)等間隔とみられる。柱穴の平面形はやや形の崩れるものもみられるがほぼ方形で、一辺73～81cmを中心に、一辺57～98cmを測り、柱径は18cm前後とみられ、深さは15～26cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器77点、土師器10点、須恵器10点、土師質土器28点、製塩土器5点がみられたが、図示できるものはなかった。

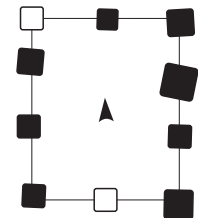


図3-388 SB-7044

SB-7045 (図3-389)

VII-1区南東端部、SB-7018と重複した形で検出した桁行3間(4.50m)、梁行2間(3.00m)の南北棟建物跡とみられるもので、東側柱の柱穴の大半はVII-2区との間の未調査地区にあるとみられ未確認である。棟方向はN-3°26'-Eを示し、柱間寸法は、桁行(南北)が1.35～1.65m(4.5～5.5尺)、梁行(東西)が1.50m(5.0尺)等間隔とみられる。柱穴の平面形は形の崩れるものもみられるが基本的に方形で、一辺50～57cmを中心に、一辺36～69cmを測り、柱径は18cm前後とみられ、深さは25～47cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器17点、土師器5点、須恵器2点、土師質土器31点、製塩土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

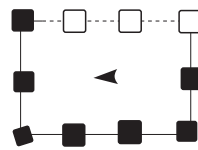


図3-389 SB-7045

柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器17点、土師器5点、須恵器2点、土師質土器31点、製塩土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-7046 (図3-390)

VII-1区西部、SB-7033・7047と重複した形で検出した桁行4間(6.90m)、梁行3間(4.80m)の南北棟建物跡で、棟方向はN-3°19'-Wを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.50～1.95m(5.0～6.5尺)、梁行(東西)が1.35～1.95m(4.5～6.5尺)である。柱穴の平面形はやや形の崩れるものもみられるがほぼ方形で、一辺63～79cmを中心に、一辺43～102cmを測り、柱径は15cm前後とみられ、深さは18～74cmである。柱

穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器119点, 土師器6点, 須恵器23点, 土師質土器48点, 鉄製品1点がみられ, 須恵器1点(7455)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-394 7455)

台付椀で, 丸味のある底部にラッパ状に開く高さ2.5cmの脚台が付き, 端部を下方に小さく屈曲さす。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SB-7047(図3-391)

VII-1区西部, SB-7033・7046と重複した形で検出した桁行4間(7.20m), 梁行2間(4.50m)の南北棟建物跡で, 北と南の妻柱真中の柱穴は未確認である。棟方向はN-2°13'-Wを示し, 柱間寸法は, 桁行(南北)が1.35~2.10m(4.5~7.0尺), 梁行(東西)が2.25m(7.5尺)等間隔とみられる。柱穴の平面形はほぼ方形で, 一辺61~74cmを中心に, 一辺44~88cmを測り, 柱径は15cm前後とみられ, 深さは42~77cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器108点, 土師器61点, 須恵器24点, 土師質土器40点, 製塩土器1点, 石製品1点がみられ, 須恵器1点(7456)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-394 7456)

杯蓋で, 天井部は丸く, ほぼ全域に回転ヘラ削りを施す。口縁部は短く, 下方を向き, 端部を細く仕上げる。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

SB-7048(図3-392)

VII-1区南西部, SB-7008と重複した形で検出した桁行3間(5.25m), 梁行2間(3.75m)の南北棟建物跡で, 棟方向はN-6°8'-Wを示す。柱間寸法は, 桁行(南北)が1.65m(5.5尺)・1.80m(6.0尺), 梁行(東西)が1.80m(6.0尺)・1.95m(6.5尺)である。柱穴の平面形はほぼ方形で, 一辺59~65cmを中心に, 一辺41~90cmを測り, 柱径は20cm前後とみられ, 深さは22~54cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器68点, 土師器43点, 須恵器12点, 土師質土器82点, 製塩土器3点, 土製品1点, 石製品2点がみられ, 須恵

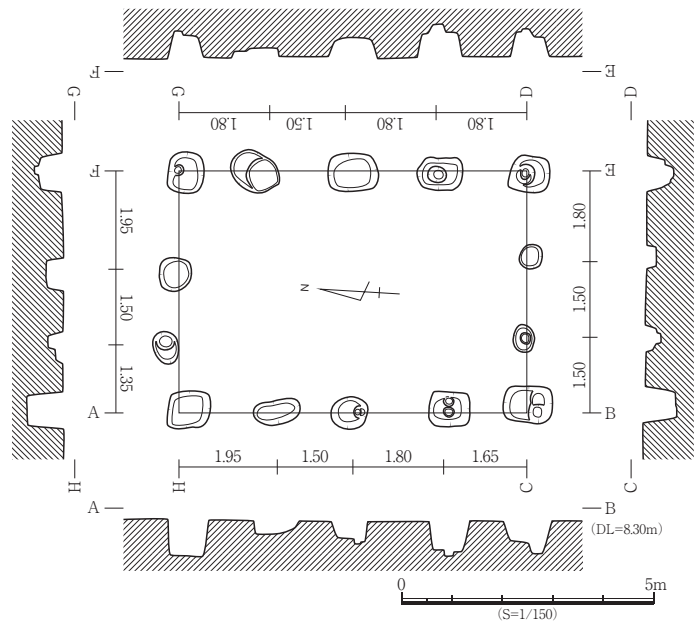


図3-390 SB-7046

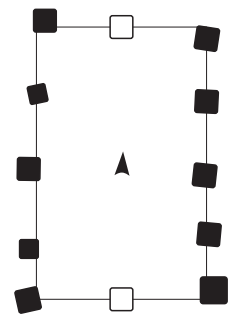


図3-391 SB-7047

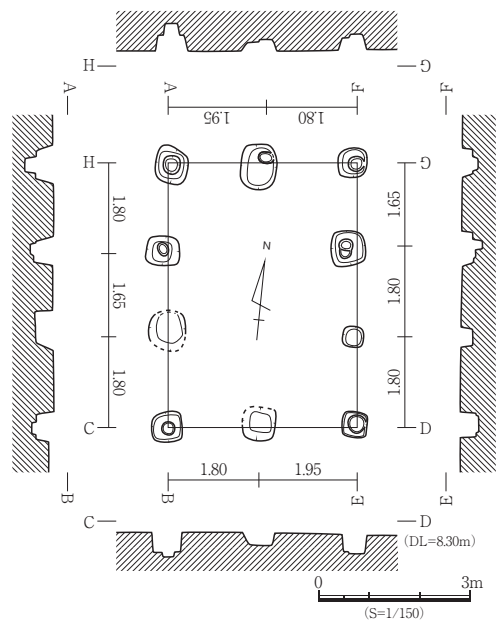


図3-392 SB-7048

器1点(7457), 土製品1点(7458), 石製品1点(7459)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-394 7457)

杯身で、底部が深い。底部外端部に高さ0.7cmのハの字形に開く高台が付き、外側には回転ヘラ削り、外底面は回転ヘラ切りの後にナデ調整を加える。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

土製品(図3-394 7458)

円筒形の土錘で、紐孔は径0.5cmを測る。胎土には極細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

石製品(図3-394 7459)

棒状の叩石で、片面中に深い擦痕と弱い敲打痕、側面と両端に摩滅痕、縁辺を中心に擦痕が残る。

SB-7049(図3-393)

VII-1区南部, SB-7041と重複した形で検出した桁行2間(3.30m), 梁行2間(3.00m)の小型東西棟建物跡で、棟方向はN-80°4'-Eを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.50m(5.0尺)・1.80m(6.0尺), 梁行(南北)が1.35~1.65m(4.5~5.5尺)である。柱穴の平面形はやや形の崩れるものもみられるがほぼ方形で、一辺54~59cmを中心に、一辺42~78cmを測り、柱径は15cm前後とみられ、深さは10~51cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器29点, 土師器11点, 須恵器3点, 土師質土器35点, 黒色土器1点, 製塩土器1点がみられ, 土師器1点(7460)が図示できた。

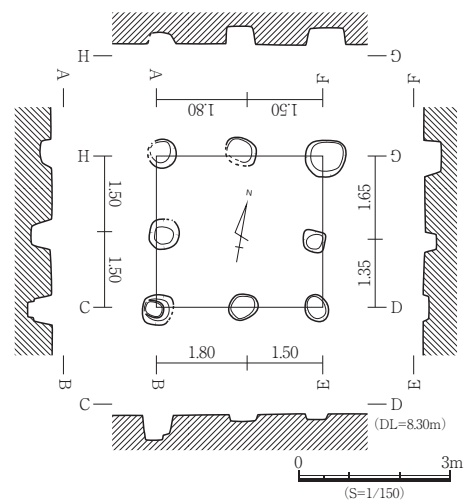


図3-393 SB-7049

出土遺物

土師器(図3-394 7460)

杯で、口縁部は斜め上方に真直ぐ伸び、端部を内側に若干折込む。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

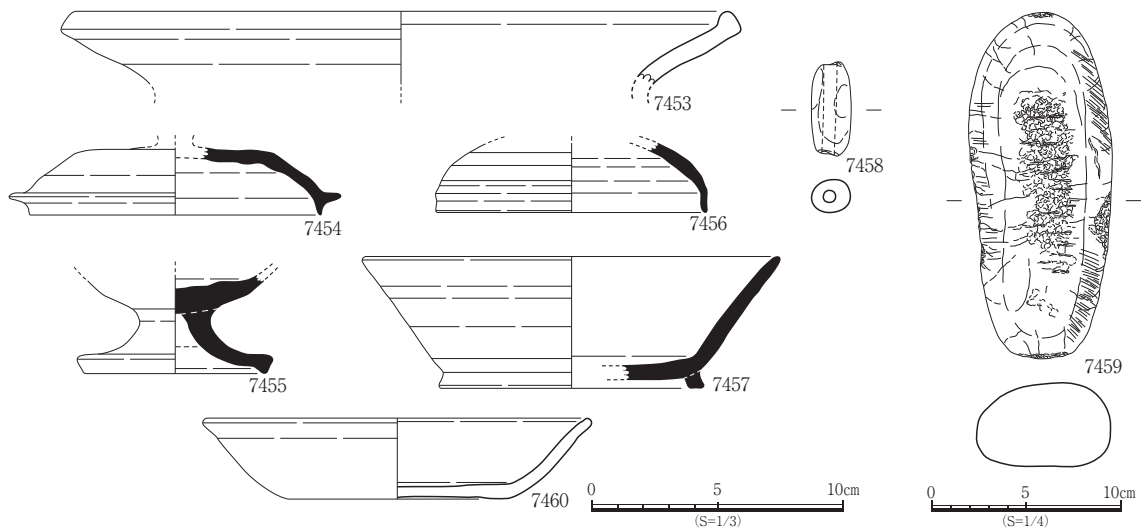


図3-394 SB-7040・7041・7046~7049出土遺物実測図

SB-7050 (図3-395)

Ⅶ-1区中央部, SB-7006・7030と重複した形で検出した桁行3間(6.30m), 梁行2間(4.20m)の南北棟建物跡で, 棟方向はN-2°0'-Wを示す。柱間寸法は, 桁行(南北)が1.80~2.40m(6.0~8.0尺), 梁行(東西)が2.10m(7.0尺)等間隔である。柱穴の平面形はやや形の崩れるものもみられるが基本的に方形で, 一辺51~58cmを測り, 柱径は12cm前後とみられ, 深さは13~58cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器32点, 土師器1点, 土師質土器4点, 土製品1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

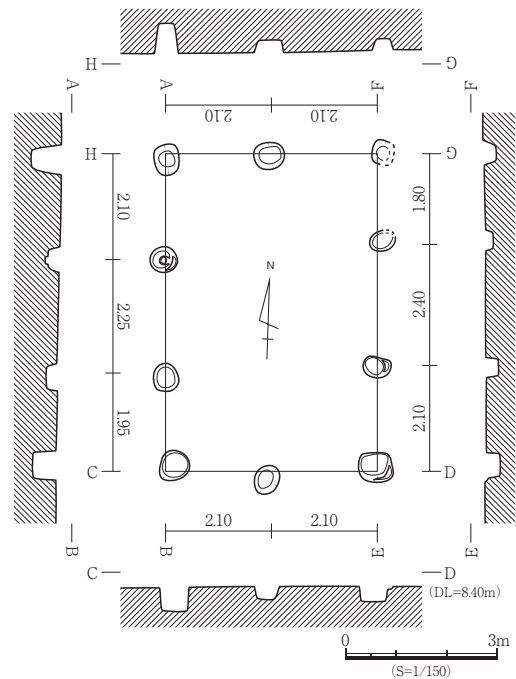


図3-395 SB-7050

SB-7051 (図3-396)

Ⅶ-1区北部, SB-7052の南側で検出した桁行3間(4.20m), 梁行2間(3.00m)の小型東西棟建物跡で, 棟方向はN-82°27'-Eを示す。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.20~1.50m(4.0~5.0尺), 梁行(南北)が1.35~1.65m(4.5~5.5尺)である。柱穴の平面形は円形を呈するものが散見されるが基本的に方形を指向していたものとみられ, 一辺54~58cmを測り, 柱径は12cm前後とみられ, 深さは28~41cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器40点, 土師器1点, 土師質土器2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

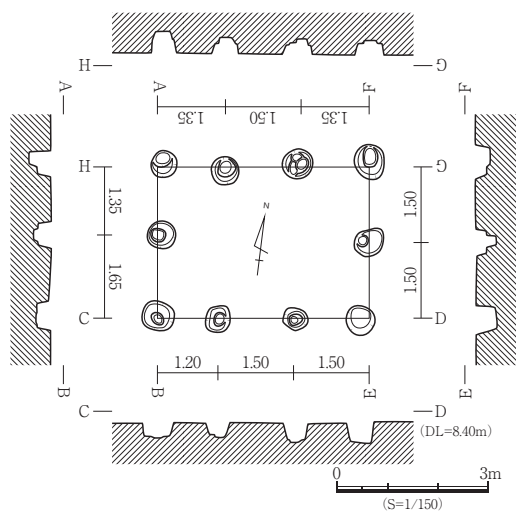


図3-396 SB-7051

SB-7052 (図3-397)

Ⅶ-1区北部, SB-7051の北側で検出した桁行2間(3.00m), 梁行2間(2.85~3.00m)の歪みのある小型東西棟建物跡で, 北側柱真中の柱穴と西妻柱真中の柱穴は未確認である。棟方向はN-81°3'~84°17'-Eを示す。

柱間寸法は, 桁行(東西)が1.50m(5.0尺)等間隔, 梁行(南北)が1.35~1.50m(4.5~5.0尺)とみられる。柱穴の平面形は円形を呈するものもみられるが基本的に方形を指向していたものとみられ, 一辺47~49cmを測り, 柱径は15cm前後とみられ, 深さは13~41cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器7点, 土師質土器1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

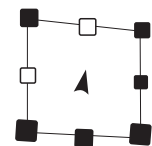


図3-397 SB-7052

SB-7053 (図3-398)

Ⅶ-3区南東端部, 南壁際で検出した桁行2間(3.00m), 梁行2間程度の小型東西棟建物跡とみられ, 南側はⅦ-1区との間の未調査地区にあるとみられ未確

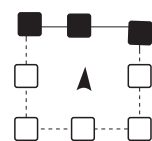


図3-398 SB-7053

認である。棟方向はN-87°8′-Eを示し、柱間寸法は、桁行(東西)が1.50m(5.0尺)等間隔とみられる。柱穴の平面形は形の崩れるものもみられるがほぼ方形で、一辺64~69cmを中心に、一辺60~74cmを測り、柱径は15cm前後とみられ、深さは37~40cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器8点、須恵器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-7054 (図3-399)

VII-1区北端部、北壁際で検出した桁行3間(4.80m)、梁行2間(3.60m)程度の小型東西棟建物跡とみられ、北側はVII-4区との間の未調査地区にあるとみられ未確認である。棟方向はN-84°17′-Eを示し、柱間寸法は、桁行(東西)が1.50・1.65m(5.0・5.5尺)、梁行(南北)が1.80m(6.0尺)等間隔とみられる。柱穴の平面形は円形を呈するものが多いが、基本的に方形を指向していたとみられ、一辺49~54cmを中心に、一辺41~72cmを測り、柱径は15cm前後とみられ、深さは25~47cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器18点、土師質土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-7055 (図3-400)

VII-1区北端部、SB-7054の東隣で検出した桁行3間(5.70m)、梁行2間(3.60m)の東西棟建物跡で、棟方向はN-82°10′-Eを示し、柱間寸法は、桁行(東西)が1.65~2.10m(5.5~7.0尺)、梁行(南北)が1.50~2.10m(5.0~7.0尺)である。柱穴の平面形は円形を呈するものもみられるが、基本的に方形で、一辺59~63cmを中心に、一辺52~71cmを測り、柱径は15cm前後とみられ、深さは14~36cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器48点、土師器1点、須恵器1点、土師質土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-7056 (図3-401)

VII-2区中央部、SB-7059の東側で検出した桁行2間

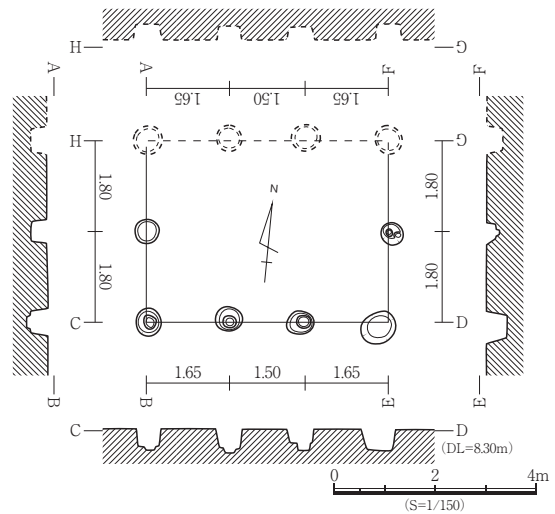


図3-399 SB-7054

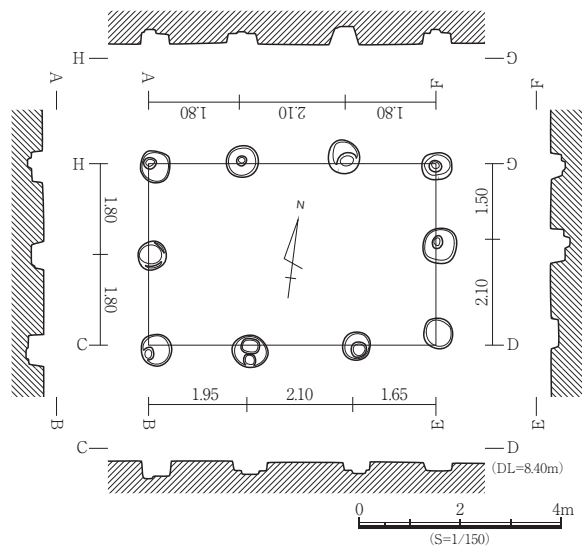


図3-400 SB-7055

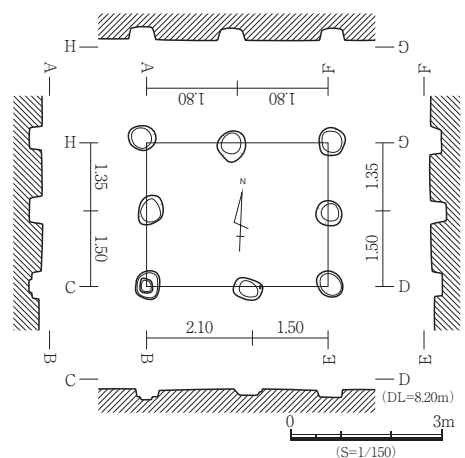


図3-401 SB-7056

(3.60m), 梁行2間(2.85m)の小型東西棟建物跡で, 棟方向はN-87° 25'-Eを示す。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.50~2.10m(5.0~7.0尺), 梁行(南北)が1.35m(4.5尺)・1.50m(5.0尺)である。柱穴の平面形は形の崩れるものもみられるが基本的に方形で, 一辺49~57cmを中心に, 一辺40~63cmを測り, 柱径は15cm前後とみられ, 深さは14~32cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器13点, 須恵器3点, 土師質土器35点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SB-7057 (図3-402)

Ⅶ-1区北東端部, 北壁と西壁際で検出した桁行2間, 梁行2間とみられる小型南北棟建物跡で, 大半は未調査地区にあるとみられる。棟方向はN-14° 18'-Wを示し, 柱間寸法は, 桁行(南北)が1.80m(6.0尺), 梁行(東西)も1.80m(6.0尺)とみられる。柱穴の平面形は形の崩れるものもみられるが基本的に方形と考えられ, 一辺50~52cmを中心に, 一辺43~53cmを測り, 柱径は15cm前後とみられ, 深さは16~22cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

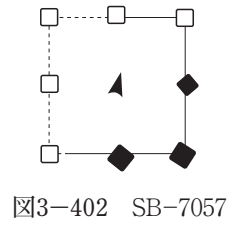


図3-402 SB-7057

SB-7058 (図3-403)

Ⅶ-1区北部, SB-7055の南側で検出した桁行3間(6.60m), 梁行2間(4.20m)の東西棟建物跡で, 棟方向はN-64° 22'-Wを示す。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.80~2.70m(6.0~9.0尺), 梁行(南北)が2.10m(7.0尺)等間隔である。柱穴の平面形は形の崩れるものもみられるがほぼ方形で, 一辺69~76cmを中心に, 一辺60~85cmを測り, 柱径は16cm前後とみられ, 深さは21~50cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器107点, 土師器12点, 須恵器5点, 土師質土器41点がみられ, 弥生土器1点(7461)が図示できた。

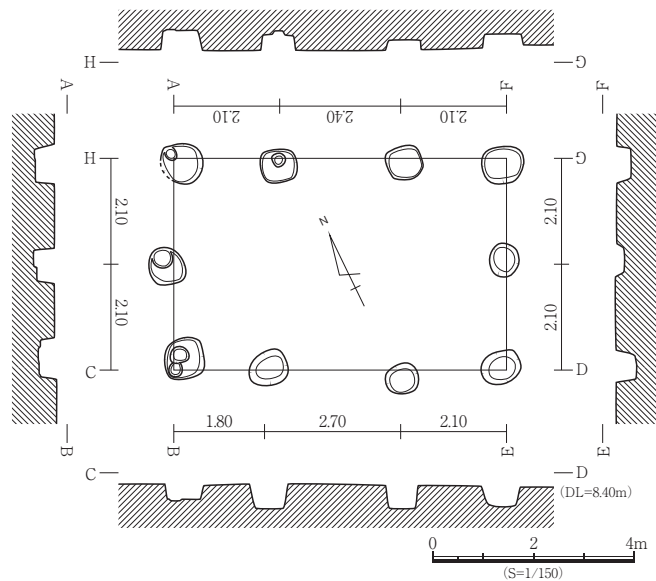


図3-403 SB-7058

出土遺物

弥生土器(図3-404 7461)

甕で, 口頸部はくの字形を呈し, 口縁端部は浅い凹面となる。

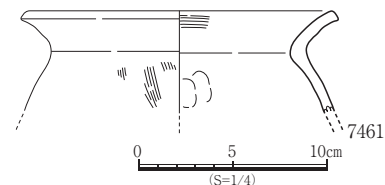


図3-404 SB-7058出土遺物実測図

SB-7059 (図3-405)

Ⅶ-1区東端からⅦ-2区西端にかけて検出した桁行4間(8.40m), 梁行2間(3.60m)の東西棟建物跡で, 北と南の側柱西から1間目の柱穴はⅦ-1区とⅦ-2区間の未調査地区にあるとみられる。棟方向はN-73° 21'-Wを示し, 柱間寸法は, 桁行(東西)が1.65~2.25m(5.5~7.5尺), 梁行(南北)が1.65m(5.5尺)・1.95m(6.5尺)である。柱穴の平面形は円形を呈するものもみられるが基本的に方形を指向していたものとみられ, 一辺55~

64cmを中心に、一辺40～82cmを測り、柱径は15cm前後とみられ、深さは10～41cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器63点、土師器12点、須恵器24点、土師質土器150点、黒色土器5点、製塩土器1点、土製品1点がみられ、須恵器3点(7462～7464)、土師質土器1点(7465)、土製品1点(7466)が図示できた。

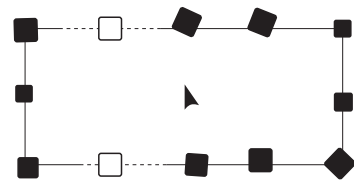


図3-405 SB-7059

出土遺物

須恵器(図3-406 7462～7464)

7462はやや扁平な杯蓋で、天井部はやや凹み、口縁部は短く、斜め下方に下り、端部を下方に小さく屈曲さす。胎土には極細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

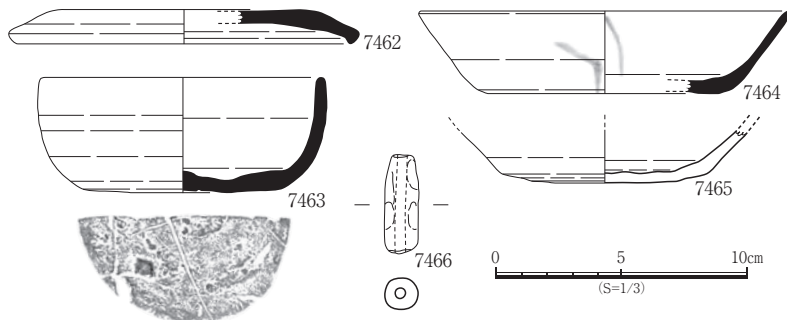


図3-406 SB-7059出土遺物実測図

7463・7464は杯で、7463は、口縁部が平らな底部から内湾気味にほぼ真上に立ち上がり、

端部は丸い。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、ナデ調整を加える。7464は、口縁部が平らな底部から外上方にほぼ真直ぐ立ち上がり、端部は丸い。器面には火襷がみられる。胎土には、7463が極細粒砂から細粒中礫、7464が極細粒砂から中粒砂を少し含む。

土師質土器(図3-406 7465)

杯で、成形はA技法となり、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

土製品(図3-406 7466)

円筒形の土錘で、紐孔は径0.4cmを測る。表面には指押えとナデ調整を施す。胎土には極細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

SB-7060(図3-407)

VII-1区南東部、SB-7004・7014と重複する形で検出した桁行3間(6.00m)、梁行2間(3.90m)の南北棟建物跡で、棟方向はN-13°46'-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.80～2.10m(6.0～7.0尺)、梁行(東西)が1.95m(6.5尺)等間隔である。柱穴の平面形は形の崩れるものもみられるがほぼ方形で、一辺72～80cmを中心に、一辺59～88cmを測り、柱径は18cm前後とみられ、深さは21～54cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器51点、土師器19点、須恵器8点、土師質土器48点、製

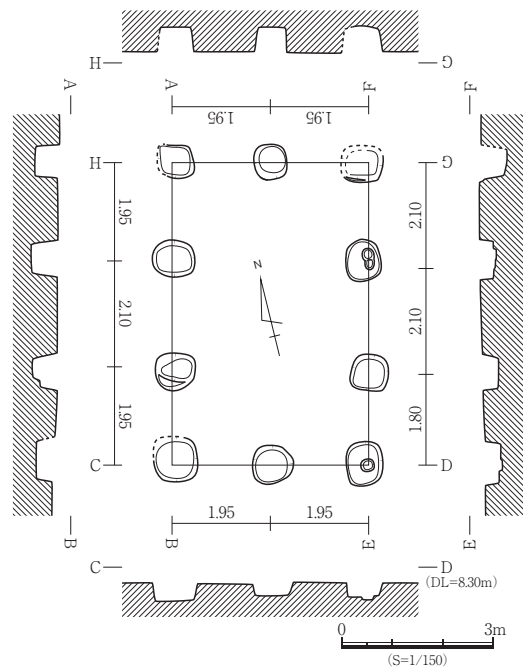


図3-407 SB-7060

塩土器3点がみられ、土師器1点(7467)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-408 7467)

羽釜で、口縁部は胴部から直立し、外面に断面台形の鐙が巡る。鐙上半から内面にかけて煤が付着し、鐙下半には指頭圧痕が残る。

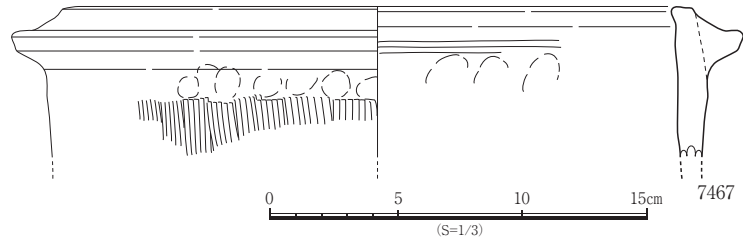


図3-408 SB-7060出土遺物実測図

SB-7061(図3-409)

VII-2区北西部, SB-7012・7013・7026と重複する形で検出した桁行4間(7.80m), 梁行2間(4.80m)の東西棟建物跡で、北側柱西から1間目の柱穴は未確認である。棟方向はN-75° 26'-Wを示し、柱間寸法は、桁行(東西)が1.65~2.10m(5.5~7.0尺), 梁行(南北)が2.40m(8.0尺)等間隔である。柱穴の平面形は円形を呈する小型の柱穴もみられるが基本的に方形で、一辺57~62cmを中心に、一辺33~77cmを測り、柱径は15cm

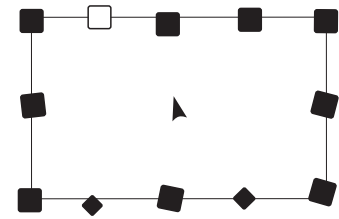


図3-409 SB-7061

前後とみられ、深さは19~49cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器68点, 土師器45点, 須恵器40点, 土師質土器335点, 黒色土器3点, 製塩土器7点がみられ、須恵器1点(7468), 土師質土器1点(7469), 黒色土器1点(7470)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-410 7468)

壺で、口縁部は外反し、端部を上下に拡張する。口縁部内面は、粘土が付着し、幾分ハダ荒れとなる。胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

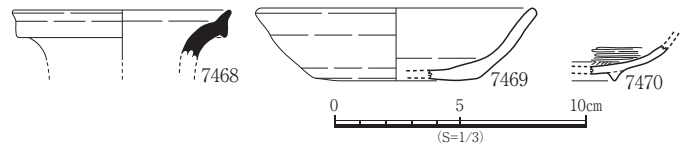


図3-410 SB-7061出土遺物実測図

土師質土器(図3-410 7469)

杯で、成形はA技法となり、胎土には極細粒砂から粗粒砂を若干含む。

黒色土器(図3-410 7470)

内黒の椀で、外面には断面逆三角形の高さ0.4cmの高台が付き、内面にはヘラ磨きを施す。胎土には雲母片、極細粒砂から中粒砂を若干含む。

② 塀・柵列跡

9列を復元した。柱穴の掘方などからみて建物跡の可能性のあるものもみられたが、対になる柱列が見出せなかったため塀・柵列跡とした。また、復元した中にはSA-7002のように明らかに建物群を囲んだとみられるものもあり、西野々遺跡における中枢の様相を示唆する資料となっている。ただし、広く官衙域を圍繞するものはみられなかった。一方、復元はできなかったものの、VII-3~5にかけて無数の柱穴が東西方向に検出されており、I区(『西野々遺跡I』)でも同様の柱穴群が検出されていることを勘案すると何らかの区画を考慮する必要があるかもしれない。

SA-7002(図3-411)

VII-1区中央部, SB-7004・7005の北側で検出したコの字形の塀跡で東西方向はN-79° 20'-Wを示し、南側にある同じ方向の建物跡を区画していたものと考えられる。14間分(26.40m(88.0尺))を検出

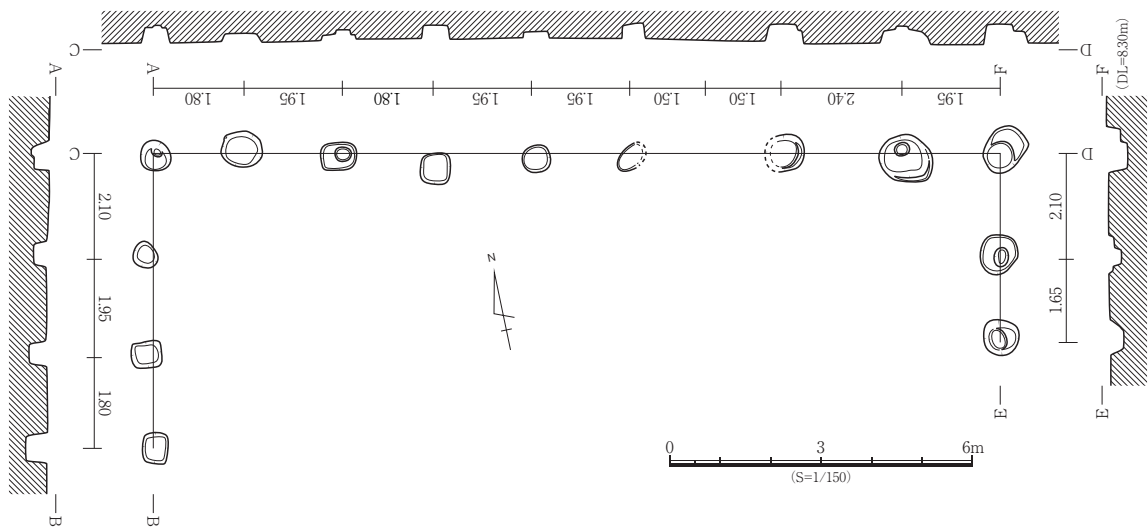


図3-411 SA-7002

し、西側は3間分(5.85m(19.5尺)), 北側は9間分(16.80m(56.0尺)), 東側は2間分(3.75m(12.5尺))あり、柱間寸法は1.50~2.40m(5.0~8.0尺)である。柱穴の平面形はやや形の崩れるものもみられるが、ほぼ方形で、一辺60~73cmを中心に、一辺40~109cmを測り、柱径は20cm前後とみられ、深さは15~44cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器61点、土師器18点、須恵器13点、土師質土器41点、製塩土器5点がみられ、土師器1点(7471)と須恵器1点(7472)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-412 7471)

杯蓋で、ヘラ磨きされた平らな天井部には擬宝珠形のつまみが付く。内面にもヘラ磨きが一部残る。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

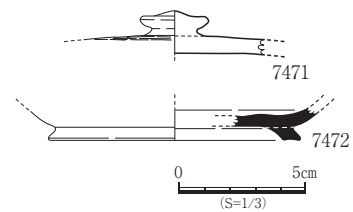


図3-412 SA-7002出土遺物実測図

須恵器(図3-412 7472)

杯身で、平らな底部外面端部には高さ0.5cmのハの字形に開く高台が付く。底部は回転ヘラ切りの後にナデ調整を加える。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

SA-7003(図3-413)

VII-1区南東部、SB-7005・7016と重複する形で検出した南北堀跡(N-13°30'-E)である。3間分(5.70m)を検出し、柱間寸法は1.80m(6.0尺)・2.10m(7.0尺)である。柱穴の平面形はほぼ方形で、一辺75~78cmを中心に、66~84cmを測り、柱径は20cm前後とみられ、深さは17~44cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器31点、土師器19点、須恵器11点、土師質土器21点、製塩土器1点、鉄製品1点がみられ、土師器3点(7473~7475)と須恵器2点(7476・7477)が図示できた。

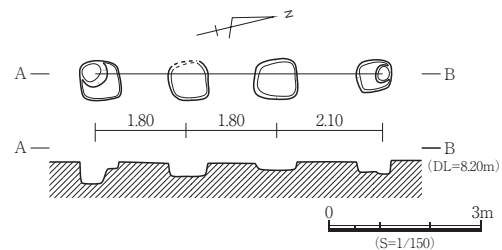


図3-413 SA-7003

出土遺物

土師器(図3-414 7473~7475)

7473・7474は杯身で、底部外面端部には7473が高さ0.4cm、7474が高さ0.5cmの高台が付く。7473の内面にはヘラ磨きの痕が残る。胎土には、7473が極細粒砂から中粒砂、7474が極細粒砂から粗粒砂を若干含む。

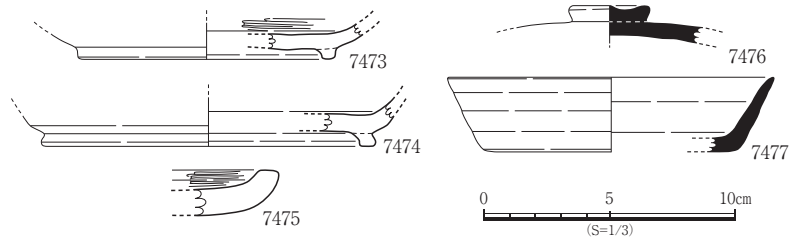


図3-414 SA-7003出土遺物実測図

7475は高杯で、口縁部は体部から外上方に短く屈曲し、ほぼ全面にヘラ磨きを施す。胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

須恵器(図3-414 7476・7477)

7476は杯蓋で、天井部はやや丸味があり、扁平な擬宝珠形つまみが付く。胎土には極細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

7477は杯で、口縁部は外上方にほぼ真直ぐ立ち上がり、端部を細く仕上げる。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

SA-7004(図3-415)

VII-1区南西部、SB-7007の南側2.50~2.60mのところ検出した東西堀跡(N-84°0'-W)で、SB-7007に関連するものと考えられる。3間分(5.70m)を検出し、柱間寸法は1.80m(6.0尺)・1.95m(6.5尺)である。柱穴の平面形は円形を呈するものもあるが方形を指向していたとみられ、一辺40~44cmを中心に、一辺33~53cmを測り、柱径は12cm前後とみられ、深さは23~36cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器3点、土師器4点、土師質土器1点、製塩土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

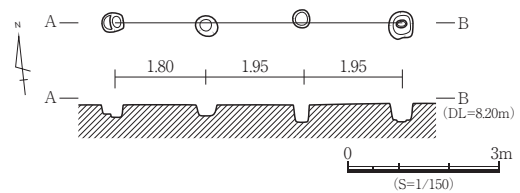


図3-415 SA-7004

SA-7005(図3-416)

VII-1区東端部、SB-7012と重複した形で検出した南北堀跡(N-11°35'-E)である。3間分(4.35m)を検出し、柱間寸法は1.35m(4.5尺)・1.50m(5.0尺)である。柱穴の平面形は形の崩れるものもみられるが基本的に方形で、一辺56~69cmを中心に、一辺55~86cmを測り、柱径は12cm前後とみられ、深さは19~50cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器67点、土師器31点、須恵器20点、土師質土器21点、製塩土器1点、石製品1点がみられ、須恵器2点(7478・7479)と石製品1点(7480)が図示できた。

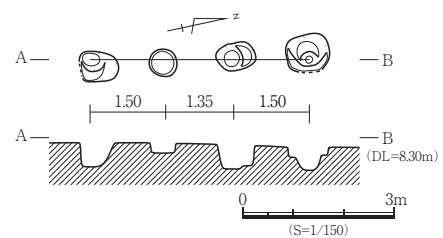


図3-416 SA-7005

出土遺物

須恵器(図3-417 7478・7479)

7478 は杯蓋で、天井部は丸味があり、口縁部はそのまま下り、端部を下方に屈曲さす。外面にはハダ荒れがみられ、胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7479 は杯で、底部は回転ヘラ切りの後にナデ調整を加える。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

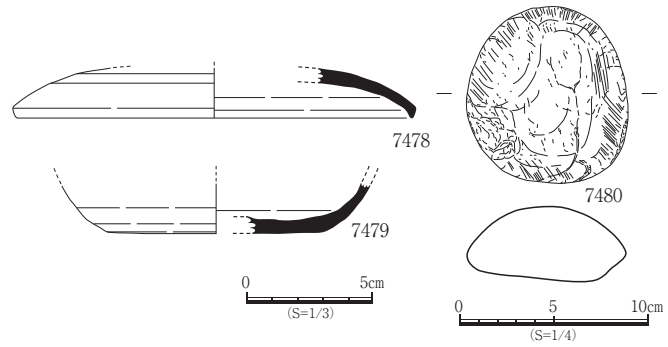


図3-417 SA-7005出土遺物実測図

石製品(図3-417 7480)

磨石で、表面は平滑となり、縁辺を中心に擦痕が残る。

SA-7006(図3-418)

VII-2区北部, SB-7025の南側約2.00mのところ
で検出した東西堀跡(N-78°33'-W)で、SB-7025
に関連するものと考えられる。3間分(6.60m)を検出
し、柱間寸法は2.10m(7.0尺)・2.40m(8.0尺)である。
柱穴の平面形はやや形の崩れるものもみられる
が、ほぼ方形で、一辺50~55cmを中心に、一辺31~
71cmを測り、柱径は12cm前後とみられ、深さは8~
35cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥
生土器5点、須恵器1点、土師質土器5点がみられたが、図示できるものはなかった。

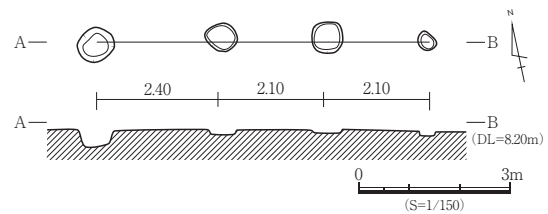


図3-418 SA-7006

SA-7007(図3-419)

VII-2区北部, SB-7025の南平側の東の延長上
で検出した東西堀跡(N-80°50'-W)である。3間分
(6.30m)を検出し、柱間寸法は2.10m(7.0尺)等間隔と
なる。柱穴の平面形は形の崩れるものもみられるが
基本的に方形で、一辺65~76cmを中心に、一辺46~
89cmを測り、柱径は20cm前後とみられ、深さは18~
59cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒
褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器21点、土師器7点、須恵器4点、土師質土器16点
がみられたが、図示できるものはなかった。

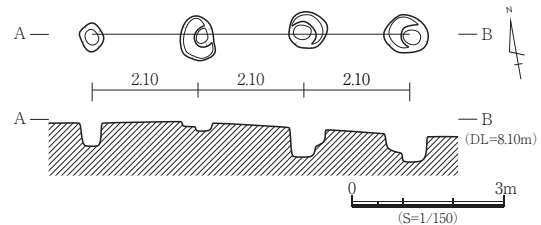


図3-419 SA-7007

SA-7008(図3-420)

VII-1区南西部, SB-7039と重複する
形で検出した南北堀跡(N-4°28'-E)であ
る。4間分(9.00m)を検出し、柱間寸法は
1.80~2.70m(6.0~9.0尺)である。柱穴の
平面形はほぼ方形で、一辺61~71cmを中
心に、一辺54~80cmを測り、柱径は15cm
前後とみられ、深さは10~35cmである。

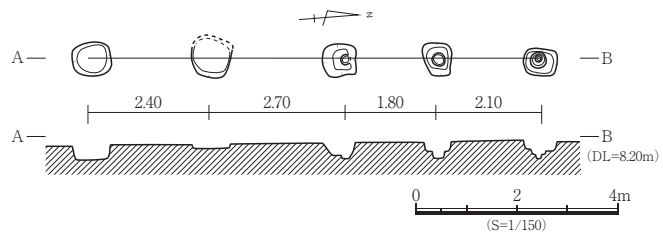


図3-420 SA-7008

柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器31点、土師器13点、須恵器3点、土師質土器34点、製塩土器2点がみられ、土師質土器1点(7481)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-421 7481)

皿で、成形はA技法となり、底部の切り離しは回転ヘラ切りで、ナデ調整を加える。体部は外傾し、口縁部は外反し、端部を細く仕上げる。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

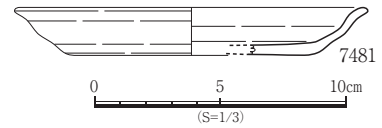


図3-421 SA-7008出土遺物実測図

SA-7009(図3-422)

VII-1区東端部、SB-7018・7045と重複する形で検出した南北塀跡(N-0°20'-W)である。5間分(8.10m)を検出し、柱間寸法は1.35～2.10m(4.5～7.0尺)である。柱穴の平面形はほぼ方形で、一辺63～71cmを中心に、一辺62～82cmを測り、柱径は20cm前後とみられ、深さは13～69cmである。柱穴の埋土は

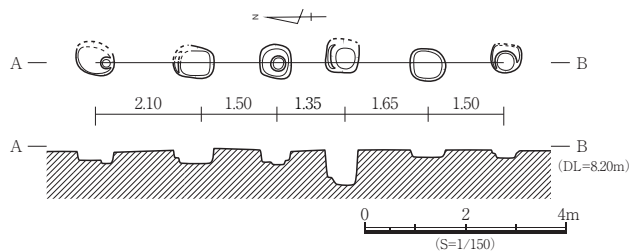


図3-422 SA-7009

地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器15点、土師器14点、須恵器3点、土師質土器12点、石製品1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SA-7010(図3-423)

VII-1区東端部、SB-7060の東側約3.00mのところ検出した南北塀跡(N-13°23'-E)で、SB-7060との関連性が考慮される。3間分(5.10m)を検出し、柱間寸法は1.50m(5.0尺)・1.80m(6.0尺)である。柱穴の平面形はやや形の崩れるものもみられるが、ほぼ方形で、一辺81～96cmを中心に、一辺75～100cmを測り、柱径は20cm前後とみられ、深さは18～41cmである。柱穴の埋土は地山

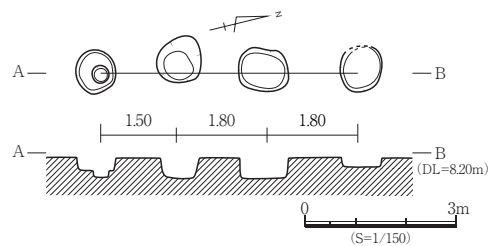


図3-423 SA-7010

の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器45点、土師器29点、須恵器19点、土師質土器39点、製塩土器2点がみられ、須恵器1点(7482)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-424 7482)

杯で、口縁部は外上方にほぼ真直ぐ立ち上がり、端部を丸く仕上げる。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

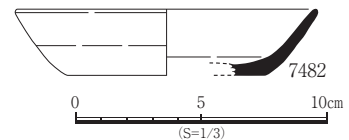


図3-424 SA-7010出土遺物実測図

③ 土坑

51基を検出した。中には布掘りではないかとみられるものもあったが、柱穴が確認されていないことから土坑として扱ったものもある。

SK-7024

VII-1区南東部、SB-7014の南隣で検出した方形の土坑で、P-7043に掘り込まれる。長辺1.80m以上、短辺1.38m、深さ10cmを測り、長軸方向はN-86°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器57点、土師器3点、須恵

器3点, 土師質土器24点がみられ, 弥生土器2点(7483・7484)と須恵器1点(7485)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-426 7483・7484)

7483は甕で, 口頸部はくの字形を呈し, 口縁端部は凹面となる。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

7484は手づくね土器で, 器面には指頭圧痕が残り, 底部は上げ底となる。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

須恵器(図3-426 7485)

器高の低い杯蓋であるが, 天井部はやや丸味があり, 口縁部はそのまま斜め下方に下り, 端部を下方に屈曲さす。天井部外面はほぼ全面に回転ヘラ削りを施し, 若干ハダ荒れがみられる。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

SK-7025 (図3-425)

VII-1区南部, SB-7042の東隣で検出した方形の土坑で, 東壁と西壁をピットに掘り込まれる。長辺1.46m, 短辺1.31m, 深さ40cmを測り, 長軸方向はN-89°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器12点, 土師質土器2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-7026

VII-1区南部, SB-7042と重複した形で検出した舟形の土坑で, やや湾曲し, 南壁を中心にピットに掘り込まれる。長辺4.31m, 短辺0.84m, 深さ10cmを測り, 長軸方向はN-83°-Wを示す。断面形は舟底形を呈し, 底面は西にやや傾斜する。埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器20点, 土師器9点, 須恵器9点, 土師質土器209点がみられ, 土師器1点(7486)と土師質土器2点(7487・7488)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-426 7486)

小皿で, 口縁部は斜め上方に短く延びる。胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

土師質土器(図3-426 7487・7488)

7487は椀で, 成形はB技法となり, 底部はベタ高台で, 回転糸切りとなる。胎土には極細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

7488は小皿で, 成形はB技

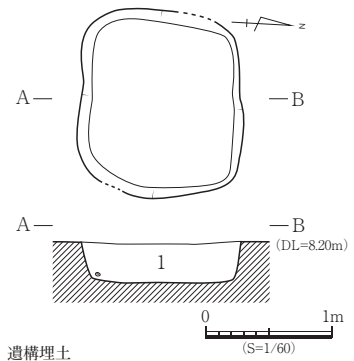


図3-425 SK-7025

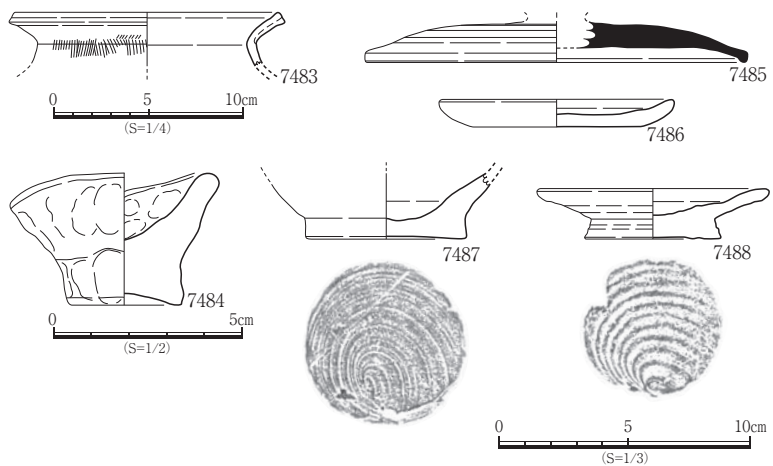
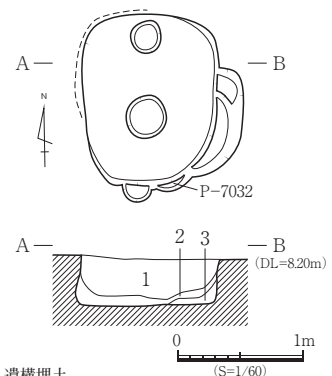


図3-426 SK-7024・7026出土遺物実測図

法となり、底部はベタ高台で、回転糸切りとなる。胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

SK-7027 (図3-427)

Ⅶ-1区南部, SK-7026の西隣で検出した方形の土坑である。長辺1.40m, 短辺1.09m, 深さ42cmを測り, 長軸方向はN-2°-Eを示す。断面形は箱形を呈し, 底面から2個のピットを検出したが, 深さはいずれも3~4cmと浅い。埋土は3層に分層され, 上層から地山の土粒を含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルト, 地山の土粒を含む暗褐色(10YR3/3)砂質シルト, 地山の土粒を含む黒褐色(10YR2.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器28点, 土師器6点, 須恵器2点, 土師質土器27点, 石製品1点, サヌカイト片1点(4.1g)がみられ, 石製品1点(7489)が図示できた。



遺構埋土
1. 地山の土粒を含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルト
2. 地山の土粒を含む暗褐色(10YR3/3)砂質シルト
3. 地山の土粒を含む黒褐色(10YR2.5/2)シルト

図3-427 SK-7027

出土遺物

石製品(図3-428 7489)

砥石で、側面を中心に4面に使用痕が残る。

SK-7028

Ⅶ-1区南部, SB-7041の西隣で検出した不整楕円形の土坑である。長径2.04m, 短径1.44m, 深さ10cmを測り, 長軸方向はN-7°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-7029

Ⅶ-1区南端部, SB-7034と重複した形で検出した楕円形の土坑である。長径2.93m, 短径2.12m, 深さ20cmを測り, 長軸方向はN-12°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器99点, 土師器9点, 須恵器19点, 土師質土器257点, サヌカイト片2点(1.6g)がみられ, 弥生土器1点(7490)と須恵器3点(7491~7493)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-428 7490)

小型の壺で、胴部最大径は中位より下にあり、口頸部はくの字形を呈する。外面頸部から中胴部はハケ調整、下胴部から外底面はナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

須恵器(図3-428 7491~7493)

7491は杯蓋で、天井部は丸味があり、口縁部はそのまま斜め下方に下り、端部を下方に曲げる。胎土には白色極細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

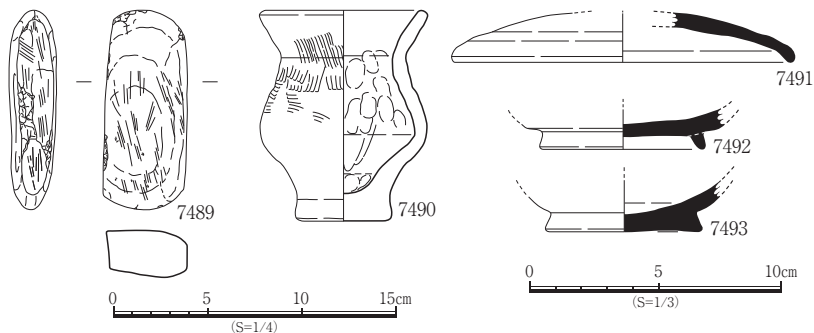


図3-428 SK-7027・7029出土遺物実測図

7492は杯身で、底部外端

2. VII区 (2) 古代

部の内側に高さ 0.7cmの高台が付き、外側に回転ヘラ削りの痕跡が残る。胎土には極細粒砂から粗粒砂を若干含む。

7493は椀で、底部は体部に向かって内湾する。底部はベタ高台となり、底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

SK-7030

VII-1区南端部、南壁際で検出した方形とみられる土坑で、南側は調査区外に続く。長辺2.32m、短辺0.42m以上、深さ40cmを測り、長軸方向はN-84°-Wを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器24点がみられ、内1点(7494)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-429 7494)

小型の甕の底部とみられる。外底面は未調整である。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SK-7031

VII-1区南部、SB-7038に切られた形で検出した舟形の土坑で、やや湾曲する。長辺9.05m、短辺0.82m、深さ31cmを測り、長軸方向はN-2°-Wを示す。断面形は概ね舟底形を呈する。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器68点、土師器1点、須恵器2点、土師質土器6点、サヌカイト片1点(3.3g)がみられ、須恵器1点(7495)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-429 7495)

杯身で、底部外面端部より内側に高さ0.6cmの高台が付き、外側に回転ヘラ削りの痕が残る。底部切り離しは回転ヘラ切りで、ナデ調整を加え、高台周辺はヨコナデ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SK-7032

VII-1区南西部、SB-7048と重複した形で検出した楕円形の土坑である。長径1.70m、短径0.62m、深さ14cmを測り、長軸方向はN-84°-Wを示す。断面形は舟底形を呈し、底面には東側に平場がある。埋土は地山の小ブロックを含む黒色(10YR2/1)シルトであった。出土遺物には弥生土器12点、土師器1点、須恵器4点、土師質土器7点がみられ、須恵器1点(7496)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-429 7496)

杯身で、口縁部は平らな底部から外上方にほぼ真直ぐ延び、端部を丸く仕上げる。底部外面端部には高さ0.7cmの高台が付き、外側には回転ヘラ削りの痕が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を若干含む。

SK-7033

VII-1区南西部、SB-7020の東側で検出した不整形の土坑で、北壁を中心にピットに掘り込まれる。長辺2.82m、短辺0.81m、深さ14cmを測り、長軸方向はN-89°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR2.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器12点、土師器1点、須恵器1点、土師質土器16点がみられ、弥生土器1点(7497)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-429 7497)

甕で、頸部は短く直立し、口縁部は外反し、貼付口縁となる。端部にはヘラ状工具による刻目、外面には指頭圧痕が明瞭に残る。頸部外面はヨコナデ調整とナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

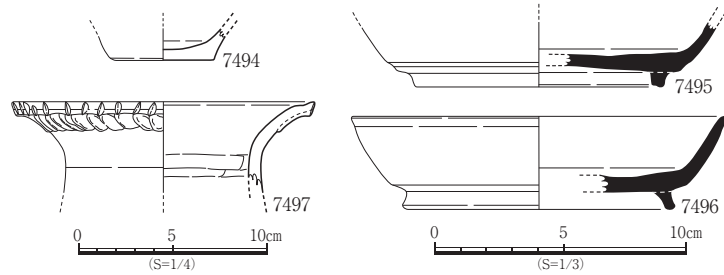


図3-429 SK-7030~7033出土遺物実測図

SK-7034

VII-1区西端部、西壁際で検出した方形とみられる土坑で、西側は調査区外に続く。形態的にはSK-7030と似る。長辺3.24m、短辺0.52m以上、深さ36cmを測り、長軸方向はN-4°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器12点、土師器1点、須恵器1点、土師質土器8点、製塩土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-7035(図3-430)

VII-1区中央部西寄り、SB-7031を掘り込んだ形で検出した不整形方形の土坑である。長辺1.66m、短辺1.57m、深さ9cmを測り、長軸方向はN-24°-Eを示す。断面形は舟底形を呈し、底面から1個のピット(径30~38cmの楕円形で、深さ11cm)を検出した。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器4点、土師質土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

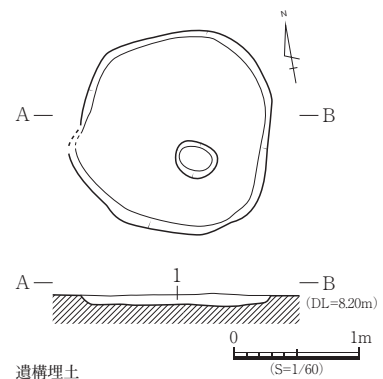


図3-430 SK-7035

SK-7036(図3-431)

VII-1区北西部、SB-7010を掘り込んだ形で検出した舟形の土坑で、約3.00m西には同形態のSK-7037があり、共に布掘り状をなし、東平側であったかの様相を呈す。長辺8.26m、短辺0.84m、深さ21cmを測り、長軸方向はN-7°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し、底面には掘削痕跡が残る。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、地山のブロックの含み具合により2層に分層される。出土遺物には弥生土器18点、土師器8点、須恵器20点、土師質土器85点、黒色土器2点、石製品1点がみられ、土師器1点(7498)、須恵器1点(7499)、土師質土器1点(7500)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-433 7498)

羽釜で、口縁部は胴部から直立し、外面に幅2.5cmの鐙が巡る。胎土には粗粒砂を中心に細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

須恵器(図3-433 7499)

甕の底部とみられるもので、底部は平らで、外上方に延びる。外面には平行のタタキと回転ヘラ削りを施す。胎土には白色細粒砂から粗粒砂を少し含む。

土師質土器(図3-433 7500)

椀で、成形はA技法とみられる。底部の切り離しは回転糸切りとなり、底部外面にはハの字形に開く高さ1.8cmの高台が付く。胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

SK-7037(図3-432)

VII-1区北西部, SB-7010を掘り込んだ形で検出した舟形の土坑で、約3.00m東には同形態のSK-7036があり、共に布掘り状をなし、西平側であったか様の相を呈す。長辺8.30m, 短辺0.98m, 深さ27cmを測り、長軸方向はN-5°-Eを示す。断面形はU字形を呈し、底面には掘削痕跡が残る。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、地山のブロックの含み具合により2層に分層される。出土遺物には弥生土器38点, 土師器12点, 須恵器19点, 土師質土器66点, 黒色土器・緑釉陶器・製塩土器・土製品各1点がみられ、土師器1点(7501), 緑釉陶器1点(7502)が掲載できた。

出土遺物

土師器(図3-433 7501)

羽釜で、口縁部は胴部から内傾して立ち上がり、外面に幅2.0cmの罫が巡る。罫より下に煤が付着する。胎土には粗粒砂を中心に細粒砂から粗粒砂を多く含む。

緑釉陶器(図版141 7502)

軟質系の皿の体部とみられるもので、全面に緑釉を施釉する。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

SK-7038(図3-434)

VII-1区北西端部, SD-7002の南側で検出した不整形の土坑である。長辺2.74m, 短辺2.04m, 深さ28cmを測り、長軸方向はN-62°-Eを示す。断面形は概ね逆台形を呈し、東壁際に小さな段部がみられる。埋土は地山のブロックを含む黒色~黒褐色(10YR2/1.5)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器67点, 須恵器1点, 土師質土器6点がみられたが、図示できるものはなかった。

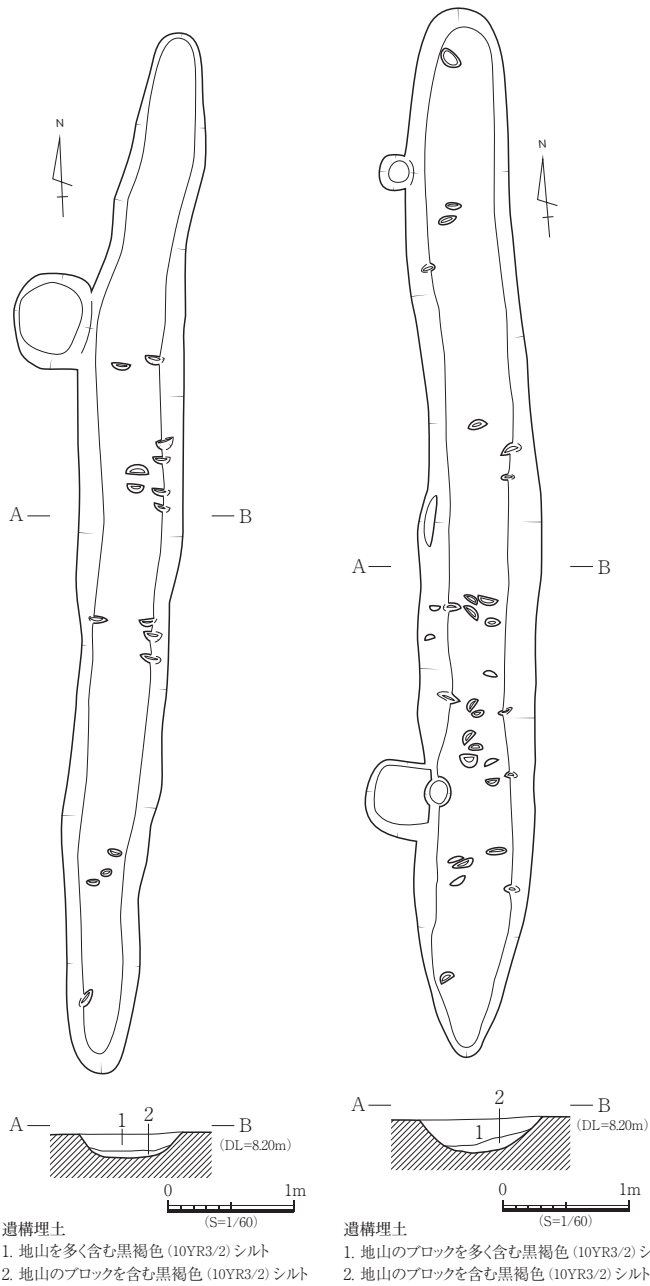


図3-431 SK-7036

図3-432 SK-7037

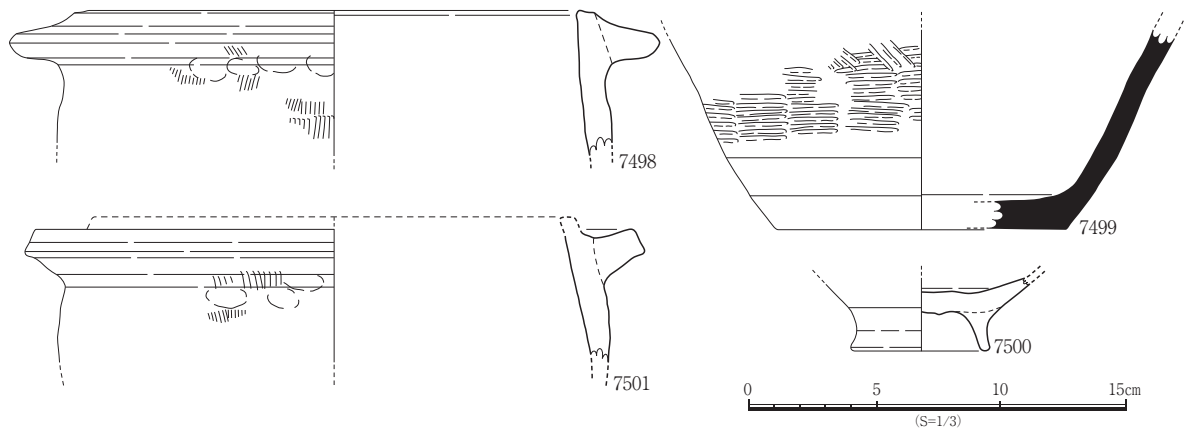
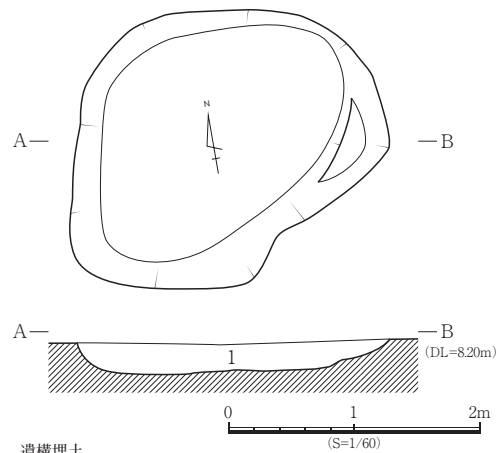


図3-433 SK-7036・7037出土遺物実測図

SK-7039 (図3-435)

Ⅶ-3区西部で検出した舟形の土坑で、南壁を中心にピットに掘り込まれる。長辺4.02m，短辺0.59m，深さ22cmを測り，長軸方向はN-90°-Eを示す。断面形は舟底形を呈し，平面には東側に平場がみられる。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器2点，須恵器1点，土師質土器5点がみられたが，図示できるものはなかった。

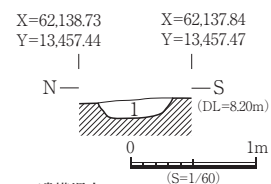


遺構埋土
1. 地山のブロックを含む黒色～黒褐色(10YR2/1.5)砂質シルト

図3-434 SK-7038

SK-7040

Ⅶ-3区中央部，SK-7041に切られた形で検出した方形の土坑で，北の調査区外に続く。長辺1.52m，短辺1.01m以上，深さ35cmを測り，長軸方向はN-86°-Eを示す。断面形はU字形を呈する。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR2.5/2)シルトを主体に地山のブロックと土粒の含み具合により3層に分層される。遺物は出土しなかった。



遺構埋土
1. 地山の土粒を含む黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルト

図3-435 SK-7039

SK-7041

Ⅶ-3区中央部，SK-7040を掘り込んだ形で検出した不整形の土坑である。長辺1.96m，短辺0.75m以上，深さ30cmを測り，長軸方向はN-81°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器10点，土師器2点，須恵器6点，土師質土器7点，石製品2点がみられ，須恵器2点(7503・7504)と石製品1点(7505)が図示できた。

出土遺物

出土遺物

須恵器(図3-437 7503・7504)

いずれも高杯で，脚柱部は直立し，裾部で大きく開く。7503は内面にしぼり目が残し，7504が外面に凹線が2条巡る。胎土には，7503が細粒砂から粗粒砂を比較的多く，7504が極細粒砂から中粒砂を少し含む。

石製品(図3-437 7505)

断面が丸い叩石で、両端に敲打痕と摩滅痕が残り、また、平滑な表面には縁辺を中心に擦痕がみられる。

SK-7042

VII-1区中央部北寄り、SB-7006に掘り込まれた形で検出した舟形の土坑である。長辺約11.00m、短辺0.88m、深さ21cmを測り、長軸方向はN-73°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を少し含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器48点、土師器12点、須恵器・軽石各1点がみられ、石製品1点(7506)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-437 7506)

扁平な叩石で、両面中央に弱い敲打痕、側面と両端に敲打痕と摩滅痕が残る。

SK-7043(図3-436)

VII-1区中央部、SB-7029とSB-7030の間で検出した不整形の土坑である。長辺1.76m、短辺1.10m、深さ23cmを測り、長軸方向はN-50°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を少し含む黒色(7.5YR1.7/1)砂質シルトで、下層部で黒色～黒褐色(10YR2/1.5)シルト質砂の堆積が認められた。出土遺物には弥生土器32点、須恵器2点、土師質土器5点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-7044

VII-1区中央部東寄り、SB-7015とSK-7045に切られた形で検出した舟形の土坑である。長辺約3.50m、短辺0.75m、深さ25cmを測り、長軸方向はN-59°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトで、下層部は地山の土粒を多く含んでいた。出土遺物には弥生土器18点、土師器16点、須恵器7点、土師質土器12点がみられ、須恵器1点(7507)が図示できた。

出土遺物

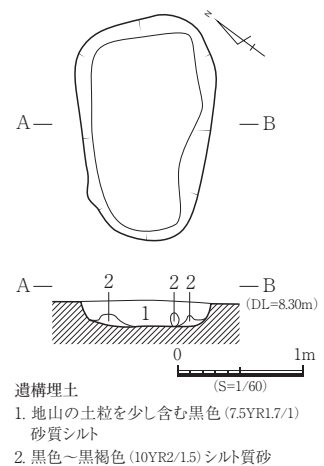


図3-436 SK-7043

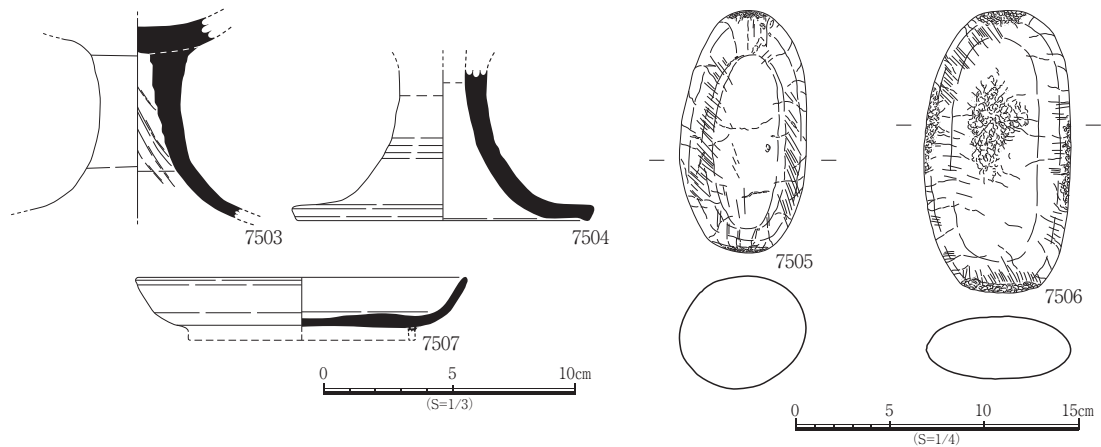


図3-437 SK-7041・7042・7044出土遺物実測図

須恵器(図3-437 7507)

杯身であるが、底部が浅く、高台が付かなければ皿と表現できるものである。回転ヘラ切りの外底面には小さな高台の痕跡が残り、周囲をヨコナデ調整する。胎土には極細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

SK-7045

Ⅶ-1区中央部東寄り、SK-7044を掘り込み、SB-7015に切られた形で検出した舟形の土坑である。長辺5.34m、短辺0.84m、深さ33cmを測り、長軸方向はN-34°-Eを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルトで、焼礫が混じっていた。出土遺物には弥生土器25点、土師器18点、須恵器24点、土師質土器33点、製塩土器18点、石製品・鉄製品各1点がみられ、土師器2点(7508・7509)、須恵器2点(7510・7511)、土師質土器1点(7512)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-438 7508・7509)

いずれも杯で、口縁端部を7508が丸く仕上げているのに対し7509は内側に折込んでいる。7508は遺存状態が良くないが、いずれも器面にはヘラ磨きを施しており、底部はヘラ切りとみられるが、回転ヘラ切りの可能性もあり、土師器から土師質土器への過渡期のものとも考えることもできる。胎土には、7508が細粒砂から中粒砂を若干、7509が細粒砂から粗粒砂を少し含む。

須恵器(図3-438 7510・7511)

7510は大型の杯蓋で、口縁部は斜め下方に下り、端部を下方に屈曲さす。胎土には白色細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

7511は細頸壺で、頸部は外傾し、口縁部は真横に屈曲し、端部を上下に拡張する。胎土には極細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

土師質土器(図3-438 7512)

皿で、成形はA技法となるが、口縁端部を内側に若干折込み、器面にはヨコ方向のヘラ磨きを施し、土師器の調整手法で仕上げる。胎土には極細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

SK-7046

Ⅶ-1区中央部東寄り、SK-7044を掘り込み、SK-7047に切られた形で検出した方形の土坑である。

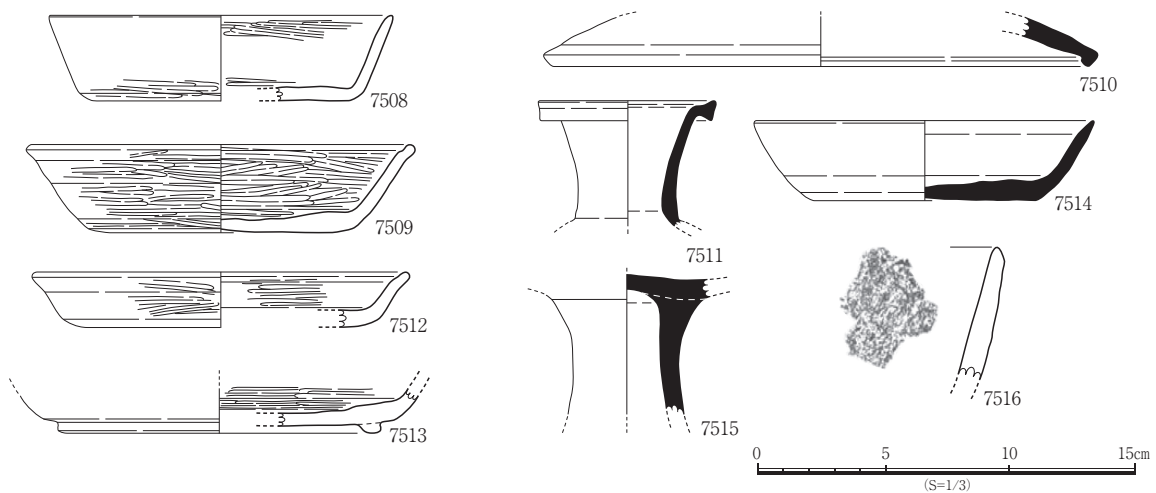


図3-438 SK-7045・7047・7049出土遺物実測図

2. VII区 (2) 古代

長辺1.69m, 短辺1.32m, 深さ18cmを測り, 長軸方向はN-79°-Eを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。遺物は出土しなかった。

SK-7047

VII-1区中央部東寄り, SK-7044・7046を掘り込んだ形で検出した方形の土坑である。長辺約1.70m, 短辺1.17m, 深さ16cmを測り, 長軸方向はN-79°-Wを示す。断面形は概ね逆台形を呈し, 南壁沿いに平場がみられる。埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器37点, 土師器9点, 須恵器16点, 土師質土器12点がみられ, 土師器1点(7513)と須恵器2点(7514・7515)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-438 7513)

杯身で, 底部外面端部には高さ0.4cmの高台が付き, 内面にはヘラ磨きが施される。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

須恵器(図3-438 7514・7515)

7514は杯で, 口縁部は平らな底部から外上方にほぼ真直ぐ立ち上がり, 端部を細く仕上げる。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7515は高杯で, 底部は平らで, 脚柱部は真下に下る。脚柱部外面にはしぼり目が残る。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

SK-7048

VII-1区中央部東寄り, SK-7049に切られた形で検出した楕円形とみられる土坑である。長径1.10m以上, 短径0.80m以上, 深さ19cmを測り, 長軸方向はN-7°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には土師器1点, 須恵器2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-7049

VII-1区中央部東寄り, SA-7002とSK-7048を切った形で検出した隅丸方形とみられる土坑である。長辺1.93m, 短辺1.06m以上, 深さ20cmを測り, 長軸方向はN-4°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を少し含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルトで, 少し炭化物が混じっていた。出土遺物には弥生土器17点, 土師器10点, 須恵器10点, 土師質土器22点, 製塩土器2点, 土製品1点, 石製品2点がみられ, 製塩土器1点(7516)が図示できた。

出土遺物

製塩土器(図3-438 7516)

器面は摩耗するが, 内面に布目が残り, 胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

SK-7050

VII-1区東部, SA-7002の北隣で検出した舟形の土坑である。長辺約1.60m, 短辺0.56m, 深さ20cmを測り, 長軸方向はN-7°-Wを示す。断面形はU字形を呈する。埋土は地山の土粒を少し含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器27点, 土師器3点, 須恵器9点, 土師質土器5点, 製塩土器1点がみられ, 須恵器1点(7517)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-440 7517)

杯身で、平らな底部外面端部に断面逆三角形の高さ0.5cmの高台が付き、体部は外上方に立ち上がり、口縁部は若干外傾し、端部を丸く仕上げる。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

SK-7051

Ⅶ-1区東部、SA-7002と重複する形で検出した楕円形の土坑である。長径2.21m、短径1.09m、深さ19cmを測り、長軸方向はN-22°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器50点、土師器12点、須恵器24点、土師質土器43点、製塩土器6点、鉄滓2点がみられ、須恵器1点(7518)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-440 7518)

杯身で、平らな底部外面端部にハの字形に開く高さ0.5cmの高台が付く。胎土には極細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SK-7052

Ⅶ-1区東端部東壁際、SB-7012と重複する形で検出した舟形の土坑である。長辺3.40m以上、短辺1.07m、深さ12cmを測り、長軸方向はN-79°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器2点、土師器・須恵器各1点、土師質土器14点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-7053

Ⅶ-2区北西部、SK-7054に切られた形で検出した楕円形の土坑である。長径2.28m、短径1.13m、深さ16cmを測り、長軸方向はN-3°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は中礫を含む灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器10点、須恵器8点、土師質土器37点、製塩土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-7054

Ⅶ-2区北西部、SK-7053を掘り込んだ形で検出した楕円形の土坑である。長径1.47m、短径0.65m、深さ14cmを測り、長軸方向はN-3°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は3層に分層され、上層から中礫を含む褐灰色(10YR4/1)砂質シルト、灰黄色(2.5Y6/2)砂、中礫を含む灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器2点、土師器4点、土師質土器8点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-7055(図3-439)

Ⅶ-2区北東部、SK-7058の北東側で検出した舟形の土坑である。長辺1.39m、短辺0.40m、深さ12cmを測り、長軸方向はN-21°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)砂であった。出土遺物には弥生土器1点、土師器7点、須恵器2点、土師質土器11点、製塩土器1点がみられ、土師質土器2点(7519・7520)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-440 7519・7520)

7519は杯で、成形はA技法となり、口縁部は底部から外上方にほぼ真直ぐ延び、端部を丸く仕上げる。底部の切り離しは回転糸切りとなり、胎土には

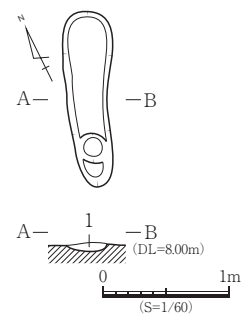


図3-439 SK-7055

極細粒砂から粗粒砂を若干含む。

7520は皿で、成形はA技法となり、口縁部は底部から外上方を向き、端部は丸い。底部切り離しは回転ヘラ切りで、胎土には細粒砂から中粒砂を若干含む。

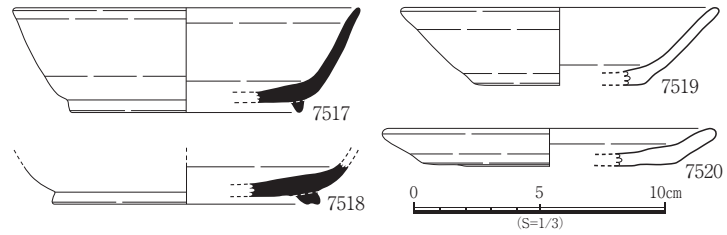


図3-440 SK-7050・7051・7055出土遺物実測図

SK-7056

VII-2区北東端部、東壁際で検出した楕円形とみられる土坑である。長径1.08m以上、短径1.27m、深さ33cmを測り、長軸方向はN-85°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)砂であった。出土遺物には弥生土器18点、土師器18点、須恵器7点、土師質土器115点、黒色土器1点、製塩土器1点がみられ、土師質土器4点(7521~7524)と黒色土器1点(7525)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-441

7521~7524)

7521~7523は杯であるが、器高指数が7521・7522が25.0台であるのに対し7523は38.9と底部が深く、区分される。いずれも成形はA技法で、底部の切り離しは回転ヘラ切りとなる。7521

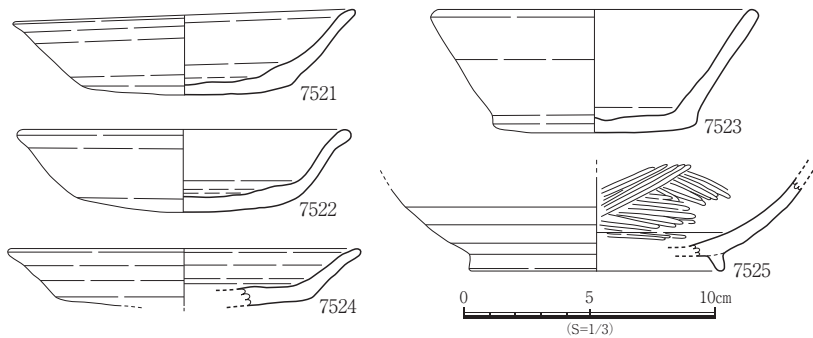


図3-441 SK-7056出土遺物実測図

の口縁部は体部からやや外傾しており、口縁端部の折込みの形骸化とみることができる。7522は口唇部に煤が付着し、灯明皿として使用された可能性が考慮される。7523の内底面にはロクロ目がみられ、B技法で成形された可能性も残るが、器壁が厚く、体部から口縁部にその痕跡がないことからA技法とした。胎土には、7521が極細粒砂から中粒砂を比較的多く、7522・7523が極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

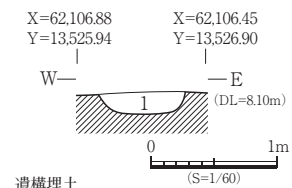
7524は皿で、成形はA技法となり、底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。口縁端部内側には折込みの痕跡が残る。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

黒色土器(図3-441 7525)

内黒の椀で、底部外面端部にハの字形に開く高さ0.7cmの高台が付き、周囲をヨコナデ調整する。底部は丸味があり、内面にはヘラ磨き、体部外面には回転ヘラ削りを施す。胎土には極細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SK-7057(図3-442)

VII-2区北東端部、SK-7058の東側で検出した舟形の土坑で、南側が西側に曲がる。長辺5.83m、短辺0.77m、深さ23cmを測り、長軸方向は概ねN-20°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し、底面中央部には径40~62cm、深さ9cmの落ち込みがみられる。埋土は中礫混じりの灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には弥生土器39点、土師



遺構埋土
1. 炭化物を含む中礫混じりの灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト

図3-442 SK-7057

器27点, 須恵器15点, 土師質土器244点, 黒色土器3点が見られ, 土師器1点(7526)と土師質土器1点(7527)が図示できた。

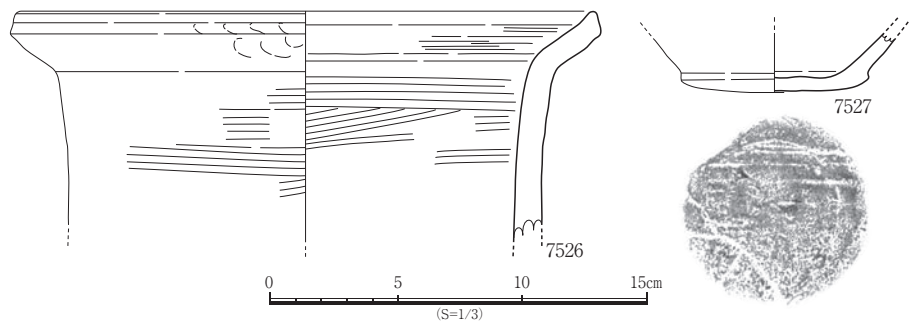


図3-443 SK-7057出土遺物実測図

出土遺物

土師器(図3-443 7526)

甕で, 口縁部はやや外傾して立ち上がる胴部から大きく外傾する。口縁部外面は指押えの後にヨコナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

土師質土器(図3-443 7527)

杯で, 成形はA技法となり, 底部の切り離しは回転ヘラ切りとなり, 板状圧痕が残る。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

SK-7058

VII-2区北東部, SK-7059の東隣で検出した不整楕円形の土坑である。長径6.02m, 短径4.02m, 深さ18cmを測り, 長軸方向はN-6°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し, 底面中央部から径72cmの円形で, 深さ22cmのピットを検出した。埋土は中礫混じりの灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器226点, 土師器3点, 須恵器1点, 土師質土器76点, 黒色土器・製塩土器各1点が見られ, 弥生土器5点(7528~7532)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-444 7528~7532)

いずれも甕で, 7528・7529はほぼ同形態のもので貼付口縁となる。7528は, 頸部が直立し, 口縁部で大きく外反し, 端部下端にヘラ状工具で刻目, 頸部外面下端に2段に微隆起突帯を貼付し, 上下に貼付の際の指頭圧痕が残る。7529は, 口頸部が長胴の胴部から外反し, 口縁端部下端にヘラ状工具で刻

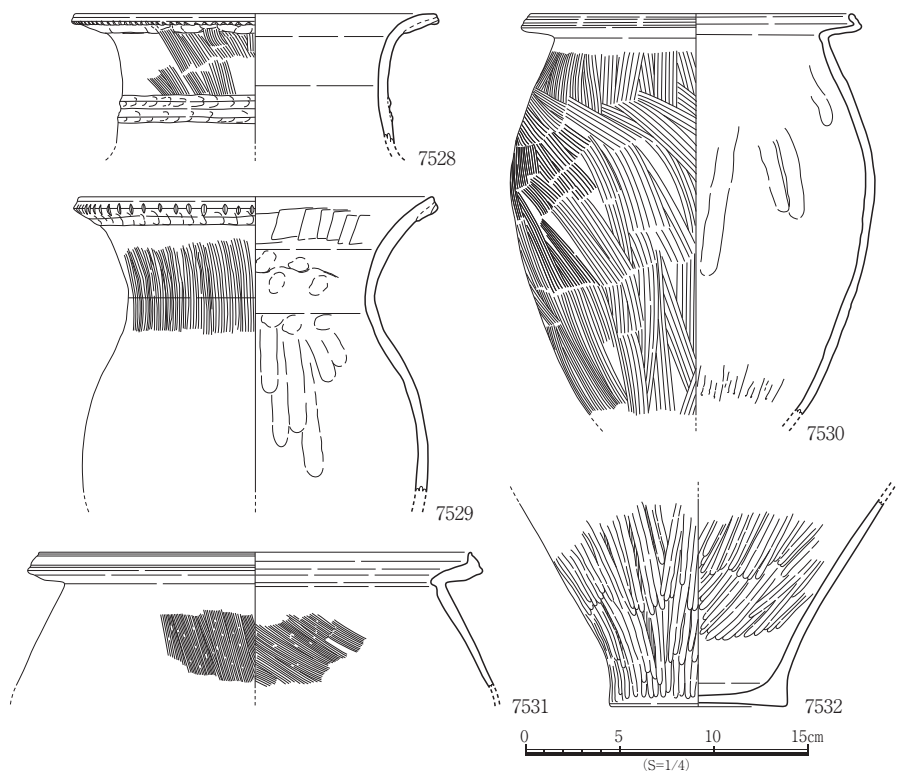


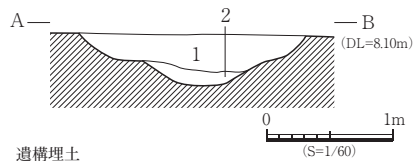
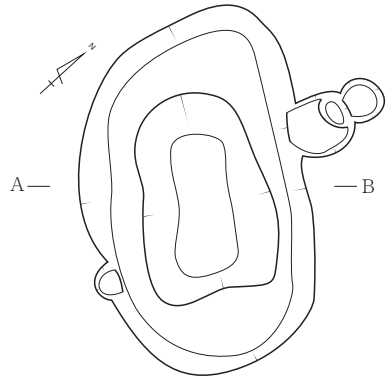
図3-444 SK-7058出土遺物実測図

目を施す。頸部外面から肩部外面にはハケ調整, その下にヨコナデ調整, 中胴部外面にはナデ調整を施す。7530・7531は, 口頸部が倒卵形の胴部から大きく屈曲するもので, 口縁端部を7530は上方に拡張し, 7531は肥厚して擬凹線文を施す。7530は胴部外面, 7531は胴部内外面にハケ調整を施す。いずれも胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

7532は甕の底部とみられるもので, 内面には焦げ目が付着する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

SK-7059 (図3-445)

VII-2区北東部, SK-7058の西隣で検出した楕円形の土坑である。長径2.84m, 短径1.80m, 深さ44cmを測り, 長軸方向はN-55°-Wを示す。断面形は逆台形を呈し, 壁際には平場が巡り, 底面は一段落ち込む。埋土は上下2層に分層され, 上層が中礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト, 下層が中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器8点, 土師器2点, 須恵器1点, 土師質土器26点がみられたが, 図示できるものはなかった。



遺構埋土
1. 中礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト
2. 中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)砂質シルト

図3-445 SK-7059

SK-7060 (図3-446)

VII-2区東部, SK-7058の南側で検出した不整形の土坑である。長辺3.34m, 短辺2.71m, 深さ21cmを測り, 長軸方向はN-55°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器55点, 土師器5点, 須恵器4点, 土師質土器79点, 黒色土器2点, 製塩土器4点, 土製品1点がみられ, 弥生土器3点(7533~7535)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-447 7533~7535)

7533は甕で, 口頸部は胴部からくの字形を呈し, 口縁端部を上方に拡張して擬凹線文を施す。胴部内面中位以下にヘラ削り, 外面にはハケ調整を施した上で中位以下にヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

7534・7535は甕の底部とみられるもので, いずれも外底面はハケ調整の後にナデ調整が施される。また, いずれも胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

SK-7061 (図3-448)

VII-2区東端部, SK-7060の南東側で検出した舟形の土坑である。長辺3.28m, 短

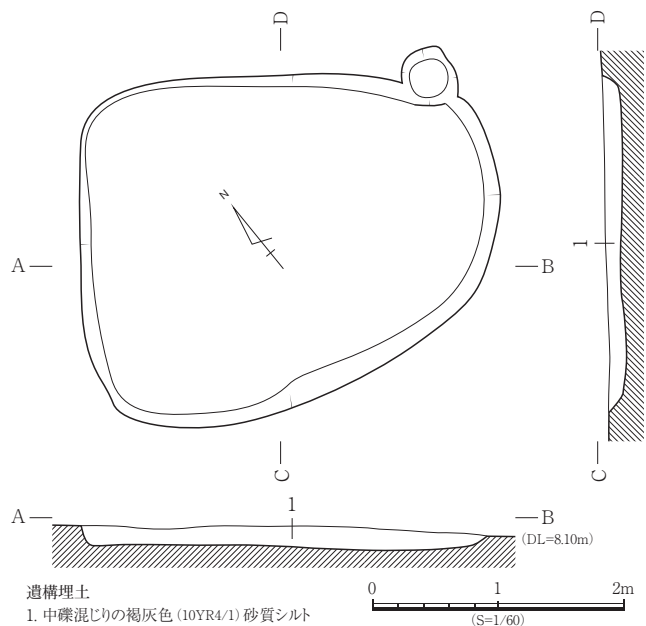


図3-446 SK-7060

辺0.64m, 深さ22cmを測り, 長軸方向はN-19°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は中礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器7点, 土師器3点, 須恵器3点, 土師質土器78点, 黒色土器2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-7062

VII-2区中央部南東寄り, SD-7008の北側で検出した不整楕円形の土坑である。長径1.65m, 短径0.98m, 深さ12cmを測り, 長軸方向はN-17°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを含む暗褐色(10YR3/3)シルトであった。出土遺物には弥生土器2点, 土師器3点, 土師質土器12点, 黒色土器1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-7063 (図3-449)

VII-2区中央部南寄り, SK-7062の西側で検出した不整楕円形の土坑である。長径1.39m, 短径0.98m, 深さ6cmを測り, 長軸方向はN-55°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。遺物は出土しなかった。

SK-7064 (図3-450)

VII-2区中央部南寄り, SK-7063の北西側で検出した方形の土坑で, SK-7065に切られ, 南壁に2個のピットが掘り込まれていた。長辺1.88m, 短辺1.44m, 深さ13cmを測り, 長軸方向はN-71°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器4点, 土師器9点, 須恵器2点, 土師質土器53点, 製塩土器1点がみられ, 須恵器1点(7536)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-454 7536)

鉢とみられるもので, 口縁部はほぼ真上を向き, 胎土には極細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

SK-7065 (図3-450)

VII-2区中央部南寄り, SK-7064を掘り込んだ形で検出した楕円形の土坑である。長径1.50m, 短径1.08m, 深さ15cmを測り, 長軸方向はN-13°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器4点, 土師器8点, 須恵器5点, 土師質土器70点, 黒色土器・石製品各1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

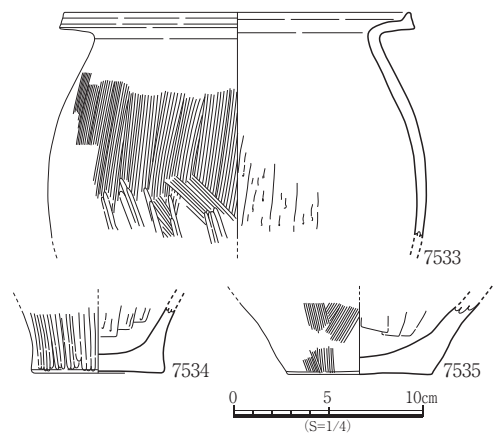
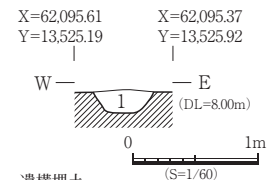
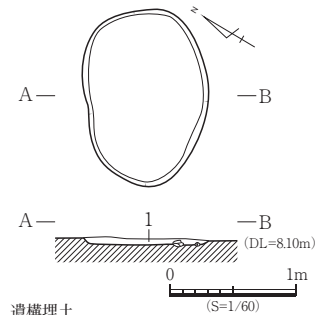


図3-447 SK-7060出土遺物実測図



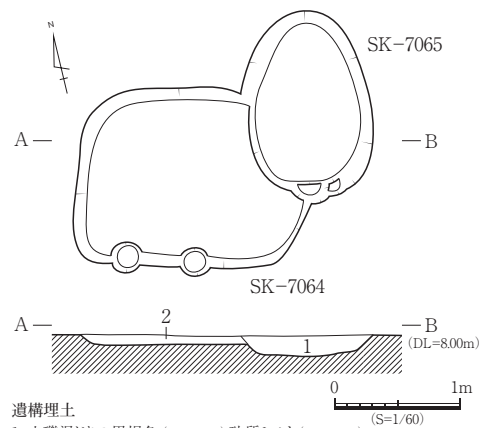
遺構埋土
1. 中礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト

図3-448 SK-7061



遺構埋土
1. 地山の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)シルト

図3-449 SK-7063



遺構埋土
1. 中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)砂質シルト(SK-7065)
2. 地山の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルト(SK-7064)

図3-450 SK-7064・7065

SK-7066 (図3-451)

VII-2区中央部, SK-7065の北側で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.64m, 短辺1.36m, 深さ7cmを測り, 長軸方向はN-5°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器6点, 土師器3点, 須恵器3点, 土師質土器46点, 黒色土器2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

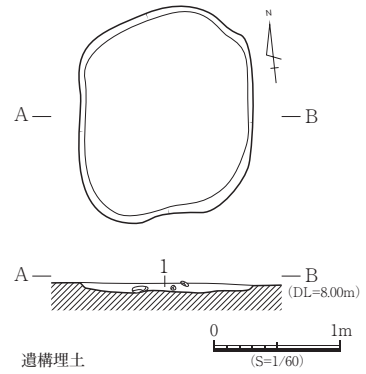


図3-451 SK-7066

SK-7067 (図3-452)

VII-2区中央部西寄り, SB-7059の南東側で検出した方形の土坑で, ピットに掘り込まれる。長辺2.86m, 短辺1.39m, 深さ13cmを測り, 長軸方向はN-4°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は中礫混じりの褐灰色(10YR4/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器4点, 土師質土器8点がみられたが, 図示できるものはなかった。

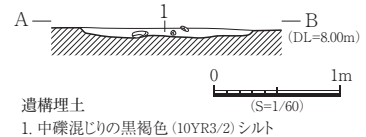


図3-452 SK-7067

SK-7068 (図3-453)

VII-2区南西部, 西壁際で検出した不整形方形の土坑で, ピットに掘り込まれていた。長辺1.48m, 短辺1.10m, 深さ18cmを測り, 長軸方向はN-4°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は中礫混じりの黒褐色(10YR3/2~2/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器9点, 土師器4点, 須恵器8点, 土師質土器24点がみられ, 土師質土器1点(7537)が図示できた。

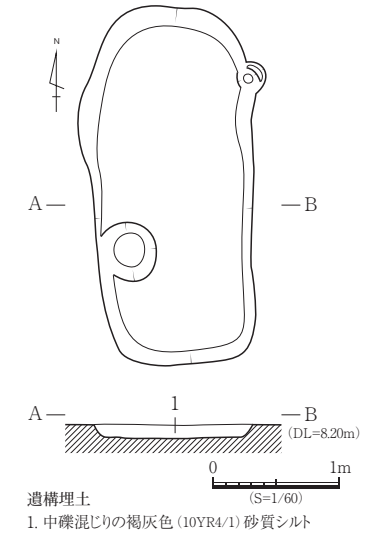


図3-453 SK-7068

出土遺物

土師質土器(図3-454 7537)

杯身で, 成形はA技法となる。底部外面端部には断面逆三角形で基部が太い高台が付く。胎土には極細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

SK-7069

VII-2区南西部, SK-7068の南側で検出した不整楕円形の土坑である。長径1.71m, 短径1.29m, 深さ10cmを測り, 長軸方向はN-15°-Eを示す。断面形は舟底形を呈し, 底面で3個のピットを検出した。埋土は中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)砂質シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には弥生土器3点, 土師器2点, 須恵器3点, 土師質土器8点がみられたが, 図示できるものはなかった。

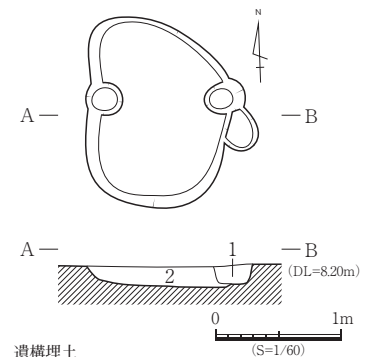


図3-453 SK-7068

SK-7070

VII-2区南西端部, 壁際で検出した隅丸方形とみられる土坑で, 調査区外に続く。長辺約2.50m, 短辺約2.30m, 深さ15cmを測り, 長軸方向はN-8°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し, 底面で3個のピットを検出した。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)砂質

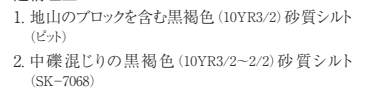


図3-453 SK-7068

シルトであった。出土遺物には弥生土器17点、土師器6点、須恵器7点、土師質土器68点がみられ、弥生土器1点(7538)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-455 7538)

甕の底部とみられるもので、内面には指ナデ調整、外面にはヘラナデ調整を施し、胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

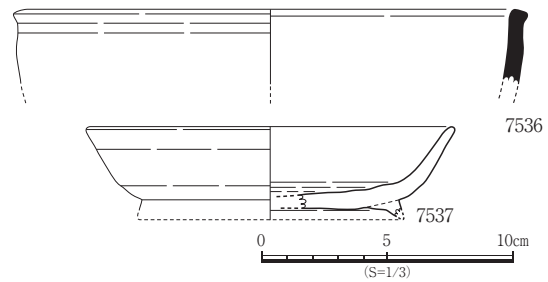


図3-454 SK-7064・7068出土遺物実測図

SK-7071

Ⅶ-2区南部、SD-7008と重複した形で検出した不整形の土坑である。長辺4.72m以上、短辺1.85m、深さ26cmを測り、長軸方向は概ねN-8°-Wを示す。断面形は舟底形を呈し、底面で5個のピットを検出した。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器58点、土師器33点、須恵器29点、土師質土器399点、黒色土器4点、製塩土器3点がみられ、須恵器1点(7539)と土師質土器3点(7540~7542)が図示できた。

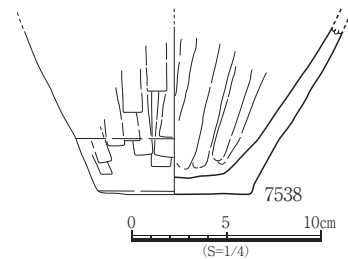


図3-455 SK-7070出土遺物実測図

出土遺物

須恵器(図3-456 7539)

杯蓋で、平らな天井部には擬宝珠形のかんづめが付き、口縁部は内湾気味に斜め下方に下り、端部を下方に屈曲さす。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

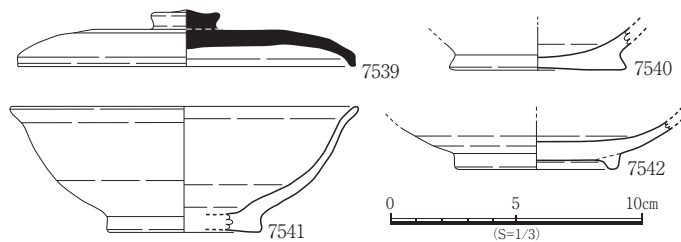


図3-456 SK-7071出土遺物実測図

土師質土器(図3-456 7540~7542)

いずれも椀で、7540・7541はベタ高台となり、底部の切り離しは回転糸切りとなる。7540は、体部が内湾して上がり、口縁部で外傾し、端部を細く仕上げる。胎土には、7540が極細粒砂から粗粒砂を少し、7541は極細粒砂を若干含む。7542は高台が付くもので、底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられる。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

SK-7072

Ⅶ-2区南端部、南壁際で検出した円形とみられる土坑で、約半分は調査区外にある。径は約1.50mとみられ、深さは11cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器6点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-7073

Ⅶ-2区南端部、南壁際で検出した方形とみられる土坑で、南側は調査区外に延びる。長辺1.46m以上、短辺1.18m、深さ10cmを測り、長軸方向は概ねN-5°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器5点、土師器・須恵器各1点、土師質土器14点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-7074

VII-2区南部, SD-7008の南側で検出した方形の土坑で, ピットと重複する。長辺1.09m, 短辺0.95m, 深さ20cmを測り, 長軸方向は概ねN-61°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器17点, 土師器2点, 須恵器6点, 土師質土器145点, 黒色土器1点がみられ, 土師質土器2点(7543・7544)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-457 7543・7544)

7543は椀で, 成形はA技法となり, 底部外面端部に断面逆台形の高さ0.4cmの高台が付く。胎土には極細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

7544は小皿で, 成形はA技法となり, 口縁部は外上方を向き, 端部を丸く仕上げる。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

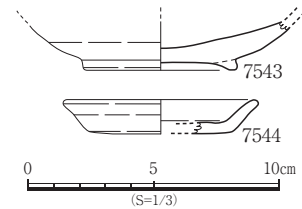


図3-457 SK-7074出土遺物実測図

④ 溝跡

7条を確認した。この内, SD-7002はVI-2区で検出したSD-6008, SD-7003はVI-2区で検出したSD-6009と同じ溝跡である。確認された溝跡の大半は調査区縁辺部にあり, SD-7008などは区画に関連するものとみられる。

SD-7002(図3-459)

VII-1区北西端部で検出した区画溝で, 西側はVI-2区のSD-6008に続く。東側は調査区外に延びるが, VII-3・4区では確認されていない。ただし, VII-3区で確認したSD-7003に繋がる可能性は残る。検出長は7.92m, 幅は0.62~0.75m, 深さは13~32cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は東(7.810m)から西(7.725m)に向って傾斜し, 主軸方向は西(N-98°-W)に向かって真直ぐ延び, SD-6008に続く。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器19点, 土師器5点, 須恵器11点, 土師質土器15点, サヌカイト片1点(1.3g)がみられ, 須恵器3点(7545~7547)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-458 7545~7547)

7545は扁平な杯蓋で, やや凹む天井部には擬宝珠形のつまみが付き, 口縁部は斜め下方に下り, 端部を下方に屈曲さす。胎土には白色細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

7546は杯身で, 底部外面端部より内側に真下を向く高さ0.7cmの高台が付く。底部外面はナデ調整され, 切り離し手法は不明である。胎土には白色極細粒砂から中粒砂を少し含む。

7547は小壺で, 底部外面端部にはハの字形に開く高さ0.4cmの高台が付く。底部外面はナデ調整され, 切り離し手法は不明である。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

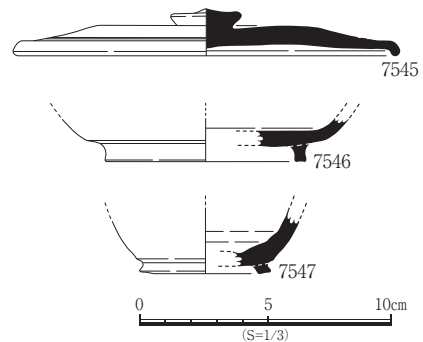


図3-458 SD-7002出土遺物実測図

SD-7003(図3-459)

VII-1区北西部で検出した調査区を斜めに走る溝で, 南側はVI-2区のSD-6009に続く。北側は調査

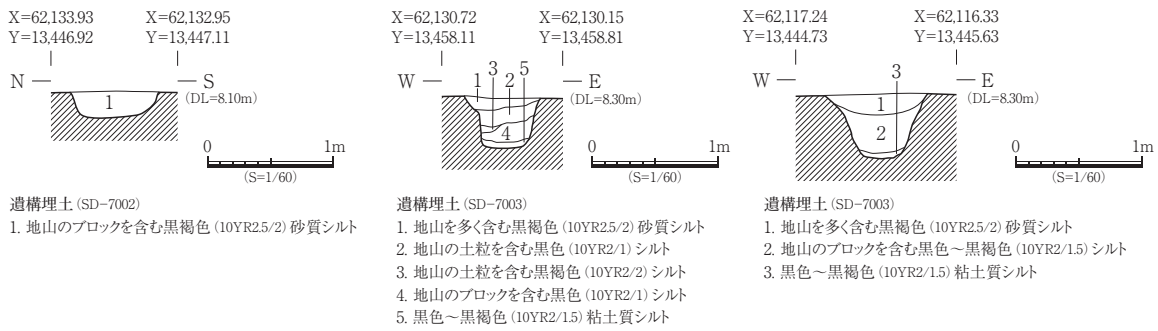


図3-459 SD-7002・7003

区外に延び、VII-3区で確認できる。検出長は38.03m、幅は0.58～0.93m、深さは29～56cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は北(7.770m)から南(7.477m)に向かって傾斜し、主軸方向は、VII-3区で西南西(N-123°-W)に向い、VII-1区では南西(N-135°-W)に方向を変え、SD-6009に続く。埋土は黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルトを主体に地山のブロックや土粒の含む度合いによって3～5層に分層され、下層部にシルトや粘土質シルトの堆積が認められた部分もあった。出土遺物には弥生土器598点、土師器26点、須恵器69点、土師質土器80点、黒色土器1点、製塩土器2点、石製品5点、サヌカイト片2点(27.0g)がみられ、弥生土器1点(7548)、土師器1点(7549)、須恵器3点(7550～7552)、石製品1点(7553)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-462 7548)

甕で、口頸部は直立する胴部から外傾し、貼付口縁となる。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

土師器(図3-462 7549)

杯身で、底部外面はナデ調整され、端部にはハの字形に開く高さ0.7cmの高台が付く。器面にはヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

須恵器(図3-462 7550～7552)

7550は杯蓋で、天井部は丸く、口縁部はそのまま下り、内側に小さなかえりが付く。天井部外面のほぼ全面に回転ヘラ削りを施す。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7551は杯身で、体部はヘラ起こしされ、口縁部は外上方を向き、端部は丸い。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

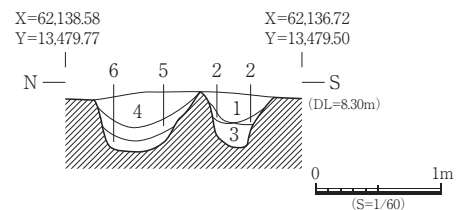
7552は甕で、口縁部は丸い胴部から外傾する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-462 7553)

扁平な磨石で、平滑な表面には縁辺を中心に擦痕、片面に弱い敲打痕、側面に粗い擦痕が残る。

SD-7004(図3-460)

VII-3・4区で検出した東西溝で、西側はSD-7003に切られる。全長は約14.00mとみられ、幅は0.58～0.78m、深さは28～44cmを測り、断面形はU字形ない



遺構埋土
 1. 地山の土粒を少量含む黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト(SD-7004)
 2. 地山のブロックを多く含むにぶい黄褐色～黄褐色 (10YR5/5) シルト(SD-7004)
 3. 地山の土粒を含む黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト(SD-7004)
 4. 地山のブロックを僅かに含む黒褐色 (10YR2.5/2) 砂質シルト(SD-7005)
 5. 地山の土粒を含む黒褐色 (10YR2.5/2) 砂質シルト(SD-7005)
 6. 黒褐色 (10YR2.5/2) 砂質シルト(SD-7005)

図3-460 SD-7004・7005

し逆台形を呈する。基底面は西(8.005m)から東(7.750m)に向って傾斜し、主軸方向は東(N-92°-E)を向く。埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルトを主体に地山のブロックや土粒の含む度合いによって3層に分層される部分もあった。出土遺物には弥生土器67点、土師器46点、須恵器47点、土師質土器226点、製塩土器2点がみられ、須恵器1点(7554)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-462 7554)

台付壺で、底部は外上方を向き、外面端部にハの字形に開く高さ1.3cmの高台が付く。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

SD-7005(図3-460)

VII-4区で検出した東西溝で、調査区外に延びるが、VII-5区では検出されていない。検出長は7.07m、幅は0.61~0.87m、深さは38~48cmを測り、断面形はU字形を呈する。基底面は西(7.759m)から東(7.756m)に向って傾斜し、主軸方向は東(N-100°-E)に延びる。埋土は黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルトを主体に地山のブロックや土粒の含む度合いによって3層に分層される。出土遺物には弥生土器22点、土師器18点、須恵器26点、土師質土器16点、サヌカイト片1点(60.4g)がみられ、須恵器1点(7555)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-462 7555)

杯身で、底部外面は回転ヘラ切りの後にナデ調整を加え、端部にハの字形に開く高さ0.7cmの高台が付く。口縁部は外上方に真直ぐ立ち上がり、端部は丸い。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SD-7006(図3-461)

VII-5区で検出した南北溝で、調査区外に延びるが、VII-1区では検出されていない。検出長は5.98m、幅は0.77~0.95m、深さは31~51cmを測り、断面形は概ねU字形を呈する。基底面は北(7.820m)から南(7.803m)に向って若干傾斜し、主軸方向は南南西(N-161°-W)にやや曲がりながら延びる。埋土は黒褐色(10YR2.5/2)砂質シルトを主体に地山のブロックや土粒の含む度合いによって2層に分層される。出土遺物には弥生土器116点、土師器46点、須恵器24点、土師質土器51点、製塩土器1点、石製品1点がみられ、須恵器2点(7556・7557)が図示できた。

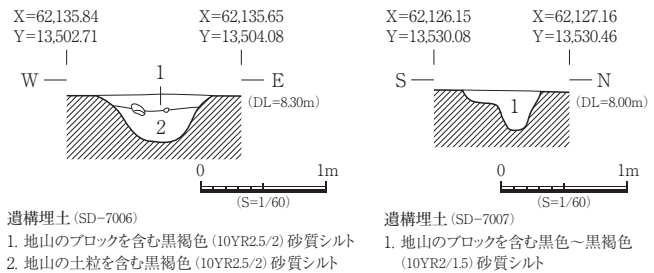


図3-461 SD-7006・7007

質シルトを主体に地山のブロックや土粒の含む度合いによって2層に分層される。出土遺物には弥生土器116点、土師器46点、須恵器24点、土師質土器51点、製塩土器1点、石製品1点がみられ、須恵器2点(7556・7557)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-462 7556・7557)

いずれも杯身であるが、7556は7世紀代のもので、底部はヘラ起こしされ、回転ヘラ削りも一部に残る。7557は8世紀代のもので、底部外面端部よりやや内側にハの字形に開く高さ0.6cmの高台が付く。胎土には細粒砂から粗粒砂を7556が少し、7557が比較的多く含む。

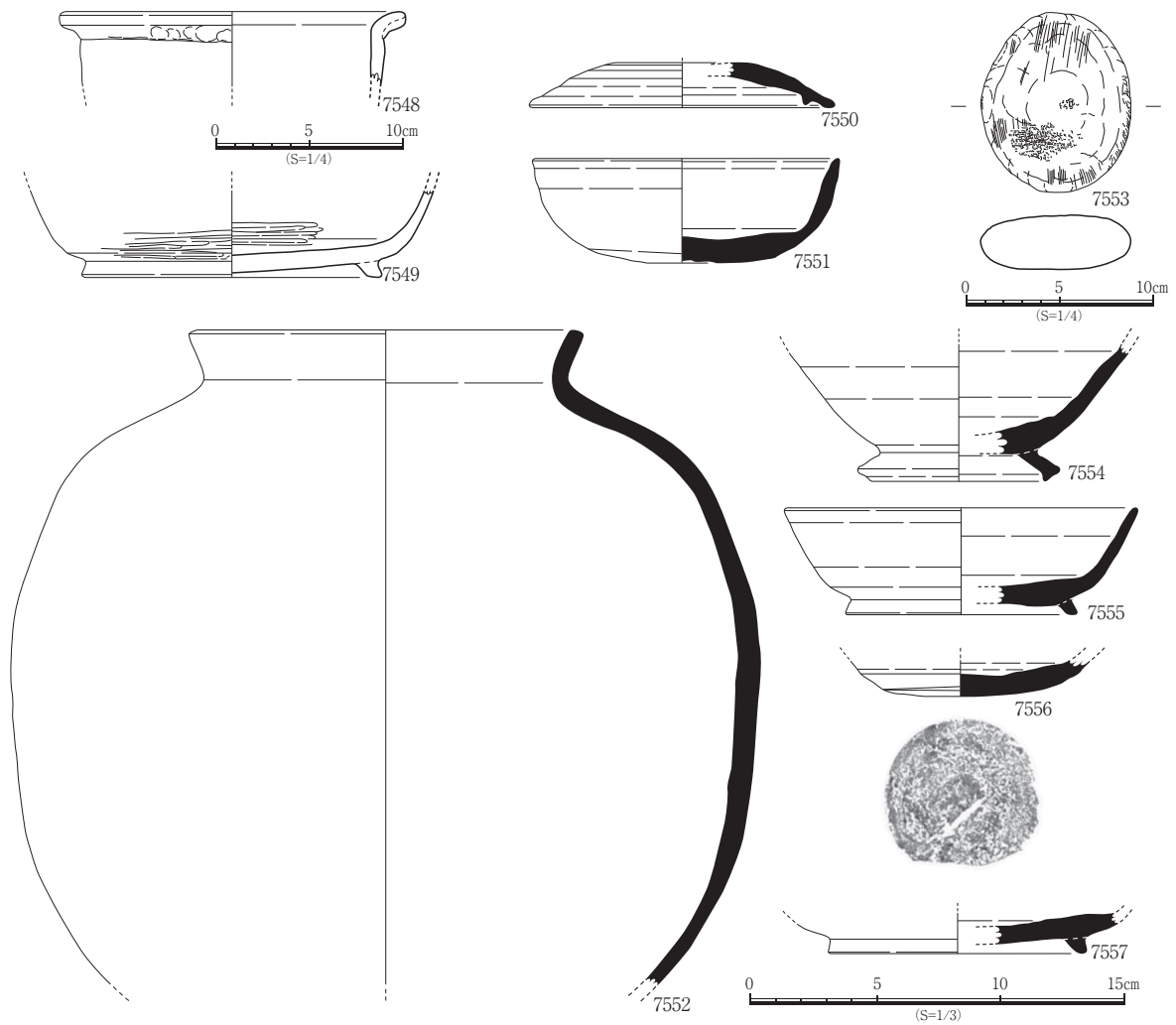


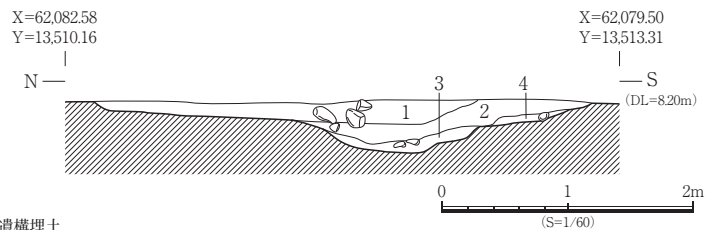
図3-462 SD-7003~7006出土遺物実測図

SD-7007 (図3-461)

Ⅶ-5区南東部で検出した東西溝で、東は調査区外に延びる。検出長は13.10m、幅は0.14~0.66m、深さは3~32cmを測り、断面形は西側で逆台形を呈し、東に行くに従ってU字形となり、V字形を呈する箇所もみられた。基底面は西(7.976m)から東(7.669m)に向って傾斜し、主軸方向は東南東(N-106°-E)にほぼ真直ぐ延びる。埋土は地山のブロックを含む黒色~黒褐色(10YR2/1.5)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器26点、須恵器4点、土師質土器・石製品各1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-7008 (図3-463)

Ⅶ-2区南東部で検出した調査区を斜めに走る東西溝で、東西とも調査区外に延び、東はⅧ区のSD-8010へ続く。検出長は27.36m、幅は1.20~4.48m、深さは27~55cmを測り、断面形は逆台形ないし



遺構埋土

- 1. 地山の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルト
- 2. 地山のブロックを少量含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルト
- 3. 地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルト
- 4. 地山のブロック

図3-463 SD-7008

舟底形を呈し、兩岸側が浅い平場となり、中央部が溝の主体部となる。基底面は東(7.619m)から西(7.538m)に向って傾斜し、主軸方向は南西(N-127°-W)にほぼ真直ぐ延びる。埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルトを主体に地山のブロックや土粒の含む度合いにより2~4層に分層される。出土遺物は多く、弥生土器1,211点、土師器1,978点、須恵器2,113点、土師質土器9,976点、黒色土器161点、緑釉陶器9点、二彩陶器1点、灰釉陶器11点、製塩土器197点、瓦器26点、瓦18点、土製品5点、石製品11点、鉄滓1点がみられ、土師器18点(7558~7575)、須恵器67点(7576~7642)、土師質土器37点(7643~7679)、黒色土器13点(7680~7692)、緑釉陶器8点(7693~7700)、二彩陶器1点(7701)、灰釉陶器11点(7702~7712)、製塩土器2点(7713・7714)、瓦器1点(7715)、瓦1点(7716)、土製品3点(7717~7719)、石製品3点(7720~7722)が掲載できた。

出土遺物

土師器(図3-464・465 7558~7575)

7558~7561は杯身で、底部外面には輪高台が付く。いずれも口縁部を欠き、全体を知ることができないが、成形は左手手法である。器面は、ナデ調整が主体で、ヘラ磨きを施すものはみられない。胎土には、7558は極細粒砂から粗粒砂を少し、7559~7561は極細粒砂から中粒砂を若干含む。

7562・7563は皿で、いずれも口縁端部を内側に折込み、7563は器面にヘラ磨きを施す。胎土には、7562が細粒砂から粗粒砂を少し、7563が極細粒砂から中粒砂を若干含む。

7564・7565は高杯で、7564は、口縁部が体部から外上方に屈曲し、端部は丸い。器面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。7565は、平らな底部と真下を向く脚柱が残る。脚柱の成形はA技法で、土師器の調整で仕上がる。胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

7566~7575は羽釜で、胴部は真上に立ち上がり、7566~7569の口縁部はそのまま立ち上がり、7570~7575の口縁部は内傾する。いずれも口縁部外面に断面台形状の鏝が巡る。7571の胴部外面はハケ調整され、ヘラ記号らしき痕が残る。7572~7574の外面にもハケ目が残る、7575には平行のタタキ目が残る。胎土には、7566・7570が極細粒砂から極粗粒砂、7567・7569・7571~7575が細粒砂から極粗粒砂、7568が極細粒砂から粗粒砂を多く含む。

須恵器(図3-466~470 7576~7642)

7576~7587は杯蓋で、天井部が丸いもの(7576)、ほぼ平らなもの(7577~7580・7583・7585・7587)、凹

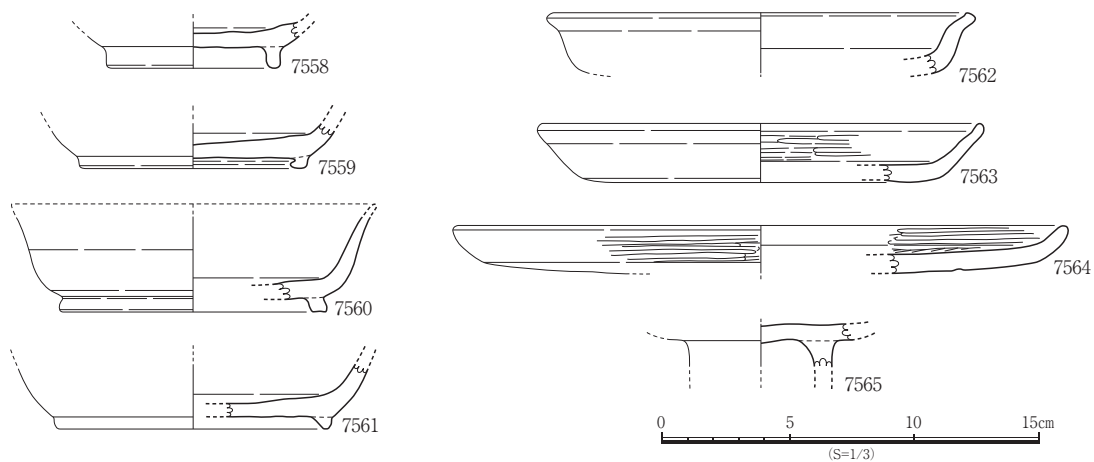


図3-464 SD-7008出土遺物実測図1

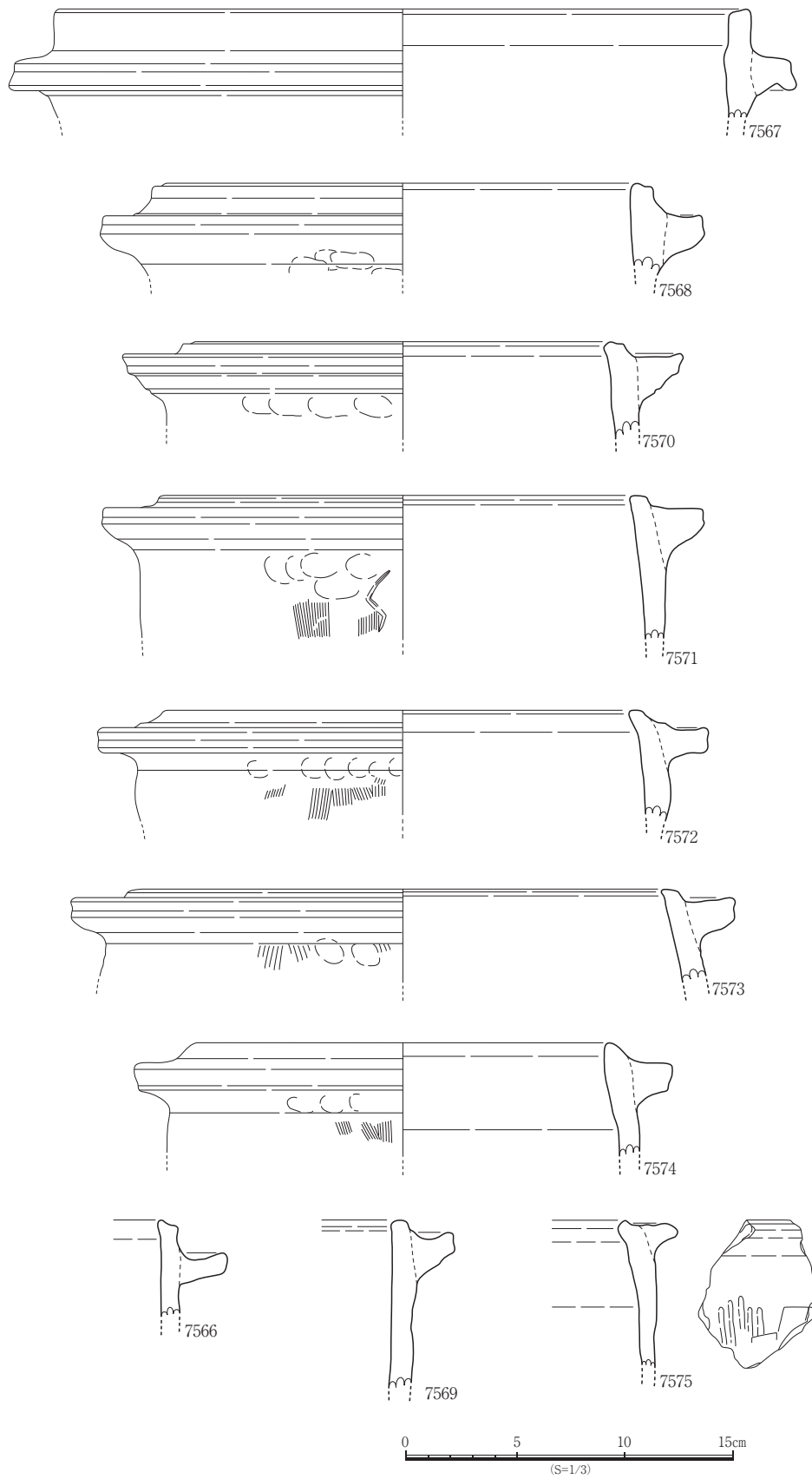


図3-465 SD-7008出土遺物実測図2

むもの(7581・7582・7584・7586)があり, 7576には宝珠形, 7577・7578には擬宝珠形のつまみが残る。口縁部は天井部から斜め下方に延び, 端部を下方に屈曲さす。胎土には, 7576が極細粒砂から中粒砂を若干, 7577・7586が極細粒砂から中粒砂を少し, 7578・7579・7582・7583・7585が極細粒砂から粗粒砂を少し, 7580が細粒砂から粗粒砂を少し, 7581が極細粒砂から中粒砂, 黑色粒を少し, 7584・7587が極細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

7588～7608は杯身で, 輪高台が付き, 口縁部が平らな底部から外上方に立ち上がるもの(7588～7603)と口縁部が底部から内湾気味に立ち上がるもの(7604～7608)がある。底部の切り離しは, ナデ

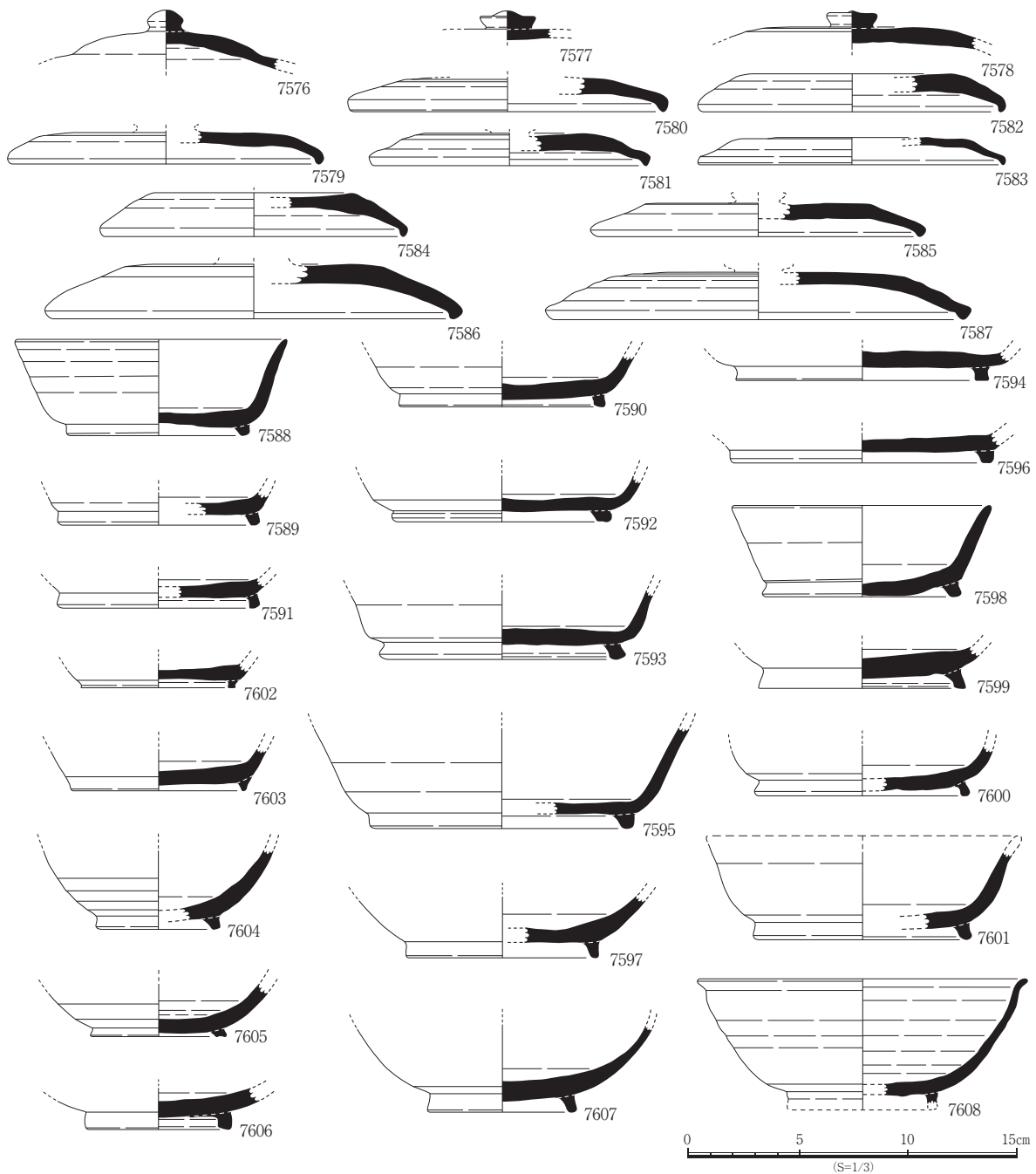


図3-466 SD-7008出土遺物実測図3

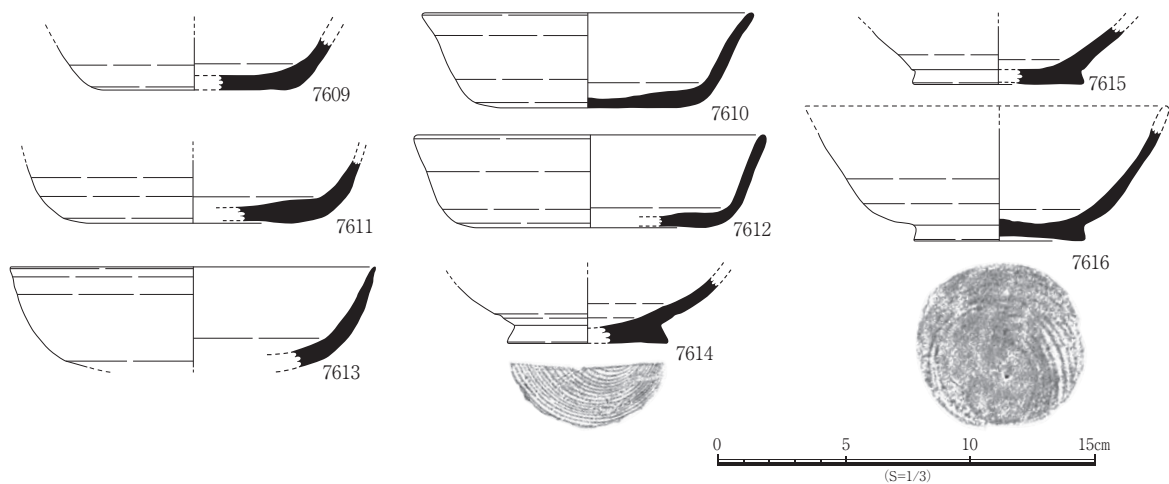


図3-467 SD-7008出土遺物実測図4

消して不明なもの以外は回転ヘラ切りとなる。調整は、基本的に器面に回転ナデ調整を施し、内底面にナデ調整を加え、底部を回転ヘラ切りで切り離し、底部外面端部周辺に回転ヘラ削りを施した上で高台を貼付し、ヨコナデ調整で仕上げる。また、外底面にナデ調整を加えるもの(7588・7590・7591・7595・7598・7599・7602～7604・7606～7608)、底部外端部に回転ヘラ削りが残るもの(7592・7604・7605・7608)がある。中でも、7604など口縁部が内湾して上がるものは、回転ヘラ削りを施す範囲が広がる。また、7602の外底面には爪痕が高台内側に残る。胎土には、7588・7591・7592・7596・7599・7600・7601・7604が極細粒砂から粗粒砂を少し、7589・7593が細粒砂から中粒砂を少し、7594が極細粒砂から極粗粒砂を比較的多く、7597が細粒砂から中粒砂を比較的多く、7598が細粒砂から粗粒砂を少し、7603・7607が極細粒砂から極粗粒砂を少し、7595・7602・7605・7606が極細粒砂から中粒砂を若干、7590・7608が極細粒砂から粗粒砂を若干含む。

7609～7613は高台の付かない杯で、口縁部が平らな底部から外上方に立ち上がるもの(7609～7612)と口縁部が丸味のある底部から内湾気味に上がるもの(7613)がある。調整は、輪高台の付くものと基本的に同じであるが、底部外面端部周辺に回転ヘラ削りを施したものはない。底部を回転ヘラ切りした後にナデ調整を加えるもの(7609・7612)がみられる。胎土には、7609が細粒砂から粗粒砂を少し、7610～7613が極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7614～7616はベタ高台の杯で、口縁部は底部から内湾気味に上がり、底部の切り離しは回転糸切りとなる。胎土には、7614・7616が極細粒砂から粗粒砂を少し、7615が極細粒砂から中粒砂を若干含む。

7617～7621は皿で、口縁端部内側に折込みの痕跡が沈線として残る7621以外は丸くなる。底部の切り離しは不明瞭なものを除いていずれも回転ヘラ切りとなり、7621には

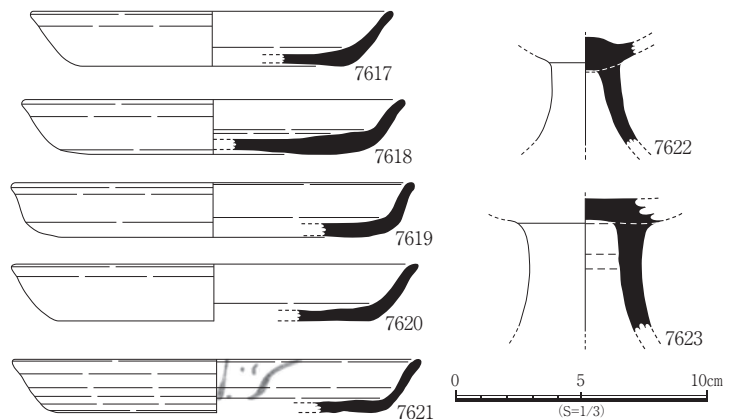


図3-468 SD-7008出土遺物実測図5

ナデ調整を加える。また、7621には火礫が残る。胎土には、7617・7620が極細粒砂から粗粒砂、7618が細粒砂から粗粒砂、7619が極細粒砂から極粗粒砂、7621が極細粒砂から中粒砂を少し含む。

7622・7623は高杯である。7622は小型で、脚柱部は外下方に開き、胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。7623は7565の土師器と酷似するもので、杯底部は平らで、脚柱部は外下方に外反気味に下る。胎土には極細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

7624は鉄鉢で、口縁部は外上方に延びる体部から屈曲して上方を向く。外面には1条の凹線が巡る。胎土には極細粒砂から極粗粒砂を若干含む。

7625～7636は壺である。7625は小型の細口壺で、口縁部は胴部から屈曲して真上を向く。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。7626も細口壺で、口縁部はほぼ直上し、端部は平面となり、外面には2条の沈線が巡る。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。7627・7628は同形態の小型細頸壺で、口頸部が外反し、端部上端を拡張する。胎土には、7627が極細粒砂から中粒砂を若干、7628が極細粒砂から中粒砂を少し含む。7629は広口壺で、頸部は直上し、口縁部で外反し、端部上端を拡張する。胎土には細粒砂から細粒中礫を少し含む。

7630～7633は輪高台が付く底部で、下胴部外面から底部外端に回転ヘラ削りを施すものが多い。7630は小型の壺で、外面には回転ヘラ削りを施す。7631・7632の高台はハの字形を呈し、周囲をヨコ

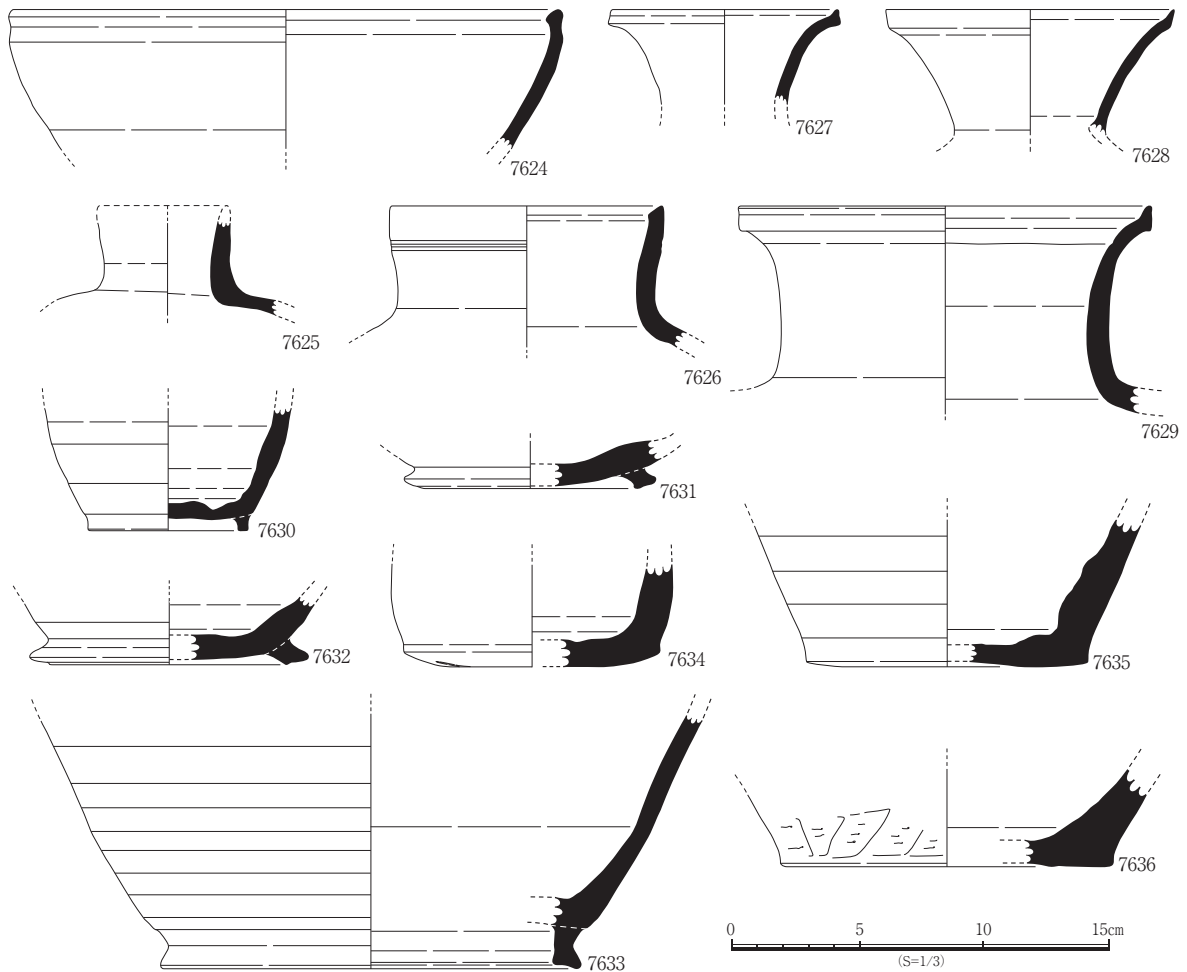


図3-469 SD-7008出土遺物実測図6

ナデ調整する。7633の高台は真下を向き、高さ1.6cmを測る。いずれも胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

7634～7636は平底の壺底部である。7634の底部は回転ヘラ切りにより凸状となり、ナデ調整を加えナデ消す。また、外底面にはヘラ記号らしきヘラ描沈線が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。7635は外底面にヘラナデ調整を施し、胎土には極細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。7636は外面に静止ヘラ削りを施すもので、外底面は未調整となる。胎土には細粒砂から極細粒中礫を少し含む。

7637～7642は甕で、口頸部が胴部から屈曲して短く外傾ないし外反するもの(7637～7639)と比較的長い頸部を有するもの

(7640～7642)がある。7642の外面に波状文が施されている以外は無文で、胴部内面には同心円文のタタキ、平行のタタキを施すものが多い。胎土には、7637が細粒砂から極粗粒砂を少し、7638が細粒砂から粗粒砂を少し、7639・7640が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く、7641が極細粒砂から粗粒砂を少し、7642が細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

土師質土器(図3-471・472 7643～7679)

7643～7652は杯で、大半は口縁部を欠くが、口縁部が外上方に真直ぐ延びるもの(7645)と口縁部

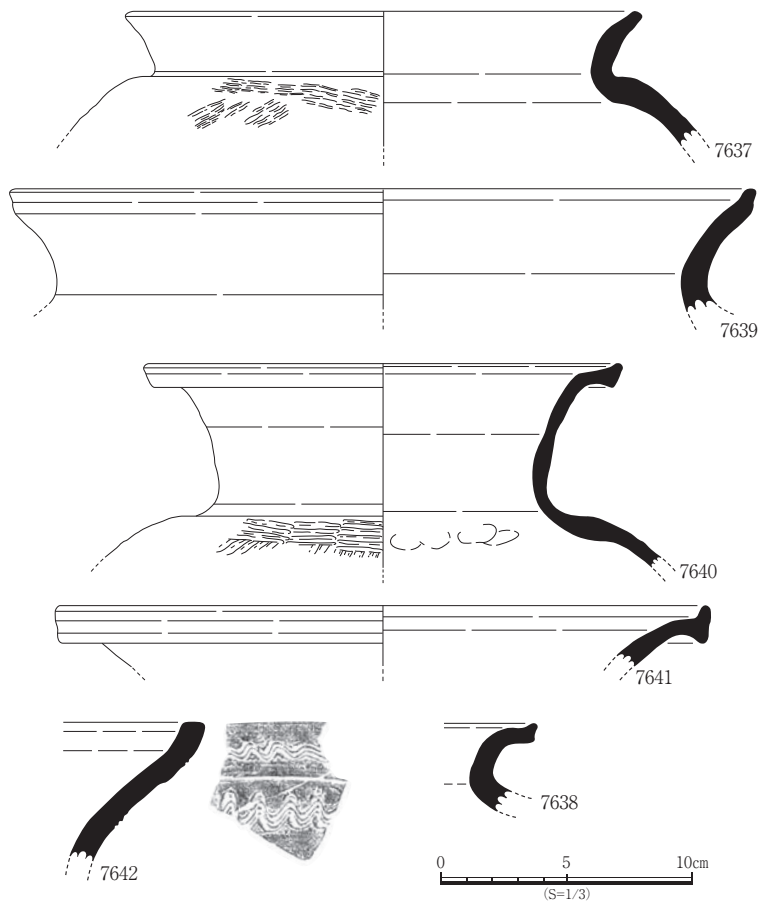


図3-470 SD-7008出土遺物実測図7

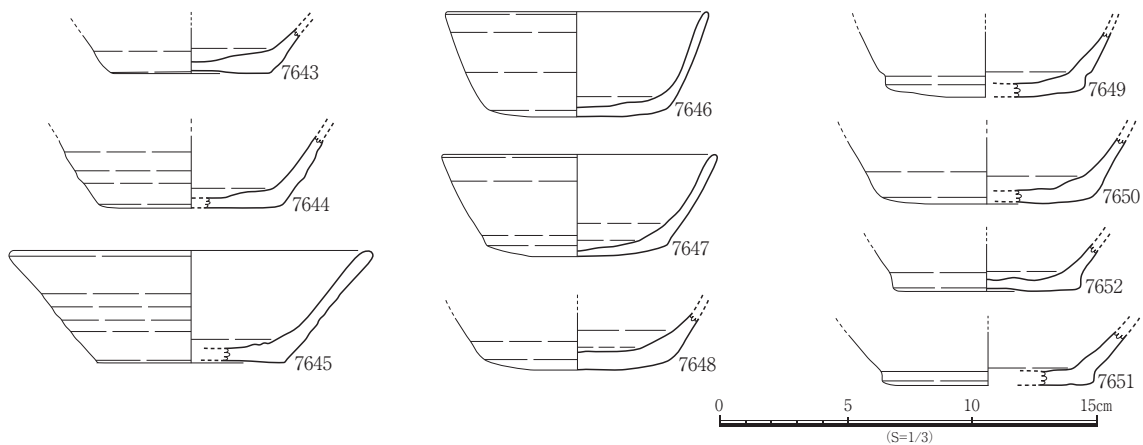


図3-471 SD-7008出土遺物実測図8

が底部から内湾気味に上がるもの(7646・7647)がみられる。成形は、7645がB技法である以外いずれもA技法となり、底部の切り離しも7645が回転糸切りである以外回転ヘラ切りとなる。調整は、摩耗するものもみられるが、基本的に器面に回転ナデ調整を施した後に、内底面にナデ調整を加え、底部を回転ヘラ切りか回転糸切りで切り離す。胎土には、7643・7648・7651・7652が極細粒砂から中粒砂を若干、7644が極細粒砂から極粗粒砂を少し、7645～7647・7649・7650が極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7653～7656はベタ高台の椀で、成形はいずれもA技法となる。底部の切り離しは回転ヘラ切りになるもの(7656)、回転糸切りになるもの(7653・7654)及び静止糸切りになるもの(7655)がある。胎土には、7653・7654が極細粒砂から中粒砂を若干、7655が極細粒砂から粗粒砂を若干、7656が極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7657～7669は椀で、輪高台が付く。高台高は、7669が1.1cmである以外は0.5cmを中心に0.4～0.9cmで、断面逆台形のものが多い。いずれも口縁部を欠くが、底部は内湾気味になっており、そのまま口縁部に至るとみられる。7657・7662の外面には回転ヘラ削りが施される。胎土には、7657・7659～7662・7666・7669が極細粒砂から粗粒砂を少し、7658・7663が極細粒砂から中粒砂を少し、7664が極細粒砂から極粗粒砂を少し、7665・7667・7668が極細粒砂から中粒砂を若干含む。

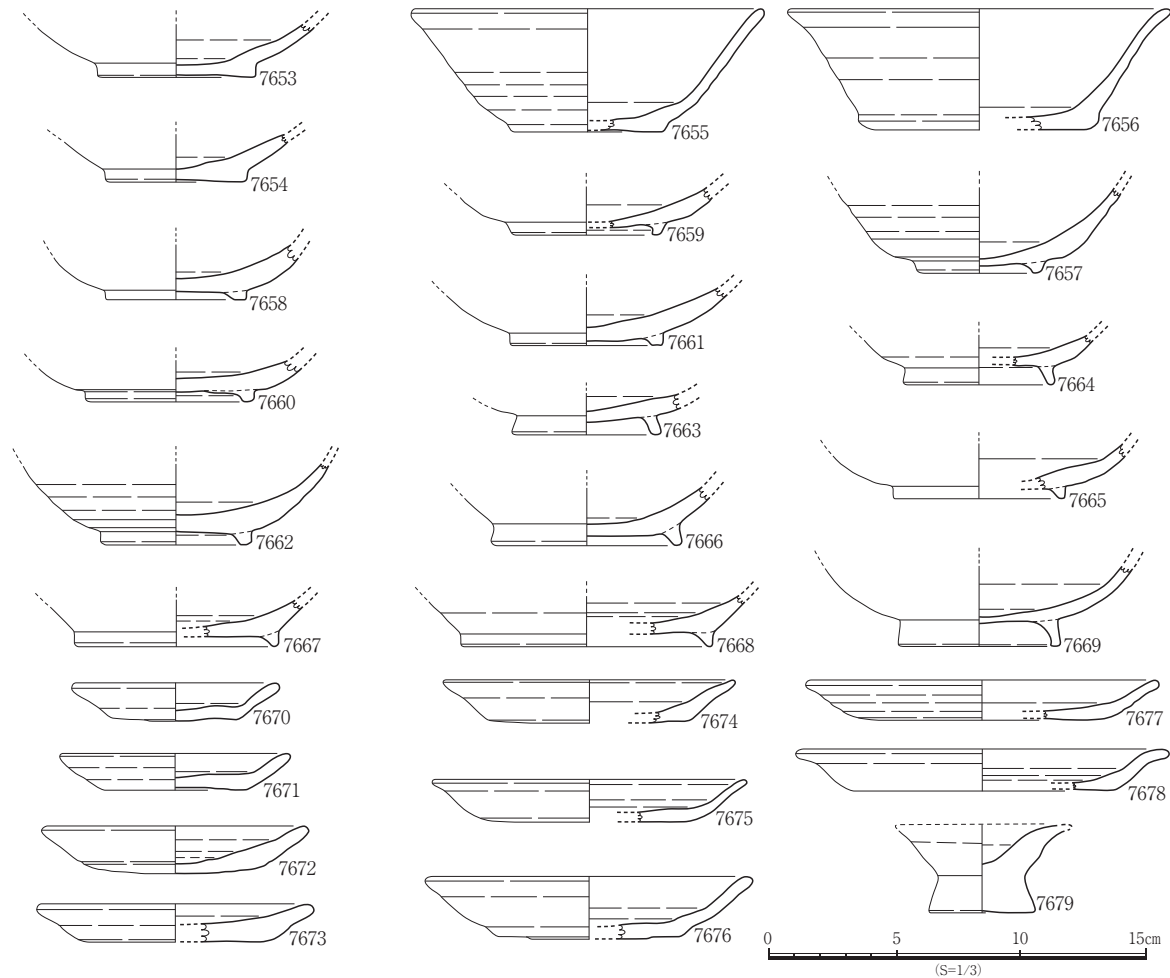


図3-472 SD-7008出土遺物実測図9

7670・7671は小皿で、成形はA技法となり、底部の切り離しは回転糸切りで、7670には板状圧痕が残る。調整は基本的に杯と同じである。胎土には、7670が極細粒砂から粗粒砂を少し、7671が極細粒砂から中粒砂を少し含む。

7672～7678は皿で、内底面から口縁部にそのまま立ち上がるもの(7672・7673)と平らな内底面端部から口縁部が上方に立ち上がるもの(7674～7678)がある。いずれも成形はA技法で、底部の切り離しは回転ヘラ切りとなる。7674の口縁端部内側に沈線として折込みの痕跡が残る以外は、概ね丸く仕上げる。胎土には、7672～7674・7676が極細粒砂から粗粒砂を少し、7675が極細粒砂から極粗粒砂を少し、7677が極細粒砂から中粒砂を少し、7678が極細粒砂から中粒砂を若干含む。

7679は高さ1.5cmの高台が付く小皿で、ベタ高台となる。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

黒色土器(図3-473 7680～7692)

7680～7686は内黒の椀で、7680～7683は断面三角形ないし逆台形の高さ0.5～0.8cmの高台が付き、7681以外には内面にヘラ磨きが残る。胎土には、7680が極細粒砂から中粒砂、7681～7683が極細粒砂から粗粒砂を少し含む。7684～7686は細長い高さ0.7～1.1cmの高台が付き、内面にはヘラ磨きが残る。胎土には、7684が極細粒砂から中粒砂、7685・7686が極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7687は内黒の杯で、成形はA技法で、底部の切り離しは回転ヘラ切りとなり、土師質土器の内面に炭素を吸着させた在地産とみられる。

7688・7689は内黒の甕で、口縁部は胴部から外反し、端部を丸く仕上げる。胎土には、7688が細粒砂から極粗粒砂、雲母片を比較的多く、7689が極細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

7690～7692は黒色土器Bの椀である。7690にはハの字形に開く高さ0.7cmのしっかりした高台が付き、内面にはヘラ磨きが残る。7691には高さ0.2cm、7692には高さ0.3cmの逆三角形の高台が付き、内外面にはヘラ磨きを施す。また、7692の外面上端には回転ヘラ削りを行う。胎土には、7690が極細粒砂から粗粒砂を少し、7691が極細粒砂から中粒砂を若干、7692が極細粒砂から粗粒砂と雲母片を比較的多く含む。

緑釉陶器(図3-474 7693～7696・7699・7700, 図版151 7697・7698)

7693は軟質系の皿で、全面に緑釉を施釉するが、外面は剥落が目立つ。胎土には極細粒砂から中粒

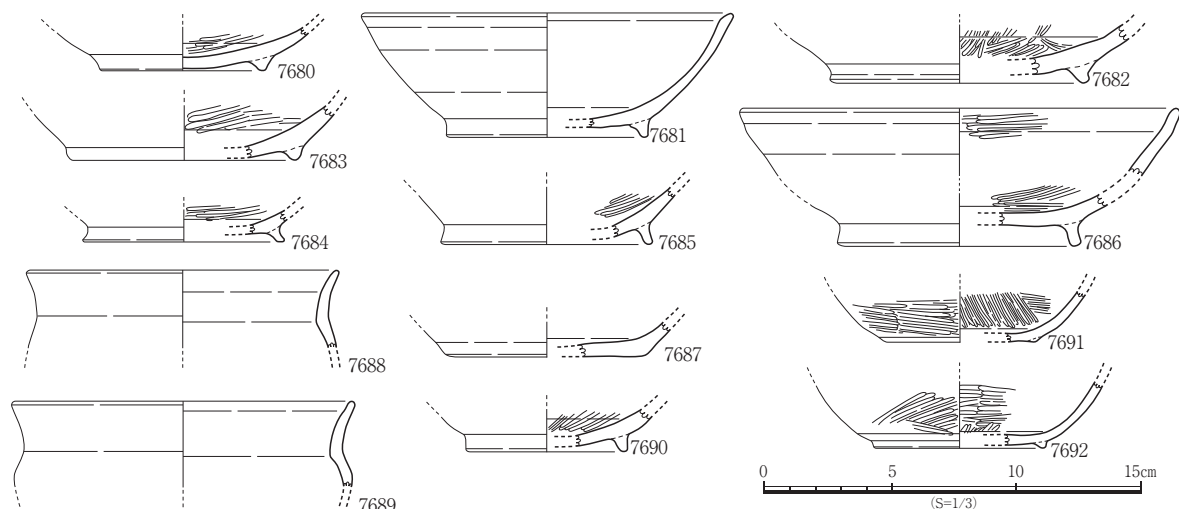


図3-473 SD-7008出土遺物実測図10

砂を少し含む。

7694・7695は硬質系の椀で、全面に緑釉を施釉し、7695の外面には蓮弁の一部が残る。胎土には、7694が極細粒砂から中粒砂を少し、7695が極細粒砂から細粒砂を若干含む。

7696～7699は硬質系の皿で、全面に緑釉を施釉し、7698の外面には回転ヘラ削りの痕が残る。7699には高さ0.8cmの面取りされた高台が付き、見込には釉溜まりが残る。胎土には、7696が細粒砂から中粒砂を少し、7697が極細粒砂から細粒砂を若干、7698が極細粒砂から中粒砂を若干、7699が極細粒砂から細粒砂を少し含む。

7700は硬質系の椀で、猿投産とみられる。器面は回転ナデ調整で、外面には回転ヘラ削りを施し、底部は削り出し高台となる。見込から高台外側にかけて緑釉を施釉する。胎土には、極細粒砂から中粒砂を若干含む。

二彩陶器(図版183 7701)

硬質系の皿で、内面には緑色、外面には緑色と黄色の釉を施釉する。胎土には極細粒砂から中粒砂、黒色粒を少し含む。

灰釉陶器(図3-474 7702・7703・7708～7711, 図版141・152 7704～7707・7712)

7702・7703は椀で、7702は全面に灰釉を施釉する。7703は三日月形高台が付くもので、器面は回転ナデ調整で、底部は回転ヘラ切りとなり、高台外面基部から見込にかけて灰釉を施釉する。内底面は摩滅する。胎土には、7702が極細粒砂から細粒砂、7703が極細粒砂から極細粒中礫を若干含む。

7704～7711は皿である。残部が僅かな7704～7707は全面に灰釉を施釉し、胎土には、7704～7706が極細粒砂から中粒砂、7707が極細粒砂から細粒砂を若干含む。7708の外面には回転ヘラ削りの痕

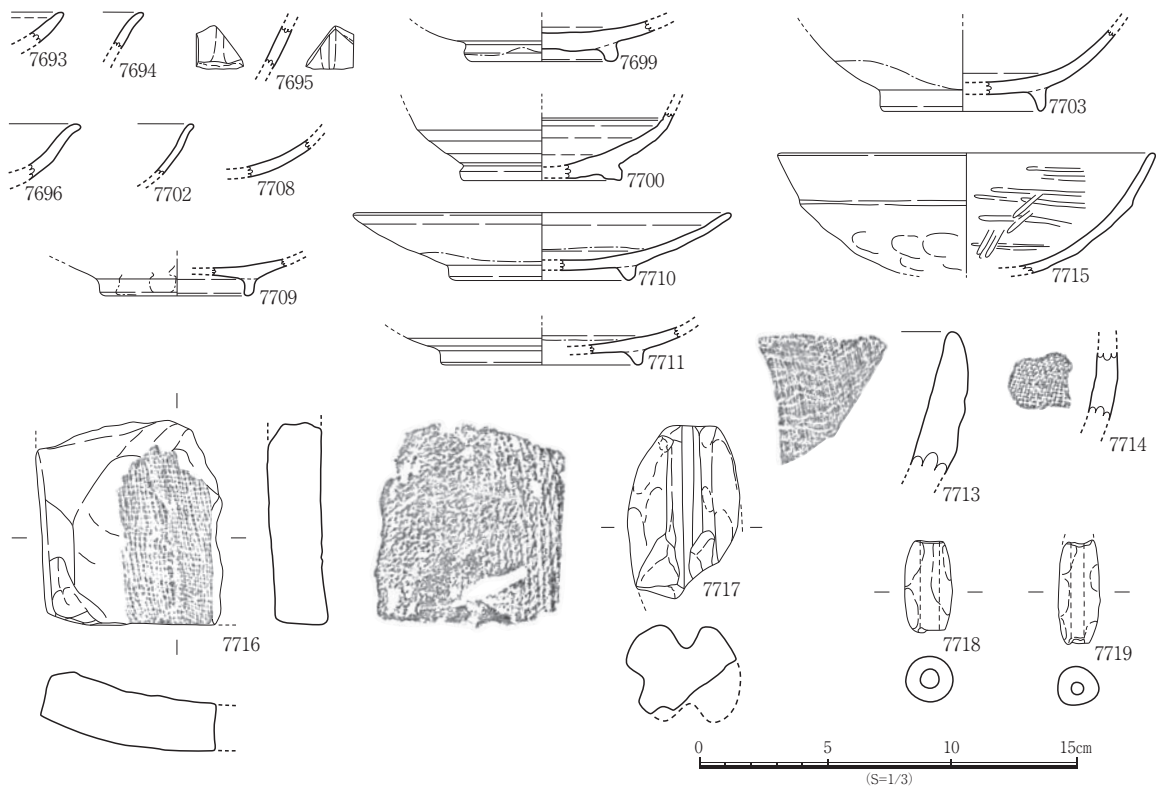


図3-474 SD-7008出土遺物実測図11

が残り、回転ヘラ削りの上半から内面にかけて灰釉を施釉する。胎土には極細粒砂から細粒砂を若干含む。7709は真下を向き高さ0.7cmの高台が付くもので、外面には釉垂れがみられ、胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。7710は、口縁部が底部から内湾気味に緩やかに上がるもので、端部は丸い。器面は回転ナデ調整を施し、見込にナデ調整を加える。底部は回転ヘラ切りとなり、端部に高さ0.6cmの高台が付く。灰釉は体部内面から高台外面基部にかけてハケ塗りされる。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。7711は、高さ0.6cmの高台が付き、外側には回転ヘラ削りを施す。灰釉は体部内面に残る。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

7712は瓶の口縁部の細片とみられ、内面は無釉で外面のみ灰釉を施釉する。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

製塩土器(図3-474 7713・7714)

7713は口縁部、7714は胴部の細片で、いずれも内側には布目、外面には指頭圧痕とナデ調整の痕が残る。胎土にはいずれも細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

瓦器(図3-474 7715)

椀で、口縁部は体部から内湾気味に上がり、端部を丸く仕上げる。内面にはナデ調整の後にヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

瓦(図3-474 7716)

平瓦で、凹面には布目、凸面には縄目のタタキ目が残る。細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

土製品(図3-474 7717～7719)

いずれも土錘である。7717は紐溝があるもので、3ヵ所に設けられていたものとみられ、胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。7718は円筒形で、紐孔は径0.8cmを測り、胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。7719は紡錘形で、紐孔は径0.5cmを測り、胎土には極細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

石製品(図3-475 7720～7722)

7720は磨石で、平滑な表面には縁辺を中心に擦痕、側面1ヵ所と両端に敲打痕と摩滅痕が残る。

7721・7722は砥石で、7721には4面に使用痕が残る。7722は河原石を使用したもので、両面と側面に使用痕が残る。

⑤ ピット

その多くが掘立柱建物跡などの柱穴と考えられ、総数は4,866個であった。この内、図示できた遺物が出土したのは93個(P-7002～7094)で、出土したピットについては遺物観察表に記している。

埋土は基本的に地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。

出土遺物

弥生土器(図3-476 7723～7730)

7723は壺で、口縁部は外反し、端部にへ

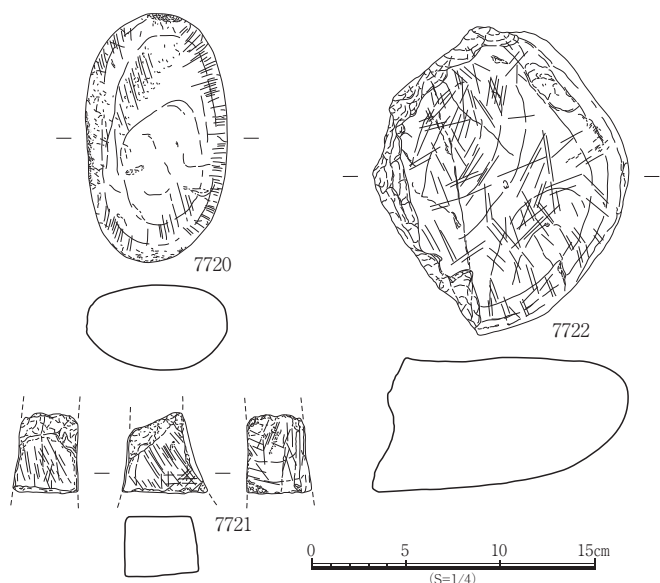


図3-475 SD-7008出土遺物実測図12

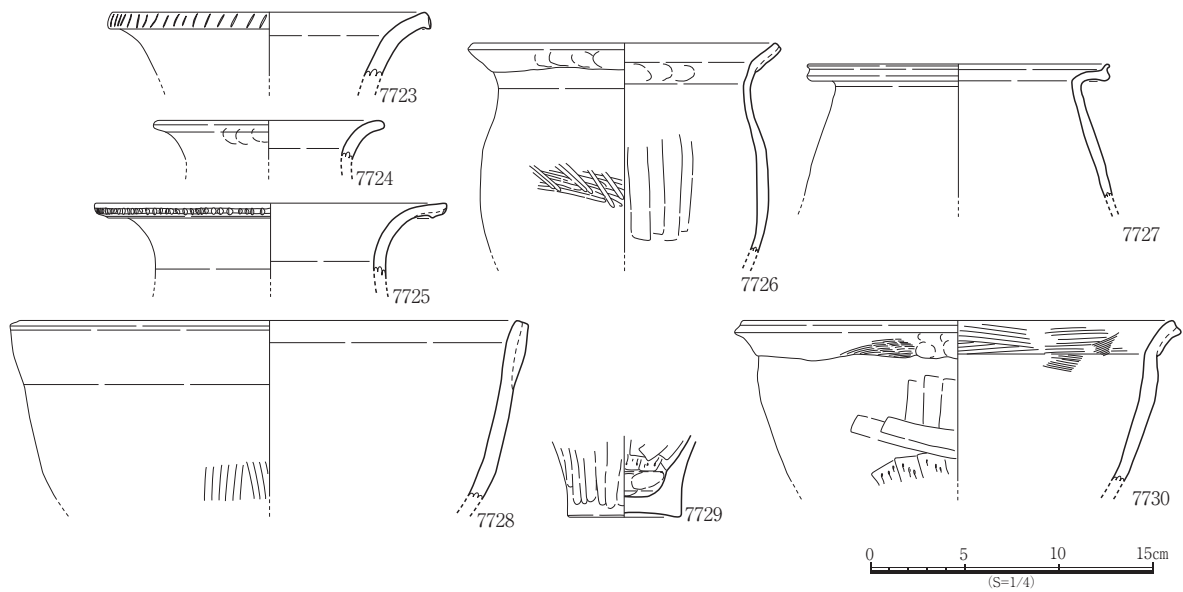


図3-476 ピット出土遺物実測図1

ラ状工具による刻目を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

7724～7728は甕である。7724は小型で、口縁部は外反し、端部は丸い。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。7725は、口頸部が大きく外反し、口縁部が貼付口縁となるもので、端部下端にヘラ状工具による刻目、その下に作り出し微隆起突帯とクシ描直線文を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。7726は、口頸部が膨らみのない胴部から外反するもので、口縁部は貼付口縁となり、外面には指頭圧痕が残る。頸部内面には指押え、胴部内面にはヘラナデ調整とナデ調整、外面にはヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。7727は、口頸部が内傾して立ち上がる胴部から屈曲し、口縁端部上端を拡張するもので、口縁端部は凹面となる。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。7728は深鉢のような形態を呈するもので、胴部は内傾して立ち上がりそのまま口縁部に至る。口縁部は肥厚する。外面には煤が付着する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

7729は甕の底部とみられるもので、内面にはヘラ削りを施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

7730は鉢で、形態的には7728に似る。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外傾し、貼付口縁となる。外面には指頭圧痕とハケ目が残る。体部外面はヘラナデ調整とヘラ削りの後にナデ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

土師器(図3-477・478 7732～7749, 図版183 7731)

7731は杯蓋の口縁部の細片で、赤色塗彩される。口縁部は斜め下方に下り、端部を下方に屈曲さす。胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

7732・7733は杯である。7732が大型で、口縁端部を内側に折込み、内面には放射線状の暗文を施す。胎土には極細粒砂から細粒砂を少し含む。7733は、口縁部が平らな底部から外上方に立ち上がり、端部を内側に大きく折込み、凹面となる。外面にはヨコ方向のヘラ磨きを施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

7734・7735は椀である。7734は、口縁部が内湾する体部から外傾し、丸い口縁端部内側を折込む。

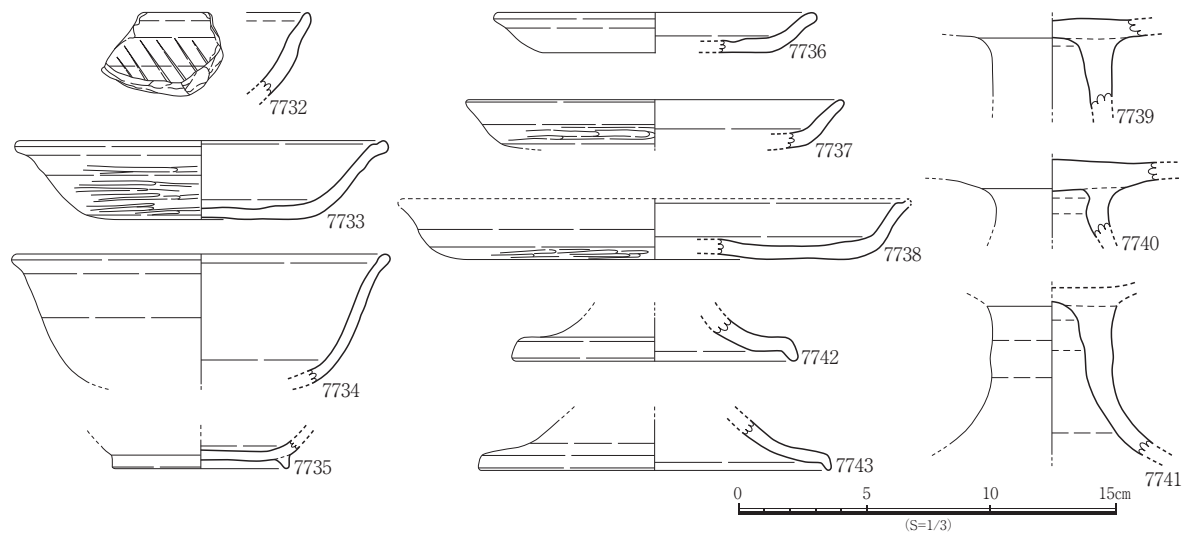


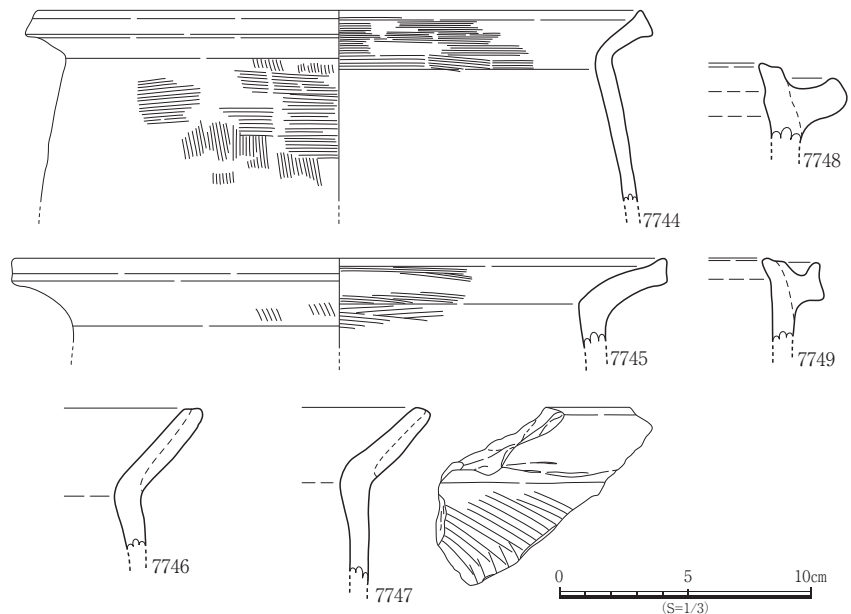
図3-477 ピット出土遺物実測図2

胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。7735は輪高台の付くもので、外底面端部に断面逆三角形の高さ0.6cmの高台が付く。胎土には極細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

7736～7738は皿で、7736・7737は口径が15cmに満たない小型となる。7736・7737は、口縁部が上外方に上がり、端部は丸く、7737にはヘラ磨きの痕が残る。7738は、口縁端部を内側に折込むもので、器面は摩耗するが、外底面はヘラ切りの後に部分的にヘラ磨きを施す。胎土には、7736が極細粒砂から中粒砂を若干、7737が極細粒砂から粗粒砂を少し、7738が極細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

7739～7743は高杯であるが、一般的な土師器の高杯の脚部ではなく、須恵器の脚部、すなわち、粘土巻き上げロクロ成形されたものである。このことからすると土師質土器と呼称できようが、杯部の成形が左手手法とみられ、かつ土師器的な調整を行っており、ここでは一応土師器として取り上げた。7739・7740は平らな杯底部に真下を向く脚柱が付く。胎土には極細粒砂から極粗粒砂を7739が少し、7740が比較的

多く含む。7741はほぼ真下になる脚柱から裾部が開くもので、胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。7742・7743は裾部で、大きく開き、端部は下方に屈曲する。胎土には、7742が極細粒砂から粗粒砂を少し、7743が細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。



7744～7747は甕で、口縁部は胴部から外傾する。7744は胴部内面にナ

図3-478 ピット出土遺物実測図3

デ調整, 外面にハケ調整を施す。7746・7747は口縁部に粘土紐の接合痕が残る。胎土には, 7744が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く, 7745が細粒砂から粗粒砂を比較的多く, 7746・7747が細粒砂から粗粒砂を多く含む。

7748・7749は羽釜で, 内傾する口縁部外面には, 7748が幅2.4cm, 7749は幅2.0cmの鏝が付く。胎土には細粒砂から粗粒砂を7748が比較的多く, 7749が多く含む。

須恵器(図3-479・480 7750~7782)

7750~7753は杯蓋で, 天井部に丸味のあるもの(7750・7751), 天井部が平らなもの(7752), 天井部が凹むもの(7753)がある。天井部に丸味のあるものは器高が高く, 天井部が凹むものになるに従って器高も低くなる。7751・7752以外は天井部外面ほぼ全面に回転ヘラ削りを施す。7751の天井部外面には粘土紐の接合痕が残る, 7752の天井部には環状のつまみが付いていたとみられ, かつほとんど類例のない静止ヘラ削りが施される。胎土には, 7750・7753が極細粒砂から粗粒砂を少し, 7751が極細粒砂から中粒砂を少し, 7752が細粒砂から粗粒砂を少し含む。

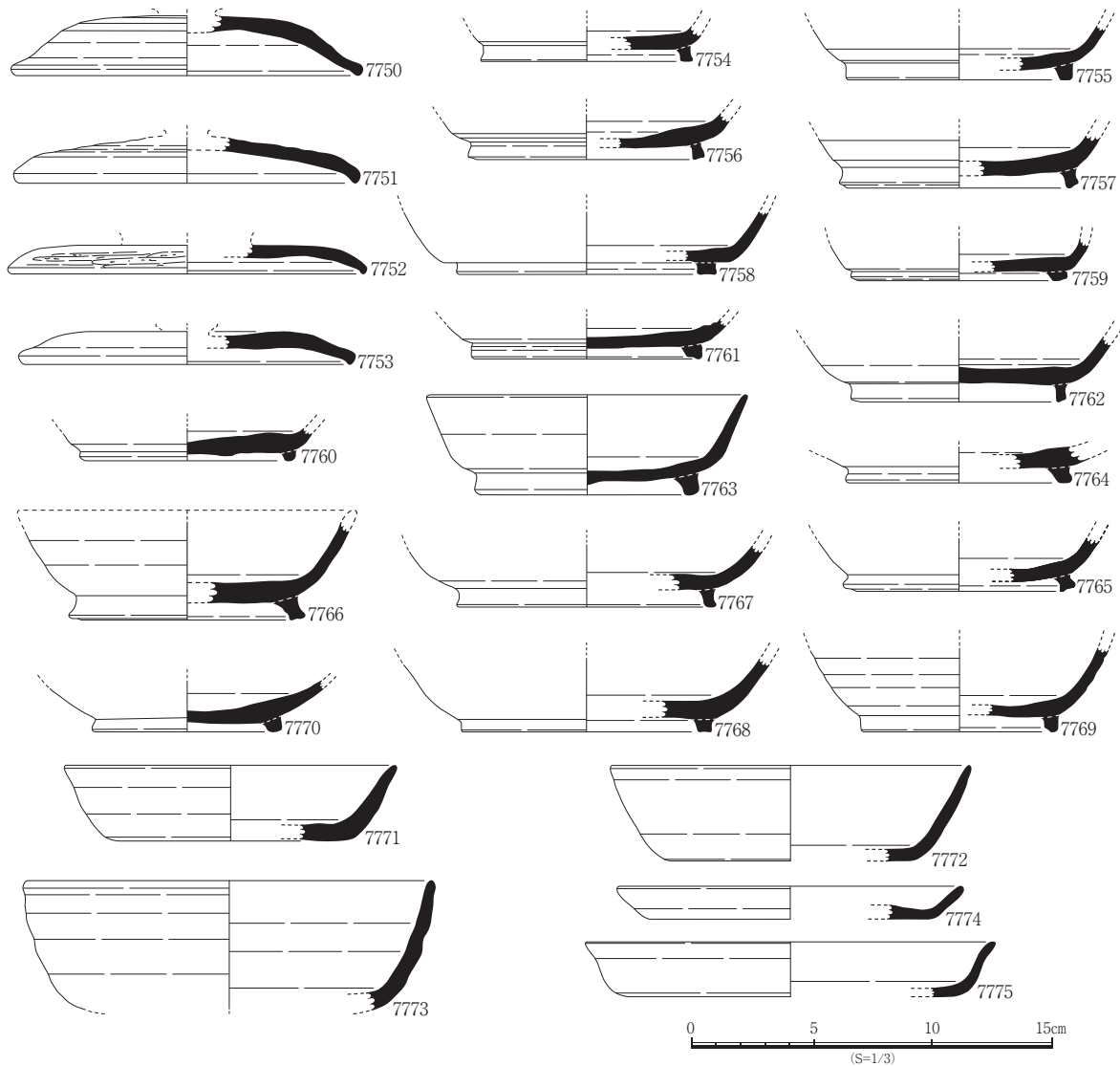


図3-479 ピット出土遺物実測図4

7754～7770は杯身で、輪高台が付き、口縁部が平らな底部から外上方に立ち上がるもの(7754～7768)と口縁部が底部から内湾気味に立ち上がるもの(7769・7770)がある。底部の切り離しは、ナデ消して不明なもの以外は回転ヘラ切りとなる。調整は、基本的に器面に回転ナデ調整を施し、内底面にナデ調整を加え、底部を回転ヘラ切りで切り離し、底部外面端部周辺に回転ヘラ削りを施した上で高台を貼付し、ヨコナデ調整で仕上げる。また、外底面にナデ調整を加えるもの(7759・7760・7761・7768)、回転ヘラ削りが残るもの(7754～7758)がある。この内、7760のナデ調整は縁辺にのみ施す。胎土には、7754が細粒砂から中粒砂を少し、7755・7757・7767が極細粒砂から中粒砂を若干、7756・7758・7759が極細粒砂から中粒砂を少し、7760が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く、7761が極細粒砂から粗粒砂を比較的多く、7762・7764・7765・7768が極細粒砂から粗粒砂を少し、7763は白色細粒砂から粗粒砂を比較的多く、7766が極細粒砂から極粗粒砂を少し、7769が細粒砂から粗粒砂を比較的多く、7770は細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7771～7773は杯で、器高指数が30以下のもの(7771・7772)と30以上のもの(7773)がある。前者は口縁部が平らな底部から外上方に立ち上がるのに対し、後者は口縁部が内湾気味に上がり、椀とも表現できる。口縁端部はいずれも丸く仕上げる。調整は基本的に杯身と同じである。胎土には、7771が極細粒砂から粗粒砂を若干、7772が細粒砂から粗粒砂を比較的多く、7773が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

7774・7775は皿で、7774は小型となり、口縁部は平らな底部から外上方に短く延び、端部は丸い。7775は平らな底部から内湾気味に上がり口縁部で外反し、端部を丸く仕上げる。調整は基本的に杯と同じである。胎土には、7774が細粒砂から粗粒砂、7775が極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7776・7777は高杯で、いずれも杯底部と脚柱部が残り、杯底部は平らで、脚柱部は真下に下り、裾部に向かって開く。7776の脚柱部内面にはしほり目とナデ調整の痕が残る。胎土には、7776が極細粒砂から中粒砂を若干、7777が極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7778～7780は小型の壺である。7778は短頸壺で、口縁部は扁球形の胴部から短く上方を向き、底部外面に回転ヘラ削り、胴部外面中位に凹線が1条巡る。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

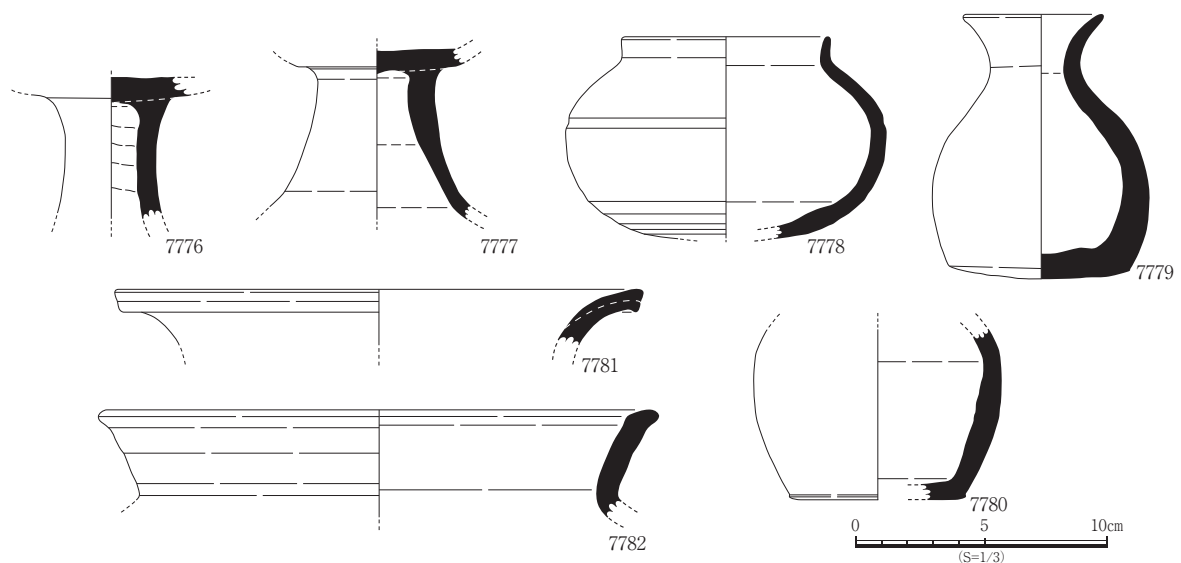


図3-480 ピット出土遺物実測図5

7779・7780は同形態の壺とみられ、胴部最大径は中位より下にあり、口頸部は外反し、口縁端部は丸い。胎土には、7779が白色細粒砂から粗粒砂を比較的多く、7780が細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

7781・7782は甕で、7781は、口縁部が大きく外反し、端部が浅い凹面となる。7782は、口縁部が外傾し、端部を肥厚する。胎土には、7781が細粒砂から粗粒砂を比較的多く、7782が極細粒砂から粗粒砂を若干含む。

土師質土器(図3-481・482 7783～7810)

7783～7794は杯で、成形はA技法とB技法がみられる。底部の切り離しは、A技法では回転ヘラ切り(7783～7786・7789・7792・7794)と回転糸切り(7787・7791)、B技法では回転ヘラ切り(7788)と回転糸切り(7790・7793)がある。まず、A技法で底部の切り離しが回転ヘラ切りとなるものは、口縁部が平らな底部から外上方に上がるもの(7784・7786・7789・7792・7794)と口縁部がやや凸状をなす底部から上外方に上がるもの(7783・7785)があり、A技法で底部の切り離しが回転糸切りとなる7791は、口縁部が凹状を呈する底部から斜め外方に上がる。B技法で底部の切り離しが回転糸切りとなるもの(7790・7793)では、口縁部が平らな底部から内湾気味に上がり、口径に対して底径の割合が7783(63.1%)などに比べ低く(45.8%)、口縁部が開く傾向がみられる。口縁部が残るものはいずれも端部を丸く仕上げしており、内側に折込みの痕跡が残るものはみられなかった。調整は、A技法・B技法とも須恵器の杯と基本的に同じであるが、B技法の中には7790のように体部外面が未調整となるものもみられる。胎

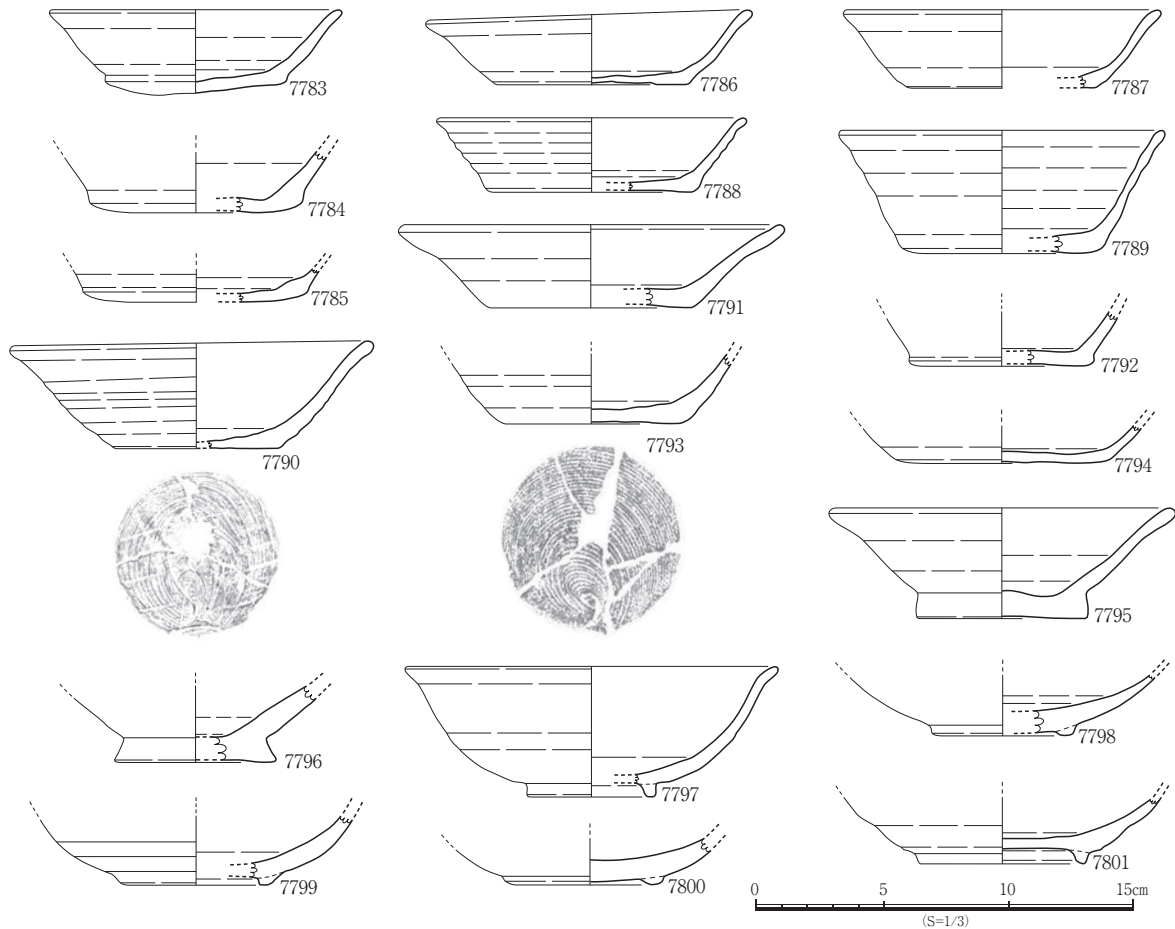


図3-481 ピット出土遺物実測図6

土は、7783・7784・7786・7792・7793が極細粒砂から粗粒砂を少し、7785が細粒砂から粗粒砂を少し、7787・7789が極細粒砂から中粒砂を少し、7788が極細粒砂から粗粒砂を比較的多く、7790・7791が極細粒砂から中粒砂を若干、7794が極細粒砂から粗粒砂を若干含む。

7795・7796はベタ高台の椀である。いずれも成形はA技法で、底部の切り離しは回転糸切りとなる。口縁部は平らな底部から斜め外方に上がる。胎土には、いずれも極細粒砂から中粒砂を少し含む。

7797～7801は輪高台の付く椀である。成形はいずれもA技法で、体部は底部から内湾気味に上がり、口縁部は外傾する。調整は杯と基本的に同じであるが、その多くが外底面にナデ調整を加え、体部外面に回転ヘラ削りを施すものもみられる。胎土には、7797・7799・7801が極細粒砂から中粒砂、7798・7800が極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7802～7810は小皿で、器高指数が13.3～22.8のものがみられる。成形はいずれもA技法とみられ、底部の切り離しには回転ヘラ切りのもの(7802～7804)、静止糸切り(7805)、回転糸切りのもの(7806～7810)があり、回転ヘラ切りのものが回転糸切りのものに比べ、概して口径が広く、器高指数が低くなる。摩耗するものが多いが、調整は基本的に杯と同じとみられる。胎土は基本的に精良で、7802・7804・7806～7808が極細粒砂から中粒砂を若干、7803が細粒砂から極細粒中礫を若干、7805が極細粒砂から粗粒砂を少し、7809が細粒砂から極粗粒砂を少し、7810が極細粒砂から中粒砂を少し含む。

黒色土器(図3-483 7811・7812)

いずれも内黒の椀で、7811は、口縁部が体部から内湾気味に上がり、端部は丸く、内面にはヘラ磨きの痕が残る。7812は、やや凸状の底部に断面逆三角形の高台が付き、内面にはヘラ磨きを施す。外底面はナデ調整を施す。胎土には、7811が極細粒砂から粗粒砂、7812が細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

緑釉陶器(図3-483 7813・7814)

7813は軟質系の椀で、器面には回転ナデ調整の後に全面に緑釉を施釉する。胎土には極細粒砂から細粒砂を若干含む。

7814は硬質系の皿で、器面には回転ナデ調整の後に全面に緑釉を施釉するが、剥落が目立つ。胎土には極細粒砂から中粒砂を

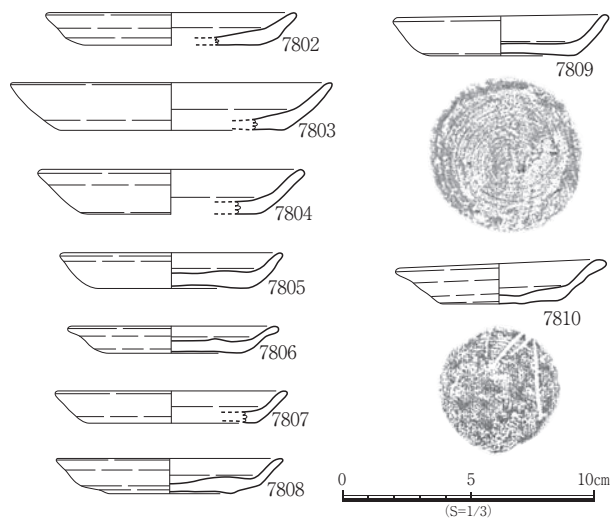


図3-482 ピット出土遺物実測図7

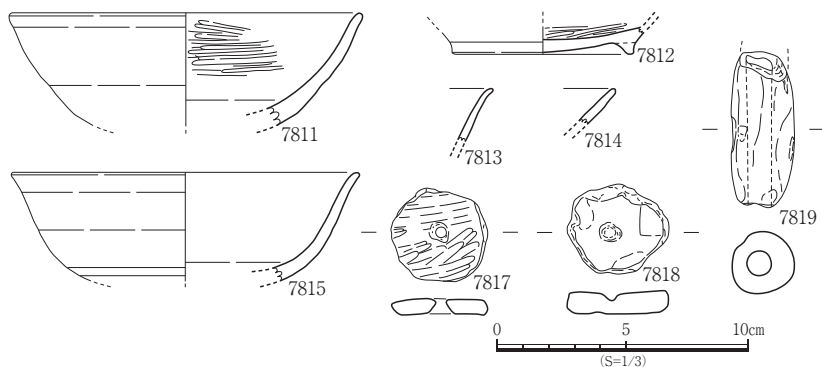


図3-483 ピット出土遺物実測図8

若干含む。

灰釉陶器(図3-483 7815, 図版152 7816)

7815は椀で、体部が内湾気味に上がり、口縁部が小さく外反する。体部下半には回転ヘラ削りを施す。見込を除く内面から体部外面ヘラ削りの上まで灰釉を施釉する。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7816は皿で、全面に灰釉をハケ塗りするが、口唇部は釉が剥落する。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

土製品(図3-483 7817~7819)

7817・7818は土器を転用した紡錘車である。7817は両面から円孔を穿ち、貫通するが、7818は片方

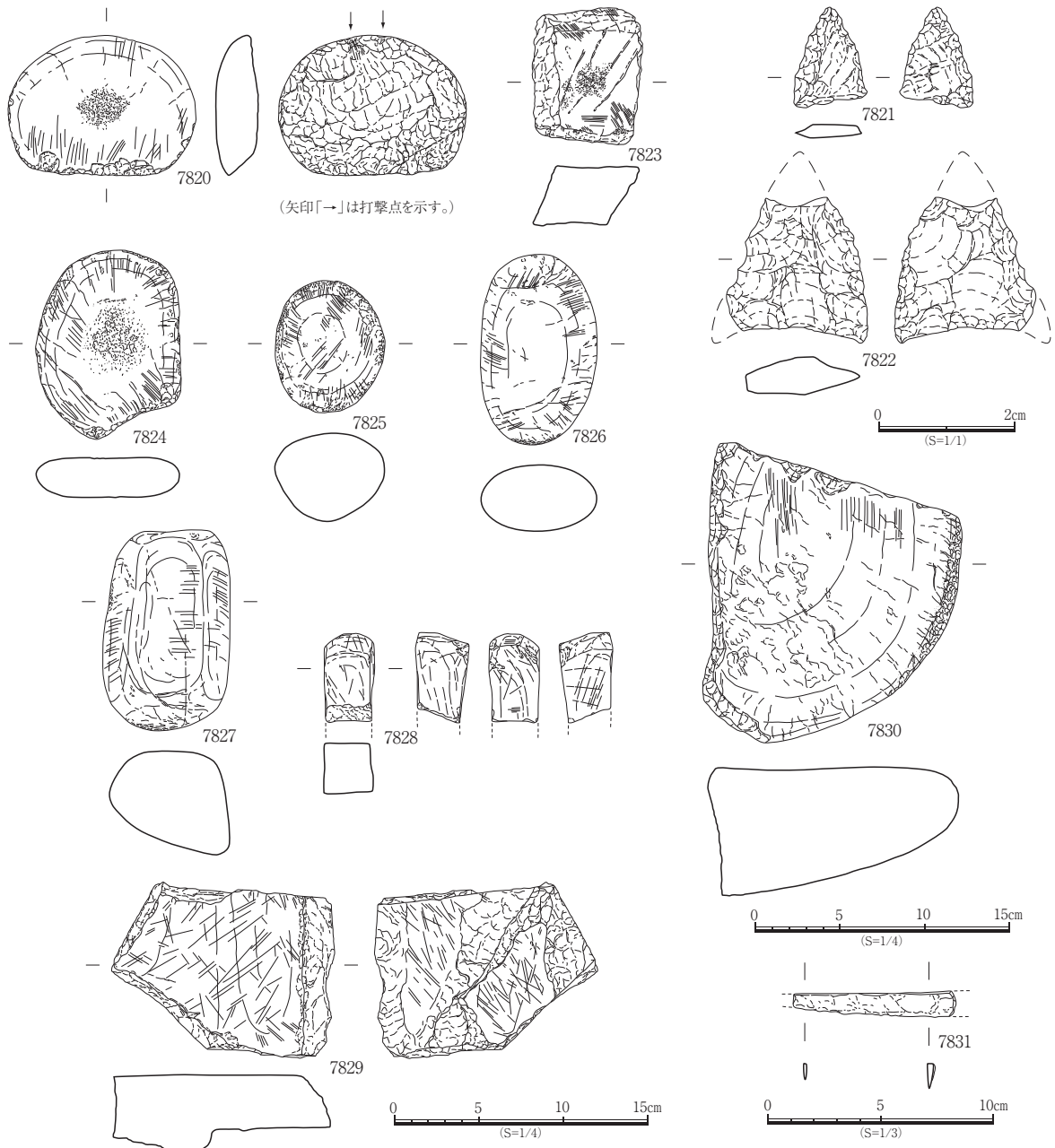


図3-484 ピット出土遺物実測図9

から穿孔するものの未貫通となる。胎土には、7817が細粒砂から粗粒砂を比較的多く、7818が細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7819は円筒形の土錘で、孔径は1.0cmと比較的大きい。表面にはナデ調整を施し、胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

石製品(図3-484 7820~7830)

7820は中型の打製石鎌で、表面は刃部を中心に擦痕が目立ち、欠けもみられ、中央部には弱い敲打痕が残る。裏面は剝離面となり、打撃点が2カ所にみられる。

7821・7822はサヌカイト製の石鎌で、7821は小型の平基、7822は凹基となる。

7823・7824は叩石である。7823は片面に敲打痕と擦痕が残り、側面2面には擦痕が残り、砥石としても使用されたものとみられる。7824は扁平で平滑となり、両面と周縁に敲打痕が残り、縁辺を中心に擦痕が残る。

7825~7827は磨石で、表面は平滑となり、縁辺を中心に擦痕が残る。また、7825の周縁に摩滅痕と弱い敲打痕、7826の端部に弱い敲打痕、7827の端部に敲打痕、側面に摩滅痕が残る。7827には煤の付着もみられる。

7828~7830は砥石である。7828は柱状をなし、各面と小口に使用痕が残る。7829は板状をなし、両面と側面に使用面が残る。7830は河原石を使用したもので、片面に使用痕、残部周縁に粗い敲打痕が残り、使用面は被熱で変色する。

金属製品(図3-484 7831)

刀子で、よく使用されており、刃は摩滅する。

(3) 中世

VII-1区西部から南西部にかけてVI-2区から続く溝に囲まれた屋敷跡を確認した。VII-1区で確認した部分は屋敷跡の東半分にあたる。遺構はこの屋敷跡を中心にVII-1区東部にかけて分布して、掘立柱建物跡34棟、塀・柵跡11列、土坑29基、溝跡4条、ピット1,403個を検出した。

① 掘立柱建物跡

屋敷内で11棟、屋敷外で23棟の計34棟が復元できた。中世的構造である間仕切柱を持つ建物が12棟、下屋構造を持つ建物が1棟含まれる。

SB-7062(図3-485)

VII-1区南西部、屋敷内で検出した桁行4間(7.50m)、梁行2間(3.80m)の東西棟建物跡で、両妻柱から内側に1間目の柱通りに間仕切柱が建つ。棟方向はN-83°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.50~2.30m、梁行(南北)が1.80~2.00mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約28cmを中心に、径20~36cmを測り、柱径は12cm前後とみられ、深さは7~39cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器2点、土師器3点、土師質土器14点がみられたが、図示できるものはなかった。

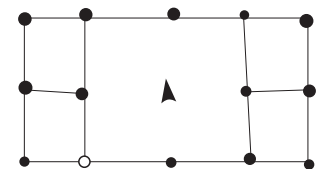


図3-485 SB-7062

SB-7063(図3-486)

VII-1区南西部、屋敷内で検出した桁行3間(4.80m)、梁行2間(3.60m)の東西棟建物跡で、東妻柱から西に1間目の柱通りに間仕切柱が建つ。棟方向はN-83°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.50~

1.80m, 梁行(南北)が1.70~1.90mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で, 径約30cmを中心に, 径24~36cmを測り, 柱径は10cm前後とみられ, 深さは8~33cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には須恵器4点, 土師質土器7点, 鉄製品1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

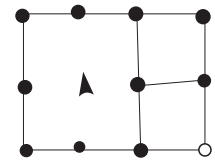


図3-486 SB-7063

SB-7064 (図3-487)

VII-1区南西端部, 屋敷内で検出した桁行2間(3.70m)以上, 梁行2間(3.40m)の東西棟総柱建物跡で, 西側は調査区外に延びるとみられる。棟方向はN-80°-Wを示す。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.70・2.00m, 梁行(南北)が1.70mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で, 径約34cmを中心に, 径26~42cmを測り, 柱径は12cm前後とみられ, 深さは5~36cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器3点, 土師器1点, 須恵器4点, 土師質土器5点がみられたが, 図示できるものはなかった。

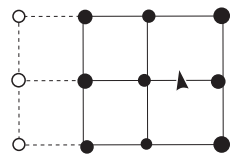


図3-487 SB-7064

SB-7065 (図3-488)

VII-1区南西部, 屋敷内で検出した桁行3間(4.50m), 梁行2間(2.90m)の東西棟建物跡で, 東妻柱真中の柱穴はSK-7106に切られ未確認である。棟方向はN-81°-Eを示す。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.30~1.60m, 梁行(南北)が1.30・1.60mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で, 径約26cmを中心に, 径18~33cmを測り, 柱径は10cm前後とみられ, 深さは17~33cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器7点, 須恵器5点, 土師質土器4点がみられたが, 図示できるものはなかった。

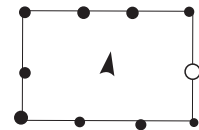


図3-488 SB-7065

SB-7066 (図3-489)

VII-1区南西部, 屋敷内で検出した桁行3間(5.40m), 梁行2間(3.60m)の東西棟建物跡で, 西妻柱から東に1間目の柱通りに間仕切柱が建つ。棟方向はN-90°-Eを示す。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.60・1.90m, 梁行(南北)が1.75~1.85mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で, 径約41cmを中心に, 径27~54cmを測り, 柱径は12cm前後とみられ, 深さは13~47cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器10点, 土師器7点, 須恵器3点, 土師質土器80点, 石製品1点がみられ, 土師質土器3点(7832~7834)が図示できた。

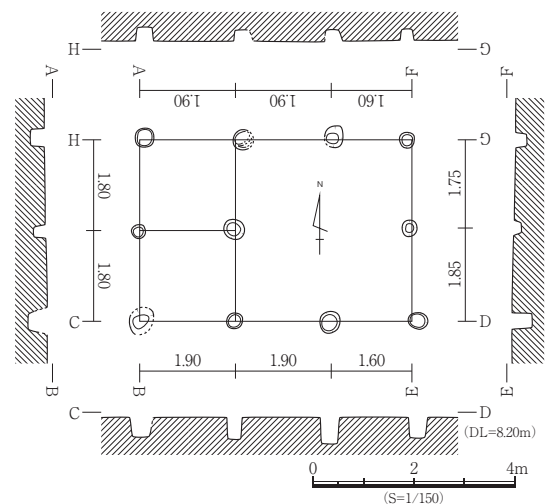


図3-489 SB-7066

出土遺物

土師質土器(図3-490 7832~7834)

いずれも同形態の杯で, 成形はいずれもB技法となる。底部の切り離しは回転糸切りとなり, 体部は斜め外上方に上がり, そのまま口縁部に至る。端部は丸い。口径に対する底径の比率は31.2~

34.5%である。回転ナデ調整は外面から体部内面にかけて施されるが、内底面は未調整でロクロ目が明瞭に残

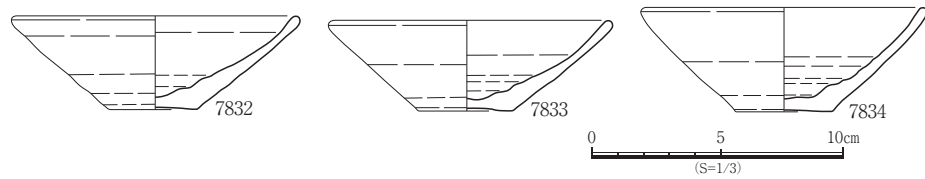


図3-490 SB-7066出土遺物実測図

る。いずれも胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

SB-7067 (図3-491)

Ⅶ-1区南西部、屋敷内で検出した桁行5間(8.60m)、梁行1間(2.80m)の細長い東西棟建物跡である。棟方向はN-85°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.30~2.10m、梁行(南北)が2.80mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約37cmを中心に、径24~50cmを測り、柱径は10cm前後とみられ、深さは13~42cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器3点、土師器4点、須恵器5点、土師質土器13点、白磁1点、石製品2点がみられたが、図示できるものはなかった。

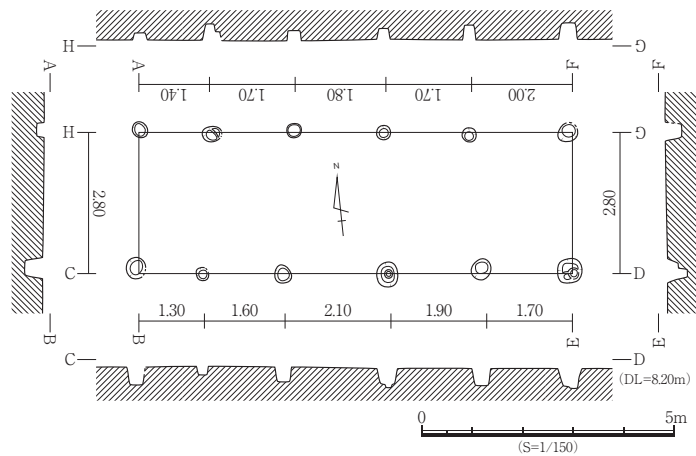


図3-491 SB-7067

SB-7068 (図3-492)

Ⅶ-1区南西部、屋敷内で検出した桁行4間(8.10m)、梁行2間(2.90m)の細長い東西棟建物跡である。棟方向はN-90°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.70~2.25m、梁行(南北)が1.40・1.50mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約32cmを中心に、径22~42cmを測り、柱径は10cm前後とみられ、深さは6~33cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器3点、土師質土器8点がみられたが、図示できるものはなかった。

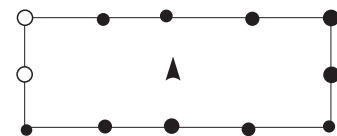


図3-492 SB-7068

SB-7069 (図3-493)

Ⅶ-1区南西部、屋敷内で検出した桁行4間(7.10m)、梁行2間(3.50m)の東西棟建物跡で、西妻柱から東に1間目の柱通りに間仕切柱が建つ。棟方向はN-88°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.40~2.00m、梁行(南北)が1.60・1.90mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約30cmを中心に、径20~40cmを測り、柱径は12cm前後とみられ、深さは9~33cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器4点、土師器2点、須恵器2点、土師質土器11点、瀬戸焼2点、石製品1点がみられ、瀬戸焼1点(7835)が図示できた。

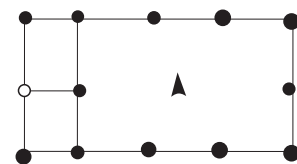


図3-493 SB-7069

出土遺物

瀬戸焼(図3-501 7835)

天目茶碗で、底部は削り出し高台となり、残部外面は露胎で、内面には鉄釉を施釉し、胎土には黒色粒を僅かに含む。

SB-7070(図3-494)

VII-1区南西部、屋敷内で検出した桁行3間(4.50m)、梁行2間(3.20m)の東西棟建物跡である。棟方向はN-88°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.30~1.80m、梁行(南北)が1.60mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約29cmを中心に、径22~36cmを測り、柱径は12cm前後とみられ、深さは11~45cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器10点、土師器9点、須恵器1点、土師質土器11点がみられたが、図示できるものはなかった。

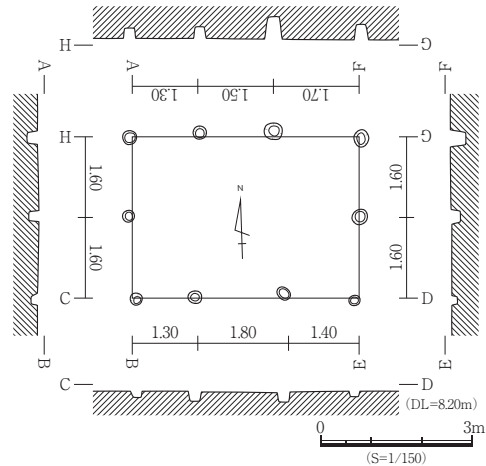


図3-494 SB-7070

SB-7071(図3-495)

VII-1区南西部、屋敷内で検出した桁行3間(5.10m)、梁行2間(3.30m)の東西棟建物跡で、東妻柱真中の柱穴は未確認である。棟方向はN-88°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.50・1.80m、梁行(南北)が1.60・1.70mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約29cmを中心に、径22~36cmを測り、柱径は12cm前後とみられ、深さは12~40cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器12点、土師器9点、須恵器1点、土師質土器18点がみられたが、図示できるものはなかった。

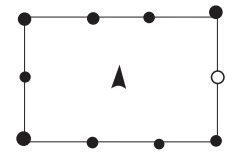


図3-495 SB-7071

SB-7072(図3-496)

VII-1区南西部、屋敷内で検出した桁行4間(6.90~7.00m)、梁行2間(3.10m)のやや歪みのある東西棟建物跡で、西妻柱真中の柱穴は未確認である。棟方向は概ねN-87°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.60~1.90m、梁行(南北)が1.40・1.70mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約33cmを中心に、径17~48cmを測り、柱径は12cm前後とみられ、深さは6~46cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器7点、土師器1点、須恵器2点、土師質土器9点、サヌカイト片1点(2.1g)がみられたが、図示できるものはなかった。

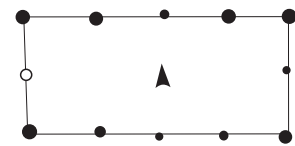


図3-496 SB-7072

SB-7073(図3-497)

VII-1区西部、屋敷内で検出した桁行4間(5.40~5.50m)、梁行2間(2.80~3.00m)のやや歪みのある東西棟建物跡で、北側柱西から1間目の柱穴は未確認である。棟方向はN-82~84°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.00~1.65m、梁行(南北)が1.30・1.50mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約28cmを中心に、径16~40cmを測り、柱径は12cm前後とみられ、深さは7~40cmである。柱

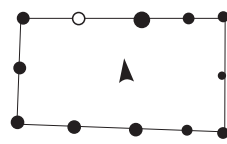


図3-497 SB-7073

穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には須恵器2点, 土師質土器27点がみられ, 土師質土器1点(7836)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-501 7836)

杯で, 成形はB技法となり, 口縁部は体部から内湾気味に上がり, 端部は丸い。内底面以外に回転ナデ調整を施し, 内底面にはロクロ目が明瞭に残る。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

SB-7074(図3-498)

VII-1区西部, 屋敷を区画する溝跡(SD-7009)と重複した形で検出した桁行3間(5.00~5.50m), 梁行2間(4.20~4.40m)の歪みのある南北棟建物跡で, 南妻柱真中の柱穴は未確認である。棟方向はN-1~3°-Eを示す。柱間寸法は, 桁行(南北)が1.50~2.05m, 梁行(東西)が2.00・2.20mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で, 径約44cmを中心に, 径24~64cmを測り, 柱径は12cm前後とみられ, 深さは12~62cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器28点, 土師器7点, 須恵器7点, 土師質土器44点がみられ, 土師質土器2点(7837・7838)が図示できた。

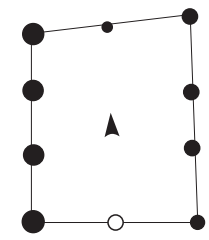


図3-498 SB-7074

出土遺物

土師質土器(図3-501 7837・7838)

いずれも杯で, 成形はB技法となり, 口縁部は体部から内湾気味に上がり, 端部を細く仕上げる。器面にはナデ調整を施し, 底部の切り離しは回転糸切りとなる。いずれも胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

SB-7075(図3-499)

VII-1区西部, 屋敷を区画する溝跡(SD-7009)およびSB-7074と重複した形で検出した桁行3間(6.40~6.50m), 梁行2間(3.80m)のやや歪みのある南北棟建物跡で, 東側柱隅柱を除く2個のピットは未確認である。棟方向は概ねN-10°-Eを示す。柱間寸法は, 桁行(南北)が1.90~2.30m, 梁行(東西)が1.70~2.10mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で, 径約30cmを中心に, 径23~36cmを測り, 柱径は12cm前後とみられ, 深さは10~49cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器1点, 土師器7点, 須恵器1点, 土師質土器8点, 製塩土器1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

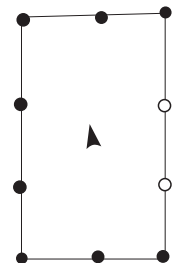


図3-499 SB-7075

SB-7076(図3-500)

VII-1区西部, 屋敷を区画する溝跡(SD-7009)およびSB-7074・7075と重複した形で検出した桁行3間(5.20~5.40m), 梁行2間(3.80m)のやや歪みのある東西棟建物跡である。棟方向は概ねN-82°-Wを示す。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.50~1.90m, 梁行(南北)が1.70~2.10mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で, 径約32cmを中心に, 径22~42cmを測り, 柱径は12cm前後とみられ, 深さは13~49cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器11点, 土師器3点, 須恵器3点, 土師質土器41点がみられ, 土師質土器1点(7839)が図示できた。

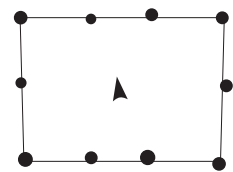


図3-500 SB-7076

出土遺物

土師質土器(図3-501 7839)

椀で、成形はA技法となり、底部外面には高さ0.5cmの高台が付く。体部は斜め上方に延びそのまま口縁部に至る。器面は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整を加え、体部下端にヘラ磨き、外底面はナデ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

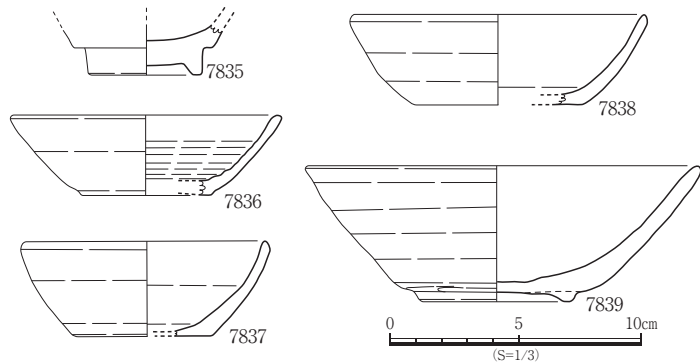


図3-501 SB-7069・7073・7074・7076出土遺物実測図

SB-7077(図3-502)

VII-1区南西部、屋敷を区画する溝跡(SD-7009)と重複した形で検出した桁行3間(5.70m)、梁行2間(3.50~3.60m)のやや歪みのある南北棟建物跡である。棟方向はN-12~13°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.60~2.30m、梁行(東西)が1.70~1.85mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約29cmを中心に、径17~41cmを測り、柱径は10cm前後とみられ、深さは7~28cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器5点、須恵器2点、土師質土器18点、黒色土器・瓦器各1点がみられたが、図示できるものはなかった。

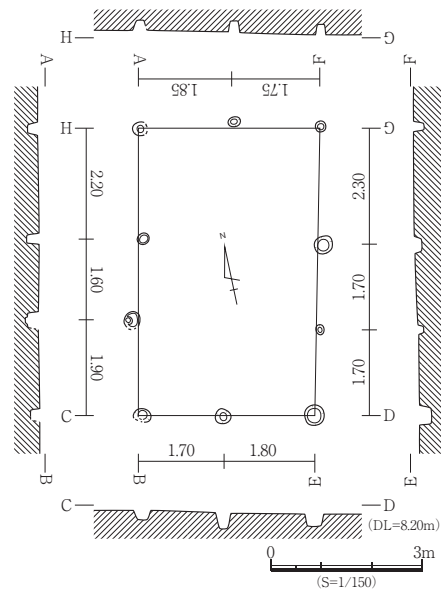


図3-502 SB-7077

SB-7078(図3-503)

VII-1区南部、屋敷の東側で検出した桁行2間(3.70m)、梁行1間(2.80m)の東西棟建物跡である。棟方向はN-87°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.75~1.95m、梁行(南北)が2.80mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約30cmを中心に、径23~36cmを測り、柱径は10cm前後とみられ、深さは16~45cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器6点、須恵器2点、土師質土器12点がみられたが、図示できるものはなかった。

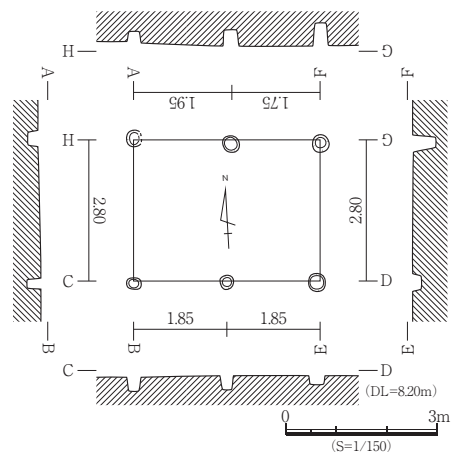


図3-503 SB-7078

SB-7079(図3-504)

VII-1区南部、屋敷の東側、SB-7078と重複した形で検出した桁行5間(7.90~8.10m)、梁行2間(3.80~4.00m)の歪みのある東西棟建物跡で、東妻柱から西に1間目の柱通りに間仕切柱が建つ。棟方向はN-83~85°-Wを示す。柱間寸法は、

桁行(東西)が1.20~1.90m、梁行(南北)が1.65~2.25mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約33cmを中心に、径24~42cmを測り、柱径は12cm前後とみられ、深さは12~35cmである。柱穴の埋土は

地山のブロックを含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器26点, 土師器10点, 須恵器9点, 土師質土器116点, 瓦器1点, サヌカイト片1点(0.8g)がみられたが, 図示できるものはなかった。

SB-7080 (図3-505)

VII-1区南部, SB-7079の東側で検出した桁行3間(4.80m), 梁行2間(4.10m)の東西棟建物跡で, 西妻柱から東に1間目の柱通りに間仕切柱が建つ。棟方向はN-87°-Wを示す。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.60m等間隔, 梁行(南北)が1.80~2.30mを測る。

柱穴の平面形はほぼ円形で, 径約33cmを中心に, 径20~45cmを測り, 柱径は12cm前後とみられ, 深さは13~34cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器12点, 土師器3点, 須恵器3点, 土師質土器31点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SB-7081 (図3-506)

VII-1区南部, SB-7080の北側で検出した桁行3間(5.60m), 梁行1間(3.00m)の東西棟建物跡である。棟方向はN-89°-Eを示す。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.40~2.10m, 梁行(南北)が3.00mを測る。柱穴の平面形は楕円形を呈するものもみられるが, 基本的に円形で, 径約37cmを中心に, 径30~44cmを測り, 柱径は12cm前後とみられ, 深さは28~35cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器2点, 土師器1点, 須恵器1点, 土師質土器3点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SB-7082 (図3-507)

VII-1区南部, 屋敷の東側, SB-7079の北側で検出した桁行4間(6.80m), 梁行2間(3.80m)の東西棟建物跡で, 両妻柱から内側に1間目の柱通りに間仕切柱が建つ。また, 西妻柱真中の柱穴は未検出である。棟方向はN-89°-Eを示す。柱間寸法は, 桁行(東西)が1.20~1.95m, 梁行(南北)が1.80・2.00mを測る。

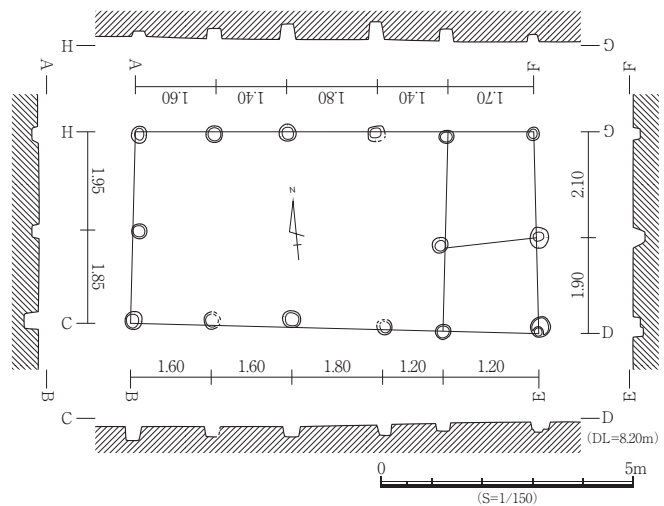


図3-504 SB-7079

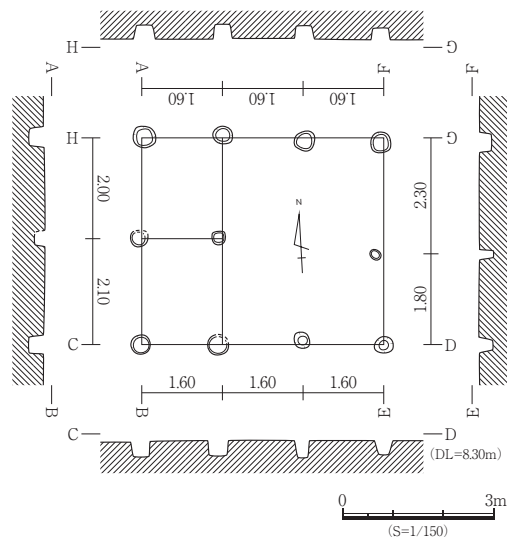


図3-505 SB-7080

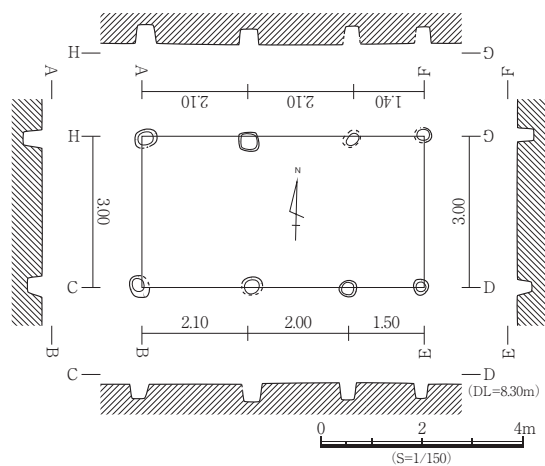


図3-506 SB-7081

柱穴の平面形はほぼ円形で、径約38cmを中心に、径30～46cmを測り、柱径は12cm前後とみられ、深さは10～50cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器19点、土師器20点、須恵器7点、製塩土器1点、土師質土器79点、瓦器1点がみられ、土師器1点(7840)と瓦器1点(7841)が図示できた。

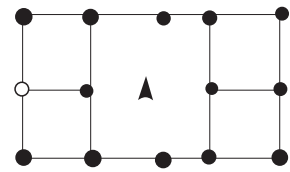


図3-507 SB-7082

出土遺物

土師器(図3-512 7840)

皿で、成形は手づくねで、体部には指頭圧痕が残る。口縁部は斜め上方を向き、体部より器壁が厚く、端部内側には折込みの痕跡が凹線となって残る。口縁部にはヨコナデ調整、内底面と外底面にはナデ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

瓦器(図3-512 7841)

椀で、底部外面には断面逆三角形の高さ0.5cmの高台が付く。胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

SB-7083(図3-508)

VII-1区南部、屋敷の東側、SB-7082の北側で検出した桁行4間(6.80～7.20m)、梁行2間(3.40～3.50m)の東西棟建物跡で、東妻柱から西側に1間目の柱通りに間仕切柱が建つ。また、西妻柱真中の柱穴と北西隅柱から東に1間目と2間目の柱穴および南西隅柱から東に1間目の柱穴の計4個は未検出である。棟方向はN-80～81°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)

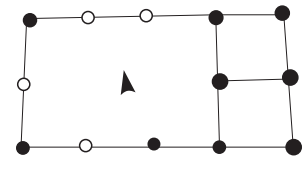


図3-508 SB-7083

が1.75～1.95m、梁行(南北)が1.70・1.80mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約33cmを中心に、径27～39cmを測り、柱径は12cm前後とみられ、深さは15～60cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器9点、土師器4点、須恵器2点、土師質土器27点、黒色土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-7084(図3-509)

VII-1区中央部南寄り、屋敷の東側、SB-7083の北東側で検出した桁行3間(4.10m)、梁行2間(3.10m)の東西棟建物跡で、西妻柱から東側に1間目の柱通りに間仕切柱が建つ。棟方向はN-88°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.20～1.50m、梁行(南北)が1.35～1.75mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約30cmを中心に、径21～40cmを測り、柱径は12cm前後とみられ、深さは12～39cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器13点、土師器4点、須恵器8点、土師質土器63点、製塩土器・瓦質土器各1点、サヌカイト片1点(0.9g)がみられたが、図示できるものはなかった。

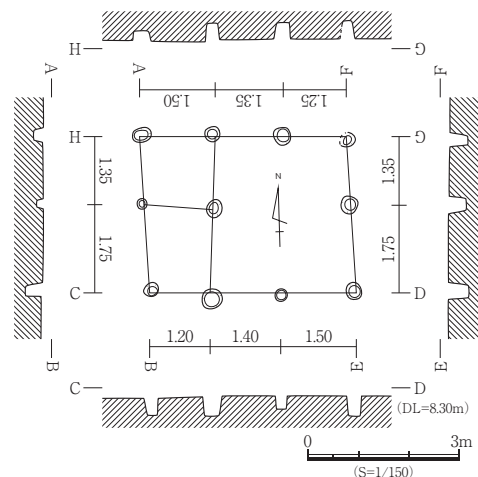


図3-509 SB-7084

SB-7085(図3-510)

VII-1区中央部、SB-7084の北側で検出した桁行2間(4.20～4.30m)、梁行2間(3.70～3.80m)の歪みの

ある東西棟総柱建物跡である。棟方向はN-83~85°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.90~2.40m, 梁行(南北)が1.70~2.10mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約28cmを中心に、径22~34cmを測り、柱径は12cm前後とみられ、深さは13~43cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器10点, 土師器1点, 須恵器7点, 土師質土器33点, 瓦質土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-7086 (図3-511)

VII-1区中央部, SB-7085と重複した形で検出した桁行3間(5.90m), 梁行2間(4.00m)の東西棟建物跡で、西妻柱から東に1間目の柱通りに間仕切柱が建つ。また、西妻柱北側と真中の柱穴および北東隅柱の柱穴の計3個は未検出である。棟方向はN-87°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.70~2.10m, 梁行(南北)が1.90~2.10mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約35cmを中心に、径21~48cmを測り、柱径は12cm前後とみられ、深さは20~55cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器3点, 土師器3点, 須恵器3点, 土師質土器21点, 瓦質土器1点がみられ、土師質土器1点(7842)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-512 7842)

杯で、成形はB技法となり、底部の切り離しは回転糸切りによる。器面には回転ナデ調整を施すが、内面にはロクロ目が残る。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

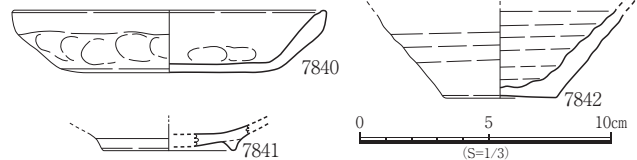


図3-512 SB-7082・7086出土遺物実測図

SB-7087 (図3-513)

VII-1区中央部, 屋敷の東側, SB-7086の西側で検出した桁行3間(6.40~6.60m), 梁行2間(4.40~4.70m)の歪みのある東西棟建物跡で、西妻柱から東に1間目の柱通りに間仕切柱が建つ。また、西妻柱真中の柱穴は未検出である。棟方向はN-76~79°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が2.10~2.30m, 梁行(南北)が2.20~2.40mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約43cmを中心に、径34~52cmを測り、柱径は15cm前後とみられ、深さは14~58cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器10点, 土師器13点, 須恵器10点, 土師質土器130点, 黒色土器1点, 灰釉陶器1点, 土製品2点, 石製品2点がみられ、須恵器1点(7843), 土師質土器2点(7844・7845), 灰釉陶器1点(7846), 土製品2点(7847・7848), 石製品2点(7849・7850)が図示できた。

出土遺物

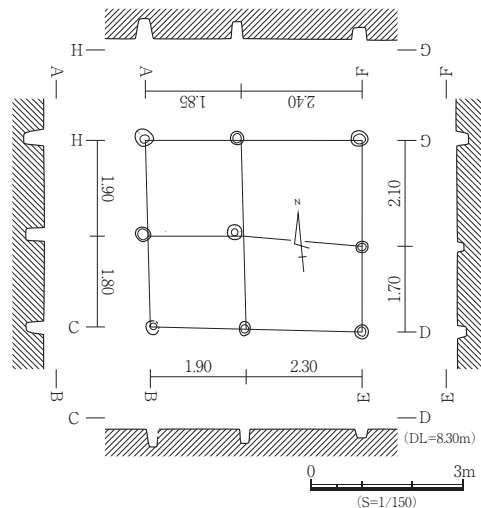


図3-510 SB-7085

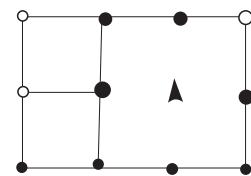


図3-511 SB-7086

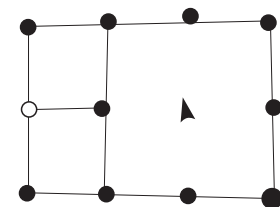


図3-513 SB-7087

須恵器(図3-514 7843)
甕で、口縁部は外反し、
端部を上方に拡張する。胎
土には、細粒砂から極粗粒
砂を少し含む。

土師質土器(図3-514
7844・7845)

7844は杯で、成形はA技
法となり、底部の切り離し
は回転ヘラ切りで、ナデ調
整を加える。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7845はバタ高台の椀で、成形はA技法となる。底部の切り離しは回転糸切りで、ナデ調整を加える。胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

灰釉陶器(図3-514 7846)

皿で、底部外面には高さ0.7cmの高台が付き、周辺にヨコナデ調整を施す。器面は回転ナデ調整で、体部内面から体部外面にかけて灰釉をハケ塗りで施釉する。見込には重ね焼きの痕が残る。胎土には極細粒砂から中粒砂を少し含む。

土製品(図3-514 7847・7848)

いずれも紡錘形の土錘で、紐孔の径は、7847が0.5cm、7848が0.4cmを測る。胎土には、7847が極細粒砂から粗粒砂を少し、7848が極細粒砂から中粒砂を若干含む。

石製品(図3-515 7849・7850)

7849は叩石で、表面は平滑となり、縁辺を中心に擦痕、両面中央と周縁2カ所の敲打痕が残る。また、表面には煤が僅かに付着する。

7850は砥石で、上下2面を主に使用し、側面8カ所にも使用痕が残る。

SB-7088(図3-516)

VII-1区北部で検出した桁行3間(4.10m)、梁行1間(2.70m)の東西棟建物跡である。棟方向はN-88°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.00~2.10m、梁行(南北)が2.70mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約22cmを中心に、径17~26cmを測り、柱径は10cm前後とみられ、深さは11~19cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には南側柱東から1間目の柱穴から出土した弥生土器1点(7851)があり、図示できた。

出土遺物

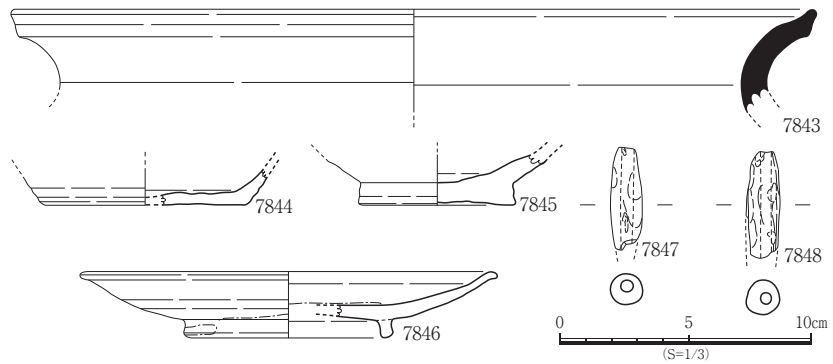


図3-514 SB-7087出土遺物実測図1

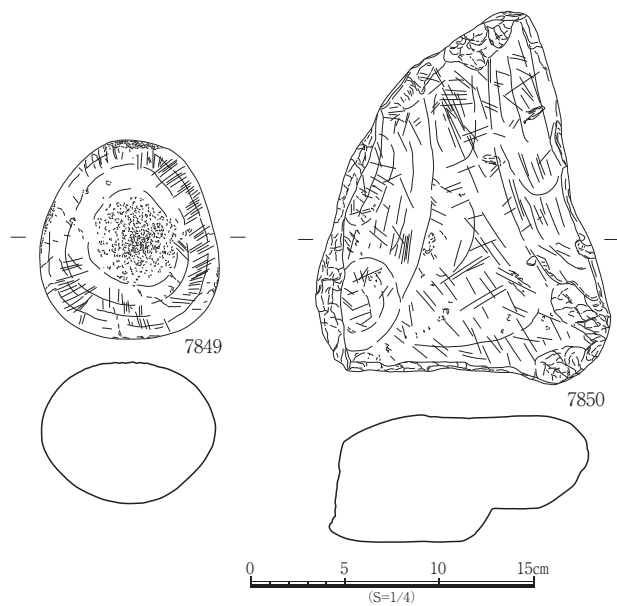


図3-515 SB-7087出土遺物実測図2

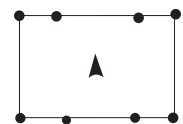


図3-516 SB-7088

弥生土器(図3-523 7851)

蓋で、天井部は平らとなって、真下に下り、口縁部で開き、貼付口縁となり、口縁部外面には指頭圧痕が残る。胎土には細粒砂から極細粒中礫を比較的多く含む。

SB-7089 (図3-517)

Ⅶ-1区中央部北寄り、SB-7090の西側で検出した桁行4間(5.30～5.40m)、梁行2間(2.90m)のやや歪みのある東西棟建物跡で、東妻柱真中の柱穴は未確認である。棟方向はN-80°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.15～2.20m、梁行(南北)が1.45m等間隔である。柱穴の平面形は楕円形を呈するものも散見されるが基本的には円形で、径約38cmを中心に、径26～49cmを測り、柱径は15cm前後とみられ、深さは10～37cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器16点、土師質土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

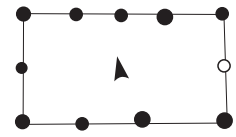


図3-517 SB-7089

SB-7090 (図3-518)

Ⅶ-1区中央部北寄り、SB-7089の東側で検出した桁行3間(4.80m)、梁行1間(2.60～2.80m)のやや歪みのある東西棟建物跡で、北側柱西から1間目の柱穴は未確認である。棟方向はN-71～73°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.40～1.80m、梁行(南北)が2.60・2.80mを測る。柱穴の平面形は楕円形を呈するものも散見されるが基本的には円形で、径約36cmを中心に、径30～42cmを測り、柱径は12cm前後とみられ、深さは21～33cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。遺物は出土しなかった。

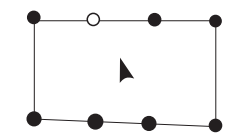


図3-518 SB-7090

SB-7091 (図3-519)

Ⅶ-1区中央部、SB-7086の東側で検出した桁行4間(6.10～6.20m)、梁行1間(3.00m)の東西棟建物跡で、南東隅柱の柱穴は未確認である。棟方向はN-83°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.30～1.80m、梁行(南北)が3.00mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約29cmを中心に、径20～38cmを測り、柱径は12cm前後とみられ、深さは15～51cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器6点、土師器2点、土師質土器2点、製塩土器1点がみられたが、図示できるものはなかった。

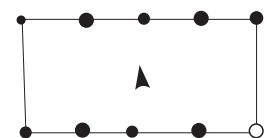


図3-519 SB-7091

SB-7092 (図3-520)

Ⅶ-1区南東部で検出した桁行3間(5.80～5.90m)、梁行2間(4.00～4.20m)の歪みのある東西棟建物跡で、西妻側の柱穴と北西隅柱から東へ1間目の柱穴は未調査部分にあるとみられ未確認である。棟方向はN-70～72°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.90～2.05m、梁行(南北)が2.00・2.10mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約37cmを中心に、径30～44cmを測り、柱径は15cm前後とみられ、深さは15～49cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器2点、土師器7点、須恵器2点、土師質土器20点がみられたが、図示できるものはなかった。

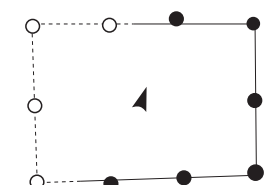


図3-520 SB-7092

SB-7093 (図3-521)

Ⅶ-2区南西部で検出した桁行2間(3.90m)、梁行2間(3.90m)の身舎に一面下屋付きの東西3間

(5.10m), 南北2間(3.90m)の東西棟建物跡である。棟方向はN-86°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が1.20~2.00m, 梁行(南北)が1.75~2.15mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約45cmを中心に、径27~67cmを測り、柱径は15cm前後とみられ、深さは9~37cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器13点, 土師器5点, 須恵器2点, 土師質土器49点, 灰釉陶器1点がみられ、灰釉陶器1点(7852)が図示できた。

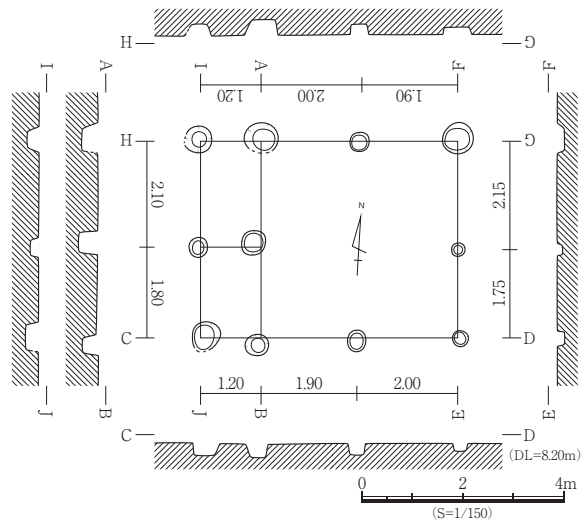


図3-521 SB-7093

出土遺物

灰釉陶器(図3-523 7852)

碗の口縁部とみられ、器面には灰釉を施釉する。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

SB-7094 (図3-522)

VII-1区東部で検出した桁行2間(4.50~4.70m), 梁行1間(3.60~3.70m)の歪みのある東西棟建物跡である。棟方向はN-79~80°-Wを示す。柱間寸法は、桁行(東西)が2.20~2.45m, 梁行(南北)が3.60~3.70mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約33cmを中心に、径23~42cmを測り、柱径は12cm前後とみられ、深さは10~24cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器6点, 土師器5点, 須恵器4点, 土師質土器53点, 緑釉陶器1点, 製塩土器2点がみられ、緑釉陶器1点(7853)が図示できた。

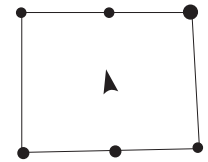


図3-522 SB-7094

出土遺物

緑釉陶器(図3-523 7853)

碗の口縁部とみられ、器面には緑釉を施釉するが、口唇部に剝落がみられる。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

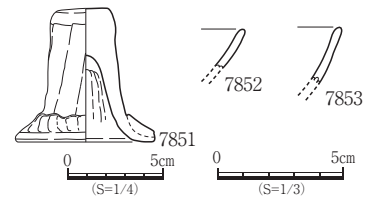


図3-523 SB-7088・7093・7094
出土遺物実測図

SB-7095 (図3-524)

VII-5区東部で検出した桁行3間(4.50m), 梁行2間(3.70~3.90m)のやや歪みのある南北棟建物跡で、北東隅柱の柱穴と南妻柱真中の柱穴は未確認である。棟方向はN-13~16°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.35~1.70m, 梁行(東西)が1.90~2.00mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約27cmを中心に、径23~30cmを測り、柱径は10cm前後とみられ、深さは7~30cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器1点がみられたが、図示できなかった。

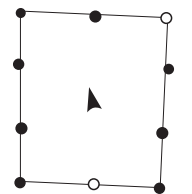


図3-524 SB-7095

② 塀・柵列跡

屋敷内で2列, 屋敷外で9列の計11列を復元した。建物跡に関連するとみられるものがある一方で、単独で確認されているものもあり、そのあり方には種々ある。

SA-7011 (図3-525)

Ⅶ-1区南西部, 屋敷内で検出したL字形の堀跡(東西方向: N-89°-E)で, SB-7070・7071の北西側に位置し, 関連性が考慮される。4間分(7.50m)を検出し, 柱間寸法は1.80~2.00mである。柱穴の平面形はほぼ円形で, 径約25cmを中心に, 径21~28cmを測り, 柱径は10cm前後とみられ, 深さは11~30cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には須恵器1点, 土師質土器7点がみられたが, 図示できるものはなかった。

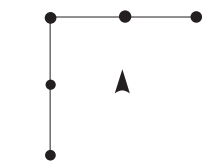


図3-525 SA-7011

SA-7012 (図3-526)

Ⅶ-1区南西部, 屋敷内で検出した東西堀跡(N-81°-W)で, SB-7069の北側に位置し, 関連性が考慮される。3間分(6.50m)を検出し, 柱間寸法は1.80~2.70mである。柱穴の平面形はほぼ円形で, 径約31cmを中心に, 径27~34cmを測り, 柱径は10cm前後とみられ, 深さは11~16cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器1点, 土師質土器6点がみられたが, 図示できるものはなかった。



図3-526 SA-7012

SA-7013 (図3-527)

Ⅶ-1区南部, 屋敷外で検出した南北堀跡(N-9°-E)で, SB-7081の東側に位置し, SA-7014に切られる。3間分(4.10m)を検出し, 柱間寸法は1.30・1.40mである。柱穴の平面形はほぼ円形で, 径約36cmを中心に, 径28~44cmを測り, 柱径は10cm前後とみられ, 深さは20~56cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器1点, 土師器10点がみられたが, 図示できるものはなかった。

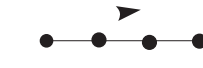


図3-527 SA-7013

SA-7014 (図3-528)

Ⅶ-1区南部, 屋敷外で検出した南北堀跡(N-6°-E)で, SA-7013を掘り込む。4間分(5.40m)を検出し, 柱間寸法は1.20~1.70mである。柱穴の平面形はほぼ円形で, 径約35cmを中心に, 径29~40cmを測り, 柱径は10cm前後とみられ, 深さは14~39cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器3点, 土師器9点がみられたが, 図示できるものはなかった。

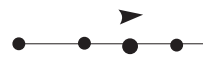


図3-528 SA-7014

SA-7015 (図3-529)

Ⅶ-1区中央部, 屋敷外で検出した南北堀跡(N-22°-E)で, SB-7086と重複する。3間分(5.90m)を検出し, 柱間寸法は1.80~2.10mである。柱穴の平面形は楕円形を呈するものもみられるが基本的に円形で, 径約38cmを中心に, 径27~48cmを測り, 柱径は12cm前後とみられ, 深さは17~36cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器1点, 須恵器1点, 土師質土器7点がみられたが, 図示できるものはなかった。

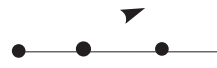


図3-529 SA-7015

SA-7016 (図3-530)

Ⅶ-1区中央部, 屋敷外で検出した東西堀跡(N-78°-W)で, SB-7086と重複する。4間分(6.50m)を検出し, 柱間寸法は1.10~2.50mである。柱穴の平面形はほぼ円形で, 径約36cmを中心に, 径30~41cmを測り, 柱径は10cm前



図3-530 SA-7016

後とみられ、深さは13～29cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器2点、土師質土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

SA-7017 (図3-531)

VII-1区中央部北寄り、屋敷外で検出した東西堀跡(N-74°-W)で、SB-7089・7090と重複する。3間分(4.80m)を検出し、柱間寸法は1.55・1.70mである。柱穴

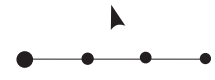


図3-531 SA-7017

の平面形はほぼ円形で、径約28cmを中心に、径27～56cmを測り、柱径は10cm前後とみられ、深さは11～19cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器5点、須恵器1点、土師質土器6点がみられたが、図示できるものはなかった。

SA-7018 (図3-532)

VII-1区北部、SA-7017の北側で検出した東西堀跡(N-73°-W)である。3間分(5.20m)を検出し、柱間寸法は1.40～2.30mである。柱穴の平面形はほぼ円形で、

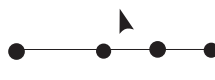


図3-532 SA-7018

径約40cmを中心に、径31～48cmを測り、柱径は15cm前後とみられ、深さは25～36cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/3)シルトであった。出土遺物には弥生土器8点、土師器2点、土師質土器5点がみられたが、図示できるものはなかった。

SA-7019 (図3-533)

VII-1区北端部、北壁際で検出した東西堀跡(N-74°-W)である。3間分(6.40m)を検出し、柱間寸法は1.85～2.65mである。柱穴の平面形はほぼ円形で、

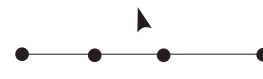


図3-533 SA-7019

径約33cmを中心に、径33～34cmを測り、柱径は12cm前後とみられ、深さは10～36cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。遺物は出土しなかった。

SA-7020 (図3-534)

VII-2区西部で検出した東西堀跡(N-83°-W)である。4間分(8.60m)を検出し、柱間寸法は2.00～2.40mである。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約26cmを中心に、径18～33cmを測り、柱径は10cm前後とみられ、深さは14～38cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器6点、土師器2点、須恵器2点、土師質土器33点、製塩土器1点、灰釉陶器1点がみられ、灰釉陶器1点(7854)が掲載できた。

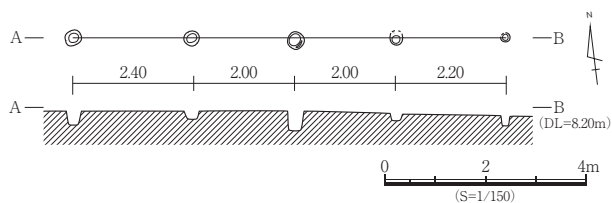


図3-534 SA-7020

出土遺物

灰釉陶器(図版152 7854)

皿の体部とみられ、外面には回転ヘラ削りの痕が残る。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

SA-7021 (図3-535)

VII-5区中央部で検出した東西堀跡(N-87°-E)である。3間分(4.60m)を検出し、柱間は1.50・1.60mである。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約30cmを中心に、径

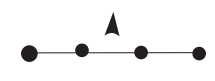


図3-535 SA-7021

27～46cmを測り、柱径は15cm前後とみられ、深さは22～35cmである。柱穴の埋土は地山のブロックを多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトであった。遺物は出土しなかった。

③ 土坑

29基の土坑を検出した。屋敷内に20基、屋敷外に9基あり、屋敷外では屋敷跡を囲む溝跡の東側に点在する。

SK-7075 (図3-536)

Ⅶ-1区南西部、屋敷内で検出した不整形の土坑である。長径1.72m、短径1.71m、深さ26cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底面からピット1個(径35cmの円形で、深さ8cm)を検出した。埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器15点、土師器9点、須恵器7点、土師質土器40点、鉄滓1点がみられたが、図示できるものはなかった。

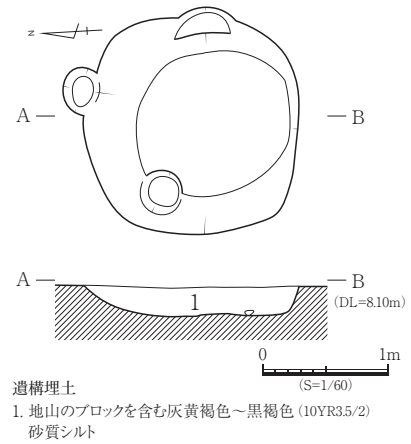


図3-536 SK-7075

SK-7076

Ⅶ-1区南西部、屋敷内で検出した楕円形の土坑で、SK-7077に掘り込まれる。長径1.26m、短径1.05m、深さ10cmを測り、長軸方向はN-51°-Wを示す。断面形は逆台形を呈し、底面からピット1個(径24cmの円形で、深さ7cm)を検出した。埋土は地山

のブロックを含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)砂質シルトを主体に、炭化物が堆積していた箇所もみられた。出土遺物には弥生土器1点、土師質土器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-7077

Ⅶ-1区南西部、屋敷内で検出した円形の土坑で、SK-7076を掘り込む。長径1.07m、短径0.91m、深さ23cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器5点、土師器8点、須恵器2点、土師質土器18点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-7078

Ⅶ-1区南西端部、南壁際で検出した円形とみられる土坑である。長径1.39m、短径0.68m以上、深さ18cmを測る。断面形は舟底形を呈し、中央部で円形の落ち込みが認められた。埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)砂質シルトで中礫が混じっていた。出土遺物には弥生土器9点、土師質土器8点、青磁1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-7079

Ⅶ-1区南西端部、西壁際で検出した方形とみられる土坑で、大半は調査区外にある。長辺2.02m以上、短辺0.36m以上、深さ8cmを測り、長軸方向はN-1°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器11点、土師器3点、須恵器12点、土師質土器41点、鉄製品1点がみられ、土師器1点(7855)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-537 7855)

皿で、成形は手づくねで、体部外面には指頭圧痕が残る。口縁部から内面にヨコナデ調整を施し、内底面にナデ調整を加える。また、外底面にもナデ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒

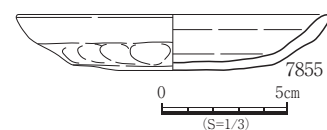
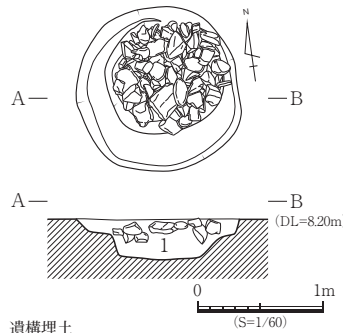


図3-537 SK-7079出土遺物実測図

砂を少し含む。

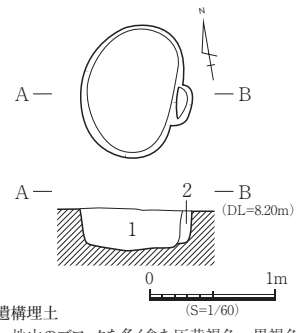
SK-7080 (図3-538)

VII-1区南西部, 屋敷内で検出した円形の土坑で, 古代の建物(SB-7008)を掘り込む。長径1.36m, 短径1.30m, 深さ29cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色(10YR4/2)シルトで, 大礫の堆積が認められた。出土遺物には弥生土器4点, 土師質土器7点, 石製品9点がみられ, 石製品3点(7856~7858)が図示できた。



遺構埋土
1. 地山を含む灰黄褐色(10YR4/2)シルト

図3-538 SK-7080



遺構埋土
1. 地山のブロックを多く含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)シルト(SK-7081)
2. 地山のブロックを含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)シルト(ピット)

図3-539 SK-7081

出土遺物

石製品(図3-540 7856~7858)

7856・7857は叩石で, 7856は片面中央に敲打痕と粗い擦痕, 側面に敲打痕, 縁辺を中心に擦痕が残る。また, 片面中央以外に煤が付着する。7857は片面に敲打痕と擦痕が残る。また, 被熱で変色し, 両面中央部以外には煤が付着する。

7858は下臼で, 4~5本単位の条線が残る。

SK-7081 (図3-539)

VII-1区南西端部, SD-7010の西側で検出した楕円形の土坑である。長径1.06m, 短径0.77m, 深さ34cmを測り, 長軸方向はN-6°-Eを示す。断面形は箱形を呈する。埋土は地山のブロックを多く含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)シルトで, 底面に炭化物の堆積が認められた。出土遺物には弥生土器16点, 土師器6点, 土師質土器35点, 製塩土器6点, 石製品1点がみられ, 石製品1点(7859)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-540 7859)

扁平片刃石斧で, 刃部と基部が欠損する。欠けた部分以外には研磨痕が残る。

SK-7082

VII-1区南西端部, SD-7010の東側で検出した方形の土坑で, 北壁をピットに掘り込まれる。長辺1.07m, 短辺0.99m, 深さ22cmを測り, 長軸方向はN-10°-Wを示す。断面形は逆台形を呈し, 北側にピット

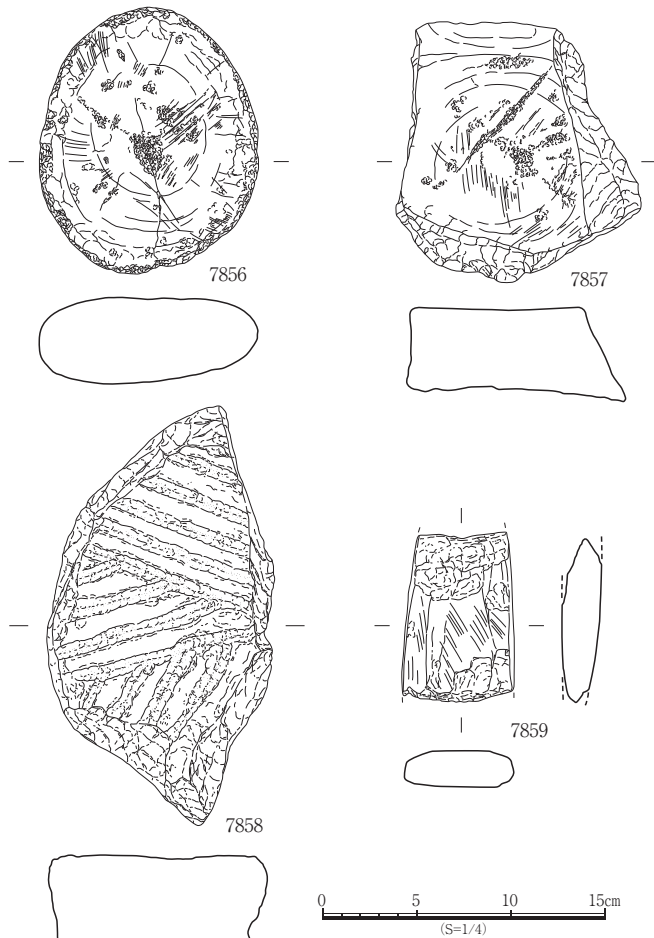


図3-540 SK-7080・7081出土遺物実測図

ト状の浅い落ち込みが認められた。埋土は地山のブロックを多く含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器8点, 土師器1点, 須恵器9点, 土師質土器33点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-7083

Ⅶ-1区南端部, SD-7009に切られた形で検出した方形の土坑で, SK-7084に掘り込まれる。長辺3.54m, 短辺0.80m以上, 深さ21cmを測り, 長軸方向はN-88°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には土師器1点, 須恵器6点, 土師質土器25点, 製塩土器・青磁各1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-7084

Ⅶ-1区南端部, SD-7009とSK-7083を掘り込んだ形で検出した不整形の土坑である。長辺2.25m, 短辺1.00m以上, 深さ9cmを測り, 長軸方向はN-86°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器1点, 須恵器3点, 土師質土器23点, 青花1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-7085 (図3-541)

Ⅶ-1区南部, SK-7086の西側で検出した楕円形の土坑である。長径3.98m, 短径1.68m, 深さ22cmを測り, 長軸方向はN-8°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し, 底面から4個のピットを検出した。埋土は地山のブロックを多く含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器20点, 土師器7点, 須恵器19点, 土師質土器55点, 青花2点がみられ, 須恵器1点(7860)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-545 7860)

杯蓋で, 口縁部は緩やかに下り, 端部を下方に屈曲さす。胎土には細粒砂から中粒砂を若干含む。

SK-7086

Ⅶ-1区南部, SK-7085の東側で検出した隅丸方形の土坑で, SD-7009に掘り込まれる。長辺3.29m, 短辺約3.10m, 深さ14cmを測り, 長軸方向はN-11°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを多く含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器30点, 土師器10点, 須恵器27点, 土師質土器79点, 製塩土器・備前焼・白磁・青磁各1点がみられ, 白磁1点(7861)が図示できた。

出土遺物

白磁(図3-545 7861)

小型の碗で, 底部は削り出し高台となり, 高台外側から見込にかけて施釉する。胎土には黒色粒を比較的多く含む。

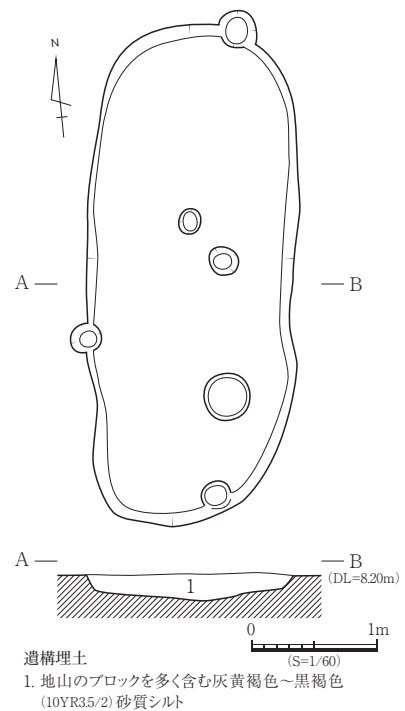
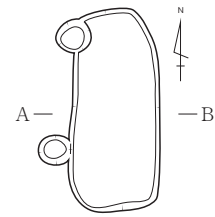


図3-541 SK-7085

SK-7087 (図3-542)

VII-1区南部, 屋敷内で検出した方形の土坑で, ピットに掘り込まれる。長辺1.60m, 短辺0.72m, 深さ7cmを測り, 長軸方向はN-3°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色(10YR4/2)シルトで, 炭化物を僅かに含んでいた。出土遺物には弥生土器2点, 土師器1点, 須恵器2点, 土師質土器4点がみられたが, 図示できるものはなかった。



SK-7088 (図3-543)

VII-1区南西部, 屋敷内, SB-7072の北側で検出した不整円形の土坑である。長径1.17m, 短径1.06m, 深さ14cmを測り, 長軸方向はN-87°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)シルトで, 炭化物を僅かに含んでいた。出土遺物には土師器1点, 須恵器2点, 土師質土器10点がみられたが, 図示できるものはなかった。

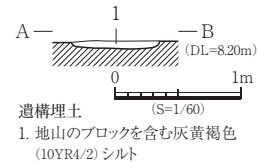


図3-542 SK-7087

SK-7089 (図3-544)

VII-1区南西部, 屋敷内, SB-7069の北側で検出した不整楕円形の土坑である。長径1.12m, 短径0.98m, 深さ13cmを測り, 長軸方向はN-85°-Wを示す。断面形は逆台形を呈し, 中央部がピット状に落ち込んでいた。埋土は上下2層に分層され, 上層が地山の土粒を含む灰黄褐色(10YR4.5/2)シルト, 下層が地山の土粒を多く含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器2点, 土師器1点, 須恵器8点, 土師質土器5点がみられたが, 図示できるものはなかった。

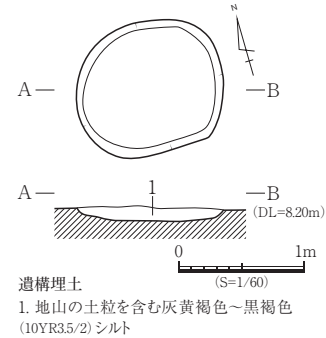


図3-543 SK-7088

SK-7090

VII-1区南西部, 屋敷内, SK-7089の南側で検出した円形の土坑である。径0.95m, 深さ15cmを測る。断面形は舟底形を呈し, SK-7089と同様に中央部がピット状に落ち込んでいた。埋土は地山の土粒を多く含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器1点, 土師器3点, 須恵器2点, 土師質土器6点がみられたが, 図示できるものはなかった。

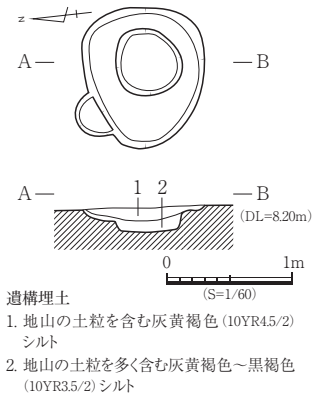


図3-544 SK-7089

SK-7091

VII-1区南西部, 西壁際で検出した方形とみられる土坑で, 大半は調査区外に続く。長辺3.28m, 短辺0.86m以上, 深さ46cmを測り, 長軸方向はN-9°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し, 南壁際に段部がみられる。埋土は地山の土粒を多く含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器4点, 土師器4点, 須恵器4点, 土師質土器25点がみられ, 須恵器1点(7862)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-545 7862)

杯身で, 器面にはヨコナデ調整を施した上で, 内底面にナデ調整を施す。底部を回転ヘラ切りで切

り離し、外端部に回転ヘラ削りを施して、高さ0.5cmの高台を貼付し、ヨコナデ調整で整える。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

SK-7092

Ⅶ-1区南西部、西壁際で検出した楕円形とみられる土坑で、約半分は調査区外に続く。長径1.83m、短径0.71m以上、深さ35cmを測り、長軸方向はN-7°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し、底面は中央部が落ち込む。埋土は上下2層に分層され、上層が地山のブロックを含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)シルト、下層が地山のブロックを少し含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)砂質シルトであった。遺物は出土しなかった。

SK-7093 (図3-546)

Ⅶ-1区西部、屋敷内で検出した方形の土坑である。長辺1.74m、短辺1.13m、深さ29cmを測り、長軸方向はN-11°-Eを示す。断面形は箱形を呈する。埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色～にぶい黄褐色(10YR4/2.5)シルトであった。出土遺物には弥生土器11点、土師器3点、須恵器5点、土師質土器34点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-7094

Ⅶ-1区西部、屋敷内で検出した円形の土坑である。長径1.64m、短径1.56m、深さ22cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色(10YR4/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器5点、須恵器1点、土師質土器3点、白磁・青磁・石製品各1点がみられ、弥生土器1点(7863)と石製品1点(7864)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-547 7863)

甕で、口頸部は外反し、口縁端部下端を若干拡張する。肩部外面下端に微隆起突帯を貼付し、ヨコナデ調整を施す。胎土には細粒砂から粗粒砂を多く含む。

石製品(図3-547 7864)

砥石で、断面三角形を呈し、各面に使用痕が残る。

SK-7095 (図3-548)

Ⅶ-1区西部、SD-7009を切った形で検出した楕円形の土坑である。長径1.18m、短径0.90m、深さ37cmを測り、長軸方向はN-4°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)シルトを主体に、地山のブロックや土粒の含む度合いにより

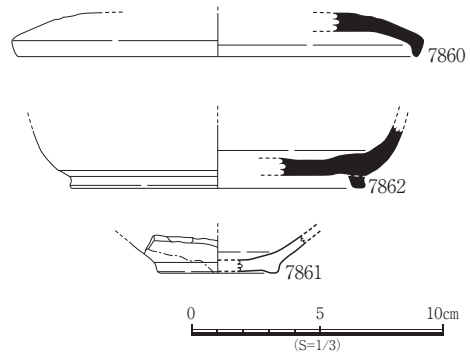


図3-545 SK-7085・7086・7091出土遺物実測図

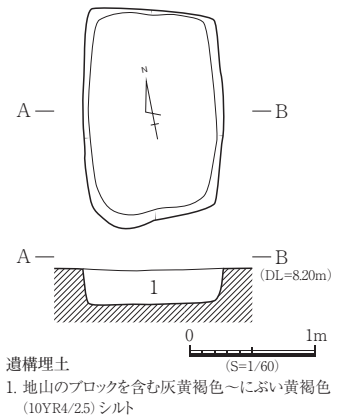


図3-546 SK-7093

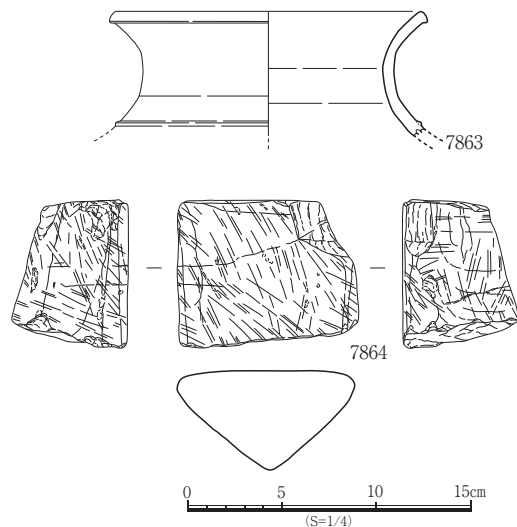


図3-547 SK-7094出土遺物実測図

4層に分層される。出土遺物には弥生土器3点, 土師器2点, 須恵器1点, 土師質土器3点, 石製品2点がみられ, 土師質土器1点(7865)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-555 7865)

杯で, 成形はB技法となる。体部から口縁部は内湾気味に立ち上がり, 端部を丸く仕上がる。口唇部から外面に回転ナデ調整を施し, 内面にはロクロ目が明瞭に残る。胎土には極細粒砂から細粒砂を若干含む。

SK-7096(図3-549)

VII-1区中央部西寄り, 屋敷外で検出した方形の土坑である。長辺1.53m, 短辺1.38m, 深さ40cmを測り, 長軸方向はN-73°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の小ブロックを含む灰黄褐色~にぶい黄褐色(10YR4/2.5)砂質シルトであった。出土遺物には須恵器・土師質土器各1点がみられたが, 図示できなかった。

SK-7097

VII-1区中央部西寄り, SD-7009に切られた形で検出した楕円形の土坑である。長径1.14m, 短径0.67m以上, 深さ14cmを測り, 長軸方向はN-8°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器1点, 土師器1点, 土師質土器12点がみられ, 土師質土器1点(7866)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-554 7866)

杯で, 成形はB技法となり, 底部の切り離しは回転糸切りによる。口縁部に回転ナデ調整を施すが, 内底面と体部内外面は未調整である。胎土には極細粒砂から粗粒砂を若干含む。

SK-7098(図3-550)

VII-1区中央部西寄り, SB-7087を切った形で検出した楕円形の土坑である。長径2.11m, 短径0.88m, 深さ10cmを測り, 長軸方向はN-10°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器2点, 須恵器4点, 土師質土器19点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-7099(図3-551)

VII-1区南部, SB-7081を切った形で検出した不整形の土坑である。長辺1.97m, 短辺1.33m, 深さ21cmを測り, 長軸方向はN-90°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色

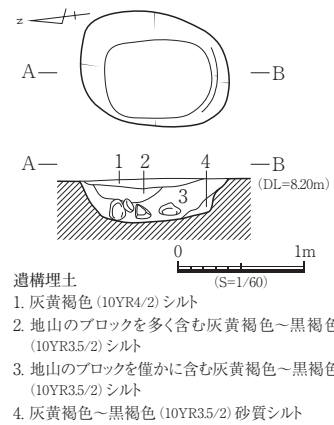


図3-548 SK-7095

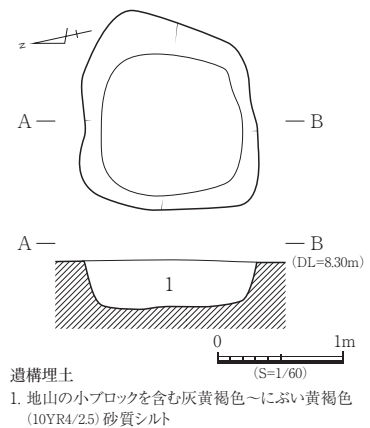


図3-549 SK-7096

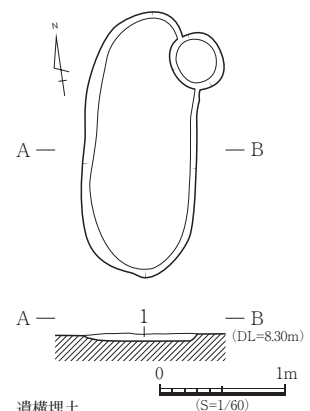


図3-550 SK-7098

(10YR4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器7点、土師器17点、須恵器7点、土師質土器51点、瓦器1点がみられ、土師器1点(7867)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-554 7867)

羽釜で、口縁部は内傾し、外面に粘土帯を貼付する。口縁部外面には指頭圧痕、内面全面にヨコ方向のハケ目が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SK-7100(図3-552)

VII-1区東部、SK-7101の西側で検出した不整楕円形の土坑である。長径2.60m、短径1.00m、深さ13cmを測り、長軸方向はN-17°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を多く含む灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器4点、土師器5点、須恵器4点、土師質土器15点、青磁1点がみられ、青磁1点(7868)が図示できた。

出土遺物

青磁(図3-554 7868)

同安窯系の皿で、口縁部は外傾し、内面には2条の沈線、外面には回転ヘラ削りの痕が残る。胎土には黒色粒を比較的多く含む。

SK-7101(図3-553)

VII-1区東部、SK-7100の東側で検出した円形の土坑である。長径1.49m、短径1.45m、深さ27cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色(10YR5/2~4/2)砂質シルトを主体に、地山のブロックと土粒の含み具合により2層に分層される。出土遺物には弥生土器10点、土師器1点、須恵器8点、土師質土器18点、製塩土器・近世磁器・石製品各1点がみられ、石製品1点(7869)が図示できた。

出土遺物

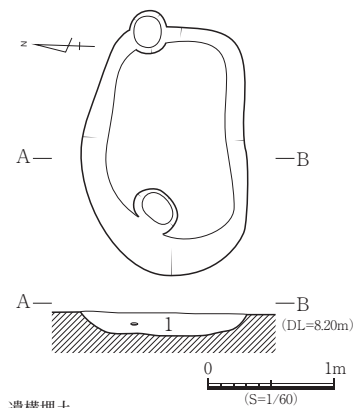
石製品(図3-554 7869)

サヌカイト製の石鏃で、凹基となる。

SK-7102

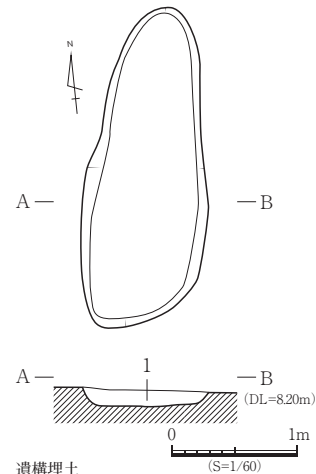
VII-1区南東部で検出した方形の土坑である。長辺3.46m、短辺1.22m、深さ29cmを測り、長軸方向はN-7°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土はにぶい黄褐色(10YR5/3~4/3)砂質シルトを主体に、地山のブロックと土粒の含み具合により2層に分層される。出土遺物には弥生土器22点、土師器2点、須恵器27点、土師質土器92点、製塩土器2点、白磁・青花・鉄製品・古代瓦各1点がみられ、土師質土器1点(7870)が図示できた。

出土遺物



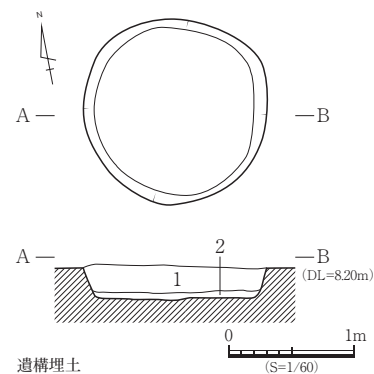
遺構埋土
1. 地山のブロックを含む灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト

図3-551 SK-7099



遺構埋土
1. 地山の土粒を多く含む灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト

図3-552 SK-7100



遺構埋土
1. 地山のブロックを僅かに含む灰黄褐色(10YR5/2~4/2)砂質シルト
2. 地山の土粒を僅かに含む灰黄褐色(10YR5/2~4/2)砂質シルト

図3-553 SK-7101

土師質土器(図3-554 7870)

杯で、成形はB技法となり、底部の切り離しは回転糸切りによる。内底面にはロクロ目が残る。胎土には極細粒砂から極細粒中礫を若干含む。

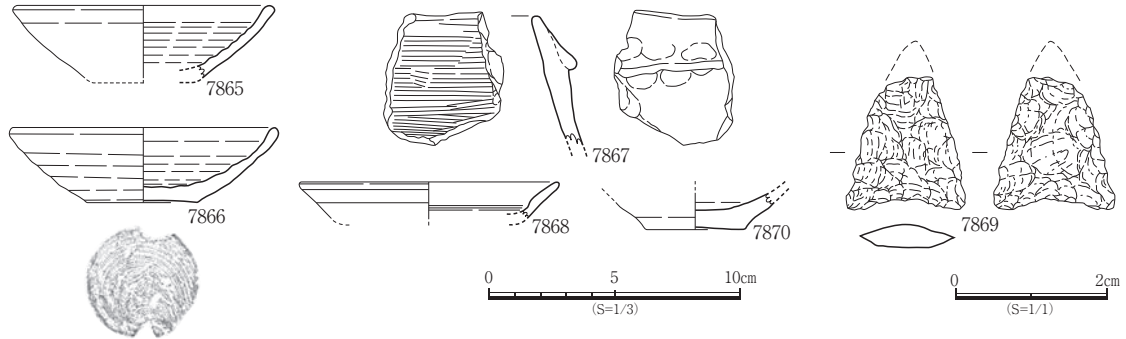


図3-554 SK-7095・7097・7099～7102出土遺物実測図

SK-7103

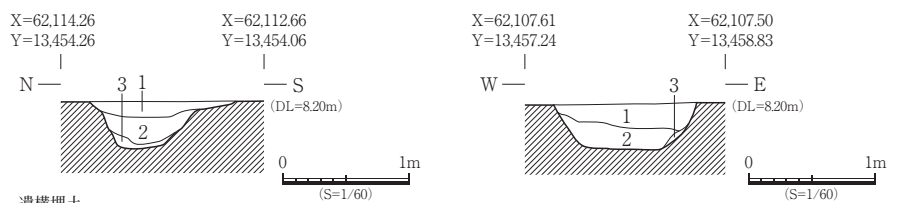
VII-2区南西部で検出した不整形の土坑である。長辺1.76m、短辺1.05m、深さ28cmを測り、長軸方向はN-20°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトを主体に、地山のブロックと土粒の含み具合により2層に分層される。出土遺物には弥生土器7点、土師器7点、須恵器6点、土師質土器57点、製塩土器2点、白磁1点がみられたが、図示できるものはなかった。

④ 溝跡

VI区で確認した屋敷を区画する溝跡の東半分を確認した。部分的に重複しているところもみられることから掘返しが行われたものとみられ、南側はさらに調査区外に延びる。これ以外に3条を確認した。

SD-7009 (図3-555)

VII-1区西部から南西部にかけて検出したL字形を呈する区画溝で、2条に分かれる部分があり、掘返しが行われたものとみられ、西側はVI区に、南側は調査区外に続く。検出長は55.33m、幅は0.65～1.72m、深さは11～47cmを測り、断面形はU字形ないし逆台形を呈する。基底面は北西部で7.795m、コーナー部で7.733m、南端部で7.864mを測り、目立った傾斜はみられず、ほぼ平坦となり主軸方向は東西方向でN-81°-W、南北方向でN-8°-Eを示す。埋土は地山の土粒を多く含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)砂質シルトを主体に、地山の土粒を含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)粘土質シルトの堆積も認められ、2～3層に分層される部分もある。出土遺物には弥生土器174点、土師器74点、須恵器223点、土師質土器620点、黒色土器1点、灰釉陶器1点、製塩土器6点、瓦器1点、備前焼2点、白磁3点、青磁2点、青花2点、瀬戸・美濃系1点、土製品3点、石製品8点、鉄製品1点、鉄滓3点、サヌカイト片3点(10.8g)がみられ、土師器1点(7871)、備前焼2点(7872・7873)、瀬戸・美濃系1点(7874)、石製品2点(7875・7876)が図示できた。



遺構埋土
 1. 地山の土粒を多く含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)砂質シルト
 2. 地山の土粒を含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)粘土質シルト
 3. 地山の土粒を含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)砂質シルト

図3-555 SD-7009

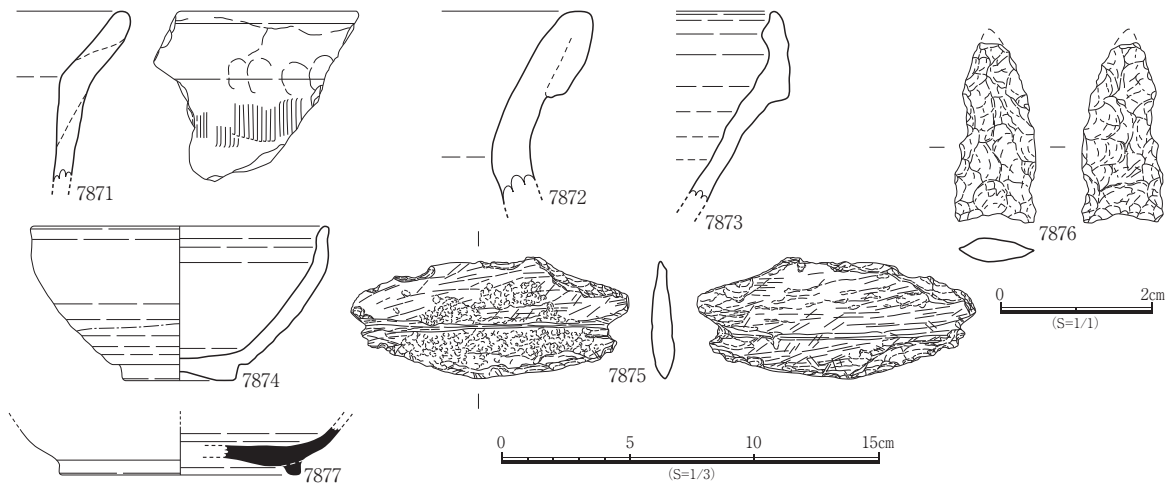


図3-556 SD-7009・7011出土遺物実測図

出土遺物

土師器(図3-556 7871)

甕で、内傾接合となり、口縁部はやや外傾して立ち上がる胴部から外傾し、端部を丸く仕上げる。外面には煤が付着する。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

備前焼(図3-556 7872・7873)

7872は甕で、口縁部は外傾し、玉縁となる。外面には自然釉がかかる。胎土には細粒砂から極細粒中礫を比較的多く含む。

7873は播鉢で、口縁部は体部から直立し、外面には重ね焼きの痕跡が残る。胎土には中粒砂を中心に細粒砂から極細粒中礫を少し含む。

瀬戸・美濃系(図3-556 7874)

天目茶碗で、底部は削り出し高台となり、体部は外上方に上がり、口縁部は直立する。体部外面から見込に鉄釉を施釉する。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

石製品(図3-556 7875・7876)

7875はサヌカイト製の石庖丁で、表面の大半は研磨し、両端に抉りを設け、その間に溝を彫込む。刃部はやや外湾し、刃部長9.0cm、幅0.4cmを測る。

7876はサヌカイト製の基部の狭い石鎌で、凹基となる。

SD-7010(図3-557)

Ⅶ-1区南西部、屋敷内で検出した南北溝で、調査区外に延びる。検出長は4.26m、幅は0.75~0.90m、深さは13~17cmを測り、断面形は逆台形を呈し、両側が平場となり、基底面は北(7.967m)から南(7.946m)に向ってやや傾斜し、主軸方向は南(N-178°-W)に延びており、区画溝(SD-7009)に繋がる可能性もある。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器17点、土師器4点、須恵器6点、土師質土器45点、灰釉陶器・備前焼各1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-7011(図3-557)

Ⅶ-1区北東部から南東部にかけて検出した南北溝で、SB-7091と重複する。検出長は30.01m、幅は0.15~0.37m、深さは4~29cmを測り、断面形は逆台形ないしU字形を呈し、基底面は北(8.100m)か

ら南(8.067m)に向ってやや傾斜し、主軸方向は南(N-173°-W)に真直ぐ延びており、何らかの区画をなしていた溝跡とみられる。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器14点、土師器7点、須恵器9点、土師質土器57点がみられ、須恵器1点(7877)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-556 7877)

杯身で、底部外面端部に高さ0.6cmの高台を貼付する。底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

SD-7012(図3-557)

VII-5区西部で検出したL字形の溝で、北の調査区外に延びる。検出長は6.33m、幅は0.32~0.82m、深さは3~9cmを測り、断面形は舟底形を呈し、基底面は南(8.201m)から北(8.169m)に向ってやや傾斜し、主軸方向は東(N-80°-E)に延びた後、北東(N-36°-E)に角度を変えて調査区外に延びる。埋土は地山の土粒を含む灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器13点、須恵器4点、土師質土器16点がみられたが、図示できるものはなかった。

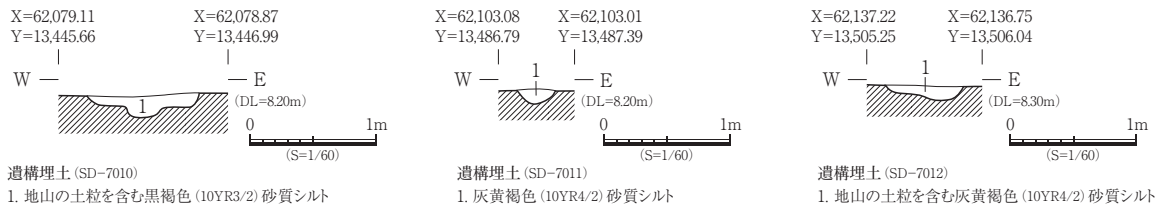


図3-557 SD-7010~7012

⑤ ピット

その多くが掘立柱建物跡などの柱穴と考えられるもので、大半は屋敷跡から検出され、総数は1,403個であった。この内、図示できた遺物が出土したのは22個(P-7095~7116)で、出土したピットについては遺物観察表に記している。

埋土は基本的に地山のブロックを含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)シルトで、場所により土質が砂質シルトとなるものもあった。

出土遺物

須恵器(図3-558 7878)

杯身で、平らな底部外面端部にハの字形に開く高さ0.7cmの高台が付く。外底面は丁寧にナデ調整され、切り離しの痕をナデ消す。胎土には細粒砂から中粒砂を少し含む。

土師質土器(図3-558 7879~7885)

7879~7881は杯で、いずれも成形はB技法とな

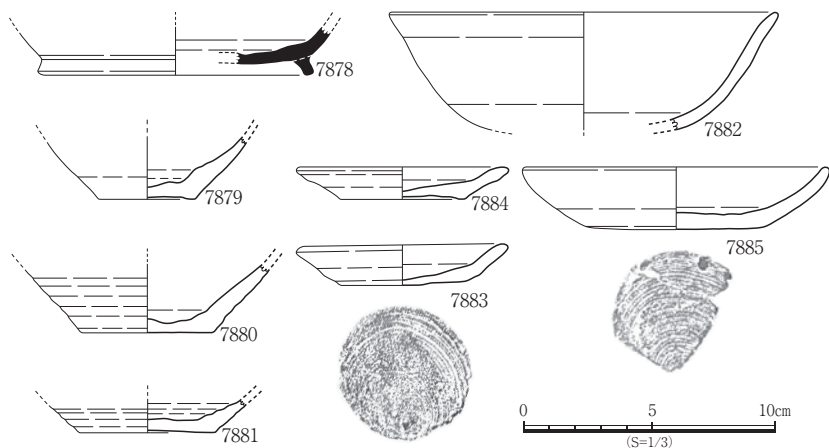


図3-558 ピット出土遺物実測図1

り、底部の切り離しは回転糸切りとなり、7880はナデ調整を加える。ロクロ目が、7879・7881は内面、7880は外面に残る。胎土には、7879が細粒砂から粗粒砂を少し、7880・7881が極細粒砂から中粒砂を若干含む。

7882は椀で、体部は内湾気味に上がり、口縁部は外上方を向く。器面は摩耗しており、調整は不明瞭となる。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

7883・7884は小皿で、成形はA技法となり、底部の切り離しは回転糸切りで、7883はナデ調整を加える。口縁部は斜め上方を向き、端部は丸い。胎土には、7883が極細粒砂から極粗粒砂、7884が極細粒砂から中粒砂を少し含む。

7885は皿で、成形はB技法となり、底部の切り離しは回転糸切りによる。口縁部は内湾気味に上がり、端部は丸い。内面にはロクロ目が残り、胎土には細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。

製塩土器(図3-559 7886)

胴部の破片で、内面には布目、外面にはナデ調整の痕が残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

瓦質土器(図3-559 7887)

火鉢の口縁部で、径0.8cmの円孔が開く。胎土には細粒砂から粗粒砂を少し含む。

常滑焼(図3-559 7888)

小型の壺で、口縁部は外傾し、端部を折返して肥厚する。口唇部には自然釉がかかる。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

備前焼(図3-559 7889)

播鉢で、内面には8本単位の条線を10ヵ所程度に施していたものとみられる。外底面は未調整となる。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

白磁(図3-559 7890)

汀溪窯系の碗で、口縁部は玉縁となり、全面に白磁釉を施釉する。胎土には黑色粒を比較的多く含む。

青磁(図3-559 7891)

稜花皿で、底部は削り出し高台となり、内外面に花卉を彫込み、高台から見込にかけて青磁釉を施釉する。器面には貫入がみられる。胎土には黑色粒を多く含む。

土製品(図3-559 7892~7895)

いずれも土錘で、7892が円筒形である以外は紡錘形となる。紐孔の径は、7892が ϕ 0.3cm、7893が ϕ 0.5

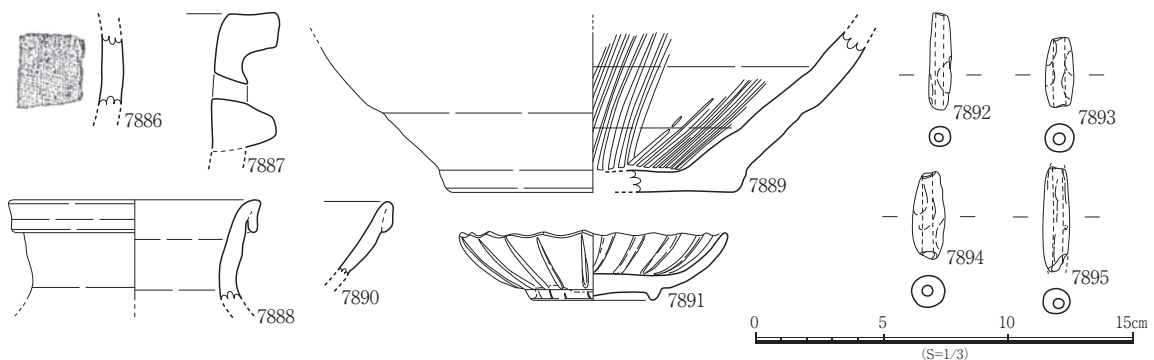


図3-559 ピット出土遺物実測図2

2. VII区 (4) 近世以降

cm, 7894・7895が0.4cmで, 胎土には, 7892が極細粒砂から中粒砂を少し, 7893が極細粒砂から粗粒砂を少し, 7894が細粒砂から中粒砂を少し, 7895が極細粒砂から極粗粒砂を若干含む。

石製品(図3-560 7896~7900)

7896は棒状の叩石で, 断面三角形を呈し, 一方の端部に敲打痕が明瞭に残る。

7897・7898は扁平な磨石で, 7897の平滑となる表面には縁辺を中心に擦痕, 周縁に敲打痕が残り, 叩石としても使用されたものとみられる。7898も縁辺を中心に擦痕, 片面1カ所と周縁1カ所に敲打痕が残る。

7899は砥石で, 断面四角形各面に使用痕が残る。

7900は丸く, 扁平な台石で, 表面は平滑となり, 縁辺を中心に擦痕が残る。片面は被熱で変色し, 煤の付着もみられる。

金属製品(図3-560 7901)

刀子で, 鉄製の茎を装着した青銅製の柄部分4.5cmが残る。

(4) 近世以降

① 土坑

散発的に16基の土坑を検出した。

SK-7104 (図3-561)

VII-1区南西部で検出した円形の土坑で, 壁際を小溝が巡る。長径1.81m, 短径1.73m, 深さ38cmを測る。断面形は逆台形を呈し, 壁際を巡る小溝は上幅8~17cm, 下幅3~7cm, 深さ2~5cmを測り, 桶側などを設置していた可能性が考慮される。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルトで, 大礫の堆積が中層以上で認め

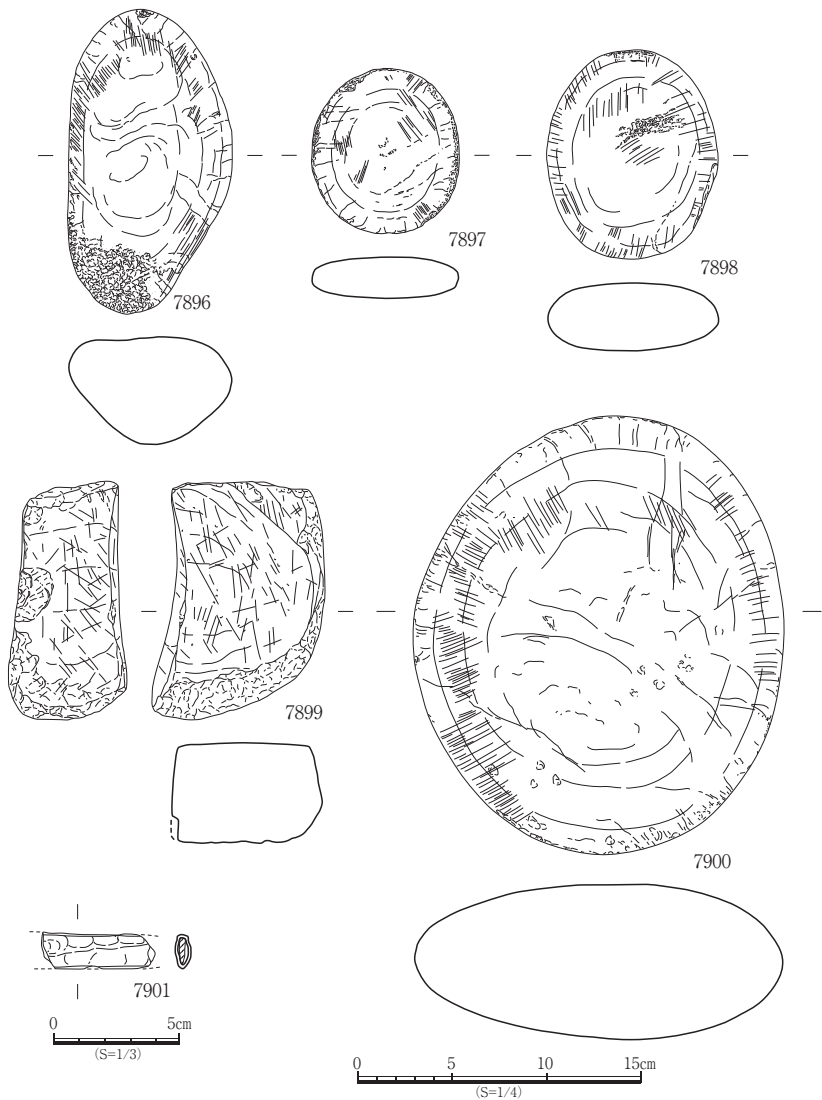


図3-560 ピット出土遺物実測図3

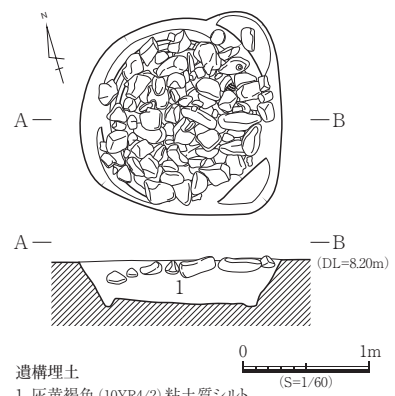


図3-561 SK-7104

られた。出土遺物には須恵器2点、土師質土器21点、近世磁器2点、石製品3点、鉄滓1点がみられ、須恵器1点(7902)と石製品2点(7903・7904)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-562 7902)

直口壺で、胴部は肩が張り、口縁部は短く外傾し、端部は丸い。内面には口縁部を内傾接合した痕跡が明瞭に残る。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

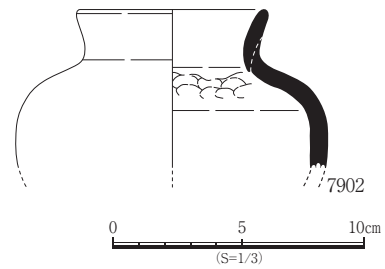


図3-562 SK-7104出土遺物実測図1

石製品(図3-563 7903・7904)

いずれも下臼で、7903には5本単位の条線、7904には5～6本単位の条線が残る。

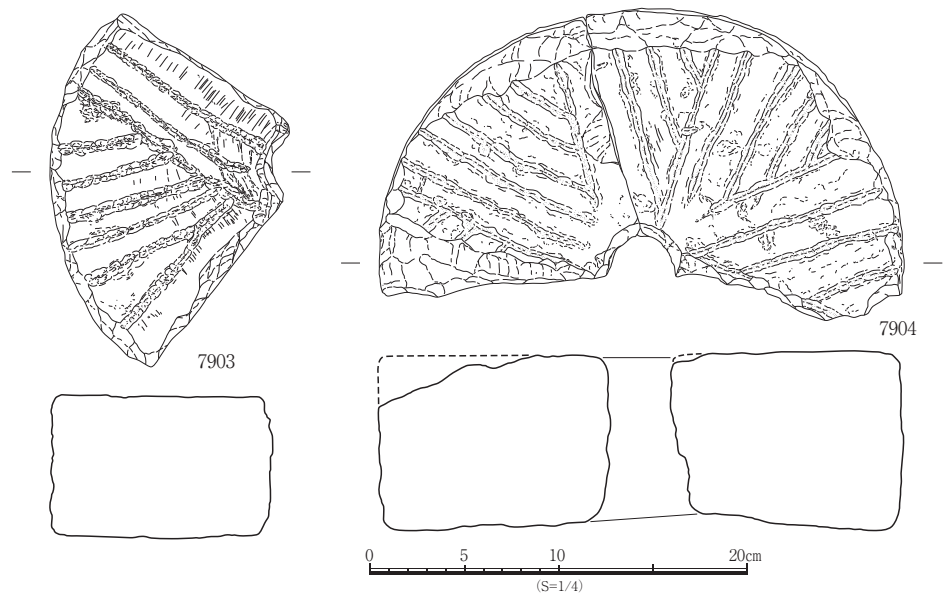


図3-563 SK-7104出土遺物実測図2

SK-7105 (図3-564)

Ⅶ-1区南西部、SK-7104の東側で検出した舟形の土坑である。長辺2.12m、短辺0.61m、深さ34cmを測り、長軸方向はN-6°-

Eを示す。断面形は逆台形を呈し、底面北側にはピット状の浅い落ち込みが認められる。埋土は上下2層に分層され、上層が地山のブロックを含む灰黄褐色(10YR4/2)シルト、下層が地山のブロックを含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器5点、須恵器7点、土師質土器10点、青磁1点がみられ、青磁1点(7905)が図示できた。

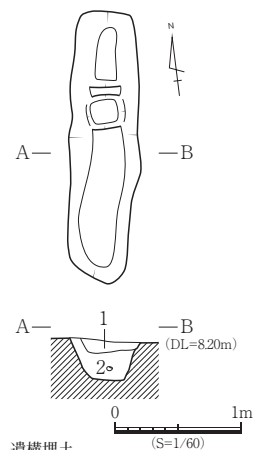
出土遺物

青磁(図3-565 7905)

端反皿で、全面に緑釉を施釉し、貫入がみられる。

SK-7106

Ⅶ-1区南西部、SK-7105の南東側で検出した大型の方形の土坑である。長辺5.74m、短辺1.73m、深さ21cmを測り、長軸方向はN-84°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを多く含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器26点、土師器4点、須恵器17点、土師質土器34点、緑釉陶器・製塩土器・瓦器・白磁・青磁・石製品



- 遺構埋土
1. 地山のブロックを含む灰黄褐色(10YR4/2)シルト
 2. 地山のブロックを含む灰黄褐色～黒褐色(10YR3.5/2)砂質シルト

図3-564 SK-7105

2. VII区 (4) 近世以降

各1点, 近世以降の陶器3点がみられ, 緑釉陶器1点(7906), 青磁1点(7907), 近世以降の陶器1点(7908), 石製品1点(7909)が掲載できた。

出土遺物

緑釉陶器(図版151 7906)

皿の体部の細片で, 全面に緑釉を施釉する。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

青磁(図3-565 7907)

碗で, 底部は削り出し高台となり, 高台外側から見込にかけて緑釉を施釉する。胎土には黒色粒を比較的多く含む。

近世以降陶器(図3-565 7908)

鉢で, 体部は内湾気味に立ち上がり, 直立した口縁部は粘土紐を折返して肥厚する。体部外面は回転ヘラ削りされ, 口唇部から体部外面上半に鉄釉を施釉する。胎土には極細粒砂から細粒砂を若干含む。

石製品(図3-565 7909)

磨石で, 表面は平滑となり, 縁辺を中心に擦痕, 片面中央に弱い敲打痕と擦痕, 周縁を中心に摩滅痕が残る。

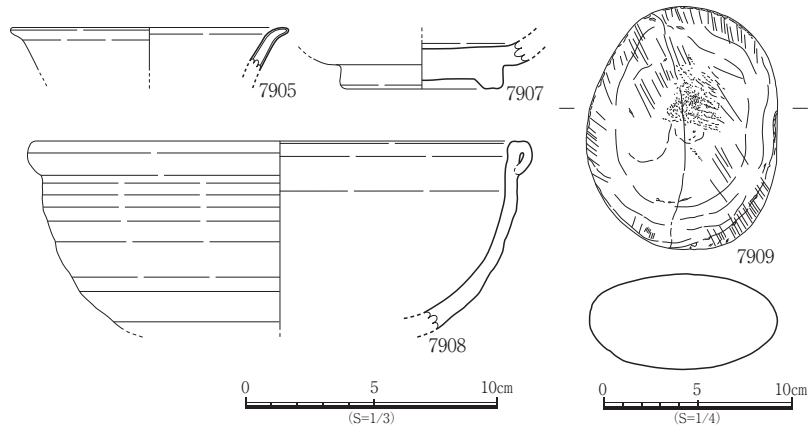


図3-565 SK-7105・7106出土遺物実測図

SK-7107

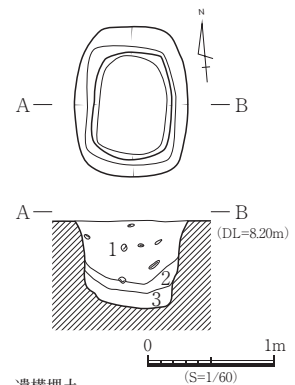
VII-1区南部で検出した不整楕円形の土坑である。長径1.38m, 短径1.14m, 深さ16cmを測り, 長軸方向はN-3°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)シルトであった。遺物は出土しなかった。

SK-7108(図3-566)

VII-1区中央部南寄りで検出した方形の土坑である。長辺1.19m, 短辺0.91m, 深さ70cmを測り, 長軸方向はN-6°-Eを示す。断面形は箱形を呈する。埋土は灰黄褐色(10YR4.5/2)・褐色～灰黄褐色(10YR4/1.5)シルトを主体に, 地山のブロックの含み具合により3層に分層される。遺物は出土しなかった。

SK-7109

VII-1区北西部, 壁際で検出した方形の土坑で, 調査区外に続く。長辺2.68m, 短辺2.08m以上, 深さ10cmを測り, 長軸方向はN-86°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し, 底面はほぼ平坦である。埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色(10YR4/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器6点, 須恵器11点, 土師質土器14点, 近世陶磁器4点, 石製品3点, サヌカイト片1点(0.4g)がみられたが, 図示できるものはなかった。



- 遺構埋土
1. 地山のブロックを含む灰黄褐色(10YR4.5/2)シルト
 2. 地山のブロックを少量含む褐色～灰黄褐色(10YR4/1.5)シルト
 3. 地山のブロックを含む褐色～灰黄褐色(10YR4/1.5)シルト

図3-566 SK-7108

SK-7110

Ⅶ-1区北西部, 壁際で検出した方形の土坑で, 調査区外に続く。長辺1.58m, 短辺0.83m以上, 深さ24cmを測り, 長軸方向はN-89°-Wを示す。断面形は箱形を呈する。埋土は地山のブロックを多く含む黄褐色(10YR5/4)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器3点, 須恵器5点, 土師質土器9点, 近世陶器1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-7111

Ⅶ-1区北部, 壁際で検出した方形の土坑で, SK-7113に切られ, 調査区外に続く。長辺2.28m以上, 短辺0.75m以上, 深さ11cmを測り, 長軸方向はN-84°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックと土粒を多く含む灰黄褐色~黒褐色(10YR3.5/2)砂質シルトであった。出土遺物には須恵器1点がみられたが, 図示できなかつた。

SK-7112

Ⅶ-1区北部, 壁際で検出した方形の土坑で, SK-7113に切られ, 調査区外に続く。長辺0.92m以上, 短辺0.64m以上, 深さ21cmを測り, 長軸方向はN-6°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックと土粒を多く含む灰黄褐色(10YR4.5/2)シルトであった。出土遺物には土師器1点, 須恵器2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-7113

Ⅶ-1区北部, 壁際で検出した方形の土坑で, SK-7111・7112を掘り込み, 調査区外に続く。長辺1.33m以上, 短辺1.68m, 深さ35cmを測り, 長軸方向はN-3°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックと土粒を多く含む灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器1点, 須恵器4点, 土師質土器1点, 青花2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-7114 (図3-567)

Ⅶ-1区北部, SK-7113の東側で検出した円形の土坑である。長径1.38m, 短径1.32m, 深さ31cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は中礫とハンダブロックを含む灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで, 基底面を中心に厚さ3cmの橙色(5YR6/8)シルト(ハンダ)が認められた。出土遺物には肥前系磁器1点, 近世磁器1点, 石製品4点がみられ, 肥前系磁器1点(7910)が図示できた。

出土遺物

肥前系磁器(図3-568 7910)

猪口で, 口縁部は内湾して上がり, 端部は細い。外面に文様を施し, 全面に自然釉を施釉する。胎土には黒色粒を若干含む。

SK-7115

Ⅶ-5区中央部で検出した不整形の土坑で, 調査区外に続く。長辺6.18m, 短辺4.75m以上, 深さ21cmを測り, 長軸方向はN-70°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は中礫と地山のブロックを含む褐灰色~灰黄褐色(10YR5/1.5)シルト質砂であった。出土遺物には弥生土器6点, 須恵器6点, 土師質土器5点, 備前焼1点, 近世陶器29点, 近世磁器24点, 能茶山焼・石製品・鉄製品・古銭各1点がみられ, 能茶山焼1点(7911)が図示できた。

出土遺物

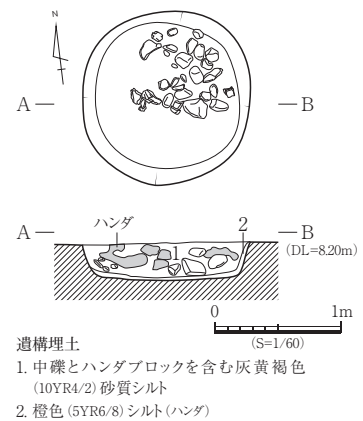


図3-567 SK-7114

能茶山焼(図3-568 7911)

広東茶碗で、底部は削り出し高台となり、内湾気味に上がる。見込に帆かけ舟と三又トチンの痕が残り、外面に界線3条と文様、高台内側に窯印が残る。全面に白色釉を施釉し、畳付は釉ハギとなる。胎土には黒色粒を比較的多く含む。

SK-7116

VII-5区中央部で検出した不整形の土坑である。長辺2.70m、短辺2.22m、深さ17cmを測り、長軸方向はN-71°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は地山のブロックを少し含む暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルトであった。出土遺物には土師器1点、須恵器1点、土師質土器3点、備前焼2点、近世陶器8点、近世磁器8点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-7117

VII-5区中央部で検出した不整形の土坑である。長辺4.28m、短辺1.90m、深さ9cmを測り、長軸方向はN-14°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は中礫混じりの暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器5点、須恵器1点、土師質土器7点、近世陶器2点、近世磁器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-7118

VII-5区南部、南壁際で検出した隅丸方形とみられる土坑で、調査区外に延びる。長辺2.40m、短辺1.50m以上、深さ22cm以上を測り、長軸方向はN-77°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器2点、備前焼1点、近世陶器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-7119

VII-5区南東部、壁際で検出した方形とみられる土坑で、調査区外に延びる。長辺1.44m以上、短辺1.14m以上、深さ27cmを測り、長軸方向はN-70°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器1点、備前焼2点、近世陶器5点、近世磁器2点、石製品3点、金属製品1点がみられ、石製品1点(7912)と金属製品1点(7913)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-568 7912)

硯で、側面と表面は研磨され、海部には「五」の刻書が残る。

金属製品(図3-568 7913)

刀子で、鉄製の茎を装着した青銅製の柄部分8.5cmが残る。

② 溝跡

調査区を南北に延びる2条の溝跡を検出した。

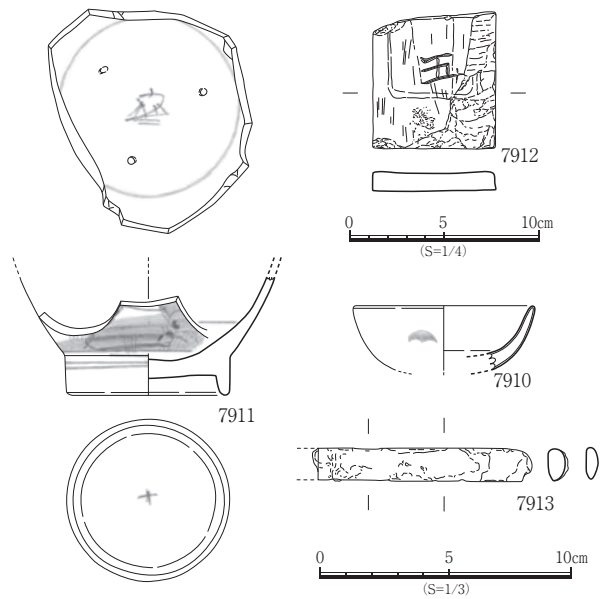


図3-568 SK-7114・7115・7119出土遺物実測図

SD-7013 (図3-569)

Ⅶ-1区北部から南部にかけて検出した真直ぐ延びる南北溝で、SB-7076・7083・7087・7088などの遺構を掘り込む。検出長は41.35m、幅は0.41～0.64m、深さは4～13cmを測り、断面形は舟底形を呈し、基底面はほぼ平坦で、標高は7.971～8.119mを測り、主軸方向は北北東(N-15°-E)を向く。埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器5点、須恵器6点、土師質土器14点、近世陶器2点、鉄製品76点がみられたが、図示できるものはなかった。

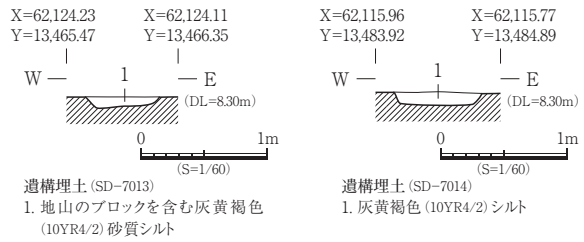


図3-569 SD-7013・7014

埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器5点、須恵器6点、土師質土器14点、近世陶器2点、鉄製品76点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-7014 (図3-569)

Ⅶ-1区東部で検出した南北溝で、SB-7090を掘り込む。検出長は13.28m、幅は0.60m、深さは2～14cmを測り、断面形は逆台形を呈し、基底面は南(8.120m)から北(8.060m)に向かってやや傾斜し、主軸方向は北(N-11°-E)に延びる。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器11点、須恵器1点、鉄製品13点がみられたが、図示できるものはなかった。

③ 井戸跡

1基を確認したが、調査区の壁際で完掘できなかった。

SE-7001

Ⅶ-2区北東端部、北壁際で検出した井戸跡ではないかとみられる遺構でほぼ円形を呈する。石組みなどの主体となる遺構は確認されていない。長径約2.10m、短径約2.00m、深さ10cm以上を測る。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は、掘削部分が灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器4点、近世陶器11点、近世磁器10点、瓦37点、ガラス製品2点がみられたが、図示できるものはなかった。

3. VIII区

調査区は現在の農道と用水路の関係で4ヵ所に分れる。これらは、大きく西部と東部に分れ、さらに東部は南側と北側に分れ、北側は東西2ヵ所に細分される。西側の調査区をVIII-1区、東側の調査区をVIII-2区、北部は西からVIII-3区、VIII-4区と呼称して記述する。

確認された遺構の時代はVI・VII区とほぼ同じで、古墳時代を除く、弥生時代～近世であり、弥生時代、古代、中世が中心となる。ただし、西野々遺跡の東の境に当り、遺構総数はVI区やVII区に比べ大幅に少なく、各時代とも集落縁辺部の様相を呈する。

弥生時代では集落の東の区画をなしたとみられる溝跡を始めとして竪穴建物跡・竪穴状遺構3軒など集落を構成する遺構を検出したが、建物跡は散発的である。

古代でも溝跡を中心に確認し、官衙関連とみられる掘立柱建物跡はみられない。

中世では性格がはっきりしないものの柱穴が格子状に繋がる遺構を確認した。この時代も、集落の縁辺部とみられ、遺構の密度は低い。

(1) 弥生時代

前述のとおり、集落縁辺部の様相を呈しており、検出された遺構数は少ない。

確認された遺構は、竪穴建物跡2軒、竪穴状遺構1軒、塀・柵列跡5列、土坑17基、溝跡9条、畝状遺構3列、ピット309個であった。

① 竪穴建物跡・竪穴状遺構

2軒の竪穴建物跡と1軒の竪穴状遺構を確認した。唯一、全容が推測できたのはST-8002だけであった。

ST-8001 (図3-570)

VIII-1区の北西部、調査区の西壁で建物跡の立ち上がりを確認し、壁溝を検出したことによりその存在が判明したもので、径約5.00mの円形の竪穴建物跡とみられ、その大半は調査区外にある。確認した付属遺構は壁溝のみで、何本柱で棟を支えていたか不明である。なお、床面の標高は7.675～7.701mである。壁溝は東壁際に一部遺存しており、幅約8～10cm、深さ2～5cm、延長1.60mを測る。埋土は黒褐色(5YR3/1～10YR3/2)シルトを主体に地山のブロックや土粒の含み具合により4層に分層される。遺物は出土しなかった。

ST-8002 (図3-571)

VIII-1区の南東端部、壁際で検出した径約5.70mとみられる円形の竪穴建物跡で、東側と南側は調査区外に延びる。遺存する壁高は8～15cm、床面の標高は7.666～7.727mである。付属遺構として2個の中央ピット(P-1・8)と壁溝および34個のピットを確認した。建物本体の拡張はみられないものの、中央ピットが2個あり、かつ多数のピットが確認されたことから建替え(2時期)が行われたものと思われる。P-1がP-8に掘り込まれていることから、中央ピット(P-1)が1期で、これに伴う主柱穴は壁溝との位置関係から中央ピットを囲むP-2～7とみられ、6本柱で棟を支えていたものと考えられる。中央ピット(P-1)は不整楕円形とみられ、長径約1.20m、短径約0.85m、深さ18cmを測る。P-2は径30～38cmの楕円形で、深さ6cm、P-3は径31cmの円形で、深さ15cm、

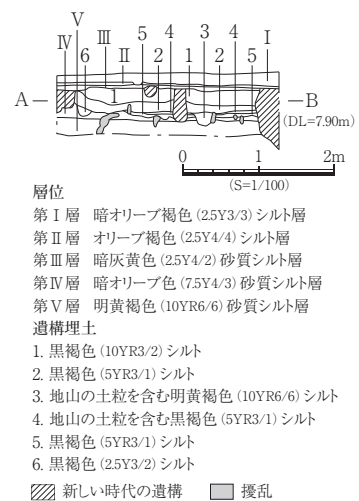


図3-570 ST-8001

P-4は径29cmの円形で、深さ7cm、P-5は径35cmの円形で、深さ27cm、P-6は径30～35cmの楕円形で、深さ33cm、P-7は径25～30cmの楕円形で、深さ9cmを測る。柱間寸法は1.45～2.25mである。2期は中央ピット(P-8)に伴う時期で、この期の支柱穴は壁溝との位置関係から中央ピットを囲むP-9～14とみられ、6本柱で棟を支えていたものと考えられる。中央ピット(P-8)は不整楕円形とみられ、長径1.15m、短径0.83m、深さ26cmを測り、弥生土器18点が出土する。P-9は径34～40cmの楕円形で、深さ39cm、P-10は径49cmの円形で、深さ41cm、P-11は径49～54cmの楕円形で、深さ40cm、P-12は径35cmの円形で、深さ36cm、P-13は径31～36cmの楕円形で、深さ32cm、P-14は径41cmの円形で、深さ34cmを測る。柱間寸法は1.30～1.90mである。壁溝は北壁沿いと南壁沿いで確認さ

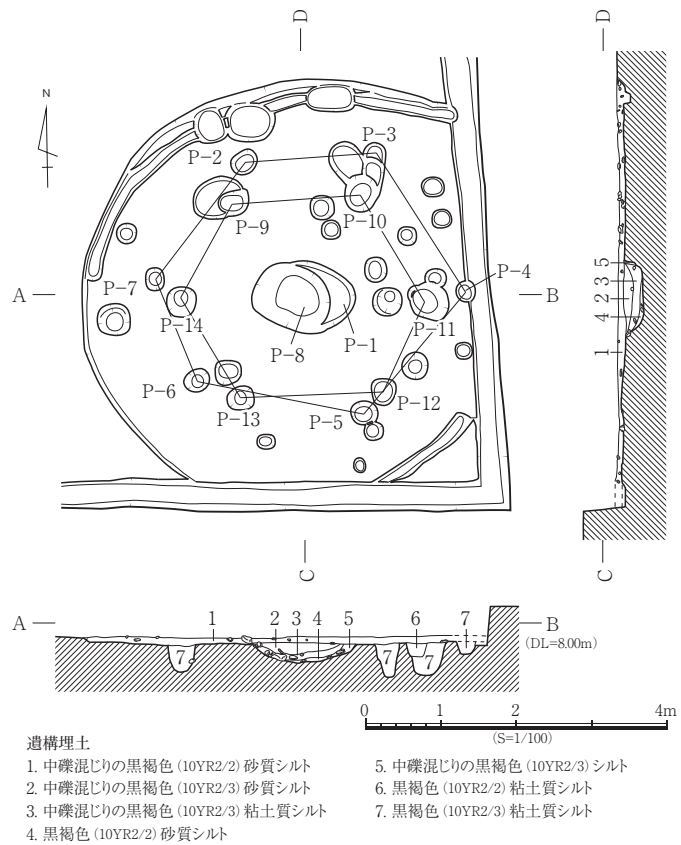


図3-571 ST-8002

れ、幅16～22cm、深さ3～11cm、延長7.62mを測る。埋土は中礫混じりの黒褐色(10YR2/2)砂質シルトで、さらに中央ピットは地山の土粒の含み具合で4層に分層される。出土遺物は弥生土器273点、石製品1点、サヌカイト片6点(10.4g)がみられ、弥生土器4点(8035～8038)と石製品1点(8039)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-572 8035～8038)

8035は甕で、口頸部はくの字形となり、口縁端部を肥厚し、凹線文を施す。口縁部外面には煤が付着する。胎土には中粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

8036・8037は甕の底部で、8036は、外面が被熱で変色する。胎土には、8036が粗粒砂から極細粒中礫を比較的多く、8037が中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

8038は高杯で、口縁部は体部から直立し、胎土には中粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

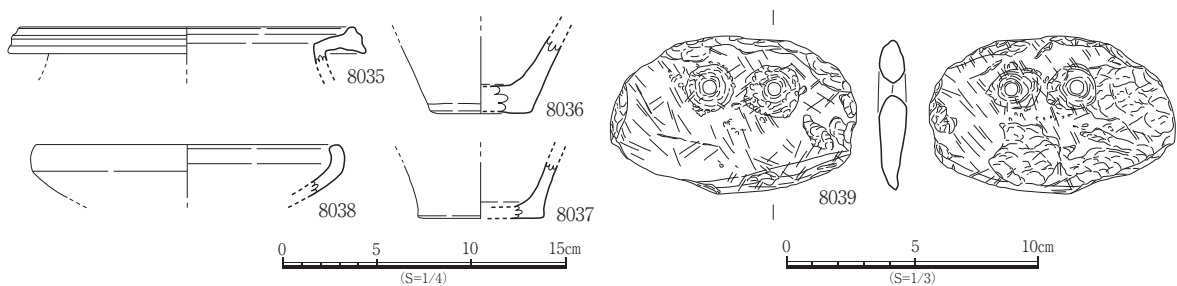


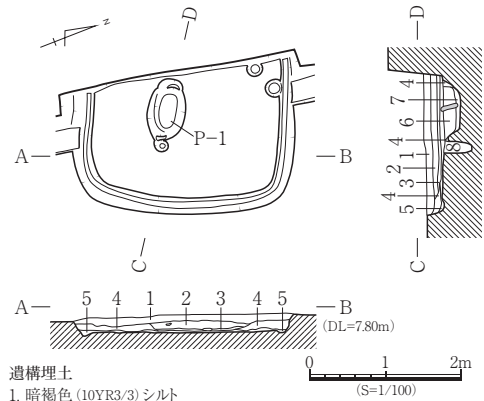
図3-572 ST-8002出土遺物実測図

石製品(図3-572 8039)

2穴の石庖丁で、背と刃部はやや外湾し、剝離部分以外は研磨する。紐孔は径0.5cmを測り、両面から穿孔する。

ST-8003(図3-573)

Ⅷ-1区南西部、壁際で検出した方形の竪穴状遺構で、西側約1/2は調査区外に延びる。長辺2.96m、短辺約2.60m、深さ16~27cmを測り、長軸方向はN-24°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。付属遺構として中央ピット(P-1)と壁溝および4個のピットを確認した。中央ピット(P-1)は楕円形を呈し、長径0.70m、短径0.50m、深さ23cmを測る。支柱穴は中央ピット両端で検出したピットとみられ、2本柱で棟を支えていたものとみられる。壁溝はすべての壁沿いを巡っており、幅6~10cm、深さ3~5cm、延長5.40mを測る。埋土は黒褐色~暗褐色(10YR3/2~3/3)シルトを主体に地山のブロック・土粒の含み具合で5層に分層される。出土遺物には弥生土器103点、石製品1点がみられ、弥生土器4点(8040~8043)と石製品1点(8044)が図示できた。



- 遺構埋土
1. 暗褐色(10YR3/3)シルト
 2. 黒褐色(10YR3/2)シルト
 3. 黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト
 4. 地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)シルト
 5. 地山のブロックを多量に含む黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト
 6. 黒褐色(10YR3/1)シルト
 7. 地山の土粒を含む黒色(10YR2/1)粘土質シルト
 8. 黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト

図3-573 ST-8003

出土遺物

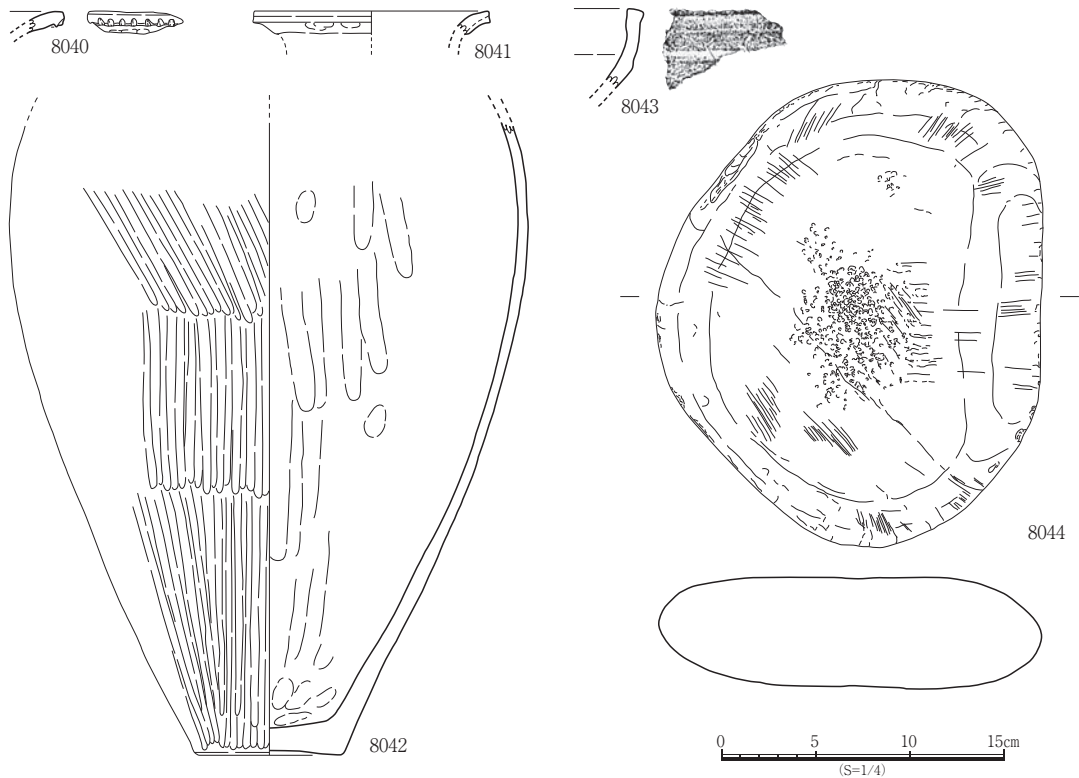


図3-574 ST-8003出土遺物実測図

弥生土器(図3-574 8040~8043)

8040・8041は甕で、8040は、口縁部が外反し、端部下端にヘラ状工具による刻目を施し、外面には煤が付着する。8041は、口縁部が外反し、貼付口縁となる。外面には指頭圧痕が残り、煤が若干付着する。胎土には、8040が細粒砂から粗粒砂を少し、8041が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

8042は壺の底部から中胴部で、底部は上げ底となり、胴部は外上方に立ち上がり、胴部最大径は中位より上にある。内面には指ナデ調整とナデ調整、外面にはヘラ磨きを施す。胎土には中粒砂から極粗粒砂を多く含む。

8043は高杯で、口縁部は胴部から直立し、外面に凹線文が施されていた可能性もある。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

石製品(図3-574 8044)

台石で、表面は平滑となり、縁辺を中心に擦痕、両面中央に敲打痕が残る。

② 堀・柵列跡

関連するとみられる5列の柵列を復元した。いずれもSD-8002を掘削中に検出したもので、SD-8002が半分ほど埋まった後に掘削されていた。区画をなしていた可能性が考慮される。

SA-8001(図3-575)

Ⅷ-1区北部、SA-8002に切られた形で検出した南北柵列跡(N-40°-E)である。14間分(10.10m)を検出し、柱間寸法は0.60~0.85mである。柱穴の平面形は楕円形を呈するものもあるが基本的に円形で、径約30cmを中心に、径21~40cmを測り、柱径は10cm前後とみられ、深さ8~20cmである。柱穴の埋土は褐灰色(10YR4/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器35点がみられたが、図示できるものはなかった。

SA-8002(図3-575)

Ⅷ-1区北部、SA-8001を掘り込み、SA-8003に切られた形で検出した南北柵列跡(N-40°-E)である。12間分(8.60m)を検出し、柱間寸法は0.70~0.75mである。柱穴の平面形は楕円形を呈するものもあるが基本的に円形で、径約34cmを中心に、径24~44cmを測り、柱径は10cm前後とみられ、深さ8~15cmである。柱穴の埋土は褐灰色(10YR4/1)シルト質砂であった。出土遺物には弥生土器71点がみられたが、図示できるものはなかった。

SA-8003(図3-575)

Ⅷ-1区北部、SA-8001・8002を掘り込んだ形で検出した南北柵列跡(N-42°-E)である。12間分(8.85m)を検出し、柱間寸法は0.70~0.85mである。柱穴の平面形は楕円形を呈するものもあるが基本的に円形で、径約30cmを中心に、径22~37cmを測り、柱径は10cm前後とみられ、深さ8~24cmである。柱穴の埋土は灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂であった。出土遺物には

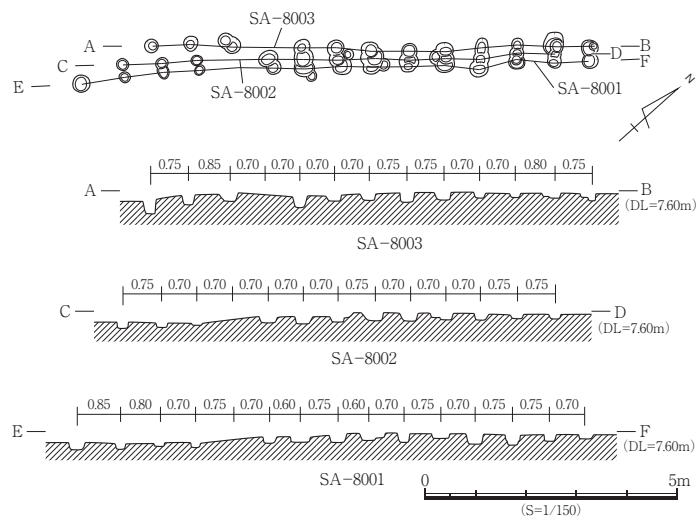


図3-575 SA-8001~8003

弥生土器44点がみられたが、図示できるものはなかった。

SA-8004 (図3-576)

VIII-1区南部, SA-8005に掘り込まれた形で検出した東西柵列跡(N-56°-E)である。14間分(10.55m)を検出し、柱間寸法は0.60~0.85mである。柱穴の平面形は楕円形を呈するものもあるが基本的に円形で、径約30cmを中心に、径18~42cmを測り、柱径は10cm前後とみられ、深さ8~19cmである。柱穴の埋土は褐灰色(10YR5/1)シルト質砂であった。出土遺物には弥生土器78点がみられたが、図示できるものはなかった。

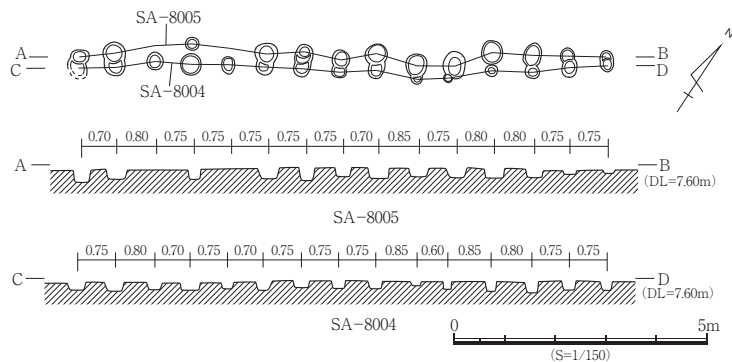


図3-576 SA-8004・8005

SA-8005 (図3-576)

VIII-1区南部, SA-8004を掘り込んだ形で検出した東西柵列跡(N-57°-E)である。14間分(10.65m)を検出し、柱間寸法は0.70~0.85mである。柱穴の平面形は楕円形を呈するものもあるが基本的に円形で、径約35cmを中心に、径25~54cmを測り、柱径は10cm前後とみられ、深さ6~26cmである。柱穴の埋土は褐灰色(10YR4/1)シルト質砂であった。出土遺物には弥生土器78点がみられたが、図示できるものはなかった。

③ 土坑

散発的に17基を検出した。

SK-8001 (図3-577)

VIII-1区西部で検出した不整形の土坑である。長辺1.53m, 短辺1.33m, 深さ29cmを測り、長軸方向はN-23°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器8点がみられたが、図示できるものはなかった。

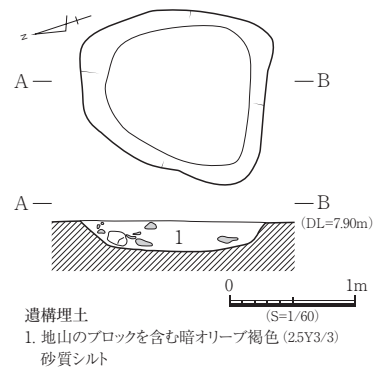


図3-577 SK-8001

SK-8002

VIII-1区南西端部, SD-8002に掘り込まれた形で検出した楕円形とみられる土坑で、南側は調査区外に続く。長径3.31m以上, 短径1.26m, 深さ13cmを測り、長軸方向はN-58°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを少し含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器6点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-8003 (図3-578)

VIII-1区南端部で検出した楕円形の土坑で、ピットを掘り込む。長径1.82m, 短径1.40m, 深さ16cmを測り、長軸方向はN-76°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は上下2層に分層され、

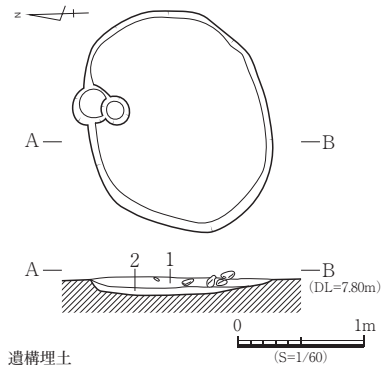


図3-578 SK-8003

上層が砂混じりの黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト, 下層が砂混じりの黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器59点と石製品1点がみられ, 弥生土器2点(8045・8046)と石製品1点(8047)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-579 8045・8046)

8045 は甕で, 口頸部は大きく外反し, 粘土帯の大半は剥落するが, 口縁端部下端にヘラ状工具による刻目を施す。胎土には極細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

8046 は甕の底部で, 上げ底となる。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

石製品(図3-580 8047)

砥石で, 残部全面に使用痕が残り, 各所に弱い敲打痕と擦痕, 一部に条痕がみられる。

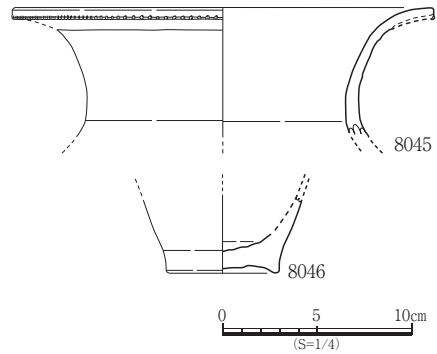


図3-579 SK-8003出土遺物実測図1

SK-8004

VIII-1区中央部で検出した舟形の土坑で, SD-8002を掘り込む。長辺4.16m, 短辺0.40m, 深さ12cmを測り, 長軸方向はN-54°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は地山の土粒を含む灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器30点と石製品1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-8005

VIII-1区中央部で検出した不整楕円形の土坑で, SU-8002を掘り込む。長径1.23m, 短径0.66m, 深さ22cmを測り, 長軸方向はN-18°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は上下2層に分層され, 上層が暗褐色(10YR3/3)砂質シルト, 下層が黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器8点がみられたが, 図示できるものはなかった。

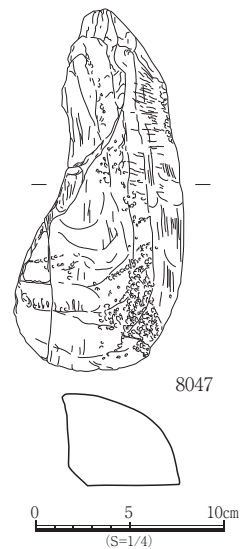


図3-580 SK-8003出土遺物実測図2

SK-8006

VIII-1区中央部で検出した不整形の土坑で, SU-8002・8003に掘り込まれる。長辺2.60m以上, 短辺2.34m, 深さ26cmを測り, 長軸方向はN-79°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は灰褐色(7.5YR5/2)シルト質砂であった。遺物は出土しなかった。

SK-8007

VIII-1区北東端部, 壁際で検出した円形とみられる土坑で, 大半は調査区外にある。長径0.70m以上, 短径0.51m以上, 深さ30cmを測る。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は4層に分層され, 上層から砂混じりの褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト, 褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト, 黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト, 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質シルトとなっていた。出土遺物には弥生土器1点がみられたが, 図示できなかつた。

SK-8008

VIII-2区南部で検出した弧状をなす溝状の土坑である。長辺3.76m, 短辺0.30m, 深さ6cmを測り, 長軸方向は北側でN-21°-E, 南側でN-10°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は地山のブロッ

3. VIII区 (1) 弥生時代

クと中礫を少し含む黒褐色(2.5Y3/1)シルトであった。遺物は出土しなかった。

SK-8009

VIII-2区南部, SK-8010に掘り込まれた形で検出した溝状の土坑である。長辺3.11m以上, 短辺0.46m, 深さ6cmを測り, 長軸方向はN-21°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトであった。遺物は出土しなかった。

SK-8010

VIII-2区南部, SK-8009を掘り込んだ形で検出した溝状の土坑である。長辺3.94m, 短辺0.66m, 深さ8cmを測り, 長軸方向はN-18°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は中礫を多く含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルトであった。遺物は出土しなかった。

SK-8011

VIII-2区中央部で検出した舟形の土坑である。長辺2.54m, 短辺0.34m, 深さ8cmを測り, 長軸方向はN-26°-Wを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は中礫を多く含む黒褐色(2.5Y3/2)砂質シルトであった。遺物は出土しなかった。

SK-8012

VIII-2区南部で検出した舟形の土坑である。長辺2.35m, 短辺0.38m, 深さ10cmを測り, 長軸方向はN-5°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルトであった。遺物は出土しなかった。

SK-8013

VIII-2区中央部, SK-8014に掘り込まれた形で検出した舟形の土坑である。長辺3.00m, 短辺0.38m, 深さ9cmを測り, 長軸方向はN-4°-Eを示す。断面形は舟底形を呈する。埋土は中礫を多く含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質シルトであった。遺物は出土しなかった。

SK-8014

VIII-2区中央部, SK-8013を掘り込んだ形で検出した溝状の土坑である。長辺8.14m, 短辺0.93m, 深さ6cmを測り, 長軸方向は北側約2/3がN-2°-E, 南側約1/3がN-25°-Wを示す。断面形は逆台形を呈し, 南側が一段落ち込む。埋土は中礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂であった。出土遺物には弥生土器14点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-8015

VIII-4区北部で検出した舟形の土坑で, ピットに各所を掘り込まれる。長辺1.78m, 短辺0.28m, 深さ7cmを測り, 長軸方向はN-60°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山の土粒を含む黒褐色(10YR3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器27点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-8016 (図3-581)

VIII-4区北部で検出した舟形の土坑である。長辺2.47m, 短辺0.46m, 深さ6cmを測り, 長軸方向はN-70°-Eを示す。断面形は舟底形を呈し, 底面南寄りにピット状の落ち込みがみられる。埋土は中礫を少し含むオリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器57点がみられたが, 図示できるものはなかった。

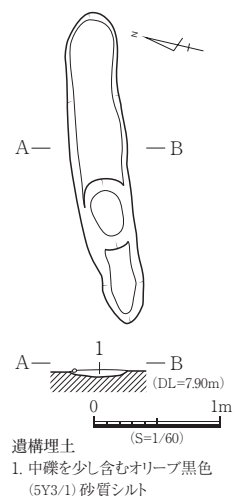


図3-581 SK-8016

SK-8017

Ⅷ-4区北部，SD-8008 を掘り込んだ形で検出した北側が曲がる溝状の土坑である。長辺2.55m，短辺0.38m，深さ11cmを測り，長軸方向は北側がN-33°-E，南側がN-66°-Eを示す。断面形は舟底形を呈し，南側が一段落ち込む。埋土は黒褐色(10YR3/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器26点がみられたが，図示できるものはなかった。

④ 溝跡

集落の境をなすとみられる溝跡など9条を確認した。この内，SD-8002は前述のとおりSA-8001～8005との関連が考慮され，溝で境をなした時期と柵列で境をなした時期があった可能性が考えられる。

SD-8001 (図3-582)

Ⅷ-1区西側，SD-8002に掘り込まれた形で検出した北壁中央部から南西隅壁に向って斜めに延びる東西溝で，それぞれ調査区外に続く。検出長は28.10m，幅は0.89～1.30m，深さは16～29cmを測り，断面形は舟底形を呈する。基底面は東(7.514m)から西(7.343m)に向って傾斜し，溝は南西(N-142°-W)に向かって弧状を描きながら延びる。埋土は基本的に黒褐色(10YR3/2)砂質シルトで，下層部で地山の土粒を含む灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトの堆積が認められた。出土遺物には弥生土器242点，石製品1点がみられ，石製品1点(8048)が図示できた。

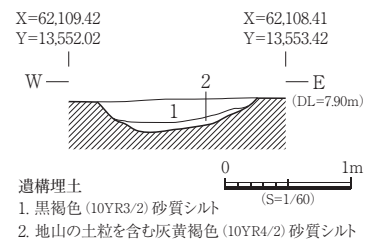


図3-582 SD-8001

出土遺物

石製品(図3-583 8048)

投弾で，断面は丸く，表面は平滑となる。



図3-583 SD-8001

SD-8002 (図3-584)

Ⅷ-1区中央部，SD-8001 を掘り込んだ形で検出した北壁東部から南西隅壁に向って斜めに延びる南北溝で，それぞれ調査区外に続く。検出長は30.28m，幅は1.46～3.78m，深さは22～34cmを測り，断面形は舟底形を呈する。基底面は北(7.506m)から南(7.377m)に向って傾斜し，溝は南西(N-139°-W)に延びた後，南西(N-124°-W)に角度を変えて調査区外に続く。溝は約半分が埋まった後(黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトを主体に2層に分層される。)，柵列(SA-8001～8005)が設置されており，関連性が考慮される。また，断面観察では，柵列が廃棄された後に舟底形のプランがみられ，再度溝として機能したことも考えられる。上層の埋土は2層に分層され，上から灰褐色(7.5YR5/2)砂質シルト，黒褐色(10YR2/3)砂質シルト，黒褐色(10YR2/3)砂質シルト，黒褐色(10YR2/3)砂質シルトとなっている。

出土遺物実測図

として機能したことも考えられる。上層の埋土は2層に分層され，上から灰褐色(7.5YR5/2)砂質シルト，黒褐色(10YR2/3)砂質シルト，黒褐色(10YR2/3)砂質シルト，黒褐色(10YR2/3)砂質シルトとなっている。

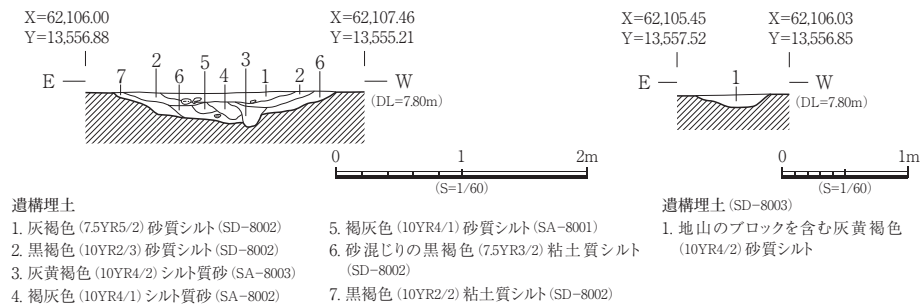


図3-584 SD-8002・8003, SA-8001～8003

た。出土遺物には弥生土器3,046点, 石製品9点, 軽石4点がみられ, 弥生土器14点(8049～8062)と石製品9点(8063～8071)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-585 8049～8062)

8049～8056は口縁部ないし口頸部の細片または破片である。8049は壺で, 肥厚した口縁部は外反し, 端部にはヘラ状工具で斜格子文を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

8050～8056は甕で, 8050は, 口縁部が外傾し, 貼付口縁となる。8051は, 口縁部が外傾し, 端部は凹面となる。8052は, 口頸部が外傾し, 端部にヨコナデ調整を施す。8053は, 口縁部が内傾する頸部から外傾し, 端部は平面となる。8054・8055は, 口縁部が外傾するもので, ハケ目が8054は内外面, 8055は外面に残る。8056は, 口縁部がくの字形を呈するもので, 端部を上方に拡張する。胎土には, 8050～8052・8055が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く, 8053が中粒砂から極粗粒砂を多く, 8054が細粒砂から極粗粒砂を少し, 8056が粗粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

8057は甕の胴部の細片で, 内面にはハケ調整, 外面にはタタキの後にハケ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

8058～8061は甕の底部とみられるもので, 8058は上げ底, 8059～8061は上げ底風となる。胎土には, 8058・8061が細粒砂から極粗粒砂を比較的多く, 8059が粗粒砂から極粗粒砂を多く, 8060が細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

8062は壺の底部とみられるもので, 胎土には細粒砂から極細粒中礫を比較的多く含む。

石製品(図3-585・586 8063～8071)

8063～8066は投弾で, 表面は平滑となり, 重量は28.8～62.6gを測る。8066には摩滅痕が残り, 光沢がある。

8067～8069は叩石である。8067は両面中央に敲打痕, 縁辺を中心に擦痕が残る。8068は片面中央

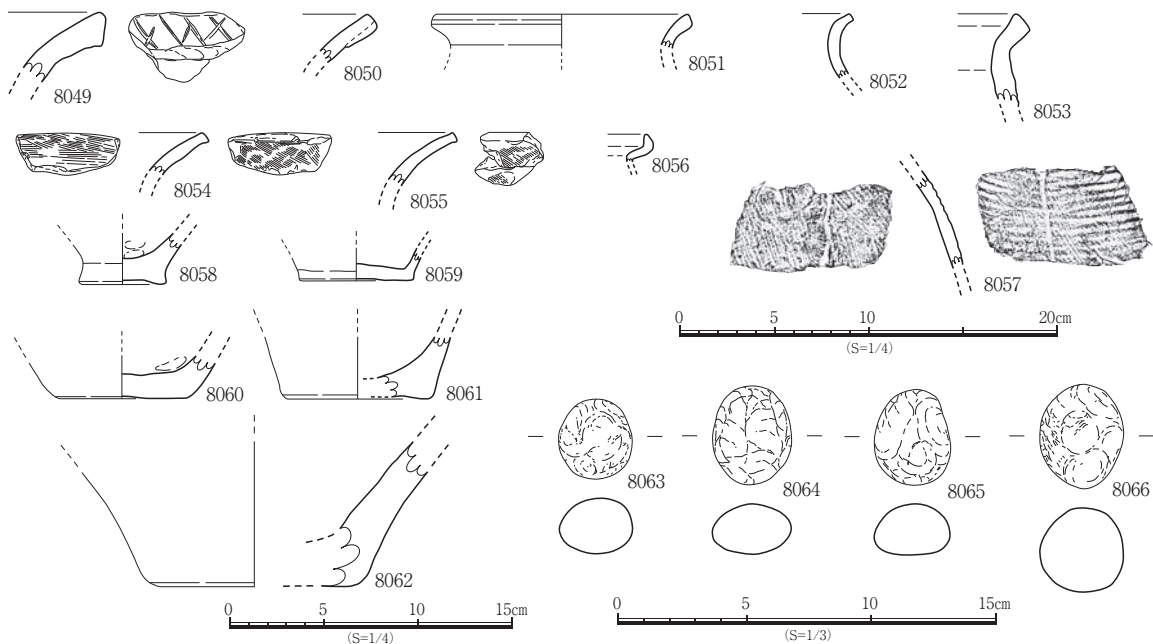


図3-585 SD-8002出土遺物実測図1

に敲打痕，縁辺を中心に擦痕，周縁に摩滅痕が残る。8069は扁平なもので，片面中央に敲打痕，縁辺を中心に擦痕が残る。

8070・8071は砥石である。8070は2面に使用面が残る。8071は2面に使用面と敲打痕及び擦痕が残る，叩石，磨石としても使用されたものとみられる。

SD-8003 (図3-584)

Ⅷ-1区中央部，SD-8002の東壁を切った形で検出した北壁中央部から南西隅壁に向って弧状を

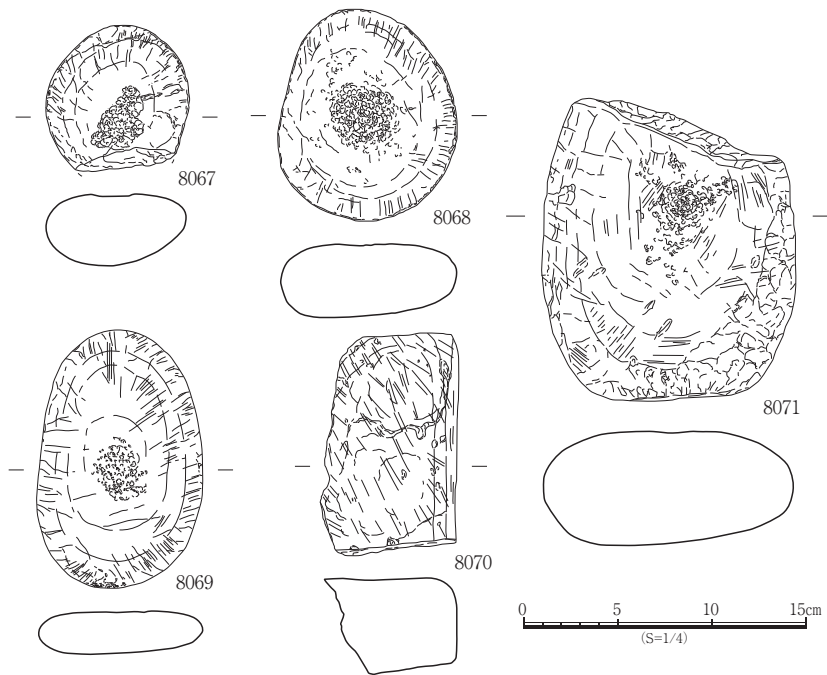


図3-586 SD-8002出土遺物実測図2

描きながら斜めに延びる南北溝で，それぞれ調査区外に続く。検出長は27.52m，幅は0.28～0.68m，深さは4～18cmを測り，断面形は舟底形を呈する。基底面は北(7.583m)から南(7.570m)に向ってやや傾斜し，溝は南西(N-144°-W)に向かって延びた後，角度を変え西南西(N-119°-W)に延びる。埋土は地山のブロックを含む灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器246点，石製品1点がみられたが，図示できるものはなかった。

SD-8004 (図3-587)

Ⅷ-1区南部，SD-8003を切った形で検出した南北溝で，南側は調査区外に続く。検出長は4.14m，幅は0.23～0.36m，深さは5～12cmを測り，断面形は逆台形を呈する。基底面は北(7.604m)から南(7.557m)に向ってやや傾斜し，溝は南西(N-125°-W)に向ってほぼ真直ぐ延び，調査区外に続く。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器47点，石製品1点がみられ，石製品1点(8072)が図示できた。

出土遺物

石製品(図3-588 8072)

投弾で，表面は平滑となり，重量は45.1gを測る。

SD-8005 (図3-587)

Ⅷ-2区北西端部で検出した南北溝で，それぞれ調査区外に続く。検出長は3.56m，幅は0.50～0.58m，深さは17cmを測り，断面形はU字形を呈する。基底面は南(7.631m)から北(7.610m)に向ってやや傾斜し，溝は北北東(N-15°-E)に向って延び，調査区外に続く。埋土は中礫混じりの黒褐色(2.5Y3/2)砂質シルトであった。出土遺物は図示できた弥生土器1点(8073)のみであった。

出土遺物

弥生土器(図3-588 8073)

壺で，口縁部はやや外反し，端部にヘラ状工具による刻目を両端，刺突文を中央に施文し，外面に

3. VIII区 (1) 弥生時代

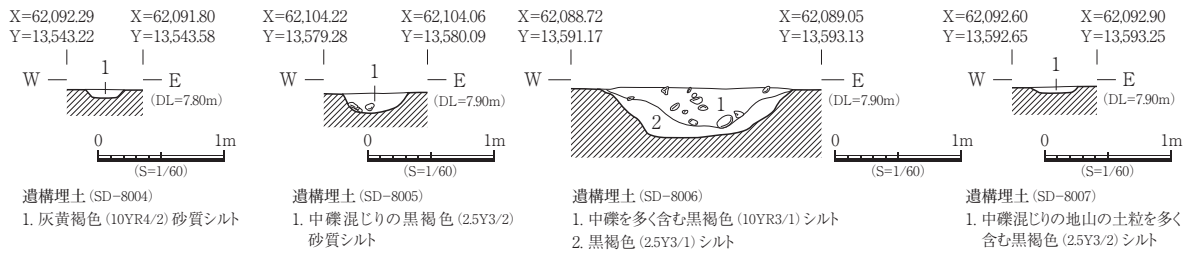


図3-587 SD-8004~8007

2条の凹線を巡らす。胎土には細粒砂から極粗粒砂を多く含む。

SD-8006 (図3-587)

VIII-2・3区で検出した南北溝で、個別に検出しているが、方向と形状からみて同一のものとみられ、それぞれ調査区外に続く。検出長は34.64m、幅は1.38~1.70m、深さは30~40cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は南(7.462m)から北(7.380m)に向って傾斜し、溝は北(N-11°-W)に向って延び、調査区外に続く。埋土は上下2層に分層され、上層が中礫を多く含む黒褐色(10YR3/1)シルト、下層が黒褐色(2.5Y3/1)シルトであった。出土遺物には弥生土器1,079点、石製品1点がみられ、弥生土器1点(8074)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-588 8074)

壺で、口頸部はやや外反し、口縁部は粘土帯を貼付して肥厚する。胎土には中粒砂から極細粒中礫を多く含む。

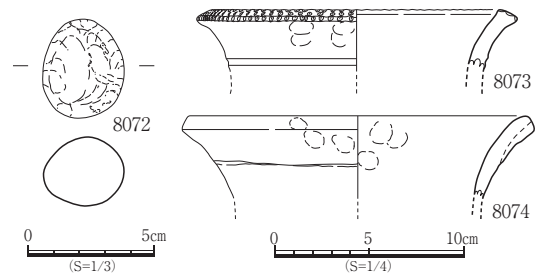


図3-588 SD-8004~8006出土遺物実測図

SD-8007 (図3-587)

VIII-2区、SD-8006を切った形で検出した南北溝で、それぞれ調査区外に続く。検出長は18.86m、幅は0.35~0.54m、深さは5~10cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は南(7.808m)から北(7.753m)に向って傾斜し、溝は北(N-15°-W)に向って弧状を描きながら延び、調査区外に続く。埋土は中礫混じりの地山の土粒を多く含む黒褐色(2.5Y3/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器12点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-8008 (図3-589)

VIII-4区の緩斜面で検出した南北溝で、それぞれ調査区外に続く。検出長は13.94m、幅は0.40~0.74m、深さは4~15cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は北(7.579m)から南(7.547m)に向ってやや傾斜し、溝は南南東(N-164°-E)に向って延び、調査区外に続く。埋土は地山のブロックを少し含む黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器16点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-8009 (図3-589)

VIII-4区の緩斜面、SD-8008の東側で検出した南北溝で、北側は調査区外に続く。検出長は8.94m、幅は0.56~0.76m、深さは4~10cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は北(7.439m)から南(7.337m)に向って傾斜し、溝は南南東(N-161°

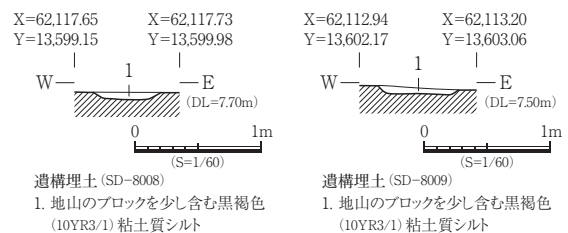


図3-589 SD-8008・8009

-E)を向く。埋土は地山のブロックを少し含む黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器12点がみられたが、図示できるものはなかった。

⑤ 畝状遺構

SD-8002の東壁を軸とした弧状を描いた溝状遺構が複数等間隔に検出されたもので、西野々遺跡でこれまでに確認したものとはやや様相を異にする。また、検出された場所が、丁度柵列の切れ目に当り、単に畝地とは言えない面もある。

SU-8001 (図3-590)

Ⅷ-1区南東部、SU-8002・8003に切られた形で検出した9本単位の弧状を描く畝状遺構で、畝間間隔は0.63～0.72m、畝幅は0.37～0.52mとみられる。幅は18～28cm、深さ3～15cmを測り、最大長は4.24mである。SD-8002の東壁

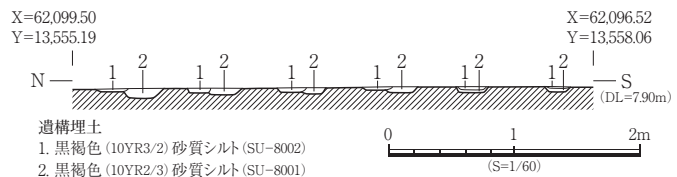


図3-590 SU-8001・8002

付近を軸に弧状を描いており、方向はN-30～70°-Eを示す。断面形は舟底形ないし逆台形を呈する。埋土は、黒褐色(10YR2/3)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器103点とサヌカイト片1点(1.0g)がみられたが、図示できるものはなかった。

SU-8002 (図3-590)

Ⅷ-1区南東部、SU-8003に切られた形で検出した6本単位の弧状を描く畝状遺構で、畝間間隔は0.61～0.76m、畝幅は0.42～0.53mとみられる。幅は20～27cm、深さ3～11cmを測り、最大長は3.92mである。SU-8001と同様にSD-8002の東壁付近を軸に弧状を描いており、方向はN-25～60°-Eを示す。断面形は舟底形ないし逆台形を呈する。埋土は、黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器28点がみられたが、図示できるものはなかった。

SU-8003

Ⅷ-1区南東部、SU-8001・8002を切った形で検出した3本単位の弧状を描く畝状遺構で、畝間間隔は0.92～1.04m、畝幅は0.46～0.72mとみられる。幅は24～50cm、深さ3～21cmを測り、最大長は1.42mである。SU-8001・8002と同様にSD-8002の東壁付近を軸に弧状を描いており、方向はN-40～85°-Eを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は、黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器4点、サヌカイト片1点(1.0g)がみられたが、図示できるものはなかった。

⑥ ピット

Ⅷ-3・4区を中心に分布しており、その多くが掘立柱建物跡や柵列跡などの柱穴と考えられるが、復元等には至っていない。総数は309個であった。この内、図示できた遺物が出土したのはP-8001(径37cmの円形で、深さ10cm)のみであった。埋土は基本的に黒褐色(10YR2/2～2/3)シルトであった。

出土遺物

石製品(図3-591 8075)

サヌカイト製の石鏃で、凹基となる。

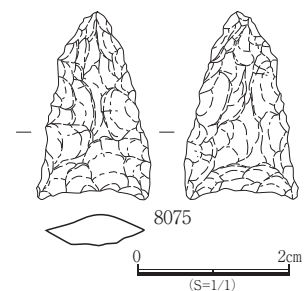


図3-591 ピット出土遺物 実測図

(2) 古代

VI区やVII区でみられたような掘立柱建物跡はなく、溝跡を中心に検出した。この様相からすると古代における西野々遺跡の東端部と位置付けることができる。

① 土坑

VIII-1区北西部を中心に、不整形の土坑など7基を検出したが、関連性を示すものは見出せなかった。

SK-8018

VIII-1区南西端部で検出した方形とみられる土坑で、西半分は調査区外に延びる。長辺1.06m、短辺0.50m以上、深さ68cmを測り、長軸方向はN-13°-Eを示す。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は3層に分層されるが主体は地山のブロックを多く含む黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルトで、上層に灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトと灰黄褐色(10YR4/2)シルトの堆積が認められた。出土遺物には弥生土器22点と土師質土器7点がみられ、土師質土器2点(8076・8077)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(図3-592 8076・8077)

8076は杯で、成形はA技法となる。胎土には極細粒砂から粗粒砂を若干含む。

8077は椀で、成形はA技法となり、底部外面端部には真下を向く高さ0.6cmの高台を貼付する。底部は体部に向って内湾する。胎土には極細粒砂から粗粒砂を若干含む。

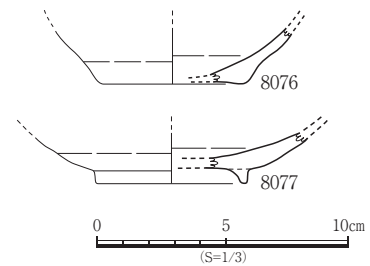


図3-592 SK-8018出土遺物実測図

SK-8019

VIII-1区北西部で検出した不整楕円形とみられる土坑で、SD-8011・8012・8015に切られる。長径1.92m、短径1.52m、深さ16cmを測り、長軸方向はN-34°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は灰色(5Y4/1)シルトであった。出土遺物には弥生土器20点と須恵器36点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-8020

VIII-1区北西部、SK-8019を切った形で検出した不整楕円形とみられる土坑で、SD-8011・8015・8016に切られる。長径2.26m、短径1.52m、深さ18cmを測り、長軸方向はN-61°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は上下2層に分層され、上層には地山のブロックを含む灰色(5Y4/1)シルト、下層には褐灰色(10YR4/1)シルトの堆積が認められた。出土遺物には弥生土器15点、須恵器15点、土師質土器2点がみられ、弥生土器1点(8078)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-593 8078)

甕で、口縁部は外反し、貼付口縁となり、外面には指頭圧痕が残る。内面にはハケ調整を施す。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

SK-8021

VIII-1区北西部、SK-8020の北側で検出した不整円形とみられる土坑で、SD-8015・8016、SK-8022に切られる。長径1.19m、短径1.10m、深さ33cmを測り、長軸方向はN-47°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂を主体に地山のブロックの含み具合によって2層に分層される。出土遺物には弥生土器20点がみられ、内1点(8079)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図3-593 8079)

甕で、口頸部は外反し、口縁部は貼付口縁となり、胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

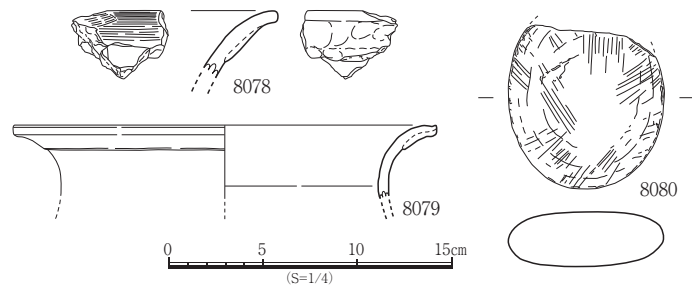


図3-593 SK-8020~8022出土遺物実測図

SK-8022

VIII-1区北西部、SK-8021を切った形で検出した不整楕円形とみられる

土坑で、SD-8015・8016に切られる。長径1.07m、短径0.89m、深さ15cmを測り、長軸方向はN-19°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックと土粒を含む灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂であった。出土遺物は図示した石製品1点(8080)のみであった。

出土遺物

石製品(図3-593 8080)

扁平な磨石で、縁辺を中心に擦痕、周縁に摩滅痕が残る。

SK-8023

VIII-1区北部で検出した不整形の土坑で、SU-8005に切られる。長辺2.25m、短辺1.80m、深さ16cmを測り、長軸方向はN-61°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器2点と土師質土器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-8024

VIII-1区北部、壁際で検出した不整楕円形とみられる土坑で、SU-8004~8006に切られる。長径約3.00m、短径2.24m、深さ26cmを測り、長軸方向はN-20°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し、東西壁際に平場がみられる。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器5点がみられたが、図示できるものはなかった。

② 溝跡

VIII-1区西部で南北溝跡7条、VIII-3・4区で東西溝跡5条を検出した。

SD-8010(図3-595)

VIII-1区北西部で検出した南北溝で、それぞれ調査区外に続く。検出長は10.50m、幅は1.18~1.32m、深さは16~25cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈する。基底面は北(7.610m)から南(7.568m)に向ってやや傾斜し、溝は南南西(N-162°-W)に向って延び、調査区外に続く。埋土は灰色(5Y4/1)シルトであった。出土遺物には弥生土器13点、土師器6点、須恵器12点、土師質土器27点、石製品1点がみられ、須恵器3点(8081~8083)、土師質土器1点(8084)、石製品1点(8085)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-594 8081~8083)

8081は杯身で、底部の切り離しは回転ヘラ切りで、外端部に断面逆台形の高さ0.4cmの高台が付く。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

8082は皿で、口縁部は斜め上方に上がり、端部は丸い。底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。胎土には極細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

8083は台付壺で、底部外面端部にはハの字形に開く高さ2.1cmの高台が付く。胎土には細粒砂から極粗粒砂を比較的多く含む。

土師質土器(図3-594 8084)

椀で、成形はA技法となり、底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。底部外面端部に真下を向く高さ0.7cmの高台が付く。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

石製品(図3-594 8085)

比較的扁平な叩石で、両面中央に敲打痕、縁辺を中心に擦痕が残る。

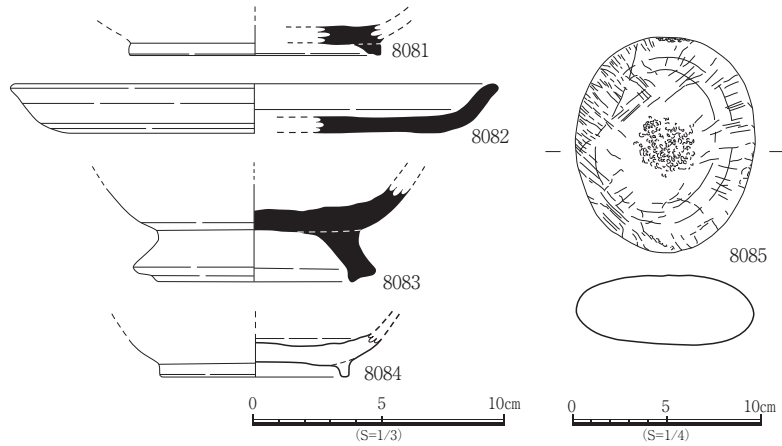


図3-594 SD-8010出土遺物実測図

SD-8011(図3-595)

VIII-1区北西部, SK-8019・

8020を切った形で検出した南北溝で、それぞれ調査区外に続く。検出長は18.89m、幅は0.39~0.65m、深さは5~13cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は北(7.701m)から南(7.647m)に向ってやや傾斜し、溝は緩やかにカーブを描きながら南南西(N-153°-W)に向って延び、調査区外に続く。埋土は灰色(7.5Y4/1)シルトであった。出土遺物には弥生土器4点、須恵器7点、土師質土器5点がみられ、須恵器1点(8086)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図3-597 8086)

杯で、口縁部は外上方に上がり、端部は丸い。口縁部から内面は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りとなり、ナデ調整を加える。胎土には白色極細粒砂から極粗粒砂を少し含む。

SD-8012(図3-595)

VIII-1区北西部, SK-8019を切り、SD-8013に掘り込まれた形で検出した南北溝で、それぞれ調査区外に続く。検出長は17.11m、幅は0.42~0.60m、深さは10~17cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面はほぼ平坦で、7.632~7.637mを測り、主軸方向は概ね北北東(N-26°-E)を示す。埋土は灰色(5Y4/1)シルトであった。出土遺物には弥生土器8点、土師器1点、須恵器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

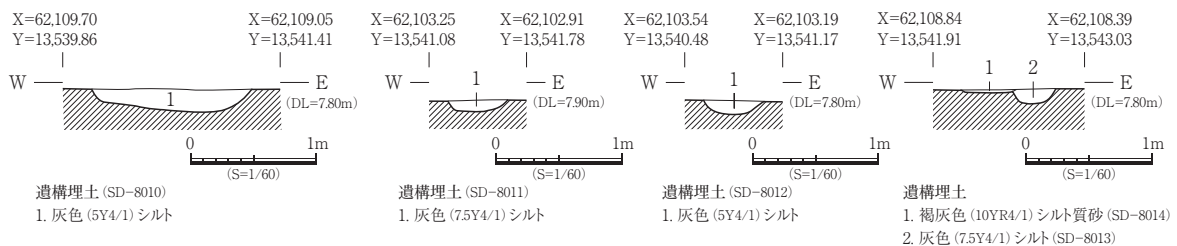


図3-595 SD-8010~8014

SD-8013 (図3-595)

Ⅷ-1区北西部, SD-8014 に掘り込まれた形で検出した南北溝で, それぞれ調査区外に続く。検出長は14.96m, 幅は0.28~0.42m, 深さは8~18cmを測り, 断面形は舟底形を呈する。基底面は北(7.780m)から南(7.647m)に向って傾斜し, 溝は緩やかにカーブを描きながら南南西(N-156°-W)に向って延び, 調査区外に続く。埋土は灰色(7.5Y4/1)シルトであった。出土遺物には弥生土器4点, 土師器1点, 須恵器6点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SD-8014 (図3-595・596)

Ⅷ-1区北西部, SD-8013 を掘り込んだ形で検出した南北溝で, それぞれ調査区外に続く。検出長は14.57m, 幅は0.31~0.68m, 深さは4~10cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は北(7.725m)から南(7.649m)に向って傾斜し, 溝は緩やかにカーブを描きながら南南西(N-158°-W)に向って延び, 調査区外に続く。埋土は褐灰色(10YR4/1)シルト質砂であった。出土遺物には弥生土器8点, 須恵器1点, 土師質土器2点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SD-8015 (図3-596)

Ⅷ-1区北西部, SD-8016 に掘り込まれた形で検出した南北溝で, それぞれ調査区外に続く。検出長は20.88m, 幅は0.60~1.20m, 深さは7~14

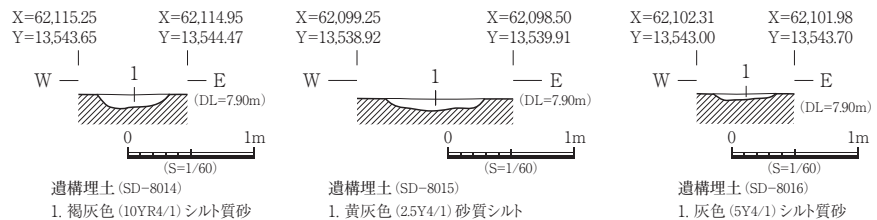


図3-596 SD-8014~8016

cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は北(7.746m)から南(7.631m)に向って傾斜し, 溝は南南西(N-147°-W)に向ってほぼ真直ぐ延び, 調査区外に続く。埋土は黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器43点, 土師器3点, 須恵器27点, 土師質土器30点がみられ, 土師器1点(8087)が図示できた。

出土遺物

土師器(図3-597 8087)

甕で, 口縁部は直立するとみられる胴部から外傾し, 端部上端を拡張する。内面にはハケ目が残る。胎土には極細粒砂から粗粒砂を多く含む。

SD-8016 (図3-596)

Ⅷ-1区西部, SD-8015 を掘り込んだ形で検出した南北溝で, それぞれ調査区外に続く。検出長は20.08m, 幅は0.28~0.60m, 深さは2~8cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は北(7.850m)から南(7.680m)に向って傾斜し, 溝は南南西(N-152°-W)に向ってほぼ真直ぐ延び, 調査区外に続く。埋土は灰色(5Y4/1)シルト質砂であった。出土遺物には弥生土器2点, 土師器15点, 須恵器27点, 土師質土器165点, 黒色土器1点がみられ, 須恵器1点(8088)が図示できた。

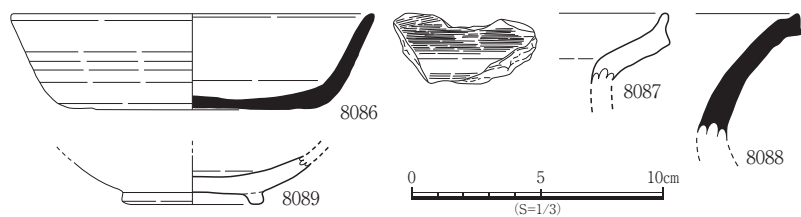


図3-597 SD-8011・8015・8016・8019出土遺物実測図

出土遺物

須恵器(図3-597 8088)

甕で、口縁部は外反する。胎土には極細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

SD-8017(図3-598)

Ⅷ-4区南東部, SD-8021の南隣で検出した東西溝で、東側は調査区外に続く。検出長は4.40m, 幅は0.32~0.50m, 深さは14~19cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は西(7.549m)から東(7.396m)に向って傾斜し、溝は東南東(N-109°-E)に向って延び、調査区外に続く。埋土は上下2層に分層され、上層が地山の土粒を少し含む黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト、下層が地山の土粒を多く含む黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器1点、須恵器1点、土師質土器4点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-8018(図3-598)

Ⅷ-3区中央部, SD-8019に掘り込まれた形で検出した東西溝で、西側は調査区外に続く。また、掘方が比較的しっかりしているもののⅧ-4区でその延長が確認されていないことから東側はⅧ-3区とⅧ-4区の間から始まったものとみられる。検出長は4.00m, 幅は0.90~1.02m, 深さは22~29cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は東(7.452m)から西(7.382m)に向って傾斜し、溝は西北西(N-62°-W)に向って延び、調査区外に続く。埋土は3層に分層され、上層から黒褐色(2.5Y3/2)砂質シルト、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質シルト、黄灰色(2.5Y4/1)シルト質砂であった。出土遺物には弥生土器120点がみられたが、図示できるものはなかった。

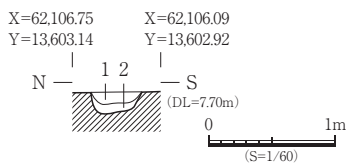
SD-8019(図3-598・599)

Ⅷ-3・4区, SD-8018を掘り込み、SD-8020・8021に切られた形で検出した東西溝で、途中で途切れるが東側と西側は調査区外に続く。検出長は22.52m, 幅は0.42~0.50m, 深さは9~27cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面は西(7.590m)から東(7.395m)に向って傾斜し、溝は東南東(N-110°-E)に向って延び、調査区外に続く。埋土は上下2層に分層され、上層が黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト、下層が地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器21点、須恵器2点、土師質土器30点がみられ、土師質土器1点(8089)が図示できた。

出土遺物

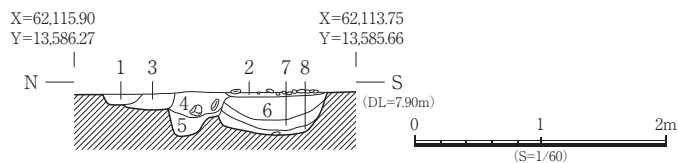
土師質土器(図3-597 8089)

椀で、底部は体部に向って内湾し、外面端部に高さ0.5cmの高台が付く。胎土には極細粒砂から中粒砂を比較的多く含む。



遺構埋土 (SD-8017)

1. 地山の土粒を少量含む黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト
2. 地山の土粒を多量に含む黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルト



遺構埋土 (SD-8018~8021)

- | | |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 地山の土粒を含む黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト(ピット) 2. 地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/2)砂質シルト (SD-8021) 3. 黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト (SD-8020) 4. 黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト (SD-8019) | <ol style="list-style-type: none"> 5. 地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルト (SD-8019) 6. 黒褐色(2.5Y3/2)砂質シルト (SD-8018) 7. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質シルト (SD-8018) 8. 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質砂 (SD-8018) |
|---|---|

図3-598 SD-8017~8021

SD-8020 (図3-598・599)

Ⅷ-3・4区, SD-8019 を掘り込んだ形で検出した東西溝で, 途中で途切れる箇所がみられるが, 方向と掘方から同一のものとみられる。溝の東側と西側はさらに調査区外に続く。検出長は 22.54m, 幅は 0.34~0.55m, 深さは 6~11cmを測り, 断面形は逆台形を呈する。基底面は西(7.716m)から東(7.454m)に向かって傾斜し, 溝は東南東(N-110°-E)に向かって伸び, 調査区外に続く。埋土は黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器4点, 須恵器2点, 土師質土器24点がみられたが, 図示できるものはなかった。

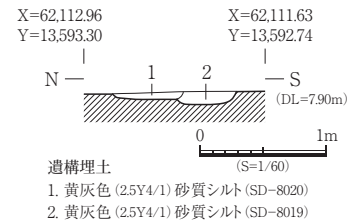


図3-599 SD-8019・8020

SD-8021 (図3-598)

Ⅷ-3・4区, SD-8018・8019 を掘り込んだ形で検出した東西溝で, 途中で途切れるが, 方向と掘方から同一のものとみられる。溝の東側と西側はさらに調査区外に続く。検出長は 6.65m, 幅は 0.73~1.03m, 深さは 3~6cmを測り, 断面形は舟底形を呈する。基底面は西(7.777m)から東(7.542m)に向かって傾斜し, 溝は東南東(N-109°-E)に向かって伸び, 調査区外に続く。埋土は地山のブロックを含む黒褐色(2.5Y3/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器9点, 土師質土器5点がみられたが, 図示できるものはなかった。

③ 畝状遺構

Ⅷ-1区北部でまとまって確認された畝地跡とみられるもので, 7列を確認した。西野々遺跡でこれまでに確認した畝状遺構に比べ, 相対的に短いものである。

SU-8004

Ⅷ-1区北部, SU-8005に切られた形で検出した7本単位の東西方向の畝状遺構で, 畝間間隔は0.67~0.76m, 畝幅0.37~0.45mである。幅は 26~38cm, 深さ 2~11cmを測り, 最大長は 1.94mである。主軸方向は概ねN-57°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は黄灰色(2.5Y5/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器45点, 須恵器4点, 土師質土器1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SU-8005 (図3-600)

Ⅷ-1区北部, SU-8004 を掘り込み, SU-8006 に切られた形で検出した7本単位の東西方向の畝状遺構で, 長さに散つきはみられるものの, 方向的にみて同一のものとみられる。畝間間隔は 0.60~0.70m, 畝幅0.36~0.44mである。幅は 20~38cm, 深さ 2~8cmを測り, 最大長は約6.00mである。主軸方向は概ねN-70°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は灰色(7.5Y4/1)シルトであった。出土遺物には弥生土器54点, 須恵器25点, 土師質土器9点がみられ, 須恵器2点(8090・8091)が図示できた。

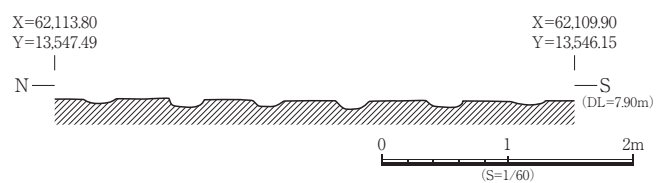


図3-600 SU-8005

出土遺物

須恵器(図3-601 8090・8091)

8090は小型の杯身で, 底部は厚く, 口縁部は外上方に上がり, 端部を細く仕上げる。体部下端には

3. VIII区 (3) 中世

回転ヘラ削りの痕が残る。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、外端部には三日月形の高さ1.0cmの高台が付く。胎土には白色極細粒砂から中粒砂を少し含む。

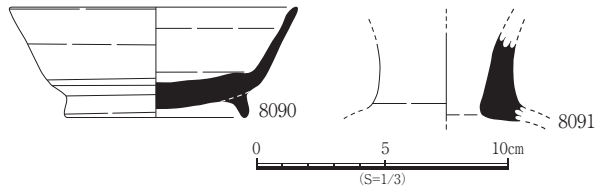


図3-601 SU-8005出土遺物実測図

8091は細頸壺で、頸部は胴部から屈曲して外傾する。胎土には極細粒砂から粗粒砂を少し含む。

SU-8006

VIII-1区北部，SU-8005を掘り込んだ形で検出した5本単位の東西方向の畝状遺構で、畝間間隔は0.65～0.69m，畝幅0.42～0.48mである。幅は18～26cm，深さ3～7cmを測り，最大長は1.30mである。主軸方向は概ねN-87°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。埋土は灰色(10Y4/1)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

SU-8007 (図3-602)

VIII-1区北部東寄りで検出した5本単位の東西方向の畝状遺構で、畝間間隔は0.66～1.07m，畝幅0.46～0.86mである。幅は16～22cm，深さ2～5cmを測り，最大長は1.36mである。主軸方向は概ねN-80°-Wを示す。

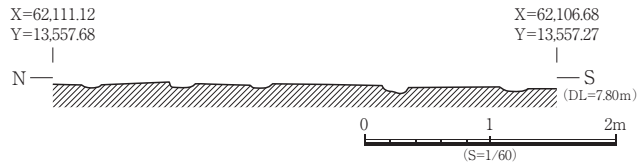


図3-602 SU-8007

断面形は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器9点，土師質土器3点がみられたが、図示できるものはなかった。

④ ピット

VIII-1区北西部を中心に確認したが、掘立柱建物跡や柵列跡などを復元することはできなかった。総数は148個であった。この内、図示できた遺物が出土したのはP-8002(径46cmの円形で、深さ17cm)のみであった。埋土は基本的に黒褐色(7.5YR3/1)シルトであった。

出土遺物

弥生土器(図3-603 8092)

甕で、口縁部は外反し、端部下端にヘラ状工具で刻目、その下に微隆起突帯を貼付する。胎土には細粒砂から粗粒砂を比較的多く含む。

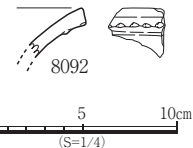


図3-603 ピット
出土遺物実測図

(3) 中世

屋敷から東に約80m離れた地点に当たり、遺構数も少なく、確認された遺構は掘立柱建物跡1棟、溝跡3条、性格不明遺構1基、ピット123個であった。この内、性格不明遺構としたものは後述のとおり珍しい構造物で、その性格が注目される。

① 掘立柱建物跡

1棟復元できたが、南半分は調査区外に延びており、全容は不明である。

SB-8001 (図3-604)

VIII-1区南部，壁際で検出した桁行3間(6.00m)程度，梁行2間(5.90m)の南北棟建物跡とみられるものである。棟方向はN-25°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.90・2.10m，梁行(東西)が2.60・3.30m

を測る。柱穴の平面形はほぼ円形で、径約28cmを中心に、径23～32cmを測り、柱径は12cm前後とみられ、深さは8～59cmである。柱穴の埋土は地山の土粒を多く含む褐灰色(10YR4/1)シルトであった。出土遺物には弥生土器5点、土師質土器7点がみられたが、図示できるものはなかった。

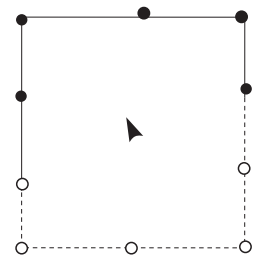


図3-604 SB-8001

② 溝跡

確認したものはいずれも短く、小規模なもので、一定の長さがあるものを溝跡として報告する。

SD-8022 (図3-605)

Ⅷ-1区南部で検出したL字形の溝で、東西方向は途中で途切れるが、方向と掘方から同一のものとみられる。溝の南側は調査区外に続く。検出長は10.62m、幅は0.13～0.30m、深さは2～7cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈する。基底面はほぼ平坦で、標高7.686～7.721mを測り、溝の主軸方向

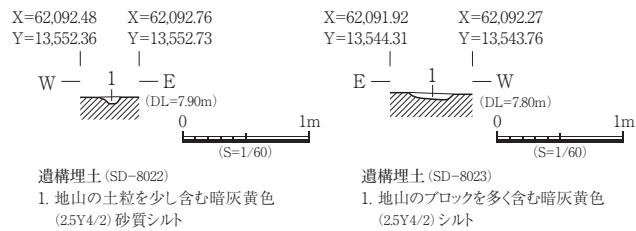


図3-605 SD-8022・8023

は東西が北西(N-53°-W)、南北が北北東(N-14°-E)を示す。埋土は地山の土粒を少し含む暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器1点、土師質土器2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-8023 (図3-605)

Ⅷ-1区南西部、SD-8022を掘り込んだ形で検出した南北溝で、途中で途切れるが、方向と掘方から同一のものとみられる。溝の南側は調査区外に続く。検出長は8.55m、幅は0.24～0.37m、深さは1～7cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面はほぼ平坦で、標高7.594～7.676mを測り、溝の主軸方向は北北東(N-31°-E)を示す。埋土は地山のブロックを多く含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルトであった。遺物は出土しなかった。

SD-8024

Ⅷ-2区中央部で検出した南北溝である。検出長は9.38m、幅は0.39～0.55m、深さは2～7cmを測り、断面形は逆台形を呈する。基底面はほぼ平坦で、標高7.881～7.844mを測り、溝の主軸方向は北(N-2°-E)を示す。埋土は地山のブロックを多く含むにぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器8点、土師質土器13点がみられたが、図示できるものはなかった。

③ 性格不明遺構

ピットが格子目状に検出された箇所があり、建物跡とは異なるとみられることから性格不明遺構として報告する。

SX-8001 (図3-606)

Ⅷ-1区中央部から北東部にかけて検出したピットが格子目状に検出されたもので、その範囲は東西約18.0m、南北約20.0mに及び、さらに北側に広がる可能性もある。復元した規模は、最も残りの良い部分で、桁行(南北)12間(18.45m)、梁行(東西)6間(16.80m)を測り、梁は1～4間で桁と繋がっており、加工品を作るための干し棚等の格子目状の簡易な構造物が存在したものとみられ、桁方向はN-21～27°-Eを示す。柱間寸法は、桁行(南北)が1.20～1.90m、梁行(東西)が2.60～2.80mを測る。柱穴の

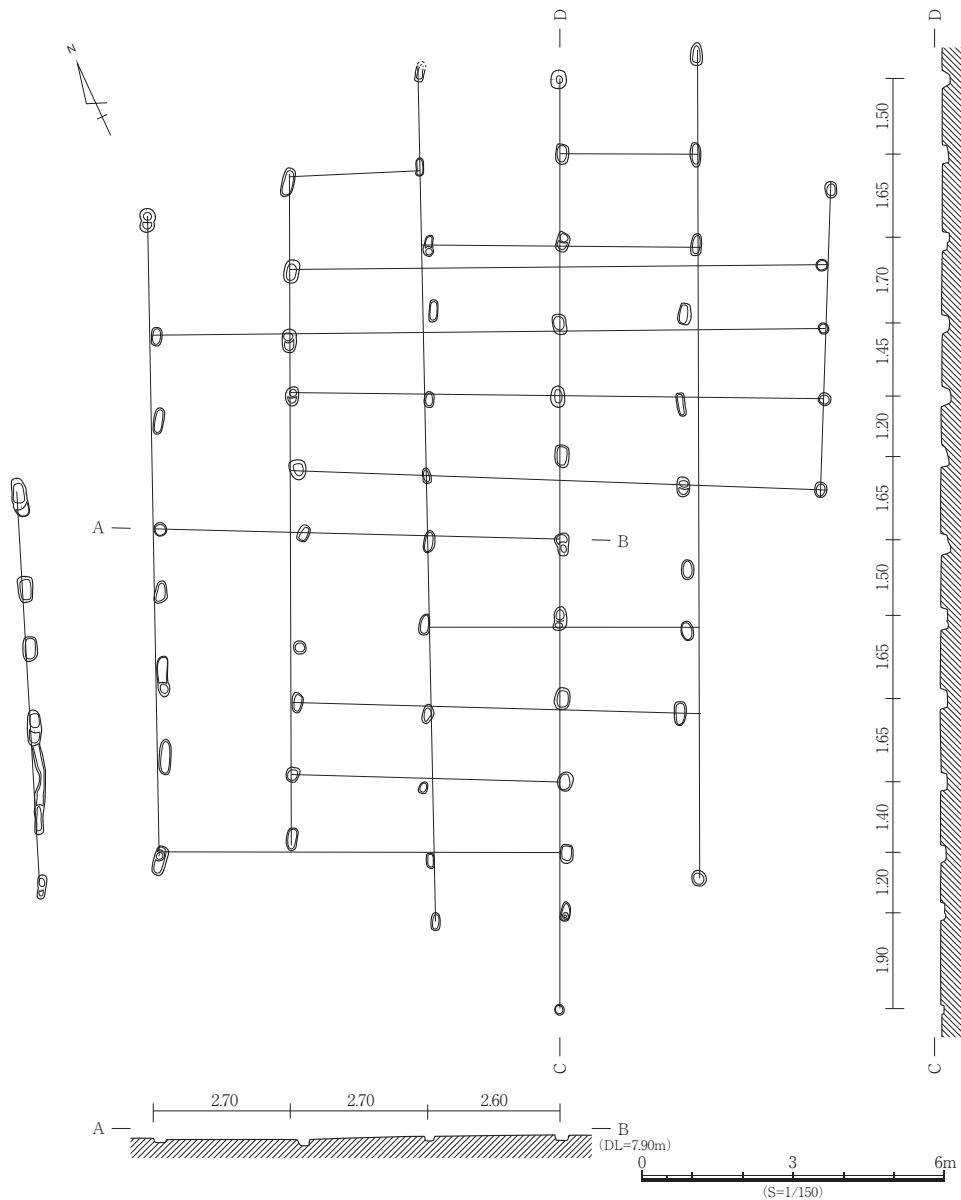


図3-606 SX-8001

平面形は円形を基本とするが、抜き取りや建替えが行われたとみられ、楕円形を呈するものが多く、径約26cmを中心に、径18～33cmを測り、柱径は9cm前後とみられ、深さは2～25cmである。柱穴の埋土は灰黄褐色(10YR4/2)シルトであった。出土遺物には弥生土器27点、土師質土器14点、瓦器1点がみられ、瓦器1点(8093)が図示できた。

出土遺物

瓦器(図3-607 8093)

椀で、口縁部は体部から内湾して立ち上がる。口縁部はヨコナデ調整で、体部外面には指頭圧痕が残る。胎土には中粒砂を中心に粗粒砂を少し含む。

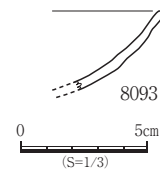


図3-607 SX-8001
出土遺物実測図

(4) 近世

土坑1基を確認した。

① 土坑

SK-8025

Ⅷ-1区北西端部, 壁際で検出した方形とみられる土坑で, 大半は調査区外に続く。長辺3.94m以上, 短辺1.25m以上, 深さ50cmを測り, 長軸方向はN-12°-Eを示す。断面形は逆台形を呈し, 底面は南側が一段低くなる。埋土は灰色(7.5Y4/1~5/1)シルト質砂ないしシルトが主体となり, 8層に分層される。出土遺物には弥生土器26点, 土師器2点, 須恵器18点, 土師質土器46点, 瓦質土器3点, 青磁2点, 肥前系磁器4点, 能茶山焼3点, 近世陶器21点, 近世磁器27点, 瓦3点, 石製品・木製品各1点がみられ, 肥

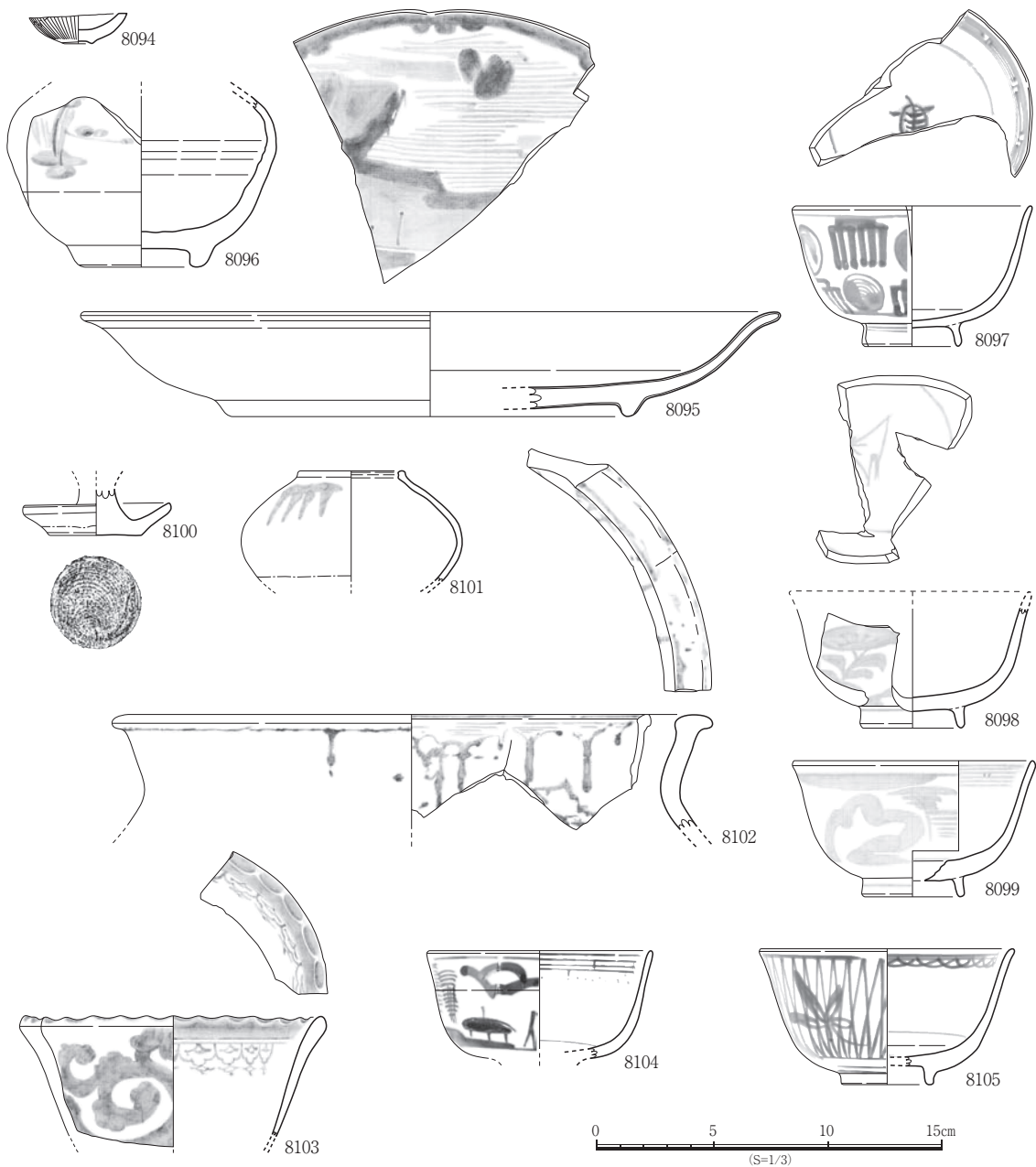


図3-608 SK-8025出土遺物実測図

3. Ⅳ区 (4) 近世

前系磁器3点(8094～8096), 能茶山焼3点(8097～8099), 近世陶器3点(8100～8102), 近世磁器3点(8103～8105)が図示できた。

出土遺物

肥前系磁器(図3-608 8094～8096)

8094は紅猪口で、型作りで、外面には条線が残り、口唇部から内面に白色釉を施釉する。胎土には黒色粒を若干含む。

8095は皿で、体部は内湾気味に上がり、口縁部で外反する。内面全面に文様を施し、全面に透明釉を施釉する。畳付は釉ハギとなる。胎土には黒色粒を若干含む。

8096は瓶で、底部は削り出し高台となり、胴部は丸く、外面に水草を描き、外面全面に施釉し、畳付を釉ハギする。

能茶山焼(図3-608 8097～8099)

いずれも広東茶碗で、底部外面には細い高台を貼付し、体部は内湾気味に上がり、口縁部で外上方を向く。8097は見込に亀、8098は見込に富士山、外面に草花文、8099は外面に草花文を施す。いずれも胎土には黒色粒を若干含む。

近世陶器(図3-608 8100～8102)

8100は台付灯明皿で、底部は回転糸切りとなり、斜め上方に立ち上がり、中央に脚柱が付く。胎土には細粒砂から粗粒砂を若干含む。

8101は小壺で、胴部は偏球状となり、口縁部は僅かに立ち上がる。肩部外面に笹文を描き、外面に施釉する。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

8102は甕で、口頸部はくの字形となり、端部を肥厚する。残部全面に鉄釉が施釉されるが、摩耗、剝離が著しく釉が残っているのは釉溜まり部分と釉垂れ部分周辺である。胎土には極細粒砂から中粒砂を若干含む。

近世磁器(図3-608 8103～8105)

8103は鉢で、口縁部は外上方に立ち上がり、口唇部は輪花状となる。外面と口縁部内面に文様を描く。胎土には黒色粒を若干含む。

8104・8105は広東茶碗で、体部は内湾して上がり、口縁部は外上方を向く。8104の外面には窓絵、8105は花文と斜格子文を描く。いずれも胎土には黒色粒を若干含む。

第Ⅳ章 自然科学分析

パリーノ・サーヴェイ株式会社

辻 康男・矢作健二・辻本裕也・松元美由紀・高橋 敦・齊藤紀行

1. はじめに

本報告では、調査区やその周辺の古環境変遷と、発掘調査で検出された土器の胎土に関する岩石学データの採取を目的に、実施した各種の自然科学分析結果について述べる。前者の目的に対しては、調査区に累重する堆積層の層相観察と記載、植物珪酸体分析、種実遺体分析(土壌試料の洗い出し・分類、洗い出し試料同定・解析)、炭化材同定、粒度分析、不攪乱堆積物試料の軟X線写真による層相観察を実施した。また、後者の目的については、土器の胎土についての薄片観察と蛍光X線分析を適用した。

2. 試料

試料採取位置については、後に示す図4-12に記載している。植物珪酸体分析は、Ⅶ-1区のSD-7001埋土から2点、Ⅷ-1区のSD-8001から3点の合計5点を実施する。種実遺体分析は、Ⅶ-1区のST-7007埋土について1式分を実施する。炭化材同定については、Ⅵ-2区のSK-6017で3点、SK-6023で1点、ST-6029のP-1で1点の合計5点を行う。さらに、Ⅶ-1区のST-7007埋土の洗い出し試料から検出された炭化材5点についても分析する。粒度分析は、Ⅵ-2区の深掘トレンチから採取した試料(1地点の試料番号1・4~6, 2地点の試料番号1, 4地点の試料番号1~4)の合計9点を行う。不攪乱堆積物試料の軟X線写真撮影は、Ⅷ-1区の北壁断面から採取した不攪乱堆積物サンプルについて1点を実施する。この他、SK-7009出土の弥生土器壺内から検出された種実遺体1点の同定を行う。

胎土薄片作成鑑定と胎土蛍光X線分析を実施した胎土分析試料は、西野々遺跡より出土した弥生土器20点である。試料にはNo.1~20が付されている。器形は壺が9点、甕が11点である。土器の調整などの特徴から、試料は、畿内第Ⅲ、第Ⅲ~Ⅳ、第Ⅳ、第Ⅴの各様式に分類されており、また、肉眼で認識される胎土の特徴から推定される地域性などの所見も示されている。

3. 分析方法

(1) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。結果は、植物珪酸体含量の一覧表4-1で示すとともに、植物珪酸体

3. 分析方法 (2) 種実遺体分析

含量の層位的変化を図示する。

(2) 種実遺体分析

土壌試料200cc (336.5g)を0.5mm目の篩を通して水洗し、残渣をシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実や炭化材などを抽出する。検出された植物遺体等は、48時間80℃で乾燥後の重量を求め、種類毎にビンに入れて保管する。

(3) 炭化材同定

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林(1991)、伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

(4) 粒度分析

公文・立石編(1998)の方法を参考に礫・砂粒子画分は篩別法、シルト・粘土粒子画分はピペット法で行った。また、粒径区分はWentworth(1922)に従った。以下に分析操作工程を示す。

試料を風乾して2mmφ篩でふるい分ける。2mmφ篩上粒子は水洗して重量を測定する。一方、2mmφ篩下粒子は40.00gをビーカーに秤量し、蒸留水と30%過酸化水素水を加え、熱板上で有機物分解を行う。分解終了後、蒸留水と分散剤(4%カルゴン)を加え、攪拌しながら30分間音波処理を行う。沈底瓶にこの懸濁液を移し、往復振とう機で1時間振とうする。振とう終了後、水で全量を1000mlにする。この沈底瓶を1分間手で激しく振り、直ちに静置する。ピペット法に準じて所定時間に所定深度から粘土・シルト画分(0.063mm>), 粘土画分(0.0039mm>)を10ml採取し、105℃で24時間乾燥させた後、重量を測定し加積通過率(質量%)を求める。ピペット法終了後、懸濁液を63μm篩で水洗いする。63μm篩残留物を105℃で24時間熱乾後、1.0, 0.5, 0.25, 0.125mmφ篩でふるい分け、各篩毎に篩上残留物の質量を測定し、加積通過率(質量%)を求める。ピペット法およびふるい分けで求められる加積通過率(質量%)から粒径加積曲線を描き、Wentworth(1922)の粒径区分毎の質量を算出する。

(5) 軟X線写真撮影

地層断面より採取したブロック状の不攪乱堆積物を厚さ1cmの板状に整形し、それをアクリル板上に設置し、周囲を幅1cmの棒状のアクリル樹脂で固定し、軟X線写真撮影を実施した。撮影したフィルムについては、肉眼とルーペによる観察およびスキャナーでコンピューター上に取り込んだ画像の補正などから、堆積・土壌構造の特徴把握を行う。試料調整および撮影については、公文・立石編(1998)、斉藤(1993)を参考とした。

(6) 胎土薄片作製鑑定

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄

片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

データの呈示は、松田ほか(1999)が示した仕様に従う。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

(7) 胎土蛍光X線分析

波長分散型蛍光X線装置を用いたガラスビード法による定量分析を行う。

① 測定元素

測定元素はSiO₂, TiO₂, Al₂O₃, Fe₂O₃, MnO, MgO, CaO, Na₂O, K₂O, P₂O₅の10元素およびLOIとRb, Sr, Zr, Baの微量4元素である。

② 装置

理学電機工業社製RIX1000 (FP法のグループ定量プログラム)

③ 試料調製

試料を振動ミル(平工製作所製TI100; 10ml容タンングステンカーバイト容器)で微粉碎し、105℃で4時間乾燥させた。この微粉碎試料についてガラスビードを以下の条件で作成した。

溶融装置; 自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビードサンプラー (3491A1)

溶剤及び希釈率; 融剤(ホウ酸リチウム) 5.000g: 試料0.500g

剥離剤; LiI (溶融中1回投入)

溶融温度; 1200℃ 約7分

④ 測定条件

X線管; Cr (50Kv-50mA)

スペクトル; 全元素Ka

分光結晶; LiF, PET, TAP, Ge

検出器; F-PC, SC

計数時間; Peak40sec, Back20sec

4. 結果

(1) 植物珪酸体分析

結果を表4-1, 図4-1に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。以下に、各地区の弥生溝跡での産状を述べる。

① VII-1区 SD-7001

試料番号1と2の植物珪酸体含量は、3万個/g前後である。いずれの試料も、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。なお、栽培植物であるイネ属も検出され、短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が認められる。その含量は少なく、数百個/g程度である。

4. 結果 (1) 植物珪酸体分析

表4-1 植物珪酸体含量

(個/g)

種 類	上段:調査区 中段:遺構 下段:試料番号				
	Ⅶ区-1区		Ⅷ区-1区		
	SD-7001		SD-8001		
	1	2	1	2	3
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ族イネ属	100	200	-	100	200
タケ亜科ネザサ節	2,300	2,800	4,600	6,700	2,300
タケ亜科	8,800	10,800	13,000	15,700	9,400
ヨシ属	100	-	100	300	200
ウシクサ族コブナグサ属	200	100	100	-	-
ウシクサ族ススキ属	100	100	300	-	200
イチゴツナギ亜科	300	800	100	400	400
不明キビ型	300	200	1,900	2,200	1,100
不明ヒゲシバ型	700	900	1,300	2,500	1,600
不明ダンチク型	1,600	1,000	1,800	2,300	2,700
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ族イネ属	200	300	300	100	100
タケ亜科ネザサ節	4,400	5,000	3,100	9,200	4,400
タケ亜科	7,100	4,900	5,100	4,600	11,500
ヨシ属	200	100	400	300	200
ウシクサ族	200	200	300	300	600
不明	2,100	3,300	3,900	3,700	5,000
合 計					
イネ科葉部短細胞珪酸体	14,600	16,900	23,200	30,200	18,100
イネ科葉身機動細胞珪酸体	14,300	13,900	13,000	18,200	21,900
総 計	28,900	30,800	36,200	48,400	40,000

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)。

なお、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後丸めている。

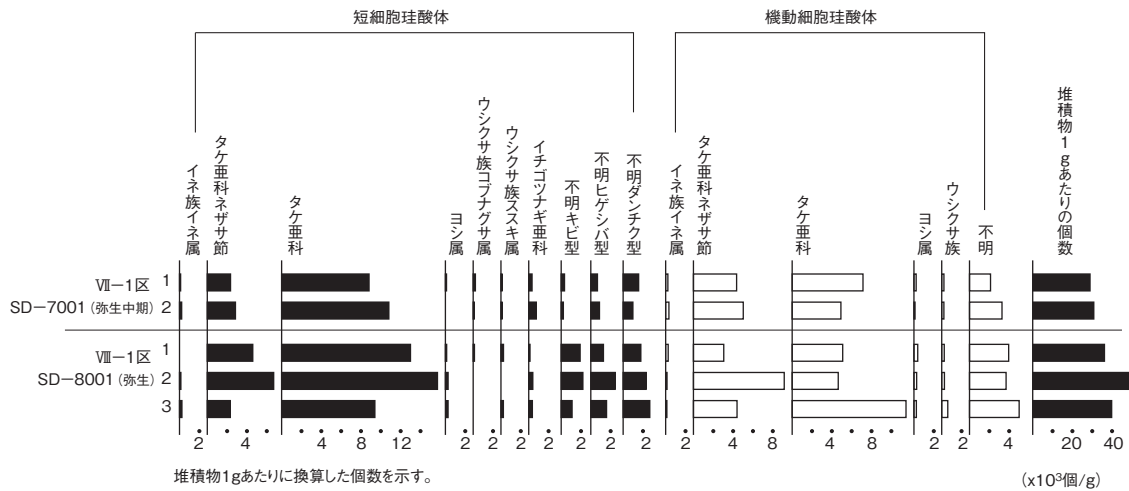


図4-1 植物珪酸体含量

② Ⅷ-1区 SD-8001

試料番号1, 2, 3の植物珪酸体含量は、3.6～4.8万個/gである。すべての試料において、Ⅶ-1区のSD-7001の試料と同様に、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、イネ属、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。イネ属は短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が認められ、その含量は数百個/g程度である。

表4-2 種実分析結果

分類群		部位	状態	VII-1区	
				ST-7007 中層	SK-7009
和名	学名			土壌200cc(371.35g)	単体
イネ	<i>Oryza sativa</i>	穎	炭化・破片	28	-
コムギ	<i>Triticum aestivum</i>	胚乳	炭化	6	-
炭化材(径4mm以上)			炭化	5cc(1.41g)	-
不明植物		地下茎?		2	1

(2) 種実遺体分析

結果を表4-2に示す。ST-7007中層からは、栽培植物のイネの炭化穎が28個、コムギの炭化胚乳が6個、炭化材5cc(1.41g)、地下茎と思われる植物片2個が検出された。なお、SK-7009の分析試料は、種実ではなく地下茎と思われる植物片であった。以下に、本分析にて同定された種実の形態的特徴を記す。

① イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

ST-7007中層から、穎(果)の破片が28個検出された。炭化しており黒色を呈す。完形ならば6~7.5mm、幅3~4mm、厚さ1.5~2mm程度の長楕円形。破片は、基部の斜切状円柱形の果実序柄部分で、大きさは1~2.5mm程度。果皮表面には顆粒状突起が縦列する。

② コムギ (*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

ST-7007中層から、胚乳が6個検出された。炭化しており黒色、長さ3~3.5mm、径2~2.5mm程度の楕円体。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑~粗面。

(3) 炭化材同定

樹種同定結果を表4-3に示す。炭化材は針葉樹のヒノキ科と落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属クヌギ節に同定された。このほか、ST-6026のP-1とST-7007中層の炭化材では、クヌギ節とは異なる散孔材の道管配列を有する広葉樹材が認められたが、保存が悪く種類の同定には至らなかった。同定された各種類の解剖学的特徴等を記す。

① ヒノキ科 (Cupressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1~10細胞高。

表4-3 樹種同定結果

調査区	遺構	層位・位置	時期	点数	樹種	備考
VI-2区	SK-6017		弥生	3	ヒノキ科	
					ヒノキ科	
					ヒノキ科	
VI-2区	SK-6023		弥生	1	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
VI-1区	ST-6026	P-1	弥生	1	広葉樹(散孔材)	中央ビット付近出土
VII-1区	ST-7007	中層	弥生中期	5	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	洗い出し用試料
					コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
					コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
					コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
					広葉樹(散孔材)	

4. 結果 (4) 粒度分析

② コナラ属コナラ亜属クヌギ節(Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1~2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高のものとの複合放射組織とがある。

(4) 粒度分析

粒度分析結果を表4-4、Folk&Ward (1957)による評価を総合して結果を表4-5に示した。また、

表4-4 西野々遺跡の粒度組成

粒径区分	礫					砂					シルト				粘土 0.0039mm >
	中礫			細礫		極粗粒砂	粗粒砂	中粒砂	細粒砂	極細粒砂	粗粒シルト	中粒シルト	細粒シルト	微粒シルト	
試料名	64 ~32mm	32 ~16mm	16 ~8mm	8 ~4mm	4 ~2mm	2.00~ 1.00mm	1.00~ 0.50mm	0.50~ 0.25mm	0.25~ 0.125mm	0.125~ 0.063mm	0.063~ 0.031mm	0.031~ 0.016mm	0.016~ 0.008mm	0.008~ 0.0039mm	
1-1	52.3	11.1	7.0	6.9	5.2	4.0	6.6	4.9	0.8	0.3	0.1	0.1	0.0	0.1	0.6
1-4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	5.8	27.9	47.7	8.3	1.2	1.4	1.3	0.7	1.1	3.8
1-5	0.0	0.0	4.8	6.9	11.2	11.3	24.2	29.3	2.6	2.4	0.9	0.9	0.7	0.6	4.2
1-6	0.0	13.2	24.5	11.3	8.5	6.2	11.6	10.2	1.8	1.1	1.3	1.4	1.2	1.1	6.6
2-1	0.0	34.9	21.1	20.7	3.7	1.3	1.9	4.1	3.7	1.9	1.5	1.0	0.7	0.6	2.9
4-1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	8.6	44.0	27.8	5.9	1.8	2.1	2.1	2.0	5.6
4-2	0.0	0.0	16.0	15.8	15.3	14.9	17.3	10.8	5.5	1.5	0.5	0.4	0.3	0.2	1.5
4-3	0.0	0.0	4.8	5.0	13.1	20.5	32.1	16.4	3.6	0.8	0.5	0.3	0.4	0.4	2.1
4-4	0.0	0.0	0.0	1.2	5.2	15.4	45.3	18.4	2.7	0.9	1.1	0.6	0.3	0.8	8.1

注)単位は重量%で表示

表4-5 西野々遺跡の粒度組成解析結果

試料名	Md (中央値)	Mz (平均値)	Mo (最頻値)	Sk (歪度)	σ (分級度)	Kg (尖度)	
1-1	-0.70 φ (1.627mm)	-0.68 φ (1.605mm)	粗粒砂	-0.66 φ (1.585mm)	0.48 著しい正	0.53 やや良い	3.98 極めて突出
1-4	1.82 φ (0.282mm)	1.78 φ (0.291mm)	中粒砂	1.99 φ (0.251mm)	0.26 正の歪み	1.53 悪い	2.77 非常に突出
1-5	1.21 φ (0.433mm)	0.97 φ (0.510mm)	粗粒砂	-0.66 φ (1.585mm)	0.14 正の歪み	2.05 非常に悪い	1.48 突出
1-6	-0.58 φ (1.491mm)	0.30 φ (0.813mm)	粗粒砂	-0.66 φ (1.585mm)	0.88 著しい正	2.27 非常に悪い	1.76 非常に突出
2-1	-0.70 φ (1.622mm)	0.01 φ (0.993mm)	粗粒砂	-0.66 φ (1.585mm)	0.89 著しい正	1.89 悪い	11.41 極めて突出
4-1	2.44 φ (0.184mm)	2.76 φ (0.147mm)	細粒砂	2.33 φ (0.200mm)	0.54 著しい正	1.67 悪い	2.17 非常に突出
4-2	-0.40 φ (1.319mm)	0.22 φ (0.857mm)	粗粒砂	-0.66 φ (1.585mm)	0.72 著しい正	1.32 悪い	0.88 偏平
4-3	0.71 φ (0.609mm)	0.67 φ (0.630mm)	粗粒砂	-0.66 φ (1.585mm)	0.08 ほぼ対称	1.24 悪い	0.85 偏平
4-4	1.14 φ (0.455mm)	1.23 φ (0.425mm)	中粒砂	1.00 φ (0.501mm)	0.40 著しい正	2.04 非常に悪い	3.31 極めて突出

注)評価はFolk & Ward (1957)による

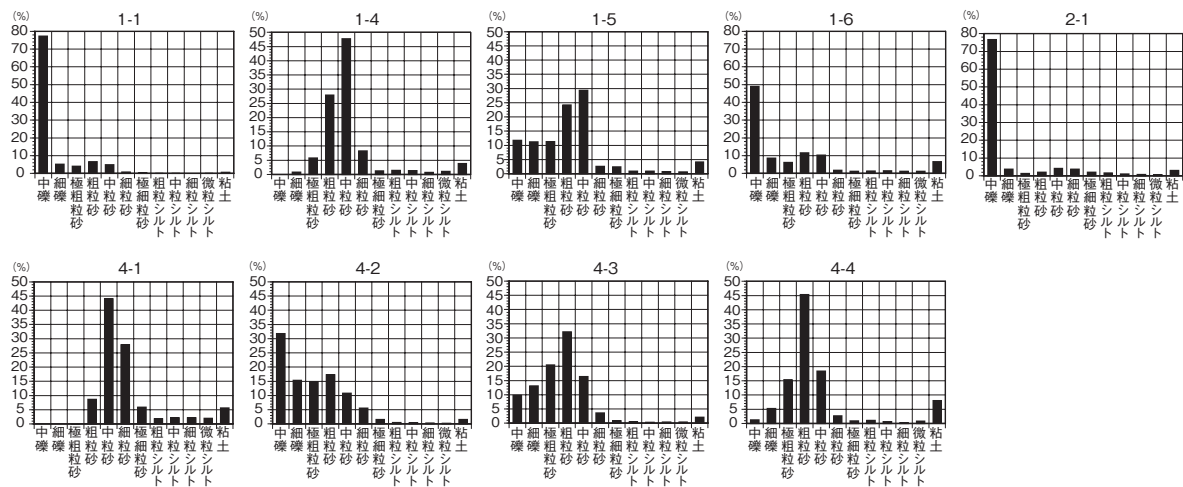


図4-2 粒度分析結果

粒度分析結果について各粒径頻度分布のグラフを図4-2, Folk (1954)の礫・砂・泥からなる堆積物区分を示した三角ダイアグラムを図4-3に示す。この図4-3からは, 1-1・2-1が礫, 4-2が砂質礫, 1-6が泥質砂質礫, 1-5・4-3が礫質砂, 4-4が礫質泥質砂, 1-4が砂, 4-1が泥質砂に区分される。分級度は, やや良いが1-1, 悪いが1-4・2-1・4-1・4-2・4-3, 非常に悪いが1-5・1-6・4-4となる。

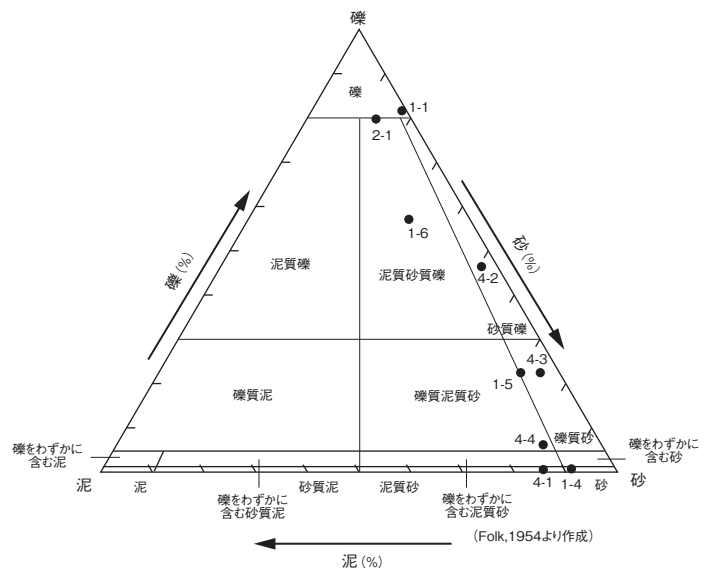


図4-3 粒度分析結果三角ダイアグラム

(5) 軟X線写真撮影

試料の軟X線写真と特徴的な堆積

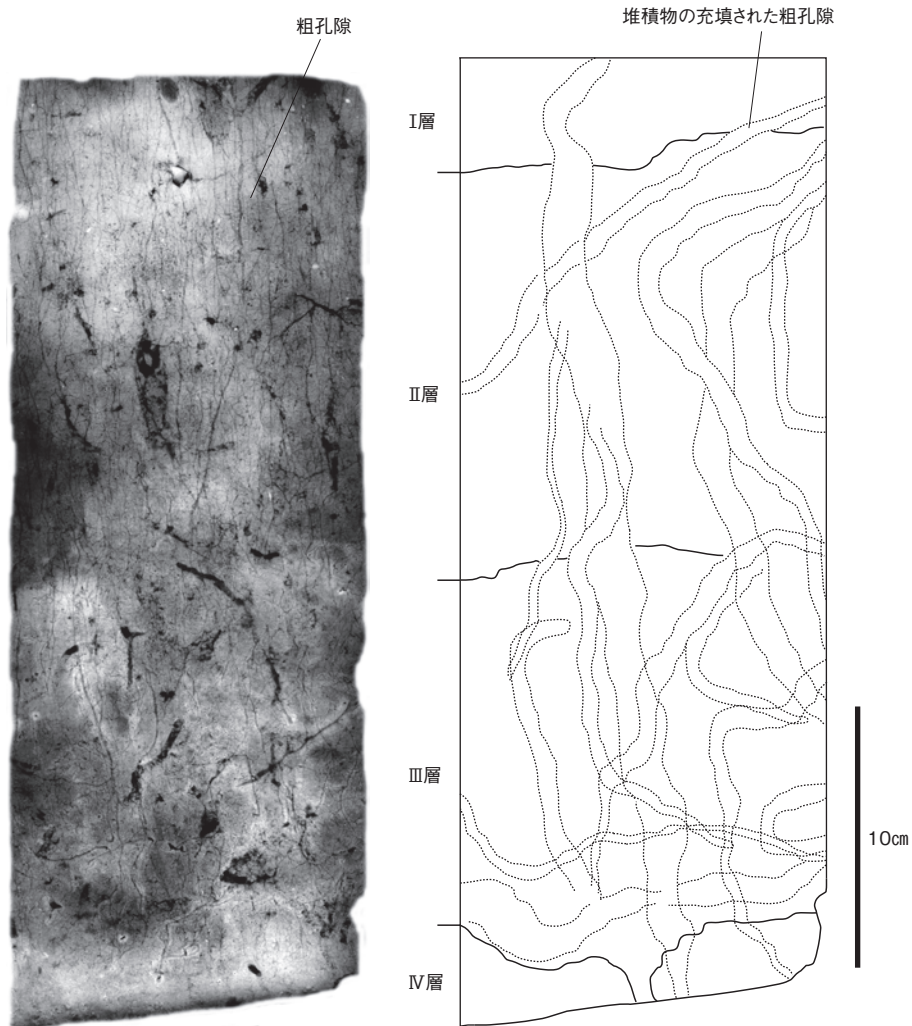


図4-4 VIII-1区採取堆積層断面の軟X線写真

4. 結果 (5) 軟X線写真撮影

相・土壌相および層理面のトレースを図4-4に示す。軟X線写真画像については、より暗色な領域が相対的に堆積物の密度が低いことを示す。よって、孔隙や粘土などで充填されていない根痕などは、周囲より相対的に暗色となる。

試料全体では、堆積物に充填された幅5～20mmの垂直方向に直線的で、管状の形態をなすと推定される生痕が非常に発達する。さらに、幅1～2mm程度の堆積物に充填されない、垂直方向に暗色を呈し直線状に伸びる孔隙も非常に多く分布する。この粗孔隙については、上部から下部に向かって、発達程度が減少する。粒団状構造の発達は、試料全体で不良である。土壌構造は、垂直方向に発達する粗孔隙とそれに直交する方向の粗孔隙に境され角塊状構造を示す。

上記のような土壌構造が認められる観察試料については、軟X線写真による土壌相の差異から、I～IV層の4つの層準に区分される。I層は層厚4.5cm以上で、直下のII層に比べ孔隙が少ない。II層は層厚15cm前後で、上下の堆積層に比べ孔隙が多い。III層は層厚15cm前後で、明色を呈する領域に、幅5

表4-6 弥生土器胎土分析試料一覧および胎土分類結果

No	器形	残存部位	出土地点	出土遺構	図版No	様式	胎土	備考	鉱物・岩石組成			粒径組成				化学組成					胎土分類					
									A	B	C	1	2	3	4	a	b	c	d	e						
1	壺	ほぼ完形	Ⅶ-1区	ST-7009	7263	Ⅲ	田村																		A1a	
2	壺	口縁部～胴部	Ⅳ-1区	SD-401	4018	Ⅲ	田村	貼付口縁, クシ描文																		A1b
3	甕	口縁部～胴部	Ⅵ-1区	ST-6003	6110	Ⅱ～Ⅲ	高知県西部	クシ描文																		B3a
4	壺	口縁部～胴部	Ⅵ-1区	ST-6003	6108	Ⅱ～Ⅲ	高知県西部	クシ描文																		B3a
5	甕	口縁部～胴部	Ⅶ-1区	ST-7009	7266	Ⅲ	高知県西部																			B3a
6	壺	口縁部～胴部	Ⅳ-1区	SD-401	4032	Ⅲ	搬入?	貼付口縁																		A1b
7	壺	口縁部～胴部	Ⅵ-2区	ST-6037	6356	Ⅲ～Ⅳ	田村	凹線文																		B3a
8	甕	口縁部～胴部	Ⅵ-2区	SK-6023	6552	Ⅲ～Ⅳ	田村	凹線文																		A1a
9	甕	口縁部～胴部	Ⅵ-2区	SK-6020	6475	Ⅲ～Ⅳ	高知県西部	貼付口縁																		B3a
10	壺	ほぼ完形	Ⅳ-1区	SD-401	4031	Ⅲ～Ⅳ	田村																			A2b
11	壺	ほぼ完形	Ⅵ-1区	ST-6027	6269	Ⅳ	瀬戸内	直口壺																		A1a
12	甕	口縁部～胴部	Ⅵ-2区	ST-6057	6428	V	田村?																			A1c
13	壺	胴部～底部	V-1区	SD-502	5114	V	田村	タタキ目残る																		A1c
14	甕	ほぼ完形	Ⅵ-2区	ST-6057	6427	V	田村?																			A1d
15	甕	ほぼ完形	V-2区	SD-502	5111	V	畿内?	No.5106と同一?																		A1c
16	甕	口縁部～胴部	Ⅲ-1区	SD-3003	3106	V	搬入																			C1e
17	甕	口縁部～胴部	Ⅵ-2区	ST-6021	6214	Ⅳ	高松平野?	凹線文																		A2b
18	甕	ほぼ完形	Ⅵ-2区	SK-6037	6577	V	田村?																			A1d
19	壺	胴部～底部	Ⅵ-2区	SK-6041	6603	Ⅲ	高知県中央部	下分遠崎遺跡と類似																		A1b
20	甕	口縁部～胴部	Ⅶ-1区	ST-7017	7288	V前半	田村																			A4d

<鉱物・岩石組成>

- A: 石英・斜長石の鉱物片を主体とし、堆積岩類を少量伴う。
- B: 堆積岩類の岩石片を主体とし、少量の石英・斜長石の鉱物片を伴う。
- C: 石英・斜長石の鉱物片を主体とするが、堆積岩類を含まずに、少量の結晶片岩を伴う。

<粒径組成>

- 1: 極細粒砂～中粒シルトをモードとする。
- 2: 中粒砂をモードとする。
- 3: 極粗粒砂～粗粒砂をモードとする。
- 4: 極粗粒砂と中粒シルトをモードとする。

<化学組成>

- a: 今回の試料の中で最も多くの試料に認められる組成
- b: aに比べてSiO₂が高く、Al₂O₃とFe₂O₃が低い傾向にある。
- c: 主要元素の組成はb類に近いが、微量元素においてb類に比べるとRbとBaが低い傾向にある。
- d: a～c類に比べてCaとMgが高く、Zrが低い傾向にある。
- e: 他の試料に比べてCaが突出して高い。

表4-7 薄片観察結果(1)

No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																			合計														
		鉱物片									岩石片																								
		石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑泥石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	玄武岩	ひん岩	ドレイト	多結晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	閃緑岩	結晶片岩	ホルンフェルス	千枚岩	粘板岩	珪質粘板岩	緑色岩	珪化岩	粘土岩	火山ガラス	植物残骸		
1	細礫																																		0
	極粗粒砂	2										2	1	3																					8
	粗粒砂	1	1									2	4	4												2	1					1			17
	中粒砂	4											1	2		1					1	1							1					11	
	細粒砂	8		2								1	1								1													13	
	極細粒砂	23	3	9					1			1									1													38	
	粗粒シルト	23	1	15																												1		40	
	中粒シルト	15		4																														19	
基質																																		585	
孔隙																																		14	
2	細礫																																	0	
	極粗粒砂												1																						2
	粗粒砂											2	1						1	1										1	2			8	
	中粒砂	3	1	2								1	4			1					4													16	
	細粒砂	8		1								1				1					1													12	
	極細粒砂	13	1	5									1																					20	
	粗粒シルト	13		6				1																										20	
	中粒シルト	3		2																														5	
基質																																		159	
孔隙																																		6	
3	細礫											2																						2	
	極粗粒砂											4	5	4			3															2		18	
	粗粒砂	1										15	21	11	1		2				1									4	1		57		
	中粒砂											16	5	5				1			1										1		29		
	細粒砂											8	3	2							4												17		
	極細粒砂	4		2								2									3												11		
	粗粒シルト	7		2								2																					11		
	中粒シルト	8		1																														9	
基質																																		280	
孔隙																																		43	
4	細礫																																	0	
	極粗粒砂											3	4	10			2															6		25	
	粗粒砂											14	14	21	1	1	1	1			1								1	12	2		69		
	中粒砂		1	2								5	10	12	2						3									4			39		
	細粒砂	1										1	6	2	1						5												16		
	極細粒砂	3		2			1					1									6												13		
	粗粒シルト	13		1								1																					15		
	中粒シルト	3		1																														4	
基質																																		370	
孔隙																																		31	
5	細礫																																	0	
	極粗粒砂											8	8	13	1				1												1			31	
	粗粒砂											2	12	6			1				1									4			26		
	中粒砂	1										4	5	4							2	1											17		
	細粒砂	1		1								4	4								6												16		
	極細粒砂	6		2								2	2								1												13		
	粗粒シルト	4		2								1																					7		
	中粒シルト	8																																8	
基質																																		255	
孔隙																																		30	
6	細礫																																	0	
	極粗粒砂												1																						1
	粗粒砂	4										1		1							1				2	1								10	
	中粒砂	16	1	5								2	1									1												25	
	細粒砂	27	2	4			1					2	1								1	3								1			42		
	極細粒砂	33	9	16								1																						60	
	粗粒シルト	19	6	9																											1		34		
	中粒シルト	15	3	10																														28	
基質																																		510	
孔隙																																		36	
7	細礫																																	0	
	極粗粒砂												4	9													3				2			18	
	粗粒砂	1		1	1				1	1		1	5	6			1	1			2	1				1	5			1			29		
	中粒砂											1	1														1	1			2			6	
	細粒砂													1							1													2	
	極細粒砂	2		2								1									1													6	
	粗粒シルト	3	1	2																														6	
	中粒シルト			3																														3	
基質																																		215	
孔隙																																		23	

4. 結果 (6) 胎土薄片作製鑑定

表4-7 薄片観察結果(2)

No	砂粒区分	砂粒の種類構成																										合計						
		鉱物片													岩石片												その他							
		石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑帘石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・テイサイト	玄武岩	ひん岩	ドレイイト	多結晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	閃緑岩	結晶片岩	ホルンフェルス	千枚岩	粘板岩		珪質粘板岩	緑色岩	珪化岩	粘土岩	火山ガラス	植物珪酸体
8	細礫									1																	1						2	
	極粗粒砂											1															1						2	
	粗粒砂										1	1							1				1										6	
	中粒砂	1									2																		2	1			4	
	細粒砂	3	1	3		1						1							2						1								12	
	極細粒砂	12	1	8							3								4												1		29	
	粗粒シルト	10		9																													19	
	中粒シルト	7		6																														13
基質																																	328	
孔隙																																	23	
9	細礫																																0	
	極粗粒砂		1								2	15	5													2		1					26	
	粗粒砂	1									4	13	5																2				25	
	中粒砂	1		1						2	1	4	3				1		1										2				16	
	細粒砂										2	1	3						2														8	
	極細粒砂	3		1						2	1	3							3														13	
	粗粒シルト	6		2																													8	
	中粒シルト	2		1																														3
基質																																	212	
孔隙																																	12	
10	細礫																																0	
	極粗粒砂		7	2																					1									1
	粗粒砂		26	6	5			1	4	6	3	1			1			3	1				1	1							5		31	
	中粒砂		25	4	6				2			1						8	1														54	
	細粒砂		24	4	10							1						2	1													1	40	
	極細粒砂		17	1	4						1																						39	
	粗粒シルト		10		4																												22	
	中粒シルト		10		4																													14
基質																																	445	
孔隙																																	13	
11	細礫																																0	
	極粗粒砂										1							1																2
	粗粒砂							1			4						7	1			1					1			3				18	
	中粒砂	4		1							4	2					17	1											1				30	
	細粒砂	4	1	4							5	2					4													2			22	
	極細粒砂	18		14							7						5																44	
	粗粒シルト	19	1	11							1																						32	
	中粒シルト	10	1	6																													17	
基質																																	483	
孔隙																																	17	
12	細礫										1																						2	
	極粗粒砂										1																							1
	粗粒砂	1	1	1							2																							5
	中粒砂	7		5				1			5	1						3											2				24	
	細粒砂	14	1	6							12							3													1		37	
	極細粒砂	29		14			1				9							1															54	
	粗粒シルト	20	1	7																											1	2	31	
	中粒シルト	13		2																													15	
基質																																	401	
孔隙																																	13	
13	細礫																																0	
	極粗粒砂											1																						3
	粗粒砂	7		1							3	1	1					2	2										1	1			17	
	中粒砂	16	2	4			1				2	1			1			6	1														34	
	細粒砂	14	4	9							3							3											1				34	
	極細粒砂	18	2	11							1							4															36	
	粗粒シルト	31	3	13																													47	
	中粒シルト	14	1	6																													21	
基質																																	521	
孔隙																																	20	
14	細礫										1																						1	
	極粗粒砂										1			1																				4
	粗粒砂	3								3	2	3	1																					15
	中粒砂	8		1						3	1	3		2				3									2				1		22	
	細粒砂	12	1	2						1	4			1				4																25
	極細粒砂	15	2	7							1								2															27
	粗粒シルト	12		10																														22
	中粒シルト	4		3																														7
基質																																	377	
孔隙																																		12

表4-7 薄片観察結果(3)

No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																				合計													
		鉱物片										岩石片																							
		石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑帘石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャリト	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	玄武岩	ひん岩	ドレイト	多結晶石英	花崗岩類		花崗岩	閃緑岩	結晶片岩	ホルンフェルス	千枚岩	粘板岩	珪質粘板岩	緑色岩	珪化岩	粘土岩	火山ガラス	植物珪酸体	
15	細礫																																		0
	極粗粒砂	1																																	1
	粗粒砂	2						1		2	2		1						3	1						3								16	
	中粒砂	5	1					1		4	6	4		1					3					1	1					4				31	
	細粒砂	14	1								5	5							2		1				2									31	
	極細粒砂	17	1	14							4																							36	
	粗粒シルト	17	2	16																														35	
	中粒シルト	10		6																														16	
	基質																																	395	
孔隙																																		6	
16	細礫																							1										1	
	極粗粒砂																																	0	
	粗粒砂							2	1										2				3											8	
	中粒砂	3		3															2															8	
	細粒砂	7	2		1		2												6													1	19		
	極細粒砂	12	1	6			2	8	1										3												1		34		
	粗粒シルト	15	1	6			10																										32		
	中粒シルト	12		5			5																											22	
	基質																																	331	
孔隙																																		11	
17	細礫																																	0	
	極粗粒砂		1																															2	
	粗粒砂	4	4							1	1	1		1					5		1													18	
	中粒砂	15	4	2							1								14		1										2			39	
	細粒砂	16	4	3															3												1			27	
	極細粒砂	10	2	5															1															18	
	粗粒シルト	8	2	3						1																						1		15	
	中粒シルト	2	1	1																														4	
	基質																																		369
孔隙																																		5	
18	細礫																																	0	
	極粗粒砂	1											1										2											4	
	粗粒砂										3	1							2									1	1					8	
	中粒砂										3	1							2									1						7	
	細粒砂	7	3	1				2			2	1	1						1										1					19	
	極細粒砂	10	1	6							5								4															26	
	粗粒シルト	9		9															1													1		20	
	中粒シルト	5		6																														11	
	基質																																		306
孔隙																																		7	
19	細礫																																	0	
	極粗粒砂																																		0
	粗粒砂	2																	1	2														5	
	中粒砂	5	1	1								1				1			2															11	
	細粒砂	13		3							1	1							1													1		20	
	極細粒砂	21	3	8															1													1		34	
	粗粒シルト	26	3	17																												1		47	
	中粒シルト	13	2	13																														28	
	基質																																		441
孔隙																																		23	
20	細礫																																	0	
	極粗粒砂										2	4							2						1							2			11
	粗粒砂						2			2	1	3						1							1			1						11	
	中粒砂						1	1		1		1																							4
	細粒砂	1								1									2																4
	極細粒砂	4	1	3					1																										9
	粗粒シルト	5	2	3																															10
	中粒シルト	6	1	4																															11
	基質																																		309
孔隙																																		30	

4. 結果 (6) 胎土薄片作製鑑定

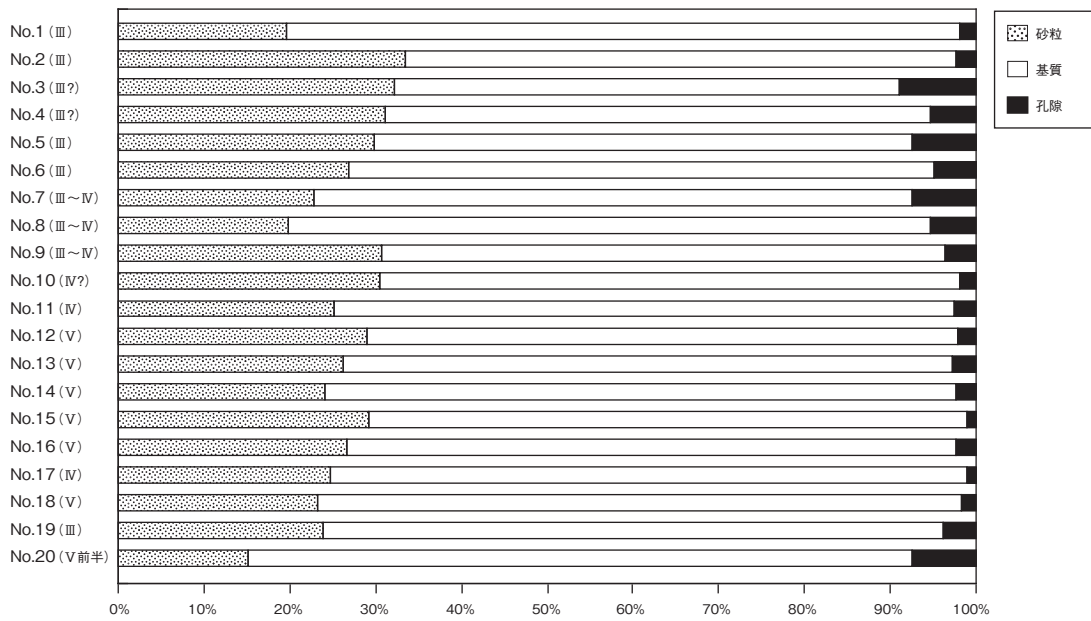


図4-5 砂粒・基質・孔隙の割合

～20mmの垂直方向に発達した生痕の貫入が明瞭である。Ⅳ層では、孔隙量が少なく、全体として明色をなす。

(6) 胎土薄片作製鑑定

各試料の器形、部位、出土地点、出土遺構、所見などを一覧にして表4-6に示す。

観察結果を表4-7、図4-5～9に示す。砂粒の組成では、石英および斜長石を多く含み、チャート・頁岩・砂岩の堆積岩類を少量伴うという組成の試料とチャート・頁岩・砂岩の堆積岩類を多く含み、石英と斜長石を少量伴うという組成の試料とに二分される。また、全試料にカリ長石が少量～微量含まれ、試料によっては、緑レン石、黒雲母、不透明鉱物などの鉱物片や花崗岩類、結晶片岩、千枚岩、緑色岩、珪化岩などの岩石片がそれぞれ微量認められる。さらに、試料によっては、微量の火山ガラスや植物珪酸体なども含まれる。

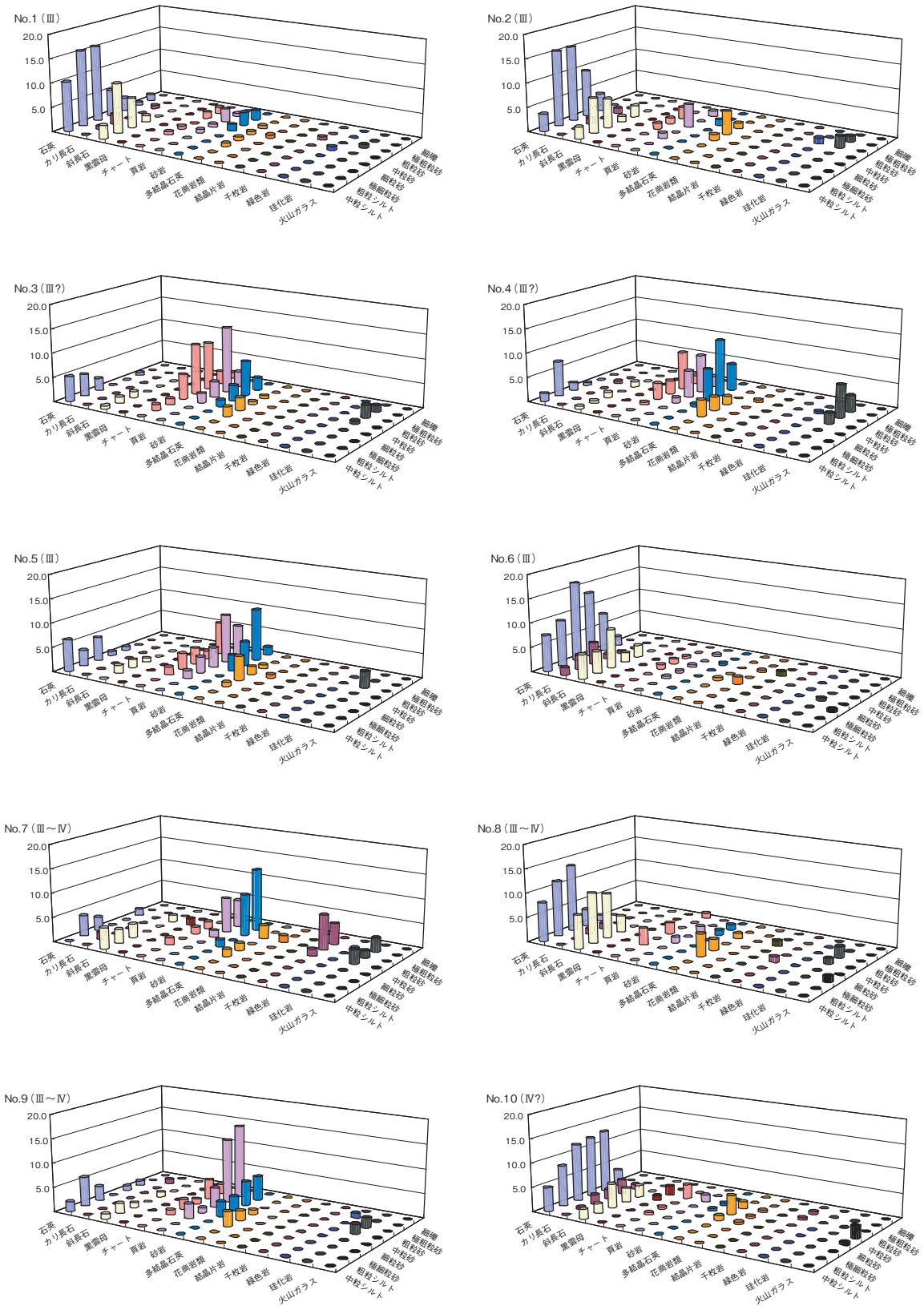
これらの砂粒の割合は、20～30%を占める。粒径組成をみると、極細粒砂または粗粒シルトにモードのある試料と極粗粒砂または粗粒砂にモードのある試料にほぼ二分されるが、No.10とNo.17は中粒砂にモードがあり、No.20は極粗粒砂～粗粒砂と中粒シルトという両極にモードがある。

(7) 胎土蛍光X線分析

結果を表4-8に示す。ここでは試料間の組成を比較する方法として、以下に示す元素を選択し、それらの値を縦軸・横軸とした散布図を作成した(図4-10・11)。

- ・化学組成中で最も主要な元素(SiO₂, Al₂O₃)

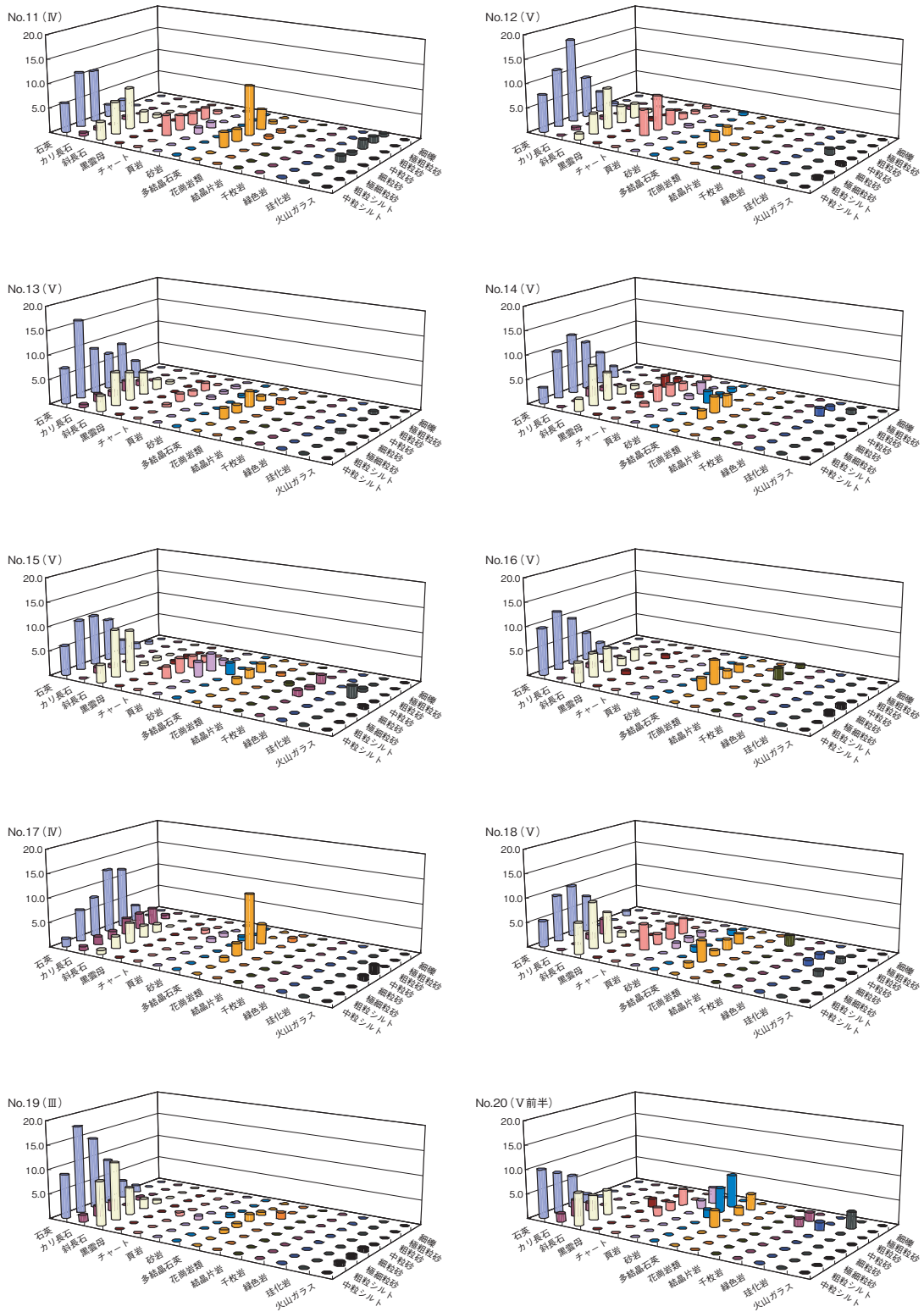
- ・粘土の母材を考える上で長石類(主にカリ長石, 斜長石)の種類構成は重要である。このことから、指標として長石類の主要元素であるCaO, Na₂O, K₂Oの3者を選択し、長石全体におけるアルカリ長石およびカリ長石の割合を定性的に見る。実際には、長石類全体におけるアルカリ長石の割合 $(Na_2O + K_2O) / (CaO + Na_2O + K_2O)$ を横軸とし、アルカリ長石におけるカリ長石の割合 $K_2O / (Na_2O +$



・X軸はWentworth(1922)に基づく粒度階, Y軸は検出された鉱物・岩石の種類, Z軸は鉱物・岩石の出現頻度(%)を示す。

図4-6 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)

4. 結果 (7) 胎土蛍光X線分析



・X軸はWentworth(1922)に基づく粒度階, Y軸は検出された鉱物・岩石の種類, Z軸は鉱物・岩石の出現頻度(%)を示す。

図4-7 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2)

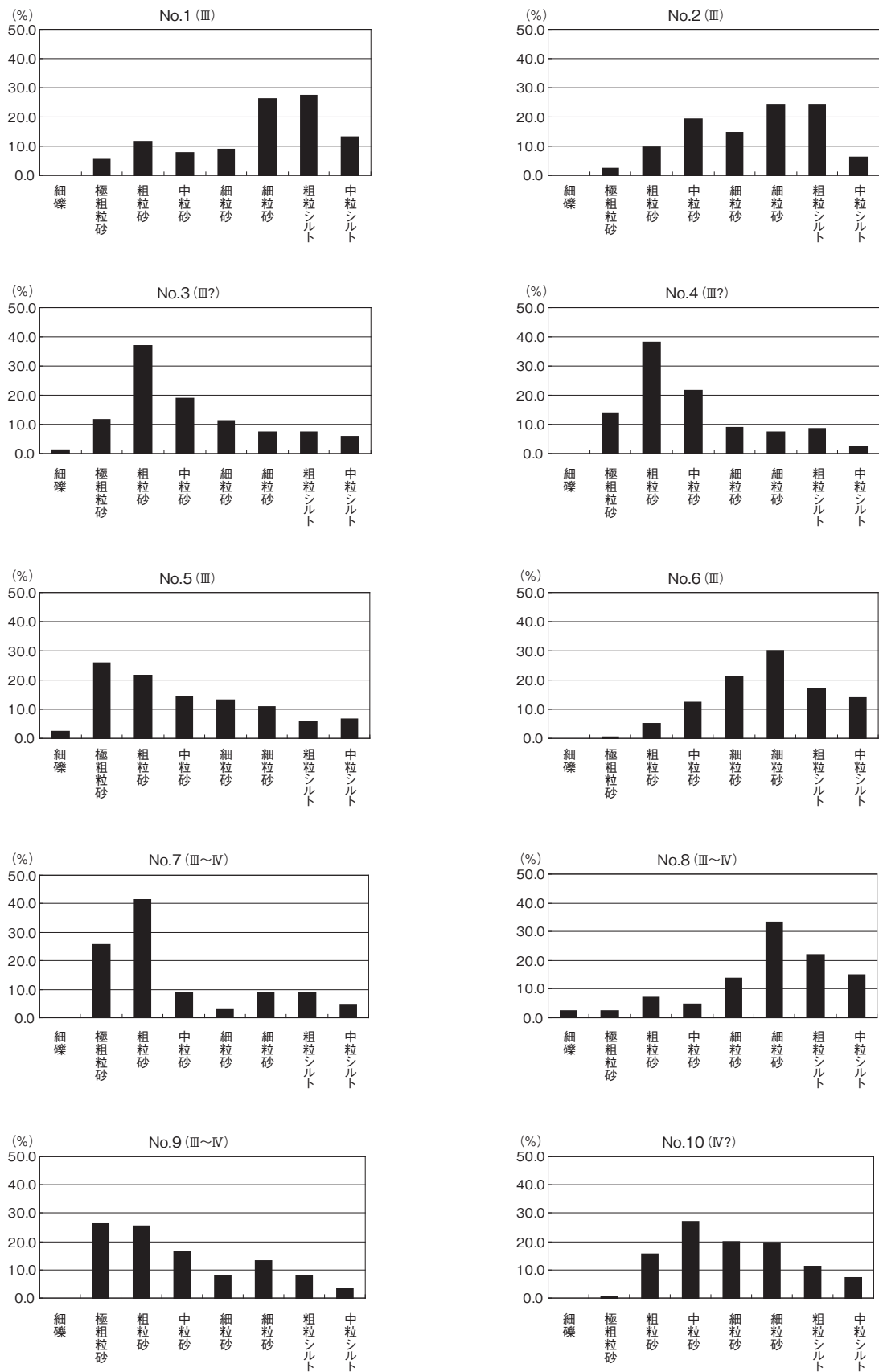


図4-8 胎土中の砂の粒径組成(1)

4. 結果 (7) 胎土蛍光X線分析

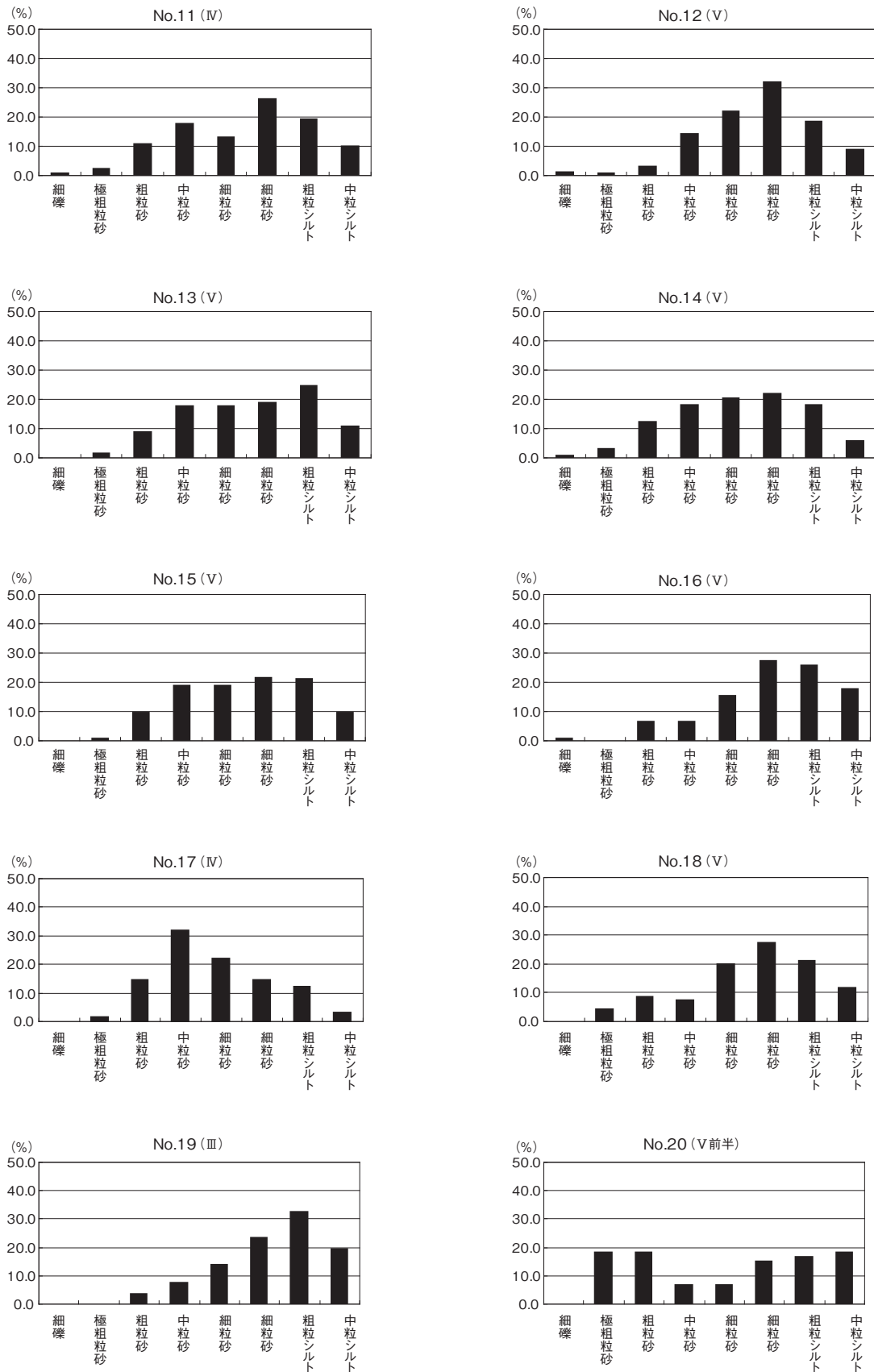


図4-9 胎土中の砂の粒径組成(2)

表4-8 土器胎土の蛍光X線分析結果(化学組成)

No	様式	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	MnO (%)	MgO (%)	CaO (%)	Na ₂ O (%)	K ₂ O (%)	P ₂ O ₅ (%)	Igloss (%)	合計 (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Zr (ppm)	Ba (ppm)
1	Ⅲ	61.32	18.09	0.78	6.11	0.02	0.35	0.46	1.26	1.62	0.18	9.81	100.00	72	96	227	596
2	Ⅲ	69.81	15.46	0.74	2.48	0.01	0.15	0.31	1.32	1.61	0.33	7.78	100.00	51	97	284	443
3	Ⅲ	56.95	18.61	0.92	8.07	0.02	0.51	0.32	0.83	1.79	0.35	11.64	100.00	56	57	204	375
4	Ⅲ	52.41	20.56	0.99	8.35	0.02	0.81	0.42	1.28	2.48	0.67	12.01	100.00	73	83	217	442
5	Ⅲ	59.58	17.89	0.84	6.39	0.03	1.03	0.44	1.09	1.41	0.56	10.74	100.00	33	83	207	264
6	Ⅲ	67.44	15.72	0.77	3.08	0.03	0.28	0.34	1.33	1.84	0.09	9.08	100.00	70	112	243	513
7	Ⅲ~Ⅳ	53.54	18.82	1.22	8.37	0.03	0.83	0.52	1.14	1.45	0.82	13.26	100.00	63	72	223	517
8	Ⅲ~Ⅳ	59.93	16.51	0.97	7.68	0.03	0.61	0.43	1.02	1.33	0.45	11.04	100.00	63	59	212	452
9	Ⅲ~Ⅳ	57.29	18.06	0.83	6.16	0.06	1.22	0.35	1.03	2.72	0.58	11.70	100.00	87	83	211	464
10	Ⅳ	70.38	13.97	0.67	2.68	0.03	0.39	0.33	1.18	1.63	0.14	8.61	100.00	68	91	277	442
11	Ⅳ	57.60	17.31	1.07	7.79	0.01	0.57	0.24	0.74	1.05	0.41	13.21	100.00	36	34	226	233
12	V	59.19	20.36	1.10	4.55	0.02	0.86	0.46	0.98	1.65	0.50	10.33	100.00	35	97	271	343
13	V	67.45	16.34	0.74	2.32	0.01	0.34	0.24	1.82	1.61	0.13	9.00	100.00	50	117	248	354
14	V	63.37	13.91	0.66	6.95	0.08	2.80	0.81	1.07	1.26	0.20	8.89	100.00	47	89	180	484
15	V	63.16	15.89	1.03	5.54	0.02	0.69	0.28	1.57	1.50	0.17	10.15	100.00	55	79	262	412
16	V	54.77	17.69	1.37	8.06	0.11	1.26	2.92	1.65	0.80	0.12	11.25	100.00	42	87	211	224
17	Ⅳ	64.62	16.05	0.87	3.70	0.03	0.28	0.52	1.11	2.10	0.19	10.54	100.00	86	83	253	570
18	V	64.87	14.41	0.81	4.27	0.04	3.17	0.53	1.11	1.02	0.37	9.40	100.00	59	65	195	332
19	Ⅲ	65.22	16.89	0.72	3.20	0.09	0.67	0.60	1.43	1.66	0.48	9.04	100.00	70	110	250	533
20	V	55.30	17.74	1.02	8.99	0.54	1.57	0.73	1.23	1.15	0.66	11.07	100.00	57	72	201	664

K₂O)を縦軸とする。

・輝石類や黒雲母、角閃石など有色鉱物における主要な元素。この場合、指標としてこれらの有色鉱物の主要な元素のうち、TiO₂、Fe₂O₃、MgOを選択し、Fe₂O₃を分母としたTiO₂、MgOの割合を見る。

・各微量元素を選択する。組み合わせは、Rb-SrとZr-Baとする。

また、これらの散布図では、様式ごとにそれぞれ異なる記号で示した。作成した5つの散布図を概観すると、各図において第V様式の分布と他の様式の分布とが比較的明瞭に分離していることがわかる。さらに、第V様式の分布も、まとまっているわけではなく、各図において試料間の分離が顕著である。特に、長石類主要元素の散布図、有色鉱物主要元素の散布図およびZr-Baの散布図から、No12,13,15のグループ、No14,18,20のグループ、いずれにも属さないNo16の3グループに分離される。

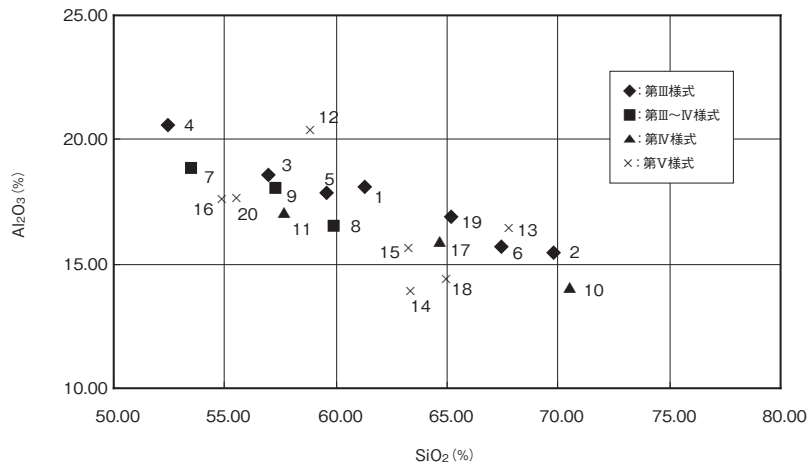
一方、第V様式以外の試料については、第V様式ほど分離は明瞭ではないが、有色鉱物主要元素の散布図とZr-Baの散布図から、No1,3,4,5,7,8,9,11のグループとNo2,6,10,17,19のグループとに分離する傾向が窺える。他の散布図においては、これら2つのグループの分布域は部分的に重複するが、その重心は明らかにずれており、有意な分離であるとされる。

5. 考察

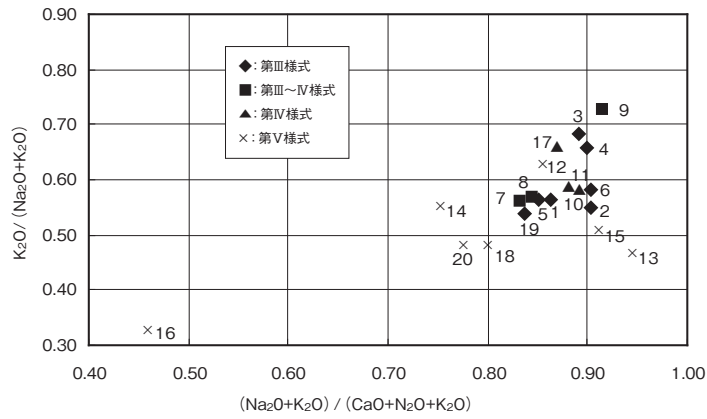
(1) 弥生時代の溝埋土の植物珪酸体群集

弥生時代のSD-7001とSD-8001の溝埋土では、高燥で開けた土地条件を好むネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立った。これまでの西野々遺跡の自然科学分析調査でも、I~Ⅲ区の弥生時代中期やそれ以降の溝埋土では、今回の分析結果と同様の産状が見られる。このような既往の結果を踏まえると、分析を実施したSD-7001やSD-8001周辺では、明るく開け乾燥した土壌環境が形成されていた可能性が高いと判断される。

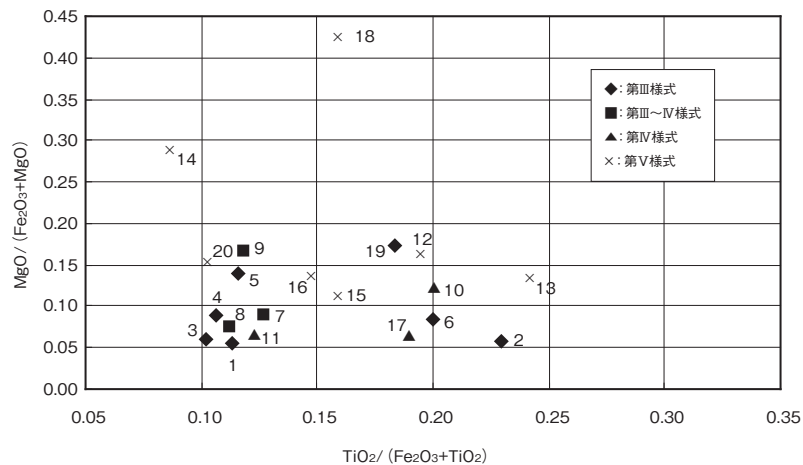
5. 考察 (1) 弥生時代の溝埋土の植物珪酸体群集



SiO₂-Al₂O₃散布図

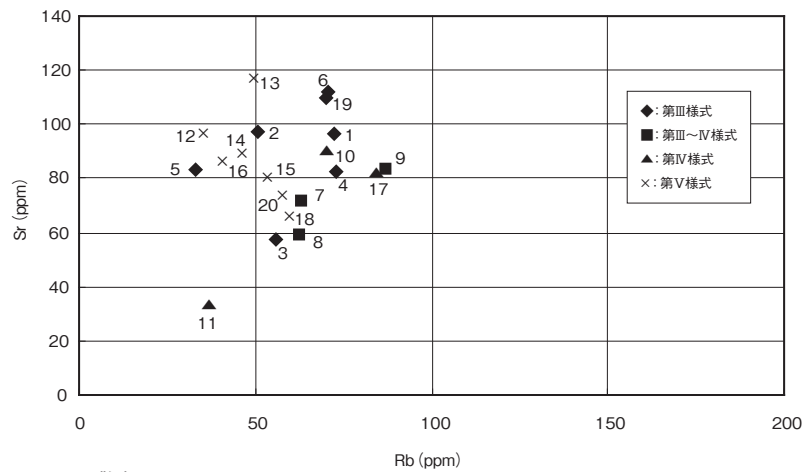


長石類主要元素の散布図

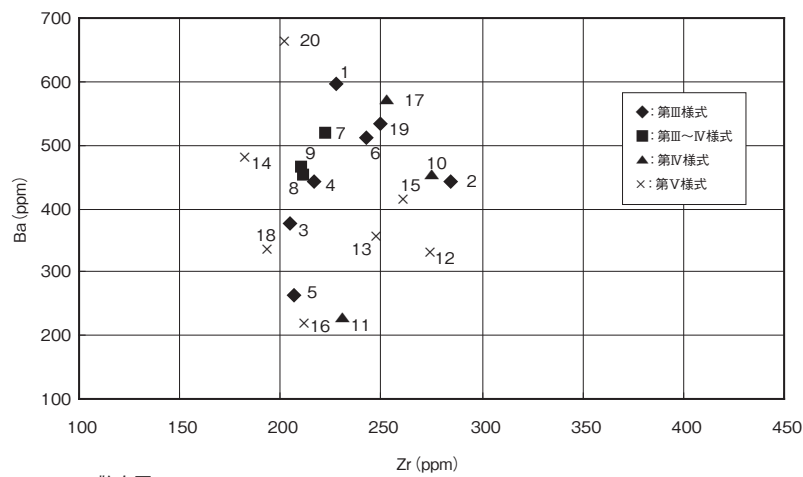


有色鉱物主要元素の散布図

図4-10 土器の科学組成散布図(1)



Rb-Sr散布図



Zr-Ba散布図

図4-11 土器の科学組成散布図(2)

SD-7001が検出されたⅦ区とそれに西接するⅥ区は、弥生時代に居住域であったことが発掘調査により確認されている。当該期の溝埋土の植物珪酸体群集から推定される土壤環境は、居住域であるⅦ区の発掘結果と矛盾のないものと捉えられる。これまでに西野々遺跡で実施した弥生期の植物珪酸体分析および花粉分析結果を踏まえると、当該期に調査区では、ネザサ節やススキ属、ヨモギ属などが分布する草地を主体となす植生景観からなり、乾性の土壤発達が進行するような安定した土地条件が広がっていたと推定される。

なお、今回の分析地点であるⅦ区およびⅧ区では、弥生時代の溝埋土から、数百個/g程度とわずかではあるが栽培種のイネ属が検出された。これに対し、Ⅱ区およびⅢ区の弥生時代の溝からは、イネ属がまったく検出されていない。分析を実施した溝は、周辺の土壤の流れ込みと人為による埋め戻しによって埋没したものである。遺構検出状況から、イネ属が検出されたⅦ区・Ⅷ区は、居住域に相当し、Ⅱ・Ⅲ区は弥生時代の居住域から外れていたことが窺える。以上のことから、Ⅶ区・Ⅷ区の溝埋土で検出されたイネ属珪酸体は、人間により居住域に持ち込まれたイネに由来する可能性が高いことが示唆される。

(2) VII-1区 ST-7007埋土から得られた種実遺体

弥生時代中期のST-7007埋土では、栽培種のイネとコムギの種実が検出された。これらはいずれも炭化したものを含む。それ以外の種実は、検出されなかった。分析試料が竪穴建物跡を充填する埋土であることと、栽培種のみが確認されたことから、イネ・コムギについては、人間が居住域内に持ち込み消費・廃棄したものと判断される。なお、イネについては、ST-7007などの建物跡が多数検出されたVII-1区のSD-7001埋土の植物珪酸体分析結果の検討からも、居住域内に持ち込まれたことが示唆される。弥生時代の集落内からのイネの検出については、本遺跡の東方約2.5kmに位置する田村遺跡群でも大量に確認されている(古環境研究所, 2004)。また、黒尾・高瀬(2003)の弥生時代の栽培植物の出土事例の集成からも、当該期のイネの産出については、四国県内や瀬戸内沿岸、北部九州、大阪湾岸域において普通にみられることが判る。

しかしながら、今回検出された弥生時代のコムギについては、黒尾・高瀬(2003)によれば、四国県内での出土事例がなく、瀬戸内・北部九州において山口県・福岡県下の遺跡で数例の報告しかなされていない。なお、大阪湾岸域では、黒尾・高瀬(2003)においてコムギの出土事例が記載されていないが、その後に刊行された長原遺跡の報告書において、弥生時代中期のNG 03-6次SB015の焼失住居床面から1点の炭化したコムギが報告されている(上中, 2005)。このような弥生時代のコムギの出土事例から、今回の西野々遺跡のST-7007からの検出については、検出事例が希少で注目されるべき結果と認識される。

以上のような弥生時代中期の竪穴建物跡(ST-7007)埋土から検出されたイネ・コムギについては、当該期の西野々遺跡や香長平野やその周辺部における植物利用を考えるうえにおいて、今後、重要な報告事例の一つとなるものと考えられる。高知県下では、前田編(2003)の松ノ木遺跡において縄文期の遺跡土壌の水洗別がなされているが、このような調査・分析について、今後もさらに継続的に実施し、時空間的な考古植物学的資料の蓄積が期待される。

(3) 弥生時代の遺構から検出された炭化材

同定を実施した炭化材のうち、VI-1区のST-6026の試料は、P-1付近から出土しており、燃料材の一部が炭化・残存した可能性がある。これらの遺構から検出された炭化材の種類は保存状態が悪く不明であるが、広葉樹材が利用されていたことが推定される。

その他の炭化材については、居住域に伴う溝や住居跡埋土から出土しており、炭化していることから、何らかの人間活動に伴って利用され、炭化したものと思われる。その樹種は、SK-6017で針葉樹のヒノキ科、SK-6023とST-7007中層で落葉広葉樹のクヌギ節からなり、遺構間で異なった同定結果が得られている。

同定された樹種の生態性については、クヌギ節がコナラ節と共に二次林を構成する種類であるが、コナラ節よりも湿った環境に生育し、河畔林を構成することもある。よって、クヌギ節は氾濫原上でも分布が見込まれる樹種である。さらに二次林要素でもあることから、クヌギ節は人間の活動領域に近接した山地や丘陵・台地において存在する可能性がある。一方、ヒノキ科には、ヒノキやアスナロ等の有用材が含まれる。これらは、山地・丘陵地の尾根筋に生育する種類である。

なお時代が異なるが、当社の分析において本遺跡より下流側の西方約2kmに位置する介良野遺跡では、弥生時代終末期～古墳時代初頭の住居跡の埋土から水洗別された炭化材が、アカガシ亜属と

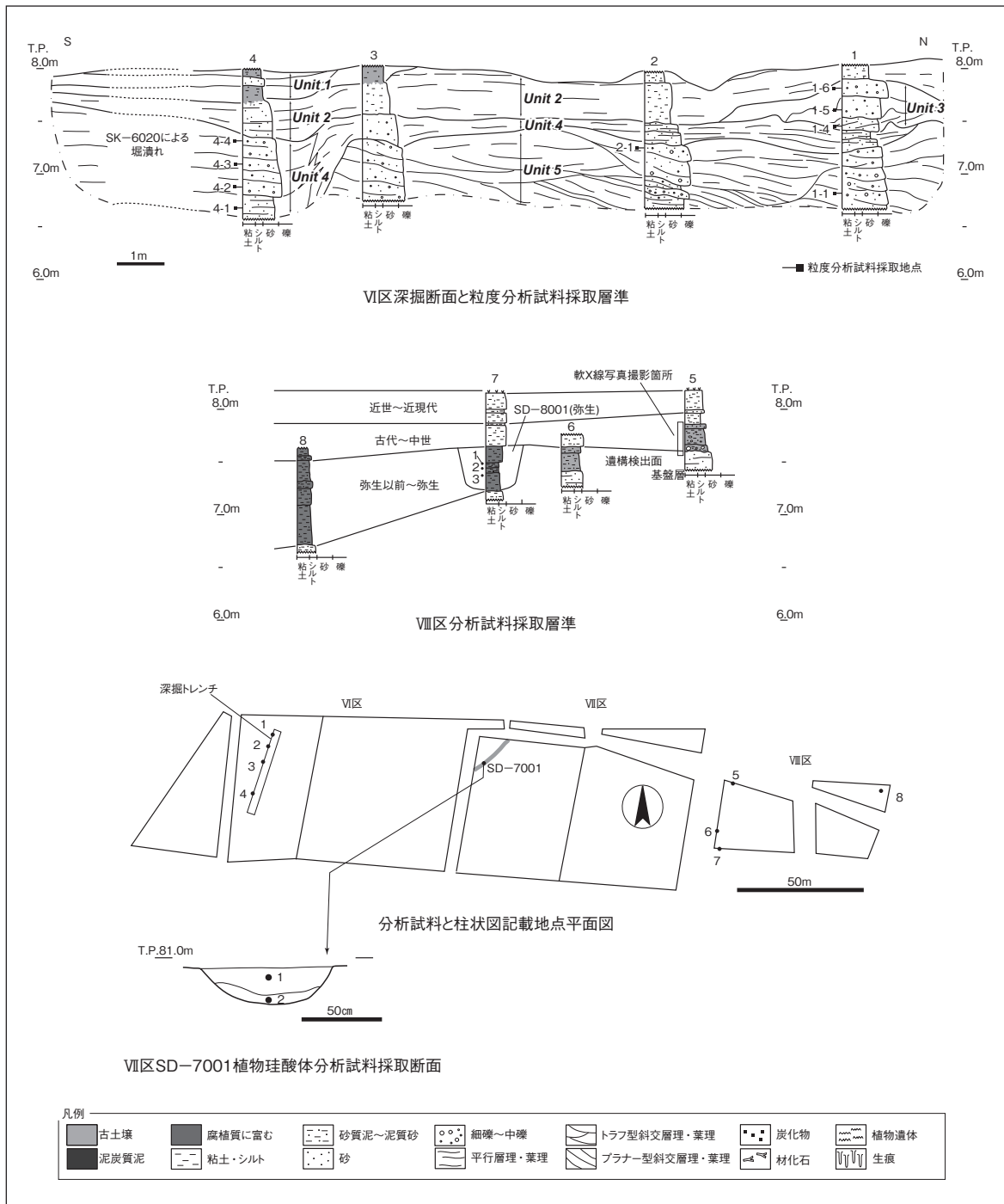


図4-12 西野々遺跡分析地点の層序とサンプル採取層準

スタジイからなる樹種構成をなすことが確認されている(辻ほか, 2007)。このような樹種構成は, 西野々遺跡の弥生時代の住居跡から得られた炭化材の樹種と異なり興味深い。このような分析結果の差異については, 現段階でその要因などを特定することは難しい。物部川やその周辺の平野部における遺構出土の炭化材の樹種については, 現状で類例蓄積の段階にあり, 住居跡埋土に含まれる炭化材の由来の詳細な吟味とともに, 今後さらに類例蓄積を進めていくことで, 先史時代における木材利用のあり方の一端に迫れるものと認識される。

5. 考察 (4) 西野々遺跡の遺構検出面基盤層の堆積状況



写真4-1 VI区深掘断面堆積状況1



写真4-2 VI区深掘断面堆積状況2



写真4-3 VI区深掘断面堆積状況3



写真4-4 VI区深掘断面堆積状況4

(4) 西野々遺跡の遺構検出面基盤層の堆積状況

① 堆積ユニットの分布と特徴

VI区では、調査終了段階において、弥生時代以降の遺構検出面となる堆積層についての形成過程の検討や年代試料の採取を目的として、バックホーを用いて、深掘トレンチの掘削を行った。掘削を行った深度は、約2.0mである。深掘トレンチは、幅2.0m、長さ約37.0m、概ね南北方向に走向する。

VI区深掘断面では、層理面・再侵食面の分布と層相から、堆積ユニット1～5の5つに層序区分を試みた。図4-12には、深掘断面と柱状図、堆積ユニットの累重状況について示す(写真4-1～4)。以下に、各堆積ユニットごとの地質学的記載を、現地調査での層相記載と粒度分析結果を踏まえ示す。

深掘断面最下部に位置する堆積ユニット5は、トラフ型斜交層理・葉理をなす礫層で構成される。礫層については、最大礫径が小型の大礫(Small cobbles: 64～128mm)で、細礫(granule: 2～4mm)～極粗粒の中礫(very coarse pebbles: 32～64mm)で構成され、基質が粗粒砂～極粗粒砂からなる。堆積ユニット5では、幅5.0m、深さ0.6m程度の下に凸状をなす流路状の堆積空間を礫層が充填しており、これらが再侵食を行いながら上方へ付加する。

堆積ユニット4は、トレンチ南端部に厚く累重する。本ユニットは、緩やかに斜交する葉理を示す細礫～中粒の中礫(medium pebbles: 8～16mm)を多く含む礫質砂～砂質礫からなる。ユニット最下部には、細粒砂～中粒砂にモードを持つ泥質砂層が累重する。

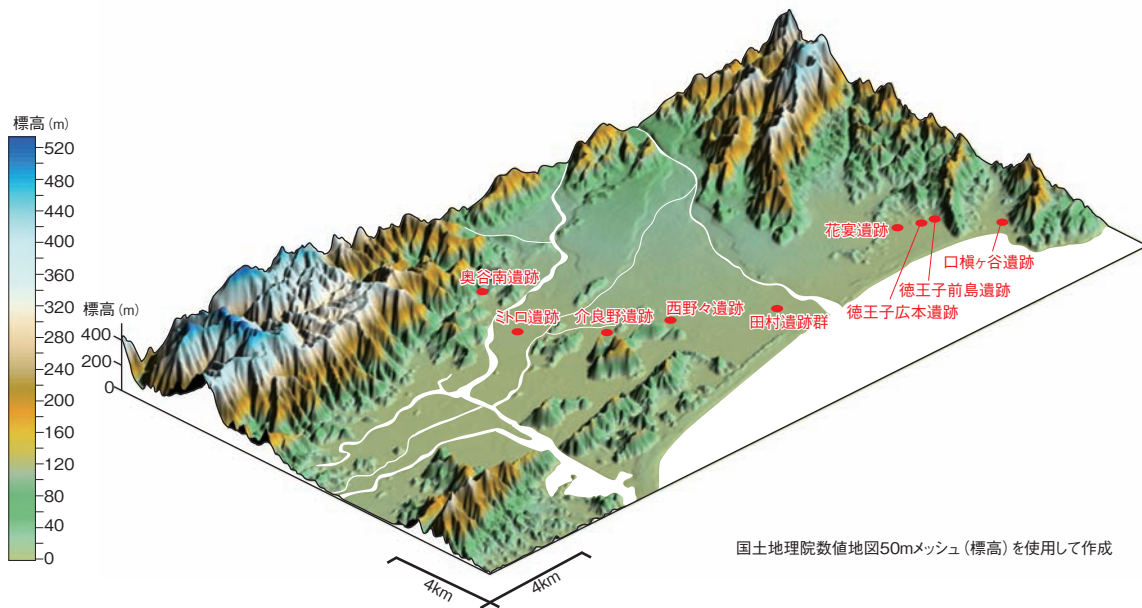


図4-13 調査地点位置図

堆積ユニット3は、上に凸状をなす堆積形態をなす。層厚は、最大で幅5.0m、高さ0.6m程度である。上方粗粒化をなし、最下部にはプラナー型斜交葉理をなす中粒砂～粗粒砂層が存在する。その上部には、淘汰が非常に不良で堆積構造もあまり明瞭でない、細礫から細粒の中礫(fine pebbles : 4～8mm)混じりの粗粒砂からなる礫質砂と細礫～中粒の中礫を主体となす泥質砂質礫が累重する。

堆積ユニット2は、遺構検出面の基盤となる堆積層で、平行葉理をなしシルト混じりの細粒砂～中

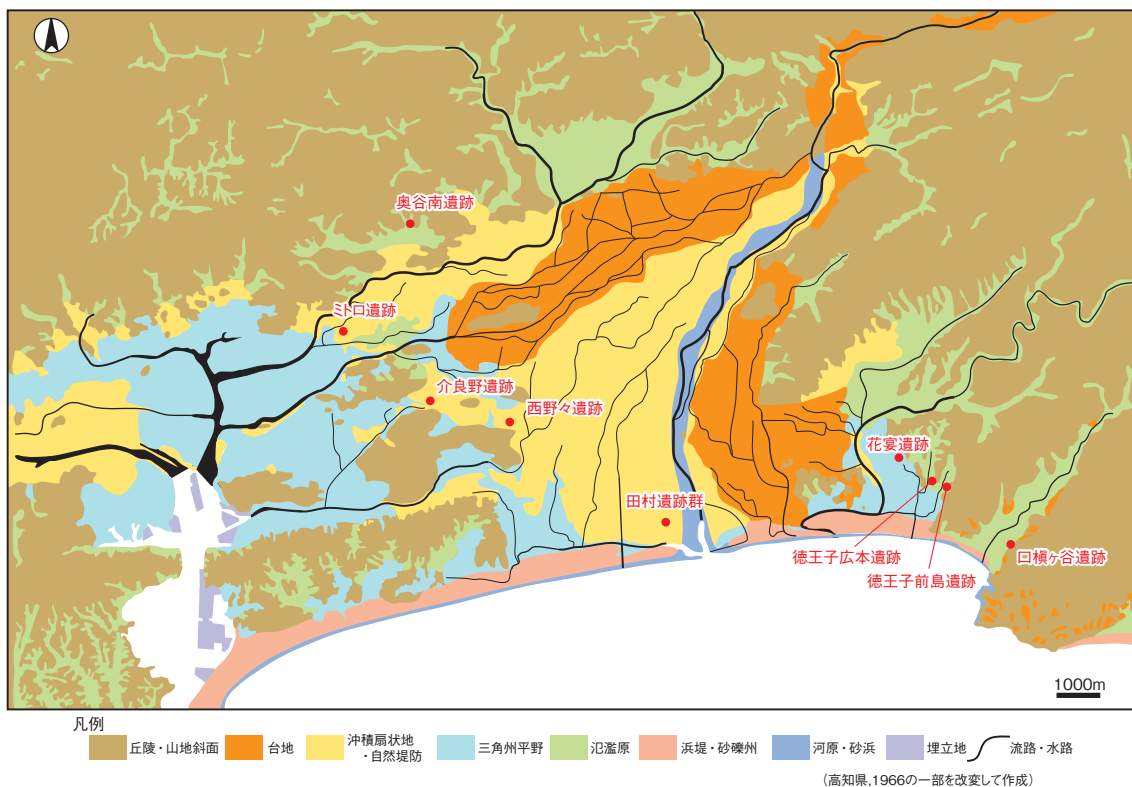


図4-14 香長平野の地形と遺跡の立地

粒砂層で構成される。深掘トレンチの最上部に位置する堆積ユニット1はトレンチ南半部のみ分布する。本ユニットでは、細粒砂～中粒砂を挟在し、上下で古土壌をなす塊状の腐植質を含むシルト質細粒砂～中粒砂層で構成される。

② 遺構検出面基盤層の堆積過程

i Unit5 (堆積ユニット5)

観察を行った深掘トレンチでは、すべての堆積ユニットで側方および垂直方向への顕著な細粒化が認められない。最下部に位置する堆積ユニット5では、堆積層の分布が上に凸状の形態をなすとともに、ユニット内において流路状の堆積空間が、再侵食しながら上方へ付加する。増田(1999)の河川堆積システムに基づくと、堆積ユニット5は、網状河川の堆積システムで形成されたと解釈される。

西野々遺跡は、高知県(1966)の地形分類図によると、物部川が形成した沖積扇状地の末端部に位置する(図4-13・14)。満塩・阿子島(1991)によると、物部川が形成した沖積扇状地は、山田堰がかつて築造された土佐山田町の神母ノ木付近に扇頂部が存在するとされる。扇端部については、海岸部に並行する浜堤後背近くまで及んでいる。なお、物部川の現流路沿いには、一段低くなった活動中の氾濫原面と考えられる地形面が存在しており、そこにおいては埋没流路(旧河道)の痕跡の分布が非常に明瞭に判読される。物部川沖積扇状地の堆積平均勾配は、0.2°前後(3.5%前後)を示す。斉藤(2006)では、日本国内の扇状地面の平均堆積勾配の頻度分布を示し、その下限を0.1°(2%)としている。物部川扇状地の堆積勾配は、斉藤(2006)の下限勾配を上回ると共に、頻度分布から日本国内において一般的な数値とみなされる。このような湿潤地域の扇状地を流下する河川では、一般的に網状流路が発達することが指摘されている(チャーレーほか, 1995)。層相から網状河川の堆積システムと認定された遺構検出面基盤層については、上記のような地形学的観点からも支持される。

以上のことから、遺構基盤層を構成する堆積ユニット1～5は、扇状地上の網状河川の堆積システムで形成されたと考えられる。このうち堆積ユニット5については、その層相から、流路滲筋の河床内を埋積した堆積物と考えられる。

なお、今回の調査区やこれまでの発掘調査では、遺構検出面において帯状の礫が何条も分布することが確認されている。この帯状の礫層は、今回の調査・分析で観察された堆積ユニット5のように、上に凸型の形態をなす流路充填堆積物の砂礫層の頂部が、遺構検出面に露出したものであることが、これまでの調査・分析結果から窺える。そして、これらの礫層は、遺構検出面下において、凹凸をなして累重する。網状河川の堆積システムが発達する扇状地河川では、一般的に河岸が低く、河床変動に関係する粒径集団の土砂移動が激しいので、流路内の堆積しやすい場所において、河床が周辺より高くなることが指摘されている(山本, 2004)。そのため、扇状地面では、流路変更が生じやすく、それまで流下していた流路が形成していた地形(砂州による凹凸面)をそのまま残す場合があるとされる。このような扇状地での河床変動状況を踏まえると、これまでの西野々遺跡の発掘調査や深掘断面で確認される凹凸をなす礫層は、流路変更とその後の流路間の埋積の繰り返しによって生じたものと解釈される。遺構検出面で認められる帯状の礫層については、上方付加が卓越するため上に凸型を形づくり、周囲よりも相対的に高まりをなして埋没した河床の最終的な位置に相当するものと判断される。

ii Unit4～1 (堆積ユニット4～1)

堆積ユニット4は、流路充填堆積物の堆積ユニット5よりも細粒な砂層を中心とした堆積層で構

成される。また、本ユニットは、ユニット5を覆うように累重する。このような累重状況から、堆積ユニット4は、流路間の低地を埋積した地層と解釈される。堆積ユニット2・3については、堆積ユニット4・5を覆って累重する。上に凸型をなし、淘汰が非常に悪い堆積ユニット3は、層相と粒度組成から、流路埋没後の扇状地面上で発生した布状洪水の堆積物と推定される。堆積ユニット2については、今回の分析で粒度分析を実施しなかったが、Ⅱ区・Ⅲ区で分析を実施している。この堆積ユニット2は、浮遊土砂を大量に含む砂質粘土質シルト～シルト質砂に区分される堆積物で構成される。このことから、堆積ユニット2については、扇状地面上に形成された流路および流路間の凹地を埋積して、調査区周辺が平坦化した後に、周囲の流路から供給された洪水堆積物と考えられる。また、これまでの調査により、遺跡の基盤層に相当する部分では、Ⅰ区で部分的に泥層が累重する領域が見いだされている。このような泥層は、流路埋没後の氾濫原に形成された小規模な池沼と解釈される。

堆積ユニット1では、古土壌が形成されている。このことから、本ユニットは、扇状地上の流路・氾濫原堆積物の埋積後、静穏な堆積環境下へと変化に伴い発達した土壌帯と認識される。なお、古土壌は、北側へ向かう途中で途切れており、その連続については調査区周囲の壁面でも追うことが出来なかった。このような古土壌の分布から、調査区では、本来相対的に北側の方が地盤が高かったことが推定される。古土壌帯の不連続から、高まりについては、弥生時代以降のある時期に、削平されたものと判断される。調査区の北半部では、堆積ユニット5に相当する流路充填堆積物が分布する。想定される地盤の高まりは、この堆積ユニット5の累重に対応している。従って、Ⅵ区では、調査区北半部が、基盤の流路堆積物の分布に対応して元々周囲より地盤が若干高かったことが指摘される。西野々遺跡のⅥ区やⅦ区では、弥生時代の居住域が検出されているが、そのほとんどで遺構の削平が著しい。今回の深掘断面の観察から、Ⅵ区などでは、弥生時代以降のある段階に、扇状地堆積物最上部の古土壌とその下位にまで及ぶ削平があったことが確認される。削平の程度が大きい部分では、弥生時代の遺構の残存状況が非常に劣悪である可能性が指摘される。このことから、竪穴建物跡などの遺構分布の検討にあたっては、本遺跡の場合、基盤層の堆積状況から推測される古微地形と後世の削平を踏まえる必要があると考えられる。

③ 西野々遺跡における遺跡形成過程—これまでの自然科学分析結果の概要—

i 遺構検出面基盤層の堆積年代

以上のような遺構検出面基盤層の層相解析から、西野々遺跡における今回の調査区は、網状流路の河川堆積システムによって形成された沖積扇状地の扇端部に位置することが確認される。

考古遺跡において過去の人間活動を解釈する際には、遺跡形成過程の把握が必要と認識される。遺跡形成過程の検討では、遺跡成立以前のその場所の自然環境、人間活動の展開に伴う遺構形成過程や放棄後段階における人間と自然営力による環境変化や埋没過程などを明らかにしていくことが重要と考えられる。

西野々遺跡では、弥生時代以降の遺構、遺物が検出される基盤層の堆積年代が不明であった。このような遺構検出面基盤層の堆積年代は、遺跡形成過程の検討の際に重要な情報であり、今回の発掘に伴い、その年代を明らかにすることが自然科学分析の目的の一つであった。これまで実施された、遺跡基盤層の深掘調査では、多くの深掘トレンチを設定したにもかかわらず、年代試料を得ることが出来なかった。こういった状況のなか、今回の調査範囲の西端部に位置するⅤ区の調査・分析では、初めて遺構検出面基盤層の放射性炭素年代値が得られた。さらに、近年には、西野々遺跡周辺に位置

する考古遺跡の発掘調査においても、遺構検出面基盤層の年代や形成過程に関する地質学・地形学的な情報が報告されつつある。

このような西野々遺跡とその周辺での考古遺跡発掘調査に伴う自然科学分析結果の蓄積を鑑み、本節では、これまでに西野々遺跡とその周辺遺跡で得られてきた分析結果を踏まえ、西野々遺跡やその周辺領域での地質学・地形学的知見の整理を試みたい。

今回の西野々遺跡での一連の発掘調査結果から、弥生時代以降の遺構検出面は、I区東端部およびVI・VII区を頂部として、西側へ緩やかに傾斜していくことが明らかとなってきた(図4-15)。遺構検出面は、腐植質に富む黒みを帯びる色調を呈す古土壌で構成される。ただし、相対的に地形が高い領域では、後世の削平によって古土壌の土壌層位A層が削平を受け、遺構が土壌層位B層において確認されている。相対的な高まりとして認識される地形的に頂部をなすI区東端部およびVI・VII区では、遺構検出面基盤層が砂礫層を主体とした堆積物で構成される。

発掘調査範囲の西端部に位置し、居住域に関する遺構が希薄となるV-2区では、遺跡基盤層の上面高度が相対的に低くなり、弥生時代～古代頃の遺構検出面が現地表面下から比較的深い深度に埋没するような堆積状況が観察される。このような堆積状況を示すV-2区に分布する弥生時代～古代頃の遺構検出面の基盤層では、I区東端部およびVI・VII区で構成されるような砂礫層と異なり、それより細粒の泥層ないし砂泥互層で構成される。これらの泥層ないし砂泥互層の最上部には、腐植質に非常に富む黒色泥層からなる古土壌が存在する。V区の分析では、この古土壌の腐植について放射性炭素年代測定を実施し、上述したように、西野々遺跡において、初めて遺構検出面基盤層の地形発達史に関する情報を得ることができた。古土壌の腐植からは、 5230 ± 40 yrs BPの年代値が得られている。また、その直下の泥層中では、埋没したヒノキの木材片から 5510 ± 40 yrs BP、そのさらに下部の砂泥互層中の炭化物から 5240 ± 40 yrs BPの年代値も得られている。

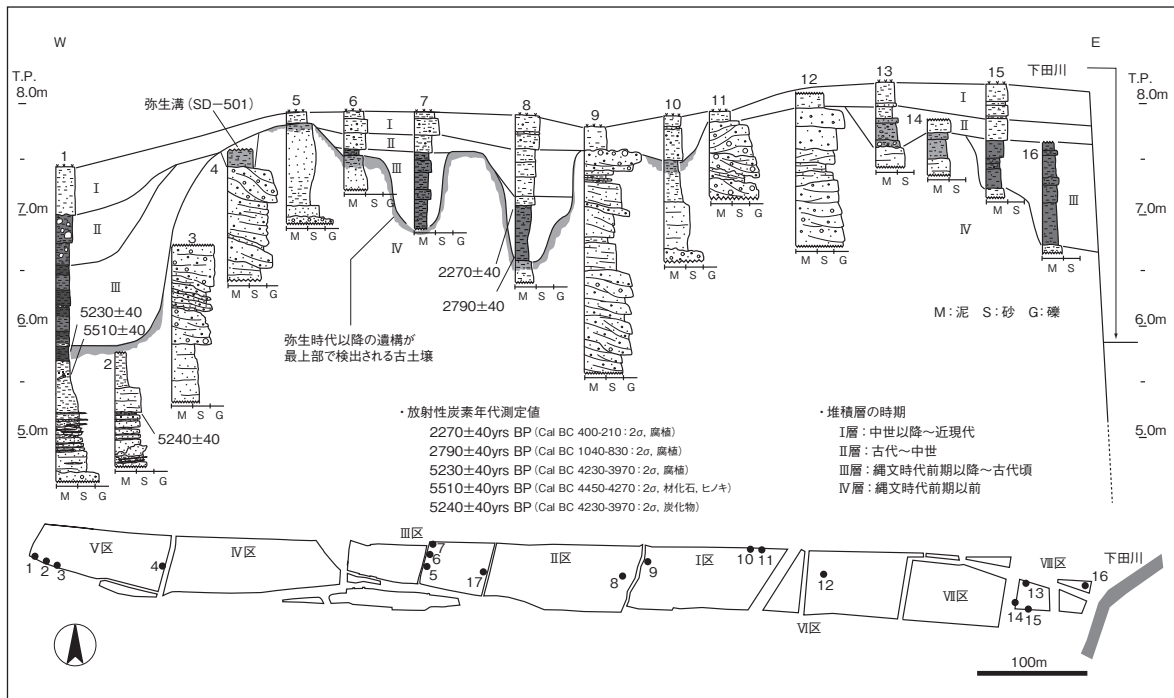


図4-15 西野々遺跡東西方向の層序模式柱状断面図

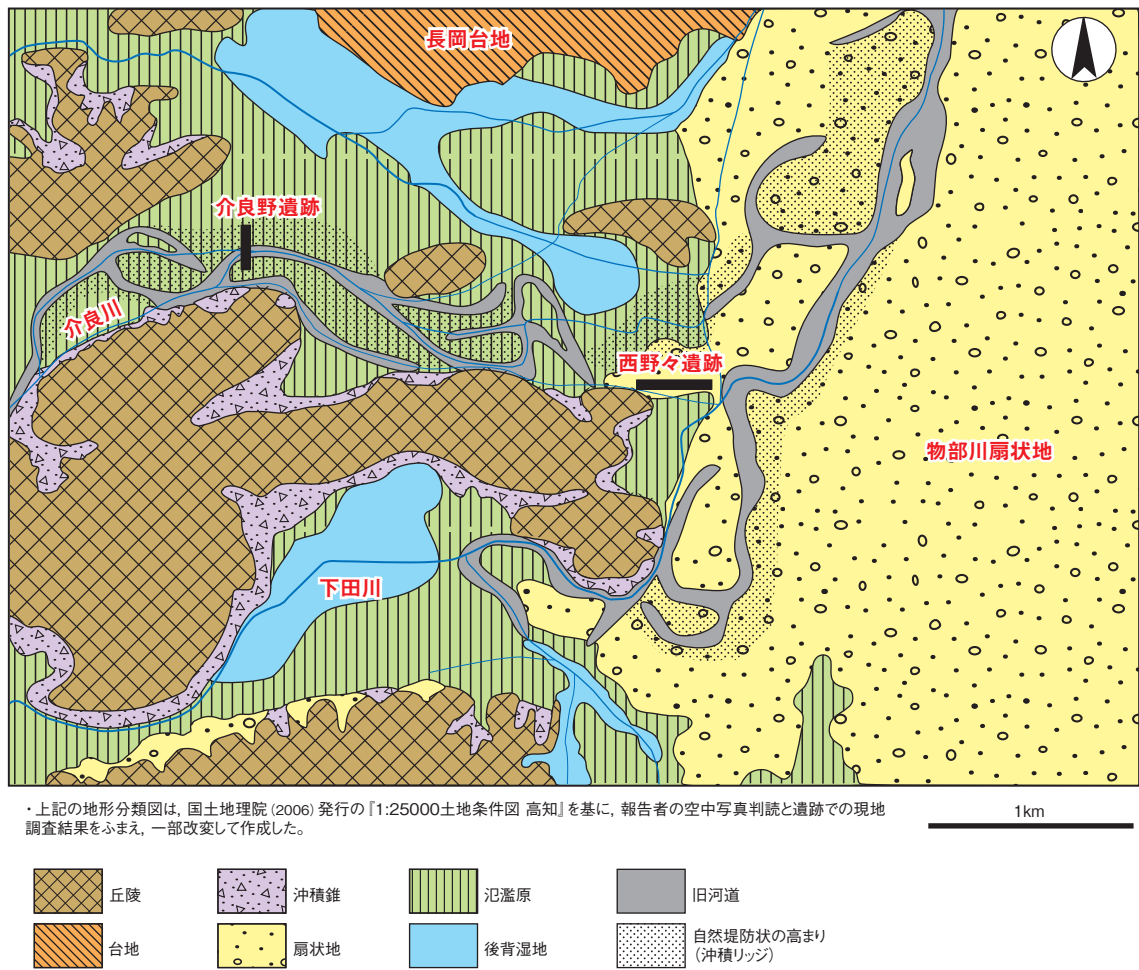


図4-16 調査区周辺の地形分類図

これらの年代値とⅠ～Ⅷ区までの連続的な堆積層観察から、西野々遺跡において弥生時代以降の遺構検出面となる遺跡基盤層については、放射性炭素年代測定値で5200年前後の縄文時代前期後半頃までの扇状地発達によって形成され、その後に堆積物供給が停止して、離水し地表面上で安定した土壌発達が行われたものと考えられる。

ii 西野々遺跡での遺跡形成過程

発掘調査から、本遺跡で本格的な人間活動が展開するのは、弥生時代であることが確認される。上述の地形・地質学的検討結果から、弥生時代前後から古代には、既に地形面が離水しており、今回の調査領域内の広い範囲で、高燥で安定した土壌環境が継続的に維持されるような状況であったことが指摘される。花粉・植物珪酸体分析結果では、弥生時代～中世に、明るく乾いた場所を好むネザサ節、ススキ属、ヨモギ属などが多産し、かつ草本が主体をなす化石群集が得られている。植物化石群集から、弥生時代前後～中世の時期には、草が卓越するような植生景観が展開していたと推定される。なお、Ⅰ～Ⅲ区では、部分的に腐植質泥層で埋積される流路状の落ち込みが存在する。ここでは、弥生時代前後～古代頃に、ガマ属、オモダカ属、イボクサ属、フサモ属、ミズワラビ属、ヨシ属といった水湿地生の草本が生育していたことが花粉分析結果から窺える。落ち込みでは、周囲より湿潤な環境が形成されていたことが、層相および植物化石群集から確認される。

5. 考察 (4) 西野々遺跡の遺構検出面基盤層の堆積状況

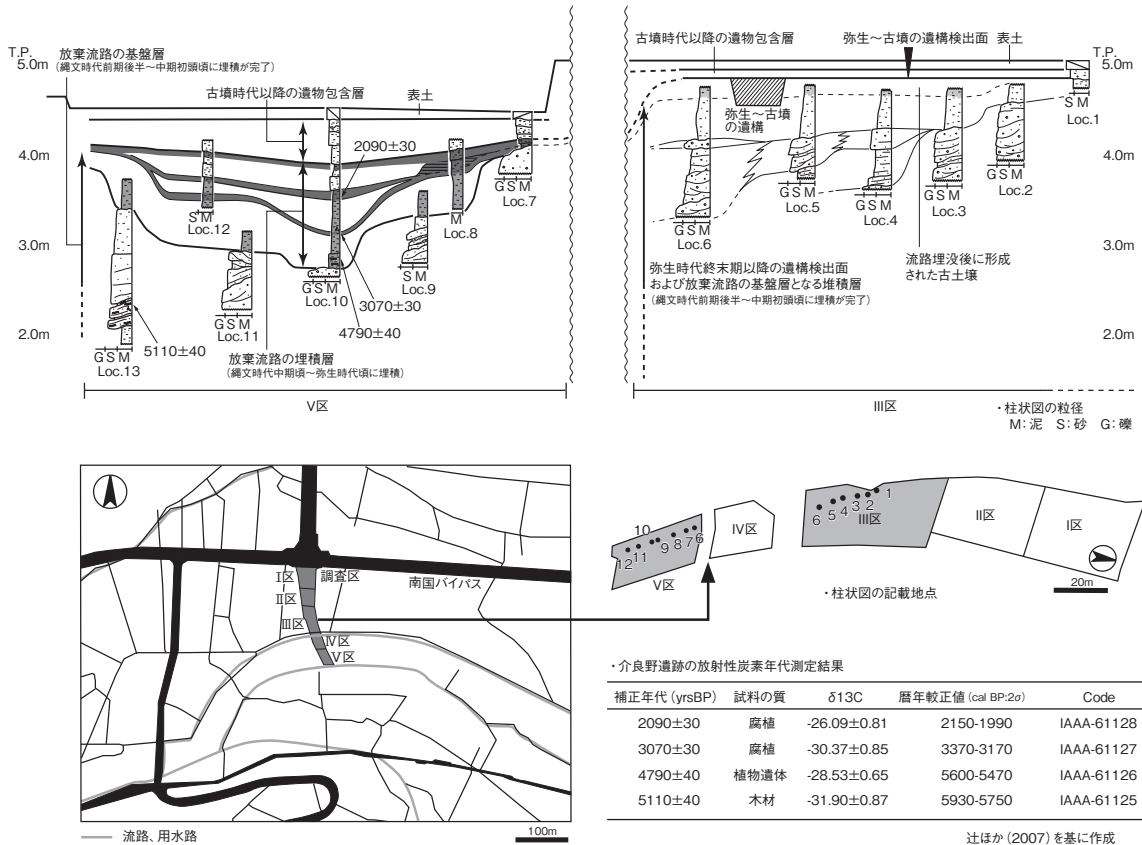


図4-17 介良野遺跡の層序と年代

今回の発掘調査結果では、相対的に高まりをなす I 区東端部および VI・VII 区の頂部付近で、弥生時代～古代に居住域が形成され、多数の竪穴建物や掘立柱建物跡が検出されている。居住域に関する遺構・遺物は、西側に向かい相対的にその分布密度が減少する傾向を示す。なお、本遺跡では、弥生時代～古代頃に、栽培種であるイネ属植物珪酸体がほとんど検出されない傾向が確認される。本年度の分析では、居住域内の溝や住居跡埋土からイネ属が産出しているが、これは居住域内に持ち込まれたものである。西野々遺跡は、立地的に珪酸体化石の風化が進行し易い土壌環境が形成されており、珪酸体化石についても風化の影響を考慮する必要がある。ただし、弥生時代前後～古代の植物珪酸体分析結果では、タフノミーの異なる流路状の落ち込みや遺構埋土などの複数の分析地点で、いずれもイネ属の産出が非常に少量であった。このようなイネ属の産出状況からは、弥生時代前後～古代に西野々遺跡において、水田が広く展開するような状況ではなかった可能性が示唆される。

弥生時代以降に上記のような遺構が検出される西野々遺跡では、地形的特徴として非常に注目される点として、遺跡周辺において連続性の良い旧河道の分布が認められることがあげられる(図4-16)。この旧河道については、西野々遺跡下流の南西約2～3kmに位置する介良川沿いの介良野遺跡の自然科学分析において、放射性炭素年代測定で4800年前頃以降に埋没を開始し、腐植質泥層が累重したことが確認されている(辻ほか, 2007; 図4-17)。介良野遺跡および西野々遺跡で実施された分析結果を踏まえると、地形分類図で確認される旧河道については、5000年前頃まで継続した扇状地の土砂供給停止に伴って、それまで活動的であった流路が放棄流路へと変遷した地形発達を示しているものと判断される。

このような旧河道内では、現在も小規模な流路が形成されている。旧河道内の現流路については、鈴木(1998)にまとめられた形態と構成物質に基づく低地河川の分類を踏まえると、本流の転流後にその旧流路跡に形成された河川である名残川に相当すると判断される。このような名残川では、流路の堆積環境が穏やかで、大規模な洪水の頻度が少なく、かつある一定量の水分量が見込まれるため、灌漑などに利用し易い特徴を有す(鈴木, 1998)。西野々遺跡周辺の物部川の沖積扇状地上に存在する旧河道内を流下する名残川については、これまでの分析・調査結果から、5000年前頃以降、旧河道内の範囲内に継続的に存在していた可能性が示唆される。

Ⅲ区やⅣ区では、西側から東側へ伸びる水路と考えられる弥生時代～古代の溝群が検出されている。これらの溝は、その走向方向から、丘陵裾部を通り、東側へ伸びることが予想される。東側には、名残川である下田川が存在しており、ここが取水地点であった可能性が高いことが、地形・地質学的な検討から強く示唆される。今回の調査領域は、北東から南西に舌状に伸びる、微高地をなす扇状地および自然堤防状の高まり(沖積リッジ)上に立地する。尾根状をなす微高地周囲では、相対的に低い氾濫原面が広がっていることを踏まえると、西野々遺跡で検出された水路の可能性のある溝群については、東側を流下する名残川から北西側の氾濫原への導水を目的とした灌漑水路と評価される。

なお、遺跡内を流下する名残川については、西野々遺跡の南西約2kmに位置する田村遺跡群でも、小野編(2002)の概報に添付された等高線図から、田村川の東に位置する秋田川がそれに該当するものと思われる。小野編(2002)の詳細な等高線図と発掘調査結果から、秋田川を挟んで西側と東側で地形面が上下2面に区分される可能性が示唆される。秋田川の西側に位置し、相対的に下部の地形面については、昭和55～58年度の空港整備事業に伴う調査範囲に相当する。この調査区では、秋田川に近い領域で、弥生時代前期の水田跡が発見されると共に、一部の調査区内の堆積に関しても弥生時代前期頃まで、河川氾濫堆積物の累重が認められることが読みとれる。このような遺構と堆積層の検出状況は、弥生時代前期段階の水田形成と名残川の可能性のある秋田川の旧流路との因果関係を傍証するものとして着目される。弥生時代前期段階の土砂堆積は、秋田川の東側に位置し、B・C区などを除く相対的に上部の地形面上に立地する平成8～13年度の空港整備事業に伴う調査範囲で認められない。このことは、等高線図から地形面が区分される可能性を支持する調査結果とも解釈される。これらの田村遺跡群で予察される地形と遺構の分布状況や堆積状況については、名残川の可能性のある秋田川の存在との有機的な関係を窺わせる点で重要と認識される。

以上のような、西野々遺跡における地質学・地形学的現地調査に基づく系統的な自然科学分析結果と周辺遺跡の調査成果の再評価によって、物部川沖積扇状地では、遺跡の立地環境を検討する際に有効となる新たな知見が得られてきていることが成果として確認される。このような成果のうち、物部川沖積扇状地上において起源が縄文期に遡る可能性のあることが判明した旧河道については、弥生時代以降の農業生産などの人間活動を考えるうえにおいて、重要な存在となる可能性が高く注目される。このような旧河道と遺跡立地の関係性については、今後より具体的な人間活動を踏まえた詳細な議論を進めていくことが課題として認識される。この点については、西野々遺跡などで実施している遺跡での地質・地形調査を主眼においた現地調査の継続、その結果を踏まえた大縮尺スケールでの空中写真判読、既往の発掘調査報告書の読み込みなどから、遺跡形成過程を軸として、さらに検討を進めていくことが必要であろう。また、西野々遺跡や田村遺跡群では、沖積扇状地上の水文環境を反映して、微化石や大型植物化石の保存状態が極めて悪く、これまでの分析においても十



写真4-5 VIII区軟X線写真撮影試料採取断面

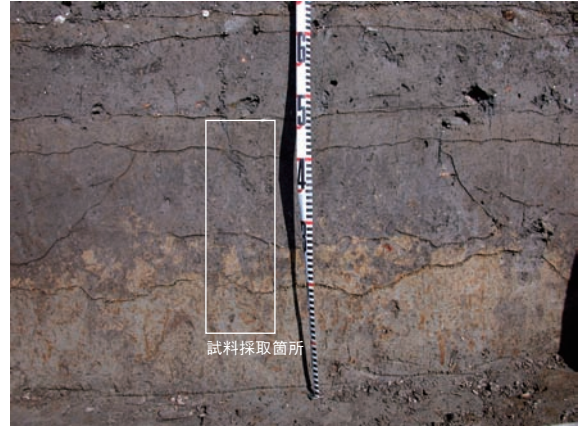


写真4-6 VIII区軟X線写真撮影試料の堆積断面

分な古植生復元が行えたとは言い難い状況である。この点については、今後、微高地縁辺部などに存在が予想される泥質堆積物などを対象に、分析の機会を作っていければと思われる。

(5) VIII区の古代～中世の層準の堆積・土壌相

軟X線写真撮影を実施した観察地点では、遺構基盤層をなす黄褐色泥質砂層の直上において、幅10～30mm程度の黄褐色泥質砂層起源のブロック土の散乱が認められた(写真4-5・6)。観察地点付近では、畑の畝状を呈するような溝群(畝状遺構)が検出されている。このような遺構基盤層直上のブロック土の発達と、検出された溝群の特徴から、観察地点では、畑地耕作土が形成されていたと考えられた。

ブロック土の散乱する層準は、軟X線写真観察層準のⅢ層に相当する。このⅢ層では、周囲から分離したブロック土が存在せず、幅5～20mmの垂直方向の堆積物によって充填される粗孔隙の著しい貫入が観察される。このような軟X線写真による土壌相の観察から、遺構基盤層をなす黄褐色泥質砂層の直上のブロック土が散乱する層準については、人為的な擾乱ではなく、生物擾乱の発達で形成されたものと認識される。Ⅲ層に発達する粗孔隙は、上位に累重するオリーブ褐色を呈する腐植質の砂質泥層によって充填される。このことから、Ⅲ層が擾乱を受けたのは、Ⅲ層上位のⅠ～Ⅱ層以上のオリーブ褐色腐植質砂質泥層が形成された時期以降と考えられる。

以上のことから、軟X線写真観察層準において、Ⅳ層は生物擾乱の影響が少ない遺構基盤層、Ⅲ層はⅡ層より上位の堆積層が形成された時期以降に、激しい生物擾乱を受けて形成された遺構基盤層最上部と解釈される。

Ⅰ層とⅡ層は、腐植質に富み、古土壌ないし古土壌を母材とする堆積層である。Ⅱ層からⅢ層にかけては、自然状態の土壌で形成される土壌層位A層からC層に至る漸移的な垂直方向の構造変化が観察されず、Ⅱ層とⅢ層の層界を挟んで層相が一変する。またⅡ層では、単層内において全体的に均質な土壌相が分布することも観察される。このような土壌相から、Ⅱ層は人為的によく攪拌されて形成された耕作土と考えられる。なおⅡ層は、検出遺構から、畑地耕作土の可能性も想定されている。考古遺跡での古畑地土壌の軟X線写真や土壌薄片による微細構造的な研究では、作土層準において粒団構造が発達することが指摘されている(松田・別所, 1997; 松田, 2001・2004)。Ⅱ層では、粒団構造の発達が認められず、土壌構造の観点から、観察地点において畑地が存在したことを積極的に指示で

きない。

軟X線写真での土壌相から、今回、観察を実施した試料では、全体的に生物擾乱の影響を大きく受けていることが判明する。特に、試料のさらに上部から連続する幅1～2mm程度の直線状に伸びる孔隙については、現成の水田耕作土の軟X線写真(造影剤撮影)の観察的研究から、心土部分に稲の根痕の累積として発達する構造と認識される(森ほか, 1992)。従って、このような孔隙については、現在の水田耕作に伴う土壌間隙構造と考えられる。

上記のことから、I層とII層では、現成を含む生物擾乱の影響が著しく、過去の土壌構造の把握が困難な状況であると判断される。従って、II層から上位の層準については、耕作土である可能性が極めて高いことが指摘されるが、その詳細な土壌構造からの検討に関して行うことができないものと考えられる。

(6) 弥生土器の胎土の鉱物学・岩石学検討

① 分析視点

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉碎による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。今回の試料のように比較的粗粒の砂粒を含み、低温焼成と考えられる土器の分析では、前者の方が、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。さらに前者の方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。

なお、土器胎土中の砂粒については、小林(2003)の民族考古学的研究を踏まえると、人為的に混入された混和材を起源とするものが少なからず混入していると認識される。胎土に砂粒を混入する機能については、成形のしやすさ・調整のしやすさ・煮沸効果・物理的衝撃に対する耐久性・耐熱性などに大きく関係することが指摘されている(小林, 1999; 西田, 2003)。

一方、蛍光X線分析は、胎土中の砂粒だけではなく、素地を作っている粘土も含めた特性を表しており、また、機器分析による数値データで表されることから、客観性、再現性がよいということがある。従って、本分析では、薄片観察法および蛍光X線分析を併用して土器胎土分析を実施した。

これまでに当社が実施した今回と同様の胎土分析では、同一の地質背景を有する地域内であっても、遺跡ごとに特徴的な岩石・鉱物の粒度組成が存在する可能性が見いだされてきている。同様の観点からの研究は、鐘ヶ江(2003)や谷口(1999)などが存在している。

小地域内における土器の移動については、森岡(1980)が兵庫県東南部の六甲山地南麓地域において、平野部(灰色系土器)と山麓部(褐色系土器)に位置する集落間での動態について言及している。辻ほか(2003)では、兵庫県芦屋市内出土の灰色系土器と褐色系土器の粒径別の岩石・鉱物学的胎土分析を実施し、これら2つの色調系列の土器が検出される各遺跡において、それぞれに特徴的な岩石・鉱物の粒度組成があることを確認している。

② 胎土の分類と肉眼による胎土観察所見との対応

i 胎土分類基準

今回の胎土分析では、産地同定に拘泥せず、以下に示すような胎土分析から分類されるパターン

と肉眼による胎土分類との対応関係について検討することを目的とした。

結果で述べたように、今回の分析では、薄片観察で認められた鉱物片、岩石片の組成と粒径組成さらに化学組成において、試料間に類似性が認められ、グループ化することが可能である。ここでは、見いだされた共通性を以下のように整理した(表4-6)。

鉱物片、岩石片組成

A: 石英・斜長石の鉱物片を主体とし、堆積岩類を少量伴う

B: 堆積岩類の岩石片を主体とし、少量の石英・斜長石の鉱物片を伴う

C: 石英・斜長石の鉱物片を主体とするが、堆積岩類を含まずに、少量の結晶片岩を伴う

粒径組成

1: 極細粒砂～中粒シルトをモードとする

2: 中粒砂をモードとする

3: 極粗粒砂～粗粒砂をモードとする

4: 極粗粒砂と中粒シルトをモードとする

化学組成

a: 今回の試料の中で最も多くの試料に認められる組成

b: aに比べてSiO₂が高く、Al₂O₃とFe₂O₃が低い傾向にある

c: 主要元素の組成はb類に近いが、微量元素においてb類に比べるとRbとBaが低い傾向にある

d: a～c類に比べてCaとMgが高く、Zrが低い傾向にある

e: 他の試料に比べてCaが突出して高い

以上3項目におけるそれぞれの分類名を組み合わせ(例えばA1a)胎土分類名とする。各試料の胎土分類を表4-6に併記する。今回の試料では、この胎土分類と様式との間に以下のような対応関係が認められる。

ii 第Ⅲ様式

7点の試料は、No1・2・6・19のA類とNo3～5のB類とに2分される。B類の試料は、いずれもB3aであるが、A類の試料は、A1aのNo1とA1bの他の3点とに細分される。発掘調査所見による胎土では、高知県西部とされた試料がいずれもB3aに対応する結果となった。一方、A1bに分類された3点は、田村、搬入?、高知県中央部という所見に分かれている。また、A1aのNo1は田村とされている。

iii 第Ⅲ～Ⅳ様式

3点の試料は、A1aのNo8とB3aのNo7・9とに分かれる。発掘調査所見による胎土との対応では、ともに田村とされたNo7とNo8が胎土分類では分かれており、No7は高知県西部とされたNo9と同じ胎土分類になっている。

iv 第Ⅳ様式

3点の試料は、いずれもA類であるが、粒径組成と化学組成において、A1aのNo11とA2bのNo10・17とに分けられる。発掘調査所見による胎土では、No10は田村、No11は瀬戸内、No17は高松平野?とされているが、上述のようにNo10の方が高松平野?とされたNo17に近い胎土を示す。

v 第Ⅴ様式

No16以外の試料は全てA類に分類される。A類に分類される試料のうち、No20以外は全て粒径組成において1類に分類される。No20は、今回の試料の中で唯一認められた粒径組成である4類に分類

された。化学組成においては、A1類に分類された試料も細分され、No.12・13・15のA1c類とNo.14, 18のA1d類とに分かれる。なおNo.20は、化学組成はNo.14・18に近いd類である。No.16は、今回の試料の中で唯一認められた鉱物、岩石組成であるC類に分類され、化学組成も他の試料とは大きく異なるe類に分類された。ただし、粒径組成は、他の多くの第V様式の試料と同様の1類である。一方、発掘調査所見による胎土との対応では、田村および田村?とされた5点の試料は、A1cとA1dに2点ずつおよびA4dに1点というように分かれたが、畿内?とされたNo.15も田村とされた試料の半数と同様のA1cである。搬入とされたNo.16については、今回の分析結果でも他の試料とは異なるc類かつe類を示し、肉眼による胎土観察所見と整合する結果となった。

vi 胎土分類結果

第Ⅲ様式および第Ⅲ～Ⅳ様式の試料は、ともにA類とB類にほぼ二分され、粒径組成も細粒傾向の強い1類と粗粒傾向の強い3類に二分され、A類は1類、B類は3類という特性を示す。

Ⅳ様式になるとB類は認められずにA類のみとなるが、粒径組成では1類とやや粗粒傾向の2類とに分かれる。また、粒径の違いは化学組成の違いともなっており、材料の違いが示唆される。

さらに、Ⅴ様式では、発掘調査所見により搬入とされたもの以外は全てA類であり、そのほとんどが粒径組成の細粒傾向の強い1類を示し、その点では他の様式に比べて斉一性が高いように見える。ただし、化学組成では二分され、材料の違いは存在すると考えられる。しかも、第Ⅲ様式や第Ⅳ様式とも異なる材料が使用された可能性が高い。第Ⅲ様式の試料と第Ⅳ様式の試料との間では、鉱物、岩石組成だけではなく、化学組成においてもa類とb類という共通した胎土が認められたが、第Ⅴ様式において、共通する材料が認められなくなったことは注目して良い。

③ 胎土の地域性について

今回の胎土分析分類の指標のうち、鉱物、岩石組成は、土器の材料(粘土および砂)が採取された地域の地質学的背景を示唆している。A類とB類の違いは、鉱物片と岩石片の相対的な量比の違いによって分類したものであり、検出された鉱物や岩石の種類はほぼ同様である。したがって、現時点では、A類もB類もともに、共通した地質学的背景に由来する可能性が高いといえる。

西野々遺跡は高知平野の東部に位置するが、高知平野を取り巻く地質は、四国の東端から西端まで中央をほぼ東西方向に横切る帯状に伸びた秩父累帯と呼ばれる地質により構成されている。四国の秩父累帯については、甲藤ほか(1968)や日本の地質「四国地方」編集委員会編(1991)などにより概観することができる。秩父累帯を構成する岩石は、主に砂岩、泥岩、礫岩、石灰岩、チャートなどの堆積岩類と酸性凝灰岩および変成岩の緑色岩類や千枚岩であり、礫岩を構成している礫種は主に石灰岩、チャート、砂岩、泥岩であるとされているが花崗岩類も少量含まれている。また、緑色岩類の中には原岩である玄武岩なども分布している。このような地質学的背景は、今回のA類およびB類に認められた岩石片の種類構成とほぼ整合する。したがって、今回の試料のほとんどは、高知平野あるいは秩父累帯の分布域内で採取された砂や粘土が材料となっている可能性が高い。おそらく、A類とB類の違いは、その地域内での採取地の違いによると考えられるが、現時点では、各分類とも、その具体的な地域を特定することはできない。今回の分析結果では、発掘調査所見により、高知県西部とされた第Ⅲ様式の試料がいずれもB類であったことなどを考慮すれば、今後、発掘調査所見により推定される地域の堆積物や土器の分析例との比較を重ねることにより、地域性を絞ることが可能となることが期待される。

なお、No.16にのみ認められたC類については、堆積岩類が含まれないという組成が、その地域性を考える際に重要である。高知県の地質は、北部に結晶片岩および緑色片岩からなる三波川帯が東西方向に分布するが、その南側には秩父累帯、さらに南側には四万十帯といういずれも堆積岩類からなる地質によって占められている。したがって、高知県内を流れる主要な河川の中流域から下流域に堆積する碎屑物を想定した場合に、堆積岩類が全く含まれないという地域はほとんど存在しない。したがって、C類の材料採取地は、高知県内にはない可能性が高い。これは、元素組成においてCaOの含有量が、他の試料と全く異なることから支持される。現時点では、その地域を特定することはできないが、地質分布からみれば、至近の地域では、三波川帯からなる山地に接している徳島平野の南縁部などの地域が推定される。C類の地域性についても、今後の分析例の蓄積が必要である。

今回の試料において、胎土の肉眼観察から推定されている地域の中には、「瀬戸内」や「高松平野」および「畿内」などが存在する。これまでの当社による胎土分析例では、例えば、高松平野や淡路島の遺跡から出土した弥生土器では、岩石片に花崗岩類を多く含むものが多く、この地域に広く分布している領家帯の花崗岩類という地質学的背景が反映されている。また、大阪府や兵庫県東部の遺跡から出土した弥生土器では、領家帯の花崗岩類の分布と丹波帯とよばれる堆積岩類の分布を反映した、堆積岩類と花崗岩類を主体とする岩石片組成が得られている。今回の試料には、これらの岩石片組成を示すものは認められず、これまでの分析例と比較しても、今回の試料の中に瀬戸内や高松平野および畿内からの搬入品が存在する可能性は低いと言える。

④ 胎土の特徴とその時期的変遷

Ⅲ様式では、胎土の化学組成や含まれる岩石・鉱物の種類構成に差がないものの、岩石・鉱物の量比と粒径組成に明瞭な差異を一部の試料で見いだすことができる。この差異は、肉眼による胎土の雰囲気による分類における西野々遺跡、田村遺跡群周辺と高知県西部という区分に対応する。すなわち、上述の結果のように、胎土の粒度組成では、高知県西部が西野々遺跡、田村遺跡群周辺に比べ粗粒であることが確認される(図4-18)。また、岩石・鉱物の量比では、高知県西部で堆積岩類の岩片が主体となるのに対し、西野々遺跡、田村遺跡群周辺で石英・斜長石の鉱物片が主体となることが指摘される。Ⅲ～Ⅳ様式についても、上記の傾向が確認される。このようなⅢ様式とⅢ～Ⅳ様式の分析結果からは、肉眼による胎土分類が、岩石・鉱物学的な胎土観察結果からも有意であることが支持される。ただし、同じⅢ様式においても、高知県中央部の下分遠崎遺跡に類似する胎土試料では、田村遺跡群の胎土の特徴を持つ試料との間に、分析結果の差異を認めることはできなかった。しかしながら、分析結果が1点のみであり、両遺跡の胎土の特徴については、今後さらに検討を進めていくことが必要であろう。

V様式では、それ以前の時期に比べ、胎土分類に斉一化の傾向が窺えると共に、細粒化の傾向が確

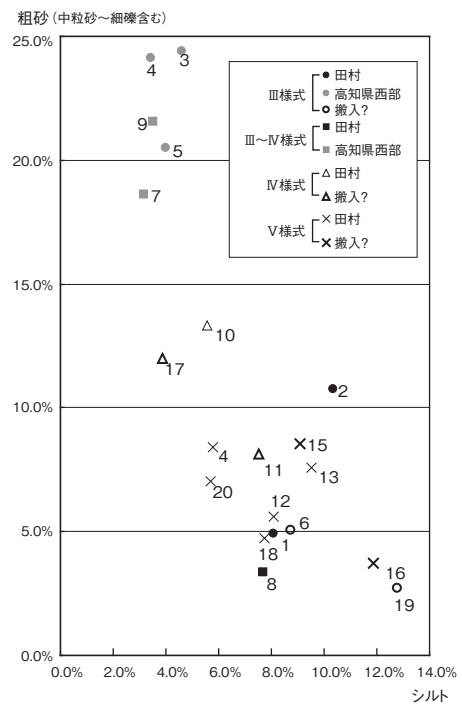


図4-18 胎土分析試料の粒度組成

認められる(図4-18)。小林(1999)では、縄文時代から弥生・古墳時代への胎土の細粒化が全国的傾向であることを指摘しており、今回の分析結果もそのような変化に対応したものである可能性が窺える。ただし、今回の分析では、V様式が甕主体であり、それ以前、特にⅢ様式が壺主体となっており、同一器種における比較検討が出来ていない点に留意する必要がある。器種別の土器胎土の粒度組成の特徴については、小林(1999)により、縄文時代～弥生時代に煮炊き土器は非煮炊き土器よりも大粒の砂を含み、また、同一器種間では容量のより大きい方が粗粒であることが指摘されている。このため、上記の分析結果については、今後、同一器種での検証を行うことが必要である。

6. 小結

今回およびこれまでの調査・分析から、以下のような内容の可能性や蓋然性が示される。

(1) 古環境

- ・西野々遺跡は、物部川が形成した沖積扇状地上に立地する。
- ・弥生時代以降の遺構検出面を構成する調査区の基盤層は、網状河川の堆積システムで形成されたと考えられた。
- ・西野々遺跡において弥生時代以降の遺構検出面となる遺跡基盤層は、縄文時代前期後半頃までの扇状地発達によって形成され、その後に堆積物供給が停止して、離水傾向となり地表面上で安定した土壌発達が行われたものと考えられた。
- ・人間活動の展開が認められる弥生時代には、調査区の広い範囲が、ネザサ節やススキ属、ヨモギ属などが分布する草地からなり、乾性の土壌発達が進行するような安定した土地条件が広がっていたと推定された。
- ・弥生時代のSD-7001で検出されたイネ属珪酸体は、人間により居住域に持ち込まれたイネに由来する可能性が示唆された。
- ・弥生時代中期のST-7007埋土では、栽培種のイネとコムギの種実が検出された。
- ・弥生時代の遺構から検出された炭化材は、SK-6017は針葉樹のヒノキ科、SK-6023とST-7007中層では落葉広葉樹のクヌギ節の炭化材が確認された。このうち、クヌギ節については調査区の周囲、ヒノキ科は、調査区をとりまく山地や丘陵部に生育していたものと考えられた。
- ・現在、物部川沖積扇状地上を流下する下田川や介良川は、本地域の扇状地発達の停止後に形成された名残川であることを指摘した。そして、このような名残川については、弥生時代以降の耕作地開発にとって、重要な取水源となっていた可能性が示唆された。
- ・Ⅷ区の遺構基盤層直上で認められたブロック土の散乱は、人為的擾乱ではなく、その他の生物擾乱によって形成されたものと考えられた。

(2) 土器胎土

- ・発掘調査所見による肉眼での胎土分類と、胎土分析に基づく胎土分類との比較からは、両者間で調和する点と、しない点の双方の分析結果が得られた。今回のような土器胎土分析は、これまでの肉眼観察による土器胎土の認識についての検証として意味あるものと考えられた。
- ・胎土の肉眼的特徴から、西野々遺跡、田村遺跡群周辺以外の場所で生産されたと推測される非在地産とされた試料6・11・15～17のうち、岩石・鉱物学的特徴から、確実な搬入品であると確認されたのは、試料番号16のみであった。

6. 小結 (2) 土器胎土

・非在地と認識された試料16以外のすべての試料は、岩石・鉱物学的特徴から、高知平野あるいは秩父累帯の分布域内で採取された砂や粘土を材料とすると考えられた。

・Ⅲ様式とⅢ～Ⅳ様式では、西野々遺跡や田村遺跡群周辺と高知県西部産との胎土分類が可能であることが判明した。

・同じⅢ様式では、高知県中央部の下分遠崎遺跡と田村遺跡群の胎土との間に、分析結果からの差異を見いだすことができなかった。

・Ⅴ様式では、それ以前の時期に比べ胎土分類に斉一化の傾向が窺え、さらに細粒化することが確認された。

・Ⅴ様式では、化学組成が2分された。さらに、Ⅲ様式、Ⅳ様式の化学組成値とも異なることも確認された。この要因については、現段階で不明である。

参考文献

- チョーレー, R.J.・シャム., S.A.・サグデン, D.E., 1995『現代地形学』大内俊二訳 古今書院 692p.
- Fork, R.L., 1954, The distinction between grain size and mineral composition in sedimentary - rock nomenclature. *J. Geol.*, 62, 344-359.
- Fork, R.L. and Ward, W., 1957, Brazons river bar, a study in the significance of grain size parameters. *Journal of Sedimentary Petrology*, 27, 3-26.
- Friedman, 1961, Distinction between dune, beach, and river sands from their textural characteristics. *Journal of Sedimentary Petrology*, 31, 514-529.
- 林昭三 1991『日本産木材顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫 1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料31』京都大学木質科学研究所 81-181.
- 伊東隆夫 1996「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料32』京都大学木質科学研究所 66-176.
- 伊東隆夫 1997「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料33』京都大学木質科学研究所 83-201.
- 伊東隆夫 1998「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料34』京都大学木質科学研究所 30-166.
- 伊東隆夫 1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料35』京都大学木質科学研究所 47-216.
- 石川茂雄 1994『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会 328p.
- 甲藤次郎・小島丈児・須鎗和己・沢村武雄・鈴木堯士 1968『高知県地質産図(20万分の1)』高知県商工課
- 鐘ヶ江賢二 2003「色調変化からみた九州弥生土器の地域色」松本直子・中園聡・時津裕子編『認知考古学とはなにか』青木書店 87-104.
- 小林正史 1999「ポイント・カウンティング法による土器胎土の粒度組成の分析－土器の使い方と製作コストとの関連から－」『北陸の考古学Ⅲ－石川考古学研究会々誌41－』73-95 石川考古学研究会.
- 小林正史 2003「東南アジアの土器作り民族誌における工程間の結びつき」『立命館大学考古学論集Ⅲ』立命館大学考古学論集刊行会 1043-1065.
- 古環境研究所 2004「高知県、田村遺跡群における自然科学分析」『田村遺跡群Ⅱ第8分冊 自然科学編』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 283-288.
- 高知県 1966『土地分類基本調査 高知5万分の1国土調査』経済企画庁.
- 近藤鍊三・佐瀬隆 1986「植物珪酸体分析, その特性と応用」『第四紀研究25』31-64.
- 公文富士夫・立石雅昭編 1998『碎屑物の研究法』地学団体研究会 399p.
- 黒尾和久・高瀬克範 2003「縄文・弥生時代の雑穀栽培」『雑穀 畑作農耕論の地平』木村茂光編 29-56.
- 久馬一剛・八木久義訳監修 1989『土壌薄片記載ハンドブック』博友社 176p.
- 松田順一郎 2001「大阪府布市遺跡の中世畑地耕作土にみられた微細堆積相」『日本文化財科学会第18回大会研

- 究発表要旨』日本文化財科学会 56-57.
- 松田順一郎 2004「古墳時代と江戸時代の畑地堆積物堆積構造の比較－大阪府久宝寺遺跡、京都府山崎遺跡の事例－」『日本文化財科学会第21回大会研究発表要旨』日本文化財科学会 62-63.
- 松田順一郎・別所秀高 1997「大阪府北島遺跡における畑地形成と地形発達」『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨』日本文化財科学会 70-71.
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高 1999「瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－」『日本文化財科学会第16回大会発表要旨集』120-121.
- 宮田雄一郎・山村恒夫・鍋谷淳・岩田尊夫・八幡雅之・結城智也・徳橋秀一 1990「淡水生アルタの形成過程－琵琶湖愛知川河口部を例として－2 地質構成と堆積相」『地質学雑誌96』839-858.
- 森也寸志 2000「軟X線による非破壊土壌中の排水機構の解明」『土壌の物理性No.83』59-65.
- 森也寸志・滋賀摂子・岩間憲治・渡辺紹裕・丸山利輔 1992「土地利用による土壌間隙構造の差異－軟X線による観察を中心として－」『土壌の物理性No.66』19-27.
- 森岡秀人 1980「土器からみた高地性集落会下山の生活様式」『藤井祐介君追悼記念考古学論叢』197-207.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000『日本植物種子図鑑』東北大学出版会 642p.
- 成岡市 1993「土壌粗孔隙の形態とその測定法土壌の不均一性と物質移動の研究前線」『日本土壌肥料科学雑誌』64-1, 90-97.
- 中嶋雅宏・中山勝博・百原新・塚腰実 2004「中新統土岐口陶土層の堆積過程と産出する大型植物化石の水理的挙動－岐阜県多治見市大洞地区の例－」『地質学雑誌110』204-221.
- 西田泰民 2003「土器の物理的特性と用途」『立命館大学考古学論集Ⅲ』立命館大学考古学論集刊行会 1067-1077.
- 日本の地質「四国地方」編集委員会 1991『日本の地質8 四国地方』共立出版 266p.
- 前田光雄編 2000『松ノ木遺跡 V』高知県長岡郡本山町教育委員会 358p.
- 増田富士雄 1999「透水層・帯水層のトレース：ダイナミック地層学からのアプローチ」『地下水技術41』1-15.
- 満塩大洗・阿子島功 1991「(4)高知県の完新統」『日本の地質8 四国地方』日本の地質「四国地方」編集委員会編、共立出版株式会社 47-149.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006『針葉樹材の識別IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修) 海青社 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 齊藤享治 2006『世界の扇状地』古今書院 299p.
- 齊藤文紀 1993「軟X線写真観察法」『第四紀試料分析法2』研究対象分析法日本第四紀学会編 東京大学出版会 103-108.
- 佐藤幸一 1990a「八郎潟干拓地重粘土水田土の粗孔隙の発達とその意義」『農業土木学会誌』60 25-30.
- 佐藤幸一 1990b「八郎潟干拓地における畑地と草地土壌の粗孔隙の発達とその意義」『農業土木学会誌』60 287-292.
- 島地謙・伊東隆夫 1982『図説木材組織』地球社 176p.
- 鈴木隆介 1998「建設技術者のための地形図読図入門」『第2巻 低地』古今書院 554p.
- 谷口陽子 1999「東関東地域の縄文土器の混和材について：数量化3類を用いたテクスチュアルアナリシスの試み」『情報考古学』5-2 11-29.
- 辻康男・矢作健二・辻本裕也・田中義文 2003「芦屋市内に所在する考古遺跡の自然科学分析」『寺田遺跡(第128地点)発掘調査報告書－集落東端部の様相と知見－』芦屋市教育委員会 135-163.
- 辻康男・田中義文・馬場健司・松元美由紀・高橋敦 2007「介良野遺跡の自然科学分析」『介良野遺跡 県道高知

参考文献

- 東インター線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 163-194.
- Wentworth, C.K. 1922『A scale of grade and class terms for clasticsediments』J.Geol 30 377-392.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998『広葉樹材の識別IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修) 海青社 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].
- 上中央子 2005「長原遺跡NG02-8・03-6次調査における炭化種実同定」『長原遺跡発掘調査報告 XII』(財)大阪市文化財協会 258-259.
- 山本晃一 1994『沖積河川学 堆積環境の視点から』山海堂 470p.
- 山本晃一 2004『構造沖積河川学 - その構造特性と動態 -』山海堂 690p.

第V章 総括

1. はじめに

西野々遺跡は平成15年度に実施した試掘調査で確認された遺跡で、平成16年度から平成19年度にかけて発掘調査を実施し、その様相¹⁾がほぼ明らかになってきた。中でも、今回報告するⅥ～Ⅷ区の調査成果が西野々遺跡の様相解明の手がかりとなっている。これらの調査区は西野々遺跡の東約1/4に位置し、検出・復元した遺構は、竪穴建物跡65軒、竪穴状遺構26軒、掘立柱建物跡148棟、堀・柵列跡41列、土坑245基、溝跡48条、井戸跡1基、道路遺構3条、畝状遺構8列、水溜り状遺構1基、性格不明遺構1基、ピット11,120個に上り、遺跡の中心部であったことを物語る。中でも、弥生時代の竪穴建物跡65軒、方形の柱穴で構成された古代の官衙関連遺構とみられる掘立柱建物跡71棟や道路遺構、一辺35～44mの溝で区画された中世の屋敷跡などが注目される。

本章では、今回の報告が西野々遺跡の最後の巻²⁾となるため、これまでに実施してきた自然科学分析の結果から導き出された古環境や地形の変遷をまとめた上で、各時代の様相や特徴的な事柄などについて考察し、総括としたい。

2. 古環境と地形発達史

自然科学分析については、平成16年度以降地質の専門家の現地指導を仰ぎながら発掘調査と連携して実施してきた。それによって、遺跡の古環境を始めとして地形の発達状況が明らかとなった。

その成果については、『西野々遺跡Ⅱ』（高知県 2011）にも記しているが、ここではⅥ～Ⅷ区で実施した自然科学分析の成果（第Ⅳ章）を踏まえ、西野々遺跡の古環境と地形発達史について改めて考古学的視野を交えまとめてみることにする。

まず、遺跡の立地については、現在の地形から物部川が形成した沖積扇状地に立地し、位置的にその末端に所在すると考えられ、実際、自然科学分析の結果からもほぼ同じ結果を得ることができた。このような中で、今回の自然科学分析の最も大きな成果は、その扇状地の形成時期について蓋然性の高い年代を得たことであろう。すなわち、遺跡西端部（Ⅴ-2区）に堆積する古土壌の腐食質泥層から年代資料（ 5230 ± 40 yrs BP）を、さらに直下からも年代資料（ 5510 ± 40 yrs BP ～ 5240 ± 40 yrs BP）を得ることができたことである。このことにより、遺跡の基盤層は今から5200年前後（Cal BC 4450～3970:2 σ ）前の縄文時代前期後半頃までに扇状地発達によって形成されたものと考えられるようになった。それ以降、離水し、地表面上で安定した土壌が発達したものと考えられる。

また、その堆積メカニズムをより詳細に分析することができたことも大きな成果の一つであろう。遺跡は、東の下田川（Ⅷ区）から西の明見との境（Ⅴ区）までの東西約1.0kmにも及び、地勢としては西に傾斜するものの、平坦な微高地が形成されていたのではなく、比較的起伏に富んでいる。すなわち、遺構検出面には基盤の砂礫層が帯状に露出しているのである³⁾。これは基盤をなす砂礫層の凹凸によるもので、この凹凸は、扇状地面で散見される流路変更とその後の流路間の埋積の繰り返しによって生じたものと理解される。換言すれば、この起伏に富んだ地形は網状河川の堆積システムで形成されたものと解釈され、離水する直前の状況としては、砂礫層の堆積による高まり（凸部）がⅠ区東側からⅧ区、Ⅱ区西側からⅢ-1区東側、Ⅲ-1区中央部からⅤ-1区にみられ、その間隙に当たるⅠ区南側、Ⅱ

区東側，Ⅲ-1区中央部東寄り，V-2区は流路の河床や流路間の凹地になっていたものと考えられる。そして，この低地には流路埋没後に扇状地面上で発生した布状洪水の堆積物と考えられる細粒砂を中心とした堆積層が埋積して，平坦化に向かう。

さらに，その後下田川など周辺の流路からの洪水によって供給された砂質粘土質シルト～シルト質砂などが堆積し，遺構検出面となっている。

一方，埋積しきれなかったⅠ区南側などの低地は氾濫原に形成された小規模な池沼となったものとみられる。このような過程で形成された地形の中で，最も安定し乾燥した微高地上，調査区で言えばⅠ区東側からⅦ区に弥生時代の集落，古代の官衙関連施設，中世の溝で囲まれた屋敷が造られることとなる。この人間の営みの過程で，Ⅵ区やⅦ区の標高の高い北側は削平の影響を受けることとなり，古い遺構ほどその影響が大きくなっている。

また，古環境復元に併せて土器の胎土分析も並行して継続的に実施してきた。これについては，3106（Ⅲ区『西野々遺跡Ⅱ』で報告分）など搬入品と特定されたものがある一方で，考古学的には搬入品とみられるにも関わらず，肯定的な結果がでなかったものもあった。この分析については今後も継続的に行い，資料の蓄積を行う中で再検討しなければならないであろう。

3. 弥生時代について

西野々遺跡の中心的な時代の一つであり，検出された竪穴建物跡は68軒，竪穴状遺構は27軒，掘立柱建物跡は32棟を数え，この内，竪穴建物跡の96%，掘立柱建物跡の94%が今回報告するⅥ～Ⅷ区に所在し，Ⅰ区東側からⅧ区にかけてこの時期の集落が展開する。

(1) 集落の様相と変遷

集落の主体を占める竪穴建物跡と掘立柱建物跡の時期については，遺構計測表の備考欄に併記しているが，後者については出土遺物が限られ，存続時期が判然としないものも多い。その中で，存続時期が一定推測される竪穴建物跡は概ね図5-1に示したように中期中葉(Ⅲ様式)から後半(Ⅳ様式)を中心に，中期前半(Ⅱ様式)から後期初め(Ⅴ様式)頃まで存続したものと考えられる。その後は，遺物の出土はみられるものの明確な竪穴建物跡は確認されておらず，再び竪穴建物跡が確認できるのは終末期で，4軒(Ⅰ区で1軒，Ⅵ区で2軒，Ⅷ区で1軒)⁽⁴⁾が検出されている。

まず，集落の立地についてみてみると，西野々遺跡では東約1/4に位置する。この部分は，西野々遺跡の中で，唯一四方に開け，かつ基盤の砂礫層の上に粘土質シルトないしシルト質砂を主体とする堆積物が埋積した比較的掘削し易い部分でもあり，立地的に最適地で

時期	弥生時代中期				弥生時代後期		古墳時代 前半
	前半 Ⅱ様式	中葉 Ⅲ様式 (古) (新)	後半 Ⅳ様式 (古) (新)		前半 Ⅴ様式	後半	
平面形態	BC300~200	BC100	0		AD100	AD200	
円形 (不整形円形も含む)	[Shaded area]						
多角形 (五~七角形)	[Shaded area]						
隅丸方形	[Shaded area]						
方形	[Shaded area]						

図5-1 竪穴建物跡形状別変遷図

あったものと推察される。この中で、竪穴建物跡は、VI区北西端を中心に⁽⁵⁾南西方向へ楕円形状に広がっているものとみられ、最盛期の中期中葉から後半に最も大きな広がりとなり、東西幅は約300mに及ぶ。南北幅については判然としないものの、南の香長中学校で南国市教育委員会が行った発掘調査でも竪穴建物跡が確認されていることから、200m以上の広がりが推定され、全体で200棟程度の竪穴建物跡が存在するものとみられ、想定される集落の面積は47,100㎡程度と考えられる。

次に、竪穴建物跡の規模(図5-2)についてみてみると、床面積は、最大のものがST-6031の51.78㎡、最小がST-6005の8.55㎡、平均が22.85㎡であった。建物構造的に際立った違いは見出せないものの、床面積には一定の較差が看取されることから、集落内での格差が生じていたものともみられる。一方、祭祀的要素の強いものの出土は見られず、その格差が幾程のものであったか推測するのは難しい。

規模と共に視覚的に分かり易い形状についてみてみると、第II章でもその変遷については触れたが、概ね円形(最大:47.39㎡, 最小:8.55㎡, 平均:23.01㎡)、多角形(最大:51.78㎡, 最小:13.20㎡, 平均:21.49㎡)、隅丸方形(最大:36.58㎡, 最小:17.55㎡, 平均:24.31㎡)、方形(最大:26.01㎡, 最小:15.38㎡, 平均:20.55㎡)へと漸次移行していることが、出土遺物からも判明した。本遺跡では希薄な後期後半から終末にかけて、集落が営まれる伏原遺跡(高知県 2010)などでは、明確な多角形のベット状遺構が付設された竪穴建物跡が確認されているが、本遺跡の場合、ベット状遺構が付設された竪穴建物は皆無で、かつ明確に多角形と言い得るものは少なく、弧というよりか辺と見た方が適切と判断されることから多角形としているものもあり、円形から明確な多角形へ移り変わる過渡的な形状と推察される。反面、これについては発掘調査を実施した調査員の認識にも左右されがちな面がある。いずれにしても、前述の竪穴建物の形状変化は中期から後期の様相の一つとして指摘できよう。

竪穴建物と並存した平地建物(掘立柱建物)についてみてみる。これまでの調査で復元できた32棟の特徴として、まず挙げることのできる点は、梁行が1例(SB-6011)を除き、いずれも1間である点である。出土遺物が限られ、存続時期を明確にすることができないものもみられるが、竪穴建物と概ね同時期に存続したものと考えられ、当時の平地建物は、梁行を1間としていたことが考えられ、建物の拡張は桁を延ばすことによって行われ、2間から5間のものがみられ、平均は3間(2.8間)であった。この内、11棟には規模の大小はみられるものの舟形土坑が付属していた。田村遺跡群(高知県 1986)の前期中半⁽⁶⁾の建物では妻側に付随したものもみられるが、田村遺跡群でも中期以降の建物には本例と同じく平側に付属する。本遺跡ではみられなかったが、田村遺跡群(高知県 2004)には両平側に付

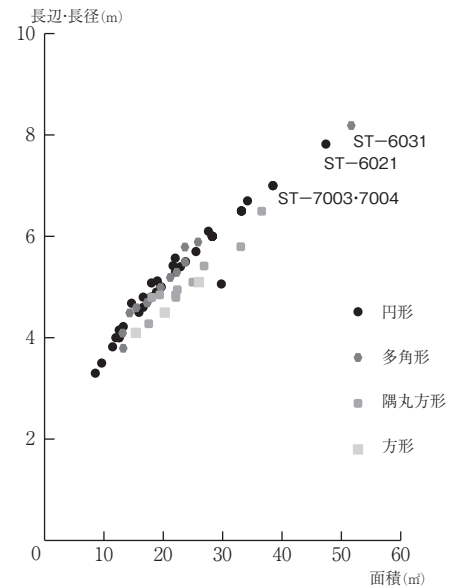


図5-2 竪穴建物跡の規模

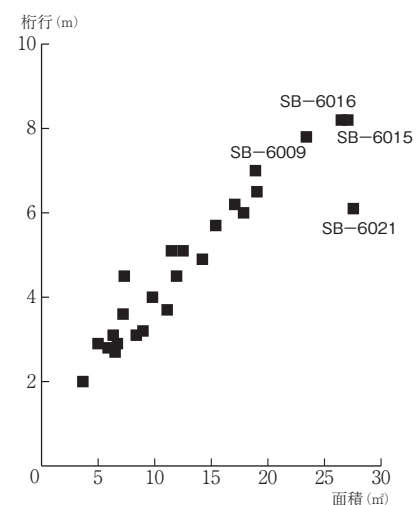


図5-3 弥生時代掘立柱建物跡の規模

属するもの⁽⁷⁾もみられる。この付属する舟形土坑の性格については、推測の域は出ないが、土器が一定出土していることから貯蔵的なものではないかとみられ、また、柱穴とみられるピットが底面から検出されたものもあることから何らかの覆いがされていたものと推察される。そして、この建物の入口については、付属する舟形土坑側に設けていた方が合理的と考えられることから平入と考えた方が適切ではなからうか。

最後に堅穴状遺構についてみる。形状は方形か隅丸方形を呈しており、平均規模は、長辺が2.71m、短辺が1.87m、面積が5.31㎡となり、最大のもは面積が10.44㎡(ST-6052)で、最小のもは2.18㎡(ST-7028)であった。いずれも小規模なもので、堅穴建物跡に付随する貯蔵用の施設ではなかったかとみられる。ST-7026のように壁溝と柱穴とみられるピットが底面から検出されているものもあり、簡易な覆いがなされ、排水にも配慮された施設であったものとみられる。時期的には堅穴建物と同じく中期中葉から後半を中心としたものと考えられる。

(2) 遺物の様相

ここでは、讃岐金山産とみられるサヌカイトとSK-6020から埋納されたような状態でまとまって出土した石製品についてみる。

① サヌカイトの出土状況

弥生時代の遺構を中心に、製品である打製石鏃が数点、剥片が十数点各堅穴建物跡から出土している。その出土状況については、表5-1に示したように全体で22,842点(約3.3kg)が出土している。この出土状況をグラフで示すと図5-4のようになり、特定の堅穴建物跡で特異な出土状況を示す。すなわち、ST-6010からは一般の堅穴建物跡の約1,200倍、重量で約92倍の量の剥片が出土している。また、剥片点数ではST-7017、ST-6001、ST-7005、ST-6021、ST-6026などからも一般の堅穴建物跡の数倍から十数倍の量の剥片が出土している。

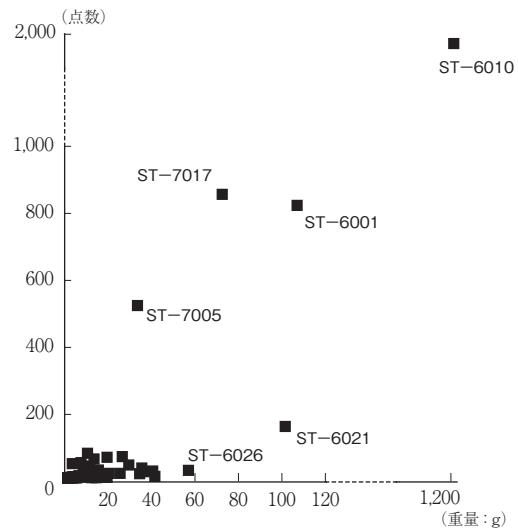


図5-4 サヌカイト出土状況

このことからST-6010は明らかに打製石鏃を中心としたサヌカイト製品の工房跡と考えることができよう。

製品として遺存していた打製石鏃13点は、一般の堅穴建物跡の5~6倍の量であるが、未配付のものともみられる。出土点数の多かった前述のST-7017などについても、工房跡と看做すことが可能であろう。ただし、ST-6010との間には大きな較差があり、後者は補助的ないし付随的なものであったのではなからうか。

表5-1 サヌカイト出土状況総括表

	剥片点数	重量(g)	実測点数	重量(g)	出土総点数	総重量(g)
遺物包含層	63	361.7	7	50.2	70	411.9
弥生時代遺構	22,616	2,120.2	53	409.8	22,669	2,530.0
古代遺構	79	234.9	4	37.8	83	272.7
中世遺構	16	32.4	3	64.8	19	97.2
近世遺構	1	0.4	0	0.0	1	0.4
合計	22,775	2,749.6	67	562.6	22,842	3,312.2

剥片と製品を含め全体で約3.3kgの量のサヌカイトと67点の打製石鏃が出土した。この量がどのような意味を持っていたかは判然としないが、田村遺跡群(高知県2006)では約6倍の400点以上の打製石鏃が出土している。一

方、剥片点数や重量についての報告はないが、剥片点数やそれに伴う重量もそれなりのものであったと想像される。約1.2km離れ併存した二つの集落は、サヌカイトに限れば讃岐と盛んに交易を行っていたことが推察される。さらに、讃岐産(6214)、伊予産(7303)、阿波産(3106・6391)とみられる土器の出土からこの時期は他地域との交易が盛んであったことが窺える。

② 打製石鎌について

粗製剥片石器(愛知県 1998)とか大型直縁刃石器(高知県 2006)と呼称されていたもので、本遺跡でもこれまでに出土例(4094)のある石器である。また、今回も散発的に混入も含めST-6010(6141)、ST-6021(6220)、SK-6014(6455)、SK-6017(6470)、Ⅶ区第Ⅵ層(7210)、SB-7006(7402)、P-7093(7820)から1点ずつ出土している。このような中で、今回SK-6020から53点が埋納されたかのような状態でまとまって出土した。いずれも砂岩の河原石を直接打撃で打ち割ってできた剥片(貝殻状剥片)で、そのやや外湾する縁辺部には擦痕及びそれに伴うと考えられる光沢が一部みられ、何らかの石器であったことが窺える。確かに、石器そのものを表現するには粗製剥片石器と言うことになるが、用

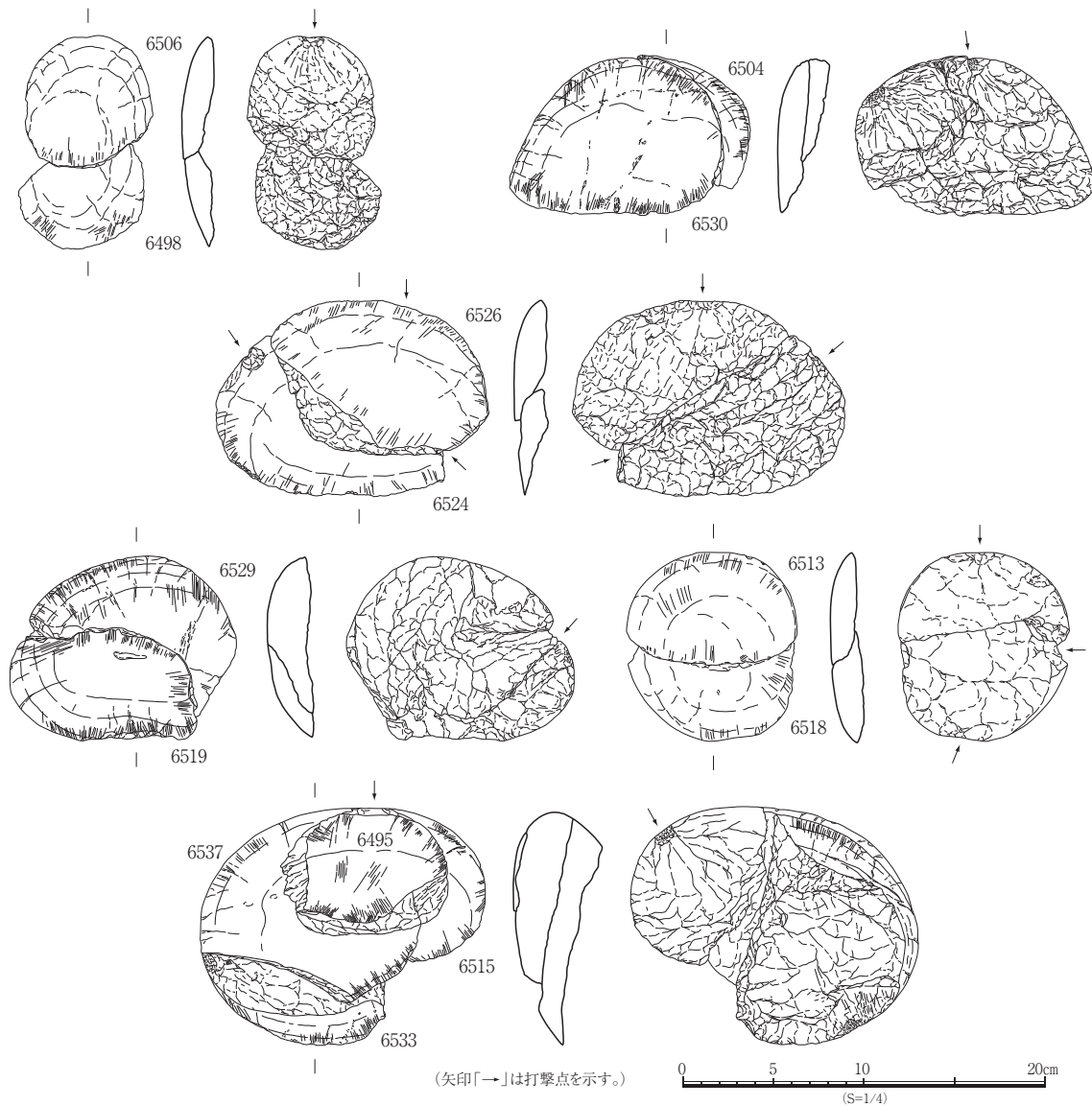


図5-5 打製石鎌接合資料

4. 古代について (1) 掘立柱建物跡について

途によって名称を付す方がより実態に則しているものと思われる。図5-6に表したように大きさにより3種に分けることが可能で、明らかに使い分けられていたものと判断される。今回は顕微鏡による使用痕跡の分析は実施しなかったが、田村遺跡群(高知県2006)で行っており、それによると「根切りなど厚みのあるイネ科植物に対して使われた」と記されている。また、「穂刈りは石鎌で」との記述もみられる。

今回のものがどのような植物に対して使用されていたかは論及できないものの、植物を刈る際に使用された蓋然性が高いものと考えられ、大きさに違いがみられるのは使用者が異なることを意味するのではなかろうか。換言すれば、イネ科植物も含め草刈り用として大型を男性、中型を女性、小型を子供が使用していたのではなかろうか。よって、その名称としては「打製石鎌」と呼称した方がより実態に即していると思われる。

そして、鉄器の普及に伴ってその役目を終えたことにより、まとめて埋納されたものと考えられ、その時期は中期中葉頃ではないかと推察される。

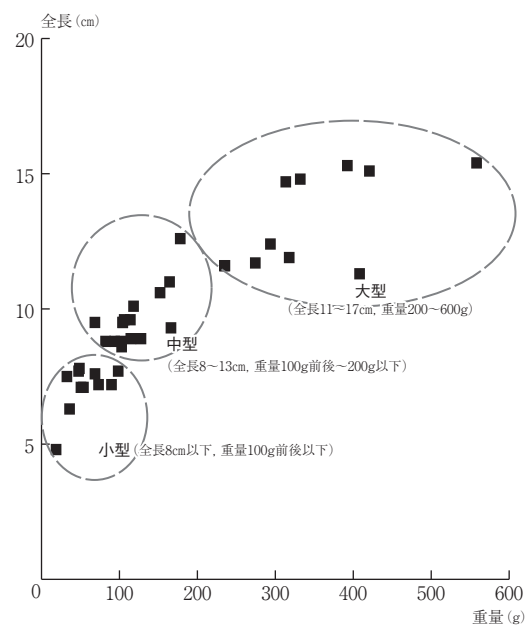


図5-6 打製石鎌重量分布図

4. 古代について

これまでの調査で、方形の掘方を持つ官衙関連と考えられる掘立柱建物群はⅠ区で12棟、Ⅱ区で4棟、Ⅲ区で10棟、Ⅳ区で6棟復元され、一定の纏まりもみられたことから何らかの官衙施設であったことが想定され、結論はでないまでも山中氏の指摘するように郷単位の独自の施設ないし郡衙の出先機関との見方(山中 2003)を示した。

そして、今回の調査で、その中枢部分とみられる建物群が検出され、復元できた掘立柱建物跡は68棟(全体で100棟)に及び、中にはSB-7004のように一辺が1.50mを測る柱穴で構成された大型建物跡も確認され、かつ陶硯、緑釉陶器、製塩土器なども出土し、官衙関連施設であったことをさらに強く印象付ける。また、先の建物群の性格と密接に関連するであろう道路遺構も検出されている。

(1) 掘立柱建物跡について

これまでに復元した建物跡の多くは、出土遺物が限られたものの8世紀後半から9世紀前半のもののみられ、土佐国衙跡で建物跡が最も多く確認される時期(廣田a 2000)とも符合する。

一方、遺物包含層や古代以降の遺構から出土する古代の出土遺物の様相をみると増減はみられるものの白鳳期から平安時代後期頃までのもの⁽⁸⁾がみられ、少なからず各時期の掘立柱建物跡が存在したものとみられる。これら掘立柱建物跡は、道路遺構(SR-6003)の東側に展開し、棟方向により大きく8期に分けることが可能である。掘立柱建物跡を検討する前にまず、それらを制約する道路遺構(SR-6001~6003)と道路遺構(SR-6003)に並走する区画に関連したとみられる溝跡(SD-6008)等についてみてみることにする。

比較的多くの遺物が出土している道路遺構(SR-6003)は主軸方向がN-12°-E(側溝の傾斜方向は

N-168°-W)を示し、7世紀後半から10世紀後半までの遺物がみられ、長期に互って存続した可能性があり、並走するSD-6008も出土遺物から併存した可能性が高い。また、SD-6008がSR-6003と並走する西側の南北部分は掘返しが顕著で、かつ西側のSD-6006とは5.5~6.6m間

表5-2 古代掘立柱建物跡の変遷

時期	棟方向(南北棟)	VII区	VII区
I期	N-78°-W(N-12°-E)	SB-7004~7006など	-
II期	N-80°-W(N-10°-E)	SB-7011~7017など	SB-6027・6028など
III期	N-85°-W(N-5°-E)	SB-7027~7033など	SB-6036・6037など
IV期	N-90°-W(N-0°-E)	SB-7034~7042など	SB-6041・6042など
V期	N-85°-E(N-5°-W)	SB-7046~7056など	SB-6043・6044など
VI期	N-75°-E(N-15°-W)	SB-7057など	-
VII期	N-75°-W(N-15°-E)	SB-7060・7061など	-
VIII期	N-65°-W(N-25°-E)	SB-7058など	SB-6046など

隔で並走しており、その部分が道として機能していた可能性も考えられる。遺存状況から推察すると、SR-6003が後出であろう。いずれにしても、これらの遺構は前後して掘削されたものとみられ、掘立柱建物群と終始関連していた遺構とみられる。また、SR-6003から15.0~18.0m離れた西側では主軸方向がN-16°-Eを示す遺存状態が極めて良いSR-6002、及びSR-6002と重複して並走するSR-6001が検出されている。後述するが、この主軸方向に近い棟方向を示す建物跡は僅かで、かつこの道路遺構から出土した遺物を見ると12世紀頃とみられ、官衙関連施設の終焉頃のものと判断される。

一方、東側は状況からみてSD-7008によって区画されていたものと判断される。SR-6003などは条里との関連性が考慮されるが、このSD-7008は斜め方向(N-127°-W)に延びており、SR-6003などとは異なり地形に左右されていたものであろう。

このように西に道路遺構(SR-6003)を擁し、東は下田川の右岸付近までの東西約140mの範囲に建物群が展開する。

さて、これら建物群は棟方向から前述のとおり8期(表5-2)に分けることが可能である。その棟方向はGN(真北方向角:-0°03'56")に対し東に12°前後振るI期から徐々にGNの北に近づき、西に15°前後振るVI期へと移り変わり、一転して東に17~21°前後振るVII・VIII期となる。この最後のVIII期が前述のSR-6001・6002と併存していた可能性が考えられる。

この内、I期(出現期)はSB-7004に代表され、梁行が古相の3間で、かつ8世紀中葉頃の須恵器(廣田1995)が出土し、VII-1区南東部に中心部を置く。続く、II期はその中心部をI期の南側(SB-7014・7017・7018)に一部重複さす形で移し、その後さらにVI区南東部(SB-6027・6028・6030)に中心を移転するとみられる。いずれもコの字形を指向している。時期的には8世紀後半から9

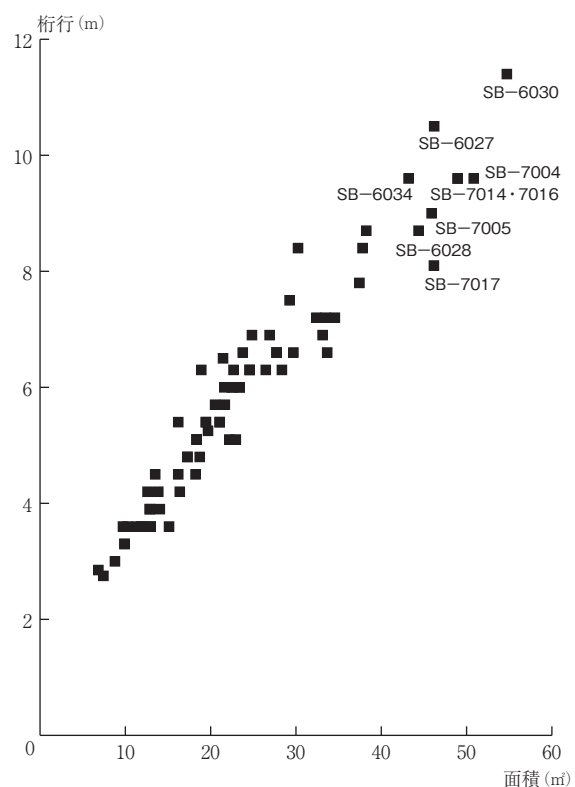


図5-7 古代掘立柱建物跡の規模

世紀頃に存続したとみられる。その後、Ⅶ-1区中央部南寄りにⅢ期の中心部、その南側にⅣ期の中心部が造られる。Ⅳ期は南の調査区外に続く。Ⅴ期はⅦ-1区西部に中心部がみられるものの、この期から中心部の規模の縮小化がみられるようになり、Ⅵ期以降はそれまでのような明確な中心部は造られず、散在的である。時期を示す資料に乏しく、判然としないが、Ⅵ期以降は平安時代後期に当たるのではないかとみられ、Ⅲ～Ⅴ期は平安時代前期後半から中期頃ではなかろうか。

以上のように、8世紀中葉頃に出現し、8世紀後半から9世紀に最盛期を迎え、約600m離れた西のⅣ区にも施設が設置される。10世紀頃までは一定の規模で施設が維持されるものの、それ以降は衰退へと向うものとみられる。建物規模(図5-7)もそれに呼応し、最盛期に最大規模の建物(SB-6030)が造られる。

(2) 陶硯と文字資料にみる遺跡の性格について

今回の調査で出土した資料から遺跡の性格について、以前にまとめた土佐国の陶硯(廣田 2009)と文字資料(廣田 2006)を踏まえて考えてみる。陶硯については可能性も含め8点を確認したが、いずれも転用硯で、杯身を転用したものが3点(6762・6975・7428)、杯蓋を転用したものが3点(7406・7422・7586)、甕の破片の内面を使用したものが2点(6874・6875)であった。

土佐国では転用硯以外の陶硯の出土例は限られ、転用硯の出土が目立つ。今回の資料も土佐国の様相と符合しており、甕の破片の利用は宮崎遺跡(大方町 1992)の例に似る。また、陶硯の出土は官衙関連と寺院跡に限られており、本遺跡も官衙関連と考えて間違いなさそうである。また、時期的には杯身と杯蓋が8世紀末から9世紀前半、甕の破片の転用が9世紀後半頃みられる。

文字資料については須恵器の壺の肩部に「大」の刻書が残るもの(7115)が1点出土した。土佐国では、深淵遺跡、ひびのきサウジ遺跡、上美都岐遺跡の3遺跡に出土例がみられ、いずれも刻書で、集団や時期の違いではなく何らかの共通の意味を持っていたことが推測される。これらの遺跡は郷家クラスと考えられており、郡衙の出先機関ではないとは断言できないものの当遺跡も郷家の施設であったと考えた方がよいのではなかろうか。換言すれば、各郷に郡衙の出先機関が設置されたとみるよりか、各郷に郷家が設けられたと考えた方が状況に即しているように思われる。その場合、西野々遺跡は大曾郷⁹⁾の郷家と言うことになる。

(3) 素焼き土器の様相と変遷

報告書という性格上、本項では素焼き土器の変遷の基本的な考え方について示し、編年案については別稿に譲ることにする。なお、南四国の素焼き土器については拙稿(廣田 2000)を提示しており、ここではそれに則して、素焼き土器の変遷(図5-8)についてみてみたい。

本遺跡では、放射線状の暗文が施されたもの(7431など)を初現とし、ミズビキ技法(ロクロー本挽き成型法：B技法)のもの(6978)まで出土している。いわゆる左手手法による土師器からB技法と呼称している土師質土器への変遷である。その変遷過程について、これまでの調査と今回の調査で示唆される資料が比較的多く出土しており、より鮮明にすることができるのではないと思われる。

まず、奈良時代は基本的に左手手法の土師器が主体で、暗文を施すものからヘラ磨きのみものへと簡素化し、平安時代前期には部分的に施すものから全く施さないものへと移り変わり、甕などの煮炊具で生産が続くものの、食器類のほとんどは須恵器と同じ成形技法(粘土紐巻き上げロクロ成形：A技法)で製作された土師質土器に代わる。これに呼応するように口縁端部にみられる折込みも簡略化し、平安時代中期には見られなくなる。

一方、土師質土器は須恵器工人の中から生まれたと考えられ、地域によっても違いが見られるものの奈良時代後半から平安時代を通じ、一部中世段階でも前述のA技法で製作される。また、須恵器に土

種類	奈良時代		平安時代		鎌倉時代	室町時代
	前半	後半	前半	中葉	後半	前半
土師器						
須恵器						
土師質土器						

図5-8 土師器、須恵器、土師質土器の変遷概念図

師器と全く同じ形状の皿(7389)などがみられることから土師器工人との交流も示唆され、その典型とも言えるものとしての高杯(廣田 2005)がある。逆に面取りをした脚柱を持つ高杯(3351)は限られる。

土師質土器の生産は、須恵器生産の減少と軌を一にしており、9世紀後半以降増加し、10世紀には須恵器に取って代わるものとみられ、須恵器生産は壺や甕など限られた器種になる。ヘラ磨きが全面に施された奈良時代末から平安時代初めの素焼き土器は、基本的には土師器と考えるが、ヘラ磨きが外底面まで施されていないものの中にはA技法のもの(7393)もみられることから奈良時代末頃からロクロで成形していた可能性(土師器から土師質土器への移行)も考えられる。換言すれば、ロクロの使用が比較的早い時期から素焼き土器に導入されていたのであろう。平安時代中期には器種の縮小化がみられ、小杯や小皿が出現し、後期には汀溪窯系の白磁を模倣したのではないかとみられる体部外面に回転ヘラ削りを施し、輪高台となる椀が出現する。鎌倉時代にはB技法で小皿が製作されるようになるとみられ、徐々に杯にも採用されるようになったものと考えられる。ただし、室町時代前半頃までのものは器面調整が比較的丁寧で、回転ナデ調整でロクロ目をナデ消しており、判然としないものもみられるが、後半頃から内面を中心にミズビキ痕(6947・6978)が明瞭に残ると共に底部の縮小化に向う。

また、Ⅲ区では底部とそれ以外を別に製作した小皿(3209・3210・3213～3216)が出土しており、A技法の垂流であるとみられることからA2技法とした。これらは室町時代前半頃のものではなかろうか。また、古代以降、一定手づくね土器(土師器:3421など)も併存しており、京との関連が看取される。

このように、素焼き土器は、遅くとも平安時代前期から須恵器の影響でロクロを使用した土師質土器となり、左手手法の土師器と一時期併存した後、土師器に代わって中世以降も製作される。最初は、須恵器と全く同じ技法(A技法)で製作されるが、室町時代頃からミズビキ技法(ロクロ一本挽き成型法:B技法)に徐々に移り変わり、後半にはすべてB技法となる。

(4) 搬入品の様相

今回の調査では、細片も含め緑釉陶器 55 点、灰釉陶器 49 点が出土している。緑釉陶器には軟質系と硬質系がみられ、前者はいずれも畿内産のものとみられ、平高台(6813・6933)から6876のように輪高台となるものと猿投産ではないかとみられる削り出し高台の椀(7700)が出土している。このことから時期的には9世紀から10世紀初め頃のものと判断される。

灰釉陶器も細片が多く、時期判断資料に乏しいが、底部が遺存するもの(7709～7711)からみると三角高台のものと三日月高台のものがあり、黒笹 14 号窯式後半から黒笹 90 号窯式中頃のものと(山下 1995, 齋藤 2000)とみられることから平安時代前半の9世紀中葉から後半の時期ではなかろうか。

いずれも、西野々遺跡の最盛期に搬入された遺物と言えよう。なお、県内では灰釉陶器の出土は緑釉陶器の出土に比べ少なく、東海地方との交流を考える上で重要な資料となった。

5. 中世について

西野々遺跡では、これまでに400 m²程度の小規模な屋敷地が確認されているが、今回Ⅵ区とⅦ区を挟んで、一辺35～44mの屋敷跡(付図13)が検出された。屋敷地は約1,540 m²に及ぶ。四国の屋敷地(廣田 2002)からみると土豪クラスとみられ、佐川町岩井口遺跡(佐川町a 1995, 佐川町b 1995, 廣田 b 2000)のような荘郷単位を掌握した在地領主クラスのように家臣が居住する屋敷が付随することはないが、屋敷東側からは10棟余りの建物跡が復元できたことから、屋敷以外にも下人の住まいがあった可能性が示唆される。

建物跡(図5-9)については、丁度、屋敷跡の中央が調査区境になっている関係もあろうが、復元できた建物は間仕切柱のある中世型掘立柱建物と古代から続く律令型掘立柱建物で、余り大型の建物はみられない。また、北側の入口とみられる部分が枳形状を呈しており、防御の色合いを感じさせる。一方、出土遺物には茶釜があり、屋敷の主人には茶の湯を嗜む戦国武士の姿が浮かぶ。

今回、一定規模の屋敷跡が確認されたことから西側に展開する小規模な屋敷はこの屋敷の傘下に置かれていた可能性が考えられる。

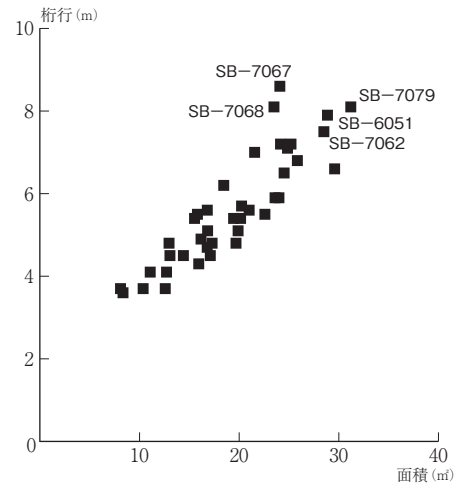


図5-9 中世掘立柱建物跡の規模

6. まとめ

ここでは、平成16年度から平成19年度にかけて実施した西野々遺跡の成果に基づき、遺跡の消長について記し、まとめとしたい。

西野々遺跡の出現は、弥生時代中期に遡る。讃岐を始めとして他地域との交易を行いながら後期前半頃まで集落を営み、周辺開発も盛んに行われたとみえて延長1.0 kmにも及ぶと推定される灌漑用水路を掘削する。後期後半は低調となるものの、終末期に再び集落が見られる。しかし、小規模で短期間のうちに消滅する。これは、南四国一円にみられる現象で弥生時代終末を境として人の匂いが忽然と感じられなくなる。

次に、人の痕跡が現れるのは、古墳時代後期である。しかし、西野々遺跡でのその営みは低調で、集落跡は確認されていない。白鳳期以降になると官衙関連と考えられる施設が徐々に建てられ、中心部が変遷する中、最盛期とみられる8世紀後半から9世紀には東西約700mの間に付随施設と考えられる建物群が点在し、平安時代後期頃まで続き、弥生時代以来の繁栄期を迎える。

中世になると400 m²前後の小規模な屋敷が点在する中で、最も良い立地に恵まれた東側には一辺35～44mの溝で圍繞された土豪層クラスの規模(廣田 2002)を誇る屋敷が出現する。この主は、茶の湯を嗜むことのできる戦国武士であったとみられる。しかし、戦国時代の終焉と共に、この屋敷も地中に埋没する。

近世以降は土坑などが散発的に見られるものの目立った遺構はなく、耕作地となり、西野々遺跡は水田の下に埋もれ、現在に至る。

7. おわりに

やっと、ここまで辿り着くことができた。それ⁽¹⁰⁾を可能にしたのは整理作業員と補助員のお陰である。

また、フルDTPが総頁数1,698頁(花宴遺跡：408頁(平成22年12月刊行)、西野々遺跡Ⅱ：504頁(平成23年1月刊行)、西野々遺跡Ⅲ：786頁(平成23年3月刊行))の報告書の刊行を入稿から納品までそれぞれ2ヵ月余りで可能にした。なお、これら作業は奥付に掲載したスペックで行った。

これまで50冊以上の報告書作成に関わってきたが、何度やっても満足いくものはいない。特に、発掘調査が大規模になればなるほど細部まで目を通し難くなる。遺物実測図については、統一性を図るため文様や調整痕まで逐一手を入れたつもりであるが、遺構平面図については、現地が残っていないこともあり、齟齬を修正する程度しかできなかった。このような今回の報告書作成業務の中で、多くの教訓を得ると共に今後の埋蔵文化財の行方を垣間見ることができたような気がする。

種々の理由により、発掘調査の終了から数えて3年が経過して本報告の刊行となった。立場上、調査担当者に代わって記述したため、調査担当者の意図した内容になったかどうかは判然としない。また、検出された遺構・遺物は膨大で、仔細に分析、考察しなければならない事柄も多岐に及ぶため組上に載せられなかった事項も多いと思われる。しかし、ここまでの記述(16頁建て、68版)をもって報告書としての責と代役としての役目を果たしたことにしたい。

最後に、現地調査、その後の整理作業、報告書作成に関わったすべての方々に感謝申し上げ、本書の結びとする。

註

- (1) 発掘調査は道路建設に伴うものであったため西野々遺跡を横断する形で、東西約1.0kmに亘って行われ、約43,000㎡(調査面積は、Ⅰ区：6,048㎡、Ⅱ区：6,396㎡、Ⅲ区：6,470㎡、Ⅳ区：6,495㎡、Ⅴ区：4,870㎡、Ⅵ区：6,430㎡、Ⅶ区：5,071㎡、Ⅷ区：1,258㎡、合計：43,038㎡で下層確認トレンチ等を含んだ調査総面積ではない。)を調査した。遺跡自体は後述のとおり南北にさらに広がっており、南北は少なくとも100m以上あるものとみられ、遺跡の面積は100,000㎡を下らないと推測される。このことから遺跡の4割程度を調査したものと考えられる。確認された遺構は弥生時代から近世に至るもので、古墳時代が希薄であることを除けば、連綿と人の痕跡を辿ることができる。
- (2) 西野々遺跡の発掘調査成果については、3分冊の報告書にまとめている。
『西野々遺跡Ⅰ』高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ 平成20年3月
『西野々遺跡Ⅱ』高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ 平成23年1月
『西野々遺跡Ⅲ』高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ 平成23年3月
- (3) 『西野々遺跡Ⅰ』でも触れたが、この砂礫層面の開発(掘削)は弥生時代では少なく、本格化するのは古墳時代以降、西野々遺跡では古代以降である。鉄器の普及が大きな要因であったことが窺える。
- (4) ST-6042からは搬入品の土師器が出土しているが、伴出する在地の土器は弥生土器であり、弥生時代の竪穴建物跡とした。この時期、少なくとも南四国では古墳は築造されておらず、古墳時代には入っていない。
- (5) Ⅰ区では砂礫層の凸状の堆積がみられる部分(『西野々遺跡Ⅰ』図版7)から東に弥生時代の集落が確認されている。
- (6) Loc.16のSB1には妻側に舟形土坑が付属する。
- (7) E7区のSB714の両平側には桁行とほぼ同じ長さの舟形土坑が付属する。
- (8) 須恵器では宝珠形のつまみを持ち、杯蓋の口縁部内面にかえりが付くもの(6744・6875など)から底部外面が回転糸切りとなる杯身(7105・7107)までみられる。
- (9) 祈年遺跡(高知県 2007)からも官衙関連の建物群が確認されており、宗部郷の郷家の可能性が考えられている。なお、遺跡名は、発掘調査時点では「土島田遺跡」と呼称していた。

引用・参考文献

(10) 8名の調査員(補助的調査員は除く)が1年以上かけて調査した遺跡(実働は、西野々遺跡Ⅲ区: 廣田(14ヵ月), 西野々遺跡Ⅳ区: 小野(8ヵ月), 西野々遺跡Ⅴ区: 曾我(9ヵ月), 西野々Ⅵ区: 井上・前田(11ヵ月), 西野々遺跡Ⅶ区: 小野(14ヵ月), 西野々遺跡Ⅷ区: 山本ほか(8ヵ月), 花宴遺跡: 小野・下村(14ヵ月)であった。)を一人で報告するのは無謀であったかもしれない。一連の報告書(花宴遺跡, 西野々遺跡Ⅱ, 西野々遺跡Ⅲ)に掲載した遺物点数は3,741点(花宴遺跡:916点, 西野々遺跡Ⅱ:827点, 西野々遺跡Ⅲ:1,998点), 遺物の撮影カット数は1,817カット(花宴遺跡:517カット, 西野々遺跡Ⅱ:444カット, 西野々遺跡Ⅲ:856カット)であった。実測図の作成以外の作業はすべてデジタルで行った。挿図点数は1,112点(花宴遺跡:137点, 西野々遺跡Ⅱ:304点, 西野々遺跡Ⅲ:671点)に上る。逆に, デジタルでなければ, 不可能とは言わないまでも, 昔ながらのトレース, 図版作成, 編集そして校正を行っていたならばどれだけの時間と経費を費やさなければならなかったであろうか。20年近くマルチメディアに親しんでいると一昔前の作業など想像すらできない。一方, 遺物写真では撮影カット数が多くなったこともあり, ゴミ取りや選択範囲の指定作業では思いのほか整理作業員の手を煩わせた。また, それ以外の作業(現像, 使用サイズへの変更, 調整・補正作業)は一人で行ったが, これもカット数が多く思いのほか時間を要した。

引用・参考文献

- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1998.8 『東新規道遺跡』
大方町教育委員会 1992.3 『竹シマツ遺跡・宮崎遺跡』
高知県教育委員会 1986.3 『田村遺跡群』
高知県教育委員会 2004.3 『田村遺跡群Ⅱ』
高知県教育委員会 2006.3 『田村遺跡群Ⅱ』- 総論 -
高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2007.1 『土島田遺跡- 現地説明会資料 -』
高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2008.3 『西野々遺跡Ⅰ』
高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2010.1 『伏原遺跡Ⅰ』
高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2010.2 『伏原遺跡Ⅱ』
高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2011.1 『西野々遺跡Ⅱ』
佐川町教育委員会a 1995.3 『岩井口遺跡 二ノ部遺跡・城跡』
佐川町教育委員会b 1995.3 『岩井口遺跡Ⅱ』
齋藤孝正 2000.6 『日本の美術』第409号 至文堂
高橋照彦 1995.12 「3. 緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
廣田佳久 1995.2 「南四国の須恵器」『王朝の考古学』 雄山閣
廣田佳久a 1996.1 「土佐国衙跡の調査研究の現状と課題」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念論文集 雄山閣
廣田佳久b 1996.1 「国人の館に関する一考察」『土佐史談』第200号 土佐史談会
廣田佳久 2000.1 「南四国における古代末の土器様相- 素焼き土器を中心に -」『考古学論集』第7号 立正大学考古学会
廣田佳久 2002.3 「中世住居の研究- 遺構からみられる四国の住居の様相」(平成14年度 高知女子大学人間生活学研究科 修士論文)
廣田佳久 2005.3 「3. 土師器と土師質土器について」『野田遺跡Ⅱ・野田廃寺』
廣田佳久 2006.1 「土佐国の出土文字資料について- 古代資料を中心として -」『考古学の諸相Ⅱ』 坂詰秀一先生古稀記念論文集 雄山閣
廣田佳久 2009.8 「土佐国の陶硯- 陶硯にみる土佐国の古代の様相について -」『考古学の源流』 木村剛朗さん追悼論集刊行会
山下峰司 1995.12 「4. 灰釉陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
山中敏史 2003.3 「I-3 地方官衙」『古代の官衙遺跡 I 遺構編』 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

遺物觀察表

凡例

1. 図版番号は、Ⅵ区が6001～6980、Ⅶ区が7001～7913、Ⅷ区が8001～8105である。
2. 法量は土器を基準にcmで示しているが、土製品、石製品の場合は口径が全長(cm)、器高が全幅(cm)、胴径が全厚(cm)、底径が重量(g)、古銭の場合は口径が銭径(cm)、器高が内径(cm)、胴径が銭厚(cm)、底径が量目(g)と読み替えている。それ以外の値については、特徴または本文中に記している。なお、カッコ付きの数値は残存値を表している。
3. 遺存状態については、遺存部が1/6に満たないものは「破片」、1/10に満たないものは「細片」と表記している。

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6001	第II層	肥前系磁器 紅皿	4.4	1.5	-	1.2	灰白色 〃	良好	約1/3が残存、外面には条線が残存、口縁外面から内面に白色釉を施釉、高台は露胎
6002	〃	近世陶器 皿	10.7	2.8	-	6.2	オリーブ黄色 〃	〃	約3/4が残存、全面にオリーブ色の釉を施釉、外底面に重ね焼きの痕跡が残存
6003	〃	〃 〃	10.2	2.5	-	7.0	にぶい黄橙色 〃	良	約1/3が残存、高台は貼付けによる。全面に乳白色の釉を施釉し、畳付は釉ハギ
6004	〃	石製品 大型蛤刃石斧	(12.8)	6.8	3.9	(537.1)	-	-	刃部が欠損、石材は緑色岩、全面を研磨
6005	〃	銅製品 煙管	5.7	0.9	0.4	(3.3)	-	-	接合部の一部が欠損、青銅製、全体に錆化が進む。
6006	第III層	土師質土器 杯	10.1	4.9	-	4.3	にぶい黄橙色 灰黄褐色	良	約2/3が残存、成形はB技法、器面は回転ナデ調整、外面に煤が付着、底部の切り離しは回転糸切り
6007	〃	備前焼 播鉢	33.4	7.5	-	-	赤褐色 〃	良好	口縁部から体部の破片、器面は回転ナデ調整で、内面に4本単位の条線が残存、口縁部外面に自然釉が付着
6008	〃	白磁 碗	-	(2.1)	-	6.2	灰黄色 灰白色	〃	底部約1/2が残存、内面に施釉、外面に回転ヘラ削り、底部は削り出し高台、畳付は摩滅
6009	〃	青磁 皿	-	(1.0)	-	3.8	灰黄色 灰白色	〃	底部約2/3が残存、見込に劃花文、底部の切り離しは回転糸切りで、全面に施釉し、底部は釉ハギ
6010	〃	〃 〃	-	(3.2)	-	7.4	オリーブ灰色 〃	〃	底部約1/3が残存、見込に草花文、底部は削り出し高台で、全面に施釉し、畳付は釉ハギ
6011	〃	土製品 土錘	2.9	1.2	1.1	3.3	暗灰色 灰白色	〃	完存、小型で円筒形、表面は摩耗、孔径0.5cm
6012	〃	〃 〃	(4.2)	1.4	1.3	(5.1)	橙色 〃	良	一方の端部が欠損、円筒形、表面は摩耗、孔径0.6cm
6013	〃	〃 〃	4.6	1.6	1.4	7.3	黄灰色 〃	〃	完存、紡錘形、表面は指押えとナデ調整、孔径0.5cm
6014	〃	〃 〃	(4.0)	1.7	1.5	(7.6)	褐灰色 〃	〃	一方の端部が欠損、紡錘形、表面は指押えとナデ調整、孔径0.5cm
6015	〃	〃 〃	(4.7)	1.7	1.6	(7.8)	〃 〃	〃	先端部が欠損、紡錘形、表面は摩耗、孔径0.5cm
6016	〃	〃 〃	(4.0)	1.8	1.7	(8.9)	にぶい橙色 〃	〃	両端が欠損、紡錘形、表面は摩耗するが、指頭圧痕が残存、孔径0.6cm
6017	第IV層	弥生土器 長頸壺	12.3	(5.9)	-	-	〃 〃	良好	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、頸部内面は指ナデの後にハケ調整、外面はナデ調整
6018	〃	〃 甕	14.9	(5.5)	(15.7)	-	灰褐色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片、口頸部と肩部内面はヨコナデ調整、胴部内外面はハケ調整
6019	〃	〃 〃	19.3	(3.1)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口頸部の破片、口唇部から口縁部内面と頸部外面はヨコナデ調整、口縁部外面は指押え、頸部内面はナデ調整
6020	〃	〃 〃	-	(4.3)	-	5.2	浅黄橙色 にぶい橙色	良	底部約1/3が残存、器面は摩耗するが、ナデ調整とみられる。
6021	〃	〃 〃	-	(4.4)	-	6.3	黒褐色 にぶい褐色	〃	底部が残存、内面は指押えとナデ調整、外面はハケ調整、外底面はナデ調整
6022	〃	〃 壺	-	(5.5)	-	10.9	にぶい赤褐色 橙色	〃	底部約1/3が残存、内面はヘラナデ、外面はナデ調整、外底面は未調整
6023	〃	〃 ミニチュア土器	-	(2.7)	-	4.0	にぶい黄褐色 明赤褐色	良好	底部が残存、器面はナデ調整で、外面下端に指頭圧痕が残存
6024	〃	土師器 甕	31.7	(8.1)	28.0	-	にぶい黄褐色 褐色	良	口縁部から上胴部の破片、口縁部から頸部外面はヨコナデ調整、頸部内面はハケ調整、胴部外面はハケ調整
6025	〃	須恵器 杯蓋	15.4	(1.8)	-	-	褐灰色 灰オリーブ色	良好	つまみを除く約1/5が残存、天井部外面は回転ヘラ削り、他は回転ナデ調整で、天井部内面にナデ調整

VI区 遺物観察表2 (6026～6050)

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6026	第IV層	須恵器 杯身	-	(2.3)	-	7.6	褐灰色 〃	良好	底部約1/2が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 高台周囲はヨコナデ調整
6027	〃	〃 〃	-	(2.5)	-	9.5	灰色 〃	〃	体部から底部の約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 高台周囲はヨコナデ調整
6028	〃	〃 〃	-	(2.2)	-	10.0	〃 〃	〃	体部から底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 体部外面に回転ヘラ削り, 高台はヨコナデ調整
6029	〃	〃 杯	13.4	2.9	-	8.9	黄灰色 〃	不良	1/2弱が残存, 器面は摩耗, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6030	〃	〃 長頸壺	4.9	(9.9)	-	-	灰色 〃	良	口頸部がほぼ完存, 口縁部から外面は回転ナデ調整, 内面はヨコナデ調整, 頸部外面に2条の凹線
6031	〃	〃 台付壺	-	(3.2)	8.0	1.2	褐灰色 〃	良好	底部の破片, 器面は回転ナデ調整, 高台周囲はヨコナデ調整
6032	〃	〃 甕	13.5	(4.9)	-	-	〃 〃	良	口縁部から上胴部の破片, 口頸部は回転ナデ調整, 外面に1条の凹線, 胴部内面に同心円文, 外面に平行のタタキ
6033	〃	〃 〃	-	(13.1)	(25.8)	-	にぶい黄橙色 〃	良好	下胴部から底部が残存, 内面は当て具の圧痕の後をヘラナデ, 外面は全面にタタキ
6034	〃	緑釉陶器 皿	-	(1.0)	-	-	灰オリーブ色 〃	〃	体部の細片, 軟質系, 全面に緑釉を施釉
6035	〃	灰釉陶器 椀	-	(1.6)	-	-	灰オリーブ色 灰白色	〃	口縁部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 全面に灰釉を施釉
6036	〃	〃 皿	-	(2.6)	-	-	灰黄褐色 灰オリーブ色	〃	体部の破片, 口縁部から内面は回転ナデ調整, 体部外面は回転ヘラ削り, 体部外面上半から内面に灰釉を施釉
6037	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	-	灰黄色 〃	〃	体部の細片, 内面は回転ナデ調整, 外面は回転ヘラ削り
6038	〃	石製品 石鏃	2.2	1.3	0.4	0.9	-	-	ほぼ完存, 石材はサヌカイト, 凹基石鏃
6039	〃	〃 投弾	3.4	3.1	2.9	39.6	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑
6040	〃	〃 〃	4.0	3.6	2.0	39.0	-	-	〃
6041	〃	〃 〃	4.2	3.3	2.1	40.0	-	-	〃
6042	〃	〃 磨石	6.8	6.1	2.1	127.4	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕が残存
6043	〃	〃 〃	8.2	7.1	2.5	206.7	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕が残存
6044	第V層	弥生土器 壺	17.4	40.0	23.6	6.9	灰黄褐色 にぶい橙色	良	約1/2が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はヨコ方向, 外面はタテ方向のヘラ磨き, 胴部外面はヘラ磨き
6045	〃	〃 〃	21.5	(12.7)	-	-	橙色 褐灰色	やや不良	口頸部の約1/2が残存, 器面は摩耗するが, 口縁部内面にハケ目が残存, 口縁端部にヘラ状工具による斜格子文
6046	〃	〃 〃	10.4	(4.6)	-	-	橙色 〃	良好	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整, 口縁端部に擬凹線文
6047	〃	〃 〃	20.2	(5.1)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口頸部約1/6が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部外面にハケ調整, 口縁端部に凹線文
6048	〃	〃 甕	-	(3.5)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口縁部の細片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はヘラナデ, 口縁部外面下端にクシ描直線文
6049	〃	〃 〃	15.0	(3.2)	-	-	にぶい黄褐色 灰黄褐色	〃	口頸部の破片, 内面は摩耗, 口唇部はヨコナデ調整, 口縁部外面下端に微隆起突帯
6050	〃	〃 〃	14.5	(4.7)	-	-	橙色 明赤褐色	不良	口頸部の破片, 頸部内面は指ナデ, 他は摩耗, 口縁部下端にヘラ状工具による刻目

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
6051	第V層	弥生土器 甕	16.3	(2.5)	-	-	にぶい黄橙色 灰黄褐色	良好	口頸部の破片, 口縁部内面はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整, 口縁端部に棒状工具による刻目
6052	〃	〃 〃	17.8	(4.3)	-	-	明赤褐色 橙色	やや 不良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面は摩耗, 口縁部外面は指押え, 頸部外面はハケ調整の後にヘラ磨き
6053	〃	〃 〃	21.6	(5.3)	-	-	にぶい褐色 にぶい橙色	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整, 口縁部外面に煤が僅かに付着
6054	〃	〃 〃	23.2	(3.1)	-	-	橙色 〃	〃	口縁部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 他はナデ調整, 口縁部外面に指頭圧痕が残存
6055	〃	〃 〃	34.3	(7.4)	(31.8)	-	〃 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部外面に指押え, 胴部内面にハケ調整, 外面はナデ調整, 他は摩耗
6056	〃	〃 〃	10.8	(3.1)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい赤褐色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整, 口縁端部にはヘラ状工具による刻目
6057	〃	〃 〃	11.0	(12.9)	10.7	(4.6)	にぶい黄褐色 にぶい赤褐色	やや 不良	底部以外約4/5が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整とハケ調整, 外面はナデ調整で, 煤が付着
6058	〃	〃 〃	9.7	18.5	12.6	4.0	にぶい黄褐色 にぶい褐色	良	胴部約1/3が欠損, 口頸部はヨコナデ調整, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はヘラ磨き, 頸部に2個1対の円孔が2つ
6059	〃	〃 〃	13.5	(2.9)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁部の破片, 内面はヨコナデ調整, 他は摩耗
6060	〃	〃 〃	17.8	(5.8)	(22.8)	-	にぶい赤褐色 〃	良好	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内外面はハケ調整で, 外面に煤が付着
6061	〃	〃 〃	19.0	(6.8)	(23.3)	-	黒褐色 褐灰色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面はハケ調整
6062	〃	〃 〃	21.5	(4.5)	(22.8)	-	橙色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内外面はナデ調整
6063	〃	〃 〃	-	(4.0)	-	4.7	褐灰色 にぶい褐色	〃	底部が残存, 器面はナデ調整で, 内面に焦げ目が付着
6064	〃	〃 〃	-	(4.0)	-	5.2	褐灰色 にぶい橙色	〃	底部約1/2が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面はヘラ磨き, 外底面はナデ調整
6065	〃	〃 〃	-	(4.7)	-	6.2	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	底部約1/3が残存, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整
6066	〃	〃 壺	-	(4.5)	-	7.4	橙色 明赤褐色	良	底部約4/5が残存, 内面は指ナデ, 外面はヘラナデ, 外底面は未調整, 外面に黒斑が残存
6067	〃	〃 甕	-	(4.0)	-	7.8	灰黄褐色 にぶい褐色	良好	底部約2/3が残存, 内面はヘラ磨き, 外面はタタキの後にヘラ磨き, 外底面はナデ調整
6068	〃	〃 壺	-	(10.7)	(21.1)	7.9	にぶい黄褐色 にぶい橙色	〃	下胴部の一部と底部が残存, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整, 下端から外底面はナデ調整で, 一部にヘラ削り
6069	〃	〃 〃	-	(5.1)	-	8.6	にぶい橙色 にぶい黄褐色	〃	底部約1/3が残存, 内外面はヘラ磨き, 外底面は未調整
6070	〃	〃 甕	-	(7.0)	(17.8)	10.2	灰褐色 にぶい橙色	〃	底部の約1/2が残存, 内面は摩耗と剝離, 外面はヘラ磨き, 下端はナデ調整, 外底面は未調整
6071	〃	〃 高杯	16.6	(5.3)	-	-	灰褐色 〃	良	口縁部から体部の破片, 口縁部から内面はヨコナデ調整, 外面は摩耗と剝離, 口縁部外面に凹線文
6072	〃	〃 〃	-	(7.3)	-	12.7	にぶい橙色 灰褐色	良好	脚柱部約1/5が残存, 内面はヘラ削り, 裾部はヨコナデ調整, 外面はヘラ磨き
6073	〃	〃 ミニチュア土器	5.3	4.9	4.1	3.2	にぶい褐色 〃	良	口縁部が約1/2欠損する以外は残存, 外底面はナデ調整, 他は指押えと部分的にナデ調整
6074	〃	〃 〃	-	(2.5)	-	3.7	灰黄褐色 〃	〃	底部がほぼ残存, 器面はナデ調整で, 高台状の底部は指押え
6075	〃	〃 〃	-	(3.2)	-	4.6	橙色 〃	〃	底部約1/4が残存, 器面はナデ調整, 外面下端は指押え, 外底面はナデ調整

VI区 遺物観察表4 (6076～6100)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
6076	第V層	弥生土器 ミニチュア土器	-	(3.7)	-	5.4	にぶい褐色 〃	良好	底部約1/4が残存、内面と外底面はナデ調整、外面はタテ方向のヘラ磨き、器壁が薄い。
6077	〃	石製品 扁平柱状石斧	(12.4)	4.7	2.3	(2410)	-	-	刃部が欠損する以外は残存、石材は緑色岩、表面は研磨され、基部側面に擦痕が残存
6078	〃	〃 石鏃	2.5	1.5	0.3	1.3	-	-	完存、石材はサヌカイト、平基の石鏃
6079	〃	〃 〃	2.6	1.4	0.4	1.3	-	-	完存、石材はサヌカイト、凸基の石鏃
6080	〃	〃 穿孔具	3.1	1.0	0.3	0.8	-	-	完存、石材はサヌカイト、先端が錐状に尖る。
6081	〃	〃 叩石	11.4	9.5	2.5	(395.5)	-	-	ほぼ完存、石材は中粒砂岩、表面は平滑で、上面に弱い敲打痕、側面と縁辺を中心に擦痕が残存
6082	〃	〃 磨石	7.8	7.7	2.4	212.5	-	-	完存、石材は中粒砂岩、表面は平滑で、縁辺を中心に擦痕が残存
6083	〃	〃 〃	9.8	6.9	2.7	270	-	-	完存、石材は粗粒砂岩、表面は平滑で、縁辺を中心に擦痕が残存
6084	〃	〃 〃	11.3	6.8	2.8	353.8	-	-	完存、石材は粗粒砂岩、表面は平滑で、上面と側面に弱い敲打痕、縁辺を中心に擦痕が残存
6085	〃	〃 砥石	28.8	18.4	8.0	660.0	-	-	ほぼ完存、3面と側面に使用痕、表面には各所に弱い敲打痕が残存
6086	ST-6001	〃 石鏃	2.9	1.7	0.2	1.1	-	-	完存、石材はサヌカイト、凸基無茎の石鏃
6087	〃	〃 〃	2.2	2.0	0.5	1.4	-	-	完存、石材はサヌカイト、平基の石鏃
6088	〃	〃 〃	(2.9)	(2.8)	0.4	(2.4)	-	-	基部が欠損、石材はサヌカイト、大型石鏃とみられる。
6089	〃	〃 穿孔具	(3.2)	1.1	0.4	(1.3)	-	-	先端部が欠損、石材はサヌカイト、先端は錐状に尖っていたとみられる。
6090	〃	〃 磨石	8.3	7.8	2.6	255.1	-	-	完存、石材は細粒砂岩、表面は平滑で、縁辺を中心に擦痕が残存
6091	〃	〃 〃	9.6	7.7	2.6	306.1	-	-	完存、石材は細粒砂岩、片面中央部と側面に敲打痕が残存
6092	〃	〃 〃	10.2	7.6	3.1	345.6	-	-	完存、石材は粗粒砂岩、表面は平滑で、擦痕が残存
6093	〃	〃 〃	14.2	8.4	3.5	400.5	-	-	完存、石材は泥岩、自然面も残るが、表面は比較的平滑で、側面に擦痕が残存
6094	〃	〃 砥石	19.5	13.3	5.5	2.2kg	-	-	完存、石材は粗粒砂岩、両面に使用痕が残存
6095	ST-6002	弥生土器 壺	15.1	(9.1)	15.0	-	にぶい黄橙色 〃	良	口頸部から上胴部の約1/3が残存、口唇部から口縁部内面はヨコナデ調整、口縁部外面は指押え
6096	〃	〃 甕	-	(2.1)	-	5.6	灰色 にぶい黄橙色	〃	底部が残存、内面はナデ調整、外面は摩耗
6097	〃	〃 ミニチュア土器	-	(6.7)	6.2	3.2	にぶい橙色 〃	〃	口縁部が欠損、胴部内面は指ナデ、他はナデ調整で指頭圧痕が部分的に残存
6098	〃	〃 〃	-	(3.3)	(7.0)	4.4	にぶい黄橙色 にぶい橙色	やや不良	底部を中心に約1/3が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面は摩耗
6099	〃	〃 〃	-	(4.3)	-	(4.2)	にぶい橙色 〃	良	底部の大半が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面は摩耗
6100	〃	土製品 紡錘車	4.1	3.5	0.7	11.7	にぶい橙色 褐灰色	〃	完存、土器の転用、中央に径5mmの円孔を上下から穿つ、上面はヘラ磨き、下面は摩耗

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6101	ST-6002	石製品 石庖丁	(11.7)	(6.7)	1.0	(108.3)	-	-	刃部が欠損し、約3/4が残存、石材は千枚岩、両面に研磨痕が残存、石庖丁の未成品
6102	〃	〃 柱状石斧	(8.3)	3.7	2.8	(167.3)	-	-	基部が欠損、石材は結晶片岩、各面に研磨痕が残存
6103	〃	〃 石鏃	2.6	1.9	0.5	1.3	-	-	完存、石材はサヌカイト、有茎の石鏃
6104	〃	〃 投弾	3.6	2.1	1.6	17.8	-	-	完存、石材は中粒砂岩、表面は平滑
6105	〃	〃 〃	3.7	3.1	2.0	32.9	-	-	完存、石材は粗粒砂岩、表面は平滑
6106	〃	〃 磨石	7.6	7.2	2.4	228.7	-	-	完存、石材は緑色岩、表面は幾分風化するが、平滑
6107	〃	〃 〃	7.9	7.5	3.9	307.5	-	-	完存、石材はチャート、表面は平滑で、各所に擦痕が残存
6108	ST-6003	弥生土器 壺	26.6	(14.8)	(34.4)	-	にぶい橙色 にぶい赤褐色	良	口縁部から中胴部約1/4が残存、口縁部はヨコナデ調整、内面は丁寧なナデ調整
6109	〃	〃 甕	16.6	(3.1)	-	-	褐灰色 〃	〃	口頸部約1/6が残存、器面は摩耗、口縁部下部に刻目、口縁部外面に微隆起突帯とクシ描直線文
6110	〃	〃 〃	19.7	(19.4)	20.4	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁部約1/2と胴部約1/5が残存、口唇部はヨコナデ調整、口縁部外面に微隆起突帯2条とクシ描直線文
6111	〃	〃 〃	23.2	(3.5)	-	-	にぶい黄褐色 〃	〃	口頸部の破片、口唇部はヨコナデ調整、口縁部外面は指押え、頸部内面は摩耗、外面はハケ調整
6112	〃	〃 〃	-	(3.4)	-	5.5	にぶい褐色 〃	〃	底部が残存、器面は摩耗し、外面は被熱で変色
6113	〃	〃 〃	-	(7.2)	-	7.0	にぶい黄褐色 にぶい橙色	〃	底部約1/3が残存、内面は指押えとナデ調整、外面はナデ調整とヘラナデ、外底面はナデ調整
6114	〃	〃 〃	-	(8.6)	(17.8)	7.7	暗灰黄色 にぶい橙色	〃	底部約1/2が残存、内底面に指頭圧痕が残存、外面にはヘラ磨きが僅かに残存、他は摩耗
6115	〃	〃 ミニチュア土器	(3.4)	-	(4.2)	-	褐灰色 にぶい橙色	〃	底部の大半が残存、内面は指押えとナデ調整、外面はヘラナデとナデ調整、外底面はナデ調整
6116	〃	石製品 打製石斧	16.9	10.7	2.0	(488.2)	-	-	部分的に欠損、石材は粘板岩、側面に挟りが2ヵ所残存、表面は研磨されるが、自然面も残存
6117	〃	〃 石鏃	(4.4)	2.1	0.5	(2.5)	-	-	茎の先端のみ欠損、石材はサヌカイト、有茎の石鏃
6118	〃	〃 投弾	3.9	2.4	2.0	22.8	-	-	ほぼ完存、石材は中粒砂岩、表面は平滑で、煤が付着、表面の剥落が一部にみられる。
6119	〃	〃 〃	3.6	2.7	2.0	25.6	-	-	完存、石材は細粒砂岩、表面は平滑
6120	〃	〃 〃	4.4	2.9	1.8	32.7	-	-	完存、石材は粗粒砂岩、表面は平滑
6121	〃	〃 〃	3.7	3.0	2.4	37.6	-	-	〃
6122	〃	〃 〃	4.2	3.2	2.1	38.6	-	-	〃
6123	〃	〃 磨石	6.0	5.0	1.9	82.4	-	-	ほぼ完存、石材は粗粒砂岩、表面は平滑で擦痕が残存、表面の剥落が一部にみられる。
6124	〃	〃 〃	9.4	5.7	2.5	203.9	-	-	完存、石材は中粒砂岩、表面は平滑で、縁辺部に擦痕がみられ、敲打痕が側面3ヵ所と表面1ヵ所に残存
6125	〃	〃 〃	10.0	7.6	2.9	316.0	-	-	完存、石材は粗粒砂岩、表面は平滑で、縁辺を中心に擦痕が残存

VI区 遺物観察表6 (6126～6150)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
6126	ST-6004	弥生土器 壺	25.4	(3.5)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面は摩耗, 頸部外面はハケ調整
6127	〃	〃 甕	15.9	(3.4)	-	-	灰黄褐色 〃	〃	口頸部の破片, 器面は摩耗, 口縁部下端にヘラ状工具による刻目, 口縁部外面にクシ描直線文
6128	ST-6005	〃 壺	-	(3.1)	-	8.4	浅黄褐色 〃	〃	底部の約1/3が残存, 器面は摩耗するが, 内面に指ナデの痕跡が残存
6129	〃	〃 〃	-	(6.2)	-	11.3	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	底部の約1/2が残存, 内面と外面はナデ調整, 外底面は摩耗
6130	〃	石製品 投弾	3.7	2.7	2.4	31.6	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑
6131	ST-6007	弥生土器 甕	-	(2.0)	-	-	にぶい黄褐色 灰褐色	良好	口縁部の破片, 内面はヨコナデ調整, 外面はハケ調整, 口縁部下端にヘラ状工具による刻目
6132	〃	〃 蓋	-	(1.8)	-	-	にぶい橙色 〃	不良	つまみのみ残存, 器面は摩耗
6133	〃	土製品 紡錘車	3.1	2.9	0.5	5.6	灰黄褐色 にぶい赤褐色	良	ほぼ完存, 土器の転用で, 上面はヘラ磨き, 下面は摩耗, 上下から径3mmの円孔を穿つ。
6134	〃	石製品 石鏃	(2.8)	1.2	0.4	(1.5)	-	-	ほぼ完存, 石材はサヌカイト, 柳葉形の石鏃
6135	〃	〃 〃	2.6	1.9	0.3	(1.1)	-	-	一部欠損, 石材はサヌカイト, 三角形の石鏃
6136	ST-6008	弥生土器 壺	19.0	(3.0)	-	-	灰褐色 〃	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 口縁部下端にヘラ状工具による刻目と外面に微隆起突帯
6137	〃	〃 甕	-	(3.5)	-	6.6	黒褐色 にぶい赤褐色	良好	底部約1/3が残存, 内面はヘラナデ, 外面は粗目のハケ調整, 外底面はナデ調整
6138	〃	石製品 石鏃	(2.7)	1.7	0.3	(1.2)	-	-	先端が欠損, 石材はサヌカイト, 三角形の石鏃
6139	ST-6010	弥生土器 台付鉢	-	(7.5)	19.2	-	褐灰色 にぶい黄褐色	良	体部約1/5が残存, 器面は摩耗
6140	〃	石製品 小型蛤刃石斧	8.6	4.5	1.4	(81.2)	-	-	部分的に欠損, 石材は結晶片岩, 片面は研磨されるが, 一方の面は未調整
6141	〃	〃 打製石鏃	(13.5)	8.9	2.3	(315.9)	-	-	ほぼ完存, 石材は中粒砂岩, 表面は自然面で縁辺を中心に擦痕が残存, 裏面は剥離面が残存
6142	〃	〃 石鏃	(1.8)	0.9	0.3	(0.4)	-	-	基部が欠損, 石材はサヌカイト, 柳葉形の石鏃
6143	〃	〃 〃	2.4	0.9	0.4	0.8	-	-	完存, 石材はサヌカイト, 柳葉形の石鏃
6144	〃	〃 〃	(2.0)	1.3	0.4	(1.1)	-	-	基部が欠損, 石材はサヌカイト, 柳葉形の石鏃
6145	〃	〃 〃	1.9	1.4	0.4	0.9	-	-	完存, 石材はサヌカイト, 平基の石鏃
6146	〃	〃 〃	1.9	1.7	0.2	0.7	-	-	〃
6147	〃	〃 〃	2.1	2.5	0.6	2.1	-	-	〃
6148	〃	〃 〃	(2.1)	1.6	0.3	(0.8)	-	-	先端が欠損, 石材はサヌカイト, 平基の石鏃
6149	〃	〃 〃	2.3	1.4	0.3	1.1	-	-	完存, 石材はサヌカイト, 平基の石鏃
6150	〃	〃 〃	2.5	1.7	0.4	1.0	-	-	〃

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6151	ST-6010	石製品 石鎌	1.7	1.3	0.2	0.3	-	-	完存, 石材はサヌカイト, 小型の凹基の石鎌
6152	〃	〃 〃	(2.4)	(1.8)	0.4	(1.1)	-	-	ほぼ完存, 石材はサヌカイト, 凹基の石鎌
6153	〃	〃 〃	2.4	1.7	0.5	1.5	-	-	完存, 石材はサヌカイト, 凹基の石鎌
6154	〃	〃 〃	2.8	1.7	0.5	1.8	-	-	〃
6155	〃	〃 投弾	4.2	3.0	1.8	31.7	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑
6156	〃	〃 〃	4.3	3.8	2.0	46.2	-	-	〃
6157	〃	〃 〃	5.5	4.5	2.5	88.9	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 擦痕とみられる 痕跡が僅かに残存
6158	〃	〃 叩石	10.5	8.2	2.5	319.1	-	-	ほぼ完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑で, 片面中央部 に弱い敲打痕が残存
6159	〃	〃 磨石	6.3	5.6	1.4	80.5	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺に擦痕が残存
6160	〃	〃 〃	7.2	6.3	2.0	141.8	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦 痕が残存
6161	〃	〃 〃	7.1	6.1	3.0	176.2	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺に擦痕が残存
6162	〃	〃 〃	8.6	6.8	2.7	241.2	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦 痕が残存
6163	〃	〃 〃	7.1	7.8	3.0	247.9	-	-	完存, 石材はチャート, 表面は平滑で, 部分的に擦痕が 残存
6164	〃	〃 〃	11.1	7.5	2.6	339.6	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 各所に擦痕が残存
6165	〃	〃 砥石	31.6	14.8	3.4	25kg	-	-	ほぼ完存, 石材は粗粒砂岩, 使用面は上面のみで, 鉄分 が付着し, 褐色を呈する。他は自然面となる。
6166	〃	〃 〃	24.5	17.7	(5.8)	(27kg)	-	-	大半が残存, 石材は細粒砂岩, 2面と5ヵ所に使用痕が 残存
6167	〃	〃 管玉	1.1	(0.4)	(0.2)	(0.1)	-	-	約1/2が残存, 石材は蛇紋岩, 表面は風化し, 摩滅する。
6168	ST-6011	〃 石庖丁	10.9	4.3	0.6	(48.6)	-	-	部分的に欠損, 石材は粘板岩, 表面は研磨され, 紐孔が 2ヵ所に両面から穿穴される。
6169	〃	〃 大型蛤刃石斧	14.8	7.3	2.8	524.1	-	-	完存, 石材は緑色岩, 表面は側面以外を研磨し, 両刃の 刃部を作り出す。
6170	〃	〃 〃	17.5	7.2	5.5	1.2kg	-	-	ほぼ完存, 石材は緑色岩, 未成品とみられる。
6171	〃	〃 磨石	11.1	7.7	2.5	332.9	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑で, 側面に敲打痕が 残存
6172	ST-6013	弥生土器 甕	-	(13.7)	17.5	-	にぶい橙色 〃	良	頸部から中胴部の約1/3が残存, 内面はナデ調整で, 部 分的に指頭圧痕が残存, 頸部外面はナデ調整
6173	〃	石製品 叩石	11.8	3.3	1.9	(130.5)	-	-	ほぼ完存, 石材は粘板岩, 表面は平滑で, 先端部に敲打 痕, 側面に擦痕が残存
6174	ST-6014	弥生土器 壺	-	(4.1)	-	-	橙色 〃	やや不良	口縁部の細片, 口唇部から内面はヨコナデ調整, 外面は 指押え, 口縁端部に凹線文と円形浮文
6175	〃	〃 〃	26.5	(1.7)	-	-	にぶい橙色 〃	良	口縁部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 他は摩耗する が, 口縁端部にハケ状工具による刺突文

VI区 遺物観察表8 (6176～6200)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
6176	ST-6014	弥生土器 甕	21.5	(3.8)	-	-	黄橙色 〃	不良	口頸部の破片, 器面は摩耗するが, 口縁部外面に指頭圧痕が残存
6177	〃	〃 〃	15.0	(4.1)	-	-	にぶい褐色 〃	良	口頸部約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整, 口縁部下端にヘラ状工具による刻目
6178	〃	〃 〃	18.4	(5.5)	(13.6)	-	にぶい橙色 〃	〃	口頸部約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はヘラナデと指ナデ, 口縁部外面は指押えで, 煤が付着
6179	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	-	にぶい褐色 灰褐色	良好	口縁部の細片, 器面はヨコナデ調整で, 端部を拡張し, 凹線文を施文
6180	〃	〃 〃	(17.8)	(3.5)	-	-	黒褐色 灰黄褐色	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ調整, 口縁部部に凹線文を施文
6181	〃	〃 〃	17.0	(4.1)	-	-	にぶい褐色 〃	良好	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面はハケ調整, 口縁部部に凹線文
6182	〃	〃 〃	17.0	(1.5)	-	-	明赤褐色 にぶい赤褐色	〃	口縁部の破片, 器面はヨコナデ調整, 端部に擬凹線文を施文, 外面に煤が付着
6183	〃	〃 〃	-	(6.5)	(9.0)	5.1	灰黄褐色 にぶい黄褐色	良	底部の破片, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整で, 下端から外底面はナデ調整
6184	〃	〃 〃	-	(9.3)	(15.1)	6.1	灰黄褐色 にぶい赤褐色	〃	底部から下胴部の約1/3が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面は摩耗するが, ハケ目が一部に残存し煤が付着
6185	〃	〃 〃	-	(2.7)	-	6.8	橙色 にぶい褐色	〃	底部約1/4が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 他はナデ調整で, 外面は被熱で変色し, 一部に煤が付着
6186	〃	〃 〃	-	(6.4)	-	10.5	橙色 にぶい褐色	〃	底部約1/4が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面は粗いヘラ磨き, 外底面はナデ調整, 外面下端に煤が付着
6187	〃	〃 台付鉢	-	(3.5)	-	7.4	にぶい黄褐色 にぶい橙色	良好	脚台部約1/2が残存, 内面はナデ調整, 外面はヨコナデ調整
6188	〃	〃 高杯	-	(1.9)	-	-	にぶい黄褐色 〃	良	口縁部の細片, 器面はヨコナデ調整で, 外面に擬凹線文を施文
6189	〃	〃 〃	-	(3.4)	-	-	にぶい黄褐色 褐灰色	〃	口縁部から体部の細片, 口縁部はヨコナデ調整で内面に朱が付着, 体部内面はナデ調整, 口縁部外面に擬凹線文
6190	〃	〃 〃	18.4	(1.9)	-	-	灰褐色 にぶい赤褐色	良好	口縁部の破片, 器面はヨコナデ調整で, 外面に凹線が1条巡る。
6191	〃	石製品 石庖丁	9.9	4.4	1.2	60.8	-	-	ほぼ完存, 石材は千枚岩, ほぼ全面を研磨し, 紐孔1個を両側から穿孔する。
6192	〃	〃 石斧	7.4	5.0	1.1	(61.4)	-	-	刃部を中心に欠損, 石材は千枚岩, 片面は研磨されるが, 片面は表面が剥離する。
6193	〃	〃 〃	12.2	4.4	0.8	91.0	-	-	大半が残存, 石材は粘板岩, 未成品で, 片面と1側面は研磨されるが, 他は未調整
6194	〃	〃 石鏃	2.1	2.0	0.4	1.2	-	-	完存, 石材はサヌカイト, 三角形で平基の石鏃
6195	〃	〃 〃	2.5	1.7	0.4	(1.2)	-	-	基部両端が欠損するが, ほぼ完存, 石材はサヌカイト, 三角形で凹基の石鏃
6196	ST-6016	弥生土器 壺	-	(4.6)	-	-	にぶい橙色 灰褐色	良好	口頸部の細片, 口縁部はヨコナデ調整, 口縁部下端に刻目, 口縁外面に3条の微隆起突帯と棒状浮文
6197	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	-	にぶい赤褐色 〃	良	口縁部の細片, 内面はハケ調整, 口唇部から外面はヨコナデ調整, 口縁部部に凹線文を施文
6198	〃	〃 甕	18.3	(7.3)	(22.3)	-	橙色 〃	〃	口縁部から上胴部の約1/5が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面はハケ調整
6199	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	-	にぶい橙色 橙色	良好	口頸部の細片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整, 口縁部部に擬凹線文, 外面に煤が付着
6200	〃	〃 〃	-	(3.6)	-	-	にぶい褐色 〃	良	口縁部の細片, 口唇部はヨコナデ調整, 他はハケ調整で, 外面に煤が付着

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6201	ST-6016	弥生土器 ミニチュア土器	3.2	3.1	-	2.5	オリーブ黒色 〃	良	約1/3が残存, 器面はナデ調整で, 各所に指頭圧痕が残存
6202	〃	土製品 紡錘車	3.5	3.2	0.5	6.5	灰黄褐色 〃	〃	ほぼ完存, 土器の転用, 上面は摩耗, 下面はナデ調整で, 円孔は, 大半が上面から穿穴
6203	〃	石製品 石鎌	(4.0)	1.6	0.4	(1.9)	-	-	先端と茎の先が欠損, 石材はサヌカイト, 凸基の石鎌
6204	〃	〃 〃	(3.5)	1.8	0.7	(5.1)	-	-	〃
6205	ST-6017	弥生土器 壺	-	(2.1)	-	-	橙色 明赤褐色	良好	肩部の細片, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後にハケ状工具で刺突文を施文
6206	ST-6018	〃 甕	-	(6.6)	-	8.0	灰黄褐色 〃	〃	底部の大半が残存, 内面はナデ調整, 外面はヘラナデ, 外底面はナデ調整
6207	ST-6020	〃 〃	-	(13.9)	(21.7)	7.0	灰褐色 にぶい赤褐色	〃	底部から胴部の約1/2が残存, 内面はハケ調整の後にヘラ磨き, 外面はヘラ磨き, 外底面はヘラ削り
6208	ST-6021	〃 〃	-	(2.6)	-	-	灰褐色 褐灰色	〃	口縁部の細片, 口唇部はヨコナデ調整, 他はナデ調整で, 口縁部外面に微隆起突帯とクシ描直線文
6209	〃	〃 〃	15.0	(2.7)	-	-	橙色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整, 口縁部下端にヘラ状工具による刻目
6210	〃	〃 〃	15.6	(4.8)	-	-	〃 〃	やや不良	口頸部約1/4が残存, 口唇部と口縁部内面はヨコナデ調整, 頸部内面はヘラナデでナデ調整を加える。
6211	〃	〃 〃	15.2	(7.3)	13.0	-	にぶい橙色 灰褐色	良好	口縁部から上胴部約1/4が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はヘラ削り, 外面はヘラ磨きで, 煤が付着
6212	〃	〃 〃	15.3	(3.2)	-	-	にぶい橙色 橙色	〃	口頸部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 口頸部内面はヘラ磨きとヘラ削り, 外面はヘラナデ
6213	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	-	灰褐色 〃	〃	口縁部の細片, 器面はヨコナデ調整で, 口縁部を拡張し, 凹線文を施文
6214	〃	〃 〃	17.3	(15.6)	22.7	-	〃 〃	〃	口縁部から中胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整の後にヘラ磨き, 外面はヘラ磨き
6215	〃	〃 〃	-	(5.3)	(10.8)	5.2	黒褐色 灰褐色	良	底部約3/4が残存, 内面は摩耗, 外面はハケ調整で煤が付着, 下端から外底面はナデ調整
6216	〃	〃 〃	-	(21.2)	13.4	4.7	黒色 褐灰色	不良	胴部以下の大半が残存, 内面は指押え, 指ナデとナデ調整, 外面上半に煤が付着し, 下半にハケ調整とヘラ磨き
6217	〃	〃 壺	-	(10.3)	(25.2)	10.9	橙色 〃	良	底部約1/3が残存, 内面はナデ調整, 外面はヘラ磨き, 下端から外底面はナデ調整, 被熱で変色
6218	〃	〃 高杯	-	(9.5)	-	10.0	にぶい赤褐色 〃	良好	脚台部の破片, 内面はしぼりとヘラ削り, 外面はヘラ磨き, 裾端部はヨコナデ調整で, 擬凹線文を施文
6219	〃	石製品 石庖丁	(6.2)	3.9	0.7	(22.4)	-	-	約1/2が残存, 石材はサヌカイト, 未成品で紐孔は穿穴途中, 片面は研磨されるが, 一方は剥離のままで未調整
6220	〃	〃 打製石鎌	11.9	8.1	2.4	317.8	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 弱い敲打痕と縁辺を中心に擦痕が残存, 裏面は剥離面が残存
6221	〃	〃 不明石器	(8.0)	(1.4)	(0.8)	(10.2)	-	-	一部が残存, 石材は粘板岩, 断面は三角形を呈し, 2面を研磨, 残りの面は剥離面が残存
6222	〃	〃 石鎌	(2.8)	1.5	0.5	(1.5)	-	-	茎の先端が欠損, 石材はサヌカイト, 有茎の石鎌で, 菱形を呈する。
6223	〃	〃 〃	3.2	0.9	0.5	1.1	-	-	完存, 石材はサヌカイト, 幅の狭い柳葉形で凸基無茎の石鎌
6224	〃	〃 〃	(2.2)	1.4	0.4	(1.2)	-	-	先端が僅かに欠損するが, ほぼ完存, 石材はサヌカイト, 凹基の石鎌
6225	〃	〃 〃	2.1	1.7	0.4	1.1	-	-	完存, 石材はサヌカイト, 凹基の石鎌

VI区 遺物観察表10 (6226～6250)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
6226	ST-6021	石製品 石鏃	2.6	1.8	0.4	1.5	-	-	完存, 石材はサヌカイト, 小さな挟りが残存する凹基の石鏃
6227	〃	〃 〃	2.8	1.6	0.3	0.9	-	-	完存, 石材はサヌカイト, 凹基の石鏃
6228	〃	〃 投弾	3.1	2.8	1.7	21.0	-	-	完存, 石材はチャート, 表面は平滑
6229	〃	〃 磨石	5.4	6.2	1.5	72.3	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 擦痕と摩滅痕が残存
6230	〃	〃 〃	10.0	8.3	4.1	459.8	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 側面に弱い敲打痕と擦痕, 縁辺を中心に擦痕が残存
6231	〃	〃 〃	12.2	7.8	3.8	561.2	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 各所に擦痕が残存し, 側面の一部に弱い敲打痕
6232	ST-6022	弥生土器 壺	19.3	(4.4)	-	-	橙色 明赤褐色	不良	口頸部の破片, 口唇部から口縁部内面はヨコナデ調整, 内面と頸部外面はハケ調整, 口縁端部に刺突文
6233	〃	〃 甕	19.7	(2.0)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良	口縁部の破片, 口唇部から口縁部内面はヨコナデ調整, 口縁部外面に微隆起突帯とクシ描直線文
6234	〃	〃 壺	-	(3.7)	-	5.6	灰黄褐色 にぶい黄褐色	〃	底部が残存, 内面はヘラ磨き, 外面と外底面は摩耗するが, 外面下端に指ナデの痕跡が残存
6235	〃	〃 甕	-	(9.4)	-	6.3	褐灰色 にぶい赤褐色	〃	底部約1/2が残存, 器面はナデ調整で, 内底面に指頭圧痕が残存
6236	〃	〃 蓋	11.1	9.6	-	-	にぶい赤褐色 にぶい褐色	〃	口縁部の一部が欠損, 内面は指ナデ, 天井部外面と口縁部はナデ調整, 外面はヘラナデ
6237	〃	〃 ミニチュア土器	3.1	6.9	4.8	3.1	にぶい褐色 暗灰色	良好	大半が残存, 内面は指ナデ, 頸部外面は指押え, 胴部外面はハケ調整の後にナデ調整
6238	〃	〃 〃	6.4	9.5	9.2	5.3	褐灰色 にぶい橙色	〃	約1/2が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はヘラ削りとナデ調整, 外面はヘラ磨き, 下胴部はヘラナデ
6239	〃	石製品 石庖丁	9.8	3.9	0.7	48.3	-	-	ほぼ完存, 石材は粘板岩, 全面を研磨し, 紐孔2個を表裏から穿つ。刃部長9.3cm, 幅0.4cm
6240	〃	〃 〃	5.5	7.5	1.0	57.0	-	-	ほぼ完存, 石材は粘板岩, 表面は平滑, 裏面は剥離面が残存, 両端に挟り, 刃部長7.2cm, 幅0.8cm
6241	〃	〃 投弾	3.4	2.4	2.0	23.2	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑
6242	〃	〃 〃	3.4	2.7	1.9	24.1	-	-	〃
6243	〃	〃 〃	3.6	3.0	1.8	27.9	-	-	〃
6244	〃	〃 〃	3.7	3.1	2.1	33.6	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑
6245	〃	〃 〃	3.8	2.9	2.7	40.6	-	-	〃
6246	〃	〃 〃	4.2	3.5	2.0	41.2	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑
6247	〃	〃 〃	4.0	3.0	2.5	42.2	-	-	〃
6248	〃	〃 〃	5.3	3.2	2.0	46.9	-	-	〃
6249	〃	〃 叩石	11.5	6.0	2.7	301.1	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 上面に弱い敲打痕, 側面3ヵ所に敲打痕と摩滅痕が残存
6250	〃	〃 磨石	5.2	4.8	1.6	62.3	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕が残存

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6251	ST-6022	石製品 磨石	7.0	5.7	1.8	109.4	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 上面に弱い敲打痕, 側面を中心に擦痕が残存
6252	〃	〃 〃	8.9	3.3	1.6	81.8	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕が残存
6253	ST-6023	弥生土器 甕	16.3	(2.0)	-	-	にぶい橙色 〃	良好	口縁部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面は指押え
6254	〃	〃 ミニチュア土器	-	(2.4)	-	3.6	にぶい黄褐色 にぶい橙色	良	底部約1/2が残存, 内面は指ナデ, 外面は指ナデとナデ調整, 外底面は剝離
6255	ST-6026	〃 甕	17.5	(7.0)	(14.8)	-	にぶい褐色 灰黄褐色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面は摩耗
6256	〃	〃 〃	-	(3.5)	-	5.6	黒褐色 灰黄褐色	〃	底部約1/2が残存, 器面はナデ調整
6257	〃	〃 高杯	-	(2.0)	-	7.4	にぶい橙色 〃	〃	裾部約1/5が残存, 器面は摩耗, 内面にヘラによるキズが残存
6258	〃	土製品 紡錘車	4.9	5.1	0.9	21.2	褐灰色 にぶい橙色	やや不良	完存, 土器の転用, 未成品, 表面は摩耗するが, 指頭圧痕が僅かに残存, 円孔穿穴途中で破損
6259	〃	石製品 石斧	(8.6)	4.9	1.9	(95.3)	-	-	基部が欠損, 石材は千枚岩, 刃部に研磨痕が残存, 他は風化し剝離が目立つ。刃部長3.6cm, 幅0.7cm
6260	〃	〃 〃	13.4	2.4	1.7	76.7	-	-	ほぼ完存, 石材は粘板岩, 未成品, 断面は三角形を呈し, 一面に研磨痕, 他は剝離のまま
6261	〃	〃 石鏃	(3.4)	1.1	0.4	(1.7)	-	-	先端と基部が欠損, 石材はサヌカイト, 凸基無茎の石鏃
6262	〃	〃 〃	(3.3)	1.6	0.5	(2.4)	-	-	先端部が欠損, 石材はサヌカイト, 基部が舌状をなす石鏃
6263	〃	〃 投弾	2.7	2.6	2.0	19.3	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑
6264	〃	〃 〃	3.4	2.8	1.7	23.3	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑
6265	〃	〃 〃	3.4	2.8	2.0	26.4	-	-	〃
6266	〃	〃 〃	3.6	3.1	1.8	29.2	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑
6267	〃	〃 〃	3.9	2.9	2.0	33.1	-	-	完存, 石材はチャート, 表面は平滑
6268	〃	〃 〃	5.0	2.7	2.1	42.3	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑
6269	ST-6027	弥生土器 壺	7.5	19.4	16.5	6.5	にぶい黄橙色 橙色	良	約2/3が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はハケ調整とナデ調整で, 爪痕が残存, 頸部に突帯を貼付
6270	〃	〃 〃	12.0	(5.8)	-	-	灰黄褐色 褐色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部外面はハケ調整, 口縁端部に擬凹線文を施文
6271	〃	〃 〃	-	(2.4)	-	-	にぶい黄褐色 にぶい褐色	〃	口縁部の細片, 外面はヨコナデ調整, 内面は摩耗, 口縁端部下端に刻目, その下に微隆起突帯
6272	〃	〃 〃	20.0	(5.6)	-	-	灰黄褐色 〃	〃	口頸部約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はヘラ磨き, 口縁端部下端に刻目, その下に微隆起突帯
6273	〃	〃 〃	9.1	(14.1)	-	-	橙色 〃	〃	口頸部が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はナデ調整の後にクシ描波状文とクシ描直線文を施文
6274	〃	〃 〃	-	(4.5)	-	-	黄灰色 にぶい黄褐色	〃	頸部の破片, 内面はナデ調整, 外面はヨコナデ調整の後に微隆起突帯と棒状浮文を貼付
6275	〃	〃 〃	-	(10.0)	-	-	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	やや不良	頸部から上胴部の破片, 器面は摩耗するが, 内面に指ナデの痕が残存, 頸部外面下端に突帯を貼付

VI区 遺物観察表12 (6276～6300)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
6276	ST-6027	弥生土器 壺	-	(9.9)	-	-	にぶい褐色 灰褐色	良	頸部から肩部の細片, 器面には一部にヨコナデ調整とナデ調整の痕が残存, 外面に凹形浮文と微隆起突帯
6277	〃	〃 甕	15.2	(8.9)	-	-	黄灰色 にぶい黄褐色	〃	口頸部約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 他は摩耗, 口縁部は浅い凹面となる。
6278	〃	〃 〃	15.7	(5.6)	-	-	橙色 〃	やや 不良	口頸部の破片, 器面は摩耗, 口縁部は凹面となり, 口縁部外面には指頭圧痕が2段に残存
6279	〃	〃 〃	17.2	(4.3)	-	-	にぶい褐色 灰褐色	良好	口頸部約1/4が残存, 口縁部外面は指押え, 他は細かいハケ調整
6280	〃	〃 〃	19.2	(4.2)	-	-	にぶい褐色 にぶい赤褐色	やや 不良	口頸部約1/6が残存, 器面は摩耗するが, 口縁部外面に指頭圧痕が残存
6281	〃	〃 〃	13.4	(6.1)	(16.4)	-	にぶい黄褐色 〃	良	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はヘラ削り, 外面はハケ調整, 頸部外面に煤が付着
6282	〃	〃 〃	16.5	(5.7)	-	-	〃 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 胴部内面はヘラ削り, 他は摩耗, 口縁部は擬凹線文を施文
6283	〃	〃 〃	-	(3.8)	-	5.6	灰黄色 橙色	〃	底部が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 他はナデ調整で外面は被熱で変色
6284	〃	〃 〃	-	(5.4)	-	4.8	にぶい黄褐色 にぶい橙色	〃	約1/2が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 他は摩耗
6285	〃	〃 〃	-	(5.8)	-	5.6	にぶい黄褐色 〃	良好	底部約1/2が残存, 内面は丁寧なナデ調整, 外面はハケ調整と指ナデ, 外底面はナデ調整
6286	〃	〃 〃	-	(5.9)	-	5.4	灰黄褐色 〃	良	約1/2が残存, 内面はヘラ削り, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整で, 外面は被熱で変色
6287	〃	〃 壺	-	(3.2)	-	8.1	にぶい黄褐色 〃	〃	底部の破片, 器面はナデ調整で, 内底面には朱が付着
6288	〃	〃 高杯	-	(3.4)	-	14.0	にぶい橙色 褐灰色	〃	裾部約1/6が残存, 器面はヨコナデ調整, 端部には擬凹線文を施文
6289	〃	〃 ミニチュア土器	5.2	(5.9)	-	(2.3)	橙色 〃	不良	約1/2が残存, 器面は摩耗するが, 部分的に指ナデの痕と指頭圧痕が残存
6290	〃	〃 石製品 石庖丁	11.8	4.3	0.8	69.5	-	-	ほぼ完存, 石材は千枚岩, 表面は研磨されるが, 亀裂とひび割れが各所にみられる。刃部長10.0cm, 幅0.4cm
6291	〃	〃 小型扁平片刃石斧	5.4	3.5	0.8	32.0	-	-	ほぼ完存, 石材は蛇紋岩, 全面を研磨, 刃部長3.4cm, 幅1.3cm
6292	〃	〃 石斧	11.6	5.1	1.6	138.9	-	-	ほぼ完存, 石材は千枚岩, 片面は研磨するが, 片面は剝離のまま, 刃部長4.6cm, 幅0.8cm
6293	〃	〃 磨製石鏃	(4.1)	1.5	0.3	(1.8)	-	-	ほぼ完存, 石材は粘板岩, 扁平で, 基部が舌状に延びる。
6294	〃	〃 石鏃	(3.8)	2.0	0.4	(2.4)	-	-	先端部が欠損, 石材はサヌカイト, 平基の石鏃
6295	〃	〃 投弾	3.6	2.6	1.9	28.7	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑
6296	〃	〃 〃	4.1	3.2	2.0	36.7	-	-	〃
6297	〃	〃 〃	4.2	3.1	2.0	35.6	-	-	〃
6298	〃	〃 砥石	22.5	(15.6)	9.8	(4.0kg)	-	-	約3/4が残存, 石材は中粒砂岩, 4ヵ所に使用面が残存
6299	ST-6028	弥生土器 壺	-	(3.9)	-	-	橙色 にぶい橙色	良	頸部の細片, 器面はナデ調整で, 外面に楕円形浮文とクシ描直線文
6300	〃	〃 甕	-	(3.6)	-	-	にぶい褐色 にぶい黄褐色	やや 不良	口縁部の細片, 器面は摩耗するが, 外面に指頭圧痕, 内外面にハケ目が残存

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6301	ST-6028	弥生土器 甕	16.2	(4.1)	-	-	黒褐色 暗褐色	やや不良	口頸部の破片、口縁部内面はヨコナデ調整、頸部内外面はハケ調整、口縁部外面にヘラ状工具による刻目
6302	〃	〃	13.2	(6.2)	(15.6)	-	橙色 〃	〃	口縁部から上胴部の約1/3が残存、口頸部はヨコナデ調整、胴部内面はナデ調整、外面は摩耗
6303	〃	〃	14.0	(12.3)	16.4	-	にぶい赤褐色 〃	良	口縁部から中胴部の破片、口頸部はヨコナデ調整、胴部内面はヘラ削りの後にハケ調整を肩部に施す。
6304	〃	〃	-	(3.3)	-	4.3	にぶい黄褐色 橙色	〃	底部約1/4が残存、内面はナデ調整、他は摩耗
6305	〃	〃	-	(4.7)	-	7.1	にぶい橙色 黒褐色	良好	底部約1/3が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面はタタキの後にハケ調整で煤が付着、外底面は未調整
6306	〃	〃 壺	-	(3.8)	-	7.6	にぶい橙色 橙色	〃	底部約1/2が残存、器面はナデ調整
6307	ST-6030	〃 甕	11.2	(6.4)	-	-	にぶい褐色 明赤褐色	良	口頸部約1/3が残存、口縁部はヨコナデ調整、頸部内面は指ナデとナデ調整、外面はナデ調整
6308	〃	〃	12.7	(15.8)	19.4	-	橙色 にぶい橙色	良好	中胴部以上約1/3が残存、口縁部はヨコナデ調整、頸部内外面はナデ調整、胴部内面は指ナデ
6309	〃	〃	19.8	(8.0)	-	-	橙色 〃	不良	口頸部約1/5が残存、器面は摩耗、口縁部外面は指押え、口縁部は粘土帯を貼付で、凹線状をなす。
6310	〃	〃	12.1	(4.5)	-	-	にぶい赤褐色 にぶい褐色	良好	口縁部から上胴部の破片、胴部内面はナデ調整、他はヨコナデ調整で、口縁部を拡張し、擬凹線文を施文
6311	〃	〃	-	(7.4)	-	-	にぶい橙色 明褐色	〃	胴部の破片、器面はナデ調整で、外面に微隆起突帯を作り出し、クシ描直線文を施文した上で、楕円形浮文を貼付
6312	〃	〃	-	(4.2)	-	7.0	橙色 〃	良	底部約1/4が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面はナデ調整、外底面はヘラ削り
6313	〃	〃 壺	-	(4.6)	-	8.4	褐色 にぶい橙色	良好	底部約1/2が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面は指ナデとヘラ磨き、外底面は未調整
6314	〃	石製品 石鏃	1.8	1.3	0.2	0.5	-	-	完存、石材はサヌカイト、平基の石鏃
6315	〃	〃	(1.9)	(1.5)	0.3	(0.7)	-	-	ほぼ完存、石材はサヌカイト、平基の石鏃
6316	〃	〃 投弾	2.9	3.1	2.2	28.1	-	-	完存、石材は粗粒砂岩、表面は平滑
6317	〃	〃 叩石	7.2	1.9	1.2	27.8	-	-	完存、石材は細粒砂岩、表面は平滑で、擦痕が各所に残存し、先端が摩滅する。
6318	ST-6031	弥生土器 壺	24.0	(5.2)	-	-	橙色 〃	良	口頸部約1/5が残存、口縁部内面はヨコナデ調整、頸部内外面はハケ調整、口縁部に斜格子文と棒状浮文
6319	〃	〃 甕	-	(2.0)	-	-	にぶい赤褐色 〃	良好	口縁部の破片、外面はヨコナデ調整の後にヘラ磨き、口縁部下端にヘラ状工具による刻目
6320	〃	〃	-	(3.7)	-	5.1	橙色 〃	良	底部約1/2が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面はハケ調整、外底面はナデ調整
6321	〃	〃	-	(3.6)	-	5.5	褐色 にぶい赤褐色	良好	底部が残存、内面はナデ調整、外面はヘラナデとナデ調整、外底面はナデ調整
6322	〃	〃 ミニチュア土器	5.6	4.4	-	-	黒色 にぶい橙色	〃	ほぼ完存、内面はナデ調整、外面は指押えとナデ調整
6323	〃	土製品 紡錘車	2.9	2.8	1.0	(6.8)	にぶい橙色 にぶい黄褐色	良	ほぼ完存、土器の転用、未成品、表面はナデ調整で、円孔は未貫通
6324	〃	石製品 小型蛤刃石斧	9.2	4.9	1.3	(115.1)	-	-	ほぼ完存、石材は結晶片岩、側面と基部以外を研磨、側面に抉り、刃部長4.8cm、幅1.4cm
6325	〃	〃 投弾	3.4	2.7	2.0	26.1	-	-	完存、石材は粗粒砂岩、表面は平滑

VI区 遺物観察表 14 (6326～6350)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
6326	ST-6031	石製品 投弾	5.5	4.5	3.9	123.9	-	-	ほぼ完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑
6327	〃	〃 叩石	12.0	4.0	1.5	(123.0)	-	-	ほぼ完存, 石材は細粒砂岩, 表面は比較的平滑で, 側面を中心に擦痕と敲打痕, 中央部にも弱い敲打痕が残存
6328	ST-6033	弥生土器 甕	20.0	(5.3)	-	-	にぶい橙色 橙色	良	口頸部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整, 口縁部外面に指押え
6329	〃	〃 〃	18.7	(20.5)	22.2	-	にぶい橙色 〃	良好	口縁部約1/4と胴部約1/3が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面は指押えとナデ調整, 外面はヘラ磨き
6330	〃	〃 〃	22.9	(11.2)	(32.9)	-	〃 〃	〃	口縁部から上胴部約1/5が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 内面は指押えとナデ調整, 外面はヘラ磨き
6331	〃	〃 〃	-	(6.0)	-	6.1	灰黄褐色 褐灰色	良	底部約2/3が残存, 内面はナデ調整, 外面はヘラ磨き, 外底面はナデ調整
6332	〃	石製品 石鏃	(1.8)	(1.7)	0.4	(0.9)	-	-	茎の一方が欠損, 石材はサヌカイト, 平基の石鏃
6333	〃	〃 磨石	8.4	6.1	3.1	230.4	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 側面に弱い敲打痕が残存
6334	ST-6034	弥生土器 壺	-	(6.7)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良好	頸部から上胴部の破片, 内面はナデ調整, 外面はヘラ磨きで, 頸部下端に微隆起突帯を貼付
6335	〃	〃 鉢	15.9	(6.0)	-	-	にぶい橙色 〃	やや不良	口縁部から体部の破片, 口縁部内面はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 他は摩耗, 口唇部に煤が付着
6336	〃	〃 〃	-	(2.6)	-	3.9	にぶい橙色 にぶい褐色	良	底部約1/3が残存, 内面は指押えとナデ調整, 高台外面は指押え, 内面はナデ調整, 外面に煤が付着
6337	〃	石製品 石鏃	3.3	1.4	0.4	1.5	-	-	完存, 石材はサヌカイト, 凹基の石鏃
6338	〃	〃 投弾	3.9	3.0	2.1	30.5	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑
6339	〃	〃 磨石	13.8	6.2	3.0	435.0	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕が残存し, 敲打痕が一部にみられる。
6340	〃	〃 〃	14.1	12.2	3.1	888.8	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 擦痕が各所に残存
6341	ST-6035	弥生土器 甕	14.8	(3.1)	-	-	にぶい橙色 〃	良好	口頸部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はヘラ削り, 口縁端部に擬凹線文を施文
6342	〃	〃 〃	-	(2.8)	-	5.9	灰色 にぶい褐色	不良	底部約1/2が残存, 器面は摩耗
6343	〃	〃 蓋	-	(3.2)	-	-	にぶい褐色 〃	良	つまみが残存, 内面はナデ調整, 外面は摩耗するが, 指頭圧痕が残存
6344	〃	石製品 磨石	8.1	7.0	2.0	(167.3)	-	-	ほぼ完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑で, 側面を中心に擦痕が目立つ。
6345	〃	〃 〃	8.8	7.1	2.7	(235.0)	-	-	ほぼ完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 両面に擦痕が残存
6346	〃	〃 〃	10.7	5.4	2.9	236.2	-	-	完存, 石材は千枚岩, 表面は平滑であるが, 剝離する部分もみられる。片面に擦痕が残存
6347	ST-6036	弥生土器 甕	14.2	(3.6)	(13.8)	-	にぶい黄橙色 〃	良好	口頸部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内外面はナデ調整
6348	〃	〃 〃	-	(3.2)	-	8.9	褐灰色 にぶい橙色	良	底部約1/5が残存, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整とナデ調整, 外底面は摩耗
6349	〃	〃 高杯	22.0	(5.5)	-	-	にぶい褐色 橙色	〃	杯部約1/5が残存, 口唇部から口縁部外面はヨコナデ調整, 内面はナデ調整の後にヘラ磨き
6350	〃	土製品 紡錘車	4.2	3.8	0.6	12.1	灰色 〃	〃	ほぼ完存, 土器の転用, 表面に指頭圧痕の痕跡が残存, 円孔を両面から穿穴

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6351	ST-6036	石製品 石庖丁	11.3	5.2	(1.2)	(94.5)	-	-	ほぼ完存, 石材は千枚岩, 部分的に研磨するが, 未調整で剥離面が残存, 両端を抉る。刃部長10.4cm
6352	〃	〃 石鏃	2.7	1.8	0.3	1.1	-	-	完存, 石材はサヌカイト, 凹基の石鏃, 表面は風化が進む。
6353	〃	〃 叩石	15.5	12.0	3.5	(1.0kg)	-	-	一部欠損, 石材は中粒砂岩, 中央部に弱い敲打痕, 縁辺と側面に擦痕が残存
6354	ST-6037	弥生土器 壺	10.4	(6.0)	-	-	灰黄褐色 〃	良好	口頸部約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面はナデ調整
6355	〃	〃 〃	-	(1.8)	-	-	にぶい褐色 〃	良	口縁部の細片, 器面はヨコナデ調整, 端部に棒状工具で刻目
6356	〃	〃 〃	11.6	(17.0)	25.6	-	にぶい褐色 にぶい橙色	〃	口縁部から中胴部約1/3が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面は中胴部以下にヘラ削り
6357	〃	〃 〃	-	(9.9)	-	-	にぶい橙色 明赤褐色	〃	頸部から上胴部約1/4が残存, 頸部内面は摩耗, 胴部内面はヨコ方向の指ナデ, 外面はハケ調整
6358	〃	〃 甕	15.0	(3.5)	-	-	にぶい橙色 にぶい褐色	良好	口頸部約1/3が残存, 口唇部から口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整, 外面はヨコナデ調整
6359	〃	〃 〃	13.2	(4.9)	(11.2)	-	にぶい褐色 〃	良	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内外面はナデ調整, 口縁端部に凹線文を施文
6360	〃	〃 〃	14.8	(1.7)	-	-	〃 〃	〃	口頸部の破片, 器面はヨコナデ調整, 口縁端部に凹線文を施文, 器面には煤が付着
6361	〃	〃 〃	14.8	(8.8)	14.5	-	〃 〃	〃	口縁部から上胴部約1/3が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内外面はナデ調整, 口縁端部に凹線文を施文
6362	〃	〃 〃	19.5	(6.8)	19.1	-	にぶい褐色 〃	やや不良	口縁部から上胴部約1/6が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面はハケ調整
6363	〃	〃 〃	10.7	(3.9)	(11.4)	-	にぶい黄褐色 〃	不良	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はヘラ削り, 外面は摩耗, 口縁端部に擬凹線文
6364	〃	〃 〃	17.8	(4.9)	-	-	にぶい褐色 褐色	良	口縁部から上胴部の破片, 口頸部と肩部外面はヨコナデ調整, 胴部内面はヘラ削り, 外面はナデ調整
6365	〃	〃 〃	21.2	(1.5)	-	-	にぶい黄褐色 灰褐色	良好	口縁部の破片, 器面はヨコナデ調整, 口縁端部に擬凹線文, 外面には煤が付着
6366	〃	〃 〃	-	(3.2)	-	9.0	にぶい褐色 〃	良	底部約1/3が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面は被熱で変色し, 表面は剥離, 摩耗する。
6367	〃	〃 鉢	21.2	(4.4)	-	-	褐灰色 黒色	良好	口縁部の破片, 器面はヨコナデ調整
6368	〃	〃 高杯	-	(4.2)	-	-	にぶい黄褐色 〃	良	口縁部から体部の細片, 口唇部から口縁部内面はヨコナデ調整, 体部内面と外面はナデ調整
6369	〃	〃 〃	26.8	(5.9)	-	-	〃 〃	〃	杯部約1/4が残存, 口縁部から口縁部外面はヨコナデ調整, 内面は摩耗, 体部外面はナデ調整
6370	〃	〃 〃	-	(3.1)	-	10.1	にぶい褐色 〃	〃	裾部の破片, 内面はヘラ削り, 裾部から外面はヨコナデ調整, 裾端部に凹線文を施文
6371	〃	〃 〃	-	(10.7)	-	11.9	にぶい褐色 浅黄褐色	〃	脚部約1/2が残存, 内面はナデ調整, 裾部はヨコナデ調整, 外面は摩耗
6372	〃	石製品 叩石	9.6	8.5	2.3	303.6	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は比較的平滑で, 中央部と側面に弱い敲打痕が残存
6373	ST-6038	弥生土器 甕	-	(5.4)	-	6.0	黒褐色 褐色	良	底部の破片, 内面はヘラ削り, 外面と外底面はナデ調整
6374	〃	〃 ミニチュア土器	-	(4.2)	7.7	4.3	黒褐色 褐色	良好	中胴部以下約1/4が残存, 内面は指押え, 外面はナデ調整
6375	〃	〃 〃	8.2	9.1	7.2	3.9	灰褐色 にぶい黄褐色	良	約1/2が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後にナデ調整

VI区 遺物観察表 16 (6376～6400)

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6376	ST-6040	弥生土器 壺	-	(6.4)	-	-	灰褐色 橙色	不良	口縁部の破片, 口唇部から内面はヨコナデ調整, 他は摩耗, 口縁端部外面に斜格子文の上に棒状浮文を貼付
6377	〃	〃 手づくね土器	2.4	3.4	3.4	2.5	にぶい黄褐色 〃	良	約1/2が残存, 内面はナデ調整, 外面は指押えとナデ調整
6378	ST-6042	土師器 壺	22.8	(8.6)	-	-	灰褐色 にぶい褐色	〃	口頸部の大半が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面は摩耗
6379	〃	〃 〃	-	(34.1)	27.3	-	にぶい橙色 〃	〃	頸部以下の多くが残存, 頸部内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後にヨコナデ調整, 胴部内外面はハケ調整
6380	〃	弥生土器 高杯	-	(7.2)	-	-	明赤褐色 〃	不良	脚柱部が残存, 器面は摩耗
6381	〃	土製品 紡錘車	4.0	3.8	0.6	9.6	にぶい橙色 〃	良	ほぼ完存, 土器の転用, 未成品, 上面はハケ調整, 下面はナデ調整, 円孔は未穿孔
6382	〃	石製品 叩石	12.5	10.0	3.7	664.6	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 両面中央部と側面に敲打痕, 縁辺を中心に擦痕が残存
6383	〃	〃 磨石	7.3	5.0	3.1	156.0	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕が残存
6384	〃	〃 〃	13.4	7.9	2.7	438.4	-	-	〃
6385	ST-6043	〃 叩石	19.8	11.8	5.4	(1.9kg)	-	-	ほぼ完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 両面に弱い敲打痕と縁辺を中心に擦痕が残存
6386	ST-6044	弥生土器 壺	16.7	(11.4)	(19.8)	-	灰黄褐色 〃	良好	口頸部約3/5と肩部の一部が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はヘラナデ, 胴部内面は指押えとナデ調整
6387	〃	〃 〃	-	(7.9)	(19.4)	-	褐灰色 灰黄褐色	良	上胴部約1/4が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面はナデ調整の後に微隆起突帯, 棒状浮文を施文
6388	〃	〃 〃	-	(7.5)	(21.1)	-	灰褐色 〃	〃	上胴部約1/3が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面はハケ調整の後に竹管文, 微隆起突帯, 棒状浮文を施文
6389	〃	〃 甕	16.6	(7.0)	(18.2)	-	にぶい褐色 橙色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面は摩耗, 口縁端部に凹線文
6390	〃	〃 〃	-	(5.1)	-	5.0	にぶい黄褐色 にぶい橙色	〃	底部が残存, 器面はナデ調整
6391	ST-6047	〃 高杯	(16.6)	(3.8)	-	-	にぶい褐色 にぶい橙色	〃	口頸部の破片, 口唇部と口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ調整, 外面は摩耗, 口縁端部に1条の凹線
6392	〃	〃 甕	-	(7.0)	-	11.0	にぶい黄褐色 にぶい橙色	〃	底部約1/3が残存, 内面は摩耗するが指頭圧痕が残存, 外面は被熱で変色し, 摩耗と剝離
6393	〃	石製品 叩石	15.6	7.7	4.4	(632.4)	-	-	ほぼ完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 端部に摩滅痕, 側面と縁辺を中心に擦痕が残存
6394	〃	〃 砥石	(5.4)	4.5	2.0	(76.7)	-	-	約1/3が残存, 石材は細粒砂岩, 4面に使用面が残存
6395	ST-6048	〃 磨石	10.8	8.4	2.9	399.5	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕が残存
6396	ST-6051	弥生土器 甕	-	(1.7)	-	-	にぶい黄褐色 〃	良好	口縁部の細片, 口唇部から内面はヨコナデ調整, 外面はハケ調整で2条の微隆起突帯を作り出す。
6397	〃	〃 壺	-	(3.4)	-	11.6	にぶい橙色 〃	〃	底部の破片, 内面と外面はナデ調整, 外底面はヘラナデとナデ調整
6398	〃	〃 高杯	-	(2.0)	-	-	明赤褐色 〃	〃	口縁部の細片, 器面はヨコナデ調整, 内外面に朱が付着, 外面下端に1条の凹線
6399	〃	〃 〃	18.0	(3.2)	-	-	にぶい褐色 明赤褐色	〃	口縁部から体部の破片, 器面はヨコナデ調整で, 外面にヘラ磨きを加える。口縁部外面に擬凹線文
6400	ST-6052	〃 壺	25.8	(8.1)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄褐色	〃	口頸部約1/6が残存, 口縁端部に凹線文, 口縁部内面にハケ状工具による斜格子文と円孔を穿孔

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6401	ST-6052	弥生土器 甕	-	(4.0)	-	-	にぶい褐色 にぶい黄橙色	良好	口縁部の細片, 口唇部はヨコナデ調整, 口縁部はナデ調整で, 外面にヨコナデ調整で微隆起突帯を作り出す。
6402	〃	〃 〃	-	(4.8)	-	7.2	にぶい黄橙色 〃	〃	底部約1/2が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面はヘラナデとナデ調整, 外底面はナデ調整
6403	〃	〃 高杯	19.9	(3.2)	-	-	明赤褐色 〃	〃	口縁部から体部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 体部内面は放射線状にヘラ磨き, 外面にもヘラ磨き
6404	〃	石製品 磨石	11.4	10.1	4.7	742.9	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕が残存
6405	ST-6054	弥生土器 甕	-	(3.2)	-	5.1	黒色 褐灰色	良好	底部約2/3が残存, 器面はナデ調整で, 外面下端に指押え
6406	〃	〃 〃	-	(2.5)	-	5.7	にぶい橙色 にぶい褐色	〃	底部約1/4が残存, 内面と外面はナデ調整, 外底面はヘラ削りとナデ調整
6407	〃	〃 〃	-	(7.3)	-	8.4	にぶい黄橙色 〃	〃	底部約1/3が残存, 内面はナデ調整, 外面はヘラ磨き, 外底面は未調整
6408	〃	〃 〃	-	(8.6)	(18.8)	7.2	にぶい黄褐色 灰黄褐色	良	底部がほぼ完存, 内面は指ナデとナデ調整で焦げ目が付着, 外面はヘラナデの後にヘラ磨き, 外底面は未調整
6409	〃	石製品 石庖丁	(4.2)	(3.7)	0.7	(16.9)	-	-	約1/3が残存, 石材は赤色頁岩, 全面を研磨し, 紐孔1個と穿穴途中の穴1個が残存
6410	ST-6055	弥生土器 甕	12.5	(7.7)	(10.8)	-	にぶい黄褐色 にぶい褐色	良	口縁部から上胴部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 頸部内面は指押え, 胴部内面はナデ調整, 他は摩耗
6411	〃	〃 〃	16.0	(7.7)	(15.7)	-	橙色 にぶい褐色	良好	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はヘラナデ調整, 胴部内面は指押えとナデ調整
6412	〃	〃 〃	20.0	(5.8)	-	-	にぶい橙色 にぶい褐色	良	口頸部約1/2が残存, 内面と頸部外面はハケ調整で, 口縁部にヨコナデ調整を加える。口縁部下端に刻目
6413	〃	〃 〃	22.0	(4.0)	-	-	にぶい褐色 にぶい橙色	〃	口頸部の破片, 口唇部から口縁部内面はヨコナデ調整, 頸部内面はヘラナデ, 外面はハケ調整
6414	〃	〃 〃	-	(4.3)	-	5.0	明赤褐色 赤褐色	〃	底部の大半が残存, 器面はナデ調整
6415	〃	〃 〃	-	(4.2)	-	6.0	にぶい黄褐色 にぶい橙色	〃	底部約3/5が残存, 器面はナデ調整で, 外面に煤が付着
6416	〃	〃 壺	-	(4.7)	-	6.9	にぶい橙色 橙色	良好	底部約1/2が残存, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整の後にヘラ磨き, 外底面は未調整
6417	〃	〃 甕	-	(2.9)	-	8.6	橙色 にぶい橙色	良	底部1/2弱が残存, 器面はナデ調整
6418	〃	〃 壺	-	(3.2)	-	7.1	にぶい橙色 黒褐色	良好	底部約1/4が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面はヘラ磨きで, 下端にヘラナデを加える。外底面は未調整
6419	〃	〃 甕	-	(3.0)	-	9.5	灰黄褐色 にぶい褐色	〃	底部約1/4が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面と外底面はナデ調整で, 外面には煤が付着
6420	〃	石製品 磨石	7.2	5.3	2.7	153.4	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕が残存
6421	ST-6056	弥生土器 壺	17.0	(9.8)	-	-	橙色 〃	不良	口頸部約1/2が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 他は摩耗, 口縁部下端に刻目, 口縁部外面に指頭圧痕が残存
6422	〃	〃 甕	19.2	(6.3)	-	-	灰褐色 〃	良	口頸部約1/3が残存, 器面は摩耗, 口縁部下端にヘラ状工具による刻目, 口縁部外面に微隆起突帯
6423	〃	〃 〃	22.8	(4.4)	-	-	橙色 にぶい赤褐色	〃	口頸部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 頸部外面はナデ調整, 内面は剝離, 口縁部外面は指押え
6424	〃	〃 〃	-	(3.5)	-	5.7	暗灰色 にぶい褐色	良好	底部約1/3が残存, 内面は剝離するが, 指頭圧痕が残存, 外面はヘラ磨き, 外底面は未調整
6425	〃	〃 〃	-	(6.0)	-	6.8	明赤褐色 赤褐色	やや不良	底部約1/4が残存, 内面はナデ調整, 外面は摩耗と剝離

VI区 遺物観察表18 (6426～6450)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
6426	ST-6056	石製品 砥石	(18.8)	19.8	(8.9)	(4.2kg)	-	-	約2/3が残存, 石材は中粒砂岩, 両面に敲打痕, 砥石として使用した面が2ヵ所残存
6427	ST-6057	弥生土器 甕	13.2	16.7	14.4	4.2	にぶい褐色 〃	やや 不良	下胴部の一部が欠損するのみ, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はハケ調整, 外面はタタキ
6428	〃	〃 〃	15.0	(20.7)	19.9	-	〃 〃	良好	底部以外約1/2弱が残存, 内面はハケ調整の後に, 口縁部にヨコナデ調整, 下胴部にヘラ削り, 上に指ナデ
6429	〃	石製品 砥石	(12.0)	4.9	3.7	(307.1)	-	-	約4/5が残存, 石材は泥岩, 4面に使用痕が残存
6430	SB-6012	弥生土器 甕	12.5	(3.0)	-	-	明黄褐色 にぶい橙色	やや 不良	口頸部の破片, 内面はハケ調整で, 口唇部と口縁部内面にヨコナデ調整, 口縁部外面は指押え
6431	SB-6018	〃 〃	16.3	(2.7)	-	-	黒色 〃	良	口頸部の破片, 口唇部から口縁部内面はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ調整, 外面はヨコナデ調整
6432	SK-6001	〃 無頸壺	8.7	(9.5)	14.5	-	にぶい黄橙色 〃	やや 不良	口頸部の一部と中胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部内面は指押えとナデ調整及びヘラ削り
6433	〃	〃 壺	18.9	(5.7)	-	-	橙色 〃	不良	口頸部の破片, 器面は摩耗, 口縁部外面は指押え
6434	〃	〃 甕	-	(1.9)	-	-	にぶい黄褐色 褐色	やや 不良	口縁部の細片, 器面は摩耗, 口縁部下端にヘラ状工具による刻目, 口縁部外面は指押え
6435	〃	石製品 太型蛤刃石斧	17.8	7.5	4.4	(1.2kg)	-	-	ほぼ完存, 石材は緑色岩, 刃部のみ丁寧に研磨, 側面は簡単な研磨, 両側面は成形のみ
6436	〃	〃 叩石	13.2	5.2	3.0	315.5	-	-	完存, 石材はサヌカイト, 表面は比較的平滑で, 両端に敲打痕と摩滅痕が残存
6437	〃	〃 磨石	9.8	8.5	3.3	407.7	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕が残存
6438	SK-6002	〃 〃	7.7	6.9	2.9	(212.0)	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 平滑な面もあるが, 大半に剥離がみられる。
6439	SK-6003	弥生土器 壺	-	(3.0)	-	-	明赤褐色 灰黄褐色	良	口縁部の細片, 口唇部から内面はヨコナデ調整, 口縁部外面はハケ調整の後に楕円形浮文, 微隆起突帯
6440	〃	〃 〃	13.8	(3.7)	-	-	にぶい黄褐色 〃	〃	口頸部約1/5が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整, 口縁部部に擬凹線文
6441	〃	〃 甕	-	(6.3)	-	5.2	褐灰色 橙色	〃	底部約2/3が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面と外底面はナデ調整で, 被熱で変色し, 煤も付着
6442	SK-6004	〃 〃	-	(4.2)	-	5.6	にぶい橙色 橙色	やや 不良	底部約1/4が残存, 器面はナデ調整
6443	〃	〃 〃	-	(4.5)	-	5.1	にぶい黄褐色 にぶい橙色	良	底部が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面は指押えの後にハケ調整, 外底面はナデ調整
6444	SK-6007	〃 壺	-	(1.7)	-	-	にぶい黄褐色 〃	〃	口縁部の細片, 器面は摩耗
6445	〃	〃 〃	11.8	(8.7)	(16.9)	-	橙色 〃	やや 不良	口縁部から上胴部の約1/4が残存, 器面は摩耗するが, 胴部内面に指頭圧痕が残存, 肩部外面に刺突文
6446	〃	〃 甕	-	(1.4)	-	-	褐灰色 〃	良好	口縁部の細片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面には微隆起突帯を作り出す。
6447	SK-6011	〃 壺	-	(1.8)	-	-	橙色 にぶい黄褐色	不良	口縁部の細片, 器面は摩耗, 端部に擬凹線文の上から棒状浮文を貼付
6448	〃	〃 甕	13.5	(7.3)	(15.4)	-	にぶい橙色 〃	やや 不良	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面はヘラ磨き
6449	SK-6014	〃 壺	16.7	(7.1)	-	-	灰黄褐色 〃	不良	口縁部から上胴部の破片, 器面は摩耗, 頸部下端に3条の微隆起突帯を貼付
6450	〃	〃 〃	-	(5.2)	(22.0)	-	にぶい黄褐色 橙色	良	上胴部の破片, 内面は指押えとナデ調整, 外面はナデ調整とハケ調整で, 下半にヘラ磨きを加える。

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6451	SK-6014	弥生土器 甕	-	(2.3)	-	-	浅黄橙色 にぶい黄橙色	やや 不良	口縁部の細片, 内外面はハケ調整で, ヨコナデ調整を加える。口縁外面は指押え
6452	〃	〃 〃	-	(3.8)	-	-	にぶい橙色 灰褐色	良	口頸部の細片, 口唇部はヨコナデ調整, 内外面はナデ調整, 口縁部外面に指頭圧痕が残存
6453	〃	〃 壺	-	(3.2)	-	5.0	橙色 にぶい橙色	良好	底部の大半が残存, 内面と外底面はナデ調整, 外面は剝離
6454	〃	〃 高杯	-	(11.4)	-	12.3	にぶい黄橙色 〃	良	脚台部がほぼ完存, 内面はヘラ削りとナデ調整, 裾部はヨコナデ調整, 外面はナデ調整, 端部に擬凹線文
6455	〃	石製品 打製石鎌	(11.2)	9.5	1.6	(228.0)	-	-	ほぼ完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剝離面が残存
6456	SK-6015	弥生土器 甕	23.5	(2.5)	-	-	褐灰色 〃	良好	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整, 口縁部外面に刻目と微隆起突帯
6457	〃	〃 〃	-	(2.8)	-	-	にぶい褐色 〃	良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整, 外面はナデ調整, 口縁部下端に刻目
6458	〃	〃 〃	21.2	(4.6)	-	-	橙色 赤褐色	不良	口頸部約1/4が残存, 器面は摩耗
6459	〃	〃 〃	10.4	(3.0)	-	-	にぶい橙色 灰褐色	良	口頸部の破片, 口唇部から口縁部外面はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面にハケ調整
6460	SK-6016	〃 〃	12.8	(4.5)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部外面はナデ調整, 内面は摩耗
6461	〃	〃 〃	-	(4.4)	-	6.7	黒色 にぶい橙色	良好	底部が残存, 器面はナデ調整
6462	〃	〃 〃	-	(4.9)	(12.1)	4.9	にぶい橙色 〃	良	〃
6463	〃	石製品 叩石	13.4	8.5	3.0	530.4	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 端部に強い敲打痕が残存
6464	〃	〃 〃	13.5	7.8	3.3	640.9	-	-	完存, 石材は緑色片岩, 中央部に弱い敲打痕, 側面に比較的強い敲打痕が残存
6465	SK-6017	弥生土器 壺	21.6	(8.6)	-	-	橙色 〃	良	口頸部約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整, 口縁部外面に指頭圧痕が残存
6466	〃	〃 甕	15.9	(2.1)	-	-	灰褐色 〃	〃	口縁部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整, 外面はナデ調整で, 煤が付着
6467	〃	〃 〃	-	(3.7)	-	-	橙色 〃	〃	口縁部の細片, 口唇部を中心にヨコナデ調整, 口縁部下端に刻目, 口縁部外面に指頭圧痕が残存
6468	〃	〃 〃	16.7	(4.6)	-	-	にぶい橙色 にぶい褐色	〃	口頸部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 内外面はナデ調整, 粘土帯は欠落
6469	〃	〃 ミニチュア土器	-	(2.5)	-	1.2	にぶい橙色 〃	〃	底部が残存, 内面はヘラナデとナデ調整, 外面は指押えとナデ調整
6470	〃	石製品 打製石鎌	9.7	6.2	1.8	(119.9)	-	-	ほぼ完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剝離面が残存
6471	〃	〃 磨石	11.4	9.1	2.8	444.0	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕が残存
6472	SK-6019	弥生土器 甕	16.0	(5.8)	(16.0)	-	にぶい橙色 にぶい褐色	良好	口縁部から上胴部の破片, 口縁部内面から肩部外面にヨコナデ調整, 内面はナデ調整の後にヘラ磨き
6473	〃	〃 蓋	7.3	12.4	-	10.1	灰黄褐色 〃	良	一部欠損, 内面はハケ調整, 指ナデ, ナデ調整, 外面はヘラナデとナデ調整
6474	SK-6020	〃 壺	-	(11.5)	17.4	-	明赤褐色 にぶい赤褐色	〃	胴部上半約1/2残存, 内面は部分的にヘラ削りし, ナデ調整を加え, 外面はハケ調整の後にヘラ磨き
6475	〃	〃 甕	18.0	(22.0)	18.0	-	にぶい褐色 〃	〃	口縁部の一部と下胴部が欠損, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内外面はナデ調整で, 外面には煤が付着

VI区 遺物観察表 20 (6476~6500)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
6476	SK-6020	弥生土器 甕	-	(4.3)	-	-	にぶい褐色 〃	良好	口頸部の細片, 口縁部と頸部外面はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ調整, 口縁部外面に微隆起突帯とハケ調整
6477	〃	〃 〃	20.2	(5.0)	-	-	にぶい赤褐色 〃	良	口頸部約 1/5 が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はヘラナデ, 口縁部外面に2条の微隆起突帯
6478	〃	〃 〃	-	(1.5)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口頸部の細片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整, 外面は煤が付着
6479	〃	〃 〃	23.9	(2.8)	-	-	橙色 〃	〃	口縁部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面は摩耗, 口縁部外面は指押えて, 煤が付着
6480	〃	〃 〃	-	(3.9)	-	-	にぶい橙色 にぶい褐色	〃	口縁部の細片, 内面は摩耗, 外面はヨコナデ調整, 口縁端部外面にヘラ状工具による刻目
6481	〃	〃 〃	-	(5.4)	-	5.9	黒褐色 にぶい赤褐色	〃	底部の破片, ナデ調整, 外面はハケ調整の後にヘラ磨き, 外底面は未調整
6482	〃	〃 〃	-	(10.8)	(21.7)	8.8	にぶい橙色 〃	〃	底部が残存, 内面は指ナデとナデ調整で, 焦げ目が付着, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整
6483	〃	〃 蓋	7.7	9.8	-	-	明赤褐色 〃	〃	口縁部約 2/3 が欠損, 口縁部はヨコナデ調整, 天井部はナデ調整, 外面はヘラナデとナデ調整, 内面は指押え
6484	〃	〃 ミニチュア土器	8.7	9.6	7.7	4.2	にぶい橙色 〃	〃	ほぼ完存, 口唇部から口縁部内面はヨコナデ調整, 胴部内面は指押えとナデ調整, 他はナデ調整
6485	〃	〃 〃	9.2	12.9	10.9	5.2	橙色 〃	〃	ほぼ完存, 口頸部はヨコナデ調整, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はナデ調整, 外底面は指押えとナデ調整
6486	〃	〃 〃	10.5	15.0	10.8	4.7	〃 〃	良好	口縁部約 1/2 が欠損, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面は指ナデとナデ調整, 下胴部外面はヘラナデ
6487	〃	〃 〃	8.8	11.0	10.1	4.9	明赤褐色 橙色	良	ほぼ完存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面は指ナデと指押え, 外面はナデ調整
6488	〃	〃 〃	-	(7.3)	9.2	6.1	にぶい橙色 〃	〃	胴部以下約 1/2 が残存, 下胴部外面はヘラナデ, 他はナデ調整で, 部分的に指頭圧痕が残存
6489	〃	石製品 打製石鎌	4.8	4.2	0.8	18.7	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6490	〃	〃 〃	(6.5)	4.1	0.9	(24.4)	-	-	一部欠損, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6491	〃	〃 〃	7.5	4.5	0.9	32.6	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6492	〃	〃 〃	6.3	5.0	1.1	36.0	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6493	〃	〃 〃	(7.7)	5.1	1.1	(38.7)	-	-	一部欠損, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6494	〃	〃 〃	6.8	(4.3)	1.1	(39.5)	-	-	ほぼ完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6495	〃	〃 〃	7.8	6.4	0.9	(45.2)	-	-	ほぼ完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6496	〃	〃 〃	7.7	5.3	1.2	47.6	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6497	〃	〃 〃	7.8	4.8	1.1	48.6	-	-	〃
6498	〃	〃 〃	7.1	5.4	1.3	50.6	-	-	〃
6499	〃	〃 〃	7.1	5.1	1.5	53.8	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6500	〃	〃 〃	8.4	5.9	1.6	(67.7)	-	-	一部欠損, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6501	SK-6020	石製品 打製石鎌	9.5	6.0	1.0	68.5	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6502	〃	〃	7.6	7.6	1.3	68.6	-	-	〃
6503	〃	〃	7.2	5.9	1.7	73.2	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6504	〃	〃	8.9	5.4	(1.7)	(75.4)	-	-	ほぼ完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は剥離面と平滑な面となり, 縁辺を中心に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6505	〃	〃	8.8	5.3	2.2	82.2	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6506	〃	〃	7.2	7.1	1.6	89.8	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6507	〃	〃	8.8	6.4	1.5	93.8	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6508	〃	〃	(8.6)	6.6	1.6	(94.6)	-	-	ほぼ完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6509	〃	〃	10.9	(5.2)	2.0	(95.6)	-	-	ほぼ完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6510	〃	〃	7.7	7.6	1.8	98.4	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6511	〃	〃	8.8	7.2	1.6	101.9	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6512	〃	〃	8.6	7.3	1.7	102.8	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6513	〃	〃	9.5	6.2	1.4	104.2	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6514	〃	〃	9.6	6.8	1.4	106.1	-	-	〃
6515	〃	〃	9.6	6.7	1.6	114.0	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は剥離面と平滑な面となり, 刃部と縁辺を中心に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6516	〃	〃	8.9	6.4	1.7	114.6	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6517	〃	〃	10.1	7.5	1.2	118.1	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6518	〃	〃	9.5	6.2	1.4	104.2	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6519	〃	〃	10.3	6.2	1.3	(127.2)	-	-	ほぼ完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6520	〃	〃	8.9	6.4	1.9	127.6	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6521	〃	〃	(10.9)	7.9	1.8	(138.0)	-	-	一部欠損, 石材は細粒砂岩, 表面は二つに割れるが平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6522	〃	〃	10.6	7.4	1.8	152.1	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6523	〃	〃	(10.4)	7.1	1.4	(113.9)	-	-	約2/3が残存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6524	〃	〃	13.1	7.4	(1.8)	(164.8)	-	-	ほぼ完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存
6525	〃	〃	9.3	9.0	1.6	166.1	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剥離面が残存

VI区 遺物観察表22 (6526～6550)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
6526	SK-6020	石製品 打製石鎌	12.6	7.9	1.6	178.0	-	-	ほぼ完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剝離面が残存
6527	〃	〃	(10.9)	7.9	2.2	(198.8)	-	-	一部欠損, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剝離面が残存
6528	〃	〃	(10.9)	8.9	1.9	(203.2)	-	-	部分的に欠損, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剝離面が残存
6529	〃	〃	11.6	8.9	2.3	234.6	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は剝離面と平滑な面となり, 縁辺を中心に擦痕, 裏面は剝離面が残存
6530	〃	〃	11.6	8.7	1.9	235.3	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剝離面が残存
6531	〃	〃	(10.7)	8.4	2.1	(258.4)	-	-	ほぼ完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剝離面が残存
6532	〃	〃	11.7	8.2	2.3	274.3	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剝離面が残存
6533	〃	〃	12.4	9.4	2.0	293.7	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 両面とも剝離面が主となり, 僅かな平滑面には擦痕が残存
6534	〃	〃	14.7	7.7	2.0	313.4	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剝離面が残存
6535	〃	〃	14.8	8.4	2.7	332.0	-	-	〃
6536	〃	〃	15.3	8.8	2.7	392.4	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剝離面が残存
6537	〃	〃	12.5	10.7	3.1	(402.7)	-	-	ほぼ完存, 石材は中粒砂岩, 表面は剝離面と平滑な面となり, 縁辺を中心に擦痕, 裏面は剝離面が残存
6538	〃	〃	11.3	11.0	2.4	408.1	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剝離面が残存
6539	〃	〃	15.1	10.3	2.1	420.7	-	-	〃
6540	〃	〃	16.5	93.7	2.5	(500.0)	-	-	ほぼ完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 刃部を中心に縁辺部に擦痕, 裏面は剝離面が残存
6541	〃	〃	15.4	11.3	2.5	558.2	-	-	〃
6542	〃	叩石	9.4	4.7	3.7	245.2	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕, 端部に摩滅痕が残存
6543	SK-6023	弥生土器 壺	23.8	(5.0)	-	-	橙色 〃	良	口頸部約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整, 口縁端部下端にヘラ状工具による刻目
6544	〃	〃	-	(4.3)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい赤褐色	良好	頸部約1/5が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面はナデ調整で, 刻目突帯を貼付
6545	〃	〃	-	(22.6)	21.2	-	にぶい橙色 にぶい褐色	良	頸部から胴部の約1/3が残存, 頸部内面はハケ調整と指ナデ, 外面はヨコナデ調整, 胴部内面は指ナデとナデ調整
6546	〃	〃	-	(22.1)	27.2	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	胴部約1/3が残存, 内面は上半にハケ調整, 下半にナデ調整, 外面は上半にハケ調整, 下半にヘラ磨き
6547	〃	甕	14.7	(8.9)	(14.0)	-	にぶい黄橙色 〃	やや不良	口頸部約1/2, 胴部約1/5が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 他は摩耗, クシ描直線文・波状文と微隆起突帯
6548	〃	〃	-	(1.4)	-	-	にぶい褐色 にぶい橙色	良	口縁部の細片, 器面はヨコナデ調整, 口縁端部はヘラ状工具による刻目
6549	〃	〃	17.0	(4.4)	-	-	褐灰色 〃	良好	口頸部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整, 口縁部外面に刻目突帯と微隆起突帯
6550	〃	〃	16.8	(3.4)	-	-	にぶい橙色 灰褐色	〃	口頸部の破片, 口唇部と口縁部外面はヨコナデ調整, 他はナデ調整, 口縁部外面に指頭圧痕が残存, 煤が付着

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6551	SK-6023	弥生土器 甕	-	(1.8)	-	-	灰褐色 〃	良好	口縁部の細片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整
6552	〃	〃 〃	14.9	(10.4)	19.1	-	にぶい橙色 にぶい赤褐色	良	口縁部から中胴部約1/3が残存, 口頭部はヨコナデ調整, 胴部は肩部内面にナデ調整, 中胴部にハケ調整
6553	〃	〃 〃	20.2	(10.7)	(29.3)	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁部から上胴部約1/4が残存, 口頭部はヨコナデ調整, 胴部内外面はハケ調整, 口縁端部に擬凹線文
6554	〃	〃 〃	-	(5.2)	-	5.1	暗褐色 灰褐色	良好	底部の約1/4が残存, 内面はナデ調整, 外面はヘラナデ, 外底面はナデ調整
6555	〃	〃 〃	-	(2.2)	-	5.2	黒褐色 にぶい赤褐色	良	底部の破片, 内面は指ナデ, 外面は被熱で摩耗, 外底面はナデ調整
6556	〃	〃 〃	-	(1.3)	-	5.4	にぶい橙色 灰黄褐色	〃	底部約1/2が残存, 器面はナデ調整
6557	〃	〃 〃	-	(2.9)	-	6.2	灰黄褐色 にぶい褐色	良好	底部約1/4が残存, 内面はナデ調整, 外面はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整
6558	〃	〃 〃	-	(3.4)	-	6.7	にぶい橙色 にぶい褐色	良	底部が残存, 器面はナデ調整
6559	〃	〃 〃	-	(3.2)	-	10.9	黒褐色 にぶい褐色	〃	底部約1/5が残存, 内面と外底面はナデ調整, 外面はヘラナデ
6560	〃	〃 鉢	(13.4)	(3.4)	-	8.9	橙色 〃	〃	底部と体部の破片, 器面はナデ調整
6561	SK-6024	〃 壺	-	(15.0)	(28.6)	-	にぶい橙色 〃	〃	胴部上半約1/3が残存, 内面はナデ調整で, 粘土紐接合部に指頭圧痕が残存, 外面はハケ調整
6562	SK-6025	〃 〃	-	(3.7)	-	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色	良好	口縁部の細片, 口唇部から外面はヨコナデ調整, 内面は摩耗, 口縁端部に凹線文と下端に刻目
6563	〃	〃 甕	-	(2.1)	-	5.9	褐灰色 にぶい褐色	〃	底部約1/4が残存, 器面はナデ調整
6564	〃	石製品 磨石	10.8	5.4	2.5	206.2	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑
6565	SK-6026	弥生土器 甕	-	(8.0)	(12.9)	5.0	黄灰色 にぶい黄褐色	良	底部が残存, 内外面はハケ調整, 外面下端は指ナデ, 外底面はナデ調整
6566	SK-6027	〃 〃	14.4	(1.7)	-	-	にぶい黄褐色 灰黄褐色	〃	口縁部の破片, 内面は摩耗, 口唇部はヨコナデ調整, 外面にヘラ状工具による刻目と微隆起突帯
6567	〃	石製品 扁平両刃石斧	6.6	4.3	1.1	(61.0)	-	-	ほぼ完存, 石材は蛇紋岩, 部分的に欠損するも全面を研磨する。刃部長4.1cm, 幅0.6cm
6568	SK-6029	弥生土器 壺	14.9	(5.0)	-	-	灰黄褐色 〃	良好	口頭部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整
6569	〃	〃 〃	26.4	(2.7)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁部の破片, 内面は斜格子状にハケ調整, 口唇部から外面はヨコナデ調整で, 端部に凹線文を施文
6570	〃	〃 甕	-	(3.6)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口頭部の細片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整, 口縁部外面に刻目と微隆起突帯
6571	〃	〃 〃	-	(5.2)	-	-	にぶい橙色 褐色	〃	口頭部の破片, 口縁部から頸部外面はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ調整, 口縁部外面に刻目と微隆起突帯
6572	〃	〃 蓋	-	(3.3)	-	-	褐色 にぶい褐色	良	口縁部の細片, 口唇部から外面はヨコナデ調整, 内面はナデ調整
6573	SK-6031	〃 壺	23.5	(5.2)	-	-	橙色 〃	やや不良	口頭部の破片, 器面は摩耗, 口縁端部にヘラ状工具による斜格子文, 口縁部外面は指押え
6574	〃	〃 甕	18.3	(5.9)	-	-	にぶい赤褐色 〃	不良	口頭部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面は摩耗, 外面はハケ調整
6575	SK-6033	石製品 磨石	9.4	8.0	3.0	328.1	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 中央部に摩滅痕が残存

VI区 遺物観察表24 (6576~6600)

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6576	SK-6034	弥生土器 甕	15.1	(10.1)	(19.5)	-	にぶい褐色 灰褐色	やや不良	口縁部の一部と上胴部約1/3が残存, 内面はナデ調整, 外面は摩耗, 肩部外面に円形浮文, 微隆起突帯, 棒状浮文
6577	SK-6037	〃 〃	13.5	19.9	12.7	4.8	にぶい橙色 にぶい黄褐色	良	口縁部約1/3と胴部の一部が欠損する以外は残存, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部内面は指ナデとナデ調整
6578	〃	〃 〃	-	(2.2)	-	5.8	黒褐色 にぶい赤褐色	〃	底部が残存, 内面と外底面はナデ調整, 外面はヘラ磨き, 器面は被熱で変色し, 煤も付着
6579	〃	〃 〃	-	(5.1)	-	8.3	褐色 にぶい褐色	良好	底部の一部が残存, 内面と外面はナデ調整, 外底面は未調整
6580	SK-6038	〃 〃	17.0	(3.5)	-	-	にぶい黄褐色 〃	良	口頸部の破片, 器面は摩耗, 口縁部外面にヘラ状工具による刻目と貼付微隆起突帯
6581	〃	〃 〃	18.0	(5.8)	-	-	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	良好	口頸部約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面上半にヘラナデ, 下半にナデ調整, 外面はヨコナデ調整
6582	〃	〃 〃	18.2	(2.6)	-	-	にぶい褐色 〃	良	口縁部の破片, 器面はヨコナデ調整, 口縁部外面に指頭圧痕が残存
6583	〃	〃 〃	24.4	(3.7)	-	-	黒褐色 褐灰色	良好	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整, 口縁部下端にヘラ状工具による刻目
6584	〃	〃 〃	18.2	(8.6)	(20.7)	-	明赤褐色 〃	不良	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面は摩耗, 頸部外面はナデ調整, 胴部外面はハケ調整
6585	〃	〃 〃	-	(3.3)	-	-	にぶい黄褐色 〃	良	口頸部から上胴部の細片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内外面はナデ調整
6586	〃	〃 〃	-	(9.0)	14.6	-	橙色 にぶい赤褐色	〃	頸部から上胴部約1/3が残存, 頸部内面はハケ調整, 胴部内面は指ナデ, 指押えとナデ調整, 胴部外面はハケ調整
6587	〃	〃 〃	-	(2.8)	-	5.2	にぶい褐色 褐色	〃	底部約1/2が残存, 器面はナデ調整, 全般に被熱で変色
6588	〃	〃 〃	-	(3.6)	-	5.4	にぶい黄褐色 にぶい褐色	良好	底部が残存, 器面はナデ調整で, 外面下端に指頭圧痕が残存
6589	〃	〃 〃	-	(6.3)	-	5.8	黒色 にぶい褐色	〃	底部の破片, 内面は丁寧なナデ調整, 外面から外底面はナデ調整の後にヘラ磨き
6590	〃	〃 〃	-	(5.2)	-	7.4	褐灰色 灰褐色	良	底部の破片, 内面はヘラ削りとナデ調整, 外面はナデ調整, 外底面は未調整
6591	〃	〃 〃	-	(5.8)	-	8.4	黒褐色 明赤褐色	不良	底部約1/4が残存, 器面は摩耗するが, 内面に指頭圧痕が残存し, 煤が付着, 外面下端に指ナデの痕が残存
6592	〃	〃 壺	-	(5.1)	-	9.0	褐灰色 にぶい黄褐色	良	底部の破片, 内面はヘラ削りとナデ調整, 外面はヘラ磨き, 外底面はナデ調整
6593	〃	〃 〃	-	(6.2)	-	9.8	にぶい橙色 にぶい黄褐色	良好	底部約1/3が残存, 内面はナデ調整の後にヘラ磨き, 外面はハケ調整の後にヘラ磨き, 外底面は未調整
6594	〃	〃 蓋	12.0	8.0	-	-	にぶい赤褐色 にぶい橙色	良	天井部と口縁部約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面と天井部はナデ調整
6595	〃	石製品 叩石	12.4	7.2	4.6	587.1	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は比較的平滑で, 中央部と側面に比較的強い敲打痕, 各所に弱い敲打痕が残存
6596	〃	〃 磨石	7.5	6.1	1.6	115.6	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕, 側面に敲打痕が残存
6597	SK-6040	〃 石庖丁	9.9	4.8	1.0	(70.1)	-	-	ほぼ完存, 石材は粘板岩, 欠け部分以外は研磨する。両端に抉りを施す。刃部長9.2cm, 幅0.3cm
6598	SK-6041	弥生土器 壺	11.8	(31.2)	22.0	-	褐灰色 にぶい橙色	やや不良	底部以外約2/3が残存, 器面は剝離と摩耗, 口縁部の粘土帯は欠損
6599	〃	〃 〃	14.8	(17.4)	25.5	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色	良	口縁部から胴部約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整で, しぼり目が残存, 胴部外面はヘラ磨き
6600	〃	〃 〃	(20.2)	(10.5)	-	-	灰黄褐色 〃	〃	口頸部1/2弱が残存, 内面はハケ調整, 指押えとナデ調整, 外面はハケ調整で, 断面三角形の突帯を貼付

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6601	SK-6041	弥生土器 壺	-	(18.8)	23.0	-	黒褐色 にぶい橙色	良	中胴部約1/2が残存, 器面は一部にハケ目が残存するも 摩耗し, 剥離する。
6602	〃	〃 〃	22.5	(3.6)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良好	口頸部約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外 面はハケ調整, 口縁端部にハケ状工具による斜格子文
6603	〃	〃 〃	-	(31.9)	23.6	7.7	灰黄褐色 〃	良	胴部以下約1/2が残存, 内面はナデ調整の後にヘラ磨 き, 外面はほぼ全面にヘラ磨き
6604	〃	〃 甕	20.2	22.4	22.0	9.2	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	約1/2が残存, 口縁部から頸部外面はヨコナデ調整, 頸 部内面はハケ調整の後にナデ調整
6605	〃	〃 〃	25.0	(11.8)	(23.9)	-	にぶい褐色 にぶい黄褐色	やや 不良	口頸部約1/2と胴部の一部が残存, 胴部内面はナデ調 整, 他は摩耗と剥離, 胴部外面を中心に施文
6606	〃	〃 〃	18.0	(6.8)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄褐色	良	口頸部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面は剥離, 外 面はハケ調整
6607	〃	〃 〃	-	(10.5)	(16.6)	5.8	黒色 にぶい橙色	〃	底部が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はヘラナデ とナデ調整, 外底面はナデ調整
6608	〃	〃 〃	-	(17.7)	(21.1)	7.0	黒褐色 にぶい橙色	〃	下胴部の大半が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面と 外底面は剥離し, 摩耗する。
6609	〃	〃 壺	-	(5.2)	-	10.6	灰黄褐色 〃	〃	底部約1/2が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面はヘ ラ磨き, 外底面はヘラナデ
6610	〃	〃 〃	-	(16.3)	(23.3)	12.4	〃 〃	〃	下胴部から底部の破片, 内面はヘラナデとナデ調整, 外 面はヘラ磨き, 外底面はナデ調整
6611	〃	石製品 石鏃	(2.6)	(2.0)	(0.4)	(2.7)	-	-	基部が欠損, 石材はサヌカイト, 平基の石鏃とみられる が不明
6612	〃	〃 〃	(2.0)	(1.4)	0.3	(0.8)	-	-	〃
6613	〃	〃 叩石	(30.9)	24.1	4.1	(3.9kg)	-	-	約3/4が残存, 石材は中粒砂岩, 片面中央部に敲打痕が 残存, 全体に被熱で黒色化する。
6614	〃	〃 砥石	(16.3)	13.6	6.0	(2.2kg)	-	-	約2/3が残存, 石材は中粒砂岩, 両面と側面に使用痕が 残存し, 側面には敲打痕もみられる。
6615	SK-6046	弥生土器 甕	16.3	(4.9)	-	-	橙色 〃	不良	口頸部の破片, 器面は摩耗, 口縁部外面には指頭圧痕が 残存
6616	〃	〃 〃	18.0	(5.1)	-	-	灰褐色 にぶい橙色	良	口縁部から上胴部の約1/5が残存, 口頸部はヨコナデ調 整, 胴部内外面は摩耗, 口唇部に凹線文
6617	〃	〃 〃	-	(4.2)	-	7.7	黒褐色 橙色	〃	底部約1/3が残存, 内面と外面はナデ調整, 外底面は未 調整
6618	〃	〃 手づくね土器	(4.2)	(3.8)	(4.1)	2.1	灰白色 〃	やや 不良	口縁部が欠損, 内面は指ナデ, 外底面はナデ調整, 外面 は摩耗
6619	SK-6048	〃 壺	12.0	(12.2)	-	-	橙色 〃	不良	口縁部から上胴部の約1/4が残存, 胴部内面は指ナデ, 他は摩耗
6620	〃	〃 甕	-	(7.2)	-	9.0	黄灰色 橙色	良	底部が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面はタタキの 後にハケ調整, 外底面はナデ調整
6621	〃	石製品 磨石	10.0	8.6	2.7	358.1	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦 痕, 片面中央部に弱い敲打痕が残存
6622	SK-6057	弥生土器 壺	8.2	(2.1)	-	-	橙色 にぶい黄褐色	やや 不良	口縁部の破片, 器面は摩耗, 口縁端部にヘラ状工具によ る刻目, 外面に指頭圧痕が残存
6623	〃	〃 〃	19.0	(9.0)	-	-	橙色 〃	〃	口頸部約1/5が残存, 器面は摩耗
6624	〃	〃 甕	18.6	(3.6)	-	-	にぶい橙色 にぶい赤褐色	良	口頸部の破片, 口唇部から頸部外面はヨコナデ調整, 頸 部外面にハケ目が僅かに残存, 口縁部下端に刻目
6625	〃	〃 〃	20.8	(14.9)	20.0	-	黄灰色 〃	〃	口縁部から上胴部約1/5が残存, 口縁部はヨコナデ調 整, 内面はナデ調整, 胴部外面にヘラ磨き

VI区 遺物観察表 26 (6626～6650)

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6626	SK-6057	弥生土器 甕	18.4	(10.3)	17.2	-	にぶい褐色 〃	良	口縁部から中胴部の約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整, 胴部外面に微隆起突帯
6627	〃	〃 〃	27.2	(14.3)	24.0	-	〃 〃	良好	口縁部から胴部の約1/4が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 内面は指ナデとナデ調整, 口縁端部に刻目
6628	〃	〃 壺	-	(7.5)	9.8	4.6	黒色 にぶい黄橙色	良	胴部以下約1/3が残存, 内面は指ナデ, 外面は摩耗, 外面下端に指頭圧痕が残存, 外底面はナデ調整
6629	〃	〃 甕	-	(6.1)	-	4.8	褐灰色 にぶい橙色	良好	底部が残存, 内面は指ナデ, 外面はハケ調整の後にナデ調整, 外底面はハケ調整
6630	〃	〃 〃	-	(6.1)	-	5.1	褐灰色 灰褐色	やや不良	底部から下胴部の約1/3が残存, 内面はナデ調整で焦げ目が付着, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整
6631	〃	〃 〃	-	(4.0)	-	5.3	褐灰色 にぶい褐色	良好	底部の大半が残存, 内面はナデ調整, 外面から外底面はヘラ磨き
6632	〃	〃 〃	-	(5.0)	-	5.5	にぶい褐色 〃	良	底部約3/4が残存, 内面は指押え, 指ナデとナデ調整, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整
6633	〃	〃 〃	-	(10.6)	-	6.8	暗灰色 にぶい橙色	〃	下胴部から底部の約1/2が残存, 内面はヘラナデとナデ調整, 外面はハケ調整の後にヘラ磨き
6634	〃	〃 鉢	19.7	(4.1)	-	-	橙色 にぶい橙色	〃	口縁部から体部の約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 体部内外面はナデ調整
6635	〃	〃 蓋	-	(6.2)	-	-	にぶい橙色 灰黄褐色	〃	口縁部以外の大半が残存, 天井部外面はヘラ削り, 外面はナデ調整, 内面は指ナデとナデ調整
6636	〃	〃 ミニチュア土器	6.8	10.9	7.6	4.5	黒色 にぶい橙色	〃	ほぼ完存, 口頸部はナデ調整, 胴部内面はヘラナデとナデ調整, 外面はヘラナデと指押え, 外底面はナデ調整
6637	SK-6058	〃 甕	-	(1.8)	-	-	にぶい黄褐色 〃	〃	口縁部の細片, 器面は摩耗, 口縁部外面にヘラ状工具で刻目, その下に作り出し微隆起突帯とクシ描直線文
6638	〃	〃 〃	-	(8.9)	(15.2)	4.7	灰黄褐色 〃	〃	底部約1/3が残存, 器面はナデ調整で, 外面には煤が付着
6639	SD-6001	〃 〃	17.4	(10.2)	(32.5)	-	明赤褐色 〃	〃	口縁部から中胴部の約1/4が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 胴部内面はハケ調整, 外面はナデ調整, 他は摩耗
6640	SD-6002	〃 壺	10.5	(7.7)	(12.4)	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁部から上胴部の約1/2が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 内面は指ナデとナデ調整で, 指頭圧痕が残存
6641	〃	〃 〃	11.0	(9.0)	(14.8)	-	橙色 〃	やや不良	口縁部から上胴部の約1/2が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 内面は指ナデ, 外面はハケ調整
6642	〃	〃 〃	12.4	(3.2)	-	-	〃 〃	良	口頸部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 口縁部外面に指頭圧痕が残存, 他は摩耗
6643	〃	〃 〃	19.6	(10.1)	-	-	にぶい橙色 橙色	良好	口頸部約1/4が残存, 口頸部内面下半に指ナデ, 上半と外面にハケ調整, 口唇部はヨコナデ調整
6644	〃	〃 〃	-	(30.1)	24.8	5.9	灰褐色 にぶい橙色	良	口縁部と中胴部が欠損, 下胴部内面はヘラ削り, 上胴部内面と胴部外面肩部にハケ調整
6645	〃	〃 甕	13.3	(5.7)	-	-	にぶい橙色 褐灰色	不良	口頸部の破片, 器面は摩耗するが, 頸部外面にハケ目が残存し, 貼付微隆起突帯, クシ描直線文, 楕円形浮文
6646	〃	〃 〃	14.2	(4.3)	-	-	橙色 〃	〃	口頸部の破片, 器面は摩耗, 口縁部下端にヘラ状工具による刻目, 口縁部外面に指頭圧痕が残存
6647	〃	〃 〃	16.4	(3.4)	-	-	橙色 にぶい褐色	良	口頸部約1/4が残存, 口唇部から頸部外面はヨコナデ調整とナデ調整, 口縁端部にヘラ状工具による刻目
6648	〃	〃 〃	-	(3.2)	-	-	にぶい橙色 にぶい褐色	良好	口頸部の細片, 口唇部はヨコナデ調整, 頸部外面はナデ調整, 口縁端部刻目, 口縁部外面にクシ描直線文
6649	〃	〃 〃	17.4	(2.4)	-	-	灰褐色 〃	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ調整, 外面に刻目, 微隆起突帯, クシ描直線文
6650	〃	〃 〃	18.2	(11.8)	19.1	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色	良	口縁部から中胴部の大半が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 頸部外面にクシ描直線文, 刺突文

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6651	SD-6002	弥生土器甕	18.4	(8.4)	(17.3)	-	明赤褐色 にぶい赤褐色	やや不良	口縁部から上胴部の約1/3が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整, 口縁部下端に刻目
6652	〃	〃	18.6	(4.6)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良好	口頸部約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面にハケ調整, 外面にもハケ目が僅かに残存
6653	〃	〃	20.6	(3.3)	-	-	にぶい赤褐色 褐灰色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整, 口縁部外面に刻目, 微隆起突帯, クシ描直線文
6654	〃	〃	21.7	(4.5)	-	-	にぶい褐色 〃	やや不良	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 他は摩耗, 口縁部外面にヘラ状工具による刻目
6655	〃	〃	23.7	(4.7)	-	-	にぶい橙色 にぶい褐色	良好	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整及び指押えとナデ調整, 外面はハケ調整
6656	〃	〃	12.4	(4.2)	-	-	橙色 〃	やや不良	口頸部の破片, 頸部内面はナデ調整, 他は摩耗するが, 口縁部外面に指頭圧痕が残存
6657	〃	〃	15.2	(2.9)	-	-	にぶい褐色 〃	良好	口縁部の破片, 器面はヨコナデ調整, 口縁部外面に指頭圧痕が残存
6658	〃	〃	15.8	(3.2)	-	-	橙色 にぶい褐色	良	口頸部の破片, 口唇部から内面はヨコナデ調整, 頸部外面はナデ調整, 口縁部外面は指押え
6659	〃	〃	17.8	(5.2)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口頸部約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面にハケ目が残存, 頸部外面はハケ調整
6660	〃	〃	20.5	(4.5)	-	-	明赤褐色 褐色	良好	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整, 外面はナデ調整, 口縁部外面は指押え
6661	〃	〃	21.5	(4.9)	-	-	灰黄褐色 にぶい褐色	良	口頸部の破片, 口唇部と頸部外面はヨコナデ調整, 内面は摩耗, 口縁部外面は指押えで, 煤が付着
6662	〃	〃	25.5	(7.2)	-	-	にぶい褐色 褐色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整, 口縁部外面は指押えで, 煤が付着
6663	〃	〃	24.4	(3.4)	-	-	にぶい褐色 〃	良好	口頸部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整とナデ調整, 頸部外面はヘラナデとナデ調整
6664	〃	〃	16.9	(15.2)	20.0	-	にぶい黄褐色 褐色	良	口縁部から中胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整, 胴部内面は指ナデ, 外面はハケ調整
6665	〃	〃	11.5	(6.8)	10.6	-	にぶい黄褐色 〃	〃	口縁部から中胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部内面は指ナデ, 他は摩耗
6666	〃	〃	17.9	(8.5)	(21.0)	-	褐色 〃	やや不良	口縁部から上胴部約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整, 頸部外面に指頭圧痕が残存
6667	〃	〃	19.1	(5.2)	17.7	-	〃 〃	良好	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整, 外面は指押え, 胴部外面はヘラ磨き
6668	〃	〃	15.7	(19.1)	21.9	-	明赤褐色 〃	良	口縁部から中胴部の約1/2残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面上半はナデ調整, 下半はヘラ削り
6669	〃	〃	-	(4.5)	-	3.7	灰黄褐色 〃	〃	底部が残存, 器面はナデ調整
6670	〃	〃	-	(6.1)	(8.2)	4.3	にぶい褐色 褐色	〃	底部が残存, 内面はナデ調整, 外面はヘラナデとナデ調整, 外底面はナデ調整, 外面には煤が付着
6671	〃	〃	-	(1.9)	-	5.0	褐色 にぶい赤褐色	良好	底部約3/4が残存, 器面はナデ調整, 外面と外底面は被熱で変色
6672	〃	〃	-	(2.0)	-	5.0	にぶい褐色 にぶい褐色	やや不良	底部が残存, 器面は摩耗し, 剥離するが, 内底面に指頭圧痕とナデ調整の痕が残存
6673	〃	〃	-	(8.5)	(16.2)	5.0	浅黄褐色 にぶい黄褐色	良	底部約2/3が残存, 内外面は摩耗するが, 外面にはハケ目が残存, 外底面はナデ調整で黒斑が残存
6674	〃	〃	-	(2.5)	-	5.5	褐色 にぶい褐色	〃	底部約1/3が残存, 内面は摩耗し, 剥離する。外面と外底面はナデ調整
6675	〃	〃	-	(2.4)	-	5.8	にぶい黄褐色 褐色	やや不良	底部約2/3が残存, 内面はナデ調整, 外面はタタキを施した上で, 外底面に付けてハケ調整を加える。

VI区 遺物観察表28 (6676~6700)

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6676	SD-6002	弥生土器 甕	-	(5.7)	-	6.0	灰黄褐色 〃	良	底部約1/2が残存, 内面はナデ調整, 外面はヘラ磨き, 外底面は未調整
6677	〃	〃 〃	-	(4.2)	-	6.2	灰黄褐色 にぶい赤褐色	良好	底部が残存, 内面はナデ調整, 外面はヘラ磨き, 外底面はナデ調整
6678	〃	〃 〃	-	(10.3)	(15.0)	6.5	橙色 にぶい黄褐色	良	底部と下胴部約1/3が残存, 内面はヘラ削りの後にヘラ磨き, 外面はハケ調整, 外底面はヘラ削りとナデ調整
6679	〃	〃 〃	-	(3.1)	-	6.6	にぶい橙色 灰黄褐色	〃	底部約1/2が残存, 器面はナデ調整
6680	〃	〃 〃	-	(4.0)	-	6.6	黒褐色 にぶい橙色	〃	底部約3/4が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はヘラナデの後にナデ調整, 外底面はヘラ削り
6681	〃	〃 〃	-	(4.6)	-	6.7	灰黄褐色 にぶい褐色	〃	底部が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面はヘラ磨き, 外面下端と外底面はナデ調整
6682	〃	〃 〃	-	(5.2)	-	6.9	灰褐色 にぶい橙色	良好	底部約2/3が残存, 内面は摩耗, 外面から外底面は丁寧なナデ調整
6683	〃	〃 〃	-	(3.9)	-	7.0	褐灰色 にぶい褐色	〃	底部が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面は摩耗, 外底面はナデ調整
6684	〃	〃 〃	-	(6.8)	(16.6)	7.0	にぶい褐色 〃	〃	底部約1/4が残存, 内面はナデ調整, 外面はヘラ磨きで, 煤が付着, 外底面はナデ調整
6685	〃	〃 〃	-	(4.9)	-	8.6	褐灰色 にぶい褐色	〃	底部の破片, 内面は指押えとナデ調整, 外面はヘラ磨き, 外底面はヘラ削り
6686	〃	〃 〃	-	(8.1)	(18.3)	8.7	褐灰色 にぶい褐色	やや不良	底部約1/2が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はナデ調整で, 被熱で変色, 外底面は未調整
6687	〃	〃 〃	-	(11.3)	17.9	6.4	にぶい褐色 にぶい赤褐色	良	底部から下胴部の約1/4が残存, 内外面はナデ調整で, 外面に煤が付着, 外底面は未調整
6688	〃	〃 〃	-	(16.2)	16.4	6.8	灰褐色 橙色	やや不良	中胴部以下1/2弱が残存, 内面は下半にヘラナデとナデ調整, 外面から外底面は摩耗し, 剝離する。
6689	〃	〃 〃	-	(16.5)	22.0	7.2	にぶい橙色 〃	良好	中胴部以下約1/2が残存, 内面下胴部はヘラ削りとハケ調整, 中胴部はナデ調整
6690	〃	〃 〃	-	(14.1)	(21.0)	7.6	明赤褐色 〃	良	下胴部から底部の破片, 内面はナデ調整, 外面はヘラ磨き, 外底面はヘラ削り
6691	〃	〃 高杯	18.7	(4.9)	-	-	灰褐色 にぶい褐色	〃	口縁部から体部の約1/6が残存, 口縁部から内面はヨコナデ調整, 口縁部外面に凹線文, 体部外面は摩耗
6692	〃	〃 〃	-	(8.7)	-	12.3	にぶい褐色 にぶい橙色	〃	脚台部が残存, 内面はヘラ削り, 裾部はヨコナデ調整, 外面はヘラ磨き
6693	〃	〃 鉢	22.2	13.5	-	6.3	にぶい橙色 〃	〃	口縁部約1/4と体部以下の大半が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整とヘラ磨き
6694	〃	〃 〃	-	(10.8)	-	5.3	にぶい黄褐色 灰褐色	〃	体部約1/2と脚台部が残存, 体部内面はヘラナデとナデ調整, 外面は摩耗するが, 指頭圧痕が残存
6695	〃	〃 ミニチュア土器	7.4	(6.4)	8.2	-	にぶい黄褐色 〃	〃	中胴部から上約1/2残存, 口縁部は指押えとナデ調整, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はハケ調整
6696	〃	〃 〃	-	(2.5)	-	3.8	橙色 にぶい橙色	良好	底部約2/3が残存, 内面は指ナデ, 外面から外底面はナデ調整で, 外面下端に指頭圧痕が残存
6697	〃	〃 〃	-	(4.5)	6.3	3.8	にぶい黄褐色 灰黄褐色	やや不良	底部約1/2が残存, 内面は指ナデ, 外面から外底面は摩耗するが, 外面下端に指頭圧痕が残存
6698	〃	〃 〃	-	(4.7)	6.6	4.1	にぶい黄褐色 にぶい橙色	良	胴部以下約2/3が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面から外底面はナデ調整
6699	〃	土製品 土製円板	5.3	5.1	0.9	(19.6)	灰褐色 灰黄褐色	〃	ほぼ完存, 表面は指ナデとナデ調整で, 裏面に煤が付着
6700	〃	石製品 石庖丁	(7.7)	4.4	0.7	(39.6)	-	-	約1/2残存, 石材は粘板岩, 破損後再利用され, 割れ面を含め全面を研磨し, 新たに紐孔を穿穴

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6701	SD-6002	石製品 叩石	11.6	10.1	3.0	551.6	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 両面中央と側面に敲打痕, 縁辺を中心に擦痕が残存
6702	〃	〃 砥石	11.9	11.7	3.3	643.7	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 上下2面と側面3面の計5面に使用痕, 角には敲打痕が残存
6703	P-6003	弥生土器 壺	-	(2.2)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良好	口縁部の細片, 口唇部と内面はヨコナデ調整, 外面にハケ状工具で斜格子状の刻目
6704	〃	〃 〃	-	(5.3)	-	-	灰黄色 にぶい橙色	〃	上胴部約1/4が残存, 内面はハケ調整とナデ調整, 外面はハケ調整の後に暗文風のヘラ磨きと突帯
6705	〃	〃 甕	-	(6.3)	-	5.1	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良	底部の一部が残存, 内外面はナデ調整で, 内底面にはヨコナデ調整, 外底面は未調整
6706	P-6006	〃 〃	-	(3.8)	-	10.6	黄灰色 にぶい赤褐色	良好	底部の破片, 内面は指押えとナデ調整, 外面はナデ調整, 外底面は未調整
6707	P-6004	〃 蓋	11.7	8.4	-	-	橙色 にぶい褐色	やや不良	口縁部約2/3が欠損, 天井部は指押え, 外面はハケ調整, 口縁部はヨコナデ調整, 内面は指押えと指ナデ
6708	P-6002	〃 ミニチュア土器	3.8	3.8	-	1.8	にぶい黄橙色 〃	良	約2/3が残存, 器面はナデ調整で, 指頭圧痕が残存
6709	P-6005	〃 〃	6.2	(8.4)	6.9	(5.1)	にぶい橙色 〃	〃	底部以外が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 内面は口縁部と下胴部にハケ調整, 各所に指押えとナデ調整
6710	P-6001	石製品 叩石	(9.8)	(9.0)	3.6	(441.5)	-	-	大半が残存, 石材は粗粒砂岩, 表面はほぼ平滑で, 側面を中心に敲打痕が残存
6711	SB-6027	須恵器 杯蓋	-	(1.7)	-	-	灰黄色 〃	良	擬宝珠形のつまみ部分が残存, つまみはヨコナデ調整, 器面は回転ナデ調整で, 内面にナデ調整を加える。
6712	〃	〃 杯身	14.0	3.8	-	10.8	褐灰色 〃	良好	約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 高台周辺はヨコナデ調整
6713	〃	〃 〃	-	(3.7)	-	6.8	灰色 〃	良	体部から底部が残存, 器面は回転ナデ調整, 高台周辺はヨコナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6714	〃	土師質土器 杯	-	(1.7)	-	7.6	にぶい黄橙色 浅黄橙色	やや不良	底部約3/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで未調整
6715	〃	〃 〃	-	(1.0)	-	8.7	にぶい黄橙色 〃	不良	底部約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6716	〃	〃 皿	11.6	1.2	-	9.7	にぶい橙色 にぶい黄橙色	良	一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切りでナデ調整を加える。
6717	〃	〃 〃	12.5	1.7	-	8.9	にぶい黄橙色 〃	不良	約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6718	〃	〃 〃	13.0	1.5	-	9.6	橙色 〃	やや不良	約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6719	〃	〃 〃	14.9	1.7	-	10.4	〃 〃	良	約4/5が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6720	〃	緑釉陶器 椀	-	(1.6)	-	-	オリーブ灰色 〃	〃	口縁部の細片, 軟質系, 全面に緑釉を施釉
6721	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の細片, 軟質系, 器面は回転ナデ調整の後にヘラ磨き, 全面に緑釉を施釉
6722	〃	〃 〃	-	(2.9)	-	-	〃 〃	やや不良	口縁部の破片, 軟質系, 器面は摩耗し, 緑釉の剥落が目立つ。
6723	〃	〃 〃	-	(1.2)	-	-	〃 〃	良	体部の破片, 軟質系, 全面に緑釉を施釉
6724	〃	〃 〃	-	(1.1)	-	-	〃 〃	〃	体部の細片, 軟質系, ヘラ磨きの後に緑釉を施釉
6725	〃	〃 〃	-	(1.1)	-	-	明オリーブ褐色 〃	不良	体部の細片, 軟質系, 器面は摩耗し, 緑釉の大半が剥落

VI区 遺物観察表30 (6726～6750)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
6726	SB-6027	緑釉陶器 椀	-	(1.7)	-	-	オリーブ灰色 〃	良好	体部の細片, 硬質系, 器面は回転ナデ調整で, 全面に緑釉を施釉
6727	〃	〃 皿	-	(1.1)	-	-	灰オリーブ色 〃	〃	口縁部の細片, 硬質系, 器面は回転ナデ調整で, 外面に回転ヘラ削り, 全面に緑釉を施釉
6728	〃	灰釉陶器 椀	15.0	(3.3)	-	-	オリーブ黄色 〃	良	口縁部から体部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 体部外面に回転ヘラ削り, 内面から体部外面に灰釉を施釉
6729	〃	〃 〃	-	(1.8)	-	-	灰色 〃	良好	体部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 全面に灰釉を施釉
6730	〃	〃 〃	-	(2.4)	-	-	明オリーブ灰色 〃	〃	体部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 全面に灰釉を施釉するが, 大半が剥落
6731	〃	〃 皿	-	(2.4)	-	-	灰オリーブ色 〃	〃	体部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 体部下半に回転ヘラ削り, 内面から回転ヘラ削り付近まで灰釉を施釉
6732	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	-	オリーブ灰色 灰色	〃	体部の細片, 器面は回転ナデ調整, 外面下半に回転ヘラ削り, 全面に灰釉を施釉
6733	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	-	灰オリーブ色 〃	〃	〃
6734	〃	〃 〃	-	(2.0)	-	-	灰黄色 〃	〃	体部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 外面下半に回転ヘラ削り, 全面に灰釉を施釉するが, 外面はほとんど剥落
6735	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	-	灰オリーブ色 〃	〃	体部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 外面の多くに回転ヘラ削り, 全面に灰釉を施釉, 部分的にハダ荒れ
6736	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	-	明オリーブ灰色 〃	〃	体部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 外面下半に回転ヘラ削り, 全面に灰釉を施釉するが, 剥落が目立つ。
6737	〃	〃 〃	-	(1.0)	-	-	オリーブ灰色 灰白色	良	体部の細片, 器面は回転ナデ調整, 内面に灰釉を施釉するが, 大半が剥落, 外面は露胎
6738	〃	〃 〃	-	(0.9)	-	-	オリーブ灰色 明オリーブ灰色	〃	体部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 体部下半に回転ヘラ削り, 内面から回転ヘラ削り付近まで灰釉を施釉
6739	〃	〃 〃	-	(1.5)	-	-	にぶい黄褐色 〃	良好	体部の細片, 器面は回転ナデ調整, 外面下半に回転ヘラ削り, 内面上半から外面に灰釉を施釉
6740	〃	〃 〃	-	(0.4)	-	-	灰黄褐色 灰白色	〃	底部の1/4弱が残存, 内面は回転ナデ調整, 外面は回転ヘラ削り, 内面に灰釉を施釉
6741	〃	石製品 叩石	12.0	6.3	2.5	271.6	-	-	ほぼ完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑で, 両面と側面に弱い敲打痕が残存
6742	〃	〃 砥石	(12.2)	(8.7)	(4.6)	(688.2)	-	-	一部が残存, 石材は細粒砂岩, 片面と側面の2面に使用痕及び擦痕と敲打痕が残存
6743	SB-6028	土師器 釜	28.0	(9.1)	(37.4)	-	にぶい赤褐色 にぶい黄褐色	良好	口縁部から胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部内面は指押えとナデ調整, 外面はハケ調整
6744	〃	須恵器 杯蓋	-	(2.7)	-	-	褐灰色 灰色	〃	宝珠形のつまみが残存, つまみはヨコナデ調整, 外面には自然釉が付着, 内面は回転ナデ調整とナデ調整
6745	〃	〃 杯身	12.0	3.8	-	8.9	黄灰色 褐灰色	〃	1/2弱が残存, 器面は回転ナデ調整, 高台周辺はヨコナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ削りで, ナデ調整
6746	SB-6029	弥生土器 甕	19.3	(2.6)	-	-	橙色 〃	良	口頸部の破片, 口縁部から頸部外面はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ調整, 外面に煤が付着
6747	〃	土師器 椀	-	(2.6)	-	10.1	明赤褐色 〃	不良	底部約1/3が残存, 器面は摩耗, 高台高0.7cm
6748	SB-6030	須恵器 杯身	-	(2.2)	-	8.1	灰黄色 〃	〃	〃
6749	SB-6031	弥生土器 甕	19.2	(3.1)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄褐色	良好	口縁部の破片, 器面はハケ調整の後にヨコナデ調整を加える。
6750	SB-6032	〃 ミニチュア土器	-	(3.8)	-	3.9	にぶい黄褐色 にぶい橙色	〃	底部が残存, 内面は指押え, 外面はヘラナデの後にナデ調整, 外底面はナデ調整

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6751	SB-6033	須恵器 皿	17.1	2.2	-	13.8	黄灰色 〃	不良	約1/2が残存、器面は回転ナデ調整、底部の切り離しは回転ヘラ切り
6752	SB-6034	灰釉陶器 皿	-	(1.1)	-	-	灰オリーブ色 〃	良好	体部の細片、器面は回転ナデ調整、体部の一部に回転ヘラ削り、内面から回転ヘラ削り付近まで施釉
6753	〃	石製品 砥石	(7.7)	7.4	3.2	(60.2)	-	-	約1/2が残存、石材は軽石、2面に使用痕が残存
6754	SB-6035	土師器 杯蓋	16.0	1.2	-	-	橙色 〃	やや不良	口縁部約1/5が残存、器面はヨコナデ調整で、天井部外面にヘラ磨き
6755	〃	須恵器 杯身	-	(1.3)	-	7.8	黄灰色 〃	良好	底部約1/4が残存、器面は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整、底部の切り離しは回転ヘラ切り
6756	SB-6036	石製品 砥石	(18.1)	(16.6)	10.8	(3.7kg)	-	-	一部が残存、石材は中粒砂岩、2面に使用痕が残存
6757	SB-6039	須恵器 杯蓋	-	(1.9)	-	-	灰白色 〃	不良	つまみと天井部の一部が残存、器面は回転ナデ調整、天井部外面は回転ヘラ削り、天井内面にナデ調整
6758	〃	土師質土器 杯	13.1	2.6	-	8.3	にぶい褐色 〃	やや不良	約1/2が残存、成形はA技法、器面は回転ナデ調整で内底面にナデ調整、底部の切り離しは回転ヘラ切り
6759	〃	黒色土器 壺	-	(3.5)	(15.2)	-	暗灰色 灰褐色	不良	上胴部約1/5が残存、器面は摩耗
6760	〃	土製品 土錘	5.4	2.0	1.9	19.5	灰色 灰黄褐色	良	完存、円筒形、表面はナデ調整、孔径0.7cm
6761	〃	〃 〃	5.5	2.0	1.9	20.5	灰色 〃	良好	〃
6762	SK-6059	須恵器 杯身(転用硯)	-	(1.7)	-	7.8	灰褐色 〃	良	底部約1/4が残存、器面は回転ナデ調整で内底面は摩滅、底部外面はナデ調整、高台高0.6cm
6763	SK-6061	土師器 皿	15.6	1.4	-	11.2	橙色 〃	不良	1/2弱が残存、成形は左手手法、器面は摩耗
6764	SK-6062	須恵器 台付壺	-	(5.8)	-	8.2	褐灰色 灰黄褐色	良好	底部約1/5が残存、器面は回転ナデ調整で、外面下半に回転ヘラ削り、高台周辺はヨコナデ調整
6765	SK-6064	弥生土器 甕	-	(1.7)	-	-	にぶい黄橙色 橙色	やや不良	口縁部の破片、口唇部はヨコナデ調整、外面は指押え、他は摩耗
6766	SK-6065	灰釉陶器 皿	-	(1.1)	-	-	灰オリーブ色 〃	良好	体部の細片、器面は回転ナデ調整、外面下半に回転ヘラ削り、全面に施釉
6767	SK-6066	弥生土器 壺	23.1	(9.2)	-	-	明赤褐色 にぶい褐色	良	口頸部の破片、内面は摩耗するが、ハケ目が僅かに残存、頸部外面はハケ調整の後にヘラ磨き
6768	〃	〃 〃	(24.0)	(5.3)	-	-	にぶい赤褐色 〃	良好	口縁部の破片、口唇部はヨコナデ調整、内面は指ナデとヘラナデ、外面は指押えとナデ調整
6769	SK-6067	〃 甕	20.7	(6.8)	-	-	にぶい褐色 灰褐色	良	口頸部約1/2が残存、口縁部はヨコナデ調整、頸部内面はハケ調整とナデ調整、外面はハケ調整
6770	SK-6070	〃 〃	25.5	(3.3)	-	-	にぶい橙色 〃	良好	口縁部の破片、口唇部はヨコナデ調整、内面はナデ調整、外面に刻目と2条の微隆起突帯
6771	SK-6071	土師器 皿	12.7	1.6	-	8.4	にぶい黄橙色 〃	良	約1/3が残存、成形は左手手法、口縁部から内面はヨコナデ調整で、内底面にナデ調整、他は摩耗
6772	〃	〃 〃	13.5	1.4	-	9.3	橙色 〃	〃	約1/5が残存、成形は左手手法、口縁部はヨコナデ調整、内底面と外底面はナデ調整
6773	〃	土師質土器 杯	-	(2.3)	-	8.2	にぶい黄橙色 〃	〃	底部約1/2が残存、成形はA技法、器面は回転ナデ調整、内面は摩耗、底部の切り離しは回転ヘラ切り
6774	SK-6072	土師器 皿	14.8	1.4	-	9.9	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	約3/4が残存、成形は左手手法、口縁部から内面はヨコナデ調整、外底面はナデ調整
6775	〃	土師質土器 杯蓋	15.5	1.4	-	-	にぶい橙色 橙色	〃	約1/3が残存、成形はA技法、器面は回転ナデ調整

VI区 遺物観察表32 (6776~6800)

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6776	SK-6072	土師質土器 杯蓋	-	(1.1)	-	-	にぶい橙色 〃	良	口縁部の破片, 成形はA技法, 内面は回転ナデ調整, 外面は摩耗
6777	〃	〃 杯	12.4	2.6	-	7.8	にぶい橙色 橙色	不良	口縁部約3/4が欠損, 成形はA技法, 器面は摩耗, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6778	〃	〃 〃	12.1	2.6	-	8.0	にぶい橙色 〃	良	1/2弱が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6779	〃	〃 〃	13.5	3.0	-	9.2	淡黄色 〃	〃	1/2弱が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6780	〃	〃 〃	10.3	7.3	-	7.3	にぶい黄橙色 〃	〃	約4/5が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6781	〃	〃 〃	13.0	3.2	-	8.6	にぶい橙色 〃	〃	約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6782	〃	〃 〃	12.2	3.1	-	7.3	にぶい橙色 灰黄色	やや不良	口縁部約1/2が欠損, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6783	〃	〃 〃	-	(1.0)	-	7.6	にぶい黄橙色 〃	〃	底部約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6784	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	8.3	〃 〃	〃	〃
6785	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	8.4	にぶい橙色 橙色	良	底部が残存, 成形はA技法, 内面は回転ナデ調整, 外面は摩耗, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6786	〃	〃 〃	12.4	2.7	-	7.9	にぶい橙色 橙色	〃	約1/6が残存, 成形はA技法, 口縁部は回転ナデ調整, 他は摩耗, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6787	〃	〃 〃	12.3	2.7	-	7.9	浅黄橙色 にぶい橙色	〃	口縁部約1/2が欠損, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6788	〃	〃 〃	12.2	2.7	-	7.9	橙色 〃	不良	約3/4が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6789	〃	〃 〃	12.5	2.8	-	7.3	褐灰色 にぶい橙色	〃	1/2弱が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 内底面は剝離, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6790	〃	〃 〃	13.1	3.0	-	8.5	にぶい橙色 〃	良	底部約1/2と口縁部約1/3が残存, 成形はA技法, 口縁部は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6791	〃	〃 〃	12.4	2.9	-	8.1	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	大半が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6792	〃	〃 〃	11.6	3.2	-	7.4	にぶい橙色 〃	〃	口縁部の大半が欠損, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6793	〃	〃 〃	-	(1.5)	-	8.0	橙色 〃	やや不良	底部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6794	〃	〃 〃	13.5	4.1	-	7.4	にぶい橙色 橙色	良	口縁部約2/3が欠損, 成形はA技法, 口縁部から内面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面は未調整
6795	〃	〃 〃	11.6	4.0	-	6.5	にぶい橙色 〃	〃	口縁部約2/3が欠損, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6796	〃	〃 〃	16.1	5.2	-	8.6	橙色 にぶい橙色	不良	口縁部約1/4と底部の一部が残存, 成形はA技法, 口縁部は回転ナデ調整, 他は摩耗し, 剝離する。
6797	〃	〃 〃	15.0	5.8	-	7.8	浅黄橙色 〃	良	約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6798	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	7.4	橙色 〃	〃	底部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗
6799	〃	〃 〃	-	(2.5)	-	7.7	浅黄橙色 〃	やや不良	底部1/2弱が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6800	〃	〃 椀	-	(2.5)	-	8.0	にぶい黄橙色 〃	良	底部約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 外底面はナデ調整, 高台高1.3cm

番号	遺構層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
6801	SK-6072	土師質土器 皿	14.3	1.6	-	11.1	にぶい橙色 〃	良	口縁部約2/3が欠損, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6802	〃	〃 〃	13.0	1.5	-	8.7	〃 〃	不良	約4/5が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで未調整
6803	〃	〃 〃	12.0	1.4	-	9.4	にぶい橙色 橙色	良	口縁部約1/2, 底部約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整
6804	〃	〃 〃	11.7	1.6	-	7.8	橙色 〃	不良	約1/5が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗し, 摩滅する。
6805	〃	〃 〃	13.1	1.8	-	9.6	にぶい橙色 橙色	良	約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内面は摩耗, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6806	〃	〃 〃	13.8	1.9	-	9.4	橙色 〃	〃	1/2弱が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6807	〃	〃 〃	12.7	1.8	-	7.3	にぶい黄橙色 〃	〃	約1/3が残存, 成形はA技法, 口縁部から内面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面は摩耗
6808	〃	〃 〃	11.7	1.9	-	7.9	にぶい橙色 〃	〃	約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 内底面は摩耗, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6809	〃	〃 〃	14.6	2.4	-	9.2	〃 〃	〃	底部約2/3と口縁部の一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整
6810	〃	〃 〃	11.6	2.0	-	7.7	橙色 〃	不良	約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6811	〃	〃 〃	14.3	2.7	-	8.8	明褐灰色 にぶい黄橙色	良	約1/2強が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 器面は摩耗
6812	〃	黒色土器 椀	-	(2.8)	-	6.8	黒色 にぶい黄橙色	〃	体部から底部約1/3が残存, 内面はヨコ方向のヘラ磨き, 外面はヨコナデ調整, 高台は摩滅, 高台高0.3cm
6813	〃	緑釉陶器 皿	14.5	2.8	-	6.4	にぶい黄橙色 灰白色	不良	口縁部約1/2が欠損, 軟質系, 底部は削り出し高台, 全面に緑釉を施釉するが, 摩耗と剥落が顕著, 高台高0.5cm
6814	SK-6074	石製品 投弾	7.4	7.0	5.8	388.3	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 表面は細かな起伏となるが, 大半で表面が剥落
6815	〃	〃 磨石	10.7	6.8	2.3	262.0	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕が目立つ。
6816	SK-6075	弥生土器 蓋	10.0	(2.0)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良	約1/3が残存, 外面は指ナデとナデ調整, 内面はナデ調整
6817	SK-6076	灰釉陶器 皿	-	(3.4)	-	-	灰黄色 〃	良好	体部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 内面に灰釉を施釉, 外面は露胎
6818	SK-6079	須恵器 甕	-	(3.1)	-	-	褐灰色 〃	〃	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内面はハダ荒れ, 外面に凹線で区切ったクシ描波状文を2段に施文
6819	〃	緑釉陶器 椀	-	(1.7)	-	-	灰オリーブ色 灰色	〃	体部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 外面に回転ヘラ削り, 全面に緑釉を施釉
6820	〃	灰釉陶器 椀	-	(1.4)	-	7.2	灰オリーブ色 〃	〃	底部の破片, 内面は回転ナデ調整, 外底面はヨコナデ調整, 高台は三日月高台で, 高さ0.8cm, 高台内側まで施釉
6821	〃	石製品 石庖丁	(5.1)	(7.9)	0.6	(33.6)	-	-	約3/5が残存, 石材はサスカイト, 全面を研磨, 挟りが1カ所残存
6822	SK-6080	須恵器 杯蓋	-	(2.2)	-	-	灰色 〃	良好	つまみを含む天井部が残存, つまみはヨコナデ調整, 天井部外面は回転ヘラ削り, 内面は回転ナデ調整
6823	〃	〃 杯身	-	(1.5)	-	8.1	〃 〃	良	底部の破片, 器面は回転ナデ調整, 高台周辺はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整, 高台高0.8cm
6824	SK-6083	弥生土器 壺	16.4	(7.2)	-	-	明赤褐色 〃	不良	口頸部約1/4が残存, 器面は摩耗し剥離するが, 口縁部外面に指頭圧痕が残存
6825	SD-6005	土師質土器 椀	-	(1.8)	-	6.7	にぶい黄橙色 〃	良好	底部の破片, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切りで, 板状圧痕が一部に残存

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
6826	SD-6007	土師器 皿	17.6	2.8	-	10.5	明赤褐色 〃	良	底部1/2と口縁部の一部が残存, 成形は左手手法, 器面は摩耗するが全面にヘラ磨き
6827	SD-6008	弥生土器 高杯	20.8	(5.4)	-	-	褐灰色 〃	良好	口縁部から体部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面に刻目, 円形浮文, 微隆起突帯
6828	〃	土師器 杯身	17.7	5.6	-	11.5	〃 〃	やや 不良	約1/3が残存, 成形は左手手法, 内面はほぼ全面にヘラ磨き, 高台周辺はヨコナデ調整, 他は摩耗
6829	〃	須恵器 杯身	13.9	4.5	-	10.6	灰白色 〃	不良	約1/2が残存, 口縁部から内面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面は摩耗, 高台高0.8cm
6830	〃	〃 〃	14.2	4.3	-	10.3	褐灰色 灰色	良	一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り, 高台高0.9cm
6831	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	9.6	灰色 〃	良好	底部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り, 高台高0.8cm
6832	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	9.7	褐灰色 〃	〃	底部約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6833	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	9.7	灰白色 〃	不良	底部約1/4が残存, 器面は摩耗, 高台高1.0cm
6834	〃	〃 杯	-	(2.2)	-	7.8	灰色 〃	良好	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 体部下端に回転ヘラ削り, 底部はヘラ起こし
6835	〃	〃 長頸壺	11.0	(12.3)	-	-	灰白色 〃	良	口頸部の大半が残存, 器面は回転ナデ調整, 外面に2条の凹線
6836	〃	〃 〃	-	(10.8)	15.8	9.3	黄灰色 〃	良好	中胴部以下1/2弱が残存, 外面は回転ヘラ削りで, 器面に回転ナデ調整, 内底面に自然釉が付着
6837	〃	〃 短頸壺	-	(5.3)	18.0	-	褐灰色 灰色	良	上胴部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 肩部外面に1条の凹線
6838	〃	〃 〃	11.8	(4.2)	-	-	灰色 暗オリーブ色	良好	口縁部から上胴部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 口縁部に自然釉がかかり, 内面はハダ荒れ
6839	〃	〃 甕	(19.6)	(7.4)	-	-	灰白色 〃	不良	口縁部から上胴部の破片, 口頸部は回転ナデ調整, 胴部内面は同心円文, 外面は平行のタタキ
6840	〃	緑釉陶器 椀	-	(1.3)	-	-	灰色 〃	良	口縁部の細片, 硬質系, 器面は回転ナデ調整, 全面に緑釉を施釉するが, 大半が剥落
6841	〃	〃 〃	-	(0.8)	-	-	オリーブ灰色 〃	良好	体部の細片, 軟質系, 器面は回転ナデ調整, 全面に緑釉を施釉
6842	〃	土製品 土錘	4.8	1.8	1.8	15.9	橙色 〃	良	ほぼ完存, 円筒形, 表面は指押えとナデ調整, 孔径0.5cm
6843	SD-6009	須恵器 壺蓋	8.2	3.7	-	-	褐灰色 〃	〃	約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面は回転ヘラ削り, 天井部内面はナデ調整
6844	〃	〃 甕	16.8	(7.3)	(22.8)	-	灰黄色 〃	不良	口縁部から上胴部の破片, 器面は摩耗するが, 胴部内面に同心円文のタタキ目が残存
6845	〃	石製品 砥石	18.7	11.9	7.5	2.0kg	-	-	ほぼ完存, 石材は粗粒砂岩, 上面と側面2面の計3面に使用痕が残存
6846	SR-6001	〃 叩石	13.4	6.8	2.7	379.2	-	-	ほぼ完存, 石材は中粒砂岩, 上面と側面に敲打痕が残存
6847	SR-6002	弥生土器 壺	-	(2.6)	-	-	にぶい褐色 〃	良好	口縁部の細片, 器面はヨコナデ調整, 外面に指頭圧痕が残存, 端部にヘラ状工具による斜格子文
6848	〃	〃 ミニチュア土器	-	(8.1)	6.0	3.6	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部を除く約1/2が残存, 内面はしぼり目と指押え, 外面上半にナデ調整, 下半にヘラ磨き, 外底面は指押え
6849	〃	須恵器 杯蓋	-	(1.9)	-	-	灰黄褐色 〃	やや 不良	天井部の破片, つまみはヨコナデ調整, 他はナデ調整, つまみ径2.7cm, つまみ高0.9cm
6850	〃	土師質土器 杯	-	(2.8)	-	6.6	にぶい黄橙色 〃	良	底部から体部約1/4が残存, 成形はA技法, 内面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面は未調整

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6851	SR-6002	土師質土器 椀	-	(1.5)	-	5.3	灰黄褐色 〃	良	底部約1/5が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り, 高台高0.4cm
6852	〃	東播系須恵器 片口鉢	-	(3.2)	-	-	灰色 〃	良好	口縁部の細片, 器面は回転ナデ調整, 口唇部には重ね焼きの痕跡として自然釉がかかる。
6853	〃	鉄製品 鉄鏃	(14.7)	1.1	1.1	(11.8)	-	-	ほぼ完存, 主頭鏃, 鏃身長0.7cm, 頸部長9.7cm, 茎部長4.3cm
6854	SR-6003	土師器 皿	15.8	1.7	-	12.0	にぶい橙色 〃	良	約1/5が残存, 成形は左手手法, 口唇部は内側に折り込む。口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整
6855	〃	須恵器 杯蓋	-	(1.7)	-	-	褐灰色 〃	良好	つまみが残存, 外面はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, つまみ径2.7cm, つまみ高1.1cm
6856	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	-	- 灰黄色	やや 不良	つまみのみ残存, 器面はヨコナデ調整, つまみ径2.5cm, つまみ高0.7cm
6857	〃	〃 〃	9.9	(1.4)	-	-	灰色 〃	良	口縁部から天井部の破片, 天井部外面は回転ヘラ削り, 他は回転ナデ調整
6858	〃	〃 〃	10.2	(1.6)	-	-	灰黄色 灰色	〃	〃
6859	〃	〃 杯	13.3	3.1	-	9.2	灰色 〃	やや 不良	口縁部から底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内底面と外底面にナデ調整
6860	〃	〃 〃	(12.2)	(3.3)	-	8.0	黄灰色 灰色	良	底部から体部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整, 体部下半に回転ヘラ削り, 底部の切り離しはヘラ起こし
6861	〃	〃 杯身	-	(2.7)	-	8.0	黄灰色 〃	良好	底部約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 体部下端に回転ヘラ削り, 高台高0.5cm
6862	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	9.9	褐灰色 〃	〃	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整, 体部下端に回転ヘラ削り, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6863	〃	〃 〃	-	(2.6)	-	8.6	灰白色 黄灰色	〃	底部の大半と体部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面に自然釉とハダ荒れ
6864	〃	〃 〃	16.4	5.5	-	7.8	黄灰色 〃	良	底部1/2と口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面と外底面はナデ調整
6865	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	6.8	〃 〃	やや 不良	底部約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整, 体部下端に回転ヘラ削り, 外底面はナデ調整, 高台高0.9cm
6866	〃	〃 細口壺	9.8	(8.0)	-	-	黄灰色 灰オリーブ色	良好	口頸部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整, 口縁部内面から外面に自然釉がかかり, 頸部外面にハダ荒れ
6867	〃	〃 広口壺	13.5	(4.7)	-	-	灰色 〃	良	口頸部の破片, 器面は回転ナデ調整
6868	〃	〃 台付壺	-	(4.7)	-	11.7	黄灰色 褐灰色	良好	底部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面に自然釉, 底面には径3.5cmの円孔を外側から穿穴
6869	〃	〃 壺	-	(5.8)	-	13.6	灰色 〃	〃	底部1/2弱が残存, 器面は回転ナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り, 内底面に自然釉, 外底面はナデ調整
6870	〃	〃 甕	-	(4.5)	-	-	黄灰色 〃	良	口頸部の細片, 器面は回転ナデ調整
6871	〃	〃 〃	-	(4.9)	-	-	褐灰色 〃	良好	口頸部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 頸部外面に回転カキ目調整を加える。
6872	〃	〃 〃	-	(6.2)	-	-	褐灰色 灰色	〃	口頸部の細片, 口縁部から内面は回転ナデ調整, 頸部外面はナデ調整
6873	〃	〃 〃	27.0	(3.8)	-	-	灰白色 褐灰色	不良	口頸部の破片, 器面は回転ナデ調整
6874	〃	〃 転用硯	(10.6)	(8.9)	1.3	-	灰色 〃	良	一部が残存, 内面は摩滅するが, 同心円文のタタキの痕跡が僅かに残存, 外面には格子目状のタタキ
6875	〃	〃 〃	(16.3)	(14.8)	1.4	-	灰黄褐色 黄灰色	〃	ほぼ完存, 内面は摩滅し, 墨痕とみられる染み痕が各所に残存, 同心円文のタタキの痕跡が僅かに残存

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
6876	SR-6003	緑釉陶器 椀	11.8	(3.6)	-	(7.3)	褐灰色 にぶい黄橙色	良好	底部1/2と口縁部約1/5が残存、硬質系、器面は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整
6877	〃	〃 皿	-	(1.3)	-	-	灰オリーブ色 〃	良	体部の細片、軟質系、器面は回転ナデ調整、全面に緑釉を施釉
6878	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	-	〃 〃	不良	底部の細片、軟質系、底部は削り出し高台、全面に緑釉を施釉するが、器面は摩耗し、剥落する。
6879	〃	灰釉陶器 皿	-	(1.4)	-	-	〃 〃	良好	体部の細片、器面は回転ナデ調整、全面に灰釉を施釉、外面はハダ荒れ
6880	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	-	灰オリーブ色 灰白色	〃	体部の細片、器面は回転ナデ調整で、外面下端に回転ヘラ削り、全面に灰釉を施釉
6881	〃	土製品 土錘	4.0	1.5	1.4	(7.1)	にぶい黄橙色 〃	良	一部欠損、円筒形、表面は指押えとナデ調整、孔径0.6cm
6882	〃	石製品 叩石	11.3	10.6	2.6	472.5	-	-	完存、石材は中粒砂岩、表面は平滑で、鉄分が付着し、両面中央に敲打痕、縁辺を中心に擦痕が残存
6883	〃	〃 〃	9.7	9.0	2.6	355.7	-	-	完存、石材は細粒砂岩、表面は平滑で、片面中央と側面に弱い敲打痕、縁辺を中心に擦痕が残存
6884	SU-6001	須恵器 台付壺	-	(4.9)	-	9.2	灰色 〃	良好	底部約1/2が残存、内面は回転ナデ調整、外面は回転ヘラ削り、高台周辺はヨコナデ調整、外底面はナデ調整
6885	〃	緑釉陶器 杯	-	(1.2)	-	3.8	浅黄橙色 灰オリーブ色	不良	底部が残存、軟質系、器面は摩耗、底部の切り離しは回転糸切り、外面に緑釉が僅かに残存
6886	〃	〃 椀	-	(1.9)	-	-	オリーブ灰色 〃	良	口縁部の細片、軟質系、器面は回転ナデ調整で、全面に緑釉を施釉するが、剥落する箇所もみられる。
6887	〃	〃 〃	-	(1.5)	-	6.4	〃 〃	〃	底部の破片、軟質系、器面は摩耗するが、緑釉が部分的に残存、高台高0.4cm
6888	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	-	オリーブ灰色 浅黄橙色	やや不良	体部の細片、軟質系、器面は回転ナデ調整で、全面に緑釉を施釉するが、外面は摩耗し、釉が剥落
6889	〃	〃 〃	-	(0.7)	-	-	灰オリーブ色 〃	良	口縁部の細片、軟質系、器面はヘラ磨きで、全面に緑釉を施釉するが、外面は大半が剥落する。
6890	〃	〃 皿	-	(1.0)	-	-	〃 〃	良好	体部の細片、硬質系、内面と外面上半はヘラ磨き、下半は回転ヘラ削り、全面に緑釉を施釉
6891	〃	灰釉陶器 椀	-	(0.8)	-	-	〃 〃	良	体部の細片、器面は回転ナデ調整で、外面下半に回転ヘラ削り、内面上半から外面上半に灰釉を施釉
6892	P-6036	弥生土器 甕	18.8	(1.9)	-	-	灰褐色 〃	〃	口縁部約1/4が残存、口唇部はヨコナデ調整、他はナデ調整で、外面に刻目、微隆起突帯、クシ描直線文
6893	P-6023	〃 〃	21.4	(3.2)	-	-	にぶい黄橙色 灰褐色	良好	口頸部の破片、口縁部はヨコナデ調整、頸部内外面はナデ調整、口縁部外面に刻目とクシ描直線文
6894	P-6026	〃 〃	-	(3.7)	-	-	にぶい橙色 にぶい褐色	良	口頸部の破片、口縁部内面は摩耗、口唇部はヨコナデ調整、他はナデ調整、口縁部外面に刻目とクシ描直線文
6895	P-6036	〃 〃	17.7	(4.5)	-	-	橙色 〃	不良	口頸部の破片、内面は摩耗と剥離、頸部外面はハケ調整とクシ描直線文、口縁端部に刻目、外面に煤が付着
6896	〃	〃 〃	17.5	(6.3)	15.0	-	黒褐色 にぶい橙色	良	口縁部から上胴部の破片、内面は指押えとハケ調整、外面はハケ調整の後に口縁部にヨコナデ調整を加える。
6897	P-6021	〃 〃	16.8	(4.8)	-	-	黒色 にぶい褐色	良好	口縁部から上胴部の破片、口頸部はヨコナデ調整、他はナデ調整、口縁端部に擬凹線文
6898	P-6029	〃 〃	14.3	(8.4)	(21.0)	-	橙色 灰褐色	不良	口縁部から中胴部の約1/5が残存、口縁部内面はヨコナデ調整、胴部内面は指押えとナデ調整、外面はハケ調整
6899	P-6043	〃 〃	-	(3.7)	-	4.5	暗灰色 にぶい黄橙色	良	底部約1/3が残存、内面は指押えとナデ調整、外面はナデ調整の後にヘラ磨き、外底面はナデ調整
6900	P-6042	〃 〃	-	(4.2)	-	5.6	褐灰色 黒褐色	やや不良	底部約1/2が残存、器面は摩耗するが、内面に指頭圧痕、外面下端と外底面にナデ調整の痕跡が残存

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
6901	P-6029	弥生土器 高杯	-	(4.8)	-	-	灰褐色 〃	良	口縁部の細片, 口縁部はヨコナデ調整, 体部内面はナデ調整, 外面はヘラ磨き, 口縁端部に擬凹線文
6902	P-6035	土師器 皿	-	(2.5)	-	-	橙色 〃	良好	口縁部の細片, 成形は左手手法, 器面にはヨコ方向のヘラ磨き, 口唇部を内側に若干折り込む。
6903	P-6011	〃 盤	20.5	2.3	-	15.1	にぶい橙色 〃	不良	1/2弱が残存, 成形は左手手法, 器面は摩耗, 口唇部を内側に折り込む。高台高0.6cm
6904	P-6026	〃 〃	24.2	3.2	-	18.7	浅黄橙色 赤褐色	〃	約1/6が残存, 成形は左手手法, 器面は摩耗するが, 外面に赤色塗彩の痕跡が残存, 高台高0.5cm
6905	P-6048	〃 羽釜	(6.2)	-	-	-	にぶい橙色 〃	良好	口縁部の細片, 器面はヨコナデ調整, 外面に断面矩形の鏝を貼付
6906	P-6039	〃 〃	-	(6.5)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	鏝の一部が残存, 内面と鏝上面はナデ調整, 鏝下面はハケ調整
6907	P-6007	須恵器 杯蓋	-	(1.8)	-	-	灰色 〃	〃	つまみと天井部の破片, つまみはヨコナデ調整, 天井部外面は回転ヘラ削り, つまみ径2.4cm, つまみ高1.0cm
6908	P-6008	〃 〃	-	(1.5)	-	-	灰黄色 灰白色	やや不良	つまみと天井部の破片, つまみはヨコナデ調整, 天井部外面は回転ヘラ削り, つまみ径2.7cm, つまみ高0.8cm
6909	P-6009	〃 〃	9.6	(2.7)	-	-	灰色 〃	良	天井部から口縁部の破片, 天井部外面は回転ヘラ削り, 他は回転ナデ調整で, 天井部内面にナデ調整を加える。
6910	P-6041	〃 〃	20.5	(2.5)	-	-	灰黄色 黄灰色	やや不良	口縁部から天井部の破片, 天井部外面は回転ヘラ削り, 他は回転ナデ調整で, 天井部内面にナデ調整を加える。
6911	P-6022	〃 杯身	-	(1.9)	-	8.0	褐灰色 〃	良	底部約1/2が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り, 外底面はナデ調整
6912	P-6025	〃 〃	11.7	3.9	-	8.0	〃 〃	〃	口縁部の一部と底部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6913	P-6010	〃 〃	-	(1.5)	-	10.5	灰黄色 〃	不良	底部の破片, 内面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 他は摩耗, 高台高0.6cm
6914	P-6026	〃 〃	-	(2.9)	-	10.7	灰白色 〃	〃	底部約1/4が残存, 外底面はナデ調整, 他は摩耗, 高台高0.8cm
6915	P-6015	〃 〃	-	(1.7)	-	6.5	灰黄色 〃	〃	底部約1/2弱が残存, 底部の切り離しは回転ヘラ切り, 他は摩耗, 高台高0.6cm
6916	P-6019	〃 高杯	-	(9.0)	-	-	灰色 〃	良	脚台部の大半が残存, 器面は回転ナデ調整で, 杯部内底面にナデ調整, 内面にしほり目が残存
6917	P-6016	〃 台付壺	-	(3.3)	-	9.6	〃 〃	良好	底部1/2強が残存, 内面は回転ナデ調整で, 中央に自然釉が付着, 外面は回転ヘラ削りで, 自然釉が付着
6918	P-6012	〃 甕	-	(4.9)	-	-	〃 〃	良	口縁部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 外面にハケ状工具で列点文
6919	P-6013	〃 〃	-	(8.4)	-	-	黄灰色 〃	不良	口縁部から上胴部の細片, 口頸部が回転ナデ調整, 胴部内面は同心円文, 外面は平行のタタキ
6920	P-6045	土師質土器 杯	12.8	2.7	-	9.0	にぶい橙色 橙色	良	約2/5が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6921	P-6044	〃 〃	13.0	3.9	-	7.5	橙色 〃	〃	約2/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
6922	P-6047	〃 皿	12.7	2.0	-	8.2	〃 〃	良好	約2/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6923	P-6037	〃 〃	13.4	1.5	-	9.0	にぶい橙色 橙色	良	1/2弱が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
6924	P-6014	黒色土器 椀	14.0	3.9	-	7.6	黒色 にぶい黄橙色	〃	約1/5が残存, 内面は界線状のヘラ磨きの後に圈状のヘラ磨き, 口縁部はヨコナデ調整, 高台高0.3cm
6925	P-6030	緑釉陶器 椀	-	(1.8)	-	-	黄灰色 〃	〃	口縁部の細片, 軟質系, 器面は回転ナデ調整で, 全面に緑釉を施釉

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6926	P-6018	緑釉陶器 椀	-	(0.9)	-	-	浅黄橙色 灰オリーブ色	良	体部の細片, 軟質系, 器面は回転ナデ調整で, 全面に緑釉を施釉
6927	P-6037	〃 〃	-	(1.3)	-	-	灰オリーブ色 〃	不良	体部の細片, 軟質系, 器面は回転ナデ調整で, 全面に緑釉を施釉, 外面は摩耗
6928	〃	〃 〃	-	(1.3)	-	4.2	灰オリーブ色 灰黄色	〃	底部約1/2が残存, 軟質系, 底部は削り出し高台, 器面は回転ナデ調整, 全面に緑釉を施釉, 外面は剥落と摩耗
6929	〃	〃 皿	13.7	(2.4)	-	-	灰オリーブ色 〃	良	口縁部の破片, 軟質系, 器面は回転ナデ調整で, 全面に緑釉を施釉
6930	P-6046	〃 椀	-	(1.4)	-	-	明オリーブ灰色 〃	やや 不良	体部の細片, 硬質系, 器面は回転ナデ調整で, 外面は部分的にヘラ磨き, 全面に緑釉を施釉
6931	P-6017	〃 〃	11.2	3.7	-	7.1	灰白色 〃	良	底部約1/2と口縁部の一部が残存, 硬質系, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 高台高0.7cm
6932	P-6031	〃 〃	-	(1.6)	-	7.9	灰オリーブ色 灰白色	〃	底部約1/2が残存, 硬質系, 高台の付根から内面に緑釉を施釉, 高台周辺はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整
6933	P-6038	〃 皿	14.0	2.1	-	6.0	灰色 〃	良好	底部と口縁部の一部が残存, 底部は削り出し高台, 全面に緑釉を施釉, 口縁部内面は剥落が目立つ。高台高0.5cm
6934	P-6028	灰釉陶器 蓋	-	(0.8)	-	-	〃 〃	良	口縁部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 口唇部から内面に灰釉を施釉
6935	P-6033	〃 椀	-	(1.8)	-	-	明オリーブ灰色 〃	良好	体部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 外面下半に回転ヘラ削り, 全面に灰釉を施釉
6936	P-6017	〃 皿	-	(1.2)	-	-	灰オリーブ色 〃	〃	体部の細片, 全面に比較的厚く灰釉が残存
6937	P-6037	〃 〃	-	(1.2)	-	-	〃 〃	〃	体部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 全面に灰釉を施釉
6938	P-6040	〃 〃	-	(1.3)	-	-	〃 〃	良	体部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 外面の多くに回転ヘラ削り, 全面に灰釉を施釉するが, 大半が剥落
6939	P-6034	土製品 土錘	(3.3)	1.6	1.6	(8.6)	灰黄色 〃	〃	一方の端部が欠損, 円筒形, 表面は指押えとナデ調整, 孔径0.4cm
6940	P-6020	〃 〃	(3.8)	2.0	2.0	(10.1)	にぶい黄色 〃	やや 不良	一方の端部が欠損, 円筒形, 表面は摩耗, 孔径0.9cm
6941	P-6032	〃 〃	(6.0)	2.2	2.0	(20.4)	浅黄橙色 〃	良	一方の端部が欠損, 紡錘形, 表面はナデ調整, 孔径0.5cm
6942	P-6027	石製品 石鎌	2.7	1.5	0.4	1.5	-	-	完存, 石材はサヌカイト, 平基の石鎌
6943	P-6024	〃 磨石	10.0	4.3	2.3	157.3	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 一方の端部が摩滅
6944	〃	〃 〃	9.6	6.2	3.6	294.1	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 側面を中心に摩滅痕が残存, 縁辺に沿って煤が付着
6945	P-6007	〃 〃	10.6	8.5	2.5	(357.3)	-	-	ほぼ完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 側面を中心に弱い敲打痕が残存
6946	SB-6049	土師器 羽釜	-	(4.3)	-	-	灰褐色 にぶい褐色	良好	口縁部から胴部の細片, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 口縁下には断面かまほこ状の鑊が付く。
6947	SB-6049	土師質土器 杯	10.1	3.6	-	5.2	にぶい橙色 〃	良	約1/3が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
6948	SB-6051	石製品 投弾	3.9	3.0	2.7	46.1	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑
6949	SB-6052	〃 石臼	28.5	-	5.5	7.4kg	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 上面に4条から7条の条線が明瞭に残存
6950	SD-6010	弥生土器 甕	-	(3.8)	-	4.6	黄灰色 にぶい褐色	良好	底部約2/3が残存, 内面はヘラナデ, 外面はヘラ磨き, 外底面はナデ調整

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
6951	SD-6010	弥生土器 甕	-	(3.9)	-	5.0	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良	底部約1/2が残存, 内面はヘラ削り, 外面から外底面はナデ調整
6952	〃	土師器 皿	7.4	1.7	-	3.6	にぶい黄橙色 〃	良好	一部が残存, 成形は手づくね, 口縁部はヨコナデ調整, 他は指押え
6953	〃	〃 〃	10.0	2.1	-	6.6	にぶい橙色 にぶい黄橙色	良	〃
6954	〃	土師質土器 杯	10.5	2.4	-	4.8	にぶい橙色 〃	良好	口縁部の一部と底部約1/2が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整
6955	〃	〃 〃	11.2	2.8	-	4.5	〃 〃	良	約4/5が残存, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
6956	〃	〃 〃	11.7	4.6	-	4.5	〃 〃	〃	ほぼ完存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
6957	〃	〃 茶釜	13.1	(14.2)	20.9	-	〃 〃	〃	一部が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内外面はハケ調整, 鋳周辺はヨコナデ調整
6958	〃	備前焼 播鉢	-	(5.6)	-	-	褐灰色 〃	良好	口縁部の細片, 器面は回転ナデ調整, 外面に自然釉がかり, ハダ荒れ
6959	〃	鉄製品 毛抜き	(9.0)	0.3	0.8	(7.3)	-	-	基部が欠損, 錆化が進む。刃部長1.3cm, 幅1.0cm
6960	SP-6001	須恵器 杯身	-	(1.9)	-	8.8	黄灰色 〃	良	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にカキ目, 高台周辺はヨコナデ調整, 高台高0.8cm
6961	〃	〃 双耳壺	-	(6.5)	-	-	灰色 〃	〃	上胴部の把手部分が残存, 内面は回転ナデ調整, 外面は回転ヘラ削りで, 幅約1cm, 長さ約6cmの把手を貼付
6962	〃	土師質土器 杯	9.9	2.7	-	4.4	にぶい黄橙色 浅黄橙色	良好	約1/5が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
6963	〃	〃 〃	-	(2.0)	-	5.5	にぶい橙色 〃	〃	底部から体部の破片, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
6964	〃	〃 茶釜	13.0	(8.0)	22.6	-	〃 〃	〃	口縁部から中胴部の約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整
6965	〃	灰釉陶器 椀	-	(1.5)	-	-	灰オリーブ色 〃	〃	口縁部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 全面に灰釉を施釉し, 貫入あり。
6966	〃	〃 皿	-	(1.0)	-	-	灰オリーブ色 灰白色	〃	体部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 外面の大半に回転ヘラ削り, 内面のみに灰釉を施釉
6967	〃	備前焼 播鉢	-	(3.8)	-	-	にぶい赤褐色 褐灰色	〃	口縁部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 内面に条線が1ヵ所残存
6968	〃	青磁 稜花碗	-	(1.8)	-	4.9	灰オリーブ色 〃	良	底部約1/3が残存, 底部は削り出し高台, 内面から高台外面に施釉
6969	〃	土製品 土錘	(3.9)	1.9	2.1	(11.8)	橙色 〃	やや不良	片端が欠落, 円筒形, 表面は摩耗, 孔径0.8cm
6970	〃	〃 〃	(4.1)	1.1	1.0	(3.7)	灰白色 〃	〃	両端が欠落, 紡錘形, 表面は摩耗するが, 指頭圧痕が残存, 孔径0.5cm
6971	〃	石製品 投弾	3.3	3.1	2.7	38.9	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑
6972	〃	〃 〃	4.4	3.6	2.9	59.8	-	-	〃
6973	〃	〃 叩石	11.2	2.8	1.1	59.0	-	-	完存, 石材は粘板岩, 表面は平滑で, 各所に擦痕, 一方の端部に摩滅痕が残存
6974	〃	〃 磨石	9.0	(4.8)	1.4	(107.9)	-	-	ほぼ完存, 石材は緑色岩, 表面は平滑で, 各所に擦痕が残存
6975	P-6051	須恵器 杯身(転用硯)	-	(1.2)	-	11.1	灰褐色 褐灰色	良好	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内底面は摩滅し, 外面に墨が付着, 高台周辺はヨコナデ調整, 高台高0.5cm

VI区 遺物観察表40 (6976～6980)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
6976	P-6050	土師質土器 杯	11.3	2.7	-	5.8	にぶい橙色 〃	良好	約1/4が残存, 成形B技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
6977	P-6049	〃 〃	11.0	3.5	-	5.2	にぶい黄橙色 〃	良	約2/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内面にハケ調整, 内底面にナデ調整
6978	P-6052	〃 〃	11.9	4.2	-	3.9	橙色 〃	〃	約2/3が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
6979	SK-6098	近世陶器 碗	-	(2.5)	-	4.4	にぶい黄褐色 〃	良好	底部が残存, 底部は削り出し高台, 内面を中心に鉄釉を施釉, 外面に煤が附着, 高台高1.1cm
6980	SK-6100	土師質土器 小皿	6.6	1.5	-	4.2	浅黄橙色 〃	〃	約1/2が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り, 口唇部に煤が附着

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
7001	第I層	備前焼 播鉢	-	(6.6)	-	-	赤灰白色 灰色	良好	口縁部の細片, 器面は回転ナデ調整, 口縁部内面に指頭 圧痕が残存
7002	〃	肥前系磁器 皿	12.4	3.4	-	4.4	灰オリーブ色 〃	〃	約1/2が残存, 底部は削り出し高台, 体部外面から内面に 施釉, 見込に胎土目が3ヶ所残存
7003	〃	〃 〃	-	(1.3)	-	-	灰オリーブ色 オリーブ黄色	〃	口縁部の細片, 全面に施釉
7004	〃	〃 端反碗	14.8	(2.9)	-	-	灰白色 〃	〃	口縁部の破片, 口縁部内外面に界線, 外面に文様を描い てから全面に施釉
7005	〃	京焼系陶器 丸碗	-	(3.2)	-	5.4	にぶい黄橙色 〃	〃	底部の大半が残存, 底部は削り出し高台, 全面に淡褐色 釉を施釉し, 畳付は釉ハギ
7006	〃	近世以降陶器 端反皿	12.6	(2.6)	-	-	灰黄褐色 〃	〃	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 全面に施釉
7007	〃	〃 花瓶	4.8	(5.8)	-	-	灰オリーブ色 青灰色	〃	口頸部の大半が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内面にし ぼり目が残存, 口縁部内面から外面に施釉
7008	〃	〃 鉢	-	(8.0)	17.8	9.4	黒褐色 暗灰色	〃	体部以下約1/3が残存, 底部は削り出し高台, 体部下端に 回転ヘラ削り, 体部下半から内面に鉄釉を施釉
7009	〃	〃 土瓶	11.0	(11.1)	19.2	-	にぶい黄橙色 黒褐色	〃	底部を除く約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 外面下 胴部から内面に鉄釉を施釉し, 口縁部は釉ハギ
7010	〃	近世以降磁器 皿	10.0	(2.1)	-	-	灰白色 〃	〃	約1/4が残存, 全面に白色釉を施釉, 細かな貫入あり。
7011	〃	瓦 平瓦	(7.4)	(6.8)	1.8	-	浅黄色 〃	やや 不良	一部が残存, 凹面に布目, 側面はヘラで面取り, 凸面はナ デ調整
7012	第III層	土師器 皿	13.4	2.6	-	10.4	にぶい橙色 〃	良	一部が残存, 成形は左手手法, 器面は摩耗するが, ヨコナ デ調整とヘラ磨きの痕跡が残存
7013	〃	〃 甕	26.4	(6.7)	22.4	-	にぶい橙色 にぶい赤褐色	良好	口縁部と上胴部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面と胴 部外面はハケ調整, 口縁部外面は指押えの後にナデ調整
7014	〃	土師質土器 杯	-	(1.0)	-	5.7	橙色 浅黄褐色	良	底部約3/4が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
7015	〃	〃 〃	9.2	3.3	-	4.2	にぶい橙色 〃	良好	1/2弱が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 内面 に煤が付着, 底部の切り離しは回転糸切り
7016	〃	〃 〃	12.1	4.3	-	4.2	橙色 〃	良	口縁部約1/2が欠損, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整 で, 内面にロクロ目が残存, 底部の切り離しは回転糸切り
7017	〃	瓦器 椀	-	(1.0)	-	4.7	灰黄褐色 黄灰色	良好	底部約1/3が残存, 内面は摩耗, 外面は指押えで, 高台周 辺はヨコナデ調整
7018	〃	瓦質土器 鍋	-	(2.7)	-	-	黄灰色 黒褐色	〃	口縁部の細片, 口唇部から内面はヨコナデ調整, 外面に4 条の沈線
7019	〃	白磁 碗	-	(3.4)	-	-	灰白色 〃	良	口縁部の細片, 口縁部は玉縁状をなし, 全面に施釉
7020	〃	〃 〃	-	(2.9)	-	-	〃 〃	良好	〃
7021	〃	〃 〃	-	(3.6)	-	-	灰オリーブ色 〃	〃	口縁部から体部の細片, 体部は露胎となり, それ以外に 施釉, 貫入あり。
7022	〃	〃 〃	-	(2.0)	-	7.3	灰色 黄灰色	〃	底部約1/3が残存, 底部は削り出し高台, 外面は回転ヘラ 削り, 内面に施釉
7023	〃	青磁 鉢	-	(4.2)	-	-	明緑灰色 〃	〃	口縁部から体部の細片, 内面に波状の陰刻を施し, 全面 に施釉
7024	〃	青花 碗	-	(2.2)	-	4.4	灰白色 〃	〃	底部の約1/3が残存, 底部は削り出し高台, 見込と外面に 文様を描き, 全面に施釉し, 畳付は釉ハギ
7025	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	4.7	〃 〃	〃	底部の約2/3が残存, 底部は削り出し高台, 見込と外面に 文様を描き, 高台外面から内面に施釉

Ⅶ区 遺物観察表2 (7026～7050)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7026	第Ⅲ層	備前焼 播鉢	26.0	(3.4)	-	-	暗赤灰色 灰色	良好	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 口縁部外面に重 ね焼きの痕跡が残存
7027	〃	土製品 土錘	(2.5)	1.2	1.2	(3.0)	にぶい橙色 〃	良	約1/2が残存, 紡錘形, 表面は指押えとナデ調整, 孔径0.4cm
7028	〃	〃 〃	3.6	1.4	1.3	5.0	にぶい黄橙色 〃	〃	完存, 紡錘形, 表面は摩耗, 孔径0.4cm
7029	〃	〃 〃	(4.0)	1.2	1.1	(4.3)	〃 〃	〃	ほぼ完存, 紡錘形, 表面はナデ調整, 孔径0.4cm
7030	〃	〃 〃	(4.3)	1.4	1.3	(6.9)	にぶい橙色 〃	〃	端部が欠損, 紡錘形, 表面は摩耗, 孔径0.4cm
7031	〃	〃 〃	4.2	1.9	1.5	(10.2)	にぶい黄橙色 〃	〃	一部欠損, 紡錘形, 表面は摩耗するが, ナデ調整の痕跡が 残存, 孔径0.6cm
7032	第Ⅳ・Ⅴ層	土師器 杯蓋	-	(2.1)	-	-	明赤褐色 橙色	良好	つまみのみ残存, 外面はヨコナデ調整, 内面はナデ調整
7033	〃	〃 〃	15.8	3.6	-	-	橙色 〃	〃	天井部約1/3と口縁部の一部が残存, つまみはヨコナデ 調整, 天井部外面はヘラ削り, 口縁部はヨコナデ調整
7034	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	-	橙色 にぶい橙色	やや 不良	つまみを含む天井部約1/5が残存, 器面は摩耗するが, 内 面を中心にヘラ磨きの痕跡が僅かに残存
7035	〃	〃 杯身	-	(1.6)	-	10.8	にぶい橙色 〃	良	底部約1/5が残存, 成形は左手手法, 器面はヨコナデ調整 で, 内底面と外底面はナデ調整
7036	〃	〃 〃	-	(2.0)	-	11.6	明赤褐色 橙色	不良	底部1/2弱が残存, 成形は左手手法, 器面は摩耗
7037	〃	〃 〃	-	(2.7)	-	12.4	にぶい黄橙色 〃	良	底部約1/5が残存, 成形は左手手法, 内面はナデ調整で, 煤が付着, 外面はヘラ磨き, 高台周辺はヨコナデ調整
7038	〃	〃 〃	-	(2.6)	-	13.8	にぶい黄橙色 橙色	〃	底部の破片, 成形は左手手法, 外底面はヘラ磨き, 他は 摩耗
7039	〃	〃 杯	13.6	3.1	-	8.2	橙色 〃	〃	一部が残存, 内面はヨコ方向のヘラ磨き, 外面は摩耗
7040	〃	〃 〃	14.2	3.6	-	8.2	明赤褐色 〃	不良	約1/3が残存, 成形は左手手法, 器面は摩耗
7041	〃	〃 〃	13.4	3.5	-	8.7	橙色 〃	良	口縁部の一部と底部約1/3が残存, 成形は左手手法, 器面 は摩耗
7042	〃	〃 皿	13.0	1.7	-	8.8	〃 〃	不良	約1/3が残存, 成形は左手手法, 器面は摩耗するが, 底部 外面はヘラ切りとみられる。
7043	〃	〃 〃	16.0	2.2	-	12.6	〃 〃	〃	1/3弱が残存, 成形は左手手法, 器面は摩耗
7044	〃	〃 〃	18.2	2.5	-	15.0	灰黄褐色 橙色	良	一部が残存, 成形は左手手法, 器面は摩耗するが, 体部下 端にヘラ磨き, 底部外面はヘラ切りの後にナデ調整
7045	〃	〃 〃	16.1	2.3	-	13.6	浅黄橙色 〃	〃	一部が残存, 成形は左手手法, 器面は摩耗
7046	〃	〃 高杯	-	(3.8)	-	-	浅黄橙色 にぶい橙色	〃	杯底部と脚柱基部が残存, 脚部はヨコナデ調整とナデ調 整, 他は摩耗
7047	〃	〃 甕	18.6	(8.2)	(19.0)	-	橙色 〃	良好	口縁部から上胴部の約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調 整, 胴部内面はヘラ削り, 外面はナデ調整
7048	〃	〃 〃	25.4	(5.3)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部 内外面はナデ調整
7049	〃	〃 〃	33.0	(9.4)	29.6	-	褐色 黒褐色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口唇部から頸部内面はヨコナデ 調整, 胴部内面はナデ調整, 外面は指押えの後にハケ調整
7050	〃	〃 羽釜	19.0	(5.4)	21.2	-	灰黄褐色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部と鏝はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面はハケ調整

番号	遺構 層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
7051	第IV・V層	土師器 羽釜	-	(4.0)	-	-	にぶい橙色 明赤褐色	良好	口縁部の細片, 口唇部から鏝はヨコナデ調整, 内面はナデ調整
7052	〃	〃	-	(4.1)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部の破片, 口唇部から鏝はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整とナデ調整
7053	〃	〃	-	(5.2)	-	-	にぶい黄橙色 橙色	良	口縁部と鏝の一部が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 内面と鏝はナデ調整
7054	〃	〃	24.4	(4.6)	-	-	にぶい橙色 灰褐色	良好	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面はヨコナデ調整とタタキ
7055	〃	須恵器 杯蓋	-	(2.4)	-	-	灰黄色 〃	やや不良	天井部約1/3が残存, つまみはヨコナデ調整, 外面は回転ヘラ削り, 内面は回転ナデ調整の後にナデ調整
7056	〃	〃	-	(1.6)	-	-	灰色 〃	良好	天井部つまみ周辺が残存, つまみはヨコナデ調整, 外面は回転ヘラ削り, 内面は回転ナデ調整の後にナデ調整
7057	〃	〃	-	(1.0)	-	-	灰白色 〃	〃	天井部つまみ周辺が残存, 外面は自然釉がかかりハダ荒れ, 内面はナデ調整
7058	〃	〃	-	(1.9)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい黄色	不良	天井部約1/2が残存, 器面は摩耗するが, 外面に回転ヘラ削りの痕跡が僅かに残存
7059	〃	〃	-	(1.2)	-	-	灰白色 〃	〃	つまみを含む周辺が残存, 器面は摩耗
7060	〃	〃	11.4	4.0	-	6.2	灰色 〃	やや不良	1/2強が残存, 天井部はヘラ起こしで, 外面に回転ヘラ削りの痕跡が残存, 他は回転ナデ調整
7061	〃	〃	11.2	(2.2)	-	-	〃 〃	良好	天井部から口縁部の約1/4が残存, 天井部外面は回転ヘラ削り, 他は回転ナデ調整で, 天井部内面にナデ調整
7062	〃	〃	15.0	12.8	-	-	灰白色 〃	やや不良	約1/3が残存, 天井部外面約2/3に回転ヘラ削り, 他は回転ナデ調整で, 天井部内面にナデ調整
7063	〃	〃	15.6	(2.5)	-	-	灰白色 黄灰色	〃	約1/4が残存, 天井部外面約2/3に回転ヘラ削り, 他は回転ナデ調整
7064	〃	〃	14.0	2.2	-	-	灰色 〃	〃	天井部から口縁部の破片, つまみはヨコナデ調整, 天井部外面約2/3に回転ヘラ削り, 他は回転ナデ調整
7065	〃	〃	15.8	(2.4)	-	-	灰白色 〃	〃	約1/4が残存, 天井部外面約2/3に回転ヘラ削り, 他は回転ナデ調整で, 天井部内面にナデ調整
7066	〃	〃	13.8	(2.7)	-	-	灰色 〃	〃	天井部約1/3が残存, 天井部外面はほぼ全面に回転ヘラ削り, 他は回転ナデ調整で, 天井部内面にナデ調整
7067	〃	〃	20.0	(2.3)	-	-	灰白色 〃	不良	つまみ以外約1/5が残存, 器面は摩耗
7068	〃	〃	14.6	(2.1)	-	-	明紫灰色 灰色	良好	天井部と口縁部の破片, 天井部外面約2/3に回転ヘラ削り, 他は回転ナデ調整で, 天井部内面にナデ調整
7069	〃	〃 蓋	9.0	3.6	-	5.2	灰白色 〃	不良	1/4弱が残存, 天井部外面から口縁部は回転ナデ調整で, 天井部はヘラ起こし, 天井部内面は未調整
7070	〃	〃 杯身	-	(1.7)	-	8.0	〃 〃	〃	約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り, 外底面は摩耗
7071	〃	〃	-	(2.1)	-	8.6	〃 〃	良好	底部約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り
7072	〃	〃	-	(1.4)	-	8.6	灰色 〃	〃	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り
7073	〃	〃	13.0	4.2	-	8.8	〃 〃	〃	1/2弱が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り
7074	〃	〃	-	(2.3)	-	9.2	灰色 灰黄色	〃	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り
7075	〃	〃	-	(2.8)	-	10.0	灰色 〃	良	底部約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り

VII区 遺物観察表4 (7076~7100)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7076	第IV・V層	須恵器 杯身	-	(1.3)	-	11.2	灰白色 〃	やや不良	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り
7077	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	7.4	青灰色 〃	良好	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7078	〃	〃 〃	-	(2.4)	-	7.9	灰白色 〃	良	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7079	〃	〃 〃	-	(2.8)	-	8.2	〃 〃	不良	体部から底部の約1/3が残存, 器面は摩耗
7080	〃	〃 〃	-	(1.2)	-	8.5	灰色 〃	良好	底部約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7081	〃	〃 〃	-	(2.8)	-	9.8	〃 〃	〃	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7082	〃	〃 〃	-	(2.9)	-	6.8	灰白色 〃	〃	底部約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り
7083	〃	〃 〃	15.0	3.8	-	10.8	灰色 灰白色	〃	1/2弱が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り
7084	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	7.5	灰色 〃	〃	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7085	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	7.4	灰白色 〃	不良	底部約1/4が残存, 器面は摩耗
7086	〃	〃 〃	14.5	3.7	-	8.8	〃 〃	〃	一部が残存, 器面は摩耗
7087	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	9.4	灰色 〃	良	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7088	〃	〃 〃	-	(1.8)	-	10.8	〃 〃	不良	底部約1/4が残存, 器面は摩耗
7089	〃	〃 〃	-	(3.1)	-	5.8	灰黄色 灰白色	良好	底部から体部の約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 体部外面は回転ヘラ削り
7090	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	6.3	灰白色 〃	やや不良	底部の残存, 器面は摩耗
7091	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	6.5	黄灰色 灰白色	良好	底部約2/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 外面下端に回転ヘラ削り, 底部の切り離しは回転糸切り
7092	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	6.6	灰白色 〃	良	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り
7093	〃	〃 〃	-	(1.8)	-	6.9	〃 〃	〃	底部約1/2が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内面はナデ調整, 高台周辺はヨコナデ調整
7094	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	7.5	〃 〃	〃	一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整
7095	〃	〃 〃	-	(1.3)	-	7.8	〃 〃	良好	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内面はナデ調整
7096	〃	〃 〃	-	(3.6)	-	6.6	〃 〃	〃	底部約2/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7097	〃	〃 台付椀	-	(6.3)	-	8.0	灰黄色 〃	不良	椀底部と脚台部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 杯底部下端に回転ヘラ削り
7098	〃	〃 杯	-	(2.1)	-	8.0	灰白色 〃	〃	底部約1/4が残存, 器面は摩耗するが, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7099	〃	〃 〃	12.0	3.9	-	8.0	灰色 〃	良好	約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部外面はヘラ起こしの後にナデ調整
7100	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	8.4	灰白色 〃	不良	底部約1/2と体部の一部が残存, 器面は摩耗するが, 外底面に回転ヘラ切りの痕跡が残存

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7101	第IV・V層	須恵器 杯	13.0	3.9	-	8.6	灰白色 〃	不良	約1/4が残存, 器面は摩耗するが, 外底面には回転ヘラ切りの痕跡が残存, 内面には煤が付着
7102	〃	〃 〃	(14.5)	(4.0)	-	8.6	〃 〃	〃	底部約1/3が残存, 器面は摩耗
7103	〃	〃 〃	12.6	4.0	-	8.8	〃 〃	〃	約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面と外底面はナデ調整
7104	〃	〃 〃	16.0	(4.3)	-	12.3	灰色 〃	良	約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面はナデ調整, 外底面はナデ調整で, ハケ目が残存
7105	〃	〃 杯身	-	(2.6)	-	5.8	灰白色 〃	〃	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
7106	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	6.8	灰色 〃	良好	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面は回転ヘラ削り
7107	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	7.3	灰白色 〃	やや不良	底部約1/3が残存, 器面は摩耗するが, 外底面に回転糸切りの痕跡が残存
7108	〃	〃 皿	11.8	1.6	-	7.8	青灰色 〃	良好	一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
7109	〃	〃 〃	13.4	1.8	-	9.1	灰白色 〃	やや不良	一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切りの後にナデ調整
7110	〃	〃 〃	15.6	2.1	-	13.6	〃 〃	不良	一部が残存, 器面は摩耗するが, 外底面に回転ヘラ切りの痕跡が僅かに残存
7111	〃	〃 〃	16.0	2.0	-	13.0	灰色 〃	やや不良	一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ削り
7112	〃	〃 〃	16.9	2.1	-	13.6	灰白色 〃	不良	一部が残存, 器面は摩耗するが, 外底面に回転ヘラ切りの痕跡が残存
7113	〃	〃 鉢	16.7	(3.8)	-	-	灰色 〃	良好	口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整, 外面に重ね焼きの痕跡が残存
7114	〃	〃 提瓶	-	(7.0)	(15.0)	-	〃 〃	〃	頸部から上胴部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 側面は回転ヘラ削り, 内面頸部下端に指頭圧痕が残存
7115	〃	〃 壺	-	(9.7)	10.6	8.9	〃 〃	〃	口縁部以外が残存, 器面は回転ナデ調整で, 外面はハダ荒れするが, 「大」の刻書が残存
7116	〃	〃 短頸壺	9.0	(3.3)	(11.6)	-	褐灰色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 外面はハダ荒れ
7117	〃	〃 台付壺	-	(5.8)	(14.0)	7.8	灰色 〃	〃	底部約1/2が残存, 器面は回転ナデ調整で, 高台周辺はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整
7118	〃	〃 〃	-	(2.9)	-	15.0	〃 〃	良	底部約1/4が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面は回転ナデ調整, 外底面は回転ヘラ削りとナデ調整
7119	〃	〃 壺	-	(4.7)	-	14.8	〃 〃	良好	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 外面に回転ヘラ削り, 外底面はナデ調整
7120	〃	〃 〃	-	(11.0)	(22.8)	15.4	褐灰色 黄灰色	〃	下胴部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 外面に回転ヘラ削り, 下端にヘラ削り
7121	〃	〃 甕	19.6	(5.4)	-	-	黄灰色 灰色	やや不良	口縁部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 肩部外面に平行のタタキ
7122	〃	土師質土器 杯	10.4	3.5	-	6.8	にぶい黄橙色 〃	良	口縁部の一部と底部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整
7123	〃	〃 〃	-	(1.8)	-	8.6	橙色 にぶい橙色	やや不良	底部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ削り
7124	〃	〃 〃	-	(2.8)	-	7.0	灰白色 浅黄橙色	良	底部約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ削り
7125	〃	〃 〃	13.9	3.4	-	6.5	にぶい黄橙色 橙色	やや不良	約3/5が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 外底面に回転糸切りの痕跡が残存

Ⅶ区 遺物観察表6 (7126～7150)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7126	第Ⅳ・Ⅴ層	土師質土器 杯	12.6	(4.0)	-	-	にぶい黄橙色 橙色	良	口縁部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整
7127	〃	〃 〃	14.7	5.3	-	5.8	にぶい橙色 〃	〃	底部と口縁部約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内面に回転ヘラ削り
7128	〃	〃 椀	-	(2.0)	-	4.7	にぶい黄橙色 灰白色	不良	底部が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 外底面に回転糸切りの痕跡が残存
7129	〃	〃 〃	-	(3.8)	-	7.0	灰白色 浅黄橙色	やや不良	底部1/2弱が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
7130	〃	〃 〃	14.8	(4.6)	-	(5.0)	にぶい黄橙色 〃	良好	底部以外1/2弱が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, ヘラ磨きを加える。
7131	〃	〃 〃	17.0	(4.0)	-	-	灰白色 〃	良	口縁部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内面にヘラ磨き, 外面に回転ヘラ削り
7132	〃	〃 〃	-	(2.0)	-	5.2	浅黄橙色 にぶい黄橙色	不良	底部約1/5が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗
7133	〃	〃 〃	-	(1.2)	-	5.8	浅黄橙色 〃	やや不良	底部の大半が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 内面に煤が付着
7134	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	5.8	灰黄褐色 にぶい橙色	〃	底部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗
7135	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	6.3	浅黄色 にぶい黄橙色	良	底部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 底部内外面にナデ調整
7136	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	(7.2)	橙色 〃	やや不良	底部約2/3が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗
7137	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	7.8	黄灰色 淡赤橙色	良	底部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 底部内外面にナデ調整
7138	〃	〃 〃	-	(2.5)	-	5.8	浅黄橙色 〃	良好	底部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内面にヘラ磨き, 外面に回転ヘラ削り
7139	〃	〃 〃	-	(2.6)	-	6.6	浅黄色 灰白色	良	底部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内面にナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り
7140	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	6.8	灰白色 浅黄橙色	〃	底部約3/4が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 高台周辺はヨコナデ調整
7141	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	6.9	灰白色 〃	〃	底部の大半が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗
7142	〃	〃 〃	-	(2.9)	-	5.2	灰黄色 橙色	不良	底部1/2弱が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗
7143	〃	〃 〃	-	(3.7)	-	6.0	灰白色 〃	やや不良	口縁部が欠損, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整で, 外面に回転ヘラ削り, 底部の切り離しは糸切り
7144	〃	〃 〃	-	(1.8)	-	6.4	灰黄褐色 にぶい黄橙色	良好	底部約2/3が残存, 成形はA技法, 内面はナデ調整, 外面は回転ヘラ削り, 外底面はナデ調整
7145	〃	〃 〃	-	(1.8)	-	6.7	浅黄橙色 〃	やや不良	底部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 底部の切り離しは回転糸切り
7146	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	6.1	灰白色 〃	〃	底部約2/3が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 外面下端に回転ヘラ削りの痕跡が残存
7147	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	6.7	〃 〃	〃	底部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 外面下端に回転ヘラ削り
7148	〃	〃 皿	12.0	1.8	-	10.0	橙色 〃	〃	約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 外底面に回転ヘラ切りの痕跡が残存
7149	〃	〃 〃	12.1	1.5	-	8.4	〃 〃	良好	約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ削り
7150	〃	〃 〃	14.0	1.7	-	6.4	にぶい橙色 〃	良	一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ削り

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
7151	第IV・V層	土師質土器 皿	13.2	2.8	-	8.0	橙色 〃	不良	ほぼ完存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 内底面にナデ調整の痕跡が残存
7152	〃	〃 小皿	9.6	2.2	-	6.6	浅黄橙色 橙色	良	約3/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7153	〃	〃 〃	9.6	2.2	-	5.6	にぶい黄橙色 〃	良好	1/2弱が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは静止糸切り
7154	〃	〃 〃	8.0	1.4	-	5.6	橙色 〃	やや不良	約1/5が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 外底面に回転糸切りの痕跡が残存
7155	〃	〃 〃	9.8	1.7	-	7.2	にぶい橙色 〃	良好	一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
7156	〃	〃 〃	8.7	(1.5)	-	-	〃 〃	良	口縁部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整
7157	〃	〃 〃	7.4	1.6	-	5.0	浅黄橙色 にぶい橙色	〃	口縁部約1/3と底部が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整
7158	〃	緑釉陶器 椀	-	(0.8)	-	-	オリーブ灰色 〃	〃	口縁部の細片, 軟質系, 全面に緑釉を施釉
7159	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	-	灰白色 〃	〃	口縁部の細片, 軟質系, 器面は回転ナデ調整で, 全面に緑釉を施釉するが, 部分的に剥落
7160	〃	〃 〃	-	(2.0)	-	-	オリーブ灰色 〃	〃	口縁部の細片, 軟質系, 器面は回転ナデ調整で, 全面に緑釉を施釉
7161	〃	〃 〃	-	(2.5)	-	-	〃 〃	良好	体部の細片, 軟質系, 器面は回転ナデ調整で, 全面に緑釉を施釉
7162	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	-	浅黄橙色 オリーブ灰色	良	体部の細片, 軟質系, 器面は摩耗し, 外面に緑釉が部分的に残存
7163	〃	〃 〃	-	(1.3)	-	6.6	緑色 〃	〃	底部の破片, 軟質系, 器面は摩耗し, 高台外面の一部に緑釉が残存
7164	〃	〃 〃	12.0	(2.9)	-	-	オリーブ黒色 〃	良好	口縁部の破片, 硬質系, 器面は回転ナデ調整で, 外面に回転ヘラ削り, 全面に緑釉を施釉
7165	〃	〃 〃	-	(2.4)	-	-	灰オリーブ色 〃	〃	口縁部の細片, 硬質系, 器面は回転ナデ調整で, 全面に緑釉を施釉
7166	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	7.8	緑色 〃	〃	底部の一部が残存, 硬質系, 器面は回転ナデ調整で, 高台内側から内面にかけて緑釉を施釉
7167	〃	〃 皿	13.6	(1.2)	-	-	灰オリーブ色 〃	〃	口縁部の破片, 硬質系, 器面は回転ナデ調整で, 全面に緑釉を施釉
7168	〃	〃 〃	-	(1.1)	-	-	オリーブ灰色 灰白色	〃	体部の細片, 硬質系, 外面はヘラ磨き, 全面に緑釉を施釉
7169	〃	灰釉陶器 椀	-	(1.2)	-	-	灰黄色 〃	〃	体部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 全面に灰釉を施釉
7170	〃	〃 皿	-	(2.1)	-	-	〃 〃	〃	体部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 外面に回転ヘラ削り, 全面に灰釉を施釉
7171	〃	〃 〃	-	(2.5)	-	-	灰色 黄灰色	〃	体部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 外面下半に回転ヘラ削り, 外面上半から内面にかけて灰釉を施釉
7172	〃	瓦器 椀(転用碗)	-	(1.2)	-	4.7	灰色 〃	〃	底部が残存, 内面はナデ調整の後にヘラ磨きで, 墨痕らしき痕跡が残存, 外面は指押え
7173	〃	青磁 端反碗	18.2	(4.5)	-	-	灰オリーブ色 〃	〃	口縁部から体部の破片, 内面にカキ目文, 全面に施釉し, 細かな貫入あり。
7174	〃	瓦 平瓦	(7.3)	(7.4)	1.4	-	灰白色 〃	不良	細片, 凹面に布目, 凸面に縄目のタタキ, 側面はヘラで面取り
7175	〃	土製品 紡錘車	2.8	3.3	0.8	(7.2)	にぶい黄橙色 橙色	良好	ほぼ完存, 土器片の転用で未成品, 上面にハケ目が残存, 円孔はずれ, 未貫通

Ⅶ区 遺物観察表8 (7176～7200)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7176	第Ⅳ・Ⅴ層	土製品 土錘	2.9	1.3	1.2	(3.3)	にぶい黄橙色 〃	やや 不良	ほぼ完存, 紡錘形, 表面は摩耗, 孔径0.5cm
7177	〃	〃 〃	(4.6)	1.7	1.6	(11.0)	橙色 〃	良	端部が欠損, 円筒形, 表面はナデ調整, 孔径0.4cm
7178	〃	石製品 石鏃	(2.1)	(2.1)	0.4	(1.2)	-	-	基部の一部が欠損, 石材はサヌカイト, 凹基の石鏃
7179	〃	〃 穿孔具	6.5	2.0	1.7	35.9	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 各所に擦痕が残存し, 両端が摩滅し, 尖る。
7180	〃	〃 砥石	(18.4)	14.7	6.3	(2.7kg)	-	-	大半が残存, 石材は細粒砂岩, 3面に使用痕が残存し, 側面には2条の条痕が残存
7181	〃	古銭	2.4	2.0	0.1	1.7	-	-	完存, 真書の熙寧元寶(北宋, 1068～1077年)
7182	第Ⅵ層	弥生土器 長頸壺	12.6	(7.2)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良	口頸部の破片, 口唇部から口縁部内面はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ調整, 外面にヘラ描沈線, クシ描直線文
7183	〃	〃 壺	12.6	(6.7)	-	-	黄灰色 にぶい橙色	〃	口頸部約2/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面は指ナデ, 外面はハケ調整, 口縁端部に擬凹線文
7184	〃	〃 〃	14.4	(6.3)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良好	口頸部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整で, 口縁部内面と頸部外面下端にハケ目が残存
7185	〃	〃 〃	12.8	(11.5)	(24.8)	-	橙色 にぶい橙色	良	口縁部と上胴部の大半が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内外面はハケ調整, 口縁端部に擬凹線文
7186	〃	〃 甕	22.0	(4.8)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良好	口頸部約1/6が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はハケ調整の後にナデ調整, 外面はヘラ磨き
7187	〃	〃 〃	18.2	(3.4)	-	-	灰黄褐色 黒褐色	良	口頸部約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整, 口縁部外面に刻目と微隆起突帯
7188	〃	〃 〃	14.7	(2.0)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整, 口縁端部に凹線文
7189	〃	〃 〃	20.1	(7.4)	(21.6)	-	にぶい褐色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内外面はナデ調整, 口縁端部に凹線文
7190	〃	〃 〃	10.2	(5.3)	(11.4)	-	灰黄褐色 〃	良好	口縁部から上胴部の約1/3が残存, 口頸部から肩部外面はヨコナデ調整, 胴部内面はヘラ削り
7191	〃	〃 〃	12.0	(5.9)	12.5	-	橙色 〃	良	口縁部から中胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面は指押え, 外面はヘラ削り
7192	〃	〃 〃	11.0	(3.8)	(12.3)	-	にぶい褐色 〃	良好	口縁部から上胴部の破片, 胴部内面はヘラ削り, 外面はハケ調整で, 口頸部内面から肩部にヨコナデ調整
7193	〃	〃 〃	22.0	(5.7)	(22.2)	-	明褐色 明赤褐色	〃	口縁部から上胴部の破片, 頸部内面はハケ調整で, 口頸部にヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面はハケ調整
7194	〃	〃 〃	14.6	(8.5)	(20.4)	-	にぶい褐色 にぶい黄橙色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整で, 外面にヘラ磨きと刺突文, 胴部内面は指押えとナデ調整
7195	〃	〃 〃	28.7	(7.9)	26.6	-	灰黄褐色 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口唇部から頸部内面はヨコナデ調整, 口縁部外面は指押え
7196	〃	〃 〃	-	(7.6)	(15.7)	6.5	黒褐色 にぶい黄橙色	良	底部約1/2が残存, 器面はナデ調整で, 内面に焦げ目が付着
7197	〃	〃 〃	-	(5.4)	-	7.0	にぶい褐色 明赤褐色	不良	底部約2/3が残存, 器面は摩耗するが, 外面にタテ方向のヘラ磨きの痕跡が残存, また外面は被熱で変色
7198	〃	〃 〃	-	(5.2)	-	7.2	浅黄橙色 橙色	良	底部が残存, 内面と外底面はナデ調整, 外面はハケ調整
7199	〃	〃 〃	-	(6.0)	(13.6)	7.4	にぶい褐色 橙色	良好	底部約1/3が残存, 内面はナデ調整, 外面はヘラ磨き, 外底面は未調整
7200	〃	〃 〃	-	(6.6)	-	7.4	黄灰色 にぶい黄橙色	良	底部約1/3が残存, 内面は摩耗するが, 焦げ目が付着, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7201	第VI層	弥生土器 甕	-	(5.5)	-	7.7	黄灰色 にぶい橙色	不良	底部が残存, 内面は指押えと指ナデ, 他は摩耗
7202	〃	〃 〃	-	(29.0)	34.6	12.5	橙色 〃	良	中胴部以下の大半が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 他は摩耗するが, 外面にヘラ磨きの痕跡が残存
7203	〃	〃 高杯	-	(4.6)	-	-	赤褐色 明赤褐色	やや 不良	口縁部から体部の細片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面は剥離, 外面はヘラ磨き
7204	〃	〃 〃	-	(7.3)	-	-	橙色 〃	良好	脚柱基部が残存, 杯部内面と外面はヘラ磨き, 脚部内面はしほり目とヘラ削り
7205	〃	〃 ミニチュア土器	-	(3.3)	(6.0)	4.0	橙色 にぶい橙色	良	底部約1/2が残存, 内面は指ナデ, 外面は摩耗, 外底面はナデ調整
7206	〃	〃 〃	-	(3.8)	-	4.9	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	底部の破片, 脚台部はナデ調整, 基部は指押え
7207	〃	石製品 石庖丁	(6.7)	(2.8)	0.6	(14.0)	-	-	一部が残存, 石材は粘板岩, 表面は全面を研磨し, 紐孔が1個残存
7208	〃	〃 〃	8.0	(3.9)	0.8	(42.6)	-	-	ほぼ完存, 石材はサヌカイト, 両端に挟り, 刃部長7.6cm, 幅0.7cm, 表面は風化する。
7209	〃	〃 〃	(7.6)	4.6	0.4	(25.8)	-	-	約1/2が残存, 石材は千枚岩, 表面は全面を研磨するが未成品, 刃部長4.1cm以上, 幅0.3cm
7210	〃	〃 打製石鎌	11.0	6.3	1.9	164.3	-	-	ほぼ完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕が残存, 裏面は剥離面が残存
7211	〃	〃 扁平片刃石斧	5.1	3.2	0.8	(20.4)	-	-	ほぼ完存, 石材は結晶片岩, 表面は全面を研磨, 刃部長2.9cm, 幅0.5cm
7212	〃	〃 挟入柱状片刃石斧	7.8	2.9	2.6	(128.7)	-	-	ほぼ完存, 石材は結晶片岩, 断面は柱状で, 全面を研磨, 刃部長2.8cm, 幅2.6cm
7213	〃	〃 両刃石斧	(9.2)	5.8	4.3	(393.9)	-	-	基部が欠損, 石材は結晶片岩, 表面は全面を研磨し, 側面に摩滅痕が残存, 刃部長5.7cm, 幅2.3cm
7214	〃	〃 石鎌	2.2	1.5	0.2	0.9	-	-	完存, 石材はサヌカイト, 磨製で凹基の石鎌
7215	〃	〃 〃	(2.4)	(1.7)	0.4	(1.2)	-	-	ほぼ完存, 石材はサヌカイト, 凹基の石鎌
7216	〃	〃 磨石	8.6	6.9	3.6	(309.5)	-	-	ほぼ完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 片面中央に弱い敲打痕, 縁辺を中心に擦痕が残存, 側面は表面が剥落
7217	ST-7001	弥生土器 甕	19.7	(3.0)	-	-	にぶい黄褐色 浅黄橙色	やや 不良	口縁部の破片, 器面は摩耗するが, 外面に指頭圧痕が残存
7218	〃	〃 〃	-	(3.9)	(8.8)	6.2	にぶい橙色 明赤褐色	良好	底部の大半が残存, 内面は指ナデとヘラ削り, 外面はヘラ磨き, 外底面はナデ調整
7219	〃	〃 鉢	13.0	(5.0)	-	-	浅黄橙色 にぶい橙色	良	口縁部から体部の約1/3が残存, 内面はハケ調整で, 全面にヨコナデ調整を加えた上で, 外面にヨコ方向のヘラ磨き
7220	〃	〃 蓋	-	(5.0)	-	-	橙色 〃	良好	天井部の大半が残存, 天井部外面はナデ調整, 他は指押えで, 外面にナデ調整を加える。
7221	ST-7002	〃 壺	-	(6.2)	(10.6)	5.0	橙色 にぶい橙色	良	底部が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整
7222	〃	〃 〃	-	(12.8)	(25.2)	5.2	灰黄褐色 褐灰色	〃	下胴部以下約1/3が残存, 内面はナデ調整, 外面はヘラ磨き, 外底面はナデ調整
7223	〃	〃 甕	-	(5.4)	(9.0)	4.9	褐灰色 黄灰色	〃	底部が残存, 器面はナデ調整で, 外面を中心に剥離と摩耗がみられる。
7224	〃	〃 〃	-	(5.8)	(11.4)	5.0	褐灰色 明赤褐色	やや 不良	底部が残存, 内面はナデ調整, 他は剥離と摩耗
7225	〃	〃 高杯	-	(6.1)	-	7.5	にぶい褐色 にぶい橙色	良好	杯底部と脚台部約1/5が残存, 杯部内面は指押え, 外面基部はヘラナデ, 脚部内面にしほり目が残存

Ⅶ区 遺物観察表10 (7226～7250)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7226	ST-7002	石製品 叩石	10.6	4.5	2.0	139.2	-	-	ほぼ完存, 石材は粘板岩, 表面は全面を研磨し, 先端部に敲打痕と摩滅痕が残存
7227	〃	〃 磨石	17.2	11.9	4.5	1.5kg	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕, 側面に摩滅が残存
7228	〃	〃 砥石	23.0	16.3	9.1	3.4kg	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 主に5面を使用する。
7229	ST-7003	〃 石鏃	(2.5)	1.6	0.5	(1.5)	-	-	茎の先が欠損, 石材はサヌカイト, 凸基の石鏃
7230	〃	〃 〃	(2.8)	1.7	0.5	(1.3)	-	-	先端のみ欠損, 石材はサヌカイト, 凹基の石鏃
7231	ST-7005	〃 磨石	9.6	5.3	2.8	200	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕が残存
7232	〃	〃 〃	13.1	6.1	3.3	422.2	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 片面中央部と側面に弱い敲打痕, 縁辺を中心に擦痕が残存
7233	ST-7006	弥生土器 壺	13.3	(13.0)	(15.9)	-	にぶい橙色 にぶい褐色	良	口縁部から中胴部の約1/2が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整の後にナデ調整
7234	〃	〃 蓋	12.8	5.4	-	-	にぶい橙色 褐灰色	〃	ほぼ完存, 天井部内外面はナデ調整, 口縁部はヨコナデ調整で, 天井部外端に指頭圧痕が残存
7235	〃	石製品 叩石	10.4	9.1	4.5	638.3	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 片面中央と側面に敲打痕, 縁辺を中心に擦痕が残存
7236	〃	〃 磨石	10.2	6.9	2.9	299.5	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕, 側面の一部に弱い摩滅痕が残存
7237	〃	〃 穿孔具	5.5	1.2	0.8	8.9	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 細い棒状をなし, 表面は平滑で, 縁辺の一部に擦痕, 先端に摩滅痕が残存
7238	ST-7007	弥生土器 壺	14.6	(6.7)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良	口頸部の破片, 口縁部から頸部外面にヨコナデ調整, 他はナデ調整, 口縁端部に凹線文
7239	〃	〃 〃	-	(2.8)	-	-	灰黄褐色 にぶい黄褐色	良好	上胴部の細片, 器面はナデ調整で, 外面にクシ描直線文, 微隆起突帯, 楕円形浮文を施す。
7240	〃	〃 甕	18.6	(5.4)	-	-	にぶい黄褐色 〃	〃	口頸部約1/3が残存, 口唇部から内面はヨコナデ調整, 外面はナデ調整で, 口縁部外面に指頭圧痕が残存
7241	〃	〃 〃	-	(3.2)	-	6.1	にぶい褐色 にぶい黄褐色	〃	底部が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面はヘラ磨き, 外底面はナデ調整
7242	〃	〃 蓋	-	(3.2)	-	-	にぶい黄褐色 〃	良	天井部約2/3が残存, 天井部外面はナデ調整, 外面は指ナデ, 内面は指押えと指ナデ
7243	〃	〃 ミニチュア土器	4.6	8.0	5.7	3.6	橙色 明赤褐色	〃	約2/3が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はしほり目と指頭圧痕, 外面はハケ調整の後にナデ調整
7244	〃	〃 手づくね土器	3.2	5.3	4.1	2.9	浅黄褐色 〃	良好	完存, 口縁部は指押えとナデ調整, 底部外面はヘラナデ, 外底面はナデ調整
7245	〃	石製品 扁平片刃石斧	(10.4)	5.1	1.2	(77.0)	-	-	約2/3が残存, 石材は蛇紋岩, 未成品で側面を中心に研磨痕が残存
7246	〃	〃 叩石	9.0	5.9	2.5	195.4	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 側面と両端に敲打痕が残存
7247	〃	〃 〃	14.8	9.0	5.7	1.1kg	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 片面中央と側面3ヵ所に敲打痕と擦痕が残存
7248	〃	〃 磨石	9.9	8.5	2.6	264.7	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕, 側面に敲打痕が残存
7249	〃	〃 〃	14.5	6.8	2.6	409.7	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕, 側面に弱い敲打痕が残存
7250	〃	〃 〃	11.0	7.8	3.5	455.5	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕が残存

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
7251	ST-7007	石製品 磨石	13.5	10.5	3.1	491.8	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕, 両端及び側面に摩滅痕が残存
7252	〃	〃 〃	13.0	(10.4)	5.1	(943.8)	-	-	ほぼ完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕, 側面に弱い敲打痕が残存
7253	〃	〃 砥石	5.4	3.9	1.7	(49.4)	-	-	ほぼ完存, 石材は中粒砂岩, 上下2面と側面3面の計5面に使用痕が残存し, 元の形状は留めない。
7254	〃	〃 〃	(9.8)	3.9	2.5	(100.1)	-	-	一部欠損, 石材は泥岩, 5面に使用痕が残存し, 元の形状は留めない。
7255	〃	〃 〃	13.1	9.3	4.4	(724.4)	-	-	ほぼ完存, 石材は中粒砂岩, 上下2面と側面4面の計6面に使用痕が残存
7256	〃	〃 〃	(17.2)	11.5	(5.9)	(1.4kg)	-	-	約2/3が残存, 石材は粗粒砂岩, 上下2面と側面2面の計4面に使用痕が残存し, 敲打痕も各所に残存
7257	ST-7008	弥生土器 甌	-	(3.2)	-	6.2	にぶい褐色 灰黄褐色	良	底部約1/4が残存, 内底面に径3.3cmの円孔を焼成後に穿つ。外面はナデ調整で, 煤が付着
7258	〃	石製品 石庖丁	4.0	9.0	0.9	42.6	-	-	完存, 石材は粘板岩, 表面は全面を研磨し, 紐孔2個を両面から穿つ。刃部長8.8cm, 幅0.4cm
7259	〃	〃 石鏃	(4.5)	2.0	0.5	(3.2)	-	-	ほぼ完存, 石材はサヌカイト, 凸基の石鏃
7260	〃	〃 投弾	3.3	3.2	2.4	36.2	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑
7261	ST-7009	弥生土器 壺	18.2	(6.5)	-	-	にぶい黄橙色 橙色	良	口頸部の破片, 器面は摩耗
7262	〃	〃 〃	17.4	(10.2)	-	-	褐灰色 明黄褐色	〃	口頸部から上胴部1/2弱が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 頸部外面はハケ調整, 胴部内面は指押え
7263	〃	〃 〃	23.7	(31.0)	31.6	-	灰色 にぶい橙色	〃	口縁部約2/3と中胴部より上が約1/2残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ調整, 外面はヘラナデ
7264	〃	〃 〃	19.0	(8.7)	-	-	にぶい黄褐色 〃	やや不良	口頸部の破片, 口頸部内面上半はハケ調整, 下半は指ナデとナデ調整, 外面は摩耗するが, ハケ目が残存
7265	〃	〃 〃	17.0	(7.4)	-	-	にぶい赤褐色 にぶい褐色	良好	口縁部から上胴部の破片, 口縁部から頸部外面はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ調整, 外面に突帯と棒状浮文
7266	〃	〃 甕	19.6	(9.8)	(17.6)	-	灰黄色 黄灰色	良	口縁部と上胴部約1/2が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 口縁部外面に刻目, 微隆起突帯等
7267	〃	〃 〃	-	(3.6)	-	-	灰褐色 灰黄褐色	〃	口縁部の細片, 口唇部はヨコナデ調整, 他はナデ調整で, 外面に貼付突帯
7268	〃	〃 〃	16.0	(4.2)	-	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整で, 口縁部外面に指頭圧痕が残存
7269	〃	〃 〃	-	(4.5)	(11.4)	5.9	灰褐色 にぶい橙色	〃	底部が残存, 内面はナデ調整で, 焦げ目が付着, 外面はヘラナデ, 外底面はナデ調整
7270	〃	〃 壺	-	(12.8)	(19.2)	6.0	暗灰色 にぶい黄灰色	〃	底部約1/3が残存, 内面は指押えとハケ調整, 外面はヘラ磨き, 外底面はナデ調整
7271	〃	石製品 太型蛤刃石斧	(13.1)	(5.6)	4.2	(344.2)	-	-	刃部が残存, 石材は緑色岩, 残部は比較的平滑で, 基部を中心に研磨され, 各所に弱い敲打痕もみられる。
7272	〃	〃 〃	20.1	6.5	4.0	904.5	-	-	ほぼ完存, 石材は緑色岩, 表面はほぼ全面を研磨, 刃部長4.7cm, 幅2.0cm
7273	〃	〃 投弾	4.1	3.3	2.3	38.8	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑
7274	〃	〃 磨石	(10.1)	8.6	2.6	(365.5)	-	-	部分的に欠損, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕が残存し, 多くの部分に光沢あり。
7275	〃	〃 砥石	(11.5)	5.9	4.8	(540.0)	-	-	約2/3が残存, 石材は中粒砂岩, 4面に使用痕が残存し, 煤の付着もみられる。

Ⅶ区 遺物観察表 12 (7276～7300)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7276	ST-7010	石製品 砥石	(16.2)	(10.0)	4.7	(1.1kg)	-	-	約 2/3 が残存, 石材は中粒砂岩, 両面と側面に使用痕が 残存
7277	ST-7011	弥生土器 甕	14.4	(15.1)	13.8	-	灰黄褐色 にぶい黄橙色	良	口縁部から下胴部の約 1/4 が残存, 口唇部はヨコナデ調 整, 内面は指ナデの後にナデ調整
7278	〃	〃 〃	20.0	(6.4)	-	-	にぶい橙色 灰黄褐色	良好	口頸部約 2/3 が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 頸部内外 面はナデ調整, 口縁部外面は 2 段に指押え
7279	〃	石製品 投弾	5.9	4.0	3.7	113.2	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 部分的に擦痕が 残存
7280	ST-7013	弥生土器 壺	12.0	(8.7)	(12.2)	-	暗灰黄色 橙色	やや 不良	中胴部以上約 1/3 が残存, 器面は摩耗するが, 胴部内面 に指押え, 口縁外面に斜めの刻目を施す。
7281	〃	〃 甕	-	(16.7)	10.5	6.6	橙色 〃	〃	口縁部が欠損, 頸部内外面はナデ調整, 胴部外面にハケ 調整, 外底面は未調整, 他は摩耗
7282	〃	〃 〃	17.3	(10.1)	-	-	灰黄色 にぶい黄橙色	良	口縁部から中胴部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 頸部 内面と胴部外面にハケ調整, 胴部内面はナデ調整
7283	〃	石製品 石庖丁	3.1	9.8	0.8	(33.9)	-	-	ほぼ完存, 石材は粘板岩, 表面は全面を研磨し, 紐孔 2 個 を両面から穿つ。刃部長 9.8cm, 幅 0.3～0.8cm
7284	ST-7017	弥生土器 甕	18.6	(8.0)	(16.8)	-	橙色 〃	不良	口縁部から上胴部の破片, 器面は摩耗するが, 胴部内面 に指頭圧痕, 外面にハケ目が残存
7285	〃	〃 〃	15.7	(6.2)	-	-	にぶい黄褐色 明赤褐色	良好	口頸部約 1/5 が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 頸部内外 面はハケ調整で, 外面にはヘラ磨きを加える。
7286	〃	〃 〃	-	(1.8)	-	-	にぶい橙色 灰黄褐色	〃	口縁部の細片, 口唇部から内面はヨコナデ調整, 端部下 端に刻目, その下に貼付微隆起突帯, クシ描直線文
7287	〃	〃 〃	10.1	(6.4)	9.1	-	にぶい橙色 橙色	〃	中胴部から上位の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 内面は しぼりと指押え, 外面はヘラ削りとナデ調整
7288	〃	〃 〃	14.5	(12.0)	17.6	-	灰黄褐色 褐色	良	中胴部と口縁部約 1/2 が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 頸部内面は指押え, 胴部内面はヘラ削り
7289	〃	〃 〃	-	(5.4)	(11.5)	5.3	褐灰色 にぶい橙色	良好	底部約 1/3 が残存, 内外面はナデ調整で, 外面には煤が 付着, 外底面は未調整
7290	〃	〃 ミニチュア土器	3.6	4.6	3.1	2.0	にぶい黄褐色 〃	〃	完存, 口縁部から内面は指押え, 外面から外底面はナデ 調整
7291	〃	石製品 石鏃	1.9	1.6	0.4	1.3	-	-	完存, 石材はサヌカイト, 平基の石鏃
7292	〃	〃 穿孔具	4.1	(1.8)	0.4	(1.5)	-	-	ほぼ完存, 石材はサヌカイト, 頭部は太く, 先端に向かっ て尖る。
7293	〃	〃 不明	3.8	6.0	0.9	32.4	-	-	完存, 石材は粘板岩, 片面約 2/3 を研磨するが, それ以外 は剝離面が残存
7294	ST-7018	弥生土器 壺	8.6	(3.1)	-	-	褐灰色 にぶい褐色	良	口縁部が残存, 器面は摩耗するが, 外面にクシ描直線文 と円形浮文(14 個貼付していたとみられる。)
7295	〃	〃 〃	9.4	(15.3)	(23.2)	-	橙色 浅黄褐色	〃	口頸部約 1/3 と上胴部の一部が残存, 器面は摩耗するが, 口縁部にヨコナデ調整の痕跡が残存
7296	〃	〃 甕	22.4	(2.0)	-	-	にぶい褐色 褐灰色	良好	口縁部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 他はナデ調整で, 外面に刻目, 貼付微隆起突帯, クシ描直線文
7297	〃	〃 〃	-	(15.9)	(20.8)	7.2	暗灰色 にぶい橙色	良	下胴部以下約 2/3 が残存, 内面はヘラナデとナデ調整, 外面はハケ調整の後にヘラ磨き
7298	〃	〃 ミニチュア土器	-	(2.7)	-	3.8	橙色 にぶい褐色	良好	脚台部が残存, 器面は指押えとナデ調整で, 内面に煤が 付着
7299	ST-7019	〃 壺	(23.0)	(2.7)	-	-	にぶい橙色 橙色	〃	口縁部の破片, 内面に 2 段の波状文, 口唇部から外面は ヨコナデ調整で, 端部を拡張して凹線文を施文
7300	〃	〃 〃	-	(17.9)	20.6	5.2	黄灰色 にぶい黄褐色	良	胴部以下約 1/2 が残存, 内外面はハケ調整の後にナデ調 整で, 肩部外面に円形浮文を貼付

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7301	ST-7019	弥生土器 甕	-	(3.3)	-	-	にぶい黄橙色 浅黄橙色	良好	口縁部の細片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はヘラ磨き, 外面に4段の微隆起突帯とクシ描直線文
7302	〃	〃 〃	-	(5.9)	(12.3)	5.5	灰黄褐色 にぶい黄橙色	良	下胴部以下約1/3が残存, 器面はナデ調整で, 内面に焦 げ目が付着
7303	〃	〃 高杯	11.8	(11.3)	-	-	にぶい褐色 橙色	良好	杯部約1/3と脚柱部上位約1/2が残存, 頸部内外面はハ ケ調整で, 口頸部にヨコナデ調整
7304	〃	石製品 小型両刃石斧	6.5	2.4	1.5	39.4	-	-	完存, 石材は蛇紋岩, 表面は全面を研磨し, 光沢あり。基 部に敲打痕が残存, 刃部長2.3cm, 幅1.1cm
7305	ST-7021	〃 磨石	13.0	6.6	2.2	332	-	-	完存, 粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕, 片面 中央と側面に摩滅痕と敲打痕が残存
7306	ST-7023	弥生土器 甕	20.9	(5.9)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良	口頸部約1/4が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はヘ ラナデの後にナデ調整, 外面はナデ調整
7307	〃	〃 〃	13.0	(4.3)	-	-	明赤褐色 にぶい褐色	〃	口頸部約1/2弱が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内 外面はナデ調整, 口縁部外面にクシ描波状文
7308	〃	石製品 叩石	7.9	(5.2)	1.3	(64.6)	-	-	約1/4が残存, 石材は粗粒砂岩, 片面に敲打痕, 側面に弱 い敲打痕と擦痕が残存
7309	ST-7025	弥生土器 壺	15.2	(6.1)	-	-	にぶい橙色 にぶい褐色	良好	口縁部から上胴部の破片, 口縁部から外面はヨコナデ調 整, 頸部内面はしほりとナデ調整
7310	〃	〃 〃	15.8	(3.3)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部の破片, 口唇部から内面はヨコナデ調整, 外面は ナデ調整, 端部に凹線文
7311	〃	石製品 小型石斧	8.7	2.1	1.1	27.8	-	-	完存, 石材は蛇紋岩, 表面は全面を研磨, 刃部長1.7cm, 幅1.5cm
7312	ST-7026	〃 磨石	8.0	7.1	2.1	185.1	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦 痕, 片面中央に弱い敲打痕, 側面に摩滅痕が残存
7313	〃	〃 〃	9.5	8.1	3.2	368.2	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦 痕, 片面中央と側面に弱い敲打痕が残存
7314	ST-7028	弥生土器 壺	9.4	(2.9)	-	-	橙色 〃	良	口頸部の破片, 口縁部外面は指押え, 口縁部内外面にハ ケ調整を施し, ナデ調整を加え, 円孔を外から穿つ。
7315	ST-7029	〃 〃	19.2	(2.7)	-	-	褐灰色 にぶい褐色	良好	口縁部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整, 端部下端に刻目
7316	ST-7031	〃 〃	-	(4.0)	-	-	にぶい黄褐色 〃	やや 不良	口縁部の細片, 器面は摩耗するが, 外面に刻目, 貼付微 隆起突帯を3段, その間にクシ描波状文
7317	〃	〃 〃	25.8	(3.1)	-	-	にぶい黄褐色 黄灰色	良	口縁部の破片, 内面は摩耗, 口唇部はヨコナデ調整, 外 面はナデ調整, 端部両端にヘラ状工具による刻目
7318	〃	〃 甕	12.8	(4.9)	-	-	にぶい黄褐色 〃	〃	口縁部から上胴部の約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調 整, 内面は指押えとナデ調整, 頸部外面はヘラナデ
7319	〃	〃 〃	18.2	(7.1)	(21.8)	-	〃 〃	やや 不良	口縁部から上胴部の破片, 器面は摩耗するが, 口縁部に ヨコナデ調整の痕跡が残存
7320	〃	〃 壺	-	(6.1)	(13.2)	5.4	にぶい黄褐色 橙色	良好	底部約1/5が残存, 内面は指ナデ, 外面はナデ調整の後 にヘラ磨き, 外底面はナデ調整
7321	〃	〃 甕	-	(4.3)	(10.6)	7.6	黄灰色 明褐色	〃	底部約1/4が残存, 内面は剥離, 外面はハケ調整, 外底面 はナデ調整
7322	〃	〃 高杯	-	(9.4)	-	8.8	明黄褐色 橙色	〃	脚台部約1/3が残存, 内面はしほり目が残存, 裾部はヨ コナデ調整, 外面は3段に細かなハケ調整
7323	〃	石製品 磨石	17.5	8.9	(5.1)	(969.8)	-	-	約2/3が残存, 石材は粗粒砂岩, 残部の表面は平滑で, 縁 辺を中心に擦痕, 側面に筋状の敲打痕が残存
7324	SB-7002	弥生土器 高杯	-	(7.2)	-	-	橙色 〃	良	杯底部と脚柱基部の1/2弱が残存, 杯部内面は指押えと ナデ調整, 外面はハケ調整の後にナデ調整
7325	SK-7003	石製品 石鏃	2.3	(1.8)	0.3	(0.8)	-	-	片方の基部先端が欠損, 石材はサスカイト, 凹基の石鏃

Ⅶ区 遺物観察表 14 (7326～7350)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7326	SK-7004	弥生土器 甕	15.6	(4.4)	(17.0)	-	暗灰黄色 にぶい黄橙色	良好	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はヘラ削り, 外面はナデ調整
7327	SK-7005	〃 〃	-	(5.9)	(9.7)	5.2	褐灰色 にぶい橙色	〃	底部約1/5が残存, 内面と外底面はナデ調整, 外面はハケ調整で, 下半に煤が付着
7328	SK-7009	〃 壺	15.6	(10.5)	(15.3)	-	橙色 〃	やや 不良	口縁部から上胴部の約1/3が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 口頸部内外面はハケ調整, 胴部内面は指押え
7329	〃	〃 〃	16.8	(15.7)	(25.2)	-	〃 〃	〃	口縁部約1/5と中胴部約1/3が残存, 器面は摩耗するが, 口縁部外面に指頭圧痕が残存
7330	〃	〃 甕	17.2	(10.0)	16.6	-	灰黄褐色 〃	〃	上胴部以上約1/2が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 口縁部外面に刻目, 微隆起突帯
7331	〃	〃 〃	9.4	(5.8)	8.8	-	褐灰色 にぶい黄橙色	良好	口縁部から上胴部の約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面は指押えとナデ調整, 頸部外面はハケ調整
7332	〃	〃 〃	19.6	(6.2)	(21.8)	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部約1/5と上胴部の一部が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面は指押え, 外面はハケ調整
7333	〃	〃 〃	-	(13.6)	9.2	4.5	橙色 〃	良	口縁部以外が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整, 底部外面に黒斑が残存
7334	〃	〃 〃	-	(3.3)	(9.0)	5.5	灰白色 黄灰色	〃	底部が残存, 器面はナデ調整で, 外面にハケ目が僅かに残存
7335	〃	〃 ミニチュア土器	8.4	(5.2)	9.4	-	にぶい橙色 褐灰色	〃	口縁部の一部と上胴部約1/3が残存, 口頸部外面はハケ調整, 他は指押えとナデ調整
7336	〃	石製品 石庖丁	(4.2)	9.3	0.6	(40.4)	-	-	一部欠損, 石材は白色頁岩, 全面を平らに研磨, 紐孔2個を両面から穿つ。刃部長8.6cm, 幅0.3cm
7337	SK-7010	弥生土器 甕	13.0	(8.1)	12.8	-	灰白色 〃	良	口縁部から上胴部約4/5が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 内面は指押えとナデ調整, 外面はナデ調整
7338	〃	石製品 叩石	11.3	7.0	2.8	343.3	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕, 両面中央に敲打痕が残存
7339	SK-7011	〃 磨石	11.9	8.1	3.5	505.3	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 縁辺を中心に擦痕, 片面中央に弱い敲打痕が残存
7340	SK-7012	〃 石鏝	(3.3)	1.9	0.5	(2.2)	-	-	先端欠損, 石材はサスカイト, 平基の石鏝
7341	SK-7013	弥生土器 壺	13.0	(4.5)	-	-	橙色 〃	良	口頸部約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整, 口縁部外面に指押え
7342	〃	〃 〃	27.0	(5.1)	-	-	にぶい橙色 橙色	良好	口縁部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はヘラ磨きとナデ調整, 外面は斜格子文と棒状浮文
7343	〃	〃 甕	-	(6.0)	(12.6)	5.8	黒色 橙色	〃	底部約1/4が残存, 内面は指ナデ, 外面はヘラ磨きで, 被熱で変色し煤が付着, 外底面は未調整
7344	〃	〃 高杯	11.5	(15.6)	16.0	-	橙色 にぶい黄橙色	〃	口縁部から体部の約1/3が残存, 口縁部は摩耗, 内面はナデ調整, 外面はヘラ磨き, 口縁部外面にヘラ描沈線
7345	〃	〃 〃	-	(12.2)	-	-	橙色 〃	〃	脚柱部が残存, 杯部内面はナデ調整, 脚柱部内面はしばりとヘラナデ調整, 外面は摩耗するが, 斜格子文が残存
7346	SK-7015	〃 甕	17.5	(13.4)	16.3	-	褐灰色 灰黄褐色	良	中胴部以上の約2/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はハケ調整, 胴部内面は指ナデとナデ調整
7347	SK-7016	石製品 磨石	15.7	10.2	3.3	702.3	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕, 片面中央と側面に敲打痕と摩滅痕が残存
7348	SK-7021	弥生土器 甕	18.4	(3.9)	-	-	浅黄色 灰色	やや 不良	口頸部の破片, 器面は摩耗するが, 口縁部下端にヘラ状工具による刻目, その下にクシ描直線文
7349	〃	〃 〃	-	(5.9)	(12.5)	6.0	橙色 〃	良好	底部が残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面はタタキの後にハケ調整, 外底面はヘラ削り
7350	〃	〃 〃	-	(13.2)	(18.4)	6.0	〃 〃	良	下胴部以下1/2弱が残存, 内面はヘラ削り, 外面はヘラ磨き, 外底面はナデ調整

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7351	SK-7021	弥生土器 甕	-	(11.8)	(18.2)	6.6	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良	下胴部約1/3と底部の大半が残存、内面は指押えと指ナデ、 外面はヘラ磨き、外底面はナデ調整
7352	〃	〃 〃	-	(10.6)	(16.8)	7.0	明黄褐色 にぶい黄橙色	〃	底部が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面はハケ調整の 後にヘラ磨き、外底面はナデ調整
7353	〃	〃 壺	-	(5.0)	-	7.1	灰黄色 にぶい橙色	良好	底部が残存、内面は指押えとナデ調整、外面はヘラ磨き、外 底面は指押えとナデ調整
7354	〃	〃 〃	-	(6.6)	(17.0)	7.8	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良	底部約1/2が残存、内面はナデ調整、外面はタタキの後にヘ ラ磨き、外底面は指押えとナデ調整
7355	〃	〃 〃	-	(7.0)	(15.1)	8.6	にぶい黄橙色 橙色	〃	底部の大半が残存、内面は指ナデとナデ調整、外面はハケ 調整の後にヘラ磨き、外底面はナデ調整
7356	〃	石製品 太型蛤刃石斧	(20.7)	9.2	4.9	(1.6kg)	-	-	刃部と基部の一部が欠損、石材は緑色岩、側面以外を研磨
7357	〃	〃 磨石	8.1	7.9	4.7	350.3	-	-	完存、石材は粗粒砂岩、表面は平滑で、縁辺を中心に擦痕、 片面中央と側面に敲打痕が残存
7358	SK-7022	弥生土器 器台	-	(5.9)	-	19.9	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良	裾部約1/4が残存、口縁部はヨコナデ調整、端部にヘラ状工 具による刻目、内面はナデ調整、外面に凹線文
7359	SD-7001	〃 壺	13.8	(8.5)	-	-	褐灰色 明赤褐色	不良	口頸部から上胴部の約1/2が残存、器面は摩耗するが、胴部 内面に指ナデの痕跡、外面にハケ目が残存
7360	〃	〃 甕	14.4	(4.7)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色	良好	口頸部約1/6が残存、口唇部はヨコナデ調整、頸部内面はナ デ調整とヘラナデ、外面はナデ調整
7361	〃	〃 〃	14.6	(5.2)	-	-	明赤褐色 橙色	やや 不良	口頸部約1/4が残存、口唇部はヨコナデ調整、頸部内面は摩 耗、外面はハケ調整、口縁部外面は指押え
7362	〃	〃 〃	14.4	(4.6)	-	-	橙色 〃	不良	口頸部の破片、器面は摩耗するが、口縁部外面に指頭圧痕 が残存
7363	〃	〃 〃	18.0	(7.0)	-	-	明赤褐色 〃	〃	口頸部の破片、口唇部はヨコナデ調整、口縁部外面は指押 え、他は摩耗
7364	〃	〃 〃	15.6	(4.9)	-	-	にぶい橙色 橙色	良	口頸部約1/5が残存、口唇部はヨコナデ調整、頸部内面はハ ケ調整と指ナデ、外面はハケ調整
7365	〃	〃 〃	-	(3.1)	(9.1)	5.2	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良好	底部が残存、内面は指押えとナデ調整、外面はハケ調整の 後にナデ調整、外底面はナデ調整、外面は被熱で変色
7366	〃	〃 〃	-	(4.6)	(10.0)	5.6	黄灰色 にぶい黄橙色	良	底部約3/4が残存、内面は指ナデ、外底面はヘラ削りで、外 面から底部外端にかけてナデ調整
7367	〃	〃 鉢	23.4	16.5	20.8	8.2	灰褐色 にぶい橙色	〃	底部と口縁部から体部の約1/5が残存、口縁部はヨコナデ 調整、内面は指押えと指ナデ、外面はハケ調整
7368	〃	〃 ミニチュア土器	-	(2.8)	-	5.8	褐灰色 橙色	良好	脚台部が残存、内面はヘラ削り、他はナデ調整、高台高1.7cm
7369	〃	石製品 磨石	11.1	8.1	3.0	391.6	-	-	完存、石材は細粒砂岩、表面は平滑で、縁辺を中心に擦痕、 片面中央に弱い敲打痕、側面に摩滅痕が残存
7370	P-7001	弥生土器 甕	-	(4.5)	(6.7)	4.3	にぶい橙色 〃	良好	底部約1/3が残存、内面は指押えとナデ調整、外面はヘラ磨 き、外底面はナデ調整
7371	SB-7004	土師器 杯蓋	15.4	(1.7)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	口縁部の破片、成形は左手手法、口縁部はヨコナデ調整、他 はヘラ磨き
7372	〃	〃 杯身	-	(1.7)	-	9.2	橙色 明赤褐色	不良	底部が残存、成形は左手手法、器面は摩耗
7373	〃	〃 皿	-	(1.7)	-	-	橙色 〃	やや 不良	口縁部の細片、成形は左手手法、器面は摩耗するが、内面に 放射線状の暗文、外面にナデ調整の痕跡が残存
7374	〃	〃 〃	19.0	(2.1)	-	-	明赤褐色 〃	良好	一部が残存、成形は左手手法、口縁部はヨコナデ調整、内面 はヘラ磨き、底部外面はナデ調整
7375	〃	〃 高杯	20.5	(1.8)	-	-	〃 〃	〃	口縁部の破片、成形は左手手法、全面にヘラ磨き

Ⅶ区 遺物観察表 16 (7376～7400)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7376	SB-7004	土師器 甕	25.3	(6.2)	(25.0)	-	にぶい赤褐色 〃	良好	口縁部から上胴部の破片, 口唇部から口縁部外面はヨコナデ調整, 内面はハケ調整で, 胴部内面にナデ調整
7377	〃	須恵器 杯蓋	12.9	2.5	-	-	灰白色 〃	不良	一部が残存, 器面は摩耗, つまみ径2.2cm, つまみ高0.7cm
7378	〃	〃 〃	13.9	(1.4)	-	-	〃 〃	良好	約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面は回転ヘラ削り, 内面にナデ調整
7379	〃	〃 〃	15.2	(1.2)	-	-	〃 〃	良	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整
7380	〃	〃 〃	21.2	(1.7)	-	-	〃 〃	〃	口縁部から天井部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面に回転ヘラ削り, 内面にナデ調整
7381	〃	〃 杯身	11.5	2.6	-	7.9	〃 〃	良好	約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 高台周辺はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整
7382	〃	〃 〃	-	(3.3)	-	9.4	灰黄色 〃	良	体部から底部の約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7383	〃	〃 〃	-	(1.3)	-	9.9	灰色 灰白色	やや 不良	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 高台周辺はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整
7384	〃	〃 〃	-	(2.0)	-	10.2	黄灰色 灰白色	良	底部約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 高台周辺はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整
7385	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	11.0	灰色 〃	やや 不良	底部約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面はナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り, 高台高0.8cm
7386	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	11.3	〃 〃	〃	底部約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り, 高台高0.9cm
7387	〃	〃 〃	-	(2.5)	-	12.4	〃 〃	良	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7388	〃	〃 〃	13.8	4.1	-	9.4	灰白色 〃	不良	約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7389	〃	〃 皿	17.8	2.1	-	13.0	〃 〃	やや 不良	一部が残存, 器面は摩耗するが, 口縁部に回転ナデ調整の痕跡が残存
7390	〃	〃 台付壺	-	(3.5)	-	10.2	〃 〃	不良	底部約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 外面下端に回転ヘラ削り, 外底面はナデ調整, 高台高1.8cm
7391	〃	〃 壺	-	(9.3)	(19.0)	13.2	褐灰色 黄灰色	良好	底部約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面はナデ調整, 外面に回転ヘラ削りとタタキ, 外底面はヘラ削り
7392	〃	〃 甕	20.2	(41.0)	39.1	8.0	灰色 黄灰色	〃	胴部を欠くが口縁部から上胴部の約1/2と底部が残存, 器面は回転ナデ調整, 胴部内面は同心円文のタタキ
7393	〃	土師質土器 杯	13.0	3.4	-	9.2	橙色 〃	良	口縁部の一部と底部約3/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整の後にヘラ磨き
7394	〃	〃 〃	15.0	3.4	-	10.0	にぶい橙色 橙色	不良	底部と口縁部の一部が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7395	〃	〃 皿	13.9	1.8	-	11.2	灰白色 浅黄橙色	〃	一部が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 底部の切り離しは回転糸切り
7396	〃	製塩土器	-	(3.3)	-	-	にぶい黄橙色 黄灰色	良	胴部の細片, 内面に布目が残存, 外面は摩耗
7397	〃	土製品 土錘	(4.8)	1.4	1.4	(9.5)	にぶい黄橙色 〃	〃	端部が欠損, 円筒形, 表面は指押えとナデ調整, 孔径0.5cm
7398	〃	石製品 磨石	10.3	9.6	4.9	662.2	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕, 側面には摩滅痕と弱い敲打痕が残存
7399	〃	〃 砥石	(21.3)	14.0	6.1	(2.6kg)	-	-	ほぼ完存, 石材は細粒砂岩, 上下2面と側面を使用, 部分的に弱い敲打痕も残存
7400	SB-7005	須恵器 杯身	-	(1.8)	-	8.6	灰白色 灰色	良好	底部約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り, 外底面はナデ調整

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
7401	SB-7005	土製品 土錘	(4.3)	1.5	1.4	(8.1)	にぶい橙色 〃	良好	一部欠損, 円筒形, 表面には指押えとナデ調整, 孔径0.4cm
7402	SB-7006	石製品 打製石鎌	14.9	10.8	2.9	(544.3)	-	-	刃部の一部が欠損, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕が残存, 裏面は剥離面が残存
7403	SB-7007	土師器 甕	(5.2)	2.0	3.6	-	- 明赤褐色	良好	把手1つがほぼ完存, 器面は指押えと下端にハケ調整
7404	〃	〃 皿	-	(1.4)	-	-	赤褐色 〃	良	底部から体部にかけての細片, 外面は剥離, 摩耗するが, 全面を赤色塗彩する。
7405	〃	須恵器 杯蓋	-	(1.5)	-	-	灰色 〃	不良	天井部から口縁部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面は回転ヘラ削り
7406	SB-7009	〃 杯蓋(転用硯)	13.9	3.0	-	-	褐灰色 〃	良	約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面は回転ヘラ削り, 内面は摩滅し, 硯に転用
7407	SB-7010	〃 杯身	10.6	(3.0)	-	6.3	灰白色 〃	やや不良	約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面はナデ調整, 底部外面は回転ヘラ削りで, ヘラ起こし
7408	SB-7013	〃 〃	-	(2.4)	-	5.4	灰白色 灰色	良好	底部を中心に約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面はナデ調整, 底部はヘラ起こし
7409	SB-7014	土師器 蓋	25.6	(2.7)	-	-	橙色 〃	〃	口縁部の破片, 器面は全面にヨコ方向のヘラ磨き
7410	〃	〃 高杯	26.2	(2.3)	-	-	〃 〃	〃	杯部の一部が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 他はヨコ方向のヘラ磨き
7411	〃	〃 甕	18.0	(5.4)	(18.4)	-	灰褐色 にぶい褐色	〃	口縁部と上胴部の一部が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部内面は指押え, 外面はハケ調整
7412	〃	須恵器 杯蓋	14.4	(1.1)	-	-	灰色 黄灰色	〃	口縁部から天井部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面は回転ヘラ削り, 内面はナデ調整
7413	〃	〃 杯身	-	(2.0)	-	9.4	黄灰色 灰白色	不良	底部の破片, 器面は摩滅するが, 高台周辺はヨコナデ調整の痕跡が残存, 高台高0.9cm
7414	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	8.8	灰褐色 灰黄褐色	良	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内底面はナデ調整, 高台周辺はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整
7415	〃	〃 甕	20.2	(2.2)	-	-	黄灰色 暗灰色	良好	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 外面に回転カキ目調整, 内面はハダ荒れ
7416	〃	〃 〃	-	(11.3)	-	-	黄灰色 黒色	〃	頸部と上胴部の細片, 器面は回転ナデ調整, 胴部内面は同心円文, 外面は平行のタタキ
7417	SB-7015	土師器 皿	15.6	2.1	-	12.4	にぶい橙色 〃	〃	一部が残存, 成形は左手手法, 器面はヨコナデ調整の後にヘラ磨き, 外底面はヘラ削りの後に部分的にヘラ磨き
7418	SB-7016	〃 高杯	23.2	(2.1)	-	-	橙色 〃	〃	杯部約1/5が残存, 成形は左手手法, 器面はヨコナデ調整の後にヘラ磨き, 内面は半圓状, 圓状の暗文風
7419	〃	須恵器 杯蓋	-	(2.1)	-	-	灰黄褐色 灰色	〃	天井部から口縁部の約1/2が残存, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面は回転ヘラ削り, 内面はナデ調整
7420	〃	石製品 磨石	13.3	10.2	5.7	1.1kg	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕, 側面に摩滅痕と敲打痕が残存
7421	SB-7017	須恵器 杯蓋	15.0	(2.5)	-	-	にぶい黄橙色 灰白色	不良	約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面は回転ヘラ削り
7422	〃	〃 杯蓋(転用硯)	15.2	(2.0)	-	-	灰黄褐色 褐灰色	良好	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内面に墨痕が残存, 硯に転用
7423	〃	〃 杯身	-	(2.8)	-	7.3	灰色 〃	〃	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ削りで, ナデ調整
7424	〃	〃 〃	14.4	4.4	-	9.5	〃 〃	〃	口縁部の一部と底部約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整, 高台周辺はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整
7425	〃	土製品 土錘	4.2	1.8	1.9	13.5	にぶい橙色 〃	良	完存, 円筒形, 表面は摩滅するが, 指頭圧痕が残存, 孔径0.7cm

Ⅶ区 遺物観察表 18 (7426～7450)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7426	SB-7017	鉄製品 鉄鎌	(5.9)	(1.6)	0.5	(7.5)	-	-	身基部と関及び茎が残存、雁股の鉄鎌
7427	SB-7018	土師器 杯蓋	-	(1.9)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄橙色	良好	口縁部の細片、口縁部はヨコナデ調整、内面はヘラ磨き、 他は摩耗
7428	〃	須恵器 杯身(転用碗)	-	(1.7)	-	10.3	黄灰色 褐灰色	良	底部約1/4が残存、内底面はナデ調整で研磨痕が残存、 高台周辺はヨコナデ調整、外底面はナデ調整
7429	SB-7019	石製品 叩石	13.0	5.1	2.8	275.3	-	-	完存、石材は粘板岩、両端に摩滅痕、1面に研磨痕が残存
7430	SB-7022	須恵器 杯身	9.5	2.9	-	6.2	灰黄色 〃	やや 不良	約1/3が残存、器面は回転ナデ調整で、内底面にナデ調整、 底部外面に回転ヘラ削りとヘラ起こし
7431	SB-7023	土師器 皿	19.0	(3.6)	-	-	明赤褐色 〃	良好	口縁部から体部の破片、成形は左手手法、器面はヨコナ デ調整で、内面に放射線状の暗文
7432	〃	土師質土器 杯	12.2	(3.3)	-	7.6	浅黄橙色 〃	良	1/2弱が残存、成形はA技法、器面は回転ナデ調整で、内 底面にナデ調整、底部の切り離しは回転ヘラ切り
7433	〃	石製品 砥石	(8.6)	6.8	5.2	(438.9)	-	-	一部が残存、石材は細粒砂岩、3面に使用痕が残存
7434	SB-7027	土師器 杯身	-	(1.7)	-	12.4	にぶい黄橙色 〃	やや 不良	底部の破片、成形は左手手法、高台周辺はヨコナデ調整、 他は摩耗、高台高0.8cm
7435	〃	〃 杯	15.6	3.9	-	9.4	明赤褐色 〃	不良	1/2弱が残存、成形は左手手法、器面は摩耗
7436	〃	〃 皿	15.2	1.8	-	12.2	橙色 〃	良好	一部が残存、成形は左手手法、器面はヨコナデ調整の後 にヘラ磨き、内底面はナデ調整、外底面はヘラ切り
7437	〃	〃 甕	22.0	(11.3)	(22.8)	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁部から中胴部の破片、口頸部内面にハケ調整の後に 口頸部にヨコナデ調整、胴部内面はナデ調整
7438	〃	須恵器 杯身	-	(1.9)	-	11.9	灰色 〃	良	底部約1/3が残存、器面は回転ナデ調整で、内底面にナ デ調整、外底面はナデ調整、高台高0.9cm
7439	〃	〃 杯	-	(2.2)	-	8.2	〃 〃	不良	底部約1/3が残存、器面は摩耗するが、底部の切り離し は回転ヘラ切り
7440	〃	〃 長頸壺	16.2	(1.2)	-	-	灰オリーブ色 暗灰色	良好	口縁部の破片、器面は回転ナデ調整、内面は自然釉がか かり、外面はハダ荒れ
7441	〃	土師質土器 杯	14.6	3.5	-	10.0	橙色 〃	〃	約1/3が残存、器面は回転ナデ調整で、内面はヨコ方向 のヘラ磨き、底部の切り離しは回転ヘラ切り
7442	〃	石製品 砥石	(12.7)	(10.6)	5.4	(998.1)	-	-	一部が残存、石材は細粒砂岩、2面に使用痕と敲打痕が 残存、被熱で変色箇所あり。
7443	SB-7028	土師器 杯身	-	(1.9)	-	10.8	明褐灰色 にぶい橙色	やや 不良	底部約1/4が残存、成形は左手手法、器面は摩耗
7444	〃	須恵器 杯蓋	11.6	(2.6)	-	-	灰白色 褐灰色	良好	口縁部から天井部の破片、器面は回転ナデ調整、天井部 は自然釉がかかりハダ荒れ、口縁部基部に沈線
7445	〃	〃 杯身	-	(2.5)	-	8.0	にぶい黄橙色 浅黄色	やや 不良	底部1/2弱が残存、器面は回転ナデ調整で、内底面にナ デ調整、外面下端に回転ヘラ削り
7446	〃	〃 杯	13.6	3.8	-	8.7	灰白色 〃	不良	約1/3が残存、器面は回転ナデ調整、底部の切り離しは 回転糸切り
7447	〃	〃 鉢	15.4	(11.8)	19.6	-	黄灰色 灰白色	良	口縁部から体部の破片、器面は回転ナデ調整、口縁部外 面下端に2条の沈線
7448	SB-7029	土師器 皿	17.6	2.2	-	13.9	明赤褐色 〃	良好	口縁部の一部と底部約1/4が残存、器面はヨコ方向のヘ ラ磨き、外底面はヘラ切り
7449	〃	製塩土器	-	(4.7)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	口縁部の細片、口唇部から外面はナデ調整、内面には布目
7450	SB-7031	須恵器 皿	9.2	2.1	-	4.8	灰色 〃	〃	1/3弱が残存、器面は回転ナデ調整、体部外面に1条の沈 線、底部の切り離しは回転ヘラ切りで、ナデ調整

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7451	SB-7033	石製品 砥石	12.6	(8.5)	5.2	(646.2)	-	-	一部欠損, 石材は中粒砂岩, 上下2面に使用痕が残存
7452	SB-7035	土師質土器 椀	-	(1.4)	-	6.8	浅黄橙色 〃	不良	底部1/2弱が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 高台高0.5cm
7453	SB-7040	土師器 甕	26.0	(2.9)	-	-	明赤褐色 にぶい赤褐色	良好	口縁部の破片, 器面はヨコナデ調整
7454	SB-7041	須恵器 杯蓋	11.5	(2.7)	-	-	灰白色 〃	〃	1/4弱が残存, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面は回転ヘラ削りで, 自然釉がかかりハダ荒れ
7455	SB-7046	〃 台付椀	-	(3.9)	-	7.2	灰色 〃	〃	脚台部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 杯部内面はナデ調整
7456	SB-7047	〃 杯蓋	10.6	(2.8)	-	-	灰白色 〃	〃	口縁部から天井部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面は回転ヘラ削りの後にナデ調整
7457	SB-7048	〃 杯身	16.3	5.3	-	10.4	灰白色 黄灰色	良	約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り, 高台周辺はヨコナデ調整
7458	〃	土製品 土錘	3.7	1.6	1.3	6.9	にぶい黄橙色 〃	〃	完存, 円筒形, 表面は摩耗, 孔径0.5cm
7459	〃	石製品 叩石	18.4	7.6	4.5	994.5	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は比較的平滑で, 片面中央と側面に深い擦痕と敲打痕, 両端に摩滅痕が残存
7460	SB-7049	土師器 杯	15.1	3.2	-	8.8	橙色 明赤褐色	良	1/2弱が残存, 成形は左手手法, 外底面周辺はナデ調整, 他は摩耗
7461	SB-7058	弥生土器 甕	16.1	(5.5)	(16.4)	-	灰黄色 にぶい黄褐色	良好	口縁部から上胴部の破片, 頸部内面はハケ調整で, 口頸部にヨコナデ調整, 胴部内面はナデ調整, 外面はハケ調整
7462	SB-7059	須恵器 杯蓋	13.2	(1.4)	-	-	灰白色 黄灰色	やや不良	つまみを除く約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面は回転ヘラ削り, 内面はナデ調整
7463	〃	〃 杯	11.0	4.6	-	8.0	灰白色 灰色	良好	口縁部約1/6と底部約1/2が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7464	〃	〃 〃	14.6	3.3	-	9.6	灰色 〃	良	一部が残存, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り, 口縁部と体部に火樫
7465	〃	土師質土器 杯	-	(2.1)	-	8.0	橙色 〃	不良	底部と体部の破片, 器面は摩耗するが, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7466	〃	土製品 土錘	3.9	1.4	1.3	7.8	にぶい橙色 〃	良好	完存, 円筒形, 表面は指押えとナデ調整, 孔径0.4cm
7467	SB-7060	土師器 羽釜	25.0	(6.0)	26.2	-	黒色 灰黄褐色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 胴部内面は指押えとナデ調整, 外面はハケ調整
7468	SB-7061	須恵器 壺	8.5	(2.0)	-	-	灰色 黒色	〃	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整, 内面はハダ荒れ
7469	〃	土師質土器 杯	10.8	2.9	-	6.4	明赤褐色 橙色	不良	一部が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗
7470	〃	黒色土器 椀	-	(1.4)	-	-	黒色 にぶい橙色	良好	底部の細片, 内面はヘラ磨き, 高台周辺はヨコナデ調整, 他は摩耗, 高台高0.4cm
7471	SA-7002	土師器 杯蓋	-	(1.7)	-	-	明赤褐色 〃	〃	つまみを含む天井部が残存, つまみはヨコナデ調整, 天井部外面はヘラ磨き, 内面はナデ調整で一部にヘラ磨き
7472	〃	須恵器 杯身	-	(1.3)	-	9.8	灰色 〃	〃	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面はナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ削りで, ナデ調整
7473	SA-7003	土師器 杯身	-	(1.4)	-	10.0	橙色 〃	〃	底部の破片, 器面はヨコナデ調整で, 内面にヘラ磨き, 高台周辺はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整
7474	〃	〃 〃	-	(2.0)	-	13.0	〃 〃	〃	底部の一部が残存, 成形は左手手法, 器面はヨコナデ調整で, 内底面と外底面はナデ調整
7475	〃	〃 高杯	-	(1.8)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良	口縁部の細片, ほぼ全面にヘラ磨き, 口唇部は摩耗

Ⅶ区 遺物観察表 20 (7476～7500)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7476	SA-7003	須恵器 杯蓋	-	(1.5)	-	-	灰白色 〃	やや 不良	つまみ周囲が残存, 器面は摩耗, つまみ径3.2cm, つまみ 高0.6cm
7477	〃	〃 杯	12.9	3.0	-	10.0	〃 〃	〃	一部が残存, 内面は回転ナデ調整, 外面は摩耗
7478	SA-7005	〃 杯蓋	15.7	(2.0)	-	-	灰色 〃	良好	口縁部から天井部の破片, 器面は回転ナデ調整, 天井部 外面は回転ヘラ削りで, ハダ荒れ
7479	〃	〃 杯	-	(2.0)	-	8.6	灰白色 黄灰色	〃	底部約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ 調整, 底部の切り離しは回転ヘラ削りで, ナデ調整
7480	〃	石製品 磨石	9.4	8.5	4.0	422.5	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕, 側面に弱い敲打痕が残存
7481	SA-7008	土師質土器 皿	13.6	1.9	-	9.8	にぶい黄褐色 〃	やや 不良	一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底 面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ削り
7482	SA-7010	須恵器 杯	11.9	2.7	-	7.8	灰色 〃	良好	一部が残存, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回 転糸切りの可能性があるが不明瞭
7483	SK-7024	弥生土器 甕	14.0	(2.9)	-	-	橙色 にぶい褐色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部外面にハケ 調整
7484	〃	〃 手づくね土器	5.3	3.5	-	2.9	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	完存, 器面は指押えとナデ調整
7485	〃	須恵器 杯蓋	15.0	(1.6)	-	-	灰色 〃	〃	一部が残存, 器面は回転ナデ調整, 天井部外面は回転ヘ ラ削りで, 若干ハダ荒れ, 内面はナデ調整
7486	SK-7026	土師器 小皿	9.2	1.1	-	6.7	橙色 〃	不良	約1/2が残存, 成形は左手手法, 器面は摩耗
7487	〃	土師質土器 椀	-	(2.6)	-	6.2	灰黄色 〃	良好	底部が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の 切り離しは回転糸切り
7488	〃	〃 小皿	8.9	2.0	-	5.4	橙色 灰白色	やや 不良	口縁部約2/3が欠損, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整 で, 底部の切り離しは回転糸切り
7489	SK-7027	石製品 砥石	10.6	4.4	2.5	170.5	-	-	完存, 石材は泥岩, 側面2ヶ所を中心に4面に使用痕が残存
7490	SK-7029	弥生土器 壺	8.1	11.2	8.8	5.0	灰色 にぶい橙色	良	1/2弱が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面はナデ調 整, 胴部内面は指押え, 肩部外面はハケ調整
7491	〃	須恵器 杯蓋	-	(2.0)	-	13.4	灰オリーブ色 黄灰色	〃	口縁部から天井部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 天井 部外面は回転ヘラ削り, 内面はナデ調整
7492	〃	〃 杯身	-	(1.6)	-	6.4	灰白色 〃	不良	底部約1/2が残存, 内面はナデ調整, 外面は回転ヘラ削り, 他は摩耗, 高台高0.7cm
7493	〃	〃 椀	-	(2.0)	-	6.0	〃 〃	〃	底部約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離し は回転糸切り
7494	SK-7030	弥生土器 甕	-	(1.7)	-	5.4	にぶい黄橙色 黒褐色	良好	底部が残存, 内外面はナデ調整, 外外面は未調整
7495	SK-7031	須恵器 杯身	-	(2.6)	-	9.8	灰色 〃	やや 不良	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ 調整, 外面下端に回転ヘラ削り
7496	SK-7032	〃 〃	14.8	3.7	-	10.6	〃 〃	〃	一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り, 他は摩耗
7497	SK-7033	弥生土器 甕	15.8	(4.8)	-	-	にぶい黄橙色 浅黄褐色	良好	口頸部約1/3が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はヘラ ナデとナデ調整, 端部にヘラ状工具で刻目
7498	SK-7036	土師器 羽釜	20.6	(5.8)	22.0	-	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口唇部から鏝はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 胴部外面はハケ調整
7499	〃	須恵器 甕	-	(7.9)	(20.0)	11.6	褐灰色 黄灰色	〃	底部約1/5が残存, 内面はナデ調整, 外面上半は平行のタ タキ, 下半は回転ヘラ削り, 外外面はナデ調整
7500	〃	土師質土器 椀	-	(2.9)	-	5.3	灰黄色 灰白色	良	底部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面はナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り, 高台高1.8cm

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
7501	SK-7037	土師器 羽釜	(19.0)	(5.8)	21.9	-	灰褐色 〃	良好	口縁部から上胴部の破片, 口縁部と鏝はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面はハケ調整で, 煤が付着
7502	〃	緑釉陶器 皿	-	(0.8)	-	-	暗オリーブ灰色 灰オリーブ色	良	体部の細片, 軟質系, 全面に緑釉を施釉
7503	SK-7041	須恵器 高杯	-	(8.0)	-	-	淡黄色 灰白色	やや 不良	脚柱部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 杯部内面はナデ調整, 脚部内面にはしほり目が残存
7504	〃	〃 〃	-	(6.0)	-	11.5	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	脚台部下半約1/2が残存, 器面は回転ナデ調整, 外面に2条の凹線
7505	〃	石製品 叩石	12.8	6.7	5.9	763.8	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 両端に摩滅痕と敲打痕, 縁辺を中心に擦痕が残存
7506	SK-7042	〃 〃	15.0	7.8	3.3	604.6	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 両端と側面に摩滅痕と敲打痕, 縁辺を中心に擦痕が残存
7507	SK-7044	須恵器 杯身	13.0	(2.5)	-	(9.0)	灰色 〃	良好	約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7508	SK-7045	土師器 杯	13.5	3.4	-	10.2	灰黄色 〃	〃	約1/4が残存, 器面はヨコナデ調整で, 内底面にナデ調整を加えてからヘラ磨き, 外底面はヘラ切り
7509	〃	〃 〃	15.0	3.5	-	10.5	橙色 〃	良	約1/2が残存, 底部外面はヘラ切りで, 全面にヨコ方向のヘラ磨き
7510	〃	須恵器 杯蓋	21.2	(2.0)	-	-	灰白色 〃	良好	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内面にナデ調整
7511	〃	〃 細頸壺	6.9	(5.0)	-	-	灰色 〃	〃	口頸部の大半が残存, 器面は回転ナデ調整で, 頸部内面下端にヘラナデ, 外面は部分的にハダ荒れ
7512	〃	土師質土器 皿	14.6	2.2	-	10.9	にぶい橙色 橙色	〃	一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整の後にヨコ方向のヘラ磨き, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7513	SK-7047	土師器 杯身	-	(1.8)	-	12.6	明赤褐色 〃	良	底部の一部が残存, 成形は左手手法, 内面にヘラ磨き, 外面は摩耗
7514	〃	須恵器 杯	13.4	3.2	-	8.8	灰色 〃	不良	1/2弱が残存, 器面は摩耗するが, 底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられる。
7515	〃	〃 高杯	-	(5.6)	-	-	灰黄色 〃	〃	基部が残存, 器面は摩耗するが, 外面にしほり目の痕跡が残存
7516	SK-7049	製塩土器	-	(5.3)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	口縁部の細片, 器面は摩耗するが, 内面に布目が残存
7517	SK-7050	須恵器 杯身	13.6	4.2	-	9.0	灰黄色 にぶい黄橙色	良	約1/4が残存, 器面は摩耗, 高台高0.5cm
7518	SK-7051	〃 〃	-	(1.7)	-	10.6	灰白色 〃	不良	底部の破片, 器面は摩耗
7519	SK-7055	土師質土器 杯	12.4	3.1	-	6.8	にぶい黄橙色 〃	良	約1/5が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
7520	〃	〃 皿	12.8	1.5	-	10.0	にぶい橙色 橙色	良好	約1/5が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7521	SK-7056	〃 杯	13.4	3.4	-	8.3	にぶい黄橙色 〃	良	約3/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7522	〃	〃 〃	12.8	3.3	-	8.6	橙色 〃	良好	約2/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7523	〃	〃 〃	12.6	4.9	-	8.0	にぶい橙色 〃	良	約1/3が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7524	〃	〃 皿	13.8	(2.3)	-	10.2	橙色 〃	〃	一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7525	〃	黒色土器 椀	-	(3.8)	-	10.0	黒色 にぶい黄橙色	良好	底部から体部約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内面はヘラ磨き, 外面下半に回転ヘラ削り, 高台高0.7cm

Ⅶ区 遺物観察表 22 (7526～7550)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7526	SK-7057	土師器 甕	22.8	(9.2)	18.7	-	にぶい橙色 〃	不良	口縁部から上胴部約1/5が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 内面と胴部外面はハケ調整
7527	〃	土師質土器 杯	-	(2.4)	-	7.4	灰白色 〃	良	底部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7528	SK-7058	弥生土器 甕	19.0	(6.9)	-	-	にぶい黄橙色 灰黄褐色	良好	口頸部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 頸部外面はハケ調整で, 貼付微隆起突帯2条
7529	〃	〃 〃	18.6	(15.7)	18.3	-	橙色 〃	良	中胴部以上約1/3が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内面上半にヘラナデ, 胴部内面は指ナデとナデ調整
7530	〃	〃 〃	16.9	(21.3)	19.3	-	灰黄褐色 褐灰色	〃	中胴部以上約2/3が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面は下胴部にヘラ削り, 他は指ナデとナデ調整
7531	〃	〃 〃	22.8	(7.2)	(25.2)	-	橙色 〃	〃	口縁部から上胴部1/2弱が残存, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内外面はハケ調整, 口縁端部に擬凹線文
7532	〃	〃 〃	-	(11.0)	(19.3)	9.1	暗灰黄色 橙色	〃	底部から下胴部約1/2が残存, 内面はナデ調整とヘラ磨き, 外面はハケ調整の後にヘラ磨き
7533	SK-7060	〃 〃	18.2	(12.0)	20.0	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良好	口縁部から中胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内面はヘラ削りとナデ調整, 外面はハケ調整とヘラ磨き
7534	〃	〃 〃	-	(3.5)	(8.1)	6.8	黒色 にぶい褐色	〃	底部の大半が残存, 内面はヘラ削りとナデ調整, 外面はヘラ磨き, 外底面はハケ調整の後にナデ調整
7535	〃	〃 〃	-	(3.9)	(12.7)	7.6	にぶい橙色 〃	〃	底部1/2弱が残存, 内面はヘラナデとナデ調整, 外面と外底面はハケ調整の後にナデ調整
7536	SK-7064	須恵器 鉢	19.4	(3.0)	20.1	-	灰色 〃	〃	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整
7537	SK-7068	土師質土器 杯身	14.4	(3.7)	-	(10.4)	灰黄色 にぶい橙色	不良	約1/5が残存, 成形はA技法, 口縁部は回転ナデ調整, 他は摩耗
7538	SK-7070	弥生土器 甕	-	(8.9)	(16.8)	8.0	オリーブ黒色 にぶい黄橙色	良	底部が残存, 内面は指ナデ, 外面はヘラナデ, 外底面はナデ調整
7539	SK-7071	須恵器 杯蓋	13.3	2.3	-	-	灰白色 黄灰色	良好	約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面に回転ヘラ削り, 内面にナデ調整, つまみはヨコナデ調整
7540	〃	土師質土器 椀	-	(1.7)	-	6.7	灰白色 〃	やや 不良	底部約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
7541	〃	〃 〃	13.8	5.0	-	6.0	橙色 〃	不良	約1/2弱が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り, 高台高0.6cm
7542	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	6.3	にぶい黄橙色 灰白色	やや 不良	底部が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられる。
7543	SK-7074	〃 〃	-	(1.9)	-	6.0	にぶい橙色 〃	不良	底部が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 高台高0.4cm
7544	〃	〃 小皿	7.6	1.4	-	5.6	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 底部の切り離しは回転糸切りとなる。
7545	SD-7002	須恵器 杯蓋	15.0	1.9	-	-	灰白色 〃	やや 不良	口縁部から天井部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面は回転ヘラ削り, 内面はナデ調整
7546	〃	〃 杯身	-	(1.7)	-	8.0	にぶい黄橙色 〃	〃	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り, 外底面はナデ調整
7547	〃	〃 小壺	-	(2.6)	-	5.2	灰白色 黄灰色	良好	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整, 高台周辺はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整
7548	SD-7003	弥生土器 甕	17.8	(4.0)	16.2	-	にぶい黄橙色 〃	良	口縁部から上胴部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 口縁部外面は指押え, 胴部内外面はナデ調整
7549	〃	土師器 杯身	-	(3.5)	-	11.8	橙色 〃	〃	底部約1/2が残存, 内外面はヨコ方向のヘラ磨き, 高台周辺はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整
7550	〃	須恵器 杯蓋	12.1	(1.8)	-	-	淡青灰色 〃	良好	天井部から口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面は回転ヘラ削り, 内面はナデ調整

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
7551	SD-7003	須恵器 杯身	12.1	4.2	-	7.5	灰色 〃	良好	口縁部約1/6と底部が残存, 器面は回転ナデ調整, 体部外面下半はナデ調整, 底部はヘラ起こし
7552	〃	〃 甕	15.2	(26.2)	30.0	-	灰色 にぶい黄橙色	不良	口縁部約1/2と胴部約1/6が残存, 器面は摩耗
7553	〃	石製品 磨石	9.6	8.0	2.9	295.2	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 表面は縁辺を中心に擦痕, 片面に弱い敲打痕と摩滅痕が残存
7554	SD-7004	須恵器 台付壺	-	(5.5)	(13.5)	7.0	灰色 〃	良好	底部約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整, 高台高1.3cm
7555	SD-7005	〃 杯身	14.0	4.3	-	9.2	〃 〃	〃	約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで, ナデ調整
7556	SD-7006	〃 〃	-	(1.5)	-	6.2	〃 〃	良	底部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部外面は回転ヘラ削りで, ヘラ起こし
7557	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	10.3	灰白色 〃	不良	底部約1/4が残存, 内面は回転ナデ調整で, 内底面中央にナデ調整, 他は摩耗, 高台高0.6cm
7558	SD-7008	土師器 杯身	-	(1.8)	-	6.8	橙色 明赤褐色	〃	底部の破片, 器面は摩耗, 高台高0.9cm
7559	〃	〃 〃	-	(1.8)	-	8.8	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良	底部の破片, 成形は左手手法, 器面はヨコナデ調整で, 内底面と外底面はナデ調整
7560	〃	〃 〃	(14.2)	(4.3)	-	10.4	橙色 にぶい黄橙色	〃	一部が残存, 成形は左手手法, 内面はナデ調整, 高台周辺はヨコナデ調整, 高台高0.6cm
7561	〃	〃 〃	-	(2.6)	-	10.7	橙色 〃	やや 不良	底部の破片, 成形は左手手法, 器面は摩耗
7562	〃	〃 皿	16.6	(2.4)	-	-	浅黄橙色 〃	良	口縁部の破片, 成形は左手手法, 器面は摩耗
7563	〃	〃 〃	17.4	2.4	-	12.4	橙色 〃	〃	一部残存, 成形は左手手法, 器面は摩耗するが内面にヘラ磨きの痕跡が残存
7564	〃	〃 高杯	24.0	(1.9)	-	-	にぶい橙色 にぶい褐色	良好	杯部の一部が残存, 成形は左手手法, 器面は全面にヨコ方向のヘラ磨き
7565	〃	〃 〃	-	(1.8)	-	-	にぶい橙色 橙色	良	基部約1/3が残存, 脚部外面はヨコナデ調整, 内面はナデ調整
7566	〃	〃 羽釜	-	(4.5)	-	-	にぶい褐色 灰黄褐色	良好	口縁部から上胴部の細片, 口縁部から鏝約2/3にヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面は指押えとナデ調整
7567	〃	〃 〃	31.4	(5.0)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	口縁部の破片, 器面はヨコナデ調整
7568	〃	〃 〃	21.4	(4.2)	-	-	にぶい黄橙色 灰黄褐色	〃	口縁部の破片, 口唇部から鏝約2/3にヨコナデ調整, 鏝約1/3は指押え
7569	〃	〃 〃	-	(7.8)	-	-	灰黄色 にぶい黄橙色	〃	口縁部から胴部の細片, 口唇部から鏝はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面は指押え
7570	〃	〃 〃	19.0	(4.5)	(21.6)	-	灰黄褐色 〃	〃	口縁部の破片, 内面から鏝約2/3にヨコナデ調整, 鏝約1/3は指押え
7571	〃	〃 〃	21.6	(6.6)	24.0	-	〃 〃	〃	口縁部から上胴部の破片, 口唇部から鏝約2/3にヨコナデ調整, 鏝約1/3は指押え, 胴部内面はナデ調整
7572	〃	〃 〃	21.6	(5.1)	24.5	-	褐灰色 にぶい褐色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口縁部から鏝約2/3にヨコナデ調整, 鏝約1/3は指押え, 胴部内面はナデ調整
7573	〃	〃 〃	23.8	(4.3)	(27.8)	-	黒褐色 にぶい黄橙色	〃	口縁部から上胴部の破片, 内面から鏝はヨコナデ調整, 胴部外面はハケ調整
7574	〃	〃 〃	18.8	(5.2)	21.6	-	黄灰色 灰黄色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口唇部から鏝はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 外面は指押えとハケ調整
7575	〃	〃 〃	-	(6.8)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	〃	口縁部から上胴部の細片, 鏝から内面はヨコナデ調整, 胴部外面は平行のタタキの後にナデ調整

Ⅶ区 遺物観察表 24 (7576～7600)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7576	SD-7008	須恵器 杯蓋	-	(2.7)	-	-	灰白色 灰色	良好	つまみを含む天井部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面は自然釉がかかりハダ荒れ
7577	〃	〃 〃	-	(1.3)	-	-	黄灰色 灰色	〃	つまみが残存, つまみはヨコナデ調整, 自然釉がかかりハダ荒れ, 内面はナデ調整
7578	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	-	灰白色 〃	良	つまみを含む天井部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面に回転ヘラ削り, 内面にナデ調整
7579	〃	〃 〃	14.1	(1.6)	-	-	〃 〃	〃	約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面に回転ヘラ削り, 内面にナデ調整
7580	〃	〃 〃	14.2	(1.6)	-	-	灰色 〃	〃	一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面に回転ヘラ削り, 内面にナデ調整
7581	〃	〃 〃	12.4	(1.5)	-	-	灰色 灰白色	良好	約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面に回転ヘラ削り, 内面にナデ調整
7582	〃	〃 〃	13.6	(1.8)	-	-	黄灰色 〃	やや 不良	一部が残存, 内面は回転ナデ調整, 他は摩耗
7583	〃	〃 〃	13.8	(1.3)	-	-	浅黄色 灰白色	〃	約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面に回転ヘラ削り, 内面にナデ調整
7584	〃	〃 〃	13.6	(2.0)	-	-	黄灰色 灰色	良好	1/4弱が残存, 内面は回転ナデ調整で, 天井部内面はナデ調整, 外面はハダ荒れ
7585	〃	〃 〃	14.6	(1.5)	-	-	灰白色 灰色	良	約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面に回転ヘラ削り, 内面にナデ調整
7586	〃	〃 杯蓋(転用硯)	18.4	(2.5)	-	-	灰白色 〃	〃	一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面に回転ヘラ削り, 内面に研磨痕が残存し, 硯に転用
7587	〃	〃 杯蓋	18.6	(2.2)	-	-	浅黄色 灰黄色	〃	約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面は回転ヘラ削り, 内面はナデ調整
7588	〃	〃 杯身	12.2	4.4	-	8.2	灰色 褐灰色	良好	口縁部約1/3と底部約2/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7589	〃	〃 〃	-	(1.5)	-	8.8	灰白色 灰色	良	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7590	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	9.2	褐灰色 〃	良好	底部約1/6が残存, 器面は回転ナデ調整, 高台周辺はヨコナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで, ナデ調整
7591	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	9.2	灰白色 灰色	〃	底部約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 高台周辺はヨコナデ調整, 底部外面はナデ調整
7592	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	9.6	灰色 〃	〃	底部約1/2が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り
7593	〃	〃 〃	-	(3.1)	-	11.3	灰黄色 灰白色	〃	底部約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7594	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	11.4	灰黄色 灰黄褐色	〃	底部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7595	〃	〃 〃	-	(4.6)	-	11.7	灰白色 〃	やや 不良	体部から底部の約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面と外底面はナデ調整
7596	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	11.8	〃 〃	不良	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7597	〃	〃 〃	-	(2.8)	-	8.6	灰黄色 黄灰色	良	〃
7598	〃	〃 〃	11.6	4.2	-	9.0	灰白色 灰色	やや 不良	口縁部の一部と底部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面と外底面はナデ調整
7599	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	9.4	褐灰色 灰色	良好	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整, 内面は摩耗, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで, ナデ調整
7600	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	9.6	灰白色 〃	良	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
7601	SD-7008	須恵器 杯身	(14.0)	(4.8)	-	9.8	灰白色 〃	良	一部が残存, 器面は回転ナデ調整, 高台周辺はヨコナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7602	〃	〃 〃	-	(1.1)	-	7.0	〃 〃	良好	底部約1/2が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで, 爪痕が残存
7603	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	8.0	灰色 〃	〃	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで, ナデ調整
7604	〃	〃 〃	-	(3.6)	-	5.5	灰白色 〃	やや 不良	底部約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面に回転ヘラ削り, 高台周辺はヨコナデ調整
7605	〃	〃 〃	-	(2.4)	-	6.1	〃 〃	良好	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面に回転ヘラ削り, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7606	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	6.4	灰黄色 〃	やや 不良	底部約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 高台周辺はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整
7607	〃	〃 〃	-	(4.0)	-	6.6	灰白色 〃	不良	底部が残存, 高台周辺はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整, 他は摩耗
7608	〃	〃 〃	14.8	(6.0)	-	(6.6)	〃 〃	やや 不良	約1/2が残存, 器面は回転ナデ調整で, 体部外面に回転ヘラ削り, 高台周辺はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整
7609	〃	〃 杯	-	(2.1)	-	7.8	〃 〃	良	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで, ナデ調整を加える。
7610	〃	〃 〃	12.9	3.8	-	9.0	〃 〃	不良	底部と口縁部約1/5が残存, 器面は摩耗するが, 外底面には回転ヘラ切りの痕跡が残存
7611	〃	〃 〃	-	(2.5)	-	10.4	〃 〃	〃	約1/2が残存, 器面は摩耗するが, 外底面には回転ヘラ切りの痕跡が残存
7612	〃	〃 〃	13.8	3.7	-	10.6	灰色 〃	良好	約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで, ナデ調整
7613	〃	〃 〃	14.4	(4.0)	-	-	灰白色 淡黄色	不良	一部が残存, 器面は摩耗するが, 底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられる。
7614	〃	〃 〃	-	(2.6)	-	6.3	灰色 〃	良好	底部約1/2が残存, 器面は回転ナデ調整で, 底部はベタ高台となり, 底部の切り離しは回転糸切り
7615	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	6.8	灰白色 〃	不良	底部約1/3が残存, 器面は摩耗するが, 底部はベタ高台となり, 底部の切り離しは回転糸切り
7616	〃	〃 〃	(14.4)	(5.4)	-	6.7	〃 〃	〃	体部から底部の約2/3が残存, 器面は摩耗するが, 底部はベタ高台となり, 底部の切り離しは回転糸切り
7617	〃	〃 皿	14.2	2.2	-	10.4	〃 〃	〃	約1/5が残存, 底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられるが, 器面が摩耗し, 不明瞭
7618	〃	〃 〃	15.0	2.2	-	12.0	〃 〃	〃	口縁部の一部と底部約1/4が残存, 器面は摩耗するが, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7619	〃	〃 〃	15.8	2.2	-	12.0	にぶい黄橙色 〃	やや 不良	約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7620	〃	〃 〃	15.7	2.3	-	12.4	灰白色 〃	不良	一部が残存, 器面は摩耗するが, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7621	〃	〃 〃	16.0	2.1	-	13.4	灰白色 灰色	良好	約1/6が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで, ナデ調整, 内面に火襷
7622	〃	〃 高杯	-	(4.3)	-	-	灰色 〃	〃	脚柱部上半が残存, 杯部内面はナデ調整, 他は回転ナデ調整
7623	〃	〃 〃	-	(5.3)	-	-	灰白色 〃	不良	脚柱部上半が残存, 器面は摩耗
7624	〃	〃 鉄鉢	21.7	(5.6)	-	-	灰色 〃	良好	口縁部から体部の破片, 器面は回転ナデ調整
7625	〃	〃 壺	(5.1)	(4.4)	-	-	灰白色 〃	良	口縁部から上胴部の破片, 口頸部は回転ナデ調整, 胴部内外面はナデ調整

Ⅶ区 遺物観察表 26 (7626～7650)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7626	SD-7008	須恵器 壺	10.8	(5.7)	-	-	灰色 〃	良好	口縁部から上胴部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 胴部内面に同心円文のタタキ, 口縁部はハダ荒れ
7627	〃	〃 〃	9.0	(3.8)	-	-	〃 〃	〃	口縁部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 外面にナデ調整
7628	〃	〃 〃	11.4	(5.0)	-	-	〃 〃	〃	口頸部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内面から口唇部はハダ荒れ
7629	〃	〃 〃	16.4	(8.3)	-	-	灰白色 灰色	〃	口頸部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 口唇部に自然釉がかかる。
7630	〃	〃 〃	-	(4.9)	(9.8)	6.3	灰色 〃	〃	底部約1/2が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面は指押え, 外面は回転ヘラ削り, 底部はヘラ起こし
7631	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	9.8	灰白色 〃	〃	底部約1/2が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7632	〃	〃 〃	-	(2.7)	(11.5)	11.0	灰白色 淡黄色	良	底部約1/6が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り, 外底面はナデ調整
7633	〃	〃 〃	-	(10.1)	(26.2)	16.4	黒色 紫灰色	〃	底部の破片, 内面はナデ調整, 外面は回転ヘラ削り, 高台周辺はヨコナデ調整
7634	〃	〃 〃	-	(4.1)	-	10.2	青灰色 灰色	良好	底部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整, 外底面はナデ調整で, ヘラ記号が残存
7635	〃	〃 〃	-	(5.9)	(15.3)	11.2	灰色 〃	〃	底部約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面に指押えとナデ調整, 外面は回転ヘラ削り, 外底面はヘラナデ
7636	〃	〃 〃	-	(3.9)	-	13.0	褐灰色 〃	良	底部約1/4が残存, 内面はナデ調整, 外面は静止ヘラ削り, 外底面は未調整
7637	〃	〃 甕	20.0	(5.3)	(24.8)	-	にぶい黄橙色 にぶい褐色	不良	口縁部から上胴部の約1/5が残存, 器面は摩耗するが, 肩部に平行のタタキ目が残存
7638	〃	〃 〃	-	(3.5)	-	-	黄灰色 灰黄褐色	良好	口頸部の細片, 器面は回転ナデ調整, 口縁部内面はハダ荒れ
7639	〃	〃 〃	29.2	(4.9)	-	-	灰色 灰白色	〃	口頸部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 外面はハダ荒れ
7640	〃	〃 〃	18.6	(8.2)	(22.0)	-	灰色 暗灰色	〃	口頸部約1/3と上胴部の一部が残存, 口頸部は回転ナデ調整, 胴部内面は同心円文, 外面は平行のタタキ
7641	〃	〃 〃	25.6	(2.4)	-	-	灰色 灰オリーブ色	〃	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 自然釉がかかる。
7642	〃	〃 〃	-	(5.5)	-	-	灰色 〃	〃	口縁部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 外面に3本単位と4本単位の波状文
7643	〃	土師質土器 杯	-	(1.8)	-	6.4	明赤褐色 〃	不良	底部の大半が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられる。
7644	〃	〃 〃	-	(2.9)	-	7.2	橙色 〃	良好	底部から体部の約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整
7645	〃	〃 〃	14.0	4.5	-	7.4	にぶい黄橙色 〃	良	口縁部の一部と底部約1/2が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
7646	〃	〃 〃	10.3	4.2	-	6.8	橙色 〃	不良	口縁部の一部と底部が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられる。
7647	〃	〃 〃	10.8	-	4.1	7.2	浅黄褐色 〃	やや不良	口縁部約1/3と底部が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられる。
7648	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	7.4	にぶい褐色 にぶい黄橙色	〃	底部約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられる。
7649	〃	〃 〃	-	(2.6)	-	7.7	橙色 〃	良	底部約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7650	〃	〃 〃	-	(2.6)	-	8.3	淡黄色 橙色	〃	底部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
7651	SD-7008	土師質土器 杯	-	(2.1)	-	8.4	浅黄橙色 〃	良	底部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7652	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	7.4	にぶい褐色 橙色	〃	底部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7653	〃	〃 椀	-	(2.1)	-	6.2	橙色 〃	〃	底部が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 底部外面には回転糸切りの痕跡が残存
7654	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	5.4	灰黄褐色 にぶい橙色	不良	底部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 底部の切り離しは回転糸切りとみられる。
7655	〃	〃 〃	13.6	4.9	-	5.8	浅黄橙色 〃	良	約1/5が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 底部の切り離しは静止糸切りとみられる。
7656	〃	〃 〃	15.0	4.8	-	9.0	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7657	〃	〃 〃	-	(3.4)	-	5.0	淡黄色 〃	やや 不良	一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 体部外面に回転ヘラ削り, 他は摩耗
7658	〃	〃 〃	-	(2.2)	-	5.5	暗灰黄色 にぶい褐色	不良	底部約2/3が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 高台高0.4cm
7659	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	5.8	褐灰色 にぶい黄橙色	やや 不良	底部1/2弱が残存, 成形はA技法, 外面は回転ナデ調整, 高台周辺はヨコナデ調整, 他は摩耗
7660	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	6.0	にぶい黄橙色 浅黄橙色	不良	底部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 高台高0.5cm
7661	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	6.0	にぶい橙色 〃	やや 不良	底部約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 高台高0.5cm
7662	〃	〃 〃	-	(3.2)	-	6.0	浅黄褐色 にぶい黄褐色	〃	底部が残存, 成形はA技法, 外面に回転ヘラ削り, 底部の切り離しは回転糸切り, 他は摩耗
7663	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	5.8	にぶい黄褐色 浅黄褐色	良	底部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面と底部外面はナデ調整
7664	〃	〃 〃	-	(2.0)	-	5.8	褐灰色 にぶい黄褐色	不良	底部の破片, 成形はA技法, 器面は摩耗
7665	〃	〃 〃	-	(2.2)	-	6.8	にぶい橙色 〃	やや 不良	底部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗
7666	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	7.3	灰白色 浅黄褐色	良	底部約1/5が残存, 成形はB技法, 器面は摩耗と剝離
7667	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	8.0	橙色 明赤褐色	不良	底部約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗
7668	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	9.8	橙色 〃	やや 不良	底部約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗
7669	〃	〃 〃	-	(3.2)	-	6.4	橙色 にぶい黄褐色	〃	〃
7670	〃	〃 小皿	8.0	1.5	-	4.8	橙色 浅黄褐色	〃	底部約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
7671	〃	〃 〃	9.0	1.5	-	5.6	にぶい橙色 〃	〃	約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 底部の切り離しは回転糸切りとみられる。
7672	〃	〃 皿	10.1	1.9	-	7.2	にぶい黄褐色 橙色	良	約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7673	〃	〃 〃	10.7	1.5	-	7.0	にぶい橙色 〃	〃	1/3弱が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7674	〃	〃 〃	11.4	1.7	-	8.0	橙色 〃	やや 不良	約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられる。
7675	〃	〃 〃	12.4	1.7	-	8.8	〃 〃	〃	約1/5が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられる。

Ⅶ区 遺物観察表28 (7676～7700)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7676	SD-7008	土師質土器 皿	12.6	2.5	-	7.2	浅黄橙色 にぶい橙色	良	約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7677	〃	〃 〃	13.8	1.6	-	10.0	にぶい褐色 にぶい橙色	〃	〃
7678	〃	〃 〃	14.2	1.7	-	10.6	にぶい橙色 〃	やや 不良	一部が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗
7679	〃	〃 小皿	(6.9)	(3.5)	-	4.0	橙色 〃	〃	口縁部が欠損, ベタ高台, 器面は摩耗
7680	〃	黒色土器 椀	-	(1.8)	-	6.4	黒褐色 にぶい橙色	良	底部約1/3が残存, 内面はヘラ磨き, 外面は摩耗と剝離, 高台高0.6cm
7681	〃	〃 〃	14.6	5.0	-	7.8	黄灰色 にぶい黄橙色	やや 不良	一部が残存, 内面はナデ調整, 他は摩耗, 高台高0.8cm
7682	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	10.2	黒色 にぶい黄橙色	良	底部約1/4が残存, 内面はヘラ磨き, 外面は摩耗, 高台高0.8cm
7683	〃	〃 〃	-	(2.2)	-	8.9	黒褐色 にぶい橙色	やや 不良	底部約1/3が残存, 内面はヘラ磨き, 外面は摩耗, 高台高0.5cm
7684	〃	〃 〃	-	(1.3)	-	7.9	暗灰色 にぶい赤褐色	良好	底部の破片, 内面はヘラ磨き, 高台周辺はヨコナデ調整, 高台高0.7cm
7685	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	8.2	暗灰色 にぶい橙色	〃	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内面にヘラ磨き, 高台周辺はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整
7686	〃	〃 〃	17.2	(5.5)	-	9.6	黒色 にぶい黄橙色	良	一部が残存, 内面はヘラ磨き, 外面は摩耗, 高台高1.1cm
7687	〃	〃 杯	-	(1.4)	-	7.8	黄灰色 橙色	良好	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7688	〃	〃 甕	12.2	(3.1)	-	-	黒色 にぶい黄褐色	やや 不良	口縁部から上胴部の破片, 器面は摩耗
7689	〃	〃 〃	13.4	(3.4)	13.4	-	黒色 にぶい褐色	不良	〃
7690	〃	〃 椀	-	(1.7)	-	6.2	黒褐色 褐灰色	良	底部約1/3が残存, 内面はヘラ磨き, 高台周辺はヨコナデ調整, 他は摩耗, 高台高0.7cm
7691	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	6.0	暗灰色 〃	良好	底部約1/4が残存, 器面は全面にヘラ磨き, 高台は小さくかまぼこ状を呈す。
7692	〃	〃 〃	-	(2.7)	-	6.8	灰黄褐色 褐灰色	〃	底部の破片, 器面は全面にヘラ磨き, 外面下端に回転ヘラ削り, 高台は断面三角形
7693	〃	緑釉陶器 皿	-	(1.2)	-	-	灰オリーブ色 橙色	良	口縁部の細片, 軟質系, 全面に緑釉を施釉
7694	〃	〃 椀	-	(1.5)	-	-	オリーブ黄色 〃	良好	口縁部の細片, 硬質系, 全面に緑釉を施釉
7695	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	-	オリーブ灰色 〃	〃	体部の細片, 硬質系, 外面に鎬蓮弁, 全面に緑釉を施釉
7696	〃	〃 皿	-	(2.3)	-	-	灰オリーブ色 〃	〃	口縁部の細片, 硬質系, 器面は回転ナデ調整で, 全面に緑釉を施釉
7697	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	-	〃 〃	〃	体部の細片, 硬質系, 器面は回転ナデ調整で, 全面に緑釉を施釉
7698	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	-	灰白色 灰オリーブ色	良	体部の細片, 硬質系, 外面下半にヘラ削り, 全面に緑釉を施釉
7699	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	5.8	灰オリーブ色 〃	良好	底部が残存, 硬質系, 器面は回転ナデ調整, 高台は面取り, 外底面はナデ調整とヘラ調整
7700	〃	〃 椀	-	(2.7)	-	6.2	灰白色 〃	〃	底部約2/3が残存, 硬質系, 器面は回転ナデ調整で, 外面は回転ヘラ削り, 底部は削り出し高台

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
7701	SD-7008	二彩陶器 皿	-	(1.7)	-	-	浅黄色 灰白色	良	体部の細片, 硬質系, 内面に緑釉, 外面に緑色と黄色の釉を施釉
7702	〃	灰釉陶器 椀	-	(2.0)	-	-	灰オリーブ色 灰白色	良好	口縁部の細片, 全面に灰釉を施釉
7703	〃	〃 〃	-	(3.1)	-	6.4	灰白色 〃	〃	底部約1/2が残存, 器面は回転ナデ調整, 高台周辺はヨコナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7704	〃	〃 皿	-	(1.3)	-	-	灰オリーブ色 灰色	〃	体部の細片, 器面の大半に灰釉を施釉, 外面はハダ荒れ
7705	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	-	灰黄色 灰白色	良	体部の細片, 全面に灰釉を施釉
7706	〃	〃 〃	-	(1.6)	-	-	灰白色 〃	良好	体部の細片, ほぼ全面に灰釉を施釉
7707	〃	〃 〃	-	(0.8)	-	-	灰オリーブ色 〃	〃	体部の細片, 全面に灰釉を施釉
7708	〃	〃 〃	-	(1.5)	-	-	オリーブ灰色 〃	〃	体部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 外面下半に回転ヘラ削り, 外面2/3と内面に灰釉を施釉
7709	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	5.8	灰オリーブ色 灰白色	〃	底部約1/6が残存, 高台周辺はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整, 内面と高台外に灰釉を施釉
7710	〃	〃 〃	14.7	2.7	-	7.4	灰白色 〃	〃	約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面はナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7711	〃	〃 〃	-	(1.2)	-	7.8	〃 〃	〃	底部約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 外面は回転ヘラ削り, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7712	〃	〃 瓶	-	(1.5)	-	-	灰白色 灰黄色	〃	口縁部の細片, 器面は回転ナデ調整, 外面のみに灰釉を施釉
7713	〃	製塩土器	-	(5.3)	-	-	にぶい橙色 黄橙色	良	口縁部の細片, 口唇部から外面は指押えとナデ調整, 内面に布目が残存
7714	〃	〃	-	(2.8)	-	-	灰色 〃	良好	胴部の細片, 外面は指押え, 内面は布目が残存
7715	〃	瓦器 椀	14.8	(4.8)	-	-	灰色 褐灰色	やや不良	口縁部から体部の約1/4が残存, 口縁部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整の後にヘラ磨き, 外面は指押え
7716	〃	瓦 平瓦	(8.2)	(7.5)	2.1	-	灰黄色 にぶい橙色	良	破片, 凹面に布目, 凸面に縄目のタタキ目が残存, 側面はヘラで面取り
7717	〃	土製品 土錘	(6.9)	(4.4)	(3.6)	(78.7)	- 灰白色	〃	約2/3が残存, 表面はナデ調整で, 紐溝が3ヵ所に残存
7718	〃	〃 〃	3.7	1.9	1.8	(8.7)	橙色 〃	不良	ほぼ完存, 円筒形, 表面は摩耗するが, 指頭圧痕が残存, 孔径0.8cm
7719	〃	〃 〃	(4.2)	1.7	1.5	(11.3)	にぶい黄橙色 〃	良好	両端が欠損, 紡錘形, 表面は指押えとナデ調整, 孔径0.5cm
7720	〃	石製品 磨石	13.2	7.5	4.5	685.9	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕, 側面には敲打痕と摩滅痕が残存
7721	〃	〃 砥石	(4.3)	3.4	3.2	(87.8)	-	-	一部が残存, 石材は細粒砂岩, 4面に使用痕が残存
7722	〃	〃 〃	(16.3)	(13.5)	7.1	(2.0kg)	-	-	約3/5が残存, 石材は細粒砂岩, 3面に使用痕が残存
7723	P-7011	弥生土器 壺	16.5	(3.4)	-	-	橙色 〃	不良	口縁部の破片, 器面は摩耗, 口縁部部にヘラ状工具による刻目
7724	P-7010	〃 甕	11.9	(2.1)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良	口縁部の破片, 器面はヨコナデ調整で, 外面に指頭圧痕が残存
7725	P-7030	〃 〃	18.5	(4.1)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄橙色	良好	口頸部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整, 頸部外面はヨコナデ調整, 口縁部外面に施文

Ⅶ区 遺物観察表30 (7726～7750)

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
7726	P-7044	弥生土器 甕	16.0	(11.2)	15.4	-	にぶい黄褐色 にぶい黄橙色	良	口縁部から中胴部の破片, 口唇部から口縁部内面はヨコナデ調整, 口縁部外面は指押え
7727	P-7008	〃 〃	15.8	(7.1)	(16.2)	-	にぶい黄橙色 褐色	〃	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 胴部内外面はナデ調整
7728	P-7074	〃 〃	26.2	(9.5)	-	-	明赤褐色 にぶい赤褐色	良好	口縁部の破片, 器面はヨコナデ調整とナデ調整で, 外面にハケ目が残存し, 煤が付着
7729	P-7007	〃 〃	-	(4.3)	-	5.8	暗灰色 にぶい橙色	〃	底部が残存, 内面はナデ調整とヘラ削り, 外面は指ナデ, 外底面はナデ調整
7730	P-7032	〃 鉢	22.6	(8.5)	21.2	-	にぶい褐色 橙色	〃	口縁部から体部の約1/5が残存, 口唇部はヨコナデ調整, 頸部内外面にハケ調整, 胴部内面はナデ調整
7731	P-7012	土師器 杯蓋	-	(1.5)	-	-	赤褐色 〃	〃	口縁部の細片, ヘラ磨きの後に赤色塗彩
7732	P-7029	〃 杯	-	(3.3)	-	-	明赤褐色 〃	良	口縁部の細片, 器面はヨコナデ調整で, 内面に放射線状の暗文, 全面に赤色塗彩
7733	P-7090	〃 〃	14.6	3.2	-	9.2	〃 〃	〃	1/2弱が残存, 成形は左手手法, 器面はヨコナデ調整で, 内面にナデ調整, 外面にヘラ磨き, 底部外面はヘラ切り
7734	P-7065	〃 椀	14.6	(5.2)	-	-	橙色 〃	不良	口縁部から体部の破片, 器面は摩耗
7735	P-7076	〃 〃	-	(1.2)	-	6.9	にぶい褐色 〃	良好	底部約1/3が残存, 器面は摩耗, 高台高0.6cm
7736	P-7080	〃 皿	12.6	1.6	-	9.2	橙色 〃	良	約1/5が残存, 器面はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整
7737	P-7021	〃 〃	14.8	(1.9)	-	12.2	〃 〃	〃	一部が残存, 器面はヨコナデ調整の後にヨコ方向のヘラ磨き
7738	P-7041	〃 〃	(20.0)	(2.3)	-	15.2	にぶい褐色 〃	〃	底部を中心に約1/5が残存, 外底面はヘラ切りの後にヘラ磨き, 他は摩耗
7739	P-7040	〃 高杯	-	(3.6)	-	-	にぶい橙色 橙色	〃	基部が残存, 脚部内面はナデ調整, 他は摩耗
7740	P-7041	〃 〃	-	(3.1)	-	-	橙色 〃	良好	基部約1/2が残存, 器面は摩耗, 成形は, 杯部が左手手法, 脚部がA技法
7741	P-7047	〃 〃	-	(5.9)	-	-	にぶい黄橙色 〃	〃	基部が残存, 器面はヨコナデ調整, 脚部の成形はA技法
7742	P-7058	〃 〃	-	(1.7)	-	11.2	浅黄橙色 〃	〃	裾部の破片, 器面はヨコナデ調整, 成形はA技法
7743	P-7045	〃 〃	-	(2.0)	-	13.8	明赤褐色 〃	〃	〃
7744	P-7050	〃 甕	23.9	(7.7)	(23.7)	-	橙色 〃	良	口縁部から上胴部の破片, 口頸部内面と胴部外面はハケ調整で, 口頸部と胴部上半にヨコナデ調整
7745	P-7064	〃 〃	25.8	(3.5)	-	-	にぶい赤褐色 〃	良好	口縁部の破片, 内外面はハケ調整で, ヨコナデ調整を加える。
7746	P-7024	〃 〃	-	(5.7)	-	-	〃 〃	〃	口縁部から上胴部の細片, 口頸部内面と胴部外面はハケ調整で, 口頸部と内面にヨコナデ調整
7747	P-7025	〃 〃	-	(7.1)	-	-	にぶい褐色 〃	〃	口縁部から上胴部の細片, 胴部外面はハケ調整, 他はヨコナデ調整
7748	P-7066	〃 羽釜	-	(3.2)	-	-	にぶい黄橙色 褐灰色	〃	口縁部の細片, 鏝下端はナデ調整, 他はヨコナデ調整
7749	P-7033	〃 〃	-	(3.4)	-	-	褐灰色 にぶい黄褐色	〃	口縁部の細片, 口唇部と鏝はヨコナデ調整, 他はナデ調整
7750	P-7052	須恵器 杯蓋	14.2	(2.6)	-	-	灰色 〃	〃	一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面に回転ヘラ削り, 内面にナデ調整

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7751	P-7082	須恵器 杯蓋	14.0	(1.9)	-	-	褐灰色 〃	良好	一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内面にナデ調整
7752	P-7013	〃 〃	14.6	(1.3)	-	-	黄灰色 〃	良	つまみを除く約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 外面に静止ヘラ削り, 内面にナデ調整
7753	P-7039	〃 〃	13.6	(1.4)	-	-	灰黄色 にぶい黄褐色	やや 不良	約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 天井部外面の大半に回転ヘラ削り, 内面にナデ調整
7754	P-7019	〃 杯身	-	(1.5)	-	8.8	灰白色 〃	〃	底部約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り, 高台高0.7cm
7755	P-7077	〃 〃	-	(2.3)	-	9.2	黄灰色 〃	良	〃
7756	P-7046	〃 〃	-	(1.9)	-	9.8	灰色 〃	〃	底部約1/6が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り
7757	P-7060	〃 〃	-	(2.2)	-	9.8	黄灰色 〃	良好	〃
7758	P-7069	〃 〃	-	(2.6)	-	10.6	灰色 〃	〃	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 外面下端に回転ヘラ削り, 高台周辺はヨコナデ調整
7759	P-7026	〃 〃	-	(1.8)	-	9.0	灰白色 〃	〃	底部約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 高台周辺はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整
7760	P-7092	〃 〃	-	(1.4)	-	9.0	灰色 〃	〃	底部が残存, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで, 縁辺をナデ調整, 高台高0.5cm
7761	P-7058	〃 〃	-	(1.7)	-	9.3	紫灰色 灰色	〃	底部約1/6が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで, ナデ調整
7762	P-7088	〃 〃	-	(2.7)	-	8.3	黄灰色 〃	やや 不良	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7763	P-7022	〃 〃	13.1	4.2	-	9.2	灰色 〃	良	1/2強が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り, 高台高0.9cm
7764	P-7062	〃 〃	-	(1.5)	-	9.2	褐灰色 〃	〃	底部の破片, 器面は回転ナデ調整, 高台周辺はヨコナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り, 高台高0.7cm
7765	P-7061	〃 〃	-	(2.2)	-	9.5	灰色 〃	良好	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7766	P-7059	〃 〃	(13.9)	(4.7)	-	9.8	〃 〃	〃	口縁部の一部と底部約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7767	P-7063	〃 〃	-	(2.6)	-	10.6	灰黄色 〃	やや 不良	底部約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 他は摩耗, 高台高0.8cm
7768	P-7041	〃 〃	-	(3.1)	-	10.2	灰色 灰黄色	良	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7769	P-7094	〃 〃	-	(3.5)	-	8.0	灰色 〃	良好	底部約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7770	P-7034	〃 〃	-	(2.1)	-	7.8	灰白色 〃	不良	底部が残存, 器面は摩耗
7771	P-7039	〃 杯	13.6	3.2	-	10.4	灰黄色 〃	やや 不良	一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7772	P-7038	〃 〃	14.8	4.0	-	9.6	灰白色 〃	不良	約1/6が残存, 器面は回転ナデ調整とみられる。
7773	P-7020	〃 〃	16.8	(5.4)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい褐色	やや 不良	口縁部から体部の破片, 器面は回転ナデ調整
7774	P-7016	〃 皿	14.2	1.4	11.8	-	黄灰色 灰色	〃	一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切りで, ナデ調整
7775	P-7057	〃 〃	16.9	2.3	-	13.6	にぶい黄橙色 〃	不良	一部が残存, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは不明

Ⅶ区 遺物観察表32 (7776～7800)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7776	P-7048	須恵器 高杯	-	(5.7)	-	-	灰白色 〃	良好	基部が残存, 杯部内面はナデ調整, 脚部内面はしぼりとナ デ調整, 外面は回転ナデ調整
7777	P-7049	〃 〃	-	(6.8)	-	-	〃 〃	不良	基部が残存, 器面は摩耗
7778	P-7087	〃 短頸壺	8.1	(8.1)	12.7	6.6	〃 〃	良好	約1/2が残存, 器面は回転ナデ調整で, 底部外面に回転ヘ ラ削り, 中胴部外面に1条の凹線
7779	P-7028	〃 壺	5.4	10.6	8.6	7.2	灰色 〃	〃	口縁部約2/3が欠損, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離 しは回転ヘラ切りで, ナデ調整
7780	P-7071	〃 〃	-	(6.8)	9.8	7.0	灰白色 〃	〃	胴部の破片, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転 ヘラ切りで, 縁辺をナデ調整
7781	P-7002	〃 甕	20.8	(2.2)	-	-	〃 〃	不良	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整
7782	P-7053	〃 〃	21.6	(4.3)	-	-	灰色 灰白色	良	〃
7783	P-7054	土師質土器 杯	11.4	3.4	-	7.2	浅黄橙色 〃	〃	口縁部約1/4と底部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナ デ調整で, 内底面にナデ調整
7784	P-7081	〃 〃	-	(2.4)	-	8.4	にぶい黄褐色 〃	〃	底部約1/6が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7785	P-7084	〃 〃	-	(1.3)	-	8.8	明赤褐色 橙色	やや 不良	底部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 外 底面に回転ヘラ切りの痕跡が残存
7786	P-7018	〃 〃	12.6	3.0	-	7.5	橙色 〃	〃	ほぼ完存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面 にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7787	P-7080	〃 〃	12.4	3.2	-	7.2	にぶい黄褐色 橙色	良	破片, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離 しは回転糸切り
7788	P-7051	〃 〃	12.0	3.0	-	8.0	にぶい黄褐色 にぶい橙色	〃	約1/3が残存, 成形はB技法, 口縁部から内面は回転ナデ 調整で, 内底面にナデ調整, 体部外面は未調整
7789	P-7079	〃 〃	12.8	4.9	-	7.8	灰白色 にぶい黄褐色	〃	約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内 底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7790	P-7006	〃 〃	14.2	4.3	-	6.5	浅黄橙色 〃	良好	ほぼ完存, 成形はB技法, 口縁部から内面は回転ナデ調整 で, 内底面にナデ調整, 体部外面は未調整
7791	P-7037	〃 〃	15.0	3.3	-	8.0	浅黄褐色 灰白色	良	約1/5が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内 底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
7792	P-7086	〃 〃	-	(2.2)	-	7.2	にぶい橙色 〃	良好	底部1/2弱が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7793	P-7070	〃 〃	-	(2.8)	-	7.0	灰白色 〃	〃	底部が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底 面にナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
7794	P-7051	〃 〃	-	(1.5)	-	8.4	灰褐色 にぶい橙色	良	底部約2/3が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7795	P-7072	〃 椀	13.4	4.4	-	6.6	浅黄褐色 〃	やや 不良	約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部 はベタ高台で, 底部の切り離しは回転糸切り
7796	P-7075	〃 〃	-	(3.0)	-	6.2	浅黄褐色 にぶい黄褐色	良	底部1/2弱が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部はベタ高台
7797	P-7037	〃 〃	14.6	5.2	-	5.0	浅黄色 〃	やや 不良	一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底 面にナデ調整, 他は摩耗, 高台高0.5cm
7798	P-7068	〃 〃	-	(2.4)	-	5.4	橙色 にぶい橙色	〃	底部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 高台高0.4cm
7799	P-7069	〃 〃	-	(2.8)	-	6.1	にぶい黄褐色 灰黄褐色	良	底部の一部と体部の約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は 回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 高台高0.5cm
7800	P-7068	〃 〃	-	(1.8)	-	6.2	灰白色 淡赤褐色	やや 不良	底部が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 高台高0.4cm

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7801	P-7037	土師質土器 椀	-	(2.7)	-	6.6	浅黄色 〃	やや 不良	底部の約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 内面に 煤が付着, 高台高0.4cm
7802	P-7051	〃 小皿	9.8	1.3	-	7.0	にぶい黄橙色 〃	〃	約1/6が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 外底面 には回転ヘラ切りの痕跡が残存
7803	P-7083	〃 〃	12.6	1.9	-	8.8	灰白色 浅黄橙色	〃	口縁部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 外底面には回転ヘラ切りの痕跡が残存
7804	P-7056	〃 〃	10.3	1.8	-	6.6	浅黄橙色 〃	良	一部が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 外底面 には回転ヘラ切りの痕跡が残存
7805	P-7072	〃 〃	8.8	1.4	-	6.0	灰白色 〃	やや 不良	1/2強が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 内底面 にナデ調整, 外底面に静止糸切りの痕跡が残存
7806	〃	〃 〃	8.2	1.1	-	5.4	浅黄橙色 にぶい黄橙色	〃	底部と口縁部の破片, 成形はA技法, 器面は摩耗
7807	P-7073	〃 〃	9.0	1.3	-	6.7	灰白色 〃	良	口縁部約1/6が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整 で, 内底面にナデ調整
7808	〃	〃 〃	9.0	1.4	-	5.0	橙色 〃	やや 不良	約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 外底面 には回転糸切りの痕跡が残存
7809	P-7036	〃 〃	8.3	1.6	-	6.1	橙色 赤色	良	完存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 外底面には回転 糸切りの痕跡が残存
7810	P-7067	〃 〃	7.9	1.8	-	4.7	灰白色 〃	〃	約4/5が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内 底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
7811	P-7080	黒色土器 椀	13.9	(4.5)	-	-	黒褐色 浅黄橙色	〃	口縁部から体部の破片, 器面は摩耗するが, 内面にヘラ 磨きの痕跡が残存
7812	P-7017	〃 〃	-	(1.1)	-	7.1	黒色 橙色	良好	底部1/2強が残存, 内面はヘラ磨き, 高台周辺はヨコナデ 調整, 外底面はナデ調整, 高台高0.5cm
7813	P-7085	緑釉陶器 椀	-	(2.1)	-	-	灰黄色 浅黄色	〃	口縁部の細片, 軟質系, 器面は回転ナデ調整で, 全面に緑 釉を施釉
7814	P-7084	〃 皿	-	(1.4)	-	-	灰白色 〃	〃	口縁部の細片, 硬質系, 器面は回転ナデ調整で, 全面に緑 釉を施釉
7815	P-7003	灰釉陶器 椀	13.6	(4.4)	-	-	黄灰色 〃	〃	口縁部から体部の約1/4が残存, 器面は回転ナデ調整で, 外面下端に回転ヘラ削り, 口唇部から内面に施釉
7816	P-7089	〃 皿	-	(0.8)	-	-	灰黄色 〃	〃	口縁部の細片, 全面に灰釉を施釉
7817	P-7043	土製品 紡錘車	3.7	3.8	0.7	9.8	黄灰色 にぶい赤褐色	〃	完存, 土器の転用, 上面はハケ調整とヘラ磨き, 下面はナ デ調整, 径0.4cmの円孔を穿つ。
7818	P-7005	〃 〃	3.6	4.1	0.9	12.9	にぶい橙色 橙色	良	完存, 土器の転用で未成品, 上面はヘラナデとナデ調整, 下面はナデ調整, 円孔は未貫通
7819	P-7009	〃 土錘	(6.2)	2.5	2.5	(31.2)	にぶい橙色 〃	〃	両端が部分的に欠損, 円筒形, 表面はナデ調整, 孔径1.0cm
7820	P-7093	石製品 打製石鎌	8.3	11.1	2.5	(292.1)	-	-	ほぼ完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑で, 中央に敲打痕, 縁辺に擦痕, 裏面は剥離面が残存
7821	P-7035	〃 石鎌	1.5	1.1	0.2	0.1	-	-	完存, 石材はサヌカイト, 平基の石鎌
7822	P-7091	〃 〃	(2.2)	2.1	0.6	(2.6)	-	-	先端, 基部の一部が欠損, 石材はサヌカイト, 凹基の石鎌
7823	P-7078	〃 叩石	(8.1)	(6.4)	3.5	(267.8)	-	-	破片, 石材は粗粒砂岩, 片面中央に敲打痕, 3面に擦痕も 残存し, 砥石としても使用したものとみられる。
7824	P-7015	〃 〃	11.2	8.5	2.4	(368.4)	-	-	一部が欠損, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心 に擦痕, 両面中央と側面に敲打痕が残存
7825	P-7042	〃 磨石	7.8	6.5	5.2	327.8	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心擦痕, 側面に摩滅痕と弱い敲打痕が残存

Ⅶ区 遺物観察表34 (7826～7850)

番号	遺構層位	器種 器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
7826	P-7055	石製品 磨石	11.2	6.9	3.9	455.8	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕, 端部に弱い敲打痕が残存
7827	P-7031	〃 〃	11.9	7.5	6.1	828.5	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑で, 各側面に擦痕, 敲打痕, 摩滅痕が残存, 煤の付着もみられる。
7828	P-7027	〃 砥石	(5.1)	3.0	3.1	(71.7)	-	-	約1/3が残存, 石材は細粒砂岩, 各面と小口の5面に使用痕が残存
7829	P-7023	〃 〃	(10.4)	(13.1)	4.5	(791.4)	-	-	一部が残存, 石材は細粒砂岩, 4ヵ所に使用面が残存
7830	P-7004	〃 〃	(17.8)	(15.3)	7.6	(2.7kg)	-	-	約1/4が残存, 石材は中粒砂岩, 上面を砥石として使用, 側面に敲打痕, 下面に擦痕が残存, 被熱で変色
7831	P-7014	金属製品 刀子	(7.2)	1.1	0.3	(4.8)	-	-	刃部の一部が残存, 刃先に向かって細くなり, 刃は擦り減る。全体に錆化が進む。
7832	SB-7066	土師質土器 杯	11.2	3.8	-	3.5	にぶい橙色 〃	良	約2/3が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にロクロ目が残存, 底部の切り離しは回転糸切り
7833	〃	〃 〃	11.0	3.6	-	3.7	橙色 〃	やや不良	〃
7834	〃	〃 〃	11.0	4.2	-	3.8	にぶい橙色 〃	良	約1/3が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にロクロ目が残存, 底部の切り離しは回転糸切り
7835	SB-7069	瀬戸焼 天目茶碗	-	(2.0)	-	4.4	黒色 灰白色	良好	底部が残存, 内面は鉄釉を施釉, 外面は露胎で, 底部は削り出し高台, 高台高1.1cm
7836	SB-7073	土師質土器 杯	10.5	3.2	-	5.1	灰白色 〃	〃	口縁部を中心に約1/4が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整で, 内面にはロクロ目が明瞭に残存
7837	SB-7074	〃 〃	9.5	3.8	-	5.6	にぶい黄橙色 〃	良	約3/4が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
7838	〃	〃 〃	11.6	3.6	-	6.6	灰黄色 にぶい黄橙色	〃	約1/5が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
7839	SB-7076	〃 椀	15.5	5.5	-	5.9	にぶい黄橙色 〃	〃	ほぼ完存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面と外底面はナデ調整, 高台高0.5cm
7840	SB-7082	土師器 皿	12.3	2.5	-	8.0	浅黄橙色 〃	〃	約1/2が残存, 成形は手づくね, 口縁部はヨコナデ調整, 内面と体部外面は指押え, 外底面はナデ調整
7841	〃	瓦器 椀	-	(1.0)	-	5.2	黄灰色 灰色	〃	底部約1/3が残存, 器面は摩耗, 底部には断面三角形の高台を貼付, 高台高0.5cm
7842	SB-7086	土師質土器 杯	(10.8)	(4.2)	-	4.4	にぶい黄橙色 〃	〃	底部と体部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内面にはロクロ目が明瞭に残存, 底部の切り離しは回転糸切り
7843	SB-7087	須恵器 甕	31.8	(4.1)	-	-	灰白色 〃	良好	口縁部の破片, 口縁部は回転ナデ調整で, 外面に自然釉がかかる。
7844	〃	土師質土器 杯	-	(1.5)	-	7.9	橙色 〃	良	底部約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
7845	〃	〃 椀	-	(2.0)	-	6.0	橙色 にぶい橙色	〃	底部約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
7846	〃	灰釉陶器 皿	16.0	2.6	-	8.2	灰オリーブ色 灰白色	良好	約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内面から高台外面に灰釉を施釉, 内底面に重ね焼きの痕跡が残存
7847	〃	土製品 土錘	(4.1)	1.3	1.2	(5.0)	黒色 〃	〃	一部欠損, 紡錘形, 表面はナデ調整, 孔径0.5cm
7848	〃	〃 〃	(4.3)	1.4	1.4	(5.5)	〃 〃	良	約3/4が残存, 紡錘形, 表面はナデ調整, 孔径0.4cm
7849	〃	石製品 叩石	10.6	9.5	7.5	976.3	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 両面中央と側面に敲打痕, 縁辺を中心に擦痕が残存
7850	〃	〃 砥石	19.7	15.6	6.7	2.6kg	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, ほぼ各面に使用痕と各所に擦痕が残存

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
7851	SB-7088	弥生土器蓋	7.0	(7.1)	-	-	暗灰色 にぶい黄橙色	良	裾部約1/3が残存, 天井部は平らでナデ調整, 外面はヘラナデ, 口縁部から内面はナデ調整
7852	SB-7093	灰釉陶器椀	-	(1.6)	-	-	灰色	良好	口縁部の細片, 全面に灰釉を施釉
7853	SB-7094	緑釉陶器椀	-	(2.3)	-	-	灰オリーブ色	〃	口縁部の細片, 全面に緑釉を施釉, 口唇部は緑釉が剥落
7854	SA-7020	灰釉陶器皿	-	(1.9)	-	-	灰黄色 灰白色	〃	体部の細片, 外面に回転ヘラ削り, 内面の大半と外面に灰釉を施釉
7855	SK-7079	土師器皿	12.2	2.2	-	7.8	にぶい橙色 浅橙色	良	1/2弱が残存, 成形は手づくね, 口縁部から内面はヨコナデ調整で, 内底面にナデ調整, 体部外面は指押え
7856	SK-7080	石製品叩石	14.1	11.6	4.6	1.0kg	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 片面中央と側面に敲打痕と粗い擦痕が残存, 大半に煤が付着
7857	〃	〃	(13.8)	(13.0)	5.0	(1.1kg)	-	-	1/5程度が残存, 石材は粗粒砂岩, 片面に敲打痕と擦痕が残存, 欠損部分を中心に被熱し, 煤が付着
7858	〃	〃 石臼	27.8	-	5.8	(2.2kg)	-	-	下臼の約1/3が残存, 石材は礫岩, 上面に4~5本の条線, 下面に摩滅痕が残存
7859	SK-7081	〃 扁平片刃石斧	(6.8)	4.5	1.5	(86.7)	-	-	刃部と基部欠損, 石材は蛇紋岩, 欠損部以外に研磨痕が残存
7860	SK-7085	須恵器杯蓋	15.8	(1.8)	-	-	青灰色 褐色	良好	口縁部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 外面にナデ調整
7861	SK-7086	白磁碗	-	(1.5)	-	4.6	灰白色	〃	底部約1/2が残存, 高台は削り出し高台で, 高台以外に白磁釉を施釉, 高台高0.4cm
7862	SK-7091	須恵器杯身	-	(2.5)	-	11.6	灰白色 黄灰色	良	底部から体部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面下端に回転ヘラ削り
7863	SK-7094	弥生土器甕	16.2	(6.7)	-	-	浅黄橙色 灰黄褐色	〃	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部内外面はナデ調整, 頸部下端に貼付微隆起突帯1条
7864	〃	石製品砥石	9.6	(7.8)	5.3	(476.9)	-	-	破片, 石材は細粒砂岩, 3面に使用痕が残存
7865	SK-7095	土師質土器杯	10.0	(3.1)	-	(4.0)	にぶい橙色	良	口縁部約1/3が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整で, 内面にはロクロ目が明瞭に残存
7866	SK-7097	〃	10.4	3.0	-	4.5	橙色 黄橙色	良好	ほぼ完存, 成形はB技法, 口縁部は回転ナデ調整, 他は未調整, 底部の切り離しは回転糸切り
7867	SK-7099	土師器羽釜	-	(5.2)	-	-	淡赤橙色 橙色	〃	口縁部から上胴部の細片, 口唇部はヨコナデ調整, 内面はハケ調整, 外面は指押え
7868	SK-7100	青磁皿	10.2	(1.5)	-	-	灰オリーブ色	〃	口縁部約1/4が残存, 外面は回転ヘラ削り, 内面に沈線2条, 全面に青磁釉を施釉
7869	SK-7101	石製品石鏃	(2.3)	1.6	0.3	(0.8)	-	-	先端部が欠損, 石材はサヌカイト, 凹基の石鏃
7870	SK-7102	土師質土器杯	-	(1.4)	-	3.9	浅黄橙色	良	底部約1/3が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にロクロ目が残存
7871	SD-7009	土師器甕	-	(6.8)	-	-	浅黄橙色 灰黄褐色	良好	口縁部から上胴部の細片, 口縁部から内面はヨコナデ調整, 胴部外面はハケ調整で, 外面には煤が付着
7872	〃	備前焼甕	-	(7.7)	-	-	暗紫灰色	〃	口頸部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 口縁部に自然釉がかかる。
7873	〃	〃 播鉢	-	(7.6)	-	-	赤灰色 灰色	〃	口縁部から体部の細片, 器面は回転ナデ調整で, 外面に重ね焼きの痕跡が残存
7874	〃	瀬戸・美濃系天目茶碗	11.6	6.2	-	4.2	黒色	〃	底部と口縁部の約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 底部は削り出し高台, 内面から体部外面に施釉
7875	〃	石製品石庖丁	4.8	11.0	0.9	(63.1)	-	-	一部が欠損, 石材はサヌカイト, 両端に挟りと溝を彫り込む。表面は研磨され, 部分的に敲打痕が残存

Ⅶ区 遺物観察表36 (7876～7900)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7876	SD-7009	石製品 石鏃	(2.6)	1.1	0.3	(0.9)	-	-	先端部が欠損, 石材はサヌカイト, 凹基の石鏃
7877	SD-7011	須恵器 杯身	-	(1.9)	-	9.4	灰色 灰白色	良	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り, 高台高0.6cm
7878	P-7096	〃 〃	-	(1.9)	-	10.9	灰白色 〃	〃	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 高台周辺はヨコナデ調整, 外底面はナデ調整
7879	P-7108	土質土器 杯	-	(2.5)	-	3.8	にぶい橙色 〃	〃	底部約1/2が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にロクロ目が残存, 底部の切り離しは回転糸切り
7880	P-7095	〃 〃	-	(2.7)	-	5.2	橙色 にぶい橙色	良好	底部1/2強が残存, 内面は回転ナデ調整, 外面は未調整, 底部の切り離しは回転糸切りで, ナデ調整
7881	P-7110	〃 〃	-	(1.3)	-	5.4	にぶい黄橙色 〃	良	底部約1/3が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にロクロ目が残存, 底部の切り離しは回転糸切り
7882	P-7112	〃 碗	15.2	(4.7)	-	-	浅黄橙色 〃	やや 不良	口縁部の破片, 成形はA技法, 器面は摩耗
7883	P-7113	〃 小皿	7.9	1.6	-	5.1	暗灰色 黒色	〃	完存, 成形はA技法, 底部の切り離しは回転糸切りで, 凸部にナデ調整, 他は摩耗
7884	〃	〃 〃	8.2	1.3	-	5.0	褐灰色 〃	良	約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
7885	P-7101	〃 皿	11.8	2.5	-	7.0	灰白色 にぶい橙色	やや 不良	約1/3が残存, 成形はB技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にロクロ目が残存, 底部の切り離しは回転糸切り
7886	P-7106	製塩土器	-	(2.9)	-	-	灰黄褐色 にぶい橙色	良	胴部の細片, 内面に布目, 外面にナデ調整の痕跡が残存
7887	P-7116	瓦質土器 火鉢	-	(5.5)	-	-	淡黄色 〃	不良	口縁部の細片, 器面は摩耗
7888	P-7111	常滑焼 壺	9.8	(4.0)	-	-	灰褐色 灰赤色	良好	口縁部約1/2が残存, 器面は回転ナデ調整で, 口縁部に自然釉がかかる。
7889	P-7103	備前焼 播鉢	-	(6.4)	-	(11.2)	青灰色 赤灰色	〃	底部約1/5が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内面に8本単位の条線が残存
7890	P-7114	白磁 碗	-	(3.0)	-	-	灰白色 〃	〃	口縁部の細片, 口縁部は玉縁をなし, 全面を施釉
7891	P-7102	青磁 稜花皿	10.4	2.8	-	5.0	明オリーブ灰色 〃	〃	約1/2が残存, 底部は削り出し高台, 内外面は花卉を彫り込む。見込から高台外面に施釉
7892	P-7115	土製品 土錘	3.9	0.8	0.8	(2.3)	灰白色 〃	良	大半が残存, 円筒形, 表面は摩耗するが, 指頭圧痕が残存, 孔径0.3cm
7893	P-7097	〃 〃	2.8	1.1	1.1	2.5	橙色 〃	〃	完存, 小型の紡錘形, 表面は摩耗, 孔径0.5cm
7894	P-7098	〃 〃	3.5	1.3	1.3	(4.0)	にぶい黄橙色 〃	やや 不良	ほぼ完存, 紡錘形, 表面は摩耗, 孔径0.4cm
7895	P-7099	〃 〃	(4.2)	1.1	1.0	(3.5)	〃 〃	〃	両端が一部欠損, 紡錘形, 表面は摩耗, 孔径0.4cm
7896	P-7100	石製品 叩石	16.1	8.7	5.7	1.1kg	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕, 端部に敲打痕が残存
7897	P-7109	〃 磨石	8.7	7.8	2.2	216.1	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で縁辺を中心に擦痕, 側面に敲打痕が残存
7898	P-7105	〃 〃	11.1	9.1	3.6	536.3	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で縁辺を中心に擦痕, 片面中央に敲打痕が残存
7899	P-7113	〃 砥石	(12.6)	9.1	5.3	(970.8)	-	-	ほぼ完存, 石材は細粒砂岩, 4面に使用痕がみられるが, 主に使用されたのは2面
7900	P-7107	〃 台石	17.4	14.7	6.2	2.2kg	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺を中心に擦痕が残存し, 側面に煤が付着

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
7901	P-7104	金属製品 刀子	(4.5)	1.4	0.6	(5.1)	-	-	青銅の柄と鉄製の刀子の茎が残存、部分的に変形する。
7902	SK-7104	須恵器 直口壺	7.4	(6.3)	12.4	-	灰色 褐灰色	良好	中胴部以上の約1/3が残存、器面は回転ナデ調整で、肩部内面に指頭圧痕が残存
7903	〃	石製品 石臼	26.6	-	7.6	(26kg)	-	-	下臼の約1/4が残存、上面に5本単位の条線が残存、下面は摩滅
7904	〃	〃 〃	27.8	-	9.5	(64kg)	-	-	下臼約1/2が残存、上面に5～6本単位の条線が残存、下面は摩滅、孔径3.3cm
7905	SK-7105	青磁 端反皿	10.9	(1.7)	-	-	明オリーブ灰色 〃	良好	口縁部の破片、全面に施釉し、貫入あり。
7906	SK-7106	緑釉陶器 皿	-	(1.5)	-	-	オリーブ灰色 灰オリーブ色	〃	体部の細片、硬質系、器面は回転ナデ調整で、全面に緑釉を施釉
7907	〃	青磁 碗	-	(1.9)	-	6.0	灰オリーブ色 〃	〃	底部の破片、高台は削り出し高台、高台以外に青磁釉を施釉、高台高0.9cm
7908	〃	近世以降陶器 鉢	19.4	(7.6)	-	-	にぶい赤褐色 〃	〃	口縁部から体部の破片、口縁部から内面は回転ナデ調整、体部上半は未調整、下半は回転ヘラ削り
7909	〃	石製品 磨石	12.9	10.1	5.1	1.0kg	-	-	完存、石材は中粒砂岩、表面は平滑で、縁辺を中心に擦痕、片面中央に敲打痕、側面に摩滅痕が残存
7910	SK-7114	肥前系磁器 猪口	7.0	(2.6)	-	-	灰白色 〃	良好	口縁部約1/3が残存、外面に文様、全面に透明釉を施釉
7911	SK-7115	能茶山焼 広東茶碗	-	(4.7)	-	6.0	〃 〃	〃	底部が残存、見込に帆かけ舟、三又トチン痕、外面に文様、底部は削り出し高台で、畳付釉ハギ
7912	SK-7119	石製品 硯	(7.2)	6.5	1.0	(94.7)	-	-	一部が残存、石材は粘板岩、裏面は欠損、側面と陸部は研磨され、海部には「五」の刻書
7913	〃	金属製品 刀子	(8.5)	1.3	0.7	(16.7)	-	-	青銅製の柄と鉄製の刀子の茎が残存、表面は剥離し、錆化が進む。

Ⅷ区 遺物観察表1 (8001～8025)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
8001	第Ⅰ層	土師器 羽釜	19.8	(3.3)	-	-	橙色 にぶい橙色	良好	口縁部から胴部の破片, 口縁部から内面はヨコナデ調整, 鐔下半は指押え
8002	〃	白磁 皿	11.3	2.6	-	6.4	灰白色 〃	〃	約1/5が残存, 底部は削り出し高台, 外底面以外に白磁釉を施釉し, 畳付は釉ハギ
8003	〃	青花 碗	-	(2.3)	-	6.0	明緑灰色 〃	〃	底部から体部の破片, 内外面に界線と草花文, 全面に透明釉を施釉し, 畳付は釉ハギ
8004	〃	土製品 土錘	3.5	2.2	1.4	9.5	- 橙色	〃	完存, 有溝の土錘, 表面はナデ調整で, 部分的に指頭圧痕が残存
8005	〃	石製品 磨石	10.0	6.7	2.2	231.9	-	-	ほぼ完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 両面中央部は摩滅し, 縁辺を中心に擦痕が残存
8006	〃	古銭	2.5	0.5	0.2	2.8	-	-	完存, 新寛永
8007	第Ⅲ・Ⅳ層	瓦質土器 甕	15.0	(3.8)	-	-	黄灰色 〃	良	口縁部から上胴部の破片, 口頸部はヨコナデ調整, 内面は指ナデ, 外面は指押えで, 煤が若干付着
8008	〃	青磁 碗	-	(2.0)	-	4.0	灰オリーブ色 〃	良好	底部約1/3が残存, 底部は削り出し高台, 全面に厚く青磁釉を施釉し, 畳付は釉ハギ
8009	〃	土製品 土錘	4.9	1.5	1.4	9.3	- 浅黄橙色	良	完存, 紡錘形, 表面はナデ調整で, 部分的に指頭圧痕が残存, 孔径0.4cm
8010	第Ⅴ層	弥生土器 甕	-	(1.5)	-	-	灰褐色 にぶい橙色	〃	口縁部の細片, 器面は摩耗するが, 口唇部にヨコナデ調整の痕跡, 外面に指頭圧痕とハケ目が残存
8011	〃	土師器 甕	-	(3.7)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良好	口縁部の細片, 器面はハケ調整で, 内面にヨコナデ調整, 外面にナデ調整を加える。口縁部下端に1条の凹線
8012	〃	〃 〃	7.5	4.7	2.0	-	褐灰色 にぶい黄橙色	良	把手のみ残存, 器面はナデ調整
8013	〃	〃 〃	7.2	4.3	1.9	-	- にぶい黄橙色	良好	〃
8014	〃	〃 羽釜	-	(2.5)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良	口縁部の細片, 器面は摩耗, 口縁外面に断面台形の鐔が付く。
8015	〃	須恵器 杯身	-	(1.3)	-	6.3	灰色 〃	やや不良	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整を加える。他は摩耗
8016	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	8.8	褐灰色 赤灰色	良好	底部約1/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
8017	〃	〃 〃	-	(2.2)	-	10.1	褐灰色 灰色	〃	底部の破片, 内面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 外面には自然釉が付着
8018	〃	〃 高杯	-	(4.8)	-	(6.6)	にぶい黄橙色 灰黄色	不良	脚台部の大半が残存, 杯部内面はナデ調整, 他は摩耗
8019	〃	〃 甕	-	(2.0)	-	-	灰色 〃	良好	口縁部の細片, 器面は回転ナデ調整, 口縁端部に1条の凹線, 外面に小さな突帯
8020	〃	〃 〃	-	(2.8)	-	-	〃 〃	やや不良	口頸部の細片, 器面は回転ナデ調整, 口縁端部に回転カキ目調整, 外面はタタキ
8021	〃	〃 〃	-	(5.2)	-	-	灰色 褐灰色	良好	頸部から上胴部の破片, 頸部は回転ナデ調整, 胴部内面は指押えとナデ調整, 外面は格子目状のタタキ
8022	〃	土師質土器 杯	-	(2.1)	-	5.6	橙色 〃	不良	底部から体部の破片, 成形はA技法, 器面は摩耗
8023	〃	〃 椀	-	(1.7)	-	4.5	にぶい橙色 〃	〃	底部約1/5が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗
8024	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	5.3	淡黄色 灰白色	良	底部が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗
8025	〃	〃 〃	-	(1.8)	-	6.4	褐灰色 にぶい橙色	不良	底部約1/4が残存, 成形はA技法, 外面は回転ヘラ削り, 内面に煤が付着, 他は摩耗

番号	遺構層位	器種器形	法量				色調 内面/外面	焼成	特徴
			口径	器高	胴径	底径			
8026	第V層	土師質土器 椀	-	(4.1)	-	8.0	橙色 〃	不良	底部のみ残存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 高台高1.6cm
8027	〃	〃 小皿	9.1	1.6	-	6.8	灰黄色 〃	良	一部が残存, 成形はA技法, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転糸切り
8028	〃	石製品 叩石	13.0	3.1	2.1	134.2	-	-	完存, 石材は緑色片岩, 表面は平滑で, 各所に研磨痕と擦痕, 両端に摩滅痕が残存
8029	第VI層	弥生土器 壺	18.0	(3.2)	-	-	橙色 〃	良	口頸部の破片, 口縁部から内面はヨコナデ調整で, 内面にハケ目が僅かに残存, 外面はナデ調整
8030	〃	〃 甕	-	(1.9)	-	-	にぶい黄橙色 にぶい褐色	良好	口縁部の細片, 器面はヨコナデ調整, 外面に微隆起突帯とクシ描直線文
8031	〃	〃 〃	-	(2.0)	-	-	灰黄色 にぶい黄橙色	良	口縁部の細片, 器面はヨコナデ調整, 端部下端に刻目, その下に微隆起突帯
8032	〃	〃 壺	-	(4.2)	-	7.0	褐灰色 にぶい黄橙色	〃	底部約1/2が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面はハケ調整, 外底面はナデ調整
8033	〃	石製品 投弾	3.8	3.7	2.0	38.0	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 擦痕が残存し, 摩滅し, 光沢を放つ部分あり。
8034	〃	〃 磨石	11.7	10.2	4.4	(736.8)	-	-	ほぼ完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は風化し, 剥落がみられる。側面には弱い敲打痕, 一部に擦痕が残存
8035	ST-8002	弥生土器 甕	17.5	(2.0)	-	-	黄灰色 にぶい黄橙色	良好	口頸部の破片, 口縁部はヨコナデ調整, 頸部はナデ調整, 口縁端部に凹線文, 外面には煤が付着
8036	〃	〃 〃	-	(4.1)	-	5.0	にぶい黄橙色 〃	良	底部約1/4が残存, 器面はナデ調整で, 外面は被熱で変色
8037	〃	〃 〃	-	(3.0)	-	6.4	黄灰色 にぶい橙色	〃	底面約1/5が残存, 器面はナデ調整
8038	〃	〃 高杯	16.0	(2.8)	-	-	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	口縁部から体部の破片, 内面はヨコナデ調整, 外面は摩耗
8039	〃	石製品 石庖丁	9.7	6.3	1.1	(8.9)	-	-	刃部約1/2と裏面約2/3が剥離, 石材は粘板岩, ほぼ全面を研磨, 紐孔2個を両面から穿つ。
8040	ST-8003	弥生土器 甕	-	(1.2)	-	-	灰黄褐色 灰褐色	良好	口縁部の細片, 器面はヨコナデ調整, 端部下端にヘラ状工具による刻目, 外面には煤が付着
8041	〃	〃 〃	12.4	(1.2)	-	-	にぶい褐色 褐灰色	良	口縁部の破片, 器面はヨコナデ調整, 外面は指押えで, 煤が若干付着
8042	〃	〃 壺	-	(33.5)	27.5	7.6	にぶい橙色 〃	〃	中胴部以下を中心に残存, 内面は指ナデとナデ調整, 外面は三段にヘラ磨き, 外底面は摩耗
8043	〃	〃 高杯	-	(4.2)	-	-	にぶい赤褐色 にぶい橙色	〃	口縁部の細片, 器面はヨコナデ調整, 外面に1条の凹線
8044	〃	石製品 台石	24.7	20.5	5.9	46kg	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 各所に擦痕, 両面中央に弱い敲打痕が残存
8045	SK-8003	弥生土器 甕	22.1	(6.9)	-	-	灰褐色 〃	良	口頸部の破片, 口唇部はヨコナデ調整, 他は摩耗, 口縁端部下端にヘラ状工具による刻目
8046	〃	〃 〃	-	(4.2)	-	5.7	にぶい褐色 〃	〃	底部約2/3が残存, 外底面はナデ調整, 他は摩耗し, 剥離が目立つ。
8047	〃	石製品 砥石	(19.7)	(9.0)	(4.8)	(857.4)	-	-	一部が残存, 石材は細粒砂岩, 残部には使用痕と敲打痕及び深い擦痕も残存
8048	SD-8001	〃 投弾	3.6	2.4	2.2	27.0	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑
8049	SD-8002	弥生土器 壺	-	(3.7)	-	-	明赤褐色 橙色	良	口縁部の細片, 内面は摩耗, 外面は指押えとナデ調整, 端部にはヘラ状工具による斜格子文
8050	〃	〃 甕	-	(2.5)	-	-	黄灰色 橙色	〃	口縁部の細片, 器面は摩耗

Ⅷ区 遺物観察表3 (8051～8075)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
8051	SD-8002	弥生土器 甕	13.4	(1.8)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良	口縁部の破片, 内面は摩耗, 他はヨコナデ調整, 端部は浅い凹面
8052	〃	〃 〃	-	(3.4)	-	-	灰黄褐色 にぶい褐色	〃	口頸部の細片, 口唇部はヨコナデ調整, 他は摩耗
8053	〃	〃 〃	-	(4.8)	-	-	橙色 にぶい橙色	不良	口頸部の細片, 器面は摩耗
8054	〃	〃 〃	-	(2.2)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良	口縁部の細片, 内外面はハケ調整で, 口唇部はヨコナデ調整
8055	〃	〃 〃	-	(2.8)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁部の細片, 内面は摩耗, 外面はハケ調整で, 口唇部はヨコナデ調整
8056	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	-	にぶい橙色 浅黄橙色	やや 不良	口縁部の細片, 器面は摩耗
8057	〃	〃 〃	-	(5.2)	-	-	にぶい黄橙色 〃	良	胴部の細片, 内面はハケ調整, 外面はタタキの後にハケ調整
8058	〃	〃 〃	-	(2.7)	-	4.6	にぶい褐色 にぶい黄橙色	〃	底部約2/3が残存, 内面は指押えとナデ調整, 外面と外底面はナデ調整
8059	〃	〃 〃	-	(1.8)	-	5.7	にぶい橙色 にぶい黄橙色	〃	底部約4/5が残存, 器面はナデ調整
8060	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	6.6	にぶい黄橙色 にぶい橙色	良好	底部の破片, 内面は指押えとナデ調整, 外面と外底面はナデ調整
8061	〃	〃 〃	-	(3.3)	-	7.4	灰黄褐色 橙色	不良	底部の破片, 器面は摩耗
8062	〃	〃 壺	-	(7.7)	-	10.0	にぶい橙色 赤褐色	良	底部の破片, 器面はナデ調整
8063	〃	石製品 投弾	3.1	2.9	2.2	28.8	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑
8064	〃	〃 〃	3.9	3.1	2.0	33.6	-	-	〃
8065	〃	〃 〃	3.8	3.0	2.0	33.8	-	-	〃
8066	〃	〃 〃	4.1	3.3	3.3	62.6	-	-	完存, 石材は細粒砂岩, 表面は平滑で, 多くが摩滅し, 光沢あり。
8067	〃	〃 叩石	(7.7)	7.6	3.8	(315.1)	-	-	約2/3が残存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 両面中央に敲打痕, 側面に弱い敲打痕, 縁辺を中心に擦痕が残存
8068	〃	〃 〃	11.2	9.5	3.9	616.6	-	-	完存, 石材は粗粒砂岩, 表面は平滑で, 片面中央に敲打痕, 縁辺を中心に擦痕が残存
8069	〃	〃 〃	13.7	8.8	2.2	430.4	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 片面中央に敲打痕, 縁辺を中心に擦痕が残存
8070	〃	〃 砥石	(11.8)	(7.3)	5.1	(727.0)	-	-	一部が残存, 石材は粗粒砂岩, 2面に使用痕が残存
8071	〃	〃 〃	(1.6)	13.4	6.0	(2.2kg)	-	-	約2/3が残存, 石材は中粒砂岩, 敲打痕, 擦痕が各所に残存, 叩石, 磨石として使用してから砥石に転用
8072	SD-8004	〃 投弾	3.9	3.3	2.8	45.1	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑
8073	SD-8005	弥生土器 壺	15.2	(3.3)	-	-	にぶい橙色 〃	良	口縁部の破片, 内面はヨコナデ調整, 外面は指押えの後にナデ調整, その下に2条の凹線, 端部に刻目と刺突文
8074	SD-8006	〃 〃	18.0	(4.4)	-	-	にぶい黄橙色 〃	やや 不良	口頸部の破片, 器面は摩耗するが, 外面に指頭圧痕が残存
8075	P-8001	石製品 石鏃	2.5	1.5	0.4	1.3	-	-	完存, 石材はサヌカイト, 凹基の石鏃

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
8076	SK-8018	土師質土器 杯	-	(2.2)	-	5.5	橙色 〃	不良	底部約1/4が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗
8077	〃	〃 椀	-	(2.0)	-	5.9	浅黄橙色 〃	〃	底部約1/3が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗
8078	SK-8020	弥生土器 甕	-	(3.5)	-	-	灰黄褐色 にぶい黄橙色	良好	口縁部の細片, 内面はハケ調整, 口唇部はヨコナデ調整, 外面は指押え
8079	SK-8021	〃 〃	22.30	(3.8)	-	-	にぶい褐色 にぶい赤褐色	不良	口頸部の破片, 器面は摩耗
8080	SK-8022	石製品 磨石	(8.7)	8.2	2.9	(321.6)	-	-	約3/4が残存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 縁辺と側面に擦痕が残存
8081	SD-8010	須恵器 杯身	-	(1.2)	-	9.8	明褐灰色 〃	良好	底部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
8082	〃	〃 皿	19.0	2.0	-	14.8	にぶい黄橙色 〃	良	一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
8083	〃	〃 台付壺	-	(3.9)	-	7.7	灰色 〃	良好	底部のみ残存, 器面は回転ナデ調整, 高台から外底面はヨコナデ調整で, 外底面中央はナデ調整
8084	〃	土師質土器 椀	-	(1.7)	-	7.3	浅黄橙色 〃	不良	底部約3/4が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗, 底部の切り離しは回転ヘラ切り
8085	〃	石製品 叩石	11.4	9.5	3.7	597.9	-	-	完存, 石材は中粒砂岩, 表面は平滑で, 両面中央と側面に弱い敲打痕, 縁辺を中心に擦痕が残存
8086	SD-8011	須恵器 杯	14.3	3.3	-	10.0	灰色 〃	良好	底部2/3と口縁部の一部が残存, 口唇部から内面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 体部外面は未調整
8087	SD-8015	土師器 甕	-	(2.8)	-	-	にぶい橙色 〃	〃	口縁部の細片, 内面はハケ調整, 口唇部から外面はヨコナデ調整, 下端は指押え
8088	SD-8016	須恵器 甕	-	(5.0)	-	-	灰色 〃	〃	口縁部の細片, 器面は回転ナデ調整
8089	SD-8019	土師質土器 椀	-	(1.9)	-	5.0	にぶい黄橙色 〃	不良	底部から体部の約1/2が残存, 成形はA技法, 器面は摩耗するが, 体部外面に回転ヘラ削りの可能性あり。
8090	SU-8005	須恵器 杯身	11.4	4.4	-	7.2	灰色 〃	良好	底部と体部と口縁部の一部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 内底面にナデ調整, 体部外面は回転ヘラ削り
8091	〃	〃 細頸壺	-	(3.5)	-	-	灰黄褐色 黄灰色	不良	頸部約2/3が残存, 器面は回転ナデ調整で, 胴部との境に指押え
8092	P-8002	弥生土器 甕	-	(2.6)	-	-	にぶい黄橙色 オリブ黒色	良好	口縁部の細片, 内面はナデ調整, 口唇部から外面はヨコナデ調整, 端部下端に刻目, 外面に貼付微隆起突帯
8093	SX-8001	瓦器 椀	-	(3.2)	-	-	灰色 〃	不良	口縁部から体部の細片, 口縁部外面はヨコナデ調整, 内面は摩耗, 体部外面は指押え
8094	SK-8025	肥前系磁器 紅皿	4.2	1.3	-	1.3	灰白色 〃	良好	完存, 成形は型作り, 外面に条線, 口唇部から内面に白色の釉を施釉
8095	〃	〃 皿	30.1	4.5	-	17.2	〃 〃	〃	一部が残存, 底部は削り出し高台, 内面に文様, 全面に施釉した後, 畳付は釉ハギ
8096	〃	〃 瓶	-	(7.4)	11.7	5.0	黄灰色 暗オリブ灰色	〃	胴部以下約1/3が残存, 底部は削り出し高台, 外面に文様, 内面は露胎で, 外面に施釉し, 畳付は釉ハギ
8097	〃	能茶山焼 広東茶碗	10.2	6.1	-	4.0	灰白色 〃	〃	口縁部の一部と底部約1/2が残存, 見込に亀, 口縁部内面に雷文を描き, 全面に施釉し, 畳付は釉ハギ
8098	〃	〃 〃	(10.3)	(5.9)	-	4.2	〃 〃	やや不良	底部約1/2と体部の一部が残存, 見込に富士山, 口縁部内面に雷文, 外面に草花文を描く。畳付は釉ハギ
8099	〃	〃 〃	10.3	5.9	-	4.1	〃 〃	不良	完存, 見込に円孔を穿つ。口縁部内面に雷文, 外面に草花文を描き, 全面に施釉し, 畳付は釉ハギ
8100	〃	近世陶器 台付灯明皿	6.3	(2.0)	-	4.0	オリブ褐色 〃	良好	底部が残存, 器面は回転ナデ調整で, 底部の切り離しは回転糸切り, 底部以外に施釉

Ⅷ区 遺物観察表5 (8101～8105)

番号	遺構 層位	器種 器形	法 量				色 調 内面/外面	焼成	特 徴
			口径	器高	胴径	底径			
8101	SK-8025	近世陶器 小壺	4.6	(4.8)	9.6	—	にぶい黄橙色 〃	良好	口縁部から胴部の約 1/3 が残存, 器面は回転ナデ調整で, 肩部外面に笹文を描き, 外面に透明釉を施釉, 内面は露胎
8102	〃	〃 甕	25.0	(5.0)	—	—	にぶい赤褐色 灰褐色	〃	口頸部の破片, 器面は回転ナデ調整で, 全面に鉄釉を施 釉するが, 摩耗と剥離のため釉垂れ部分のみ残存
8103	〃	近世磁器 鉢	13.0	(5.2)	—	—	灰白色 〃	〃	口縁部の破片, 口縁部内面と外面に文様を描き, 全面に 透明釉を施釉
8104	〃	〃 広東茶碗	9.6	(4.7)	—	—	〃 〃	〃	口縁部から体部の約 1/3 が残存, 口縁部内面は雷文, 外面 は窓絵を描き, 全面に透明釉を施釉
8105	〃	〃 〃	10.9	5.9	—	3.8	〃 〃	〃	約 1/2 が残存, 底部は削り出し高台, 外面に花文と斜格子 文を描き, 全面に透明釉を施釉し, 畳付は釉ハギ

遺構計測表

遺構計測表

西野々遺跡Ⅵ～Ⅷ区 遺構・遺物表

遺 構 名	Ⅵ区	Ⅶ区	Ⅷ区	合計
竪 穴 建 物 跡	42軒	21軒	2軒	65軒
竪 穴 状 遺 構	15軒	10軒	1軒	26軒
掘 立 柱 建 物 跡	52棟	95棟	1棟	148棟
堀 ・ 柵 列 跡	15列	21列	5列	41列
土 坑	101基	119基	25基	245基
溝 跡	10条	14条	24条	48条
井 戸 跡	－	1基	－	1基
道 路 遺 構	3条	－	－	3条
畝 状 遺 構	1列	－	7列	8列
水 溜 り 状 遺 構	1基	－	－	1基
性 格 不 明 遺 構	－	－	1基	1基
ピ ッ ト	3,693個	6,847個	580個	11,120個
遺 構 総 数	3,933	7,128	646	11,707
出 土 遺 物 総 点 数	62,892点	90,449点	7,315点	160,656点
掲 載 遺 物	980点	913点	105点	1,998点

註：次ページ以下の遺構計測表の中で、尺、項目以外の(数字)は検出長を示している。

遺構計測表1 VI区竪穴建物跡(ST-6001~6042)

遺構番号	平面形態	規模				長軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	床面標高(m)	面積(m ²)		
ST-6001	円形	4.22	4.00	7.481~7.501	13.26	-	Ⅱ~Ⅲ
ST-6002	〃	5.12	4.72	7.570~7.595	19.00	-	Ⅲ
ST-6003	〃	約4.80	-	7.317~7.353	17.86	-	Ⅲ
ST-6004	〃	約6.00	-	7.378~7.424	28.26	-	Ⅱ~Ⅲ
ST-6005	〃	約3.30	-	7.625~7.643	8.55	-	Ⅱ~Ⅲ
ST-6006	〃	約6.00	-	7.733~7.749	28.26	-	Ⅱ~Ⅲ
ST-6007	〃	約6.00	-	7.710~7.742	28.26	-	Ⅱ~Ⅲ
ST-6008	〃	4.80	4.40	7.769~7.796	16.61	-	Ⅲ
ST-6009	〃	約4.80	-	7.673~7.705	18.09	-	Ⅱ~Ⅲ
ST-6010	〃	5.50	-	7.697~7.721	23.75	-	Ⅱ~Ⅲ
ST-6011	〃	約4.60	-	7.751~7.784	16.61	-	Ⅱ~Ⅲ
ST-6012	〃	約3.50	-	約7.800	9.62	-	Ⅱ~Ⅲ
ST-6013	不整形円形	5.08	4.50	7.560~7.594	18.01	-	Ⅱ
ST-6014	円形	6.70	6.50	7.608~7.671	34.19	-	Ⅳ~Ⅴ
ST-6015	〃	約4.90	-	7.629~7.653	18.85	-	Ⅲ~Ⅳ
ST-6016	〃	5.40	-	7.627~7.670	22.89	-	Ⅳ~Ⅴ
ST-6017	〃	約6.00	-	7.725~7.792	28.26	-	Ⅲ
ST-6018	〃	4.15	3.85	7.768~7.807	12.56	-	Ⅲ
ST-6019	〃	約6.50	-	7.734~7.800	33.17	-	Ⅲ
ST-6020	〃	約6.00	-	7.703~7.789	28.26	-	Ⅳ
ST-6021	〃	7.82	7.72	7.744~7.768	47.39	-	Ⅴ
ST-6022	〃	5.06	4.98	7.606~7.628	19.78	-	Ⅲ
ST-6023	〃	3.82	-	7.915~7.954	11.46	-	Ⅲ
ST-6024	〃	約5.30	-	8.035~8.052	22.05	-	Ⅱ~Ⅲ?
ST-6025	五角形	約4.70	約2.50	7.457~7.491	17.34	-	Ⅲ
ST-6026	六角形	約5.90	2.50~3.80	7.402~7.487	25.92	-	Ⅳ
ST-6027	〃	約5.80	2.50~3.00	7.384~7.409	23.71	-	Ⅳ~Ⅴ
ST-6028	〃	約4.60	2.40~2.60	7.840~7.880	15.50	-	Ⅳ~Ⅴ
ST-6029	五角形	約3.80	2.00~2.40	-	13.30	-	Ⅳ
ST-6030	〃	約4.10	2.40~2.50	7.750~7.770	13.20	-	Ⅴ
ST-6031	七角形	約8.20	2.00~4.70	7.835~7.876	51.78	-	Ⅲ~Ⅳ?
ST-6032	六角形	約4.70	約2.30	8.151~8.175	17.34	-	Ⅳ~Ⅴ
ST-6033	〃	約5.20	2.50~2.70	7.952~8.163	21.23	-	Ⅳ~Ⅴ
ST-6034	七角形	約5.30	2.40~2.80	8.041~8.067	22.32	-	Ⅳ
ST-6035	隅丸方形	4.85	4.55	7.572~7.602	22.07	N-8°-E	Ⅳ~Ⅴ
ST-6036	〃	4.28	4.10	7.709~7.776	17.55	N-28°-W	Ⅴ
ST-6037	〃	5.80	5.70	7.762~7.815	33.06	N-65°-E	Ⅴ
ST-6038	〃	4.95	4.52	7.723~7.767	22.37	N-22°-W	Ⅴ
ST-6039	〃	4.85	4.80	7.754~7.787	19.40	N-78°-E	Ⅳ~Ⅴ
ST-6040	〃	4.80	4.60	7.934~7.991	22.13	N-81°-W	Ⅴ
ST-6041	方形	4.10	3.75	7.615~7.627	15.38	N-50°-E	Ⅴ
ST-6042	〃	約5.10	-	7.546~7.570	26.01	N-58°-E	Ⅴ

遺構計測表2 VI区堅穴状遺構(ST-6043~6057)

遺構番号	平面形態	規模				長軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)	面積(m ²)		
ST-6043	隅丸方形	3.25	2.48	11	8.06	N-10°-W	
ST-6044	方形	2.51	1.61	26	4.04	N-56°-W	
ST-6045	〃	1.92	1.45	7	2.78	N-13°-W	
ST-6046	〃	約2.90	約1.80	8	5.22	N-4°-W	
ST-6047	〃	2.58	1.73	38	4.46	N-31°-W	Ⅲ
ST-6048	〃	約3.30	1.68	13	5.54	N-82°-E	
ST-6049	隅丸方形	(1.21)	1.80	8	5.04	N-86°-E	
ST-6050	〃	3.18	2.32	26	7.38	N-25°-W	
ST-6051	方形	2.97	2.27	42	6.74	N-27°-W	Ⅳ
ST-6052	隅丸方形	4.00	2.61	35	10.44	N-65°-E	Ⅳ
ST-6053	方形	2.43	1.44	29	3.50	N-53°-E	
ST-6054	〃	3.17	1.91	28	6.05	N-63°-W	
ST-6055	〃	2.94	1.63	42	4.79	N-88°-E	
ST-6056	隅丸方形	2.47	1.76	71	4.35	N-89°-W	Ⅲ
ST-6057	方形	約3.50	(0.79)	21	7.00	N-0°-E	Ⅴ

遺構計測表3 VI区掘立柱建物跡1(SB-6001~6023)

遺構番号	桁行×梁行 (間)	規模		柱間寸法		深さ (cm)	面積(m ²)	棟方向 (NはGN)	備考
		桁行(m)×梁行(m)	桁(m)	梁(m)					
SB-6001	4×1	6.10~6.20×2.75~2.80	1.25~1.70	2.75・2.80	15~52	17.07	N-89~90°-W	Ⅲ	
SB-6002	3×1	4.90×2.90	1.50~1.80	2.90	26~47	14.21	N-1°-E		
SB-6003	2×1	4.50×1.60~1.65	2.10~2.40	1.60・1.65	7~52	7.31	N-16~17°-E		
SB-6004	2×1	3.00~3.10×1.95~2.20	1.20~1.80	1.95・2.20	8~31	6.33	N-17~21°-E		
SB-6005	3×1	4.50×2.60~2.70	1.30~1.70	2.60・2.70	27~44	11.93	N-66~68°-W		
SB-6006	4×1	5.90~6.00×3.00	1.30~1.90	3.00	23~42	17.85	N-65~66°-W		
SB-6007	1以上×1	1.90×2.60	1.90	2.60	16~22	4.94	N-63°-W		
SB-6008	3×1	3.70×3.00	1.10~1.60	3.00	19~38	11.10	N-52°-E		
SB-6009	5×1	7.80×3.00	1.20~2.20	3.00	7~42	23.40	N-51°-E	Ⅲ	
SB-6010	5×1	6.40~6.50×2.90~3.00	1.00~1.50	2.90・3.00	12~28	19.03	N-61°-E	Ⅲ	
SB-6011	1×2	1.95~2.00×1.80~1.90	1.95・2.00	0.90・1.00	9~24	3.65	N-38~40°-E		
SB-6012	3×1	5.10×2.10~2.40	1.50~1.90	2.10・2.40	9~35	11.48	N-1°-W~N-3°-E		
SB-6013	2×1	2.80~2.90×2.30~2.40	1.30~1.60	2.30・2.40	18~51	6.70	N-4~5°-E		
SB-6014	2×1	2.80×2.10	1.30~2.80	2.10	8~29	5.88	N-34°-W		
SB-6015	5×1	8.20×3.30	1.40~2.10	3.30	12~33	27.06	N-65°-E	Ⅲ~Ⅳ	
SB-6016	5×1	8.10~8.20×3.20~3.30	1.20~1.95	3.20・3.30	6~19	26.49	N-64~65°-E	Ⅲ~Ⅳ	
SB-6017	2×1	4.00×2.40~2.50	2.00	2.40・2.50	19~28	9.80	N-28~30°-E		
SB-6018	2×1	3.10×2.70	1.40~1.70	2.70	16~29	8.37	N-83°-W		
SB-6019	2×1	3.20×2.80	1.60	2.80	11~26	8.96	N-70°-W		
SB-6020	1×1	2.80~2.90×1.70~1.80	2.80・2.90	1.70・1.80	8~23	4.99	N-48~51°-E		
SB-6021	4×1	6.00~6.10×2.90	1.10~1.75	2.90	16~34	27.55	N-41°-E		
SB-6022	2×1	2.50~2.70×2.50	1.05~1.45	2.50	28~58	6.50	N-38~40°-W		
SB-6023	2×1	3.60×2.00	1.70・1.90	2.00	24~37	7.20	N-22°-W		

遺構計測表4 VI区掘立柱建物跡2(SB-6024~6049)

遺構番号	桁行×梁行 (間)	規模		柱間寸法		深さ (cm)	面積(m ²)	棟方向 (NはGN)	備考
		桁行(m)×梁行(m) (尺)×(尺)	桁(m) (尺)	梁(m) (尺)					
SB-6024	4×1	5.10×2.40~2.50	1.10~1.40	2.40・2.50	8~28	12.50	N-57°~58°-E		
SB-6025	4×1	5.70×2.70	1.20~3.00	2.70	14~25	15.39	N-62°-E		
SB-6026	5×1	7.00×2.70	1.20~1.60	2.70	4~35	18.90	N-42°-E		
SB-6027	5×2	10.50×4.40 (35.0)×(14.5)	1.50~2.70 (5.0)~(9.0)	2.20 (7.3)	10~67	46.20	N-80°46'-W		
SB-6028	5×3	8.70×5.10 (29.0)×(17.0)	1.50~1.95 (5.0)~(6.5)	1.50・1.80 (5.0)・(6.0)	24~131	44.37	N-11°26'-E		
SB-6029	4×2	6.60×4.20 (22.0)×(14.0)	1.05~2.25 (3.5)~(7.5)	1.80~2.40 (6.0)~(8.0)	28~65	27.72	N-84°46'-W		
SB-6030	6×2	11.40×4.80 (38.0)×(16.0)	1.65~2.55 (5.5)~(8.5)	2.10~2.70 (7.0)~(9.0)	15~71	54.72	N-8°42'-E		
SB-6031	3×3	6.00×3.90 (20.0)×(13.0)	1.50~2.40 (5.0)~(8.0)	1.20・1.50 (4.0)・(5.0)	8~57	23.40	N-8°26'-E		
SB-6032	1以上×2	(1.80)×2.85 (6.0)×(9.5)	1.80 (6.0)	1.35・1.50 (4.5)・(5.0)	29~74	5.13	N-11°44'-E		
SB-6033	3程度×2	5.40×3.60 (18.0)×(12.0)	-	1.80 (6.0)	42~62	19.44	N-15°47'-E		
SB-6034	4×2	9.60×4.50 (32.0)×(15.0)	2.10~3.00 (7.0)~(10.0)	2.25 (7.5)	4~45	43.20	N-9°56'-E		
SB-6035	3×2	7.50×3.90 (25.0)×(13.0)	2.25~2.70 (7.5)~(9.0)	1.95 (6.5)	13~43	29.25	N-7°50'-E		
SB-6036	3×2	6.30×3.60 (21.0)×(12.0)	2.10 (7.0)	1.80 (6.0)	9~40	22.68	N-84°14'-W		
SB-6037	2×2	3.90×3.60 (13.0)×(12.0)	1.65~2.25 (5.5)~(7.5)	1.65~1.95 (5.5)~(6.5)	10~29	14.04	N-4°54'-E		
SB-6038	2×2	3.30×3.00 (11.0)×(10.0)	1.50~1.80 (5.0)~(6.0)	1.35~1.65 (4.5)~(5.5)	15~29	9.90	N-17°11'-E		
SB-6039	3×2	6.50×3.30 (21.0)×(11.0)	1.80~2.55 (6.0)~(8.5)	1.50・1.80 (5.0)・(6.0)	13~33	21.45	N-82°57'-W		
SB-6040	2×2	2.85×2.40 (9.5)×(8.0)	1.20~1.65 (4.0)~(5.5)	1.20 (4.0)	12~26	6.84	N-8°40'-E		
SB-6041	2以上×3	3.60×4.20 (12.0)×(14.0)	1.50・1.80 (5.0)・(6.0)	1.05~1.65 (3.5)~(5.5)	18~29	15.12	N-90°0'-E		
SB-6042	1×1	2.75×2.70 (約9.2)×(9.0)	2.75 (約9.2)	2.70 (9.0)	29~48	7.43	N-2°17'-E		
SB-6043	3×2	6.30×4.50 (21.0)×(15.0)	1.80~2.55 (6.0)~(8.5)	2.25 (7.5)	3~33	28.35	N-72°21'-E		
SB-6044	2×1	3.60×3.15 (12.0)×(10.5)	1.35~2.25 (4.5)~(7.5)	3.15 (10.5)	21~38	11.34	N-7°8'-W		
SB-6045	4×2	4.20×3.30 (14.0)×(11.0)	1.05~1.65 (3.5)~(5.5)	1.50~1.80 (5.0)~(6.0)	3~60	13.86	N-30°32'-W		
SB-6046	3×2	3.90×3.30 (13.0)×(11.0)	1.20・1.50 (4.0)・(5.0)	1.50~1.80 (5.0)~(6.0)	29~43	12.87	N-58°24'-W		
SB-6047	4×2	7.20×3.50	1.30~2.20	1.25~2.25	10~39	25.20	N-2°0'-E		
SB-6048	3×2	5.60×3.70~3.80	1.70~2.00	1.40~2.30	8~46	21.00	N-86°~87°-W	間仕切	
SB-6049	3×2	3.50~3.60×2.30~2.40	1.05~1.30	1.10~1.30	8~54	8.34	N-87°~89°-E	総柱	

遺構計測表5 VI区掘立柱建物跡3(SB-6050～6052)

遺構番号	桁行×梁行 (間)	規模		柱間寸法		深さ(cm)	面積(m ²)	棟方向 (NはGN)	備考
		桁行(m)×梁行(m)	桁(m)	梁(m)					
SB-6050	3×1	3.65～3.70×2.20	1.15～1.30	2.20	16～44	8.09	N - 1° - E		
SB-6051	4×2	7.70～7.90×3.70	1.80～2.20	1.70～2.00	20～39	28.86	N - 86° - W	間仕切	
SB-6052	3×2	4.90×3.30	1.10～2.10	1.65	13～43	16.17	N - 79° - W	間仕切	

遺構計測表6 VI区堀・柵列跡(SA-6001～6015)

遺構番号	柱穴数(個)	規模			方向 (NはGN)	備考
		全長(m) (尺)	柱間寸法(m) (尺)	深さ(cm)		
SA-6001	3	2.00	0.90・1.10	13～19	N - 9° - E	
SA-6002	5	3.20	0.80	3～27	N - 11° - W	
SA-6003	7	4.20	0.60～0.80	2～9	N - 52° - W	
SA-6004	3	5.20	2.30・2.90	8～13	N - 60° - E	
SA-6005	4	5.80	1.50～2.30	7～45	N - 37° - E	
SA-6006	5	13.00	2.90～4.20	3～16	N - 67° - E	
SA-6007	6	13.70	2.50～3.20	3～28	N - 84° - W	
SA-6008	5	8.55	1.95～2.40 (6.5)～(8.0)	36～62	N -12°41' - E	
SA-6009	4	3.30	0.90・1.50 (3.0)・(5.0)	47～67	N -80°50' - W	
SA-6010	5	8.25	1.80～2.40 (6.0)～(8.0)	23～69	N -85°0' - W	
SA-6011	4	6.90	2.25～2.40 (7.5)～(8.0)	16～30	N -84°57' - W	
SA-6012	4	5.50	1.10～2.65	9～37	N - 89° - W	
SA-6013	4	4.75	1.35～1.90	26～36	N - 2° - E	
SA-6014	5	6.80	1.60・1.80	24～34	N - 56° - E	
SA-6015	4	4.50	1.20～1.80	15～41	N - 47° - E	

遺構計測表7 VI区土坑1(SK-6001～6011)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-6001	舟形	7.24	0.76	91	N - 86° - E	
SK-6002	不整形	約2.80	1.30	148	N - 14° - E	
SK-6003	不整楕円形	2.60	1.28	7	N - 10° - E	
SK-6004	舟形	(5.47)	0.72	40	N - 88° - W	
SK-6005	溝状	3.46	0.27	4	N - 11° - E	
SK-6006	隅丸方形	1.07	0.76	17	N - 32° - E	
SK-6007	不整楕円形	2.84	1.41	7	N - 10° - E	
SK-6008	溝状	3.26	0.18	6	N - 60° - W	
SK-6009	楕円形	1.35	0.84	8	N - 36° - E	
SK-6010	舟形	4.26	0.44	30	N - 63° - W	
SK-6011	方形	1.38	0.92	30	N - 82° - W	

遺構計測表8 VI区土坑2 (SK-6012~6054)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-6012	方形	1.42	0.78	24	N - 19° - E	
SK-6013	舟形	(1.28)	0.40	10	N - 28° - E	
SK-6014	〃	6.15	0.90	88	N - 86° - W	
SK-6015	〃	11.80	0.72	37	N - 47° - E	
SK-6016	〃	(3.00)	0.66	38	N - 47° - W	
SK-6017	〃	(3.01)	0.59	135	N - 61° - E	
SK-6018	〃	3.25	0.58	58	N - 49° - E	
SK-6019	楕円形	1.24	0.86	96	N - 86° - E	
SK-6020	不整円形	2.56	2.08	156	-	
SK-6021	舟形	2.50	0.92	130	N - 46° - E	
SK-6022	〃	4.24	0.34	52	N - 68° - E	
SK-6023	〃	7.60	0.90	55	N - 70° - E	
SK-6024	〃	4.52	0.42	12	N - 71° - E	
SK-6025	楕円形	1.07	0.89	24	N - 47° - E	
SK-6026	不整楕円形	2.29	約1.35	(93)	N - 26° - E	
SK-6027	舟形	(1.50)	0.45	20	N - 70° - W	
SK-6028	方形	1.42	0.95	16	N - 6° - W	
SK-6029	不整方形	2.08	1.41	28	N - 32° - E	
SK-6030	不整円形	1.82	1.50	14	N - 67° - E	
SK-6031	溝状	5.04	0.34	42	N - 64° - E	
SK-6032	不整方形	1.66	(0.52)	32	N - 82° - W	
SK-6033	隅丸方形	1.72	1.24	67	N - 21° - W	
SK-6034	不整方形	1.17	1.05	19	N - 47° - W	
SK-6035	不整楕円形	1.75	0.85	42	N - 22° - E	
SK-6036	舟形	約2.70	0.58	28	N - 23° - E	
SK-6037	楕円形	1.92	1.60	122	N - 54° - E	
SK-6038	舟形	8.92	0.76	47	N - 77° - W	
SK-6039	溝状	約3.00	0.26	5	N - 78° - W	
SK-6040	不整方形	3.62	1.16	12	N - 8° - E	
SK-6041	不整楕円形	1.62	0.52	13	N - 77° - W	
SK-6042	不整方形	2.18	1.20	30	N - 38° - W	
SK-6043	方形	(2.08)	(0.38)	20	N - 11° - E	
SK-6044	隅丸方形	1.47	1.00	20	N - 68° - W	
SK-6045	〃	1.68	1.09	12	N - 83° - W	
SK-6046	舟形	6.94	0.52	18	N - 80° - E	
SK-6047	〃	3.42	0.48	20	N - 17° - W	
SK-6048	〃	(2.96)	0.94	32	N - 20° - W	
SK-6049	不整楕円形	1.61	1.51	13	N - 22° - E	
SK-6050	〃	1.24	1.04	7	N - 83° - W	
SK-6051	舟形	2.25	0.38	16	N - 72° - E	
SK-6052	〃	約2.60	0.46	15	N - 65° - W	
SK-6053	〃	(3.54)	0.39	14	N - 77° - W	
SK-6054	〃	4.54	0.36	12	N - 73° - W	

遺構計測表9 VI区土坑3 (SK - 6055 ~ 6098)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-6055	舟形	(0.99)	0.55	6	N - 87° - W	
SK-6056	〃	約3.90	0.55	13	N - 89° - E	
SK-6057	〃	2.55	0.62	38	N - 66° - E	
SK-6058	〃	(2.52)	0.63	7	N - 17° - E	
SK-6059	〃	(5.84)	1.04	16	N - 82° - W	
SK-6060	不整形	1.83	0.75	19	N - 10° - E	
SK-6061	舟形	3.71	0.60	17	N - 84° - W	
SK-6062	方形	2.72	1.58	35	N - 2° - E	
SK-6063	舟形	(6.05)	0.61	56	N - 78° - W	
SK-6064	溝状	3.59	0.28	19	N - 78° - W	
SK-6065	隅丸方形	(2.01)	1.42	5	N - 7° - E	
SK-6066	円形	2.65	2.44	11	-	
SK-6067	楕円形	1.80	1.40	5	N - 4° - W	
SK-6068	不整円形	1.66	1.42	15	N - 26° - W	
SK-6069	不整形	2.38	0.88	10	N - 75° - W	
SK-6070	不整円形	3.35	3.00	14	-	
SK-6071	溝状	約3.20	0.34	9	N - 75° - W	
SK-6072	不整形	1.28	1.20	44	N - 63° - E	
SK-6073	方形	2.25	2.12	26	N - 11° - E	
SK-6074	不整形	2.12	1.73	13	N - 42° - E	
SK-6075	〃	2.29	1.08	21	N - 4° - W	
SK-6076	方形	2.15	1.15	19	N - 8° - E	
SK-6077	不整形	1.49	約1.45	6	N - 6° - W	
SK-6078	不整形	3.51	2.00	14	N - 4° - W	
SK-6079	〃	3.24	2.15	12	N - 45° - E	
SK-6080	不整形	0.94	0.92	19	N - 45° - E	
SK-6081	不整円形	1.64	1.57	8	-	
SK-6082	不整形	2.12	0.88	23	N - 1° - W	
SK-6083	舟形	2.51	0.62	13	N - 45° - W	
SK-6084	方形	2.41	1.64	31	N - 51° - W	
SK-6085	不整隅丸方形	3.34	2.00	39	N - 4° - E	
SK-6086	不整楕円形	3.27	2.32	28	N - 85° - W	
SK-6087	楕円形	1.15	0.72	7	N - 23° - E	
SK-6088	不整形	1.60	0.92	10	N - 68° - W	
SK-6089	円形	1.68	1.60	48	-	
SK-6090	方形	1.06	0.86	11	N - 73° - W	
SK-6091	〃	1.32	1.07	41	N - 76° - W	
SK-6092	〃	1.41	0.99	31	N - 85° - W	
SK-6093	不整形	2.44	1.43	13	N - 76° - W	
SK-6094	不整楕円形	1.92	1.20	16	N - 54° - W	
SK-6095	方形	1.52	0.95	23	N - 7° - E	
SK-6096	〃	1.90	1.39	14	N - 11° - E	
SK-6097	〃	1.93	1.22	23	N - 13° - E	
SK-6098	〃	2.27	1.70	29	N - 11° - E	

遺構計測表10 VI区土坑4(SK-6099～6101)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-6099	方形	2.62	1.16	22	N - 6° - E	
SK-6100	不整形	3.20	(1.00)	18	N - 13° - E	
SK-6101	不整形	1.37	1.21	(1.19)	N - 52° - E	

遺構計測表11 VI区溝跡(SD-6001～6010)

遺構番号	形状	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		検出長(m)	幅(m)	深さ(cm)		
SD-6001	南北溝	64.64	0.30～0.68	5～29	N-173°-W～N-155°-W	
SD-6002	〃	54.84	0.84～1.24	27～47	N - 130° - W	
SD-6003	東西溝	23.10	0.35～0.55	8～25	N - 74° - W	
SD-6004	〃	21.60	0.58～0.84	4～13	N - 74° - W	
SD-6005	南北溝	約10.00	0.58～1.20	4～13	N - 175° - W	
SD-6006	〃	28.33	0.18～0.41	3～12	N - 169° - W	
SD-6007	〃	4.51	0.52～0.92	4～12	N - 157° - E	
SD-6008	L字形	96.69	0.46～1.16	11～37	N-97°-W～N-167°-W	
SD-6009	東西溝	40.94	0.45～0.84	16～52	N - 46° - E	
SD-6010	コの字形	54.97	0.46～1.98	12～49	N-98°-E・N-172°-W	

遺構計測表12 VI区道路遺構(SR-6001～6003)

遺構番号	規模					主軸方向 (NはGN)	備考
	道幅(m)	溝幅(m)	検出長(m)	幅(m)	深さ(cm)		
SR-6001(東)	約4.00	2.10～3.00	31.22	0.50～1.23	6～18	N-165°-W	
SR-6001(西)			33.14	0.60～0.82	3～18	〃	
SR-6002(東)	約3.40～4.00	2.30～3.00	62.62	0.87～1.35	14～85	N-16°-E	
SR-6002(西)			60.55	0.42～1.08	28～73	〃	
SR-6003(東)	約4.60～5.60	3.30～4.60	62.50	0.79～1.23	4～19	N-169°-W	
SR-6003(西)			62.51	0.59～1.61	4～19	〃	

遺構計測表13 VI区畝状遺構(SU-6001)

遺構番号	畝跡数(本)	規模					主軸方向 (NはGN)	備考
		最大長(m)	畝間間隔(m)	畝幅(m)	幅(cm)	深さ(cm)		
SU-6001	21	4.21	0.30～0.95	0.24～0.60	24～68	3～12	N-48～89°-W	

遺構計測表14 VI区水溜り状遺構(SP-6001)

遺構番号	平面形態	規模			備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)	
SP-6001	不整形	約13.00	約6.00	69	

遺構計測表 15 VII区竪穴建物跡(ST-7001~7021)

遺構番号	平面形態	規模				長軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	床面標高(m)	面積(m ²)		
ST-7001	円形	6.10	5.76	8.044~8.105	27.60	-	III
ST-7002	〃	約6.50	-	7.950~8.084	33.17	-	III
ST-7003	〃	約7.00	-	7.950~8.084	38.47	-	
ST-7004	〃	約7.00	-	7.948~8.040	38.47	-	
ST-7005	〃	約6.00	-	8.029~8.089	28.26	-	
ST-7006	楕円形	4.68	3.96	7.907~7.982	14.65	N-18°-W	III
ST-7007	円形	5.42	5.08	7.852~7.889	21.64	-	III~IV
ST-7008	〃	5.57	5.02	7.931~7.992	22.01	-	III
ST-7009	〃	4.00	3.82	8.066~8.110	12.00	-	III
ST-7010	〃	約4.00	-	8.052~8.088	12.56	-	
ST-7011	〃	約6.50	-	8.001~8.067	33.17	-	III
ST-7012	〃	約4.50	-	8.041~8.093	15.90	-	
ST-7013	六角形	約4.50	2.00~2.50	8.022~8.059	14.38	-	III~IV
ST-7014	〃	約5.50	2.50~2.80	7.946~8.039	23.75	-	
ST-7015	円形	約4.00	-	7.739~7.786	12.56	-	
ST-7016	六角形	約5.00	2.00~2.80	7.739~7.863	19.63	-	
ST-7017(1)	円形	6.50	-	8.000~8.110	33.17	-	IV~V
ST-7017(2)	隅丸方形	約6.50	約6.00	8.000~8.110	36.58	N-9°-E	IV~V
ST-7018	〃	5.42	4.96	7.922~7.964	26.88	N-4°-E	IV
ST-7019	〃	5.10	4.90	7.889~7.943	24.99	N-3°-E	IV
ST-7020	方形	約4.50	-	8.018~8.056	20.25	N-33°-W	
ST-7021	隅丸方形	約4.80	-	7.776~7.796	18.05	N-10°-E	

遺構計測表 16 VII区竪穴状遺構(ST-7022~7031)

遺構番号	平面形態	規模				長軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)	面積(m ²)		
ST-7022	隅丸方形	2.13	1.56	43	3.32	N-23°-W	
ST-7023	〃	2.98	2.00	23	5.96	N-22°-E	III
ST-7024	不整形	2.17	1.71	13	3.71	N-34°-W	
ST-7025	〃	約2.40	1.79	25	5.76	N-55°-W	IV
ST-7026	〃	2.98	2.02	36	6.02	N-53°-W	
ST-7027	隅丸方形	1.90	1.58	46	3.00	N-55°-E	
ST-7028	〃	1.74	1.25	44	2.18	N-2°-E	III~IV
ST-7029	〃	2.35	1.78	28	4.18	N-10°-E	III~IV
ST-7030	〃	1.98	1.30	14	2.57	N-29°-E	
ST-7031	〃	3.80	2.58	15	9.80	N-81°-W	IV~V

遺構計測表 17 VII区掘立柱建物跡1 (SB-7001~7025)

遺構番号	桁行×梁行 (間)	規模		柱間寸法		深さ (cm)	面積(m ²)	棟方向 (NはGN)	備考
		桁行(m)×梁行(m) (尺)×(尺)	桁(m) (尺)	梁(m) (尺)					
SB-7001	5×1	8.70×3.30	1.30~2.30	3.30	2~22	28.71	N - 39° - E		
SB-7002	5×1	7.80×2.90	1.30~1.80	2.90	7~36	22.62	N - 57° - E		
SB-7003	3×1	4.10×1.80	1.10~1.60	1.80	7~20	7.38	N - 52° - E		
SB-7004	5×3	9.60×5.40 (32.0)×(18.0)	1.80・2.10 (6.0)・(7.0)	1.80 (6.0)	60~90	50.84	N - 78° 8' - W		
SB-7005	5×3	9.00×5.10 (30.0)×(17.0)	1.50~1.95 (5.0)~(6.5)	1.50・1.80 (5.0)・(6.0)	19~75	45.90	N - 13° 2' - E		
SB-7006	3×2	6.00×3.75 (20.0)×(12.5)	1.80・2.40 (6.0)・(8.0)	1.65・2.10 (5.5)・(7.0)	23~51	22.50	N - 78° 41' - W		
SB-7007	3×2	6.00×3.75 (20.0)×(12.5)	1.95・2.10 (6.5)・(7.0)	1.80・1.95 (6.0)・(6.5)	8~73	22.50	N - 84° 41' - W		
SB-7008	4×3	7.20×4.65 (24.0)×(15.5)	1.50~1.95 (5.0)~(6.5)	1.50~1.80 (5.0)~(6.0)	17~54	33.48	N - 10° 13' - E		
SB-7009	5×3	8.40×4.50 (28.0)×(15.0)	1.65・1.80 (5.5)・(6.0)	1.20~1.80 (4.0)~(6.0)	13~56	37.80	N - 74° 37' - W		
SB-7010	3×2	5.10×3.60 (17.0)×(12.0)	1.50・1.80 (5.0)・(6.0)	1.65~1.95 (5.5)~(6.5)	10~27	18.36	N - 78° 41' - W		
SB-7011	3×2	5.10×3.60 (17.0)×(12.0)	1.50・2.10 (5.0)・(7.0)	1.80 (6.0)	12~27	18.36	N - 80° 38' - W		
SB-7012	4×3	6.60×4.50 (22.0)×(15.0)	1.50~1.95 (5.0)~(6.5)	1.50 (5.0)	13~67	29.70	N - 11° 27' - E		
SB-7013	3×2	5.70×3.60 (19.0)×(12.0)	1.80・2.10 (6.0)・(7.0)	1.50・2.10 (5.0)・(7.0)	14~51	21.66	N - 13° 46' - E		
SB-7014	5×3	9.60×5.10 (32.0)×(17.0)	1.80~2.10 (6.0)~(7.0)	1.50~1.95 (5.0)~(6.5)	44~110	48.96	N - 80° 29' - W		
SB-7015	3×2	5.40×3.60 (18.0)×(12.0)	1.65~1.95 (5.5)~(6.5)	1.80 (6.0)	17~44	19.44	N - 13° 22' - E		
SB-7016	5×3	9.60×5.10 (32.0)×(17.0)	1.65~2.10 (5.5)~(7.0)	1.50・1.80 (5.0)・(6.0)	14~82	48.96	N - 10° 29' - E		
SB-7017	5×3	8.10×5.70 (27.0)×(19.0)	1.20~1.95 (4.0)~(6.5)	1.50~2.40 (5.0)~(8.0)	13~66	46.17	N - 10° 37' - E		
SB-7018	4×3	6.60×5.10 (22.0)×(17.0)	1.50・1.80 (5.0)・(6.0)	1.50~1.95 (5.0)~(6.5)	26~80	33.66	N - 6° 59' - E		
SB-7019	5×2	8.70×4.05 (29.0)×(13.5)	1.50~1.95 (5.0)~(6.5)	1.95・2.10 (6.5)・(7.0)	16~38	38.24	N - 83° 1' - W		
SB-7020	4×2	6.90×3.90 (23.0)×(13.0)	1.50~2.10 (5.0)~(7.0)	1.80~2.10 (6.0)~(7.0)	16~58	26.91	N - 6° 31' - E		
SB-7021	3×2	5.40×3.00 (18.0)×(10.0)	1.80~1.95 (6.0)~(6.5)	1.50 (5.0)	14~42	16.20	N - 79° 31' - W		
SB-7022	4×2	5.40×3.90 (18.0)×(13.0)	1.05~1.50 (3.5)~(5.0)	1.80~2.10 (6.0)~(7.0)	16~31	21.06	N - 7° 8' - E		
SB-7023	3×2	6.90×3.60 (23.0)×(12.0)	2.10~2.55 (7.0)~(8.5)	1.80 (6.0)	23~70	24.84	N - 9° 39' - E		
SB-7024	2×2	3.60×3.30 (12.0)×(11.0)	1.65・1.95 (5.5)・(6.5)	1.65 (5.5)	31~56	11.88	N - 7° 50' - E		
SB-7025	3×2	6.30×3.90 (21.0)×(23.0)	2.10 (7.0)	1.80・2.10 (6.0)・(7.0)	10~45	24.57	N - 78° 36' - W		

遺構計測表 18 VII区掘立柱建物跡2 (SB-7026~7048)

遺構番号	桁行×梁行 (間)	規模		柱間寸法		深さ (cm)	面積(m ²)	棟方向 (NはGN)	備考
		桁行(m)×梁行(m) (尺)×(尺)	桁(m) (尺)	梁(m) (尺)					
SB-7026	3×3	5.10×4.50 (17.0)×(15.0)	1.50~1.95 (5.0)~(6.5)	1.35~1.65 (4.5)~(5.5)	9~42	22.95	N-11°35'-E		
SB-7027	4×3	7.20×4.80 (24.0)×(16.0)	1.80 (6.0)	1.50・1.80 (5.0)・(6.0)	19~50	34.56	N-6°34'-E		
SB-7028	2×2	3.60×3.60 (12.0)×(12.0)	1.80 (6.0)	1.80 (6.0)	37~47	12.96	N-4°26'-E		
SB-7029	3×3	5.10×4.35 (17.0)×(14.5)	1.50・1.80 (5.0)・(6.0)	1.35・1.50 (4.5)・(5.0)	16~48	22.19	N-3°35'-E		
SB-7030	4×2	6.30×3.90 (21.0)×(13.0)	1.35~1.80 (4.5)~(6.0)	1.80・2.10 (6.0)・(7.0)	34~47	24.57	N-87°51'-W		
SB-7031	3×2	6.60×3.60 (22.0)×(12.0)	1.80~2.70 (6.0)~(9.0)	1.65・1.95 (5.5)・(6.5)	26~46	23.76	N-85°17'-W		
SB-7032	4×2	6.30×3.00 (21.0)×(10.0)	1.35~1.80 (4.5)~(6.0)	1.35~1.65 (4.5)~(5.5)	13~44	18.90	N-85°14'-W		
SB-7033	3×2	5.40×3.90 (18.0)×(13.0)	1.50~2.25 (5.0)~(7.5)	1.50・2.40 (5.0)・(8.0)	13~52	21.06	N-3°34'-E		
SB-7034	3×2	4.50×3.60 (15.0)×(12.0)	1.50 (5.0)	1.80 (6.0)	39~82	16.20	N-1°38'-W		
SB-7035	3×3	4.50×4.05 (15.0)×(13.5)	1.50 (5.0)	1.35 (4.5)	21~73	18.23	N-0°43'-E		
SB-7036	3程度×2	-×3.30 (11.0)	-	1.50・1.80 (5.0)・(6.0)	27~48	-	N-3°25'-E		
SB-7037	2×2	3.90×3.30 (13.0)×(11.0)	1.80・2.10 (6.0)・(7.0)	1.50・1.80 (5.0)・(6.0)	20~29	12.87	N-87°43'-E		
SB-7038	3以上×3	5.10×3.60 (17.0)×(12.0)	1.50・1.80 (5.0)・(6.0)	0.90~1.50 (3.0)~(5.0)	16~38	18.36	N-1°3'-E		
SB-7039	3×2	4.80×3.60 (16.0)×(12.0)	1.50~1.80 (5.0)~(6.0)	1.80 (6.0)	23~42	17.28	N-2°0'-E		
SB-7040	2×2	3.60×2.70 (12.0)×(9.0)	1.65~1.95 (5.5)~(6.5)	1.20・1.50 (4.0)・(5.0)	10~48	9.72	N-88°26'-W		
SB-7041	3×3	4.20×3.90 (14.0)×(13.0)	1.20・1.50 (4.0)・(5.0)	1.20~1.50 (4.0)~(5.0)	28~80	16.38	N-1°17'-W		
SB-7042	2×2	3.60×3.30 (12.0)×(11.0)	1.20~2.40 (4.0)~(8.0)	1.50・1.80 (5.0)・(6.0)	15~45	11.88	N-0°28'-W		
SB-7043	3×2	6.00×3.60 (20.0)×(12.0)	1.65~2.55 (5.5)~(8.5)	1.80 (6.0)	20~50	21.60	N-88°30'-E		
SB-7044	3×2	4.80×3.90 (16.0)×(13.0)	1.20~1.95 (4.0)~(6.5)	1.95 (6.5)	15~26	18.72	N-3°9'-E		
SB-7045	3×2	4.50×3.00 (15.0)×(10.0)	1.35~1.65 (4.5)~(5.5)	1.50 (5.0)	25~47	13.50	N-3°26'-E		
SB-7046	4×3	6.90×4.80 (23.0)×(16.0)	1.50~1.95 (5.0)~(6.5)	1.35~1.95 (4.5)~(6.5)	18~74	33.12	N-3°19'-W		
SB-7047	4×2	7.20×4.50 (24.0)×(15.0)	1.35~2.10 (4.5)~(7.0)	2.25 (7.5)	42~77	32.40	N-2°13'-W		
SB-7048	3×2	5.25×3.75 (17.5)×(12.5)	1.65・1.80 (5.5)・(6.0)	1.80・1.95 (6.0)・(6.5)	22~54	19.69	N-6°8'-W		

遺構計測表 19 VII区掘立柱建物跡3 (SB-7049~7080)

遺構番号	桁行×梁行 (間)	規模		柱間寸法		深さ (cm)	面積(m ²)	棟方向 (NはGN)	備考
		桁行(m)×梁行(m) (尺)×(尺)	桁(m) (尺)	梁(m) (尺)					
SB-7049	2×2	3.30×3.00 (11.0)×(10.0)	1.50・1.80 (5.0)・(6.0)	1.35~1.65 (4.5)~(5.5)		10~51	9.90	N-80°4'-E	
SB-7050	3×2	6.30×4.20 (21.0)×(14.0)	1.80~2.40 (6.0)~(8.0)	2.10 (7.0)		13~58	26.46	N-2°0'-W	
SB-7051	3×2	4.20×3.00 (14.0)×(10.0)	1.20~1.50 (4.0)~(5.0)	1.35~1.65 (4.5)~(5.5)		28~41	12.60	N-82°27'-E	
SB-7052	2×2	3.00×2.85~3.00 (10.0)×(9.5~10.0)	1.50 (5.0)	1.35~1.50 (4.5)~(5.0)		13~41	8.78	N-81°3'~84°17'-E	
SB-7053	2×2程度	3.00×- (10.0)	1.50 (5.0)	-		37~40	-	N-87°8'-E	
SB-7054	3×2程度	4.80×3.60 (16.0)×(12.0)	1.50・1.65 (5.0)・(5.5)	1.80 (6.0)		25~47	17.28	N-84°17'-E	
SB-7055	3×2	5.70×3.60 (19.0)×(12.0)	1.65~2.10 (5.5)~(7.0)	1.50~2.10 (5.0)~(7.0)		14~36	20.52	N-82°10'-E	
SB-7056	2×2	3.60×2.85 (12.0)×(9.5)	1.50~2.10 (5.0)~(7.0)	1.35・1.50 (4.5)・(5.0)		14~32	10.26	N-87°25'-E	
SB-7057	2×2	3.60×3.60 (12.0)×(12.0)	1.80 (6.0)	1.80 (6.0)		16~22	12.96	N-14°18'-W	
SB-7058	3×2	6.60×4.20 (22.0)×(14.0)	1.80~2.70 (6.0)~(9.0)	2.10 (7.0)		21~50	27.72	N-64°22'-W	
SB-7059	4×2	8.40×3.60 (28.0)×(12.0)	1.65~2.25 (5.5)~(7.5)	1.65・1.95 (5.5)・(6.5)		10~41	30.24	N-73°21'-W	
SB-7060	3×2	6.00×3.90 (20.0)×(14.0)	1.80~2.10 (6.0)~(7.0)	1.95 (6.5)		21~54	23.40	N-13°46'-E	
SB-7061	4×2	7.80×4.80 (26.0)×(16.0)	1.65~2.10 (5.5)~(7.0)	2.40 (8.0)		19~49	37.44	N-75°26'-W	
SB-7062	4×2	7.50×3.80	1.50~2.30	1.80~2.00		7~39	28.50	N-83°-W	間仕切
SB-7063	3×2	4.80×3.60	1.50~1.80	1.70~1.90		8~33	17.28	N-83°-W	間仕切
SB-7064	2以上×2	3.70×3.40	1.70・2.00	1.70		5~36	12.58	N-80°-W	
SB-7065	3×2	4.50×2.90	1.30~1.60	1.30・1.60		17~33	13.05	N-81°-E	
SB-7066	3×2	5.40×3.60	1.60・1.90	1.75~1.85		13~47	19.44	N-90°-E	間仕切
SB-7067	5×1	8.60×2.80	1.30~2.10	2.80		13~42	24.08	N-85°-W	
SB-7068	4×2	8.10×2.90	1.70~2.25	1.40・1.50		6~33	23.49	N-90°-E	
SB-7069	4×2	7.10×3.50	1.40~2.00	1.60・1.90		9~33	24.85	N-88°-W	間仕切
SB-7070	3×2	4.50×3.20	1.30~1.80	1.60		11~45	14.40	N-88°-W	
SB-7071	3×2	5.10×3.30	1.50・1.80	1.60・1.70		12~40	16.83	N-88°-E	
SB-7072	4×2	6.90~7.00×3.10	1.60~1.90	1.40・1.70		6~46	21.55	N-87°-W	
SB-7073	4×2	5.40~5.50×2.80~3.00	1.00~1.65	1.30・1.50		7~40	15.81	N-82~84°-W	
SB-7074	3×2	5.00~5.50×4.20~4.40	1.50~2.05	2.00・2.20		12~62	22.58	N-1~3°-E	
SB-7075	3×2	6.40~6.50×3.80	1.90~2.30	1.70~2.10		10~49	24.51	N-10°-E	
SB-7076	3×2	5.20~5.40×3.80	1.50~1.90	1.70~2.10		13~49	20.14	N-82°-W	
SB-7077	3×2	5.70×3.50~3.60	1.60~2.30	1.70~1.85		7~28	20.24	N-12~13°-E	
SB-7078	2×1	3.70×2.80	1.75~1.95	2.80		16~45	10.36	N-87°-W	
SB-7079	5×2	7.90~8.10×3.80~4.00	1.20~1.90	1.65~2.25		12~35	31.20	N-83~85°-W	間仕切
SB-7080	3×2	4.80×4.10	1.60	1.80~2.30		13~34	19.68	N-87°-W	間仕切

遺構計測表 20 VII区掘立柱建物跡4 (SB - 7081 ~ 7095)

遺構番号	桁行×梁行 (間)	規模		柱間寸法		深さ (cm)	面積(m ²)	棟方向 (NはGN)	備考
		桁行(m)×梁行(m)	桁(m)	梁(m)					
SB-7081	3×1	5.60×3.00	1.40~2.10	3.00	28~35	16.80	N-89°-E		
SB-7082	4×2	6.80×3.80	1.20~1.95	1.80・2.00	10~50	25.84	N-89°-E	間仕切	
SB-7083	4×2	6.80~7.20×3.40~3.50	1.75~1.95	1.70・1.80	15~60	24.15	N-80~81°-W	間仕切	
SB-7084	3×2	4.10×3.10	1.20~1.50	1.35~1.75	12~39	12.71	N-88°-W	間仕切	
SB-7085	2×2	4.20~4.30×3.70~3.80	1.90~2.40	1.70~2.10	13~43	15.94	N-83~85°-W	総柱	
SB-7086	3×2	5.90×4.00	1.70~2.10	1.90~2.10	20~55	23.60	N-87°-W	間仕切	
SB-7087	3×2	6.40~6.60×4.40~4.70	2.10~2.30	2.20~2.40	14~58	29.58	N-76~79°-W	間仕切	
SB-7088	3×1	4.10×2.70	1.00~2.10	2.70	11~19	11.07	N-88°-W		
SB-7089	4×2	5.30~5.40×2.90	1.15~2.20	1.45	10~37	15.52	N-80°-W		
SB-7090	3×1	4.80×2.60~2.80	1.40~1.80	2.60・2.80	21~33	12.96	N-71~73°-W		
SB-7091	4×1	6.10~6.20×3.00	1.30~1.80	3.00	15~51	18.45	N-83°-W		
SB-7092	3×2	5.80~5.90×4.00~4.20	1.90~2.05	2.00・2.10	15~49	23.99	N-70~72°-E		
SB-7093	3×2	5.10×3.90	1.20~2.00	1.75~2.15	9~37	19.89	N-86°-E	一面下屋付き	
SB-7094	2×1	4.50~4.70×3.60~3.70	2.20~2.45	3.60・3.70	10~24	16.79	N-79~80°-W		
SB-7095	3×2	4.50×3.70~3.90	1.35~1.70	1.90・2.00	7~30	17.10	N-13~16°-E		

遺構計測表 21 VII区塀・柵列跡1 (SA - 7001 ~ 7015)

遺構番号	柱穴数(個)	規模			方向 (NはGN)	備考
		全長(m) (尺)	柱間寸法(m) (尺)	深さ(cm)		
SA-7001	6	6.90	1.30・1.40	5~19	N-55°-E	
SA-7002	15	26.40 (88.0)	1.50~2.40 (5.0)~(8.0)	15~44	N-79°20'-W	
SA-7003	4	5.70 (19.0)	1.80・2.10 (6.0)・(7.0)	17~44	N-13°30'-E	
SA-7004	4	5.70 (19.0)	1.80・1.95 (6.0)・(6.5)	23~36	N-84°0'-W	
SA-7005	4	4.35 (14.5)	1.35・1.50 (4.5)・(5.0)	19~50	N-11°35'-E	
SA-7006	4	6.60 (22.0)	2.10・2.40 (7.0)・(8.0)	8~35	N-78°33'-W	
SA-7007	4	6.30 (21.0)	2.10 (7.0)	18~59	N-80°50'-W	
SA-7008	5	9.00 (30.0)	1.80~2.70 (6.0)~(9.0)	10~35	N-4°28'-E	
SA-7009	6	8.10 (27.0)	1.35~2.10 (4.5)~(7.0)	13~69	N-0°20'-W	
SA-7010	4	5.10 (17.0)	1.50・1.80 (5.0)・(6.0)	18~41	N-13°23'-E	
SA-7011	5	7.50	1.80~2.00	11~30	N-89°-E	
SA-7012	4	6.50	1.80~2.70	11~16	N-81°-W	
SA-7013	4	4.10	1.30・1.40	20~56	N-9°-E	
SA-7014	5	5.40	1.20~1.70	14~39	N-6°-E	
SA-7015	4	5.90	1.80~2.10	17~36	N-22°-E	

遺構計測表22 VII区堀・柵列跡2(SA-7016~7021)

遺構番号	柱穴数(個)	規模			方向 (NはGN)	備考
		全長(m)	柱間寸法(m)	深さ(cm)		
SA-7016	5	6.50	1.10~2.50	13~29	N-78°-W	
SA-7017	4	4.80	1.55・1.70	11~19	N-74°-W	
SA-7018	4	5.20	1.40~2.30	25~36	N-73°-W	
SA-7019	4	6.40	1.85~2.65	10~36	N-74°-W	
SA-7020	5	8.60	2.00~2.40	14~38	N-83°-W	
SA-7021	4	4.60	1.50・1.60	22~35	N-87°-E	

遺構計測表23 VII区土坑1(SK-7001~7032)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-7001	舟形	3.46	0.98	22	N-52°-E	
SK-7002	〃	(3.36)	1.10	19	N-29°-W	
SK-7003	〃	約4.40	0.61	24	N-80°-W	
SK-7004	隅丸方形	1.50	1.38	18	N-60°-W	
SK-7005	舟形	3.38	0.83	45	N-32°-E	
SK-7006	隅丸方形	1.20	(0.94)	10	N-28°-W	
SK-7007	不整形	(2.18)	(1.90)	9	N-20°-W	
SK-7008	不整楕円形	2.96	2.29	11	N-2°-W	
SK-7009	舟形	4.30	0.96	34	N-63°-E	
SK-7010	〃	2.59	0.68	40	N-55°-E	
SK-7011	不整楕円形	2.42	1.80	23	N-85°-W	
SK-7012	方形	5.24	(3.26)	7	N-88°-W	
SK-7013	不整楕円形	1.95	0.90	28	N-61°-W	
SK-7014	方形	(5.58)	(1.46)	8	N-84°-W	
SK-7015	舟形	1.67	0.68	20	N-72°-E	
SK-7016	不整形	(1.41)	1.09	13	N-13°-W	
SK-7017	不整楕円形	4.20	3.20	18	N-86°-W	
SK-7018	隅丸方形	5.20	4.88	15	N-3°-E	
SK-7019	舟形	1.66	0.76	38	N-86°-W	
SK-7020	楕円形	(1.28)	1.06	11	N-80°-E	
SK-7021	〃	(1.74)	1.14	30	N-79°-W	
SK-7022	舟形	1.85	0.53	23	N-54°-E	
SK-7023	円形	1.42	(0.74)	18	-	
SK-7024	方形	(1.80)	1.38	10	N-86°-W	
SK-7025	〃	1.46	1.31	40	N-89°-E	
SK-7026	舟形	4.31	0.84	10	N-83°-W	
SK-7027	方形	1.40	1.09	42	N-2°-E	
SK-7028	不整楕円形	2.04	1.44	10	N-7°-W	
SK-7029	楕円形	2.93	2.12	20	N-12°-E	
SK-7030	方形	2.32	(0.42)	40	N-84°-W	
SK-7031	舟形	9.05	0.82	31	N-2°-W	
SK-7032	楕円形	1.70	0.62	14	N-84°-W	

遺構計測表 24 VII区土坑 2 (SK-7033~7075)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-7033	不整形	2.82	0.81	14	N-89°-E	
SK-7034	方形	3.24	(0.52)	36	N-4°-E	
SK-7035	不整形	1.66	1.57	9	N-24°-E	
SK-7036	舟形	8.26	0.84	21	N-7°-E	
SK-7037	〃	8.30	0.98	27	N-5°-E	
SK-7038	不整形	2.74	2.04	28	N-62°-E	
SK-7039	舟形	4.02	0.59	22	N-90°-E	
SK-7040	方形	1.52	(1.01)	35	N-86°-E	
SK-7041	不整形	1.96	(0.75)	30	N-81°-E	
SK-7042	舟形	約11.00	0.88	21	N-73°-W	
SK-7043	不整形	1.76	1.10	23	N-50°-E	
SK-7044	舟形	約3.50	0.75	25	N-59°-W	
SK-7045	〃	5.34	0.84	33	N-34°-E	
SK-7046	方形	1.69	1.32	18	N-79°-E	
SK-7047	〃	約1.70	1.17	16	N-79°-W	
SK-7048	楕円形	(1.10)	(0.80)	19	N-7°-E	
SK-7049	隅丸方形	1.93	(1.06)	20	N-4°-E	
SK-7050	舟形	約1.60	0.56	20	N-7°-W	
SK-7051	楕円形	2.21	1.09	19	N-22°-E	
SK-7052	舟形	(3.40)	1.07	12	N-79°-W	
SK-7053	楕円形	2.28	1.13	16	N-3°-W	
SK-7054	〃	1.47	0.65	14	N-3°-W	
SK-7055	舟形	1.39	0.40	12	N-21°-E	
SK-7056	楕円形	(1.08)	1.27	33	N-85°-W	
SK-7057	舟形	5.83	0.77	23	N-20°-E	
SK-7058	不整形楕円形	6.02	4.02	18	N-6°-E	
SK-7059	楕円形	2.84	1.80	44	N-55°-W	
SK-7060	不整形	3.34	2.71	21	N-55°-W	
SK-7061	舟形	3.28	0.64	22	N-19°-E	
SK-7062	不整形楕円形	1.65	0.98	12	N-17°-E	
SK-7063	〃	1.39	0.98	6	N-55°-E	
SK-7064	方形	1.88	1.44	13	N-71°-W	
SK-7065	楕円形	1.50	1.08	15	N-13°-E	
SK-7066	隅丸方形	1.64	1.36	7	N-5°-E	
SK-7067	方形	2.86	1.39	13	N-4°-W	
SK-7068	不整形	1.48	1.10	18	N-4°-W	
SK-7069	不整形楕円形	1.71	1.29	10	N-15°-E	
SK-7070	隅丸方形	約2.50	約2.30	15	N-8°-E	
SK-7071	不整形	(4.72)	1.85	26	N-8°-W	
SK-7072	円形	約1.50	-	11	-	
SK-7073	方形	(1.46)	1.18	10	N-5°-W	
SK-7074	〃	1.09	0.95	20	N-61°-W	
SK-7075	不整形円形	1.72	1.71	26	-	

遺構計測表25 VII区土坑3(SK-7076~7119)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-7076	楕円形	1.26	1.05	10	N - 51° - W	
SK-7077	円形	1.07	0.91	23	-	
SK-7078	〃	1.39	(0.68)	18	-	
SK-7079	方形	(2.02)	(0.36)	8	N - 1° - W	
SK-7080	円形	1.36	1.30	29	-	
SK-7081	楕円形	1.06	0.77	34	N - 6° - E	
SK-7082	方形	1.07	0.99	22	N - 10° - W	
SK-7083	〃	3.54	(0.80)	21	N - 88° - W	
SK-7084	不整形方形	2.25	(1.00)	9	N - 86° - W	
SK-7085	楕円形	3.98	1.68	22	N - 8° - E	
SK-7086	隅丸方形	3.29	約3.10	14	N - 11° - E	
SK-7087	方形	1.60	0.72	7	N - 3° - E	
SK-7088	不整形円形	1.17	1.06	14	N - 87° - E	
SK-7089	不整形楕円形	1.12	0.98	13	N - 85° - W	
SK-7090	円形	0.95	-	15	-	
SK-7091	方形	3.28	(0.86)	46	N - 9° - E	
SK-7092	楕円形	1.83	(0.71)	35	N - 7° - E	
SK-7093	方形	1.74	1.13	29	N - 11° - E	
SK-7094	円形	1.64	1.56	22	-	
SK-7095	楕円形	1.18	0.90	37	N - 4° - E	
SK-7096	方形	1.53	1.38	40	N - 73° - W	
SK-7097	楕円形	1.14	(0.67)	14	N - 8° - E	
SK-7098	〃	2.11	0.88	10	N - 10° - E	
SK-7099	不整形方形	1.97	1.33	21	N - 90° - E	
SK-7100	不整形楕円形	2.60	1.00	13	N - 17° - E	
SK-7101	円形	1.49	1.45	27	-	
SK-7102	方形	3.46	1.22	29	N - 7° - E	
SK-7103	不整形方形	1.76	1.05	28	N - 20° - E	
SK-7104	円形	1.81	1.73	38	-	
SK-7105	舟形	2.12	0.61	34	N - 6° - E	
SK-7106	方形	5.74	1.73	21	N - 84° - W	
SK-7107	不整形楕円形	1.38	1.14	16	N - 3° - E	
SK-7108	方形	1.19	0.91	70	N - 6° - E	
SK-7109	〃	2.68	(2.08)	10	N - 86° - E	
SK-7110	〃	1.58	(0.83)	24	N - 89° - W	
SK-7111	〃	(2.28)	(0.75)	11	N - 84° - W	
SK-7112	〃	(0.92)	(0.64)	21	N - 6° - E	
SK-7113	〃	(1.33)	1.68	35	N - 3° - E	
SK-7114	円形	1.38	1.32	31	-	
SK-7115	不整形	6.18	(4.75)	21	N - 70° - W	
SK-7116	〃	2.70	2.22	17	N - 71° - W	
SK-7117	不整形方形	4.28	1.90	9	N - 14° - E	
SK-7118	隅丸方形	2.40	(1.50)	(22)	N - 77° - W	
SK-7119	方形	(1.44)	(1.14)	27	N - 70° - W	

遺構計測表 26 VII区溝跡(SD-7001～7014)

遺構番号	形状	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		検出長(m)	幅(m)	深さ(cm)		
SD-7001	南北溝	24.60	0.78～1.34	11～38	N-145°-W	
SD-7002	東西溝	7.92	0.62～0.75	13～32	N-98°-W	
SD-7003	南北溝	38.03	0.58～0.93	29～56	N-123°-W～N-135°-W	
SD-7004	東西溝	約14.00	0.58～0.78	28～44	N-92°-E	
SD-7005	〃	7.07	0.61～0.87	38～48	N-100°-E	
SD-7006	南北溝	5.98	0.77～0.95	31～51	N-161°-W	
SD-7007	東西溝	13.10	0.14～0.66	3～32	N-106°-E	
SD-7008	〃	27.36	1.20～4.48	27～55	N-127°-W	
SD-7009	L字形	55.33	0.65～1.72	11～47	N-81°-W・N-8°-E	
SD-7010	南北溝	4.26	0.75～0.90	13～17	N-178°-W	
SD-7011	〃	30.01	0.15～0.37	4～29	N-173°-W	
SD-7012	L字形	6.33	0.32～0.82	3～9	N-80°-E～N-36°-E	
SD-7013	南北溝	41.35	0.41～0.64	4～13	N-15°-E	
SD-7014	〃	13.28	0.60	2～14	N-11°-E	

遺構計測表 27 VII区井戸跡(SE-7001)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SE-7001	円形	約2.10	約2.00	(10)	-	

遺構計測表 28 VIII区竪穴建物跡(ST-8001・8002)

遺構番号	平面形態	規模				長軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	床面標高(m)	面積(m ²)		
ST-8001	円形	約5.00	-	7.675～7.701	19.63	-	
ST-8002	〃	約5.70	-	7.666～7.727	25.50	-	IV

遺構計測表 29 VIII区竪穴状遺構(ST-8003)

遺構番号	平面形態	規模				長軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)	面積(m ²)		
ST-8003	方形	2.96	約2.60	16～17	7.70	N-24°-E	IV

遺構計測表 30 VIII区掘立柱建物跡(SB-8001)

遺構番号	桁行×梁行 (間)	規模		柱間寸法		深さ(cm)	面積(m ²)	棟方向 (NはGN)	備考
		桁行(m)×梁行(m)	桁(m)	梁(m)					
SB-8001	3程度×2	6.00×5.90	1.90・2.10	2.60・3.30	8～59	23.40	N-25°-E		

遺構計測表31 Ⅷ区堀・柵列跡(SA-8001～8005)

遺構番号	柱穴数(個)	規模			方向 (NはGN)	備考
		全長(m)	柱間寸法(m)	深さ(cm)		
SA-8001	15	10.10	0.60～0.85	8～20	N-40°-E	
SA-8002	13	8.60	0.70・0.75	8～15	N-40°-E	
SA-8003	13	8.85	0.70～0.85	8～24	N-42°-E	
SA-8004	15	10.55	0.60～0.85	8～19	N-56°-E	
SA-8005	15	10.65	0.70～0.85	6～26	N-57°-E	

遺構計測表32 Ⅷ区土坑(SK-8001～8025)

遺構番号	平面形態	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		長辺・長径(m)	短辺・短径(m)	深さ(cm)		
SK-8001	不整形	1.53	1.33	29	N-23°-E	
SK-8002	楕円形	(3.31)	1.26	13	N-58°-E	
SK-8003	〃	1.82	1.40	16	N-76°-E	
SK-8004	舟形	4.16	0.40	12	N-54°-E	
SK-8005	不整楕円形	1.23	0.66	22	N-18°-E	
SK-8006	不整方形	(2.60)	2.34	26	N-79°-W	
SK-8007	円形	(0.70)	(0.51)	30	-	
SK-8008	溝状	3.76	0.30	6	N-21°-E・N-10°-W	
SK-8009	〃	(3.11)	0.46	6	N-21°-W	
SK-8010	〃	3.94	0.66	8	N-18°-W	
SK-8011	舟形	2.54	0.34	8	N-26°-W	
SK-8012	〃	2.35	0.38	10	N-5°-W	
SK-8013	〃	3.00	0.38	9	N-4°-E	
SK-8014	溝状	8.14	0.93	6	N-2°-E・N-25°-W	
SK-8015	舟形	1.78	0.28	7	N-60°-E	
SK-8016	〃	2.47	0.46	6	N-70°-E	
SK-8017	溝状	2.55	0.38	11	N-33°-E・N-66°-E	
SK-8018	方形	1.06	(0.50)	68	N-13°-E	
SK-8019	不整楕円形	1.92	1.52	16	N-34°-W	
SK-8020	〃	2.26	1.52	18	N-61°-W	
SK-8021	不整円形	1.19	1.10	33	N-47°-W	
SK-8022	不整楕円形	1.07	0.89	15	N-19°-E	
SK-8023	不整形	2.25	1.80	16	N-61°-E	
SK-8024	不整楕円形	約3.00	2.24	26	N-20°-E	
SK-8025	方形	(3.94)	(1.25)	50	N-12°-E	

遺構計測表33 Ⅷ区溝跡1(SD-8001～8004)

遺構番号	形状	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		検出長(m)	幅(m)	深さ(cm)		
SD-8001	東西溝	28.10	0.89～1.30	16～29	N-142°-W	
SD-8002	南北溝	30.28	1.46～3.78	22～34	N-139°-W～N-124°-W	
SD-8003	〃	27.52	0.28～0.68	4～18	N-144°-W～N-119°-W	
SD-8004	〃	4.14	0.23～0.36	5～12	N-125°-W	

遺構計測表 34 Ⅷ区溝跡2 (SD - 8005～8024)

遺構番号	形状	規模			主軸方向 (NはGN)	備考
		検出長(m)	幅(m)	深さ(cm)		
SD-8005	南北溝	3.56	0.50～0.58	17	N - 15° - E	
SD-8006	〃	34.64	1.38～1.70	30～40	N - 11° - W	
SD-8007	〃	18.86	0.35～0.54	5～10	N - 15° - W	
SD-8008	〃	13.94	0.40～0.74	4～15	N - 164° - E	
SD-8009	〃	8.94	0.56～0.76	4～10	N - 161° - E	
SD-8010	〃	10.50	1.18～1.32	16～25	N - 162° - W	
SD-8011	〃	18.89	0.39～0.65	5～13	N - 153° - W	
SD-8012	〃	17.11	0.42～0.60	10～17	N - 26° - E	
SD-8013	〃	14.96	0.28～0.42	8～18	N - 156° - W	
SD-8014	〃	14.57	0.31～0.68	4～10	N - 158° - W	
SD-8015	〃	20.88	0.60～1.20	7～14	N - 147° - W	
SD-8016	〃	20.08	0.28～0.60	2～8	N - 152° - W	
SD-8017	東西溝	4.40	0.32～0.50	14～19	N - 109° - E	
SD-8018	〃	4.00	0.90～1.02	22～29	N - 62° - W	
SD-8019	〃	22.52	0.42～0.50	9～27	N - 110° - E	
SD-8020	〃	22.54	0.34～0.55	6～11	N - 110° - E	
SD-8021	〃	6.65	0.73～1.03	3～6	N - 109° - E	
SD-8022	L字形	10.62	0.13～0.30	2～7	N-53°-W・N-14°-E	
SD-8023	南北溝	8.55	0.24～0.37	1～7	N - 31° - E	
SD-8024	〃	9.38	0.39～0.55	2～7	N - 2° - E	

遺構計測表 35 Ⅷ区畝状遺構(SU - 8001～8007)

遺構番号	畝跡数(本)	規模					主軸方向 (NはGN)	備考
		最大長(m)	畝間間隔(m)	畝幅(m)	幅(cm)	深さ(cm)		
SU-8001	9	4.24	0.63～0.72	0.37～0.52	18～28	3～15	N-30～70°-E	
SU-8002	6	3.92	0.61～0.76	0.42～0.53	20～27	3～11	N-25～60°-E	
SU-8003	3	1.42	0.92～1.04	0.46～0.72	24～50	3～21	N-40～85°-E	
SU-8004	7	1.94	0.67～0.76	0.37～0.45	26～38	2～11	N-57°-W	
SU-8005	7	約6.00	0.60～0.70	0.36～0.44	20～38	2～8	N-70°-W	
SU-8006	5	1.30	0.65～0.69	0.42～0.48	18～26	3～7	N-87°-W	
SU-8007	5	1.36	0.66～1.07	0.46～0.86	16～22	2～5	N-80°-W	

遺構計測表 36 Ⅷ区性格不明遺構(SX - 8001)

遺構番号	平面形態	桁行×梁行 (間)	規模		柱間寸法		深さ(cm)	桁方向 (NはGN)	備考
			桁行(m)×梁行(m)	桁(m)	梁(m)				
SX-8001	格子目状	12×6	18.45×16.80	1.20～1.90	2.60～2.80	2～25	N-21～27°-E		

報告書抄録

ふりがな	にしこのいせきさん							
書名	西野々遺跡Ⅲ							
副書名	高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第118集							
編著者名	廣田佳久, 小野由香, 井上昌紀, パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原南泉1437-1							
発行年月日	2011年3月11日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
にしこのいせき 西野々遺跡	〒783-0005 高知県南国市 おおそねあざにしこの 大埴字西野々	39204	040283	33° 33' 36"	133° 38' 32"	2006.5.8 ～ 2007.3.23 2007.4.17 ～ 2007.6.5	13,611 m ²	一般国道 55号自動車専用道路 建設工事
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
西野々遺跡	集落跡 官衙関連遺跡	弥生時代 古 中 世	竪穴建物跡 65軒 竪穴状遺構 26軒 掘立柱建物跡 148棟 堀・柵列跡 41列 土坑 245基 溝跡 48条 井戸跡 1基 道路遺構 3条 畝状遺構 8列 水溜り状遺構 1基 性格不明遺構 1基 ピット 11,120個	弥生土器 土師器 須恵器 土師質土器 緑釉陶器 灰釉陶器 黒色土器 瓦器 瓦質土器 青磁 近世陶磁器 土製品 石製品	弥生時代中期から後期初めの集落、奈良時代から平安時代にかけての官衙関連遺構、室町時代の溝に囲繞された約1,500 m ² の屋敷跡が確認された。			
要約	<p>西野々遺跡の出現は、弥生時代中期に遡る。他地域との交易を行いながら後期前半頃まで集落を営み、周辺開発も盛んに行われたとみえて延長1.0kmにも及ぶと推測される灌漑用水路を掘削する。後期後半は低調となるものの、終末期に再び集落が見られる。しかし、小規模で短期間のうちに消滅する。この現象は、南四国一円にみられるもので弥生時代終末を境として人の匂いが忽然と感じられなくなる。</p> <p>奈良時代中期から官衙関連と考えられる施設が徐々に建てられ、中心部が変遷する中、東西約700mの間に付属施設と考えられる建物群が点在し、平安時代後期頃まで続き、弥生時代以来の繁栄期を迎える。</p> <p>中世になると400 m²前後の小規模な屋敷が点在する中で、最も良い立地に恵まれた東側には一辺35～44mの溝で囲繞された土豪層クラスの規模を誇る屋敷が出現する。この主は、茶の湯を嗜むことのできる戦国武士であったとみられる。しかし、戦国時代の終焉と共に、この屋敷も地中に埋没する。</p>							

本書作成データ

ハード：MacPro 2×2.8GHz Quad-Core Intel Xeon, iMac2.4GHz Intel Core2 Duo, PowerMacG5/Dual2.0GHz,
PowerBookPro/2.5GHzなど

システム：MacOS X (10.6.5)

ソフト：JeditX2.26, Microsoft Excel Mac2008, ProofReader2.1.0, Adobe Photoshop®10.0.1, Adobe
Illustrator®13.0.3, Adobe Indesign®5.0.4Jなど

フォント：モリサワOTF基本7書体, Times Italicなど

プリンタ：DocuPrint C3540など(文書校正)

データ：Macintosh Full DTPで入稿

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第118集

西野々遺跡Ⅲ

高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ
(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ)

本文編

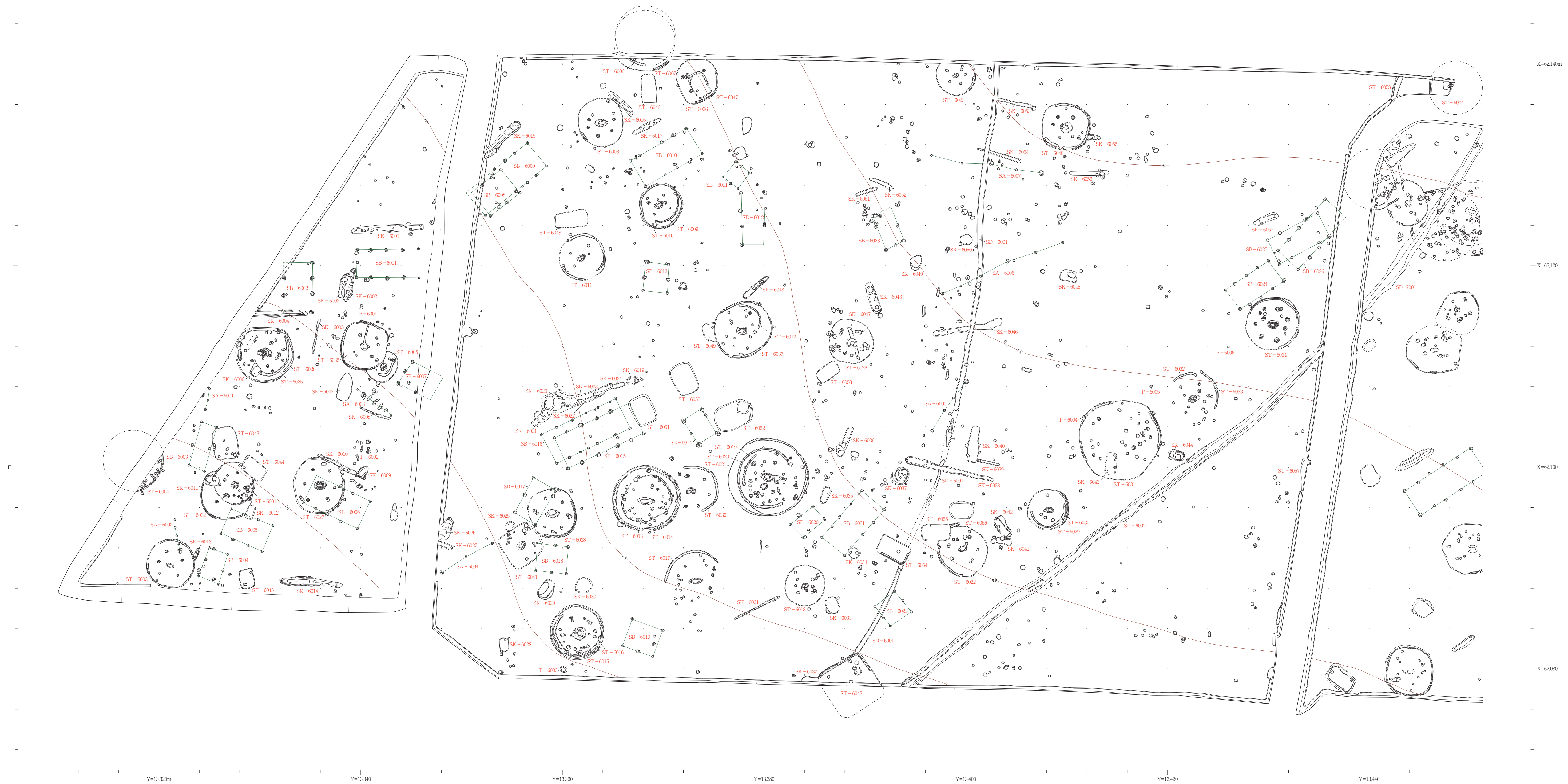
2011年3月11日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

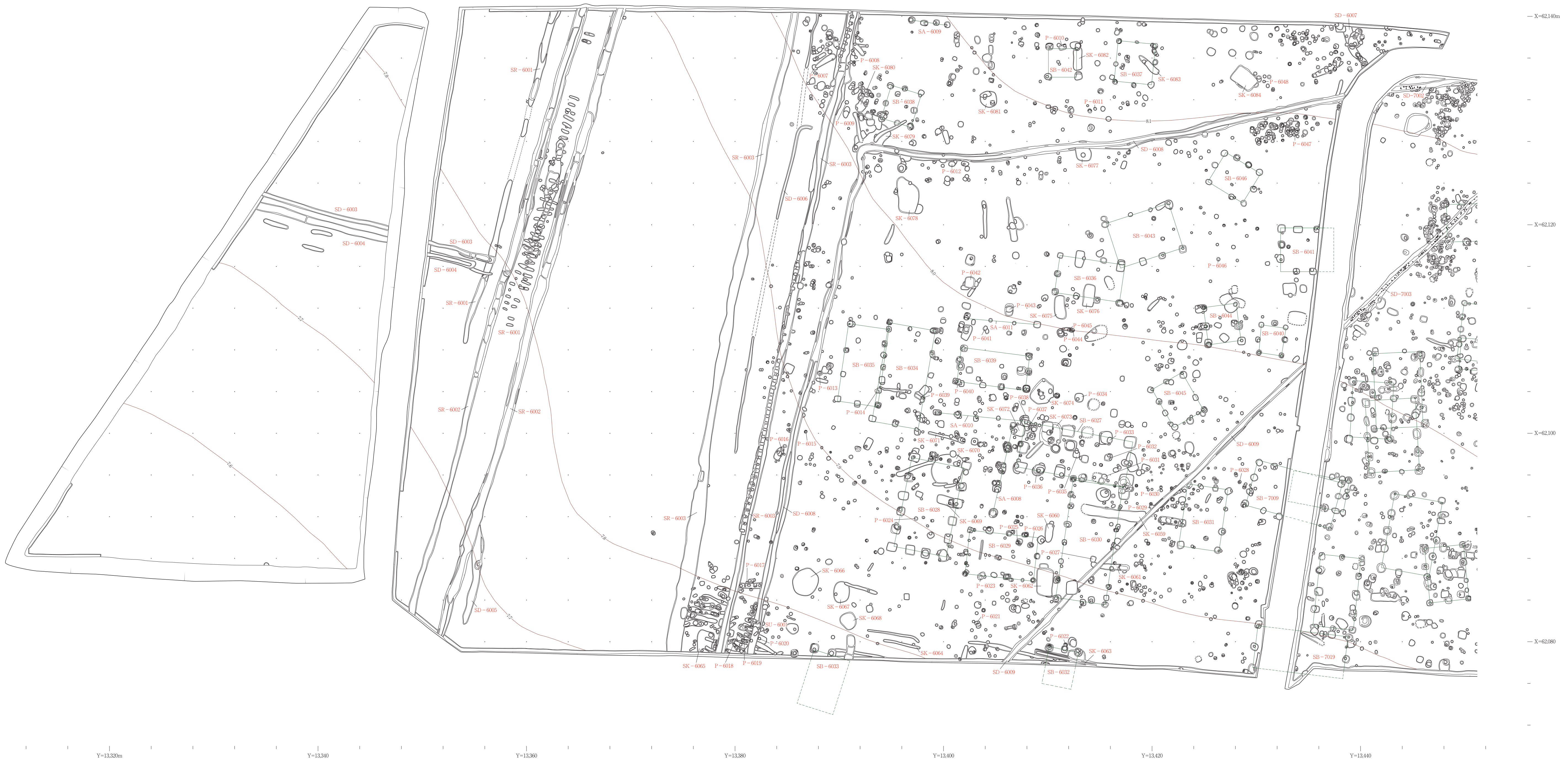
高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 088-864-0671

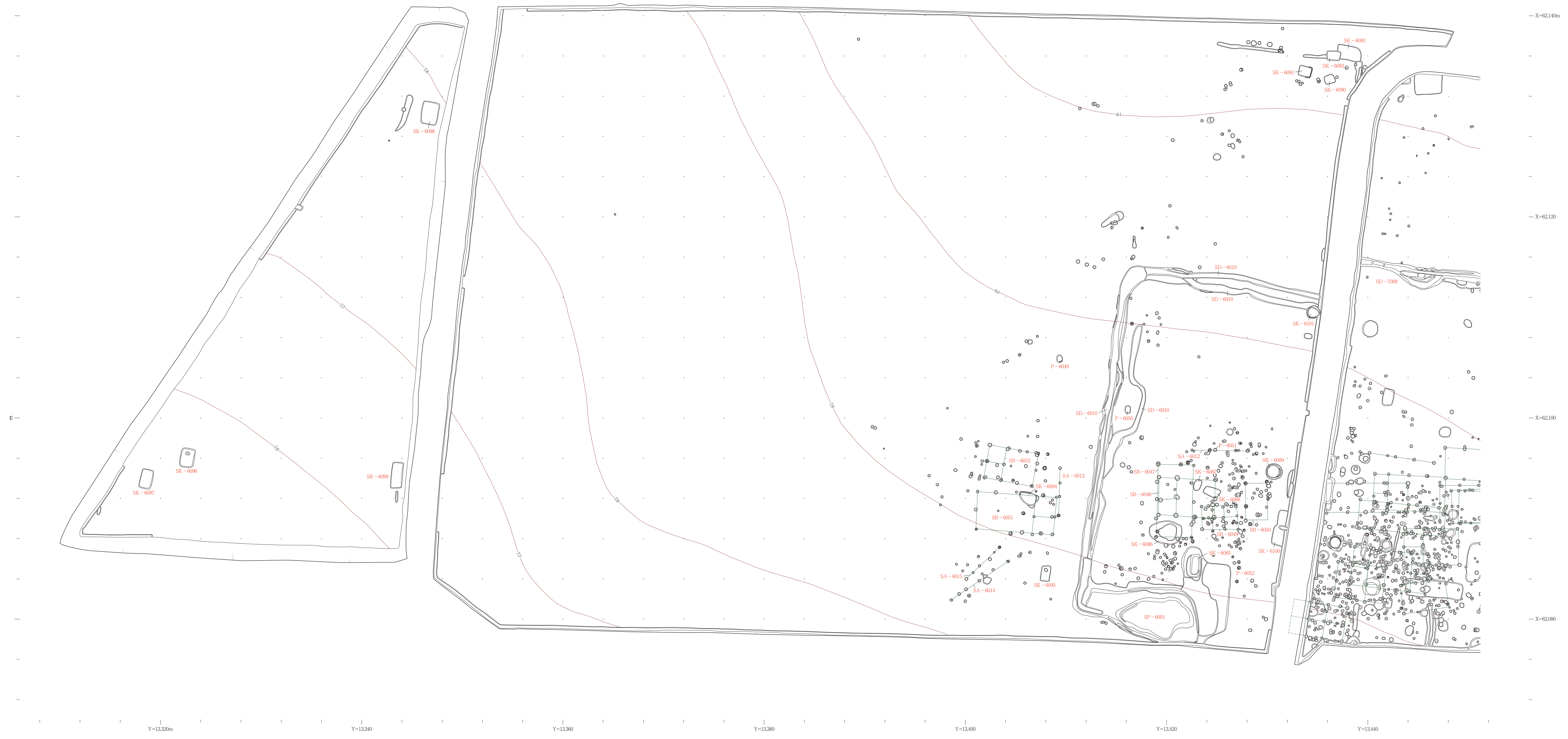
印刷 共和印刷株式会社



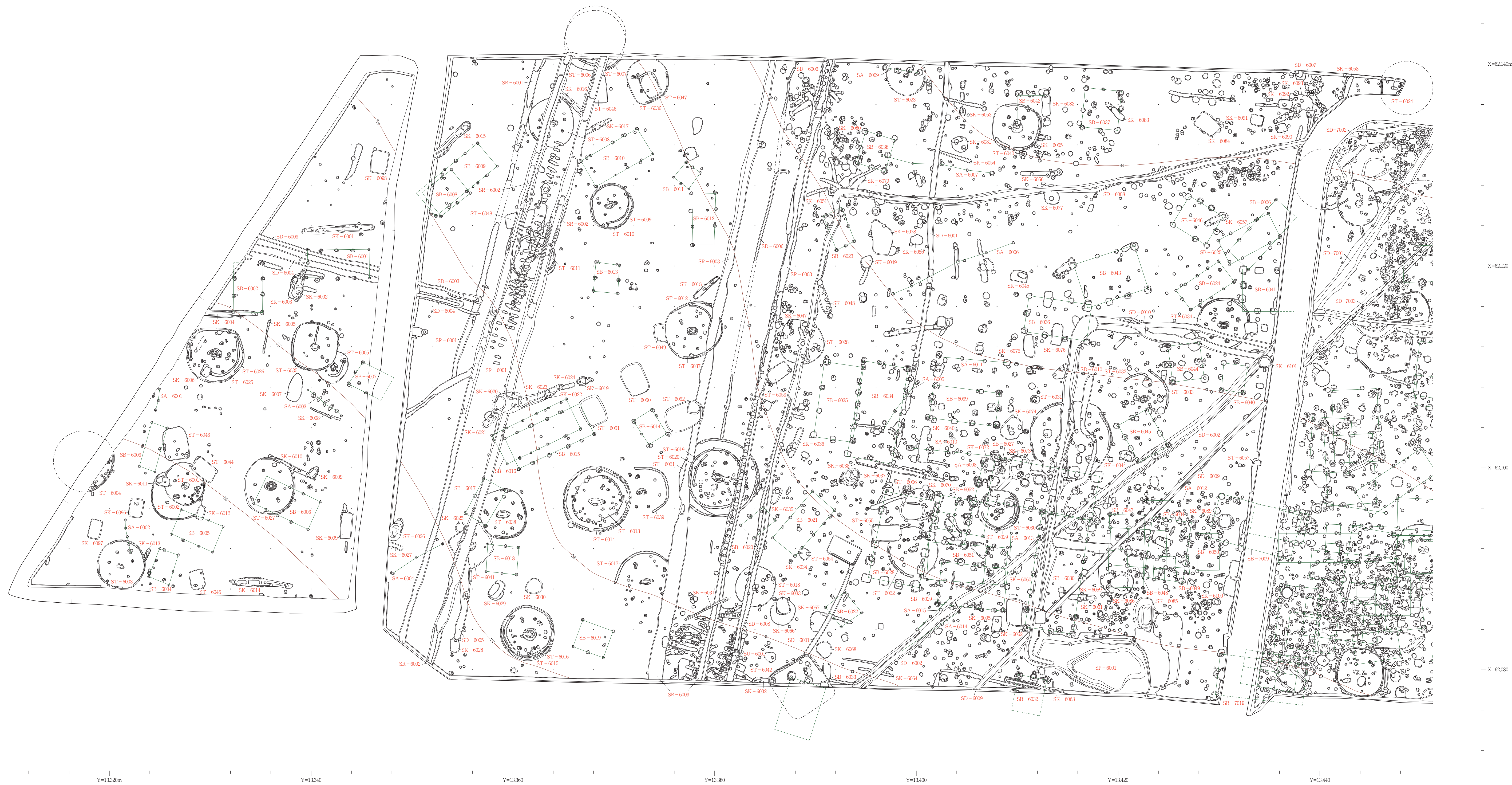
付図1 西野々遺跡第VI調査地区(VI区)弥生時代遺構平面図(S=1/200)



付図2 西野々遺跡第VI調査地区(VI区)古代遺構平面図(S=1/200)



付図3 西野々遺跡第VI調査地区(VI区)中近世遺構平面図(S=1/200)



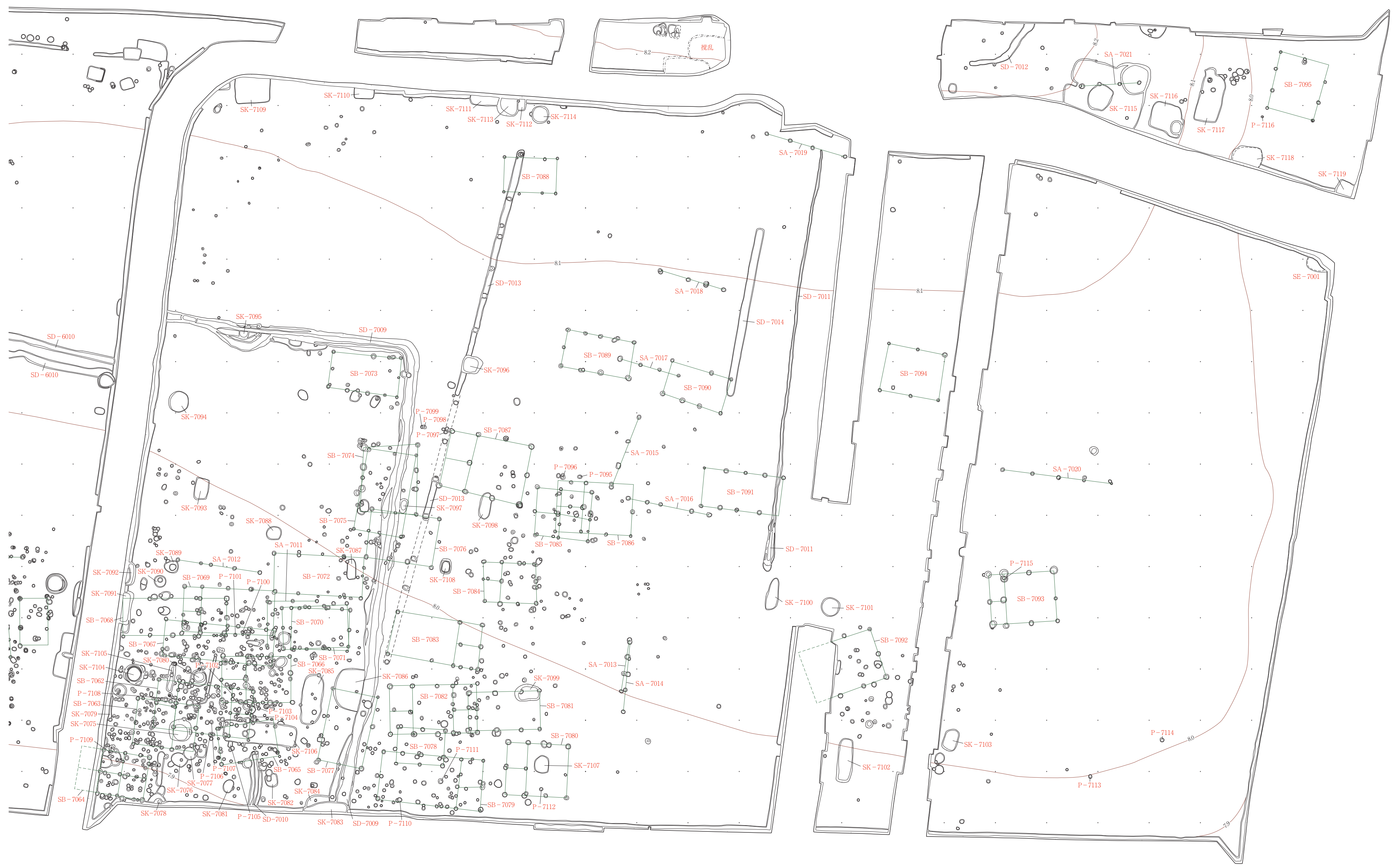
付図4 西野々遺跡第Ⅶ調査地区(Ⅵ区)遺構平面図(S=1/200)



付図5 西野々遺跡第Ⅶ調査地区(Ⅶ区)弥生時代遺構平面図(S=1/200)



付図6 西野々遺跡第Ⅶ調査地区(Ⅶ区)古代遺構平面図(S=1/200)



付図7 西野々遺跡第Ⅶ調査地区(Ⅶ区)中近世遺構平面図(S=1/200)

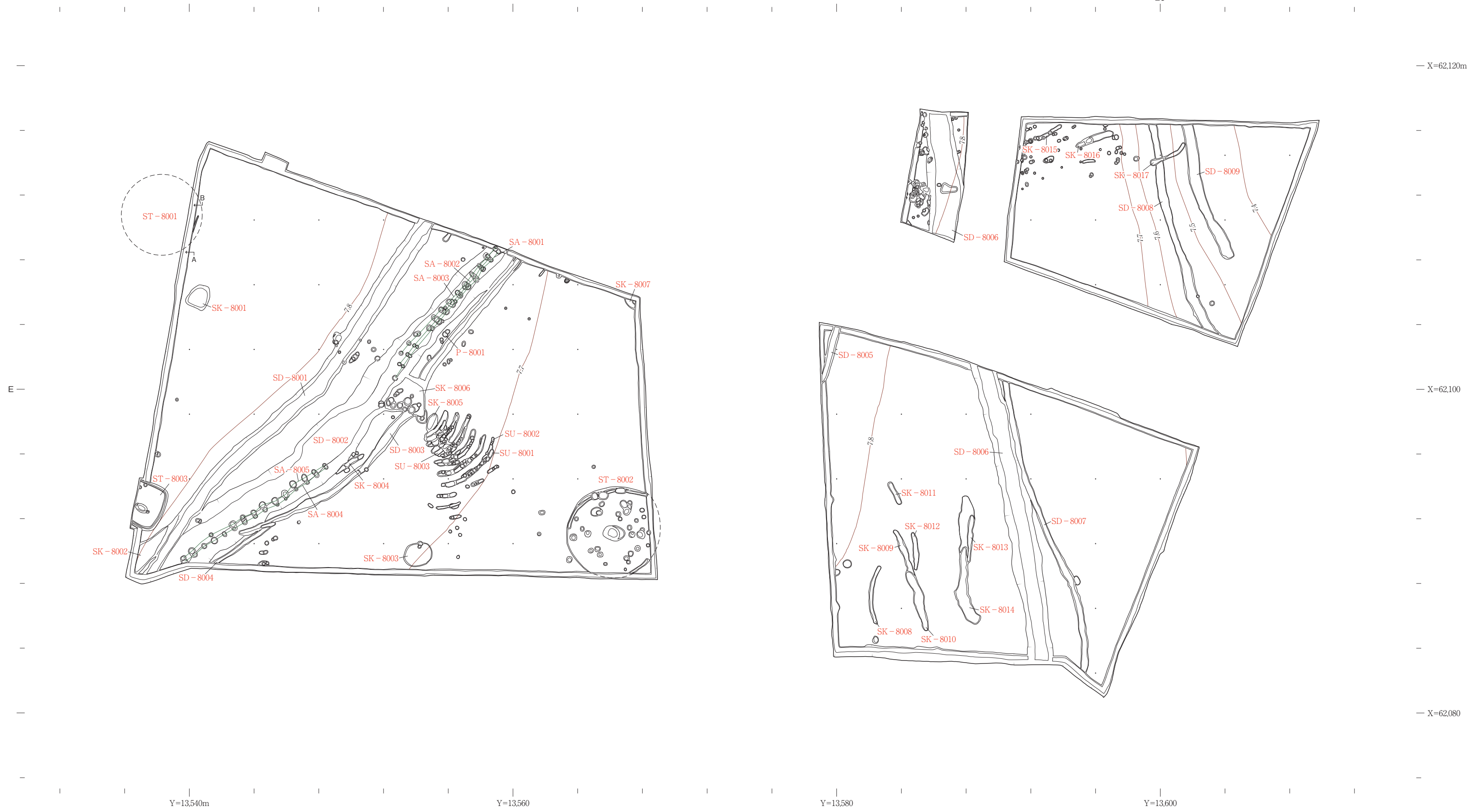


付図8 西野々遺跡第Ⅶ調査地区(Ⅶ区)遺構平面図(S=1/200)

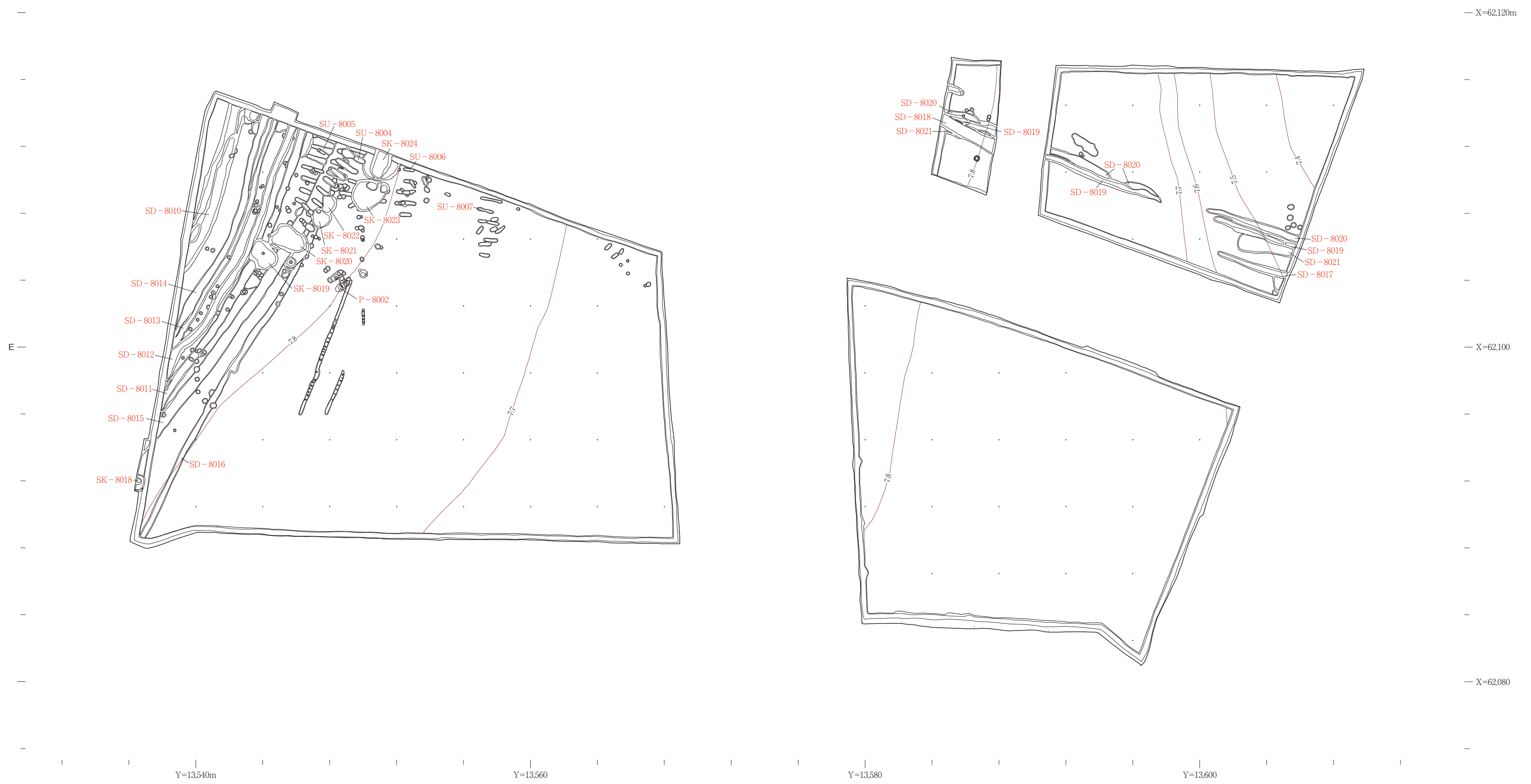
X=62,120m

X=62,100

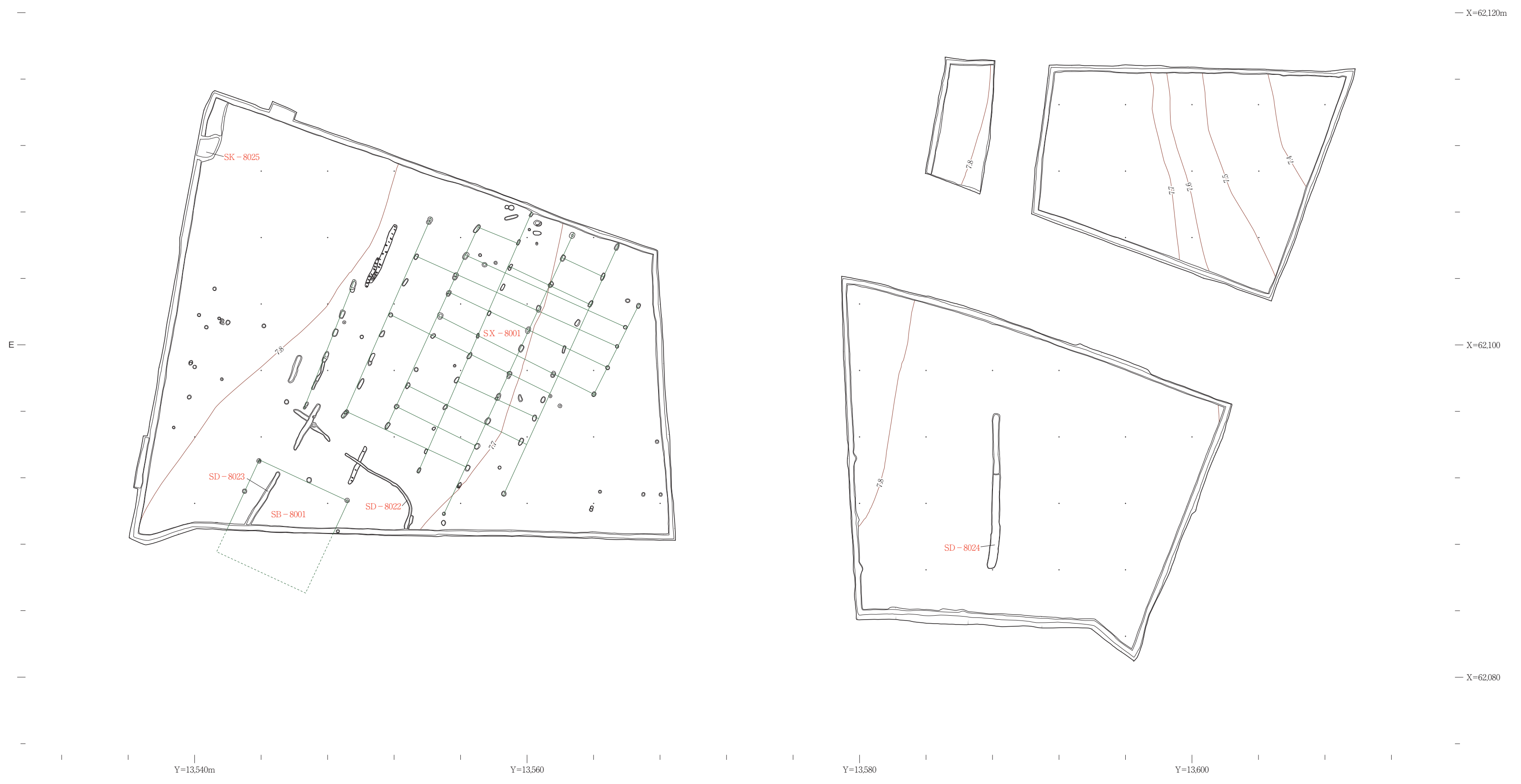
X=62,080



付図9 西野々遺跡第Ⅷ調査地区(Ⅷ区)弥生時代遺構平面図(S=1/200)

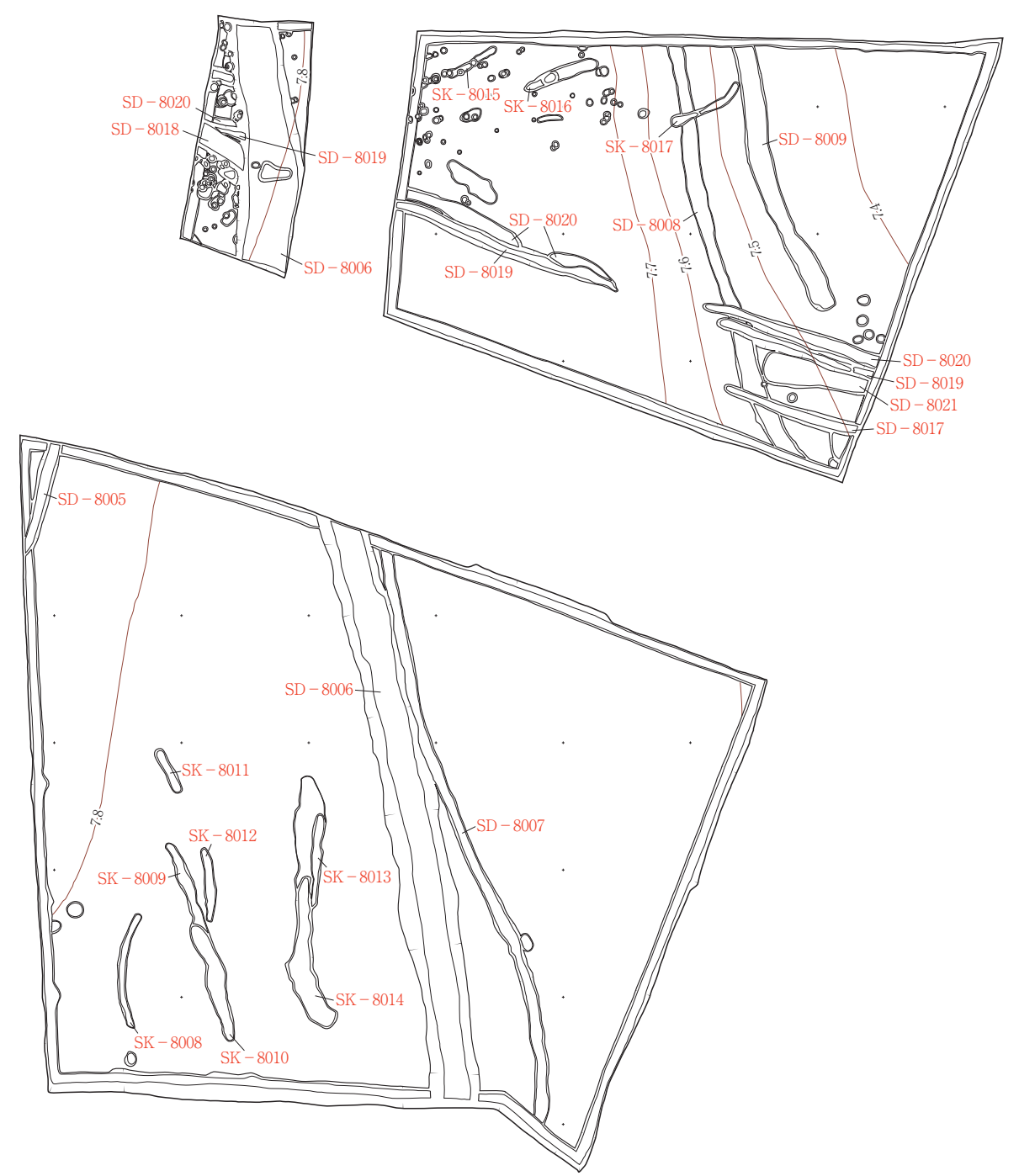
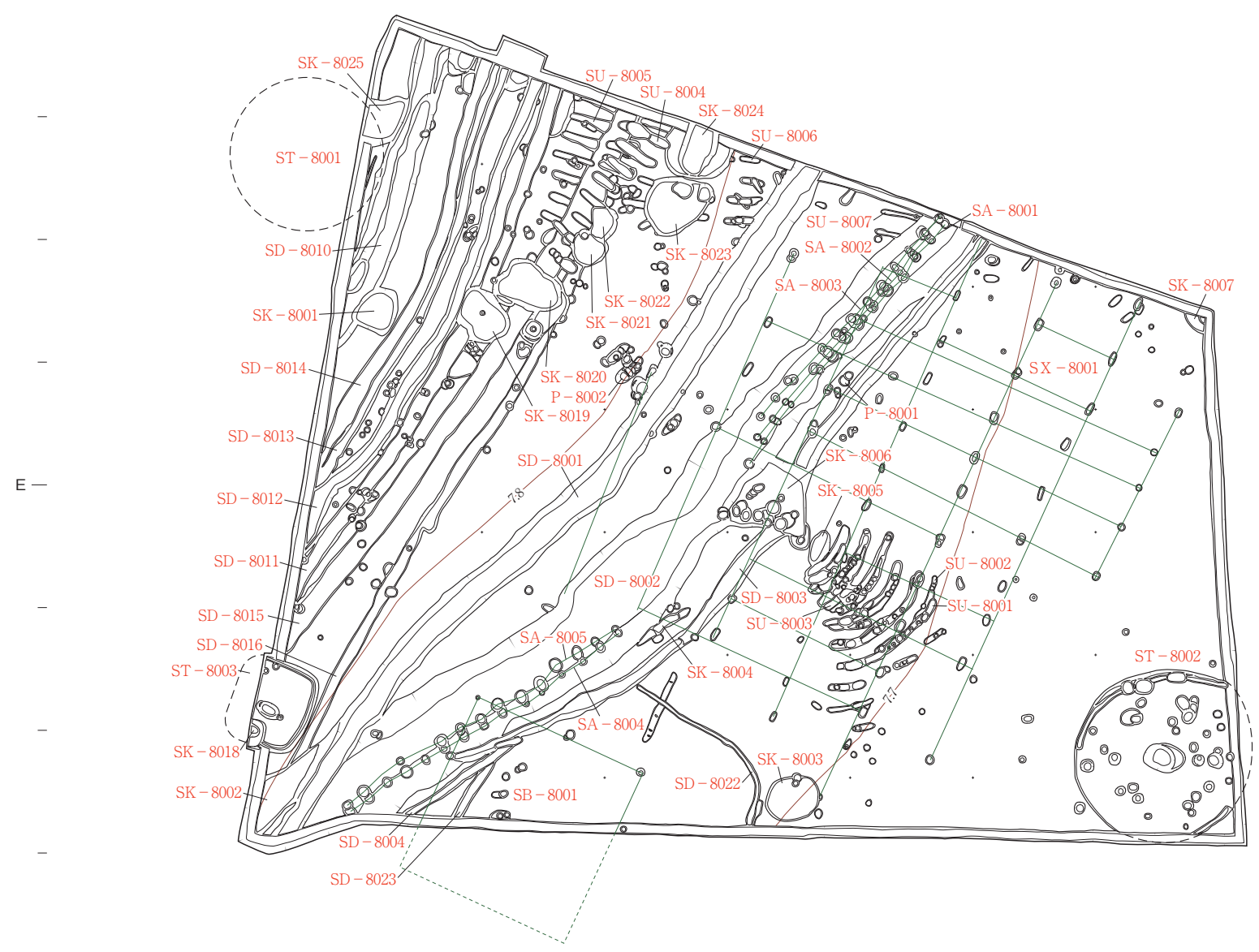


付図10 西野々遺跡第Ⅶ調査地区(Ⅶ区)古代遺構平面図(S=1/200)



付図11 西野々遺跡第Ⅷ調査地区(Ⅷ区)中近世遺構平面図(S=1/200)

X=62,120m



X=62,100

X=62,080

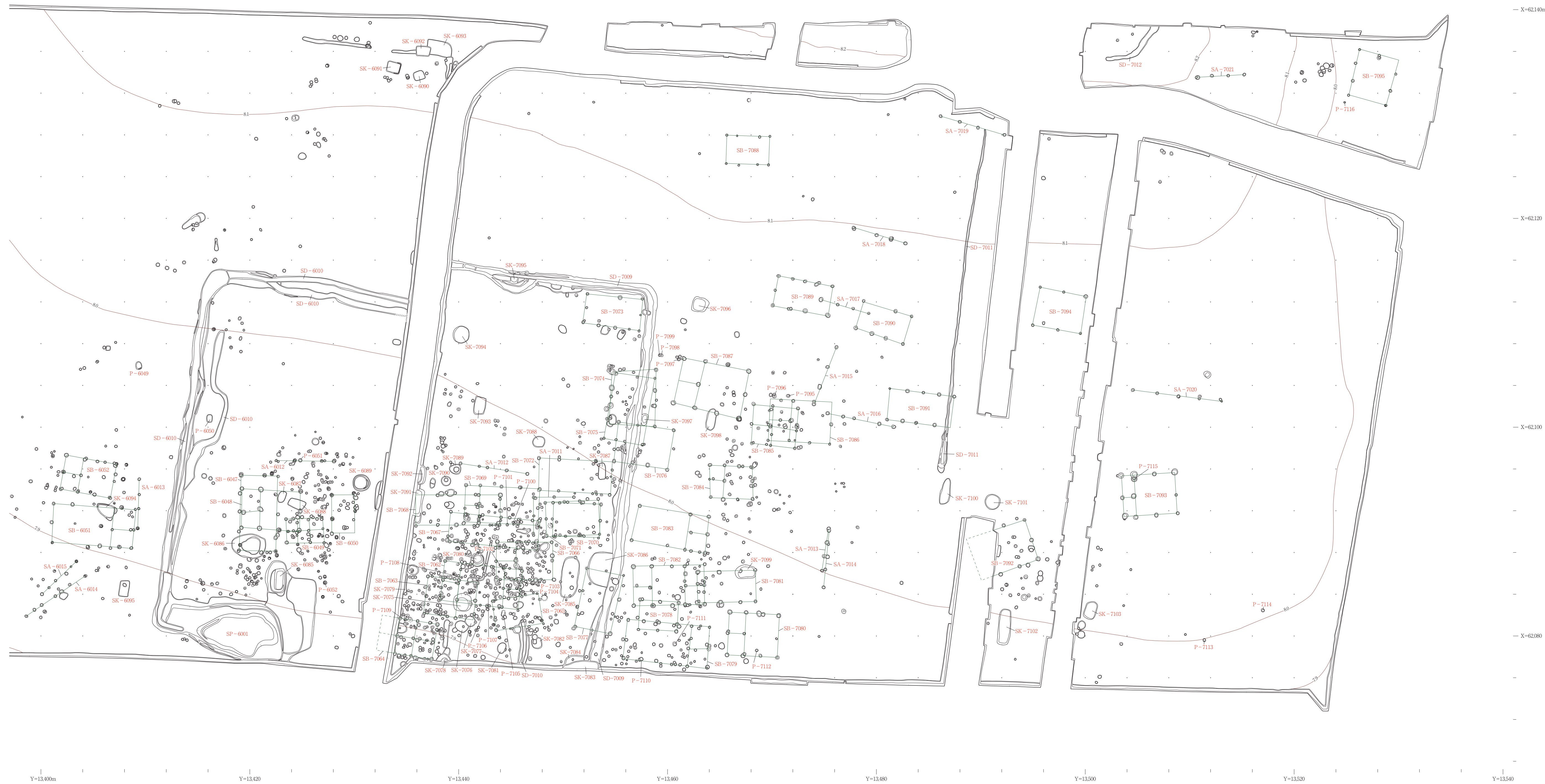
Y=13,540m

Y=13,560

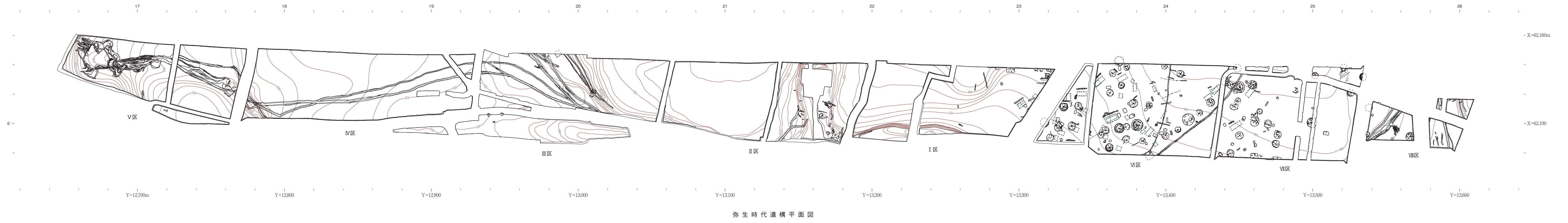
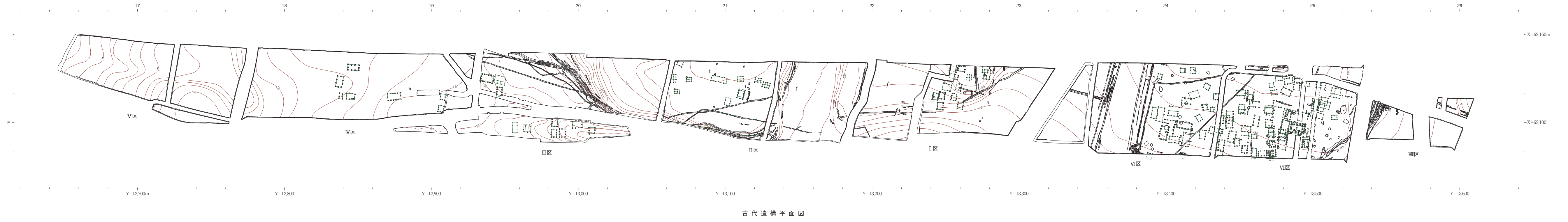
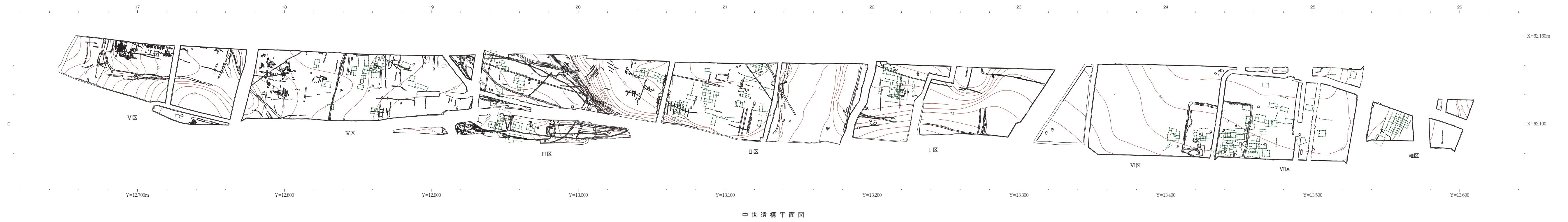
Y=13,580

Y=13,600

付図12 西野々遺跡第Ⅶ調査地区(Ⅶ区)遺構平面図(S=1/200)



付図13 西野々遺跡中世屋敷跡遺構平面図(S=1/200)



付図14 西野々遺跡遺構変遷図 (S=1/1,500)

